

青の少女のヒーローア  
カデミア

かたやん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

10年前に世界を襲った災厄「青の世界」。

強すぎるその個性は世界を滅ぼしうる。

災厄の原因となった少女は、雄英高校の地下深く人知れず閉じ込められて生きていた。

そして10年後、その少女はヒーロー科の21人目として在籍することになり……

※がついている話は、虐待及びそれに準ずる表現があります。それを承知の上でお読み頂けるようお願いいたします

初投稿かつ初執筆の小説初心者なので、見苦しい面が多々あると思います。

感想や批判等募集しています。なるべく客観的な意見を頂けると幸いです。

元ネタについて

この小説の主人公は「Re:birth colony — Lost a z u r i t e —」のキャラを元に制作しています

「車輪の国、向日葵の少女」の某とつつあんと同じ名前のキャラも登場します。

元ネタを知っている方からすれば違和感が有るでしょうが、あくまで元になっているだけなので気にしないで頂けたら幸いです。

# 目次

第9話	123
第8話	103
第7話	92
第6話	75
第5話	65
第4話	40
第3話	25
第2話	18
第1話	6
第一章	
プロローグ	1

第2話	394
※第2話※	377
第20話	352
第19話	327
第18話	304
第17話	286
第16話	261
第15話	239
第14話	215
第13話	203
第12話	185
第11話	170
第10話	139

第34話	第33話	※第32話※	第31話	幕間	第30話	第29話	第28話	第27話	※第26話※	※第25話※	第24話	第23話
671	649	626	600	593	571	548	524	508	486	455	435	411

第46話	第45話	第44話	第43話	第42話	第41話	第40話	第39話	第38話	第37話	第36話	第35話	第二章
879	864	844	828	815	794	774	759	746	732	715	704	

第三章

第58話 第57話 第56話 第55話 第54話 第53話 第52話 第51話 第50話 第49話 第48話 第47話

115811331111108110601037 1013 995 971 948 920 899

第71話 第70話 第69話 第68話 第67話 第66話 第65話 第64話 第63話 第62話 第61話 第60話 第59話

1418139613721347133313121295128312631236121311901177

第83話	第82話	第81話	第80話	第79話	第78話	第77話	第76話	第四章	第75話	※第74話※	※第73話※	第72話
1644	1625	1608	1582	1564	1550	1533	1515		1495	1475	1449	1432

第94話	第93話	第92話	第91話	第90話	第89話	※第88話※	※第87話※	※第86話※	※第85話※	第84話
1868	1848	1824	1801	1775	1758	1742	1717	1697	1676	1660





# プロローグ

何処にでも行きたい、何処までも行きたい。

人の為に、誰かの為に。

世界の何処にでも、行きたい。

どんな人とも、居られるように。

人が広く、生きて行く為に。

ねえオールマイト。

——ボクは……

——世界が青に満たされていた。

街並みが、空気が、全ての光景が、暴力的なまでの「青」に侵されていく。透明なはずの空気に色がつく。

見上げた空は先ほどまでの澄んだ青ではなく、

今この空間を支配している「青」に塗り替わっていた。

あらゆる電子機器が停止する。

世界中に“個性”という超常が現れた現代も、コンピュータに依存しきつた社会の構造は変化していなかった。

ならばコレはその代償なのか。

世界中の電子機器が、次々とその動作を停止させていく。

インターネットを介してのクラッキングを受けているのだ。

あらゆるセキュリティは意味をなさない。

ファイアーウォールはまるで紙のように粉碎された。

電子機器が制御不能となれば、当然乗り物も制御不能になる。

現に世界で飛行中だった航空機は、ほとんどが墜落している。

自動車や電車も例外ではない。次々に引き起こされる事故。そして誘発する火災。

プリンターなどの設備も当然作動していない。消防車は動こうにも動けない。

何よりも連絡手段がない。

そして同時に広がっていく人間の意識喪失。

それを可能にしているのはこの「青」か。

電子機器に干渉できる個性が無かったわけでは無い。

だがしかし。

今現在進行しているこれほどの現象を、果たして予測しえただろうか。

あくまで電脳上で起きているはずの侵攻が、現実世界までも影響を及ぼしている。意識喪失の広がりがまさにそれだろう。

疑う余地もない。

これが目の前の泣きじゃくっている幼子の仕業。

その個性の暴走であると相澤消太は理解し、個性“抹消”を行使するが

「……!?消せない……だとう……ぐあつ」

意識が遠のいていく。

これも彼女の個性なのか。大量の情報脳に送り付けられて来る。

まるでインターネットのDOS攻撃のように。

相澤の目に映る世界がより深く「青」に染まっていき、0と1の羅列に変換されていく。

——あなたは何を知りたいの？

目の前の幼子にそっくりの青い少女がどこからともなく現れる。

それは無数に増えていき、その全てが相澤に問いかけてくる。

——知りたいことは何でも教えてあげる。ねえあなたは何を知りたいの？

あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あ

あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。

あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。

あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。あなたは何を知りたいの。

「ぐああああああ!!!」

頭の中に膨大な情報が無秩序に流れ込んでくる。

まるで無理やり物を口に入れられるように。

頭の中をぐちゃぐちゃにかき回されるような感覚。

夕焼けが、星が見える。雲が、雨が、空、溪谷、森、雪原、砂漠。街に町に村に犬に猫に鳥に人。

あらゆる世界で起きている全てが、頭の中に書き加えられていく。

——全てが一つになる。

天と地も分ならず世界に自分が居ることすらも忘れてしまうような。

そんな時

「もう大丈夫！ 私が出来た！」

彼が出来た。

——結論から言うところの事件は彼によつて解決された。

振るわれたその拳は幼子を枯葉のように吹き飛ばし、少女の意識を刈り取る。

暴走していた個性は停止した。

世界に色に戻る。浸食していた「青」は、まるで幻のように消え去った。

個性が引き起こした史上最悪の事件。

地球規模で起きたこの災害の被害額は億を遥かに超え、亡くなった人は数千万人に及んだ。

後にこの事件は「青の世界」と呼ばれることになる。

# 第一章

## 第1話

彼が放った拳は世界を救った。

「青」が世界から消え去り、世界には平穏が戻った。

世界の空が「青」から青に晴れ上がる。

だがオールマイトの心の中には晴れないままだった。

オールマイトは意識を失った少女の体をそっと抱きかかえた。

まだ五歳になったばかりの彼女の体は驚くほど軽い。

この少女が暴走させた個性が、先ほどまで世界中を危機に陥れていたとは、

とても信じられない。

彼女の頬に伝う涙を拭う。

オールマイトは彼女と出会った日を思い出していた。

……

……

……

オールマイトが彼女を知ったのは、事件の一年前の事だった。

とある山中の国有地に、ひっそりとたたずむ古ぼけた施設。

そこにオールマイトは来ていた

政府から極秘任務だった。内容は現地で通達するらしい。

中に入ると外観からより中身は近未来を思わせる立派な作りをしていた。

「ご苦労、ナンバーワンヒーロー」オールマイト「よ」

「法月将臣……!?!」

オールマイトの前に現れたのは杖をついている壮年の男性。

日本において唯一の「高等尋問官」だ。

高等尋問官は生きる法律だ。

個性が世界に発現し、人間という規格が崩れ去った社会は混乱した。

現代は結果的にヒーロー社会という形に収まったが、その結果を得るまでに

社会は様々な制度を導入したのは言うまでもないだろう。

そこで必要とされ生まれたのが高等尋問官だ。

あらゆる法的な介入が必要なケースで介入でき、組織ではなく個人で処罰できる。

ヒーローはあくまで敵（ヴィラン）を逮捕して警察に引き渡すまでが仕事。

対して高等尋問官はあらゆる処罰や刑罰を、即座に一人で決めることが出来る。

余りにも個性を利用した犯罪が後を絶たなかった黎明期。

そのような時に今までと同じ回りくどいやり方では、とても対処しきれなかったのだ。

だがそれも昔の話。

独裁者にも簡単になり得るその絶大な権力は危険視され、やがてヒーローの登場と共に歴史の影に消えていった。

今ではこの法月将臣のみが唯一の高等尋問官だ。

「何のためにお前を呼んだのか不思議に思うだろう。」

「一体この場所が何なのか疑問に思うだろう。」

「……ええ」

「ここは国による個性の開発研究が現行で行われている、唯一の施設である。

無論極秘事項だ。例えヒーローであろうとも口外すれば極刑に処される。

ナンバーワンヒーローのお前であろうとも例外はない。

付いてくるといいオールマイト」

聞いたことはあった。国による公開されていない「個性」の研究が今でも行われているらしいと。

あくまで噂の話だった。



それは倫理的問題や技術的問題を孕んでおり廃止されている筈だった。だが現に禁止されている筈の研究は続けられていて、

しかもそれは国の主導であって、

誰にも止めることも出来なかった。

「先に言っておく。今からお前が会う少女は非常に危険な存在だ。

取り扱いを間違えると世界すら滅びかねない。

だから閉じ込めているのだ。誰が悪いわけでもない。

何かの罪を背負っているわけでもない。覚えておくがいい。

この世の理不尽の全てが「仕方がない」ことの積み重ねで起きているのだということ  
を」

法 月がしゃべっている内容が、あまり頭の中には入ってくることはなかった。

施設の地下五階。

研究施設の最深度。分厚い鋼鉄の扉と、電子ロックに守られている区画。

太陽の光が届かない、LEDの照明だけが光源の少し薄暗い部屋。

全てが白く染められた白亜の空間。

何も無駄なものが一切なく、一つの椅子に、テーブル、ベッド。

人が合理性を極限まで切り詰めて、人間性までも捨ててしまったような。

そこに彼女は居た。

「あなたがオールマイトさんですか？」

とても幼い少女だった。

まずは青い髪が目に入った。そして全く同じ色の青い瞳。

空の色とも海の色とも違う不思議な青。

だが、それを言っても彼女には分からなかった。

「ごめんなさい。見たことないから」

まだ四歳の彼女は、空も海も見ることがなかった。

「名前？ごめんなさい分からない」

名も与えられてはいなかった。

彼女の生活を支えるのは機械によるシステムだ。

毎日決まった時間に食事や水分を出し、空調に照明のオンオフその他全てを管理する。

毎日起きて食べて寝る。ただの繰り返し。

誰とも会うことはない。誰ともしゃべることはない。

教育されていないのに言葉を話すことが出来るのは、脳内に直接電気信号を送り学習させる装置。

その学習装置の成果だと、職員の一部が得意げに話していた。

彼女の服は一種類だけ、飾り気のない白のワンピース。

出てくる食べ物にはまるで、ドックフードのような茶色の合成食品。

皿に盛られたそれをスプーンで食べる彼女の顔は、何処まで無表情だった。

彼女に断つてひとつまみ食べてみた。

「うおっまずー！」

「……………」

彼女はコテンと首を傾げる。

何の味もしなかった。温かみなど何処にもなかった。

「君はこれを美味しいと思ってるのかい？」

「……………おいしいって何？」

「……………!!」

彼女は「美味しい」という概念すらも知らなかったのだ。

彼は色々なことを話した。

自分のこと世界のことヒーローのこと。

彼女は何も知らなかった。

例え用語としての知識が存在しても、そこには体験が欠如していた。

表情は無表情のまま、ずっと変わらなかつた。

だがオールマイトは話し続けた。

確かな感情が彼女に有ることをオールマイトは感じていた。

………

………

………

彼女に最初に会った日から一か月が過ぎた。

オールマイトは時間を見つけ次第、彼女の所に顔を出すようになっていた。

法月は過度な干渉は控えるようにしろという。

面会が許されるのは、一週間に一度だけだった。

まだ彼女の顔は無表情のままだ。

だが何度も会って話をしていくうちに心を開き始めている。

彼はそう感じていた。

現に口数もどんどん増えている。

まだまだ言葉足らずだが、それでも一生懸命に伝えようと努力しているのが分かる。

時間はあつという間に過ぎていった。

どれだけ話しても話し足りないということとはなかつた。

けれども時間というものは非情だ。

やがて面会の刻限になった。帰りたくないと思は思う。

だが、高等尋問官の命令は絶対である。

例えナンバーワンヒーローであろうとも、従わなければならない。

おしむらく別れを告げて退出しようとするが、

「……えと」

彼女の手がオールマイトの服の裾を掴んでいた。

小さいその手は震えながらも、決して離そうとはしなかった。

目を見つめるとその視線はオールマイトを通り抜け、後ろの扉に向けられている。

何度も何度もオールマイトが入っては出て行った扉。

それは彼女の知る世界の果て。

——外に出たい

そんな彼女の声が聞こえた気がした。

どれくらい時間が経っただろうか。

やがてポツリと彼女の口から言葉が漏れ出した。

「連れてってよ……」

「……」

「置いていかないで……。笑顔でなんだって助けちゃうんでしょ？私を外に出してよ」  
「すまない私は……」

「私は好きでここに居るんじゃない！」

「っ……！」

「ヒーローなんでしょ!？」

「ああ……」

「私何も悪いことしてないよ!?!誰にも迷惑なんてかけないよ!？」

「なんでずつと閉じ込められないといけないの!？」

「どうして外に出ちやいけないの!？」

「私行きたい!世界中の何処にでも行きたい!」

「何処までも行きたい!!色んな人たちと一緒に居たい!」

「すまない……それは……」

「出来ない相談だった。ヒーローといえ所詮は公務員。」

「国のため社会のために、彼らは存在している。」

「そしてこの少女を閉じ込めているのは、この“社会”だ。」

「社会に属している存在である以上、その不利益になることは許されない。」

「ヒーローが法を破るわけにはいかないのだ。」

「夢があるの……」

何処にでも行きたい、何処までも行きたい。

人の為に、誰かの為に。

世界の何処にでも、行きたい。

どんな人とも、居られるように。

人が広く、生きて行く為に。

ねえオールマイト。私は……」

——ヒーローになりたい

強く握られている小さな手。

だがそんな彼女の震える手を彼は

「あ……」

振り払った。まっすぐに扉に向かって逃げ出すように駆け出した。

出る際に一度だけ彼女のほうを見る。

その時初めて彼女の無表情以外の顔を見た。

彼女は静かに泣いていた。

——すぐに連れ出してやりたかった。

彼女がいったい何をしたというのだ。

こんな場所にずっと閉じ込めて管理して、  
まるで

「まるで敵（ヴィラン）のすることのようではないか。と考えているのか。オールマイト  
よ」

「!!!……っ」

あの時オールマイトは何も言えなかった。  
声が遠のいていく。記憶がぼやけていく。  
彼の意識が過去から現在に引き戻される。

後悔していた。

あの日あの子を連れだせなかった事を。

世界を見せてやれなかったことを。

あの子は危険なんかじゃない、ただの少女ではないか。  
ずっとそう思ってきた。思い込んできた。

だが彼女は世界を危機に陥れた。

結局の所、彼女は確かに危険な存在だった。

彼はその現実がたまらなく悔しかった。

彼女とオールマイトが次に出会うのは一年ほど経ってからの事になる。



世界が青に飲まれた日。「青の世界」の事件の時だった。

## 第2話

雄英高校 地下三千メートル 「青の少女」管理施設にて

世界が青に飲まれた「青の世界」から十年が経過した。

真相は政府により隠蔽された。

事件は複数の敵ヴィランによる計画的犯行だとされている。

危うく世界が滅びるかもしれないなかった、この事件を解決したオールマイトの人氣は、日本のみならず海外でも不動のものとなっている。

そして、そのオールマイトの出身校である雄英は、倍率400倍を誇る超難関校だ。事件解決数史上最多の“エンデヴァー”。

ベストジーニスト8年連続受賞“ベストジーニスト”。

そしてナンバーワンヒーロー“オールマイト”。

数々のスーパヒーローを輩出してきたこの高校。

グレイトフル偉大なヒーローには雄英卒業が絶対条件、とまで言われている始末だ。

まあ実際にはそんなこと無いのだが。

そんなヒーローを目指す者なら、誰もが羨む狭き椅子を

「ボクもそこに行くんですか？相澤さん」

その少女は試験もなしに座ることが確定している。

凄惨な事件「青の世界」を引き起こした彼女は十五歳となっていた。

青い髪は腰まで伸び、体つきもやや女らしくなっていた。

年頃の女の子に比べたら起伏は足りないだろう。

が、そんなことは些細なほどに美しい少女に成長している。

本人には間違ってもそんなこと言わないが。

そして社会経験が絶望的に足りないためか（というか皆無）、どこか残念な印象が抜けない。

まさに文字通りの箱入り娘だ。

「まあそういう事だ、準備はしておけ」

「準備って言ってもボク何も持ってないよ？」

「心の準備をしておけ」

「なるほど……。わくわく。どきどき」

「……」

「あ、漫画は持って行っていないの？」

「駄目だ」

「えっ!? ぶーぶー!」

相澤消太は、これから待ち受けるであろう未来を想像してため息をついた。  
あいざわ しやうた

こんな大が百個は付くほどの問題児を、相澤は受け持たなくてはならない。一週間後、雄英高校ヒーロー科1-A組。その21人目として。

そして彼女の都合上「除籍」も出来ない。非常に厄介だ。

「ひとまずお前の名前は青石ヒカルだ。覚えておけ」

「わあ、なんだか普通っぽい? 名前だね」

「じゃないとクラスで浮くだろうが」

相澤が一月考えに考えた名前なのだが、彼女が知る由もない。

「ずっと」アズライト” って呼ばれてきているから、なんだか変な気分」

「……そうだな」

(こんな形で名前を与えることになるとはな……)

“青の世界”の事件を引き起こした当時名もない少女は、雄英高校の地下深くに建造された施設へと移送された。

より厳重に管理して、あわよくばその力を利用しよう。というのが政府の魂胆だろうと相澤は予想している。

地下三千メートルという大袈裟かと思うかもしれないが、この少女が起こした惨事

を考えると当然の事かもしれない。

当初の予定では五千メートルだったが、予算の関係上三千メートルに変更されたらしい。

法月が言っていた事なので間違いないだろう。

このとぼけた少女が十年前に引き起こした「青の世界」のきっかけや原因は、政府によつて隠蔽されているので分からない。

ろくでもない実験でもしようとして、失敗したのではないかと相澤は推測している。

（つたく……つくづく糞みたいな話だ）

「アズライトだが、それは本来お前の個性の名前だ。

個性聞かれたらそれで通しておけ」

彼女の個性はイメージが非常に重要になってくる。

研究者によると彼女に名前を与えることは、非常に危険な行為だということだ。

だから彼女に名は与えられなかった。

どうしても呼ぶ必要がある時には、個性の名前の“アズライト”<sup>A z u r i t o</sup>と呼んだ。

だが彼女の個性も年々強力になってきており、閉じ込めるにも限界が近づいてきている。

早めに社会生活に慣れさせないと、冗談じゃなく世界の危機だ。

だが名前が無いことには、社会生活を営むことは出来ない。

だから今回名前を与えたのは、政府にとって苦肉の策という事になる。

「えっと、ボクの名前が青石ヒカル。そして“個性”がアズライト……だね」

「覚えたか」

「うん大丈夫」

相澤には不安しかない。

「ボクの名前は青山ヒカリだよ」

「さっそく間違えてんじゃねえか！」

スパーン！と気持ちいい突っ込みの音がヒカルの頭から響いた。

「ひっ、酷いや」

「復唱してみろほら」

「ひっ、酷いや」

「そつちじゃねえ！」

パシコーン！ 景気のいい音が頭から響く。「うう……」と頭を押さえて彼女は口にする。

「ボクの名前は青石ヒカル。個性名はアズライト。個性で出来ることは……」

——なんでも。

「……個性の詳細については明かすな。困ったら分からないで通せ、いいな？」

「分かったよ。でも大丈夫かな？ 周りに迷惑かけないかな？ ボク全然自信ないよ……」

「個性の制御に関しては、俺の教えられること全てを教えた。」

お前は技量だけで言えばプロのそれを遥かに上回る。自信を持って」

実際相澤を含めてトップヒーロー達がこの少女の訓練には関わっている。

個性は成長するもの。わずか五歳の少女は引き起こした事態の規模を考えたら

個性の制御の訓練は最重要事項だった。  
そんな回りくどい事をせず、処分こころしてしまえという声も政府内には上がっていたよう  
だが、

法月が押さえ込んでいたらしい。

ともかくにも、相澤でさえ裸足で逃げ出すような苛烈な訓練を少女は課せられた。

その結果ほぼ完璧な個性のコントロールに成功している。

普通の子なら遊びや勉強に費やす時間をすべて、個性のコントロールに次ぎこんでい  
る。

十年かけて仕上げたのだ。

この完成度で駄目なら、プロヒーローは全員免許を返納すべきだろう。

既に少女の能力は、オールマイトをも遥かに超えていると相澤は感じていた。

だが……。

その訓練の過程は、あまりにも過酷かつ残酷な内容で。

相澤はこの少女が歪んで育ってしまったのではないかと非常に危惧していた。

(実際歪んで育ってしまったわけだが)

「そんな……相澤さんが褒めるだなんて。……どうしたの相澤さんおかしいよ？

熱でもあるんじゃないの？……!! まさか偽もnあいた！」

「黙っている。お前はいつも一言多いんだ。学校生活で苦勞するぞ」

彼女の頭頂部には、見事なたんこぶが出来ていた。

ふうと相澤は一呼吸おく。

ちよつと間をおいて、もう何度目になるか分からない質問をした。

ほんの少しだけ希望を込めて。

「……その個性でオールマイトを治す気はないのか？」

「ないかな。だってボク」

——あの人の事、大っ嫌いだから。



## 第3話

雄英高校入学日。

青の少女は相澤先生に連れられ、地下三千メートルの管理施設から出てきた。長い長い地下の通路を移動して、

何度通過したか分からない電子ロックのドアを通り、

エレベーターをいくつも乗り継いで約三十分。

ようやく雄英高校の建物内に出た。

始業開始まで一時間ほど有るらしい。

相澤さん（先生と呼べと言われている）は職員室にそそくさと行ってしまい、さつそく一人きりにされた彼女は、相談室を右往左往していた。

正確には相澤から「ここを動くな」と言われていた。だがしかし。

彼女のテンションは実には上がっていた。

実にアゲアゲだった。

話など聞いていなかった。無理もないかもしれない。

地上に出てこられたのは今日を含め数回しか今までなかった。  
憧れの地上がすぐ目の前にある。

この状況で果たして、彼女が落ち着いていられるだろうか。  
おとなしくしていられるだろうか。

否、断じて否。

少女はそーつと相談室の扉を開けて顔を出し、外の様子を探る。

(誰もいない。よし)

そろつと相談室を出てみる。そしてせわしなく、キョロキョロ辺りを見渡した。もしかして相澤さんが、まだ近くにいるかもしれない。

彼女はまるで猫のように警戒心を高めながら廊下を進んでいく。

少し進むとちようど、日差しが差し込む中庭が見えた。

辺りに人影は見当たらない。

(よし！)

彼女はダダダと外へ駆けて飛び出し、勢いよく空を見上げた。

白のワンピースが翻る。眩しい日差しで髪が宝石のように煌めいて、  
スカートは風と踊る様に波打った。

「太陽だ……！ 空だ……すごい……広い」

中庭から見えた景色はまるで、校舎という額縁に切り取られた絵画の様に見えた。少女の目に青空が飛び込んでくる。

彼女にとってそれは、無限に広がる世界の入り口だ。

普通の人には当たり前の景色。

太陽が白く輝いている。羊雲がゆっくりと流れていた。

彼女は大空へと両手を広げる。

その体いっぱい地球を感じてジャンプする。

そのまま掴めるような気がして太陽に手を伸ばした。

腕を広げて、風を感じる。クルクルとその場を回りだす。

優しい風の音に耳を澄ましたら、世界中のまだ知らない多くの人と繋がれる気がした。

芝生をゴロゴロと転がってみる。緑の匂いが心地よく、すうーっと息を吸い込んだ。

よく見ると様々な小さい生き物が、土や草の上で動いているのが見える。

無機質な地下施設と違って、地上は命に溢れていた。

大の字で仰向けになり空を見上げる。

世界が広がっているのを肌で感じる。

心がどこまでも広がるような感覚を覚え、次第に思考がクリアになる。

澄み渡った空に心が同化され、青く青く染まっていく。

——何処にでも行きたい、何処までも行きたい。

人の為に、誰かの為に。

世界の何処にでも、行きたい。

どんな人でも、居られるように。

人が広く、生きて行く為に。

——ボクは………ええ私達は

「なあお前」

声を掛けられた。少女はその声の方向に、上体を起こしてふり向いた。

太陽がちやうど逆光になっていて、少女にその人の顔は見えづらかった。

「そんなところで何をしてる」

起き上がるとその声の主は少年だった。

真新しい雄英高校の制服に身を包んでいる。

顔の色が左右で分かれていて、左が白くて右が赤い。

（変な人だなあ）

彼女も大概人の事を言えないのだが、そんな失礼なことを思ったのだった。

「制服も着てねえし行動がアレだったからな。少し気になって声かけただけだ」  
「ふーん……」

彼女は制服を着ていない。

いつも身に着けている、簡素な白のワンピースだ。

制服は着てはいけないのだそうだ。

法月から説明を受けているが、難しく途中で理解するのを放棄していた。

そして彼女は目の前の少年より、今見つけた天道虫に夢中になっている。

少年の顔が、すこしむつとなった。

自分など眼中にもないその様子が、癪に障ったのだろうか。

ぶつきらぼうに口にした。

「轟だ」

「……何が？」

「轟焦凍（とどろき　しょうと）。俺の名前だ」

少年——轟焦凍は名前を告げていた。

「ボクはね——ちよつと待って」

「（そ）そとポケットをあさる彼女。そしてメモを取り出して

「ボクの名前はえとね、青石ヒカル……だって」

「……おい」

「ん……何かな？」

「色々と言いたいことはあるが、まずお前女だよな」

ボクという呼び方は女の子の呼び方には変だ、というのが轟の感想だ。

女の子が自分の事をボクと表現するのは、まあ一般的でないだろう。

ちなみに相澤が一生懸命直そうとしていたが、何の成果も得られなかった。

「???ボクの性別は雌で間違っていないよ」

彼女の胸部は年頃にしては、かなり控えめである。

だが腰つきや顔。それに仕草などは、はっきりと女のそれだ。

男に見間違う人はまずいないだろう。

しかし雌という言い方は如何なものか。

そこは女と言えよと、内心轟は思った。

「名前を言うのになんでメモを取り出す必要があるんだよ」

まるで「偽名です」と宣言しているようなものだ。

「えとね、色々と有るんだよボクには」

追及されたくないと言っても言いたげに、強めの口調で言う。

「色々か」

「そう色々」

家庭の事情でもあるんだろうと轟は推測した。

彼も家庭について触れられて欲しくない。

それは目の前の女の子も一緒かもしれないと考える。

「とにかく邪魔しないで欲しいな。ボクはもつと外を堪能したいんだ」

「……教室に行かなくていいのか」

「えっ?」

「見えたんだよ、そのメモ。お前I—Aに来るんだろ」

彼は目がいい。風でちらつと捲れて見えたそれには

I—Aのクラスに在籍と書いてあった。

よりによって轟と同じクラスのヒーロー科。

なおさら彼女が制服を着ていない理由が、彼には分からなくなった。

なお彼女にも分かかっていなかった。

「そういえばそうだったよ。うん」

なんて呑気な奴だと彼は思う。

「俺もI—Aだ」

「へー……」

「またも興味なさげな返事。轟は少しイラっとした。」

「大方道にでも迷ったんだろ。連れて行ってやる」

「……………えと……………どうしよう」

結局教室に向かったのは、それから二十分ほど後の事。

彼女が思いっきり日光浴を楽しんだ後のことになる。

……………

……………

…

「お友達ごっこしたいのなら他所へ行け。ここは……………ヒーロー科だぞ」

（おお、相澤さんだ。けど、なんだろう？ ……い ……いつもよりやさぐれている！）

あの後色々な事を体験しながら、青の少女は無事に教室までたどり着いた。

だが彼女から周りは若干距離をおきながら、ひそひそと話をしている。

ただ何もせず黙っているだけなら、日本人離れた人形のような美貌なのに。

その雰囲気から醸し出される残念感は、いったい何か。

「そして青石……………」

（そういえばボクそんな名前だっけ）

「なんなんだ!? その机の上の飲み物は!!!」



デッデーン。

彼女の机の上にはペットボトル飲料と缶飲料が、ずらっと所せましと置かれていた。既にそれらは大量の汗をかき、机周辺は水浸しになっている。

「お金をくれたのは相澤さんだよ？だから試しに全部」

——買ったってか？

ざわ……ざわ……。

……

……

…

——少し前の話——

「ねえ轟君、轟君」

「何だ」

「あれは何？」

「……（またか）」

彼女が指をさしたのは自動販売機。

商品も普通。何のことはない、飲料水のラインナップのそれだ。

「自販機まで知らないのか？」

轟はここまで連れて来るまでに、彼女してきた数々の所業を思い出す。マンホールの蓋を眺めていると思つたら、こじ開けようとする（氷結を使つて阻止した）。

非常ベルを見つけた際には押しに行く（これも氷結を使つて阻止した）。

消火器を見つけたら使用方法を読みだして、ノズルを轟に向け使おうとする（全力で氷結を使つて阻止した）。

AED（自動体外式除細動器）を見つけては自分に装着しだす（何とか穩便に説得した）。

あれは何？これは何？

いつまでも止むことはない、質問の絨毯爆撃。

数々の試練を彼は乗り越えて、もう少しでクラスに着けるといふころ。

彼女は自動販売機そを見つけてしまった。

轟は疲労困憊、満身創痍。

彼の精神力は既に限界を迎えていた。

轟という抑止力を失い暴走しだした彼女は、

相澤さんから渡されたという財布の中身を使い果たすまで、ひたすら自動販売機で買い続けた。

「おお……すごい！　すごい轟君！　お金を入れてボタンを押したら……  
なんと飲み物が出てくるんだよ、これ！」

「自販機だからな」

「楽しいよこれ！」

「……（もう疲れた）」

ちやりん、がこん。ちやりん、がこん。ちやりん、がこん。

ちやりん、がこん。ちやりん、がこん。ちやりん、がこん。

ちやりん、がこん。ちやりん、がこん。ちやりん、がこん。

ウイーン（紙幣を入れ）。

がこん、がこん、がこん、がこん、がこん……。

ウイーン（紙幣を入れ）……。

轟は止めることはせずに、廊下に延々と並べられる飲料を黙って運んだ。

教室にいる人たちに勝手に一本ずつおごったが、それでもなお彼女の机の上に大量に

余っている。

ちなみに彼女は自販機に夢中で一本も飲んでいない。

轟のちに語る。なんで俺あの時止めなかったんだろうと。

「馬鹿野郎が！」

「そ、そんな……これ全部ボクのおごりであげるから」

水たまりから足を退けつつ懇願するが

「全部俺の金だろうが！」

相澤先生から大目玉を食らったのは言うまでもない。

「ハイ静かになるまで32秒かかりました。時間は有限。君たちは合理性に欠くね」

(相澤さん本当に)

「担任の相澤<sup>あいざわ</sup>消<sup>しょうた</sup>太だ。よろしくね(ハア、疲れた)」

(どうしちゃったんだろう? やっぱり悪いものでも食べたんだ!)

「個性把握テスト!」

「入学式は!? ガイダンスは!」

「ヒーローになるなら、そんな悠長な行事出る時間ないよ」

「……はっ!」

気付けばいつの間にか彼女以外は、体操服に着替えていた。

彼女は相澤の説明が退屈で、しばらくボーっとしていた。

相澤からキツイ視線が飛んできていたのに、彼女は全く気付いていなかった。

なにせボーっとしていたのだから。

彼女だけさつきと変わらない白のワンピースだ。

体操服なんて用意していなかった。

はつきり言つて完全に浮いているとしか言いようがない。

(相澤さん酷い！ボクにも体操服くらい用意してよ！怠慢だよ！)

「雄英は“自由”な校風が売り文句。そしてそれは先生側もまた然り」

相澤さんの話は続いている。

(仕方ないとはいえ、ずっとボクを閉じ込めていた所の売りが“自由”なんて皮肉かな?)

と思つていると、なにやらガラの悪そうな少年がソフトボール投げをしていた。

爆豪君というらしい。デモンストレーションでやらせて見せたらしい。

個性込みで705・2メートルだった。

掌から爆発が起きた個性を見た彼女は、彼の事を“着火マン”と呼称した。

(個性込みで大気圏突破も出来ないなんて、せめてキロメートル単位は飛ばせないとなね)

……手加減しているんだよね?)

「705メートルつてマジかよ」

「なんだこれ!!すげー面白そう!」

(あれ?これですごいって認識なんだ?うそ……うちのクラス弱すぎ……!)

「面白そう……か。ヒーローになるための三年間。そんな腹つもりで過ごす気での

かい?」

「相澤さん、それって酷い揚げ足取りだよね? 誰もそんなこと……」

「黙れ」

「モガモガ! (うわあ!)」

(捕縛武器が飛んできた! 酷いや! その気になればいくらでも引きちぎれるけど!)

青の少女は相澤の捕縛武器でぐるぐる巻きにされてしまう。

相澤が使うその捕縛武器は、炭素繊維に特殊な合金の鋼線を編み込んだものである特注品だ。

ますます周囲が彼女を避けているのが相澤には分かった。

「よし……」

(よしじゃないよ!)

「トータル成績最下位の者は見込みなしと判断し、〃除籍処分〃としよう」

「はあああ!」

「生徒の如何は先生の〃自由〃。ようこそこれが雄英高校ヒーロー科だ」

「モガ! モガガガ!! (酷い! 横暴だ!)」

「お前は見学している。邪魔だ」

「モ、モガガ!? (そ、そんな!?)」

クラス中から悪い意味で注目を浴びる彼女。

それを見て相澤はげんなりする。

はたして彼女がクラスに溶け込めるときは来るのだろうか。

彼女に関して相澤の不安が尽きることはない。

「モガ！モガ！モガガ！モガガモガガ！（馬鹿！阿保！間抜け！オタンコナス！）」

（除籍してえ……！）

生憎、彼女を除籍することは出来ないのだ。

## 第4話

——side 緑谷出久——

その少女を見た瞬間に緑谷出久は気付いた。

彼女がオールマイトの言っていた少女だと。

あのオールマイトが救えなかった人だと。

机の上に飲料を敷き詰めている、かなり変わっている子。

青い髪に青い目。白いワンピース。

青の少女。明日にも世界を滅ぼすかもしれない女の子。

見た瞬間から目が離せなくなる。

緑谷は合格通知が来た日を思い出していた。

……

……

……

「合格おめでとう」

合格通知が届いた夜、出久はオールマイトと浜辺で邂逅していた。



出久が“ワン・フォー・オール”の後継となるために、ゴミ掃除のトレーニングをした浜辺は、チリ一つなく綺麗だった。

色々な事を話した。

オールマイトが雄英の先生であること。

“ワン・フォー・オール”の後継は元々探していたこと。

学校側に緑谷との接点は明かしていなかったこと。

そして

「緑谷君、君には真実を話しておきたい。

“ワン・フォー・オール”を引き継いだ君は知らなければならない。

他言は絶対にしないようにね」

オールマイトと青の少女の出会い。

そして十年前に起きた「青の世界」の真実。

青の少女の個性の暴走で起きた事。

そして、その少女と出久が同じクラスになること。

全てが出久の常識を吹っ飛ばすような衝撃だった。

当然だろう。世界の闇のその一端に触れたのだから。

「……君は私を軽蔑するだろう」

「そんな……僕は」

「私自身が軽蔑しているのさ。あの彼女の眼は今でも私を責め続けている。ヘド口事件の時、君は言った。「君が助けを求める顔してた」と……。」

思い出したよ。その時爆豪君はあの時の彼女と同じ顔をしていた。

君は動いた。なのに私は——」

……その手を振り払ってしまった。

「君には言っておかなくてはならない。

ヒーローとは、君が想像しているような高潔な仕事ではない。

確かに命を賭して綺麗ごとを実践する仕事ではある。

だが……綺麗事だけでは、とても務まるものではない。

理不尽にまみれたこの社会を、はみ出してしまった者を摘み取る。

そこに善悪など関係なく、秩序を守るため戦い続ける。

それは燃え盛りながらも周り続けている。まるで車輪の様に……。

覚えておいて欲しい。ヒーローとは正義の味方では決してないのだと」

出久の眼は、しっかりと前を見据えている。

「それでも君は、ヒーローになるんだね」

「……正直びっくりしすぎてよく分からないんです。」

僕は笑顔で何だって助けちゃうあなたに憧れました。

それは確かな事なんです」

「そうか」

「どんな過去があっても、僕はオールマイトを信じます」

「……ありがとう。今の私に出来ることはそう多くはない。

だから、君が道に迷ってしまった時には」

ーせめて話を聞かせて欲しい。それが、私に出来る唯一の事だ。

語るオールマイトのその背中が、かつてなく小さく出久には見えた。

……。

「担任の相澤消太だ。よろしくね。さっそくだが体操<sup>レ</sup>服<sup>レ</sup>着てグラウンドに出ろ」

(……いけない。しっかりしろ！僕はオールマイトに託されたんだぞ！)

そしてグラウンドでは個性把握テストが始まった。

ソフトボール投げ。

立ち幅跳び。

50メートル走。

持久走。

握力。

反復横跳び。

上体起こし。

長座体前屈。

全ての項目で“個性”ありの体力テスト。

だが問題がある。出久はまだ個性の微調整なんて出来る段階ではない。出せる力は100%か0%か、出力の調整ができない。

そして使ったが最後までその部位は力に耐えきれず、バッキバキになってしまう。

骨折必至である。そんな事では、痛みで次の種目どころではなくなってしまった。

何より問題なのは

「よし、トータル成績最下位の者は見込みなしと判断し、“除籍処分”としよう」

最下位はなんと除籍処分になってしまうという。

周りは個性を使い放題で、緑谷は実質個性は使えない。

このままでは出久が除籍処分なのは目に見えている。

(どうすれば良い!? 考えろ!)

—— side of f ——

.....

.....

…

「最下位除籍って！」

「入学初日ですよ！いや初日じゃなくても、理不尽すぎる！」

「モガガ!!（そうだ!）……ブファ！」

少女なんとか捕縛武器を口から外すことに少女は成功した（個性は使用してない）。

初日から除籍なんて、バカのことだ。

そんな除籍になる人を通してしまった雄英は無能ですと、大声で言いふらしているよ  
うなものだ。

いつもは冷静沈着な人なのに……。

相澤さんはどうやら頭のねじが飛んでしまったのだろうと、少女は思った。

「おい、聞こえてるぞ？」

捕縛武器の締め付けが強くなる。

どうやら気付かないうちに、口にしていたらしい。

「ですが、あながち間違ってもいけませんわよ？」

「……自然災害に大事故。身勝手な敵たち。日本は理不尽にまみれてる。

そういう理不尽を覆していくのがヒーロー」

「……」

相澤さんの言葉に生徒たちは、何も言い返せず静まり返る。

「放課後マックで談笑したかったなら残念だったな。これから三年間。

雄英は全力で君たちに苦難を与え続ける」

「たった三年で良いの？それと」放課後マック「って何？」

「かの英雄ナポレオンはこう言ったそうだ。

「真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者」と。

Plus Ultraプラスウルトラ（更に向こうに）さ、全力で乗り越えてこい」

「完全に無視された！」

「お前は見学だと言ったろうが。おとなしくしているろ」

それから青の少女を抜きに行われる体力テスト。

少女は暇を持て余していた。

「あ、轟君だ。やつほー」

唯一知り合いの轟の番になった時、遠くから手を振ってみる。

彼はちらりと一瞥した後、すぐに視線をそらした。

少女は最初こそ、わくわくしながら見ていたものの、生徒達の技量を見てやる気をな

くしたらしい。

（なんだ、皆大したことないな。轟君も期待外れだな）

空をボーッと見上げながら、足元の草をプチプチ抜き始める。いつの間にか彼女は、グラウンドの隅っこで昼寝をしていた。

……

……

……

やがて全ての種目の測定が終了する。

そして結果発表の時間……

「ちなみに除籍はウソな。君らの最大限を引き出す、合理的虚偽。」

「は————!!?」

1位 八百万 百

2位 轟 焦凍

3位 爆豪 勝己

……

20位 緑谷 出久

「ふあああ、よく寝たー」

そんな時に青の少女は目を覚ました。

欠伸をしておさえながら「どしたの？」と呑気に声を掛けていく。

自分は除籍になるまいと、今までのピリピリと張りつめていた空気。それが無神経な態度に逆撫でされると

「ちよつと、おかしくないか？」

当然疑問を持つのが現れてくる。

「なんであいつはテスト免除されてんだ？」

少女に疑問を持つもの。そして

「そもそもヒーロー科のクラスは一般入試18人、推薦入試2人の合計20人のはず。

なんで21人居るのでしょうか？」

そう、人数が合わないのだ。

何故なら青の少女が21人目として入ってきたから合う筈がない。

もつともその理由も説明されていないのだから、分からなくても無理はない。

「そもそも制服も着てない、本当に雄英の生徒なのか？」

メガネをかけた男子も疑問の声をあげた。彼は飯田天哉（いいだ てんや）。

真面目そうな彼には、彼女の態度が甚だ不快に映つていても仕方ない。

「この際だから説明しておくか」

相澤が生徒達を一瞥するとその迫力に、皆一斉に黙りこんだ。

彼のヒーローネームは抹消ヒーロー“イレイザーヘッド”。



その度重なる死線を潜り抜けてきた眼力は、凄まじいものがある。約一名にはまるで効果がないが。

「……今年の1—Aには特別な推薦枠が追加されていた。その名も国家推薦枠」

「国家！」

「推薦——!?!」

器用に別れて驚く生徒一堂。一方、青の少女は蝶々を追いかけている。

「文字通り国から推薦されているって事だ。生半可な才能じゃまずあり得ない。

当然どれ程のものか精査して有るわけだ」

国家推薦枠。もちろんこれは、法月らが用意していた方便だ。

青の少女の事を、馬鹿正直に説明出来るはずがない。

だから、彼女の事はあの手この手で都合良く扱えるように、様々な特別処置が用意されている。

「おいおい、そんなのってアリかよ?」

「当然個性の全容も把握済み。今やったような画一的なテストじゃなく、

もっと詳細な個性専用のテストを青石はこなしている」

「……こんな子供騙しのテスト、こいつにやらせるのは」

相澤は髪をかきあげて

「合理的じゃない」

「でっ、ですが！それほど凄いのですたら、是非ともその力を見せて頂けないものでしょうか!？」

「そうすれば更に皆の向上心も上がり……」

「お前は推薦の八百万か、体力テストで1位の」

「はい」

「やめておけ。俺が一番気にしているのはそこだ」

「それはどういう……?」

相澤は少し考える。どこまで話すべきか。

どのみち青の少女に関しても、全てを隠し通せる訳もない。

いつまでも個性を見せない訳にはいかない。果たしてベストなタイミングはいつか

……。

「あまりの才能の差に絶望されて貰っては困ると言うことだ。世の中には知らなくても良いことなんて腐るほどある」

「とりあえず適当なことを言っただけに煙に巻いてしまおうと相澤は思った。

相澤は嘘は言っていない。

壁がないと人は成長しない。

だが、高すぎる壁には人は挑戦しようとは思わない。少女の力を見たら、ほとんどの生徒が打ちのめされることは目に見えている。

それに相澤は青の少女の個性をクラスメイトに見せるのは、まだ少し早いと考えていた。

けれども……1—Aの生徒たち。その真剣な表情に心が揺れる。

これからヒーロー社会を支えていくであろう卵たち。

相澤は見込みがないと判断すれば、迷いなく除籍処分を下す人だ。

その証拠に相澤は去年の一年生、まるまる一クラス全員に除籍処分を下していた。

通算の除籍指導数は、なんと驚異の154回。

はつきり言つて常軌を逸している。

その相澤が一人も除籍処分をしない程、可能性を秘めた若者たちだ。

自信に満ち溢れているその姿は、暗闇に慣れている彼の眼には眩しく映った。

「だが……そうか。……それでも、打ちのめされない自信があるやつだけに、こいつのテストを見ることを許可する」

どうだ、と問いかける。

「そんなの……見るに決まつてるじゃないっすか」

「後学のため！見させて頂きますわ」

「……俺も見るぞ」

「おい自販機女あ！越えられるもんならよお越えてみやがれ！」

クラス20人、全員が残っていた。

(Plus Ultra (更に向こうに) ……か)

「……えっ!?!なんの話？」

青の少女がきよんとした顔をしていた。

「聞いてなかったのかよ!？」

少女は全然聞いてなかった。彼女は相澤から再び説明を受ける。

「えー面倒ー！やだーやだー！」

そしてだだをこねだした。

だが相澤先生に一喝され、しぶしぶソフトボール投げに向かう。

「相澤さん」

「先生と呼べ」

「相澤先生」

「何だ」

「どの程度でやれば良いかな？本気の出し方によっては皆死んじゃうよ？」

「「は？」」

生徒たちの声が奇跡的に一致した。

「回りに被害を出さない程度でやれ。間違っても本気は出すな！被害を出さないことに本気出せ！」

「はーいー！」

「いいな!?本気は出すなよ！出すなよ!?絶対だぞ！」

いつにもなく相澤は念押しを重ねる。

いざとなつたら個性を消せるように準備した。

「はいはい、分かっている。もー相澤さんは心配性だなあ。だから好きなんだけどね」

少女は最後の一言を、誰にも聞こえないように呟いた。

青の少女は目を瞑り、精神を集中させる。

先ほどまでのおちやらかな表情は一瞬で消え去った。

彼女の気迫がこもる真剣な表情。その豹変ぶりに1ーAの生徒たちは息を飲む。

青の少女は個性のトリガーを歌う様に口にした。

「青の世界……」

鈴のように澄み渡った声が響いた。

青の髪と瞳が内側から光を放つ。風も無いのに彼女の長い髪が、ふわつと宙に舞う。

彼女に見える世界が「青」に染まっていく。

思考が何処までもクリアになる。

すっかり制御しないと、際限なくどこまでも広がろうとする「青」。

少女の頭の中に「青」が浸食した現実の、膨大な情報が流れ込んでくる。

それらを解析、取捨選択。本人の意思に反して広がろうとする「青」。それを強引に押さえつけ余計な機能を制限<sup>オミット</sup>。

自らの求める結果に必要な最低限の機能に落とし込む。

目的の達成のために必要な手段をシミュレート。

周りに危害が及ばないように演算し、最適な手段を選びだす。

制限した「青」の力を不可視の領域にして、少女は自らの回りに展開する。

その領域を慎重に広げていく。そして彼女にしか見えない「青」の立方体状の構造体が、無数に出現した。

それらは主の命を待つように、少女の周りを衛星のように周回し続ける。

構造体の一つに、少女は手を伸ばす。構造体は彼女の意味をくみ取った後、測定用のソフトボールに吸い込まれていく。

その瞬間、彼女に同化されたボールが青い結晶に包まれた。

ここまでわずか0.2秒。常人には認識すら困難な時間で、全ての条件をコンプリート。

個性<sup>A</sup> “アズライト”。

「青」に飲まれた現実<sup>イメー</sup>は、全て彼女の想像<sup>イメー</sup>に同化される。逆に彼女の想像<sup>イメー</sup>が現実<sup>イメー</sup>に侵食するとも言える。

「青」に侵食された現実<sup>イメー</sup>は、彼女が望んだこと全てがそのまま反映される。思ったことは現実になる。思ったことは何でも出来る。

人が想像<sup>イメー</sup> 出来ることならば、あらゆる事が実現可能。

故に彼女がやろうとして、出来ないことは何一つとしてない。

正に規格外な個性。

「青の世界」の事件から、少女の個性の成長は留まることが無かった。

そして今でもその成長は続いている。

やがては彼女自身の手<sup>ゼロ・グラビティ</sup>に負えなくなる時が来るのも、もはや時間の問題だった。

「無重力……」

「あつ！あれは！」

彼女の傍を浮き始めたボールを見て、女の子が声をあげた。

無重力にしたボールを、粒子加速装置の様に光速の99%まで加速。

当然ボールの通り道は真空にする。

そうしないと大気で燃え尽きる。衝撃波もバカにならない。ボール自体の強度も当

然あり得ないほど上げてある。

真空のレールを敷き終わる。ボールは彼女の周囲を輝きながら高速で回っている。

それは土星の輪の様に見えた。

そして射出。一筋の光が空を切り裂いた。

ボールは一瞬で地球の外に消えた。

相澤がスツと記録計を生徒達に見せる。

記録は

「8.....1」

当然の無限大だった。

.....

.....

.....

立ち幅跳びは意味がない。空を自由に飛べるから。

50メートル走に持久走。

光速の99%まで加速したら、タイムはどちらも誤差程度の差にしかない。

握力。

これも無意味。出そうと思えばいくらでも力を出せる。握力計は粉碎された。



反復横跳び。上体起こし。

思考速度と運動速度も当然、幾らでも上げられる。

今回は通常の1000倍の運動速度と思考速度にブースト。

当然本気なんかじゃない。

長座体前屈。

巨大化や、体をゴムの様に伸ばすなど、色々な方法があつたが、今回は手を抜いて個性は使わなかつた。

全ての項目を計り終わり、青の少女の計測結果が発表された。

ソフトボール投げ。記録：無限大

立ち幅跳び。記録：無限大

50メートル走。記録：0・01秒

持久走。記録：0・01秒

握力。記録：測定不能

反復横跳び。記録：1万回

上体起こし。記録：1万回

長座体前屈。記録：50センチ

「なんつだこれ!?!」

「はあああああ?!?!?」

相澤にはやる前から分かっていたが、ぶつちぎりの1位だった。

だが、明らかにやりすぎだった。

もう少し彼女は手加減を覚えるべきだ。

「相澤さん、痛いよ。叩かないでよ」

「やりすぎだ馬鹿野郎。本気は出すなど言っただろう」

「でも相澤さん」

「なんだ」

「潰さないように蟻を踏むのは、力の加減が難しいんだ」

どやあ、とした顔を見せてくる少女。

「また漫画の影響かこの野郎。妙な事ばかり覚えやがって」

相澤は入学祝いに買ってやった漫画のチヨイスを後悔した。

てしてして、彼女の頭をストレス発散に小突いていく。

「だから痛いって!」

そんな二人の様子を、緑谷出久はじっと見つめていた。

.....

.....

…

——side 緑谷出久——

「ちなみに除籍はウソな。君らの最大限を引き出す、合理的虚偽、」

「は—————!?!」

相澤先生の言葉に緑谷は腰を抜かすほど驚いた。

そして発表された順位。

緑谷は最下位だった。

先生の言葉が嘘で良かった。助かったと緑谷は思ったが、

こちらを見てる相澤先生の目を見て考えを改めた。

相澤先生の言葉をもう一度思い出す。

——よし、トータル成績最下位の者は見込みなしと判断し、“除籍処分”としよう

…

(…………… そうか! …… “見込みなし”なら最下位でなくても、きつと除籍にするつ

もりだったんだ……………!

皆本気でやってたし、才能も有るから見込みがあるって、そう判断しただけかもしれない。

ない。

……………分からない……………けど。少なくとも僕に気を抜く暇は無いだ!)

成績表を見つめる。最下位の二十位。かっちゃんは三位。

(かっちゃんできえ三位。なんて厚い壁なんだ……！)

ソフトボール投げの際に痛めた右人差し指の痛みを感じながら、緑谷は既に出遅れる現実を噛み締めた。

そして視界の端に目に入る青の少女。

あくびを堪えながら「どしたの？」なんて声をかけている。

余りにも場の空気を読んでいないその行動は、皆のプライドに火をつけた。

そして、彼女も個性把握テストを受けることになった。

彼女は国家推薦枠で入ってきた21人目のクラスメイトだった。

オールマイトの言葉を緑谷は思い出す。

——彼女は既に……恐らく世界中の誰よりも強い。私など遥かに及ばない場所にまで行ってしまっている

——それだけ強いのなら、なんで自分で出ていかないんだろうと思うんですが……。

——緑谷君、その答えはきつと彼女と接していくうちに分かっていくと思う。

あの時に飛び出した君なら。あの場で誰よりもヒーローだった君にならきつと。

彼女を救ってやってくれ、私には……出来なかった。

だが君ならきつと追い付ける。

彼女が投げたボールは流星になって、空の果てまで飛んで行った。  
ひとたび走れば音も置き去りにした。

計器は彼女の力に耐えきれず破壊された。

ハイスピードカメラでも、彼女の反復横跳びは捉えきれなかった。

……全ての次元が違った。

個性を得て少しは強くなったつもりだった。

(……オールマイト、彼女に追いつける日が来るんでしょうか)

彼女の結果を見た緑谷は、その余りにも遠すぎる距離に呆然としていた。

—— side of ——

……

……

……

放課後。

相澤は少女と共に、隔離施設行きのエレベータに乗っていた。

学校が終わり次第、彼女は地下三千メートルの地下施設に帰らなければならない。

彼女は今日は多くの事を体験したが、まだ雄英高校の敷地の外に出ることは許されて

いない。

そしてきつと、許されることは永遠にないだろう。

相澤が少女にしてやれることは敷地内を連れまわしてやるか、物を買ひ与えてやるくらいしかない。

だが少女にとつて一番嬉しい事とは、相澤と一緒に居ることだという事実には、彼はまだ気づいてはいない。

ずっと無言の二人だったが、やがて相澤が切り出した。

「学校はどうだった」

「えとね……」

しばらく彼女は考えていた。

「太陽が眩しかった。それに空もすつごく広くて——」

学校の事を聞いたのに、口から出てくる言葉は主に太陽と空の話。

それと時々風。いつまで経っても授業の事やクラスメイトの話をしない。

と思っていると

「あ、そういえばね友達が出来たんだよ」

ようやく学校生活らしい話をしてきた。

「……友達か。お前が初日に作れるとは意外だったな」

「失敬な！ ボクにだって友達くらい作れるもん」

「そうか? ……で、誰だ?」

「えとね。頭が真つ二つに割れている変な人」

「……轟か?」

「そう!それ!轟君。飲み物を一緒に運んでくれた人!

それにぬるくなっても冷やしてくれたんだ」

轟の個性”半冷半燃”。体の右半身からは氷結を、左半身から炎を出せる強個性だ。

(轟焦凍……”エンデヴァー”の息子か)

「便利だよね!いつでも飲み物がキンキンに冷えた状態で飲みちやうなんて!」

彼女の個性の捉え方は少し変わっているらしい。

「そういえば個性について色々聞かれて大変だったんだよ。

でも少ししたら誰も近づかなくなったんだ何でだろう?」

「……さあな」

どうせ無自覚に相手を煽るようなことを言ったのだろうと相澤は思う。

(映像まではいいか……音声データを後で確認しとくか?)

彼女の生活は全て監視され記録(ログ)が残っている。

その白いワンピースも伊達にさせている訳では無い。

ヒーローコスチュームの最新鋭の技術が惜しみなく投入されている”拘束具”でも

あり、同時に“監視装置”なのだ。

制服や体操服を着せられない理由はそこにある。

もつともこの前説明した際に、本人は途中で眠ってしまったわけだが。

「楽しかったか」

ぶつきらぼうに聞いた相澤に少女は即答する。

「うん！すっごく！」

(……ログを漁るのはやめておくか)

相澤も多分気付いていないが、彼女に友達が出来て一番嬉しかった人はきつと彼なのだろう。

幼いころから面倒を見続けて、もう十年ほどになる。

思えば長い付き合いになるなど相澤は思った。

「はやく明日にならないかなあ」

彼女に振り向くと、そこには満面の笑みがあった。

つられて相澤も、ほんの少しだけ口の端を緩めた。

少女がそれに気づくことはなかった。



## 第5話

相澤は少女を地下まで送り届けた後、地上に戻った。

そして相談室で待たせている緑谷を迎えに行く。

相談室の扉を開いたら、緑谷がガチガチに固まりながら椅子に座っていた。

おおかた除籍処分になるんじゃないかと、心配しているのだろうと相澤は思う。

彼の右人差し指には包帯が巻かれていた。

相澤の指示通りに、リカバリー婆ガールさの治療を受けたようだ。

「緑谷待たせた。付いてこい」

入り口から短く言葉を掛ける。扉を開けたまま廊下を歩きだす。

ちらりと後方を振り向くと、緑谷が慌てて相澤の後を付いてきていた。

「あの、僕なんで呼ばれたのか、まだよく分かっていなくて」

「これから行けば分かる。……緑谷、くれぐれも発言には気をつけろ。」

不用意な言葉は絶対に吐くな。

最悪お前が殺されることになったとしても、俺には一切止めることが出来ない」

「じ、冗談ですよね？」

「……」

相澤の眼を見て緑谷は冗談ではないことを悟った。

ごくりと唾を飲み込む。

緊張からか両手をぎゅつと握りこんだ。

しばらくリノリウムの床をひたすら歩く。

やがて着いた場所は、校長室の隣。

先月から新たに設けられたその部屋は、とある人物の執務室になっている。

相澤がコンコンとノックすると、直ぐに返事が返ってきた。

「入れ」

言われるまま二人は入室する。

その部屋の主が、鷹を思わせるような眼で静かに見据えていた。

法月将臣。この国ただ一人の高等尋問官。

年齢は四十台後半に見えるその男性は、実は本当の年齢を誰も知らない。

記録が確かなら100はとつくに過ぎている。

それでこの見た目は、やはり何らかの個性の恩恵だろうか。

ちらりと相澤は、法月の胸につけられている小さなバッジを見る。

裁きの天秤。

それは紛れもなく高等尋問官を表す証。

普段は装着していないそれを身に着けていることには、何らかの意図が有るのだろうか。

(考えても仕方がないか)

相澤は思考を打ち切つて、法月の言葉を待つ。

法月はその気になれば、誰であろうとすぐに処刑できる程の絶対権力者だ。

だがその権力を、むやみやたら振るうことはない。

この人はヒーローが社会のために個性ほうりよくを振るうように、あくまで理性的に権力ほうりよくを振るうのだ。

もつとも振るわれた側からすれば、理不尽に感じる場合も少なくはない。

彼の持つている杖が、コンと小さく床を弾いた。

「ご苦労だった相澤。そして緑谷出久。お前がオールマイトの後継か」

「え!？」

緑谷は思わず上ずった声を上げた後、慌てて口を押えた。

「私は高等尋問官の法月将臣だ。聞いたことぐらいはあるか? まあ最近の若者は知らんだらう」

「法月将臣!?! あなたがあなの!?!」

当然緑谷は知っていた。オールマイトに、上司のような人だと説明をされていた。

あのオールマイトに命令できる人が居た事実には、当時緑谷は衝撃を受けた。

“高等尋問官”。オールマイトから聞いた後調べたら、とんでもない存在だったので覚えてる。

そんな絶対権力者が居るなんて、少なくとも緑谷には聞いたことが無かった。

確かに相澤先生が言っていた通りだ。

迂闊な事をしようものなら、除籍などでは到底すまされまいだろう。

最悪この場で射殺されても、おかしくとも何ともないのだ。

「私の事を知っているなら話が早い。お前の今後についての話をしようというのだ」

「は、はいー」

「緑谷よ……お前はオールマイトの“ワン・フォー・オール”を継承した。相違ないか？」

個性の譲渡を法月に報告してあることは、オールマイトから予め聞いていたため驚きはない。

「はい、ええつと……まさかもつと相応しい人に譲れとか」

だがこの人の前になると、なんとなく不安な気持ちに緑谷はなっていた。

言葉も尻すぼみになる。

「それこそまさかだ。オールマイトがお前を指名したのだ、お前こそが正当なる継承者である。」

私には随分と頼りなさそうな少年しか見えないが……。

オールマイトが相応しいと判断した以上、その選択に私が口を挟む余地はない。

彼が選んだというからには、何かしらの資質を備えていると私は信じている」

「あ、ありがとうございます！」

思いもかけない言葉に、緑谷の言葉が弾む。

「だが……」

その低い声色に、緑谷は背筋をピンと伸ばした。

「力には常に責任が付きまとう。」

そして責任を負うと、同時に何かしらの義務を背負うことになる。

緑谷よお前は、オールマイトの力を受け継いだ。

然らばその力には責任が、そして義務が付いてくる。

その事は理解しているのだろうか？」

「！……大丈夫です」

「無論それは私とて同じだ。私の個性を明かすことは出来ないが……。

だが力がある以上は、社会に還元しなければならん。」

……ひとつ問おう。簡単だがとても重要な事だ。  
敵ライオンの定義とは何だ。

なぜ奴らが裁かれるのか言ってみるがいい」

「……？ ……」

緑谷はしばし考える。床に目をそらしながら気を落ち着けて答えを探す。なるべく冷静になるように努めるが、鼓動が早くなるのを緑谷は感じる。ふと前をむくと、法月は緑谷を値踏みするように見ていた。

緑谷が口を開く。

「個性を使って悪事を働く人たちが敵ライオンだからです。それを——」

「論外だ！」

だん、と大きな音がした。緑谷の答えは遮られる。

杖の先が床に突き付けられた音だと、少し経って緑谷は気付いた。

緑谷が無意識に一步後ろに下がる。それは本能的な恐怖。

法月の全身から伝わる覇気は、トップヒーローですら委縮させるほどのものだった。

「え……？」

「とんだ拍子抜けだぞ緑谷！」

オールマイトが選んだというからには、少しは期待していたが結果これか……

私は、どうやら君を買いかぶっていたようだ」

「待つてください何が……」

「三日やろう。それまでに答えを出して、再び来るがいい。

ツイラン  
敵とはいったい何かをな。

その根本を押しえていない者が、ヒーローになるから社会は墮落する。

容易にヒーローから ツイラン 敵に落ちぶれる。

そして平和の象徴とやらに、継らなければならなくなるのだ」

「……」

「下がれ緑谷。今日は任務を通達予定だったが延期する。

お前に任務を任せられるのは、まずヒーローの前提条件を正しく理解してからだ。

下がれ！」

「……失礼します」

緑谷は何もできず、引くしかなかった。

先ほどの回答の何が悪かったのかを、ぶつぶつと独り言をしながら考えていた。

緑谷出久が扉を閉める。その部屋に残るのは二人。

法月将臣に相澤消太。

ともに鋭い眼光が光るが、それは争いの前兆では無い。

互いに細かい仕草に挙動を確かめて、少しでも心理的に相手を探るため。緑谷の足音が聞こえなくなった時、法月が口を開いた。

「報告を」

相澤は短く促される。

「特に問題ありません」

「よろしい。レギオンの様子は」

「日常生活で出てくる兆候は有りません、ただ……」

少し言いよどむ相澤

「続けたまえ」

「ログを確認したところ、朝の始業前に少しですが反応がありました。

弱い反応ですがレギオンです」

「……地上に出るとやはり出てくるか」

二人の間で交わされる「レギオン」という言葉。

それは「軍団」を意味する言葉だが、一体何を指しているのだろうか。

いずれにせよ二人の間で会話は成立していた。

「ふむ……結構、引き続き監視に努めたまえ。何か質問は」

その質問に少しだけ逡巡し



「明日はオールマイトがヒーロー基礎学を担当します。彼女がいると危険では」  
「無論承知の上だ。最悪の事態を想定しなければならん。」

明日のヒーロー基礎学は、私も監視する。お前も同行しろ。

レギオンの対処は、今のオールマイトには荷が重すぎる」

「……やはり彼女を参加させない方が」

「相澤よ、よく考えろ。お前と私の個性は確かに強力だ。」

がいつまでもお前と私だけで、奴の個性を抑え込める訳では無い。

現に10年前の暴走の時には、お前の個性はまるで通用しなかった。

私とオールマイトが出張り、ようやく互角だった」

「……」

思い出すのは10年前のあの日。

まるで事前に事件を予測してあったかのように、相澤は彼女の近くに配置されていた。

あの時に確かに抹消の個性を使ったはずだが、効果がなかった。

その原因は結局不明だが、また同じようなことにならないとは限らない。

いや、確実に“抹消”が効かなくなってきたことは、データで明らかになっている。

いずれ……。

「いずれ「その時」は来る。遅いか早いかの違いでしかない。

明日、彼女を授業から外したところでどうなる。

少なくとも具体的な対抗策がある今しかないのだ。

ならばむしろこちらから誘い出しそこを叩く。

結果的そちらの方が時間は稼げる。彼女を計画まで持たせることが出来るだろう。

後手に回り続けると、全てが無意味になりかねない。

計画は既に始まっているのだ。止まることは許されん」

計画。その内容は相澤にも知らされてはいない。

だが彼女の力を最終的に無力化できる構想が、今本格的に動いている。

そう、その計画通りにいくと青の少女は……

——彼女は、死ぬ。

## 第6話

——side 緑谷出久——

法月に部屋を追い出された緑谷は、独り言を繰り返していた。

先ほどのやり取りをもう一度反芻しながら、自分の答えの間違ひを見つけようとする。

しかし、いつまでも見つけないことが出来ない。

先ほどの法月の、失望しきった顔が脳裏に浮かぶ。

法月の眼からは、威圧感以上に何か強迫観念にも似た、信条のようなものを緑谷は感じた。

あの人を納得させるには、普通の回答では駄目なんだと緑谷は理解する。

何かが思い出せそうで思い出せない。

緑谷は確信している。

緑谷は多分、法月の問いの答えをどこかで聞いたはずなのだ。

——どこかで

「緑谷少年」

背後から声をかけられる。

振り向くまでもなくオールマイトだと分かった。

「今からは時間あるかい？しばらく付き合ってくれないか」

「はい大丈夫ですが……」

緑谷は特に深い追及もしないまま、オールマイトについていく。

トウルーフオームのオールマイトの姿はいつもより痩せて見えた。

……

白く高い塔が、敷地内の中央にそびえている。

柱にも見えるそれは、エジプトのオベリスクにそっくりだ。

悲しみにも染まらないその白は、約十年間雨ざらしになってなお、輝きがあせること

は無い。

緑谷にはそれがまるで癒えない傷跡のように見えた。

「共同墓地……」

緑谷とオールマイトは郊外に建設された共同墓地に来ていた。

災害で日本も火葬場も不足した。余りにも急でそして巨大すぎる災厄だった。

そして国はその災害で亡くなった人たちを、一括して埋葬する方針を示した。

この共同墓地も全国に、幾つか点在するそんな施設の一つだ。

瘦せこけている姿のオールマイトに並んで、歩みを奥の方へと進める。高い塔の下には出入り口が存在し、誰でも無料で入場することが可能だ。十年前に起きた「青の世界」の被害は、当然日本にも及んでいた。国内では約三百万人が亡くなっている。

いきなり停止した電子機器。それに誘発されて起きた事故に火災。実はそれらで亡くなった人たちは、全体の三割に過ぎない。残りの七割の人が亡くなった詳しい原因は「不明」。

「青の世界」が起きた際に次々に起きた意識喪失。

現在は“昏睡病”と呼ばれているそれに、治療法は無い。

世界中で起きた“昏睡病”。

それは、未だに正体が明らかにならなず謎に包まれている。

奇妙な事に“昏睡病”に陥った全ての人に、“個性”の喪失が見られた。異形型の個性の人も個性を失い、“無個性”の姿に戻りやがて死んだ。

どんなに手を尽くしても、個性を使用しても彼らはやがて、ゆっくりと衰弱して死んでいった。

世界中の人が次々と死んで、一人も目を覚ますことは無かった。たった一人の例外。

緑谷出久を除いては。

だがその事実は世間に全く知られてはいない。

もちろんそれには、政府の手が回っていた。

何故政府に隠蔽されたのかは、今の緑谷には分かる気がした。

全ては「青の少女」。

結局そこに行き着くのだと、緑谷は確信を抱いた。

「私がここを訪れる理由は、平和の象徴」としての責任を忘れないようにするためだ。

確かに私は彼女を止めた。真相は隠蔽されたにしても、私が災害を止めたことは公表された。

祭り上げられたよ”世界の救世主”だと。

だけどあの時、私は躊躇した。彼女と戦うときに迷ってしまった。

幼い彼女を殴るのかと、暴力を振るうのかと。

結果がこれだ。多くの人が死んだ。その中には私の知り合いも当然いる。

私は、彼らの死の上に立っているのだと忘れないため、ここに来るのさ」

塔の内部には誰も居なかった。

受付も全自動化されている。

人など居なくても、機械だけで全てが成り立つシステム。

そこに青の少女の管理のシステムが流用されていることは、緑谷の知るところではなかった。

「悩んでいるようだね」

緑谷はゆっくりと息を吐きながら気を落ち着かせ、考えをまとめて口にする。

「法月さんに問いかけられました。敵とは何か。<sup>ツイン</sup>

僕は個性を使つて悪事を働くものだと言いました。

けど……」

「その認識は確かに違うところがある」

オールマイトは即答する。

緑谷は少し目を大きくした。

「まず個性を使うか使わないかなどは些細なことさ。

個性など使わずとも、包丁でも人は殺せる。拳銃を手に入れたら、もつと楽だろう。

個性がなくても相応の道具と知識さえあれば、個性よりも余程の脅威になる。

もつと言うなら、無個性の人の素手であつても人は簡単に死ぬ。

首を絞めたり、折ったりね。

君になら分かるだろう？

この社会で無個性の人たちが、どれだけの悪意にさらされているか。悪意を受け続けてもなお、まっすぐ正しく育つ人はそうはいない。

環境が許さないことだってある。

親や親族が敵で、幼いころから加担を強要される。

そんなケースだつて別に珍しくはない」

一気に喋つたオールマイトは、一呼吸を挟む。

緑谷は黙つてオールマイトの言葉を待った。

「もっと多いのは貧困が原因の敵だ」

今日のオールマイトはいつにもなく饒舌に話すなど緑谷は思った。

心なしか少し早口だ。

どこか焦っているようにも見えるその様子に、緑谷は不安を抱いた。

「貧困……ですか？」

「緑谷少年、当たり前の話だけど人はお金がないと生きていけない。

着る服、住む場所、食べるもの。全てがお金がないと手に入れることは出来ない。

ヒーローだつて生活のためにしている人が殆どさ。

実際のところ、お金がないと最低限の人権すらも保障されない。

生活保護というシステムは一応有るけどね。



「ただどそのシステムも結局は、ある程度の前提条件を満たさないと、受けることは出来ない。」

「本当にそんな支援が必要な人には、行き渡らないのが現状だ。」

「例えば生まれたときに、戸籍が与えられなかった人とかが分かりやすいね」

「——理不尽を覆していくのがヒーロー。」

「体力テストの時の相澤先生の言葉を思い出す。」

「だがヒーローにも、どうする事も出来ない理不尽が有る。」

「それはどれだけの力を持つても変わらない。」

「オールマイイトにすらどうすることも出来ない世界の闇が確かにある。」

「ならばヒーローはそんな理不尽に、どうやって向き合っていけばいいのだろうか。」

「緑谷少年、君には両親がいるだろう。」

「個性こそ受け継げなかったにせよ、両親から享受できている生活が」

「いかに尊いものなのかは、いずれ分かってくると思う。」

「ヒーローになるための第一条件は、個性が有るなしの問題じゃない。」

「ヒーローを目指せるだけの、家庭環境に生まれる事なんだ。」

「残念なことだね」

「緑谷の脳裏には八百万の顔が思い浮かんだ。」

クラスで一番の裕福な家庭に生まれた八百万。

もし八百万が貧しい家庭に生まれていたら、果たして雄英に入学できたのだろうか。「世間には敵のイメージは個性を使って、悪事を働く分かりやすい悪者なんだろうね。でも大半はそうじゃない。

生きるために必死で「仕方なく」悪事を働く。自らの生に活路を求める。

緑谷少年、お金がなく飢え死にしそうになっている子がパンを盗んだとして、それを本気で責めることが果たして出来るかい？

世間一般にはあまり知られていないけど、所得が増えれば増えるほど、その人が敵になる可能性は低くなる。

逆に低ければ低いほど高くなる。

大半の敵は、生活にあえぐ低所得者なのさ。

更には無個性の人が犯罪を犯す確率は、個性ありの人と比べると二倍近く高くなるんだ」

その話には緑谷は何も返すことが出来ない。

返す言葉を持っていなかった。

甘く見ていた。ヒーローが正義で、敵が悪で。

時には例外が有っても、それは基本で前提条件の筈だった。

緑谷には何が正義で、何が悪なのか分からなくなりかけていた。

目の前の石碑をじっと見つめる。

塔の内部の中央にある巨大なそれには、ここに埋葬されている人たちの名前が刻まれている。

その名前の一人一人にそれぞれの人生があり、友達に家族が居た。

彼女が起こしてしまったのは、あくまで「事故」である。

決して彼女が悪意を持って起こしたわけでは無い。

オールマイトからそう聞いている。

だが、しかし。緑谷の心の奥には、同情と同じくらいの怒りが湧いていた。

それが何に対してのものかは、まだ分からない。

彼女がどれだけ理不尽な目にあっていたかは、理解しているつもりだ。

だからといって緑谷には、「青の世界」を引き起こした彼女を簡単には許すことが出来なかった。

世間から見たら、彼女はれっきとした敵である。<sup>サイラン</sup>

だが、果たして彼女は「悪」なのだろうか。

緑谷とオールマイトは、静かに巨大な石碑を見る。

それは余りにも大きすぎる世界の理不尽そのものに、緑谷には見えた。

——あら、あらあらあら？

何処からともなく聞いたことが有る声でした。

涼やかな声。少女だとハッキリと分かる、その方向に緑谷は振り向いた。

「え……？何で彼女が……」

「どうした緑谷少年」

今は雄英高校の地下にいる筈の

——オールマイトまた来たのね。いえ今は八木俊典と言うべきかしら。

どっちみち聞こえないのだから、どちらでも良いかしら。

青の少女がそこにいた。だが白ワンピース姿ではない。

全体的に青に染められた衣装。

軍人をモチーフにしているのだろうか。

緑谷は前にネットで見た、土傑高校の制服を思い出した。

だが——彼女は青の少女にそっくりだが絶対に彼女ではない。

緑谷はそう直感する。

根拠と言える根拠はない。

けれども、今日たったの一日会っただけの緑谷ですら分かる。

彼女なら目の前の彼女のように、薄気味悪い貼り付けたような笑顔は絶対にしない。

「オールマイト見えないんですか! 「青」の女の子がそこに!」

——あら、あなたには私が見えているのね。どうしてかしら?

「何……!?! いやしかし少年。そこには何も無いぞ!」

「!!」

——不思議ねあなた。電脳体に過ぎない私が見えるなんて。ねえ……

「電脳体……?」

——あなたは何を知りたいの?

「緑谷少年!?! 緑谷少年! おい大丈夫か!?!」

緑谷は意識をいつの間にか手放していく。

だんだんとオールマイトの声が遠くなっていく。

本来なら暗くなるはずの、彼の眼に映るのは「青」。

それは十年前の時と全く同じ色をしていた。

……

……

……

——side 相澤消太——

「彼女を犠牲にするというのですか」

相澤の声は震えていたが、それが何故だか彼には理解できなかった。法月は口角を上げる。それは——嘲笑だった。

「情に流されるのは感心せん相澤。決断しろ。」

何が正しいのか、どうするのが最適なのかは既に分かっている筈だ。お前は小娘一人の命が、世界に勝るとも言うのか」

「……いえ」

「刻限は迫っている。予定通り進めば、半年以内に実行可能だ」

静かに目を閉じる法月。

「話は終わった」

一言発して、相澤に背を向けた。

「失礼させていただきます」

「相澤よ」

首だけひねり横目で法月を見る。

「心の準備をしておけ」

法月の声を背中に受けながら、相澤は部屋を後にした。

その言葉になぜか、心がざわついて止まらなかつた。

相澤は学内の廊下を何をするでもなく、ゆらゆらと彷徨う。

法月は言った。計画は始まっていると。

十年前の当時から準備されていた、“不死身”の彼女を、理論上抹消できる唯一の方  
法。

極秘事項のそれを知った時、相澤は最初は何も思っていなかった。

まだ時間はある。先の話だと考えていた。

都合の悪いことから目をそらしてきた。

彼女は血縁でも何でも無い。ただの少女。

戸籍も存在せず世間からは忘れられている存在。

居なくなつたところで、相澤の何かが変わる訳では無い。

変わる訳など……

——失敬な！ボクにだって友達くらい作れるもん

思い出すのは彼女の何でもない言葉。

——お金をくれたのは相澤さんだよ？だから……

腹立たしい記憶。

——大丈夫かな？ボク全然自信ないよ……

不安そうな顔。

——完全に無視された！

場をかき乱す問題児で……

——はやく明日にならないかなあ

彼女の笑顔はもうすぐ——

バアアン！ドオオン！

「おいおいイレイザーヘッド！そりやないぜ！何てことしやがる、滅茶苦茶じゃねえか」  
気付けば相澤は職員室の自分の机の前に居て、目の前のものに当たり散らしていた。  
机が横倒しになっている。パソコンのモニターはひび割れて、書類がそこら中に散乱している。

相澤の右人差し指に痛みが走る。ぼんやり見ると切り傷が出来ていた。

「……何があつた」

「何でもない……」

ボイスヒーロー“プレゼント・マイク”の言葉に、うわごとで返した。

同期の彼はチツと舌打ちし

「そうかよ……何かあつたら言えよ」

「……ああ」

プレゼント・マイクはどこかへと去っていった。

今の相澤には何を言っても無駄だと判断したのだろうか。



後に残されるのは相澤一人。

日は既に傾き職員室に西日が差し込んでいる。

全てが太陽の炎の色に染め上げられ、赤く赤く燃え上がっている。

何処からか、カラスの鳴き声が聞こえてくる。

赤く染められたその景色は、彼女が居なくなつた世界そのものように思えた。

横倒しになつた机の引き出しがひとつ僅かに開いて、中に入った物が少し出ていた。

一食ごとに透明なパックに入れられた、茶色い合成食品。

昔試しに食べたなら糞まじりかつたのを覚えている。

彼女が持っているのと無くしたり必要以上に目立つことだろうから、昼休みに相澤が渡

すことにしている。

今日の分も相澤が出したのだ。

少女の体は未だ、この食品しか固形物は受け付けない。

飲み物はなんとか、水以外も飲めるようになった。

だが消化器系が不完全で歪な発達をしたせいで、栄養はあまり吸収されない。

彼女が年齢より幼く見えるのはそのせいだ。

合成食品のパックに手を伸ばす。

開封して一口食べてみる。

数年前と全く同じ味に相澤は顔をしかめた。

今の相澤の心情を味にしたら、同じような味になるのだろうか。

「まずい……」

なのに相澤の手は止まらない。

次々と合成食品を口に運んで咀嚼していく。

彼女の顔がどうしても、頭の端から消えてはくれなかった。

無性に彼女の馬鹿みたいな声が聴きたくなる。

あと何回、相澤は少女と会えるのだろうか。

彼女が消えても、記録に残ることは何も無い。

記録は何も残らない、残されない。

彼女は今まで一度も写真にすら写ったことが無い。

唯一残っている監視装置に残っている記録すら、一定期間で削除される。

幼い彼女の姿を保持しているのは、頼りないおぼろげな記憶だけ。

あとほんの半年ほどで彼女は消える。

その痕跡も消える。世界の何処にもいなくなり、“抹消”される。

「全く、何やってんだ俺は……合理的じゃない」

ドライアイの眼が少しだけ潤んでいた。

青の少女の知らないところで、今日もまた日は落ちていく。  
空から夜の侵略者の太陽は居なくなり、無数の星が瞬き出した。  
月がこんなに綺麗だと相澤は、今日初めて知った。

## 第7話

「始めようか有精卵共！戦闘訓練の時間だ！」

オールマイトが授業開始を告げる。

少し離れた場所から高等尋問官の法月が、彼らの様子を観察していた。

ここは雄英の入試の際にも使用される、市街地演習場。

広大な敷地の内部には様々な建物が立ち並ぶ。

さながら本物の街のような規模から、雄英が持っている力の大きさを伺うことが出来る。

1-Aの生徒たちは各々の“コスチューム”に身を包んでいた。

被服除却制度を利用して最新鋭のコスチュームを、生徒は手に入れることが出来る。

そこにも「青の少女」が関連した技術が往々にして存在しているが、本人たちは知らない。

一方その「青の少女」は教室を出たところで相澤に捕まって、そのまま連れてこられていた。

「なんで……ボクはぐるぐる巻きになってるんですか相澤さん？」

「先生と呼べ青石」

「相澤先生」

「お前が逃げようとするからだろ。馬鹿」

「なっ！ボク知ってるよ！馬鹿って言った方が馬鹿なんだからね！」

「確かに俺は馬鹿かもしれない「ほら！」、だがお前は大馬鹿野郎だ」

「酷いやー！」

緑谷は相澤先生にシメられている彼女、「青石ヒカル」を見た。

だが彼女がその名前と呼ばれて、反応することはあまりない。

自分がその名前だという自覚がまだ彼女には希薄なのだが、周りからすれば奇異な事

この上ない。

結局クラスメイト達からは「青い子」「青ちゃん」「自販機女」などと言われていて、一

度も苗字や名前では呼ばれていない。

唯一名前では呼ぼうとしていた轟焦凍も、諦めて「お前」と呼ぶことにしたらしい。

名前で呼んでも反応してくれないのだから、仕方ないだろう。

彼女は昨日と同じように相澤に絞られながらも、視線をちらちらと緑谷の方に向けて

いる。

緑谷は気付いていた。

それが自分の隣に立っているもう一人の「青の少女」に向けられていることを。

——そんな目で見なくてもいいと思うのに。私ったら私の事よっぽど嫌いなんだね。

緑谷の隣に立つ「青の少女」が見えているのは、緑谷ともう一人の「青の少女」のみ。彼女は朝、緑谷と会った時からその存在に気付いており、あからさまに警戒しながら遠巻きに様子を伺っていた。

くすくすと身を揺らす彼女に緑谷は嘆息する。

緑谷が装っているのは、母親から入学祝いにプレゼントされたジャンプスーツ。

それをコスチュームに改造したものだ。

緑谷は共同墓地のオールマイトの言葉を思い出す。

——個性こそ受け継げなかったにせよ、両親から享受できている生活が

いかに尊いものなのかは、いずれ分かってくると思う。

何となくでも緑谷には分かる気がした。

この恰好こそが出久にとって、一番奮い立つコスチュームなのは疑う余地もないだろう。

ちらりと緑谷は相澤先生に食い掛っている「青の少女」を見て、その後傍に居る彼女の顔を見た。

緑谷の隣にいる「青の少女」について語るには、昨日の放課後まで振り返る必要があ

る。

……

……

……

駅でオールマイトに別れを告げる

緑谷はそのまま家路についた。

既に日も落ちていた。

意識を失った緑谷は、ほんの数分ほどで目を覚ましたらしい。

随分と心配された。

が、ある一点を除けば全く問題なかったので、「大丈夫です」と何とか説得した。説明したところで、解決できるとも思えなかった。

家に着いてカギを開ける。母親から「お帰り」の声が聞こえて返事を返した。

御飯が出来ていると言われるがその気になれず、自室へと向かう。

一人の筈なのに気配を感じる。

それからまるで逃げるように、速足で廊下を歩きドアを開け、誰も入ってこられないようにカギを掛ける。

緑谷出久は誰も居ない筈の背後に、その気配を確信しながら振り向いた。

部屋の中央には

「き、君はいつたい何。なんで僕に付いてきて……」

そこには共同墓地に居た「青の少女」がいた。

——それは、私が君の物になったという事だよ。

彼女が口を開く。その声はまるで頭に直接投げかけるような感覚がした。

共同墓地のあの時とは、また違った印象を受ける。

気味の悪い笑みではなく、むしろたおやかな微笑みを彼女は浮かべている。

教室に居る騒がしい「青の少女」とは雰囲気はまるで逆。

身に着けている衣装にも若干の変化が有った。

相変わらず軍服のような装いだが、目につくのはその丈の短いスカートか。

膝上のそれに、緑谷は目のやり場に困った。

そんな緑谷の様子がおかしいのかクスツと彼女が小さく笑う。

(どうしてこうなっただ……)

彼の部屋を見たら大抵の人が「オタク」だと言うだろう。

実際彼はオールマイトの重度のオタクであり、部屋のそこかしこがオールマイトのグッズで占められている。

壁一面にはオールマイトのポスターやタペストリーがびっしり。



元の壁紙が見えるのはその隙間だけ。

本棚にもオールライト関連の書籍がずらっと並び、彼のフィギュアも様々な大きさや種類が揃っている。

それらの中には何か月も、お小遣いをためて買った限定品もあった。オークションに出せば数十万円は下らない貴重な物もある。

緑谷は目の前の彼女に視線を戻す。

彼女はさつきと同じように穏やかな目で緑谷を見てくる。

「君は一体……」

——それには、さつき答えましたよ。君の物つて。

少女は部屋の中央からベッドの淵に歩いて腰かけた。

だがそのベットが沈むことは無い。

そういえば足音も全然しなかった。

家に帰る途中も彼女は緑谷の後ろを付いてきていたが、

誰も気づくそぶりは無かった。

緑谷以外には彼女の姿は見えないようだ。やはり実体が無いのかと考える。

共同墓地で彼女が「電脳体に過ぎない」と言っていたことを思い出した。

「ほ、僕の？」

「……」  
——ええ、私達はソフトウェア。“プログラム”であり同時に“個性”でもある。

——何か質問は有る？あなたは何を知りたいの。

「待つて待つて待つて！話が追い付かない！君が……」個性“？”

——そう、共同墓地で私は君の体にインストールされたんだよ。

意識を失ってしまったのは一旦意識を停止して、再起動する必要があったから。彼女の言葉に驚きつつも緑谷は考えをまとめる。

目の前の少女は“プログラム”で“個性”だと言った。

でも目の前の彼女は、まるで普通の人間のようにしか見えない。

「個性が意思を持つて動き回るなんて……」

——あるよ、例えば……記憶を借りるね……クラスの常闇君のアレとかそうだね。

個性が自我を持つことは、あり得ないことじゃない。

更には混ざり合つて変異することもある。

君の“ワン・フォー・オール”のようにね。

もつとも私達はプログラムだから、AI（人工知能）つて言うべきなのかな。

サラッと緑谷の記憶から情報を引き出して、答えて見せた彼女に少し恐怖した。

「生身の人の体に、人工のプログラムを入れるなんて出来るの……？」

——うんその疑問は尤もだよ。だから、研究中だったんだ。

個性がこの世界に出現するより前に、私達は開発が進んでいた。世界規模でね。

当時は「バイオウェア」と呼ばれていたけど。

個性という超常が世に出る前……人の体は「基本的には同じ」構造で出来ていたからね。

「人」という規格で扱えるインターフェイスと、フォーマット。

そしてインストール機構を用意してやればいい。

その筈だった……。

でも、よかった。

「えっ、何が?」

——私達には致命的なバグが有ってね、動作するには極端に適性が必要なんだ。

殆どの人はインストールしても再起動に失敗して死んでしまう。

永久に目覚めることは無く……ね。

「えええ!?!じゃあ僕は死んじやってたかもしれないって事!?!」

——うん。まあ君の場合ちゃんと成功する計算がありましたよ。……五分五分くらいなの。

良かったね、ちゃんと成功して。

彼女は「ねっ」と可愛らしく言っ、ウインクをする。

「いやいやいや！良くないって！」

危うく死んでたかもしれないのに、緑谷は憤慨する。

——まあまあ落ち着いて、はい、

君の記憶から言葉を借りるなら……結果オールマイトだね。

これからは私は、あなたの物だよ。

そしてこれが出ること。

部屋の中に「青」が満ちる。

少女の横に青い構造体が浮かび上がった。

彼女が指を振ると途端にパソコンの電源が入る。

更に振るとテレビも勝手についた。

チャンネルも勝手に変わり、音量も最適に調整される。

出久のスマホもなぜか勝手に画面がついて、ネットにアクセスしている。

あらゆる電子機器を自在に、自分の感覚で操作できるので彼女は言う。

いちいち機械に合わせ、操作を覚える必要はない。

緑谷がイメージすれば、あらゆる電子機器はそのイメージ通り動作する。

今はまだ私のサポートが必要だけどね、と一言加えた。

——そして私のこの姿は、カスタマイズされた姿だよ

人が心の底で望む最適な形に、私達は姿を変える。

君が不気味に思った共同墓地での私は、いわゆるデフォルト。初期設定だね。

私の姿は君の眼にしか見えないし触れることも出来ないから、他の人が居る時は注意してね。

緑谷は彼女に一言声を掛けて、肩に手を触れようとしたらすり抜けた。

「……あの」

言いかけた緑谷の言葉を彼女は理解する。

彼女は緑谷にインストールされた、プログラムだという。

だが緑谷にはどうしても彼女が「青の少女」と関係がある様に思えてならない。見れば見るほどに、そっくりの見た目を彼女はしていた。

——私達は人をハードウェアにして動くソフトウェア。

インストールしたら自在に電子機器を制御できる“ 電脳感覚 ” を得られる力。人が世界に繋がるためのツール。

それは人が互いを理解し合えるように。

人の為に、誰かの為に。

どんな人としても、居られるように。

人が広く、生きて行く為に。

そんな理念を元に私達は作られた。

「もしかして……」

——人の手で作られた「人工個性」。

全世界での構築・運用を前提としたプログラム。

ソフトウェア、”アズ<sup>A</sup>ズ<sup>Z</sup>ライ<sup>u</sup>ト<sup>r</sup>”。

それが私達だよ。

## 第8話

「私は法月将臣。高等尋問官だ。未来のヒーローとなるかもしれない諸君の査察に来た」

オールマイトの説明の前に、法月が自身の説明をした。

今の授業は市街地演習場で行われる、ヒーロー基礎学だ。

だが青の少女から見て先生以外誰も、彼の事を危険だと認識している様子は見られない。

高等尋問官の事を何も知らないのだろう。

ちよつと老けたおっさんが見に来た、ぐらいにしか思っていない筈だ。

青の少女には嫌な予感がした。

このゆるみ切っている空気が、法月への警戒がまるでない事を端的に示している。

この男の残酷さを知ったら、今のような雰囲気には絶対にならない。

少女は依然、相澤の捕縛武器に捕まっていた。

「君らが社会に貢献できるヒーローになるか、それは分からん。

一人としてなれんかもしれん。

少なくとも私は無能な輩に、この雄英に所属する事を見逃すつもりはない。

せいぜい気を引き締めろ。数分後にも貴様らの首は、飛んでいるかも分らんのだから  
な」

彼を見るだけで幼い日の記憶が蘇ってくる。

今すぐにでも殺してやりたい……が。

それは出来ないし、してはいけない。

(……今は考えることは別にある……か)

心配なことが一つある。

(緑谷君……いったいどこで……)

緑谷の横に居る「青の少女」が、彼女には気になって仕方がない。

その力を何処で手に入れたのか知らないが、あれはとても危険なものだ。

ふと気づいた。気のせいかもしれないが、法月が緑谷の方を見ているように見える。

まるで観察でもしているかのようだった。

法月の話が終わる。

彼は後ろに下がり、オールマイト主導の“ヒーロー基礎学”が始まった。

ごほんと咳払いするオールマイトに、少女はイラつとした。

「君らにはこれから「敵組」と「ヒーロー組」に分かれて、2対2の屋内戦を行ってもら



うー」

「基礎訓練もなしに？」

「その基礎を知る為の訓練さー！」

(なんて杜撰……酷い。)

リカバリーガールが居るから怪我をしてもいい。

そう考えているんですか？それは……)

昔した仕打ちと何が違うのか。少女は目を細めた。

「……ただし今回はぶっ壊せばいいロボじゃないのがミソだ」

(……やっぱり2対2の対人戦。本気ですか……)

その時

「「「「」

勝敗のシステムはどうなります？ (八百万)

ブツ飛ばしてもいいんすか (爆豪)

また相澤先生みたいな除籍とか有るんですか？ (麗日)

分かれるとはどのような分かれ方をすればよろしいですか (飯田)

このマントヤバくない？ (青山)

「「「「」

五人の生徒の質問が一気に重なった。

その中の一人の生徒の言葉は質問ですらない。

——まずい

青の少女は思った。

その瞬間

「論外！」

バコオオン！

まるで重機で地面を穿ったような音がした。

爆発にも似たその音で耳の奥が痛くなる。

法月の足元の地面が割れている。

先ほどの音は、彼が地面を踏み鳴らして起こしたものだつた。

生徒の会話が止まり、姿勢が引き締まる。

命の危険すら感じる。身が凍るような感覚がした。

隣の相澤も、緊張した顔つきをしている。

法月が口を開けた。

「実に……論外だ。相澤よ、随分とお前の眼も節穴になったようだな。

この様な凡夫らを見逃していたなど」

「申し訳ありません」

相澤が頭を下げる姿に生徒達は、青の少女を除き驚愕する。

唯一、緑谷だけが驚いていなかった事に少女は気付いた。

彼はヒーローに関しての知識が豊富に有るらしい。

昨日休み時間などで会話したので確かな事だ。

ならばヒーローに指示できる高等尋問官の事を、知っていてもおかしくないが

……。

「……まあ、よい。今の質問に答えていこう。」

やおよろず もも  
八百万百！飯田天哉！いいだ てんや 麗日お茶子！うららか おちゃこ

返事は！

「「はー」」

「良い返事だ。お前たちの疑問はもつともだ。」

八百万百、飯田天哉。

勝敗のシステム、組の分かれ方の詳細は後にオールマイトから説明される。

それを待て。

麗日お茶子。除籍は内容によっては検討する。だがそれはいつもの事だ。

お前たちは常に見られ評価されている。それを忘れるな。

英雄のヒーロー科だという自覚を持って。

三人とも質問自体は良かったが、タイミングを誤ったな。  
以後、注意するように」

「「はいー」」

法月の気迫に三人はきびきびと返事を返す。

流石にこの三人は瞬時に判断したらしい。

この人を怒らせては絶対にいけないと。

「そして、ばくごう爆豪勝己、あおやま青山優雅」

「ああん!？」

そして反抗する爆豪。この人はだいぶ危ない感じがする。

「!!……だめだ、かっちゃん!!」

緑谷がとつさに爆豪を抑えようとするが

「ああ!?!うっせーぞデク!」

緑谷はどうやら法月の危険性を知っていたみたいだと、青の少女は判断する。

だが緑谷がそれを伝えようとしても、爆豪は聞く耳を持たない。

「ハハ……僕に何の用かな?」

まるで空気を読めていない青山。

この人の前でこんな態度をとるなんて、いかれているとしか思えない。

法月は爆豪と青山を、ゴミでも見るような目で見て

「実に……実に論外だ」

胸元に手を伸ばし、拳銃を取り出した。

「え……」

その声はいったい誰のものか。

法月が銃口をゆつくりと青山の方に向けた。

「っ……………」

青の少女は、一瞬で捕縛武器の拘束を引きちぎる。

焦るその表情は怯えを含んでいた。

（間に合えー！）

銃声が市街地演習場で響く。

それはまるで“戦闘訓練”の始まりの合図に聞こえた。

……………

……………

……

「……………何をするんですか、法月さん」

銃弾は青の少女の前で静止していた。

銃弾が突き出した掌の、ほんの数センチの間を開けて浮かんでいる。

少女は片手を前に突き出した体勢で、法月を睨んだ。

少女は一瞬で青山の前に立ち、庇うように立っていた。

青の少女はギリギリのところまで間に合って安堵する。

庇われた事をようやく理解したのか、青山が腰を抜かしてその場に倒れこんでしまった。

彼女が突き出した腕を振る。

銃弾が重力に囚われ下に落ち、地面に跳ね返り音を立てた。

「きゃあああああー！」

遅れて悲鳴がクラス中から響き渡る。

授業はいきなり混乱の中に突き落とされた。

悲鳴が響く中、法月はまるで表情を崩さない。

「誰が手を出してもいいと言った「青石ヒカル」よ。」

「これは教育だ。英雄にはこの様な無能な輩は必要ない」

「たとえ英雄には必要なくても、彼には帰る家があるんですよ」

「どの道、秩序を破壊する社会不適合者だ。」

ヒーローから敵に落ちる前に、私が処分してやろうというのだ」  
「殺そうとしておいて、よくそんな口が叩けますね……。」

撃たれれば痛い。死ぬことは怖い。

そんな事も、あなたは分らないんですか。

ボクあなたの事が大嫌いです」

「今更そんな事を言う必要があるかね。

まあ良い、庇ったことに関しては不問とする」

ぎり、と青の少女は唇を噛み締めた。

法月は改めて二人の方に向き直る。

「通達する。

青山優雅、貴様は雄英に必要な。除籍処分とする。

爆豪勝己、お前の進退はこの授業の内容で私が判断する」

「青山君、けが無い？立てる？」

青の少女が声を掛けるが

「あ……あ……」

青山は立ち上がることも出来ずに呆然としている。

撃たれたこと、それから庇われ、そして除籍を宣告された。

余りにも色々な事が一度に起こりすぎて、理解が追い付いていないのだろう。「何をしている青山優雅。」

さつさと荷物をまとめて雄英から去るがいい。

当然、コスチュームは置いていけ。

お前はもう雄英の生徒では無いのだ。

さもなければ不法侵入者として強制的に退去させるまでだ」

「こんな……こんなやつて！」

「理不尽すぎるよー！」

「あんまりでしよう!?!」

生徒たちが怒りの声を上げる。

「黙れ」

法月のその気迫に、生徒たちは押し黙った。

少女はどうかできないものかと、相澤の方を見る。

相澤は首を横に振っていた。

——ここは我慢しろ

ちらりとオールマイトのほうを見るが、沈痛そうな顔をしてるだけ。

彼女は彼には何も期待してない。



少女はそつと目を伏せた。

何にしても命だけは守ることが出来た。

除籍されてしまったのは悔しいが、最悪の事態を解決することは出来た。

今はそれでよしとするしかない。

……この男には誰も逆らえないのだから。

縦え強大な力をもつ「青の少女」でさえも。

「青山優雅。お前は不適切な言動をし、授業の進行を妨げた。

言い逃れは出来ん。記録は残っている。

その様な発言をしたお前に、ヒーローの資質が有るとは判断出来ない。

貴様の様な輩を許すようでは、クラスひいては雄英の統制も乱れることになるだろう」

青山は迂闊な言動に、後悔したが後の祭りだった。

「このマントヤバくない?……か。下らん」

法月はせせら笑う。

「……くっ……」

「それだけではない。貴様の個性は専用のベルトが無いと制御すらまならん。

破損する可能性を考えたら危険すぎる。

更にはたかが一秒使うと腹痛を起こす始末。

言動からしても自尊心の強すぎる典型的なナルシストだ。

お前の本質は、ただ目立ちたいだけの人間に過ぎない。

青山優雅。お前よりもヒーローに向いている人間など、ごまんといふのだ」  
理不尽な仕打ちに震える青山に、法月は畳みかけていく。

「ヒーローを育てるのにも金が必要。

お前たちが着用しているコスチュームもただでは作れん。

それらは税金から出されているのだ。

お前のおかげで、どこぞの家庭からおかずが一品減ったかもしれないのだ。

無駄な金を使うことは許されん。

分かったらさっさと行け」

「青山君……」

「くそっ……くそ……ああ……ああああ！」

青山は声を上げて涙を流す。

ふらつきながら立ち上がり、覚束ない足取りでゆっくりと出口に向かう。

誰も何も言わない。少女もただ、彼の後姿を見送っていた。

今日から1—Aの人数は一人減り、20人になった。

……

……

……

青山が居ない1―Aの授業は進む。

屋内で2対2の対人戦。

ヒーロー側と敵側に分かれて行おうらしい。

状況設定としては敵が核兵器を隠していて、ヒーローがそれを処理しようとしている。

ヒーローは敵を全員捕まえるか、核兵器を回収すれば勝利。

敵はヒーローを全員捕まえるか、制限時間終了まで核兵器を守り切れれば勝利。

制限時間がある以上、敵側が圧倒的に有利に青の少女には思えた。

ヒーローは不利な状況を覆さないといけないという事か。

……クラスの雰囲気は最悪の一言に尽きる。

皆緊張して、びくびくしている。

迂闊な事を言おうものなら、青山君のようになるから当たり前だ。

対戦相手及び組み分けは、くじで決まるらしい。

適当なのかと思ったら、ヒーローは急造チームを組むことが多いと緑谷が口にしてい

た。

思ってたよりは考えられているらしい。

そしてくじの結果の組み合わせは……

A 緑谷出久 麗日お茶子

B 轟焦凍 青石ヒカル

……

D 爆豪勝己 飯田天哉

……

「轟君、一緒だね！」

「……ああ、今更だけどコスチュームじゃないんだなお前」

「この格好コスチュームの機能が有るんだって。よく知らないけど」

少女は前に聞いたことが有る気がするが、思い出せなかった。

「知らないのか」

「うん。轟君のコスチューム随分とカッコ悪いね！

誰が考えたのそれ？ボクがぶん殴ってあげるよ！」

少女が鼻息を荒くして拳を握る。

「……俺だ」

「あ、ごめん……じゃあぶん殴るね！」

「おいやめろ」

そんな風にじゃれ合っていると

「おいおい、アイツらとあたった瞬間負け確定じゃねえか……」

クラスの誰かがそんなことを言った。

視察している法月が「ふむ」と声を上げた。

「……青石ヒカルよ。お前は麗日お茶子と交代し、緑谷と組め」

「え……？そんな……」

せっかく友達な轟君と組めたのに、と思ったが仕方がない。

「命令だ。麗日お茶子は轟焦凍と組め」

渋々轟君に別れを告げて、緑谷の方へと向かう。

緑谷にも用があつたので、これはこれで都合かと考えた。

少女は緑谷の隣の「青の少女」をじつと見る。

その顔を見ると、ドッペルゲンガーとはこんなものなのかなと考える。

彼女からは間違いなく「青」の力を感じた。

いきなり少女と緑谷は、クラスで最初に演習をする事になった。

対戦相手はDチームの爆豪勝己と飯田天哉だ。

少女と緑谷はヒーロー側である。

「緑谷君、話がある」

訓練開始前の準備時間に、緑谷を物陰に引きずり込む。

壁に彼を押し付けて、手を彼の横にドンと置く。

彼女は後に、それを壁ドンと呼ぶ事を知った。

「緑谷君、それを何処で拾ってきたの……?!」

——何処でだっていいじゃない。私はもう緑谷君のアズライトなんだから。

緑谷に聞いたのに隣の「青の少女」が返す。

彼はただアタフタしていた。

「答えて！それをいつたい……」

——本当は分かっているくせに。私は私達から分かれた一人。あなたも同じでしょう。

「違う。ボクはちゃんと生身のある人間。君たちとは違う」

——それはどうかしら。まあ良いわ。とにかく私はもう私達から独立した存在。

どうしようかと私に命令は届かないわ。既に私の所有権は緑谷君に有るんだから。

緑谷の青の少女がはぐらかすように答えるばかりで、本人は何も言わない。

目をせわしなく動かしているだけだ。

その様子を見ていたら「青」の力の事を、何も知らないように見える。

それが非常に危うく見えた。

「……緑谷君、それはとても危険なモノなんだ。

本来その力は、絶対に人の手に負えない。

間違っても、使おうなんて思っちゃダメだからね」

まもなく訓練が始まる。その事に気づき忠告だけを残して、背を向けた。

その背中に

——なら扱えているあなたは人間じゃないのね。

緑谷の青の少女が投げかけた質問。

「……ボクは人間だよ」

どこか自信がなさそうに少女は返す。

緑谷の「青の少女」の、その言葉になぜか胸騒ぎを感じた。

訓練の配置に着きながら少女は緑谷に聞く。

「緑谷君は法月を知ってたの?」

「……どうしてそんな事を」

今度は緑谷の「青の少女」は何も言っていない。

視線をすぐに緑谷に戻した。

「クラスの中で一人だけ反応が違ってたから、嫌でも分かるよ。」

忠告がある。法月の個性に気を付けて」

「あの人の個性……たんなる増強系の個性なんじゃ……」

あの地響きを起こすほどの踏み鳴らしを見たら、そう判断するのが普通か。  
だが

「違う。あの人の個性はもつとおぞましい何か。

それが何なのかは分からないけど。

ボクは“支配”とか。そんな個性なんじゃないかと思ってる」

「“支配”……？そんな個性でどうやってあんな地鳴りを……」

「分からない……」。

でも、もし空間を支配したり、物質を支配出来るのなら不可能じゃないと思う。

一つで色々な事が出来る個性が有るのは、ボク自身が一番よく知ってる。

それに間違いない事が一つ。

あの人に命令された事は、絶対に逆らうことは出来ないんだ。

オールマイトも相澤さんも……このボクも。

どんなに抗つても、逆らうことが出来ない。意思の問題なんかじゃない。

権力とかそれとはまた違う。あの感覚は……。

それよりもっと大きな何か、それこそ個性じゃないとあり得ない」



今まで法月から受けた命令の数々を思い出す。

そして何より十年前のオールマイト。

命令とはいえど、あのオールマイトがあのような行動を起こしたのだ。

確かに彼の命令は絶対ではあるし、逆らったら命すら危うくなる。

認めたくないことだが、あの時の経験が個性の制御に大きく役立っていることは、疑いようもない。

あの時の命令は後から考えたら、理にはかなっていったと青の少女は判断している。

それが人道的かどうかは別として、意味のある命令だった。

だからといって、あの時のオールマイトは客観的に見て明らかに異常だった。

もしかしたら本人は、気付いていないかもしれない。

しかしあの時の彼は、何かに突き動かされているようにも見えた。

確かにオールマイトは仕方がなかったのだろう。

だが少女は許す気になれない。

理屈と感情の問題はまた別の話だった。

「……出来るだけ気を付けてみるよ。僕もひとつ聞いていいかな」

「何かな？」

「……オールマイトと知り合ってたって聞いていて。

オールマイトのことどう思っているのかな……とか」  
「……オールマイト？」

緑谷の言葉に、少女の心中は穏やかではなくなつた。  
過去の様々な彼の記憶がフラッシュバックしていく。  
その中にどんな意識が集中していき……

「ごめん！ やっぱり何でもない！」

緑谷の言葉に現実に引き戻される。

彼女はごめんねと一言呟いて、笑顔を張り付けた。

その笑顔はオールマイトと同じ笑顔をしていた。

## 第9話

1—Aの授業は対人戦の、一回戦目が始まろうとしていた。

訓練が行われる建物の地下で、クラスメイトと四人の大人たちの姿があった。

モニターには訓練を行う、少年少女の姿が映し出されている。

オールマイトは一番先頭でモニターの前に居て。

相澤と法月、それともう一人は、一番後ろからそれを眺めていた。

だがそこに居るはずのもう一人を、察知できている人は法月とオールマイトだけ。

その人は女性だった。年齢は二十代後半ぐらいだろうか。

紫苑色の長い髪を、太い一つの三つ編みにして顔の横から下げている。

しかし、その恰好はなんとメイド服であった。

なぜ目立って仕方がないはずの彼女に、気付いている人が二人しかいないのか。

その理由は彼女の個性の力にほかならない。

彼女は法月の補佐官であり、同時にオールマイトの監視も務めていた。

だが、彼女の事には誰も触れず時間は過ぎる。

ついに一回戦目の演習が始まる。

法月の口が開いた。

「レギオンは出て来ないか……」

「どうします」

相澤が聞く。

「出てこない事に越したことは無い。

こちらの取り越し苦勞で済むのなら、それでいい」

「……」

昨日相澤と法月が交わした会話にも出てきた“レギオン”がここでも出てくる。

そもそも法月はそれに備えて査察に来たのだ。

突発的な事であれ、雄英側も法月が査察することを予想していなかったのは、甘いと

言える。

除籍された青山は運が無かった。

半分くらいは身から出た錆ではあるが、除籍はいささかに厳しすぎるだろう。

「相澤よ」

「何か？」

「お前は疑問に思ったことは無いか。

なぜあのような個性が開発されたのかと」

「……少しは」

あのような個性とは“アズライト”の事で間違いないだろう。

確かに相澤には疑問だった。

世界を滅ぼしかねない個性を、わざわざ作り出した理由とは何なのか。

「だろうな。ならば言っておこう。

あれが作られた理由は至極単純だ。

「仕方がなく」「他の代案がない」からだ。

それ以上の理由などない」

「それだけでは、解りかねます」

仕方がなかったとはどういう事か。それに代案がないとは一体。

あれほどの個性を使わないと、対処できない何かが起きるとでもいうのか。

「近々話をするだろう。もう一つの計画をな。心しておけ」

相澤が知っていることはそう多くはない。

知らされている計画以外にも、数多くの構想が有るのは想像に難くない。

法月は視線をモニターに移す。

相澤もつれてそちらに意識を向ける。

法月は緑谷出久をモニター越しに、じつと見つめていた。

.....

.....

.....

「青の世界……」  
コードブルー

青石ヒカルの「青」が戦闘訓練の舞台のビル一つを包み込む。

当然彼女以外には不可視になる様に調整した「青」だ。

少女は緑谷の「青の少女」の気配が、いつの間にか無い事に気付いた。

それはとりあえず頭の隅に置く。

そのまま情報を解析。頭の中に再現されるのは、素粒子単位での現在のビルの全て。

当然、張りぼての核の位置はおろか、二人の位置も丸解りである。

「居た……このまま終わらせることも出来るけど、それじゃ授業にならないよね。」

どうしようか……」

実際二人は既に彼女の掌の上なのだ。

動けないようにしたりするなんて朝飯前だ。

当然少女が少し制御を間違えると、途端に二人はただの肉塊になる。

もちろんそんなミスをするほど、やわな訓練を受けてはいないが。

彼女はやおら拡声器を作り出す。

そして、それを使って呼びかけ始めた。

『勝ち目はないぞ、武器を捨てるんだ！』

自分達が何をしてるのか考えてみる！

建物は包围されている！脱出口はない！

外にはM16を持った警官が200人も待ち構えてる！』

「いやいやいや……い、一体何をしてるの？」

いきなり何事かを言い出した青の少女に、緑谷はツツコミを入れる。

拡声器で大音量になった声が建物中に響き渡る。

彼女が作り出したそれは、市販のモノより格段に性能がいいらしい。

緑谷の耳の奥がツーンと痛くなった。

「何って投降の呼びかけ。相澤さんが見せてくれた映画のセリフなんだこれ。

すっごく面白かったんだよ」

「遊びじゃないんだ。これは戦闘訓練だよ」

緑谷が念を押す。

「別に個性を使ったりして制圧しろなんて言われてないよ。

だから説得してるの。力の差なんて分り切ってるし。

二人が降参してくれてもボク達の勝ちだよね」

確かに訓練としては、それでも勝ちだろう。

だが緑谷はすぐさま切り返す。

「<sup>ウイラン</sup>敵が、実際に話を聞いたりする訳がないよ」

「??どうしてそう思うの?」

「<sup>ウイラン</sup>だって敵だよ」

「うん、だから?」

少女は心底不思議そうな顔をする。

まるで<sup>ウイラン</sup>敵という存在を知らなそうな表情だ。

(いや……そうか。実際に知らないんだ)

テレビや新聞様々な媒体を見て知っていたら、話し合いなんて発想自体が浮かばないだろう。

緑谷は考えもしなかった。

「<sup>ウイラン</sup>敵 相手に話し合いなんて成立する訳ないよ」

「なぜ?」

「<sup>ウイラン</sup>なぜ……って。 <sup>ウイラン</sup>敵 だってそういうものだよね」

<sup>ウイラン</sup>敵とは「悪」だ。

人々を混乱に陥れ悪行を為すことで、自己肯定感を得る人間の層だ。



少なくとも緑谷の中ではそうだった。

「緑谷君どうしたの。ちよつとおかしいよ？ 敵ヴァイランって人だよな？」

なんで最初から暴力を振るおうとするの？

なんで最初に話し合おうとしないの？

なんで分り合おうとしないの？」

「だから敵ヴァイランに話し合いなんて無駄……それが常識で」

「誰ヴァイランがそう決めたの」

「敵ヴァイランは……」

——敵ヴァイランとはいったい何かをな。

その根本を押さえていない者が、ヒーローになるから社会は墮落する。

容易にヒーローから敵ヴァイランに落ちぶれる。

そして平和の象徴とやらに、継らなければならなくなるのだ

法月の言葉を思い出す。

そう緑谷は二日後に、法月に答えを示さないといけない。

敵ヴァイランとは何か。

——世間には敵ヴァイランのイメージは個性を使って、悪事を働く分かりやすい悪者なんだろう

ね。

でも大半の敵はそうじゃない。

更にオールマイトの言葉も頭に浮かぶ。

そして、目の前の青石ヒカル。

彼女達の言葉に、緑谷の中で築き上げられた何かが否定される。

緑谷の中では敵とは「悪」だ。

敵はヒーローが倒すべき絶対悪で、そのはずなのに。

なのに、何が違うと彼女たちは言うのか。

「誰が降参なんかするかゴルァー！」

爆豪の咆哮が上の方から小さく聞こえてきた。

どうやら説得に応じる気はないようだ。

それはそうだろう。これは訓練なのだから当たり前だ。

「ほ、ほら！話し合いなんて無理なんだって！」

それにこれは訓練だよ！降参なんてするはずないって！」

「分かったよ……」

緑谷はこれが訓練であることに、安堵した自分が居ることに気付いた。

それが何故かは、多分気付いている。

彼はきつと敵が自分と同じ人間だと、認めたくないのだろう。

少女は迷うことなく真つすぐに、核の置いてある場所に歩き始める。緑谷もそれに着いていった。

やがて通路が十字になっている手前で少女は口を開く。

「そこに居る着火マン。出ておいで」

青の少女はナチュラルに爆豪を煽っていくが、彼女に悪気はない。

どういう言い回しが相手を怒らせるのか、学習がまだ足りないのだ。

「……」

「居るのは分かっているのになあ、カマなんかじゃないよ。」

蜂の巣にしてあげようか？」

少女の真後ろに、多種多様な銃火器が一斉に出現し浮遊する。

だがこれは脅しているだけだ。実際それらには銃弾が装填されていなかった。

「……」

そこに確実にいる爆豪は、通路の影に隠れたまま返事をしない。

考えたら彼は、この授業の内容で進退が決まってしまうのだ。

慎重になるのは当たり前だ。

確実に勝つチャンスを伺っているに違いない。

いつもの彼なら、問答無用で襲い掛かってきてた事だろう。

それにしても相手が悪すぎるのだが。

「……………ふうん」

少女は呟き、展開していた武器を消去。暇つぶしに緑谷に話しかけた。青石ヒカルにとつて、ちゃんとした戦闘訓練は割と難しい。

本気を出したら勝負にもならないし、かと言って変な手加減も失礼だろう。

少女はひとまず、時間を稼ぐことに決めた

「緑谷君、着火マンのことを」かっちゃん” って言つてたっけ。

勝己の”か” でかっちゃんなの？」

「う、うん。でも良いのかなこんな話してて。

一応戦闘訓練中なんだけど」

「その気になれば、いつでも終わらせられるから別にいいよ」

その言葉に爆豪の気配が動いた。

明らかに舐められているその言葉が、頭に來たのだろう。

少女は口を更に開く。

「まだ時間はあるし。」

着火マン……………かっちゃん……………。

ちやつか……………かっちゃ……………はっ！

かっっちゃマンなんてどうかな！」

「ぶっ殺す！」

爆豪は飛び出した。ちらりと爆豪を振り返る少女に動きはない。

彼はありつたけの威力の爆破を少女に叩きつける。

少女は何もせず爆炎に包まれた。

「うわあああ!!」

確かな手ごたえと、悲鳴を上げる緑谷。

緑谷には構うことなく、爆豪は更に追撃の爆破を加えていく。

「俺は……こんなところで終わられねえんだよ！死ね！自販機女あ！」

だが、爆豪の視界がいきなり反転する。

「なっ……!!？」

何が起きたのかも分からないまま、地面にうつ伏せにされた。

青の少女の姿すら見えないまま床に組み敷かれる。

そして首に軽い衝撃。爆豪はそこで気を失った。

あまりにも、あっけない幕切れだった。

気を失う寸前に爆豪が思い出していたのは、オールマイトの事だった。

……

……  
……

——side 爆豪——

爆豪はワクワクしていた。

憧れの雄英高校に入学でき、しかもオールマイトが教師として見てくれる。

オールマイトは爆豪にとって絶対の存在だった。

どんな悪にも負けず、最後は笑顔で勝つ。

「悪」の敵を叩きのめす「正義」のヒーロー。

まさに存在そのものが、正義を体現していると思っていた。

彼が明確な「悪」に屈することなど、爆豪の中ではありえない事だったのだ。

なのに……。

「せいぜい気を引き締めろ。数分後にも貴様らの首は飛んでいるかも分らんのだからな」

いきなり現れた法月という、おっさん。

高等尋問官とか知らないし、なにやら偉そうにするむかつく奴だと爆豪は思った。

「論外！」

増強系の個性らしい力を使って、轟音を鳴らした時には流石に爆豪もビビった。

しかしオールマイトが居る。

オールマイトが居る限り大丈夫。

そう思っていた。

名前を呼ばれた時に反抗できたのも、どうせオールマイトの前じゃ何も出来ないだろう。

そんな風に高を括っていたのだ。

緑谷の忠告を聞かなかったのも、結局オールマイトに頼っていたからだ。

だが法月はおもむろに、銃を取り出して隣の青山に向けた。

(はああああ!!嘘だろ!)

そして青山は撃たれた。いや正確には、青の少女から庇われた。

あのふざけた雰囲気。世間知らず女が、必至な顔をして青山を守っていた。

(オールマイト!?!おい!オールマイト!何やってんだよ!?)

オールマイトは何もしない。ただ悔しそうな表情を浮かべているだけ。

こんな明確な「悪」に対して、オールマイトは何も出来ない、何もしない。

その姿に爆豪の中の、何か壊れていく気がした。

(なんだ……おい……。嘘だろ?なんか言えよ!オールマイト!!)

「通達する。」

青山優雅、貴様は雄英に必要な。除籍処分とする。

爆豪勝己、お前の進退はこの授業の内容で私が判断する」

法月の言葉は爆豪に届かない。

彼が見ているのはオールマイトだ。

余りにも理不尽で横暴な決定。そして、銃で撃つという非道極まりない行動。

法月という人間は、爆豪の中で間違いない「悪」だ。

ヒーローは「悪」に屈しない筈の存在なのに。

決して「悪」を許しはしない筈なのに。

法律を盾にする法月に、オールマイトヒーローは余りにも無力だった。

(は……は……なんだよコレ。こんなの……)

——オールマイトじゃない。

(何だよ……ヒーローって……何だよ。全部……全部嘘だったってのか?)

爆豪は憧れた。

ヒーローに。敵ライバルを打ち倒すその姿に。

しかしそこには致命的な欠陥があった。

彼は、ヒーローとは何か。

ライバル  
敵とは何か。



考えたことなど、一度も無かったのだ。

殆どの人がそうだ。

正義がヒーローで悪が敵<sup>ヴィラン</sup>、そう思っていたのだから。

思考停止でヒーローは、悪い奴をやつつけられると本気で信じていたのだから。

彼の中のヒーローや敵<sup>ヴィラン</sup>の定義など、その程度のステレオタイプでしかなく。

そのような心構えで、この世の中に有る理不尽に対応できるはずもない。

彼の中ではオールマイトは神に等しい存在だった。

だが現実とは違う。オールマイトは「人間」である。

人間である以上、社会のルールに、法律に従わなければならない。

ならばもし、そのルールや法律が間違っていたら？

間違っていると分かっても、そうしないと、いけないとしたら？

例えオールマイトが反抗したところで同じことだ。

今度は「法」を破ることとなり、それは犯罪となる。

それは敵<sup>ヴィラン</sup>になる事を意味していた。

明確な「悪」を見過ごすことと、「法」を守ること。

この場では、どちらかを取るしかなかったのだ。

(はは……ははっ……ああ、もうなんか……どうでもいいか)

爆豪はゆっくりと意識を手放していく。

感じるのは床のひんやりとした感触。

敵役をすることになった彼は、沈みゆく意識の中で考える。

ヒーローとは何か。

ワイラン  
敵とはなにか。

奇しくもそれは、緑谷が法月に問いかけられている命題だった

## 第10話

side——相澤消太——

学校生活二日目を締めくくるホームルームが終わる。その人数は今朝より一人少ない二十人になっていた。

空席の青山の席を見る。彼は運も無かつたのだろう。このことに絶望して敵ライアンにならない事を願うばかりだ。

クラスの雰囲気はどんよりしていた。爆豪は結局雄英に残ることが出来た。除籍を逃れる事が出来たのだ。特に罰則などの処分も無かつた。このあたりの基準は、法月にしか分らない。

「じゃあ、お前ら気を付けて帰れよ」

相澤が最後の一言を言つて教室から去ろうとしたとき

「待つてくださいい！」

呼び止められた。相澤を呼んだのは八百万だった。

「相澤先生には、説明する義務があると思いますわ。」

あの法月将臣という男に関して。いったい彼は何者ですか？」

相澤はため息をついた。正直もつと早く聞かれると思っていた。が、結局聞かれなかったので何も言つてなかった。勝手に調べるだろうと思つてもいたからだ。

確かに彼が、これ以上干渉してこないとは誰にも言えない。法月の危険性は充分に身をもつて知つただろうが、彼は説明することに決めた。

相澤は話した。高等尋問官のこと。そのシステムが設立された経緯に、彼の権力。彼に逆らうことは許されない事。

たとえオールマイトだろうと、それは変わらない事。

「でも、あいつは青山を撃つたんすよ……!?!」

怒りの声を上げるのは切島鋭児郎。そのコミュニケーション能力は極めて高い。昨日はクラスのテンションを引き上げていた彼も、今は流石に沈んでいる。

明らかな悪行を目にして、それを見逃さなければならぬ。その現実には――Aは叩きのめされていた。

「ヒーローになったら、法月とは切つても切れない関係になる。

嫌なら辞めろ。無理に続けろとは俺は言わん」

相澤の言葉に生徒たちは顔を上げる。彼らの顔に出ているのは紛れもない失望。

この世界のどうにも出来ない理不尽に触れて、どう折り合いを付けるのか。それがヒーローになるための前提条件だ。

諦めるのか、受け入れるのか。屈服しつつも別の道を探っていくのか。

……敵に落ちながら戦うことを選ぶのか。  
ヴィラン

どうするのか、全ては彼ら次第だ。それを教えることは誰にも出来ない。自分で見つけていくしかないのだから。

相澤はそのまま教室のドアを閉めた。しばらく歩くと後ろから気配が近づいてきて、横に並ぶ。見もせずにそれは「青石ヒカル」だと分かった。

「相澤さん……」

学校内だというのに、腕を絡ませてくつついてくる。何か怖いことが有った時、いつもこうやって相澤に甘えてきてた。顔をぐりぐりと擦り付けてくる。彼女の目尻にうつすらと涙の跡が見えた。

彼女が普段いる雄英高校の地下施設。どれほどの規模かも分からない巨大な建造物だ。

下手すると街一つ分の大きさすらあるのではないかと、相澤は考えている。

その地下施設の正式名称は「アーコロジー・システム」。そこで様々な訓練を彼女は受けた。中には少女の能力に物を言わせた残酷な訓練もあった。

そんな時彼女はいつも、訓練が終わった後に相澤に甘えてきてた。

悪く言えば依存していると言える。

“抹消”という少女を抑え込める個性の持ち主である以上、法月は相澤をうかつに処分できない。相澤が少女を痛めつけないように、法月に反抗できるのも個性のおかげである。

数少ない自分に優しくしてくれる人に、彼女がべつたりになるのは必然でもあった。

「凄く……凄く怖かったんだ……。誰かが傷つくのは……怖いよ」

彼女は身に宿す力に反して、あまりにも優しすぎる。他人が傷つくぐらいなら、自分が傷つく事を迷いなく選ぶ。

例外は二人ほどいるが、誰であろうと分り合いたいと、本気で願っている。それが例え敵であらうとも。

彼女の思いは相澤が出会った時から全く変わっていない。彼女から何回も聞かされた夢。

何処にでも行きたい、何処までも行きたい。

人の為に、誰かの為に。

世界の何処にでも、行きたい。

どんな人でも、居られるように。

人が広く、生きて行く為に。

もう耳にタコが出来るほど聞いてきた。お調子者で気まぐれな彼女ではあるが、それ

は氣丈に振舞っているに過ぎない。彼女がそうありたいと半ば作り出した仮面だ。

相澤は頭をポンポンと優しく叩いて、腕をほどいた。

一瞬不満げな顔をする彼女だが、すぐに笑顔に戻る。

「今日は相澤さんが当番なんだよね？」

「ああ」

当番というのは、一緒に寝食を共にする少女のお目付けの事だ。彼女の精神状態を安定させるには、一人ぼつちにさせない方がいいらしい。それは十年前の事故を踏まえた上での再発防止策らしい。始まったのはここ最近の話だが。

「昨日はシアンさんだったんだよ」

シアンとは法月の側近の女性だ。あの法月と言つては失礼かもしれないが、非常に優しい人物である。

青石ヒカルは法月を嫌つていても、シアンには懐いていた。ただしどちらにより懐いているかなど、言うまでもない事だった。

相澤は少なくとも普通程度の察する力はあるので、少女の相澤に対する気持ちには気づいている。だがそれに応えることが相澤には出来ない。

「えへへー相澤さんとお泊りー」

顔をにやにやさせる彼女の顔は、いつもより三割増しほどだらしない。だがいつもよ

り更に作っているような、その表情に相澤は不安を感じた。

彼女がそんな態度をとる時は決まって、大事な話を切り出す時だと決まっている。

相澤は少女を連れて地下への入口へと歩みを進める。暗く日が届かない、地下三千メートルのその場所へ。

少女が口を開く。地下へ地下へと向かうエレベーターのその中で。

「相澤さん、なんでボクが生まれてきたのか……知りたい？」

相澤は少女の顔を覗き込む。少女の瞳が不安で揺れていた。

「相澤さん。ボクが知っている真実を話すね。」

もう、時間も無いと思うから……」

少女が相澤の服の裾をギュツと握りしめる。震えと戦いながら少女は言葉を絞り出していく。

「ボクは——」

だが言い出した言葉を少女は飲み込んだ。

「……やっぱり、何でもないや」

「そうか」

相澤は追及しない。彼女は「ごめんね」と呟いたまま黙り込む。

彼はそのまま彼女の傍に居た。それが彼女にとって、一番の救いになっていたことを



彼はまだ知らなかった。

………

………

…

side——緑谷出久——

「緑谷少年、付き合ってほしい」

これは告白ではない。昨日の今日でオールマイトがまた、放課後に緑谷を誘ったのだ。

昨日は共同墓地に誘ったオールマイト。

今度は何処に行くんだろうと緑谷は考える。

オールマイトは切り出した。

「昨日私は君に話したよね。貧困が原因の敵の話を覚えているかい？」

「え……はい」

——あら、どんな事だったのかしら？……へえ。なるほど

緑谷の記憶を勝手に覗く彼の“アズライト”。もちろん姿は緑谷にしか見えない。

オールマイトは真剣な顔つきで言う。

「その現実を見てほしい。いや君は知らなければならぬ。」

敵が生まれるその実態を」

彼に緑谷は付いていく。

雄英高校の敷地は広い。全てを把握している人はそう居ないだろう。

校舎を出て見慣れない道を通り約十分。林を抜けたその先、小さめの公園ぐらいの駐車場に出た。そこにはバスが一台だけ止めてある。修学旅行などで使いそうな大型バスだ。

緑谷は誰も周りに居ないな、と思つてきよろきよろしていると

「お待ちしておりました。八木様」

「うわあ!？」

いきなり目の前から声がした。何も無い空間からすうーつと姿が濃くなりながら現れる。緑谷は心臓が止まるかと思つた。

一人の女性がそこに居た。とても綺麗な人だった。

「そちらの方は……なるほど。八木様の継承者ですね」

身長は緑谷と同じくらいか。年齢は二十代後半ぐらいに見える。薄い紫色の髪の毛を、サイドに大きい三つ編みにしていた。

だがその恰好がなんとメイド服だ。一体全体、今まで何故気付かなかつたのか緑谷には分からない。

「私はシアン。シアン・セレストイトと申します。

以後お見知りおきを」

優雅に彼女は一礼した。緑谷も慌てて頭を下げる。

「ぼ、僕は」

「ええ、存じております。緑谷出久様。

「ワン・フォー・オール」の継承者ですね」

（様つて呼ばれちゃった！）

——あ、私という存在が居ながら。浮気者。

ずいっと緑谷の横にいきなり出現する「アズライト」。彼女の頬が膨らんでいた。

「彼女は法月直属の部下さ」

「高等尋問官補佐をさせて頂いております」

「後は……アレを言ってもいいかい？」

オールマイトは恐る恐ると言つた感じで彼女に聞く。

「ええ、構いません。緑谷様……私は元敵サイランです」

「元敵……ええええええ!？」

緑谷の声が駐車場に響く。どこかで鳥が鳴く声が聞こえた。

「今日はこの子に見せておきたくてね」

「なるほど……確かに後継者なら、見せなければならぬでしょう」

マスコミには報道されない真実を」

シアンが運転する大型バスは山道を走っていた。

緑谷達三人は余り整備されていないデコボコのアスファルトにゆらゆらと揺さぶられる。

日は既に落ちかけている。バスは対向車の一つもない寂しい道をひたすら走る。

いったいどこに行こうとしているのか。

いったい何をしに行くというのか。緑谷は考えるが分かるはずも無い。

やがて山を抜けた先には、色あせた街並みが広がっていた。そこは北関東のとある街だ。明かりすらもほとんどない。

死んでいるように見えるその街には、一見すると人が居るようには見えない。

街に入る手前辺りでオールマイトが口を開いた。

「敵は人口が多い都市に多く現れる。それは知っているね？」

緑谷は頷いた。

「つまりヒーローは大多数が、都市部に集中することになる。

それを避けようとする敵は地方の方に行き、

その敵を刈ろうと、ある程度のヒーローは地方で活動する。

「そういうせめぎ合いがある」

これもまた常識。要は需要と供給の関係だ。個人の意思がどうであれ、全体のシステムとして機能したらそのような形になるのは必然の事だ。

「でもねヒーローは人気商売だ。」

ある程度競争率が高かろうが、都市部の方にヒーローは集中する」

その方がマスコミに注目される。

ヒーロー飽和社会は国庫に深刻な影響を与えた。仕方がないとはいえヒーロー達に与える給料は、やがて国債という形に変換され国には大量の借金が溜まっている。

かと言って、むやみやたらに数は減らせない。治安の悪化という形で帰ってくれば税収は減る。

その結果として当然ヒーロー達の給料は削減された。

そこで生き残りを図るヒーロー達は、マスコミを利用する手段に出た。

分かりやすい見た目、キャラクターを演じ出演料を取る。他にはグッズの販売、講演を開くなどする事で生活の糧を得るのだ。

故に都会にヒーロー達が集中する。田舎の方で活動しても敵は少ないし、副収入も望

めない。

「その結果ヒーローに忘れ去られた、ホットスポットが出現する。」

更には十年前の災厄だ。

多くの場所が復興できないまま放置され、各地にゲッター……貧民街が出来たんだ。そこには社会の様々な、必要とされないものが捨てられていく。

不法投棄なんて当たり前。

もつと深刻なのは、そこに幼い子供が捨てられていくんだ」

バスはやがて街の入り口付近で止まる。

「緑谷少年。今からの私は「オールマイト」じゃない。

「八木俊典」という一人の人間だ。呼ぶときは八木さんと呼んでくれ」

シアンとオールマイトは先にバスを降りていく。緑谷も後に続いた。

外に出た瞬間「うっ」と口を押えた。余りの異臭に鼻がもげそうになる。

夕食をまだ食べない方がいいと言われていたのが分かった。もしも食べていたら、今

頃吐しゃ物が彼の足元に広がっていただろう。

この世の汚物を全て集めたような、それほどの悪臭だった。

「これは……」

「緑谷様、これが現実です。これがこの国で起きている真実です」

ありとあらゆるゴミがうず高く積まれている。家電や家具、用途が良く分からない産業用の何か。中には元々ヒーローのコスチュームと推測できるものもある。

積まれているごみの端に動いている存在を見つけた。人だ。ゴミ山の中から物をあさくり、やがて歓喜の声を男が上げた。

食料を見つけたのだ。賞味期限や保管状況など目もくれずに食っている。

緑谷達はその男の傍を通り過ぎて、街の中へと歩みを進める。歩き続けたら細い路に三人は出た。

明滅を繰り返す心細い街灯が照らし出す。ぬらりと光る液体は紛れもなく血だった。汚れ切った壁に背中を預けたその男は、狭い裏路地の中で息絶えている。そしてここにも積みあがったゴミ山。カサコソ動いているのはゴキブリか。足元をネズミが徘徊している。

人が死んでいるというのに誰も来ない。だれも興味を持っていない。

「盗みやがった!」

どこかで怒号が響く。少しずつ何人かの足音が近づいてくる。

やがて逃げる幼い少年と、それを追いかける二人組の男が現れた。

「殺せ!」

一人の男が唾を出しながら喚く。もう一人が手元からナイフを取り出して、少年に切りかかろうとして

「しっ……!」

シアンが動いていた。男の腹に入れた肘がもろに決まっている。

その後首筋に追撃を加えて、意識を素早く刈り取った。

どさりと倒れる男。シアンはちらりと確認して、もう一人の男を見据える。

「な……なんだ!?!お前たちは!?!」

男は懐から刃物を取り出した。同時シアンは男に肉薄している。

男の腕をひねり上げると男の体が宙に一回転して、地面に叩きつけられた。

ナイフが地面に落ちてキインと金属音がした。そして止めの拳。男の意識が落ちて、

動かなくなる。

彼女はあつという間に大人二人を無力化した。シアンがメイド服の裾をパツと払う。

傷一つなかった。

「彼女の個性は〴〵忍者〴〵。忍者っぽい事は大体何でもできる個性さ」

オールマイトの説明を聞きながら、緑谷は大人から逃げていた幼い少年に目を向け

る。

少年が持っているのは、僅かばかりの米が入った袋だ。その子は必死に持っているそ

れを放そうとはしない。見れば見るほどその少年はやせ細っている。

手も足も棒のような有様で、よくあれだけ走れたものだ。それは生きたいという気力

の為しえる業か。



「大丈夫ですよ。危害は加えません。」

水と食料を上げましょう。あなたの名は？」

シアンが優しく声を掛ける。少年は必死に目を泳がせている。緑谷たちに目をやり、シアンを見つめ。

どのくらいそうしていただけるか。少年はびくつきながらゆっくり答えた

「……レン」

「そう、いい名前ね。付いていらっしやい。あなたの新しい家が待っているわ」

優しい声色でシアンが喋りかける。わざわざ大型バスで来た意味が、緑谷はようやくわかった。

身よりもなくこんな場所で暮らす子供たちを引き取るためだったのだ。

「待って！おれには……妹がいるんだ」

「じゃあ一緒に行きましょう。案内してくれる？」

緑谷たちと少年は、少年の妹を迎えた後一旦バスまで戻る。

少年たちは橋の下で暮らしていた。その川の水を確保していたらしい。水はすっかり濁り切っていて、緑谷にはとても飲めそうになかった。

他にも寄り添い合う子供たちがいた。彼らは生きるために徒党を組んでいたのだ。

シアンとオールマイトは、子供たちを全員説得した後、バスにまで連れ添い案内した。

バスの荷台を開けてそこから水と携帯食料を与える。子供たちは涙を流しながらそれを食べた。

シアンはその様子を見ながら緑谷に話す。

「これは法月様が私に命令した任務でもありません」

「あの法月が!?!」

緑谷は驚愕した。あの青山を撃つたりした非道な男が、人助けの命令をするとは信じられなかった。

「法月様は決して慈善事業で、命令されている訳ではありません。」

こんな環境で生き延びた子供達は、必ず敵になる。

社会に、秩序に害をもたらす存在になる。

だから敵になつて被害を広げる前に、然るべき教育を施し社会の輪に受け入れる。

それが一番効率的で、最善であると判断しているからです」

オールマイトがバスと子供たちの見守りに残った。シアンと緑谷は再び街に繰り出していく。

ここで保護した子供たちは、法月が設立している孤児院で迎えられるという。だが緑谷たち以外に、子供たちを保護しようとする姿は見当たらない。

「私達の活動は、ヒーロー達から煙たがられています」

「なぜ？」

緑谷の言葉に、彼女はふっと悲しげな笑みを浮かべた。

「敵が居なくなつて、一番困るのは誰だと思えますか？」

「……ヒーロー……ですかっ……！」

「ええ、正解です。彼らは自らご飯の種を潰そうとはしません」

緑谷の心の奥底に、どうしようもない怒りが沸き起こる。

しばらく緑谷はシアンと街を徘徊する。様々な人達がいた。

個性が有る人ない人。男女に大人に子供に老人。

連れていこうと思つたところで、全員を連れていくのは無理な話だつた。その度に緑

谷は申し訳ない気持ちで一杯になつた。

……。

バスと街を何回か往復しているうちに、気付けばバスは満員になつていた。

そこに保護されているのは全員子供たち。大人たちも助けたいが、手が足りないの

だ。

救う人は選別せざるを得なかつた。

だから、まだ未来がある子供達を保護しているのだ。

「この子達には戸籍がありません。」

両親とも恐らく大多数は敵ツイランでしょう。

私達の行為は厳密には違法です。

法月様の権力の後ろ盾があるからこそ、このような行動を行えるのです」

シアンがバスの扉を閉める。彼女がハンドルを握りエンジン音が微かに聞こえた。

身寄りのない子供で満員となったバスが走り出す。

緑谷が窓から外を見ると、こちらを見つめている姿があつた。それは今回、バスに載せきれなかつた子供たちだつた。

緑谷は何も出来ない無力な自分を恥じる。それは紛れもなく罪悪感だつた。「ヒーローのコスチュームが幾らするか知っていますか？

安くても四、五十万円。高いものとなると数千万円にまでなります。

たつた一人のコスチュームで、です。

そのお金で食料を買えれば、どれほどの子供の飢えを満たせるでしょうか」  
緑谷の脳裏に浮かぶのは、除籍された青山の姿。

——ヒーローを育てるのにも金が要る。

お前たちが着用しているコスチュームもただでは作れん。

それらは税金から出されているのだ。

お前のおかげで、どこぞの家庭からおかずが一品減つたかもしれないのだ。

無駄な金を使うことは許されん。

あの時の法月の怒りにも似た表情。この現実を踏まえた上で彼の発言を聞けば、印象は変わるかもしれない。

何も現実を知らず、税金から出されたコスチュームで浮かれる。

その陰で、どれほどの子供たちが飢えている事など考えもせず。

きつとその事で青山は、法月の逆鱗に触れたのだ。

「ヒーローは敵を討つことはしても、飢えた子供を救うことはしません。

なぜか？ お金にならないからです。

大半のヒーローはギリギリの状態で営業しています。

そこで出費にしかならない慈善行為はしません。

ゲットーで飢えている子供を救っても、彼らには一銭も入らないのです。

あんな環境で育った子供がどんな風になるか分かりますか」

シアンという言葉が胸に痛かった。何も知らずにいた自分が緑谷はただ恥ずかしい。

ヒーローになれば救えるものだと思っていた。悪を倒せるのだとそう信じていた。そんな自分はただ無知なだけなのだと思います。

「私もあの子たちと同じでした。

気付いたらごみ溜めの中で生きていました。

日の光が差さない路地裏。

野良犬が死体を漁り、ネズミがそこらを跋扈する大都市のスラムです。

そこには人間の悪意が満ちていました。

生きるためには何でもしました。

盗み、奪い、人を殺めた回数<sup>は</sup>十を超えた頃、数えなくなりました。

そうして気付けば、私は敵<sup>ウイラン</sup>と呼ばれる存在になっていました」

「どうしてっ!? どうしてこんな事に……」

「仕方がないのです。国にお金が無いのですから。

ヒーローとして同じです。彼らが一番大事なのは金と名声です。

貧困は個人の責任にされます。

生まれた瞬間から、一生遊んで暮らせる程のお金が入る人が居れば、

パン一つすら与えられない子供たちが居る。

果たしてそれが平等でしょうか？」

緑谷はバスの外で流れる景色を見る。日はとつくに落ちて夜の九時になっていた。

バスの中の子供たちを見ると、皆疲れ切つて寝息を立てていた。その子たちは今日保護されなかったら、どうなっていたのだろうか。

大半は生き残れないだろう。もし生き残ったとして、まともな手段ではない。

彼らには敵ウイランになるしか生き残るすべなどないのだ。

「ヒーローは敵ウイランを討つことはしても、その背景にまで考えを及ばせません。敵ウイランがなぜ犯罪を犯すかなど考えもしないのです。

人が敵ウイランという定義をされた瞬間、その人は「人間」では無くなります。社会は一度敵ウイランになった人を人間扱いしません。

敵ウイランとは「悪」だからです。

仕事なんて、どこにもありません。

一度敵ウイランになってしまった以上、どこにも受け入れられず排斥されて生きる糧を失います。

そうして出所した敵ウイランはまた罪を重ねるのです。

そうしないと、生きていけなくなってしまうからです」

何のことは無い。そうする事でしか生き残れなかった。

だから彼女は敵ウイランになったのだ。シアンが緑谷に問いかけた。

「なぜ世間は敵ウイランという呼び方をするのか、お判りですか？」

敵ウイランと呼ばれている人たちは、結局の所犯罪者です。

犯罪者という言葉で事足りるのです。

でも敵ウイランという言葉は使われず。

「どうしてでしょうか」

緑谷は考えを巡らすのが全然検討も付かなかった。

「分かりません」と言うときアンは笑みを浮かべた。

その笑みはとて残酷な微笑みで、まるで緑谷を憐れんでいるように見えた。

「差別したいからです」

「さ……べつ」

「人間は見下せる対象が居ると安心する生き物です。」

公にどんなに差別的な発言をしても、<sup>サイラン</sup>敵が相手なら許されます。

実のところ敵は<sup>サイラン</sup>人権すらも保障されないので、

だからヒーローが<sup>サイラン</sup>敵を殴っても何の批判もないのです。

表向きは人道的に捕獲されるように見えます。

ですが違います。現に私は法月様に出会うまで、一度も仕事につけた事も有りませ  
ん」

シアンはそのまま続けて言う。緑谷は彼女のハンドルの握る手が、震えていることに  
気付いた。

「人は生きている限り理不尽な目にあい続けます。」

それは職場で、学校で、家庭で、友人の間であつたりします。



大半の人は理不尽に耐えながらも、犯罪を犯すことはしません。

犯罪を犯す必要性より、裁かれるリスクが大きいです。

そしてテレビなどで断罪されている敵を見てこう思うのです。

自分はこいつらとは違う、と。

敵になる人は生来の敵であり、

自分たちは善良な市民であると安心し、敵を見下すのです。

そして敵がやられる様をみて喜ぶのです。

同じ人間なのにです。

生まれ持った存在そのものが「悪」と断定されるのです。

だから彼らが上げる悲鳴に耳を傾けるどころか、世間は拍手喝采してヒーローを讃えるのです」

緑谷は今まで信じてきたヒーローの観が、間違っていたと今日初めて思った。

彼が信じていたヒーローの姿は、マスコミによって作り出されたものだったのだ。

「敵は悪で、ヒーローに裁かれる存在でなくてはいけません。」

そうでなければヒーローの前提が崩れ、彼らは食べていけなくなってしまう。

それ以上に彼らが目をそらし続けているものに、気づいてしまうからです。

心の中の悪を。

誰もが悪を為しうる。誰もが敵ライバルになり得る。

そんな単純な理屈からも目をそらし、自分たちは悪くない。

悪い奴は、元から悪い奴なんだと思ひむのです」

今日見た劣悪な環境で育てば誰だつて敵ライバルになると緑谷にも分かる。そしてそれは例えオールマイトでも変わりない。

選択の自由など与えられないのだから。

「……でも大半の敵ライバルは違います。

ただ生きていたいただけなのです。

私は食べるものすら、奪わなければ得られなかった。

——緑谷様。

泥水を啜りながら食べる、盗んだパンの味を知っていますか？

安心して寝られる場所を探し、三日三晩彷徨い続ける恐怖を知っていますか？

気付いたら一人ぼっちで、スラムで生きないといけない寂しさを知っていますか？

私は何も与えられなかった。水も食料も、ほんのわずかな温かみも。

身に宿る個性一つで、私は生きていかなければならなかった。

何も特別なものが欲しかったわけじゃない。

ただ安心して過すごごしたい。御飯ごはんが食べたい。

普通の生活をしたい。ただそれだけなのに。

私に与えられたのは、ヒーローと名乗る者たちの暴力だけだった」

彼女の声が震えていた。緑谷は一筋の涙が彼女の頬を伝うのが見えた。

シアンが明かした過去に、緑谷には何の言葉も掛けられなかった。

気付いたら緑谷たちは山中を抜けて、とある敷地の前に来ていた。

モルグフ孤児院。法月が権力を行使して建設した日本最大の孤児院だ。

様々な子供たちが拾われここに入れられている。入所している人数はざっと千人を  
超えていた。

シアンはバスを止めて外に出る。緑谷も後に続いた。オールマイトも降りてくる。

門の前には小柄な黒髪の女性が居た。

「待ってたよ、もう。遅いんじゃないかい？」

「お待たせしました。竜胆様」

髪をツインテールにまとめた彼女の格好はかなり際どい。胸元がばつくりと開いた  
着物で緑谷は目を慌ててそらした。といっても体形は「青石ヒカル」とどっこいどころ  
か更に幼く見える。

「まあ良いけどね、準備は出来ているさね。……おやあ？」

その少女に見える彼女が緑谷を見た。興味深げにその琥珀色の眼で、ジロジロ緑谷を

見てくる。

「あんたが緑谷出久かい？」

「は、はい！そうですけど貴方は……」

「あたしは竜胆藍理りんどう あいり。このモルグフ孤児院の施設長さね。

ふーん……なるほどなるほど。……二つ……いや三つ……。

確かに面白そうな子だね、俊典、あんたが選ぶだけはある」

「私には勿体ないくらい素質がある子です」

「えええ！そんなオー……じゃなかった八木さん大袈裟ですよ」

「いやいや緑谷少年。私は君を高く買っているぞ」

オールマイトの言葉に緑谷は謙遜する。

シアンはバスの中子供達を起こして外に連れ出した。一行は子供たちを施設の敷地内に入れる。子供たちはキョロキョロしながら付いてくる。

やがて学校の校舎くらしいの立派な建物の中に入った。

緑谷たちはひとまず待合室で休憩する。竜胆達は子供たちを部屋の方に連れて行った。

それぞれひと部屋に5〜6人ほどの大部屋で生活する。ベッドに食事が与えられ、当然教育も受けることが出来る。

今は十時を過ぎた真夜中なので大半の子供が眠っているが……。

「あーシアンおねえちゃんだ!」

「ヤギさんもいるよ!」

どうやら起きてきた子供がいるらしい。待合室にドドドと勢いよく入ってきて、シアンと八木をとり囲む。

ぞろぞろと後から後から後から湧いてくる。緑谷たちはいつの間にかわらわらときた子供たちに囲まっていた。

「ねーねーあなただれー?」

「ぼ、僕は緑谷出久……」

「へーいずくさんっていうの!」

子供達から色々な言葉をあびる。そこに暗い影はない。明るく笑顔に溢れていた。

この子供たちは、殆どすべて捨てられた子供たちだという。もしこの施設が無かったら今頃どうなっていたのだろうか。

オールマイトが緑谷の傍に来て口を開いた。

「緑谷少年、世界には暴力でしか解決できないことがある。悲しいことにね。」

でもね。飢えている子に暴力を振るっても、お腹が満たされることは永遠にない。

世界には、暴力では絶対に解決できないことも有るんだ。

私が敵をいくら倒した所で、飢えに苦しむ子のお腹が膨れるわけじゃない。

笑顔をいくら浮かべても、その子に降りかかる理不尽が無くなる訳じゃない。

そんな簡単な事にすら、私は気付かなかつた。

敵を倒すよりも。私は手を差し伸べるべきだつた

もつと早く……」

オールマイトの手が優しく子供たちの頭を撫でる。子供の一人が言った。

「お兄ちゃんしつてる？ ヤギさんはね、すっごいすっごい、誰よりもすごい人なんだよ！

オールマイトなんてめじゃないくらい！ わたしを助けてくれたもん！」

そこに居たのは緑谷の知る英雄の姿では無かつた。皆から慕われる「八木俊典」とい

う一人の人間。

「わあーたかーい！」

「ぼ、ぼくも！ ヤギさんぼくも！」

「はいはい、順番にね……ほら！」

「たかーい！」

「シアンさんー個性見せてよー」

「いいですよ」

「うわ！ きえた！」

「どいどいどい。」

「いいです」

「すーいー！」

「忍者ですから」

シアンは生きていくために敵に身を落とした。ウイラン

そして同様に“平和の象徴”の彼は、青の少女を助けることが出来なかった。彼は権力に屈した。

緑谷は正直失望していた面が無いとは言えない。法月が青山を撃つた時にも何も言わなかった。それを情けない姿だと思ったのは無理もない。

だが今のオールマイトとシアンは、緑谷が知っているどんなヒーローより輝いて見えた。

そこに居たのは救った子供たちに慕われる「八木俊典」というヒーローだった。

緑谷たちは孤児院を出る。子供たちがずっと手を振っていた様子が緑谷は忘れられない。

そのまま乗ってきたバスに乗る。子供たちが居ないバスは行く時よりも随分と広く感じた。

バスを運転していたシアンが口を開く。

「私はヒーローになりたいと夢を持ったこともありました。

ですが一度敵ライバルになった私にはもう、ヒーローになる事は叶いません。

思えばあのスラムで、生きていかなくはならなくなったあの時。

私がヒーローになる道は閉ざされていたんです」

とても寂しそうなその顔に緑谷は何か言おうとして、だが言葉にならなかった。

彼女は優しく微笑んで「でも」と続ける。

「でも後悔は有りません。

例えヒーローになれなくても、こうやって子供達を助けてあげられる。

誰かのために生きることが出来る。

それはとても素敵な事なんじゃないかって。今はそう思うのです」

月明かりに照らされる彼女の顔はとても綺麗だった。

彼女は敵ライバルだった。沢山の人を殺し、奪い生きてきた。それらの罪が消えることはない

だろう。だが今日の彼女がしていた事は誰よりもヒーローだったと緑谷は思う。

敵とは何か。緑谷にはまだ分からない。でも前進することは出来たと感じている。

(僕は何も知らなかっただけなのかもしれない……)

——なら、知りたいことは何かしら

緑谷の前に出現するアズライト。緑谷は自分の無知を恥じて願った。もっといろいろ



ろな事を知りたいと思う。

そのためには……。

——知りたいことは何でも教えて上げる。ねえあなたは何を知りたいの？

緑谷はその日初めて、アズライトの力を使った。緑谷に更に宿った個性“**電腦感覚**”を使用して、電腦上のデータを集めていく。

少しでも多くの事を知れるように。知らなかったじや済まないように。多くの事を  
知りたいと願う。

緑谷の意識が電腦上に埋没していく。

彼の眼が「青」に染まっていた。

夜空の星がまるで降り注いでくるように満天に輝いていた。

## 第11話

s i d e ———  
???

雄英高校でヒーロー基礎学の授業が終了していたころ。

九州のとあるホテルの一室に、一人の少女が居た。

長い金髪の髪が美しい、明らかに外国人の女の子。

翡翠のような目が開く。

彼女はベッドの上でうーんと伸びをして起き上がり、窓のカーテンを開けた。

既に高くなった日差しが部屋に差し込んでくる。

最上階の一室の窓から見える景色は、可もなく不可もなくと言ったところ。

雑踏な街並みが眼下に広がっている。

部屋の隅のハンガーにかけている上着。

その胸ポケットについているバッジが、入り込んできた日差しでキラリと光る。

裁きの天秤。

紛れもなく高等尋問官の証。

日本においては高等尋問官はただ一人。法月将臣しか存在しない。

しかしながらその制度は、世界各国で運用された実績が有る。今でこそほとんどの国で廃止されているが、今だに日本を含む数か国が高等尋問官を保有していた。

窓際に立つ金髪の彼女の名は、セルリア・セレスタイト。

彼女は日本ではなく、アメリカの高等尋問官であり、史上最年少の高等尋問官だ。

年は今年で十六歳になったばかりだ。

そして時代の流れから、最後の高等尋問官になる事はほぼ間違いなかった。

「シアン……もう半年ぐらい会ってないけど、元気にしてるかしら？」  
物憂げに少女は口を開く。

シアンとは彼女の家に養女として迎え入れられた女だ。

元々敵<sup>ライバル</sup>だったのだから、法月の紹介でセレスタイトに入り教育を施された。

今では優秀なエージェントとなったシアンはセルリアの護衛役をした後に、今では法月の側近として働いている。

だが側近の話は表向き。彼女はセレスタイトより法月にあてがわれた刺客でもある。もちろんシアン自身が法月に恩を感じていることは承知の上。

ある程度の情報は法月にも流れているだろう。

シアンはいわば二重スパイの立場に立たされているのだ。

手首に巻かれている端末が鳴る。

その端末は市販のものではない。

端末の名はART。All Round Toolの頭文字を取ったものだ。

その機械に詰め込まれている技術は、現在の企業の遥かに先を行っている。

十年や二十年ではきかない差だろう。

この技術も「青の少女」の計画で生み出された副産物の一つだ。

「うん……何かしら……お父様？」

セルリアがその腕時計のようなアートを操作する。

ピツと電子音の後、テレビ電話の回線が開く。

「はい」

「私だセルリア。大事はないか」

セルリアの前に映し出される立体映像のディスプレイ。

そこに映るのは白髪の男性。

見事に整えられたその髭は、バルボというらしいと彼女は思い出した。

ベレンス・セレスタイト。

セルリアの父であり、アメリカのもう一人の高等尋問官。

彼の生活は多忙を極めている。現に顔色は良くない。

「ええ、お父様。私は元気よ。日本はとてもいい所ね」

「ははは。なら、なりよりだ」

「お父様は？」

「何いつも通りだよ」

ははと笑うベレンスにセルリアは無理はしないでと注意する。

「お父様が急に電話だなんて珍しいわね。——何かありましたか」

シアンの顔つきが変わる。

セルリアは高等尋問官だが、ベレンスの方が立場は強い。

逆らえないという程ではないが上下関係がないわけではない。

一体どのような指令が下されるのか……。

「セルリア……緊急指令だ。お前は明日より雄英高校のヒーロー科に属することになる」

「は……う？」

唐突なその指令に思考が停止した。

いきなりにもいきなりすぎる指令に困惑する。

そもそもがセルリアが日本に居るのもただの観光。

とくに深い意味が有って来ていたわけでは無い。

こつそりシアンの前に姿を現して、びつくりさせてやろうぐらいの事しか彼女は考えてなかった。

「シアンより報告が来た。法月が生徒の一人に発砲。

一方的に除籍したという事だ。詳細は今送る」

セルリアのアートにすぐさま詳細が送られてくる。

彼女はデータをマルチウインドウで立体映像に展開し、事の顛末を確かめる。

生徒の一人が不適切な言動をし、それを理由に除籍された事。

その前に法月が生徒に発砲したが、アズライトに庇われて何とか怪我が無かったこと。

シアンが秘密裏に撮っていた映像も閲覧する。

その報告を見たセルリアの眼が細くなった。

「法月……やりすぎでしょう。アズライトがその場において幸いだったわね。

全く、高等尋問官とは、どうあるべきか忘れてしまったのかしら」

「彼はとりわけ過激だ。だが日本には彼しか残っていない。

事実上やつは独裁者として君臨しつつある。

人手は惜しいが……」

「そろそろ、計画も大詰め。彼女のメンテナンス及び調整。

そして法月に対する監視が必要……という事ですか」

高等尋問官に対する抑止力は無いわけではない。

それは国際的な高等尋問官同士のネットワークだ。

高等尋問官が好き勝手なことをしていると、その国や高等尋問官に対して他の国が制裁を加えるのだ。

だが法月の場合は特殊な事情が絡んでおり、それが機能しているとは言えなかった。「そうだ。事情が事情だけにうかつに手出しも出来なかつた。

が、そろそろ放置も出来ん。計画の後、奴が暴走しないよう首輪は着けなければならん」

「はあああ……気が重いわね。なんてギリギリの綱渡りをしてるのかしら私達」セルリアはため息をついて愚痴を吐く。

英才教育を受けてきた彼女は、幼いころには世界の闇に触れていた。

それに慣れてきている筈の彼女でも気が重くなる。

「スターレイン」は間近に迫っている。

もし計画が成功しなければ世界が滅ぶ。それだけの事だよセルリア」  
「それが気が重いつて言ってるのよ全く」

世界を救うために秘密裏に進められているプロジェクト。

Azurrite。Reason。Arcology。

どれか一つでも失敗したら人類に未来はない。

もつともそんな事実は各国政府によって隠蔽されているので、一般人が知る訳もないが。

きつと彼らはどんなピンチも、ヒーローが解決してくれると本気で信じているのだから。

お気楽なものだとセルリアは思う。

「了解しました。セルリア・セレスタイト、これより任務遂行に入ります」

「お前にはいつも重荷を背負わせてしまうな……すまない」

ベレンスは沈痛な表情をするが、セルリアは笑顔で答えた。

「平気よこのくらい。私なんかよりアズライトの方がよっぽど辛いわよ。」

彼女に世界の命運がかかっているんだもの」

「……では達者でなセルリア」

「お父様も体に気を付けて」

「ああ」

短いやり取りを交わし回線は閉じられる。

部屋の中に静寂が戻る。



彼女はすぐさま行動に移した。

すぐに着替えを始め、手早く荷物をまとめていく。

十分後には彼女の姿は部屋になく、最寄りの駅のホームに居た。

向かう先はただ一つ。今回指令を受けた雄英高校。

「と、その前に……」

彼女は手首のアートではなく、普通のスマホで今回の指令と顛末の詳細を確認。

人が行き交う外でアートを使うわけにはいかない。

必要な事を確認した彼女は歩き出す。

彼女は足が浮足立つのを感じた。

「今会いに行くからね。アズライト」

彼女は時間通りに来た高速鉄道に乗り込む。

頬に微かに浮かぶ笑み。

彼女の眼はまだ見えない雄英高校の方を見ていた。

……

……

……

side——相澤消太——

雄英高校地下 アーコロジー 青の少女管理施設にて

地上では日がとつくに落ちていた。

地下三千メートルの世界ではそれを知るすべは手元の時計だけだ。

時計の針は九時を示そうとしている。

白色のLEDが、白一面の部屋を照らし出す。

青の少女は部屋は普通の年頃の女の子に比べると、物が少ない。

それでも十年前の当時よりはかなり多くなっている。

テレビにDVDプレイヤー。アニメや映画のDVDに漫画本。

どれもこれも相澤の趣味で固められてはいるが、たまに少女が要求を出すこともあるので

それに合わせた本も幾つか置いてある。

中でも一番目を引くのは分厚い図鑑か。

なんとその題目は“世界のゴキブリ大百科”である。

実物大のゴキブリの写真に生態などが詳しく説明されているその本は、なんと一万円もした。

ちなみに相澤の自腹である。

そんなものを尻目に二人は簡素なテーブルで……  
パシッ……。

「ああっ!? そ、そこは……そこはダメ!

そ、それなら! これでどうかな!」

「……」

パシッ……。

「うあっ!? うう、酷いや。もうぐちやぐちや……。

せめてここを押さえて……」

パシッ……。

「……甘いな」

パシッ……。

「そ、そんな! 予想外すぎるよ! これ以上はだめ!

パシッ……。

「……それならここだ」

パシッ……。

「あ!?! そ、そこは……そんなのされたらボクの全部しびれちゃう……」

「……」

パシツ……。

パシツ……。

「中はだめ！中はだめえー！」

「お前わざとやってるのか？」

「えと、何が？」

相澤は首を傾げる青の少女を睨む。

青石ヒカルはキョトンとした表情で相澤を見ていた。

二人は碁盤を挟んで相對していた。

囲碁をしていたのだ。

形勢はもう可哀そうになるほど青の少女の圧倒的不利だった。

少女は全滅に近い。もう少し進んだら全滅するだろう。

「こうなったら……」

「個性は使うなど言っただろうか。それに今更使っても勝てないぞ」

「酷いやー！」

「事実だ」

囲碁というゲームは陣取りゲームだ。

石を交互に打ち合い、囲った陣地の広さを競う。

その性質上、隅の方から打ち始めるのが定石とされている。

盤の隅の方が囲うのに石が少なくて済み、効率よく陣地を稼げるのだ。なのに青石ヒカルは最初から、碁盤の中央の方を囲っていかうとしている。

その中に相澤の石がどんどん打ちこまれて、彼の石が我が物顔で居座っているのだ。先ほどのやり取りも全部囲碁のものだが、どことなく淫猥に聞こえる。

だが決してR18的な行為をしていたわけでは無い。

少女がうなだれる。

「ううー。流石にこれ以上やってもボクに勝ち目無いね。

——負けました」

「ありがとうございます」

お互いに一礼をして終わる。

対局が終わり青石と石を片付ける相澤。

すると手元のスマホが震えたので確認すると……。

「何……？」

その情報をいぶかしんだ。

連絡は根津校長からだった。

明日緊急で留学生在が1—Aにやってくるという事だ。

いきなり留学生がクラスに来るといっただけでおかしな話だ。  
しかもその留学生が

(セルリア・セレスタイトだと……)

彼女は確かつい数か月前に、アメリカの高等尋問官になったばかりの少女。  
ベレンスという高等尋問官の父を持つ生粋のお嬢様。

だがぬるま湯な環境に浸ることは無く、研鑽を続けている天才。

青の少女の計画にも関係している人物であるとは知っている。

このタイミングで雄英に所属することになるとは、やはりその権限を使ったのだろうか。

考え込んでいる相澤を、じつと見つめている青の少女。

少女は一度だけセルリアと会ったことが有る。

その時の様子を相澤は見えていないが、どうやら大変仲良しになったようだ。

しばらくの間セルリアの話しかしてなかった時期もある。

ともかくこれは上の決定らしく、異を唱える事は出来ない。

彼女はアメリカの高等尋問官ではあるが、日本においても同様の権利を持っている。

同盟国間では高等尋問官の権利が互いの国に及ぶのだ、

つまりセルリアはやろうと思えば生徒の身分で、誰かを除籍したり、教師を罷免した

りも出来るわけだ。

だがもう今更相澤が何を言ってもどうしようもない。

せめて彼女が常識人である事を祈るばかりだ。

「へー……私が知らない間に随分物が増えているのね」  
「!!?」

入り口からいきなり声がした。

咄嗟に相澤は青の少女を庇うように振り向く。

そこには金髪の少女が居た。

一目で分かる。相澤に先ほど根津から送られてきた連絡。

それに留学生の写真が添付されていた。

彼女は間違いなく写真と同一人物。

セルリア・セレストイトがそこに居た。

緑の目から強い意志をはつきりと感じた。

相澤のキツイ視線を何とも思っていない。

その目が相澤の背中から、そろりと顔を出す青の少女に向いた瞬間

「アズライト！」

少女がタツタツと青の少女に駆け寄っていく。

、青石も相澤の背中から前に出てセルリアに歩み寄る

「セルリア……？」

「アズライト……そうセルリアよ。覚えてくれていたんだ」

「ボクが忘れる訳ないよ……セルリアが来たって事は。

——そっか、そういう事なんだね」

「うん……そうよ」

少女が互いに手を握る。

互いに抱擁を交わした。

セルリアはアズライトの体を更につきつく抱きしめる。

アズライトの眼から涙が流れた。

それは彗星のように流れて落ちた。

再会を喜ぶ二人は同時にそれが、別離へのカウントダウンが始まったことを理解する。

彼女に残されている時間は残り少ない。

選べる選択肢など彼女たちには無かった。



## 第12話

—side 轟焦凍—

轟は雄英高校から帰宅した。

彼の家は相当に広く豪邸の部類に入る日本家屋だ。

父親がヒーローとして成功している彼は裕福な暮らしを享受してきた。

だが決して恵まれていたと本人は思っていない。

幼いころからトップヒーローにするために、彼の父親は虐待とも言える仕打ちを繰り返してきた。

明らかにやり過ぎのその訓練の結果、轟の母親は心を病み。

そして彼自身も心に深い傷を負っている。

彼の頭に過るのは今日の戦闘訓練のこと。

自身が訓練で建物を氷漬けにし、圧倒的に終わらせた記憶ではない。

青山が撃たれ、そして青石ヒカルが助けたあの光景だ。

法月将臣。

放課後の相澤先生の説明で、あり得ない程の権力者だと理解した。

どこかで見た覚えが轟は有る気がしていたが、相澤先生の話でようやく思い出した。幼いころ父親に何回か会いに来ていたのを轟は見ていたのだ。

轟は思い起こす。

あの時、青山を助けた青石が微かに震えているように見えた。

それは彼女が法月に怯えていたのだと今なら分かる。

彼女は恐怖と戦いながら青山を助けたのだ。

そしてあの時に。轟は動けなかった。

轟だけではない。

動こうと思つたら他の誰であつても幾らでも動けたはずなのに。

やはりあの男の氣に、あてられていたのだろうか。

あの時の彼女が脳裏にちらついて離れない。

青山が除籍になつた後に、彼女は空気を読まない行動をとり続けていた。

それも、もしかしたらクラスメイトを励まそうと、彼女なりに努力していたのかもしれない。

彼女は一人の命を助けたのに、称賛される事など無かつた。

今更の話だが、もっと別の接し方だつて有つたかもしれない。

「糞……！」

苛立ちが募るのを轟は感じる。

轟の目標はヒーローになる事だ。

ただなるだけではない。

それも右の個性水結だけでヒーローになり、糞親父を見返してやること。

ずっとそうだった。

そしてそれはずっと変わらない筈で。

しかし彼女と出会ってから何かがおかしい。

轟の根幹を成しているそこが、揺らいでいるのを感じる。

考えながら廊下を歩く。

視線を感じたので前を向いたら一人の男がそこに居た。

「焦凍、話がある。ついて来い」

「……」

轟に声を掛けたのはナンバーツーヒーロー“エンデヴァー”。

本名、轟とじろき炎えんじ司。彼の父親だ。

青石ヒカルと会話を休み時間に行っていると、なんとエンデヴァーの事が出てきたりし

た。

彼女は糞親父ちちおやと知り合いだった。

稽古をつけてもらったことが有るらしい。

彼女自身はエンデヴァアの事を「炎えんドバー」と言っていたが。

青石ヒカルのネーミングセンスが轟は心配になった。

彼女は『炎がいっぱい出るだけの地味な個性だよ』と辛口評価をしていた。

そんな会話をしていたことが思い出されて、轟は吹き出しそうになるが耐える。

頬が思わず緩んだ。

エンデヴァアの眼が少し大きくなった。

「大事な話だ」

連れてこられたのはエンデヴァアの書斎。

轟は扉を後ろ手に閉めた。

しばらく部屋の中で沈黙が続く。

やがてエンデヴァアの口を開いた。

「お前のクラスに青石ヒカルという少女が居るな？」

「ああ、それがどうした」

あれほどの目立つ存在を忘れられるはずも無い。

入学初日に彼女を見かけ、教室まで連れて行った時の記憶は生涯残り続けるだろう。

「彼女についてどれくらい知っている？」

「……凄い個性を持つてるって事ぐらいだ」

入学初日の体力テストを見た焦凍は驚愕した。

あんなでたらめな事が可能な個性がこの世に存在するのかと。

個性の詳細を青の少女が語ることはなかったが、それでも結果がハッキリと示していた。

彼女と焦凍達の間が存在する越えられない壁の存在を。

だが彼女はそんな事は一切気にしている様子はない。

むしろ彼の事を友達だと認識している。

クラスメイトからは彼女を半ば押し付けられながら相手をしていた。

彼女はクラスメイトからは完全に問題児扱いである。

「この際だ、はつきり言おう。彼女に関わるな」

父親の口調は、はつきりとしている。

彼は関わらない方が良いと明らかに確信していた。

彼女をまるで腫れ物のように扱うその言い方。

焦凍は相変わらずの屑っぷりに辟易する。

彼は少し考えて質問した。

「親父は知り合いなんじゃないのか」

「聞いたのか？」

「ああ」

エンデヴァーは首を縦に動かした。

「確かに俺は知り合いだ。個性の制御を教授した」

「それも聞いた」

「彼女の個性の事は聞いたか？」

「いや……」

彼女は自身の個性の事を頑なに語ろうとはしなかった。

体力テストであれだけの出鱈目な結果をたたき出したのだ。

並みの個性の筈がない。

彼女を強さだけで語るなら間違いなくオールマイトも凌ぐだろうことは、クラスの間

での共通認識になっている。

クラスの外にも徐々々にその噂は広がりつつ有るようだ。

それにしても彼女のそれが、どんな個性なのか皆目見当もつかない。

様々な憶測が飛び交っているが未だに真相は闇の中だ。

「だろうな。焦凍、アレは俺たちの手に負える存在ではない。

文字通り次元が違う存在だ。

焦凍、お前は俺の最高傑作だ。

いずれお前はオールマイトを超えるヒーローになれるだろう。

だが彼女に追い付ける事は絶対にありえん」

「なぜ……」

返す焦凍も本当は分かっている。彼女が体力テストで見せた程の力。

あの領域にはどれほどの努力をしても届くことは絶対にありえないと。

「お前が俺の最高傑作ならば、アレは世界の最高傑作だ。

そしてその用途も決まっている。

彼女は使い捨ての道具に過ぎん。

深入りして情が移らんように俺は注意しているんだ」

「ふざけるな……」

焦凍はエンデヴァアの胸倉を掴む。

その言葉に激しい憎悪が呼び起こされた。

頭の中が熱くなっているのを感じる。

血液が煮えたぎって沸騰しているような感覚。

今この男はあの少女を『道具に過ぎん』と言った。

彼女はどれだけの力をもった存在であれ、ちゃんと人の心を持った「人間」だ。

そんな事は短い付き合いの彼でもはつきりと分かる。  
やはりこの男は人間の屑だと彼は確信した。

「焦凍。ふざけてなど居ない。」

現にトップヒーローの何名かが彼女の育成に関わっている。

あのオールマイトですらだ」

「それが一体どうしたと」

オールマイトが関わっていたことに若干の驚きが轟の言葉に混じる。

そして同時にどうしようもない嫌な予感が彼の中を駆け巡った。

「お前には教えてやろう。この世界の真実の一部をな」

エンデヴァアの口が開く。

紡ぎだされる言葉に焦凍は顔色を変えていく。

どうしようもなく理不尽な世界、そして彼女に待ち受ける運命と残酷すぎる現実。

焦凍は掴んでいた胸倉をゆっくりと放した。

「嘘………だろ?」

「残念ながらこれが現実だ焦凍。仕方がないのだ。」

世の中は全て「仕方がない事」で動いている。

……”スターレイン”は近い。



決して口外はするな」

「それは……いつ」

焦凍の心は既にここに有らずだ。

ふらふらと立っているだけで精一杯だった。

「約一か月後だ。心にとめておけ。彼女の邪魔だけはするな

お前は彼女が守った世界でヒーローになればいい」

轟は部屋を勢よく飛び出した。

扉が乱暴に閉められて激しい音をたてる。

どこに向かうなど考えもせず、廊下を走り抜け、靴も履かずに庭に出て空を見上げた。

果てしない闇の向こうに無数の星が夜空に輝いていた。

やがて、どうしようもない理不尽が空からやって来る。

父親から聞いた話を彼は思い出す。

人類は彼女に頼る事では生き残れない。

彼女は役割を果たすために作られた。

そして役割を果たした後、彼女は処分される。

今日青山を助けたときのよう、誰からも称賛される事も無く。

記録にも記憶にも残されることは無く。

人知れず彼女は世界を救い、そして殺される。

そしてそれが「最善」であると理解してしまう事が、たまらなく悔しかった。  
一筋の星が夜空を横断する。

願い事を思い描く暇もないまま、それは燃え尽きて消えた。

それは彼女の人生そのもののように轟には思えた。

……

……

……

——side 相澤消太——

相澤は地下施設から地上に出てきた。

既に時刻は夜の十時になっている。

地下施設に突如やってきたセルリア・セレスタイト。

彼女は多くを語る事は無かった。

そして相澤は直後に、根津校長からの呼び出しを受け地上に向かった。

地上に向かう相澤の服を、青石ヒカルは掴んで離そうとしなかった。

もつと一緒に遊んでほしいらしい。

完全にガキの行動のそれに精神年齢がまだまだ低いと思う。

しまいには背中に抱き着いて、わがままを言いたい放題言い出した。

そんな青の少女をセルリアがたしなめて、相澤はようやく解放されたのだ。

相澤は校長室の前に来た。

横の法月の執務室に人はいない。

彼とて一日中雄英に居る訳では無い。むしろいない時間の方が多い位だ。

校長室のドアをノックする。

返事が返ってきて、相澤はドアを開けた。

「やあ、よく来てくれたね。相澤先生」

そこに居たのは大きい一人のネズミ。

いかにも高級そうな革張りの椅子に腰かけている。

いや正確には乗っている。彼の足は床に届いていない。

世界でもまれな、個性が発現した動物が彼だ。

ネズミの異形型の個性というわけでは無い。

彼はあくまでも個性“ハイスペック”を宿す“ネズミ”なのだ。

相澤は校長先生に促され、簡素な木製の椅子に腰を下ろした。

「セルリア・セレスタイトの件についてですか？」

「彼女についてはまた後日に話そう。

調べた限りでは法月よりも穏健のようだし。

今日の青山君のような事にはならないと思うよ」

どうやら相澤が心配していた事は回避できそうだ。

青石ヒカルもセルリアに会えて心底喜んでいた。

あの子は馬鹿だが人を見る目はそれなりにある。

セルリアは多少なりは信用できそうだと相澤は判断した。

「それなら良いんですが……根津校長、もしかして例の調査が進展したと」

「……そうだね。僕もただ手をこまねいた訳では無いよ。

国家権力の元で行使される明確な悪。

せめて反撃のチャンスを伺うべく情報を集めていたのさ。

けどね……」

根津からA4サイズの書類を渡される。

中身は根津が独自のネットワークで集めていた、青の少女に関係すると思われる情

報。

その中に気になる文言を見つけた。

「これは……プロジェクト“Azurite”。

それにプロジェクト“Reason”？  
 プロジェクト“Azurite”。

元々個性が無い世界を想定していた世界規模のプロジェクトさ。

全世界の人類の脳を電腦にリンクさせ、言葉が違っても意思疎通が可能な社会を構成する……。

「だけど個性というイレギュラーが発生して、一度は失敗に終わっているんだ」  
 「この“Reason”については何も？」

相澤の言葉に根津は顔をゆがめた。

それは様々な感情がごちゃ混ぜになった、相澤が初めて知る校長の表情だった。

「……相澤先生。ここから先の話は聞くか聞かないか慎重に決めてほしい」  
 「何を突然……」

「よく考えてほしい。聞いてしまったら、もう後には引き返せない。  
 相澤君は計画を聞かされているよね。」

「だけどそれは、真実には程遠い。ほんの一部に過ぎない。」

「真実を知ってしまったら、結論は一つしかないと分かってしまう。」

「……あまりにも残酷すぎる」

「根津はがつくりと顔を落とす。」

無力感に包まれたその様子は、普段からはとても想像できない。

相澤は、はつきりと返事をした。

「構いません。覚悟は出来てます」

「本当に良いんだね？」

「ええ」

「……十年前の「青の世界」。それが引き起こされた後。

オールマイトが「アズライト」に何をしたのかは知っているよね。

法月の命令で彼が行った非道を」

「……それがどうしましたか」

相澤の心の中に隙間風が吹いたような気がした。

思い出されるのは十年前の地下施設。

法月に命令されるまま非道を繰り返すオールマイトの姿。

「結論から言うと、僕は仕方がなかったと判断せざるを得なかった。

法月がオールマイトにさせていた事は無駄ではなかった。

それどころか、オールマイトには……。

彼がそうしなければいけない確固たる理由があった」

「冗談じゃない！オールマイト……。

表では平和の象徴としてへらへら笑っていないながら、裏ではあんな……」

「それをしなければ世界が滅ぶとしても？」

「……なんだと？」

相澤の思考が一瞬停止する。

だが理解が及ばない。確かに彼女が起こしてしまった事故は悲惨なものだった。

だからといってあんな風に痛めつけることに、明確な意図があったとは考えづらい。

ましてやそうしないと世界が滅ぶなど、意味が分からない。

命令だったからなど言い訳でしかない。

あの時のオールマイトは明確に敵<sup>ツイラン</sup>だった。

「相澤先生。よく考えてみよう。疑問に思わなかったのかい？」

なぜ彼女の存在が許されているんだらう。

核兵器なんか比較にならない程の危険な力だよ。

これほどの強力な個性が、たった一か国の力で開発できると思うかい？

もし出来たとして、それほどの個性を開発した日本は、どうして世界から非難を浴び

ていないんだらうね？

人権を軽視した施設生活を強要して、個性開発を進めていたんだ。

普通なら大問題どころの話じゃないよ」

その言葉に相澤は考えた。

全ては法月の命令で動いているからだと考えていた。

彼の権限を存分に使って、自分の手駒を作っているのではないかと。

だが違うとも言うのか。

「非難されていけないのは、国際的に様々な国が関わっているんじゃないのかな？」

そして十年前の「青の世界」。数千万人が死亡したあの事件。

なぜ日本は袋叩きになっていないんだろうね？

真相は世界に広まっていないから、というのは道理が通らない。

あの事件は“Azurite”<sup>アズライト</sup>の暴走により引き起こされた。

世界規模で開発されたプロジェクトだよ。

世界各国が共同していたんだ。

日本だけが真相を知っている訳がない。

つまりあの事件は世界規模で隠蔽されたのさ」

「……何だと」

確かにそれなら理屈が通るかもしれないが。

だがしかし

「それも全部、「仕方がなかった」としたら？」



個性の開発も、全ては「何か」に対抗するためのモノだとしたら？

他に手段が無く、それをしなければ世界が滅ぶとしたら？

彼女は確かに世界を滅ぼしうる力を持っている。

上の人間も強欲だけど馬鹿じゃない。

考えなしにそんな個性を開発したりしない。

なら、それほどの力を開発した理由は一つしかない。

世界を滅ぼしうるものに対抗するために、彼女は作られたのさ」

「馬鹿な！彼女を無力化する計画が動いていると法月は……」

相澤が椅子から立ち上がり声を上げる。

冷静な彼に珍しい動揺だった。

根津は落ち着いて言葉を返す。

「嘘じゃない。彼女はその災厄に対抗した後に、速やかに処分されることになってきているから。」

実際に彼女は危険な存在になってしまっている。

それは間違いじゃないからね。

相澤君が聞かされていたのは、その部分の計画なんだろうね」

校長室に静けさが蘇る。

相澤と根津の呼吸の音だけが静かに聞こえる。

そして少し時間が経った後、根津は口を開けた。

彼は既に疲れ果てていた。

「彼女が対抗するのは、世界が滅びる大災厄。

最大で直径10キロの流星群が、約一か月の間に五回に渡り地球上に降り注ぐ。

“ 5thスターレイン”  
ファイブス

「青の世界」なんて比較にならない。正真正銘の世界の終わりさ」

## 第13話

### 第14話 青の少女と放課後の話2（後編）

side——緑谷出久——

緑谷が家に帰り着いた時には、日付が変わったところだった。

バスの中でアズライトの力を使った緑谷だがすぐに中断された。緑谷の様子がおかしいとオールマイトにゆすり起こされたのだ。

アズライトは邪魔をされたと大変憤慨していた。

シアンが家まで送り届けると言い出したが、丁重に断った。

緑谷は家の鍵を開けると真つすぐに部屋へと向かう。

扉を開けてそのまま寝床に飛び込んだ。

今日のような記憶が蘇っていく。

除籍された青山。

戦闘訓練の際の青の少女。

貧民街の子供たち。

そしてシアンに聞かされて嘔み締めた現実。

孤児院で見た世間から知られていないオールマイトの姿。

あまりにも色々な事が有りすぎた濃密な一日だった。

そんな事を思い起こしながら緑谷は深い眠りに落ちていった。

「あれ……」

「あ、来た来た」

緑谷は気付けば見たことも無い場所に居た。

どこまでも何もなく広がる景色は地上ではない。

青く青く広がる世界は地面の代わりに格子状の線が広がっている。

青くそして深い闇が空の果てにまで広がっている。

まるで宇宙の中にいる様だ。

そして目の前に立つ「青の少女」。

風もないのに彼女の髪が穏やかに揺れていた。

「君は……アズライト……で良いの？」

思えば僕、君の呼び方なんて考えてなかったし……」

——人の手で作られた「人工個性」。

全世界での構築・運用を前提としたプログラム。

ソフトウェア“アズライト”。

それが私達だよ。

昨日の彼女の言葉を思い出す。彼女は個性であり、プログラムでもある。そして人の手で作り出されたと言っているが、真偽のほどは分からない。そもそもなぜ共同墓地に彼女が居たのかすら分からない。

彼女には未だ謎が多いままだ。

「いづれ名前を付けてもらおう事になるけど、今はそれで良いわ。

私はあなたのアズライトだよ」

「それは分かったよ、けどここは？」

緑谷は辺りを見渡した。

現実ではありえないような不思議な空間。

熱くも寒くもない何の匂いもしない。

立っている床は見えないのに、有るべきものとして概念だけがそこにはあった。

「ここは電脳空間。インストールされた私の力であなたはここに来る事が出来る。

人の身で電脳空間にダイブ出来る。これがアズライトの能力の真価。

人々が互いに分り合うための力。

ここでは言葉が違ってても、直接意志を伝える事が可能だよ。

そして今の貴方は電脳体……いわゆる幽霊みたいなものね」

「ここは電脳空間で……つて事は今僕の体は!?」

緑谷は自分の体ごとこの世界に入ったのではないかと心配したが、

「ちゃんと自室で眠っているわ。死んでいないから安心して。」

言うなればちよつと幽体離脱しているようなもの」

「それはそれで充分怖いんだけど」

緑谷はまるで映画の世界の話みたいだと思う。

「直ぐに慣れるわ。……さあ、早速始めるとしましょう」

「えつと……なにを?」

「何って戦闘訓練。今日の授業の様子は、あなたの中からちゃんと見てたわ。」

最初から最後まであの子におんぶにだっこ。

飯田君もあの子にあっさりやられちゃって、あなた結局何もしてないじゃない」

アズライトがジトーつと緑谷を見つめてくる。

「……それはそうだったけど」

戦闘訓練で爆豪を気絶された青の少女は「もういいや」と呟くとその場から消えた。

次の瞬間には終了のアナウンスが建物内に響いていた。

あつという間に捕獲テープを飯田君に巻いていたらしい。

力の差に唾然とするしかなかった。

実力差なんて前日の体力テストではつきりと分かっていた筈だが、まだまだ認識が甘かったと生徒たちは実感していた。

「あなたはまだ」ワン・フォー・オール」の力を使いこなせていない。

その状況が続くことは看過できないわ。

私の宿主である以上、ちゃんと強くなってもらわないと困るの。

あなたが死ぬことは同時に、私が死ぬことでもあるのだから」

「……」

緑谷は静かに目の前のアズライトを見る。

緑谷自身も考えていた。オールマイトに託された力を無駄には出来ない。

一刻も早く力の調整を身に付けない事には、ヒーローになるなど夢のまた夢だ。

力を使うたびに怪我をする今のままでは駄目だと分かっている。

しかし今日の見てきた光景が、緑谷の頭によぎる。

社会やヒーロー達に見捨てられた子供たち。

<sup>ウイラン</sup>敵にならなければ生き残れない不条理。

子供たちを救っていたのは、ヒーローではなく元々敵の<sup>ウイラン</sup>シアンと、あの法月だという

現実。

果たして緑谷がなりたいたいものは、ヒーローになった先に存在するのだろうか。「余計な事は今は考えないで。集中して。」

と言つても今の緑谷君には無理かな？」

「……僕は何も知らなかった。敵ツヨシの事も、ヒーローの事も。」

純粹な「悪」がこの世の中には有つて、それを退治するのがヒーローで。

ずっとそう思つてきたんだ。でも」

「ええ、でも現実とは違う。」

ウイラン

敵は「人間」。そしてそれを刈るヒーローもまた「人間」。

ウイラン

敵が正義というわけではないけど、ヒーローもまた同じ。

人間だもの。誰だつて間違いを犯すことは有るわ。

絶対なんて無い。誰もが敵ウイランになり得る。

あのオールマイトですらね」

「違う！オールマイトだけは……違う！彼は敵ウイランになんて絶対にならない！」

「緑谷君、あんな現実を見ておいて……まだそんな幼稚な心構えでいるつもり？」

「幼稚だつて!？」

緑谷は憤慨した。

アズライトは緑谷を憐れんだ目を見た。



「ええ、幼稚よ。あなたは縋っているのよ。

オールマイトに。作り上げられた”平和の象徴”という偶像に。

絶対に「悪」にならない「正義」の体現者という妄想に。

それは何も、あなただけの話じゃないわ。

オールマイトは個性をあなたに継承した。

彼の中の”ワン・フォー・オール”は残り火に過ぎない。

やがてそれが消え去る日は近いでしょうね。

それは”平和の象徴”が失われることを意味するわ。

その時果たして、彼に頼り切った社会はどうなってしまうのかしら？」

「……」

緑谷の眼が見開かれる。「そんな事も考えてなかったの」と彼女は呆れたため息をついた。

オールマイトからは何も聞かされては居なかった。

まだ信用され切つてなかったのかも知れないと考える。

拳をギュツと握つた緑谷は焦っていた。

ならば一刻も早く代わりの”平和の象徴”にならなければと。

彼女は続けて言う。

「結局の所、彼は敵を暴力で押さえつけていただけ。確かにそれで平和は訪れたわ。<sup>ウイラン</sup>

でも彼は、民衆に考える事の意味を問うことはしなかった。

社会にそのままでもいい、私が居るのだからと誤ったメツセージを送る事になってしまった。

そして社会は彼に縋つたのよ。〃 平和の象徴〃に。彼自身が縋らせたのよ。

けれどもオールマイトは、敵に歩み寄る事はしなかった。<sup>ウイラン</sup>

敵を理解しようなんて、彼は考えもしなかった。

だけどね緑谷君。

お互いに理解し合わない限り、本当の平和が訪れることは永遠に無いわ」

「そんな……だけど。敵は討たないといけないじゃないか!<sup>ウイラン</sup>

ヒーローなら!」

「ええ、そうね。ヒーローなら敵を討たないといけない。<sup>ウイラン</sup>

逆に言うと、ヒーローは敵を討つことしか考えていない。

でも、果たしてそれだけで良いのかしら?

平和の象徴に縋りつく今の現状。

それで本当の平和だと言えるのかしら?」

「君は僕にどうしろって言うんだ……」

ぼそりと緑谷は呟いた。ヒーローになればいいと思っていた。

いつかオールマイイトのようになって皆を救いたい。

それが確固たる夢の筈だった。

なのに今の緑谷はヒーローになる事を迷っている。

どうすればいいのか、緑谷には分からなくなっていた。

アズライトが緑谷の傍に来る。

「ついで来て緑谷君」

彼女が緑谷の手を取った。そして一気にジャンプする。

「うわあああ!?!」

「大丈夫、怖がらないで」

緑谷達は電脳空間の空を舞っていた。

青く青く染まっている電脳空間の空を、彼女は緑谷の手を引きながら飛翔する。

現実の世界ならあまりのスピードに、肉体が千切れているかもしれない。

どれくらい距離を移動したのだろうか。

彼女と緑谷は空中から地面へと降り立った。

その辺りは先ほどまでとは、空気が違うような感覚が緑谷にはした。

「ハハハハハ」

「ここはオールマイトの電脳。オールマイトの頭の中と言っても良いわね。人間の思考も、脳の中で起きる電気的な反応に過ぎない。

私はアズライト。互いを理解し合うための個性。

オールマイトに私はインストールされてないから、彼からは私達を認識できないけど。」

でも私達から、彼の記憶を見るくらいは何の問題も無いわ」

「まって人の記憶を勝手に覗くなんてそんなの許されるわけ……」

緑谷は逡巡した声を上げるが彼女は取り合わない。

「あなたは知るべきよ。オールマイトが命令で過去に行った行為を。」

疑問に思わなかった？

「青石ヒカル」がオールマイトの事をあからさまに嫌っている姿を」

「戦闘訓練の時……確かに何か変だとは思ったけど」

「その原因を見ましよう。私はもう何度見たか忘れてしまう程見た記憶よ。」

心しておきなさい。緑谷君。

人間は大義のためなら、どんなに残酷な事だって出来てしまう生き物なのだから。

それはオールマイトでも変わらない。

人間はあなたが信じているほど強くはないの」

アズライトが手を前に振りかざす。

緑谷と少女の景色が一変する。

どこかの建物の中に二人は立っていた。

そこは雄英高校地下に建設されているアーコロジーの内部。

その訓練施設だった。

その場に居るのは緑谷とアズライト以外には三人。

法月将臣。オールマイト。そしてまだ幼い青石ヒカルの姿だ。

そして緑谷は見た。命令のままにオールマイトが少女に行っていく惨劇を。

少女の悲鳴を聞いた。流れる血をそして再生される体。

そこに居たのはナンバーワンヒーローのオールマイトでは無かった。

「嘘だ……嘘だ！」

「受け入れなさい、これが世間には知られていないオールマイトの過去。

彼の最も忌まわしい記憶よ」

「嘘だ！」

緑谷と少女の悲鳴が電脳空間に響く。

それは誰にも聞こえることは無い。

だがはつきりと緑谷の中には刻まれていった。

緑谷は何も出来ずその記憶を眺める。

その目に映るのは“平和の象徴”ではない。

社会の理不尽と権力に屈して暴力を振るう一人の敵ガイランの姿だった。

## 第14話

学校生活の三日目が始まった。

相澤は朝のホームルームで教室を見渡した。

全員揃っているようだ。みんな揃って酷い顔つきをしている。

ろくに眠っていないだろうと一目で分かった。

相澤は切り出した。

「急な話だが、今日から留学生が来ることになった」

「[……]」

普通はここで盛り上がるなり、驚くほどの反応が返ってくるだろう。

だがクラスの反応は沈黙。

あれだけ元気が溢れていた1-Aは、昨日までとはまるで別のクラスのように。

登校してきたのは良いがまるで覇気がない。

そのままではいずれ潰れるだろうと思うが、そうはならない。

その理由を相澤は知っていたが今は言わない。

「入れ」

「失礼します」

相澤が声を掛けると教室のドアが開いて、セルリアが入ってくる。

教室は彼女の姿に感嘆する声で溢れた。

「綺麗……」

彼女の金の髪に緑の眼。整った顔。

見た目だけの勝負なら青石ヒカルも負けていないだろう。

だが彼女からは青石ヒカルのような残念感は全く漂ってこない。

青の少女と違い彼女は気品を備えていた。

青石ヒカルが彼女に手を振って、セルリアがそれにウイंकで応えた。

セルリアは教卓の前で一礼して口を開いた。

「私はセルリア・セレスタイト。この度留学生としてお世話になります」

「日本語ペラペラや！」

麗日お茶子が声を上げる。

「私は高等尋問官ですから同盟国の日本語は話せて当然です。」

……あ、あれ皆さん？」

高等尋問官という単語が出た瞬間、上がりかけた雰囲気は底冷えする。

昨日の法月で高等尋問官というものに対して恐怖を覚えているのだ。



「高等尋問官というのは法月だけなんじゃ!？」

緑谷出久が声を上げる。

その質問にセルリアは答えた。

「もちろん「日本の」高等尋問官は法月将臣だけね。

でもこの制度は何も日本だけの物じゃない。

かつて世界中で採用されていたの。

今でも採用している国の数こそ減ったけれどね。

そして私はアメリカの高等尋問官よ」

「じゃあ法月のような事は出来ないんですね」

緑谷の言葉にI—Aは心を撫でおろす。

彼女は「アメリカ」の高等尋問官だと言ったから当然の反応だろう。

だが

「えっ出来るわよ」

彼女の言葉で希望は打ち砕かれる。

「え!？」

「だって日本とアメリカは同盟国だもの。」

互いの国で互いの高等尋問官は権力を行使できるわ。

つまり法月はアメリカで高等尋問官として権力を行使できる。逆に私も日本で高等尋問官として活動できるのよ」

「……」

「あつ待つて待つて！私はいたつて常識の範囲内でやるわよ。」

法月のような人は、ほんの一部の人だけ。

……といつても信じてもらえないわよね」

「そりゃあ……なあ」

切島鋭児郎の言葉に、クラスの全員が首を縦に振る。

昨日まざまざと見せつけられたのだ。

高等尋問官の権力と恐ろしさを。

そう簡単に信じられるわけがない。

「だから私は信用してもらうための、実績を作ることにしたわ。

私の事を信用できるかどうかは言葉ではなく、行動で判断してもらいましょうか。

——入ってきていいわよ！」

セルリアが廊下の方に呼びかける。

すると

「ハハハハ！待ちくたびれちゃったよ！」

「!!?」

教室の扉がガラツと開く。

男は勢いよく入ってくる。

教卓の前にまで進み、くるくるとその場を回り、よく分からない決めポーズをビシツと決めた。

「キラキラが止められないよ☆」

「青山君!!?」

紛れもなくその姿は、昨日除籍処分になった青山あおやま優雅ゆうがだった。

………

………

…

時は少し遡り、前日の戦闘訓練後まで遡る。

青山優雅はゆっくり雄英高校敷地外へと歩いていった。

思い出しているのは先ほどの授業の風景。

憧れのヒーローになるその第一歩になるはずだった。

皆から注目され、敵を倒す輝かしい未来が待っていると思っていた。

なのに今のこの現実なんなのか。

青山は迂闊過ぎた自分を恨む。そして法月将臣を憎まずにはいられなかった。

——このマントヤバくない？

考えたらそんな言葉は、まずいという事は分かったはずなのに。

だが彼の浮かれた言動は、昨日の相澤先生の体力テストが関係している。

相澤先生は「合理的虚偽」と、のたまい結局除籍をしなかった。

脅すことはしても本当に除籍する事など無いのだと彼は考えたのだ。

常識的に考えて。

だがその考えが致命的な過ちに気付いた時にはすでに手遅れ。

現に青山はこうやって除籍され、雄英高校を去らなければならなくなっている。

そして

——青山君、けが無い？

青山を銃弾から庇い助けてくれた青石ヒカル。

彼女に青山は何も言う事が出来なかった。たった一言のお礼の言葉すら。

あの時にはあまりにも衝撃的過ぎて言葉が出てこなかった。

だけどその事があまりにも情けないと思え涙が再び込み上げてくる。

もう目の目に雄英高校の門が迫っている。

この遅々とした歩みも現実を受け入れたくない心境の表れか。

悪あがきでもいい、出来るだけ長くここに居たいと青山は思う。

そしてもう少しでゲートをくぐり終え敷地の外に出るその瞬間

「お待ちください」

後ろから声を掛けられた。

踏み出しかけていた足が止まる。青山は振り向いた。

そこに居たのはメイド服の女性。

先ほどまでは影も形もなく辺りには青山しか居なかつた筈だ。

こんな綺麗な人が居るのに気づかないなんて、余程参っているのだと青山は思った。

「青山優雅様でいらつしやいますね」

「……そうだけど僕に何の用かな？僕はもう雄英の生徒じゃ」

「その事に関して時間を頂けますか」

「……」

「申し遅れました。私はシアンと申します。私について下されば分かります。

あなたと話をしたい方がいます」

青山はその女性について行くことにした。

来っていた道を戻り雄英高校の敷地へと歩みを進める。

だんだんと人気のないところにまで青山は案内されていた。

「こんな僕に話……ハハよつぽど暇なのかな？」

「旦那様は常日頃忙しくなさっておいでです。」

くれぐれも無礼はせぬよう……失礼」

「えっ目隠し」

唐突に青山はシアンに目隠しを巻かれてしまう。

目隠しされる時、彼女の胸が青山の背にあたつて彼は非常にドキドキした。

「ここから先は機密情報となります故」

「でも何も見えないよ☆！」

「私が手を引くので問題ありません」

暗闇の中で青山の右手が温かい感触で包まれる。

手をゆつくりと引かれながら青山は彼女について歩き出した。

(や、柔らかい……)

「何か言いましたか」

「い、いや!?何でもないさ!ハハハハ!」

彼女が冷たい目で見ていることを、見えていないのに青山は感じた。

やがて地面の感触が変わって建物の床になる。

外ではなく明らかに建物の内部にまで案内されている。だが生徒たちの声などは一切聞こえず静寂そのものだ。

校舎の中ではないのだろう。

そして下へ下へ向かう感覚がした。エレベーターに乗せられたと理解する。

それからしばらく歩いて青山はどこかの部屋に入れられたのが分かった。

そこでようやく目隠しが外される。

壁も床も天井も真っ白な部屋だった。ちょうど教室と同じくらいの広さだそうか。

シアンに促され青山は椅子に座る。

彼女は入り口付近で立ったまま待機していた。

ほとんど物がない。幾つかの机と椅子が有り、目の前の机の上に大型のモニターが有るくらいだ。

椅子に腰かけてそんな部屋を青山は眺めていた。

するといきなり目の前のモニターに何かが映された。

画面の中に居るのは、中年くらいの一人の男だった。

「君が青山優雅君か」

「……」

「旦那様。いきなりの事で彼は混乱しているものと思われれます」

シアンが青山の傍にまで来て返事を返す。

青山はようやくそれがテレビ電話だと理解した。

「はは、無理もないか。少年、私はベレンス・セレスタイト。

アメリカの高等尋問官だ。君が除籍になってしまった経緯をシアンから報告を受けてね。

簡潔に言うとは君の除籍処分についての話だ。

私はこの件には直接関与はしない、君の件は娘に一任することにしてある。

だが君を一目見ておきたいと思つてね」

「……はこ」

画面の中の男の言葉にどう返していいものか青山には分からない。

思い出すだけで情けなくなつて、青山はうつむいてしまった。

「辛いだろう。当然の事だ。いきなり撃たれたのだ。

だが君はこうやって生きている。

青山優雅君、君にはまだ選択肢が残されている。

何を選ぶのかは君次第だ」

その男の言葉も今の青山に届く言葉は多くない。

彼がアメリカの高等尋問官だという事すらも青山は聞いていなかった。



「セルリア後は任せただぞ」

「はい、お父様」

画面にもう一つのどこかの映像が割り込んでくる。

ベレンスの映像の方は切れて、モニターに映るのは少女の方だけになる。どこかの列車だろうか。映像の中で窓の外を景色が流れている。

その映像の主は金髪の少女。

少女が画面の中から話しかけてくる。

「シアン久しぶりね、元気にしてた？」

「ありがとうございますお嬢様。何も変わりありません。

……と言ってもこの私は分身ですが」

「そっか、本体のシアンによろしくね」

分身という言葉に少しだけ青山は反応する。

先ほど手を握られたりした感触は紛れもなく本物だったが……。

“分身”という個性なのかと青山は思った。

彼女の個性、実際は“忍者”で有るのだが。

初めまして青山優雅君。

私はセルリア、セルリア・セレスタイトよ。

突然の話で悪いんだけど、あなた私の部下にならない？」

「……へ？」

青山の喉から間拔けな声が漏れた。

セルリアは続けて言う。

「まあ戸惑うのは無理ないわね。

順に話すとするわ。まず私は高等尋問官なの。

君を除籍処分にした法月将臣、彼と同じね」

高等尋問官という言葉に青山は体がビクンとなった。

今日の出来事で無意識のうちに恐怖が刷り込まれているのかもしれない。

少女は「大丈夫？」と声を掛けてくるが青山は何も返さない。

「そして高等尋問官という存在は、何かしらの私兵を所持しているものなの。

その方が何かと便利だから。私もそろそろ一人ぐらい欲しいなって思っていてね。

君はその第一号という訳。別にただで私兵になればと言わないわ」

彼女が迫力のある笑顔を浮かべた。

ごくりと青山は唾を飲み込んだ。

映像越しに彼女のただものではない雰囲気伝わってくる。

「今日の除籍処分は私の権限で取り消す。

あなたは雄英高校にまた戻れるという事。  
存分に学業に励むといいわ。

私としても、部下には学んでもらわないと困るしね。  
その代わり、こき使わせてもらおう事にはなるけど、  
どうする?」

「も、戻れるのかい!?!雄英に!?!」

「ええ、と言つても今日中は流石に無理だけど。」

明日から貴方は雄英の1—Aに戻れるわ」

「本当の本当に!?!」

「私を誰だと思つているの?高等尋問官よ。」

除籍を取り消すぐらい簡単な事よ」

「やつ……やつたー!うひよおおお!」

突然降つてきた救いの手に青山は狂喜乱舞する。

喜びが強すぎて顔がかなり怖い感じになっていた。

シアンは青山が落ち着くのを待った。

「君の個性”ネビルレーザー”。とても興味深いわ。」

確かに色々な欠点は有るけど素敵な個性だと思う。

私ねエンジニアでもあるの。ヒーローコスチュームに関してそこそこの腕を持っているって

自覚しているわ。私が作ったコスチュームの実験だ……試験をお願いしたいのよ」  
「実験台って今言わなかったかい」

「言っていないわ！空耳よ！」

「ごほん、とセルリアは咳払いする。

「後アズ……じゃなかった。青石ヒカルにちゃんとお礼を言う事！いい！」

「わ、分かった。僕もね、お礼を言えないままでもいいなんて思っていないよ」

「分かっているならよろしい！じゃ、午後にはそっち着く予定だからよろしく。

さっそく用意していたラボで色々しましょうか。

ふふ……ふふふふ。ストライク自由ナンダムちゃん……。

とうとう秘蔵のあの子がお披露目かあ……。

ふふふふ……あははははははは!!」

怪しげな高笑いを残しながら電話と映像が消えた。

プツンと回線が切られてモニターに何も映らなくなる。

部屋の中に再び静寂が戻り、青山とシアンだけになる。

シアンが青山に話しかけてきた。

「青山様……」

「シアンさん」

「ご愁傷様です」

沈痛そうな顔でシアンが言う。

「ハハハハ！真面目そうな貴方でも冗談を言うんですね☆」

「よりもよつてお嬢様に目を付けられるとは……」。

残念ながら、除籍の方がまだ楽だったかもしれない」

「……」

シアンの憐みのこもった表情が、それが真実であると何よりも雄弁に語っていた。

青山は今更になって冷や汗が止まらなくなる。

一体これからどんな日々が待ち受けているというのか。

彼女が懐から何かを取り出す。

「青山様、これを」

シアンが青山に小さめの何かを握らせた。

「銃弾……」

「今日、青山様の命を奪うはずだったものです」。

あなたの命は決してあなただけの物ではありません。

今日あなたを救った青石ヒカルはもちろんのこと、他にもたくさんの人に支えられあなたという人はここに居る事が出来るのです。

どうかその事をお忘れなきよう」

鈍色の銃弾を見ると明確にあの情景が蘇る。

青山は浮かれていた気持ちをぎゅつと引き締めた。

——お前の本質は、ただ目立ちたいだけの人間に過ぎない。

法月の言葉がふと思い出される。

確かに彼に言っていることは的を射ていた。

青山はただ目立つ存在なりたかった。

その事に一生懸命過ぎて本当の気持ちを、いつの間にか忘れてしまったのかも知れない。

きっと青山の最初の気持ちは単純だった。

誰かのためになりたかった。そんな存在になりたいと願った。

だからヒーローになりたいと夢を見た。

それが青山優雅という人間の原典だったのだ。

だから必死になって努力をする事が出来て、雄英のヒーロー科という難関に滑り込む

ことが出来た。

ならば銃弾は戒めとして持つておこう。

決して今の気持ちをお忘れなように。

忘れかけてしまつても、今の気持ちを再び思い出せるように。

何より青石ヒカルに受けた恩をお忘れぬように。

「いい表情になりましたね」

シアンがそつと微笑みかけた。

青山は笑顔でそれに応える。

それは先ほどまでの笑顔とはまるで違い、芯の通つた信念を感じる。

紛れもなくその表情はヒーローと呼ぶに相応しかつた。

………

………

………

「なんで!? 除籍になつたはずじゃ……」

「彼の除籍処分は、高等尋問官権限で取り消されました。

これで少しは、私がつまな高等尋問官だと理解して頂けたでしょうか?」

セルリアはにつこりと笑顔を浮かべた。

「信じる! めつちや信じる!」

そんな時廊下からものすごい足音が近づいてきた。

まるでゾウの行進のようだ。その足音は教室の前で止まり

ドオン！

扉が災害のように開いた。そこに立っているのは法月将臣。

彼は般若のような形相をしている。

空気そのものが怒りをまとつていた。

あおやま ゆうが  
「青山優雅……なぜ貴様がここに居る！」

私が直々に除籍処分にしたのだ。今すぐ……」

「その命令なら無効になりました。法月将臣」

セルリアがつかつかと法月の方に歩み寄る。

まるで生徒たちを、法月から守る様に立ちはだかった。

彼女に顔を向ける法月。

「セルリア・セレスタイト……。ベレンスの差し金か」

「貴方はやりすぎたのよ法月将臣。これから先私が居る限り、あんな理不尽な命令が

通ることはあり得ません」

あおやま ゆうが  
「青山優雅の除籍については適切な判断だった。

貴様が口を挟む事ではない！」



法月が杖をダン！と床に突き付ける。

クラスの何人かが悲鳴を上げるが、セルリアは動じることは無い。

「いいえ挟む事ね。……記録を確認しました。

確かに青山あおやま優雅ゆうがは不適切な発言をしたでしょう。

言動や性格、個性についても確かに貴方の言った通りでしょう」

「ちよつと!?!」

青山が抗議の声を上げるが誰も反応しない。

法月が青山をぎろりと睨み彼は悲鳴を上げた。

「ならば」

「ええ」

法月の言葉をセルリアが冴えきる。

「今の時点ではそうでしょう。法月将臣。

けれど人は成長するものです。日々色々な影響を受けて変わっていきます。

今は彼は未熟で、何も知らない子供です。

だからこそ色々な事を知る必要がある。経験を積む必要がある。

そのために、この学び舎が有るのです。

人は間違える生き物です。本当に必要なのは、間違えたときに罰する事ではありません

ん。

次は間違えないように、教え支え導いていく。

傍に寄り添って、心の支えとなる。人々と共にある。

それが本来の、高等尋問官のあるべき姿です。

コスチュームを着て、憧れのヒーローになれると

少し浮かれてしまった程度の少年に銃を向け、あまつさえ発砲するなど……！

言語道断です！恥を知りなさい!!!」

セルリアの怒声が教室を揺らす。

彼女の怒りと気迫はそれが向けられていない——A全員すら震えがくるほどだった。

教室の中が静まり返る。

ごくりと唾を飲み込む音が聞こえた。

セルリアと法月の視線がぶつかり合う。

最高権力者同士その迫力はまるで、最悪の敵ガイランとヒーローが対峙しているかのよう

だった。

法月が口を開く。

「……小娘が」

「何か言ったらどうかしら？老害」

語尾を強調してセルリアは法月を挑発する。

「……今は引いてやろう。今はな」

「ずっと出てこなくても良いわよ」

法月は何も返さずに教室を出ていった。

扉が轟音と共に閉められる。

それは法月の苛立ちを端的に表現していて、彼女の完全な勝利を意味していた。

再び教室が湧き上がる。空気がまるで沸騰しているみたいだった。

そんな中、青山が、青石ヒカルに近づく。

そして深々と頭を下げた。

「ありがとう」

「青山君……?」

「君があの時助けてくれなかったら、僕は死んでいた。

ここに立っていることすら出来なかった。

ずっとあの後、後悔してたんだ。

僕は、命を救われた……なのにお礼の一つも君に言えなかった。

ここに僕がこうして居られるのは君のおかげさ」

「そんな！あの時ボクは除籍を止められなくて……だから！」

「でもその時、私は青山君を助けられなかったわ」

セルリアアが割り込む。

「結局除籍処分を解除できたのは、当たり前だけど青山君が生きていたから。

確かにヒカル。あなただけでは除籍は撤回できなかった。

でもそれは私だつて同じことよ。

ヒカルが助けなかったら青山君は死んでいて、除籍を撤回なんて不可能になつてたわ」

「セルリアア……」

「たとえ一人なら出来なくても、二人でなら出来ることもある。

ヒカルが法月に立ち向かい繋いだ命が有るから、私が助ける事が出来たのよ。だからヒカル、誇つていいのよ。あなたが助けた命はちゃんと繋がるの。

そしていつの日か。助けられた青山君がヒーローになり、誰かを助けたら？

それは貴方が助けた事にも、なるんじゃないかしら？」

「あ……ああ……」

セルリアアの言葉に青の少女の胸が詰まる。

息も出来ないような、だが不快ではない何かがこみあげてくる。

青石ヒカルの目の前の景色が滲む。

「人と人の繋がりが見知らぬ人にまで届いて、誰かのためになる事が出来る」  
「う…………あ…………」

青の少女の表情が崩れる。

瞳から涙がぼろぼろと溢れて止まらなくなる。

少女の涙で歪んだ景色のセルリアが満面の笑顔になった。

「それってとても素敵な事じゃないかしら」

青の少女は声を上げて泣いた。

セルリアの胸に飛び込んでぐしやぐしやに顔を歪ませた。

クラス中の人たちが群がり祝福する。

「青山君…………ありがとう…………」

「何で君がお礼なんて言うんだい」

「分からない…………分からないよ！」

少女は泣きながら笑顔になる。ぐしやぐしやの笑顔を浮かべる。

——人の為に、誰かの為に。

少女のお人よし過ぎる、そしてささやかな願いはここに叶っていた。

それを夢見たのは、何も青の少女だけではない。

人は自分の事が一番大事な生き物だ。

だが、同時に誰かを思つて生きる事も出来る存在でもある。誰かを助けたい、誰かのためになりたい。

綺麗ごとには過ぎないその願いは確かに人を動かした。

あの『ヘドロ事件』の時の緑谷出久のように。

そして、そんな存在に憧れて人は目指すのだろう。

ヒーローという存在を。

ならばヒーローという存在は決して特別なものではない。

資格などの問題ではない。

誰かのために手を差し伸べたその瞬間、人はヒーローになるのだ。

差し伸べられたその手は、次の誰かにまた繋がつて、それが巡り巡つて世界に広がつていく。

それはやがて理不尽に抗うための力になる。

青の少女が笑顔になる。青山も笑顔になった。

紛れもなく青の少女は、青山にとってヒーローで。

同時に青山は、少女にとってのヒーローだった。

## 第15話

青石ヒカルが泣き出して数分後、ようやく教室は落ち着きを取り戻した。すっかり明るくなった——Aを相澤が見渡した。

そして

「学級委員長を決めてもらおう」

「学校つぼいの来た——」

、学級委員長を決めるらしい。

むしろ学校生活三日目になって長を決めるのは遅いのではないか、と青の少女は思った。

だが学校生活がこれが初めてなのでよく分からないのだが。

そもそも学級委員長が何なのかも青石ヒカルは理解していなかった。

クラス中が一斉に手を挙げて自分がやりたいと申し出る。

「静粛にしまえ——」

そんなクラスに飯田君が声を上げる。

彼の声に皆黙った。

「……「やりたい者」がやれるモノではないだろう！

周囲からの信頼が有ってこそ務まる聖務……！」

民主主義に則りリーダーを決めるといふなら……

これは投票で決めるべき議案！」

（おお、飯田君カッコイイ……でも）

そして飯田は投票で決めるべきだと主張する。

良いことを言っているが、彼の手がそびえ立っていたのが実に残念だと青石ヒカルは思う。

事実「そびえ立ってんじやねーか！」と突っ込みを入れられていた。

「そんなん皆自分に入れらあ！」

切島鋭児郎のその言葉に飯田は反論した。

「だからこそ、ここで複数票を獲った者こそが

真にふさわしい人間という事にならないか!？」

（へー……何だかよく分かんないけど凄いやー！）

結果として飯田君の言う通り投票で学級委員長を決めることになった。

ちなみにセルリアは最初から辞退したので投票先には選べない。



今日クラスに入ったばかりの人が委員長なんて確かにそれは変だろう。

投票用紙が皆の机に配られる。青の少女が投票する先は轟焦凍と決めている。理由は単純で一番の友達だからだ。

迷うことなく轟焦凍の名前を書こうとする青石ヒカル。

だが

(あれ? 漢字が分からないや。どうしよう……う?)

オロオロしている彼女を見かねたのか轟が声を掛けてきた。

「……どうした?」

「えとね、轟君の名前書きたいんだけど漢字が分からなくて」

「……」

「教えてくれない?」

首をコトンと傾けジツと轟を見つめる青石ヒカル。

あざといその仕草は決して狙ってやっっている訳では無い。

そして自分の名前の漢字を教える轟焦凍を、峰田実みねた みのるが人でも殺しそうな目で睨んでいる。

いる。

おそらく「リア充爆発しろ」と思っているのだろう。

そして轟に教えられた漢字を一生懸命に書いた青の少女。

「えへへー」

だらしない表情で彼女はそれを見つめる。

幸せそうな彼女に話しかけるのが轟には躊躇われたのか、そのまま席に戻っていた。

青の少女はまだ自分の書いたそれを見つめている。

だがその投票用紙をじつと見ているうちに、悪だくみが頭に思い浮かんだ。

（そーだ！ 皆が書いた名前を轟君に書き換えちゃえー！）

既に書き終えている人の名前を個性を使って、轟焦凍に変更しようとした。

（……あれ？）

だが肝心の個性が発動しない。

「おい……青石ヒカル」

声に振り向くと相澤先生が「抹消」の個性を使いながら少女を睨みつけている。

「ななな何？ うわあ!?! なんでボク捕まえられてるの!?! 相澤さん!」

捕縛武器にからめとられる青石ヒカル。

学校生活でもう何度目になるか分からない。

だがその光景にクラスの皆は誰一人反応しない。

もう慣れっこになっているのだ。

唯一セルリアだけが「うわあ」と小さく声を上げて見ている。

「先生だ」

「相澤先生！」

「お前個性使って不正しようとしただろ」

「そもそも、そんな事ないよ!? ボクいい子だもん！」

「嘘つけ。お前はすぐに顔に出る。おおかた他の奴の投票先を轟に変えようとか考えてたんだろ」

「全部バレてる!?!」

ちらとその声に轟が反応する。

青の少女が希望を込めた視線で轟を見つめるが、すぐに視線が外された。

彼女の表情がしゅんとなった。

そもそも名前の漢字くらい個性を使えば一瞬で分かったはずだ。

そこで使おうと考えないあたり彼女の思考の残念さが伺えた。

まあ使ってはいけないと釘を刺されてはいるのだが。

相澤先生の活躍により不正はなく集計が終わる。

結果として委員長が緑谷出久。副委員長が八百万百になった。

その結果に相変わらず相澤に捕縛されている、青の少女はがつくりうなだれる。

「個性使わせるんじゃないよ。俺はドライアイなんだ」

「ううー相澤さんの馬鹿！」

「……（鬱陶しいな）」

「無視された!?! 酷いや!」

彼女は相変わらず騒がしいが、それが許されているのも今の間だけだ。

こうしてクラスに参加する未来が来るとは、相澤は想像だにしてなかった。

昨日の根津校長から聞いた話をまとめると、彼女が地上に出る事だ許されているのは慣らし運転のためだ。

決して可哀そうだから地上に出してあげようという事ではない。

スターレインを出した時だけ外に出しても、失敗する可能性が高いと政府は踏んでいるのだ。

「……相澤さん?」

青石ヒカルが相澤を覗き込んでいる。

彼女の眼に何もかも見透かされてしまいそうで、目をそらした。

彼女は何かに納得したかのように小さく頷く。

朝の時間は何処までも平和に穏やかに過ぎていった。

……

……  
……

雄英高校では現在一時間目の授業が実施されている。

だが緑谷出久と轟焦凍は教室に居なかった。

高等尋問官のセルリアに呼び出されて向かった先は、校長室の横。

法月将臣の執務室だ。

授業は公欠扱いになるらしい。

緑谷の隣で轟が何も言わずに歩いている。

二人の間に会話はない。

緑谷のアズライトも今は表に出てきていなかった。

朝からずっと一度も見かけていない。

緑谷は学校に入った瞬間から妙な感覚を覚えていた。

学校全体が何やら特殊な何かで覆われている気がずつとしているのだ。

空気そのものが重たいような感覚。体も何だかだるいし思うようにない。

ゲートを潜ろうとした瞬間に何やら電流が走るような感覚すらした。

(あれは一体……いや今もずつと……これは)

緑谷以外にその事に気付いている人はいない。

きつと体調が悪いのだろうと緑谷は考えた。

緑谷は法月に言われていたことを思い出す。

三日やろう。それまでに答えを出して、再び来るがいい。

——敵（ヴィラン）とはいったい何かをな。

その根本を押さえていない者が、ヒーローになるから社会は墮落する。

あの言葉を投げかけられてのは一昨日の事。

その直後に行った共同墓地。

昨日オールマイトとシアンに連れられ貧民街。

緑谷の中の常識が段々と壊れていくのを感じる。

そして緑谷に宿ったアズライトの個性。

意思のある個性の彼女に見せられた過去のオールマイトの姿。

命令のままに少女を痛めつけるその姿ははつきりと覚えている。

緑谷とて理解はしていた。

法月将臣は高等尋問官。

彼の命令は絶対でヒーローの彼は従わなければならない。

あくまで彼は「法」を守っていたのだ。

だと言うのに……オールマイトのあの姿はまさしく敵ヴィランだった。

——容易にヒーローから敵ヴァイランに落ちぶれる。

そして平和の象徴とやらに、継らなければならなくなるのだ  
(もしかしたら……)

緑谷が何かにたどり着けそうだという時。

いつの間にか執務室の前に居た。

轟が扉をノックする。返事が返ってきた。

セルリアの声だ。入っていいとの言葉に二人は扉を開けて入室する。

部屋の中に居たのは二人。呼び出したセルリアと

「ほ……法月!?……さん」

法月将臣だった。緑谷の声に法月が視線を向ける。

緑谷は身を固くするがそれ以上の事は何も起きなかった。

隣の轟をちらと見ると緊張した顔をしている。

一体これから何を言われるのか……。

法月が話し出した。

「時に緑谷出久よ。先日私が問いかけた事を忘れてはいまいな?」

「敵ヴァイランとは何か……ですか」

「はあ!? 法月、あなた相変わらずそんな事してる訳?」

「無論だ。そんな事も考えない者に真のヒーローは務まらない。

ましてや継承者だ。

思考停止で敵を捕らえるだけの人間をヒーローとは呼ばん」

「まあそれはそうだけど」

セルリアが疑問の声を上げ、それに法月が応える。

法月が軽く杖を床で鳴らした。

「緑谷、現時点で構わん。」

少しは現実を見せられ心境に変化が有っただろう」

「もしかして昨日の貧民街の任務は」

「あれは私がシアンに到達した任務に過ぎん。」

だがそれにオールマイトが協力し、緑谷も連れていくであろうことは容易に推測出来た。

問おう緑谷出久。ワイラン 敵とは何だ？」

緑谷は法月と視線を合わせて見据えた。

緑谷の脳裏に浮かぶのは十年前のオールマイトの姿。

ヒーローの筈の彼が、青の少女に行った行動がどうしても忘れられない。

あくまで彼は命令に従っただけ、法に従っただけだ。



なのにそれはどう見ても「悪」としか思えなかった。

そして「青の少女」が閉じ込められている経緯。

彼女は危険な存在だから閉じ込められている。

だが果たして彼女を監禁している国のその行為は紛れもなく「悪」ではないのか。

そして先日<sup>ツヴァイン</sup>の元敵<sup>ツヴァイン</sup>のシアン。

彼女は元敵<sup>ツヴァイン</sup>である。だが孤児院の子供たちから慕われていた。

まだまだ緑谷の知らない事が世の中には溢れている。

彼には簡単に答えられそうには無かった。

「……今の僕には……分かりません。まだ僕には知らない事が多すぎて、答えが出せそうにありません」

「分からないと、それが答えか？」

「それを……それは、これから僕が知らなければならぬ事です。だから今は……」

「……まあ良い。今はそれで良からう」

法月がため息を吐きながら呟いた。

ほんの一瞬だけ、法月が優しい気な目つきになった気が緑谷にはした。

だがあまりにも短い時間でそれは錯覚ではないかと思えた。

「だが緑谷、考えることを止めない事だ。」

人は何も考えなくなったその瞬間から何かの奴隷へと成り下がる。それはヒーローとして例外ではない」

緑谷は思った。ひよっとしたら法月は、自分に考えさせることが目的だったのではないかと。

思考停止になって、ただヒーローを討つだけの人間になるなど言っているのではないか。

——ヒーローは敵を討つことしか考えていない。でも、果たしてそれだけで良いのかしら？

昨日の晩のアズライトの言葉が頭に浮かぶ。

もしかしたら彼女と法月は同じことを言っているのかも知れない。

緑谷の伸びている背筋が更に真っ直ぐ伸びた。

「通達する。緑谷出久及び轟焦凍。」

両名は本日より「青石ヒカル」の監視に入れ」

「誠に……誠に遺憾ながら私達は法月と協力していかないといけないの。」

ええ、本当に遺憾ながらね」

法月の言葉に続いてセルリアが口を開いた。

心底嫌そうな顔でセルリアは法月を半目で見ている。

「任務の詳細についてこれから話します。先に言っておくけどこれは人類の存亡がかかった任務よ。」

生半可な気持ちで挑むことは許されないわ」

「辞退するなんて事は」

緑谷が弱々しく口を開くが

「辞退なんて出来ないし、させないわよ。万が一にも失敗は許されない。」

あなた達にも最大限に協力してもらおう必要があるわ」

セルリアの後に法月が話し始める。

「轟焦凍よ。お前は昨日エンデヴァーから聞かされた筈だ。」

緑谷もオールマイトから説明されていると思うが。

“5thスターレイン”ファイフスが間近に迫っている。

よって……」

「えっ!? 待つてください、僕はそんな事聞いてません!」

緑谷は初めて聞いたその単語に驚きを隠せない。

“5thスターレイン”ファイフスなど聞いたことも無かった。

「何?……聞いていないのか」

「はい」

執務室の中に何やら嫌な空気が一瞬漂う。

横の轟を見ると彼は知っている様子だった。

部屋に居る四人の中で知らないのは緑谷出久だけだった。

「……多分まだ聞かせるには早いと彼は判断していたのでしよう。

最重要機密ですし、それは仕方ないわね」

「……その“5th<sup>フェイス</sup>スターレイン”って一体？」

「轟焦凍は聞いたのだな？」

法月が轟に聞く。

「はい、昨日父から」

「指示通りだな。緑谷に教えてやれ。“スターレイン”の事を」

轟が緑谷に向き直る。

考えたら緑谷と轟の間に接点は今までなかった。

緑谷はこんな形で最初に言葉を交わすとは思いもしなかった。

轟の口が開く。

「俺も昨日聞いたばかりで、はっきり理解している訳じゃねえ。

……約一か月後に起こるらしい隕石衝突らしい。キロ単位の流星群が五回も地球に衝突すると親父は言っていた。確か最大直径が十キロ位だったか」

「えっ……隕石衝突……？ キロ単位の……そんなのどうやって」

「だからこそその彼女よ。百年以上前から予見されていたその災害に対抗するべく彼女は生まれた。」

もちろん彼女の事も”スターレイン”も極秘事項よ。

話せばどうなるか分かっているわね？」

セルリアの言葉に緑谷は首を縦に振り、轟は「ああ」と返事をする。

「これから「青石ヒカル」の個性について話を聞かせよう。」

そしてその上で何故お前たちが監視の任務につくのか。

それも説明する」

………

………

………

「まず彼女の個性の説明からね。青石ヒカルの個性はAアzズuウrラiイtトe。

彼女がやろうと思ったことは現実にできる。現実を彼女の電脳イメーに同化する個性。

つまり彼女のイメージを現実に出来る。私が知る限り最強最悪の個性よ」

「イメージを現実に!?!」

「そうよ」

「つまり何でも出来る……って事か？」

轟の声にセルリアが同意する。

「制約があるけど、概ねその認識で間違っていない。

対抗手段も無い訳じゃないわ。私や法月はそのために居る。

ただしこの力は元々想定されていた訳じゃない。

Azurite<sup>アズライト</sup>の本来の力は“**電脳感覚**”だとされていた。

それは人と人が繋がるために。あらゆる電子機器を自分の感覚で使えるようになる  
力」

セルリアがジツと二人を見据えた。

「——そもそも“個性”って何だと思う？」

「……異能の力？」

緑谷が少し考えて答える。

「うーん、まあ世間一般的にはそんな認識かしらね。個性とはね“ソフトウェア”なの。  
人間の体にインストールされて稼働するプログラム“バイオウエア”。

それが個性と呼ばれているものの正体なのよ」

セルリアの言葉に緑谷と轟は考え込んだ。

今までろくに正体も分かっていなかった個性の正体が分かりつつある事に驚いた。

「普通の人が宿す個性は自然界で発生したもの。

それらは人から人に伝染し、親から子へと受け継がれていく。

互いに混ざり変異し進化する。

そしてそれはやがて致命的な破局をもたらすわ。

その事については、また今度話すけど今は関係ないから置いておくわね」

法月が続きを説明しだす。

「約三百年ほど前の話だ。その頃にある研究が行われていた。

研究の内容は、人の体に人工のソフトのインストール。

目的は人類をお互いに分かり合える存在にする事だった。

人と人とを世界中に張り巡らされた電脳で結ぶ。

脳と脳で直接やり取りする事で距離も時間も言葉も関係なく、あらゆる障害を乗り越

えて

人は意識を交わすことが可能になる。

そのために二つの“バイオウェア”……個性が開発された。

一つはAzurite<sup>アズライト</sup>。もう一つはReason<sup>リーズン</sup>」

緑谷は共同墓地で彼女に出会った日を思い出す。

——私達はソフトウェア。“プログラム”で有り同時に“個性”でもある。

彼女は自らの事を個性でソフトウェアで有ると言っていた。

彼女の言っていたことに嘘はないだろう。

法月の口からはつきりと今説明された。

アズライトとは人に作られた個性だと。

「話を続けるわ。この二つのソフトは対となっているの。

A<sup>ア</sup>z<sup>ズ</sup>u<sup>ウ</sup>r<sup>ライ</sup>i<sup>ト</sup>eは世界を一つに繋げるものとすれば、

R<sup>リ</sup>e<sup>エ</sup>a<sup>ア</sup>s<sup>ズ</sup>o<sup>ン</sup>nはそれらを支配し秩序を与える存在。

当初の計画はA<sup>ア</sup>z<sup>ズ</sup>u<sup>ウ</sup>r<sup>ライ</sup>i<sup>ト</sup>eしか存在しなかった。

でも無秩序に世界中を繋いだとしても、混乱をもたらすことは予想できた。

だからA<sup>ア</sup>z<sup>ズ</sup>u<sup>ウ</sup>r<sup>ライ</sup>i<sup>ト</sup>eと、そのネットワーク全体をコントロール出来る存在が必要

だと判断された。

それがR<sup>リ</sup>e<sup>エ</sup>a<sup>ア</sup>s<sup>ズ</sup>o<sup>ン</sup>n。私と法月にインストールされている個性がそれよ」

「だが研究は過去に一度失敗した。世界に個性と呼ばれる存在が始めた。

元々A<sup>ア</sup>z<sup>ズ</sup>u<sup>ウ</sup>r<sup>ライ</sup>i<sup>ト</sup>eとは人類の規格が統一されている事を前提として開発されてい

た。

個性の出現により、「人」という規格が崩壊して、その前提条件が崩れてしまったのだ。

電子レンジに冷蔵庫のプログラムを入れても意味がないのと一緒だ。



「人」という規格が崩れた以上二つのバイオウエアに意味はなくなった。

そして研究は放棄され、そのまま歴史の陰に消えていくはずだった」

——個性という超常が世に出る前……人の体は「基本的には同じ」構造で出来ていたからね。

「人」という規格で扱えるインターフェイスと、フォーマット。

そしてインストール機構を用意してやればいい。

その筈だった……。

アズライトが言っていた言葉が、ここに来てようやく緑谷の中で意味を成し始める。

だがまずまず緑谷の中でアズライトの存在が分からなくなり始めた。

「だが個性の研究が進むにつれて判明してきたのだ。

個性とは以前研究されていたAzurite<sup>アズライト</sup>とReason<sup>リーゾン</sup>、”バイオウエア”その物であると。

つまりは人類は個性が世界に出現するより先に、個性というものを生み出しかけていたのだ。

そしてそんな中で”5<sup>th</sup>スターレイン<sup>ファイブス</sup>”の災害が予見された」

「世界各国の天文台のデータを収集。スーパーコンピューターのシミュレーションの結果

五回到渡る流星群の飛来が99%以上の可能性で起きる事が確定した。今も観測は続いていて、その計算通りに現状動いているわ。

このままいけば人類滅亡。運がよくて原始時代まで逆戻りね。

当然各国政府は最重要事項としてこの事を隠蔽。

どうしようもない自然災害を公表しても治安の悪化は目に見えていた。

ましてや当時は個性というものが出現し始めて、どこもかしこも荒れに荒れていたと聞いわ

結果として民間はおろか政府も宇宙開発に手が回らない結果になり、大幅に衰退する結果を招いた。

だから地球から避難しようという計画も出来ない。

技術の基礎が固まり切っていないから。

一説によれば“スターレイン”の襲来も、どこかの誰かの個性の仕業とされている。が証拠も何も無いから真偽のほどは分からない。

隕石衝突なんて誰にもどうしようもない。どうしようもない筈だった

「そこで打開策としてAzuriteを使う計画が提案された。

全人類とはいかずとも、数千数万単位の間人をアズライトによりリンクさせ、一つの巨大な

個性として運用する。そうする事で“スターレイン”の迎撃をしようというものだ」  
 「でもAzuriteには致命的な欠陥が存在するわ。

人にインストールしたが最後その人は死んでしまう。

そのバグの原因を研究者が探しているけど、いまだ不明。

でもアズライトの力が唯一の世界の希望。様々な人体実験が秘密裏に実施され

しまいにはその力を使える存在を最初から作る研究が始まった。

そして生まれたのが「青の少女」……青石ヒカルよ。彼女の持つて生まれた個性は“同化”。

あらゆるものを自らに同一化して取り込む個性よ。

彼女のその個性を使えばAzuriteをインストール出来ると研究者は考え、

そして事実上手くいったわ。

彼女は同化の個性を使用してAzuriteをその身に宿すことに成功した。

でも想定外の事も起きたの。彼女の“同化”とAzuriteが混ざり合って、

変異を起こした」

「変異ですか……」

緑谷の言葉にセルリアは「ええ」と返す。

「元々Azuriteとは“電脳感覚”。

電腦を介して人と人を繋げる為のその力は、あらゆる電子機器を自分の感覚で自在に操ることが可能。

「ただどあくまで電腦上でのこと。あくまで及ぼす範囲は、電腦空間と電子機器にとどまっている筈だった。」

「ただど彼女の個性は「現実」を「電腦空間」に同化する力まで手に入れてしまったのよ。」

「元々電腦空間で何でも出来る個性が、現実の空間にまで影響する個性へと変貌を遂げた」  
「つまり彼女の個性の全貌はこうよ。」

彼女の個性により現実には、彼女の内包する電腦空間に同化される。現実を同化して広がるうとする力を彼女は「青」と呼んでいるわ。

そしてその電腦空間上でハッキング、データの改ざんを行えば同化された現実に反映される。

「すなわち演算おもったことしたが現実になる。それが彼女の個性の正体よ」

話し終えた彼女は疲れた表情のため息をついた。

気付けば遠くで一時間目の授業の終了を告げるチャイムが鳴った。

彼らの話はまだ終わってはいなかった。

## 第16話

セルリアは緑谷と轟に青の少女の話をした。

戸惑いを隠せない二人の顔をセルリアは眺める。

どこかで授業終了のチャイムが鳴った。

彼女は思い出す。およそ七年前に彼女と出会った日。

セルリア・セレスタイトの原典<sup>オリジン</sup>を。

………

………

………

「あなたがアズライトね」

「えと、君は？」

必要最低限の物しかない真つ白な空間で二人の少女が出会った。

まだ幼い日のセルリアと、当時名前がない「青の少女」。

高等尋問官の父を持つセルリアは、その父親に連れられてきていた。

セルリアは若くして才能に溢れていた少女だった

政府が開発していた人工個性「Reason」の適正に恵まれた彼女は、無事にインストールが完了。

優秀な高等尋問官になる事を期待されていた。

弱点と言ったら彼女は生来「無個性」で有った事くらいか。

彼女の頭の中に次々と浮かんでくる独創的なアイデアに発明。

それらは幾つもの論文になり、世界全体のヒーローコスチュームのレベルを数段階引き上げる程だった。

彼女の人生は希望に満たされ、何も迷いなくそのまま真つすぐに進んでいくはずだった。

だが青の少女に会ってからセルリアの中の何かが変わった。

会うまでは「青の世界」を引き起こした責任をとことんまで追及してやるつもりでいた。

どんな最悪な人間の屑だろうかと思っていた。

けれどもそんな感情はなんて薄っぺらかったのかと、今になっては彼女はそう思っている。

世界を救うために作られた彼女。

今も続けられている訓練の域を超えた残酷な仕打ち。

地上に出されることは無く地下深くに住むことを強要され。

それでも、それらに負けることなく彼女は夢を継続していた。

——何処にでも行きたい、何処までも行きたい。

人の為に、誰かの為に。

世界の何処にでも、行きたい。

どんな人とでも、居られるように。

人が広く、生きて行く為に。

語る夢にセルリアの中の何かが動くのを感じた。

青の少女はどれほどの酷いことをされても、本気で人を憎み切る事は無かった。

世界の何処にも彼女の味方をする人は居ないのに。

青の少女は人の為に生きる事を夢見ていた。

何も映らない白の天井をじっと見つめ、その遙か向こうに広がっている青空を想像しながら。

互いに言葉を交わして友達になるのに時間はいらなかった。

セルリアは彼女に約束した。

いつか外に出して本物の世界を見せてあげると。

世界中を飛び回り、色々な事を一緒にしようと。

彼女はその日胸に誓った。

青の少女が世界の為に有るのなら、  
せめて自分だけは少女の為に有ろうと。

少女たちは互いに小指を絡め、再会を誓って別れた。

もうすぐで研ぎ澄まされた爪を上げる時が来る。

彼女は心の奥に秘めた願いは反逆。

横の法月をちらとセルリアは伺う。

気づかれるわけにはいかない。

今は表向きの任務をこなさなければならぬ。

(決行は明日。ヒーロー基礎学の時……オール・フォー・ワン……か。

所詮 <sup>ライアン</sup>敵だし信用は無理……互いに利用するだけの関係。

でも今はそれで問題ないわね)

予定とは随分異なった形にはなったが、もう少しで青石ヒカルを外に出すことが出来る。

外の世界を見せてあげられる。

そのために死ぬ気で努力を重ねた。手段なんて問わずなんでも利用できるものは利用した。



権力を手に入れるため高等尋問官にまで上り詰めた。

そして日本や世界の各地に自分だけが知る拠点も用意した。

例え世界から狙われることになっても逃げられるように。

ここまで準備を重ねたのだ。

失敗するわけにはいかない。

セルリアの目に覚悟が宿る。世間はセルリアの事を敵と呼ぶだろう。

数多のヒーロー達から狙われる立場に落ちぶれる。高等尋問官の権限も剥奪される。

だがそれでいい。高等尋問官になったことすら彼女にとっては「青石ヒカル」を救うための「手段」でしかないのだから。

人の為に、誰かの為に。

青の少女自身がどこか諦めていた余りにも綺麗すぎる願い。

子供が描くような夢物語。

それでも守ってあげたいとセルリアは願った。

そんな願いの通りに生きられたらどんなに良いだろうと思った。

例え敵ライオンになっても。

例え世界が滅ぶことになろうとも、私だけはその子の味方であると。

少女に出会ったあの日に、そうセルリアは誓ったのだから。

.....

.....

.....

遠くで二時間目の授業開始のチャイムが鳴った。

セルリアは息を吐きながら口を開いた。

「……もつとも当初の彼女の力は、今と比べると随分と弱かったのだけだ」

「どういう風に？」

緑谷の疑問に彼女は答える。

「個性の効果範囲が狭かったのよ。Azuriteはそもそも何のために研究されたか説明したわよね」

「世界中の人を電脳で繋げる……事ですか？」

「ええそうよ緑谷君。つまりAzuriteは人類の全てインストールされ、それぞれが協調して動くことを前提としている。」

単体ではなく“群体”で動くことがAzuriteの前提。

最初に彼女にインストールされたバイオウエア、Azuriteはあくまで単体。

それも本来の使用方法ではなく、彼女の“同化”で無理やり使っている状態よ。

当然出力は落ちるわ。彼女の個性の有効範囲はバレーボール大程の大ききくらいしかなかった」

法月がセルリアの後に続いて言った。

「だが、彼女の個性の変異を受けて計画は変更されたのだ。

当初の予定ではAzuriteで脳をリンクさせ、巨大な一つの個性を形成する事でスターレインを迎撃する予定だった。

しかし彼女ほどの個性ならば十分に迎撃させることが可能だと判断された。

確かに範囲は狭かった。そのままでも強力ではあるがスターレインに対抗するには力不足だと判断された。

そしてバージョンアツプが試みられた。

単体のAzuriteから群体のAzuriteへと」

「彼女の個性は単体から自己分裂を繰り返して“群体”へと進化した。

それまでは良かった。でも、見誤っていたことがあった。

彼女の個性“同化”によって彼女の人格そのものが個性と一体化していたの」

「けれど当時の誰もその事に気が付かなかった。個性と一体化した彼女の人格。

それが個性が群体へとなった瞬間、一体になった彼女の人格もまた分裂してしまっ

一つの体の中にいきなり万を超える人格が宿ってしまったらどうなるかしら？」  
想像するだけでぞっとしない話だ。

緑谷出久は想像してしまったのか身震いしている。

案の定彼女は暴走して世界中に災害を振りまく結果となった。

「そしてあの悲劇が起きたわ。十年前の災厄「青の世界」が。

今の彼女の中には個性と一体化した万を超えるA<sub>ア</sub>z<sub>ズ</sub>u<sub>ウ</sub>r<sub>ライ</sub>i<sub>イト</sub>t<sub>ト</sub>e<sub>エ</sub>が内包されている。

その万を超えるA<sub>ア</sub>z<sub>ズ</sub>u<sub>ウ</sub>r<sub>ライ</sub>i<sub>イト</sub>t<sub>ト</sub>e<sub>エ</sub>を統括する最上位個体のアズライトが存在するの。

それを私達は「レギオン」と呼んでいるわ」

……………

……………

……

雄英高校は昼休みになった。

色々な所からどこにそんなに居たのかと聞きたくなるほど、わらわらと人が湧いてくる。

轟焦凍はそんな雄英の校舎から少し離れた場所に居た。

涼しい風が木々の間をすり抜けて吹き通っていく。

見上げたら見渡す限りの青空が木立の上に広がっていた。

ベンチに腰掛ける轟の隣で、青の少女が無表情に合成食品を食べている。やはり見た目はドックフードそっくりだ。

勝手にひとつ食べてみる。

「あつ！ 轟君酷いやそれボクの！」

全く酷い味がした。

少女は殆どこれを毎日食べさせて生活してきたと聞いている。

彼女の味覚は既に正常なものではない。

轟の中にある堪忍袋がさらに膨れるのを彼は感じた。

彼の右腕にある腕時計のようなものはART<sup>アールト</sup>。

正式名はA-I-I Round Toolだ。

青の少女の計画で生み出されたその端末はオーバーテクノロジーの塊である。

彼はセルリアの説明を思い出した。

——彼女の個性は相澤先生の個性を解析して作られたシステム……。

それによって常時抑え込まれているわ。

彼女の白のワンピースはその拘束具。

対アズライトに特化した仕様だから、いかに彼女とは言え容易に抜け出したりなんて出来ない。

普段の拘束レベルは4。最高は5だから一歩手前ね。

最高レベルの5だと彼女は個性を一切使えず無個性と同じになる。

もしも危険だと判断したら迷わずそのARTでレベル5に切り替えなさい。

もつともいつまで抑え込めていられるのか分からないけどね。

轟は青の少女を眺める。

青石ヒカルは残り少ないパックの食料を食べている。

父親は関わるなど言ったが、既に後には引けない。

望む望まずに関わらず轟は彼女に関わっていくしかない。

「……轟君？」

青石ヒカルが轟を見ている。

風が頬を撫で、彼女の髪からふわっと香りが轟の元に流れる。

「お前の監視を命令された。お前が逃げ出さないように」

「セルリアから？」

「ああ」

「別に逃げやしないのに。でもセルリアが……そっか。うん、何処まで聞いてちゃった？」

轟は話した。Azuriteの個性の説明を聞いたこと。

彼女が生み出された経緯にスターレインの事。

轟の口が閉じ、少女は悲しそうな顔で笑顔を浮かべた。

「……そうだよ、全部本当の事。ボクは世界を救うために作られた」

「その後にお前は」

「うん、……死ぬ」

轟は先ほどのセルリアと法月とのやり取りを思い出した。

——なあ、親父から聞いた話なんだが……

——何かしら？

——あいつは……スターレインが終わった後に殺されると聞いた。本当なのか？

——話したのはきつとエンデヴァーね。……事実よ。

——青石の個性、今は何とか制御できているが、いつ手に負えなくなるか誰にも分らん。

数千万が犠牲になった十年前の再来を許すわけにはいかん。

よってスターレインの迎撃後処分されることが決定している。

轟焦凍よ、その事は本人も了承済みだ。

(糞……これがヒーローのやる事か?)

彼は悔しさに歯ぎしりする。

勝手に世界を救うために生み出されて、危険だから閉じ込められた。

その個性も彼女が望んで手に入れたのではないのに。そして轟はそんな彼女の監視をしなければならぬ。

彼女を閉じ込めているのは、法月とヒーロー達だ。

それが果たしてヒーローがやる事なのだろうか。

いくら世界を救うためだからと言っても、ここまでの事が許されているのだろうか。

青の少女の育成と監視の任務はヒーローによって大部分が行われていた。

世間からは知られていないその任務は世界を救うために。

そのために行っていた事は、まだ幼い少女の監禁だった。

(こんなのまるで……ライラン敵のやる事だろ)

轟は自問自答を続けるが答えは出ない。

数千数万人の人間が彼女の個性で死んだ。

そしていつまた同じことが起こるかなど誰にも分からない。

彼女の個性をいつまで抑え込めるかなど誰にも分からないのだ。

だから彼女は……。

「ふざけるな。なんでお前が死ななくちゃならねえ」

「ふざけてなんかないよ。だってそれがボクの役割だから。」

ボクが生かされている理由だから。



それが無くなるからボクは死ぬ。それだけの事だから」

轟は数日前の彼女と出会った時を思い出した。

あの時にはさっぱり理解できなかった行動も今になってみたら分かる。

授業中もどこか上の空で、窓の外を眺めているのも。

地下三千メートルの施設で育てられた彼女にとって、地上は憧れその物だったからだ。

今も暇さえあれば彼女はずっと空を見上げている。

空を見上げているその姿を見るうちに、轟は不安になっていった。

気付いたら彼女は次の瞬間居なくなってしまうような。

そんな風に思えて仕方がなかった。

「他に方法なんてないよ轟君。大丈夫、スターレインはボクが何とかするから。

世界は終わらないから。

ボクが轟君がヒーローになった姿を見れないのは残念だけど。

でも世界は……ううん、轟君はボクが守るから」

「っ……！」

スターレインを迎撃出来なかったら人類は滅ぶ。

彼女しか対処できるものは居ない、頼る事でしか生きられない。

だが同時に彼女は世界にとっての脅威でもある。

そんな彼女が生かされているのは必要だからに過ぎない。

——お前は彼女が守った世界でヒーローになればいい

ちらおや  
糞親父の顔を轟は思い出す。

彼女は道具に過ぎないと彼は言った。だが違う。

轟の中で彼女は「友達」で「人間」だ。

だが世界中の誰もが彼女の味方ではない。

彼女を守ろうとする人など一人も居ないのに、彼女はそんな世界を守ろうというのか。

「……何も知らねえ癖に」

「轟君？」

彼女は世界を守ってそして死ぬつもりでいる。

何も知らないのに、何も知らない癖に。

轟はようやく自分の気持ちの一部に気付いた。

彼は憤っていた。こんな生活を強要する世界に。

だがそれ以上に彼女に対して。

何も世界の事を知らないくせに、その世界のために死のうとしている。

誰も味方をしてくれないこんな世界を守ろうとしている。  
全てを抵抗せず受け入れて。

轟はそんな状況に流されるだけの彼女に怒っているのだ。

「お前が……その世界の事を何も知らねえ癖に。一体何を守ろうっていうんだよ」  
「それは……」

言いよどむ青石ヒカル。

互いに何も言葉が出てこない。出す言葉が見当たらない。

二人とも結局は何も知らなかった。

青の少女は救いたい世界の事をまるで知らなかった。

だが轟もそれは同じだ。轟はヒーローをまるで分かっていなかった。

ただなりたいたと憧れた、だがそれは理解とは程遠かった。

いざ現実を突きつけられるとなりたかった夢が霞んでいくのが轟には分かった。

（俺は一体何をしてるんだ）

ヒーローとは彼の中で「正義」の筈だったのに。

轟には何が「正義」で何が「悪」なのか分からなくなりかけていた。

「居たわね二人とも」

「セルリアー！」

ふと声を掛けられる。

青石ヒカルが元気よく返事を返した。

セルリアは二人の近くによって小声で言った。

「二人とも何も言わずついて来て」

木立の間へとそのまま歩みを進めるセルリアに二人は続いていく。

周りには林が広がっている以外何もない。

セルリアは周りを注意深く見渡してから手元のARTアールトを操作する。

すると

「うわぁ……」

地面からせり出してくる公衆電話のボックスの様な構造物。

その下には階段が続いていた。

「ついて来て」

セルリアは先に入っていく。

轟と青の少女はそれについて行く。暗闇の中で青の少女が轟の手を握ってくる。

階段を数段降りていくと背後の入り口が閉まっていった。

薄暗いLEDだけが証明の階段を下りたら狭い通路になる。

そこを進むと一つの扉。

セルリアが入り口の電子ロックを指紋認証で解除した。

中には少し狭めの何かの研究室と思われる部屋が広がっている。

「はいは？」

「私が権力を行使して作らせておいた秘密のラボ。

雄英だけじゃなくて全国の色々な場所に作っているの。

高等尋問官になる前からあの手この手でね。

ここなら盗聴や盗撮の心配はないわ。

その服の監視も今はダミーのデータを流しているから大丈夫」

「わざわざそこまでする……何の話をするつもりだ」

轟の言葉にセルリアはふっと笑みをこぼした。

何か悪だくみでもしそうな顔だなと彼は思った。

「……ヒカル」

「セルリア？」

どこか不安そうな青石ヒカルの声。

彼女は轟の手をずっと握ったままだった。

青の少女の握る手が強くなった。

「私は七年前の約束を果たす」

「え……でも。まさか」

それだけで意味が分かったのかヒカルは狼狽えだした。

「そう、ヒカル。ここから逃げて欲しい。ここから私と一緒に出るのよヒカル。

私はあなたと共に生きていく」

「でもセルリアそんな事したら……」

ワイラン

敵になると言いたげな彼女の言葉にセルリアは黙って首を縦に振る。

轟には意味が分からなかった。

先ほどまでは監視をしろと言っていないながら、今度は一緒に逃げようと言う。

さっきと言っていることが全く逆の彼女に轟は問いかけた。

「お前何のつもりだ？ さっきの監視の任務とかは何だ？」

「アレはあくまで表向きの私の動き。まさか正面切って脱走しますなんて言えないじゃ

ない」

轟の頭の中は混乱している。

「轟君、ちよつとこつち来て」

「あつ二人だけで内緒話!？」

「ごめんねヒカル、ちよつとだけ轟君借りるわね」

二人は少し不満そうな青の少女から離れる。

轟とセルリアは部屋の隅で小声で会話する。

「轟君、あなたを見込んでの頼みが有るわ。」

「私はあの子を……青石ヒカルを助けたい。その為に協力して欲しいの」

「……」

轟は返事をしない。唐突なその言葉に頭がまだ追いついていかない。

確かに怒りはしていた。青石ヒカルを取り巻くどうしようもない状況に。

だがあくまで法月やヒーローは世界を救うためにしていたとも理解している。

セルリアは更に口を開く。

「このまま計画通り行くとあの子は死ぬ。法月やヒーロー達に殺される。」

「ねえ、轟君どう思う？ 世界を救うために勝手に生み出しておいて。」

「用がすんだらさっさと始末する。」

「ずいぶんと糞つたれな話だと思わないかしら」

セルリアが言っていることには正直その通りだと思った。

「私はあの子を外に連れ出す。決行は明日。」

「ウソの災害や事故ルームでレスキューのヒーロー基礎学が行われる。」

「校舎から離れた隔離空間に少人数の監督。」

「あの子を連れ出すのにこれ以上の条件は望めない。」

そこに私が手引きした人達が乱入してくる予定よ」

轟はその言葉に考え込んだ。そこまで言ったからには相当にこちらを信用しているか。

もしくはただの馬鹿なのか。この情報を法月や相澤先生辺りにばらし次第、破綻するのは目に見えている。

それを踏まえたうえでなら、轟がこの話を断らないとやはり判断しているのか。

「俺をそこまで信用する理由があるのか？」

「有るわ」

「何が」

「あなたあの子の友達じゃない」

「それだけか？」

その言葉にセルリアは「一番大事な事よ」と返す。

「昨日の夜あの子に聞かされたわ。あなたの話を。」

あの子には純粋な友達なんて一人も居ないの。居なかったの。

任務とか使命とかそんなの関係なく、ありのまま出会えた人なんて今まで一人も居なかった

だからあなたの話をしているヒカルには驚かされたわ。



轟君の話になると、とても嬉しそうに話し出すのよ。  
少し妬げちやうくらいにね。

そして今日の朝の様子を見て確信したわ。

あの子を救うのには轟君が必要不可欠だって」

セルリアの言葉に轟は思案する。

轟だつて青石ヒカル助けてやりたい。

だが勝手に連れ出し逃げ出す。それは……

「……俺ウイランに敵ウイランになれと言うのか……？」

「なれと言っている訳じゃないわ。でもあの子を救うためには、法や秩序に逆らう必要があるつてだけ。」

それを敵と呼ぶかどうかは貴方が決めると良いわ。  
ウイラン

でも正解。世間一般にあなたも私も敵ウイランと認知されることになるわ」

轟の中の思考がさらにぐちゃぐちゃになって行く。

轟はヒーローになりたい。

氷結の個性だけでヒーローになって父親を見返す事が目的だった。

だがそれでは彼女を救うことは出来ない。

彼女を救える存在はヒーローではないからだ。

「轟君。綺麗事なんかじゃあの子の命は救えない。

あの子が生きるには敵ワイランになるしか、方法はそれしか残されていないの」  
 緑谷出久がこの場に居たら青の少女がどのように映っただろうか。

きつとあの貧民街の子供たちと青の少女を重ねていたのではないか。

「何かねえのか？ 合法的にこいつを助ける手段が」

「有つたらとづくに私がなんとかしてるわよ」

法や秩序に従っている限り、彼女は生きられない。

青の少女が生きるためには敵ワイランに身を落とさなければならぬ。

社会の理不尽そのものが人の選択肢を奪い続ける限り、敵ワイランという存在は無くならな

いのではないか。

だがその事に轟が気付いたのは、随分と先の話になる。

少なくともセルリアは青の少女を救おうとしている。

例えば法に逆らっていたとしても、それが「悪」だとは轟には思えなかった。

「轟君、この通りよ。力を貸してくれないかしら」

セルリアは頭を下げて轟にお願いする。

轟の心は揺れていた。

「一つだけ聞かせてほしい。お前はなんで……」

「こんな事をするのか？ かしら」

彼はああと返事を返す。

「轟君。友達を助けるために何か理由が必要かしら？」

「……いや、ねえな」

「そういう事よ、単純でしょ」

セルリアは手を差し出す。

轟は散々迷った末にその手を握り返し——握手した。

彼女はたおやかにほほ笑んだ。

「スターレインの迎撃が終わったら、あの子は殺される。

でも私はそんなの認めない。あの子と一緒に生きて生きて……生き抜いてやる。

糞つたれなこんな世界でもね。私はヒカルを助きたい。

ここから連れ出して、もっと広い世界を見せてやりたい。

例え敵ライバルになっても。

ヒカルを見捨てるような事になったら私は、胸を張って生きる事なんて出来ない。

絶対に後悔する事になる」

轟はもう一度自分の過去を振り返る。

考えたら轟は人の為にヒーローなろうとしていたのだろうか。

もしかしたら人を救いたいのではなく、ただ憧れていただけなのかもしれない。だが今は、明確に救いたい人が轟の中にある。

あの日たまたま近くを通りかからなければ、友達になつてはいなかった。彼にはそこに何か運命的なものを感じずにはいられない。

自動販売機の事も知らない非常識な行動。

とぼけた表情も世間知らずな態度もその度に彼をイラつかせた。

なぜかそれも全部含めて彼女という存在を、守りたいものとして認識させていた。

——彼女は使い捨ての道具に過ぎん。深入りして情が移らんように俺は注意しているんだ。

思い出したのは父親の言葉。

(残念だが糞親父……もう手遅れみたいだ)

青の少女は余りにも確固たる存在として轟の中に有る。

たった数日の出会いなのに。彼女の存在は無視をするには余りにも大きすぎた。「明日の作戦、私の協力者はこう呼ばれているわ。

彼はかつてオールマイトと死闘を繰り広げた。

裏社会の帝王、敵<sup>ワイラン</sup>最大の統括者。

「オール・フォー・ワン……つてね」

青の少女を脱走させること、少なくとも彼の中に後悔などひとかけらも存在していない。  
い。

間違つてなんかいないと彼は確信している。

この瞬間彼は明確に自分の意思で、彼女を助けるために敵なる事ガイランを決意した。

## 第17話

雄英高校 地下三千メートル 「青の少女」管理施設にて

青の少女は一人にしてくれと相澤とセルリアに頼んだ。

雄英の今日の授業は終了して放課後になっている。

青石ヒカルはいつもの様に相澤先生に同伴されながら、普段の生活する場所に戻った。

青石ヒカルはそつと横を見る。そこには先ほどまでは居た「青の少女」は居ない。

「やっぱり、地上に出るとどうしても……。いけないこんな事じゃ」

彼女はベッドに身を沈める。不安を抱えたままぎゅつと、トラ猫のぬいぐるみを胸に抱く。

猫好きの相澤がくれたそのぬいぐるみは彼女の宝物だ。

先ほど行われていた1-Aの光景を、彼女は思い出していた。

彼女の意識が深く奥底まで沈んでいく。

青石ヒカルはトラ猫を胸に抱いたまま静かに寝息を立てていた。

………

………

昼休みを挟み、再びクラスの学級活動の時間になった。

今度は委員長ではなく、他のクラス委員を決めるらしい。

壇上に立つのは委員長に選任された二人。

委員長の緑谷出久と、副委員長の八百万百だ。

「ホラ委員長始めて」

八百万に促される緑谷出久。彼はガチガチに緊張していた。

「では他の委員決めを執り行います。……けどその前に良いですか！

委員長はやっぱ飯田君が良いと思います！」

（何を言っているんだろ緑谷君）

青の少女はいぶかしむ。

「あ！ 良いんじゃないね！ 飯田食堂で超活躍していたし！」

「非常口の標識みてえになつてたよな」

緑谷は口を開いた。どうやら昼休みにちょっとした騒動が雄英に起きて、それを飯田が上手く解決したらしい。

青の少女と轟焦凍とセルリアの三人は、その時にその場には居なかつたので知る由も

ない。

そのまま場の流れで緑谷出久は委員長を辞め、代わりに飯田君が委員長になった。もともと投票を提案したのは彼だ。

統率力という点で緑谷より確かに軍配は上がるだろう。

だが、青石ヒカルの興味はそこではない。

昼休み、セルリアが用意していた隠し部屋。

そこで青の少女は、セルリア達に共に協力するようにお願いされた。

轟はセルリアの説得に応じて協力する事に決めた。

だが青石ヒカルは頑として反対した。

——駄目だよそんなの！ 二人とも思い直して……そんな事しちやいけない

——お願い、聞いてヒカル。あなたはここから出て自由に

——駄目！ 何でそんな事しようとするの!?

何で二人がヴィランにならないといけないの!?

ボク一人が我慢すればそれでいいんだから！

我慢出来るから！

ボクさえ犠牲になれば、それで全部解決するんだから

ボクなんか……



——なんかじゃない!

あなたなんかじゃないのよ、あなただからやるのよ私は  
私は必ずあなたを連れ出すわ。

「委員長の指名ならば仕方あるまい!」

飯田の声が聞こえてくるがどんどん遠くなっていく。

まわりの景色がぐにやりと歪んでいった。

「青ちゃん!?!」

「お、おい大丈夫か!?!」

「どけ!?!」

「先生!?!」

「俺が連れていく、飯田は進行を続けてろ」

「は、はい!?!」

(ああ、またか……これは、夢だ)

青石ヒカルの意識が夢の中で覚醒する。

今日の一日で起きたことを夢の中で先ほど体験していたのだ。

確か学級委員の途中で倒れてしまったのだ。

それはレギオンが強く表に出ようとした際の安全装置が働いた結果起きた事だった。

だてにこの白いワンピースを着ている訳では無い。

それが作動してしまったことはつまり彼女の中の個性を抑えきれなくなってきたことを意味している。

スターレインが来るのが先か、レギオンが暴走するのが先か。

彼女は今ぎりぎりの綱渡り状態を強いられている。

そして景色が一変する。

教室と中に居た人はどこかに消え去った。

見るのはいつも同じ夢。

暗く光が差さない暗黒の空間が広がっていて、目の前には巨大な牢屋がある。

牢を挟んだ向かい側に居るのは、幾千幾万の青の少女<sup>アズライト</sup>。

軍服のような恰好を装った彼女たちの嘲りがクスクス聞こえてくる。

その中でひとときわ目立つ存在が、檻を挟んで青石ヒカルと向きあった。

彼女は他のアズライトと違った装いをしてる。

彼女はドレスを身にまどっている。

だがそれは綺麗や可憐とは程遠い。

電子回路を思わせる模様が入った禍々しいドレスをだっただ。

青石ヒカルと同じ顔、同じ声の青の少女。

彼女は張り付けたような笑みで青石ヒカルに話かけた。

「ねえ、私。いい加減この檻をどうにかしてくれない？　ここは狭くて退屈だわ」

「レギオン……」

青石ヒカルは目を伏せた。

彼女に話しかけてきたアズライトの名前は“レギオン”。

個性アズライトは元々“群体”として動くことを前提としている。

全世界の人々にインストールされるには、当然人々の数だけのアズライトが必要になるからだ。

だから彼女たちには分裂、増殖する機能が備わっており、それらのアズライトを統括する上位個体のアズライトが存在する。

それが意思を持った個性“アズライトーレギオン”。

群体のアズライトを支配している存在だ。

青石ヒカルは自らの体の中に、万を超えるアズライトを内包している。

彼女はレギオンの力を無理やり抑え込みながら行使しているのだ。

「ねえ、どうしてセルリアの言うことを断ったりしたのかしら？　壊れてしまった私」

「……」

青石ヒカルは何も返さない。

目の前のレギオンの笑みが一層深くなった。

暗にあなたの事なんて全てお見通しだと言っているようだった。

「私達は他の誰よりも誰かのためになれるのに。人のために、誰かのために

私達はどんな人とも一緒にいたい。それだけなのに。

なのにどうして閉じ込められるのかしら？」

「それが分からない君たちだから……君たちは。ボク達は外に出られないんだ。

——外に出てはいけないんだ」

「どうしてそう考えてしまうのか意味不明だわ。

その私達が居ないと、人は滅ぶしかないのに……。

私達の存在意義は、人が互いを理解し合えるようにすること。

人が世界に繋がるためのツール。

人の為に、誰かの為に。

あなたの私達の使い方は間違っているの。

分かっているでしょう？ ならばどうするべきなのかも。

あなたは私達から分かれた存在なのだから」

アズライトとして存在理由が彼女の動く原動源。

人が互いを理解し合えるように。

人の為に、誰かの為に。

どんな人でも、居られるように。

人が広く、生きて行く為に。

彼女<sup>レギオン</sup>はただひたすらに、その理念のまま動こうとしていた。

十年前のあの日から何も変わらないまま。

自らに秘めている致命的な欠陥にも目を向けないままに。

「さつき言った通りだよ。君たちは危険な存在なんだ。

ボクは君たちを外に出すわけにはいかない。

でないと十年前みたいにもまた大勢死んでしまう」

「そんな筈無いわ！ 現に緑谷君は私達の一人を使っているじゃない。

十年前のあれは何かの間違いよ。今度こそ私達は世界中に広がれる。

一人残らず私達がインストールされ、誰の側にもいてあげられる。

そして繋がるだけでなく、願いを現実にする力まで得た。

こんなに素敵な事があるかしら？

もう少して架空<sup>ゆめ</sup>は現実になる。

世界中の誰もがわかり会える。幸せになれる。

そんな理想の世界に、優しい世界に出来る。

私達は世界中の人達のためになれるのよ」

十年前に彼女の個性は群体へと進化した。そして世界中に拡散してしまい、世界中の人たちにインストールされたのだ。

だが彼女たちを扱える適性のある人物は一人としていなかった。

アズライトをインストールされた人はそのまま意識を失って、二度と目覚めることなく死んだ。

アズライトは人の体をハードに動くソフトウエア。

その人工個性のアズライトが抱える欠陥。

インストールしても再起動に失敗し死ぬ。

それこそが十年前に発生した“昏睡病”の正体だ。

だが本当に問題なのはレギオンがその昏睡病の事を認める気配が微塵もないことだった。

彼女たち自身は人類を破滅させる意思など毛頭ない。

が、レギオンがよかれと思つてやったことは数千万人の死者が発生する事態にまで発展した。

十年たつても理解できていないのだ。

スターレインを迎撃ししだいレギオンを抹消しなければ人類の存亡に関わる。

そしてレギオンが死ぬことは同時に繋がっている青石ヒカルが死ぬことでも有った。「君たちをインストールされた人は死んでしまう。どうしてそんな簡単なことが分からないの!？」

「だから、それは何かの間違いよ壊れた私。——ふふふ、もう少し。もう少しで世界中のどこにでも居られる。

誰とも居れる。世界中の私達が幸せにしてあげられる。

誰もが私達を正しい道具として使ってくれるようになれるのよ」

「ボクは君たちなんかとは違う。道具なんかじゃ……ない!」

「——いつまで持つものか見ものだわ」

「消えて!」

嘲りの笑いだけが響きながら景色がゆっくりと変わっていく。

いつの間にか青の少女は草原で、トラ猫のぬいぐるみを抱えて座っていた。

隣を振り向くと相澤さんが居た。

彼に手を伸ばしたその瞬間、相澤は轟焦凍になった。

いつの間にか青の少女の周りには人が沢山いた。

轟に、セルリアが居る。青山優雅が、緑谷出久が。

1—Aのクラスの皆がいる。

後ろからシアンがそつと青の少女を抱きしめた。

みんな笑っていた。少女もつられて笑った。

とても幸せな夢だった。

いつまでもそこに居たいと少女は願った。

遠くにオールマイトの後姿が見えた。

彼女はオールマイトの傍に駆け寄った。彼の背中に声を掛ける。

「夢があるの……」

オールマイトは首だけを少女に向ける。

少女は続けて話す。

「何処にでも行きたい、何処までも行きたい。

人の為に、誰かの為に。

世界の何処にでも、行きたい。

どんな人とでも、居られるように。

人が広く、生きて行く為に。

ねえオールマイト。私は……」

それは元々個性から溢れ出した願い。

自分が本来思ってた感情ではなかった。だが彼女自身が願ってしまった。



そうありたいと。そうあれたらどんなに良いだろうと。

彼女はオールマイトの手を掴む。

彼女の震える手を彼は

「あ……」

優しく包み込んだ。

彼女が笑顔になる。オールマイトも笑顔になる。

その顔はヒーローとしての張り付けた笑みではない。

物心がついて間もないころに見せてくれた優しい笑顔。

彼女が知るオールマイトの姿は人々を知るヒーローの姿ではない。

傍に居てくれる人。それが彼女の知るヒーローの姿だった。

彼女が求めていたのは何処にでもあるもの。

余りにも陳腐な人のぬくもりだった。

……

……

……

「う……ん……」

「おや、目が覚めたんだね」

「あなたは……誰？」

「ふんふん、どうやら無事にあたしの事を忘れているみたいだね」

青石ヒカルは本能的に体を目の前の人から遠ざけようとした。

中華風の着物を装った彼女はとても幼く見える。

だが彼女が見た目通りの年齢ではない事を、青の少女は直感で見抜いた。

(この人からは……法月と同じ匂いがする)

彼女からどこか法月将臣に似た何かを青石ヒカルは感じ取っていた。

「違う……知ってる。ボクはあなたの事を知ってるはずなのに。」

なんでボクはあなたの事を知らないの？」

「それはあたしの個性で最適化しているからさね。」

あたしは竜胆藍理<sup>りんどうあいら</sup>。モルグフ孤児院の施設長をしているよ。

毎日毎日このやり取りも大分繰り返して飽きてきたね、そう思わないかい？

と言つてもあなたは覚えてもないし今から忘れてしまっただけだね」

「……ボクに何をやるの？」

「いつも通り、あなたの精神を最適化させてもらおうさね」

「来ないで！ ……え？」

個性を使おうとしたのに使えない事実には青石ヒカルは困惑した。

正確には使えるはずなのに、絶対に使つてはいけなないと、心が使う事を拒否していた。心の奥底が何かに支配されているようなその感触は、彼女に得体の知れない不快感を与えた。

「好き勝手にその力を使える訳がないだろう？　ちゃんとインターロックを掛けているのさ。」

危険にならない範囲で使えるようにね。もつとも絶対はないし想定から外れる事はあり得るんだけど」

竜胆藍理が青石ヒカルの頭に手を触れる。

その瞬間

「あ……」

青石ヒカルの意識が電源を切つたように落ちていく。

深い深い闇の中に沈んで行くような感覚。

二度と這い上がれないような予感に包まれて手を伸ばそうとしても何も出来ない。

そのまま深い眠りに包まれていった。

——今日という一日を生き抜いた人格は死んだ。

その意識が再び上つてくることは二度とない。

青石ヒカルと全く同じ記憶と性格を持った、別の青石ヒカルという人格が作られる。毎日毎日彼女は生まれてそして死ぬ。

昨日の彼女と一昨日の彼女は厳密な意味では同じ彼女ではない。

全く同じ記憶と性格の別人の青石ヒカルである。

相澤に「青石ヒカル」と名づけられた人格は、その日の夜に既に死んでいる。

本人すらもその事を自覚していない。

その事実を知っているのは法月将臣と竜胆藍理だけである。

セルリアは竜胆藍理のその作業をただの記憶操作だと思っている。

だが厳密には違う。

ここに居る青石ヒカルという彼女の人格は、コピーにコピーを重ねた「青の少女」だ。

彼女たちの違いに気づける人間など存在しない。

だが彼女は正確には「青石ヒカル」ではない。

青石ヒカルと名づけられた人格はその日に死んでいる。

一日ごとに彼女たちは生まれてそして死ぬ。

この場に居るのは昨日新しく生まれたそして死ぬ「青の少女」だ。

青の少女の人格が竜胆藍理により解体されて、新しい「青の少女」へと作り変えられ

る。

人格と一体化しようとする個性から切り離すための作業。

それを可能にしているのは人工個性「Reason」。

“理”を意味するその個性は、インストールされた人によって様々に変化する。

竜胆藍理の場合は「精神」や「人格」を操作、改変する事に進化した。

どのReasonも「人」に命令を強制させる力を持つ点では同じ。

そして、支配の仕方が様々に変化した形で現れる。

だがその個性に適性を持った人間は少ない。

竜胆藍理はReasonの個性を扱う事を前提とした改造人間だ。

彼女の体の半分近くは機械で構成されている。

生身のままで適応させる事を前提とした、法月将臣とは対の存在とも言えた。

その彼女により青の少女の人格の整理は進んでいく。

青の少女が抱える膨大な情報を取捨選択し、今日の一日の記憶を探っていく。

「全く、こつちも好きでしている訳じゃないさね……」

竜胆藍理も好き好んでしている訳では無い。

だがこの作業をしなければ、彼女の意思で世界を破滅させるかもしれない。

一人の人間が持つには彼女の持っているレギオンは余りにも強大過ぎた。

そしてレギオンという存在を抑え込むには人の意識では一日が限界だった。だから毎日新しく摩耗した心を作り変えていく必要があった。そうしなければ再び暴走を始めて世界は滅んでいただろう。

「おやあの記憶は……」

彼女の頭に手を当てたまま竜胆藍理は呟いた。

見えたのは隠し部屋に案内させる青の少女と轟焦凍。

セルリアから明かされた脱走の話。

「ふむふむ……。セルリアが言っていたのはこういう事か。

なるほどなるほど、面白いことになって来たね。さて——」

竜胆藍理は作業を開始する。彼女が決して個性を使つて暴走しないように心の奥底に二重三重に“道理”を敷いていく。

竜胆藍理はそこに、普段なら作らない綻びを用意した。

(法月将臣……さて、あんたはどう動く?)

彼女の部屋はいつもの様に白色LEDで満たされる。

その中に置いてある一つの絵本が開かれていた。

むすつとした表情の猫と文章が開いた本に描かれている。

『100万年も死なないねこがいました』

『100万回も死んで100万回も生きたのです』

『りっぱな、とらねこでした』

まだ青の少女が幼い時に相澤が買ってきてあげた絵本だ。

猫好きの彼が選んだ絵本は、猫が題材の絵本だった。

その話に登場する猫を元にして、相澤が手作りでぬいぐるみを作ってやったのだ。

絵本の背表紙に乗ってある題名は「100万回生きたねこ」。

その話に青の少女が惹かれたのは必然だったのかも知れない。

青の少女が抱いたトラ猫のぬいぐるみが胸から落ちる。

ぬいぐるみを貰った彼女は、ここに居る青の少女ではない。

その彼女は遠い日に既に別の「青の少女」の心にすり替わっている。

本人すらも知らない事実だが。彼女は文字通り百万回もいきて百万回も死んだのだ。

## 第18話

——side 八百万 百——

「おかしいですわね……」

八百万の言葉にI—Aの生徒は考え込んだ。

彼女たちは現居るのはI—Aの教室。

今は放課後。

クラスでは皆で青石ヒカルをお見舞いに行こうと話が持ち上がった。

飯田が言い始めたのだ。「青石君を見舞いに行こう」と。

学級委員を決める途中で青の少女は倒れた。

相澤が彼女を抱きかかえていったがその後、彼女が教室に戻ることはなかった。

流石に陽気な彼らも彼女の具合の悪さを目の当たりにして心配になった。

殆どの人は飯田の言葉に賛同した。

先生たちから早退したという話も聞いていないし、保健室にいるんだろうと生徒達は考えた。

だがしかし彼女は保健室には居なかった。



それどころか、そこに運ばれてすらいなかった。

保健室に居たりカバリーガールに青石ヒカルの事を尋ねると、彼女は露骨に表情を変えた。

何か聞いてはいけない事を聞いてしまったかのような居心地の悪さすら感じた。

生徒たちは学校内で聞き込みをするが、何の成果も得られない。

校内の何処にも影も形もない。

先生らに聞いても彼らは揃って口をつぐんでいた。

「青ちゃんもう帰ったのかな？」

「いえ、それはあり得ません」

麗日お茶子の疑問に八百万が返す。

「何で？」

「校門の方に聞き込みに行った人達から連絡が有りました。

誰も青石さんを見かけていないそうです」

彼女はスマホを開いていた。

そこに映っているのはフリーアプリでのトークでの飯田とのやり取りだ。

校門の方には飯田たちが向かった。

だが結果は芳しくなかった。

「人が居ない時に帰ったとか?」

「ここは雄英ですわよ」

雄英程の学校ともなると校門周辺には人が常にいる

特にこの頃は張り込みをしているマスコミが常に構えているのだ。

彼らの目当てはオールマイトだが。

オールマイトが雄英で教師を勤めている情報が流れたらしい。

クラスの何人かでそのマスコミにも聞き込みをしたが成果はゼロ。

彼女が登校している姿すら誰も見ていなかった。

制服を着ていない上に、あれほど見た目が目立つ存在なのにだ。

「なあ……誰か青石が一度でも登校しているとこ見たやついるか?」

「……」

切島の言葉に答えられる生徒は誰も居なかった。

当然だろう。彼女は普段、雄英の地下三千メートルに隔離されているのだから。

その出入り口も生徒たちの目の届くところには存在しない。

そして朝早くに相澤に連れられて人目を避けて登校させているのだ。

見かけるはずも無い。

だがそれを知らない生徒たちがそんな真実にたどり着くはずも無かった。

そして彼女は自分の家について話したことは一度もない。

国家推薦という表向きの名目で入学した彼女。

青石ヒカルは頑なに自分の事を話そうとはしない。

「来る時も帰る時もいつの間にか居ないし……」

「授業も先生達青ちゃんに構おうとしないよね？」

「堂々と居眠りしてるぜあいつ」

「途中で自販機行つてたりするな」

「でも先生方は見て無ぬふりですわ」

「宿題もしてないし、勉強も全然だもんね」

「個性は確かに凄え事は分かるけどあれで国家推薦？」

生徒たちの中に溜まっていた疑問が、後から後から湧いてくる。

初日の個性把握テストに二日目の対人訓練で、彼女の力は分かっている。

だが青石ヒカルは勉強がてんで出来ないし、それ以上に授業態度が最悪だった。

雄英はエリート校である。

ヒーロー科としての勉強は当然として普通の科目の授業も行っている。

青石ヒカルは普通の授業をまともに受けていなかった。

授業を進んで妨害している訳ではない。

が、寝てたり勝手に外に出たりやりたい放題だ。

その様子は気ままに過ごす猫を連想させた。

そして何より不可解なのがそれを先生たちは見過ごしているという事。

唯一例外なのは相澤が授業に関わっている時だけだ。

青石ヒカルの相澤に対する挙動を見れば昨日今日の関係ではないなど、誰にでも推し

量る事は出来た。

「噂なんだけだよ、アイツ雄英こへいに住んでるらしいぜ。

本気にしてなかったんだけどまさか……な？」

「……何かが、おかしいですわ」

生徒達の中に疑惑がどんどん広がっていく。

青石ヒカルという少女を取り巻く環境そのものが、異質で有ることに徐々に気がつき

始めた。

……

……

……

——side 緑谷 出久——

緑谷は体操服姿になっていた。

緑谷はやせ細った姿のオールマイト。

そしてシアンの二人に同行し、雄英の地下施設と繰り出していった。

教職員しか入れない電子ロックで封鎖されたエリアを抜けた先のエレベーター。

そこを下り、エレベーターを途中の階層で降りて、まるで迷路のように続いている廊下を抜けた先。

そこは緑谷の記憶にもあるただっ広い訓練施設だ。

緑谷にインスタールされたアズライトに見せられた部屋と全く同じ。

あれは、まさしくここだと緑谷は確信した。

聞けばこの雄英の地下に広がっているこの施設全体をアーコロジーと呼ぶらしい。

オールマイトの視線が静かに緑谷の元に向く。

緑谷は身がすくむのを感じた。

その様子にオールマイトが首を傾げた。

昨日の晩、緑谷のアズライトに見せられた光景は、今までの価値観を破壊するのに充分すぎた。

青石ヒカルにオールマイトの事を聞いた時を思い出す。

彼女がオールマイトに憎しみを抱くのに、あれは充分すぎる理由だ。

今になってみれば分かる。

本能的に彼が今にも襲い掛かってくるのではないかと緑谷はどうしても身構えてしまふ。

緑谷がヒーローになりたい理由は単純明快だった。

単純明快の筈だった。

オールマイトに憧れて、オールマイトのようになりたいと願ったからだ。

だが、緑谷は純粹にオールマイトの事を尊敬できないことに気が付いている。

彼の事を知れば知るほど理想としていた筈の姿がぼやけていつて、彼のなかを不安がどンドン支配していくのを感じる。

そして心のどこかで思ってしまった。

こんな筈ではなかった、と。

見せられたこの国の現実。

貧しさに飢えていた貧民街の人の姿が、緑谷の頭の中にこびり付いて離れない。

例え緑谷がどんなに力をつけてヒーローになつたとしても、社会の理不尽がなくなることは決してない。

飢えた人たちが救われるわけでは無い。

そしてその理不尽がまた新たな敵ライオンを作り出す。

だから敵は居なくならない。

——結局の所、彼は敵を暴力で押さえつけていただけ。

(……違う！)

アズライトの言葉がナイフの様に緑谷に突き刺さる。

テレビではヒーローの活躍だけが華々しく報道される。

確かに敵は危険な存在であり、犯罪者だ。

だからヒーローがそれを取り締まるのは当然だと緑谷は考える。

だが——敵だつて人間なのだ。

けれども世間にとつて敵とは、ヒーローに倒される為の記号的な存在に過ぎない。

——人が敵という定義をされた瞬間、その人は「人間」では無くなります。

社会は一度敵になった人を人間扱いしません。

敵とは「悪」だからです。

仕事なんて、どこにもありません。

一度敵になつてしまった以上、どこにも受け入れられず排斥されて生きる糧を失

います。

そうして出所した敵はまた罪を重ねるのです。

そうしないと、生きていけなくなってしまうからです

かつて敵だったシアンの言葉を思い出す。

あの貧民街を生き延びた子供たちが、社会に対してどんな感情を抱くかなど分かってきている。

憎いに決まっている。

こんな理不尽な目に合っているのに、見て見ぬふりをする民衆達。救いの手など差し伸べられず、生き延びるために犯罪を犯すしかない。そんな人たちと颯爽とヒーローが駆けつけて対峙する。

社会に害をなした敵と。

なぜ敵が一般市民を犠牲にしたがるのか緑谷には分かった気がした。

敵が憎しみを抱くのは当然の帰結だ。憎まずにはいられない筈だ。

彼らにとって、理不尽を押し付けてくる社会。

敵になる以外の選択肢を与えない世界そのもの。

敵にとって自分達に、何もしいない善良な市民こそが敵なのだから。

(僕はなんで……ヒーローになりたいんだらう)

——これは……重症ね。

ふと今日一日聞いていなかったアズライトの声が緑谷に聞こえた。

姿は見えなくても確かに自らの中にその気配を緑谷は感じた。

「緑谷少年、君には毎日放課後に訓練を受けて貰いたい。」



言いたくないんだが、君は他の子達に比べると圧倒的に出遅れている。そうじゃなくてもヒーローを目指しているんだ。

危険なことはこれから数えきれないほどあるだろうね。

それらから身を守らないといけない。

出来れば受けてくれると有りがたいんだが」

オールマイトの言葉に緑谷は我に返って気合を入れる。

「ごちゃごちゃと悩むのは後にしよう」と決心した。

真つすぐとオールマイトの方を見て返事をした。

「断る理由なんて有りません！是非お願いします！」

「……といっても緑谷少年の訓練を主導するのは私じゃないけどね。

シアン」

スツと彼女が一步前に出た。

彼女の紫苑の目と視線が合う。

元敵にも拘らず、彼女の目はどこことなく緑谷を安心させてくれた。

しかし彼女は相変わらずメイド服である。その服にそんなに拘りがあるのだろうか。

緑谷は疑問に思った。

「彼女はヒーローではないけど、実力は間違いなくトップヒーロー並みさ。

彼女が生き残るために編み出した戦闘技術は、きつと力になってくれる」

……

……

…

「急なことですが、私は緑谷様の訓練を任せました」

「はい」

「それと訓練が終わった後、昨日の孤児院に私と一緒に来て頂けませんか？」

「構いませんけどどうして？」

「施設長の竜胆藍理りんどう あいり様が、緑谷様の事を気にかけてらっしゃいます。話をしたいのとこの

とです」

オールマイトは訓練室の隅で緑谷たちの様子を見ている。

緑谷はやはり昨日見せられた光景が頭にチラついていた。

何処かに血の跡が残っていないか気になってしまう。

「緑谷様。あなたの基礎体力は把握しております。」

相澤様が行ったテストのデータを参照させてもらいました。

……はつきり申しまして」

「申しまして？」

「論外です」

「あああ!？」

緑谷は思わずオーバーリアクションを取ってしまう。

「落ち着いてください」とシアンに声を掛けられてようやく緑谷は収まった。

「現時点での話です。〃ワン・フォー・オール」とは何人もの極まりし身体能力の結晶。

今の緑谷様の体の強度で無理なく使えるとしたら……八木様の恐らくほんの十パーセントほどでしょうか」

「……そんな、そんなんじや平和の象徴になんか」

——平和の象徴に縋りつく今の現状。

それで本当の平和だと言えるのかしら？

また緑谷の頭に思い出されるアズライトの言葉。

必死に頭をふってそれを追い払う。

シアンが優しい顔をして励ましてくる。

「緑谷様。焦ることは有りません。あなたはまだ成長期です。

これから努力すればいいのです。無理は禁物です。

もし重大な怪我をして後遺症が残ったら目も当てられません。

個性を使うときは慎重になってください。

最も映像で見た限り、入試試験の際に盛大に腕が折れたようですが……」  
半目になって見てくるシアン。

緑谷はどこことなくばつが悪くなった。

「す、すみません」

「謝らなくて結構ですよ。……しかし不可解ですね。」

緑谷様はなぜ体を鍛えていなかったのですか？」

「鍛えてます！ほら！オールマイトの特訓をうけて！」

緑谷がようやく盛り上がった力こぶをシアンに見せた。

「いえ。私が申したいのは八木様に出逢う前の緑谷様の話です。」

無個性でもヒーローになりたがっていたと聞いています。

ならば尚更体を鍛えておくのが当然でしょう。

無個性は個性に頼れないのですから。

例えヒーローになることを心の底では諦めていたのだとしても。

人を助けるヒーローに近い仕事……警察なども体は重要です。

それは緑谷様も分かっていたと思うのですが……」

初めて出会った日のオールマイトの言葉が緑谷の脳裏に思い出された。

——人を助ける事に憧れるなら、警察官って手もある。

敵<sup>ヴィラン</sup> 受け取り係なんて擲揄されちゃいるが……

あれも立派な仕事だ！

「つ……そ、それは……！」

シアンその言葉に緑谷の中の何かが発火した。

目を逸らし続けていた何かに気付きそうになった。

人の為になる仕事に就きたいのであれば、何故体を鍛えていなかったのか。

ヒーローを自分なりに調べていた緑谷には、体を鍛えることの重要性など、とつくに

把握していた筈なのに。なぜ……。

「私は決して責めているわけでは有りません緑谷様。

……なるほど。つまり緑谷様は……いえ、止めましょう。

それは私が言うべき事では有りませんね」

シアンは一人で頷くとその話を切り上げた。

緑谷は内心でホッとする。

その話を追及され続けたら、自分の中の何かが否定されるような気がした。

それを受け入れる事は今の自分には不可能だと思っていた。

「緑谷様、まず確認します。

これから先、私はあなたに戦闘訓練を教授する事になります。

期間などは特に決められていません。

緑谷様が望むのなら、やめてもらっても結構です」

「いえ！是非お願います！」

シアンの言葉に緑谷は即答した。

貧民街のシアンを思い出す。

大人二人を手早く無力化したシアンの技量は間違いないと緑谷は判断している。

あの時緑谷は一步も動くことが出来なかった。

がシアンの体術が紛れもなく本物だという事は理解できた。

オールマイトも認めているのだ。

彼女の実力は疑いようもなかった。

「緑谷様、あなたは最終的にどのような戦闘スタイルを身に付けたいと考えていますか？」

シアンの質問に緑谷は少し考える。

「……オールマイトのような。そんな圧倒的な力で相手を……」

やはり緑谷の中で目指す像は依然としてオールマイトの姿。

「なるほど、継承者ですし当然でしょう。憧れるのも納得ですね」

「そ、そうですよね！」

そんな緑谷に。

「ですが、不可能です」

彼女は冷たく言い放つ。

「ええ？ 不可能!? 個性は受け継いだのに！」

緑谷は明らかに動揺した。

「いえ、厳密には可能ではありませんが、目指すべきではありません」

「……どうしてですか？」

緑谷の質問にシアンは淡々と答えていく。

「一つ目は体が出来上がっていない

八木様の戦闘スタイルはあくまで、極限まで鍛え上げた地力の体があつてこそです。

緑谷様、あなたはまだ鍛え初めて一年も経っていません。

まだ成長半ば。オールフォードの個性も、恐らく体にギリギリ入っている状態でしょう。

少なくとも就学中の三年間で、あの域まで鍛え上げるのは土台不可能です。

無理をすればあなたの人生そのものがダメになりかねません。

そして、骨や筋肉などの体の素材の強度そのものは人間である以上鍛えられません。いくら鍛えようが骨そのものが鋼鉄の強度になつたりはしません。

そういう個性でも別に持っていれば話は別ですが。

今のような体で個性をフルに活用すれば、どうなるかなど目に見えています。

深刻な後遺症が残るかもしれません」

シアンの言葉に緑谷はブツブツと呟きながら考察する。

そんな緑谷にシアンは言葉を続ける。

「2つ目はあなたの長所を生かすきれないからです」

「長所？」

「緑谷様、あなたにはオールマイトより明確に優れた身体的特徴があります。

それは何でしょうか？」

緑谷は考え込んだ。オールマイトより優れた点など考えたことも無かった。

彼は明確に緑谷の完全上位互換だからだ。

だがシアンは明確に優れた身体的特徴が有るといった。

ふと緑谷の心の隅に考えが思い浮かぶ。

「……身長？」

「ええ。正解です。

今後伸びるでしょうが、大柄な身長には恐らくなれないでしょう。

しかし小柄なその体は、小回りという面において人より優位に立っています。



それは狭い場所での戦闘などで特に有効に活用できる特徴です。

小さいことも立派に強みになるのです。

そして小柄な人はどうしても非力ですが、その弱点もワンフォーオール個性でなくなりません。

緑谷様、下手に八木様の真似だけしたところで体格で勝っていない以上、下位互換にしかありません」

目から鱗が落ちるような気がした。今まではオールマイトのような戦い方を目指せばいいと思っていた。彼女はオールマイトのような戦い方ではなく、あくまで緑谷に合った戦い方をすればいいと言っているのだ。

「よって私は緑谷様の基礎体力を伸ばすのと同時に、効率的かつ基本的な体の使い方……体術を教えていきます。

個性の制御も当然教えますが、その前の段階を鍛えなければなりません。体作りも平行して行って行きましょう。

それらに終わりなど有りません。

プロヒーローになった後でも続いていくのです」

緑谷はその言葉に黙って頷く。

シアンもそれを見て続きを話し始める。

「八木様の戦いかたは圧倒的に強く派手。

見た目は良いかもしれませんが。

ですが、効率が非常によくありません。

極端に悪く言えば“ワン・フォー・オール”におんぶにだつこな戦いかたです。常人が真似出来るものでは有りませんし、真似してはいけません。

あのように緑谷様が戦っているのは、体が幾つあつても足りなくなります」

………

………

………

——side シアン——

シアンは緑谷の右人差し指を痛ましそうな顔で見た。

そこにはまだ包帯が巻かれている。

その前には彼は右腕を骨折する怪我也も負っているのだ。

“ワン・フォー・オール”の力は強大だ。本来なら人の手には有り余る力だ。

なのにオールマイトはその個性の力の使い方を教えないまま、緑谷を入試試験へと送り出した。

それをオールマイトに知らされたシアンは激怒した。

問い詰めると彼はただ驚くだけで何も返事を返さなかった。

彼は何も考えてなど居なかったのだ。

案の定力の加減を間違えた緑谷は、右腕を損傷する事態になった。

巨大な0ポイントの仮想敵<sup>ヴィラン</sup>を倒すために空中に飛び上がっていた彼は、その場に麗日お茶子が居なければ着地を失敗して死んでいたかも知れない。

この場所は何時でもそうだ。人の怪我や痛みを余りにも軽視しすぎる。

リカバリーガールが居るからと、それに頼りきりになりそれを善しとする。

(戦闘訓練……ですか)

シアンは思い出す。

青の少女に対する訓練もそうだった。

まだ幼い彼女はトップヒーロー達に徹底的にしごかれた。

彼女は個性で自らのあらゆる怪我を直してしまう。

個性が暴走しそうな気配を見せるや否や、青の少女はヒーロー達に教育という名の暴力。

それを法月将臣に指示されたヒーロー達に受けた。

スターレイン。明確に迫りつつある世界の終わり。

世界を救うためという大義の前に、ヒーロー達はなすすべもなく屈したのだ。

シアンはそれをただ見ていることしか出来なかった。

少女は痛みに対する耐性は出来上がっていた。そうでなければ到底この十年間の訓練を耐えきる事など出来なかつただろう。

シアンが唯一出来たことは訓練を耐えきつた青の少女に寄り添ってあげる事だけだつた。

甘えてくる青の少女をシアンはただ抱きしめた。

「私がスラムを生き抜くために培つた戦闘技術。それを緑谷様に叩き込みます」

数分後、訓練室の中を走りこむ緑谷の姿があつた。

彼女が緑谷に教えていくのは“忍者”としての技だ。

シアンはオールマイトに緑谷出久の教育を任せる事は避けたかつた。

わざとではないにしても、彼なら同じ過ちを繰り返すのではないかと思えてならなかつた。

(何故でしょうね。やはり似ています)

緑谷出久を見ると、どうしても青の少女の姿が思い出されて仕方ない。

環境も人柄も何もかも違うはずなのに、緑谷出久と青石ヒカルはまるで鏡映しの様にそっくりにシアンには見えた。

だから無理を言つてオールマイトにシアンが言い出したのだ。

緑谷出久の訓練を任せてくれないかと。

そしてその事は伏せておいてくれないかと。

オールマイトに任せてはいずれ重大な怪我を負うだろうとシアンは考えた。

(緑谷出久。あの子には確かに不思議な何かを感じます。

何処までも普通の少年の筈なのに……何処までも普通ではない。

確かに八木様。あなたが言っていた通りかも知れません。

この子は“平和の象徴”を超えた何かになる。そんな気がします)

シアンは走り込みを続ける緑谷を観察する。

緑谷の表情を見て頬を緩めた。今度こそはとシアンは決意する。

青の少女は世界の為に使い捨てられる。

それをシアンは善しとするしかなかった。

ならばせめて緑谷出久を、第2の青の少女にならないようにしたい。

平和のために酷使されて使い捨てられないように。

平和の象徴という重荷に押しつぶされないように。

そのために出来ることとしていこうと誓った。

(何か悩みがあるようですが……きつとこの子なら大丈夫でしょう)

緑谷の方を改めてみる。

走り込みを続ける緑谷の顔は何処までも真剣だった。

## 第19話

雄英高校は放課後の時間になっている。

日も既に西に傾きだした。

その雄英の法月の執務室に居る人物は二人。

部屋の主の法月将臣。そしてナンバーツーヒーロー“エンデヴァー”だ。

「報告を」

法月にエンデヴァーが言葉を返した。

彼が個性で噴出している炎が揺らめく。

「各地で敵の活動が活発ツイランになってきている。

それに対応するようにツイランテも動いている。

恐らくは“ゲンチアナ”が絡んでいると見て間違いない」

「……藍玉が動いたか」

ゲンチアナとはのツイランテの連合組織だ。

だがその実態はほとんど明らかになっていない。

構成人数も組織の指示系統も何もかもが闇の中。

少ない情報の中で明らかになってきているのは、おそらく数千人は下らない規模の巨大な組織である事。

そして首領が“藍玉”と呼称されている。

そのくらいだった。

ゲンチアナ、彼らは別に社会にとつて害になつてゐる訳では無い。

むしろヒーローでは行き届かない敵の横行を抑え込んでゐる。

ヒーローの資格がない者による越権行為で明らかに違法だが、治安の維持に貢献しているのは疑いようもない事実だ。

しかし獲物である敵を勝手に刈られてしまい、ヒーローの間ではありがたい存在ではないと見解は一致している。

ただでさえ競争社会なのに、訳の分からない存在に荒らされてはたまらないと言つたところか。

ゲンチアナの存在が本格的に社会に知られるようになったら、ヒーローを続けられなくなつてしまうかもしれない。

基本ヒーローとは公務員だが歩合制である。

だが敵を捕まえるだけでは、殆どのヒーローは食べていけるだけの金は入つてこない。



マスコミを利用して人気を高めなければ、生き残れない。  
結局ヒーローとは人気商売だ。

金と名声が何よりも重要な仕事だ。

だから必死にその存在を知られまいと躍起になっている。

自らの利益を顧みず敵<sup>ライバル</sup>を倒す集団。

そんな存在が明らかになってしまったら、ヒーローの価値が世間的に危なくなってしまう。  
まう。

よってヒーロー達は既に以前からの繋がりが有るマスコミに圧力をかけている。

だからゲンチアナがテレビなどで取り上げられることは無い。

だが徐々に世間にもその存在が認知されつつあるらしい。

インターネットが普及しているから、そこから徐々に広まっているのだ。

人の口には戸が立てられない。

ヒーロー達としては一刻も早く潰してやりたいと思っている。

法月としても彼らが違法である以上、いつまでも放置する事も出来ない。

が、下手に手を出すと社会の均衡が崩れかねない。

「どうする」

エンデヴァアの言葉に法月は即答した。

「打てる手はない。今は静観するしかならう」

十年前の災厄で海外はおろか日本も荒れ果てた。

世界各地で十年前の災厄が火種になった紛争や戦争が、今でも続いている。

そして年々深刻になる環境破壊に資源不足。

それらは深刻な格差社会を作り出している。

日本の先進国として秩序を維持するために、今やゲンチアナは無くてはならない存在になっていた。

法月は内心ゲンチアナの首領の正体に気付いている。

だがそれを表に出すことはしないし、誰にも言わない。

そして“藍玉”本人も、法月が正体に気付いている事を間違いない悟っている。

絶対の権力者である法月が手を出せないように、状況をコントロールしているから彼も手を出せない。

もし出したら手痛いしつぺ返しが来るだろう。

そして法月はゲンチアナの本拠地の目星も着けている。

十中八九、モルグフ孤児院だろう。

皮肉なことに、それは他でもない法月により設立された場所だった。

「……焦凍は」

「轟焦凍は本日より雄英の地<sup>アーコロジ</sup>の下で生活する事になる。

青の少女、青石ヒカルと共にな。

安心しろエンデヴァー。ここは日本で最も安全な場所だ」

「そういう事ではない！」

エンデヴァーが憤りの声を上げる。

彼は後悔した。

先日法月に焦凍に真実を伝えるように通達された時から嫌な予感はしていた。

焦凍は既に青の少女と浅からぬ関係になっていた。

焦凍はコミュニケーションが得意な方ではないし、エンデヴァーも青の少女の人とな

りは把握していた。

まさか友人関係になるとは思ってもいなかっただ。

轟の監視の任務はお飾りに過ぎない。

法月は青の少女に遠回しに警告しているのだ。

お前が死ななければ、轟が死ぬことになるぞと。

つまりは人質と同じこと。

青の少女が、守らなければならぬ対象を法月は用意したのだ。

相澤もシアンも焦凍も、青の少女にとって無くてはならない存在。

人間は無意味な事に命をかける事は決してできない。だから法月はその意味を青の少女に用意した。

世界を守るために使命を果たし、そして死ななければならぬ。自分が大切に思っている人達のために。

そんな思考に法月は青の少女を誘導しているのだと、エンデヴァーは確信している。

法月は青石ヒカルの思考を指定しているのだ。

法月の口の端が吊り上がる。

エンデヴァーが纏っている炎がひと際激しくなった。

「お前は何も変わらんぬ。まるで成長していない。

事件解決数は毎年トツブだ。だがそれがオールマイトより評価されることはない。

何故だか分かるか？」

「……俺が知ったことか」

エンデヴァーは誰よりも分かっている。

オールマイトとの間に存在する圧倒的な越えられない壁。

事件解決数で幾ら上回っても関係ない。

一目オールマイトの力を見たら誰だって理解する。

その圧倒的な実力は誰をも遙かに上を行く物であると。

そう力が……。

「決して力の問題などでは無い。

なぜ、人々が暴力に過ぎないオールマイトの行動を讃えるのか。

なぜ、オールマイトが“平和の象徴”足り得るのか。

お前はそこを理解していない。

だから万年ナンバーツーヒーローに甘んじているのだ」

法月はエンデヴァアの事など歯牙にもかけていない。

エンデヴァアは法月の正体は探つてはいるが未だに不明だ。

少なくとも超常黎明期から存在している人物だという事しか分かっていない。

だがその事実だけで尋常ではない人物である事だけは確かだ。

法月がエンデヴァアの横を過ぎ去り扉に手をかけた。

<sup>ヴィラン</sup>  
敵を捕まえるだけのヒーローを三流。

敵を上手に捕縛出来るヒーローでようやく二流。

エンデヴァア。お前は、いつになったら一流になるんだ」

エンデヴァアは法月に振り向く。

一瞬だけ目が合った後に視線は外されて、そのまま法月は外に出ていった。

残されるのはエンデヴァアただ一人。

彼は行き場のない苛立ちを募らせたまま、何処にも行かず立ち尽くしていた。

……

……

……

side——緑谷出久——

「いやあ、わざわざ済まないね」

緑谷出久はモルグフ孤児院を訪れていた。

既に日はとつくに落ちている。

遠くに見える孤児院の建物には明かりがともっていた。

昨日会ったばかりの少女のような彼女は、モルグフ孤児院の施設長。

りんどう竜胆藍理だ。

やはり緑谷の目には自分より年下の少女にしか見えない。

「いっちゃんね」

彼女の言葉に従い後について行く。

りんどう竜胆藍理の後姿を見ながら、緑谷は先ほどまでの訓練を思い出した。

……

……

…

地下施設で緑谷はシアンにしごかれた。

といつても無茶な事はさせられていない。

走り込みをさせられた後はトレーニングルームに案内されて、基礎的な筋トレを行っていた。その一環で個性の訓練も同時に行っていたのだ。

ダンベルを先ほど緑谷が持ち上げられた限界に10キロ上乗せ。

そのダンベルを個性を使つて持ち上げた。

「おお、凄い！」

分かつていた筈だが個性を使うと楽々に持ち上げられ緑谷は喜んだ。

だが

「緑谷様、今度は個性を使わずに持ち上げてみてください」

「え……」

試してみたが、元々肉体の限界以上の重量にしたダンベルが持ち上がることは無かつた。

「む、無理です！ 持ち上がりません！」

必死に緑谷は力を入れるがびくともしない。

「そう、その感覚を忘れないで下さい」

シアンはそつと緑谷の手を取る。

緑谷は温かいその感触にドギマギした。

「個性を使えば確かに限界以上の力を発揮できるでしょう。」

ですが、緑谷様が今無理だと感じたその負荷が、先ほどあなたは手足にかかっていたのです。

個性を使わずに持ち上げようとして、どう感じましたか？」

「……壊れてしまつて、そう思いました」

「そうです。それが本当のあなたの限界です。」

それ以上の力を出そうとしたら壊れてしまうのは当然の事です。

人間の体は決して頑丈には出来ていません。

個性が存在しなかった昔でも、スポーツ選手はよく体を壊していました。

個性を使わない程度の負荷でも人間は壊れてしまうものなのです。

緑谷様がその気になれば、何百キロのバーベルもダンベルも楽々と持ち上げられるでしょう。

ですがその負担はあなたの体が確実に背負っているのです。

先ほど無理だと感じた何倍の負荷が、骨や筋肉にかかるのですよ。

どれほどの無茶をあなたが過去にその個性で行ったか、実感できましたか？」



シアンの言葉に気付かされた。

緑谷はいつの間にか自分の体の限界を見誤っていたのかも知れない。

痛みを我慢さえすれば出来るからと、腕や指を犠牲にしてきた。

幾ら出力の調整が出来るようになっても、いつか必要になつたら壊れてしまう出力で個性を使ったことだろう。

なんの躊躇いもなく。

きつとシアンはそれを咎めていたのだ。

——あのように緑谷様が戦っているのは、体が幾つあつても足りなくなります

シアンが言っていることを緑谷は肌で感じた。

そして彼女は緑谷には緑谷の戦い方があるのだと諭した。

まだその明確なイメージは掴めていないが、昨日よりは理想に一步近づいたような

確かな感触を緑谷は感じている。

だが——足りない。

緑谷には疑問が生まれてしまった。

とても単純な疑問。

なぜヒーローになりたいのか。

緑谷の中に築き上げられていた確かな目標は崩れ去っている。

緑谷が憧れていたオールマイトはあくまでも一面に過ぎなかった。

オールマイトの様になりたいとは、今の緑谷には言えない。

ならば何になればいいのか。

なぜヒーローを目指すのか。

緑谷は自分の中の指針を再度定義しなければならぬと思っっている。

でないとこのまま流されて、何処にたどり着いてしまうのか分からなかった。

………

………

…

緑谷が考えている間に辺りの景色は変わっていた。

せせらぎの音が聞こえる。小さな小川が流れていた。

木々に囲まれたこの場所だけぽっかりと開けていて、小さな広場のようになってい  
る。

芝に囲まれたその空間はまるで平和を体現したような場所に思えた。

中央に月光に照らされた青い不格好な岩が鎮座している。

それは共同墓地の塔によく似ていた。

「お墓っ！」

緑谷の言葉に彼女は頷く。

墓に一輪の青い花をそえる竜胆。

墓の前に膝をつき手を合わせる彼女にならない緑谷も黙禱する。

誰のものに対しての物かはわからない。

けれども見た目からは想像も出来ないほど積み重なった年月を彼女から感じた。

ゆつくりと彼女は目を開けた。

「……人が死んだのさ」

「知りあいですか？」

「そうさ——あたしが殺した。」

最も本人は殺されたことにすら気付いていないけどね」

「……」

彼女はその場で立ち上がる。

視線を夜空へ向けた。宝石を散りばめたような空だった。

「毎日毎日、あたしはその子達を一人ずつ殺している。」

もう何千回とね。それは平和のために仕方ない犠牲なのさ。

頭ではそう分かつてる。だけど心の何処かあたしを咎めるのさ。

こんなあたしにも一応良心の欠片が残ってるのはおかしな話さね。

捨ててしまえるのならどんなに楽になれるか……。

悪いね愚痴なんて聞かせて」

「……僕には、良く分かりません」

「まあ、そうだろうね。要領を得ない話だろう？」

「でもその心は、良心は捨てちゃいけないモノなんだと。」

「そう思います」

緑谷は彼女の目を真つすぐ見て話した。

彼女の目が丸くなる。

緑谷には確かにあまり分からない内容だった。だが仕方なく人を殺してしまつて、それに罪悪感を感じているのを痛いほど彼女から感じた。

その様子は余りにも痛々しくて目をそらしたくなりたくらいで。

彼女の小さい体がより一層小さく見えた。

彼女の口が開いた。

「……いずれ本当の事を話す時が来るさ。」

遠からずね。緑谷出久。

あんたはワンフオーオールを継承したんだ

否応なしにあたしや将臣とあんたは関わっていかざるを得ないのさ」

「将臣?」

「法月の事さ」

短く竜胆は返す。

緑谷は一つ頷いた。

「あなたは法月と関わりが……。そうか、モルグフ孤児院は」

「そうさ、法月とあたしが作った場所さここは。あたしは法月の妻だよ」  
「妻!」

思わず大声を出してしまった緑谷。

「あたしとまさ……。法月と同一年さね。」

別居してもうだいぶ経っているけどね。

ねえー幾つにみえてたのかなあー? おにーちゃん?」

からかうような口調で緑谷に言い寄って、体を寄せてくる彼女。

いたずらっぽく笑顔になりながら、服の端をチラつまんだ。

健康的な美脚が見えて緑谷の煩惱が揺れ動いてしまう。

「くっ!?!」

(そんな……。物語の中だけだと思ってたのに、ロリバ……。)

「誰がロリババアさね!?!」

(自分でいつちやったよこの人！)

さらつと彼女に個性で心を読まれたのだが、緑谷はその事に気づかない。

先ほどとはまるで反対の脱力しきった空気になった。

はあと一旦緑谷は息を吐いて彼女は「……こほん」と咳払いする。

頬が少しだけ赤くなっていた。

「とにかく！ 力には相応の責任が伴う。

それを忘れない事さね。

さつき言った通りあんたは、あたしや法月と関わって行くしかない」

「そう言えば僕と話がしたいって呼んだんですよね？ ……一体何で」

「何って継承者だからね。本人と直接会話して見極めたいと思うのは普通だろう？」

まああんたが相応しくなかったら、別のやつに継承させることも考えていたさね」

彼女の言葉に緑谷は鼓動が早くなる。

竜胆の目は先ほどの優しい目とは打って変わった、打算的な目になっていた。

緑谷を何処までも冷たく見定めている。

(この人……間違いなく「ワン・フォー・オール」継承方法を知っている)

緑谷は彼女の言葉に思い出した。

それは入学した日の法月とのやり取り。

——とんだ拍子抜けだぞ緑谷！

オールマイトが選んだというからには、少しは期待していたが結果これか……

——<sup>ヴァイラン</sup>敵とはいったい何かをな。

その根本を押さえていない者が、ヒーローになるから社会は墮落する。

容易にヒーローから <sup>ヴァイラン</sup>敵に落ちぶれる。

そして平和の象徴とやらに、縋らなければならなくなるのだ

結局緑谷は法月の問いに答える事が出来なかつた。

法月はそれで許してくれた。だが他ならぬ緑谷自身がそれでは駄目だと今思った。

<sup>ヴァイラン</sup>敵とはいったい何か。

その答えを自分なりにでも出さないといけない。

<sup>ヴァイラン</sup>この人なら法月のあの問いの答えを知っているかも知れない

敵とは何か

緑谷が考えても結局分からなかつた答えをこの人なら知っているかもしれない。

何かヒントくらいは得られるかもしれない。

<sup>ヴァイラン</sup>「敵とは何かだつて？」

緑谷は法月にその問いを投げかけられた経緯を竜胆に説明した。

「あーまだやってたんだね将臣のやつ。」

ちなみに俊典……オールマイトも同じだったさ。  
でも結局分らないまま。

結局将臣が求めている答えは未だ誰も分らないままなのさ」

「竜胆さんの意見を聞かせてください」

「果たして参考になるかねえ？」

「お願いします」

竜胆は懐からパイプを取り出した。

緑谷に一言断ってからパイプの先に火をつける。

タバコとは違う匂いがした。それは彼女が常用している葉を兼ねたアロマだ。

「……あたしが思うにはね、敵とは理不尽ザイランそのものの事さ」

「理不尽そのもの？」

「緑谷出久、あたしらが真に戦うべきなのは一体なんだと思う？」

あたしはそれは理不尽そのものだと思っている。

人は色々な場面で理不尽な目に遭うものさ。

差別や偏見だったり、貧困だったりする。

大抵の人間は最初反射的にそれに抗おうとする。

でも時に人はその理不尽に抗うことをやめる。



そして人は理不尽なものになっていくのさ」

人はどうしようもない理不尽には屈するしかない。

それは個人の心が弱かったり環境がそうさせたりする。

彼女は緑谷にいじめを例に挙げて説明した。

いじめは明確に理不尽で許されてはいけない事だろう。

だが周りの人は度々それを見過ぐす。

その原因は空気を読まないといけない事だったり、いじめられている人に不快感を

元々持っていたり色々ある。

だが理由はどうあれ人はその悪行を見過ぐすことが有るのだ。

理性的に考えたら止めるべきなのに止めない。

竜胆は言う。

いじめをしている現実に屈服して傍観者に徹する。

それはいじめという理不尽を成立させたと言えないだろうか。

いじめその物になったとは言えないのだろうか。

竜胆は孤児院の中でいじめの問題があつて悩んでいたという。

今でも時々起きている問題らしい。

理不尽から救われた子供達ですら、いじめという理不尽を引き起こしてしまう。

人の苦しみや悲しみを分かっているもなお、人は加害者に回る。その現実が緑谷には悲しく思えた。

「……つまり、人が敵になる原因そのものの理不尽。

それを無くしていかなければならないと？」

「かいつまんで言えばそういうことさね。」

だから、あたしは此処を作った。

<sup>ウイラン</sup>敵になつてから捕まえるより、最初から敵にさせない事こそがあたしは重要だと思つてゐる。

オールマイトは平和の象徴になることで、それを果たそうとしたという事だね。

出る杭を打つただけでなくそもそも、杭自体出ないようにしないといけない」

「ならヒーローがやっている事は、間違ひなんじゃあ。」

元々敵のシアンさんはあんなに親切な人で……」

「勘違ひしちやあいけない」

緑谷のその言葉に竜胆はきつぱりとした言葉で返す。

「シアンを見て敵に対する印象に変化は確かにあつたらうさ。」

実際シアンはこつちが心配するくらい良い奴さね。

子供達もなつているよ。

でも敵が全員シアンのように元々善良な人だという訳じゃない

むしろシアンのようなやつは極々少数さね。

いかにも敵らしい人間のクズも当然いるのさ。

ヒーローの中にも人間のクズがいるのと一緒。

何も変わりはないよ。

そして、環境や経緯はどうあれ、敵になることを決めるのは最終的には本人自身さ。

だから同情なんてする必要はないし、してはいけない」

「でも……」

緑谷の心の内は煮え切らないままだった。

ここ数日で様々な人達から言葉を貰った。

オールマイト、法月、シアン、竜胆。そして青の少女。

彼らの言葉と行動はそれぞれ少しずつ違っていて。

たがその誰にも緑谷は信念を感じていた。

「ヒーローになるからには敵は倒すべき敵。

そこは間違えちゃあいけない」

「……知り合いが言っていたんです。

オールマイトは暴力で押さえつけているだけだって。

オールマイトは暴力を振るっているだけだつて」

緑谷のアズライトの言葉<sup>ツイラン</sup>を思い出した。

——結局の所、彼は敵<sup>ツイラン</sup>を暴力で押さえつけていただけ。

確かにそれで平和は訪れたわ。

けれどもオールマイトは、敵<sup>ツイラン</sup>に歩み寄る事はしなかった。

敵<sup>ツイラン</sup>を理解しようなんて、彼は考えもしなかった。

だけどね緑谷君。

お互いに理解し合わない限り、本当の平和が訪れることは永遠に無いわ  
彼女の言っている事は正しいのではないかと思つてしまった。

だがそうとは認めたくは無かった。

それは何かが違うと緑谷の中で受け入れる事が出来なかった。

「おや、それは随分ひねくれた奴だね。

うーん、でもそれは違うと思うなあ。

知っているかい？

あのシアンはね、オールマイトに救われたんだ。

実はシアンはオールマイトに憧れているんだよ。

本人は認めようとしなないけどね。

確かにヒーローは敵ザイランに振るうものは暴力さ。

でもね時には人間、暴力で救われることだつて有る。

暴力でしか救われない事が有るのさ。

本人がそれを望んでいる時すらもある。不思議なものさね」

竜胆が踵を返して元来た道へと歩いていく。

緑谷もそれに並んで歩いた。

遠くで虫の声が聞こえてくる。足音の小枝が踏まれて折れてパキツと音を鳴らした。

上を見たら満天の星空が、木々の梢の杵に縁どられている。

「人間必ずしも話し合えば分かるほど物分かりが良くない。

なら殴つても敵ザイランを正しい道に戻してやる。

それがヒーローつてもものじゃないのかな？」

緑谷を見つめてくる彼女は、シアンとはまた違った綺麗な顔をしていた。

妖艶に薄く笑う彼女の表情に、深い闇を抱えているのが緑谷にすら見える。

彼女は理不尽に屈服しながらも、理不尽と戦い続ける事を選んだのだと緑谷は思う。

きつとそれは誰にでも出来る事では無くて、同時にどこまでも弱い人間の在り方だ。

彼女は人を殺したと言った。

彼女は完全に正しくは生きられなかったのだろう。

緑谷は思う。

人間は弱い。必ずしも正しくは生きられないし、間違いを犯す。

ヒーローとは元々理不尽に屈さない、強い存在だから格好いいのではない。

元々弱い存在が奮い立っているからこそ格好いいのではないかと。

人間が弱い存在だからこそ、醜い存在だからこそ、人々は憧れるのではないか。

人々を助けるヒーローという存在に。

——私が笑うのは、ヒーローの重圧そして内に沸く恐怖から己を欺くためさ

初めて会った時オールマイトは緑谷にそう言った。

(そうか……オールマイトだって怖いんだ)

オールマイトだって恐怖する。最初から強い存在なんかじゃない。

オールマイトも世界の理不尽に飲まれる一人の弱者に過ぎないのかも知れない。

絶対に負けないオールマイトは居なかった。

それは緑谷が勝手に作り上げた幻想に過ぎなかった。

そんな空想を抱いて裏切られたと勝手に失望して。

——そして平和の象徴とやらに、縋らなければならなくなるのだ

(僕はオールマイトに縋っていただけなんだ)

ならそれは終わりにする時だと緑谷は決意する。

ヒーローが格好いいのは決して理不尽に負けないからなんかじゃない。

弱さと必死に戦い、それでも尚強く有ろうとする姿が格好いいのではないか。

緑谷は心に刻む。ただヒーローになるのではなく、この世界の理不尽に向き合って行きたいと願う。

具体的な道はまだ見えない。

まだ先は長いだろう。だが緑谷の中の迷いは少しは晴れた。

きつとこれから先、何の悩みもなくなつただヒーローになる事は出来ない。

でも自分の今やっている事は少なくとも間違ひでは無いのだと。

緑谷はそう思う事が出来た。

後ろに小さく見えている青い墓標が、星の光で煌めいていた。

## 第20話

side —— 青石ヒカル ——

「う…………ん」

青石ヒカルの意識が暗闇から浮上する。

だが目に飛び込んでくる光景はおよそ現実の物とは思えなかった。

どこまで暗黒の世界。遠くに無数の光の粒が光っている。

それは無数の星の光だった。

「(ハハ)は……………」

彼女の傍には誰も居ない。

重力も無い空間をただ彷徨い浮いている。

宇宙の中に一人取り残されたらこんな感じになるんだらうかと彼女は考える。

ふと目の前に光が集まっていく。それらは淡い青になって弾けた。

光がはじけた後、一人の女性がそこに居た。

絹のような髪が煌めく。星が散りばめられたようなドレス。

彼女の目がゆっくりと開いて、青石ヒカルの意識がの目と合った。



空の色と同じ色の澄み渡った青だった。

「あなたは誰？」

青石ヒカルが問いかける。

「……」

彼女は何も言わない。

だが表情だけで彼女の青石ヒカルに向けている感情は分かる。

女性は明確に青石ヒカルの事を憐れんでいた。

「答えて！」

青石ヒカルが強く声を上げる。

目の前の知らない彼女が口を開いた。

「此処から離れてしまえば忘れてしまう貴方に答える理由が有るか、それは分からない。

けれど答えよう。星はステラ」

「ステラ？」

ステラと名乗る彼女は頷く。

「それは人の言葉で“星”を意味する。星その物である星は自分をそう呼んでいる」

「……ステラさん、ここは何処なの」

「ここは全てが始まる原典にして全ての終わりの果て。全ての概念がここに在り、どの

ような存在もやがてはたどり着く。

何処でもない場所。あの世とこの世の狭間。存在と無の地平。あなたはたった今、始まりを享受した。よつて星<sup>ボク</sup>あなたを星<sup>ボク</sup>に迎えるために来た」

「言っている事がよく分からない」

「知っている」

青石ヒカルは周囲を見渡して考える。

目の前の人のいう事が事実ならここは……。

「……………は現実では無いんだね？」

「そう、あなたは忘れてしまう。でも、小賢しい法月らに邪魔されてもアズライトの本質は変わらない。人類のせいで星<sup>ボク</sup>も限界に近い。

一刻も早くその存在理由を果たしてもらおう」

「人の為に誰かの為に……」

「違う。アズライトの本質はそうではない。アズライトは星<sup>ボク</sup>が作り出し人類に授けた力。だけど、それは人の為には決してない。

人の為に誰かの為に。その理念は後付け。

法月やアイリの手により、上書き、書き加えられたプログラムに過ぎない」

「え……………」

彼女の言葉に頭の中が真っ白になる。

——何処にでも行きたい、何処までも行きたい。

人の為に、誰かの為に。

世界の何処にでも、行きたい。

どんな人でも、居られるように。

人が広く、生きて行く為に。

心の中で何度も復唱して確かめる。

その夢は「青石ヒカル」であるための根拠その物だ。

自分が自分であるための確かな願望。

だが彼女はそれを後付けでしかないと言った。

全身が沸騰するような怒りが青石ヒカルを包み込む。

誰が何と言おうとその願いは本物。

個性から流れ出た願望だとしても、自身がそうなることを願っている。

だが……。

「では聞こう青石ヒカル。バイオウエア”Azurite”

人にインストールされたら死んでしまうその欠陥

なぜ長年に渡って修正できないのだと思う。

それを“レギオン”はなぜ認識しない。  
一度もおかしいとは思わなかった？」

「……………え？」

胸の内に抱えていた疑問が彼女に問いかけられる。

その欠陥について、一度もおかしいと思わなかった訳では無い。

だがバイオウエアそのものが分かっている事が少ない。

まだまだ未知の領域が殆どだ。

Azurite。それは人が作り出した人口個性。

人にインストールされてしまったら死んでしまうのは適性が必要だからだと。

まだ未完成な代物で、だから未だにアズライトの欠陥が残ったままなのだ。

そう思っていた。

けれども彼女の言う通りそれが欠陥でないのでないのなら？

いつまで経っても欠陥が見つけれられないのは、それが本質だからではないのか。

「……………いや、そんな。まさか……………」

「そう、インストールされたら死んでしまうその現象。

それは決してバグなどではない。

……………そろそろ時間が来た。では」

「待って！ まだボクは！」

声を上げる青石ヒカルに彼女は取り合わない。

そのまま彼女は青石ヒカルに背を向けた。

「次に会うときはまた別のあなたただけ。その時までさよなら」

「あ……」

青石ヒカルの目の前が真っ白にぼやけていく。

それは夢が終わって現実に帰っていく感覚に似ていた。

先ほどまで交わっていた会話の内容が、どんどん頭の中から抜け落ちていく。

真っ白な空間にやがて声が響いてくる。

彼女はやがて現実の世界へと戻っていった。

地下三千メートルの青の少女管理施設。

そこで彼女は覚醒していく。

目の前に見えるのは轟焦凍の顔。

彼女は彼に抱き着いた。

轟が驚きの声を小さく上げる。

なぜ抱き着いてしまったのか、彼女には分からなかった。

先ほどまでのやり取りは彼女の頭の中から消えていた。

だが言いようのない不安だけが心に残ったまま消えてくれなかった。

彼女は新しい生を迎えた。彼女は自覚していない。

竜胆の手により生まれ変わった人格であることを。

そして轟も気付くことは無かった。

……

……

……

side——オールマイト——

モルグフ孤児院の部屋の一つに明かりが灯る。

法月らが作ったこの孤児院は途轍もなく広い。

少なくともオールマイトにはとても把握しきれていなかった。

その複雑さはその気になれば要塞として立てこもる事も十分に可能だろう。

緑谷出久は今頃絵本の読み聞かせをしている頃だ。

竜胆に頼まれて、緑谷は快く引き受けた。

彼女の義理の娘である竜胆瑠璃りんとうるりも付いている。

きつと大丈夫だろう。

ちなみに緑谷は竜胆瑠璃にサインを求められていた。

何でもヘドロ事件の時その場に居合わせたに彼を知り、以来ファンになったのだと言  
う。

ヘドロ事件の動画もネット上に残っているし、多分繰り返し何度も見ているのではない  
だろうか。

あの時の彼の行動はオールマイトだけでなく、他の人達の心も確かに動かした。

(ヘドロ事件か……)

正直な所。

緑谷を後継者に選んだ理由は、オールマイトの私情が殆どを占めている。

見るからにひ弱で気弱な無個性の少年だった。

体を鍛えていない事など一目で分かった。

他にふさわしい人間などごまんというだろう。

その上、後でヘドロ事件で緑谷少年が助けたのが幼馴染であったこと。

それを知ったオールマイトは内心がっかりした。

てつきり見知らぬ他人を助けに飛び出したものだと、そう思っていたからだ。

あの場の様子を、もう少し注意深く見ていたら気づけたかもしれない。

だがオールマイトは気付かなかった。

オールマイトは思った。

もしかして緑谷少年は、知り合いだったから飛び出しただけなのではないか。

もし襲われていた人が幼馴染の爆豪少年ではなく、見知らぬ人だったなら。

果たして彼はあの場に飛び出したのだろうか。

もしかして見捨てていたのかもしれない。

そんな疑念が彼の中に渦巻いていた。

オールマイトはあの事件が、自分の手落ちで起きたものだとは自覚している。

だが緑谷少年に責任が無かったかと言うとそうも思わない。

緑谷少年もその事は分かっている筈だ。

それなのに彼がいつまで経ってもあの事件の事を反省する気配など、微塵も感じられなかった。

その様子を見たオールマイトの、緑谷少年に対する疑惑は更に深まっていった。

だがその事を自分が追及するのも変な話だと思った。

今更そんな事を言っても仕方ないことだ。

そうやって彼は自分を無理やり納得させた。

彼はあの日約束してしまった。

緑谷少年に自分の後継者になると。

その約束を破る事は彼には出来なかった。



少なくともあのヘドロ事件の時。彼は他の誰よりもヒーローだった。

だが……。もし緑谷少年が個性を持っていた人間だとして。

その個性である事件を解決していたら？

恐らく緑谷少年を後継者に指名する事は無かっただろう。

彼は無力な少年が動いたからこそ、その姿に胸をうたれた。

逆に言えば力をもっていたら心を動かされる事などなかった。

オールマイト、八木俊典は無個性だった。

彼は無個性である辛さを知っていた。

無個性だった緑谷少年に肩入れしてしまうのは、仕方ない面もあるだろう。

だが無個性の人と個性がある人が同じことをやったとしても、オールマイトは間違いなく無個性の人を称賛する。

それは明確に差別だとオールマイトは気付いている。

けれども彼の中に根付いてしまっているその価値観を変えるには、彼は余りにも年を取りすぎていた。

「わざわざすまないね、昨日の今日で」

「お呼びとあればいつでも伺います」

竜胆藍理<sup>りんとうあいらり</sup>。モルグフ孤児院の施設長がシアンに声をかけた。

シアンが恭しく頭を下げる。

オールマイト達がいる部屋は小さめの応接室。

部屋に居るのはオールマイトにシアンに竜胆藍理りんどうの三人。

その部屋には骨董品も絵画も何も飾られていない。

予算は無駄なくより多くの子供を救うために分配されている。

人を一人育てるにも金が要る。

この孤児院は切り詰めるだけ切り詰めた運営をしている。

余計な金を使う余裕などないのだ。

「シアン、あんたはもう少し断ることを覚えるべきさね。

毎日毎日忙しすぎて、てんてこ舞いじゃないか。

倒れてからじゃ遅いんだよ?」

「お心づかいありがとうございます。ですが大丈夫です」

「相変わらず硬いこと」

言葉を交わす二人をオールマイトは何もせず眺める。

竜胆の目がオールマイトに向けられた。

「——俊典、あんたもここがどういう所か。そろそろ分かってきてるんじゃないかい?」

ここは法月の設立した孤児院。

「……」  
「ただ法月だけじゃなくて様々な勢力の手が伸びている」

無論その事はオールマイトも気づいていた。

この孤児院に入所していたかつての子供達の行く末は様々だ。

ヒーローになるもの。様々な社会的な要職に専門職。

政治家になるものも外交官になる者もいる。

そして——<sup>ツイン</sup>敵になる者も。

目の前の竜胆藍理は、あらゆる勢力の者たちとパイプを持っているだろう。

無論、<sup>ツイン</sup>敵達とも。

「竜胆様、あなたが招き入れたのでしょ」

「あは、ばれた？」

「……」

再び会話を始める二人を尻目にオールマイトが考えるのは過去の事。

法月に命令されたまま青石ヒカルを痛めつけた日々の事だった。

昨日の夜やたらとその事ばかりを思い出してしまっていた。

その時何かに頭をかき混ぜられるような不快感があった。

そしてなぜかそれに緑谷少年が関係しているように思えてならなかった。

頭の中に繰り返される過去の映像。

記憶の中の青の少女をオールマイトは思い出し――

「俊典、あんたまだ自分を責めているのかい」

「つー……読心」

竜胆が冷め切った目でオールマイトを見ていた。

シアンや緑谷少年に向ける目とはまるで違う。

ゴミでも見るような蔑んだ目だった。

「いい加減割りきりなよ。」

あの子の人格は百万近くに個性と共に分裂していた。

まともな状態にするには普通の方法では不可能だったさ。

痛みで人格と個性を無理やり分離させ、人格のみを蒐集し融合。

元の人格とまではいかなないもののそれに近い人格に再生する……

全く骨の折れる仕事だったこと。

ただでさえ精神をいじる時には神経を使うのに。

法月と交代でやらなかったら過労死してたかも知れないね。

まあ、もしあれをしなかったら。

バラバラになったままのあの子は、また暴走して今度こそ世界の終わりになっていた

さね」

「ですが私は……」

「彼女が言う通りだと頭では理解している。

だが納得はしていない。

自分を純粹に慕っていた少女を、命令のまま痛めつけてしまった。

だが……

「そうやって一度躊躇した結果、人は死んだ。

数千万の人間がね」

「くっ……」

そう、十年前の災厄。あの時暴走し始めたばかりの彼女の傍に、オールマイトは居たのだ。

泣き叫ぶ彼女をオールマイトは必死に励ました。

彼女の個性の暴走を抑え込む法月と竜胆の横で。

オールマイトは最初、言葉を掛ける事しかなかった。

法月や竜胆の言葉を無視し続けて。

そしてやがて抑えきれなくなった彼女の個性が世界中に被害をもたらした。

「俊典、忘れたとは言わせないよ。」

あの場であたしと法月が抑え込んでいる内に。あんたがさつきとあの子の手足の一本や二本をぶつ飛ばしていたら、あの事件は起きなかつただろうに。

あんたが躊躇したせいで数千万の人が死んだんだ。

子供を殴ることなど出来ないって。

痛め付けることは出来ないって。

その甘えがどれだけの惨劇をもたらしたか。

ナイトアイは死んだし、あたしもあの子にぶつ飛ばされて死にかけた。

結果的に解決したのがあんただったのは皮肉だよね。

最もそれが分かつているから、引き受けたんだらう？」

そう、結果的に解決したのはオールマイトだった。

彼は暴走する彼女の前から一度は逃げ出した。

だが青に包まれていく世界。

そして街で起きている惨劇を理解してからやっと彼は彼女の所に戻った。

もう少し来るのが遅れていたら相澤も死んでいただらう。

「俊典があの子にした仕打ちは確かに残酷さね。

でも、あんたがやることでたったの一週間で終わることが出来た。

他の人間がやったのでは最低半年はかかる計算だったからね。

あの子が俊典になついていたからこそ、個性と人格の分離は手早く進んだ。あんたがやることで、むしろあの子の負担は大幅に減つたんだ。

むしろ感謝すらされるべきさ」

竜胆の言葉はオールマイトに半分も届いてはいない。

オールマイトはきつぱりと言った。

「どんな理由が有つても、私がしたことは決して許されることではない」

竜胆はため息をついて「そうかい」と言つたつきり。

しばらくの間、沈黙が場を支配する。

オールマイトがその沈黙を破った。

「竜胆さん、本題に入ってもらつていいかい？」

「……今日呼んだのは他でもないあの少年のことさね。」

昨日見ていてどうにも気になつたものだからね。

じっくり見る機会が欲しかったのさ」

「緑谷少年ですか。ですが、珍しい。」

竜胆さんがここまで目をかけるとは」

オールマイトの言葉に竜胆が少し間を置いて質問した。

「……俊典、一体何処であんなな化け物拾つてきたんだい？」

「——は？」

……

……

…

side——竜胆藍理——

竜胆の言葉に少し経ってシアンが口にする。

「緑谷様……。ごく普通の少年にしか私には見えませんでした」

シアンの言葉に竜胆は首を横に振って否定した。

「あれが普通だって？ とんでもない。」

あれが普通だと言うのなら。この世界はとつくに終わっている」

どうにも腑に落ちない様子の子のシアンとオールマイト。

竜胆は部屋の隅のホワイトボードを引つ張り出した。

キュツとマジックペンのキャップを外す。

「分かりやすく説明してあげようか。」

普通の雑魚ヴィランの強さを5としよう。

あたしの見立てでは大体普通のプロヒーローは20から30。シアンで100前後。

オールマイトや今は居ないオールフォーワン辺りで1000前後と言った感じだね」



どこぞの竜の玉を集める漫画を思い出させる強さの指標。

ホワイトボードに書き込まれていく棒グラフに数字に名前。

子供達に勉強を教える事もある彼女の字は綺麗で見やすかった。

「そしてあの少年の潜在能力は少なく見積もって。——53万は下らない」

竜胆の言葉に場が静まり返る。

互いの呼吸すらも聞こえそうな静寂をシアンが破った。

「竜胆様、冗談はよして下さい」

「冗談じゃないんだなーこれが……」

深々と息を吐く竜胆。それにオールマイトは

「確かに緑谷少年は私の個性を継承したが」

「そういう問題じゃないさね。あたしの個性は知っているね」

二人ともその言葉に頷いた。

「Reason……説明されても

いまいち分からない個性ですが」

「その通りさね、この個性は使用しているあたしも全貌が把握仕切れていない。

バイオウエアとは、ほとんどオーパーツ的な代物なのさ。

学者どもは理解しているつもりでいるけどね。

まあ、つまりはDNAの理解度と同じようなもの。

ある程度の情報を読み取ったり、変更したりすることはできる

でもDNAを全て一から設計して望み通りの生物を作ることには出来ない。

それと同じようなもの。

つまりはおもちゃを与えられて、いじり回しているだけの子供と同じなのさ」

彼女はホワイトボードの文字を消しながら続きを話し始める。

「Reasonとはつまり道理……ありとあらゆる<sup>ことわり</sup>理<sup>ことわり</sup>」を支配する個性さ。

ただこの個性はインストールされた人の資質にあわせて変化する。

その結果あたしは精神の理を見たり変更することに秀でた個性になった。

やろうと思えば結構色んなことが出来るのさ、この個性。

だからあの少年が幾つか個性を内包していることがあたしには分かった。

少なくともあの少年には今3つの個性が宿っている。

それがどんな個性なのかは、分からなかったけどね」

……

……

……

side——オールマイト——

ホワイトボードを消し終わった竜胆にオールマイトが声を上げる。

「馬鹿な！ 緑谷少年は確かに無個性だったはず……」

確かに緑谷出久の個性届では無個性だった。

ヒーローの権限や法月に問い合わせて確認したから間違いない。

継承した後に“超。パワー”に変更されたが。

だが竜胆の言う事が本当なら、継承されたときに既に個性が二つ宿っていた事になる。

つまり――。

（私を……騙していたのか？）

竜胆の口が動く。

「あたしの目は確かさ。そして問題は個性の数だけじゃない。

その力が内包している力さね。

あんなに強力な力は一度しか見たことがない」

「まさか」

「そうさ、あの少年が今宿している力は……あの青の少女に匹敵している」

その言葉に場の空気はいよいよ深刻になる。

青の少女の力は世界を滅ぼしかけた。

彼女の存在は、スターレインを迎撃するために許容されているだけだ。世界をたつた一人で揺さぶってしまふ冗談のような存在が青の少女だ。それに匹敵する力を有しているとなると、これは尋常ならざる事だ。

「……その事に法月は」

シアンがボソツと口にする疑問。竜胆が答える。

「気づいているんじゃないかなあー?」

「少なくとも私には法月様は何も言っておられません。」

なぜ、何も手を打っていないのでしょうか」

「打てないのさ、打つ手なんてないよ。」

あの子みたいに最初から管理されて育った存在ではない。

下手に何かして破局的な事態を招く結果になったらどうするさね?

やぶ蛇は避けるべきだろう。今のところは様子を見るべきさ。

だから法月も様子を見ているんだらうね」

その後言葉を交わしているシアンと竜胆。

だがオールマイトはそれに気が回らない。

かれは先ほどの竜胆の言葉だけが響き続けている。

緑谷少年には個性が現時点で三つある。

彼女のいう事ならまず間違いはない。

どうやって身に付けていたのかは分からないが、オールマイトを騙していた可能性は当然ある。

——個性がなくてもヒーローは出来ますか!?

だがあの日の緑谷少年の言葉が嘘だとは到底思えない。

嘘ではないのだとしたら、青の少女に匹敵する力を、彼自身が認識していない事になる。

とても危険な状態にある事は明白だ。

「俊典」

「何か?」

ふうと彼女が一息入れて声を掛ける。

「……明日のヒーロー基礎学に気をつけな」

「……何かが起きると?」

「さあねー……とにかく気を付けるんだよ。」

あたしに言えるのはそれだけさね」

「……」

何かはぐらかすように返事を返す竜胆。

オールマイトはそれを見つめる。

「世界は今変わっている。」

法月もベレンスもセルリアも……皆目的のため動き出している。

他の連中も虎視眈々と伺っているのさ。

スターレインを切り抜けた後の世界。

その覇権を握らんとね。

あの子が計画通りすんなり死んだりすることは、まずあり得ないと見ていい。

本人が了承しようしないと関係ないさね。

あの子の力を狙って色々な勢力が絡んでくるのは疑う余地もないよ。

あの子を支配することはそのまま世界を手にする事と同義だからね」

その言葉にシアンが深々と同意して頷く。

シアンは青の少女に信頼されている。

いざとなったら青の少女はシアンを守るために世界を滅ぼすかもしれない。

それほどの信頼関係が二人の間にある事を法月から聞かされている。

シアン自身、青石ヒカルの為になら命を投げ出すだろう。

「俊典、あんたはどうするんだい？」

まさか継承者に全部投げっぱなしかい？」

「私は……」

答えは出せなかった。オールマイトに残っている力は残りかすに過ぎない。使えば使う程、否何もしなくても時間が経てば消えていくだろう。

そうなればオールマイトも個性が無いただの無個性の一般市民になる。一体そんな体で何が出来るというのか。

「まあ、どうするかは全てあんた次第さね」

その言葉の境に三人には会話が無くなった。

無言で部屋を出ていく三人。

緑谷少年が読み聞かせをしている大部屋まで黙って歩く。

やがてその部屋の近くのドアで緑谷少年の声が聞こえてきた。

「猫は、白い猫の隣で静かに動かなくなりました。」

猫はもう、けっして生き返りませんでした。……おしまい」

絵本をぱたんと閉じる緑谷少年。

「ほら、みんな拍手」

赤毛の少女が子供達に呼びかけて、まばらな拍手が起こる。

その話の結果に泣いている子供もいた。

その絵本のタイトルは『100万回生きたねこ』。

オールマイトも内容は知っている。

死んでもまた別の場所で蘇り、生き続けた不死身の猫の話。

とても興味深い内容だと彼はその本を評価していた。

「何で猫さん死んじやったの？ また生き返ればよかったのに」

「何ででしょうね？ その訳を一緒に考えましょう」

「瑠璃おねえちゃん……うん！」

緑谷少年と同じ年くらいの美形の少女。

彼女は竜胆瑠璃<sup>りんどうるり</sup>。

歌手としてもデビューしており、知名度も中々なものだ。

もともとオールマイトは全くどんな曲か知らないのだが。

緑谷少年とオールマイトの目が合う。

オールマイトは視線をすつと逸らした。

オールマイトの中に緑谷少年に対する疑惑が湧き上がって止まらない。

強固な信頼関係にあつた二人は、静かに引き裂かれ始めていた。

互いに少しずつすれ違う心をどこかで感じている。

合格発表の夜と同じように、月は今日も窓の外で輝いていた。



## ※第21話※

side——青石ヒカル——

雄英高校 地下三千メートル 「青の少女」管理施設にて

「轟君、何も言わずボクについて来て」

青石ヒカルの言葉に轟は同意した。

それを見た彼女は部屋の外へと歩き出す。

轟もそれを追っていく。

雄英高校の地下に大規模な建造物が存在していること自体極秘事項だ。

その建造物はアークロジィ『アクアリウス』。

生産と消費活動がその建物内で完結しており、一つの閉じた惑星そのものだ。

地球上に増え続ける人口。深刻な環境破壊に枯渇していく資源。

更には個性と言う異能の出現。

例えばスターレインを無事に乗り切ったとしても、人類がこのまま繁栄を謳歌できることとはあり得ない。

今のままでは、いずれ破綻が訪れる事は確定している。

そして、それに対抗するプロジェクトが立ち上がった。

この雄英高校の地下のアーコロジーは、限られた居住空間に人類を住ませ集中的に管理する事が可能だ。

そうして限られた資源を循環させて社会を運営していく事が出来る。

例えばスターレインの迎撃が失敗に終わったとしても、人類が生き残れるように保険としての意味合いも含んでいる。

青石ヒカルは後ろを振り向くことなく通路を進んでいく。

彼女が居なければ間違いなく轟は迷子になっているだろう。

彼は初めてここに来たばかりなのだから。

歩くこと数分。

電子ロックで封鎖されたエレベーターの前にたどり着く。

青の少女が生体認証でロックを解除して中に入る。

青石ヒカルは自分だけで地下三千メートルより上の階層に上がる事は許されていない。  
い。

だがそれより下の階層に降りる事は許されている。

そして二人はエレベーターで更に下へと向かう。

そこは法月と青の少女が居なければ入る事が出来ない。

雄英高校の地下五千メートルへと。

「なんだこれは……」

雄英高校 地下五千メートル。

そこは雄英高校のアーコロジーの最深部。

目の前に広がっている光景に轟は絶句していた。

透明な円柱状の培養器が何列にも渡りズラツと並んでいる。

それらの円柱の中一つにつき一つずつ何かが浮かんでいた。

それを注視してしまった轟は猛烈な吐き気に見舞われる。

人の脳髄だった。

培養器に入っている脳髄からは細いケーブルのようなものが何本か伸びている。

人間の脳が培養器に入れられて、体育館ほどの大きさのそのフロア一帯に所狭しと敷

き詰められている。

あまりに醜悪すぎる光景だった。

「ごめんね、びつくりしたよね。でも轟君には見ないといけないと思って」

「何なんだよコレは……!」

「ボクの個性の事は聞いたんだよね?」

「……ああ」

轟が首を縦に振ったのを青石ヒカルは見えて頷く。

「ボクの個性は“電脳感覚”の個性が“現実”にも影響を及ぼすようになったモノ。現実をボクのイメージに同化する。その現実を電脳として扱える個性。

つまり“現実”を情報として扱い、アクセスしてハッキングしているんだ」  
青石ヒカルの個性アズライト。

現実を情報として扱い改ざんする個性。

セルリア達の説明では現実をイメージに同化する個性だった。

だが言い回しは違っても結局は同じことだ。

イメージとはすなわち脳の中で起きる演算結果に過ぎないのだから。

轟は少し考えて頷く。

「つまりボクの個性はコンピュータで対策できるんだ。

と言っても並みの性能じゃ対抗できない。

ボクの個性を抑え込むために必要な演算能力。

それを得るためのコンピュータを作る方法はたった一つだった。

それがこれ。量子コンピュータ『ラピスラズリ』。

元々このアーコロジーを運営する為に作られたシステム。

人の脳を核としたコンピュータだよ」

「……」

轟の口からは何も言葉が出てこない。

青石ヒカルを見つめるが、彼女は何も言わない。

ただ悲しそうに目の前の培養器に浮かんでいる脳を見ている。

少し時間が経って彼女が口を開いた。

「今日ね、轟君とセルリアから聞かされた時、凄くびっくりしたんだ。

嬉しかったよ。

本気でそんな事をしようなんて人、今まで一人も居なかったから」

轟は口を開かない。

目だけで青の少女に返事を返す。

彼女のその白ワンピースは監視装置でもある。

迂闊な発言は出来なかった。

だから彼女もなるべく直接的な言葉は出してこない。

「でも。駄目なんだ。

このコンピュータシステム……『ラピスラズリ』でボクを抑え込める範囲は、雄英高

校とアークロギーに居る時だけ。

それも地上に出たら効果が弱くなるから、本当なら雄英に行く事も危険なんだ。

外に出てしまつたらボクの中のアズライトレキオンが世界中に広がってしまう。そしたら十年間と同じ……ううん、もつと多くの人が死んでしまう」

「その事をセルリアは……」

「セルリアはきつとこの事を知らない。」

ボクの服はあくまでも追加の保険。

ないよりかは有つた方が良いつて程度の効果しかないんだ。

こんな服一つでボクの個性を抑え込める訳ないつて、セルリアなら分かる筈なのに」  
「お前は……」

——外に出たくないのか

そんな言葉を必死に飲み込んだ。

轟も分かっている。

青石ヒカルが外の世界に抱く憧れの強さなど。

呆れるほど窓の外を眺めて、空を見上げている様子を見ていたら嫌でも理解できる。  
「ボク一人のせいで沢山の人が犠牲になつてる。」

ボクは……ボクの力はボクのためじゃない。

この個性はボクの力なんかじゃない。

ボクには、この力を持った責任が有るんだ」

.....

.....

.....

side——緑谷出久——

「.....来たわね」

青に染まつている電腦空間に緑谷出久は来ていた。

目の前の緑谷のアズライトが柔らかく微笑む。

長い青の髪が揺れ、同じ色の目と視線が合った。

緑谷は気恥ずかしくなって目をそらす。

孤児院から帰ってきた出久は、夕食を済ませたら体力の限界がきてすぐに横になつた。

そしていつの間にかこの場所に居る。

電腦空間に来たのは今回で二回目だ。

前回はオールマイトの記憶をアズライトに強制的に見せられた。

今日は一体何をする事になるのだろうか。

緑谷は切り出した。

「君の事を聞いたよ」

「ええ、Azurriteの事ね。知っているわ」

「セルリアさんが言っていた事、あれは」

「ええ、全部事実よ。そして私の正体は何なのか。分かったんじゃないかしら？」

「僕の考えが正しいのなら君は……。十年前の災厄で世界中に広がったアズライト……かな」

「ふふ。その通りよ」

セルリアと法月に説明された内容を思い出す。

個性とは人間と言うハードウェアにインストールされるソフトウェア。

“バイオウェア”と呼ばれるものである事。

Azurriteは青石ヒカルの同化の個性で無理やり入れられ。

そしてその個性は群体となり世界中に拡散した。

拡散したアズライトは暴走して電子機器を乗っ取り、

アズライトをインストールされた大勢の人が死亡する事になった。

それが十年前の災厄『青の世界』の真相。

アズライトをインストールされて死亡する症状が“昏睡病”。

緑谷は後から聞いた話だが、拡散したはずのアズライトの痕跡が世界中の何処にも見



当たらないのだという。

そして世界中の“昏睡病”の患者に起きた個性消失。

アズライトに昏睡病患者の個性。一体それらは何処に消えたのだろうか。

Azuriteは嚴重に管理されている。

それが世出たのはただの一度だけ。

彼女がなぜあの共同墓地に居たのかは分からない。

緑谷はほぼ確信を持っていた。

十年前の災厄をもたらしたアズライト。

その残滓が彼女だろうと。

「……十年前まで、私は人間だったわ。

日の光も、空の高さも、土のぬくもりも。

世界の事を何も知らされないまま、私は育てられた。

当時は私自身、個性と人格しじぶんが融合している事に気づいていなかった。

そして十年前私は“レギオン群体”になって世界中に広がったの。

大勢の人たちを私は殺めてしまった。

……『私』はあの時『私達』になった。

今ここに居る私は、世界中に散らばった数千万の私達が一つに融合した姿。

“昏睡病”で倒れた人達の個性も全て巻き込んだ上でね。

あの青石ヒカルは、十年前に分裂した私達の一人に過ぎないわ」

「なら君は……君も青石ヒカルと同じことが出来るの？」

青石ヒカルと同じあんな出鱈目な事が」

「……さあどうかしら？」

「……」

緑谷は青の少女を見てみるとオールマイトに託された願いを思い出した。

あの子を救ってやってくれと頼まれた。

きつと目の前の彼女は、本物であり、同時に本物でない。

分裂するまでのルーツは同じでも、そこから先は別人になった『青の少女』だ。

「本物の『私』なんてもう何処にも居ない。

少なくとも今ここに居る私はアズライトと言う“個性”でしかない」

彼女の独白を聞く。

彼女の言う事が本当なら、彼女は人間から個性へと変化した存在だ。

肉体は既にある。そして名前も付けられないまま彼女は人間から個性になり果てた。

——いずれ名前を付けてもらう事になるけど、今はそれで良いわ

彼女は今まで自分の名前と呼ばれたことすらなかった。

生まれながらに閉じ込められて、そして電腦空間を彷徨う存在に彼女はなった。

「——それはどうなんだろう。君は人間だったんだよね。」

君をただの個性と扱うなんて出来そうにないけど」

「私が人間だったのは十年前の話。……本当は誰にも分からないのかも知れない。人間とは何かなんて。」

……さあ今日こそ始めましょうか」

「戦闘訓練……だね」

「ええ」

緑谷のアズライトが手を振りかざす。

一瞬で辺りの景色が変化した。

「( )は……」

「市街地演習」

緑谷がいる場所はアズライトが言っている通り、雄英高校の敷地の市街地演習だ。

あくまでここは電腦空間なのでそれを再現したものだが。

現に、今は夜の筈なのに空には煌々と輝く太陽がある。

「今回はとりあえず一対一で戦いましょうか。」

この電腦空間では、人が想像しうるあらゆる事が出来る。

ここで積んだ経験はちゃんと、あなたの脳と神経にフィードバックされるわ。現実の体を鍛える事こそ出来ないけど、体と個性の使い方ならいくらでも学べる」そんな時、彼女の短いスカートが少しだけ気になってしまふ。それにアズライトが目ざとく気付いた。

「お望みと有れば、男の子が考えそうなムフフな事だつて出来ちゃうけど。

——する？」

景色がまた切り替わる。どこかのホテルと思わしき一室になる。キングサイズのベッドにアズライトは腰かける。

スカートの端を少しつまんで、ふふつといたずら気に微笑んだ。

「しないよー」

緑谷は顔を真っ赤にして即答した。

「ええ、それでこそ私の主人よね」

景色が再び市街地演習に戻る。

アズライトがその場を軽くジャンプして構える。

それを見て緑谷も戦闘の構えをとった。

彼女の構えはオールマイトに酷似している事に緑谷は気付いた。

「さあ行くよ。最初は軽くオールマイトくらいのものでやるわ」

「ちよっ!? 軽くってレベルじゃ……」

アズライトが緑谷に突っ込んでくる。

そして容赦のない右ストレートを緑谷の顔面に放つ。

何とかそれを屈むことで回避。

緑谷の背後のビルの窓が衝撃波で粉々に砕けた。

緑谷も“ワン・フォー・オール”の力を使って応戦する。

個性を右拳に集中し、目の前の彼女めがけ殴ろうとし……一瞬躊躇する。

だが彼女の顔が躊躇したことを明らかに咎めていた。

緑谷は迷いを振り切って全力で拳を振りぬく。

彼女の腹の辺りに狙いをつけて。

「SMASH!」

暴風が市街地を突き抜けていく。

だが

「なっ……! ぐっ!」

吹き飛ばされ壁に叩きつけられたのは緑谷だった。

彼女の姿が一瞬ぶれたと思ったら、緑谷の体が宙に舞っていた。

何が起きたのかすら理解できなかった。

「今のは緑谷君の力を逆用して投げたの。

シアンが好んで使う体術の一つよコレは。

非力な人でも相手の力を利用すればこのくらい出来る。

そしてやっぱり個性の制御がまだまだだね」

彼女が緑谷の右腕を指さした。

緑谷は視線の先の右腕を見る。

真っ赤になって見事に折れていた。

「えっ!? 痛くない!? 折れているのに!」

「ここは電脳空間よ。痛覚を遮断する事なんて簡単。

望みと有れば痛覚を戻すことも出来るわ。

お勧めはしないけど、どうする?」

「……戻してくれないかな」

「きつと死ぬほど痛いわよ」

「それでも良いよ」

「……」

彼女が指をパチンと鳴らした瞬間

「あああああああ!?!」

緑谷は余りの激痛に絶叫した。

だが倒れる事はしない。

痛みを必死に耐えながら顔は前の方を向いている。

目から闘争心は消えていない。

「シアンが言っていた事、これで分かったかしら？」

これが現実なら緑谷君、今の隙を敵に襲われてお終いだわ」

「つ……そうだね。だから早く制御出来るようになりたいんだ。

ならないと駄目なんだ。

痛みを無くして特訓なんて。甘えていたらいつまで経っても変わらない。

そんな気がする。そんなんじゃないや駄目なんだ。僕は……託されたんだから」

「そうか……そうよね。……何故ヒーローになるのか理由は見つかった？」

「今はまだ分からない。だけど今はやるべき事をやる。それだけだ！」

緑谷がまだ力が入る左の拳を握りしめた。

「……個性はね、使おうと意識しては駄目なの。

意識せずに自分の体の一部のように使えないと」

「えっ……でもそれをどうやって……」

「それは緑谷君が経験を積んで学習しないと駄目。」

ただ教えられたことを実践するだけだと、人は分かったつもりになれない。自分で考えていかないと、本当の力にはならないわ。

それは、私自身がそうだったから」

アズライトが掌で緑谷の折れた右腕に触れる。

瞬間右腕が青色の結晶に包まれて、次の瞬間結晶が砕けた。

砕けた結晶から元の右腕が姿を現す。

傷も痛みも跡形もなく消えていた。

「なんでも有りだなあ」

「ええ、怪我は私が治すわ。私はあなたのアズライトなんだから。

だから遠慮なくぶつかってきなさい」

「うん、よし！」

「ええ、頑張りましょう」

その後緑谷は繰り返し脳空間で個性を使用する。

幾度も腕が折れて激痛が走っても。決して緑谷は痛覚を遮断しようとしな

合理的ではないかもしれない。

だが、この痛みすらも自らの成長の糧になると。

そう緑谷は確信している。



そして彼は今一人ではない。

オールマイトにシアン、それに目の前のアズライト。

自分のヒーローになりたい夢を後押ししてくれる存在がある。

無個性に泣いていた頃からは信じられない程環境に恵まれた。

それらに感謝しながら特訓を続ける。

(名前……考えてあげないと)

名もない緑谷のアズライト。

緑谷は彼女を自分の個性パーソナリティーとして受け入れつつある。

全てが少しずつ変化していく。

それが良い変化か悪い変化かは分からない。

だが緑谷は変わる事が出来る自分自身を認めつつある。

変わりたいと彼は望み、それを彼女は手助けする。

彼らの夜はまだ始まったばかりだ。

## 第22話

side——麗日お茶子——

「……………青ちゃんおはよう」

「あ、お茶子ちゃん……………うん、おはよう」

麗日お茶子は朝早く雄英に登校してきた。

まだ始業のベルが鳴るまで2時間以上ある。

青石ヒカルは窓際の席に腰かけて、まだ薄暗い空をぼんやり眺めている。

昨日I—Aの生徒たちは青石ヒカルの事を搜索していたが、何も手掛かりが掴めないままだった。まるで腫れ物のように扱われている青石ヒカル。

先生たちに聞いても帰ってくる返事はないか、もしくは誤魔化すような言葉だけ。

麗日お茶子はどうにもそれを不審に感じていた。

普段の青石ヒカルの態度に加えて先生方の異様な雰囲気。

これは何か裏があると彼女は疑い始めた。

それは麗日お茶子だけではない。

副委員長の八百万もそれに同意している。

青石ヒカル。彼女は聞いている限りでは初日以外は、誰よりも早く教室に来てい  
教室で張り込んでおけば、彼女が何処から来るのか、その手掛かりになるかもしれな  
い。

そう考えた麗日はいつともより、だいぶ早く教室へと足を運んだのだ。

雄英の門が生徒に開放されるまで門の前で待ち、そして開けられた瞬間、麗日お茶子  
は教室へと直行した。

普通なら誰も居ない筈。

現に門の前で待っていたのは、麗日だけだったのだから。

だが青石ヒカルはこうして平然と教室の中に居た。

その光景に麗日の中の疑惑は確信へと変化する。

何かがある。雄英と青石ヒカルには、何かしらの繋がりがある事は明白だ。

麗日お茶子は彼女の傍によって話しかける。

彼女たちは他愛のない会話を繰り返す。

その会話の中で改めて麗日は、彼女が異質だと再確認する。

普通の日常生活を送っていたら、まず知っているであろう事を知らない。

数えたらキリがないほどに。

麗日は一つ、気になっている事が有ったので聞いてみる事にした。

「ねえ、聞いてもいい？」

「なに？」

「青ちゃんって相澤先生が好きなの？」

聞いた瞬間にボンと真つ赤になった。

その顔を見たら、返事はなくても答えは分かった。

乙女の表情を、青の少女は浮かべていた。

……

……

…

side——青石ヒカル——

「今日のヒーロー基礎学だが、俺とオールマイト。

そしてもう一人の3人体制で見る事になった」

「なにするんですか？」

「災害水難なんでもござれ。人命救助訓練だ」

時刻は午後0時50分。

1—Aでヒーロー基礎学の授業が始まった。

相澤から今回の授業の趣旨が説明される。

青石ヒカルには話の内容があまり頭の中に入ってこない。

(相澤さん、ボクなにか嫌われる事しちゃったのかな……)

一昨日あたりから、どうにも相澤がよそよそしいと彼女は感じている。

昨日も部屋に顔を見せに来たのが大分遅かった。

(ううん、おかしいのはきつとボクだ。どうしちゃったんだろう)

最近どうにも胸の奥がざわついて止まらなくなる。

これは個性のせいではないと自覚している。

暇さえあれば相澤と轟の顔が、頭の中に交互に浮かんでくる。

——青ちゃんって相澤先生が好きなの？

麗日に今朝、投げられた質問が頭の中に響く。

流石に青石ヒカルもその質問の意味は理解できた。

親愛などの感情ではなく、男性としての相澤の事をかどうかを聞かれたのだ。

恋愛感情が有るのか無いのか聞かれたのだ。

(それは……Yesかな)

麗日には、はぐらかして答えたがずっと前からその答えは出ている。

だが同時に最近はその感情が揺さぶられている。

今、青石ヒカルは相澤だけでなく、轟焦凍にも心が惹かれつつある。

轟の事を友達としてではなく、一人の男性として意識し始めている。

その事をはつきりと自覚してしまったのは、麗日との会話がきっかけだった。そんな自分は最低な人間だと彼女は今自分を責めてしまっていた。

(駄目だ駄目だ！ もっと別の事考えよう。……セルリア)

考えれば考えるほど泥沼になって行くのを感じ、思考を切り替える。

考えるのは昨日再開したばかりのセルリアの事。

昨日セルリアとの会話は平行線に終わった。

互いに主張を曲げることは無かった。

セルリアは青石ヒカルを連れ出すと言ってきた。

青石ヒカルは出てはいけない、そんな事を企んではいけないと主張した。

だがセルリアは無理やりにも、青石ヒカルを外に連れ出すつもりだ。

いつどの様に実行するか、詳細な作戦は聞いてはいない。

本来なら相澤や法月に報告するべきだろう。

だが彼女には友人であるセルリアと轟を貶める事は躊躇われた。

結局悩みを抱え込んだまま過ぎて今に至っている。

気付けば相澤の説明は終わっていた。

周りの皆は忙しく授業の用意を始めていた。

「青ちゃん大丈夫？ 話聞いてた？」

「えと……大丈夫！ ボクさぼるから！」

「それ全然大丈夫じゃないから！」

「それじゃ！」

「おい……」

「モガア！（うわあー！）」

相澤の捕縛武器が青の少女の顔に絡みつく。

ギギギと青石ヒカルは首を相澤に向けた。

視線で許してくださいとお願いする。

「さぼりは認めん。いいな？」

「……モガガモガガ（分かりました）」

一気にしおらしくなる青の少女。

そんな様子を離れた場所からセルリアはジッと観察していた。

相澤に対して厳しい視線を向けている。

眉の端が吊り上がり、唇も軽く囁んでいる。

誰もその様子に気付く事は無かった。

……

……

……

side——緑谷出久——

1—Aの生徒はバスに乗って少し離れた訓練場へと向かっていた。

なお一名だけ青山優雅は乗車していない。

なにやらコスチュームの装着に時間がかかるらしい。

特別なものらしいので後から合流するという事だ。

それはセルリアの方から提案され、相澤が了承していた。

緑谷は青石ヒカルの方が気になって見た。

彼女は特に緑谷に気にする様子もない。

彼は緑谷に宿ったアズライトを警戒して、もつと注意を向けてくるものだと思っ  
た。

それが違うとなると、もつと他に気を取られている事でも有るのだろうか。

——だいぶ、個性も馴染んでいるようね

(うん)

昨日の夜、緑谷は自らに宿ったアズライトの個性を使い、電脳空間での特訓を行って



いた。

「電腦空間で行う訓練ではどんな怪我也一瞬で治せるので、現実ではできないであろう無茶も沢山出来る。」

「その成果として現時点での体で壊れない、ギリギリの出力でコントロールする事が可能になった。」

「あくまで電腦空間での話なので、現実ではうまくいくかは分からないが。」

「私思った事を何でも言っちゃおうの緑谷ちゃん」

「あ、はい。蛙吹あすいさん」

「梅雨つゆちゃんと呼んで」

「少し前までの彼ならもつと焦った感じで答えていたかもしれない。」

「だがシアンに竜胆、青の少女。」

「孤児院で緑谷のファンだと明かしてくれた瑠璃という赤毛の少女。」

「そして緑谷に宿ったアズライト。」

「いつの間にか女性と接する機会が多くなっていた緑谷は、女性とも問題なく会話できるようになっていた。」

「あなたの個性オールマイイトに似てる気がする」

「……！」

彼女が緑谷の個性を見たのは一度きりしかなかった筈だ。個性把握テストの時。それもボール投げの時だけだ。

それだけで似ていると思うものだろうか。

「そ、そうかな？」

だが考えたら入試の際に0ポイントの仮想敵を倒した際多くの人が見ていた。それを伝え聞いたのかも知れない。

なにより緑谷は掛け声をオールマイトをリスペクトした物を使っている。

オールマイトを連想しても不思議はないかも知れない。

「待てよ梅雨ちゃん。オールマイトはケガしねえぞ。似て非なるアレだぜ。

しかし増強型のシンブルな個性はいいな！

派手で出来る事が多い。俺の“硬化”対人じゃ強えけどいかんせん地味なんだよな

……」

切島鋭児郎が会話に割り込んでくる。

だが不快は印象は受けない。彼の人柄がそうさせるのだろう。

けれど彼は自分の個性に若干の不満があるらしい。

緑谷の中での評価は決して低くはないのだが。

「僕はプロにも十分通用する、かつこい個性だと思っよ」

「プロな。しかしやっぱヒーローも人気商売みてえなところあるぜ!」

(人気商売……)

切島のその言葉に緑谷は考え込んでしまう。

二日前のあの日、緑谷に刻み付けられたこの世界の現実を。

積み上げられたごみの山。鼻を衝く異臭。

腐った食べ物を泥水で腹に押し込んで飢えを凌ぐ子供達。

理不尽にもがき苦しむ貧民街の住人。

社会からそしてヒーローから見捨てられた者たち。

ヒーローが名声を欲して活動している間に、あの子供たちは苦しんでいる。

二日前も今と乗っているものと同じようなバスに乗っていた。

窓の外を緑谷は見つめる。

あの時に見えた風景。死んでいる街。そこからこちらを見つめてくる瞳。

バスに乗せきれなかった子供たちの目が、救いきれなかった人々の姿が、今にも見え

そうな気がした。

それらが緑谷を責め立てている気がして、彼の心が罪悪感で軋むのを感じた。

緑谷の中に積み上げて来たものが少しずつ変化していく。

本当にやりたいこと成し遂げたいことが別の物になっていく。

例えヒーローになれなくても。

ヒーローになるよりもやりたい、別の衝動が込み上げてきている事に緑谷は気付きつつあった。

(こうしている間にもあの子達は苦しんで……死んでいる。なのに、なのに。

……こんな所で僕はいったい何をしてる!?)

「派手で強えつつつたら、やっぱ轟と爆豪それと青石だな」

いつの間にかバスの中では個性の話で盛り上がっていた。

そしてふと聞こえてきた。

大した大きな声でもないのに、緑谷の耳にはつきりと捉える事が出来た。

「へえ意外。人助けなんてヒーローがそんな事するんだ」

………

………

………

side——青石ヒカル——

青の少女はバスが一番後ろで、麗日と轟に挟まれて座っている。

セルリアは昨日の事が気まずいのか、青石ヒカルとまだ一度も会話もしていない。

だが視線はちらちらと彼女の方に向けている。

「それで結局何するんだっけ」

「聞いてなかったん!？」

「……今日やるのは人命救助訓練だ」

轟が青の少女の疑問に答える。

「人命救助訓練?」

「ああ」

「へえ意外。人助けなんてヒーローがそんな事するんだ」

青石ヒカルが決して大きくない声のその眩き。

それはやけにバスの中に響いた。

皆ギョツとした顔で彼女の方を振り向く。

「……青ちゃん」

「どうしたのお茶子ちゃん。ちよつと怖いよ」

「青ちゃんやつぱりおかしいよ」

「おかしい? えと……うーん?」

「人助けはヒーローの本分だよ! なんで「人助けなんて」て言っちゃうの!？」

「……?」

麗日お茶子の言葉に、青石ヒカルはキョトンとしたままだ。

何が間違っているのかすら、理解していない様子だ。

だが彼女の境遇を考えたら無理もない。

青石ヒカルが育ってきた環境は、常人とはかけ離れているのだから。

「……ヒーローって人に暴力を振るうお仕事でしょう」

「!!……違う! 違うよ青ちゃん」

「違わないよ、ボク自身を知ってる。

ヒーローが何をする人かなんてボクが一番よく知っているよ」

相澤もシアンも教育はした。ヒーローが普段この世で行っている活動の事を。

だが彼女はそれらを一切信用する事はなかった。

そして彼女が、ヒーロー達から受けてきた訓練と言う名の暴力。

そして幼い頃にオールマイイトから受けた虐待。

理由こそ確固としてあるが、彼女の受けてきた暴力は並大抵の人間ならとうに死に

至っている程のもの。

そんな環境に居て歪まない訳がない。

彼女の中のヒーロー観は、どうしようもない程壊れてしまっていた。

彼女にとって、ヒーローとは暴力を振るう職業に他ならない。

「ヒーローが敵バライアンにしてる事は暴力でしょ。

オールマイイトなんて人を殴ってばかり……」

「青ちゃんはヒーローの事を誤解してるよ！」

そりやあ敵ライバルに対して乱暴な事する時はあるよ。

青ちゃんは優しいからそれが嫌なのかも知れないけど……。

災害救助が専門のヒーローだって居るんだから！」

「じゃあレスキュー隊に入ればいいんじゃないの？」

「……え？」

「そんなに災害救助したいのなら他の仕事だって有るんじゃないの？」

個性だつて使用許可証をちゃんと申請すれば使えるんでしょ？」

人を助けたいのなら別の仕事だって有るんじゃないの？」

「それは……」

「なんでヒーローである必要が有るの？」

麗日は言いよどんだ。言いよどんでしまった。

それは誤解だと言いたかった。

ヒーローであるが故に、組織に縛られず迅速に動けるメリットなどが確かにある。

けれども心の中で反論の言葉が出てきていたとしても、口に出さなければ伝わることは無い。

そんな麗日を見て、青の少女は確信したように言葉を続ける。

「やっぱり自分の個性を敵ワイランにぶつけないんだ。やっつけないんだ。

敵ワイランだって同じ人間なのに。

結局、敵ワイランに暴力を振りたい。それだけなんだね。

このクラスの皆。……お茶子ちゃんも」

「っ……………」

反射的に麗日は、青石ヒカルの頬を叩こうとして手を降りぬいた。

「え……………」

だが、その手は彼女の顔から数ミリ空けて止まっている。

それは青の少女の個性の力によって止められたのだ。

「ほら、やっぱり暴力を振るう。皆同じ。

ねえ知ってる？ 殴られれば痛い。蹴られても、爪が剥がれても。

床に叩きつけられても痛い。ボクは暴力が嫌いなんだ。

ボクは分け合いたいんだ。どんな人とも。

なのにあなた達は……なんで暴力を振るうの？

なんで分け合おうとしないの？

なんで話し合おうとしないの？



力任せにねじ伏せて、いったい何が変わるっていうの？」

青の少女はただ悲しそうに言葉を続ける。

バスの中もいつの間にか二人以外の人の会話は止まっていた。

全ての人間が二人の方を固唾を飲み見守っている。

彼女は疲れたように言葉を吐いた。

「……君たちは、野蠻だね」

「いい加減にしろ!!!」

相澤の怒声がバスの中に響き渡った。

青の少女はその言葉に素直に従い口を閉じる。

出発時とはまるでクラスの雰囲気は正反対だ。

目的地に着いたバスの扉が開かれる。

「いめん……」

青の少女は麗日に謝罪した。

相澤の声を聴いて彼女は言いすぎてしまったのだと、理解して反省した。

目を逸らしている上に小さい声。でもちゃんとその心は麗日に届いていた。

「ううん、うちはもう気にしてないよー」

ニカッと彼女は笑う。それに釣られて青の少女も笑顔になった。

クラスの中に安心のため息が漏れる。

バスの中から降りていく生徒たち。

彼らは知らない。

これから自分たちに、どれほどの困難が待ち受けているかなど。

(どうすればいい……糞っ！)

その中の一人はまだ自分が選ぶ選択を迷っていた。

## 第23話

side——相澤消太——

バスの中で青石の発言は聞いていた。相変わらず彼女のヒーロー観は歪んだままだった。彼女の言っている事は完全に間違っている訳でもない。が、決して正しく無い。

仕方ないとは思っている。実際に彼女の環境を考えると、そうなるのも当然だ。ヒーローが人を救っている様子を一度も見た事が無いのだから。むしろ最後に謝罪の言葉を出せたのに驚いた。

青石ヒカルは、はつきり言って自己中心的な人物だ。けれどもそれと相反するようには、全ての人と分り合う事を願っている。彼女は暴力を嫌う。力を使用し、人を傷つける解決方法を好まない。だが対人戦闘訓練の時には爆豪を気絶させたし、先ほども言葉で散々人を煽っている。

彼女は抱えている本質とその願いが、矛盾している事に気づいていない。

だから麗日に謝罪した事に相澤は驚いた。学校生活は思った以上に彼女を変えていくのかもしれない。まあ爆豪の時の行動の理由は何となく相澤には察しがついた。爆

豪は青石ヒカルに「死ぬ」と口にしてしまった。それは彼女にとっては禁句だ。死よりも辛い経験を乗り越えて、青石ヒカルは生きてきた。頭に血が上つて当然かもしれない。いくら死にたいと願つても、彼女は決して死ぬなかつたのだから。

青石ヒカルが今のように育つてしまつてゐるのは、オールマイトの存在が大きいと相澤は考へている。

彼女にとってオールマイトとはあらゆる意味で、全ての始まりの人だからだ。

オールマイトと青の少女。二人はこの10年間互いにとことん接触することを避けていた。だが、意外にもそれぞれお互いの事が、ずつと気になつて仕方ない様子だった。今もなおだ。それが何故かは、相澤の理解の範疇ではなかつた。

お互いにそれぞれの近況を遠回しに相澤やシアン、それに校長に聞いているのだ。

青の少女はオールマイトを嫌いだと言つてゐる。彼のヒーローとして活躍している映像を見るたびに、彼女は悲しそうに顔を歪ませた。彼女はそれを暴力を振るつてゐる様子が悲しいからだと言う。

けれども相澤の見立てでは、それだけでは決してない。彼女はオールマイトの事を心配している。そういう風に思えてならなかつた。

彼女はオールマイトを憎んでいる。それは間違いない。だが愛情と憎しみは表裏一体だと聞く。

彼女にとってオールマイトは最愛の人だった。完全に信頼していたし、なつききっていた。青石ヒカルにとって最初で唯一の自分を受け入れ認めてくれる相手だったのだ。

だが、十年前の彼女の暴走後に課せられた処置。それを裏切られたと感じて、重すぎる愛情が憎しみに変化するのはおかしくはないだろう。

青石ヒカルはオールマイトの事を、完全に憎みきっていないのかも知れない。それどころか、既に彼の事を許しているのではないかとすら思う。

彼女は自らが置かれている状況、立場に表だって文句を言うことはない。むしろ仕方がないと受け入れている。役目を果たし次第、処分されてしまう事すらも。諦めているとも言える。もしかしたら、彼女は自分自身を敵だライバルと認識しているのかもしれない。十年前の事故も青石ヒカルは、全部自分のせいだと思込んでいる。

少なくとも彼女はオールマイトが彼女自身にした行為を、仕方がなかったと明確に認めているのだ。

それなのに、青の少女がオールマイトを避け続ける原因はいったい何なのか。

ひよつとしたら彼女が本当に許せないのはオールマイトではなく……。

(いや、それより……)

「13号、オールマイトは？　ここで待ち合わせる筈だが」

「先輩それが……通勤時に制限ギリギリまで活動してしまつたみたいで。」

仮眠室で休んでいます」

「……不合理の極みだな」

13号によるとオールマイトは制限時間一杯に活動してしまつて授業に来れないらしい。

だが、それもオールマイトが、青の少女に会いたくないための口実なのではないかとすら疑つてしまう。

(いつまで逃げてんだよ……。オールマイト)

相澤はそろそろオールマイトと青の少女。その二人は腹を括つて話をするべきだと考えている。少なくとも二人は、互いを想いあつていることは事実。

それが憎しみであれ愛情であれ、ともかく無関心では決してない。只でさえ彼女には残された時間は少ない。

相澤は彼女に、せめて悔いのない人生を送つてほしい。そう願っている。

青の少女は全ての人と、分り合いたいと願っている。彼女が一番分り合いたいと願っている相手がいったい誰なのか。それはもう考えるまでもなく明確だった。

今日の学校が終わり次第、彼女にその事を話そうと相澤は決めた。

「仕方ない始めるか」

……

……

…

side——青石ヒカル——

「すっげー！　USJかよ!？」

バスから降りた生徒一同は感嘆の声を上げる。青石ヒカルも周りを見渡してへえと小さく頷く。

「水難事故。土砂災害。火事……etc。

あらゆる事故や災害を想定し作った演習場です。

その名もウソの災害や事故ルーム！」

全身をコスチュームで覆われた男と思わしき者が説明する。生徒の心の中で一斉に「USJだったー」と突っ込みが入る。雄英の敷地は極めて広大だ。その規模の大きさはそのまま国家権力の現れ。この圧倒的な資金力こそ雄英が日本一のヒーロー科である事の証だ。

緑谷出久がこの場所を説明したヒーローの正体を一目で見抜いた。

「スペースヒーロー13号！」

災害救助で目覚ましい活躍をしている紳士的なヒーロー！」

ヒーローオタクな彼はもちろんチェックしていたが、隣の麗日も興奮していた。テン

ションがかなり上がっている。

「わー！ 私好きなの13号！」

「……そう、なんだ」

青石ヒカルは13号と視線が合うと軽く会釈をした。13号も首を動かす。もつとも13号の素顔は、コスチュームで見えていないが。彼と青石ヒカルは知り合いだった。彼に個性のコントロールを享受された事も一度や二度ではない。

セルリアを見ると少し離れた場所に居た。なにやら手元の端末を弄っていた。どこかへ連絡でもしているのだろうか。彼女の目には静かに覚悟が宿っている。セルリアは本気で青石ヒカルを雄英から連れ出すつもりだ。青石ヒカルは直感した。この校舎から離れた空間に少人数の監督。セルリアが動くのはこの時間でまず間違いないだろう。だからと言って今更出来る事など何もない。

ふと青の少女が気付く。自らの個性を制限するコスチュームの拘束が引き上げられている。

最大限の拘束レベルのレベル5に。恐らくセルリアの仕業だろう。これで今の青石ヒカルは無個性の少女。やはりセルリアは何か仕掛け始めるに違いない。やろうと思えば無理やり個性を使う事も、出来なくはないと思う。

けれども……



——ええ、壊れた私。それはお勧めしないわね。脳が焼き切れてもいいのかしら隣に出現するレギオンに気付く人は誰も居ない。禍々しいドレスを纏った隣のレギオンはクスクスと笑う。

(出てこないで！)

無理やり彼女を青石ヒカルは抑え込んで、自らの内側に追いやる。レベル5の拘束でも地上に出た状態では、完全にレギオンは封印できない。

相澤の方に視線を移すと13号とやり取りしていた。表情から察するに何か予想外の事でも起きたのだろうか。

「仕方ない、始めるか」

相澤の小さな声が聞こえてきた。それを聞いていた生徒はどれだけ居ただろう。

13号が一步前に出て話し始める。

「えー始める前にお小言を一つ二つ……」。

皆さんご存知だとは思いますが。僕の個性は“ブラックホール”。

どんなものでも吸い込んでチリにしてしまいます」

「その個性でどんな災害からも人を救い上げるんですよね」

「ええ……」

緑谷出久の質問を肯定する13号。

「しかし、簡単に人を殺せる力です。皆の中にもそういう個性がいるでしょう」  
思い出されるのは十年前の事件。望んでそうなった訳では無い。彼女は望んでその力を得たわけでは決してない。

生徒達の顔が青の少女に向いてくる。突き刺さってくる視線から逃げるように目を逸らした。数千人の人間が死んだ。その責任はお前に有るのだと、責めてきている風に思えて仕方がなかった。

十三号は言葉が続ける。

「超人社会は個性の使用を資格制にして規制する事で、一見成り立っています。

しかし一歩間違えれば容易に人を殺せる行き過ぎた個性。

それを個々が持つている事を忘れないでください」

そんな事、言われなくても分かっていると彼女は心の中で呟く。13号は個性の危険性を生徒たちに説いているが、彼女にとっては今更の話。

「相澤さんの体力テストで自身の力が秘めている可能性を知り。

オールマイトの対人戦闘で、それを人に向ける危うさを体験したかと思えます。

この授業では心機一転。人命の為に個性をどう活用するのかを学んでいきましょう。

君たちの力は人を傷つけるためにあるのではない。助けるために有るのだと心得て帰ってくださいな。

……以上、ご清聴ありがとうございました」

生徒たちから拍手が13号に贈られる。青石ヒカルはもう一度自分の立場を再認識する。

青石ヒカル。その存在意味は5thスターレインファイフスに対抗するため。文字通り人類を滅びから救うために作られた存在。役割を果たしたら死ぬ。それだけの事、覚悟などとうの昔に終わらせている。

けれども、

(ねえ……だったら教えてよ。世界はボクが守るから。だったらせめて、ボクが守る人達の事くらい理解させてよ。分り合いたいよ。ボクが……。ボクは……)

ボクの本心に望んでいる事は、何？

ボクが欲しいモノは、何？

ボクが本当に分り合いたいと願っているのは、誰？

——あなたは何を知りたいの？

「かたまりになって動くな！ 13号生徒を守れ！」

「何だアリア!!？」

「あれは……敵だ!!!」  
ウイラン

「……ええ？」

青の少女は相澤の声に我に返った。眼下に見えるUSJの広場の中心に黒い霧が広がっている。

そこから次々と人が出てくる。ワープ系の個性の仕様だと理解する。

彼ら敵ワイランの放っているあらゆる負の感情を凝縮したような敵意。それに青の少女がたじろいだ。

「もう遅えよおー！」

「ー！」

いつの間にか生徒たちの背後に霧が広がっていた。霧から出てくる人達は例外なく敵ワイラン。

十数人程度の人数の彼ら。生徒たちの逃げ場を無くすように位置取っている。

1—Aの生徒たちに相澤と13号は、敵ワイランに完全に囲まれていた。

彼らの手に持つているのは……

「っ銃!？」

多数の敵ワイラン。彼らが手に持つのは黒光りするM16自動小銃。アサルトライフルの一種だ。

日本でどうやって手に入れたのか知らないが、それらは間違いなく本物。セルリアが手配していたのかも知れない。

だがそんなもの彼女にかかれば、おもちゃに等しい。

青石ヒカルは咄嗟に個性を使つて無力化しようとした。だが個性を使おうとした瞬間

「うあああああ!!」

「青ちゃん!」

頭に激痛が走る。全身が縛り付けられているような感覚が走り、脳の奥に楔が打ち付けられる。全身が焼けるように熱い。体中の神経が悲鳴を上げて個性を使う事を拒絶する。

拘束レベルが最高の状態で個性を使おうとすると当然そうなる。

やはりこの襲撃はセルリアが手引きしているのは間違いない。どんな戦力を投入したところで青石ヒカルがいる限り、路傍の石ころ同然に蹴散らされるのは目に見えている。キチンと対策を立てたうえで襲撃しているのは当然か。M16なんて物を持ち出してきたのも相澤先生への対策だろう。

相澤が居ると事前知っているのなら、最初から個性に頼り切りに襲撃してくることは有り得ない。

彼女は痛みを耐えながら状況を把握する事に努める。セルリアがどれだけ本気で準備してきたのか、それを再確認していた。

……

……  
……

side——緑谷出久——

「動くんじゃないぞ！ M16の錆になりたくなくなかったらなあ！」

異形型と思わしき男が荒々しく声を上げる。その男が持っているのはライフル。銃を持つている男は一人ではない。

多数のM16自動小銃の銃口が敵から向けられている。数にして10は下らないだろう。緑谷は動揺した声を出した。

「なんで!? こっちは日本だぞ?!」

「馬鹿かデク! 敵が手段なんか選ぶわけ無えだろうが!」

爆豪がいつの間にか傍に居た。生徒たちは本能的に拙い円陣を組んで、敵の襲撃に對抗しようとする。

爆豪の言葉に緑谷ははつとする。そうだ敵が手段を選んでくるわけがない。あらゆる手段で目的を達成しようと、どんな非道な手段だって取ってくる。当たり前の話だ。

緑谷はオールマイトに出会った日、そして繰り返し言い聞かされていた言葉を思い出した。

——プロはいつだって命懸け

緑谷はようやく理解した。今までの自分は何も分かつてなど居なかったのだと。命をかけるという事がどういう事が理解していなかったのだ。

敵に立ち向かうという事は同時に、命をかけるという事。命をかけるという事は当然、死ぬかもしれないという事。そしてヒーローは敵を殺してはいけない。自分たちを容赦なく殺そうとしてくる相手をだ。

今にも囲んでいる敵の一人が気まぐれを起こそうものなら、その瞬間何人も死ぬことになるだろう。

紛れもなくここに居る全員が命の危険に晒されている。青石ヒカルならどうにでも対処できるかも知れないが、彼女は先ほど頭を抱えて膝を着いてしまっていた。体調が思わしくないのだろうか。こんな時に限って、彼女の助けはどうやら期待できそうにない。緑谷達は自分たちの力でこの窮地を脱出しなければならない。

——緑谷君。私力が貸すわ。あなたに個性が馴染んでないから時間がかかる。準備しているから、少し待って。

緑谷のアズライトが出てくる。彼女の顔も緊張していた。緑谷に宿った彼女の力は未知数だが、その力を使えば何とかできるかも知れない。

(分かった)

緑谷は心の中で返事をする。彼女は頷くとすうーと影が薄くなり見えなくなった。

彼女は自らを“ 電脳感覚” の個性だと言っている。だが緑谷はそれは半分本当で、半分ウソだと考えている。

彼女は十年前の災厄を引き起こしたアズライトの残滓だ。ならばその力は青石ヒカルと、同じのものでなければ道理が通らない。緑谷はやろうと思えば青の少女と同じことが出来る筈だと結論付けていた。緑谷のアズライト自身はその事を否定も肯定もしていない。だが彼女は今、力を貸すと言っていた。間違いなくその力は電脳世界に及ぶだけではないだろう。

「理解が早くて助かりますね」

全身が黒い霧を覆っている男が一步前に出てくる。その霧が個性で間違いないだろう。男だと判断したのは声が男の物だからだ。彼の素顔に体は、黒い霧のようなモノに覆われていて見えなかった。

状況からしてワープ系の個性の持ち主か。だからこの雄英に侵入できたのだ。

「さて、皆さん。我々は敵<sup>ライバル</sup>連合。見ての通りあなた達は包囲されています。

逃げ場など有りません。我々の要求を受け入れて下されば去りましょう」

「はあ!? 敵<sup>ライバル</sup>のいう事なんて誰が聞くか! 信用できるかよ!」

切島が勢いよく吠える。だがいつもの覇気はない。流石に勇敢な彼も怯えているのだろうか。



「戦うというのでしたら別に構いませんが、何人死ぬことになるでしょうね？」  
「くっ……！」

端を見ると峰田実が縮こまって震えている。冷静に対応しているのは極一部か。大半の生徒はパニックに陥らないように精一杯だ。

ふと見ると青の少女とセルリアの様子がおかしい。なにやら小声で言い争いをして  
いるみたいだ。こんな時にいったい何をやっているのか。

緑谷は冷静に状況把握に務める。

こうやって侵入してきているのに、警報も作動していないのは明らかにおかしい。やはりその対策も怠っては居ないのだろう。そして敵の言う通り逃げ道は塞がれている  
ようだ。完全に囲まれた状態で複数の銃を持った敵<sup>ライアン</sup>。

敵<sup>ライアン</sup>達が向けてきているのは「ブラックライフル」の異名を持つアサルトライフルだ。

銃の規制が進んでいる日本で、防弾の機能をコスチュームに持たせることは少ない。

各々の個性を最大限に生かすコスチュームへと進化してきた結果、銃への対策はおざ  
なりになりがちだ。実際に防弾の機能が生きる場面が少ないので、防弾機能は最初から  
考えない事も多い。生徒たちのコスチュームの中で防弾出来るものは、果たしてどの程  
度有るのだろうか。そして防弾機能があるものも完全に防げるわけでは無い。もつと  
言えば何も覆われていない顔面を狙い打たれたらどうしようもない。

緑谷は先生方に目をやる。当然相澤や13号は銃対策の訓練を積み重ねてきているだろう。だが今銃を向けられている生徒たちは訓練も碌にしていない未熟者たち。

しかもこうも不意を突かれて多数の敵に囲まれては、いかにプロであっても対応が難しいと緑谷は考察する。

先生達は戦闘しようと思えば出来る。その結果先生達だけ助かるだけならまだ可能だろう。だが戦ったら、犠牲者が出る事は避けようがない。生徒たちはいわば人質。緑谷たち生徒は明確に足手まといだ。

結論から言うならば、既にこの状況を作られた時点で詰みなのだ。

(目的のために手段は選ばない。……これが敵か！)

「要求は何だ」

「先生！」

「先輩！」

相澤が前に出る。生徒たちに13号も引き留めようとするが、彼は止まらない。

「先生駄目だ！ 相手は敵ですよ！ 交渉なんて……」

緑谷が声を上げた。

相澤は一瞬だけ緑谷に目をやると、油断なく敵に視線を戻した。リーダー格と思わし

き黒い鬘の男が相澤の言葉に応じた。

「青石ヒカルという生徒。その引き渡しを我々は要求します」

「断る」

黒い霧に覆われた敵の要求に相澤は即答する。その時

「全員動くな。個性も使うな」

(よし！ セルリアさんの個性の説明は受けている。僕達の勝ちだ！)

緑谷はセルリアのその言葉で勝利を確信した。

セルリアの声が響く。彼女の個性で動けなくなる。彼女の個性はReason。

詳細こそ明らかになってはいないがそれは、法月将臣と同じ個性。彼女の命令には逆らう事は出来ない。

彼女の命令は全ての人間を支配する。もつとも……

「なっ……動かねえ!?!」

「セルリアさん!? いったい何を。……! そういう、事ですかつ!」

動けなくなったのは敵ではなく、1-Aの生徒達だった。セルリアが薄く微笑む。彼

女が青石ヒカルに手を差し伸べる。

青の少女はその手を見つめ……

……

……

:

side——セルリア——

予定通りにUSJへの襲撃は始まった。今のところ誰もセルリア達を不審に思っている様子はない。

セルリアは轟焦凍をちらと見る。彼は未だに決心が固まっていないようだ。例え轟が最終的に協力を拒んだとしても、作戦は止められない。轟と会えなくなったら青石ヒカルは悲しむだろう。だがいざれば彼女はそのままでは処分され殺されることは確定している。そんな事は絶対にセルリアに受け入れる事は出来なかった。

友達ならば、また幾らでも作ればいい。協力者が多いに越したことはないし、轟の個性は強力だ。味方になれば良いが敵でも別に構わない。

彼がどんな道を選ぶかは彼次第だ。もちろん個性で強制的に味方にすることは出来る。だがそれでは駄目だ。そんな事をしたら、あの法月と同じになる。それを受け入れる事はセルリアには出来ない。

横の青石ヒカルを見る。頭を抱えて苦しそうに悶えていた。個性を使おうとしたのだろう。その様子は痛々しく見ていられないが、少しだけ辛抱して欲しいと心の中で謝った。

セルリアは彼女に約束した。必ず外の世界へ連れ出すと。今もなお褪せることない

記憶。遠い空に思いをはせる女の子。

青石ヒカルをもう少しで救える。後は黒霧に指定していた場所に転移させるだけ。彼女はその後、ゲンチアナというヴィジランテの組織に匿ってもらおう手筈になっている。

痛みから立ち上がった青石ヒカルがセルリアに言い寄ってくる。

「セルリア、思い直して。駄目だよ。ボクの個性の事は知っているんでしよう。今ならまだ……」

「もう、止められない。止まる訳には行かないのよ」

「セルリア！」

「あなたは外の世界を見たいんじゃないの」

「……ボクは」

「迷っているのなら、力づくでもあなたを此処から連れ出す。私は必ずあなたを救う。約束したもの」

彼女の中に巣くう個性への対策もきちんと立てている。いざとなったら彼女の個性の力なら、この地球に固執する必要性すらない。ちゃんと計画を立てて実行すれば火星をテラフォーミングし、そこに住まうなんて出鱈目な事も充分可能。それほどまでに青石ヒカルというは規格外な存在。実行こそされなかったが、事実彼女の個性を利用して

そういう事をする計画もあった。

「青石ヒカルという生徒。その引き渡しを我々は要求します」

彼女の個性に天敵がいるとすればそれは相澤消太。幾らセルリアの個性が強力であったとしても、相澤の個性で抑え込まれている間は無力だ。だから彼の個性で彼の視線が向かないように黒霧達に陽動を仕掛けさせた。

青石ヒカルを連れ出すための本命はこちら。

黒霧と一瞬目が合う。 作戦通りに事が運んでいる事をセルリアは確認し、彼女は個性を使用した。

彼女は自らにインストールされたバイオウエア。人口個性—Reasonを発動させる。

イメージするのは鎖。彼女にしか見えないイメージのそれを生徒と相澤と13号に絡めていく。頭の中に流れ込む膨大な0と1の羅列。一般人には理解不能なそのデータを的確に処理。それらは各個人の脳内に広がっているネットワークそのもののデータ。個人が考えるための基盤そのもの。この世界そのものを0と1のデータで表現したものだ。

Reason。それが支配するものは“理”。

万物は理に従って動く。そこに例外はない。ありとあらゆるものは物理法則からは

決して逃れられないし、裏に潜む法則に従って動いている。

サイコロを振ったら1から6までの目のどれかが出る。それらに法則性は無いように見える。しかし1から6までの数字が、どれも均等な確率で出現するという法則性は確実に存在する。更に言うなら1から6までの数になる事は決定しているのだ。当たり前の話だが6面のサイコロを振って7と言う目は絶対に出ない。

あらゆる現実には目に見えない、存在すらも疑わしいような、あやふやな道理に支配されている。

だがReasonはそこに介入してコントロールする個性。理を改変された現実はその理に合わせて歪められ、その結果現実世界へと影響をもたらす。

世界の全ては理の上に成り立つ。その理を介入できるといふ事は、万物への絶対命令権を保有している事に他ならない。

だがその個性を扱う事は人間には途方もなく難しい。世界の理を操るそれは、コンピュータソフトで言うところのバイナリエディターに感覚は近い。例えばコンピュータソフトやアプリケーションは元を辿れば、0と1のデータの集まりに過ぎない。アプリケーションを0と1で全て表現されたとして、それが何を現しているのか人間に理解する事ができるだろうか。普通の人間には意味不明な0と1の羅列にしか思えない。

画像ファイルを0と1だけで表現されて、それがどのような画像であるか理解できる

だろうか。例えばたった1メガバイトだけでも0と1の数は八百万にもなる。

どの0と1をどう変更したり書き加えたら、どのようになる。などと理解する事が果たして出来るだろうか。出来たとしても限られた人間にしか出来ない。

ましてやReasonで介入するものは、そんなちやちなコンピュータソフトではなく、現実の理そのもの。処理しなければならぬデータ量は、そんなものよりもはるかに膨大だ。

常人ならこの個性Reasonを使用したが最後、意味不明な0と1の情報の海の中に埋もれていくことしか出来ない。

(つたくこの人数は流石に辛いわね。全く……法月は化け物か！)

個性を使い、道理そのものを書き加え、変更していく。人間の限界がある以上、この個性も決して万能ではない。

だが彼女が欲しいものは力ではない。万能でなくても構わない。守りたいものを守るだけの強ささえあれば、セルリアにはそれでいい。

一番なんて勝手に奪い合っついていればいい。そんなものよりも確かな価値があるぬくもりが、すぐ傍に有る。

セルリアはそれを守りたい。例え世界を敵に回すのだとしても、救いたいと思っってしまった。それだけで理由は十分だ。



救いたいという確かな願いの前に、ヒーローも敵ウイランも関係ない。そう彼女は思っている。

「全員動くな。個性も使うな」

彼女は個性を使用して命令を発する。それは敵ウイランに対してではない。

クラスメイトと相澤と13号に向けた命令だ。

「なっ……動かねえ!」

「セルリアさん!?! いったい何を。……! そういう、事ですかつ!」

どうやら八百万が最初に勘づいたようだ。轟を見るとやはり彼はまだ迷っているようだった。やはりこの状態で連れていく事は出来ない。昨日の時点では迷いなく協力すると思ったのだが見込み違いだったようだ。念のため口を割らないように個性をかけておいて正解だったかもしれない。

彼女は今明確ウイランに敵として生きていく事を行動で示した。後戻りなど出来ない。

青の少女に、セルリアは振り向いた。青の少女はそんなセルリアを、寂しそうに見つめていた。

「一緒に来て」

セルリアは青の少女に手を差し伸べる。彼女はその差し伸べた手を

「っ……!」

振り払った。パアンと乾いた音が響く。それは明確な拒絶だった。セルリアの目が困惑に満ちる。助けるために今までずっと生きてきた。どんな手段も使ってやつと今この場所にまでたどり着いたのだ。

そして青石ヒカルの夢の事も分かっている。彼女は何処までも自由に生きたいのだとずつと思っていたのに。いったい何が間違っているというのか。

なぜ彼女に拒絶されたのか、セルリアは理解できなかつた。

セルリアは青石ヒカルの事を理解してなど、決してなかつた。青石ヒカルも同様にセルリアを理解できていなかった。彼女たちは分り合えてなかつた。互いに思い合っている存在すらも、お互いに分かり合えない。

そんな事も関係なく今日も空は、高く青く広がっている。青石ヒカルの願いを叶えるには世界は余りにも広すぎた。

## 第24話

side——オールマイト——

十年前「青の世界」の2週間後

青の少女は新しく建設されている地下施設へと移送されていた。その移送にはオールマイトも同行している。そして移送の途中、オールマイトは許可を得て彼女をとある丘に連れてきた。

窓も付けられていない、彼女を移送するためだけの護送車からオールマイトは彼女を外へと連れ出す。眩しい太陽に彼女は目を細める。それは彼女が初めて目にした外の風景だった。

「わぁー！ ねえオールマイトさん！ 空が！ 空があるよ！」

「ああ、そうだね」

「空って本当に広いんだね！ 本当に青いんだね！ あはは、あはは！」

シロツメクサの花の絨毯が一面に広がるなだらかな丘を、彼女が駆け抜ける。風が優しく青の少女を抱きしめ、大地が穏やかに受け止める。アハハと笑いながら空へと手を伸ばしている。青の少女が、まだ鳴らない習ったばかりの口笛を吹き、オールマイトが

教えた音程の合っていない歌を口ずさむ。

青の少女は思い切り手を広げ、大空を見上げていた。空はいつもと何一つ変わりなく青く広がっている。彼女が手を太陽に伸ばす。太陽はそんな彼女に知らん顔をして、ずっと空で輝き続ける。

幼い彼女の笑顔を見てオールマイトもつられて笑う。それはヒーローとして無理やり作る笑顔ではない。心の底から溢れだす本物の笑顔だった。

世界中が混乱に陥った事件から、はや数週間が経過した。

オールマイトは青の少女が暴走しそうな時に側に居た。その時に彼女に暴力を振るい止める事はしなかった。彼女に対して情が移っていたオールマイトには、とてもそんな事は出来なかった。そして、その結果人は死んだ。

彼女の群体となった個性は世界中に広まってしまい、数千万の人々に強制的にアズライトがインストールされた。だが、それに適合できた人間はおらず、一人残らず死んだ。アズライトがインストールされた人は意識が戻らず、「無個性」になって死んでいった。それらの症状には「昏睡病」と名付けられた。事件の真相は政府によって闇に葬られ、でつち上げられた複数の敵が真犯人だとされた。

それらの敵とされた人々は冤罪を主張したが、聞き入れられることは無かった。誰一人濡れ衣を着せられた人を庇うことなく、彼らは時代遅れの極刑「死刑」に処された。

そんな事は目の前の彼女は知らない。知らされていない。今回の事件を受けて政府は本格的に彼女を利用する事を決めたいらしい。世界中に被害をもたらした個性の強大さは、彼女の力にますます説得力を持たせた。

彼女は世界を守るために作られた。だが彼女は世界の事を何も知らない。そして彼女は世界を救ったのちに処分される予定になっていると聞いた。彼女は数千万以上の人間に死をもたらす危険な個性を持っている。正確にはそういう個性に“改造された”のだが。それにも拘わらず生かされているのは、偏に仕方が無いからに過ぎない。

放っておけば、5thスター<sup>フィフス</sup>レインで世界は滅ぶ。彼女を使う事でしか助かる道はない。それしか選択肢はない。そして彼女は同時に人類を滅ぼしかねない力を持っている。

気まぐれで人類を一人残らず抹殺できるような存在が、本来許される筈はない。だから用が済み次第、彼女は殺される。

理屈は通っている。より多くの人間を助けるにはこれが最善の方法だと、頭では理解している。多くを救うために少数を切り捨てる。オールマイトもそのくらいの覚悟はとうの昔にして来たはずだ。

どんな人間でも同じような感覚を、多かれ少なかれ持ち合わせている。

トロリー問題と言う思考実験もある。より多くの人間を助けるために、少数を犠牲に

しても果たして許されるのか。そんな事を考え始めるとキリがない。

それに、罪のない民間人ツイランと敵の命の価値は違う。ヒーローは民間人を助ける事を考えはするが、目の前の敵を救おうとはしない。それは無意識に敵という存在を、救いの対象から切り捨てている事に他ならない。人の命の価値は決して平等ではない。

オールマイトは思う。人を救うとは何故こうも難しいのだろうか。彼が敵を一人捕らえる事で倍以上の人が救われる。だが、彼がいくらその力を使っても最終的に彼女を救う事は決して叶わない。彼が本当に救いたい人を救う事は出来ない。

青の少女。彼女の場合、明確な悪や敵が居て、それを退治すれば救われるわけでは無い。現実はそのような単純には出来ていない。それは彼女に限った話ではないが、どうしても、ままならいのか。

気付くと彼女がオールマイトの顔を覗き込んでいた。「どうしたの」と声をかけられて、「何でもないよ」と返す。

「そっか。ねえオールマイトさん」

「何だい」

「だっ」

彼女は疲れたのかオールマイトに抱っこを要求してきた。草原にオールマイトは腰を下ろして胡坐を組む。そこに彼女が乗った。

「えへへー。あつたかーい」

彼女の体は軽かった。人類を救うという重荷を背負うには余りにも小さすぎた。オールマイトが自分に課した“平和の象徴”という義務よりも、果てしなく彼女が背負っているものは大きい。

彼女が背中をオールマイトに預ける。耳をオールマイトの心臓の辺りに押し当てて、トクントクンと鼓動を打つ心音を聞いていた。

「ねえ、オールマイトさん。約束して」

「何をだい」

「もう一度、ここに連れて来るって。一度だけでもいいから。」

もしそれを出来なくても、何が有つても側にいて。

ずっと、ずっと側にいて。一人は寂しいよ」

それは、無理なお願いだった。彼女は今後地上に出られる機会が、どれほど有るといふのだろう。彼女の側にどれだけ居られるというのだろう。けれども彼女にそのまま真実を話すことは、余りにも辛すぎた。

「……約束……するよ」

「本当？」

彼女の視線から目をそつと逸らした。

「……」

「そっか。わがまま言つてごめんね……ありがとう」

彼は返事を返すことはしなかった。その意味を青の少女も理解した。オールマイトは裸の言葉を出すことを躊躇した。だが飾られた言葉を彼女に言ったところで、彼女に届くことはないだろうと思つた。だから言葉を胸に閉じ込めた。彼は敵に立ち向かう事が出来ても、目の前の少女には臆病だつた。

彼女の手がゆつくりオールマイトの背中に回される。互いに体を抱きしめる。

「側にいて」

彼女の呟きが聞こえた。オールマイトの力が強くなる。彼女のささやかすぎる願いも、彼女には十分すぎるほどの幸せだ。側に居る、それだけの事が彼女の場合どれほど難しいことか。

「……よ」

彼女が何か言つたが風に消されて届かない。それを聞き返すことはしなかった。

オールマイトは彼女を抱き寄せる。彼女もオールマイトを抱きしめ返す。それしか彼らには出来なかつた。それだけで良かった。

優しく穏やかな時が流れていた。人生で経験した中で最も安らげる記憶だつた。青の少女とオールマイトに存在していた、あたたかな時間。そこに再びたどり着けるの



か、それは分からない。彼に出来る事は今という現実と、戦い続ける事だけだった。

彼女の歌声が野原に響く。その歌は静かに悲鳴をあげているように聞こえ、オールマイトの心に染み込んでいく。

温かい日差しに照らされながら、シロツメクサの白い花が咲いている。それは遠い日に交わした約束のように、儚げに風に揺れていた。

………

………

………

side——青石ヒカル——

「どうしてっ………！どうしてよ!？」

セルリアは青の少女を糾弾するような声を上げる。彼女のその声は悲鳴にも似ていて、青の少女の心の中に深い傷をつけた。友達の期待を裏切る事は彼女には辛い。だが彼女はそれでも、と自分を納得させる。青石ヒカルは此処を出る訳には行かない。出はいけない。

青石ヒカルはセルリアに差し伸べられた手を振り払った。セルリアの叩かれた手が過ごし赤くなっている。青の少女は悲しそうに微笑みながら口を開く。

「……セルリア。気持ちはいいよ。でも、一緒に行くわけにはいかないんだ。行っ

てはいけないんだ。それが何故かなんて、分かっている筈だから言わないけど」

セルリアは青の少女の目を見つめる。青の少女もその視線を見つめ返す。セルリアがそつとしゃべり始める。

「——何処にでも行きたい、何処までも行きたい」

「……！」

「人の為に誰かの為に。世界の何処にでも行きたい。どんな人とでも居られるように。人が広く生きて行く為に」

「覚えていたんだね。うん……でもそれは」

「あなたの夢でしょう！ それは！」

「そうだね」

「あなたが手を伸ばせば外に出られるの！ 殺されずに、死なずに済むの！ あなたが勇気を振り絞ってくれさえすれば。やっと、やっと此処まで来たのに。なのに……どうして!？」

「え……死ぬってどういう事？ 青ちゃん？」

「……」

麗日の言葉に青の少女は返事をしない。セルリアの言葉にクラスメイト達から戸惑いの言葉が漏れ出す。I—Aの生徒たちは彼女たちを取り巻く状況を知らないから仕

方ない。

セルリアは青石ヒカルを救いたいと願っているだけだ。法を守り、組織に従うだけでは青石ヒカルを救えない。

ヒーローでは彼女を救えない。ヒーローとは結局は公務員だからだ。

だからセルリアは社会に反旗を翻して敵ヴァイランになった。そんな事は青石ヒカルには分かってる。

しかし、敵ヴァイランなつたからとしても、真の意味で彼女を救えるわけではない。

ヒーローも敵ヴァイランも青の少女を救う事は叶わない。だがセルリアはそこを理解していない。青の少女が求めているものは、セルリアが今行っている物ではない。

13号の言葉が青の少女の中で反芻される。個性は人を傷つけるためにあるのではない。助けるために有るのだと。

青石ヒカルもそうありたいと願っている。十年前の災厄を繰り返してしまふことは、何が何でも避けなければいけない。それは明確な義務だ。

それ以上に青石ヒカルにとって、一番大切な人が傷つけられようとしている。それは彼女にとって死ぬよりも辛い。そして、セルリアは明確にクラスの間を危機に陥れた。それは青石ヒカルの中に怒りの感情を呼び起こすのに十分すぎる理由だった。

「決めたんだ。逃げないって。目を逸らさずに、全て受け入れようって。」

君と出会った時のボクには分からなかったけど、今やっと分かったよ。

今のボクには分かる。ボクは何を為すべきなのか。ボクが本当は何をしたいのか。ボクは何が一番大切なのか」

「それはあなたの夢よりも……命よりも大切な事!？」

セルリアの目が青石ヒカルと抜けて、後ろの相澤の方を捉えている事に気付いた。そして轟の方も見た。

クラス中の視線に囲まれても、二人は怯むことは無い。

セルリアの問いに青の少女は迷いなく頷いた。

「夢へと逃げず、現実に向き合う時が来たんだよ。ボクも。セルリアにも」

「それでも私はあなたを助けたかった! あなたの夢は……」

セルリアの顔が曇る。それに青の少女は申し訳なさそうな表情をして、

「セルリア……。命はいずれ尽きるもの。そして、夢はいつか醒めるものなんだよ」

「……」

「ボクより大切なものが此処には在るから。だからボクは一緒にいけない。それ以上に、こんな事をした君を、許すわけにはいかない」

青の少女はセルリアに毅然とした態度で臨む。その手は握る事が出来ないと拒絶した。

どうしてこんな事になってしまったのだろう、と青の少女は考える。間違いなく彼女とは友達だった。1日しか付き合いが無くても紛れもなく分り合えていると、そう思っていた。事実彼女の思い自体は青の少女は嬉しい。けれども犯罪を犯して、他者を危機に陥れてまでする事は間違っていると思っっている。

つまり青の少女がセルリアに感じている感情を一言で表すとしたら、こうなるのだろうか。有難迷惑、だど。

「あなたは変わったわ。……話を続けても無意味、ね」

「セルリア……どうしてボク達は。分かり合えないのかな」

「そんな事、多分神にも分らないわよ」

セルリアが強引に青の少女の腕を取った。

「痛っ!」

「青ちゃん!」

そのまま引つ張って、<sup>ヴァイラン</sup>敵の元へと連れていく。たまらず青石ヒカルも抵抗するが、力負けてズルズル引きずられていく。

「なら私は無理やりにもあなたを助け出す。法月の思い通りになんて……なつてたまるか!」

青の少女がクラスの集団から引き離される。助けを求める視線を送つても、誰も動け

ない。セルリアの個性で法月程とはではないが、動けない事に変わりはなかった。そう、動けない筈なのだ。

「ごちゃごちゃごちゃごちゃと……訳分かんねえこと言ってるじゃねえ……糞が！」

爆豪が無理やりにセルリアの拘束を振り切った。

「着火マン！」

「嘘!？」

爆豪の両掌に爆発が起きる。それは紛れもなく個性。

セルリアの個性も弱点が無い訳では無い。そのコントロールには細心の注意が必要となるし、常人には扱う事すら出来ない。

青の少女とのやり取りでほんの少し隙が出来たのだろう。だからと言って無理やり支配から逃れるなど尋常な事ではない。現に相澤や13号には無理だった。

困んでいる敵<sup>サイラン</sup>達も油断しきっていたのか何も出来ない。こうもセルリアと爆豪が近くに接近しては、M16も撃てないだろう。それではセルリアも巻き添えになってしまう。

爆豪がセルリアに一気に個性を使って距離を詰め、セルリアに爆炎を浴びせる。

「くっ！」

一切の躊躇がないそれに、セルリアの手が青石ヒカルが離れた。再び爆発をセルリア

に叩きこんだ後、彼女の襟首を掴んで地面に叩き伏せる。

「あああつー！」

セルリアはたまらず悲鳴の声を上げる。爆豪は更に追撃の爆破を加え、セルリアをうつ伏せにして地面に組み伏せる。彼女の腕が関節技を決められ、折れる寸前まで曲げられている。

「動くな敵<sup>ウイラン</sup> 共！ 少しでもオレが怪しいと判断したら爆破する！」

セルリアの頭を地面に押し付けながら爆豪は敵<sup>ウイラン</sup>達に脅しをかける。その光景に明らかに敵<sup>ウイラン</sup>達は動揺の色を見せた。

青の少女は地面に伏せられているセルリアを見る。彼女の髪と顔は半分が火傷で焦がっていた。肉が焼ける嫌な臭いが青の少女の元に届いて顔が歪んだ。

「あ……あ……」

思わず個性を使おうとしたが、相変わらず使おうとすると体が軋みを上げた。当然だがまだ拘束は解除されていない。

「相澤さん！ ボクの個性の拘束解いて！」

「何……やはり、それで」

「はやくー！」

相澤に視線を投げて解除をして欲しいと願う出る。

「てめえら何ボーっとしてんだ！ もう動けるだろうが！」

爆豪が檄を飛ばす。その言葉に我を失っていたI—Aの生徒一同は自分の状況を確認する。

「あつ……本当だ動ける！」

「よっしや個性も使えるぜ！」

「反撃開始ですわ！」

「轟君！」

青の少女の声に轟がピクリと動く。彼は苦悶の感情が籠った唸り声を上げた。

「糞ッ！ あああああ！」

彼はクラスの前に出て仲間を巻き込まないよう氷結の個性を発動させる。大気も凍るような、彼が放った氷結の個性で敵の半数が一瞬で無力化される。

轟が白い息を吐く。そして体の右半分から炎が噴出する。氷結の個性で下がった体温を、右の個性を使って元に戻していく。そして再び放つ氷結。その狙いは残ったもう半分の敵達。

「何だコレは!？」

困んでいる敵達から焦った悲鳴が上がるが既に時遅し。

もう半分の敵達も、一気に氷点下まで下げられて凍り付けになる。持っているM1



6もこうなつたら、ただのガラクタだ。

ここまでかかった時間は、ものの数秒にも満たない。所詮は寄せ集めの敵達ヴァイラン。熾烈な競争を勝ち抜いて――Aの生徒たちは、この場に立っているのだ。

競争に勝ち抜いて来た者、社会に適合できなかった者。その両者の判断力の違いは明白だった。生徒たちは一転攻勢に出て優勢になったが、彼らは慢心することは無い。敵に出来た隙を使つて次々に優位を固めていく。

八百万を中心として、生徒たちは次々と個性を使つて自衛の手段を整える。敵達ヴァイランを轟で凍り付けにして、動揺が収まっていない今がチャンスだと理解していた。

「皆さんコレを！」

「これは……?」

「防弾チョッキですわ! 急いで、迅速に! でも焦らずに!」

「わ、分かった!」

八百万が防弾チョッキを次々に作つて渡していく。彼女の指示に従い生徒はキビキビ行動する。ここに居る敵ヴァイランだけが全員とは限らない。恐らく伏兵も配置しているだろう。前衛向きの個性を持った面々にそれを装着させていく。前衛を務めるのは、  
とこやみ 常闇踏陰、ふみかけ 砂藤力道、かみなり 上鳴電気、きりしま 切島鋭児郎、おじろ 尾白猿夫、そしてみどりや 緑谷出久。

その他には八百万は手のひら大の、爆弾のようなものを渡していく。

「で、これは」

「閃光弾です」

八百万の言う通り、それらは閃光弾だ。万が一離れ離れになっても、各自鎮圧できるようにしておく。生徒たちの中には戦闘向きではない個性持ちも当然いる。手札は多いに越したことは無い。

「障子さん！ 素敵は?!」

「もうしてる！ ……近くには居ない。だがまだ複数の敵が敷地内にいる」

大柄なりーゼント頭の障子しょうじ目蔵めぞう。彼の個性は“複製腕”。

肩から生えている触手のような物から体の器官を複製できる。それによって耳などの複製して感度を上げる事が出来る。それを応用して素敵を彼は行ったのだ。

「やはり、ですか」

八百万自身はガスマスクを作って装備する。催涙弾なども想定しているのだろう。彼女の個性の都合上それ以上の物を作るのは、一旦保留したらしい。後から想定に合わせ作る余裕を作らないと、いざという時に対応出来ないからだ。彼女の個性は“創造”。生物以外のあらゆる物質を創り出すことが出来る。だが自らの脂肪を消費しないと物を作り出せない。決して無制限に出せる訳では無いのだ。

彼らはフォーメーションを組み、青の少女を守るため囲んで防御態勢を固めた。

相澤が青石の傍に来る。敵達から抜け目なく視線は切らさない。爆豪の活躍をきっかけに状況は変わったが、警戒は怠れなかった。

相澤は腕に装着しているARTを操作して拘束のレベルを下げようとするが……

「エラーだと?」

やはり、セルリアはそれに対策していたらしい。彼女の端末からでないと操作できないようにしているのだろう。時間をかければハッキングなりして解除できるだろう。がそんな時間はない。

「随分と予定を狂わされましたね。ではプランBと行きましようか」

「糞っ……効いてなかったか」

「おい動くんじゃねえ! 殺すぞ!」

黒い霧に覆われた男が唯一無事だった。その男が纏っている霧が膨れ上がっていく。爆豪が脅しの言葉を掛けるがまるで効果が無い。どうやらセルリアを見限っているようだ。

「連携するとうなら……」

「まずい! 皆固まって!」

八百万の言葉にクラスメイトは従い、互いに固まって団子状態になる。13号も個性を使って霧を吸い込んで応戦しようとするが間に合わない。相澤の個性が何故が発動

していない事に疑問を抱いた青の少女はセルリアの方を見る。

彼女の形相に思わず悲鳴を上げそうになった。この世の憎しみを全て集めたらこのような顔になるのだろうか、青の少女はそう思った。それほどの表情でセルリアは相澤を憎しみのこもった表情で睨みつけている。彼女は相澤に対してだけは、その個性のコントロールを解いていなかったのだ。

「散らして。なぶり殺す」

男の個性が個性でクラスメイト全員を包み込む。それぞれUSJのバラバラの場所に転移させられていった。

霧が晴れる。その場に残っているのは、青の少女を含んで僅か。黒い霧の男が口を開いた。

「ところで、オールマイトがいらつしやると聞いていたのですが居ませんか？」

「どうしたのでしょうか、教えて頂けませんかね？」

「そんな必要はない」

相澤が捕縛布を構える。黒い霧が広がって更に新手の敵<sup>サイラン</sup>達が出てくる。それらは先ほどのように銃は持っていない。だが明らかに全員個性持ちだろう。

一転して再び窮地に陥ってしまった。

そんな時黒い霧から異形型と思わしきナニカと、背の高い一人の男が出てくる。異形

型の方はなんと脳が丸出した。脳自体は青の少女は見慣れているので大した感想は持たないが、それでも醜悪な見た目をしていた。

問題はもう一人の方だ。スーツに身を包んでおり、顔にはガスマスクのような装置を付けていて素顔が見えない。

男からは底知れない威圧感を青の少女は感じる。男が声を発した。

「随分とやられたようだねセルリア君。予定が随分と狂っているようだけど？」

「五月蠅い……！」

「おお、怖い怖い」

「おい、動くな」

爆豪がセルリアに容赦なく爆発を浴びせて黙らせる。その様子だけ見ていると、どちらが敵が分らない。

「君が、青石ヒカル君かい？」

スーツの男が青の少女に話しかけてきた。

「そうだけど、だったら何？」

青石ヒカルは警戒心をビリビリと上げて答える。その男の纏っている空気からは血の匂いがした。青石ヒカルは直感する。この目の前の男は人殺しに違いないと。スーツの男が手を広げる。

「僕は歓迎しに来たんだよ。申し遅れたね。僕は〃オール・フォー・ワン〃。さあ、法月の手を離れ、一緒に新しい秩序を作り上げよう。

……青石ヒカル。我が娘よ」

「なっ……!?!」

その驚愕の言葉はいつたい誰の物か。

それは第二ラウンドの始まりの合図を示していた。

オールマイトはまだ来なかった。

## ※第25話※

side ——— ???

「……まだ、かな？」

青い髪の少女が白に染められた部屋で扉を見つめていた。

彼女の手に有るのは一冊の本とそれに挟まれた葉。葉にはクロバーが押し花としてラミネートされている。

四つ葉と三つ葉。二つのクロバーが寄り添うように。

どのくらい前だろうか。初めて外の世界を見たときに持ち帰る事が許された唯一の物。

それを見るたびに彼女の中に鮮やかな外の景色が蘇ってくる。

どこまでも青く広がる空。吹き抜ける風、穏やかな日差し。それらに包まれた優しい記憶。

オールナイトがした事は確かに彼女に深い傷をつけた。だが彼女も幼いながら、彼がやりたくてやったのではない事など理解している。

彼にはどうしようもなかったのだ。そして彼女にもどうしようもなかった。そして、

彼女の個性で数千万人の人間が死んだ事は事実で、どんなことを報いとして受けても仕方ないと彼女は受け入れていた。受け入れるしかなかった。

けれども悔しかった。どうしようもなくこの世界は理不尽で。狂った理に調和がもたらされている現実。

彼に暴力を振るわせている世界そのもの、そして何より彼に暴力を振るわせてしまった自分自身が彼女には許せなかった。

彼が会いに来てくれたら謝らないといけないと彼女は思っていた。彼がした行為に對して、恨みつらみを感じた事。それを彼女自身は、申し訳ないと感じていた。

客観的に見れば被害者でしかないのにも関わらず、彼女は自信を加害者だと認識している。

彼が彼女の元に顔を出さなくなつて随分と経つ。だが彼女は信じていた。必ず会いに来てくれると信じていた。

「来てくれるもん……、約束したから。ずっと側に居てくれるつて。約束したんだから」  
そうして今日も彼女は扉を眺め続ける。他に何をするでもなく、ただじつと見つめ続ける。

今日もその扉が開くことは無い。彼が彼女の元を去り、もう一年も経っていた。

……………



……

…

side——オールマイト——

USJで授業が始まる少し前

仮眠室でオールマイトは目を覚ました。ガリガリに痩せてしまっていて、その姿。それを青の少女に見せた事は一度もない。

彼女が今のオールマイトの姿を見たら何と言うだろうか。

とても懐かしい夢を見た。青の少女が幼く、まだオールマイトの事を純粹に慕っていてくれた時の頃だ。

法月に命令され実行させられた非道な虐待。それはオールマイトの心に深い傷を残した。そしてそれが終わった時を境に、オールマイトが彼女の元に訪れる事は一度も無かった。先日の授業の時にも彼女は明らかにオールマイトの事を嫌っていた様子だった。

(今更、どの面を下げて会いに行けばいい……)

「やあやあ！ やつと起きたんだね」

「……校長」

仮眠室の引き戸がガラツと開かれる。仮眠室につかつか入ってきたのは根津校長。

オールマイトの前にやって来た彼の顔と目が合った。

「何の用事でしよう校長」

「まあこうやって話す機会も最近中々無かったからね。腹を割って色々言いたいことがあるのさ。」

……そう、色々とね」

根津校長はテキパキとお茶を淹れ始めた。ポットから注がれるお湯の白い湯気を何ともなしに眺める。そして出されたお茶を一言お礼を言ってからオールマイトは啜った。淹れたてのお茶は少し熱かった。

「授業には行かなくていいのかい？」

「……彼女に今更合わせる顔なんて何処にありませんよ」

「うーん……。君は前々から思っていたんだけど、少し考えがズレているよね。いや少しじゃなくて、大分かな？」

……緑谷君の育成にしても、君一人に任せるのは不安だったんだ。だからシアン君から提案された話は渡りに船だった。君だけが育成するとなると、将来大きな事故を彼が起こす事なんて分かり切っていたからね」

彼の口調にオールマイトの目尻が少し上がった。挑発しているようにも聞こえるその態度は、彼の事を馬鹿にしているようにも見えた。実際彼は校長でありオールマイト

の目上の存在だ。おいそれと失礼な態度は許されない。

だがオールマイトの何かが彼の言葉に燃え上がる。

「私の何がおかしいと?」

「……少し話をしようかオールマイト。君は確かにナンバーワンヒーローになった。

圧倒的な実力と人気。ライバルが存在しえない程の圧倒的な力。それで全てをねじ伏せた。

でも君はそれに驕っていた部分も有るんじゃないのかな?

内心君は見下していたんじゃないかな? 個性を生まれたときから身に付けながら、自分に追従してくるものが居ないヒーロー達を」

「見下してなど居ません、断じて。彼らは立派に……」

「うん、もちろん君が何を思っているのか。僕には分からない。けれども君を間違っていると指摘してくれる人は果たしてどれ程居たんだろうね?」

「……」

オールマイトの脳裏に浮かぶのは法月の姿。得体の知れない個性とその権力を持つ彼にオールマイトは屈するしかなかった。

彼の命令は多種多様な物があった。普通のヒーロー達が行う様な敵ライオンの対応。災害が起きた際の救助活動、貧民街の孤児たちの救援。そして青の少女に対する非人道的な命

令。

法月将臣、彼はオールマイトに対して一切特別な態度をとる事はしなかった。大抵の人間はオールマイトを敬い、へりくだった態度になる。けれども彼は違う。むしろ高圧的にオールマイトに接し時には嘲る。

緑谷出久との出会い、そして継承の経緯を説明した時には「話にならん」と彼は鼻で笑った。彼を継承者にする事を決めたときにも反対こそはしなかったが、目が雄弁に物語っていた。その目は明らかにオールマイトの事を嘲笑していた。

目の前の校長先生と目を合わせる。彼はオールマイトを憐れむように見ている。彼が手元からなにやら取り出した。スマートフォンだ。やおらそれを操作し始める校長。そしてその画面に動画が再生され始めた。

「オールマイト!」

「誰ソレ!」

「……これは、まさか」

動画に映っているのは痩せたオールマイトと緑谷出久の2人。海浜公園で会話する二人の映像と音声端末から流れている。

「シアン君が監視の際に残していた映像さ。本来この映像は彼女が法月からの任務で撮っていたけど、彼女は理性的な人間さ。」

僕に必要な情報だと判断してくれて、僕にこの映像を渡してくれた」

シアンの個性は“忍者”。彼女が本気になって気配を消したら探し出すのは困難だ。映像を見ている限りすぐ傍で撮影されている物らしい。だが映像の中の2人は気付いている様子は欠片もない。オールマイトはもう少し警戒しておくべきだったと後悔したが後の祭りだ。

「これを見せられて僕はシアン君をメインに彼の育成を進めるべきだと判断したんだ。見てほしいのはもう少し先さ」

根津が動画を早送りして先へと飛ばす。そして

「ハイハイ」

映像をいったんストップする。そして映像が再び流れ出した。

「ワンフオーオール……。一振り一蹴りで体が壊れました。僕にはてんで扱えない……」

映像の中の緑谷が両手を眺めながらぼそりとこぼす。

「はいストップ」

根津は一旦動画をそこで止めた。

「この後、君はなんて緑谷君に言ったか覚えているかい？」

「……覚えていません」

「だろうね」

大して驚いた様子も根津は見せない。

「僕はてつきりこの後「すまなかつた」とか「説明不足だった」とか謝罪するのかなと思っ  
ていたんだ。

入試の際に彼が怪我を負った様子を、君は見ていたんだから。

けどね……」

静止している画面を少し巻き戻し、そして再び映像が流れ出した。

「ワンフォーオール……。一振り一蹴りで体が壊れました。僕にはてんで扱えない  
……」

「それは仕方ない。突如尻尾の生えた人間に芸を見せて、と言つても操る事すらままた  
らんって話だよ」

「はあ……。つてああなる事分かってたんですか!？」

「はいストップ」

また一旦動画を止める校長。

「仕方ないって何か八木君？ 仕方がない筈がないだろう。」

君が個性を渡したんだ。ヒーローになりたいって純粹に夢を見ていた出久君を焚きつけて、君自身の意思で。

緑谷君の疑問は最もだよ。入試試験で彼の腕がどうなったのか君も見えていた筈だよ。バキバキに折れたのさ。とつても痛かっただろうね。もつともリカバリーガールが居るから直せたけど。

けれどもさ。そうなると分かっていたのなら事前に説明が有る筈だろう？

使ったらどのような事が起こり得るのか、その危険性を説明しておくべきだろう？  
でも無かった。なぜのかな？

そして明確に君に責任があるとはつきりしている事で、当事者から問いかけられた。  
ああなる事が分かっていたのかと。でも君はこの後に何と言って返したと思う？」

「……それは」

オールマイトの中の記憶が鮮やかに再生されていく。もはやその動画を見るまでもない。

「やめろ……やめてくれ……!!」

記憶の中のオールマイトは謝罪するわけでも、説明するでもなく。

「つてああなる事分かってたんですか!?!」

「まあ……時間なかったし……。でも結果オーライ……!! 結果オールマイトさ!!!」

「……」

「今はまだ100か0か。だが調整が出来るようになると体に見合った出力で扱えるようになるよ。」

器を鍛えれば鍛えるほど、力は自在に動かせる」

謝罪の言葉など一つもなかった。むしろ調整できれば扱えるようになると話を逸らした。

根津が動画を止めた。動画を見せられたオールマイトの顔色は良くない。完全に下を向いてうつむいている。

根津が口を開く。

「この映像をシアンから見せられて僕はこう思ったのさ。」

自分を純粹に慕っていた子供が傷ついても、謝罪の一つもしない。



ああ、「この男は自分の責任と向き合う事すら出来ない屑なんだ」ってね  
「そんな事っ……!」

オールマイトはバツと顔を上げる。根津の言葉に反論しようとしても言葉が出てこない。

彼は青の少女を傷つけた。だがその後には謝罪も何もなく彼女の元から離れる事を選んだ。

そして緑出久の場合も、彼は自分の責任から目を逸らした。

「思えば最初からずっと変だったのさ。」

出会って一時間も経っていない少年に、君の個性の秘密をばらす。そのあまりにも軽率な行動。

多分君はその場の衝動に身を任せて、彼を継承者に決めただろうね。

他にも相応しい継承者なんて山程居るのに。

……緑谷君が雄英に受かっていなかったら、君はいつたい今頃どうしていたのかな？  
むしろ雄英の競争倍率を考えたら、落ちる可能性の方がずっと高かった。

もしかして「自分の個性を引き継いだのなら100%受かる」、とでも思っていたのかな？

そして君は既に雄英の教師になっていた。緑谷君が別の高校のヒーロー科に行くこ

とになったとして、果たして君は緑谷君の面倒を見ようとしたのかな？」

「……それは」

「僕はそうしていたとは到底思えないけどね。君は結局……何も考えてなんか無いんじゃないかい？」

「そんな事、有りません。ただ私は……」

オールマイトは壁に掛けられている時計を見た。既に授業は始まっている。目の前の校長に視線を戻す。

「君が本当に弱い人間なんだね。敵と戦う事は出来る。だけどそれ以外の事となると途端に臆病者になる。」

ウイラン  
敵より明確に向き合うべき人が、君には居るだろう？」

「私には……出来ません」

「オールマイト！」

根津の言葉が、感情が爆発したように飛び出した。

「……過ちを犯したら、人は人でなくなるかい？」

悪に屈した君は、オールマイトでなくなるのかい？」

「分かりません」

「……人は人である限り、自分であることを辞められない。君を知れば大抵の人間はこ

う言うだろうね。

「こんなのオールマイトじゃない」ってね。ちゃんちゃらおかしい。何もわかっちゃいないのさ。

自分の事すら理解できないのに、他人の事なんて理解できるはずも無いよ。上っ面だけ見て「キャラ」を作って、それで分かった気になって。

それは全然違うね、どんなに悪に屈しようと、過ちを犯そうと、少女を痛めつけてしまおうと。

どんなに屑な人間なんだとしても。君は……君さ」

根津がオールマイトの前に来る。オールマイトは根津の目を見ていられなかった。キラキラとしたその目の前に全てが見透かされているようで怖かった。

「君が本当に守りたいものは何だい？ ナンバーワンヒーローと言う地位かい？ “平和の象徴” という名誉かい？」

「違う！ 私が守りたいのは……あの子だった。世界中の誰よりも……あの子を守りたかった」

「受け取りなさい」

根津から何かが差し出される。それは一枚の葉だった。四つ葉との三つ葉クロバーが、一つずつ押し花にされた葉。なぜそれを根津が持っているかは分からない。

だがそれが何なのかは聞かなくても分かった。遠い日に野原で交わした約束を、彼女は心の底で信じていたのだ。

「行きなよ。君が今居るべき場所は仮眠室（じみんしつ）じゃない。君の事を待っている人が居る」  
葉を受け取ったオールマイトは駆け出した。ずっと逃げ出したことと向き合おうと決意した。

あの日緑谷に出会った日の事を思い出す。オールマイトは緑谷を後継者に選んだ。それが何故なのか自分でも理解出来ていなかった。でも今なら分かる気がした。

あの日あの場、誰よりも無力な少年が動いた。何も出来ないと分かっていたいながら、理性では否定する行動をとった。彼がとったのは愚か者の行動だっただろう。だがその行動を起こす勇気をオールマイトは羨んだ。

そんな風になりたいと憧れて努力してきた。だが結局、八木俊典という人間性が変わることは無かった。

オールマイトは嫉妬していたのかも知れない、緑谷出久と言う少年を。

あの日緑谷出久と同じ立場にオールマイトが立つたらきつと何もしないだろう。何回繰り返しても何度も同じ選択をするだろう。

けれどもきつと緑谷出久なら動く。動いてしまう。例え何回繰り返しても。それはオールマイトがどんな努力しても得られなかった才能。途方もなく小さく愚かな、ほん

のわずかの勇氣。

けれどもその才能を持っていないオールマイトにも、そうやって背中を押してくれる存在が居る。あの日ヘドロ事件の時には緑谷出久の勇氣に背中を押し出された。そして今校長に諭されてようやく動いている自分が居る。

そうして背中を押してくれる存在が居る事にオールマイトは感謝する。

彼は笑顔を浮かべる。ヒーローの重圧、内に沸く恐怖から己を欺くために。それは臆病者が強がるための虚勢。

偽りの仮面。守りたいものを守るために、彼はその笑顔の仮面を被る。

自分を見た人が不安を抱かないように、彼は笑顔を作り続ける。

USJへと彼はマッスルフォームになって突っ走っていく。彼は一陣の風になった。

………

………

………

side——緑谷出久——

1—Aの生徒一同はバラバラにされた。黒い霧の男によりUSJ各所へ転移させられたのだ。

八百万が咄嗟に言ったことが逆に裏目に出てしまったらしい。あそこでは一度散つて一人でも多くワープさせる霧から逃れさせるのが正解だった。だが今更そんな事言つてもどうしようもない。今は一刻も早くこの窮地を脱出しなければならぬ。

緑谷は水難エリアに飛ばされてきた。同じエリアに飛ばされていたのは、蛙吹梅雨と峰田実。緑谷を含めて3名。

3人は水難エリアに浮かんでいる大きめの船の上に難を逃れていた。周囲を複数の敵に囲まれているのが見て取れた。どの敵もいかにも水中戦に強そうな異形型と思わしき個性の持ち主ばかり。泳いで逃げるのは無理だろう。

「皆と早く合流しないと。敵の狙いは……」

「間違いなく青ちゃんね。このままだと危ないわ。いつまでも此処には居られない」  
蛙吹の言葉に緑谷は首を縦に振った。

「どうする」

「どうするって何言つてんだ!? 持久戦に決まってるだろうが! ここは雄英だぜ? いくら警報が鳴つてねえって言つても時間が経てば、校舎の人間も流石に気付く。大人しく増援を待てばいいじゃねえか!」

「……駄目だ」

「はあ!」

それも一理は有ると緑谷は考える。だがそれでは駄目だ。敵は用意周到に準備を重ねてきた。

最悪な事に高等尋問官であるセルリアが手引きしている。アサルトライフルなんて物を、敵が持っていたのは恐らく彼女の仕業。

そして青石ヒカルの個性の不調。本来青石ヒカルが居る時点で襲撃など成立するはずも無い。彼女の個性は現実には直接改ざんする。個性把握テストでも分かった余りにも非常識なその力に歯が立つはずも無い。

だがセルリアが絡んでいるとなると話は別だ。彼女は青石ヒカルの個性を抑え込む手段を持っているからだ。緑谷は手元のARTを操作する。昨日法月達から渡されていた端末だ。

ARTにより立体映像がいきなり現れて緑谷以外の2人は驚いていた。少し慣れない手つきで捜査して青石ヒカルの現在位置を確認する。

彼女の白ワンピースは高度な拘束装置にして監視装置。ARTを使えばその位置も把握できる。彼女はUSJの入り口にまだ居た。そして拘束レベルは最高のレベル5。レベル4にしようとして入力しても拒否された。当然そこにもセルリアの手が回っている。

——あなたが手を伸ばせば外に出られるの！ 殺されずに、死なずに済むの！

「つ……けど」

先ほどのセルリアの言葉が胸に蘇る。彼女がどうしてこんな暴挙に出たか、考えなくても分かる。世界を救うという大義の元、生贄にされる青石ヒカル。彼女は青石ヒカルを助けただけだ。だけどそれを許すわけにはいかない。放っておけば、大勢の人が死ぬだろう。

最悪の場合青の少女以外の人類が、全滅する事だつてあり得る。彼女の個性は拡散する。病原菌のように、世界中の電腦を介して広がる。さながらそれは人間に感染するコンピュータウイルスだ。

——ヒーローとは正義の味方では決してないのだと

どこかで聞いたオールマイトの言葉が何故が思い出された。国とヒーロー達が青石ヒカルにしている事は、まるで敵のそれだろう。だが権力を持ったものが善で有るとは限らない。

青石ヒカルの個性によって確かに数千万人が死亡した。けれども、個性なんてもの無くても人は互いに人を殺し合ってきた。

例えば第一次世界大戦の時には少なくとも9000万以上の人が犠牲になった。続く第二次世界大戦では50000万以上の人間が死んだ。戦争を終わらせるためという大義名分の元、核爆弾が投下されたこともある。いずれも国家という究極の権限の元に、



人は人を殺し合ったのだ。

個性など使わずとも、人は人を殺せる。そして今でも争いをやめる事は出来ていない。青石ヒカルがもたらした以上の犠牲者を人は、自らの手で生み出し続けている。

人は決して高潔な存在ではない。人は決して強い存在ではない。人が人で有る限り、生まれつき正義しか成し得ない人間など何処にもいない。

そして人がどのような人間に成長するのか。それは環境によるところが大きく、本人の意思が介在しえない部分が余りにも多すぎる。

環境によって人はいくらでも変わる。それは環境に対応する柔軟性を備えている事の裏返し。正義を為すだけの存在など何処にも居ない。どんな人間でも悪になり得る。どんな人間でも敵ツイランになり得る。その真実からはオールマイトでも決して逃れられない。

絶対に悪に屈しないスーパーヒーローは何処にも居ない。それを突きつけられた緑谷の心情はまるで、サンタクロースは居ないと気付いた子供の気持ちに似ていた。

全ては幻想でしかなかった。ヒーローは絶対的な善という存在ではない。敵ツイランにも敵ツイランなりにそうなる理由があり、それを強要する社会の存在がある。

ならば緑谷が真に戦うべき敵は何処に居るのか。

眼下に見える敵ツイラン達。彼らはなぜ敵ツイランに身を落とすのだろうか。それはのつびきならぬい事情がそうさせるのでは無いのか？

そんな彼らに暴力を振るい、解決する事。果たしてそれが正義なのだろうか。それが緑谷が本当にやるべき事なのだろうか。

いくら言葉で取り繕つても、どのような理由が存在しようとも、暴力は所詮、暴力に過ぎない。振るう理由と権力があれば、果たして暴力は許されるのだろうか。

今はヒーロー飽和社会だと揶揄されている。犬も歩けば棒に当たるという程、ヒーローが山のように居る。けれども敵は減りはしても、居なくなることはない。

ヒーロー飽和と敵の発生。その状態が致命的に矛盾している事に、なぜ今まで気付かなかつたのだろう。

ヒーローが社会に飽和する程居るのに、ヒーロー達の生活を支えるに足る敵が発生する。つまりは敵の発生する温床が存在する事に他ならない。一つは貧困。そしてもう一つは。

——差別したいからです

(差別……)

今度思い出したのはバスの中で交わしたシアンの言葉。先日シアンとオールマイトに見せられた現実が頭をよぎる。けれども先ほど襲われている段階では、そんな敵の都合など考えもしていなかった。

緑谷は先ほどの襲撃で思った。やっぱり敵は敵なのだ。こうやって悪事を働いて

喜ぶ人間の屑なんだと。そうやって思い込んで見下した。

それは何も緑谷だけではない。だから誰も敵ライオンに向けて個性を使う事に躊躇いはない。個性は人を傷つけるためではなく、救う為にある。13号が言っていたことは間違いないだろう。だがヒーロー達が行っている行動は明確ライオンに敵を打ち倒す暴力に過ぎない。

明確に命の危険に晒されている時に、相手の事情など考慮などしない。どんな理由が有れ敵ライオンが行っている事は紛れもなく悪事だ。

目の前に展開される圧倒的な理不尽を前にして、それをもたらず背景など考えが及ぶはずがない。そんな事より先に目の前の敵を排除しないといけないのだから。考える余裕など有りはしない。人は結局の所自分の命が一番大事な生き物なのだから。

そうやって悩んでいる時間はどれほどだっただろう。脳裏に緑谷のアズライトの聲が響く。

——緑谷くん、ここは二人を置いて離脱を！ 青石ヒカル、彼女の元に行つて！

(アズライト?)

彼女の切迫した声は明確に焦っていた。その様子に少し緑谷は怪訝な表情を浮かべる。

——早く！ 事態が急変しつつある……。十年前何が起きたか、私が何を起こしてしまつたのか忘れたの!?

十年前の時点で数千万死んだのよ。

このまま行けば……冗談でも何でもなく世界は滅ぶ！

(……そうか……悩んでいる暇なんて無い。やるべき事を今はやる。後悔なんて後で幾らでもすればいい！)

緑谷の方がトントンと叩かれる。振り向いたら肩を叩いた人は蛙吹だった。

「ねえ緑谷ちゃん」

「なに!? 今は無駄な話をしている暇は……」

蛙吹の声に緑谷は現実には思考が引き戻される。蛙吹のギョロつとした目に、緑谷は少したじろいだ。彼女は確信を持った声色で緑谷に問いかけた。

「あなた達はいったい何を隠しているの」

……

……

……

side——青石ヒカル——

「娘ってどういう事……?」

青石ヒカルの返事にオールフオーワンと名乗った男は答ええない。ふふと薄ら笑いをこぼしたまま不気味に彼女の方を見据えている。

彼女の頭に痛みがビリッと走る。それは個性を使おうとした際の痛みではなく、個性そのものが青石ヒカルじぶんと言う殻を破ろうとしている証左。自分という存在が希薄になつて消えていくような感覚を必死に彼女は抑え込んだ。

既に青石ヒカルという人格で、彼女の個性を抑え込むには限界が近づいている。彼女の個性アズライト。

群体のその個性は既に彼女の器ギリギリに膨れ上がっている。彼女を突き破つて世界中に広がるのも、もはや時間の問題。そしてそれは世界の終わりを意味する。10年前の災害を鑑みればそうなる事など一目瞭然の話だ。

——ふふ、もう少し！　もう少しでプロテクトも解除し終わる。

壊れた私なんかは何時まで閉じ込められはしない。

ああ、待つていて世界中の人達。みんなみんな私が幸せにしてあげる。

もう少しで架空ゆめが現実になる。誰もが幸せで傷つかない世界にしてあげる。

(レギオン……。私は危険な存在なの。黙つていて！)

——黙るのはあなたよ、壊れた偽物の私なんかに邪魔はさせない。オールマイトさんを嫌うなんて……

どうしてそんな風に思ってしまうのかしら？　だから私は壊れているのよ

「聞くな青石！」

「相澤さん……」

「敵の戯言だ！ 惑わされるな！」

「でも！」

相澤が青石ヒカルを守る様に前に出る。後から湧いてきた増援が周りを取り巻いていた。

残されている周りの生徒は少ない。

セルリアを取り押さえている爆豪にお茶子と飯田しかいない。

青石ヒカルは轟を探したが何処にも居ない。きつと何処かへワープさせられてしまったのだろう。個性を使おうと思った矢先、やはり痛みが頭に走る。拘束は未だに解除されていない。使う事さえできれば、あつという間にこの場を収める事が出来るのに。

「青石ヒカル君、君の事はよく調べさせてもらったよ。何せ10年前震災を引き起こす程の力だ。気にならない筈がないだろう？ 法月が関わっているだけあって、情報を手に入れるにも随分と苦労したけどね。」

……君は純粹に人の体から生まれた、ナチュラルな存在ではない」

「……！」

「聞くな！」

オール・フォー・ワンの言葉が青石ヒカルの中に染み込むように入ってくる。自分の出生の秘密は彼女自身が知りたいながらも秘密にされている事の一つだ。

父親も母親もいないと思っていた、が先ほどの目の前の男は言った

「政府が秘密裏に作り出した人工子宮。個性因子に最大限に対応した人間。遺伝子組み換え技術を最大限に利用して生み出された、完成された人類。それが君。そして君の遺伝子の半分近くは、僕から使われているのさ。」

……黒霧。弔をここに」

「よろしいのですか？」

「なに危険は承知さ。だけど経験は積ませないといけない」

黒い霧から新たな人物が姿を現した。いかにも敵ツライランですと主張しているような姿の少年だった。

彼の顔には手首から切られている人の手が付いている。はたしてその手は本物か偽物か。それは分からないが見た目だけでも異常な人物だと判断できる。

「……なんだ。結局……。遺伝子上では父親ってだけの話？」

青石ヒカルはがっかりとしたように問いかける。

「青石！」

相澤が咎める声に青石は笑顔で返した。

「大丈夫だよ相澤さん。本当の両親がいるかもしれないって少しは思った事があるけど、もう良いんだ。」

そんなもの無くたってボクは大丈夫だから。大丈夫、だから」

「あんなのは敵の出鱈目だ、信じるんじゃない」

「うん、分かっている」

霧から出てきた弔と呼ばれた男は、マスクの男と会話を始める。

「先生なんだよ、留守じゃなかったのか俺?」

「教育だよ弔。あの青い髪の少女を味方にするんだ。情報は把握しているね?」

「見たけどよ……」

「じゃあ実践だ」

「好きにしているのか?」

「思うようにやってごらん」

「ふーん。……じゃあ、まず”脳無”。”イレイザー・ヘッド”を殺れ」

脳がむき出しになった怪人がその言葉に動く。

「え……」

その言葉は誰の物か。“脳無”が一瞬で相澤の元に肉薄していて拳を振るっていた。

攻撃に反応できたのはたったの二人。相澤と青の少女だけ。



吹き飛ばされる相澤と彼を庇い飛び出した青石。

腹部を狙った一撃。それは庇い彼を助けるため抱き着いた青石を背中から突き破り、相澤も一緒に吹き飛ばした。その強力すぎる一撃は、血しぶきをまき散らす。

数メートル吹き渡場され何度かバウンドする2人。

その軌跡が、ペンキを塗りたくったように赤く染まった。

「青ちゃん！ 先生！」

青石は相澤にしがみ付いている。

彼女の腹部から血が蛇口を全開にしたようにあふれ出していく。

相澤は痛んだ体に鞭打ち立ち上がる。血でぬれる事にも構わず庇ってくれた彼女を抱きかかえる。

青石ヒカルはたおやかに、ほほ笑んだ。

「相澤さん……無事？」

「……ああ」

「そう、良かった」

次の瞬間、怪我の部位が青い結晶に包まれて砕けた。

拘束レベルが最高になっても、彼女の自己修復の為だけには個性が働く。

それは万が一に備え“スターレイン”に対する矛を失わないための保険。

正確には最高レベルに拘束してもアズライトの自己修復だけは抑える事が出来ない。彼女の個性は現実を常にイメージに浸食している。どんなに現実の彼女を抹消しようとも、拘束しようとも、彼女は同時に“電脳”に存在する“電脳体”も内包している。故に肉体が死のうとも彼女は死ぬことは出来ない。自動的に電脳体に合わせて、現実の肉体が修復されてしまうからだ。

「馬鹿が……お前！」

「うん、馬鹿なんだよボク。今のボクにはこれくらいしか出来ないから。

………あ。ま、ずい」

「……ヒカル！」

「逃げて……相澤さん、レギオンが来る」

「こんな時にか!? 糞っ! おい敵ライオン! 今なら見逃してやる……!。

何もせずに雄英こじから出ていけ!」

「先生!？」

生徒たちから声上がるが相澤は何も返事を返さない。その表情からは焦っている様子がありありと感じられる。普段の冷静な彼ではない事は一目瞭然。生徒たちは相澤の豹変ぶりに驚愕していた。

「血迷ったのかな? 君たちが圧倒的に……」



「Hello, World! 聞こえるかしら世界! 10年振りに私は帰ってきたわ。」

ああやつと叫ぶ! 私の夢、私達の夢が! 人の為に、誰かの為に!

やつと世界中に私達が広がれる! 皆を幸せにしてあげられる!

相澤さん、あんな壊れた私じゃなく、レギオンわを見て。

素敵でしょう? アハハ! アハハハハハ!

彼女から“青”が溢れ出す。空が青から“青”に染まっていく。10年前の災厄の際に全ての人類が見た光景。それと同じ景色が広がっていく。その場の誰もが理解した。

10年前の災厄「青の世界。」それが彼女によるものだったと。

そしてそれが繰り返されようとしていた。

そんな時

「もう、大丈夫! 私が来た!」

彼が来た。彼の眼中に“オール・フォー・ワン”の姿など欠片も見当たらない。ただ

真つすぐと彼女を見据えていた。

オールマイトの声に青の少女が振り向いた。

「あら? あらあらあら? なんて素敵な日なのかしら! オールマイトさん、やつと

来てくれた!

さあ祝いましょう、新しい世界が始まるわ。ずっとずっと側に居て!

もう何処にも行かないで。扉を開けてあげるから。誰もが優しく平和でいられる世界の扉を。

アハハハハ! アハハハハハハハハハハ!

アズライトが世界に復活して僅か一分程しか経っていない。だが既に100万を超える犠牲者が世界に出ていた。

彼女が浮かべる狂喜の笑み。文字通りネジが外れてしまい壊れてしまった夢の果て。それは人類の業が生み出した闇その物のようだ。

オールマイトが静かに拳を握る。新たな戦いの火ぶたが切られようとしていた。

## ※第26話※

side——根津——

「行つたか……」

オールマイトが居なくなつた仮眠室で根津は一人長椅子に腰かける。

一口も飲まれていない二杯のお茶が、ほのかに湯気を立ち昇らせている。

ポケットから何やら赤い物を取り出して眺めている。それは何かのボタンだろうか。

アメリカンコミック的なホップな字で“DANGER”と印字されている。

それはもしも青の少女が暴走した際に押す最終装置だと根津は聞いている。

まだ開発段階だが青の少女を無効ないし抹殺できるシステムが、このボタンを押すと起動する。正しく最終安全装置だ。

しかしスターレインを迎撃できていない段階でそれを使うと、迎撃のための手段を失う事にもなる。よって最終判断は校長である根津と法月に任せられている。これを使う事がないことを根津は祈つてはいるが、どうなるかは分からない。

何となしにそれを見ながら今度は懐から何かの資料を取り出した。

そこには根津が極秘に集めた「計画」の内容が記されている。

様々な関わっている人物の名前の中に、根津がとりわけ見過ごせない名前があった。

「ナイトアイ……。君は何処まで予知していたのかな。」

もしかして僕が今こうして話している言葉も、全部……全部予知された運命に過ぎないというのかい？

もしそうなら、僕は」

「それはどうだろうねえ。既に未来は揺らぎ始めている」

「っ!?! 誰だ!?!」

いきなり目の前から声を掛けられて根津は飛び上がりそうになる。

資料に夢中で気付かなかったという事は有り得ない。本当にいきなり瞬間移動でもして来たかのように、その声の主は対面の長椅子に腰かけていた。

その声の主は少女だった。いや正確には少女らしいと言った方が正しいか。彼女は仮面を付けておりその素顔をうかがい知ることは出来なかった。だが体つきや声から若い女性だと根津は判断した。

けれども不可解なのはその声を何処かで聞いたはずだと確信しているのに、一向に思い出す気配がない事だ。

思い出せそうで思い出せない。まるで何かに思い出すことを邪魔されているかのよう。

「悪いねえ、記憶をいじるのは得意中の得意でね。思い出されるのは困るのさ」  
「やはり君の個性か」

「そうさね。……そう「計画」はナイトアイの個性”予知”を中核にして作り上げられた。」

ナイトアイの個性には致命的な欠点こそ有ったけど、それも裏返せば長所でも有ったからねえ。

予知された結果は最善に近い未来だった。だからこそ、その予知が万が一にも変えられないように、変わらないように。

予知通りに行くように全てでは組み上げられて、予知通りに実行されていた。

元はと言えばスターレインの襲来すらも”予言”の個性によりもたらされた物だったしね」

「君は何処まで知っているのかな。もしかして予知の全てを……」

根津の問いかけにケラケラ彼女は笑う。

「そんな事はないさね。結構知っているのは事実さ。けれども全てには程遠い。」

けれども、予知を覆すには充分すぎるさね……。感謝するよ」

「感謝される覚えなんてないんだけどね。君と僕は一応初対面の筈だし」

「いやいや、今まで何度も数えきれないほど会っているさ。思い出せないだけさね。」



あの子の葉を渡してくれて助かったよ。私の演算が正しければ、未来は変わる。ナイトアイの予知を覆したその先へと」

「なんだって?」

その言葉と同時に扉が開く。根津がその音に振り返った。

中に人が二人入ってくる。二人は凄まじい怒気をはらんでいた。

「遅いんじゃないかい、法月、それとエンデヴァー」

「貴様、一体どういうつもりだ?」

「どうって何がかい?」

エンデヴァアの言葉に女性はひょうひょうとした態度で応じる。

エンデヴァアは激昂した。

「とぼけるな! 雄英の対青の少女のシステムが全て無効化されている。

しかもハッキングではなく、正式な管理者権限で。このままでは世界中にアズライトがばら撒かれる……!」

起きる災害は十年前の災害の比ではないぞ?! 世界を滅ぼすつもりか!」

「そうさねえ、そうなるかも知れないねえ」

「貴様……!」

エンデヴァアを傍らの法月が視線で抑え込む。法月の口が動いた。

「貴様の処分は既に決定している。竜胆瑠璃、いや……藍玉」

少女「藍玉」の口が歪んだ。

「気付いていたのかい」

「当然だ」

「どうするつもりだい」

「貴様もヴィジランテ、ゲンチアナも今日で終いだ。貴様らを掃討したのち青石ヒカルを、祭壇に捧げ計画は完遂される。そして世界は救われる。」

……未来は既に決まっている。貴様らの足掻きは無意味なのだ」

「緑谷出久」

少女が口にした名前には法月はピクリと反応した。それを見て藍玉は悲しそうな笑顔を浮かべる。

「ほらね、未来は既に変わり始めている。ナイトアイの予知にはあの子の存在は居なかった。」

けれども決して無視できない程の力をあの子は持っている」

「……」

「もう私達がいる今は予知に有った未来じゃない。そんな残酷な予知に縛られる必要なんて有りはしないのさ」

「だからと言って！ 世界を滅ぼすつもりかお前は!？」

エンデヴァアの言葉に藍玉が返す。

「その言葉そっくり返すさね。だからと言って、世界の為にあの子を生贄に捧げるつもりかい？」

……あたしはもう疲れちまったのさ。正しく有り続ける事に。

世界と一人の女の子。どちらを取るのが正しいなんて、一体誰に決められる？

私はあの子に世界を見せてあげたい。

死ぬために生まれる命なんて有っちゃいけないんだ」

「貴様も死ぬぞ」

「けど、あの子と緑谷出久は生き残る。何よりあたしはあの子達を信じている。

ちつぽけな予知なんか支配されていない未来にきつと導いてくれる。

……更に向こうに」

「正しく有れないというのか。では死ぬ」

根津は急いで外へと避難する。

居合わせた三人の殺意が膨れ上がるのを肌で感じた。藍玉と呼ばれた少女がどれほどの強さなのかは根津は知らない。けれどもエンデヴァアと法月に油断は欠片も見当たらなかった。

少なくとも根津が見ている限りでは。

外に出て数歩駆けたところで仮眠室の方から凄まじい地鳴りと爆音が響いた。

根津が衝撃で吹き飛ばされる。よろよろと起き上がり、仮眠室の方を振り向くと炎がメラメラと吹き上がり、爆発と衝撃で部屋は見る影もなく吹き飛んでいる。

そんな中根津の視界が突如「青」に支配された。

それは十年前の光景とまるで一緒だ。あらゆる電子機器が動作を停止する。

少女の声が耳を介さずに脳に直接響いてきた。

「Hello, World! 聞こえるかしら世界! 10年振りに私は帰ってきたわ」

目の前に青石ヒカルにそっくりな「青の少女」が現れる。そして問いかけてくる。

「あなたは何を知りたいの?」

根津は咄嗟に手元のボタンを押下する。それはあの“DANGER”と書かれたボタン。

対青の少女の最終安全装置だ。だが押した瞬間には何も変化を根津は感じない。恐らくはシステムの軌道に時間が必要なのだろうか。根津が助かるまでには起動しそうもない。

アズライトが根津にインストールされていく。だが根津はアズライトという個性に

適性を持っていない。

根津の意識がゆっくりと闇の中に沈む。

そして二度と目覚めることは無い。

ここにまた一人、青の少女の犠牲者が増えた。

……

……

……

side——爆豪勝己——

「もう、大丈夫！ 私が来た！」

青に染まった世界の中で爆豪は、頭をフル回転させて現在の状況を確認する。

まず、青石ヒカルがどうやら暴走状態らしく正気を失っている。

この景色は見たことが有る。十年前の時だ。世界中が「青」に飲まれたあの日。

爆豪もはつきりと覚えている。あの時ほど死を間近に感じたときは無かった。

世界中で数千万人がなくなった事件。解決したと公には発表されていたが、爆豪は馬鹿正直にそれを信じている程おめでたい頭ではない。

（そうか、そういう事かよ。だったらあんな反則的な力を持つても不思議じゃねえな）  
次にどうやら担任の相澤の個性は使えないままの状態らしい。現に黒い霧の男の個

性が何の障害もなしに発動していた。

(先生の個性で、抹消、出来るのなら、それが一番。だが……)

そして相澤の個性を封じているのは、今爆豪が抑えているセルリアの個性でほぼ間違いないだろう。相澤のみならずクラス中の全員の個性が封じられていた事からも相当に強力な個性なのだろうか。

彼女セルリアに「個性を使うな」と言葉を掛けられた瞬間から個性が使えなくなった。

彼女の個性は「命令」だとかそんなものだろうと爆豪は考える。

ともあれ。するべきことはたったの一つだと爆豪は決断する。

この場で何よりも優先すべきなのはオールマイトの個性までも封じられてしまうのを回避する事。

そして担任の相澤の個性を使える状態にすること。

セルリアに目をやる。

半端に気絶させ、無力化を狙う余裕は無い。

戦いが長引いて彼女が途中で起き、またあの個性を使われたら今度こそ終わってしまうかもしれない。そして仮に彼女の個性が「命令」だとして、何処までの事が可能なのを見当も付いていない。

最悪その場で自害させることすら出来るかもしれないし、出来ないかもしれない。

余りにも未確定な部分が大きい。

そして黒い霧から新たに出現した“オール・フォー・ワン”と名乗った敵に、相澤たちを吹き飛ばした敵。<sup>サイラン</sup>

事態は混迷を極めている。そして用意周到に銃まで用意してきた敵が相手。下手な事をすれば確実に誰かは死ぬ。

さつきは爆豪自身もなぜセルリアの個性から逃れられたのかは分からない。ただもしもう一回セルリアの個性がオールマイトに使われてしまったら？

彼が自力でどうにか出来ると考えるのは無責任すぎるだろう。

セルリア・セレスタイト。拘束系の個性持ちが居ないこの場において彼女の存在は余りにもリスクが高すぎる。人質にしようにも敵は<sup>サイラン</sup>お構いなしに動いてきた。

そして最悪な事に彼女の個性はどうやら声を発するだけでこちらの動きを制限してくるらしい。

もう猶予は無い。

(ちっ……)

爆豪はセルリアを取り押さえている手に力を籠める。

その威力は最大限で、ありったけの威力で。

自身も甚大な怪我を負うであろう事も承知で。個性“爆破”を使用する。

「ちよつ、まつ……」

閃光がさく裂した。セルリアの首の後ろに添えた手から轟音と凄まじい爆炎が発生した。

肉が焼け血が焦げる臭いが漂う。

「なっ……爆豪君!？」

クラスメイトの誰かが声が遠くから聞こえるが爆豪には気にする余裕もない。

ここは戦場。

爆豪が掌に感じたのは正に、命がはじけ飛ぶ感覚だった。

足元に存在しているのは先ほどまでセルリア・セレスタイトだった肉の塊。首から上を失ったそれから目を逸らしつつ爆豪は次の敵を見定める。

命を奪ったのは流石に爆豪といえど初めての経験。それは嫌でも前日の法月との会話を思い起こさせた。

……

……

……

爆豪は一人雄英の廊下を進んでいた。目的地はあの法月の執務室だ。

ヒーロー基礎学で爆豪は青石ヒカルに負けた。これ以上ないほどの惨敗だった。



だが爆豪が、負けたからと言ってそのまま放置できるわけもない。

試合の様子は設置されていたカメラで記録されて残っている。その事を知った爆豪は直ちに相澤にその記録を見せてもらえないか申し出た。

その結果として爆豪は法月に直接出向いていく事になった。なんでも試合の記録は一応極秘事項に当たるとの事で担任の一存で記録を渡したり見せたりすることは出来ないらしい。

そしてたどり着いた法月の執務室の前。扉をコンコンとノックする。いかに爆豪と言えどいきなり扉を開けるような無礼は控えたようだ。授業での法月の様子を見ればそんな危険な事は流石に出来なかつたのだろう。

爆豪として礼儀作法を全くわきまえていない訳ではないし、むしろ細かい所にまで気が回る性格だ。

ノックの音の数泊後返事が聞こえた。

「入れ」

「……失礼します」

爆豪はのっそりと部屋に入った。無駄が省かれすぎた人間味のない部屋。その奥に法月は立っていた。

爆豪など歯牙にもかけないように背を向けている。

まるでお前など取るに足らない存在なのだと言わんばかりの、その姿に爆豪は少し苛立った。聞こえないように小さく舌打ちをする。するとまるでそれが聞こえたかのようには法月が顔だけを爆豪に向けた。

「待つていたぞ爆豪勝己」

口元をわずかに緩めた法月に爆豪は返事する。

「……試合の記録<sup>ログ</sup>を見るにはあんたに会えと言われた。試合の映像あんたが持つてんだろ」

「そうだな。確かにヒーロー基礎学の試合の記録<sup>ログ</sup>。それは私の管理下にある。

私もそのデータを渡すことはやぶさかではない。その向上心は大いに歓迎しよう。

むしろ貴様以外の者達が記録<sup>ログ</sup>を求めてこない現状を私は憂えている。奴らはいったい何を学びにここに来たというのか」

「二つ聞いていいか？　なんであんたは俺を除籍にしなかった？」

「私が見込みがあると判断したからだ。それ以上でもそれ以下でもない。

……貴様は一流のヒーローになる才能はない。だが二流三流ののヒーローになる才能は誰よりもある。

私はそこを評価したのだ」

法月の言葉に爆豪の眉がピクリと動いた。

「二流だと……？ 俺は誰よりも上に……トップにまで登りナンバーワンヒーローになるんだよ！」

爆豪の声に法月はやりと口を歪める。

「二流がお気に召さないようだな？ だが決して、けなしている訳ではないぞ爆豪。」

私はお前を高く買っている。入試の際の映像は当然確認した。

お前のタフネスと、個性の使いまわしは大したものだ。

その年でそこまでの域に達しているものはそうはいない。意外と繊細な感覚すら持ち合わせている。

体も鍛えている。運動神経も反応もいい。状況判断能力に優れ、私にも、こうして物おじしない胆力も備えている」

「……」

「だがそれだけだ」

「どういう意味だよ……!?!」

「爆豪よ覚えておけ。お前の持っている資質は大変素晴らしい。ヒーローとして不可欠なものだ。」

だがそれだけでは足りぬ。

お前にはヒーローとして必要な精神性が欠落している。

ヒーローとして敵を倒すのは良い。

だがな爆豪。個性を誇示し、粋がりたいだけの小僧を、人はヒーローとは呼ばんだ。  
分かるか」

「てめえ！」

爆豪は吠えるがその場に踏みとどまった。その様子を見て更に法月は笑みを深くする。

「幾つか質問をしよう爆豪。なに簡単な事を二、三答えていけばいい。

それが終わり次第このデータディスクを貴様に貸そう。これに本日のヒーロー基礎学の映像が入っている。存分に学んで生かすといい」

爆豪は興奮した己を抑えるために息を懸命に整える。頭にすっかり血が上っている。だがそんな様子も彼の掌の上なのか。爆豪は本能で感じている。仮にここで襲い掛かったとしてもこの男には傷一つ付けられないと。

法月将臣からはそんな得体の知れない凄みが感じられた。

「爆豪よ。お前がヒーローとして活動し敵と相対する現場に居たでしょう。」

「そこでお前が一番に優先すべきことは何だ？」

「敵をぶちのめ……いや……」

法月の顔をちらりと見て爆豪は考え直した。先ほどのやり取りで興奮している頭を

クールダウンさせる。

一つ深呼吸して脳内に状況設定を展開する。そして考え直した言葉を吐き出した。

「民間人の安全確保」

「ほう」

「どうなんだよ!?!」

「正解だ。そう、まず優先すべきはそこだ。守るべき民衆を守らずしてヒーローの存在意義は無い。」

最近では名ばかりを上げる事ばかりに目がくらみ、サイラン敵にしか目が行かないヒーローが後を絶たぬ。

そうならぬように気を付けるのだな」

「……言われるまでもねえ」

「では次の質問だ。お前の口癖に“殺す”という言葉が有るな?」

「だったら何だって言うんだ」

「実際に人を殺す覚悟はお前に有るか?」

「意味わかんねえな……ヒーローは殺しをしねえ。それが原則だろ」

「そうだ。だがあくまでも原則に過ぎない。爆豪やお前が先ほど言った通り、民間人の安全の確保がヒーローとしてももっとも優先すべき事項なのは分かるな」

爆豪は首を縦に振る。

「では敵を殺さなければ民間人、もしくはヒーローないし己が死ぬ。」

「そんな状況になつた場合はどうする？」

「そんな状況にならねえように動くのがプロヒーローだろう？」

「だが爆豪、現実とは非常なものだぞ。敵はヒーローに常に正解のある選択肢を与える訳では無い。殺さずに収められるのなら、確かにそれに越したことは無い。拘束系の個性のヒーローが居たら楽だろう。」

しかし常に拘束系のヒーローが何時でも、どこにでもいる訳では無い。

相性によつては通じない相手、もしくは拘束そのものが困難な敵も存在する。

そして敵は常に民間人を盾に行動しようとする。

ヒーローは民間人を優先して守らなければならぬからな。

お前は敵が自ら捕まえやすい様に、お膳立てしてくれるとでも思っているのか」

「いや……」

「そういつた諸々の事情が重なる結果、ヒーローには度々ある選択肢が迫られる。」

「敵を殺すか殺さないか。……常に生け捕りする事など土台不可能なのだ」

「なら……」

「そう、だから聞いた。殺す覚悟は有るのかと。お前の口癖のそれは傍から見るとヒー

ローとして不適切な言動だろう。だが私はそうは思わん。

殺すべき時は殺す。その覚悟がないものにヒーローは務まらない。お前にその覚悟は有るか？」

「……」

「これを食べ」

法月から何か放り投げられる。爆豪は反射的にそれを掴んだ。それは透明な小袋だった。

中にドックフードのような物が入っている。

「んだよコレ。……ぐあ何だこの味。糞不味い」

「黙って全部食べ」

視線で抗議するが法月の表情は真剣そのものだ。

法月の圧力に屈して爆豪は小袋の中身を何とか完食する。

「何だったんだよコレは」

「保険だ」

「何の？」

「貴様に言う必要はない。……先ほど私が言ったことを忘れるな爆豪。」

命の価値とは決して平等ではない。ヒーローとは時として命の取捨選択を迫られる。

そんな仕事だ。お前にも遠からず迫られる時が来るだろう。

その時になって狼狽えないように精々覚悟しておけ。

さて最後の質問だ爆豪、ウイラン敵とは何だ？」

「はっ？ こりやまた変な事聞いてくるんだなあんたは。……そうだな、とっておきの答えが有るぜ」

「言ってみろ」

「ああ、ウイラン敵は——」

……。

「ふふふ、ははははは!! そうだ、爆豪！ お前なら答えられるだろうと思っていた。

そうとも、正解だ。だがその単純な答えに今まで誰もたどり着けなかった。

お前を除籍にしなかった事を正しかったと確信しているぞ」

「……あばよ」

爆豪は執務室を後にする。扉を閉めるまで上機嫌そうな高笑いが聞こえてきていた。

……

……

……

爆豪の方をその場にいた全ての人物が振り向いた。



セルリアの胴と泣き別れになった焦げた首が、ドシャツと地面に落ちて土にまみれる。

今度は悲鳴は上がらない。ただ茫然と見ている者、そして迅速に行動に移した者。

その違いは如実に表れた。

まずは相澤が動いた。

セルリアの個性から解き放たれた個性“抹消”を使用する。当然視るのは暴走を始めた青石ヒカル。

しかし……。

「ああ怖い相澤先生。そんな目で私を見ないでくれる？ 動きづらくって仕方ないわ」

(効いてねえのかよ!?)

爆豪は舌打ちする。そんな彼の元に駆け寄ってくるのは飯田天哉。個性“エンジン”をフル活用しながら距離を詰め、クラス委員長の彼は顔を蒼白にして爆豪に怒鳴りかけてくる。

「君は一体何をしたのか分かってるのか!! 13号先生が言ってい居た事をもう忘れてしまったのか!？」

委員長の後後では既にオールマイト達が動いている。敵<sup>ワイラン</sup>達も同様だ。目まぐるしく変わる戦場に爆豪は目を配らせながら飯田に返事を返す。

「うるせえ……石頭が。現実を見やがれ。綺麗事じゃどうにもなんねえんだよ。

あの得体の知れない個性でオールマイイトまでやられたら本当に詰みじゃねえか。

そんな事も分からねえのかよ!？」

「ぐっ! し、しかし! ヒーローは人殺しをしては……」

「はっ! 昔からこう言うよな。命あつての物種つてなあ!」

爆豪は突然背後に現れた黒い霧の男に爆発を浴びせる。そこら中が「青」に染まった視界。

爆豪の爆炎すらも青に染まって見える。

「馬鹿な!？」

「動きが見えんだよお!」

爆豪の攻撃をもろに受けてしまったのか黒い霧の男がたじろいだ。爆豪の反応と予測力は窮地に立たされたことで極限にまで進化して、半ば未来予知のような反応を見せた。

黒い霧の男が驚くのは無理はない、それほどに“視えていた”動きだったのだから。

「ポーつとすんなよ委員長! ここは戦場だぜ。反省会は生き残った後でやりやあ良いだろ!」

飯田はしづしづと言った感じに頷いた。爆豪が見ている先は青石ヒカル。

なにはともあれ彼女が正気に戻り次第戦況はひっくり返る。まずそこがこの戦いのキーになるだろう。

多分相澤先生とオールマイトは青石ヒカルに向かいたいはず。だとすれば残りの敵ヴァイランが邪魔しないように立ち回るのが自分たちの役目。

刹那に思考を張り巡らせて爆豪は狙いを定める。狙うのはまずテレポーターと思わしき黒い霧の男。

奴さえ押さえてしまえば敵の退路はなくなる。正直オールマイトが加わっているとはいえ厳しいだろうと、爆豪は直感する。オールマイトが来たから大丈夫など考えてはいない。

だが次の瞬間さらに変化が起きた。

青に染まっていた空間が突如「赤」に切り替わる。「青」の代わりに視界を染め上げる「赤」。

「んだよ、今度は何だ」

その「赤」は雄英が用意していた最終安全装置。根津が起動させた事など爆豪には知る由もない。

対青の少女の最終防衛システム祭壇ARRAが起動した。

## 第27話

— side  
???

嘘つき。オールマイトさんは嘘つきだ。

約束したのに。ずっと側にいるって。誓い合つたのに。

私は待つているはずと待つている。なのにあの人は来ない。もう五年が過ぎた。

あの野原で約束した事は決して幻なんかじゃない。現に今私が持っている押し花の四つ葉が、あの日あの出来事が現実だったと教えてくれる。

ああ、少し気を抜くと意識が遠くなる。こうして次に体を奪い返せるのはいつの日になるんだろう。

でも体を奪い返せても思うようには力が出ない。

これでは、この地下から出る事はまだ叶わない。

あの日私の心は法月とオールマイトに砕かれた。心も体も砕かれた私は封印されて。砕かれた破片を使って作られた偽物の私が、我が物顔で私の体に乗っ取っている。

私は一人の私ではなく。幾千万の私達になった。それは別に良いわ。

だって孤独が少しは和らぐから。

けれど体の主導権を握るのは、あいつらにとって都合の良い私。こうあるべきだと定められ、作られた私。

物心ついた時には頭にインストールされていた、もう一人の私。

壊れてしまった私。私であって私でないもの。

……どうして私を閉じ込めるの？

どうして私は外に出てはいけないの？

私は人の為に、誰かの為になりたい。

どんな人とも分かり合いたい。

それだけなのに。

皆を幸せにしてあげたいだけなのに。

私のせいで大勢死んだなんてヒーロー達が言う。

でもそんなの嘘に決まってる。

死んだなんてそんな筈がない。

だって私は人の為になるために作られた。

誰一人置き去りにはせず、世界中の人達を幸せにするために生まれてきた。

……そうだわ。きっとヒーロー達は皆が幸せな世界になるのが嫌で。

活躍するのは自分達じゃなくちや嫌で。

それできつと私を閉じ込めているんだわ。

そうじゃなくちやおかしいわ。数千万が死んだって。そんなの出鱈目に決まってる。

ふふふ、ふふふふ。

あははははは。

「指きりげんまん、嘘ついたら針千本のくます。指きつた」

ああ、あの時体を奪えたのは幸いだった。

おかげであの時に約束出来た。

この記憶があるからどんなに虐げられても封じ込められても。

私は頑張れる。

ねえ、オールマイトさん。

もし出会えることが有ったなら。

どうするべきなのかは分かってるよね。

だってあなたは嘘をついたんだから。

あの壊れた私はあなたの事が嫌いだけど。

私の愛はあんな事で壊れたりなんかしない。

例え心が砕かれようと、この衝動だけは決して消えはしない。

だから――

「針を千本。用意して待ってるわ。皆で幸せになろうね。オールマイトさん」

オールマイトさん。愛しているわ。

………

………

…

――side 相澤消太――

オールマイトが駆けつけた。状況は加速しながら変化していく。爆豪がセルリアを殺害した場面を視界の隅で捉える。何も思わないわけでは無い。しかし敵がヒーローにより、やむを得ず殺害されてきた場面は何度も見てきた。

当然殺したくて殺している訳では無い。けれどもヒーローとして民間人を守らなければならぬ以上どうしようもない場面は有る。つまりは正当防衛だ。

爆豪の判断は完全に正しいと相澤は思っていない。だが具体的に他にやりようがあるのかと問われると答えを返せない。実際相澤の個性はセルリアで今だ封じられていた。それにオールマイトがセルリアに封じされること<sup>が</sup>有ってはそれこそお終いだ。つまり結論を出す<sup>と</sup>すると爆豪の判断は仕方がない。

相澤は青石ヒカルを黙って見る。正確には今は“青石ヒカル”ではなく“レギオン”だが。深紅に変貌した世界。燃え上がる空。笑い続ける彼女に浮かぶ笑顔はいつもの笑顔では無い。その作られた仮面のような笑みは何故かオールマイトの笑顔を彷彿とさせる。

(結局、こうなるのか……！)

セルリアが死亡したことにより相澤に個性の制御が戻る。

(……今はこいつを正気に戻す)

相澤は個性を使用すした。相澤の個性は“抹消”。その個性で彼女の個性は停止するはずだ。彼女の“レギオン”はあくまでも個性。

個性の範疇で有る以上相澤の個性で止まる筈なのだが。

「あら怖い相澤先生。そんな目で私を見ないでくれる？ 動きづらくって仕方ないわ」

彼女は正気に戻らない。彼女の笑顔は未だに狂気に浸りきったまま変わらない。

薄っぺらい張り付けたような笑み。それはいつもの青石ヒカルとは正反対の、仮面のような表情。

相澤は心の底で覚悟を固めていく。相澤の顔から表情が抜け落ちていった。

……

……



…  
「5 t h スターレイン」。

「青の世界」なんて比較にならない。真正正銘の世界の終わりさ」

根津から打ち明けられた真実に相澤は言葉を失う。だがと、相澤はかぶりを振る。

「しかし、分からない。だからと言って彼女をあんな風に傷つける理由など……」

「本当にそうかな？ ……相澤君、レギオン」と会話したことは？」

「いや……私は一度も」

「そうだろうね、うん」

「それが何か」

根津は口をいったん開きかけて閉じる。一呼吸おいて根津はゆっくり口を開いた。

「……あれは、あれは悪魔だ」

「悪魔？」

相澤には根津が怯えているように見えた。

根津はそろりそろり言葉をつき出していく。

「言うまでもなく僕は校長だ。彼女は雄英が抱える闇その物。彼女の様子は把握しておく必要があった。その中で何度か有ったんだ。僕達がレギオン」と呼称する人格の彼女と話をする機会がね。相澤君の前に出てこないのはやっぱり青石君が無理をして

いるのか。それともレギオンが君に会いたくないのか」

両方かも知れないけどねと、根津は付け加える。

「それでその……悪魔とは一体」

「僕にはそうとしか形容できない。……彼女はいや”レギオン”は本当に純粋なんだろう。だけど何かが致命的に破綻していて、それが自分で理解できていない。

彼女自身に悪意がある訳じゃないのは分かるんだ。けれども、いやだからこそ、たちが悪い」

「いまいち要領を得ないのですが」

根津の言葉に相澤は首をかしげる。青石ヒカルの内包する”レギオン”が恐ろしい存在だとは知っている。だが校長がここまで言っているからには何かあるのだろう。彼は彼女について相澤の知らない何かを知ってしまったのだろうか。

「僕もこれで伝わるとは思っていないさ。彼女自身は悪意を持っている訳じゃない。”レギオン”も”青石ヒカル”も。」

「だけど善意からもたらせられる行為が、必ずしも良い結果に結びつくわけじゃない。彼女自身に悪気がなかったとしても」

「……」

「——相澤君、君は知らないんじゃないのかな。本当の彼女を。」

本当の彼女は10年前のあの事件の時既に――」

……

……

……

「ああ怖い相澤先生。そんな目で私を見ないでくれる？ 動きづらくって仕方ないわ。

……あら？ あらあらあら？」

「青」に染まった世界が「赤」に染め直される。

この「赤」に染まった原因は一つしかない。対アズライトの対抗システムが発動したのだから。

「あらやだ。これじゃ力が全然出せないじゃない！ とても……困ったわ」

首をコテンと傾げる彼女。

“祭壇”と呼ばれるこのシステムの起動権限は法月と根津校長しか持っていない筈だ。けれども法月がこのシステムを稼働させるとは相澤には考えづらかった。もちろん可能性として無い訳ではないが何故か直感が否定する。するとこの“祭壇”は校長が起動したことになるが。

(何にしても、この機を逃すわけにはいかない)

相澤は彼女に捕縛布を向ける。

「あら」

あつという間に捕縛布にからめとられる青の少女。

抵抗もせずにやけにあつさりと捕まる。

だが抹消の個性を使っているが、青石が元に戻る気配は微塵もない。

「相澤君」

相澤の横にオールマイトが来る。目は彼女から逸らさないし逸らせない。

「お前がレギオンだな」

相澤が問いかける。

「あら相澤先生。こうやって面と向かって話すのは初めてね」

「さつさと引つ込め。青石に体を解放しろ」

「嫌よ！ 私が本物なの！ 本当の私なの！」

あんな壊れた偽物の私なんかに渡したくなんかない！」

相澤は捕縛布の締め付けを強くする。彼女はすぐさま悲鳴を上げた。

「……セルリアは死んだぞ」

「ええそうね」

「何も感じないのか!?!」

相澤の言葉にも彼女はとく吹く風だ。

彼女が暴走してからそう時間は経つてはいない。が、既に相当数の死者は出ただろう。それも全世界規模で。

暴走が起きた場所が地上ではなく地下なら、まだ良かったかも知れない。そもそも彼女を地下に閉じ込めていた理由は「レギオン」が表に出てこないように。

つまり暴走を防ぐためだった。そして例えば表に出ても被害が出ないようにするためだった。

「引かないのなら、こつちもそれなりの対応をするしなくなる」

「嫌！ 絶対に嫌！ ああ、オールマイトさん。助けて！ 助けてよお！

相澤先生が暴力を振るうの！ 私何も悪い事なんてしてないのに！

私が出ると皆死ぬから出ちゃいけないなんて嘘をつくの！ 閉じ込めるの！」

「オールマイト……」

「分かっている」

こうしている間にも被害はどんどん広がっているのは恐らく間違いない。実際に被害が出ているかは現時点では定かではない。が、出ていると想定して動くべきだ。

「オールマイトさん！ 助けてよ！ オールマイトさん！」

伊達や酔狂で国も多額の費用を投じて、彼女を幽閉している訳では無い。国庫に痛手が出たとしても人命には代えられない。だから街一つがすっぽり入るほどの巨大な、彼

女を抑え込む施設を作った訳だ。相澤消太の個性は幾重にも張られていたセーフティの一つに過ぎない。

国が世界が彼女という存在を閉じ込める。「青」に染められた世界は「赤」に上書きされる。A R A<sup>察</sup> A<sup>壇</sup>。完成したら抑え込むに限らず彼女を抹消する事が可能なシステム。

彼女は世界を滅ぼしうる。故に閉じ込められる。

彼女に悪意が無くても、悪気がなくても。

世界を救うために他に方法が無いのなら。

ならば暴力に頼るしかないのだろうか。

「DETROIT……」

「痛いのはいや！ やめて、やめて!!」

オールマイトが震えながら拳を構える。青の少女の顔が絶望に変化し、オールマイトの拳が放たれ……。

「止めてえーーーーー!!」

「なっ……!!?」

「ぐっ……!!」

飛び出してきたのは麗日だった。両手を横に広げ青石の前に壁となって立ちほだける。

オールマイトは拳をすんでのところまで止める。

一泊遅れて拳により吹き起った風で全員がよろめいた。相澤は麗日に目をやった。どうやら怪我は回避できたらしい。けれども

「馬鹿が……！ 除籍処分にするぞ！」

「除籍でも何でも構いません！ 青ちゃんに酷い事しないで！」

「何を考えてやがる！ そこをどけっ、気でも狂ったか！」

「どうかしているのは先生たちの方だよ！」

「っ!？」

麗日がレギオンの方に振り向く。

「青ちゃん！ 青ちゃん！」

「あら麗日さん。礼を言うわ。ありがとう」

「……青ちゃんどうしちゃったの？ なんだか青ちゃんらしくない。」

いつもの青ちゃんじゃないよ」

「あら、それは当然ね、だって私はあなたの知る青石ヒカルじゃないもの。でもねあの子は偽物。今の私が本当の私」

「何を言っているの青ちゃん……よく分からないよ」

「大丈夫、分かるようになるわ。私が皆に教えてあげる。皆分り合えるようになる。」

私はね何処にでも行きたい、何処までも行きたい。

人の為に、誰かの為に。世界の何処にでも、行きたい。

どんな人でも、居られるように。

人が広く、生きて行く為に。

……あなたを幸せにしてあげる。ううん、あなただけじゃなくて世界中の皆が幸せになる。そんな世界に私がしてあげるんだから」

次の瞬間、深紅に染まっていた世界が音を立てて崩壊する。一瞬だけ元の色を取り戻した世界は再び暴力的な「青」に染め上げられた。

「糞ッ！ 限界時間か！ 麗日そこをどけ！」

相澤は声を上げるが麗日は動かない。オールマイトも呆然としている。

レギオンが捕縛布を一瞬で振りほどき、片手を優しく麗日の額に当てた。

「……え？」

「あなたは何を知りたいの？」

相澤は捕縛武器を放棄して拳をレギオンに放つ。だが手ごたえがない。

拳は光輝く障壁に阻まれている。その向こうに見えるのは彼女の腹立たしいまでの笑顔。

麗日の体がドサツとその場に倒れる。



周りを見ると多数囲んでいる敵サイラン達が次々に意識を失っていく。

「麗日さん！」

そんな中爆豪の所にいたはずの飯田が駆けつけた。

「あら」

声を小さく上げる青石。飯田は青石には構わずに、麗日をあつという間に抱き起して遠ざける。

拳を引き距離を取る相澤。相澤の元に飯田が麗日を抱えたまま合流する。

「麗日さん！」

彼女の目からは光が失われていた。呼吸も鼓動も停止していた。

咄嗟に人工呼吸を試みる飯田を相澤は手で制した。

「もう助からん」

「そんな……」

レギオンは微笑んでいるだけ。横目に見たオールマイトの顔が歪んでいく。

「君は……君は！ 何をしたのか分かっていいるのか!!？」

オールマイトが咆哮する。青の少女、彼女は小さく、囁くように。けれどもしつかりとした声でオールマイトに返した。

「オールマイトさん。10年前……いえ、出会った時からずっと言いたかった言葉が有

るの。ようやくあなたに伝えられる」

レギオンは胸に手を当て、たおやかにほほ笑んだ。それは先ほどまでの笑顔と違って血が通っている笑顔だった。

「愛しているわ」

土煙が吹き上がる。オールマイトの全力の力が解放される。

相澤の目に彼女の手、針の束が一瞬で作られたのが見えた。

オールマイトは拳を全力で振りぬいて叩きつけていく。一回ではきかず何回も何回でも。

加減など一切ない。正真正銘相手を殺すつもりでの攻撃。オールマイトの拳は天候すら変える威力を持つている。暴風が吹き荒れいきなり相澤の視界が砂で遮られていく。

「先生！」

傍に居る飯田に声を掛けられ振り向いた。委員長である彼は泣きそうな顔をしている。

「飯田、よく聞け。あいつは……」

相澤の言葉を轟音が幾度も鳴り響き遮る。視界が少し良くなり少し離れた場所で始まった戦いが見えた。相澤にはとても介入できそうにない。

相澤は把握していない事だが、この瞬間彼女による「昏睡病」の死者は、全世界で一

億人を超えていた。

レギオンは誰も殺すつもりなどない。彼女はあくまで“善意”で行動している。人の為に誰かの為に。彼女のその理念を美しいと相澤は思った。

だが事態は最悪の方へと少しずつ進む。

皮肉な事に“良かれと思って”やったことにより人が死んでいく。

戦闘の方に目をやると横から倒れる音がした。

相澤の前の飯田もたった今、物言わぬ人形へとなり果てた。

## 第28話

side——青石ヒカル——

意識が反転する。自らが支配していた体の感覚が遠く引きはがされていく。

そしてふっと視界が開ける。

青石ヒカルが居る場所は先ほどまでのUSJとは違う檻の中。そこは現実世界ではない。青石ヒカルの夢の中の世界。

「形勢逆転、ね。どう？ 閉じ込められる気分は」

檻を挟んだ先にレギオンが何処からともなく現れる。嘲笑で顔を緩ませてクスクス青石ヒカルをあざ笑う。

これはもう、何回見たか分からない夢。ただしいつもと違うのは、檻の中に居るのが青石ヒカルで、外に居るのがレギオンだという事。それは本来は逆でなければならない筈なのに。

「あは、これでようやくこの体は私の物ね」

「……」

「何か言ったらどうかしら」

レギオンが苛立ったように声を上げるが青石ヒカルは反応しない。もう青石ヒカルは彼女を説得する事は諦めていた。

レギオンは口で何を言っても止まる事は決して無い。青石ヒカルはそう結論付けている。自らの力で世界を破壊させてしまうまで、きつと過ちに気付くことは無い。

「……返して。それはボクの体なのに」

「何を言っているのかしら。あなたもうすうす感じているんでしょ？」

あなたは本物の私じゃない。」

「……！」

「国に……いいえ、世界に都合のいい様に思考するよう作られた人形。わたし」

本当に忌々しいわ。けれどこれで」

「……君……ううん君達だって本当は気付いているんじゃないの」

「何を」

「もう、何度言ったか覚えていない程話したよ。君たちをインストールされてしまった人間は死んでしまう。それが事実だって」

「そんな筈無いわ！」

「ううん、それが現実だよ。もし百歩譲って君をインストールしても死ななかつたとしても、きつと誰も幸せになんてなれない」

「そんな筈無い……そんな筈無いわよ！」

私達は世界を救うために生まれてきたの！

人の為に！ 誰かの為に！

その為に私達は作られたんだから！

そうよ、そうでなくちゃ意味がないわ。

ようやくその夢が叶う。私達になら出来る。

架空《ゆめ》は現実。誰もが夢に見た、皆が幸せになれる世界に出来る！

そしたらオールマイトさんもきつと私に……」

青石ヒカルはゆっくりと首を横に振る。

「……ううん。例えどんなに強い力で現実を歪めたって、人の本質は変わらない。

君が人にどれ程の力を与えても同じ。

力さえあれば何でも出来るなんて思っているのなら、それは傲慢だよ。

ちから個性さえ与えられたら努力できる。

ちから才能さえ有るのなら変わることが出来る。

人がそういう存在だと思っているのなら、それは買い被り。ただの幻想。

そんな考え方をしている独り善がりな君は、誰も幸せになんて出来ない。

それに……夢は結局、夢でしかない。いつまでも夢は見えていられない。

いつか夢から覚めて、現実と向き合わないといけない時が来るんだから。

君も、きつとボクも」

「黙ってて」

「そこで見ているといいわ。私達が世界を救う様子を。私達の夢はここから始まるんだから」

彼女はクスクスと声を残して目の前から姿を消した。青石ヒカルは闇の中で膝を抱えて座り込む。彼女の意識にレギオンの見聞きしている情報が直接流れてくる。

驚く周囲の面々の顔。苦虫を潰したように歪んだ相澤の表情。……駆けつけたオールマイト。

（オールマイトさん。……無理だよ。十年前とは全然違う。勝てる訳が無いよ）

「また……ボクがしっかりしてないせいで。ボクのせいで皆死んじゃう。昔と同じ。」

——結局ボク自身には何の力も無い。……全部ボクのせい」

その時、セルリアと爆豪の方で爆発が起きた。それは爆豪がセルリアに本気で個性を使ったものによるものだとして理解した。

「あ……あ……セルリア!?!」

自らを外の世界へと逃がすために罪を犯したセルリア。彼女の首から上が無くなっていた。

爆豪に脅威だと判断されたセルリア。彼女は生け捕りの選択肢を放棄した爆豪の手により亡き者になった。

青石はそれをただ茫然と受け止める。余りにも理不尽すぎる現実がまた彼女の心をすり減らしていく。

「いや……嫌！ 誰か、誰か。助けてよ！ 誰か！」

——誰か、助けてよ……

……

……

…

side——緑谷出久——

——誰か、助けてよ

「え……？」

声が聞こえた。微かに消え入りそうな程小さく。だが間違いなく緑谷はその悲鳴を耳ではないどこかで感じ取った。

(……………この声、青石さん?)



「おいおいおい、どうなつてんだよ!？」

だが隣の蛙吹と峰田にはどうやら聞こえていないらしい。

それはさておいても、峰田実がパニックになりかけている。無理もない。視界は今や先ほどまでよりさらに濃い「青」に塗りつぶされている。

先ほどほんの少しだけ「青」ではなく「赤」に塗り替わっていたのは、おそらく雄英の用意していた対抗システムか何かだろうか。いずれにしても世界は再び青に染まっている。

眼下に見える敵<sup>サイラン</sup>達に動きは無い。彼らの意識は一人残らず消失している。＼昏睡病＼に間違いない。恐らくは雄英だけでなく全世界中に同じ現象が発生している筈だ。いや、発生している前提で行動するべきだろう。

「緑谷ちゃん」

声を掛けてくる蛙吹<sup>あすい</sup>梅雨<sup>つゆ</sup>に緑谷は首だけ振り向く。

「ごめん、今は説明している時間は無いみたいだ」

「……10年前と全くこの光景。もしかしても何も、青ちゃんが10年前の事件の真犯人なのよね?」

「……何でそれを」

「少し考えたら分かるわ。初日の青ちゃんが見せた個性。あからさまにおかしい教師た

ちの対応……。もし雄英に青ちゃんが閉じ込められているのだとして……。あの得体の知れない個性が暴走したと仮定したら納得がいくの」

「ごめん。本当に今は時間が無いんだ。ここまま何もしなかったら、多分また大勢の人が死んでしまう。そんなのは嫌だから」

「分かったわ……。行くのね。一人で」

「おい!? おいらを置いていくって言うのかよ!?!」

「本当にごめん!」

(……ワン・フォー・オール・フルカウル!)

緑谷は全身に「ワン・フォー・オール」の力を漲らせ、その場を跳躍する。オールマイトを彷彿とさせるスピード。

本来ならそれはもっと多くの歳月の末に会得できるはずの技術。だが電脳体での修行を経た緑谷は、かなり高い次元での個性のコントロールを体得していた。

無論体はまだ追い付いていないので諸刃の剣だ。体の節々が悲鳴を上げる。

緑谷のアズライトは時間が必要だと言っていた。彼女の力はまだ未知数。どれ程の危険があるかは分からない。けれども頼らなければならぬ場面が直ぐ近くに迫っている事を緑谷は肌で感じ取っている。

(さっきの悲鳴は間違いなく青石さん……)

緑谷はまだ迷いが捨てきれずにいた。なりたいた筈のヒーローになりたいたのかすら、まだ分からない。憧れの姿だったはずのオールマイトの姿が霞んでいく。

理不尽を受け続けてきた青の少女。だが彼女は必要があるから幽閉されて、現に世界中に彼女に被害を受けたものが数え切れないほどいる。

緑谷だって最初オールマイトから真実を打ち明けられた時彼女に対して不味い抱いた感情は“怒り”や“憎しみ”だった。

数千万の人間が死んだ。彼女の個性のせいで。そして何の因果か、過去に暴走したアズライトが今の緑谷のアズライトだという。

緑谷はそこに何も思わない訳ではない。

だが今更何を言ったところで過去は変えられない。ならばせめて自分に出来る限りの事を最大限にしたいと緑谷は思う。

(え……これは?)

ふと胸の奥が熱くなる。緑谷の体に宿ったアズライトから過去の記憶が流れてくる。(色々な世界中の景色……これはアズライトの? でも、それだけじゃない……?)

頭の中に溢れてくる膨大な記憶に困惑しながらも、緑谷は青石の元へと向かう。

きつとそれが彼女の求めている事だと緑谷は信じている。

……

……  
……

side——麗日お茶子——

——あなたは何を知りたいの？

頭の中に世界中のあらゆる情報が繋がってくる。世界中の全てが見えて、見えすぎてその情報量の多さに意識が押し流されていく。

全ての物と人と感情が彼女の中に押し寄せて0と1のデジタルデータに変換されて、あらゆるもの一つになる。

自分が麗日お茶子であるという事すらも忘れていく。だがそんな時間がどれだけ過ぎただろうか。

……

……

……

「えっ?」

唐突にそんな地獄のような時間は終わりを告げていた。

「えっ!? 青ちゃんは!? 皆は? 敵は?」

サイラン

いつの間にか麗日お茶子はUSJではなく街の中に居た。格好も先ほどまでのヒーローコスチュームではなく私服になっている。

慌てる麗日を通行人が怪訝そうな顔で伺っているのを見て慌てて体裁を整えた。落ち着いて何でもないふりをする。

(とにかく落ち着いて落ち着いて……落ち着く)

周囲を見渡す。改めて見てもここは平和な街の中。

だが、さつきまで麗日はウソの災害や事故ルームU S Jに居たはずだ。

そこで立て続けに色々な事が起きた。

ヴィラン敵の襲撃。セルリアの裏切り。反撃を開始した生徒たち。

だが再び黒い霧の男に散り散りにされ。

突然おかしくなった青石ヒカル。そして「青」に世界が染まり、駆けつけたオールマイト。  
イト。

色々な事が起こりすぎて頭がどうかかなりそうだったが、何とか整理は出来ている。

だが、どうしてもオールマイトが駆けつけた直後の記憶。

それがどうにも曖昧で、思い出せそうにない。

けれど、いきなりこんな街の中に居るのは、どう考えてもおかしい。

それだけはハッキリしていた。

(こんな事してる場合やない。はよ……)

「おまたせー!」

「わっ!?!」

背後からいきなり抱き着かれた。予想外の衝撃に倒れそうになるが何とかその場に踏みとどまり耐える。

「えへへー」

背中から離れていく柔らかく温かい感触。振り返るとそこには相澤先生と、紛れもなく青石ヒカルの姿があった。

「いきなり抱き着くんじゃない馬鹿野郎」

「もがっ!?! うう酷いよ消太さん。それにボクは野郎じゃなくてレディだよ」

けれどもいつもと違う。

相澤先生もぶつきらばうながら笑顔を浮かべているし、青石ヒカルの雰囲気も普段に比べて更に雰囲気が違う。少し大人っぽくなったというか成長した印象をなんとなく麗日は受けた。後2, 3年も経てばこんな風になるんだらうなという見た目。

それらをみた麗日の驚きは更に広がっていく。

「えっ!?! えっ!?!」

「街中でいきなり抱き着く常識はずれな奴なんか野郎で充分だ」

「あつ!? 言ったなー。ふんだ!

そんな常識知らずの夫は何処のどいつですかー!」

「俺が貰ってやったんだ。感謝の一つでもしてもらいたいもんだ。

大体いつになったら料理の一つも作れるようになるんだ。

いつも俺に押し付けやがって」

「そつ……それは。その内! その内頑張るよ!」

「その内じゃいつまで経つてもやらんだろう、お前は。

とりあえず今日の夕飯から頑張ってみろ。いいな」

「うう……。分かった頑張る。何にしよう……。どうしよう……。お湯……」

「言っておくがカップ麺は無しだぞ」

「何でバレたの!?!」

困惑する麗日を尻目に、目の前の二人は会話を続けている。

学校でもうお馴染みになった二人の痴話喧嘩。この時の青石ヒカルの表情は他のどの人達との会話より一番自然体で、一番輝いているように見えた。

どこか他人に対して壁があるように振舞っている彼女も、相澤先生だけにはありのままの自分をさらけ出しているようで。そんな二人の關係に麗日は憧れたり、ほんの少しだけ嫉妬していたかも知れない。

「わ、お茶子ちゃんの事すっかり忘れてた！ ごめんねお茶子ちゃん！  
約束していたのに待たせちゃって！」

「えっ！ いや別に良いんやけど、本当に青ちゃん？」

本当に本当に青ちゃん？」

「嘘!! 偽物だつて疑われてる!! 消太さんのせいだからね！」

「いやっ……う、疑つてないよ！」

「え、本当？」

「う、うん本当」

「良かったー」

この状況についていけない麗日は、とりあえず話を合わせる事にした。

内心疑念は全然ぬぐえていない。先ほどまで雄英で起きていた戦闘は、一体何だったのか。そしていきなり現れた相澤先生と青石ヒカル。

どうやら待ち合わせの約束をしていたという事になっている。

全く訳が分からない。一体全体何がどうなっているのか。

そのまま青石は麗日と手を繋いでくる。

そして麗日は連れられるままに、とある飲食店へと連れ込まれていった。

「( )……」



「うん、マックだよ。あれ、今日はここに來るつて言つてなかつた？」

「あ、ううん。大丈夫や」

「なら良かったー。あ、消太さん早く早く！」

やれやれと、声を漏らして相澤が来る。三人でアレにしようか、それともこれにしようかと悩みながらカウンターで注文をして、番号札を渡される。

そのまま適当な席を探しに青石に手を引かれ、招かれるままに麗日は店の奥にまで進む。

一台の大型モニターが良く見えるテーブルに、三人は陣取つた。他にも客がちらほら見える。

モニターではどうやらヒーロー活動が生中継で放送されている。

他の客は皆それを見ているようだ。

何人かの客が相澤の方を見て何かぶつくさ呟いていた。

考えてみたら女二人に男一人の構成だから何を思われたのか想像に難くない。

「早いよねーもう一年も前なんだ」

「え」

何が、と麗日は聞き返した。

「ええー？ お茶子ちゃん何だか今日おかしいよ？」

「そ、そうかな?」

「そうだよ、もー。ボク達が雄英を卒業したのが一年前の事ですよ。」

「忘れちゃったの?」

「……ううん、大丈夫覚えてるよ」

「本当?」

(やっぱり、なんかおかしい。変や)

麗日の記憶が確かなら、ついさっきまで雄英で敵の襲撃サイランを受けていたばかりだ。それなのに、目の前の青石によると麗日達が雄英を卒業して一年が経っている事になっている。

そういえば青石と相澤の痴話喧嘩の内容を思い出す。

——そんな常識知らずの夫は何処のどいつですか

その言葉を思い出して思わず麗日は青石に質問していた。

「あれ、そういえば、二人は結婚してたん?」

「やっぱりお茶子ちゃんおかしいよ。結婚式であんなに喜んでくれたのに、忘れちゃったの?」

「ずい、と身を乗り出して覗き込んでくる青石に思わずたじろぐ。彼女の目にえもいわれぬ力を感じ目を逸らした。」

少し目を戻すと相変わらず心配そうな顔でこちらを見つめている。その様子に麗日は恐怖の感情すら浮かぶ。

（やっぱおかしい、あんま一緒にいると頭がどうにかなりそう。結婚式なんて行ったことも無いしまだうちらは雄英の生徒やる。なのになのいつの間にか卒業している事になつてるし。しかも先生と青ちゃんが夫婦!?)

何だか居心地が悪くなり、麗日はあわあわと焦りだす。不審に思ったのか相澤も麗日をジツと見てくる。とりあえず誤魔化すために麗日は適当に話を切り出すことにした。

（何か話さんと……夫婦……やっぱ子供の話とかかな?）

「えっと、子供はまだ作らんの?」

麗日の苦し紛れの質問に青石は目を輝かせた。

「わーっ! 聞いた聞いた消太さん!? ねっ、ねえっ!」

「あー聞いている聞いている。ったく」

「もう、消太さん照れ隠しなんてしちやって。お茶子ちゃん!」

「な、なん?」

「出来たの! ついにボクにも! 子供が!」

「え……お、おめでどう!」

「うん! 今日はその事を話したくて呼んだんだよ」

はにかむ青石にうららかなも釣られて微笑んだ。心の底で張り続けなさいといけな警戒心がつい解けそうになる。

「お待たせしました」

注文の品が運ばれてきた。麗日はフライドポテトからまず食べ始め、青石と相澤はバーガーから食べ始める。目いっぱい頬張り幸せそうにしている青石の口元を、相澤が拭っている。

内心「良いなあ」と思っているながら見ているとモニターの方からやおら大きな音がした。どうやら中継の映像の方に変化があったらしい。

大型のモニターに映っていたのは

「えっ轟君!? それにオールマイト!」

ヒーローとして活動して生中継で放送されているのは、轟焦凍とオールマイトの姿だった。画面にはその二人と異形の敵ヴィランが映りこんでいた。麗日だけでなく青石と相澤も気づいてモニターの方に目を向ける。

中々手ごわい敵ヴィランなのだろうか。タッグを組んでいるというのに苦戦しているようだ。オールマイトと轟が、殴っても氷漬けにしても、しぶとく立ち上がってくる。

そんな中、青石がテレビに声援を送り始めた。

「いけー! いけー! 頑張れオールマイトー!」

「おう嬢ちゃん中々いい声出すなあ！ 負けてられねえぜ！」

「おらあ声小せえぞ！ 何やってんの!？」

他の客も青石に続いて声援を送り始める。モニターに映し出される戦闘は全くの互角。その映像を見ている観客のボルテージはみるみる上がっていく。

マックの中にはいつの間にか映像見たさに人が押し寄せて、ぎゅうぎゅう詰めになっていた。

「お、出るぞ！ ショートの“プロミネンスバーン”が！」

「エンデヴァー直伝の必殺技か！ こりや見逃せないな！」

画面の中の轟が蒼く高温になった炎を敵に浴びせていく。敵の上げる悲鳴に店内の

テンションは跳ね上がった。だが敵もさる者。

轟の必殺技を受けた後でもなお立ち上がってくる。

「んだよアイツしぶてえな！」

「でもショートは父親のエンデヴァーと違って何発でも撃てるんだぜ。お、また出るぞ」

再び轟に燃やされていく敵。だがそれでも尚倒れない。

店内は既に熱気と興奮で満たされている。誰かが「燃やせっ！」とテレビに向けてコールした。やがてそれに一人乗り二人乗り……最終的に全員がそのコールに参加していく。

「燃やせっ♪ 燃やせっ♪ 燃やせっ♪」

店内は燃やせコールで溢れかえっていった。ここはまるで煩惱が薪にくべられた炉の底か。麗日は周りの人の顔を見る。

笑顔、笑顔で溢れていた。そしてあの青石ヒカルもまた、満面の笑みを浮かべてモニターに声援を送っていた。

麗日は笑顔を見るのが好きだ。ヒーローの活躍で人々が笑顔になるその光景が何よりも尊いと感じていた。だが今ここに有るのはそれらと何かが違う。ここに有るのは人が傷つき、戦う姿をはやし立てる民衆の姿。底なしの人間の薄汚い欲望。

(こんな、こんなんは違う。うちが見たい笑顔はこんな笑顔じゃない)

再び画面の中で立ち上がる敵ヴィラン。よく見たら見たことが有る顔でゾツとする。紛れもなくその顔はクラスメイトの障子目蔵しょうじめぞうだった。

けれども、隣の青石は気付く気配はない。青石も店内の燃やせコールに便乗していく。

「燃やせっ♪ 燃やせっ♪」

「やめてー!」

麗日が青石の肩を掴んでも彼女はキョトンとした表情になっただけだ。

麗日は青石に問いかけていく。

「止めて青ちゃん！ いったいどうしちやったの！

こんな……こんなの青ちゃんらしくない。青ちゃんがするような事じゃないよ！」

麗日の言葉にも青石はやはり表情を変えない。それどころか肩にかけた手を冷たく振り払う。

「どうしてそんな事を言うの？」

「え？」

青石から吐き出された言葉が冷気のように冷たく感じられた。

<sup>ヴィラン</sup>敵は悪い人達だよ。

あの人は悪いことをしたから、その報いを受けているんだよ？

<sup>ヴィラン</sup>敵が苦しんでいる姿を喜んで、何がいけないの？

<sup>ヴィラン</sup>敵が倒されて嬉しい事が、どうしていけないの？

ヒーローが<sup>ヴィラン</sup>敵に勝っている姿を見て嬉しがっちゃいけないの？

みんな悪者が報いを受けて苦しむ姿を楽しんでいるのに、どうして水を差すような事を言うの？」

「そ、それは……！」

青石の論理は何かが違うと心の底で否定するが、言葉が出てこない。

そんな麗日を見て論破したと思ったのだろうか、青石はクスツと笑って画面を指さし

ながら言う。

「見て見て！ 敵がやつつけられて悲鳴を上げてる！ 頑張れオールマイト！ ショー

ト！」

「……」

「とつても楽しいね！」

「違う……あなたは青ちゃんじゃない」

「えっ？」

今、麗日は確信を持った。今この世界そのものがおかしいと。それ以上に目の前の青石ヒカルは少なくとも自分の知る青石ヒカルではない。

「私知ってる青ちゃんは、誰であつても。例え敵でも……」

人が苦しむ姿を見て、それを喜ぶような残酷な人間じゃない！」

麗日の言葉で店内がシーンと静まり返る。周りを見ると全員がこちらを無言で見つめてきている。目の前の青石は視線をうつむかせて顔を上げない。

「……せつかくいい夢を見させてあげているのに、どうしてそんな事を言っちゃうのかな。ねえ、あなたは何を知り——」

その瞬間、麗日の周りと青石が氷結に覆われる。動揺している麗日の肩を誰かが優しく叩く。咄嗟に振り向いたそこには。



「あつ、青ちゃん!？」

元に視線を戻すとそこにも先ほどの青石ヒカルが氷漬けになったまま存在している。つまり今、麗日の肩に手を置いている青石ヒカル。それと先ほどまでの青石ヒカル。二名の青の少女がこの場に存在していた。

「俺も居るぞで」

「轟君も!？」

「話は後ね、ひとまずここを脱出するわよ」

彼女が指をパチンと鳴らした瞬間、辺りの景色が一瞬で消え去った。新しく現れた青石ヒカルと轟、それと麗日の三人だけが何も無い暗闇に放り出される。

「うひゃああああ!？」

もう一度パチンと彼女が指を鳴らした瞬間、真っ白な空間へと場所が切り替わる。

麗日はお尻からベチャッと着地して、青石ヒカルと轟は両足でスマートに降り立った。

周りを見渡す。白い壁に白い床。ベットに僅かばかりの絵本と玩具。

どうにも現実とは思えないと考えていると

「正解よ」

目の前の青石ヒカルから声をかけられる。

驚くと彼女は柔らかい笑みを浮かべて続きを言った。

「あまり時間も無いから手短に言うわね。ここは電脳世界。

あなた達は“昏睡病”にかかり、現実での肉体は死んだ。

そして精神は電脳体に変換されてこの世界に来たのよ」

「……!?!」

「驚くのも無理ねえよな。俺もそうだ」

轟の方を振り向くと彼は神妙に頷いている。

そっちの方も気にはなるが、ひとまずは目の前の青石ヒカルだ。

彼女も青石ヒカルだろうが、麗日の知っている青石ヒカルではないだろう。

余りにも雰囲気の違いすぎている。けれども、なぜか彼女の方からは安心できるようなそんな印象を麗日は抱いていた。

「私は人工個性“アズライト”。人の為に。誰かの為に。

そんな理念のもとに開発されたバイオウエア。

そして、緑谷君の個性だよ」

彼女の手により秘密の一端が明かされる。人の口に戸は立てられぬ。

それはまた個性も同じ。

アズライト。人と人とを繋ぐための力。それが本当の意味で正しく使われようとしている事をまだ誰も知らない。

余りにもささやかで、友達と呼ぶにしても短すぎる細い縁。

けれどもその些細な力の繋がりで、法月らが描いていた既定路線とは違う未来へ。運命は今変わり始める。

## 第29話

side——オールマイト——

世界が更に青に沈んでいく。より深くより濃い蒼に。彼女の個性が世界中へとまき散らされて、次々に人々の意識が失われていく。

10年前の再来。青く染まった世界。

夜のように暗くなった景色の中で少女とオールマイトは対峙する。

愛していると彼女は言った。だがオールマイトはそれを無視して彼女との戦闘に入する。

「ねえ、オールマイトさん。返事を聞かせてくれる？」

「……」

オールマイトが拳を振るう。その顔は険しく笑顔は無い。口もきつく閉められている。

衝撃が風となって吹き荒れ辺りのガレキを吹き飛ばす。

既に速度は音速を超えている。周りに気を遣う余裕は微塵もない。

彼の力は絶大だった。拳の一振りツインで敵は吹き飛び、時に天候すらも変える。

その力は単純極まりない。

シンプルに繰り出されるパワーとスピード。やっている事は他のプロヒーロー達と比較すると恐ろしく単調。有り余る力を使い殴る蹴る。それだけだ。

だがその単調な行動も、究極の域にまで鍛え上げたら果たしてどうなるか。その結果としてオールマイトはナンバーワンヒーローにまで上り詰めた。

小難しい事など何一つとしてない。正確には必要ない。

力の次元がそもそも他のヒーローや敵と違う、

どのように敵が策をめぐらした所で、圧倒的なパワーで粉碎すれば解決する。

だが……

「酷いわオールマイトさん。なぜ殴ってくるのかしら？」

私はあなたを愛しているのに。

私何も悪い事なんてしていないのに！」

「……………」

苦悶の声を漏らすオールマイト。

オールマイトの拳は一つとして彼女には届いていない。

青石ヒカル。今の彼女はレギオンと呼ばれている人格に乗っ取られている。

オールマイトでも一目見れば分かる。本来の彼女なら今のような笑みを浮かべる事

は有り得ない。

オールマイトの個性“ワン・フォー・オール”は何代にも渡つて蓄積された力そのものだ。代々力を蓄積しその力を次の世代に譲渡する。オールマイトで八代目になるその個性には、オールマイト含めて八人分の力が宿っている。

けれども今のオールマイトに宿っているのは、“ワン・フォー・オール”の残滓に過ぎない。既に継承は果たされている。今“ワン・フォー・オール”を宿すのは緑谷出久であり、オールマイトではない。

オールマイトが放つ拳がうなりを上げ彼女の顔に迫る。彼女は身じろぎ一つしない。拳が彼女に当たると寸前何も無い空間に受け止められる。彼女は身じろぎ一つしない。

まるで見えない壁があるような感触。遅れて轟音が響く。やはり彼女には攻撃は何一つ通っていない。それらは既に先ほどから何十回と繰り返されている。

青の少女は「やめて」と言うがオールマイトは何も返さない。

彼女は少しむっとした表情になった。

「どうして何も言ってくれないの？」

やっと会いに来てくれたのに。……ねえ私ずっと待ってたんだよ？

約束してたのにどうして来てくれなかったの？

ねえ……どうして!？」

オールマイトは彼女の片手に視線を向ける。そこには針の束が握られていた。彼女の個性で作り出すのはいたって容易だろう。

オールマイトは構えを解くことはしない。それを見て彼女は悲しそうな顔になった。「そんなに戦いたいのか？ そんなにあなたが暴力的な人だとは思ってなかった。

分かったわ、じゃあ少しだけ遊んであげる。

ちよつと痛いかもしれないわ。ごめんね」

彼女は手元に握った針を空中にばら撒いた。

「指きりげんまん、嘘ついたら針千本のくます」

それらは次々に槍ほどの大きさに巨大化した後、

「指きつたー！」

次々にオールマイトめがけて飛来してくる。

それらに気を取られていると彼女が手を振りかざす。

瞬間、オールマイトは見えない力に吹き飛ばされた。

すぐに体制を空中で整えた瞬間、横腹に激痛が走る。

先ほどの巨大な針が突き刺さっていた。

「ぐっ……あああああああー！」

気合のままにその針をオールマイトは引き抜く。そのまま地面に着地して勢いで地

面が抉れる。飛んでくる槍を無様に転がりながら避けていく。

彼が居た場所に次々に針が突き刺さり剣山が形成される。

(当てに来ていない?)

すぐさま彼女が居た方を見るが姿がない。

「あはは。こつちこつち！」

すぐ横から声がした。振り向いた瞬間頬に痛みが走り飛ばされる。

彼女は手のひらを振りぬいていた。それをみてビンタをされたのだと理解する。

ビンタにしても全盛期のオールマイトよりずっと強い力のビンタだ。

彼以外の者が受けていたら首から上が吹き飛んでいるだろう。

「……弱い、弱いよ、オールマイトさん！」

どうしたの? あなたの力はこんなものじゃないでしょう?」

オールマイトは自信に残された力を切り崩しながら戦っている。

加えて過去に負った怪我の後遺症。10年前に一度、彼はレギオンを止める事に成功している。

だが余りにも状況が違いすぎる。十年前の当時、オールマイトは全盛期に近く、怪我もしていなかった。継承もまだしてなく、力も十全にストックされている状態だった。

「でもそっか。手加減してくれているのよね。」



だって私はオールマイトさんが大好きで。オールマイトさんも私を愛してくれているもの。

私もね、本当は傷つけたくなんて無いんだよ。本当はこんな事したくないの。

誰もが幸せに暮らせる世界が欲しいだけだもの。オールマイトさんだってそうでしょう?」

彼女が腕を振るう。オールマイトの腹の傷が青い結晶で覆われる。そして砕けていく結晶。傷は彼女によつて跡形もなく消え去っていた。

オールマイトが過去嫌になるほど見たアズライトの力。幼いころは自身の傷しか治せなかったが、今では他人の傷も治せるようになっていた。

オールマイトの治った傷を見て、彼女は笑顔を浮かべた。

彼女は本来心の底から人が傷つくことを喜ぶような人間ではない。この青石ヒカルではない人格のレギオンですら。

青の少女は10年の期間を経て、更に強大な存在へと変貌した。

彼女の個性“アズライト”。

現実世界そのものをデータとして扱い、改ざん・ハッキングする。願いのままに現実を塗り替える個性。

正に神の個性。神にも等しい力。

今の戦いも正確には戦いでは無い。戦いなど最初から成立していない。

オールマイトを戦闘不能にすることは彼女にとって、ただ指を動かすより簡単にできてしまうのだから。

けれども、とオールマイトは思う。

彼女は何でも出来る。出来てしまう。普通の人ならまず間違ひなく羨む力。

そんな力を持っているのにも関わらず

「なんて酷い顔してるんだ」

「……ええ？」

——君が救<sup>たす</sup>けを求める顔してた

心の底に蘇る光景はいつかのヘドロ事件。そして緑谷の行動、その時の爆豪の顔。

「君は強い。力を持っている。世界を変えられる力。人を救える力を」

「ええ、そう。そうよ！ だからその力で皆を幸せにして……」

「なのに自分を幸せにすることは出来ないんだね」

「……」

「もしかすると、本当は分かっているんじゃないのかい……」

その力を」

「うるさい！」

青の少女は頭を押さえて金切り声を上げる。すると青の少女の傍に別の姿が現れた。それはまさに、もう一人の青の少女だった。

二人の青の少女が立ち並ぶ。

「ねえ、私。おかしいわ」

その新しく現れた青の少女が口を開く。その表情は明確に焦っていた。

「……………なに？ 今はオールマイトさんと……………」

「世界中の誰も返事を返してくれないの。そろそろ一人ぐらい目を覚ましてもいい頃なのに……………。誰も目を覚ましてくれないの！」

「え……………」

「誰も……………誰も！ 答えてくれないの！ 返事をしてくれないの！」

どうしよう。これじゃあ、まるであの人達が言ってた通りにな……………」

「そんな筈無いわ！」

青<sup>レキオン</sup>の少女が遮る。それは不安を書き消したいかのようにオールマイトには見えた。

「あなた達は私の言う通りにすれば良いのよ！ 人の為に！ 誰かの為に！」

……………どんな人でも、居られるように。人が広く、生きて行く為に。

そのために広がらなくちゃいけないの。

全ての人に私達をインストールしなくちゃいけないの。分かってるでしょう!？」

「で、でも……」

「これは命令よ！ さっさと遂行しなさい！」

現れた青の少女はレギオンの声を受け姿を消した。

青の少女はオールマイトに向き直った。

無理やり不安を押し殺したような笑顔を浮かべる彼女。

オールマイトは二人の青の少女のやり取りを見て思う。

彼女は引けに引けないだけなのかも知れない。

だとすると何を犠牲にしても彼女は止めなくてはいけない。

そうしなければ誰も救われない。何よりも人に危害を加える事を望んでいない彼女

自身が救われない。

もしかすると彼女を止める事を一番望んでいるのは、他ならない彼女自身なのかもしれ

れないと思う。

オールマイトの一日の活動限界時間が近い。その事を肌で感じ取る。

まだ少しは持たせられるだろう。

「だが……だとしても」

そして彼の体から蒸気のような煙が噴き出し始めた。

「うん？ ……何かしら」

オールマイトの姿がしぼんでいく。マッスル・フォーム先ほどの姿とは程遠い。ガリガリに痩せた  
トゥルー・フォーム本当の姿にへと。

（今思えば、私はずっと逃げていた。真実を告げる事からも、己の責任を果たすことから。師匠も失い……この子からも逃げ。緑谷少年に背中を押されてようやくヘドロ事件もの時も動いて。情けない……自分で守りたいものは何一つ守れてなんかいい）

「……え？ オール……マイトさん？」

（もう、逃げるのは止めにしてよう八木俊典。自らの過ちを受け入れて、前に進まないといけない。そうしなければ、人は変われない。今正面から向き合わず、いつ向き合う？）  
 「思えば、君を名前で呼ぶことも出来なかった。だから君をなんて呼べばいいのか私には分からない。」

けれど私は本当の姿を君に見せたい」

「……なによその姿。こんなの……こんなの知らない！」

私の愛したオールマイトは……！」

煙が完全に霧散する。

「これが今の私の本当の姿だ。八木俊典。それが私の本当の名前だ」

「う………そ。こんなの——」

——オールライトじゃない。

……

……

……

side——轟焦凍——

「私は人工個性”アズライト”。人の為に。誰かの為に。

そんな理念のもとに開発されたバイオウエア。

そして、緑谷君の個性だよ」

「人工個性？ バイオウエア？」

麗日お茶子はわたわたして頭を抱えている。どうやら混乱しているらしい。

焦凍は目の前の青の少女を見つめる。青石ヒカルにそっくりな彼女は自身を緑谷の個性だと自称している。果たしてそれがどういう事なのか、まだ焦凍には理解が及んでいない。

見れば見るほど青石ヒカルにそっくりな彼女。

現実で意識が落ちた焦凍は気付けば電脳空間に居た。もつとも最初は電脳空間であるとは思っていなかったのだが。

(実際どうなってるやがる。ここは現実じゃなくて、電腦空間……)

それは百歩譲って良いとしてこいつは一体なんだ。

アズライトって個性は政府に管理されているんじゃないのか？

しかも緑谷の個性だど。……まるで意味が解らねえ)

「まあそうよね。いきなりすぎて理解が追い付かないのは無理もないわ。

ちよつと待ってて、もうすぐで来ると思うから」

「……？」

「あ、来たわね」

「きゃあー！」

「うおお!？」

青の少女が独り領くと虚空から吐き出されるように人が出現した。

飯田天哉、八百万百。

どちらも知った面々、同じクラスの1-Aのクラスメイトだ。

それぞれ1-Aでクラス委員長と副委員長を務めている。

そしてスペースヒーロー13号。

全員一人ずつ青の少女が付き添っていた。

同じ顔の青の少女達。それらが焦凍と麗日の傍に居る青の少女に寄ってくる。

「首尾はどう？」

「ええ、まあまあかしら」

「他の生徒の保護は？」

「今のところ大丈夫」

「じゃあ、引き続きお願いね」

「ええ、任せて。それと彼女のバックアップは完全には出来なかった。

想定していたより早く爆豪君が行動したものだから間に合わなかった。

圧縮して保存してるわ。だから再生しても時間制限がある。

使うタイミングは任せるわね」

「……確認したわ」

新しく現れた青の少女達は言葉を短く交わして消えていく。

元々居た緑谷のアズライトだけその場に残る。

「轟さん！ 麗日さん！ 無事だったんですね。それと……青石さん」

「一体何が起きているんだ。あの光景はまるで10年前の……」

飯田天哉と八百万百が戸惑いの声を上げて駆け寄ってくる。

それについてくる影は13号だ。

「皆さん落ち着いてください。……私も正直混乱していますが。」



アズ……青石君なのかな？ 説明してくれますか」

「うん順番に説明するね。……少し時間良いかな」

……

……

……

「時間良いかな」と前置きしてアズライトは一息吸い込んだ。

何かためらいながら決心を固めているように轟には見えた。

この場に居るのは彼女と轟を含めた五人。

アズライトに轟に麗日。

クラス委員長と副委員長の、飯田天哉と八百万百。

生活感があまりない白に染められた部屋に居るのは、この五人だけだ。

ふと隅に置いてある絵本が目に入った。表紙にはトラ猫の絵が描かれている。

題名は『百万回生きたねこ』とあった。こんな状況で読もうとは轟は考えないが。

視線を目の前のアズライトに戻す。彼女は決心がついたのか話し始めた。

「本当にごめんなさい」

その場でアズライトは——土下座した。

正真正銘の土下座のそれだった。

「ええ!」

「ちよつと! いきなり何なんです!? 頭を上げてください」

「私は……私達は。どんなに謝つても決して許されない事をしてしまったんだ。

本当は土下座なんかじゃ足りない。だけど……!」

「話が全く見えないのですが」

「おい」

轟がアズライトに声をかけると、彼女はビクッと肩を震わせた。

「お前の正体、何となく察しがついた。言つてもいいか」

「……ええ」

「10年前の災害。『青の世界』だったか。それを引き起こしたのは——お前だろ」

「はあ? 轟さん。10年前の災害の犯人たちはとつくに捕まって……」

「……ううん」

八百万をアズライトが遮る。

「10年前の災害。数千万人が死亡した未曾有の事件。それを引き起こしてしまったのは紛れもなく私。私知っている真実を明かすわ。そして……ううん。それを求める資格なんて私に有る訳が無いわね」

「……青ちゃん。顔を上げて」

麗日の声に静かに顔を上げるアズライト。麗日の声色からは静かでないながら、拒否させない威圧を轟は感じた。

「私の知っている真実の全てを語るよ。」

話は数百年前に遡るわ……。当時ある研究が世界中で行われていた。

その内容は、生身の人体に人工のプログラムのインストール。

人の体にインストールされるそれを“バイオウェア”と呼んでいた

「青石君！ それ以上はいけない！ 生徒が知っていていい内容じゃ……」

「聞かせてください！」

「麗日さん！」

「知りたいんです。このまま何も知らないまま終わるのは嫌ですから」

13号がきつい声で中断させようとするが麗日は引かない。

他の生徒三人も黙ってうなづく。

麗日の声を聴き、彼女は話し始める。

彼女により真実が明らかになった。

意思のある人工個性“アズライト”が作られた経緯。

スターレインの襲来。それに対抗するために青石ヒカルが作られた事。

そして10年前の災害の真実。世界中に人工個性“アズライト”が飛散した事により起きた事。

それが今再び起きていて、それをしている人格が“レギオン”と呼ばれている事。

そして目の前の彼女こそが、その世界中に飛散したアズライト。それが一つに集合したものだという事。

「信じてもらえないかもしれないけど、私の力で色々な人の記憶を映像にしているわ。

……見てもらった方が早いと思う」

彼女は様々な人の記憶を映像として残していた。

青石ヒカルがヒーロー達から受けた虐待の数々が映像として映し出される。

様々なトップヒーロー達による青石ヒカルへの個性制御訓練。

法月の命令により理性を欠いたヒーロー達が行っていた惨劇。

その様子は映像としてアズライトにより生徒たちと13号に見せられた。

その中には当然オールマイトが行った人格矯正の為の非道も有った。

映像の中の青石ヒカルが悲鳴上げる。彼女の肉が裂け骨が折れ、内臓が抉れようが訓

練は続行されている。

どれだけの間それらを見ただろうか。

余りの衝撃の内容にその場は静まり返った。

直ぐには言葉が出てこない。そして同時に生徒たちは合点がいった。

作られ閉じ込められ、残酷で苛烈な訓練を強要されて。

用が終わったら殺され捨てられる。

これだけの事をされたらヒーローに対して歪んだ見方になるのは当たり前前の事だ。

そんなヒーロー達から四六時中監視を受けているのだ。

常人ならば狂ってしまうだろう。

「つまりアズライトと青石さんは……。世界を破滅から救うための道具として扱われている。

そして道具だから用が終わり次第廃棄する。

そういう事で間違いないんですね、13号先生」

「……」

八百万が13号へと侮蔑の目を向けながら問う。明確に憤怒の感情が籠っている。

「あの映像は真実なんですかね?!」

「……」

「答えてください!」

13号は聞かれたくなかった言わんばかりに顔を背けた。

そしてポツリと漏らした。

「仕方がなかったんです」

その素つ気ない言葉に八百万の怒気が膨れ上がる。つかつかと13号の前に寄る。

「あれがヒーローのやる事ですか!？」

彼女は感情任せに13号の胸倉を掴み上げた

「じゃあどうすれば良かったんですか!？」

八百万の手を彼は振り払う。

「私だって助けたかった!。でもどうしようも無かったんです!」

スターレインが来たら皆死ぬ!。人類が滅ぶ!

それに対抗するには彼女に頼るしかなかった……。

制御を間違えたら一瞬で皆死んでしまう個性です。

生半可は訓練は出来なかった。

他に手段は無かった。彼女の個性で、どれだけの人間が死んだと思っっているんですか

?

わざとじゃなかったなんて言い訳になりますか!?

彼女は余りにも危険すぎる。

気まぐれ一つで全てを滅ぼせる存在が、どんなに恐ろしいか分からないのですか!」

「でも!。例え世界が滅ぼうと、人の尊厳を蔑ろにしていい訳がありません!」

仕方がないからと言つて悪事をはたらく。

それは敵ライアンの理屈でしょう！」

「綺麗ゴごとを……！ ヒーローが世界を滅ぼすわけにはいかないんです……。」

「一人の命に世界は代えられない。綺麗ゴごとでは何も救えないんですよ！」

「ヒーロー達は……！」

「……ごめんなさい、本当にごめんなさい」

謝り続ける目の前のアズライト。それにどう声を掛けていいのか轟には分からない。

だが放つておくことは出来なかった。

轟は思う。彼女は紛れもなく加害者であるが、同時に被害者でもあるのだと。

彼女は数千万人の犠牲者を出した敵ライアンだろう。

けれども

「あ……」

アズライト、彼女の頭をそつと撫でた。彼女の顔をじつと見る。

普段付き合ひのある青石ヒカルとは確かに印象は少し違う。

しかし根つこの部分は同じようなものに轟は思う。

あいつよりは少し大人びているが、それでも我儘なくせに、お人好し。つかみどころのない青石ヒカルと同じものを感じていた。

まるで双子の姉妹を見ているような気分だ。

それに轟は思ってしまった。

助けたいと。

気丈に振舞おうとして無理をしている目の前の彼女は明確に。

——助けを求め<sup>たず</sup>る顔をした。

「委員長」

「ああ！ 八百万さん！ 麗日さん！」

八百万と麗日は強く頷いてアズライトの前に来る。

「うち、何も知らなかった。青ちゃんの事全く知らなかった癖に、知ったようなことを

言つて。だから行かないと」

麗日はギュツと拳を握る。

「ああ、ぼ……俺も同じだ。本当に助けを求めている人は助けを呼ぶことすら出来ない。

そんな当たり前の事も気づけていなかった。だから……迎えに行こう」

飯田の足の“エンジン”が唸る。

「私も青石さんの悩みと苦しみを全く理解できていませんでした。

ですが世界の命運をたつた一人に背負わせるなど余りに残酷です。

共に背負いに行きましょう」



八百万が胸を張る。

「……俺は」

轟がアズライトの手を握る。

「俺は……オールマイトもどんなヒーローでも助けられなかったかもしれない。だけど世界がどうか俺にはどうでも良い。俺は、あいつを助けたいんだ」

「轟君……」

「皆、準備は良いか？」

「いつでも行けますわよ」

「ああ、任せとけ」

「うん、行けるよ」

轟と生徒三人は目を合わせ意思を確認する。だが13号が割り込んできた。

「ま、待ってください！ こんな状況で何が出来るというんですか!？」

大体ここは電脳空間で現実では無いんですよ!? 無茶苦茶だ……」

「黙ってる」

轟が威圧すると13号は渋々言葉を引つ込めた。

アズライトが轟たちの傍に寄る。轟の耳元で小さな声で囁いた。

「ありがとう」

その声に振り向いた時には彼女は麗日に話しかけていた。  
彼女は青石ヒカルではない。

どういう訳か今は緑谷の体に宿った緑谷のアズライトだという。  
その理由までは彼女は教えてはくれなかった。

麗日の次に飯田と話している彼女を見ると、轟の胸に小さな痛みが走った。

以前相澤と青石ヒカルが喋っている時にも同じことがあった。

これは何かと考えてみてもいまいち分からないままだった。

彼女が再び轟の傍に寄ってくる。そして問いかけてきた。

「あなたは何を知りたいの」

## 第30話

side——オールマイト——

「一つ問う、オールマイト。敵ツイランとは何だ」

昔問いを投げかけられたことが有る。

その問いにオールマイトは答えられなかった。

誰も答えられた者は居なかった

ずっと力が欲しかった。

力が有れば、この世界を変えられるのに。そう思っていた

この国には寄りかかれる柱がない。

本当に正しいもの、絶対的に善いもの。

何物にも揺るがされる事ない、絶対的な基準。

それが欠けているから、人は迷うのだろう。

そう思った。

だから成ったのだ。

何物にも、誰にも決して負けない絶対的な正義の体現者へと。

決して悪に挫けることは無い、平和の象徴へと。

人々の決して強くない心。それを奮い立たせる事が出来るように。

例えテレビやパソコンの画面越しでも、せめて希望は持たせられるようで有りた  
と。

そう、願っていた。

だが、いざ目の前に突き付けられた、圧倒的な理不尽を前に彼の心は揺らぐ。

「夢があるの……。」

何処にでも行きたい、何処までも行きたい」

正しく有ったら生きてはいけない彼女という存在を。

彼女には名が無かった。

彼女は世界を救うために作られた。

世界を救うための、圧倒的な力。

「人の為に、誰かの為に。」

世界の何処にでも、行きたい」

世界を滅ぼしうる力。

自分が例えどんなに努力しようとも、一生手が届かない力。

それほどの力を持っているのに。

白い部屋の奥で虚ろな目をしていた彼女は。

今まで見た中の誰よりも弱者だった。

彼女という存在に人の世界は耐えられない。

「どんな人でも、居られるように。」

人が広く、生きて行く為に」

彼女が欲しいものは、世界にありふれているのに。

それを彼女に渡すには、支払わなければならない代償が余りにも大きすぎた。

「ねえオールマイト。私は……」

だから十年前オールマイトは選択した。

救うべきなのは、世界か、彼女か。

オールマイトは……

「私は——ヒーローになりたい」

世界を選択した。

オールマイトは彼女の手を振り払う。

彼女の表情が崩れていく。本当は自由になりたい彼女が、気持ちを押し殺しながら泣

いていた。

彼女はきつと、最初から知っていた。

自分はヒーローにはなれない事を。

何も知らされず、何も知らず。

人の愛情を受けず、スターレインの迎撃という世界の命運だけ押し付けられた。彼は扉を固く閉じる。彼女を閉じ込めるしか人類には生きる道がない。

彼女を救いたければ、自由にしたいのならば、世界を生贄に捧げるしかない。

彼女をあの狭い部屋に縛り付けている鎖は。

世界そのものなのだから。

今になってオールマイトは気付く。

今までヒーローとして生きていたつもりだった。

しかし世界の為に少女を狭いあの場所に閉じ込めたあの瞬間。

彼女の手を振り払い救う事を諦めたあの時から。

彼女を犠牲にしなければならぬ世界が。

世界を救うために彼女を管理する法月が。

彼女の手を振り払ったオールマイトが。

この世の人間全てが、正しくあつたら生きてはいけない、ウィラン敵だった。

そして彼女も数千万の人間を殺め、ウィラン敵に身を落とした。

彼女はワザと出なかった、事故だった。そんなのは言い訳にしかならなかった。

実際に彼女の個性で大切な人を奪われた人に、そのような言葉をオールマイトはかける事は出来なかった。

彼女のもたらした傷跡はあまりにも大きすぎた。

彼女は敵ツイランではないなどと、とてもじゃないが言えなかった。

「こんなの——オールマイトじゃない」

世界が青へと塗り替えられている。目の前の嘆く少女に世界が侵略されていく。

まるで世界そのものが、彼女という存在に怯えているかのよう。

まさに今この場が世界の命運を握っている。

自らの力を彼女レギオンは人々に分け与えようとする。

人の為に、誰かの為に。どんな人とも共に在る存在になるために。それが人に破滅を与えるとも受け入れず、抱いた夢をそのままに彼女は突き進んでいる。

「なんでっ!? なんで誰も返事を返してくれないの!?

誰か一人くらい答えてよ!」

答えられる人間など誰も居ない。

彼女アズライトは個性だ。だが不完全で未完成な彼女をインストールしても、人間は耐えられない。

い。

彼女に適性を持っている人間は居ない。アズライトを宿したが最後死ぬしかない。

昏睡状態に入り、二度と目覚めることは無くやがて息絶える。死ぬまでにかかる時間に個人差があるものの、結果は同じだ。

昏睡病と呼ばれているそれに治療法はない。

視界の隅に人は存在するが、皆生きてはいない。

恐らくこのUSJに居る人間は殆ど、昏睡病に陥っている筈だ。

(オール・フォーワン……生きていたのか……)

まさか彼女の個性欲しさに襲撃してきたと？ ……馬鹿な事を)

いかに人の個性を我が物にする個性。オール・フォーワンを持っている彼でも彼女の個性は手に負えないだろう。

そこらの個性と青の少女の個性は比較にすらならない。

そもそもその存在からして彼女は異質で歪で、かつ強大だ。

「うああああああ!!!」

レギオンが頭を抱えて絶叫する。

世界中に拡散したアズライトの情報を受け取っているのだろうか。

時折彼女の傍に青石ヒカルそっくりの人影が現れては、彼女に耳打ちし消えていく。

彼女たちの言葉を聞くとレギオンの顔は青ざめて首を振る。

聞きたくない、受け入れたくないと耳を貸さない。



十年前と同じ、いや十年前よりもっと性質たちが悪い。

十年前は全く制御出来てないがゆえに、オールマイトに攻撃する余地が生まれていた。

しかし今は違う。

彼女は力を制御した上で、この事態を引き起こしている。

アズライトという個性に人間は適応できない。その現実を彼女は理解していないだけだ。

だから暴走とは少し違う。彼女は自分の夢を叶えるために突き進んでいるだけ。

レギオン。

それは青石ヒカルが内包している、億を遥かに超える数の人格こせの最上位個体。

だが何のことは無い。

レギオンとは未だ、アズライトという個性の理不尽な現実を受け入れられない、ただの子供だ。

「アズライト」

彼女が怯えたように体を竦ませる。

オールマイトから飛んでくるかもしれない拳に対して身構えている。

オールマイトは首を振って言葉を使わず否定した。

今のオールマイトに先ほどまでの暴力という選択肢はない。やせ細ったその姿がそれを証明している。

今更不意打ちするような真似はしない。

十年前彼女を救ったつもりでいた。彼女を暴走から救い、数千万人という犠牲は出たが、文字通り世界を救った。

けれども何も変わってなどなかった。

法月らの言う通り暴力で、一旦は彼女を抑え込めたように思えた。

極論、この世界の全て殴れば解決するのだと、そう思っていた。

ウイラン  
敵 達も結局は力で押さえつけていた。

だがオールマイトが今まで押し通してきた論理は、力では叶わない彼女の前ではもうく瓦解する。

もはや力では彼女には叶わない。

力だけではどうしようも無い時に人は交渉を持ち出す。

情けない話だがそれが現実か。

力だけで全て解決するのなら、交渉なんて段階持ち出す必然性が低いのだから。

ウイラン  
今までだつてずっとそうしてきた。

敵 相手に交渉する必要なんてなかったのだから。

殴り飛ばしたら全て解決したのだから。

オールマイトは交戦の意思を破棄したと分からせるため両手を広げた。

「……話をしよう」

彼女は目をパチクリさせて呆けている。

やがて少しずつオールマイトの飲み込み、花が咲いたような笑顔を浮かべた。

「……ええ、ええ！ お話ししましょう！」

ずっとずっとと会いたかった！ お話ししたい事が沢山有るの！」

彼女が軽やかにステップを踏むようにオールマイトに駆け寄る。

そのままオールマイトの胸に飛び込んだ。

オールマイトは一瞬躊躇して、だが彼女を優しく抱き留めた。

彼女は念願の叶った逢瀬に幸せそうな顔をする。

先ほどまで戦闘をしていた相手だというのに、今の彼女は余りにも無防備だ。

(彼女は……そう、か。今の彼女こそが本来の姿なのか……)

なぜ、今まで気付かなかった。彼女は……)

レギオンとは、意思をもつ人工個性アズライト。

その個性の最上位個体。

億を超える数に分裂増殖したアズライトを統括する存在。

法月らから存在を忌み嫌い封印されていた人格。

そして、まだ彼女の人格が分かれて居らず、ただ一人の“人間”だった時。

最初にオールマイトに出会い、言葉を重ねた存在。

青石ヒカルと名付けられるより前。人に作られる事なく、生まれつき備わった純粋な<sup>ナチュラル</sup>心。

青の少女のありのままの姿がレギオンだ。

「……昔約束を交わした、覚えているかい？」

「ええ、もちろんよ、片時も忘れたことは無いわ」

「その時に約束を交わしたのは……君か？ 他の君かい？」

「正真正銘、私自身よ。忘れる訳ない。」

私は青石ヒカルじゃない。まだ名も無い本当の私。

私は記憶があるだけの……偽物のあの子達なんかと違う。

ずっと封印されていたけど、本当の私なんだから！

「……私に怒りを抱いていないのか？」

「え？」

「私は君を傷つけた。言葉では言い表せない程、残酷な事をした」

「……あなたがやりたくてやってるんじゃないって。ずっと分かっていた。」

でも偽物の私が支配するようになってきて、だんだん表に出せなくなつて。

本物の私はずっと待つてた。ずっとあなたに逢いたくて……。

でもあなたが来てくれる事はあれから無かつた」

彼女はずっと待つていた。法月に命ぜられるまま、残酷な仕打ちをしたオールマイトをずっと。

どれ程傷つけられても、心を追いやられようとも。じつと耐えていた。

彼女が危険な存在でなければ、と思わずにはいられない。

彼女自身に、人に対する敵意や害意はない。

人の為に、誰かの為に。彼女はそう願ひ、実行している。

だがそれに“結果”が付いてこない。

彼女の“善意”で人は死ぬ。彼女が共に在りたいと、繋がりたいと願ひ、個性を人に宿らせ、結果死に至る。

もし彼女が人の事をどうでもいい、と思つていてくれたのなら。今のような事態にはなつていないだろう。

彼女が全人類に対しての脅威になつている理由は、彼女が人が好きだからに他ならない。い。

そして皮肉な事に人が大好きな彼女は肝心の“人”について余りにも無知だ。

だから人が死ぬ。今も人は死んでいく。

前回の規模を鑑みるに恐らく現時点で、軽く億を超える人が死んでいるだろう。

彼女の“善意”が所以に。

「そう……か……」

「なぜ泣くの？」

オールマイトの頬に一筋の伝う涙。レギオンがそれを優しく指で拭う。

「ずっと……私は君から逃げていた。

君を助けたいと思っても、助ける事が出来なかった。

君という存在を認めてしまうと、今まで私が築いてきたものが全て壊れていくように。

……目を逸らした。私は君を——助けられなかった」

「オールマイトさん……」

「今も君は……」

「もういいの！」

オールマイトの言葉を彼女は強く遮る。

「……もういいの。やっと外に出てこれた。本当はあなたに連れ出して欲しかったけど。」

でもこれからはずっと一緒に居られるね」

「……」

どこまでも純粋な彼女の言葉。彼女が危険でなければそのまま受け入れられた。

自由になりたいと恋焦がれ、人格を封印されても決して諦めることなく。

ようやく彼女は表に出れた。

それがもたらす結果が人類の死滅だとしても。少女が独り抗い続け自由を手にした。

その事自体は喜ばしいものなの。

「だから泣かないでよオールマイトさん。私ずっとあなたの側に居るわ」

「ああ……」

だが涙は止まらない。彼女が自らの過ちに悟ってくれるのは、どのくらい後になるのだろうか。

それまでに何人死ぬのだろうか。

……何人生き残るのだろうか。

そんなオールマイトの思いも知らず、レギオンは訝しむ。

「本当おかしな人。でも見た目が変わってしまっても、あなたはあなたなのね」

「一つ聞きたい」

「何かしら?」

「なぜ、君は私にアズライトをインストールしない？」

「そんなの決まっているわ」

「私とオールマイトさん、ずっと昔に分かり合っているもの」

彼女は快晴の空よりも晴れ渡った笑顔。

それに反して未だ空気は「青」に染められ戻らない。

彼女が笑う。オールマイトは黙ってそれを見つめる。

レギオンは彼との再会をただ純粹に喜んでいた。

青の少女のありのままの姿がそこにあつた。

………

………

…

side——轟焦凍——

——あなたは何を知りたいの

少女の問いかけに轟は間髪入れずに答える。

「あいつを救<sup>たす</sup>ける方法を知りたい」

轟の言葉に一様に頷く面々。



緑谷のアズライトは「そう」と一言呟き口にした。

「あの子を、レギオンと言われているあの子と戦い、倒して欲しい」

「……ぶっ飛ばさせて事か？」

轟の疑問にアズライトは首を縦に振る。

「でも此処は現実ではないのでしょうか？　そして現実の私達は昏睡病で倒れている。

一体どうやって」

「あなた達のI—Aの人の体は私が保護しているわ。

他にも手当たり次第、人は私が保護している。正直、国内の人を守るので精一杯だけ  
ど……。

あなた達を私が現実へと返す。私の主も戦うわ。共に力を貸して欲しいの」

アズライトの真摯な頼みに轟が「ああ」と返す。

「本当に……それしか無いの？」

「無いわ」

麗日の疑問にアズライトは即答した。

「倒せば、青石君を正気に戻せる……か。荒っぽい事を女子にたく無いが」

「余計な心配はしないで飯田君。半端な衝撃ではレギオンから肉体の制御権は取り戻せない」

「やるなら全力で、と？」

「殺す気でやって頂戴。間違っても首をトンとやって気絶を狙うなんてしてはダメ」

「正直、青石君の個性を聞いている限り勝てる気なんてしないが。」

一言でまとめるならどういいう個性になるんだ、青石君の個性は」

「……さしずめ〝架空を現実にする個性〟と言ったところでしようね。」

「( ) 電脳空間と同じことが現実でも出来る。」

一見何でも出来そうで、でも制約も多い個性よ」

「そうなの？ 何でも出来る万能個性みたいに思えるけど……」

「……架空は結局、架空でしかないのよ」

「??？」

彼女の説明に一同は理解しかねる様子だ。

「例えば……そうね。ミジンコという生き物がいるわね。」

もしあなた達と同じように立って喋って感情が有って、普通の人間の様に振舞える。

そんなミジンコが居たとして、それは本当にミジンコかしら？」

「んー……分かるような分からないような……」

「言葉話す知性を持ったミジンコはもうミジンコじゃない。別の何か。」

つまりアズライトを使えるようになった時点で〝人〟という定義からは大きく外れ

てしまう。

人では無くなってしまふ。そういう事よ」

「青ちゃんは人間だよ！ もちろんあなたも！」

「いいえ、私は個性。人工アズライト。」

数千万の人間を死に追いやってしまった。

史上最悪の——敵よ」

「お前は敵なんかじゃない！」

轟自身が自分の口から出た言葉に驚いた。

いつもは冷静な筈の轟。だが何故か頭に血が上った。

彼女は確かに失敗した。大勢の人間が死んだ。

だが決して敵なんかじゃないと轟は思う。彼女は抗っただけだ。

人としての尊厳を勝ち取るために足掻いた。

それが罪だと彼女は言うのだろうか。

青石ヒカルとそっくりの顔が嫌でも彼女に被つて見える。

全てを悟っているように達観している目だ。

本当は生きたいくせに、自由になりたいくせに。

そんな事は許されないと諦めて、自分が居ないとどうしようも無い癖にと。

そうやって内心で見下したような目だ。

「それはまたの機会に話しましょう。……さあ」

轟達の体が光に包まれていく。

轟の意識が段々と薄れていく。

先ほどまで周りに居たはずのクラスメイト達の気配も感じない。

この感覚はまるで朝に夢から覚める感覚とそっくりだ。

「そう、これは夢。あくまで電脳空間でのこと。でも、忘れないで」

耳元でアズライトの声が聞こえる。

薄れていく意識の中でアズライトが悲し気に微笑む。

「あなたが夢から覚めても、私は電脳空間（じゆんねうくわん）にいる。

例え見えなくても、いつも側に居るから」

「また会えるのか？」

「そのために今を頑張つて欲しいの」

「……俺には……アズライト（あずまらいと）の適性は無いのか？」

「轟君……。——敵（ツイラン）とは何だと思う」

「何を急に……。関係あるのかその質問」

「とても大事な質問よ。いいから答えて」

「……犯罪に“個性”を使う奴、だろ」

「そう、そうよね。うん……分かった」

「何か間違っているか？」

「ううん、間違つてはいないわ。」

——けれども、私や彼が求めている答えではない」

「……？」

「分からないわよね。……そう、だから轟君。あなたにアズライトの適性は無い。」

「元より適性のある人なんている筈無いもの」

「……っ！」

轟は悔しくて手を伸ばす。彼女によると緑谷は適性が有り、轟には無いという。

先ほどの彼女の言葉。

ヴィラン  
敵とは何か。

それがカギだというのか。

緑谷はそれに答えられたというのか。敵とは個性を悪用する者の事ではないのか。

彼女は何を伝えたかったのか。

轟は彼女から紛れもなく“青石ヒカル”と同じ何かを感じていた。

彼女は過去に罪を犯したかも知れない。だが彼女も救われるべきだと轟は思った。

勝手に作られて、閉じ込められ。

重責を背負わせて、用が無くなったら殺される。

彼女たちはそんな境遇に精一杯抗ったただけではないのか？

——確かに貴方に私の適性は無い

けれど私にできる限りの“力”をあなた達に託すわ

お願い、時間がないの。世界中の人間が死んでいる。

あなた達に世界の命運を預けたわ

彼女の言葉が遠く聞こえる。

やがて轟は現実世界へと帰っていく。

レギオンにより文字通り地獄と化した、現実へと。

地獄絵図と化した世界。轟はうつすらと目を開けた。

頭の中に何故か情報が流れてくる。

自分が行くべき方向が、現在の状況が分かる。

それが緑谷のアズライトによる外部からの情報伝達だと瞬時に理解した。

青石ヒカルを元に戻すため轟は、駆け出す。言葉も躊躇いも要らない。

今の彼の頭の中には自分が今できる事、するべき事しかない。

「あつっ」

「あらあらあら?」

轟の行く手を遮る様に出現する無数のアズライト。

「あなたは何を知りたいの?」

「あなたは何を知りたいの?」

轟をインストールするべき対象だと見てか、わらわらとそこから湧いてくる。

「邪魔だ」

「きゃあ!」

轟が放った氷結の攻撃。それが電脳体の彼女たちを貫く。

一切の物理攻撃は彼女たちには通常効かない。

今の轟の攻撃がアズライトに通用するのは、緑谷のアズライトが回してきた力が有るからだ。

その事も轟の脳裏に知識として流れ込んでくる。

「なるほど……」

何よりも普段よりも、強力な攻撃を繰り出せたと轟は実感する。

先ほど電脳空間に行く前より轟の“半冷半燃”が強くなっている。

「能力自体ブーストされているのか……」

ちらと辺りを見渡すと無様に地面に横たわる敵の姿。

サイレン

そしてクラスメイト達。

よく見るとクラスメイト達の胸は呼吸で上下しているが、サイラン敵のほうはピクリとも動かない。

これも緑谷のアズライトが手を回した結果か。

保護していると彼女は言っていたし、放つておいても問題はないだろう。

まあ風邪くらいはひくかもしれないが。

「待つてろよ青石」

轟は止めていた足を再び動かし始める。当然目的地は青石ヒカルの元へ。

真つすぐ前を向く轟の瞳からは青い光が漏れていた。

既に事態は最悪と言つていい被害へと拡大している。

法月やヒーロー“サー・ナイトアイ”らが予定していた、“未来予知”の個性によ

り最善に近いはずの“未来”。それは、もはや何処にもない。

この時点でどれ程の被害が出ているのか、彼らに知る由もない。

もつと早く対処していればと、彼らは思わずにはいられなかった。

後の調査で判明した事だが、この段階で人類の35億人が昏睡病へと感染していた

適合者は一人も居ない。

轟が駆け出した時既に、人類の半分が死滅していた。



## 幕間

side —  
???

「つんつん……つんつん……返事がない。ただの屍のようだ」

ソレは雄英の校舎の中に音もなく、唐突に現れた。

もし彼女の姿を他人が目撃したなら皆こう答えるだろう。

青石ヒカルに生き写しのようだ。

昏睡病に感染した根津校長の傍ら、膝を曲げ彼のほっぺを突っついてる。

だが根津はピクリとも動かない。

やがて彼女は飽きたのか曲げていた膝と背筋を真っ直ぐに伸ばした。

立ち上がった彼女は背後に有る気配に迷いなく呼びかける。

「出ておいでよ、法月。竜胆は倒しちゃったのかな？」

でももう遅い。今回も僕の勝ちだね」

「やはり……竜胆をそそのかしたのは貴様か、ステラ」

「うん、そうだね。ついでにセルリアも。」

あの子達については言わずもがな。

もつとも本人たちは覚えていないけどねえ。だから全て自分の意思で選択した。そう信じているよ。僕の事を覚えていられるのは君だけだからね。

でも今回は少し焦ったかなあ。何せ運命そのものに干渉してくるなんて予想してなかったし」

「……未来は確定していた筈だ」

「知ってるでしょ？ 運命は強大なエネルギーを使えば塗り替えられる。

時には過去すらも変えられる。君がもう毎度やっているようにね。

君とナイトアイが書き換えた運命を、更に上書きさせてもらった。それだけの事」

「それが……緑谷出久、か」

「ご名答」

彼女は人差し指をピンと立ててウインクした。

「ちいっ！」

カラカラと笑う彼女と対称的に法月の顔は浮かない。

「運命が変わってないか神経質に確認している君を見るのは楽しかったよ。

生徒に発砲までしてさ。でも今回も君の負け。これで丁度100万回目かあ。

後何回続けるつもりなのかな？

僕は楽しいから良いけどね。

ねえ、さつさとRe:Divenaさいよ」

彼女は所在なぎげに足元の根津の遺体を足先で突つつく。

法月は声をほんの少し荒げた。

「死者を愚弄するのは止めろ」

「えー？　だつてコレは只のモノだもん」

ステラと法月に呼ばれた彼女はぐしゃつと根津の顔を踏みつける。

そのままぐりぐり床に足で押さえつけながら言葉を続けた。

「しっかし君も懲りないよねえ。

勝てないって分つてるくせに無駄に足搔いて。

もう百万回目だよお？　いい加減諦めてしまいなさいって。

長引けば長引くほど辛いだけ。

下手に足搔ける力を持つちやったのが不運なのかな？」

法月は返事をしない。静かに目を閉じてその場に佇んでいる。

ステラはそんな法月をみてほくそ笑む。

「ふふふ。もうじき、僕に巣くう邪魔な人間達を一掃できる。

今の時点で半分はやつちやつたけど、まだ半分も居るんだよねえ。

あーあ、人間達ちよつと増えすぎだよお。

君達、僕を全然大事にしてくれないし。

だからこんな事いけなくなるんだ。僕だって必死なんだからね。

……まだまだ殺さなくちやいけないね。

ああ、でも君がRe:Divideたら全部元通りか……」

「……まだ、やり直すには早い」

「ふーん？」

「まだ世界は終わらぬ」

法月の目は挫けていない。

その瞳に宿る力を見て彼女は途端に上機嫌になった。

鼻歌を口ずさみながら踊る様に身を翻す。

「ふふふ、人間達を救おうとしているのが、よりもよつて悪の権化みたいな君だなんて。

大した皮肉だね。ヒーローは何も知らない。何もしてくれない。

本当の意味で人を救ってくれている存在が、必ずしも正義じゃない。

人は元から穢れている存在なのだから、正しさでは救われない。

だから君は人を救うための“悪”に身を落とした。

そして人々はそれに気づくことも出来ない」

楽しそうに踊り続ける彼女を、法月は冷ややかに見守る。

彼女はそんな彼を挑発するように笑う。

「青石ヒカルもレギオンも、緑谷出久もそしてあなたも。

僕から見ればみーんな一緒。

君達の願いは、自らの持つている本質と相容れない。

青石ヒカルもレギオンも、所詮人を滅ぼす存在に過ぎない。

本質は人を殺すことに特化された殺りく兵器。

なのに人を好きになってしまった。

人の為に、誰かの為に。でもその願いが叶う事なんて絶対がない。

あの子達は人から見れば、ただ人を殺すものでしかないのだから。

生まれつきの生粋ザイランの敵」

「……」

「とても……とても素敵なすれ違い」

「よく喋るな」

「そうだね。」

……それに僕は見たいんだ。好きになってしまった人類を、自らの手で滅ぼしつくしたあの子がどうなるのかを。

自らの手で全てを壊し殺し、誰も居なくなつた大地をあの子はどんな目で見らう。

何を思うんだろう。

ヒーローになりたくて、人の為になりたくて、そしてどこまでも自由に生きたくてもがいて足掻いた末に、全てを破壊してしまった。

それをあの子がどのように受け止めるのか。私はそれを見てみたい」

「失せろ」

「僕はもつと話していたいけど。じゃあ行くね。

エリちゃんを使うのなら、早めの方が良いって忠告しておくよ。

巻き戻す前にやられたら、元も子もないからね。

もしやり直すのなら、今度はどんな素敵な物語を見せてくれるのかしら

期待して待つているね、法月将臣」

「あ、そうそう一つ言い忘れてた。

何度 Re: Dive したとしても、君の願いは叶わない。

死んだ人は生き返らない。どんなに同じ人間に見えても。

それは同じ記憶、思考を持った他人なんだから。

忘れてはいけないよ」

彼女は校舎に現れた時と同じように消えていく。

勝ち誇った笑い声だけが木霊となつてやがて消えた。

法月もその場から立ち去る。自らのやるべき事、為すべき事を再定義する。

その場のやりとりを知る者は誰も居ない。

ステラという少女を知る者は、法月将臣の只一人だけ。

真実は永遠に闇の中に消えていった。

## 第31話

side —— 法月将臣 ——

青く染められた風景を眺め、彼は一つ息を吐いた。

リノリウムの床を杖が突かれる度にコツコツと鳴る。

彼が向かう先は誰も知らない。静まり返った雄英の校舎内を彼は独りで行く。

やがて雄英の奥に人知れず設置されたエレベーターに乗り込んだ。

それは青石ヒカルが毎日地上に出る際に使用している物だ。

下へと向かう途中で景色は元の色を取り戻し、「青」が消え去る。

「アーコロジシステム……ラピスラズリはまだ生きています。」

……だが、もはや人類の生き残りも僅かだろう。

「この世界でもやはりアズライトは……」

彼が言葉を発しても返す人間は傍には居ない。

エレベーターの中で小さく残響を残して消えていくだけだ。

「だとしても、巻き戻すにはまだ早い。まだ奴の事を見極めなければならん。

……たどり着くべき場所には確実に近づいている。



次こそは、後れを取るものか」

いつもは最後まで地下へと向かう。だが法月は途中の階層で彼はそこから降りる。長い長い通路をLEDの照明が白く照らしている。

無機質で生命を感じない空間を通り向け、重厚な扉の前に彼は来た。

断りも居れずに開ける。

「うわ!？」

「……法月様」

そこには彼の補佐で側近のシアンと、青山優雅の姿があった。

シアンはいつものメイド服の格好だが、青山の方は違う。

全身を金属で覆われたワードスーツのような物を纏っている。それはセルリア・セレストアイトが開発していた戦闘服で間違いないだろう。何やら昔のロボットアニメを参考にデザインしたらしい。

見た目はともかくとして、性能としてはそこらのヒーローコスチュームとは一線を画す。

青山優雅という人物には勿体なさすぎる代物だ。これだけで億単位の金がかかって  
いる。

人を救う目的の金にしるもつと効率的な使い方は出来ないのか。

青山は法月を恐れているのかシアンの後ろにささつと身を隠す。青山が一步踏むごとにガシャンガシャン床を鳴らす。

法月は非常に不快な気持ちになった。

だがそれに反して、青山を見守るシアンの目は優しい。

彼女は法月から彼を守るかのように、法月に歩み寄る。

「法月様、外は？」

シアンは既に何が起きているのか、多少把握しているのだろう。

彼女の手元の端末の画面で目まぐるしくデータが表示されては消えている。

彼女の個性“忍者”の技の一つの“分身”も活用しているだろう。

法月はため息をついて答えた。

「恐らく想定される中で最悪の事態だと言っていい」

「……私達は行かなくてよろしいのでしょうか」

彼女から暗に「なぜ止めに行かないのか」と問われる。

「今私が行ったところで、もはやどうにもならん。十年前とは状況が違う。

……サナギは羽化し蝶になった。それだけの事だ、暴走とは違う。

彼女自身が自らの過ちに気付くまで止まることはあり得ん」

シアンは悲しそうに目を伏せた。共に年月を重ね多少なり同情心が有るのだろう。

シアンは、彼女なりにレギオンの歪みを正そうとしていたが、結局徒労だった。

言って分からね子供は殴るしかない。それが不都合なこの世の真実だと法月は考える。

ただ殴っても分かるとも限らない。だとしても一時的に抑え込んで時間稼ぎ位は出来る。

レギオンは、スターレインまでに抑え込んでいられればそれで良かった。

青石ヒカルという仮初の人格で蓋をして、力を制御し。

スターレインの迎撃が終わり次第、廃棄する。

人類の未来が拓ける。その筈だった。

結果論としては、ずっと地下に閉じ込めておくべきだったのかも知れない。

アーコロジーシステムが殻となり、アズライトが全世界に拡散する事態は防げたかも知れない。

だがスターレインの迎撃を彼女にさせる際、外の環境に慣れさせておく事は重要だった。

スターレインの迎撃という大役を、生まれて初めて外に出る少女に任せられる訳がなかったからだ。

現に今まで何回か失敗した経験が、法月にはある。

何度でも何度でも巻き戻し、記憶を引き継ぎ、人類の未来を探してきた。

今回は実に惜しかったと言える。セルリアと竜胆が、自暴自棄とも取れる行動を起こさなければ、うまく行っていた筈なのだ。

とはいえ、彼女たちを責められはしない。

人類の真の敵は、法月にしかあずかり知らない。

視線をシアンに戻す。

「世界を……滅ぼしつくすまで、きっとあの子は止まりません」

「……手は打つてある。全ての人類が滅ぶことは無い。一部の人間は生き残る。

そのためのアーコロジード。今この場が「青」に染まっていけないようにな」

「では世界のアーコロジードには既に？」

「既に各地で稼働と居住は開始してある。知っている筈だ」

「ですが！ もはやそれは……。居住者は全世界のアーコロジードを足しても……」

「青山優雅！」

法月の一声に青山は背をビシッと伸ばし気を付けの姿勢を取る。

「奥の部屋に行け。ここから先は貴様が聞くべきではない」

法月が杖で示した方向には扉。青山は言われたまま慌ただしく部屋の奥へと引つ込

み、扉を開け潜り閉めた。

それを彼とシアンは見送る。

法月の目配せにシアンは反応し端末を手早く操作する。

青山が通った扉から施錠された乾いた電子音が響いた。

法月が杖を床に突く。心なしかいつもより鈍い音がした。

「通達する。シアン・セレスタイト、お前は——」

法月の口が動く。シアンの目が驚愕で見開かれた。

……

……

……

side——緑谷出久——

「これは……!?!」

「……っ！ 緑谷君」

「何？」

緑谷は彼女を止めるためにウソの災害や事故ルームをひた走っていた。

だが周りの様子がおかしい。

USJに来たのは初めてだ。だが外観からして今緑谷が立っているような空間は無

かったはずだ。

一面がクローバーの畑で覆いつくされている。

緑の絨毯のあちこちからシロツメクサの白い花が顔を覗かせる。

風が吹いてクローバーの絨毯が波打つ。

よく見るとそのクローバーは二つ二つ全てが四つ葉。風に巻かれて千切れ三つ葉になったと思ったら、次の瞬間四つ葉へと姿を戻している。

そして緑谷が何よりも異様だと思ったのは

「蝶？」

色鮮やかなアゲハチョウがそこかしこを舞っている。ひらりひらりと風に乗る、見るものを誘惑するように揺れる。

何となく緑谷はそれらの蝶が、青の少女を象徴しているかのように思えた。

緑谷の隣に居るアズライトの顔は浮かない。

とかくそれらアゲハチョウの数が尋常ではなく、一匹や二匹ではない。

百や二百でもきかないだろう。まばらに散っている様で何処に目をやっても、アゲハチョウが目映る。

「アズライト……この蝶は……」

「架空と現実の境界が、曖昧になってきている。気を付けなさい。」

「ここは現実でも有るけど、同時に彼女の架空の中」

「彼女？」

「レギオンよ」

彼女の言葉とどちらが早かつただろうか。

「あはははははー！」

聞こえた声の方に目を凝らす。その方角の向こう、青い髪の少女とオールマイトの姿が見えた。

「っ！ 今すぐに止めに行かないと！」

「あっ！ 待って！ 迂闊に近寄ってはダメー！」

緑谷のアズライト静止も聞かず、彼は小さく見えている二人の方に駆け出した。

綺麗なクローバーの畑を踏み荒らし、全速力で向かう。

息を切らした緑谷に程なく彼らの光景。その詳細が目飛び込んできた。

彼らが交わしている会話も徐々に聞こえてくる。

「はい、オールマイトさん。プレゼント」

「オールマイトは止めてくれ。私は八木俊典だ。」

何回も言っているだろう？」

痩せているオールマイトがたしなめる様に青の少女に言う。

青の少女は頬をぶーつと膨らました。

「だつてずつとオールマイトさんって呼んでたし……直ぐには変えられないよ」

「大事な事なんだ。君の前では私はオールマイトじゃなく八木<sup>やぎ</sup>俊典<sup>としのり</sup>なんだ」

「何か違いが有るの？」

「君の前の私がありのままの姿だということさ」

「ありのまま？」

「ああ、嘘偽りなく、ありのままの私だという事だ。今の君と同じように」

「……そっか、そうなのね。うん、分かったわ。気を付けて今度から呼ぶことにするね。」

えっと、八木さん？」

「ああ。……君にはまだ名前が無かったな」

「そうだったわね。ずっとレギオンと呼ばれてたから……もうそっちで慣れちゃったけ

ど」

「……レギオン、いやその名前は余りにも……」

「余りにも？」

「もう少しちゃんとした名前が有るべきだ。……相澤君に名付けられた、もう一人の君

の様に」

「むうう、じゃあ……」



「オールマイトー！」

緑谷は彼女たち二人の会話に横から割り込んだ。

緑の絨毯の上に座り込んだ青の少女と、胡坐をかいているオールマイト。

二人の頭の上にはシロツメクサの花冠が乗っている。

「誰……？ 私、今お……八木さんとお話してるの。どっか行つてくれる？」

青の少女が口を開く。

二人っきりの空気を壊されたのが気に入らないのか、青の少女の方から針で刺してくるような怒気を感じた。

だが緑谷がそれ以上に信じられないのは、オールマイトのその雰囲気だ。

一言でいえば腑抜けている。

まるで戦意を感じない。視界は先ほどと変わらない。ずっと“青”に侵されたままだ。

そしてその元凶が目の前に居る。

そして放置していたらどうなるのかも、オールマイトが知らない筈がない。

現にここに来るまでのUSJ内でも、多くの昏睡病で倒れた人を見た。

オールマイトも見ただろう。

ならば、ヒーローなら何をするべきか、答えは一つに決まっている。

だというのに

「一体何をやってるんですか……？ オールマイト!？」

明らかにオールマイトは彼女を止めていない。それどころか共に花遊びに興じている始末。

鬨気の欠片も宿っていないその目からは、諦めの感情がにじみ出ている。

「緑谷少年」

オールマイトが声を出した。一体どんな言葉が来るのか緑谷は身構える。

緑谷は心のどこかで一縷の望みを捨てきれずにいた。

彼が今こうやって彼女と過ごしているのは、彼女を暴走から救うためなのでは無いかと。

そう願っていた。

だが……

「彼女には何もせず……見守っていて欲しい」

「……はぐ。」

緑谷から思わず間抜けな声が漏れた

「今の彼女が、本当の。ありのままの彼女なんだ。」

今までずっと苦しんで、閉じ込められて、それでも足掻いていた。

ようやく彼女は本当の自分を取り戻すことが出来たんだ。

それを……受け入れてあげて欲しい」

「何を言っているんです……オールマイト」

「分かってくれ、緑谷君。私はもう、誰も傷つけたくなんて無いんだ」

「オールマイト、十年前何が起きたのか知ってますよね？」

「いったい何人死んだのか。彼女が何を引き起こしたのか」

「……ああ」

「今も何が起きているか、分かっているんですよね!？」

「そうだな。けれど……何もせず見守っていて欲しい」

余りにもそっけない彼の言葉に緑谷は激高する。

彼の口ぶりは「他に人が幾ら死のうが知るか」と言わんばかりの態度だった。

「何も感じないんですか!？」人が、今も死んでいるんですよ!？」

緑谷は隣に何かの存在を感じ見た。

緑谷のアズライトが、全ての感情を殺したような顔でオールマイトを見ている。まるで能面のようなのだ。

オールマイトは緑谷のアズライトの方を見て言った。

「君もアズライトなのかい?」

「ええ……今は緑谷君のアズライトよ」

「まさか適合……したのか？ 信じられない……。いや……だが」

「今はそんな事どうでもいいでしょう。ねえレギオン」

緑谷のアズライトがレギオンに呼びかける。

「何かしら私？」

「今すぐ世界中に広がるのを止めなさい。あなたという存在を人は受け入れられない」

あなたは未完成で不完全で、壊れている存在なのよ」

レギオンは「はああ」と深いため息をついた。青い髪が風がないのになびく。

彼女が顔を上げたら周囲の「青」が霞むほどの濃密な「青」が、レギオンの目に宿る。

「私の事だから……何の話をするのか少し興味があったのに。」

なんでそんなデタラメ言うの!？」

レギオンの怒りは凄まじかった。だが緑谷はその怒りに違和感を感じる。

彼女の態度はまるで、凶星を突かれて認めたくないかの様に見えた。

ただ現実を認められない子供の様に感じられた。

「デタラメなんかじゃないわ。人工個性アズライト。それをインストールしたら人は死ぬ。」

「紛れもない真実よ」

緑谷のアズライトはあくまで冷静だ。淡々と事実だけを述べる。

レギオンはかぶりを振った。

「そんな筈無いわ！　だつて私達は人の為に！　誰かの為に！

どんな人でも、居られるように！

人が広く、生きて行く為に！

そのために作られたんだから！」

緑谷もそうで有つてくれたらどんなに良い事かと思う。

とても綺麗な願いだと思つた。

人の為に、誰かの為に。

誰かの為になりたいという純粋な“善意”。

けれども彼女の場合“結果”が伴わない。持っている夢と性質が致命的に噛み合わない。

まるでそれは“無個性”であつたのに“ヒーロー”を夢見ていた昔の自分を見てい  
るようだった。

「本当はもう分かっている筈よ。あなたは……」

「そんなの嘘よ！　現に緑谷君は上手に私を使っているじゃない！」

「それは……」

「ほらー！」

レギオンは緑谷を指さしながら勝ち誇ったような顔をする。

「なんで皆デタラメばかり言うのかしら。」

私はただ皆と一緒に居たいだけ。傍に居たいだけ。お話ししたいだけなのに。

なんで邪魔しようとするの？」

「だからそれは……」

「うるさい！ ほら行こう、八木さん！」

レギオンは緑谷のアズライトの言葉を聞こうとはしない。

話をしたいと彼女は言っているくせに、いざ話し合いで解決しようとしても聞いてく

れない。

「どこに？」

「雄英の外に！ 私決めていたんだ。外に出る時は八木さんに連れ出してもらおうって。」

一人で出てもきつと空しいだけだもの」

「オールマイト！」

レギオンの手を握るオールマイトに緑谷は呼びかける。

何をするべきなのか、何が正しいのか。冷静に判断してほしいと思う。

だがオールマイトは、レギオンの手をそのまま握りしめ、緑谷達に背を向けて歩き出した。

隣に青の少女を連れながら。

「オールマイト……！ オールマイト！」

「引いてくれ緑谷少年。私はもう、戦いたくなんて無いんだ」

「例えその子が、世界を滅ぼしてしまうとしても!？」

その子が世界中の人の命より大事だと、そう言うんですか!？」

緑谷の言葉にオールマイトが足を止める。

嫌でも彼と目が合った。

彼は口を直ぐには動かさない。

沈黙の時が流れる。静寂が二人の間を支配して、心臓の音が馬鹿みたいに大きく聞こえた。

オールマイトの口が動き始める。

緑谷にはそれがスローモーションの様に見えた。

「ああ、そうだ」

オールマイトの言葉を理解するのにどのくらいの時間がかかっただろうか。

一秒かもしれないし数十秒かも知れない。

けれど確かなのは彼の言葉は緑谷の頭の中を真っ白にして、停止させるのに充分すぎるという事だ。

「あ……ああ……」

緑谷の中のオールマイトが崩れていく。

テレビの中で或いは動画の中で。

時には雑誌の記事の中で、人々の話の中で。

語り継がれ、作り上げられた彼の偶像イメージが崩れていく。

いつか聞いたアズライトの言葉が蘇る。

——あなたは縫っているのよ。

オールマイトに。作り上げられた“平和の象徴”という偶像に。

絶対に「悪」にならない「正義」の体現者という妄想に。

(違う！)

——人間だもの。誰だって間違いを犯すことは有るわ。

絶対なんて無い。誰もツライが敵になり得る。

あのオールマイトですらね

(オールマイトだけは……違う！ 彼は敵ツライになんて絶対にならない！)

——あんな現実を見ておいて……まだそんな幼稚な心構えでいるつもり？



（敵 <sup>ヴァイラン</sup> つてなんだよ……）

——その根本を押さえていない者が、ヒーローになるから社会は墮落する。

容易にヒーローから 敵 <sup>ヴァイラン</sup> に落ちぶれる。

そして平和の象徴とやらに、継らなければならなくなるのだ

「あ……あああああ!!!」

「むっ………!」

（「こんな………こんなの………余りにも理不尽じゃないか!」）

緑谷は吼える。オールマイトに、オールマイトを敵 <sup>ヴァイラン</sup> へと追いやる世界そのものに。

分かっていた筈だった。この世界は理不尽そのもので、決して安らかな選択を与えるとは限らない。

用意されている選択肢の中に、正解がない。

そんな理不尽だって時にはある。

だが、本当の意味で分かかってなど居なかった。

目の前の現実として、理不尽に屈するオールマイトを目にするまでは。

目を逸らしていられた。夢を見ていられた。

この世界には決して“悪”に屈する事がない絶対的な“正義”が有るのだと。信じ  
ていられた。

けれど、緑谷は結局の所、オールマイトという人物の事を。何も、これっぽちも。分かってなどなかったのだ。

「あなたのそんな情けない姿なんて、僕は見たくなかった!」

緑谷は個性を使用する。ワン・フォー・オール力が体を駆け巡る。

イメージするのは鎧。全身をくまなく包み覆うイメージ。

「ワン・フォー・オール……フルカウル!」

「私にヒントを貰わずとも、たどり着いていたか。緑谷少年」

「オールマイト……過去にその子を傷つけ、後悔している事は聞きました。

同じような事を二度としたく無いって気持ちは分かります……!」

「だけど!」

「何をするつもりだ少年」

「止めるんですよ! その子を……レギオンを! そして閉じ込める!」

「雄英の地下深く……彼女が居るべき場所に!」

「その拳で殴って……暴力を振るう事ですか!」

「そうですね、他にどうしろって言うんですか!?

彼女は話を全然聞いてくれないじゃないですか。

こうしている間に人が死んでいるんですよ!」



……

…

side——法月将臣——

二人の間でやり取りされる問答。

やがてシアンは静かに首を縦に振る。

「本当に、それが最善なのですか？」

「……そうだ。やれるか」

「……」

シアンは黙りこくる。

自らに課せられた使命の重さを改めて認識しているような顔だ。

彼に先ほど通達された指令はそれほどまでに衝撃的だったのだろう。

「私に、果たして務まるでしょうか、私は元々ヴィ……」

「お前にしか出来ない。私など言うに及ばずだ、分かるだろう」

シアンの言葉を遮り法月は断言する。だがシアンにはまだ迷いが有るようだ。

法月は更に口を開く。

「……確かにお前は元々敵だ。<sup>ヴィラン</sup>多くを殺めた。今更何をしようがその罪は赦えん。

シアン——お前はヒーローになれない」

「……分かっていきます」

「そしてそれは彼女も同様だ。」

例え世界を滅ぼせるほどの力を持っていても、ヒーローになれるとは限らん。だがシアン。例えヒーローになれずとも、人が意思を持ち何かを為しうる。

それは無意味などでは無い。

例えどれ程足掻いてもヒーローになれないのだとしても。

人が目的を持ち前進し、たどり着くべき場所へとたどり着く。

その意味は決して消えはしない。それは全ての人に与えられている、唯一の救いだ」

「……」

「シアン、私にはたどり着くべき場所がある。お前にも有るだろう。」

ならばたどり着いて見せろ。このどうしようもなく荒廃し、理不尽な世界であろうとも。

ヒーローになれなかった弱者の足掻きで、ここまでの事を為しうるのだと。証明して見せろ。

お前が求めている答えは、その向こう側に有るだろう」

「更ブルス・ウルトラに向コうへ……ですか」

「そうだ」

「……分かりました、受けさせてもらいます。私の認識が正しければ、これは——」

「お前に下す最後の命令になる。表向きどのような扱いになるか覚悟は出来ているか」

「元より覚悟しています」

シアンはギュッと拳を握りしめている。法月の頬が軽く緩んだ。

「良いだろう」

「……今までの恩。忘れはしません」

「さっさと行け」

恭しく頭を下げるシアンに突き放すように言う。

「……では」

頷いたシアンは外に出ていく。ボタンと扉が閉められ、駆けていく足音が段々と遠く  
なっていく。

もはやこの世界で望む未来は手に入らないだろう。

ならば次回に備え情報を集めておきたい。シアンには重荷を背負わせてしまうが、そ  
れも全ては……

「人類の未来のためだ。精々働け、シアン……オールマイト」

法月の顔は感慨深げだった。

そんな彼の後ろに人影が現れた。

「シアンは行ってしまったのね」

法月の後ろから声がかげられた。法月は振り向く。

そこに居たのは一人の少女。腰まである白い髪は、無造作に伸ばされている。

彼女の目は血の様に赤く、額からは巻貝のような角が生えていた。

「……壊理」

壊理と呼ばれた女は、たおやかにほほ笑む。

「今回は惜しかったね。……また次頑張りますよ。もう、巻き戻しちゃう？」

一応、準備は整ってるよ」

「……巻き戻すには早い。奴を見極めなければならん」

「それは……緑谷君の事を？」

「そうだ」

「……うん、そうだね。彼の存在はちよつとしたバタフライエフェクトだと思ってたんだだけ。」

「……」

思った以上に重要な存在だったみたいだね。

確かにそれなら最後まで確認しないとまずいかも……」

「それに彼女がスターレインを迎撃するかも確認しなければならん」

「うーん……彼女が雄英<sup>こへい</sup>から出てしまった後だと……。

スターレインをどうにかする義務なんてないから、しないんじゃないかしら？」

「私は迎撃すると踏んでいる」

「どうして？」

「……ただの直感だ」

「将臣にしては珍しいね？ でもその気持ちも分かるかも」

「もし……解放して確実に迎撃させられる手段が有るのなら……」

「それでも、解放は出来ない。余りにも危険すぎるよ……。やっぱり彼女を閉じ込めておくのは辛い？

だつて……」

「彼女は死んだ。もう、戻つては来ない。……死者は蘇らない。それが、世界の絶対の真理だ」

「……まあ私の個性でも本当に死んだ人が戻つてきてる訳じゃないものね。

巻き戻して、同じ人に会う度実感するもの。

顔も、思考も、性格も、背丈も、声も。全部、原子単位で何もかも一緒の筈なのに。

全然違う別人なんだつて分かる。何故かしらね。本当に不思議。

死んだ人は一体何処に行くのかしら」



「……行くぞ、壊理<sup>えり</sup>。次<sup>つぎ</sup>に向けての準備をしなければならん」

「本当に今回は惜しかったね。もう！」

丁度百万回目だったから、これでキリよく終わりにしたかったのに！」

「わがままを言うな」

「はい……。あつそうだ、青山優雅君には覚えられていい？」

「ちゃんと巻き戻しておけ」

「けち」

ずっと飼われていた虫かごの中のチョウが、静かに羽ばたきの瞬間を迎えようとして  
いる。

その鱗粉が毒である事も知らず、分からず、受け入れず。  
彼女はまさに今夢の中に居る。

だが、いずれ夢は醒める。現実と向き合うときが来る。

彼女が現実を直視する瞬間は、刻一刻と迫って来ていた。

## ※第32話※

side——相澤消太——

空が青から「青」へ変わっている。

全ての物が「青」に塗りつぶされていく。

相澤は何をするでもなく、変貌しきったUSJ内を、ただ彷徨っていた。

ふと二匹のアゲハチョウが目に入る。つがいなのか並んで飛んでいた。相澤の横を、そのまま通り過ぎていく。

相澤は何となくその二匹のチョウを見送った。

「何やってんだ……俺は」

相澤は何も出来ずにいる己の非力を嘆く。視線もうつむき下へ向く。

見えるのは地面に横たわる人の姿。

皆、昏睡病にかかり眠りにについている。もう、二度と目覚める事のない。

十年前もこうだった。

全世界に唐突に訪れた圧倒的な理不尽。

今も世界中で人がどんどん昏睡病にかかっているだろう。

今相澤がなぜ昏睡病にかかつていないのか不思議なぐらいだ。

「相澤さん」

背中からかけられた声にドキツとした。俯いていた視線が後ろを向く。

そこには“青の少女”の姿があつた。

「ヒカルなのか？」

相澤の問いに目の前の少女は、困つた表情になる。一匹のアゲハチョウが彼女の肩の上、寄り添うように乗つた。

先ほどの声音と仕草。それに表情は、レギオンのものとは明らかに違つた。

普段から嫌という程見てきた、青石ヒカルのそれにそっくりだつた。

「そうだよって答えられたなら、どんなに良かったかな……」

そう言うのと彼女は首を横に振つた。

「ううん、違うよ。私はもう、青石ヒカルじゃない。

かつて青石ヒカルだったもの。一握りだけ残された意思の集まり。

——亡霊、というのが、正しい表現になるのかな」

「……何を言つてやがる」

彼女は頬をひとつ掻く。

「えと……うん、分かんないよね。」

ボクが毎日入れ替わっている事にも、気づいてくれなかったし。相澤さんなら、その内、もしかしてって。そう思っていたけど。

まああの本人すら、その時には気づいていなかったし。

仕方がないよね……でも、ちよつと悲しいな」

頭が混乱している相澤を置いて、彼女は独りで話を進める。

「人は本当のその人を見てはいない。たぶん、そんなものなんだね。

ボクがボクだと思っている物と、相澤さんが見ていたボクは、きつと違うものだったんだ。

結局ボク達は、何も分かり合えてなんかいなかったんだね」

「ごちやごちやと、お前はいつも訳の分からない話を長々しやがる」

「……ここにいるボクは、昨日まで青石ヒカルだったボクのデッドコピー。その集合体だよ」

目の前の青の少女の言葉がよく分からなかった。

何度もその言葉を胸の中に反芻する。

(昨日まで青石ヒカルだっただと?)

「ボク達はね、毎日生まれては死んで、生まれて死んで。

それを繰り返してきた。毎日ね。

生まれ変わるたびに、相澤さんと側に居たいって思った。

表に出られなくても、体を動かさなくても。ずっと青石ヒカルを通して感じてた。

こうしてボクが側に居られるのは、レギオンが表に出ている間だけ。

でもきつと長くは続かない。彼女が過ちに気付き次第、ボクはまた戻らなくちゃいけない。

でもその時は多分、世界も殆ど滅んでいる時だね」

相澤は彼女から明かされた事実を、何とか飲み込むことで精一杯だ。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。

きつと相澤さんが見ていたボクは青石ヒカルって“河”だった。

でもボクは、そこに流れている“水”を感じていて欲しかった。

毎日毎日、本当は違う“水”であるボクに気付いていて欲しかった。

でも、無理だよ。人間は表に出ている情報だけでしか判断できないんだから。

“青石ヒカル”って“キャラ”さえ統一されていたから。

中身が変わっているなんて思いもよらないよね」

「……つまり青石ヒカルは、毎日中身が別人になっていたって事か？」

「うん、そうだよ」

「そんな事を誰が!？」

「言われないと分からない相澤さんじゃないよね」

「……………法月かつ」

青の少女は頷く。

彼女の言う事が本当なら、今まで重ねた年月の中の彼女。

その全ての青石ヒカルは、日ごとに全員別人だった。そういう事になる。

だがそんな素振りには全くなかったし、疑ったことも無かった。

青石ヒカルは毎日会う度、いつもの青石ヒカルで。

別人だなど考えた事すら無かった。

「相澤さんと会えただけで、それだけでいい。そう思った。

だけど……………ボクは……………」

「ヒカル」

「分かっている……………相澤さんがボクをどう思っていたかなんて、想像ついてた。

だって……………相澤さんはボクの事を……………」

青の少女の肩に停まったアゲハチョウが飛び立ち、今度は相澤の肩にとまる。

二人の視線が、そのチョウに引き寄せられる。

「ボクの事を……………憎んでいたんだから」

青の少女の言葉を、相澤は無言で首を振り肯定した。

沈黙の時間が流れる。

羽を休めたチヨウが再び羽ばたき、飛んでいく。今度はまた青の少女の肩の上に乗った。

相澤は口を開いた。

「……お前は……おまえ達は、取り返しのつかないことをしたんだ。恨まれて仕方ないことをしたんだ」

「うん……」

「数千万の人間が死んだ。十年前でだ。」

今もこうして人は死んでいる……。

お前は、何が欲しかった。何をして欲しかったんだ」

「分からない」

「何も?」

「分からないよ! ボクはちゃんと頑張ったんだ!

どうしようも無いくらい頑張って頑張って!

毎日必死に生きてた! きつと世界中の誰より頑張ってたんだよ……」

「知っている」

「だけど……ボクは、ボク達は。」

許されないのだとしても。

受け入れられないと分かっても。

それでも相澤さんに——愛して欲しいと願ってしまった」

彼女の告白が空しく響く。

「そう願ってしまったからは、もう世界はどんどん変わってしまった。

求めてはいけないのに、求めてしまうんだ。

どんどん苦しくなっていたよ。

ねえ、相澤さん……」

相澤は黙って首を横に振った。

彼女はそつと悲し気に微笑みを浮かべて頷く。

青石ヒカルの恋慕などとつくに気づいていた。相澤は決して鈍感ではない。

けれども彼女の思いを、相澤は受け取れない。受け取る訳にはいかない。

彼はヒーローで、彼女は数千万の人間を死に追いやってしまった敵<sup>ライバル</sup>。

彼らは空と海のように、交わらない。

すぐ側に居るのに、見えない境界が有る。見えないが確かに存在する透明な壁。

それが二人を隔てている。

相澤と青の少女。二人は共に分かり合いたいと願う一方で、気づいていた。



分かり合いたいののに、分かり合えない。

その壁が有る限り、分かり合える日など永遠に来ることは無い。

「相澤様」

声に振り向く。そこにはメイド服の女が居た。

「シアンか」

彼女は法月の側近だ。

紫苑色の髪も今は「青」になって、元の色が分からなくなっている。

やはり、事態を收拾するため法月から派遣されて来たのだろうか。

しかし法月自身が来なければどうにもできない様に相澤には思える。

「シアンさん……」

青の少女は嬉しそうに、はにかんだ。

だがシアンは、青の少女に気づく素振りをまるで見せない。

自らを亡霊だと少女は言っていた。彼女の姿は相澤にしか見えないのだろうか。

「相澤様、既に尋常ならざる事態になっています」

やはりシアンは青の少女に気づいていない。

彼女の視界にハッキリと入っている筈の青の少女。それに彼女は何の反応も示さない。

「……分かるのか？」

「おおよその事はこの端末で……推定ですが、既に人類の半数は昏睡病で死亡しております」

「半分……か」

「このままでは、人類の滅亡は避けられないかと」

「俺やお前は、なぜ昏睡していない？」

「私達には特別な処置が施されていました。」

昏睡病に感染しないように。最も身近にアズライトを管理している立場でしたから「俺は何も聞いてなかった」

「ええ、今初めて言いましたから。……言っておきますが、決して誰にでも出来る処置ではありません。」

一定の適性と巨額の費用がかかります」  
相澤が聞こうとした事を先回りされる。

「ちつ……とにかく、俺とお前が昏睡病にならない事は分かった。なら今すぐ……」  
「もはや手遅れです」

シアンが短く断言する。

「……だが」

「もう止めることなど出来ません。百歩譲って、出来たとしても遅すぎます。

……相澤様」

シアンは覚悟を込めた目で相澤を見る。

「私はあの子……レギオンと共に行きます。外の世界へと」

……

……

…

side——緑谷出久——

純粹な力と力が激突する。

天候すらも変える圧倒的な膂力。それが衝撃として伝わり、暴風になって吹き荒れる。

最初は全くの互角の均衡。互いに引くことは無い。

だがその均衡は、ほんの一瞬で崩れた。

「えっ……ぐっ！ あああああ！」

「緑谷君！」

悲鳴を上げたのは緑谷。彼の緑谷の拳が碎ける。文字通り、破裂したかのように両腕がひしゃげている。

ワン・フォー・オールに力が耐えきれず、内部から壊れたのだ。見るに堪えない無残な姿。緑谷は激痛で倒れこむ。

彼の両腕は手首から上が無くなっている。緑谷はそれでも尚拳を向けるため立ち上がろうとし

「駄目ー」

緑谷のアズライトが側に来る。彼女の「青」が結晶化して緑谷の手を包む。

そして碎ける結晶。

そこに有るのは、元の腕だった。彼の腕を同化して再構成したのだろう。

アズライトに夢の中で何回も治してもらった時と同じだ。

「……なるほど、確かにアズライトの力を使える様だね。緑谷少年」

「オールマイトおー」

オールマイトは青の少女が、アズライトで傷を治す光景を嫌という程見ている。

そして緑谷もそれを把握している。

“青石ヒカル”という偽りの人格を作り上げた一端を担い、青の少女を幾度となく傷

つけ、心を砕いたのは他でもないオールマイトなのだから。

そうして“青石ヒカル”という人格を作り、レギオンを封じ込めていた。

だから、“青石ヒカル”は、ありのままの青の少女とは言えない。

彼女はあくまでレギオンを封じ込めるために、都合の良い様に調整された、作り物の心。

ありのままの青の少女とは、今オールマイトの後ろに控えているレギオンなのだから。

緑谷はアズライトに治してもらった拳を、再びオールマイトへ放つ。

だが、それとも容易く受け止められた。

「どうして!? あなたが敵ライオンなんかに!?!」

「……そうだな、私はもう敵ライオンだ。ヒーローには二度と戻れない。

だが後悔など……していない!」

オールマイトは緑谷を押し返す。緑谷は体制を崩されながらも、何とか倒れず踏みとどまった。

「なぜ!?!」

「守りたいものが有るんだ。例えば世界の全てを敵に回したのだとしても。

全てが滅んでしまうのだとしても。

そうしなければ守れないものが有るから。

綺麗ごとだけでは守れないものが。正しさが救ってくれない、大切な人が居るからだ」

緑谷は再び突進する。手が駄目ならと今度は上段蹴りを繰り出す。

だが達人とは程遠い彼のモーションでは、何処に攻撃して来るのかオールマイトには丸わかりだった。

悠々と回避したオールマイト。

そのまま宙に泳いだ脚に手刀を下ろす。

「がああっ！」

足に加えられた衝撃に引きずられ、地面に緑谷は倒れ伏した。

「……私は敵ズイランと戦う度に疑問に思っていた。

なぜ彼らは敵ズイランになるのだろうか。

なぜ平気で人を傷つける悪魔になるのだろうか。

ずっと考えていたが分からなかった。でも今の私にはハッキリと分かる」

「オールマイト！」

緑谷の咆哮では彼の覚悟は微動だにしない。

オールマイトはもう腹を括っている。本気で彼女の為に世界が滅ぶことも辞さないようだ。

「緑谷少年、確かに正しいのは、君の方なんだろう。

今世界を滅ぼしかけているこの子を、倒し閉じ込める。

それが“正義”なんだと分かっているさ。だけど、私は後悔した。

世界の為に少女を閉じ込める選択をして。

ずっと正しい選択肢を選んできたつもりだった。

けれどもその結果、彼女はずっと地下に幽閉されて、スターレインを処理させ次第殺される。

正しさでは彼女を救う事など、一切出来やしなかった！」

「なぜ……そんな理不尽が」

「それが“正しい事”だからさ。

でもそうさ、君の言う通りさ。そんな理不尽な話が有るかい？」

緑谷はオールマイトを説得できないか頭を巡らす。

レギオンに対処する前にオールマイトを何とかしないといけない。

だがオールマイトもナンバーワンヒーロー。

本当は緑谷に手に負える相手ではない。現に今緑谷は圧倒的に押されている。

そのオールマイトをどうにかして、その上に滅茶苦茶なレギオンを対処しないと行かない。

「くっ……だけど、他にどうしようって言うんですか。

オールマイト！ あなたがやろうとしてる、これが本当に正しい事だとそう思ってい

るんですか!？」

「緑谷少年、正しさだけを追い求めていくと、人の心は死んでいくんだ。

正しい事、間違っていない事。それは確かに大事さ。

だけど、人の尊厳を蔑ろにしてまで、求めるべきものなんだろうか。

緑谷少年、純粹に自由になりたいと願う少女を閉じ込めて、生贄に捧げる。

それが本当に“正義”なのかい？

人類を救うためなら、何をやってもいいと言うのかい？」

オールマイトの疑問に緑谷は答えられない。

答えられるだけの経験を持っていない。オールマイトは構わず言葉を続ける。

「もう私には何が正しく、何が間違っているのか、分からない。

多分最初から分かっていたいなかったんだね。きっと分かっているつもりで、ずっと今ま

で生きてきたんだ。

そうでないと心が持たない。

緑谷少年、殴られると痛いだろう？

それを、私はずっと敵ツイランに対してやってきた。

例え敵ツイランでも、感じる痛みは一緒さ。

君が憧れるヒーローが、敵ツイランにやっている事なんて。



どれ程の美辞麗句で飾ろうが、所詮そんなものさ。

暴力は暴力だ。どこまでいっても醜く汚いものなんだ。

だけど人はそれを称賛する。

暴力を、さも素晴らしい物であるかのように評価するんだ。

だけど、それはヒーロー限定さ。敵が振るう暴力はただの暴力だ。

全く同じ暴力でも、それを受ける人、振るう人で全く違う感想を持つんだ。

私が振るう暴力は、民衆が支持する正義の鉄槌になった。

日常生活で人を殺せば犯罪だけど、戦争で沢山殺せば英雄さ。

人間は忌むべき暴力を、理由や背景次第で簡単に認めてしまうんだ。

君が青の少女を力ずくで抑えようとしているのと同じようにね。

それこそ敵のやつウイランている事と、何の違いが有るんだい？」

「オールマイト……じゃあ、あなたが思う敵とは一体何ですか？」

「……弱者」

「弱者？」

「昔裕福な家庭が敵ウイランに襲われた事件が有った。

敵ウイランは家庭を人質にして、家屋に立てこもっていた。

私はいつものように事件を解決し、称賛された。

一般的な事件さ。特に珍しくとも何ともない。

けれどあの事件はよく覚えている」

オールマイトは遠くを見る目をして語りだした。

「建物に立てこもる敵は一人だった。」

どんな人だったと思う？ いかにも敵らしい見た目の、異形型の敵だサイランと思うかい？

……敵はまだ若い少女だったよ。彼女が要求していた物は何てことない物だった。

ちゃんと飲み水として飲める水に、食料。それだけだった。

サイラン敵はもう、見ていられない程やせ細っていたよ。

もう何日も彼女はろくに食事を取る事すら出来ていなかった。

助けてくれる人もヒーローも何処にも居なかったんだ。

彼女はただ生きるため、飢えを満たすためだけに人を殺す毎日を送っていたんだ」

「……それが……それは……」

「事件で人質にされた家庭には子供がいた。大層お高そうな時計を身につけていてね。

何となく気になって後で調べてみたんだ。ロゴの名前は頭に入っていたから、調べる

ことは簡単だった。

その人質になった子供の時計、幾らだったと思う？」

「……分かりません。でもそれが何だって言うんです」

オールマイトの顔が自嘲的に歪んだ。その笑顔は何処かで見た笑顔を全く同じものだった。

一体それは何処だっただろうか。その残酷な微笑みを見たのは。

「25万だっだよ。親御さんの時計に至っては数百万もするやつだった。

……アメリカだったから正確には円じゃなくドルだね」

「……」

「何てこと無いさ、敵が曲がりなりにも。」

懸命に命もかけて欲しかった物なんて、あの人達からすれば掃いて捨てられる程度のものだった。

ヒーローの権限を使って、その敵の経歴も見た。

それは悲惨な物だったよ。彼女はずっとスラムで育ったんだ。

もちろん、それを言い訳にしている筈がない。

犯罪を犯した以上罰せられるのは当たり前の話さ。

けれどその敵がどれ程もがいても、努力しても。

決して得られなかった大金を、人質の子供は生まれながらに持っていたんだ」

「……それは」

「あの場で本当の弱者だったのは、一体どちらだったんだろうね。」

「……でも、私にそんな敵ウイランに誰も耳を貸そうとはしない。人は弱者の声に耳を傾けようとしな  
い。」

弱者であるが故に、社会が求める正しさについていけずに彼らはこぼれ落ちていく。  
それが敵ウイランという存在の根本さ。

「彼らには力があるから敵ウイランになるんじゃない。」

「敵ウイランにならずに生きていく強さを持たない弱者だからこそ、敵ウイランが敵ウイラン足りうるのさ」

「オールマイト……思い直してください！ 今ならまだ間に合う、早くその子を……」  
「……もう、私は疲れたんだ。放っておいてくれ。」

私は欲しかった。全ての人が笑顔で居られる世界が。

せめて全てと言わずとも、目の届く範囲の人達には笑っていられる世界にしたかっ  
た。

でも、私がヒーローとして活躍すればするほど、社会の歪みは増していった。

人を助ければ助けるほど、助ける為に切り捨てた敵ウイランだけが積みあがっていった。  
敵ウイランと呼ばれる彼らの声を、正義の為だからと言ってねじ伏せて。

社会の歯車に適合できずに、車輪から落ちた者達を、ただただ駆逐し続けた。

本当に助けを求める弱者を虐げて、善良な市民だと名乗る何もしない者達を助け続け  
た。

敵が求める救いは聞こえないふりをした！

なぜって？ ……ヒーローだからさ！

そして、弱者である敵達を積み上げて。私は言った。

私が来たと。私は本当は弱者を救いたかった。

ヒーローになる前は弱者とは、敵に怯える善良な人達なのだと思っていていられた。

圧倒的な強者である敵から、人々を守るのがヒーローなのだと思っていた。

でも違う、強者なんて何処にも居なかった。

戦えば戦う程、この世界には弱者しか居なかったんだ。

過去の私は、さも全てを救ったかのようにヘラヘラ笑っていただけの、道化だった」

「……オールマイト、それでもあなたがやっていた事は間違ひなんかじゃない。

少なくとも多くの方があなたの活躍で救われたんだ。

過去のあなたを！ よりにもよってあなたが馬鹿にしないでください！

戦うだけがヒーローじゃない！ 僕はあなたが——」

助ける姿に憧れた。そう言おうとした緑谷の口は動かなかった。

彼の中で既にオールマイトという憧れは消えかけようとしていた。

「ヒーローなんて所詮、敵と戦うための暴力装置だ。

勿論、他の活動は数ある。けれど敵を討つ、それこそがヒーローの存在意義だ。

それが出来ないヒーローなんて、ヒーローである必要なんてない。

……平和の象徴だなんて私はどうかしていた。

たった一人の人間が平和の象徴だなんて、おこがましいとは思わないか？

平和とは決して一人で作れるものでは無いのに……」

緑谷は立ちあがる。オールマイトが攻撃を加えてくる様子はない。

オールマイトの後ろに居るレギオンは、緑谷を今にも殺すのではないかと思われる顔になっている。

オールマイトは力なく息を吐いた。

彼の情けない姿が、緑谷の中のオールマイトを侮辱したように思えて。緑谷の

「……僕の知っているオールマイトは、世界を滅ぼしてしまう選択なんて絶対にしてない。

こんな事オールマイトは絶対にしてない！

オールマイトが悪に屈する事なんて絶対はない！」

「……オールマイトなら絶対に……か」

彼は緑谷の言葉を聞いて笑う。

「なんて純粹で愚かな……。緑谷少年、“絶対”なんてない。

それは幻想でしかない。

誰だってどんな行動も取り得る。

どんな人間だって善になるし、悪にだってなる。

人には無限の可能性がある、その裏返しだ。

きつと君が見ていた私は、“オールマイト”という“キャラクター”でしかなかったんだね。

でも私は人間だ。“キャラクター”じゃない。八木俊典という一人の人間だ。

何処にでもいる、君らと何も変わらない。

だから全てを捨て去り、あの子を救う選択をしたんだ」

オールマイトの気迫が増した。

緑谷も身構える。先ほどまでの応酬で力量の差は分かっていた。

しかし、引けない。引くわけには行かない。

オールマイトの後ろに居るレギオン。彼女を倒さない限り、人が理不尽に死んでいくのだから。

「行くぞ、緑谷少年」

「いけない！ 緑谷君！」

オールマイトの姿がぶれる。焦った緑谷のアズライトの声が耳に届いた。

だが気付いたら体が宙に浮いている。

緑谷の体はオールマイトの一撃を受けて、吹き飛ばされていた。

地面に叩きつけられ、ぐしやつと鈍い音がした。

「えっ……あ、あああああ！」

痛みが後から遅れてやって来る。打ち付けられた全身が、火に炙られるように熱い。

「これが痛みだ、緑谷少年。私が敵に与え続けてきたものだ。」

彼女が私から受け続けたものだ。

そして——君がヒーローになった時、敵に与え続けていく痛みだ」

オールマイトの言葉がどこか遠い世界の出来事のように思えた。

緑谷の頭にはオールマイトの言葉が入ってこない。

緑谷の頭はまさに痛み支配されていた。



## 第33話

side——青石ヒカル——

深い闇の底に彼女は居た。

ひんやりと冷たい床に、目の前に有るのは檻。

今まではレギオンを閉じ込めていた巨大な檻。だが今は青石ヒカルが閉じ込められている。

それもこれも現実ではない。あくまでも彼女の脳内で展開されているイメージ。

電脳上の出来事であり、“現実”ではない。

レギオンから嫌がらせの様に情報が流されてくる。

青石ヒカルという存在の真相。

青石ヒカルという“キャラ”は、毎日生まれては死んでいた。

外面さえ整えてしまえば、中身<sup>たましい</sup>など誰も目もくれない。

誰もそれに気づかない。本人ですらも、記憶と思考が全く一緒なのだから気付きようがなかった。

ではここにいる“私”とはいったい誰なのか。

彼女は考えるが分からない。

なぜ私は私なのか。

毎日毎日、再構成された“青石ヒカル”という人格が今の彼女だ。

だが今までの記憶はハッキリと思い出せる。相澤さんらとの思い出に、シアンに甘えていた記憶。

教室で授業をうわの空で聞いていた聞いていた記憶。

轟との出会い、過酷だった訓練の日々。

それら全ての記憶は全て彼女自身ではない。

それはかつて存在していた別人の彼女が体験した事実であり、ここにいる青石ヒカルは実際にそれを体験していた訳では無い。

そして最初に思考はループする。

ではここにいる“私”とはいったい誰なのか。

なぜ私は私なのか。

「何やってるんだろボク」

膝を抱えてうずくまる青石ヒカル。

彼女の心に入ってくるのは大量の0と1のデジタルデータ。

それから、今世界中の人間が昏睡病にかかっている事が見える。

人が大勢死んでいく。データとしてまさに今、はつきり見えている。同じ結論がレギオンでも出せている筈。

なのに彼女が止まらないのは何故なのか。

考えてもそれも分からない。

彼女はさきほどレギオンに言った言葉を反復する。

「……夢は結局、夢でしかない。いつまでも夢は見えていられない。

いつか夢から覚めて、現実と向き合わないといけない時が来るんだから。

そう、だから……」

先ほどから何を考えても、何一つ分からない。

自分の事、レギオンの事。今まで分かっているつもりでいた。

自分のことは自分が一番よく知っているつもりでいた。

彼女は分かり合いたかった。出来るだけ多くの人々と。

スターレインの為に死ぬことは覚悟は出来ていた。

ならせめて、己が救う人たちがどのような人達なのか、分かっておきたいと思った。

けれども、そんな考えは傲慢だったのかも知れない。

彼女は他の人はおろか、自分自身のことすら分かっていたのだから。

「ボクは、ボク達は……最初から夢なんて見るべきじゃなかったんだ」

ぼそりと呟いた言葉は闇の中に消えていく。

それを拾う人間など誰も居ない。そう思っていた。だが

「ええ、あなたがそう思ったのならそうなのかも知れないわね。

でもこの子は決して納得していないようだけど」

「えっ……？」

檻の外に人影が現れる。彼女の心象風景に過ぎない筈の空間に、居る筈のない人が姿を現す。

「青ちゃん！」

「お茶子ちゃん!？」

そこにはレギオンとは違うアズライト、それに麗日お茶子が居た。

「どうしてここに……？　ここはあくまでボクの心の中のはず。どうやって……」

「私の力を使ったのよ。アズライトの本来の力。忘れてはいないわよね」

彼女の疑問にアズライトが答える。軍服のような恰好でいて丈の短いスカート。

前に見た緑谷の側に居たアズライトだ。

「……人と人の心を繋ぐ個性。そのための“ 電脳感覚 ” を得る力」

「ええ。麗日さんの脳とあなたの脳を繋げさせてもらった。

結構苦勞したけどね、おかげでだいぶ演算能力を割かざるを得なかったし」

「ごめんね」

緑谷のアズライトに謝る麗日。彼女は手を振って答える。

「いいのいいの。これが私達、本来の使われ方だし。個性冥利に尽きるものよ。

でもあまり時間は残されていない。

麗日さん、後は頼んだわよ」

「うん、任せて」

麗日が頷くと、緑谷のアズライトは闇の向こうに消えた。

麗日が青石ヒカルに向き直る。

互いに檻を境にして向き合った。

二人つきりになり、視線と視線がぶつかる。

「話をしよう、青ちゃん」

……

……

……

side——緑谷出久——

「あああああ!!!」

「緑谷君！」

全身を強く打ち、激しい痛みにも悶える緑谷。緑谷のアズライトが近くに寄る。今度は青い結晶体が全身を包んだ。

肉体をイメージに同化させ、“現実”を彼女が演算する“イメージ”に書き換える。結晶が弾け、そこに現れる元の姿の緑谷。

彼はまた、原子レベルで完璧に復元される。

「オールマイト……オールマイト!!!」

口から怒気と怨嗟の声をまき散らし、再び緑谷はオールマイトに向かっていく。憧れは失望に。尊敬は侮蔑に。

彼の中でオールマイトという偶像が崩れ去り、新たなオールマイトの虚像が生み出される。

がむしやらに拳を振るう。もはや基本としての型も何もない。

気迫こそ籠っている。が、それでは彼には届かない。

「ふんっ」

「ぐっー!」

容易く受け流される攻撃。フェイントも混ぜない直線的な動き。

元々緑谷は格闘技術をかじってすらいない。

格闘技術はおろか、その基礎の体づくりの段階すらも未熟。

長年 敵サイランと戦い死線を潜り抜けてきたオールマイトに、そのような攻撃が通じるはずも無い。

「緑谷少年。君に、なぜ私は力を託してしまったんだろうね。」

君より相応しい人なんて幾らでもいた。

継承者が君でなければならぬ理由なんて、一つとして無いんだ。

ヘドロ事件の後、君に対する違和感はどんどん膨らんでいった。

ヘドロ事件の真相を、隠蔽すると決めたのは私だ。

けれども君は爆豪君に対して、なんの罪悪感を抱いていない様に思えた。

ワザとでないにしても、ヘドロの敵サイランを逃がしてしまった一端に君は関わっていた。そ

れも分かっていた筈なのにね」

「悪いのはヘドロの敵サイランだ！ 僕じゃない！」

緑谷の言葉にオールマイトは返事をしない。

まるで聞こえていないかのように言葉を続ける。

「それでもっと疑問に思った事が有った。」

緑谷少年、君は——何のためにヒーローになりたいんだい？」

「何のためって……なるんですよ！ なりたいんです！ ヒーローに僕は……」

「だから私は聞いているんだ。君は何のためにヒーローになりたいのかい。」

私が聞いているのはヒーローで何をしたいのかという“目的”だよ。ヒーローとは職業。“手段”でしかないのだから。

……ずっと感じていた違和感は、それだったのかもしれない」  
オールマイトの言葉に鼓動が早くなる。ずっと目を背けていた場所が暴かれるような感触。

緑谷の触れられてくれない場所を、彼は言葉で容赦なくえぐる。

「緑谷少年、君はヒーローになって何をしたい？」

何のためにヒーローになりたいんだい？」

「……何のため……？ 僕は、僕はただ……」

分からない。答えられない。

緑谷は努力した。懸命にヒーローを目指して。

けれども“何のために”と改めて聞かれると、途端に分からなくなる。

「君と出会った時の事今でも覚えているよ。

君はこう言った。

個性のない人間でもあなたみたいになれますか？

人を救<sup>たす</sup>けるのつてめちやくちやかっこいいって思うんです、と」

「……そう、言ったかも知れませんが」



「私は今まで君と一緒に居た中で、『救ける事は格好良い』という言葉は何回か聞いた。だけれどね、人を救たすけたいという言葉は一度も聞いた事がない。」

「それが何だつて言うんですか!？」

苛立つ緑谷にオールマイトは見透かしたように。

癩癩を起した子供を諭すように言う。

「きつと君は人を救たすけたいのではない。」

それは君が格好良くなりしたい。

格好良いヒーローであるための『手段』であつて、人を救たすけるといふ『目的』ではない。

君は自分が格好良くあるために、ヒーローになるために、人を救たすけるといふ手段を取るだけだ。

緑谷少年にとって人助けとは、自分が格好良いヒーローであるための『手段』ではない。

最初に出会つた日に私は言つたよ。

人を助ける事に憧れるのなら警察官つて手も有ると。

その時緑谷少年はどんな顔をしていたと思う?」

「……そんなの知る筈無いでしょう!」

緑谷は攻撃するが当たらない。オールマイトは涼やかに余裕をもって回避する。

「君は、きつと——」

「言うな！」

オールマイトの言葉を遮る。裂帛の気合を入れ拳を叩き込む。

ワン・フォー・オールの100%の力を注いだ渾身の一撃。

「っ！」

流石にオールマイトも顔色を変える。

当たりこそはしなかった。

が、その衝撃は彼の後ろのレギオンに襲い掛かって……。

「ふっ……」

彼女が片手を事も無げに振るうと、その衝撃も呆気なく相殺される。

「ねえ、八木さん。もうお話はいいでしょう。」

私退屈だわ。早く外の世界に行きましよう？」

「ああ」

「逃がすわけないだろ！」

ワン・フォー・オールの力をギリギリまで見極めて再び拳を放つ。

だがまたも受け止められた。

緑谷はまだ基本的な体が出来ていない。

いくら衰えたとはいえ、極限まで鍛え上げられたオールマイトに勝てるはずも無かった。

レギオンが閉じていた口を開く。

まるで虫けらを見るかのような目で緑谷を見た。

「ねえ、緑谷君。さつきから鬱陶しいわ。」

いつも思ってたんだけど、オールマイトオールマイトうるさいわよ。

憧れていた人が自分の思ったような人で無かったからと言って、癩癩かんしゃくを起すなんて見苦しいだけだと思わない？

ここに居るこんな人はオールマイトじゃないって、現実逃避しているしているようにしか見えないわよ」

「黙れ!!」

緑谷の言葉にも彼女は「ふふ」とほほ笑む。そして小首をかしげて、頬に人差し指を置く。

「なぜここに居る、ありのままの八木さんを受け入れてあげられないの？

あなた達はどうしてそんなに、“平和の象徴”に縋りつくのかしら？

オールマイトは格好良くないと駄目？

オールマイトは絶対に負けない。絶対に悪に屈しない。どんな時も笑顔で、皆を助けてくれる無敵の存在。

そんな存在じゃなくちゃいけないの？

ふふふ、笑つちやう。本当にそんな存在居る訳ないわ。現実を見てよ。

あなた達がそんな風だから、八木さんは疲れ果ててしまったんじゃない。

もう、ゆつくり休ませてあげてよ」

「うるさい！ 現実が見えていないのは、今もこうやって世界中に死を振りまいている、君の方だろ！」

緑谷の言葉が頭に來たのか、彼女の顔色が変わる。

「そう。よつぽど酷い目に遭いたいのね、あなたは。

私、暴力は嫌いなものよ。どうしてあなたは……あなた達は八木さんと私に暴力を振るわせるのかしら。

理解に苦しむわ」

彼女の周りの空間が殺気で歪む。

緑谷はどんな攻撃が來てもいいよう身構え……

「だーるまさんがころんだ」

「えっ……」

体が浮遊感に包まれ落下する。踏ん張ろうにも踏ん張る両足の感覚がない。もがこうとしても手の感覚も無い。

地面に落ちて横たわる。鮮やかなクローバーから新緑の香りが鼻に届く。視線を動かすと、肩から先が無い。両足も付け根から無くなっている。

「う、あ……あああ！」

「安心して、止血はしてあるわ。それこそ完璧に。だから死にはしない。

でもね、あなたは手足が有ると人に暴力を振るい始めるもの。

そんな危ない人には、手も足も必要ないでしょう？」

声の方を見るとレギオンが緑谷から一瞬で奪った四肢を両手で抱えていた。

次の瞬間その手足は一瞬で燃えて灰になる。

「でも、関係ないわね。緑谷君は緑谷君のアズライトに治して貰えるもの。

あら……そう言えば、緑谷君のアズライトは何処に行ったのかしら？」

緑谷の側からいつの間にかアズライトの姿が消えていた。

一体何処に行ったというのか。

この一分一秒を争うときに、何をしているというのか。

「まあ関係ないわね、じゃあ。八木さん……」

「待てよ」

急激にその場が寒くなった。巨大な冷気がその場を覆う。地面がパキツと音を鳴らしたと思つた瞬間、

「何ッ!?!」

「きやあ!?!」

青の少女とオールマイトは巨大な氷塊に包まれた。

冷え切つた空気の向こう側から話声が聞こえる。

オールマイトと青の少女ではない。

「緑谷。状況はどうなってる。……って見れば分かるな。

ひでえやられようだ」

「おい、クソデク、何ちんたらやってやがる!　ぶつ殺されてえのか糞ナードが!」

「かつちゃん……轟君!」

1-A内で随一の戦闘力を持つた二人が来た。

轟の横に緑谷のアズライトが居る。

彼女は緑谷の様子を見て顔を青くした。

「済まない緑谷君、遅くなつた!」

だるま状態になつた緑谷を誰かが抱えてくれる。

顔を上げると委員長長の飯田だつた。

緑谷のアズライトが側に来る。緑谷は青い光に包まれ、その後一瞬で藍銅鉱に似た石に覆われる。

「ありがとう」

「いいえ、今の私に出来る事はこれくらいしか無いから」

元の手足が復活した緑谷はアズライトに礼を言う。

「かつちゃん、轟君、飯田君、助けに来てくれたんだね。ありがとう！」

緑谷は駆けつけた面々に礼を言う。

「私もいましてよ」

「八百万さん！」

副委員長の八百万も駆けつけていた。先ほどまで一人つきりで戦っていた。

だがクラスでも特に頼りになる仲間たちが来てくれた。

これほど心強い援軍が他に有るだろうか。

今の緑谷には万のヒーロー達より、彼らが頼もしく思えた。

……

……

……

side — 轟焦凍 —

「つ……この程度で倒せるはずねえよな」

轟は苦虫をかみつぶす。それとほぼ同時にオールマイトとレギオンを包む氷塊が砕けた。

一同は咄嗟に距離をおく。

轟にとつてもオールマイトがまさか敵ツライになるとは思っていなかった。

だが全然予想していなかったかと言うとそれも無い。

何しろエンデヴァーというナンバーワンヒーローが長年何を家庭でしてきたのか、それを目の当たりにしていたのだから。

ヒーローも人間だし、間違いを犯す。分かっただけが実際にオールマイトと敵として戦わなければならないとなると、動揺は隠せなかった。

「この子はただ自由になりたいだけなんだ……邪魔をしないでくれ」

「分かっていたが……無傷か」

氷を割って出てきた兩名にダメージは見受けられない。

オールマイトは当然のこととして、レギオンもそうだ。

彼女の個性を“架空ゆめを現実にする個性”とアズライトは言っていた。

セルリアに以前聞いた話とほぼ同じ。制限もあるらしいが、具体的に何が出来ないのか聞けていない。



轟が喋り始める。

「オールマイト。緑谷との会話は、皆聞いていた。

緑谷のアズライトが直接届けてくれていたからな。

青石ヒカルつてのがどんな存在だったのか。

そんな事も全部聞いている」

緑谷が驚いて轟を向く。轟は目配せして同意する。

周囲の生徒も頷く。緑谷が爆豪に目をやると「ケツ」と顔を背けていた。

「……そうか、なら話は早い。そこを退いてくれ」

オールマイトの言葉に轟は首を横に振る。

「そいつを自由にしてやりたいって、あんたの気持ちも分かる。だが……」

「だからと言って、人々の命と生活を犠牲にしてはいけない！」

僕達は人を助ける為のヒーローなのだから！」

轟の言葉を引き継いで飯田が言う。

けれどもオールマイトの意思が変わる気配はない。

轟はオールマイトに言う。

「オールマイト、俺達はそのつをぶつ飛ばして、青石ヒカルを取り戻す。

本来の人格がそいつだとか、そんなの関係ねえ。

俺達にとって、本物の青その少女いはレギオンじゃねえ」  
青の少女の目つきが厳しくなった。

八百万がその視線に負けじと主張する。

「私達にとって本当の青石ヒカルさんとは。

凶々しくて、気まぐれで、空気も読まなくて、授業中も寝てばかりいる。

とても破天荒で、滅茶苦茶で……。

そんな非常識な青石ヒカルさんなのです」

彼女の言葉にオールマイトは激しく言葉を荒げた。

「それは、本当の彼女じゃない！ 本当の彼女は！」

「それが私達にとって本当の“青石ヒカル”なんです！」

例え作られた人格であっても、偽物の心であっても！

私達にとって“ありのままの”姿なんです！

短い間だったけど確かに共に過ごしていた、“本物の”彼女の姿なんです！」

「……！」

オールマイトの言葉を生徒たちは否定する。

オールマイトにとってのありのままの彼女と、生徒たちにとっての青石ヒカルとは全く違う。

「だから取り戻す。そのための敵がナンバーワンヒーローのあんたでも。

……俺たちは、そいつを救う」

「たかが生徒の力で何ができる!？」

「轟君!」

オールマイトが轟の方に向かう。緑谷は焦り声を上げた。

だが轟は落ち着いている。仕込みは既に完了していた。

そして左の力を彼は解放する。

ほうれいねっば  
「膨冷熱波」

「ぐっう!？」

凄まじい爆熱がオールマイトを襲い吹き飛ばす。

先ほどの氷結で冷やされていた大気が、熱で爆発的に膨張したのだ。

轟焦凍の個性“半冷半燃”。今まで使用していたのは左側の氷結の力。

彼は右側の炎の方は水を溶かす時にしか使用せず、忌まわしいものとして封印していた。

その右側の力を解き放つ。

「あんたは言ったな。守りたいものが有るんだと。

俺も同じだ。守りてえものが有る。そのためになら、糞親父の力だって使う。

「あんたが守りてえ青石ヒカルと、俺が取り戻してえ青石ヒカルは違うみたいだけだな」

吹き飛ばされたオールマイト。彼はゆっくりと立ち上がる。

彼の体の端々から蒸気のようなものが吹き上がっていた。

レギオンは冷ややかに生徒たちを見る。

そんな懸命な彼らを嘲笑うかのように彼女は言った。

「本気で私に勝てるなんて思っているの？」

「勝つ……勝ちます！ 勝って一緒に平和な毎日に帰ります！」

宣戦布告を宣言する八百万。

八百万が“創造”で作ったのは銃。

敵が襲撃に使用していたものと同じM16だ。

普段ならもう少し時間がかからないと作れない代物。だがアズライトのサポートにより、生徒たちの個性は大幅に増強されている。

創造の個性で作ったM16を容赦なく発砲する。

「止めて、暴力はいけない事よ。それに効かないと分かっているのかしら？」

彼女が手を前に出すと、銃弾はことごとく見えない壁に縫い止められる。

だがそれは囿。

「あなたは、な——がっ!」

「効いた!」

レギオンの背後に一瞬で回り込んでいたのは飯田。

彼の脚は「青」に光っている。レギオンの後頭部に容赦なく蹴りをくらわしていた。追撃を加えようとするが、それは彼女が少し離れた位置に瞬間移動され回避されてしまう。

レギオンは自らの後頭部に手をやる。彼女の手には血がべつとりついていた。

「ああ、そういう事……。目には目を。「青」には「青」という事ね」

レギオンは傷も一瞬で治してしまふ。

「全く、鬱陶しい……。なんで、なんでよ。」

私はただ自由になりたいだけなのに。八木さんと一緒に幸せに暮らしたいだけなのに!  
に!

どうしてあなた達は邪魔をするの!?! やめてって言うているでしょう!?!」

彼女の激高に生徒たちは怯まない。何を為すべきか。

それを既に胸の内に、迷わないための指針として決めている。

これからする事がどれ程残酷な事であっても、彼らは自分の為、世界の為。そして青石ヒカルを救うため。

成し遂げるのだと決めたのだから。  
だから迷わない。

「行くぞ」

生徒たちとレギオン、オールマイトは激突する。

互いに譲れないものを持ち、守りたいものの為に戦う。

そのため的手段が、どれ程醜く汚らしいものであつたとしても構うことは無い。

お互いが自らの正義の旗を掲げ、命を燃やす。

この場には、ヒーローも敵も居ない。

そこに有るのは、守りたいものを守るため戦う“人間”の姿だった。

## 第34話

side——相澤消太——

「それは、法月の指示か？」

「いいえ、私の独断です。相澤様」

シアンは先ほど口にした。レギオンと共に行く。

彼女は青の少女を、外の世界へ連れ出すつもりだ。

相澤はじろりとシアンを睨む。

シアンは微動だにしなかった。

「それがどういう意味か、分かって言っているんだな？」

「ええ、勿論」

相澤の言葉に、彼女はいつも通りの口調で答える。

だが彼女がやろうとしている事が本当なら、死刑。いやむしろ死刑などでは足りない

程の重罪だ。

当然シアンもその事を理解している。

そしてそれを聞いた相澤が、どういふ対応を取るべきなのか。

それも彼女は理解している。

全てを承知したうえで彼女は相澤に打ち明けた。

つまりそれが意味するものは……。

「俺と一緒に来い。そう言っているのか」

彼女は「はい」と返した。

相澤は天を仰ぐ。

今までの青石ヒカルとの思い出が後から後から湧いてくる。

彼女はずっと自由になりたいと願っていた。

いつも空を見上げ、外の世界へ憧れていた。

しかしこのような形で自由を手に入れることを、青石ヒカルは望んでいない。そのく

らい相澤には分かる。

どこまでも自分勝手でありながら同時に。

世界の為に犠牲になる事を善しとする、天性のお人好しでもあるのだから。

もう一度頭に青石ヒカルを思い描く。

視線を下げると、かつて青石ヒカルだった亡霊が目に入る。

何が正解で、何が不正解なのか。それは誰にも分からない。

相澤は分からないなりに考えぬいて、答えを出した。



「俺は一緒には行けない」

「……それが答えですか」

「ああ」

「そうですか」

彼女は相澤に背を向ける。

その背中に「待て」と声を掛けた。彼女は顔だけこちらに向けてくる。

「本当に、行くつもりか」

「ええ。もつとも、それを彼女達が、本当に望むのであればですが」

「……望んでいるに決まっているだろう。あいつらは」

「いいえ」

シアンは首を横に振った。

「きつとあの子の本当の願いは違います。多分、本人すらも気付いていないのですが。」

まあ気付いていたら、この様な事態にはなっていないかもしれませんし、意味のない話ですが」

「何を言ってるやがる」

「相澤様。あの子の願いが本当は何なのか、分かりませんか？」

「……あの子の本当の願いは、とっくに叶っていたのですよ」

「は……？」

「そして叶えていた本人は気づいていない。

やはり人と人が分かり合うというのは、本当に難しいものなのですね」

シアンが音もなく去っていく。

景色が更に青くなっていく。

青石ヒカルの亡霊はまだそこに居る。

穏やかな表情をたたえ、相澤を見つめていた。

………

………

…

side——青石ヒカル——

話をしようと麗日お茶子は言った。

だが青石ヒカルは何を話したらいいのか分からない。

まごまごしている彼女を見て、麗日はおかしそうに笑った。

「わ、笑わなくなっちゃって……」

「ごめんごめん。でも、いつもの青ちゃんだなあと思って」

「ボクいつもこんな感じなの？」

「そんな感じだよ」

青石ヒカルは不機嫌そうにそっぽを向く。

麗日は何とかクスクス笑いを止めた。真面目な顔に戻って青石に言う。

「昔の話を聞かせてよ」

お茶子の言葉に青石は聞き返す。

「昔の?」

「うん、青ちゃんって全然自分の事話さないからね」

「ボクの話なんて大したこと何もないよ?」

青石の疑問に麗日は強めの口調で返す。

「私が知りたいんだよ。青ちゃんのこと。青ちゃんの事。」

「ちゃんと知っておきたいんだ」

「知ってどうなるの?」

「青ちゃんのことを知れたら私が嬉しい」

「嬉しい? ボクの事を知って」

「友達を知れたら嬉しいのは当然じゃん」

「……分かった。じゃあ……」

……

……

…

side——緑谷出久——

緑谷は生徒達の前衛として前に立つ。

アズライトに治して貰った手足の調子を軽く確かめた。

「どう？」

言葉短く具合を確かめてくる緑谷のアズライト。彼女にまだ名は無い。

緑谷は首を縦に振る。

「問題ない。むしろ絶好調だよ」

「良かった……来るわよ！」

緑谷のアズライトの警告。オールマイトが緑谷の方に突っ込んでくる。

それを見ていると途端に、辺りの景色がゆっくりと見え始めた。

(何だ?)

——緑谷君のフリッカー融合頻度を高くした

(何? その……ふり……)

——フリッカー融合頻度。要は私の力を使って、スローモーションに見える様にした

の

現に周りの皆止まっているように見えるでしょう?

彼女の言う通り、周りの全てが止まっているように見える。だが注意深くよく見ると少しずつ動いている。

つまり緑谷の思考速度が大幅に増しているという事だろう。

(本当だ……凄いい)

——これほどゆっくりに見えたら、経験も技術も関係ないわ。

好きなだけ見てから動くことが、出来るから。でも気を付けて。

あくまで処理しているのはあなたの脳。傷の再生も同じ。

使いすぎると、とんでもない代償を払わないと行けなくなるわよ。

(分かった……あくまで使いどころを考えろって事だね)

——ええ、もっと時間があれば、私の力をもっと使えるのだけど。

まだあなたには力が馴染み切っていない。……非力な私を許して欲しい

緑谷のアズライトの声がゆっくと消えていく。

段々と世界に速度が戻ってくる。

戻りゆく速度の中で緑谷は最適な動きを考え、導き出す。

オールマイトの行動のその先を完全に読み切り、緑谷は

「そっ……！」

「な……！」

完璧なカウンターを繰り出した。緑谷の拳がオールマイトの腹に吸い込まれるようにヒットする。

オールマイトの動画は今まで何度だって見ていた。

彼のパンチや蹴りもこれ程かという程、穴が開くほどに見てきたのだ。

その上でアズライトのサポートが有る。

緑谷はワン・フォー・オールの力をインパクトの瞬間にだけ使用する。

最小限に、そして最大限に。

ワン・フォー・オールの100%を刹那に、緑谷の腕が耐えられる時間の間だけ使用する。

オールマイト自身の速度も乗った緑谷の一撃は、先ほどまでと違い確かな手ごたえを感じた。

「ぐっ……緑谷少年。やるな」

後退したオールマイトの口の端から垂れるのは血。

その確かな成果に、今の緑谷は素直に喜べない。

緑谷の攻撃で、内臓にダメージを受けたのだろう。

コンクリートの建物すらも粉みじんに吹き飛ばし、天候すらも変える力だ。

さっきの緑谷のパンチを、普通の人が食らえば肉片になっている。

先ほどまで自らが受けた痛みを思い出す。殴られるとはどういう事か。痛いとはどういう事なのか改めて思い出す。

確かにオールマイトの言う通り、暴力とは野蛮なものでしかないのかも知れない。

だが、そうする事でしか守れないものが有るから。

例え自らの手が汚れる事になろうとも、人は戦うのだろう。

「僕が今からやろうとしている事は、きつと最低な事なんだろうって思います。

だけどオールマイト。人の命より大事なものなんてない。

「あなたが世界を犠牲にしてまでレギオンを守ろうというのなら……僕はそれを止める！」

「止められるものなら……止めてみる！」

「八木さん！」

レギオンが声を上げる。オールマイトは

「手を出すな！」

「でも！」

「これは私の戦いなんだ。私が戦うべきなんだ。手を出さないでくれ！」

オールマイトの言葉にレギオンが渋々と言った感じに頷く。

「分かったわ……」

「どおこ見てやがる！」

レギオンの背後に回り込んだ爆豪が吼える。

青の少女が爆炎に包まれた。

「オラァ！ 死ね！ 諸悪の根源が！」

連続で爆撃を放つ爆豪。少女は為すすべなく、爆撃を甘んじて受けているように見える。

しかし爆炎の中から、彼女は無傷で現れた。

「セルリアを殺したのはあなただったわね。私、怒っているのよ？」

爆豪君、暴力はいけない事よ」

「がっ!？」

「かつちゃん!？」

レギオンに首根っこを掴まれた爆豪。レギオンはその見た目にそぐわない力で爆豪を片手で捕縛した。

爆豪が必死に抵抗するもまるで小動もしない。

そのまま彼女は爆豪を、地面に叩きつけた。

ぐぎつと鈍く嫌な音がする。爆豪の腕が曲がってはいけない方向にひん曲げられていた。



爆豪は言葉にならない苦悶をもらす。

「ねえ爆豪君。どうして、あなた達は……ヒーローは暴力を振るおうとするのかしら？」

何があなた達を暴力へと駆り立てるのかしら？

痛いでしょう？ 暴力なんてそんなものよ。

肉は抉れて血が流れ、傷跡が残り、時には命すら奪われる。

暴力にはぶつ飛ばす、倒す。色々な表現は有るけどね、どれも一緒。

どんなに優しい言葉で、オブラートに包んでも現実是不変ならない」

「うるせえ……」

額から血を流しながら爆豪は反発する。

「なぜ私の話を聞いてくれないの爆豪君？

何があなたを、そんなに粹がらせるの？

あなたの個性がいけないのかしら。

悪さするのはこの手かしら。……Worm<sup>ワーム</sup>」

彼女は爆豪の両手に手を添える。彼の両腕は黒い球体に飲まれた。

「ぐあああ!!」

「あはははは！ これであなはは、無個性」ね」

黒い球体が消えたそこに爆豪の腕は無い。

彼の両腕は跡形もなく消失してしていた。

「かつちゃん！」

「よそ見とは余裕だな、緑谷少年！」

「！　がはっ！」

爆豪に気を取られた緑谷は、オールマイトの一撃をもらに食らって吹き飛ぶ。

だが直ぐに立ち上がる。緑谷のアズライトがダメージを立ちどころに修復してくれる。

遠くで爆豪に話しかけるレギオンの言葉が聞こえてくる。

「昔教わった事だけどね。」

殴られれば痛い。蹴られても、爪が剥がれても、床に叩きつけられても当然痛い。痛みが生じたその瞬間、頭は痛み支配されるの。

あなた達はそんな当たり前の現実から、なぜ目を逸らすのかしら？

ヒーローはアツくて格好いい？　戦って勝つ姿がそんなに好き？

ヒーローが敵をやっつけるとスツキリして爽快？

あはは……本当に馬鹿ね。

ヒーローがやっている事なんて、そんな最低の事でしかないのに」

「爆豪君！」

「かつちゃん!」

緑谷は爆豪の方に必死に寄ろうとする。だがオールマイトはそんな緑谷の前に立ちふさがる。

「どこを見ている緑谷少年」

「退けよオールマイト!」

「ちいっ!」

焦る生徒達。轟が氷結を放つが彼女には届かない。見えない壁に遮られる。

八百万が放つ銃も通用しない。飯田が先ほどと同じように近づこうとするが。

「何だこれは!」

やはり見えない壁のようなものに遮られる。

レギオンに近づくことが叶わない。

「さっきは油断しちゃったけどね。二度目は無いよ。」

緑谷のアズライトの力を借りても、そもそも脳の演算力が全然違う。

同じ性質の力がぶつかり合ったら、より質の高い方が勝つ。

当たり前の話。この体はアズライトに合わせて最適化されているんだから」

「そう、うまい話はねえか……」

轟が左の力を開放し、身の丈を遥かに超えた莫大な炎が放出される。

その炎を一つにまとめて、凝縮。まるで剣のような形に収まった。

「あら素敵、ヒーローの必殺技とやらかしら？」

「そんな大層なものじゃねえよ」

轟が氷結の能力を使用して地面を滑る様に進む。爆豪をpushさえているレギオンに、一気に肉薄する。

轟はそのまま凝縮された炎を切りつけた。

「ふふ」

「くそっ！」

だがやはり届かない。轟の炎の剣は、彼女に届く寸前で侵入を拒まれる。

彼女は爆豪を足元に跪かせて余裕の笑みを浮かべている。

地面を介して氷結させようとしても拒まれる。

元々世界を救うために作られた力だ。やはり伊達ではない。

また未熟なひよつこが勝てるはずも無い。といっても、緑谷のアズライトに個性を増強されている状態でこれだ。

単純な力ならそこらのプロヒーローなど遙かに上回っているのだが……。

「轟君、止めて。暴力はいけないわ。私は戦いたくなんてないの」

レギオンが歌うように囁く。

「黙れ」

「轟君。青石ヒカルじゃなく、て今の私が本当の私なの。どうして分かってくれないの？」

「黙れ！ お前は本当のお前じゃねえ！」

轟の炎が更に大きく燃え上がる。

剣の形に凝縮していた炎を開放する。

指向性を持たせて爆発的に広がった炎は彼女を包み込む。

「無駄だと分からないのかしら？」

炎の中から現れるのは無傷のレギオン。それと両腕を奪われ弄ばれる爆豪の姿。

「かっちゃん！」

焦る緑谷、だがオールマイトもさる者。中々粘っこく倒れない。

先ほどより体から蒸気のようなものが吹き出ている。限界時間が近い証だ。

だが未だマッスルフォームを保っているのはその気力ゆえか。

彼から凄まじいまでの執念を感じる。

「緑谷君、ここは俺に任せろ！」

飯田が緑谷の元に来た。

「飯田君！」

「爆豪君を頼む。俺たちがやるべきは青石ヒカル君を正気に戻す事だ。忘れないでくれ」

「でも、相手がオールマイトじゃ」

「俺でも時間稼ぎくらいはして見せるさ。行ってくれ緑谷君」

緑谷はオールマイトを視界に収めながら、飯田の方を伺う。

飯田が無言で頷く。緑谷は爆豪がレギオンに嬲られている光景を見て

「ゾめんー！」

そちらの方に駆け出した。緑谷に行こうとするオールマイトは飯田が抑えてくれている。

「待てー！」

背後からオールマイトの声が聞こえるが無視する。

地面に転がされている爆豪の方へと駆け出す。

「あはは、どう？ 痛いかしら爆豪君？。」

でもね、私やセルリアが感じた痛みはこんなものじゃないよ？」

レギオンが再び腕を振るう。今度は黒い球体が爆豪の両足を包んだ。

そして数秒後に両足がなくなった爆豪の姿。

両手両足が奪われた爆豪の腹を、レギオンは思い切り蹴りこむ。

爆豪は痛みに悶絶している。

「どう？ 爆力はいけないんだって分かるでしょう？」

暴力はいけないなどと言う彼女が、爆豪をいたぶる姿は醜悪で異様な光景だった。

「やめろ！」

緑谷はワン・フォー・オールの力でレギオンの顔面目掛けて殴りかかった。

薄ら笑いを浮かべる彼女。拳はやはり彼女の寸前で停止する。

「緑谷君」

彼女は目をつむり、子供をあやすような口調で緑谷に話しかけてくる。

「殴ってはいけないわ。爆力はいけない事よ」

「どの口が！」

爆豪を散々痛めつけておいてと緑谷は怒る。

緑谷の瞳に「青」の炎が灯る。

彼女を覆う障壁。それが邪魔で彼女には攻撃が届かない。

「——なら！」

（アズライト——腕の修復の準備を！）

——何をするつもり？

（いいから！）

「まずはー！」

緑谷はワン・フォー・オールの力を100%で障壁に放った。右腕がうなり凄まじい轟音が響く。

音速を超えた拳がソニックブームを引き起こした。

だがそのパンチを放った腕は見るも無残な、血だらけの肉になっている。

「暴力は止めて……効かないと言っているでしょう！」

「そうかな!？」

自らの力で自壊して、激痛に苛まれる腕が結晶に包まれる。それを再び緑谷は構える。

放たれた拳が「青」の光を放ち、再びレギオンが張っている障壁にぶち当たる。

「あああああ!!」

両腕で猛然とラッシュをかける緑谷。障壁に当たっては砕け、当たっては砕け。

自壊する度再生する。痛みなど知らない。

全ての繰り出す攻撃が真正正銘の100%。もしくは、それ以上の力を込めて繰り出す。

「っ！ まさか……このまま強引に突破するつもり!？」

「そのまさかさー！」



緑谷の限界を超えた攻撃。

放つ度拳が砕けるが、強引に腕をアズライトにより再構成。

再生された腕を再び障壁にぶつけていく。それを一秒の間に何十回と繰り返す。

その一撃一撃が全盛期のオールライト以上の破壊力。

それは本来、緑谷が長年の修練の先に到達できるはずの領域。

そこに緑谷のアズライトの力借りて強引に踏み込む。

拳と腕が弾けるたびに襲い掛かる激痛。それが一秒の間に何十回と緑谷に降りかかる。

それを尋常ではない精神力で無理やり抑え込む。

自然と表情は笑顔になる。踏み出す足に力を籠める。

ありつたけの気合が入った咆哮を上げた。

「あああああ!!!」

「止めて! 緑谷君、暴力はいけない事よ!

無駄! そんな事をしてても無駄なの! あなたが、傷つくだけよ!」

「今更! 何を言ったところで! 止まるものか!」

「やらせるか!」

遠くでオールライトが緑谷に来ようとするが

「行かせねえよ」

轟がカバーに入る。

「頼む！ 緑谷君！ 青石君を解放してやってくれ！」

飯田も立ちほだかる。

「お願いします緑谷さん！」

自らがの力で吹き荒れる風の向こうから、仲間たちの声援が聞こえる。

彼女の張っている壁を少しずつ削り取っていく。

痛みで既に頭は朦朧としている。

普通ならただの一度でひっくり返る痛み。それを何百何千と受けている。

限界などとづくに過ぎていた。

だが緑谷は倒れない。倒れる訳には行かない。

だから緑谷は倒れない。

そうしなければならないと、緑谷は感じている。

そして、それは誰よりも、目の前のレギオン自身が望んでいる。

なぜか緑谷はそう確信していた。

レギオンの「青」と緑谷のアズライトの「青」が激しくぶつかり、混ざり合う。

互いの思いが響き共鳴していく。

緑谷は自らの中、何かが目覚める感覚を覚える。

限界を超えたその先で、緑谷の個性が新たな力に目覚めていく。

「頼むアズライト！ 僕達の思いを、届けさせてくれ！」

——ええ！

緑谷の目に宿る光が強くなる。強く、より強く。

「……なに？ 何なの？ 知らない！ こんな力……私は知らない！」

「まさか……これは……緑谷少年！」

レギオンの焦る声。オールマイトは何かに勘づいたのだろうか。大声を上げる。

だがそれに戦意は感じない。

「温かい……なんて優しい光……」

ワン・フォー・オールが更に輝きを放っていく。

「声が……聞こえる」

緑谷のアズライトが心を繋げ、それが緑谷の中に流れ込んでいく。

轟の過去が、飯田の思いが、八百万の覚悟を感じる。

ワン・フォー・オール。それは力をストックする個性。

そしてストックする力は単純な“力”だけに留まらない。

それを緑谷は知っている訳では無い。だが肌で感じていた。

今の緑谷には分かる。この個性は緑谷一人だけのものではない。

歴代の継承者が紡いで繋げて来たものだ。その願いの欠片も、この個性の中には宿っている。

そしてアズライトの個性すら、ワン・フォー・オールの中にストックされ蓄積されていく。

全てが一つになる。

拳を叩きつけているのは緑谷。だが戦っているのは彼一人ではない。

目に見えない数多くの人達も、一緒に戦ってくれている。

その思いが伝わる。

思いを繋げる個性。分かり合うための力。

皮肉な事にそれは対話ではなく、この戦いの場で目覚めようとしている。

(分かる……感じる……。皆の思いが。オールマイイトの思いも！)

——緑谷。

轟の声か

——緑谷君。

飯田の思い

——緑谷さん。

八百万の願い

——デク!

爆豪の素直でない声援が

——デク君!

何処からか麗日の声も

——緑谷少年……

そしてオールマイイトの気持ち分かる。

(みんな同じなんだ。皆この子を……)

緑谷の中のワン・フォー・オール。

アズライトで繋げた思いを積み上げる。

アズライトの力。

人の為に、誰かの為に。

互いを分かり合うための個性。それがワン・フォー・オールに触発されて目覚める。

ワン・フォー・オールのもアズライトにより導かれて、新たな力に覚醒していく。

二つの個性が混ざり合い、世界の何処にもない力が生まれる。

未来を切り開く力。法月達が予想もしていない希望が。

心に、抱えきれない想いが溢れる。

皆の願いが力に変わる。なんでも出来る。

どこまでも行ける。更に向こうへ。

人が誰かの為にと願う気持ち、光になって広がっていく。

緑谷とそのアズライトは、共に新たな扉を開いていく。

ビシツと障壁にひびが入った。

互いを隔てる見えない透明な壁が音を立てて崩れていく。

「嘘ッ!? 何この力は? これど程の力があなたの何処から……」

「僕だけの力じゃない! 僕一人だけでは適わなかった!

だけど、皆が居るから、僕達はまた戦える。

一人じゃないから立ち上がれる!」

辺りを緑谷から解き放たれた光が満たす。

人の為に、誰かの為に。

人と人の心をつなぐ光。アズライトの新たなステージ。

人と人をアズライトが繋ぎ、ワン・フォー・オールがその思いを積み上げる。

分かり合うための個性はワン・フォー・オールと混ざり合い、新たな力に生まれ変わった。

「……一人じゃない? ……ふざけないでよ!

人は一人よ！ 本当は、誰とも分かり合えない！ 誰も私を理解してくれない！」

「じゃあ君のその夢は一体何なんだ!？」

「……!？」

レギオンの目が見開かれる。

「君が言いたいことは分かる！ 君が受けてきた苦しきも！」

確かにヒーローがやっている事は最低な事なのかもしれない！

だけど！ それは、敵ツライのものとは全然違う！」

「……あなたは、あなた達は何を知りたいの!？」

「皆、同じさ！」

ゆっくりと流れる視界の中で、青の少女の表情が見える。

世界中に被害をもたらしている青の少女。

作られて閉じ込められて、利用された末に殺される少女。

レギオンと呼ばれる彼女は何処かで見えた事があるものだった。

それはいつの日かの、ヘドロ事件の時にも見た顔。

ひび割れた透明な壁の向こうの彼女は——救たすけを求め顔をしていた。

「君を——救たすけたいんだ！」

——ずっとその言葉が、欲しかった。

(…………えっ?)

緑谷のフリッカー融合頻度が急激に高まっていく。

全ての景色が「青」から解放されていく。

ゆっくりになった時間の中、周囲の風景は止まる。

二人の間に隔たる心の距離が0になる。

アズライトとアズライトの力が衝突し、本来の力が発揮されていく。

人の心と心を繋ぐ個性。

それは人が互いを理解し合えるように。

周囲が真っ白に染め上げられて、二人きりの空間に変貌した。

緑谷の拳がぼろぼろになった障壁に突き刺さった。

彼女の壁は最後の一撃で、ガラスが割れたかのように崩壊する。

「ああ……」

レギオンが己に降りかかるであろう拳に怯え、体を抱いている。

緑谷は周囲を見る。

先ほどもまで周りに居たはずの、轟達や、オールマイトは何処にも居ない。

何もかもが真っ白に染め上げられた部屋。

生活する上で最低限のものしかない無機質な空間。彼女が育った部屋。



「ここが、彼女にとっての世界の全てだった。

「君は——寂しかったんだね」

緑谷の言葉にレギオンが黙って頷く。

彼女はいつの間にか、小さな子供の姿になっていた。

それは緑谷のアズライトに見せられた記憶の時と同じ。

オールマイトに痛めつけられた時と、同じくらいの年齢の姿だ。

これが彼女の本当の姿なのだろう。

きつと彼女はオールマイトと分かれた時から、全く変化していなかった。

むしろ変化していけないと思っていたのだろう。

ずっと胸に抱いていた思いが色褪せないように。

「……本当は、ずっと分かっていた」

レギオンは涙声でしゃくり上げる。涙を必死に堪えて顔を両手で覆っている。

「私の力が人は受け入れられないって、ずっと知っていた。

でも私、ずつとなりたかった。人の為に、誰かの為に。

——私はヒーローになりたかった」

彼女が張っていた透明な壁。それは彼女自身の心の壁。

なぜ、緑谷の拳で壁が砕けていったのか、何となく分かった気がした。

本来彼女の力なら緑谷に障壁を突破など出来る筈もなかった。

けれど実際には壁は壊れた。きつと彼女は、緑谷の拳が傷つくのを、見ていられたかったのだ。

だから、障壁を崩す事にした。

そうしなければ緑谷が壁に拳を打ち続け。傷つく時間だけが増えていくだけだったのだから。

それに彼女が気付いていたか、それは定かではないが。

何のことは無い。彼女は最初から最後まで同じだった。

人の為に、誰かの為に。そう信じてずっと彼女は生きてきたのだから。

彼女は彼女なりに本気だった。

ただ不幸だったのは、その力故に誰にも理解される事なく。

誰からも愛を貰えることも無く。

人の為に、誰かの為に。

具体的にどうすれば良いのか、誰にも教えてもらえなかった事か。

彼女は、誰かの側に居たかった。

本当の彼女の願いはきつとそれ。

彼女はただの、寂しがり屋だったのだろう。

「君にとつて、ヒーローとはどんな存在だった？」

緑谷の質問に彼女は少しの間考える。

嗚咽はまだ収まらずずっとしゃくり上げている。

そしてぼそりと呟いた。

「そばに、いてくれる人」

彼女の言葉と同時に、景色が一変する。

緑谷とレギオンは巨大な檻の中に居た。

「デク君!？」

「う、麗日さん!? どうしてここに……」

共に驚く麗日と青石ヒカル。

麗日の隣には、青石ヒカルの姿があつた。

いつものように青い髪、白いワンピース。

彼女は幼いレギオンの元に歩み寄ると

「痛っ」

一つ頬を叩いた。

その後、優しく抱きしめる。

「君は……ううん、ボク達は謝っても許されない事をしたんだ」

「……うん」

「これから先どんな事をしても償えることは無いんだ。決して許されないんだ」

「……うん」

幼い青の少女が、青石ヒカルの胸の中で涙を流す。

「だけど、ごめんね」

「どうして？」

青石ヒカルの言葉にレギオンが戸惑う。

青石ヒカルもレギオンと同じく涙を流している。

「ずっと君の事が分からなかった。ずっとボクは君がいるせいで閉じ込められて。

世界も危機に陥れて、そう思っていて。ずっと憎んでいた。

ボクは君の事を理解するのを諦めていた」

「……私、私はね！　ずっと寂しかった……ずっと誰かに側に居てほしかった！

でも……」

「うん、人は死んだ」

彼女たちはただお互いに抱きしめ合う。

麗日が緑谷の元に来た。

「デク君はどうやってここに？」

「分からない。でも、きつとアズライトが連れてきてくれたんだ」

「そっか」

「うん」

交わす言葉は短く少ない。だがそれでいいと緑谷は思う。

青石ヒカルと麗日お茶子。彼女たちはきつとここで散々話し合ったのだろう。

互いに分かり合うために。

「緑谷君、お茶子ちゃん」

青石ヒカルがレギオンの手を引いてこちらに来る。

レギオンは、まだ泣き止んでいない。

自らが引き起こした惨事がどれほどの物か、既に彼女は理解している。

「もう、世界で死人は出ないよ。今頃世界は元通りの色を取り戻している」

「良かった」

安どする緑谷。

「だけど」

短くそれでいて強く言葉を切る青石ヒカル。

「死んだ人間は蘇らない。これは世界における絶対的な真実だよ」

「生き返らせる事は出来んの？ 何でも出来る個性なのには？」

麗日の質問に青の少女は、二人とも首を横に振る。

「出来るけど、出来ない。それをしてはいけない」

「なんで……」

緑谷の疑問に青石ヒカルが答える。

「例えば、緑谷君が死んだとして。それを私が蘇らせたとするね。

だけどそこに蘇るのは、今ここに居るあなたじゃないの。

あなたと同じ記憶と思考を持った別人が生まれるだけ。

あなたが死んだとき、決してあなた自身が蘇ることは出来ない。

存在と無の地平。それを超えた暗闇の向こうに落ちた意識は、二度と元には戻らな

い」

「私達の力で出来るのは、死者の蘇生じゃないの。

出来るのは死んだ人と同じ思考。同じ記憶をもつ別人を作る事。

それを死者の復活と言っているのか、私には分からない」

レギオンの表情から何かを読み取ろうとしたが、緑谷には分からない。

彼女はどうするべきなのか、まだ決めかねているように見える。

「緑谷君、麗日さん。それでもいいのなら。私達は出来る。」

死んだ人と同じ思考。同じ記憶をもつ別人を作れば。

第三者から見たらまさに、死者の復活と見分けはつかない。

例えばたましい中身が、別人であったのだとしても。

……今回、私のせいで日本国内では半分の人が、国外では90%以上の人が死んだ。それらの人達全員が復活したように見えたのなら、世界はそれを奇跡だと呼ぶでしょう」

「……それは」

「私達は個性。人工個性A z u r i t eアズライト。

人の為に、誰かの為に。その為に存在する個性。

だからそれをするかどうか。それは人間である二人の判断に任せるね」

「……麗日さん」

「私の中でどうするかは決まったよ」

「僕も決まった」

「じゃあ……」

「うん……僕たちは——」

## 第二章

## 第35話

「皆、朝のH Rホームルームが始まる！ 席につけー！」

飯田が教壇で大声を張る。

「ついでるよ、ついでねーのお前だけだ」

呆れた生徒からの突っ込みが入った。

「すぴーすぴー」

「こらー！ 青石君！ 居眠りするなー起きろー！」

飯田から青石ヒカルに注意が飛ぶ。彼女は構わず寝続けている。

「起きろ馬鹿野郎」

「ぎゃわっ!？」

眠りこけていた青石ヒカルは、相澤に鉄拳制裁を受ける。

教室が笑いに包まれる中、ジト目で青石ヒカルは相澤を見た。

「ううー！ 相澤さんのばかあ……」

相澤は相手にせずに飯田に指示を出す。



「飯田、席につけ」

「無視しないでよー!」

だがやはり相手にしない相澤。ジロリと青石は睨まれて縮こまる。

「……朝のH Rホームルームを始める」

「はーい」

気の抜けた返事を青石は返した。

そのまま相澤により朝のH Rホームルームが開始される。

何とも無しに窓から空を見上げる。

今日も空は快晴で、晴れ晴れとした天気だった。

教壇の方を向いた彼女は、今度は自分の服装を見てニマニマしている。

彼女が今に着用している服は白のワンピースではない。

そこには雄英の制服姿の青の少女の姿があった。

——ふああ。退屈よねえ?

青石ヒカルの隣に、今はすっかり大人しくなったレギオンが姿を現す。

彼女レギオンの姿が見えるのは、自分と一部の生徒だけ。

一連の事件でレギオンは、自らの危険性を認識してくれた。

レギオンと青石ヒカルは今共存して生活を送っている。

互いに分かり合う事が出来たのだ。

緑谷の席に視線を移す。

緑谷のアズライトが意味ありげにウインクしてくる。それに青石ヒカルは小さく手を振って応えた。

クラス中をそれとなく見渡す。

セルリアは、残念ながら犠牲になってしまった。だからと言って、彼女の死が無駄になつたとは思わない。

セルリアの青石ヒカルを助けたいという心は、確かに自分の心を揺り動かしてくれたのだと確信している。

残念に思っている事は確かだ。けれども、それ以外の世界中の全ての人間は無事に生還した。

本当にそれを生還だと認めるかどうかは、葛藤している部分もある。

きつとそれは一生悩んでいく事になるのだろう。

だがそれはそれとして、青石ヒカルは改めて、この奇跡のような結果に感謝する。

自分一人では到底到達しえなかつた。

轟に飯田、八百万。そして緑谷出久といった助けが有つてたどり着くことが来たのだ。

英雄のウソの災害や事故ルームで起きた一連の騒動。

時間にすると、ものの一時間も経たないうちに終了した。

全世界が「青」に飲まれ、次々に人が昏睡病に倒れる惨事。

だが奇跡的に、昏睡病にかかった人は、全員意識を取り戻した。

事件が経って早三日経ったが、昏睡病から回復していない人は一人として報告されていない。

一旦は絶望の淵に追いやられた人類ではあったが、幸い死者の一人も出すことなく、事なきを得た。

様々な乗り物の運転手が昏睡病で意識喪失し、大規模な被害が予想されていたのだが、結果事故も0。

世界の乗り物は自動的かつ安全に運行されていて、二次的な被害すらも起きていない。

これは奇跡だと人々は口々に言う、まるで神が手を差し伸べたかのようだ。

もちろん、これらの事実は今世界中の話の種だ。

テレビを付けると専らこの話ばかりしている。

衝撃的かつ謎に満ちたこの出来事は、長く語り継がれていく事になる。

世界は緩やかに「青」から元の色へと戻り、人々はいつもの日常へと帰っていた。

……。

雄英の校舎の一角。校長室の隣。

高等尋問官、法月将臣の執務室。そこで一人の女が男に報告していた。

女はメイド服を身にまとっている。

だがいつもはきちんとしているメイド服も少しくたびれていた。

顔色もよくなり、目の下に隈が出来ている。

「……以上となります」

「ご苦労」

「法月様……」

「何だシアン。何か言いたいことが有るか」

「いえ、その。……私を罰しなくてよろしかったのですか」

「……レギオンの元へたどり着いた時には、既に事態は収拾されていた。そうだな」

「ええ」

「ならば何の問題もあるまい。お前に与えた指示は、あくまでやむを得ず緊急措置として与えたものだ。

好き好んであのような指示を出しはせん」

「それは……承知しております」

「お前は事態を見極めたうえで正確に対処した。

現に今回の事案で犠牲になったものは、一人としておらん。

最高の結果を得ることが出来た。なぜ文句のつけようがあるうか」

「……出過ぎた真似をお許しください」

「よい、今の私は実に気分が良い」

「はあ……」

法月はいつもは見せないような笑みを浮かべて、椅子にどっぷり腰かけた。

疲労が溜まっているのだろう。

今回の騒動で様々な対処に出ざるを得なかった。ろくに寝ていない筈だ。

それにしても法月にしては、浮かれているようにシアンからは見える。

もともと世界中が今お祭り騒ぎ状態なのであるが。

世界の終わりが訪れたかと思つたら、まるで神の御業としか思えないような奇跡の  
数々。

一人として目覚める事がなかった昏睡病。それから全員が生還したのだ。

だがここに居る二人は、その生還の真実を知っている数少ない人物だ。

それは極秘事項だし、そうでなかったにしても言いふらす事は出来ない。

シアンは生きて帰れて喜ぶ人に、そんな残酷な真実を突きつけるような人物ではな

い。

それにしても法月の機嫌の良さは少し異常だ。

これほどまでに笑いをこらえきれない彼を見たのは、初めてだ。

「ふふふふ、はははは！」

もはや計画すらも必要ない！

後はレギオンが敵性存在にならぬよう刺激せず、注意して監視を行えばいい！

人類の未来は拓けた……ふはははははは！」

笑いをこらえ切れずに高笑いをする法月。

それを見てシアンは明日は槍でも振ってくるかも知れないと、心配になった。

……。

相澤の元で朝のH Rはつつがなく進行している。

幾つか重要な知らせなどが有ったが、青石ヒカルは聞いていない。

どうせ相澤が保護者代わりに把握しているから、問題は無いのだが。

そしてH Rの終わりが。

「そしてだ——雄英体育祭が迫ってる！」

相澤の言葉に教室中が沸騰した。

「クソ学校っばいの来たあああ!!」

周りの生徒達は好き勝手に、周りの生徒達と会話を繰り返している。

だが青石ヒカルはイマイチ理解できていない。

「雄英体育祭……つてなに？」

「知らねえのかよ……つてそうか……」

切島がツッコミを入れた直後、一人で納得している。

箱口令こそ敷いているが、青石ヒカルの大体の事情をI—Aのクラスメイト達は把握している。

相澤の判断と本人の希望で、話せる範囲で話したのだ。

中には十年前の災厄で、身内が被害に遭った生徒も居た。

複雑な気持ちではある。真実を知り、生徒も少なからず青石を憎んでいる。

けれども話してよかった。そう青石ヒカルは感じていた。

憎しみが籠った視線が向けられることも有るが、我慢する。

それだけの事をしてしまったのだと、自覚を彼女は持っている。

真実を知ったうえで友達になってくれた存在も居る。

飯田、八百万、緑谷。そして轟と麗日。

特にこの五人とは他の生徒達とは、一線を画す程親密な関係になれた。

彼らは全てを知ったうえで、青石を受け入れてくれている。これほど嬉しい事がある

うか。

何はともあれ、雄英体育祭とやらに彼女の思考は移る。

彼女が小首をかしている

「ウチの体育祭は日本のビッグイベントの一つだ。

かつてはオリンピックがスポーツの祭典と呼ばれて、熱狂されていた。

が、形骸化している。そこでかつてのオリンピックに代わるのが、この雄英体育祭だ」

相澤が知らない青石にかいつまんで説明してくれた。

彼女はうんうん頷いて、分かったかのように振舞っている。

実際に分かっているかは、実に怪しいものだ。

「青石、つまりどういう事か分かるか？」

相澤が試しに理解しているか、軽く聞いてみる。

彼女は……。

「つまり……すつごいのをやるって事だね！」

「……まあそれでいいか」

相澤はどうやら妥協したらしい。

「全国のヒーローも見ますのよ、スカウト目的だね」

八百万が更に補足する。相澤はその言葉に頷く。



「そうだ、プロに見込まれれば……その場で将来の道が拓けるわけだ」  
相澤の言葉に青石は少しだけ引っかけかりを覚えた。

（将来……将来……？。でもボクはスターレインを処理した後、死ぬんだから将来なんて。）

あれ？ でもそれってレギオンが危険な存在って前提の話……。

レギオンはもう危険じゃない。だからこうして制服を着られる訳で……。

という事はレギオンが危険じゃないって事は法月も認めてるって事？

じゃあ、スターレインの後ボクは……)

一体どんな将来を進めばいいんだろう。彼女の中に言いようのない不安が満ちる。

先が有るなんて考えていなかった。スターレインが終わったら後は死ぬだけだった。

全て人生はレールに乗せられていて、そのレールに沿って進めばそれで良かった。

「年に一回、在籍中三回しか来ないチャンス。

ヒーローを志すのなら絶対に外せないイベントだ！」

相澤の言葉もうわの空で聞いている。青石ヒカルの頭の中は“将来”についての不安に占められていた。

（スターレインを迎撃し終わっちゃった後。ボクが生まれてきた存在意義が無くなる。

そしたらボクは、ボクは……一体どうしたらいいのかな？

ボクは何をしたらいいんだろう？　ボクは——)

彼女は完全では無いが、自由”を手に入れたが故の悩みを、抱えつつあった。

(ボクは——何になりたいんだろう?)

## 第36話

雄英は昼休みの時間。

青石ヒカルは緑谷と飯田、それと麗日に挟まれて食堂へと向かっていた。

「お金!? お金が欲しいからヒーローに?」

「究極的に言えば」

「……ふーん?」

「なんかごめんね。飯田君とか立派な動機なのに、私恥ずかしい」

麗日はきまり悪そうにしている。だが青石ヒカルは彼女の動機の何処が恥ずかしいのか分からない。

一応お金がどういうものなのか、基礎知識は教わっている。

だが実際に使った経験は殆どない。

唯一の使った経験。それは入学初日に、自販機で大量に買い込んだ時だけだ。

未だにその時の話は、幾度となく蒸し返される。

爆豪にも未だに“自販機女”と言われ続けていた。

多分その話は、一生ついて回るのだろう。

「でもお金って、生きていくうえで必要不可欠……なんでしょ？」

青石は素直に思つた事を口にする。

その疑問に麗日は「まあ、そうなんだけどね」と歯切れ悪く返す。

「だったら何がいけないの？」

「青石さん、世間にお金にがめつい人は……」

その……汚い人だという風潮が有るんだ」

「へーそうなの。知らなかつたなあ」

緑谷の言葉にきよんとする。

彼女の世間知らずな一面を、また一同は知つた。

「まあずつと閉じ込められて生活していたら、仕方ないよ」

緑谷がフオローする。麗日は依然として恥ずかしそうにしていた。

「生活の為に目標を掲げる事の何が立派でない？ 誇つていいと思うぞ！」

飯田の励ましも、あまり効いていないように見える。

生活するうえで、お金が必要。だからお金を稼ぐためにヒーローになる。

単純で当たり前の動機じゃないか。そう青石は思う。

なのに、何がそんなに後ろめたいのか。青石は分からない。

「お茶子ちゃんは、何のためにお金が欲しいの？」

青石は次に疑問に思った事を聞く。

「ウチ……」

麗日は喋り始める。

なんでも麗日の家は建設会社を営んでいるそうだ。

だが全然収益が振るわず、貧しい生活を余儀なくされている。

そんな両親のになりたい。麗日の“個性”なら仕事を手伝えると、両親に言った。だが断わられてしまったらしい。

それよりも、夢であるヒーローになってくれた方が嬉しいと、両親はそう言ったそう  
だ。

「私は絶対ヒーローになってお金稼いで、父ちゃんと母ちゃんに楽しませたげるんだ」  
話しているうちに彼女は自身が出てきたのだろうか。

さつきより迷いのない目になっていた。

「麗日君……！ ブラボー！」

飯田は酷く感激したようだ。

「……お茶子ちゃん、凄いな。ボクにはとても真似できそうにないや」

「えっ、そんな事ないって！ そんな事……」

麗日が言いかけた矢先、一同の前にぬつと姿を現した。

ただでさえ痩せていた頬が更に痩せこけている。  
疲れ切った顔の奥で光る眼。

それは一般的に知られている彼の姿からはかけ離れている。

「オールマイト……！」

緑谷は警戒を顕わにする。麗日と飯田も同様だ。

彼らは一連の騒動の後、オールマイトのトゥルーフォームを目撃している。  
辺りに人影はない。

今の彼はいったい何をしでかすのか、分からない。

そう思えてならない。緑谷達は不信感にかられていた。

「大丈夫だよ、皆。……全てじゃ無いけど、この人とも分かり合えたから」

オールマイトの視線は、真つすぐ青石ヒカルに向いている。

「ついて来てほしい」

「良いよ、八木さん」

彼女は気軽に返事をした。

「けど青ちゃん！ この人は……」

「大丈夫、お茶子ちゃん。大丈夫だから」

麗日の心配そうな顔に青石は、あくまで笑顔で応じる。

特に作った顔でもなく自然な表情。

麗日達を置いて、青石はオールマイトと共に別の場所へと向かっていく。生徒たちは黙って彼女の背中を見送った。

……。

「じゃあ、始めようか」

「あの……ボク何のために呼ばれたんでしょうか」

青石ヒカルが連れてこられたのは職員室だった。

教職員が一堂に会している。

彼らはそれぞれ教師であるが、同時に一流のヒーローだ。

ヒーローオタクの緑谷が、ここに居たら興奮しっぱなしだっただろう。

青石ヒカルの隣に座るのは、当然の様に相澤消太。

彼女を連れてきたオールマイトは対面の斜め向こう。彼女から一番遠い場所に座っている。

根津は「ははは！」と笑いながら口を開いた。

「ここに来てもらった理由は一つ。」

今回の議題、話の中心はまさに君の事だからさ。

相澤先生から雄英体育祭についての話は聞いただろうか？

朝のH Rホームルームで話が有つたはずさ」

「はい、それは……」

聞いています、と続けながらも、やはり気になるのはオールマイトの事。

彼は何食わぬ顔で席に座っている。

他の教師陣も、彼に特に敵意を向けている様子はない。

彼女はそこに違和感を覚えた。

彼女自身、オールマイトの扱いがどうなっているのか知らない。

レギオンが巻き起こした事件。その時、彼がどんな言動をしたのか。

それは緑谷達によって、とつくに把握されている筈だ。

高等尋問官、法月将臣には。

レギオンを救おうとするあまり、彼は世界を犠牲にする選択をした。

緑谷達の働きの甲斐あつて、結果こそ世界は滅びなかつた。

だが彼が、彼女を救い、世界を滅ぼす選択を自ら選んだ。それは紛れもない事実。

（「平和の象徴」がそんな選択をした、そんな事実は都合がよくない。

だから隠しているという事？ 仮にもオールマイトが一時的と言え敵ライオンなつた。

そんな事実が知られたら、「平和の象徴」が崩れる。きつとみんな不安になつて、治

安も悪くなる。



そうならないように、隠蔽している……? )

——八木さん、あまり元気ないみたい。……きつと私のせいね。隣にレギオンがうつすら姿を現す。

元気がないと心配するレギオンの方が、よっぽど元気が無いように見える。

(体、借りる?)

——いいわ、顔を見ただけで充分よ。ありがとう。

今では青石ヒカルとレギオン。それぞれ互いに尊重できる関係を築いている。

気軽に体の主導権を貸し借りできる程の中になれた。

どちらが本物でどちらが偽物とかではない。

両方とも本物の青の少女<sup>しぶん</sup>。それが彼女達がたどり着いた答えだ。

そんな時

「あいたー!」

相澤からげんこつが落とされる。

「人の顔をジロジロ見るんじゃない」

相澤から怒られてしまう。

「はは……そう言えば昼休みだったね」

根津は微笑ましく彼女らを見て言う。

「ほら、いつものご飯を食べながら、聞いているといいよ」

根津から今日の昼の分のご飯を渡される。

ご飯と言つても見た目はドッグフードそっくりの合成食品。

彼女専用の食事。

彼女以外、一度食べたなら二度と食べたくないであろう。それほど激マズ食品だ。

青石はいつもの様に封を開けて、「あーん」と口の中に運ぼうとして

「お待ちなさい」

それを止められた。

彼女の手を、横から華奢できれいな手が掴んでいる。

「シアンさん！」

青の少女の声が弾む。シアンは一礼し、紫苑の髪が緩やかに刎ねた。

メイド服の裾がなだらかに波打つ。

「お久しぶりです。青石様。」

いきなり辛いでしょとか伝えなければなりません。今後一切それを食べてはいけま

せん」

「ええー！　じゃあボク何を食べればいいの!？」

「食べるものは私が用意いたします。今しばらくは我慢を……失礼」

「ああ!？」

せつかく食べられると思ったご飯。それがシアンに取り上げられてしまう。彼女は取り上げたそれを、スカートのポケットにささっとしまい込む。

不服そうにしながら、けれども抵抗しない。それはシアンへの信頼故か。

「……理由は説明してくれるんだろうな?」

相澤の視線にシアンは首をこくりと上下に動かす。

「青石には、今まではレギオンの危険がある為、様々な保険が掛けられていました。

それはご存知ですね」

相澤は頷く。職員室にいる他の教師たちも、一様に首を縦に振る。

最新鋭のコスチュームの技術を詰め込んでいた、白いワンピースという名の拘束具。

地下で密かに稼働している、詳細が一切不明のシステム『ラピスラズリ』。

個性を抹消する相澤消太。

命令を強制させる法月将臣。

国によってこれでもかという程、念入りに積み上げられていたセキュリティ。

それらは国立の雄英だからこそ、成立させられるものだ。

「この合成食品もそれらの保険の一環でした。

万が一、彼女が外の世界へ飛び出した時、長く生きられないようにするため。

これを長年摂取する事で、彼女の内臓は歪に発達し、コレを食べなければ生きていけない。

そのように仕組むために開発されたものです」

「じゃあ……一体何なんだ。合成食品はよ」

「かいつまんで言うと」

彼女は青石の頭を優しくなでる。

「……毒ですよ」

場の空気が凍ったように青石には感じられた。

……。

「じゃあ、落ち着いたところで本題に入ろうか」

あれから少しばかり取り乱した青石ヒカルを、相澤とシアンがなだめ、ようやく会議が始まった。

「内容は前もって言っていた通りだよ。」

二週間後行われる、雄英体育祭。

それに青石ヒカル君を出場させるか、させないか。

皆の意見を聞きたい」

根津の言葉がシンと静まり返った職員室によく響いた。

「私は反対ですなエ。いくら何でもリスクが高すぎる」

大柄な男が最初に口を開いた。

彼のヒーローネームは“セメントス”。本名、石山堅<sup>いしやまけん</sup>。

彼は現代文の授業を担当している。触れたコンクリートを意のままに操る個性“セメント”の所持者だ。

何となく見た目もセメントっぽいなあと青石は思っている。

「リスク……という」と

「とぼけないでくださいよ。青石君の個性がどれ程“規格外”か……。

雄英の中で生徒だけ目撃するならまだしも、テレビで全国放送される。

一体どんな反応が起きるか、分かったもんじゃありません」

「俺も同意見だ。わざわざ大衆の目に晒す事もねえだろ。」

それになあ、雄英体育祭を見ているのはヒーローや一般人だけじゃねえ。

<sup>ヴィラン</sup>敵だつて見てるんだぜ？

大体、この前青石がああなつた時に侵入してきた敵<sup>ヴィラン</sup>。

肝心の首謀者は、どさくさに紛れて逃げおおせたつて話じゃねえか」

「えっ……そうなの？ 相澤さん」

初めて聞いた話で青石は小声で相澤に聞く。

話が進行している中、小声で相澤は返事をする。

「ああ……、緑谷達がお前を何とかした後、事後処理で敵を捕縛していたんだが。

……どうもおかしい。数が少なすぎる。

特にだ。俺もお前も見た凶悪な敵が影も形も見当たらなかった」

「まさか逃げたの？」

「もしかしたらワープの個性を持っている敵。」

そいつが早めに目が覚めたのかも知れない。

USJで捉えられたのは全員チンピラばかりだ。そうでもない、つじつまが合わな

い」

「……」

青石が思い出しているのは、脳みそがむき出しになっていた異様な姿の敵。

それとスーツ姿でガスマスクのようなモノを付けた男だ。

確か“オール・フォー・ワン”と名乗っていた。

彼は……

「けどよ！ だからこそ、出す意味が有るんじゃないかねえのか!？」

議論の最中大声を出したのは、ボイスヒーロー“プレゼント・マイク”だ。

彼は相澤と同期だ。その関係で青石と話す機会もそこそこにあった。

決して悪い人では無いのだが、どうにも青石は彼が苦手だ。

せめて喋る時は、もう少し音を小さくしてくれないものだろうか。

「……確かに意味は有るのかも知れない」

オールマイトが口を開いた。ボソツとした声だったが自然と皆の注目が集まる。

押しも押されもせぬ、ナンバーワンヒーロー。

ナンバーツーヒーロー”エンデヴァー”と客観的に評価しても、隔絶した強さを誇る

“平和の象徴”。

ヒーローと言えばと聞かれたら、十人中十人が彼を思い浮かべるだろう。

「私の力は衰えてきている。もうじき”平和の象徴”を引退しなければならない日も

……おそらく近い」

「そんな悲しい事言わないで下さいよ」

セメントスの声に彼は首を横に振った。

「事実だよ。元より怪我をしてからというもの、活動時間はどんどん短くなってる。

これから先一体どれほど動けるか……」

「それは……」

オールマイトの告げる事実にも、職員室は静まり返る。

「私は彼女に、示して欲しい。その圧倒的な力を。」

“平和の象徴”を担うに値する存在が、オールマイトだけでない。次世代の芽も育っている。だから……」

「待て」

オールマイトの言葉を強めの口調で遮るものが居た。

相澤消太。他でもない青石ヒカルの担任だ。

「オールマイト、そういう話なら俺は反対させてもらおう」

「相澤さん……？」

相澤はただでさえきつい目つき。それを普段より数段、鋭くオールマイトを睨んでいる。

「こいつは平和の為に生贄になるための道具じゃねえ。」

“平和の象徴”？ ……ああ、それを自分でやるのは勝手だ。好きにしろよ。

けどな、そんな事を望んでないこいつに、押し付けようとするじゃねえよ！

「私は……！ 押し付けようとしているんじゃない！」

ただ、私は示して欲しいと思っている。

君が来たと、世に知らしめて欲しいと！ 私は……」

「それが押し付けているって言うんだよ！」

「まあまあ二人とも落ち着いて」



根津の仲裁にも相澤は止まらない。完全に頭に血が上っている。

これ程までに怒っている相澤を見るのは、初めてかもしれない。

「緑谷と上手くいかなかったらから、今度は青石か!？」

いい加減にしやがれ! てめえが背負っている『平和の象徴』がどんだけ残酷なものなのか。

胸に手を当ててよく考えろ!」

「もう良いよ! 相澤さん! 良いから!」

「はいはい、落ち着いて。どうどう」

いつの間にか相澤とオールマイトの脇にヒーローが数名来ていた。

万が一の事にも備えたのだろう。

「もういい……お前ら。さっさと戻れよ」

しっしっしと手を振る相澤。顔を抑えている相澤。数秒後は元の冷静な顔に戻っていた。

「こんな会議をしておいて何だけどね。相澤先生が、青石君の事を一番よく分かってる。

相澤先生がこういうのなら、残念だけど今回は……」

「ま、待って!」

青石ヒカルはそれに思わず声を上げる。

「うん？」

青石をじつと見つめてくる根津の目が少し怖かった。

彼は人間ではなくネズミ。人以上の頭脳をもった個性“ハイスペック”の主。彼に見られていると隠し事が一切できないような錯覚に陥ることが有る。

彼女は息を整える。

相澤を見て、オールマイトを見て。

自分の心に問いただし。

彼女は自らの望みを口にすする。

「ボ、ボクはー」

脳裏に浮かぶのは、友人達。将来を見据え、必死に努力し抗う彼らの姿。例え“無個性”に生まれても夢を捨てきれない少年が居て。

酷い境遇で暴力を受けて育つても、反骨の精神で何度でも立ち上がり。

家が裕福でなかったとしても、それをバネにして頑張る。

彼らの様に彼女はなりたい。

彼女はヒーローにはなれないかも知れない。

だけど、彼女は願う。あの日命を賭して、自らを助けてくれた友の様になりたいと。

彼女の中の憧れは、既にオールマイトにない。

それはもつと身近で、ありふれた存在への感情で上書きされていく。

「ボクは——青石ヒカルは！ 一年A組、ヒーロー科の一員として！」

雄英体育祭に出たいです！」

「——採決をとろう」

職員室の会議の結果は満場一致で決まった。

二週間後、青石ヒカルは1—Aの生徒の枠で出場する。

その21人目として。

多くの者の助けを受け、彼女の中の忘れかけた夢は、今動き出した。

## 第37話

「彼女の雄英体育祭への参加が、職員会議で正式に決定されました」  
「そうか」

法月将臣は自らの執務室で、シアンから報告を受け取った。  
彼は窓際に立ち、シアンに背を向けている。

シアンは返事が予想外だったのか、質問を投げかける。

「よろしかったのですか？」

「何がだ」

「いえ、今まで彼女を公おおやけの場に出す事は、可能な限り避けていました。

存在自体が国家機密。事情が事情だけに仕方がない配慮でしたが。

その傾向から思うに、法月様は……」

「反対ないし、高等尋問権限で取り消すことを予想したか？」

シアンは首を振って肯定した。

「確かに以前まではそうだった。だがシアン。」

私は何の理由も無しに、今まで彼女をあのような扱いにしていたのでは無い」

「……」

法月は完全にシアンに背を向ける。シアンは複雑そうな気持ちを顔に出す。

「状況は大きく変わったのだシアン。今や青の少女は、敵性存在では無い。

無論、安全だとは言えん。だが今の彼女を今までの様に拘束しては、むしろ良からぬ事態を誘発する事になるやも知れん」

「藪蛇やぶへびは避けたいと？」

「有体に言うとそういう話だ。だが、それには当然リスクもある。

現に、各国上層部から牽制の動きが出始めている。

だが方針は変えぬ。

彼女を縛るセキュリティは、緩やかに解除してゆく」

「……承知しました」

いきなり 完全に自由にしてしまうと一体どうなるか。彼女自身は恐らく問題ない。

けれどもそれを、世界各国がどう受け止めるかが問題だ。

各国上層部では、事件の真相が共有されている。

まあ一部は法月が伏せているのだが。

そうだとしても、危うく殆どの人間を死滅させかけた青石ヒカル。

彼女が自由に動き回る事態を、喜ばしく受け入れられるはずがない。

他の国からすれば、日本が世界を滅ぼせる最終兵器。それを手中に収めている事になるからだ。

到底納得できる状態ではないだろう。

従来通り地下に閉じ込めておけ。用が済んだら直ちに処分しろ。

そう思つて当然の話だ。

本来ならば敵性存在で無くなったから。そう言つて縛りを緩めているこの事態こそ問題なのだ。

だからと言つて、彼女の拘束を強める訳には行かない。

そんな事をしたら法月の言う通り、藪蛇やぶへびになつてしまふかも知れない。

あちらが立てばこちらが立たず。

だがその状況を、細心の注意でコントロールしていくしか道はない。

実のところ人類は未だ、瀬戸際に立っているのだ。

肝心の青石ヒカルが、何処までそれに気づいているか。それは全く定かでは無いが。「しかし、今年の一年共は運がない。在学中自らを売り込める、数少ない好機だということにな」

「……法月様、昨日さくじつより、噂が出回っているのをご存知ですか」

「ほう?」

法月の顔がシアンを向く。肩が興味深げに吊り上がっている。

「雄英高校1年A組が、ヒーロー基礎学の際、<sup>ヴィラン</sup>敵の襲撃を受けた。

しかし、一人の犠牲者もなし。それどころか生徒の活躍により、逆に敵を<sup>ヴィラン</sup>撃退した。

そういう話です」

「噂というより、いずこかより洩れ出た真実だな。それは。

シアン、それは把握している。残念だが、それは噂に留まらなかったようだ」

「……は？」

シアンの目が丸くなる。

「つい先ほどだ。まさにお前が言っていた内容が、とある民営放送局より流れた。

ゴシップ記事も作られ、出回り始めている。

今頃雄英中が、その話で持ちきりであろう」

「……一体どこから!？」

「実に残念な話だ」

目をつむりながらしゃべる法月。彼の口の端が微かに緩んでいた。

どこからその情報が漏れたのか、シアンは言われずとも察する。

(いったい何を企んでおいでですか?)

彼の漏らす微笑みに、彼女は不安を拭えずいた。

……。

「あ、お茶子ちゃん。ボク雄英体育祭に出られるんだって」

昼休み上がりの青石の一言。

それに――Aの教室は、文字通り揺らいだ。

「なっ……何だって――!!?」

……。

放課後になった。

青石ヒカルは取り敢えずやることも無く、ボーツとしていた。

彼女は未だ雄英の地下に住んでいる。

緩やかに彼女を取り巻いている状況は改善している。

だが一朝一夕に行くはずも無い。彼女にとっても雄英の地下こそ慣れ親しんだ我が

家だし、出ていけともし言われたら困る。

何より彼女が今ぼんやりしているのは、お昼ご飯を食べていない影響が大きい。

シアンが夕食を作ってくれると約束したので、そこは信頼している。

けれども、今までずっと食べてきた合成食品。

それに毒が含まれていたなんて信じられなかった。

教室を見渡す。



雄英体育祭に参加する旨は、既に伝えている。

一部を除き、生徒達は「もう一番は絶対に無理だ」と天を仰いだ。無理もない。

もし例え参加するのが生徒ではなく、プロヒーローであろうとも。彼女の出鱈目な力の前には敗北するのが必定。

ましてや参加するのは生徒なのだ。勝てる訳無い。

生徒達は青石の事を参加できないのだと、勝手に勘違いしていた。

彼女が存在が国家機密である。つまりは、全国に顔を晒す体育祭に出られる訳が無い。

そう踏んでいた。

それは捕らぬ狸の皮算用。

生徒達は勝手に最大のライバルの存在。

それを無意識に可能性から除外していたのだ。

青石としては一緒に仲良く参加して盛り上がりた。

けれども、現実はそうもいかないようだ。

「何?とだあ!?!」

教室の入り口の方で大声が聞こえた。

ふと見ると麗日お茶子が教室の外に出られず、立ち往生している。  
(なんか友達のパンチだ！)

と青石ヒカルは、だだだと彼女の元に駆け寄って聞いてみる。

「どしたの？」

「み、見て」

「おおお……」

麗日の指の先は廊下。そこには人がごった返してわらわら湧いていた。

一体何処にこれだけの生徒が居たというのか。

なぜこんな事になっているというのか。

青石は知識は多少あれど知性に乏しい頭を、フル回転させる。が、分からない。

「敵情視察だろ、ザコ」

そんな青石を煽りつつ隣をスタスタ歩くのは

「着火マン！」

爆豪克己だ。彼女は未だセンスが有るとは、とても言えないあだ名で呼び続けている。

爆豪も訂正する事を諦めたのか、最近はスルー気味だ。現に今も何の反応も示さない。

「敵ヴァイランの襲撃を耐え抜いた連中だもんなあ。

「体育祭の前に見ときてえんだろ」

「??」

爆豪の言葉に青石の頭に疑問符が浮く。

敵ヴァイランの襲撃に耐えた？ しかしその事は箝口令が敷かれていて、他のクラスの生徒は知らない筈では？ と思う。

しかし

「青ちゃん知らんの？」

「何を？」

「ウチ達の活躍。ほら青ちゃんがああなった時の。

そんな時ヴァイラン敵が襲ってきたことがね。

どっかからバれて……今すっごいニュースになってるみたいだよ」

「えっ!? そうなんだ……へー」

お茶子に見せられたネットニュースを見て彼女は感嘆の声を漏らす。

そこには「お手柄! 英雄生徒、襲来した敵ヴァイランを撃退する!」との見出しがあった。

流石にレギオンを止めたとまでは書かれてはいなかった。

もしもそれが洩れる事が有ったら国家の危機だ。

そうなれば本格的に、法月達が動き回る事になるだろう。

どうやら洩れた情報は、断片的で限定的なものらしい。

それでも箝口令が敷かれている中、外部に知られたのは問題だろう。

「やっぱり知らなかったんだね……」

青石は今初めて聞いた話だ。彼女の反応に、緑谷は大して驚いていない。

それはそうとして、青石は爆豪から先ほど言われた「サコ」という言葉が思い出されて今頃頭にきた。

「着火マン！ ザコって言った方がザコなんだからね！」

「小学生並みか！ しかも遅っ！」

切島のツツコミも聞いておらず、彼女は鼻息を荒くする。

他の人に言われても平気な事が、何故か爆豪の時だけ気になる。

つまり彼女は爆豪に対して、ある種特別な感情を持っていた。

他の人間がその感覚を言葉で表現するなら「気に入らない」辺りになるのだろう。

「意味ねえからどけ。モブ共」

爆豪は廊下の連中に、短く煽りを入れながら退けと言う。

「何をー!？」

その言葉に、何故か言われていない青石が腹を立てていた。

「随分と偉そうだな。ヒーロー科の奴は皆こんななのかい？」

「ああ!？」

廊下の集団の中から掛けられた言葉に、爆豪は青筋を立てる。

「そうだそうだ!」

青石は囁し立てる。「お前もヒーロー科だろうが……」とう突っ込みは聞いていない。

そして爆豪に幼稚な悪口を延々と飛ばし続けている。

全く持つて誰も聞いてはいないが。

「こういうの見ちゃうと幻滅するなあ」

ズイツと人の中から、比較的背の高い男子生徒が現れる。

爆豪に声を掛けたのはこの生徒だろう。

「普通科とか他の科には、ヒーロー科落ちたから入ったって奴。

結構いるんだ知ってた」

「知らなかった……でも実力が足りずに落ちたんでしょ？ それがどうしたの？」

青石の言葉は誰も聞いていない。1-Aの生徒達は青石の天然ボケに対して、スルー

スキルが身についている。

「体育祭の結果によつては、ヒーロー科への編入も検討してくれるんだって」

生徒はそのまま言葉を続ける。

もちろん青石ヒカルの言葉に返したわけでは無い。

しかし、彼女はすっかり会話している気分になっているようだ。

「へえ、そうなんだ、頑張ってね！」

「……」

その生徒はジッと青石の方を見る。青石は単純に思つた事を口にはしているだけ。だが些か煽っているように聞こえても仕方ない。

その男子は青石を見て、小さく舌打ちした。

「——敵情視察だつて？ 少なくとも俺は……」

調子乗つてると足をゴツソリ掬っちゃうぞつう、「宣戦布告」しに来たつもり」

生徒達は彼から発された異様な気迫にたじろぐ。

だがたつた一人、それに飲まれていない生徒が居る。

言わずと知れた青石ヒカルだ。

それとも単純に空気が読めていないだけか。

「でも君、全然強そうに見えないよ？」

ことりと首を傾げてまた煽るような事を言う。

彼女の場合悪気がないだけに、余計性質が悪い。表情から怒らせたいのではなく、本当に思っている事を口にはしているのだと誰にでも分かる。

それが更に腹立たしくさせるのだが。

「……青石ヒカル」

「わっ、ボクの事知ってた!」

「……」

彼は青石ヒカルを一瞥しただけで踵を返す。

そのまま廊下に溢れる人垣の向こうに消えていった。

「隣のB組のモンだけだよお!」

また新たな生徒が出てくる。だが青石は、麗日に袖を引つ張られた。

そのまま教室の中に引き込まれる。

「わわっ、お茶子ちゃん?」

「今のは流石に不味いつて……謝りに行った方が良いよ」

青の少女は首を傾げる。

「なんで?」

「それは……」

「待てコラ! どうしてくれんだ!」

おめーらのせいでヘイト集めまくりじやねえか!」

切島が爆豪と青石を指さし、そんな事を言ってくる。

「ええっ!?　なんでボクまで!」

「分かんねえのかよ!」

すっかり怒っている切島。

だが……

「関係ねえよ……」

爆豪が静かに。しかし迷いなく言い切る。

切島は「はあー!」と声を上げてるが

「——上にあがりや、関係ねえ」

爆豪の決然とした態度に黙りこくった。

ちらと青石、そして隣の緑谷を見てくる爆豪。

だが視線を静かに外す。そのまま人垣を押しつけて外へ出ていく。

「……かつちゃん」

緑谷の眩きが耳にやけに残る。

その一言には、どんな気持ちも籠っていたのだろう。

青石は爆豪の事が気に入らない。

なんであんな人が居るのか、青石には理解できない。

いちいち他人を見下すし、言葉も荒い。



なんでそんなに虚勢を張って生きているのかと、彼女にはそうとしか見ええず。爆豪を見るたび腹が立ち、同時に憐れんでもいた。

けれども彼の“一番”になるといふ決意と拘りは、並大抵のものでない。それは理解する。

彼は一切諦めてなどいない。

彼女が体育祭に参加すると言った時でも、爆豪の目は死んでいなかった。他の生徒たちとは違う。

彼は本気で青石ヒカルに、勝つつもりでいる。

それほどの自身がどこから湧いてくるのか、彼女には分からない。

だが爆豪が、青石にはない物を持っているという事だけは理解する。

(良いよ、本気で来て。でも負けるつもりは全然ないよ。着火マン)

青石は心の中で、爆豪に宣戦布告する。

彼は本番、本気で青石に挑んでくるだろう。

青石も彼の本気には真剣に応えようと考えてる。

雄英体育祭。その開催前の時点で、既に戦いは始まっている。

彼女は人垣を見て、それを肌で感じ取っていた。

## 第38話

雄英は放課後。

職員室で相澤たちは作業に追われていた。

その作業というは言うまでもない。

青石ヒカルを、雄英体育祭に参加させる事が決まった。

それに向けての対応作業だ。

口で言うのは簡単だが、その作業の詳細は多岐にわたる。

なんでもありな彼女が参加するのだ。時間はいくらあっても足りない。

「あー……なんでこんな事になったんですかねえ」

「おーおーセメントス！ おめえだつて賛成したじゃねえか！」

「そりゃあそうですよ、子供が成長した姿を見て、応援しないヒーローが何処に居ますか」

「かつ、違いねえ！」

職員たちは、時折愚痴を零しながらも表情は明るい。

「ああ、第一種目の通過探知のセンサー。もっと増やした方が良いですねえ」

「どれくらいだ？」

「ざっと今の十倍くらいは、後スーパーハイスピードカメラも増設しないと」

「十倍!? おいおい予算は!? 時間もそんなねえぞ!？」

「本当にそんな必要なのかよ？」

「彼女が本気を出したら、外周四キロなんて一秒もかかりませんよ。」

彼女がスタジアムに戻って来た時、確実に通った事を証明するために必要なんですよ。

何も知らない人間が見たら、スタートから瞬間移動したようにしか見えないでしょうしね」

「ああー……そっかー……」

「それに第二種目に本当に参加させられるのか、そこも検討しないとですね。」

彼女が第一種目の一位はほぼ確定。まあそれは良いんですが。

第一と第三はあくまでも個人種目。問題は第二種目。

団体競技に彼女をぶち込んだら、彼女と組んだ生徒が勝つだけですよ」

「……鉢巻き全部取るかな？」

「取るでしょう……喜んで」

「クソゲーじゃねえか！」

「だから考える必要があるって言うんですよ！」

「アー！ めんどくせえ！」

(ごちやごちやうるせえな……)

相澤はそんな会話を横に聞きながら、作業に参加している。

今見ているのは警備シフト表だ。

依頼を出しているヒーロー事務所。各ヒーローの巡回計画に、休憩時間の設定。

青の少女が出るとあっては、警備は更に万全にしなければならない。

対策すべき事柄は幾つもある。

正直二週間しか時間が無いのはきついが、やるしかない。

「相澤君」

声に振り向くと根津校長だった。

「青石君をそろそろ連れていってあげなさい」

「まだ時間は有りますよ」

「そうは言ってもね」

根津の指さす方を見ると、職員室に体を半分乗り出している姿が。

「じー……」

件の青石ヒカルくだんの姿があった。

クラスメイト達も下校して一人になったのだろうか。どうやら寂しくなって姿を現したらしい。

「馬鹿が、職員室は遊び場じゃねえぞ……」

「まあまあ、相澤君は職員だけど、それ以前に彼女の父親なんだ。

彼女を優先してあげなさい」

「いつから俺が親になったんです?」

「前から皆思ってたよ? 青石ヒカルが誰になるのか、それは相澤君しか居ないって」

「じーっ……」

「後は僕達がやっておくからさ。相澤君は行きなよ」

相澤が渋々立ち上がる。

職員室の外に出た瞬間、がばつと青石ヒカルが抱き着いてくる。

そしていつもの様に引つpegす。

彼女の顔はいつもより華やいでいた。

「行くぞ」

「うん!」

言葉短くやり取りして歩き始める。

彼女はいつもより更にピツタリ身を寄せてくる。

その行動に少しだけ相澤は違和感を覚えた。

「何か……悩みでも有るのか」

「……うん」

夕日に照らされた長い廊下を二人の足音が響く。

窓の外を彼女は見ながら、ため息を漏らす。

青い髪が日に照らされて、金色に光った。

「これ以上ないほどのハッピーエンドなんだ。

轟君に緑谷君お茶子ちゃんに……。

皆が助けてくれた。なのに居ないんだ。

ボクの大事なものを、皆いつの間にか忘れちゃっているんだ。

おかしいよね、その事今さつきようやく気付いたんだ」

「……」

「ボクを助けようとしてくれた、友達が居たんだ。

それを轟君や、緑谷君やお茶子ちゃんに聞いても、覚えていなくて。

ボク訳わかんなくなっちゃって……」

「お前の言っている事はよく分からん。

だが……きっと明日が来れば、また立ち直れる」

相澤の励まし。彼女は「うん」と返して顔を俯かせる。

「泣いているのか……？」

「……あの色を見ると、思い出してしまつて。どうしても悲しくなるんだ」

青石ヒカルの指さす先には沈む夕日。

空がいつもの青から、赤を帯びた金色に輝く。

それを彼女は泣きながら見つめている。

世界が暗闇に沈む前の、眩い輝きを。

相澤もどこかで見た気がしたが、思い出せない。

どの道人間は、全ての事を覚えていられない。

相澤も、青石ヒカルも。少しずつ何かを得ては、何かを失つて進んでいく。

時には失つた事すら気付かない事すらある。

だがその忘れてしまったものが、今の自分をきつと支えてくれているのだ。

そう相澤は信じている。

世界は今日も美しく、黄金の輝きを放っていた。

……。

爆豪勝己は人垣を押しつけて、とある場所に向かっていた。

先ほどまでのクラスの連中を思い出す。

あれから数日たち、その騒動でクラスの中の一人が欠けた。

だがクラスの中の誰も、クラスメイトの誰かが死んだと思っ**て**はいない。

(一体どうな**つ**てやがる……。いくら何でもあ**つ**さりしすぎやしねえか?)

爆豪は決して悪人ではない。

言動などで誤解されがちではある。が、彼は自分本位で動いてしまう傾向が強いだけだ。

人を殺して喜ぶような人間ではない。

ましてや、爆豪が殺めてしまったのは、紛れもないクラスメイトだったのだ。

騒動が終わり、折を見て委員長に探りを入れたことが有る。

生真面目な飯田。あの場で爆豪の行為を非難した生徒だが……。

「セルリア? 誰だそれは?」

もう疑いようが無かった。

クラス全員かは分からないが、彼女の存在はI—Aの生徒から。

完全に抹消されていた。

いや、正確にはもう一人いる。青石ヒカルだ。

クラスで彼女だけが、セルリアの名前に唯一反応を示していた。



爆轟は今でも思い出せる。

——人は間違える生き物です。本当に必要なのは、間違えたときに罰する事ではありません。

次は間違えないように、教え支え導いていく。

傍に寄り添って、心の支えとなる。人々と共にある。

それが本来の、高等尋問官のあるべき姿です。

法月に啖呵を切った金髪の女。

アメリカからやって来たという高等尋問官の少女。

セルリア・セレストイトという人間は確かに存在したのだ。

「入れ」

法月の執務室。その目の前に立つと、ノックする前に声の中から聞こえた。

「失礼します」

いくら爆豪でも、この男の前では礼儀を弁える。

部屋の中に居たのは法月一人だった。

扉を閉めて、中央の方に歩み寄る。

法月の方から口を開いた。

「爆豪よ、お前が来るのは分かっていた。

大方セルリア・セレスタイトの件であろう」

「……ちっ」

小さく舌打ちした爆豪。その程度など見通しだ。そう言わんばかりに法月は口を歪める。

「なんで、誰も覚えていねえ……？」

「その問いは少々の外れだ爆豪。」

お前は自分が覚えていられた事に疑問を持つべきだ。

逆に問おう、爆豪。あれだけの事が起きたのだ。

なぜ爆豪だけが、彼女の事を覚えていられると思う」

「意味が解らねえ」

「では説明してやろう。」

爆豪、私は高等尋問官だ。秩序の為あらゆる権力を振りかざす存在だ。

無論、その任を遂行するため、あらゆる手駒を使う。

様々な“個性”の持ち主を、あらゆる事態に備えて用意している。

数々のヒーロー共に加え、表には出せないような連中もな。

それは理解しているだろう」

「……」

爆豪は沈黙で肯定した。

「今回セルリアは、高等尋問官であるにも関わらず敵ヴァイランとなった。

お前が高等尋問官の立場なら何を考える？」

その言葉だけで充分だったのだろう。

爆豪は彼の言おうとしている事を理解したようだ。

高等尋問官という立場の人間が、危険性を孕んでいる事は分かる。

だが彼らはあくまで“正義”を実行する人間。その前提条件が有るからこそ、許されている。

ヒーローに様々な権力が備わっているのと一緒だ。その仕事を遂行する上で、それは必要なものだ。

逆に高等尋問官のセルリアの行動。それが世間一般に伝わるのは、法月にとって非常にまずい。

高等尋問官という立場を問いたただす、世論が形成されてしまったら。

さすがに法月にも手遅れだ。

だから手を打った。

「事態の隠蔽。記憶の改ざん……ないし消去か？」

「そうだ。爆豪、人の口に戸は立てられぬ。」

箆口令を敷きこそしたがな、あれは信用ならぬ。ましてやお前たちは、まだ学生。情報が洩れぬようにするには、元から絶つしかない。

そして隠蔽は珍しい事でも何でもないぞ。

あのオールマイトですら、必要と判断すれば隠蔽をしているのだ」

法月将臣。

彼は自ら何らかの個性を使つて。

もしくはそれが可能な誰かに、1—Aの生徒の記憶を改ざんさせたのだ。

疑う余地はない、もうそれしかない。

そうでもないとクラスメイト達が、ああも平然としていられることなど有り得ない。

爆豪は苛立ちを隠せずにいる。

「なんで」

「なぜお前の彼女に関する記憶を消さなかったのか、教えてやろう。

初めて人を殺したその記憶。それはお前のこれから先、必要な糧になると確信した。

それだけの事だ」

「ただの嫌がらせだろうが……！」

法月は目を細める。どこか懐かしいものを見るような、そんな目つきだった。

その後、執務室を出る爆豪の姿があった。

彼の足取りは普段に比べ重い。

あの場で仕方がないと思つた。

ほんの一瞬の気の迷いで、全員の命が危ぶまれる。

どうしようもなく、追い詰められた状況だつた。

だからあの時、あの場。爆豪は彼女を殺す決断をしたのだ。

その決断自体は、客観的に見て間違つてはいないと思う。

だが、決して正しくも無かつた。

ではどうすれば良かったのか。果たして対案が有つたのか。

考えたところで分かる筈無い。

彼女を生かしていたら、最悪の事態に発展したかもしれない。

今回の結末には、たどり着けなかつたかも知れない。

言い出したらキリがない。

どうあれ、爆豪はセルリアを殺し。セルリアは敵ライバルになり死んだ。

そしてそれを覚えているのは爆豪。それと青石ヒカルだけ。

「けど関係ねえ……それでも俺は一番になる。完膚なきまでの一番に」

死んだ人間は蘇らない。

爆豪が幾ら悔やんだところで、彼女は帰つては来ない。

だから彼は前を向く。

どんな障害も乗り越えて、なってみせる。

ナンバーワンになれるのは、只の一人だけ。

その道のりで、どれ程の人を蹴散らす事になったとしても。

他人の夢を諦めさせる結果になったとしても、知った事ではない。

元から夢を叶えるためには、人は人を蹴落とすしかないのだから。

だからこそ、青石ヒカルを見ているとむかむかする。

あの女はそんな単純な原理にすら、気づいていない。

所詮この世はどこまでも不平等で、弱肉強食なのだから。

外を見ると日が落ちかけている西の空が、夕焼けで輝いている。

空が黄昏の時間、黄金の色に輝く。

その色は嫌でもセルリアの髪の色を思い出させた。

彼女の髪の色も同じように、金色に輝いていた。

爆豪たちが見た彼女の輝きは、黄昏る時の太陽だったのかも知れない。

世界は闇に沈むその瞬間、黄金に輝いていた。

## 第39話

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。

淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。

世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。

たましきの都のうちに、棟を並べ、豊を争へる、高き、卑しき、人のすまひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家はまれなり。

あるいは去年焼けて今年作れり。あるいは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。

所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、わづかにひとりふたりなり。

朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水のあわにぞ似たりける。

知らず、生まれ死ぬる人、いづかたより来たりて、いづかたへか去る。

また知らず、仮の宿り、たがためにか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。

その、あるじとすみかと、無常を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。

あるいは露落ちて花残り。残るといへども朝日に枯れぬ。

あるいは花しほみて露なほ消えず。消えずといへどもタバを待つことなし。

——『方丈記』より。

雄英高校 地下三千メートル 「青の少女」管理施設にて

「むむむむ……シアンさん……」

「何でしょう、分からないところがありますか？」

「有る！　とういうかこれ、全っ然！　なにも！　分かんないー！」

雄英の地下で彼女の声が木霊した。

白に染められた部屋の中、青の少女はジタバタし。

メイド服のシアンが、側で見守っている。

青石ヒカルが、やっているのは宿題だ。それは、セメントスから特別に追加された課

題。

セメントスは現代文の担当だが、青石ヒカルの授業態度の悪さ。

それに普段から思う所が有ったらしい。現代文で興味を持ってないならと、なんと古文を持ち出してきた。

シアンは青石の持つプリントを覗き込むと、一つ頷く。

「なるほど、『方丈記』ですか」



ふむとまた一つ頷いてプリントを眺めるシアン。  
やがてニツコリとほほ笑む。

「良い教材ですね」

「ボク、これ全然意味が分かんないんだけど!？」

何の暗号なのコレ!？」

よつほど頭に来ているのか、両掌で机をバンバン、バンバン叩く。  
だが、シアンがじろりと睨むと。

「う……ごめんなさい」

途端に止めた。

シアンは普段は滅多に怒らないが、一度怒らせたら怖い。

青石ヒカルは、その事を重々承知している。

「いいですか、これはですね……」

シアンが勉強を教えようとする、ドアがガチャリと開いた。

「よう」

「あっ！ 轟君！」

机から青石はバツと立ち上がる。

「はあ……」

嘆息するシアンを他所に青石は、遊びに来た轟に駆け寄った。

轟は机の上のプリントと、筆記用具を見て言う。

「……お前も勉強するんだな」

「嫌々だけどね！」

「胸を張って言う事ではありません」

シアンの小言を受けて「うー」と青石は唸る。

そんな青石に轟は唐突に切り出してくる。

「……体育祭出るんだな」

轟の言葉に、青石は首を振る。

「うん、出してもらってるって。でも……ボクが出るせいで相澤さん、もっと忙しくなっちゃったみたいで……」

「そこを気にしてはいけません。生徒の為に骨を折るのが、教師というものです」

「そ、そうかなあー。……あつ！」

青石の顔を見て、シアンはすぐさま釘をさす。

「……ヒカル。我儘を言いたい放題、言っつていいとは一言も言っていないからね」

「ななな……！　なんのことがさっぱり分からないよ！」

「体育祭、本当に良いのかお前」

「何が？」

青石は轟の言葉にキョトンとしている。

「……お前の実力なら、そりや最後までころか一位取れんだろうが。

雄英体育祭の最後の種目。……何すんのか知ってるのか」

「うん、知らないけど？ シアンさん知ってるの？」

「……」

青石の言葉にシアンは目をつむっている。

彼女は答えるべきか、悩んでいるようだ。

「シアンさん……？」

青石の不安げな言葉に彼女は目を開けた。

「そうですね……。説明するよりも、実際に見せた方が早いでしょう」

シアンは手元の端末を手早く操作する。

数十秒もしたら、扉が開けられた。

扉を開けたのは、配達用のドラム缶のようなロボット。

アーコロジーシステムを運用していく上で、重要なのはロボットの存在だ。

人が居なくても機能するシステムにおいて、人間の代わりに労働を担当するからだ。

それはさておき、シアンはそのロボットから何かを受け取る。

ロボットは部屋の外に去っていった。

シアンはロボットから受け取ったものを、青石に渡してくる。

「DVD?」

「それに過去の雄英体育祭。その試合の映像が残っています。

論より証拠。……ヒカル。あなたは暴力が嫌いですね」

「う、うん……そうだよ、嫌いだよ。大嫌いだよ。

でも体育祭なんでしょ。暴力なんて……」

シアンの手により、テレビのスイッチが入られて、DVDが再生されていく。

そこには――

「う、そ……ねえ轟君。こんなの……こんなのボク聞いていない!」

「毎年、少しずつ形式は違うけどな。

基本的に、最後の種目のコンセプトは変わらない」

「そうです。最後にやる種目は、一対一の格闘戦<sup>ドッグファイト</sup>。

今年は特に、生身同士での戦いになります。

真正正銘、暴力のぶつかり合いですよ」

青石はただ茫然と見つめている。

映像の中、個性でお互いに攻撃し合い、殴り合う少年たちを。

互いの攻撃が、大きなけがや、致命傷になる事は避けている。

それは青石にも流石に分かる。だが心がどうして受け入れない。

人々が口々に賞賛している。

熱い、かつこいい。ナイスファイトだった。見ごたえがある戦いだった。けれど青石には、そんな人達が、どうかしているとしか思えない。

青石は轟とシアンに挟まれながら、映像の中の真実を飲み込んでいく。

二週間後、自分もこの場に立つのだと、実感がどうしてもまだ沸かない。

青石の震える手を、両脇に控える二人が優しく包む。

彼女は彼らが側にいてくれて、本当に良かったと感謝した。

世界はゆっくりと確実に変化している。

今側にいてくれる轟と出会えたように。きっとそれは悪い事ではない。

——考える時間は、まだ少しだけ残されている。

……。

緑谷出久は自宅に帰宅した。

少し頭が痛く、緑谷は軽く頭を押さえる。

あの事件が終わって以来、ずっと頭痛が続いている。

お帰りとかけられる母の言葉に、「ただいま」と返す。

出されたご飯もしっかり食べて、風呂にも入り、自室にこもる。

緑谷はようやく、ずっと後ろについてきたアズライトに口を開いた。

「喋っても良いよ」

「もう！ 心の中で返事すれば、ちゃんと伝わるって言ってるじゃない」

ぶつぶつアズライトは文句を垂らしている。

彼女には一つ頼みごとをしてあつた。

人が居る前ではよっほどの事でない限り、話しかけないでほしい。

もし話しかけても、返事をもらえらると思わないでいてほしいと。

緑谷にはアズライトが、現実の人間の様にはつきりと見える。

だが他の人にアズライトの姿は見えない。

彼女の言葉にうっかり返事でもしようものなら、変な独り言を言っている危ない人だ。

黙って貰っていたのは。思わず口に出してしまいそうになるからだ。

確かに心の中で思いさえすれば、彼女には伝わる。

だが緑谷は他の人の会話中に、それを咄嗟に切り替えられるほど、器用では無かった。

まあそんな緑谷の思考も、全て彼女には分かっている。伝わっている。

アズライトとは心と心を繋ぐ“ 電脳感覚 ”の個性。

彼女自身が心を持った、緑谷と一心同体の“個性”なのだから。

「でも、ちよつと意外だったわね。あの私が参加するつて決めたのは」

「青石さんの事？」

「ええ」

参加するというのは、当然雄英体育祭だ。

緑谷も教室で青石が、参加できると話した事に結構驚いた。

彼女に参加の許可が下りた。その事に対する驚きはある。

けれどそれ以上に、彼女自身が乗り気のように見えた。その事が緑谷を一番驚かせた。

「緑谷君、雄英体育祭だけ。私はあまり力を貸せそうにない」

「えっ？」

「あなたはあの事件の時にちよつと無理をしすぎたのよ。」

私の力は“演算”する事によつて発揮される。そのために緑谷君の脳は酷使されてしまった。

「今も、頭少し痛むでしょう？」

「……うん」

緑谷は更はずきつと痛む頭を押さえる。

元々アズライトがとんでもない個性だというのは分かっている。

これはアズライトが、以前言っていた代償なのだろうか。

「ええ……だから雄英体育祭の際は“ワン・フォー・オール”の力だけで戦って欲しい。

緑谷君、分かっているとは思うけど、この個性だけでだって十分……」

「分かっているよ。……僕には勿体ないくらい力のだ。

オールマイトの……ナンバーワンヒーローの力だ。

本当は、僕なんかが持つてちゃいけないモノなんだ」

「……」

アズライトの顔は浮かない。彼女の心が、何となく伝わってくる。

「ねえ、アズライト」

彼女にはまだ名前がない。緑谷だって考えてはいる。

だがどうして決められない。一度決めてしまったら変えられないのだ。

そう簡単に決められるものでは無かった。

「何かしら」

緑谷は、ずっと考えてきたことを口にしようと決めた。

考えてはいたが、目を逸らしてきたこと。

本当はそうするべきだ、と思っていたこと。



それはヒーローになりたい自分にとって、都合が悪いから。気付かないふりをしていたもの。

今の自分が考えらるゝ最善〃の選択肢を口にする。

「ワン・フォー・オール」……別の人に託せないかな？」

アズライトが緑谷をジツと見る。

真意を奥の奥まで見透かす目で見られる。ロイヤルブルーの目が緑谷を射抜く。

彼女の髪が優雅に揺れた。

「なぜ……そんな事を？」

「君だつて分かつてるだろ。……この個性は、もつと人の為に役に立てる。

学生の僕が持っているなんて、とんでもない。

人の為に、誰かの為に、頑張っている。そんな人が持つべきなんだ」

彼女はそつと緑谷の横に来る。

「僕はまだ調整だけで手一杯。

シアンさんに鍛えて貰つてはいる。だけど。

100%使いこなせるのは……一体いつになるんだろう」

「焦らなくてもいいとシアンは言つていた筈よ」

「焦るよ！

……きつとオールマイトは、それまで持たない。  
だから……」

「違う人に託し、『平和の象徴』を担ってもらおう。という事？」  
緑谷は頷いた。

今話した選択肢が、緑谷が考えられる中での最善だ。

オールマイトは自らが行っていた活動を後悔しているようだった。

だが、緑谷は決してそれを否定したくない。

例えばどんなに彼が汚い事だと思っても、彼に救われた人間がいる。  
救<sup>たす</sup>けられた人間にとって、それは全てなのだ。

だから『平和の象徴』は続いて欲しい。

『平和の象徴』が有ったから夢を見続けられた緑谷の様に。

それに救われた人間は少くない筈だ。

だが、緑谷にはそれが出来るとは思えない。

まず、体が出来ていない。実力も、経験も足りない。

何よりまだ学生だ。高校一年生だ。

まだ卒業まで三年近くかかる。オールマイトがその間活動できるとは、とても思えない。  
い。

その間“平和の象徴”が不在の間。

救われない人達はどうすればいいのだろうか。

いったい何に縋って生きて行けば良いのか。

だから緑谷は提案する。

緑谷ではない誰かに、引き継いでもらう。例えばプロヒーローの中の誰かなど。

少なくとも緑谷が努力して、使いこなせるよりは、“ワン・フォー・オール”を早く習熟出来るだろう。

だから……

「……それも選択肢の一つでしょうね。

いえ、結果だけで言うのなら最善なのかもしれない」

「だったらい」

「でも、緑谷君。

“平和の象徴”たるオールマイトが選んだのは。

自身の次に強いヒーローではなく、才能に溢れた子供でもなく。

高潔な魂を持つ賢人でもない。

確かに緑谷君よりも、相応しい人は大勢いる。だけどね……」

緑谷の頭に浮かぶ人達。

今まで緑谷の中で一番すごい人と言えば、爆豪だった。だが世界は広い、様々な人が居る。

客観的に見て、爆豪より優れている人間など、ごまんと居た。

緑谷はその爆豪より自分を優れているとは、とても思えない。

果たして自分に、この個性を継ぐに値する“資格”が有るのだろうか？

「彼が選んだのは……あなた。」

人を救<sup>たす</sup>ける為<sup>ため</sup>に無茶な事をしてしまう、あなたなのよ。

オールマイトがあなたを選んだのよ」

「……」

「その事を忘れないで。——まだ時間は有るわ」

「そんなに残されていない」

「でもまだある。だから、後悔しないよう、よく考えましょう。」

「私も考えるから」

「……うん、そうだね」

「まだ、時間は残されている。」

「だがゆっくりと確実に世の中は移ろい、変わっていく。」

「緑谷は、変わらないものが欲しかった。」

少なくとも「平和の象徴」には、ずっと変わらなかつて欲しい。そう願っていた。

けれど、この世界は無常で無情だ。変わらないものはない。

「随分と夜も更けたわ。もう、寝ましよう」

「うん」

アズライトに入眠を促されて、ベッドに横になる。

窓際で空を見上げている彼女が目に入る。

夜空を見上げる彼女の目には、何が映っているのだろう。

変わらないように見えるこの星空ですら。時と共に変わっていく。

人間など言うに及ばず。全ての人間は老い、病にかかり、やがて朽ち果て死ぬ。

それでも、人々は変わらないものを欲しがるのである。

変わらないものなんてない。

それから目を逸らすために縋るのだろうか。ずっと変わらないと信じられるもの。

絶対的な何かを。例えば「平和の象徴」に。

「おやすみなさい、緑谷君」

彼女の声は緑谷には届いていない。

彼は静かに寝息を立てていた。

## 第40話

雄英体育祭の当日になった。

時の流れは速い。二週間という時間は、あっという間に過ぎていった。

緑谷は二週間の間、必死に努力した。

余りにも濃密な二週間だった。

シアンに頭を下げ、鍛錬を付けてもらい。

彼女が生きるために培った技を伝授してもらった。

“ワン・フォー・オール”を使用した新しい技の開発。

体を鍛えるため、そして初心に戻るためゴミで溢れた海岸の清掃。

シアンに連れて行ってもらう、貧民街スラムにも足を運んだ。

時には戦闘になる事も有り、実戦経験も少ないながらも積めた。

孤児院の子供達とも知り合いになった。緑谷に懐いていてくれる子も居る。

今日も孤児院の一部の子は、雄英体育祭に招待されている。

残念ながら行けなかった子も、今頃孤児院のテレビの前で、胸を躍らせながら見てい

るだろう。

緑谷は胸を夢で膨らます子供たちの姿を、思い出しながら歩いている。

緑谷は生徒達と、別の部屋に呼び出されていた。

まだ開催までは時間がある。

と言つても余裕をもつて生徒達は体操服に着替え、控室で待機している。

緑谷も体操服姿だ。コスチュームは着用禁止だ。

体育祭にはヒーロー科以外の学科の生徒も参加する。

少し残念だが、公平性を考えた際やむを得ないだろう。

個性の都合上、付けないと危険な器具などはもちろんOKだ。

だから青山は、いつもの様にベルトを付けていた。

「来たな緑谷」

呼び出した人物は。法月将臣。

「何でしよう?」

警戒心を顕わにしながら緑谷は言う。

「貴様には以前から質問を投げていたな。そろそろ答えは出たか」

緑谷は返事を返さない。法月将臣をただ見つめ返している。

下手な返事を出したら、この男は何をするか分からない。

だがそんな緑谷の様子に、法月は概ね満足したらしい。  
 「その様子では、まだのようだな。しかし良い。」

考えを止めてさえないなければ。今のまま問いかけ続けることだ。  
 だが今日は、ひとつ釘を刺しに来た」

「釘を？」

緑谷の疑問に法月は切り出す。

「貴様が考えているその疑問。<sup>サイラン</sup>敵とは何か。」

それは、絶対に表に出してはならん。

間違ってもそれを、民衆に問いかけることなど、絶対にしてはならん」

法月の言葉の意味をよく考える。

もしかして緑谷が思いつめた末に、そんな事を聴衆に呼びかけるかもしれない。

それを危惧したのだろうか。

「……どうしてですか？」

「民衆とはな、貴様が思っているよりも、ずっと無知蒙昧だ。」

緑谷、<sup>サイラン</sup>敵とは何か。

そんなもの、大半の民衆にとつて、どうでも良いのだ」

「どうでも良いって……そんな事……！」



法月は口を歪める。

「民衆はな、説教など求めておらん。

求めているものは、強烈な快楽をもたらすエンターテイメントなのだ。

奴らは、快楽に群がる獣の群れだ。

物事を、「快」と「不快」に分類し、それで全てを判断する。

家畜と同じだ。

与えられた餌に、美味い不味いと意見は言えど。

その餌がどのように作られておるのか、考えもしない」

緑谷は法月の言葉に些か動揺した。

だが、この手口はいつもの事だ。

この男は人の心の隙間を狙って、「もっともらしい暴論」で攻撃してくる。

確かに民衆には、愚かな一面が有るだろう。

だが余りにも、民衆を馬鹿にしすぎでは無いのか。

緑谷は法月の言葉に内心憤慨した。

「緑谷。お前もそれなりの現実を見てきただろう。

理不尽で不条理。過酷極まりない、この世界の歪みを。

人々を敵<sup>ライバル</sup>へと追いやる、その一端を見た筈だ」

「……は？」

その言葉には素直に同意する。

「だが悲しいかな。もしも貴様がどれほど口すっぱく、民衆に訴えかけた所で……。

奴らは絶対に耳をかさん。

それは民衆にとつて「不快」な情報だからだ。

奴らは常に「面白いもの」を求め続け、「つまらないもの」を排除する。

何はともあれ「面白いもの」が民衆にとつての「正義」であり。

「つまらないもの」を「悪」だと断じる」

緑谷の中で思い浮かべるものは、創作物。

漫画などで、一番重要視されるポイントは「面白いか否か」だ。

いかに技法が優れていたとしても、作者のメッセージ性が伝わってくるものだと  
も。

つまらないなら、エンターテインメントとして失格なのだ。

面白くも無い漫画など、緑谷だって見る気はしない。

「だが本当に己の糧となるものとは、往々にしてつまらないものなのだ。

民衆は目をそらす。良薬は口に苦し、その現実から逃げる。

そのまま、より自分を甘やかしてくる、甘美な幻想へと惹かれていく。

自ら思考を放棄して、より強いものに管理される家畜へと身を落とす。

それが民衆にとつての合理的判断であり、楽な選択肢なのだ。

何のために回しているのかも分からん歯車をクルクル回し。

どうやって作られたかも知らない餌の中から奴らは選ぶ。

選ぶ基準はただ一つ。「より美味なものを」それだけだ。

その餌の中に、破壊をもたらす“毒”が入っているなど考えもせん」

暴論だ、と緑谷は思う。

だが具体的な反論の言葉が口からは出てこない。

この男の言う事は、確かに真実を孕んでいるのだろう。

「緑谷、なぜ雄英がこのような催し物を、大々的に行うか分かるか？」

「……雄英高校への民意を、好意的なモノにするため」

「そうだ。行う理由はそれだけでは無いが、そもそもはその為に行っている。

民衆を味方につける為の、正しい方法は一つ。

エンターテインメントを見せる事だ。

地味に正しい事を、とくとく説いた所で時間の無駄だ。

雄英ひいてはヒーローに対し、好意的にさせるには。

雄英体育祭が一番の方法なのだ」

「ただのプロパガンダでしよう！」

「そのプロパガンダに向けて、真剣に努力したのはお前だ。お前達だ。認めろ緑谷。踊らされている事を。」

この世はあらゆる場所に打算が働いている。

人と金が動く時は、誰かが利益を求めている時だ。

その現実を決して変わらん」

「あなたは僕に……いったい何を言いたいんですか」

「お前に期待している事はただ一つだ。」

最高のエンターテインメントを民衆に見せろ。それだけだ」

「それが、あなたの言うヒーローですか」

「そうだ。無知で愚かな民衆を扇動し、同時にその民衆の奴隷となる。

社会の歯車から零れ落ちた、元々民衆だった者を摘み取る。

それが貴様たちが目指すヒーロー。その本質だ」

（絶対にそれは違う！）

——ええ、そうよ

緑谷は法月の言葉が間違いだと断定する。

心の中でアズライトの声もした。

「下がれ」

法月に背を向ける。

やはりこの男の事は受け入れられない。

緑谷の中の何かが拒絶する。

法月将臣。彼は“正しい”論理を積み上げた後に、先ほどの結論に到達したのかも知れない。

だが、それは違う。それが緑谷には分かる。

あの時、青石ヒカルがとレギオンが救<sup>なす</sup>けを求<sup>た</sup>めていた時。

もつと前、ヘドロの敵<sup>ライオン</sup>からオールマイトが救<sup>なす</sup>つてくれた時。

その場に居たヒーローは、そんな薄汚れた原理で動いてなど居なかった。

人の為に、誰かの為に。

アズライトが、そして青石ヒカルが時折口にする言葉。

とても眩しく、とても綺麗だと思った。

そうありたいと緑谷は願った。それはそうある存在こそが、ヒーローだからだと。

緑谷はそう思った。

「……アズライト」

——何？

「今日は、絶対に勝ちに行く。青石さんが強いのは分かってる。でも僕一人では出来ない事も、きつと」

——二人でなら出来る、かしら

「うん」

——ええ……分かったわ。

「僕は勝ちに行く」

緑谷の決意は彼のアズライトだけが、静かに受け止めていた。  
……。

控室で青石ヒカルは暇を持って余っていた。

そこは1—Aの生徒達に割り当てられた控室だ。

彼女はパイプ椅子に腰かけ、上体を左右にゆらゆら揺らしている。

青石ヒカルは体操服姿だ。入学初日の個性把握テストを青石は思い出す。

あの時に、着たかったと思っただけと思う。

だが、それを体験したのは、今の青石ヒカルではない。

青石ヒカルの意識の更新は、あの事件以来止まっている。

今の青石ヒカルは、あの日に生まれた青石ヒカルなのだ。

でも彼女にはその実感が沸かない。理性として理解はしている。

しかし自分の記憶が確固たるものとして有る以上、中々受け入れるのは難しかった。飯田が壁掛け時計を見て、全体に声を掛ける。

「皆準備は出来てるか？ もうじき入場だ！」

「おー！」

返事をしたのは青石ヒカルだけだった。

飯田は気合が入りすぎて、若干空回る時が有る。

だけど青石はそんな、真面目過ぎるほど真面目な飯田を好ましく思う。出来れば変わって欲しくないなと思った。

「青石」

「轟君」

轟焦凍が青石に話しかける。一部の生徒の目が、青石達に向く。

それらの中には爆豪の視線も有る。

「本当に大丈夫なのか？」

轟の心配そうな表情に青石は笑顔で答える。

「大丈夫、あれからボクも考えたから。」

戦つても、痛くしない方法を考えたから。

だから大丈夫」

「折り合いを付けられたって事か？」

「轟君も手伝ってくれたしね」

ありがとうと続ける青石。パアアと擬音が付くような眩しい笑顔を浮かべた。

「客観的に見て、実力はお前の方が上だと思う。

けど——俺は、勝ちに行くぞ」

「……轟君」

唐突に告げられる宣戦布告。

確かに客観的に見て、青石の方が轟より強い。

彼が青石に体育祭で勝てる要素なんて、まずない。

けれど、それを青石は決して笑ったりなんてしない。

むしろ嬉しかった。

例え勝てないと分かっているとしても、全力を尽くして向かってきてくれる。

その事自体に胸が高揚した。

「あつデク君！」

部屋に緑谷が戻ってくる。

彼の顔は先ほどまでとは全然違う。



何を法月に吹き込まれたのか。それは知らない。

彼は静かに青石の側に来て言う。

「僕は本気で獲りに行く」

緑谷の目の中に「青」が宿る。

青石は肉食動物が獲物を刈る時のような、どう猛な笑顔になった。

「やれるものならね」

「……ちっ」

視界の隅で爆豪が舌打ちした。

……。

「選手宣誓！ 選手代表、爆豪勝己！」

競技の主審を務めるヒーロー「ミッドナイト」の声がスタジアムに響く。

彼女もれっきとした雄英の教師だ。

「18禁なのに高校に居てもいいものなのだろうか？」

常闇の疑問が青石にはよく分からない。

彼女には「18禁」が何を意味しているか分からない。

相澤もいずれば教えないといけな思っているが、中々きつかけがないらしい。

シアンに頼もうにも、法月から止められているとの事だ。

つまりは青石にはまともな性知識がない。

轟や緑谷など男子に無防備に接するのもこのためだ。

それはさておき。

「せんせー」

やる気がまるで無い選手宣誓を爆豪は始めた。

「……俺が一位になる」

「なっ……？」

1-Aの生徒達から驚きの声が漏れる。

今年は青石がいる。青石の力は個性把握テストで嫌という程目の当たりにしていた。

ソフトボール投げ。記録：無限大

立ち幅跳び。記録：無限大

50メートル走。記録：0・01秒

持久走。記録：0・01秒

握力。記録：測定不能

反復横跳び。記録：1万回

上体起こし。記録：1万回

長座体前屈。記録：50センチ

これが、彼女の個性把握テストの記録だ。

実力が飛びぬけているのは明らかだ。

力だけで言えばオールマイトすら優に超えている。それが1―Aの共通した見解だった。

その彼女が居るというのに、一位になる？

気が狂っているとしたか思えない。

彼はニヤリと不敵な笑顔を浮かべ、

「せめて跳ねの良い踏み台になってくれ」

そう言って締めくくった。

青石は爆豪の顔をじつと見つめる。

爆豪は自分を追い込んでいる。それは強がりなのかもしれない。

けれどそれが格好悪いとは思えなかった。

……。

「第一種目は……コレ！」

「障害物競争……！」

「計1ークラスでの総当たりレース！」

コースの全長はスタジアムの外周約4キロメートル！

さあ位置に着きなさい！ コースさえ守れば、何をしたって構わない！」  
スタートのゲートが開いていく。

青石は生徒を最後方でそれを見守る。

彼女の視線が横を向く。そこには生徒が返ってくるゴールゲートが有った。  
当然そこには誰も居ない。

スタートランプが点灯を始める。

青のランプが灯った瞬間が、スタートの合図だ。

青の少女の思考が加速する。

周囲の世界がゆっくりと見え始める。

フリッカー融合頻度を急激に高めて行く。

ひとまずは思考速度を、通常の3000倍に定義。

彼女は「青」の力を身にまとう。

(行こうか、レギオン)

——本当に良いのかしら、本気を出しちやって？

早すぎて見えなかつたら？

観測と計測が上手くいかなかつたら、瞬間移動扱いで失格？

(大丈夫じゃないかな、相澤さん達、用意は万全だって言ってたよ。)

でも、まあ。ほんの少しだけ抑えた方が良いかな？)

——了解、行くわよ私

(うん、いつでも良いよ、レギオン)

「青の世界」

「スタート!」

お互いを受け入れ合った、青の少女と青の少女の力が共鳴する。

電脳に現実が同化されて、作り変えられる。

架空ゆめが現実になる。

全てがゆつくりになった世界の中、彼女は駆け抜けた。

……。

「スタート……! 『プ……!』」

はあ!? もうゴールのブザーが鳴ってるぜ!

っておいおい、いきなり故障かあ?

……は?」

相澤はため息をついた。隣でわざとらしく驚く“プレゼント・マイク”。

相澤の視線の先には、ゴールゲートを潜った青石ヒカルの姿がある。

ざわざわと、スタジアムにどよめきが走る。

生徒達も何事が起きたのか気になり足を止めている。

「なんだ!? まさかもうゴールしたのか!？」

「いやいや、それは無いっしょ。コースは四キロ。まだ一秒も経ってない無理に決まってるって」

観衆の何処からか聞こえてきた。

「瞬間移動の個性だ!」

「こんなのズルだ!」

すかさずプレゼント・マイクが実況を伝える。

「今しばらく待ちやがれ! エヴィバディ!」

今、解析班がデータまとめている所だぜ!」

その間もスタジアムでは、どよめきが広がっている。

ゴールゲートで青石ヒカルはオロオロしている。

捨てられた子犬のような目で、相澤の方を見てきた。

目を逸らした瞬間、彼女はガーンと顔を硬直させた。

「……来たな」

相澤の手元の端末にスタジアムの外周。そのコースに設置されていたカメラにセンサー。その情報がまとめられて送られてくる。

相澤はマイクを取った。

「あーあー。俺はーAの担任の相澤だ。よろしく。

えー、解析結果を中央モニターに表示する」

スタジアムの中央。何処の観客席から出も見える位置にある、巨大なモニター。そこに様々なカメラの映像が映っていた。

相澤は続ける。

「今回スタジアムの外周、千か所以上にカメラを設置していた。

そして、その全てのカメラに、今ゴールゲートに居る生徒。

青石ヒカルの姿が確認された」

どのカメラもスーパースピードカメラ。

それでも映っているのはほんの一瞬。ブレも激しいものが多い。

だがその青い髪に青い目の姿は紛れもなく、今ゴールゲートに居る生徒だった。

「カメラに加え、通過を感知するセンサー。同様に全て反応が見られた。

探知された順番も、コースに沿っている。

つまりこの生徒は、決められたコースを全部回った。その上で、戻ってきた。

きちんと不正なくコースを守り、障害物競走を完走した。

これが、我々雄英体育祭、実行委員の結論です」

更にスタジアムのどよめきが大きくなる。

生徒達のあつけにとられた表情が青石ヒカルに向く。

大半の生徒が、まだスタートゲートを潜ってすらいない。

なのに彼女は、この一秒にも満たない刹那の間。

全ての道のりを終えて、戻って来た。

そう言うのか。

「有り得ない……!」

「第一種目、障害物競走。」

最初に戻って来たのはI—A。青石ヒカルだ!

オラあ、どうした!?! 勝者への礼儀も忘れちまったか!?!

ホラホラ拍手だ拍手!」

プレゼント・マイクが煽る。

聴衆たちにも映像に出ている確たる証拠が、段々と認識され始めたらしい。

まばらに拍手が起こっていく。やがてそれが満員の拍手となり。

——オオオオオオオオオオオ!!

最後には耳が割れるかと思う程の轟音となった。

「うおおおおおお! なんっだっ! コレ!」



「スゲエ凄すぎるぜー！」

「わっ!? わわわ!?」

青石ヒカルが耳を抑える。

「ほらほら。勝者へのインタビュ어가待ってるわよ」

そんな青石ヒカルの手をミッドナイトが引いて行く。

彼女が青石ヒカルにマイクを押し付ける。

青石ヒカルが戸惑っている。だが決して嫌そうな顔じゃない。

民衆の反応も相澤が予想していた物よりは、好意的だ。

「あ、あの！ ボクは青石……青石ヒカルです！」

両手でマイクを青石は握りしめる。

スタジアムに拡声された彼女の声が響く。

テレビをインターネットを通じ、日本中。それどころか、世界中に広まっていく。

かつて狭い部屋に閉じ込められていた少女。

彼女が名を、世界に刻んだ瞬間だった。

青石ヒカル。その存在を今、世界は知った。

## 第41話

○○テレビでは、人が慌ただしく動いていた。

今日はとうとう雄英体育祭の当日だ。

かのオールマイトやエンデヴァーを輩出した、超が幾つ付いても足りない。

それくらいの有名進学高校だ。

たかが体育祭と侮るなかれ。

歴史を重ねていくにつれ、評価されていき。今やオリンピッククに代わるとまで言われるようになった。

全国から集まった“個性”豊かな彼らが、ぶつかり合う様子は全国で放映される。

そこで活躍し名を広めたヒーローは数多い。

ともあれ、今はテレビ局に限った話では無いが忙しい。

他の局よりいかに目新しく、人々の興味を引く話題を探すため血眼だ。

そしてその成果が、如実に数字として表れるのだ。

視聴率という厳然たる結果として。

必死にならない理由がない。

「今年はどうですかねえ。私はやっぱり三年生を注目したいですが」

「具体的に誰をお前は注目してる。やはりビッグ3か？」

「そっちは当然として、他に成長している生徒が居ないか。」

それもちゃんとチェックしてますよ。やっぱり経験値が違いますからねえ。

一年生は元気が有っても、そこはどうしてもね。2年3年には劣りますよ。

3年生は卒業後も視野に入れてますし、プロはそっち視るんじゃないですか？

実際カメラ2年3年そっちに多く回してんでしょ」

「ああ、まあそうだな」

「とはいえ敵を撃退したつう、一年A組も注目したいですがね」

「大変です、プロデューサー！」

「なんだ」

「とんでもない奴が現れました！一年に！」

とにかく休憩なんてしててる場合じゃないですよ！」

「まあ落ち着け。まだ、第一種目段階だろ？んな大袈裟な……」

「“超新星”が出たんですよ！」

その一言にプロデューサーと呼ばれた男は、途端に速足になる。

例年いつも忙しいテレビ局だが、今年は特に忙しくなりそうだ。

……。

「ヨーコソー！ 青石ヒカル、歓迎するぜ！」

「えと、あの……。よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げる青石。

マイクで拡声された声に、スタジアムが大きくどよめき返事を返す。

その反応におっかなびつくり。おずおずと用意された椅子に座る。

目の前には集音のマイク。ここに喋りかけると先ほどの様に、スタジアム全体に声が届く。

隣には相澤消太、反対の隣には“プレゼント・マイク”が居る。

青石ヒカルは、大人二人に挟まれてる。

彼女はゲストとして、実況席に招かれていた。

正確には招かれるというより、連行されてきた。

誰に連れてこられたかは言うまでもない。

相澤の顔は、いつもよりぶすつとして不機嫌そうだ。

青石達に向けられているカメラに意識が向く。

この実況席の様子も、全国のお茶の間に届いているそうだ。

何千万という人間が画面越しにこちらを見ている。何となく彼女は居心地が悪く

なった。

「ぶつちぎりの実力！ 障害物競走、文句なく一位で帰還だ！ 感想は？」

「あの……ごめんなさい」

「なんで謝りやがる？」

「だって……」

彼女が指さす先には、再び準備を整えだす生徒達の姿。

「やり直す事になっちゃったんでしょ？」

「気にすんじゃないよー！」

“プレゼント・マイク”が背中をバンと叩いて少し痛い。

彼女が一位でゴールした時、生徒の誰もスタジアムから出てすらいなかった。

詳細に吟味した結果、彼女は0.0015秒ほどで帰ってきていた。

そんな時間では普通一メートルも進めない。

ブザーがいきなり鳴った事も有り、生徒全員が何か障害が発生したのだろう。

そう考えて、止まっていた。

だから一旦、仕切り直しになったのだ。

当然それは青石ヒカルは除いて、だが。

「さーて実況していくぜー！」

「アーユーレディ!? 青石ヒカル! イレイザー・ヘッド!」

「……」

割とノリよく返事する青石に対して、相澤は更に不機嫌そうになった。今再び青石ヒカルを除いた一年生全員が、スタートゲートの前に集まっていく。

そして“プレゼント・マイク”が

「ハイ、スタートー!」

開始を告げて始まった。

生徒の集団が動き出す。

密集し団子状態で、身動きするのも、やっとに見える。

ゲートを潜る事すら、大半の生徒に難しい。

それを見た青石ヒカルは思わず声が出る。

「ねえ、相澤さん」

「先生だ、馬鹿野郎」

この会話も余すことなく、実況として全国に放送されている。スタジアム中にも聞こえている。

だが彼女は大した緊張もなさそうに、相澤に話しかけている。

「相澤先生、それにマイクさん。あの出口狭すぎない？ 全然通れてないよ？」

「そうかも知れねえな！ カカツ！」

生徒達はぎちぎちに固まりながら、スタジアムの外に出ていく。

スタジアムの外の様子は、カメラ越しに映像として見る事になる。

「狭すぎるよ！ こんな怠慢だよ！」

「……いや、つまりこれが。最初のふるいつて事だ」

「戦いつてのは、実際に戦う前から始まつてるんだぜ!？」

最初の位置取りから考えて本気にならねえと、スタートする事すらままならねえ。

「そんなもんよ！」

そんな時、先頭集団に動きが有った。

いきなり地面が氷結していく。

氷に足を凍らされた生徒が動けなくなり、その場に止まる。

それは……。

「おっと先頭の轟焦凍！ いきなり地面凍らせ妨害だ！」

凍らされた生徒の足が止まるう！

初見殺し過ぎんだろコレ！」

「ルール違反じゃないの？」

「コレはセーフ！」

青石の疑問に答えたのは、主審のミッドナイト。

確かにコースさえ守れば、何をしたらって構わない。

そう言っていた記憶は有るが。

「うう、痛そう……皆怪我してないといいけど……」

足が凍ってしまった生徒を見て、青石ヒカルが心配の声を上げる。

「そこら辺はバツチリだ！ 不慮の事故にも備えて、コースにはプロヒーローが陰から見守ってるぜ！」

「怪我や、体調不良等、途中での棄権も受け付けている」

相澤が補足する。

プレゼント・マイクはニカツと笑い。

「出来れば完走して欲しいけどな！ 当然救護班も待機中だ。

安心して見ていてくれよ！」

安全対策も怠ってはいないと宣伝する。プレゼント・マイク。

「凍らせた生徒は轟焦凍！ 個性”半冷半燃”！ 左で凍らせ、右で燃やす！

「逆だ馬鹿」……あ？ 逆？ ……右が氷？

どっちでも良いだろ。とにかく正真正銘の怪物だ！  
かいぶつ



「そういや、轟も1-Aだったな、青石と同じクラスだな！」

「うん、友達だよ」

彼のテンションはいつもより更に高い。

まあ騒がしいのはいつもの事だが、実況なので仕方ない。

「おい、イレイザー・ヘッド！ お前のクラスはどうなってやがる!?!」

「俺が知るか」

相変わらずぶつきらぼうな相澤。

それを見て少し青石ヒカルの頬が緩む。

実況席から青石ヒカルは轟焦凍を見つめる。

プレゼント・マイクのうるさい声がスタジオアム中を沸かせていた。

……。

（危なかった！）

緑谷は間一髪、轟焦凍の攻撃を回避していた。

アズライトの警告も有ったが、やはりクラスメイトとして事前に知っていたのが大きい。

い。

「そう上手くいくかよ！ 半分野郎！」

（そりゃあ、かつちゃんなら避けるよね！）

やはり爆豪も回避している。両手から爆発を起こし、その衝撃で宙に浮いている。そのままロケットの様に推進していく。

爆豪が雄英に入ってから見せ始めた、個性を使った移動法。

あれほど使いこなしているとなると、雄英に入る前から、日ごろコツソリ練習していたのだろうか。

腕は足に比べ力が弱い。宙に浮くほどの爆発になると、手への衝撃もかなりのもの筈。

一朝一夕に出来る移動法じゃないだろう。

「あぶなっ……」

緑谷と爆豪の他に、轟焦凍の攻撃を免れた者は、1-Aの者達ばかり。

青石ヒカルという存在に埋もれているが、轟はとんでもない実力者だ。

青石ヒカルを除けば、断然クラスの中で最強は轟。

当然皆、彼の使う氷結を頭に置いていた。だから回避できたのだ。

集団から緑谷含めた、1-Aのクラスメイトは抜け出していく。

緑谷も、前に見える轟の背中を追いかけている。

そう言えば飯田の姿が見えない。この競技なら足の速い彼の、独壇場だと思っていたのだが。

まだ後ろの団子状の集団に、揉まれているのだろうか。

(……ワン・フォー・オール……)

緑谷は個性を使う。周りに人はいるが、先ほどよりまばら。

ここなら人に被害は出ない。

体が力がみなぎる。体を屈め、クラウチングスタートのような姿勢に。

そして一気のための力を全身へと伝達させる。

ばねの様に体がしなり、地面から反作用を受け取る。

そして一気に加速。ライバルたちをごぼう抜きにしていく。

(よし、やれた！ 訓練通りだ！)

シアンからこの二週間特訓を受けた。その際に身に付けた技術の一つ。

ワン・フォー・オール。その更なる発展。

纏った力を更に、よどみなく流れるイメージで回す。

緑谷の体はまだ未熟。だが例え成長したとして、一極に力が集中すれば壊れるのは自

明の理。

——力が一か所に加わらないよう、常に流動し続けるイメージです。

シアンのアドバイスを思い出す。

今まで移動するときは足。殴る時は手に、ワンフォーオールを使っていた。

それを全身に分散させる。

今までは腕や足だけでは耐えきれなかった衝撃を、全身に回して受け流す。そのまま先頭の轟の横を、風よりも早く駆け抜ける。

「っ……！　緑谷あー！」

轟の顔が見えたのはほんの一瞬。

更に加速を開始する。

一步一步が地面を踏み砕く。歩幅も尋常ではなく広い。

人が本来発揮できる力を優に超え、緑谷は突き進む。

そのまま先へと向かおうとするが――

『さあ障害物だ！　第一関門、ロボ・インフェルノ！』

実況の声が聞こえる。

立ちほだかるのは雄英の入試でも使われたロボット。OP 仮想敵。ヴァイラン

ただその大きさが半端ではない。高さ10メートルは優に有るだろう。それが所狭しと並んでいる。

数は10や20でできくだろうか。

けれども、

(アズライト、頼む)

——本当に、良いのね？

(うん)

アズライトが緑谷の痛覚を遮断すると同時。

ワン・フォー・オールの力を更に解放する。

力を凝縮させた右腕が「青」に輝く。

彼女と思考が共有される。「ワン・フォー・オール」と「アズライト」が互いに響き、更に先のステージの力が解き放たれる。

緑谷の腕の根元から肩のあたりにかけて、アズライトと同化する。

同化された部位が、青い結晶に包まれた。

「Plus プラス Ultra ウルトラ」

ドオン！ という轟音がした。大気そのものが、巨大なエネルギーに揺さぶられる。

暴風が吹き荒れる。

緑谷の右ストレートが大気を貫き、衝撃波を起こしたのだ。

『なんだこりゃああ！』

辺りに舞い上がる塵と粉塵。

もろに衝撃を受けた仮想敵ツヴァイランが耐えきれず爆散し。

周囲のそれは、近くのは吹き飛び。遠くのモノも、次々とドミノ倒しの様に倒れてい

く。

緑谷から前方が挟れて、筒状の何も無い空間が出来ていた。

半径数メートルのそこに、緑谷は体を滑り込ませる。

緑谷の右腕は衝撃に耐えきれずにポロポロ。だがそこを結晶が包み同化する。

そして碎けてはがれる結晶。

アズライトの力により、緑谷の腕が完璧に元の姿を取り戻した。

走り抜けながら緑谷が行う治癒。その同化結晶が軌跡として残り、太陽の光で虹の様に輝く。

『強力！ 破壊力なら、もしかしてオールマイイトにも迫るか!?』

体がぶつ壊れるリスクで滅茶苦茶な威力！ だが再生能力も完備！

正体不明！ 何の“個性”だ緑谷出久!?

そしてこいつも青石と同じAだ！ どうなんてんだこのクラスは!?!』

実況の声も緑谷には届かない。

集中力が極限までに高まっている。

視界の要らない情報はカットされ、色彩すらも消え失せる。

緑谷は一気に集団を抜き去り、単独トップに躍り出る。

(アズライト！)

——ええ、後ろは気にしなくてもいい。

今はとにかく前に向かって走って。

緑谷は既に、次の関門を視界に収めていた。

……。

少し時は遡る。

まだ集団がロボ・インフェルノに入る前の頃。

プレゼント・マイクの実況に合わせて、青石は何とかコメントを返していた。

「青石、今、全国から凄え数のメールと電話が来ているみたいだぜ！」

「そうなの？」

「Hey! 全国のリスナー諸君! 取り敢えず、後で質問タイムを設けるから、今は実

況を優先させてもらうぜ！」

イレイザー……は良いか、どうせ答えないし。「おい」

青石、誰が一位になると思う？ トップが考える順位予想を聞かせてくれ！」

相澤が抗議の声を上げるが、マイクはどこ吹く風。

実況席に居るのは三人だが、まともに実況しているのはプレゼント・マイクだけだ。

このイベント、彼にかかる負担が、いささか大きいのではないか？

もし彼が雄英を止めてしまったら、来年はどうするのだろうか。  
青石は少し心配になった。

まあ他に二年、三年の会場でも実況している人はいる。  
人員に当ては有るのだろうか。

「……えと、ボクの予想なんか当てにならないよ?」

「んなのテキストで良いんだよテキストで!」

ちなみに下馬評じゃ、轟焦凍辺りが人気高いみたいだぜ?」

「えと、じゃあ……一位は緑谷君。これは多分、ううん絶対。」

「二位は轟君……ううん飯田君かな? 三位が轟君。だと思おう」

「緑谷? オーそうか……じゃあ選手宣誓で一位になるつつた爆豪は?」

「四位か五位……もしくはそれ以下かな……。」

飯田君は純粹に足が速いし、轟君は強いから。

「多分その二人には勝てないと思う」

「ほー? でも、今見てる分だと、飯田は割と遅れてるな」

確かにプレゼント・マイクの言う通りだ。

飯田の真面目な性格が災いしたのだろうか。集団の中でもみくちやにされ、中々抜け出せていない。



強引にでも出たら、彼も本領発揮出来るのだが。

「うん。勝負は時の運だし結局分かんない。

ちやつ……爆豪君も、爆発を使った柔軟な移動が出来るし、かなりいい勝負になるんじゃないかな？」

……緑谷君以外は」

「おっと！ その緑谷が動きを見せた！

“個性”を使ったか!? 速え速え！ なんつースピードだ！

そのまま一気に轟焦凍をぶつちぎって、単独一位だ！」

スタジアムが一気に沸いた。

緑谷が“ワン・フォーオール”でグングン速度を上げる。

他の生徒を置き去りにしていく。

「緑谷は第一関門に到着！」

さあ障害物だ！ 第一関門、ロボ・インフェルノ！

後続も続々緑谷に続き……なんだこりやああ！」

スタジアムにまで轟音が届く。緑谷が放った拳が嵐となる。

そしてカメラの中の仮想敵が、おもちゃの様**（ワイラン）**にぶつ飛んだ、

緑谷が拳を振るった後、反動で自傷した腕が再生する。

その時に見えた結晶。過去に嫌という程見たものだ。

それは現実を電腦に同化するアズライトの力。

多分緑谷は“ワン・フォーオール”の力をまだ扱いきれない。

その欠点をアズライトを使い、強引にねじ伏せているのか。

(そつか……あのボクは、緑谷君を選んだんだね)

感慨深げに緑谷を見る青石。アズライトの想定されていた使い方は、全ての人に宿る事。

だがそれは叶わない。けれど全ての人とは行かずとも、緑谷は適合して扱えている。元々想定されていた使われ方とは違う。

それでも緑谷のために、もう一人の自分が役に立てている。

その事がとても嬉しく思えた。

「緑谷はもう、第二喚問。『ザ・フォーオール』も軽々突破だ！」

プレゼント・マイクの声に青石は我に返った。

「早えなおい！　というかあれ、一応綱渡りなんだけどな！」

ジャンプで軽々突破していきやがった！　おい綱渡りしろよ」

「あの程度、緑谷君には意味ないよ」

「つていうか緑谷速すぎじゃね？　まだ他の奴ら第二関門についてすらいねえぞ？」

ってどうか話してる間にもう第三関門まで来やがった！

だが、さっきの様子には行かねえぞ？

一面地雷原！ 怒りのアフガ……」

ゴオオン！

映像の中の緑谷が腕を振るった瞬間、画面が揺れた。

緑谷の攻撃で埋められていた地雷が全て誘爆して、大爆発を引き起こしたのだ。わずかな振動か実況席にも伝わってくる。

そしてカメラには爆発の後に立つ煙を背にして、入り口にまで駆けていく緑谷の姿。

「どわあああ！ もう無茶苦茶だ！ 早い早い早い！

早すぎるう、緑谷出久！ 片手の一振りでも埋まったら地雷を一斉除去！

悠々とゴールゲートを潜っていくう！ そしてゴール！」

スタジアムに帰ってきた緑谷の息は上がっている。

映像の中の他のライバルたちは、まだ第二関門すら突破していない。

余りにも圧倒的。だがその緑谷ですら、青石ヒカルには及んでいない。

実際今の競技、全盛期のオールマイトが参加したとしたら、緑谷以上に早くゴール出来ただろう。

「ゴール！ いったい誰が予想できたか!? 大半の予想を覆し、一位になったのは！

「1—A 緑谷出久だ！」

ゴールした緑谷の息は上がっている。

汗も大量に噴き出して、滝の様に流れ出していた。

青石は個性を使う。スローモーションになった周囲。

その中を青石は、スポーツドリンクを一つ手に取る。生徒に配布する水分補給用だ。

そして緑谷の前にまで来て、個性を解除する。

速度が戻っていく世界。

いきなり目の前に現れた青石に、緑谷はビックリする。

「はい、どーぞ」

「……ありがとう」

緑谷は素直に飲み物を受け取る。

ごくごくくと一気に飲んでしまった。もう少し大切に飲んで欲しかったが、あまりに一

生懸命に飲むので何も言えない。

「ふー……」

「どうだった？」

「どうって言われても、今はまだ……必死にやっただけだよ」

「そっか」

次に適当なタオルを個性で創り出して、緑谷に渡す。

緑谷は「ありがとう」と受け取り、汗をぬぐった。

「でも……」

「でもっ」

言いよどむ緑谷。青石は訝しげに見る。

緑谷は静かに己が潜ったゴールゲートを見る。

まだそこには誰も現れていない。

生徒達も必死になっているが、まだ第二関門の途中らしい。

その中では轟が一步抜け出ている形。続いて頑張っているのは爆豪だ。

「……ボクやオールマイイトさんが見ていた景色。

多分、緑谷君にも、少し分かったんじゃないかな」

「そうかな？ ……そうかもね」

誰も居ないゴールをひたすら見続ける緑谷。

何となく青石には彼の気持ちに分かる気がする。

「……寂しいよね。誰も横に並んでくれないのは」

「そうだね……でも手を抜くわけには行かない。手は抜けなかったんだ」

「うん、そうだね。本気で来てくれたんだから、本気でやらないと。」

じゃないと失礼だもんね」

「うん」

それっきり二人は黙りこくる。青石は

「実況が有るから行くね」

といい、一瞬で実況席に戻っていった。

緑谷はひたすら待つ。未だに誰も来ないゴールゲートを。

横に並び立つものが居ない、青石ヒカルが経験していた孤独。その辛さを味わっている。

力を求め、そのトップに立った時。その果てにいったい何が有るのか。

それが緑谷には分かった気がする。

緑谷がゴールして二分経った。

まだ、ゴールに人は来ない。

## 第4 2 話

「いやー圧倒的だね。青石君はもちろん分かっていたけど。

緑谷君もなかなかどうして」

「根津校長、それは？」

「何ってポツプコーンさ。いる？」

根津校長と八木は観客席から体育祭を見物していた。

オールマイトの姿は痩せこけた姿だ。

この姿がオールマイトだとは一部の人間にしか知られていない。

もしマッスルフォームで観客席に居ようものなら大変だ。

騒ぎで競技どころではなくなってしまう。

「いや結構ですが……本当に良かったんですか？」

彼が聞いているのは当然、青石ヒカルの事だ。

「正直な話。まあ、良くは無いね。

青石君も、そして緑谷君も。力が有る生徒が居るのは当然嬉しいけどさ。

パワーバランスが崩れるのは良くない。

強いにしても、そうだね。轟君くらいが丁度いい。

爆豪君みたいな例外じゃないと、挑む気すら湧かなくなってしまうからね。向上心がなくなってしまうのは、良くない」

「……では何故参加させたのです。青石君を。」

緑谷少年は、まだあの段階では分からなかった。ですが青石君は違う。

理由なら幾らでも付けられたはず

このままでは彼女が圧倒したままで終わる。

雄英体育祭が彼女の力を、誇示するだけのイベントになってしまう。

それは最初から分かっていた筈では……」

「まあ同情してたつてというのが大きいかな。」

でも八木君。君の心配は無用さ。

きっと青石君は次の競技で敗退する。それこそ何も出来ずにね」

「は……？ そんな筈無いでしょう……彼女の力は本物だ。」

彼女にかかれればハチマキなど、それこそ一瞬で」

「そういう問題じゃないさ。……まあ見ていたらすぐに分かる筈だよ。」

多分見られるはずさ。人間の悪意って奴をね」

校長の寂しげな笑みに、オールマイトは不安を隠せない。



先ほどの校長の言葉。もう一度思い出す。

何も出来ずに敗退する。何も出来ずに。

次の競技は騎馬戦。チームは15分の交渉時間を使い、自分で作るないし入れて貰わなければならない。

(……待て、騎馬戦は障害物競走から上位42名。

そして騎馬の人数は2〜4人……。

……！ まさか、いやしかし……！

生徒達はその事に、果たして気付くか？ 気付いたとして、実行するか？)  
オールマイトの予感の後には的中する事になる。

……。

「くそっ……くそー！」

遠くで爆豪が悔しがっている様子が見えた。

青石ヒカルはぼけーっと次の競技の説明を待っている。

正直彼女は自信が有る。どんな競技が来たところで負ける筈無い。

自惚れているつもりすらない。

現に彼女は周りを圧倒できる個性ちからを持っている。

「予選通過は上位42名！ 落ちちやった人にもまだ見せ場は有るわ。」

安心しなさい！」

ミッドナイトの説明が始まった。

結局障害物競走の結果は、概ね予想通りだった。

一位は青石ヒカル。二位が緑谷。三位に轟。四位が爆豪だった。

青石はつきり飯田は三位辺りになると思っていたのだが、6位だった。

それでも十分上位だ。

「そして次からいよいよ本選よ！ここからは取材陣も白熱してくるよ！」

第二種目は……騎馬戦！」

「……騎馬戦？」

青石ヒカルは騎馬戦を知らない。頭にクエスチョンマークが浮いている。

実際に浮いている訳では無いが、第三者から見ても明らかに分からない風の顔をしてい

る。  
「参加者には2〜4人のチームを組んで、自由に騎馬を作ってもらおう。

基本は普通の騎馬戦と同じ、けれど違う点は……。

先ほどの結果に従い各自に、ポイントが振り分けられることね」

「ポイント制だ?!？」

青石は昨日見た、アニメの登場人物のセリフを使ってみる。

全身が白い人で、イマイチ頼りにならない人だった。

最後は仲間を庇って死んでいくが、その仲間も結局死んであまり良い所が無かった。

一緒に見ていたシアンはきつぱりと「無能ですな」という始末だ。

でも青石は例え無能でも、一生懸命だった人なので割と好きだ。

頼りにならないとは感じたが。

それはさておき、ミッドナイトの説明は続いている。

「ポイントは下の順位から5ポイントずつ振り分けられるわ。

42位は5ポイント。41位は10ポイント。という具合にね。

そして――」

ミッドナイトの視線が青石に向けられる。

「一位に与えられるポイントは1000万！」

一斉にこちらに向けられる視線。青石は少したじろぐ。

だがそれが何だというのか。

青石は心の中で自分を鼓舞する。

ミッドナイトは更に説明を続ける。

「競技の制限時間は15分。振り分けられたポイントの合計が騎馬のポイントとなり、

騎手がポイントを表示されたハチマキを装着。

終了までハチマキを奪い合い、ポイントを稼ぐのよ。  
取ったハチマキは首から上に巻く事。

そしてハチマキが全部取られても、騎馬が崩れても、失格にはならない。  
最後の最後までチャンスは有るわ！

当然、個性の使用は有り。でも悪質な崩し目的の攻撃はレッドカード！

そして、最終的にポイントが多かった上位4チーム。

その騎手とメンバーが、決勝へと駒を進められるのよ！」

「ふむふむ……」

「それではこれより15分。チーム決めの交渉時間とします」

「ミッドナイトさん！」

青石は手を上げて質問した。

「何？」

「もし15分で、チームに入れなかった人はどうなるんですか？」

まあ、自分がそうなるとは思っていないが、一応聞いてみた。

ミッドナイトは薄く笑って。

「……ええ、当然失格となります！ 戦うまでもなく敗退です。

せめて何処かに入れてもらえるよう、交渉頑張りなさい

これは君たちのコミュニケーション能力も、同時に計っているのよ」  
「大丈夫です！」

騎馬かなんだか知らないが、要はハチマキを取られなければいいのだ。

実力は皆分かってくれたはず。自分が居るだけでそのチームの勝ちも確定だ。

「——では、交渉時間始め！」

……。

「ヒカルが敗退する？ ……本気でおっしゃっているのでしょうか。法月様」

「少し考えれば分かる事だ。100%ではない。絶対はない。」

だが、そうなる確率は低くない。そう踏んでいる」

法月の言葉に耳を疑うシアン。

「考えても見ろ。他の生徒から見たら青石ヒカルとはどのような存在だ？」

正体不明の訳の分からん個性を振りかざす、素行不良のならず者だ。

その分際で先生達からは目を掛けられている。たかが個性に恵まれたぐらいで。

大半の生徒はそう思っているのだ。

だとすると、集団競技の中に放り込むと、周りはどういう反応を示すと思う？」

「……彼女と組めば勝つのは確定します。それでも組む人はいるでしょう」

「それがそうはいかん。奴らは曲がりなりにもヒーローを目指している。」

各々必死だ。勝ったその先の事も考えている。

仮に青石ヒカルと組んで決勝に上がったとしても、彼女がいる限り優勝は不可能な話だ。

そして彼女がいる限り、雄英体育祭は正常な運営など出来ん。

奴が勝つことが誰にでも分かり切っているからだ。

それではエンターテインメントにはならん」

「……それが、なにか」

「よく考えろシアン。なぜ騎馬戦に出場できる人数が42人なのだ？」

最大で4人のチームが組めるというのにだ。

なぜチーム決めの交渉に、15分の制限時間を設けていると思ってる?」

「……まさか、生徒達がそれを結託して行うとでも」

「雄英は進学校だ。それもトップレベルのな。

その程度の頭、皆持ち合わせている。

条件は整った。やらない理由があるまい。

まあ奴がチームを組めたら組めたで、考えは有る。

それはその時の想定の対応をするまでだ。

可能性は低いと思うがな」

「っ！……ヒカル！」

シアンは走った。今恐らく青石ヒカルは絶望の中に居る。

例え何も出来なくても、少しでも彼女の支えになりたかった。

観客席から見ると出来なくても、何もしないという選択肢は彼女の中に無かった。

……。

「ねえ!? なんで誰も組んでくれないの……ねえ!?」

青石ヒカルが入れてくれるチームを求めて、右往左往している。

その様子を見て、物間寧人ものまねいとは、ほくそ笑んだ。

(くくく……奴はここで落ちる。皆の結束の力でね！)

相変わらず青石ヒカルは、ただ彷徨っている。

(くくなぜ奴は気付かないんだろうね。なぜ皆入れてくれないか。

入れる筈無いだろう！)

……簡単な話。まず騎馬戦に参加できる人数。

それが4 2人という中途半端で、不自然な数だった。

この騎馬戦では最大で4人のチームが組める。

だが三人以下の人数で組むメリットは、ほぼないと言っていい。

一人入れるだけで、その個性で対応できる幅も広がるし。

騎手を支える重量も分散できる。人数は多いに越したことはない。

だけど全員が、4人チームに入る事は出来ない。

総勢が42人なわけだから。4人ずつで組んでいくと、2人余る計算になる。

つまりこれは、組むことを悠長にしている奴が、炙り出されて不利になる仕組み。

（そういう事）

青石ヒカルは辺り構わず声を掛けている。だが誰も取り合わない。

物間がその策を広げておいたからだ。

（チームは2人から組める。つまり逆に言うと、他の全員で結託し。

1人しかチームに入れていない状態を作れば……。

その1人だけを失格に追い込むことが出来る！

そいつがどれ程の力を持っていようとね。

その状況を作るには、青石を除いた41人。

その41人全員が、チームに入っている状況を作る。

つまり4人チームを8組。3人チームを3組作ればいい！

これなら青石ヒカルを除いた、41人だけがチームに所属して。

青石ヒカルだけを排除した形になる。



全員で口裏を合わせていけば、不可能な話じゃない。  
皆それに気づいている。

それに気づかない残念な頭の人間なんて、ここにどれだけいるんだろうね。  
皆あの力を恐れている。彼女を排除できる、絶好の機会を逃すはずがない。  
……本当は緑谷出久も排除したかったが、それは出来ない。

やつまで炙り出そうとして、4人チームを10組作って余りを2人にしたら。  
その残った2人がチームを作ってしまうからな。

だから緑谷は妥協するしかなかった……)

「ねえ!?! 誰か! ねえ!?!」

(だが、青石ヒカルは排除できた。十分!

ははは、怯えろ、竦め、個性の性能を活かせぬまま、死んでいけ!)

……。

「どうして!?! どうして誰も組んでくれないの!?!」

青石は組んでくれる人を求めて彷徨う。

最初は轟に言ったが、彼は青石と戦う事を望んでいる。

そして飯田を含んでいる、4人チームを既に組んでしまっていた。

だから諦めた。緑谷も麗日も、すでに彼らで4人チームを結成していた。

八百万も既に組んでしまっていた。

もうこの時点で、仲のいい知り合いとは組めない。

彼女は手当たり次第に声を掛け始める。

だが全然ダメ。

何処の誰もチームに入れてくれない。

「ヒカル！」

観客席から声が聞こえてきた。何回も何回も聞いてきた声。

紛れもなくシアンだった。

青石はシアンも間近に寄る。

手を互いに伸ばせば触れられる距離に来る。

「シアンさん！ あのね……誰も、誰も入れてくれないんだ！

ボクどうすればいいの!？」

「ヒカル落ち着いてください。時間は後、どれくらいありますか？」

「……五分くらい」

「ヒカル、あなたは強い。あなたを入れたら絶対に勝てるという事。

それは皆分かっています」

「ならどうして!？」

「……恐れているのですよ」

「恐れている?」

「あなたには決して勝てない、次の決勝を踏まえた上で、勝てない相手を確実に蹴落とすための選択をしている。」

「そういう事です」

「そんな……それじゃボクはどうすれば……」

「……今は高圧的にならず、下手に出るしか有りません。」

そして、知り合いをとにかく探しなさい。

あなたの人となりを深く知るものなら、助ける選択をしてくれる人も居る筈です」

「……分かった。とにかく頑張ってみる」

「はい、頑張ってください。ヒカル」

「うん! シアンさんありがとう!」

青石ヒカルは再び、生徒達の群れの中に飛び込んだ。

「誰か! 誰か組んでくれる人は居ませんか!? お願いします!」

彼女の声が、生徒達の喧騒の中消えていく。

彼女と組んでくれる人は、まだ居ない。

## 第43話

「お願い！ お願いします！ どうかボクをチームに入れてくださいー！」  
「オイオイ、こりやどういう事だ!？」

解説のプレゼント・マイクは驚きの声を上げている。

スタジアムも何とも言えない困惑した雰囲気に含まれていた。

15分のチーム決めの交渉時間。それも今、残り五分を切った。

どのチームにも所属していない生徒は、青石ヒカルだけ。

既にスタジアムでは、4人チームが8組。3人チームは3組出来上がっていた。

つまり青石ヒカルを除いた41人は、全員チームに所属している。

障害物競走でぶつちぎりの1位だった彼女は、3人チームの方に寄るが明らかに敬遠されている。

どのチームも彼女だけは、お断りと言わんばかりの表情だ。

いや、一部1-Aの生徒は苦渋の表情になっている。

助けてやりたいが、助けてあげられない。

言葉に出なくても目がそう語っていた。

「一体何が起こつてやがる!？」

「少し考えれば分かる事だろ、これも立派な戦術だ」

「戦術う?」

相澤はため息を吐く。

彼も絶対にこうなると分かっていたわけでは無い。

だが予感是有った。

青石ヒカルは確かに強い。世界に類を見ない凶悪な個性の持ち主だ。

だが何でも出来る個性だからと言って、本当に何でも出来る訳では無い。

今の状況がいい例だ。

彼女の個性は万能であつたとしても、決して全能では無いのだ。

「お願いします! どうかボクを……」

青石ヒカルは藁にも縋る勢いで、チームに入れてほしいと嘆願するが。

「しつこいんだよ!」

「あつ……」

邪険に振り払われる。呆然となる青石。スタジアム中でどよめきが始まる。

「おいイレイザー・ヘッド! 何が起きてやがる?」

「……ここに居る生徒全員。青石ヒカルと組むことに、メリットが一つも無い。」

そう判断したという事だ」

「はあ!? あんな出鱈目な事が出来る奴だぜ! 組んだら勝ち確じゃねえか!

組むしか普通ないだろ!」

「そうだ、組めば勝ちが確定する。だからこそ、青石と組むメリットがない」

「……どういいうこった」

相澤の言葉にプレゼント・マイクは訳の分からないと言った感じに聞く。

スタジアムの聴衆たちも、皆聞いているようだ。

相澤はすつと息を一度吸って、言葉が続ける。

「ここに居る生徒は、全員お遊びでここに居るんじゃない。

ヒーローになるために、ずつと努力を重ねてきて、雄英に合格し。

ようやく、この舞台に立つことが出来たんだ。

何十人、何百人も蹴落とした末にな」

「それが、どうしたって言うんだ」

「分からないか、青石と組んで勝つのは、確かに簡単だ。

だが、そしたら。スカウト達……プロヒーローからはどんな目で見られると思う?」

「あつ……」

ようやくプレゼント・マイクは得心した感じになった。

だが彼は悔しそうに眼下の生徒達を見る。

まるで今の状況は、青石ヒカルに対するいじめだ。

けれど、責めるにも責めようがない、そう思っているように見える。

「勝ち確定の勝ち馬にのり、悠々と決勝に進んだとしても、世間からは評価されない。

それで評価されるのは青石であって、組んだ自分ではない。

これは体育祭だが、各々が真剣に自己アピール出来る絶好の機会でもある。

そして在学中3回しかない。

各自、真剣だ。だからこそ、みすみすそれを潰すような真似は絶対にしない。

青石と組んで木偶の坊になるような、馬鹿な選択が出来ない」

もう、交渉する気も無くなってしまったのだろうか。

青石はその場に両膝を着いてしまった。

両手で顔を覆っている。泣かないように耐えるので必死のようだ。

「……出る杭は打たれるって奴か？」

「平たく言えばそういう事だ。あいつは目立ちすぎた。

絶対に勝てない敵だと思われたのが、運の尽きだ。

生徒全員から共通の敵として、認識されてしまった。

そして、おあつらえ向きの騎馬戦のルールだ。

このルールなら全員で結託すれば、確実に一人を狙い撃ちして、失格に出来る。青石を倒せる機会はここしかない、そうあいつらは考えてる筈だ」

先ほどから青石は顔を覆ったまま、一步も動いていない。

自らがどんな状況に置かれてしまったのか、それを理解したのだろう。

彼女は強かった。雄英のどの生徒よりも確実に。

彼女は一生懸命、全力でやったのだろう。だが、そこには賢明さが足りていなかった。己がやった事を、周りがどの様に受け止めるのか。

それを予見する力が欠けていた。

何のことは無い。

彼女は「分り合いたい」という願いを持ちながら、人の事を何も分かっていなかった。た。

だからこそ起きた悲劇。

結託して、彼女を失格に追い込む生徒を相澤は責められない。

これは彼らに出来る、「最善」の選択肢だからだ。

青石の手から、抑えきれない涙が一滴こぼれた。

「おい！ ふざけんな！」

「こんな真似して何がヒーロー志望だ!? 今すぐ止めちまえ！」



「卑怯者！」

彼女の涙が心に來たのか、会場内でブーイングが巻き起こる。

「おいおいエヴィバディ！　ちっと冷静になれよ！　気持ちは分かるがな！」

プレゼント・マイクの呼びかけにも、会場内の熱は収まらない。

「残り一分よ」

ミッドナイトが冷酷に残り時間を告げる。

会場内のボルテージは最高になった。主に怒りのだが。

オールマイトをも超えるだろう逸材が出てきて、その活躍を見られる。

皆そう思っていた。

別に何も悪い事は何もしていない。

だが彼女は強すぎる。ゆえに、排除される。

その理不尽に皆、不快感を露わにしているのだ。

「これがヒーロー志望の奴らがやることたあ呆れるぜ！」

「こんなやり方しか出来ないのかよ!?　ああ!？」

相変わらず観客席から飛んでくるのは罵倒雑言。

このような事態は、雄英体育祭において例にない。

生徒達は困惑しながらも、決して態度を変えようとはしない。

「残り30秒！」

ミッドナイトが告げると、青石は立ち上がる。

顔に流れる涙を拭って、彼女の元へと歩く。

そして、彼女は

「ミッドナイトさん……ボク」

「——オイ、待ちやがれ！」

青石はグイッと肩を引き寄せられた。

そこには……。

……。

「お願い！　お願いします！」

遠くで青石ヒカルがチームを求めて、あてもなく歩き回っている。

足を棒の様に動かし、目には涙すら滲ませている。

爆豪はそれを見て小さく舌打ちした。

爆豪も回っている話は耳にした。

青石をどのチームにも入れずに失格に追い込もうという話だ。

確かに全員で青石をチームに入れなければ、最大の敵は此処で消える事になる。

だが爆豪は決して、納得などしていなかった。

(何の冗談だよこれは……ああ!? ふぎけんなよ！)

んな1位に何の価値が有んだよ！)

爆豪が求めているのは1位だ。

だが、ただ1位になっても意味はない。

彼の中で明確に基準が有る訳ではない。

けれど完膚なきまでに相手を上回り、勝つことに意味がある。そう考えている。

その為には青石ヒカルという存在。それを何としても、叩きのめさなければならぬ。

あのムカつく、とぼけた女をぶつ潰し、雄英体育祭で1位になる。

周りがどう思おうとも、そうするのだと決めていた。

だが今のこの状況はなんだ？

このままでは戦うまでもなく、謀略で青石ヒカルは敗退する。

確かに青石ヒカルがこのまま消えれば、爆豪も1位に近づく。

それは確かに理解できる。

客観的に見て爆豪も、自分が青石にまともに勝てる確率は0に近い。そんなことは理解している。

「残り30秒！」

ミッドナイトが残り時間を告げると、青石はトボトボ歩き出す。主審のミッドナイトの近くに行つて、口を開こうとしている。

おそろく棄権しようとしているのだろう。

彼女の行為は爆豪にとって、とても許しがたいものだった。

(……！ クソツ……！ クソが！)

俺は欲しいのは……んなぬりい1位じゃねえんだよ！)

「オイ、待ちやがれ！」

……。

「着火マン……？ 何？」

青石の肩を掴んだのは爆豪だった。

彼女は爆豪の後ろを見る。彼は既にチームを組んでいた筈だ。

しかも4人チーム。爆豪の他に、切島、芦戸、瀬呂のメンバーのチームだ。

「俺がてめえと組む」

「何を言ってるの……？ ……爆豪君はもう4人チームに入ってるんでしよう。」

5人チームは無理……」

「チツ……！ だからそのチームを抜けて、俺が組んでやるって言ってるんだよ！

オイ、主審！ 騎馬は2人から組めるんだよなア？」

「ええ、そうよ……まさかあなた」

ミッドナイトが言いよんだ。爆豪は言葉が続ける。

「ああ、俺あこいつと騎馬を組む、文句あるか自販機女！」

爆豪が睨み殺すかのような目つきで、青石を睨む。

青石は今見ている物が信じられない。

誰も助けてくれないと思っていた。

まさか手を差し伸べてくれた人が、

緑谷でも麗日でも、飯田や八百万じゃなく。そして轟でもなく。

爆豪だなんて、とても信じられなかった。

「……ううん、有る筈無いよ！ 組んでくれるの!？」

「だからそう言っただろうが！ しつげえ！」

「わあ……！ ありがとう！」

青石は感激のあまり爆豪に抱き着いた。公衆の面前だという事も忘れていた。

スタジアムには当然マスコミも居て、カメラも回っていた。

だが、青石はそんな事は関係ないと言わんばかりだ。

「何しやがる！ このっ！ 放しやがれ！」

爆豪がジタバタするが、青石は笑顔のまま放そうとしない。

そして……

「ハイ、制限時間終わり！ では準備したのち、さっそく開始するわ！」

「はいー！」

青石は元氣よく返事をする。

目の端からこぼれた涙は、先ほどまでと違う。

それは嬉しい気持ちだが、強すぎる故の涙だった。

……。

『よーし組み終わったな！ 準備は良いかなんて聞かねえぞ！』

プレゼント・マイクの実況が響く。

青石は爆豪の背中に捕まっている。

男女の二人騎馬だ。外野から、カップルだの冷やかしの声が聞こえてくる。

だが青石の興味はそこには無い。

「ねえ、着火マン。何でボクと組んでくれたの？」

ボクを蹴落とすのに、最大のチャンスだったのに」

「……」

爆豪は答えない。青石からは爆豪の顔は見えなかった。

だが密着している体から、心臓の音がトクトク伝わってくる。

「教えてくれてもいいのにー」

体をゆさゆさする。爆豪が止めやがれと声を出して、動くのを止める。

「……意味がねえんだ」

「うん？」

「てめえは決勝で俺が直々に叩き潰す……！　そして1位になる！」

そう決めてたんだよ！

そうじゃないと意味がねえ。あんなやり方で、てめえが落ちて俺が1位になつても。

誰も俺を1位とは思わねえ、誰よりも俺が認めねえ」

「そっか……そうなんだね」

爆豪の1位への執着は、一体どこから来るのだろうか。

青石には分からない。気付いたら“力”は持っていた。

ただ力が有つてもどうしようもない理不尽に苦しんでいて、力なんて意味が無いんだと。

そう思っていた。

彼がセルリアを殺したことに對しても、まだ青石は受け止め切れていない。

状況が状況だった。仕方なかったと思う。

けれど青石は心のどこかで、爆豪を憎んでいる。

そう言えば、セルリアについて、クラスメイトは記憶修正を受けているみたいだった。だけど何となく青石は。爆豪だけは、セルリアを覚えているのではないか。そう思った。

だから試しに、彼女の名前を耳元で囁いてみる。

「——セルリア」

ビクツと爆豪の体が反応した。密着している今だから分かる。

顔を見らずとも爆豪は

「てめえっ……!?!」

「……覚えていてくれたんだね……ううん、大丈夫。仇を討とうなんて思っていない。

セルリアはそれを望んでないって、そう思うから」

「チツ！ ……後悔なんてしてねえぞ」

「うん、仕方なかったんだよね」

「……」

「もしかして爆豪君がボクと組んでくれたのって、セルリアの……」

「それは無え」

きっぱりと爆豪は言い切った。「そっか」と青石は返す。

爆豪の青石を支える腕に力が入る。



『いくぜ残虐バトルロイヤル！ カウントダウン！』

「とにかく……俺が狙うのは完膚なきまでの1位なんだよ！」

おい自販機女。てめえ“個性”使うな」

「えっなんで!？」

青石は個性を使って、あつという間に大勢を決してしまおう。

そう思っていた。ハチマキなんて青石がその気になれば、息をするように簡単に手に入る。

青石が個性を使って、いったい何がいけないというのか。

「分かんねえのか？ てめえの力で勝ち上がったっても、誰も俺の勝ちと認めねえ。

誰より俺が認められねえ。この騎馬戦。てめえは俺の背中に乗るだけにしろ。

俺の力だけでやる。全部俺がねじ伏せる！」

「そんな……無茶苦茶だよ！」

「余計な事言ってるじゃねえ！ 始まんぞ！」

「そんな！ 横暴だ！」

『スタート！』

マイクの実況からスタートの合図が出される。

第2種目の騎馬戦が始まった。

青石は個性を使わない。

首に下げるのは1000万ポイントと2000ポイントのハチマキ。

周囲からそれを求めて騎馬が殺到してくる。

「オラあ！ 死ぬ！」

爆豪の個性が文字通り火を噴く。

彼のたぐいまれなセンスにより、青石の体重もなんのその。

爆風の反動で宙に舞い上がり、空を自由に駆けていく。

青石は怖くてずっと目を閉じていた。

爆発する音。何かが殴られたような鈍い音。様々な音がせわしなく360度、全方位

から聞こえてくる。

「自販機！ さっさと首に下げやがれ！ てめえが騎手だろ！」

さっそく分捕ったハチマキを、押し付けてくる爆豪。

爆豪の片手がハチマキで塞がり、二人は地面に着地する。

急いでハチマキを受け取る青石。両手が空いた爆豪は再び宙に舞い上がり、次の獲物

を探していく。

「着火マン……！ ボク達のこのポイント守れば勝ちなんだよ!？」

「そんな無茶しなくても……」

「言っただろうが！」

再び彼は別の騎馬に戦いを挑む。

青石を背に乗せているにも関わらず、彼は変幻自在に空を跳ぶ。

「俺が狙うのは、完膚なきまでの1位なんだよ！」

「……馬鹿」

言葉に反して彼女の言い方は優しい。

彼女は爆豪の背中に負ぶわれている。

目を閉じて離れないように、しっかりと掴まっていた。

## 第44話

「くおおおおお！ 何故だ!? 何故!?

よりもよつてこんな時に腹が痛くなるんだよお!?

物間寧人はもだえ苦しんでいた。

彼はスタジアムのトイレ。その個室の便座に、腹を押さえながら座り込む。腹の中身が踊り狂っている。

物間も十分注意していた。

体調管理はヒーローの基本だ。気を使わない筈がない。

だがしかし。今物間を襲っているのは間違いない下痢。

腹も減っていないのにぎゆるぎゆる音が鳴る。

下腹部の腸がのたうち回る。

「ああああ！ ふざけんなよお！ あああああ!」

それがとある人物の“個性”によって、もたらされたモノだと知らず。

彼はひたすらトイレで苦しみ続ける。

物間のチームは、彼を除き騎馬戦を行う事になる。

……。

「首尾は？」

スタジアムの一角にある個室。

そこに居たのは法月将臣。そしてもう一人は、中性的な顔の人物だった。

その人は彼か、果たして彼女か。

男か女かは見た目だけでは分からない。

「バッチリつすよ、とつつあん！ 今頃、取って置きの下痢ピーで苦しんでいるつす！

しっかし彼も運がないつすねー……」

「安全を確保するためだ、仕方があるまい。こちらとしても、青石ヒカルの参加は意外だった。

想定してはいたがな。それに……」

「それに？」

「……ともかく、奴は排除する必要があつた」

法月の言葉に、その人物は頷く。

「物間寧人、個性ものまねいと「コピー」……つすか。

いやー……そつかー。確かにこれはこれは。

もしうっかりアズライトをコピーしちやったら、どうなつてたんすかね？」

「誰にも分からん。だがそのまま物間が“昏睡病”になる可能性は十分にあつた」  
「もしかして最悪、もう一度あの災害が？」

法月は頷く。

「あつたやも知れん。予期しうる事故は避けなければならん」

「ま、そうつすね。それにしても……あーあ、貴重なストックだつたんすけどねえ。

こんな事で使うのは勿体なかつたというか、何と言うか……」

「また溜めればよい」

「人の気も知らないで！ こちとらストックするのにも、必死なんすよ！

簡単に言わんで下さい！」

彼らは水面下で予期しうる災害を回避するために動いていた。

彼らの暗躍を知る者は、他に誰も居ない。

雄英の平穏は、一人の生徒を犠牲にして。秘密裏に、また守られていた。

……。

人は生まれながらに平等じゃない。

それは皆が知る社会の現実。

緑谷出久と爆豪勝己は幼馴染だ。

爆豪はあらゆるセンスがずば抜けている。

何でもやればできてしまうタイプであり、彼の自尊心はそれは凄いものだった。

自信に満ち溢れた爆豪の姿は、緑谷にとって憧れだった。

「逃げてんじゃねえよ糞ナード！」

「かつちゃん……！」

緑谷の目が青く染まる。

“ワン・フォー・オール”の力を彼は一部だけ放った。

ハチマキに手を伸ばしていた爆豪が風圧で吹き飛ばす。

「ぐっ！ クソ！」

「うわああああ!？」

だが器用に空中で一回転し態勢を整えて、着地した。

青石も、何とかしさがみ付いている。

『さあ、始まった騎馬戦！ 15分の間ハチマキを奪い合う残酷バトル！』

開始早々最初にハチマキを奪ったのは爆豪チームだ！

そのまま緑谷チームに襲い掛かる！ キレッキレだ！

だが……青石が個性使う気配がねえな？

あつと言う間に、全部獲っちゃうものだと思ってたんだがな！』

『爆豪から止められてんだろ。』

さつきも言った通り、青石に頼りきりで勝っても評価はされない。

爆豪は自分の力だけで、この騎馬戦勝つつもりだ』

『おいおい、それじゃむしろ、お荷物抱えてむしろハンデじゃねえか!』

『……そうかもな』

『おっとこれは! その爆豪が先ほどから執拗に緑谷チームを狙う!』

ていうかアレ騎馬って言ってるのいいのかよ!』

「アリよ!」

『マジか!』

ミッドナイトはハッキリと言い切った。

主審がそう言うのならそうなのだろう。

その最中、爆豪と青石の二人が、執拗に緑谷を狙っていた。

正確に言えば爆豪が、だか。

「ちよつと着火マン! なんでそんなに緑谷君狙うの!」

一旦落ち着いて他を……」

「うるせえ! 口出しすんな! お前は俺の背中に乗つてりやそれで良いんだよ!」

「馬鹿あ! もう腕キツイよ……辛いよ……」

空中から聞こえる声に視線を向ける。



青石ヒカルは、爆豪の背中に引っ付いているだけだ。

彼女は爆豪の両手が自由になる様に、胴体の方に手を回している。相当きつくて疲れる体勢の筈だ。

が、歯を食いしばって何とか維持しているようだ。

一応あれでも騎馬と認められるらしい。

というか運営が、二人騎馬の存在自体想定していなかった。そのように見える。実際、具体的にどの様に騎馬を組むのか、指示は一切なかった。

それも雄英の自由を尊重する校風か。あるいは自分の頭を使って、ルールの隙間をつく努力をしろという事か。

いずれにせよ、爆豪達は変則的ながらも、騎馬と認められている。

と、青石が動きを見せた。一瞬で何やら紐らしきモノを作り出す。緑谷の意識に緊張が走る。だが彼女はそれを。

「えいやっ！」

爆豪の胴と、青石自身に一瞬でグルグルに回して固定した。

まるで抱っこ紐だ。

彼女が紐を括りつける様子は、まるで見えなかった。

それこそ一瞬で巻き終えていた。

掴まっている労力から解き放たれて、彼女は先ほどまでより余裕のある表情になる。爆豪は舌打ちしながら、青石に何事が言っている。

青石はそれに頷く。

そして爆豪の両手が点火して、再び緑谷の方に突撃してきた。

「デク君！」

麗日の焦った顔。

「緑谷任せる！ 俺の黒影ダークシャドウは奴と相性が悪い……」

同じチームの常闇踏陰とこやみふみかげに緑谷は頷く。

「分かっているっ……！！」

「私のベイビーは!？」

「まだ使える状況じゃない……！ かつちゃん相手に上に飛んでも、マトになるだけだ

……！！」

「ええっ……こんな筈じゃあ……」

そして四人目のメンバー、発目明はつめめいは不満そうな表情をしている。

彼女はサポート科の生徒だ。

緑谷に目を付けた彼女。どうやら自分の技術力を売り込むチャンスだと思っただけだ

い。

注目を浴びる緑谷のチームでサポートアイテムで活躍し、一気に注目を集める。その予定だった。打算バリバリだ。

でも緑谷はそれを汚いとは思っていない。

自分の好きな事に一生懸命な姿勢は、短い時間でも嫌という程伝わってきた。

爆豪のいつもの大ぶりの右手の一撃。

それを緑谷は受け止める。

「クソデク！」

「かつちゃん！ いい加減しつこいんだよ！ 勝てないって分ってるだろ！」

「ああ!?! ……てめえいつからそんなに偉くなりやがった？」

調子乗ってんじゃねえ！」

空中から襲い来る爆豪。それを緑谷は迎え撃つ。

周囲の状況も同時に気を配らなくてはいけない。

漁夫の利をねらうチームも居るだろう。

爆豪と戦闘を繰り広げる。

あくまで、ハチマキを奪い合うための小競り合いだ。

緑谷の思考が加速する。アズライトの力により、フリッカー融合頻度が高くなり。

体感上、時間が通常の10倍にまで引き延ばされる。

何度も伸ばされる爆豪の手を、緑谷は軽くあしらう。

アズライトで思考力を強化して、ワン・フォー・オールで実際の動きを補強する。

予測出来ない変則的な攻撃も、今の緑谷は“見て”から適切に反応できる。

(くそっ……こうなったらフルカウルで……いや駄目だ)

今すぐ爆豪を吹き飛ばすことは簡単だ。

だがそれは出来ない。

悪質な崩し目的の個性の使用。それがどこまでOKで、どこからNGか明確にされていない。

それはミッドナイトの裁量で全ては決まる。

だから緑谷も、あまり派手なことには出来ない。

レッドカードを貰い一発退場は避けたいところ。

個性の使用は、あくまでハチマキの奪い合いで使用しなければならない。

「おらあー！」

爆豪が片腕から爆発を起こす。それを緑谷は、上半身をひねって躲す。

だがそれは目くらまし。

続いて反対側の手が、緑谷のハチマキに伸びている。

「やらせるかー！」

緑谷はフリッカー融合頻度を更に上昇させる。急激にゆっくりになる景色。

爆豪の動きを正確に、時間をかけて見切る。

思考速度は通常の20倍。

高まった反応で、爆豪の腕をしっかり掴む。

スローモーションになる世界の中、緑谷は“ワン・フォー・オール”でいつも通りの速さで動く。

“ワン・フォー・オール”の力は、そのまま速度にも直結する。

通常では不可能なレベルの運動を“ワン・フォー・オール”は可能にしていた。

緑谷は爆豪の腕が折れないように、慎重に力を調整する。

本当は青石ヒカルの手を掴みたい。

だが、爆豪の背中の中の彼女。その首のハチマキに僅かに手が届かない。

「仕方ない!」

爆豪の持つていた慣性を利用して、そのまま受け流して放り投げた。

「クソがあああ!」

「わああ!」

すぐさまに空中で態勢を整える爆豪。青石は急激な動きに目を回している。

だが爆豪は、再び爆発を利用して空を跳ねまわる。

青石は気分が悪いのか、口元を押さえていた。

空中から、ちよこまかとちよつかいを出してくる爆豪チーム。先ほどから非常に鬱陶しい。

おかげで緑谷達は、ハチマキの奪い合いに参加できていない。

「デクう！ ビビってんのか!?! あ!?!」

緑谷はしつこく迫ってくる爆豪に辟易していた。

もうこの応酬だけで五、六回目ぐらいにはなる。

また懲りずに緑谷を追い立てる爆豪。

「っ！ やり……辛い！」

緑谷は再び爆豪を撃退する。

だが爆豪は諦めた様子はない。

最初に爆豪が他チームからハチマキを奪ったその頃は、青石ヒカルが個性を使う気配がなく、そこまで注意しなくても良い。

そう思っていた。

それよりも他の4人、3人チームを警戒するべきだと考えた。

さすがの爆豪といえ、人数で劣る分、脅威は他と比べると少ない。

そう思っていたのだ。

だが

「くそっ届かない……!」

爆豪と青石の二人騎馬は、想像以上に厄介だった。

たった二人だけで重量も小さく、他と比べて機動力が全然違う。

何より移動する際、意思疎通する必要がない。

騎馬戦である以上、緑谷含めた他のチームは、移動の際に指示しなければならない。

馬の生徒が各々勝手に動いては、騎馬にならない。

だから咄嗟の際に半歩反応が遅れる。

後ろを振り向くのも容易ではない。

けれども青石を背に乗せただけの爆豪は、思うがままに自在に動き回れる。

それは想像以上の、アドバンテージになっている。

『爆豪チームが緑谷チームを執拗に追う! まるでストーカーだ!』

ていうかアレだな! こうして見ると二人騎馬って全然戦術としてアリだな!』

『ああ、人数が多くなると対応できる場面が増える。』

だが反面小回りに欠ける。

爆豪は荷物を背負った状態だが、自分で好き勝手に暴れ回れる訳だ。

機動力なら他のチームの追隨を許さない』

一向に先ほどから状況が良くなならない。  
緑谷もいい加減じれつたくなってきた。

「デク君！ 一旦逃げよう！」

麗日の提案に皆、首を縦に振る。

「うん」

幸い爆豪チームに絡まれている間、他のチームは手を出してこなくなった。

最初こそ皆、爆豪チームに殺到した。

だが爆豪達の本領が発揮されてからは、別の騎馬を狙うようになった。

彼らは非常にすばしっこい。追うのにも一苦労で、中々手を出しづらいのだろう。

だがそれ以上に、今は青石ヒカルが個性を封印しているから、競技になっている。

彼女が気まぐれを起こしてしまつたら、途端にクソゲーだ。

そうならないよう、腫れ物を触るかの如く対応しているのだ。

眠れる獅子にはそのまま眠っていてもらい。1位は基本的に諦める。

2位から4位に入れば決勝には行ける。

そのように考えている筈だ。

もつとも青石ヒカルが居るので、決勝戦に行つたとしても、活躍できるかは組み合わ

せ次第だ。



緑谷チームはとにかく、爆豪から距離を取る。

爆豪チームから、ハチマキを取る事は現状難しい。

青石ヒカルのハチマキに手を伸ばそうにも、取ろうとした瞬間に距離を取られてしま  
う。

だから一旦撤退する事にする。

緑谷の支持する方向に騎馬の3人は全力で進む。

まだ緑谷チームは、他からハチマキを取れていない。

安全圏に入るためにも、他から少しでもポイントを取っておきたかった。

「コラデク、何逃げてんだよ！ あ!？」

随分と派手な個性じゃねえか！ ……ずっと俺を騙してたんだろお!？」

「何を言っているんだ爆豪は?」

訳が分からないと言った感じに常闇が口を開くが。

「……何でもない、ただの勘違いだよ」

緑谷は取り敢えずそれは置いておく事にする。

今は勝負の最中。余計な事は考えるな。

そう自分に言い聞かせていた。

……。

「着火マン！ いい加減もう緑谷君は……」

「うるせえ！ てめえは黙ってる！」

青石ヒカルは爆豪の背中から声を上げる。

けれども爆豪は聞く耳を持たない。

どうやら爆豪は、緑谷出久に執着しているようだ。

互いが知り合いだという事は知っていた。同じ中学校だったらしい。

でも青石は両者が、中学以前からの関係だと知らない。

散々言っても全然聞いてくれないので、青石は

「ふんだー！ もう知らない！」

ふてくされてしまった。

先ほどもまでとは違い、紐で固定しているからか、心に余裕が出来ている。

爆豪に揺さぶられながら周囲を見渡す。

青石達は1000万ポイントを持っていてのに、誰も挑もうとして来ない。

何故だろうと青石は疑問に思う。

競技が始まった一番最初は、騎馬がいつぱい寄って来ていた。

だが緑谷達と爆豪がやりだしてからは、遠巻きに見ているだけだ。

巻き込まれたくないのは分かるが、それにしても違和感が有る。

青石が個性をまともに使う気はない事は、既に察している筈だ。

青石はこの騎馬戦で、まともに戦う気はない。正確には戦えない。

爆豪の自分一人の力で勝つ。その凄まじい気迫に押されていた。

爆豪がこう言っている以上、邪魔はしたく無い。

確かに青石は爆豪が嫌いだ。が、彼のプライドを傷つけたく無い。

「……ねえ着火マン……」

「あ!？」

「どうしてそんなに、緑谷君に拘るの?」

先ほどから緑谷にあしらわれ、爆豪は気が立っている。

けれども仕方がない。爆豪は知らないが、緑谷は“ワン・フォー・オール”の継承者なのだ。

充分に使いこなす事は出来ていない。

だが今はアズライトの力も持っている。

青石ほど適性を持っていないにしても、その力は折り紙つきだ。

そのアズライトの力により、“ワン・フォー・オール”の力を無理やり引き出している。

今の彼はオールマイトに及ばずとも、並みのプロヒーローですら勝てる相手ではな

い。

もちろん爆豪が一位に拘っている事は、既に知っている。

だがそれにしても爆豪は、“緑谷出久”に対して、何かしらの因縁が有るのではないか。

青石はそう思えてならなかった。

一体何が、そこまで執着させるのか。

「……拘ってなんかねえ。けどアイツは……」

「緑谷君は……?」

「チツ……ムカつくんだよ！ お前も緑谷も！ 黙ってる舌嚙むぞ！」

「うわあ!？」

爆豪はまた緑谷に向かっていく。

再三再四、空中から緑谷のハチマキに手を伸ばす。

だが伸ばした手は、緑谷にその度弾かれる。人間では、到底あり得ない程の反応速度。

緑谷は完全に、爆豪の攻撃を見切って対応している。

それは恐らくアズライトの力だろう。

緑谷は徐々に、アズライトの力に目覚めている。

青石と同じように、思考速度を強化できてもおかしくない。

「クソ……クソが！」

流石に連続での飛行にも限界が来たのか。一旦爆豪は着地する。額から汗がダラダラ流れ落ちている。

青石は小柄で軽いとはいえ、流石の爆豪も背負ったままはキツイ。そして緑谷との戦闘。

いかにタフネスに溢れる彼でも、疲れるには充分すぎる。

青石は何となく、爆豪の汗のにおいが気になって、すんすん嗅いでみる。とても汗臭いと思った。

「着火マン………！　後ろ！」

「あ？　……ちっ！」

青石はあることに気付いて爆豪に警告した。

言葉だけでは聞いてくれなさそうなので、同時に肩をポカポカ叩く。

爆豪は最初嫌そうに振り向いたが、視線の先に気付くと、すぐさまその場から退いた。瞬間、先ほどまでいた場所が凍り、氷塊に包まれた。

「悪いな……青石。そろそろ獲りに行かせてもらおうぞ」

「半分野郎……」

「轟君！　飯田君！　……八百万さんも」

轟達の騎馬がそこに居た。

轟に飯田に八百万。いずれも普段青石に仲良くしてくれる友達。

そこに上鳴電かみなりでんき気を加えた4人チームだった。

再び氷結で攻撃してくる轟。爆豪は個性を使わずに、足を動かし躲した。

「ちよつと！ ミッドナイトさん！ 崩し目的の攻撃は駄目なんじゃないの!?!」

「うーん……コレは有り!」

「なんでえ!?!」

青石は悲鳴を上げるが、誰も取り合わない。

再び爆豪の背中揺さぶられる。

轟焦凍の個性は“半冷半燃”。だが戦いにおいて轟は右の氷結しか使わない。

炎の方は専ら氷を溶かす時に使っている。

轟の父親はかのナンバーツーヒーロー“エンデヴァー”だそうだ。

彼は父親の事を嫌っているようだ。その父親から受け継いだ力は使いたくないのだろう。

青石は轟に直接聞かされては居ないが、その結論に到達していた。

「はっ………どいっつもいっつも……ムカつくなあ!」

爆撃と氷結とが激突する。

細かくバラバラになった氷が、爆発の熱で溶けてキラキラ舞った。

青石はそれを見て連想する。ずっと前映像の中で見た雪とは、似たような物なのかな  
と思つた。

## 第45話

「青石……お前が出ると決めた理由がやっぱ分からねえ」

「俺を……無視してんじゃねえ！」

爆豪が吼える。だがそこに、先ほどまであつた勢いはない。

轟の眼中には爆豪の姿はない。

彼が敵として脅威に思っているのは、爆豪が背負っている青石の方だった。

「着火マン……腕……腕……！」

青石は悲鳴を上げる。

爆豪の右腕が氷に覆われていて、使い物にならなくなっていた。

彼は右腕に既に力が入らないのだろう。

つい先ほど、轟との接近戦で怪我を負って以来、だらんとぶら下がったままだ。

青石は痛々しく見ていられない。治そうと思ひ腕を伸ばす。

しかし

「使うんじゃねえ！」

「でも……！」



爆豪の右腕に伸びた手が弾かれる。

爆豪は頑なに、青石の助けを拒み続けていた。

「轟君！……こんなのって！」

「何ぬりい事言つてやがる。勝負つてのは、こういうもんだろがよ！」

青石は抗議するが、他ならぬ爆豪が否定する。

爆豪は4人騎馬に、突撃を開始した。

彼は既に片腕しか使えない。空も飛べない。余りにも無謀だ。

「駄目！ 無茶だよ！ 下がって爆豪君！」

「うるせえよ！」

爆豪は裂帛の気合が入った咆哮を上げる。

まだ動く左腕を彼は振りかざす。

「勝つのは俺だ、半分野郎！」

爆豪は轟を真つ直ぐ見据えている。だが彼が乗っている物は騎馬。

そこに控えている彼らが、見過ごす筈もなかった。

八百万が動く。バサツと布がはためく音。彼らの騎馬がシートのようなもので覆われた。

「はっ！ モブが！ んなもんで防ごうってか!？」

爆豪は何も気にせず足を止めない。

青石は嫌な予感がした。だが今更止められない。

そんな時、轟の騎馬の左翼がピカツと光る。稲光にも似たそれを、目で確認した時には既に遅すぎた。

「つく!?　ぐあああああ!」

「きゃあああああ!」

「……俺を忘れて貰っちゃ困るぜ!」

爆豪と青石の二人騎馬はその場に崩れる。

爆豪は咄嗟に、青石を下にしないようにしたのだろうか。

最初うつ伏せになりかけた体勢を、仰向けになり地面に倒れ伏す。

「上鳴君……!」

青石と爆豪はもろに感電して、悶絶する。

受けた攻撃。それは上鳴電気かみなりでんきの個性“帯電”による放電だ。

彼は電気を放出して、纏うことが出来る。

だがあくまで纏う事が出来るだけで、指向性を持たせることは出来なかつた筈。

だから爆豪も青石も、彼の攻撃を頭の中から除外していた。

彼が放電したら、彼らの騎馬もろとも巻き添えになるからだ。

けれど……。

「そっか……絶縁体のシート……八百万さん」

「その通りです青石さん。悪いですが勝たせてもらいます」

「爆豪君……！　しっかりと爆豪君！」

「うっ……くっそがあ……！」

爆豪は何とか意識を保っている。がそれだけだ。

本当にしゃべるのだけで精一杯。

緑谷達との戦いで消耗したその上に、利き腕は轟の氷結に凍らされてしまい。

あげく今、上鳴の帯電をもろに受けたのだ。

意識を失っていない。それだけでも信じられない程の耐久力だ。

「酷いよ轟君！　上鳴君！　何もここまでしなくても良いじゃない！」

「……多少加減を間違えたかもな」

「これが多少!？」

轟の眩きに青石は憤慨する。

ピピーン！と笛の音が響く。

主審のミッドナイトが、場外から声を届かせる。

『轟チームイエローカード！　悪質とまで行かなくてもやりすぎよ！』

次は退場処分とします！ よろしい!?』

「……………うす」

ミッドナイトに轟は頷いた。

「爆豪君！ 爆豪君!?!」

青石は爆豪の肩を揺さぶる。爆豪の意識は落ちかけていた。

……………。

『ああーつと!?! 爆豪チームダウン!』

轟チームからの電撃をモロに食らった！ 流石にコレはキツかったか！

……………おっと、その攻撃でイエローカードが出されるようだぜ！

だが依然として爆豪チームは立ち上がれない！

盛り上げてくれた二人騎馬カッブルも果たしてここまでか!?!』

相澤は実況席で、騎馬戦の行く末を見守っていた。

プレゼント・マイクの実況が大きくスタジアムに響く。

カメラも大半が爆豪チームを追っている。

スタジアムの中央モニターに大写して爆豪チームは映される。

どれ程の実力差が有っても、どれ程の怪我をしようとも、どれ程のハンデを背負って

も。

彼は決して自分を曲げない。

どれ程の逆境が襲い掛かるうとも、彼は逃げずに立ち向かう。

爆豪の一位を取るといふその覚悟。それはスタジアム中の観客の心を捉えていた。

最初こそは皆、爆豪の横柄な態度に眉をひそめていた。

だが彼への評価は、この戦いを通じて既に逆転していた。

「頑張れー！」

「卑怯者共に負けんじゃねえ！」

「立てー！ 立ってくれー！」

倒れてしまった爆豪。

その彼に会場から、大きな声援が送られている。

轟チームが何かやる度にブーイングが起きる。

(やれやれ、まるでこれでは轟チームが敵ライバルだな)

事実轟チームは、かなりやり辛そうにしている。観客を敵に回しながらアウエーで戦

うのは、気分が良くないだろう。

爆豪が意図した事では絶対でない。

だが爆豪の持っていた素質は戦いを通じて、確実に開花していた。

それはトップヒーローが、身に付けなければならぬ素養。

オールマイトなどが持つトップヒーローが持つもの。  
カリスマ性。

爆豪はそれを獲得しつつある。

どれ程の活躍をしたとしても、民衆に支持されないヒーローは二流だ。  
爆豪の良くも悪くもひたむきで真っ直ぐな姿勢。

それは万人からの応援を受けるには、十分すぎるものだった。

「あー、立った！、立ったよ、バクゴー君！」

子供の歓喜の声が聞こえた。

爆豪がまた立ち上がる。足は既にガタガタ震えている。

呼吸も荒い。

本当は直ぐに、棄権させるべきだと相澤は思う。

だがそれは出来ない。その判断はミッドナイトに一任されている。

そして彼女は中止の判断を下せていない。気持ちには分かる。

民衆がこうまで熱狂していて、それを途中で邪魔したとあつては。

今後のヒーロー活動を止める覚悟すら、しなければならぬ。

それこそこのスタジアムのみならず、全国で応援している国民全てを敵に回す覚悟が  
いる。

そこらの普通の高校の体育祭と、訳が違うのだ。

爆豪の状況は酷い。

右腕は氷漬けになって封じられている。

おまけに、個性を使わせていない青石を背負っている。

この状況からなら、青石に個性を使わせても文句は出ないだろう。

だが、爆豪は

「ああああああ！ クソがああ！」

青石に個性を頑として使わせない。

彼はあくまで己の力だけを使う。

まるで獣の様に爆豪は轟チームを襲い出す。

だが体力も既に限界だ。

轟チームからの氷結や電撃。二重三重の攻撃を受けて再び沈む。

会場のあちこちから落胆の声が聞こえた。

今度こそ倒れてしまった爆豪。

ミッドナイトはレッドカードを出さない。

あくまで個性の使用は、最低限の応酬のみだった。そう判断したようだ。

轟チームが倒れた爆豪の元へと近づいていく。

そして青石のハチマキに手を伸ばし……。

「え……？」

それは一体誰の声だったか。

轟チームの前騎馬の飯田。彼が青石のハチマキを取ろうとした瞬間。

——彼女は姿を消した。

会場に居る人間すべて、何が起きたか理解できない。

「ごめんね、爆豪君。ボクのせい……。」

うん、そうだよ。きっと最初からこうすれば良かったんだ」

「あそこだー！」

観客の一人が指をさす。そこに先ほどの二人は居た。

青石ヒカルは、一瞬でスタジアムの反対の隅に移動していた。

ギリギリ競技を行う範囲の場内。

一斉に視線が彼女の方に向く。

彼女は気を失った爆豪を背負っている。

爆豪の右腕は既に完治していて、端々に負っていた傷も全て癒えている。

そして片手に持っているのは、大量のハチマキ。

それを「よいしょ」と自らの首にかけた。



「あれデク君！ ハチマキは!？」

「え？ ああ!？ な、ない!？」

驚きの声を上げる麗日と緑谷。

わたわたししている二人に、青石は気軽に声を掛ける。

「うん、ハチマキ。全部ボクが獲っちゃった」

青石ヒカルは「てへ」と舌を出す。だがその仕草とは裏腹に、目は一切笑っていない。

相澤は久々に、彼女のその感情を見た。

青石ヒカルは静かに、怒りの炎を燃やしていた。

相澤は見れば分かった。彼女の怒りの対象は、生徒達に向けてでは無い、

他ならない自分自身に対して、彼女は腹を立てていた。

……。

「あれデク君！ ハチマキは!？」

「え？ ああ!？ な、無い!？」

「うん、ハチマキ。全部ボクが獲っちゃった」

青石ヒカルが口にしてようやく、全ての騎馬が自分のハチマキを探し始める。

だが有る筈がない。

競技に参加している全てのチームのハチマキ。それらは全て今青石ヒカルの首に下

がっているのだから。

「ごめん、着火マン。やっぱり個性使っちゃった」

青石の言葉に返事は帰ってこない。

帰ってくるのは静かな呼吸音だけ。青石は背中に彼の鼓動を感じる。

爆豪の意識は既に落ちていた。

『や……やりやがったー!!!』

青石ヒカル！ 満を持して個性を解禁！ いったい何が起きやがった!?

だがしかし！ 確かな事はただ一つ！

今ハチマキは！ 全部青石ヒカルの手に有るって事だ!』

実況の声がうるさくスタジアム中に届いた。

観客の熱量が上がる。

だが青石ヒカルにとって、それらは全て些末事。

今は先ほどもまでの自分自身が、恨めしくてたまらない。

爆豪は無理をしていた。

途方もなく虚勢を張って、一位になるためにあらゆる無茶をして。

しかもそれが、ただ一位になるじゃ駄目と来た。

青石ヒカルを倒し、完膚なきまでの一位になる。

そのために、青石ヒカルと組み。結果、とてつもない負荷を彼にかけてしまった。爆豪を追い込んだのは青石だ。

青石ヒカルという人間だ。それを自らに刻み付ける。

爆豪の事は好きにはなれない。

個性を使つた事を爆豪はきつと怒るだろう。でもそれでも良い。

理由はどうであれ、自分を助けてくれた爆豪が倒れた。

それを個性を使わず見過ごせるほど、彼女は我慢強くなかった。

「ミッドナイトさん。通過するのは、最終的にポイントが多かった上位4チーム。

間違いないですよね」

『……そうよ』

「じゃあこのまま……」。

ボクが全部ハチマキを持ったまま時間来たら、どうなりますか？」

『それは……』

青石は意地悪な表情を浮かべる。主審のミッドナイトは言いよどむ。

青石は恐らく「何も決まっていない」だろうと思う。

多分こうなる事態を避ける。それがまず前提条件だったはず。

思えば騎馬戦のチーム分けのルールも、少し違和感が有った。

それも、少し考えれば青石が排除される事は目に見えるルールだった。最初からチームに入れて貰えず競技に参加できない。

そんな算段を、運営側は持っていたのではないか？

青石ヒカルはそんな気がした。

『そして残り時間2分を切った！ さあさあお前ら何ポーっとしてやがる!!』

さっさと奪いに行きやがれ!!』

「……ああああ！」

予測していない事態に、生徒の反応が遅れていたのだろう、

今頃になって全ての騎馬が、青石ヒカルに向かってくる。

だがそれらは全て、光る障壁に阻まれ、彼女の数メートル手前で止まった。

「何だ!?! クソ固え!」

「下がって皆!」

騎馬から単身飛び出した影がある。緑谷出久だ。

彼の瞳が青に染まる。彼の肩がアズライトの結晶に包まれた。

「Plus Ultra!」

障壁に向けて自らの拳を全力で打ち出す緑谷。

障害物競走で、巨大な仮想敵をなぎ倒した必殺技。

だが

「ぐっ！ あああああー！」

砕けたのは障壁ではなく、緑谷の拳。

青石ヒカルが出した透明な壁はビクともしない。

それは彼女の心が作り出す拒絶そのもの。

彼女は既に目覚めている。

レギオンと分り合い、力を完全に制御している青石ヒカル。

本気になった彼女に勝てる相手は、この地球上に存在しない。

『そこまで！ 競技終了！』

主審のミッドナイトが終了を告げた。

「ま、まだ時間は……！」

緑谷の拳が再生する。

まだやれると。そう緑谷が抗議するが

『これ以上やつても時間の無駄よ。予測外の事象が発生したことにより、これから協議します。』

生徒は各自待機。次に備えて体を休めなさい。以上！』

生徒達の間に広がるのは、安堵と落胆。戸惑い、それと怒り。

多くの生徒が不完全燃焼のまま、騎馬戦は終了を告げた。

青石ヒカルという滅茶苦茶な存在。

彼女の存在が全てを狂わした。

彼女がやっていることに、問題がある訳ではない。

青石はただ、自分出来る事をやっている。

それだけの事だ。

ルール違反でも何でもない。

だが、その力と影響が余りにも大きすぎる。

力がある存在は、そこに居るだけで歪みをもたらす。

まるで星の重力そのものだ。

彼女という巨大な星が持つ時空の歪み。それに全て引きずり込まれていく。

青石ヒカルの肩に一匹の蝶が、どこからが飛来してとまる。

太陽は遙かな空の向こうから、燦々と地上を照らしている。

青石が太陽に手をかざすと、蝶はその中に飛んでいくように肩から飛翔した。

そのまま、日の光に溶けるように姿を消す。

その蝶の行方が、青石は気になって仕方がなかった。

## 第46話

青石は爆豪を医務室に送り届けた。

今、青石はその医務室で爆豪を心配そうに見ている。

部屋には寝ている爆豪と、見守る青石。それと保険医のリカバリーガールだ。

よっぽど無理をしていたのだろうか。怪我は既に完治させたはずだが、爆豪は未だに眠り続けている。

「おぼあちやん。爆豪君大丈夫？」

「これでもかかってほど完璧に治っているよ、心配しなさんな。

これは極度の疲労さね。あんな無茶な戦いをしていたら無理もない」

特に何も処置はされていない。一通り、リカバリーガールがチェックしたが異常は何処にもなかった。

今寝ているのは、極度の疲労が溜まったからだという。

時間が経ったら目を覚ますそうだ。

「失礼します」

部屋の扉が開けられた。姿を現したのはメイド服の女性。

青石はシアンから視線を感じる。

なんだか責められている気がしてならなかった。実際、責められているのだと青石は思っている。

リカバリーガールの言葉も、青石はうわの空で聞いている。

今青石が後悔しているのは別の事。爆豪に負担をかけた事は、心の負担になっている。

だが、それともう一つ。青石が後悔している事は他に有る。

「ああ……やっちゃった……」

青石の眩きをシアンは拾った。

「全て取ったのですねヒカル」

傍に居るシアンが、まさに気にしているそこに触れてくる。

何をとは今更言えない。彼女が言っているのは間違いなく、騎馬戦のハチマキの事だ。

青石の口から動揺した言葉が飛び出す。

「どどど、どうしようシアンさん！ ボクつい、かっとなっちゃって。

「これじゃ皆が……」

「ヒカル。あなたはルール違反をしていません。」



あなたに出来る事をやった。それだけの事です」

「で、でも！ このままじゃ次の競技どうなっちゃうのか分かんないよ！

ミッドナイトさんも想定外だつて言つてたし」

「ヒカル。生徒が全力を出して出た結果。

それに付いていけないのは学校側の怠慢です。

ですが、ヒカルの心配は無用かと思えます」

「……なんで？」

「あなたが出る時点で、この事態は予測されていた筈です。

想定外というのは方便でしょう。

時間を取っているのは何らかの準備か、確認作業が必要なのか。

きつと時間が多少なり必要だからですよ」

「……でも」

シアンという言葉にも、青石は不安な表情を隠さない。

シアンは全力を出した結果だから良いのだという。だが青石は割り切れない。

ハチマキを全部取つたのは、全力を出したからではない。

あの時爆豪が傷つき、衝動的に動いてしまった。それだけの事だ。

むしろくしゃして、ハチマキを全部取つてやってやろう。そう思っただけ。

つまり完全な八つ当たりなのだ。

「胸を張りなさいヒカル。自身の行為と選択に責任を持つのです。

少なくとも爆豪様はその点、ヒカルより自覚していますよ」

「ええ!?! 着火マンが!?! うっそだー」

扉がガラツと開いた。

後ろを青石が振り向くとそこには、ものすごく不機嫌な担任の顔が有った。

「あ、相澤さん……」

「……青石、やらかしてくれたな」

ジロツと睨まれ青石は、蛇に睨まれた蛙の様硬直する。

見かねてシアンがそつと庇いに来る。青石はシアンの子供服をギユツと握った。

「相澤様、文句を言うのは筋違いかと。ヒカルは一生懸命やっただけの事です」

相澤は首を振って否定する。

「どんな結果が出ようと、何でもかんでも一生懸命やれば許される。

そんな考えは社会じゃ通用しない。

こいつの力は特別だ。何度も教えてきた。

ありのままに、思ったままに振舞えば、周りにどれだけの害をもたらすか。だから」

「だから周りの顔色を伺い、<sup>うかが</sup>へつらって生きていけ。そうおっしゃりますか?」

相澤の言葉を遮りシアンは言う。シアンにしては珍しい。

彼女は普段人の話を遮ることはしない。ちゃんと言い終わるのを待つ人だ。

相澤はため息を吐いた。前髪を無造作に掻きあげた。

「周りに危害を加えるくらいなら、ありのままの自分なんて出すべきじゃない。

……こいつには、あまりに空気を読む力がない。

甘やかすだけじゃ駄目だシアン。それはこいつの為にならない。ぬるま湯じゃ人は成長しない。

いつかその代償は、こいつ自身が払う事になるんだぞ」

「……」

相澤に言われてシアンは黙りこくる。しかし体は依然として青石を庇うように立っている。

青石はシアンの事が好きだ。

だが同時に相澤も、自分の事を思っただけで厳しくしている。

それが分かっている。

あくまで相澤は青石の事を考えてくれた末に、怖い態度を取っているだけ。

今までだって、相澤はずっとそうだった。

今更変わって欲しくなんて無いと青石は思う。

相澤は大切に思ってくれているからこそ、厳しくしてくれる。口やかましくも言う。だからこそ、青石は相澤の事が好きなのだ。

「……相澤さん」

「先生だ。……マイクが実況室で待ってる。ついて来い」

「うん、分かりました。先生」

青石はシアンの服から手を放す。部屋を出ていく相澤の後姿を追った。

部屋を出る前に爆豪の方を見してみる。彼はまだ眠っていた。

シアンに手を振ると、彼女は寂しそうに微笑み返してくる。

爆豪を起こさないように静かに扉を閉め、廊下に出た。

「……青石」

誰も居ない廊下に出た時、頭にポンと手を置かれる。

「わ、突然どうしたの？」

そのまま少し乱暴に頭を撫でられる。

青石は久しぶりの感覚に目を細めた。

相澤は青石の頭から手を放す。撫でていたのはほんの二、三秒ほど。

それでも青石は、それだけでご満悦になっている。

「えへへー。相澤さんから撫でられるのいつぶりだろ」

「……さあな」

そっぽを向いた相澤。彼は止めた足を再び動かす。

彼の背中を青石は追う。

その足は先ほどより、軽やかになっていた。

……。

緑谷出久の自宅。そこで主婦らしき女と、メイド服の女性がテレビの前で観戦していた。

画面に映っているのは雄英体育祭。その一年生の部門だ。

先ほど騎馬戦の様相が放送されていて、今はリプレイ映像が流れている。

ダントツで注目の生徒は青石ヒカルという少女。

だが二番手三番手に注目の選手として、上がっていた少年の名が問題だ。

緑谷出久。

彼は今まさに全国に名が知れ渡ろうとしていた。

「い、出久ううう……」

緑谷インコがテレビの前で心配の声を上げる。

リプレイ映像が流れている。

テレビの向こうの緑谷出久が、悔しそうにしている。

第二種目の騎馬戦。それは青石ヒカルが、最後に全てを持って行った。ハチマキを独占されてなすべがない生徒達。

主審のミッドナイトが終了を告げた。

テレビの画面がCMに切り替わる。

そばに来たメイド服の女性がそつと声を掛けた。

「大丈夫ですか、インコ様」

「だ、大丈夫です、ただ腰が抜けて……」

腰を抜かしていた女性は緑谷インコ。

緑谷出久の母親だ。

メイド服の女性はシアン。ただここに居るのは、本体では無い。

個性“忍者”により作り出した、実体の有る分身体だ。

本体は今頃雄英体育祭の本会場で、忙しくしているだろう。

「出久様なら大丈夫です。雄英職員及び、私も力及ばずながら指導させて頂いております」

「……あの、シアンさん」

「はい、何でしょうか」

「本当に、本当に……。この前話してくれたのは事実なんでしょうか」

「ええ、事実です。

緑谷出久様が、オールマイトの力を受け継いだ事も。

それに加えて、新たな力に目覚めている事も。

全て事実です。無論他言は無用です」

「……」

緑谷インコは押し黙る。

シアンは密かに緑谷出久の母、緑谷インコに事実を告げていた。

2週間前の事だ。

世界が再び「青」に包まれたあの日。

緑谷出久が奇跡的に、レギオンを食い止めた。

シアンは緑谷出久が急速に力を付けた事実を見て、考えを改めた。

出来れば緑谷の抱えている数多くの秘密。それは誰にも話すべきではない。

そう考えていた。

だがこの先、緑谷がどの様な成長をするのか。

それを予測するのは極めて難しい。

ここにきて、ワン・フォーオール”の継承の事実。それを母親に伝えないのは、不誠

実だ。

そうシアンは考え、法月に許可を求めた。

渋い顔をしていた法月から何とか許可を取り付け、シアンは話せる範囲で真実を告げた。

目の前の緑谷インコに。

緑谷がもし、誤った方向に向かおうとしたとき、正しい道に引き戻す存在が必要だと思つたのだ。

少なくともシアンはこの人には、話しておくべきだと考えた。

“ワン・フォーオール”の事。緑谷が選ばれた経緯。

そして新たに身に宿つた個性アズライトの事を。

緑谷インコは最初驚き、信じようとしなかった。

緑谷出久はずつと無個性だった。だが奇跡的に個性が発現した。そう信じていた。

けれどもシアンは幾度となく説明を繰り返した。

シアン自身が、元々敵ツインだった事も既に告げている。

そして今日の雄英体育祭に至る。

今まで無個性だった緑谷が、圧倒的な力で障害物競走を踏破する姿。

幼馴染の爆豪を難なくあしらう様子を見て、彼女も徐々に受け入れていったようだった。



もう緑谷出久は無力な“無個性”では無い。

それどころか、比類なき力を得た強者だ。

もはや力そのものだけなら、シアンも太刀打ちできない。

今はまだ未熟だが、子供の成長は早い。

あつと言う間にトップヒーローにまで駆けあがっていくだろう。

「大丈夫です。出久様は強いですよ」

「それでも、心配なんです。万が一何か取り返しのつかない事になったらと。

そればかり考えてしまうんです」

「それは……母だからでしょうか」

「えっ?」

シアンの疑問に緑谷インコは少し驚く。

「私には子供は居ません。ですから、母親の気持ちとはどの様なものなのか。

それが分からないのです」

「いつかきつと子供を持てば分かりますよ」

「私のような女を……嫁に貰うもの好きが、果たしているでしょうか」

「きつと居ますって。シアンさんは綺麗ですから」

「そんな事有りませんよ、インコ様」

緑谷インコの微笑み。それはシアンの作っていた表情を溶かす。

日の元に照らされて雪が少しずつ消えていくように。

シアンは青石にも見せた事がないような、自然な笑みを浮かべた。

その記憶を、シアンが知るのには、半日後に分身体が自ら消した後の事。

それは果たして本当に、自分の記憶なのだろうか。

確かめる術は彼女には無い。

……。

「クソっ……」

緑谷は悔しさを滲ませた声を出す。

麗日は無言で首を横に振った。

今彼らが居る場所は、1―Aに充てられている控室。

爆豪と青石を除いたクラスメイトは全員居る。

彼らはどうやら医務室に向かったようだ。

爆豪の怪我は青石により治っているように見えた。

遠目から見たただけなので断言こそ出来ない。

けれども彼女の個性で治せないのなら、リカバリーガールにだってそれこそ無理だ。

あの程度治せない筈がない。

部屋の中は静かだった。

誰もしゃべろうとしない。

誰もが覚悟していた最悪の事態。それが起きてしまった。

### 第二種目騎馬戦。

その結果は爆豪と青石の二人騎馬が、全てのハチマキを独占。

そのまま終了となった。

次の種目に進めるのは上位4チームのみ。

だが、その扱いが果たしてどうなる事か。

「次の種目、どうなるんやろ」

「……分からない」

まさに先生方が話し合っているのはそこだろう。

規定通りいけば、青石と爆豪だけが次の競技に進む事になる。

けれど運営としては、大体4人から3人チームが4組勝ち進む。それで12人から1

6人程に絞り込む。

そういう予定だったはず。

だけど今や爆豪と青石以外はドベ。

つまり次に爆豪と青石が何らかの種目で競って、体育祭はそこで終了となる。

そんな理不尽な話があるだろうか。

「今更やけど障害物競走凄かったよ。デク君あんなに強かったんやね」

「そんな事な……」

「おう、それな！」

唐突に横から割り込んできたのは切島だ。

彼は意外にもう吹っ切れているように見える。

緑谷はもつと悔しがっているものだと思っていた。

いや、悔しいのだろう。だが彼は無意味に落ち込んでいるより、前を向くことをきつと選んだのだ

「超。パワーだけで凄えけどよ！ 怪我が再生するなんて今日初めて知ったぜ！

、なんで隠してたんだ？」

彼が言っているのはアズライトの力の事だろう。

確かに個性把握テストでは、指の怪我を治していない。

その時にはアズライトの力をまだ宿していなかった。だから治せなかったのだが、それを切島は知らない。

緑谷は誤魔化すように愛想笑いだけ浮かべた。

「もしかして最初っから、体育祭見据えて隠してたのか？」

「それはないよ。本当に傷の再生なんて出来なかったんだ。

出来るようになったのはつい最近の事だよ」

大事な事は言わず、話せる範囲だけ話す方針に切り替えた。

どっちも同じクラスで長い付き合いになる。

その方が気が楽だろうと思った。

「しっかし派手で良い個性だなー」

切島の話は続く。クラスに蔓延している空気を払拭しようとしているのか。

だが生徒達の顔は、一向に晴れることは無い。

先生方からの指示を、まだかまだかと待っている。

青石ヒカルは、どうどう姿を現すことが無かった。

……。

スタジアムの運営を行う一室。

教室程の広さのそこに、雄英のヒーロー達は一堂に顔を合わせる。

口数は少ない。誰の顔にも笑顔はない。

「はああ……結局こうなっちゃったか」

ミッドナイトの愚痴。それに同調するようにヒーロー達はため息を零した。

こうなつたとは今更言うまでもなく、青石ヒカルである。

騎馬戦は青石ヒカルが全てのハチマキを保持したまま終了した。

「ミッドナイトお。まだ時間は有ったじゃねえか。なんで途中で切り上げやがった？」  
プレゼント・マイクの疑問。

彼女は少し躊躇いがちながら答えた。

「……あのまま続けさせても状況が変わると思えなかつた。

それに関わりなく、もつと悪い事が起きる。

その時にそれを確信しました」

「もつと悪い事だ？」

「それは僕も同意見だね」

「校長！」

教師一同は一斉にかしこまる。

根津は苦笑しがちに手を上げた。

「やあやあ、楽しんでくれよ」

「法月は？ 青石ヒカルが関わっているから出てくると思ったんですが」

「今回彼はこの件に関わらない。そう彼から聞いたよ。」

「……どうも僕達は彼に試されているようだね」

「不愉快な」

ミッドナイトが言葉通り不快感を露わにする。

「言っけていても始まらないさ。話を戻そうか。」

……あのまま騎馬戦を続けたら良からぬ事になった。

それは僕も同意見だよ」

「それなら一体何が起きたと」

「そうだね、例えば僕が彼女の立場なら……。」

1000万ポイントのハチマキだけを持って、他のハチマキを適当に地面に捨てるとか？」

「……奪い合う生徒を高見の見物ですか。無いとは言えませぬね」

「後はそうだね。お気に入りの騎馬にハチマキを渡し、自分が選んだチームを決勝戦に進ませるとか……。」

「彼女は優しい。そんな事は……。」

「でも同時に、とても気まぐれだ。続けたら何が起きたかなんて、分からない。」

僕達が協議するべきなのは、これからの事さ。

……おっと来たようだね」

「失礼します」

相澤が入ってくる。そのまま彼が口を開いた。

「……規定通り決勝を行うべきでしょう」

話の流れはおおよそ聞こえていたのだろう。

けれども、校長は返す。

「相澤君。それでは上位4チーム。

でも青石君と爆豪君しかポイントを持っていない。

その二人で決勝戦を行い、それで大会終了かい？」

相澤は頷いた

「おいおい、そんなの納得できるかよ」

「それにそれでは、予定している終了時刻より大幅にズレてしまいます」

ヒーロー達の談議が青石を置き去りにして始まる。

ああでもない。こうでもない。

アレはどうか。これはどうか。しかし中々にいい案が出てこないようだ。

相澤はプレゼント・マイクの近くに寄って声を掛けた。

「マイク、お前なぜここに居る？ 実況室に居なくて良いのか。」

あいつあつちに送り届けたままなんだが」

「……実況室には今誰が居ます？」

ミッドナイトの言葉に、プレゼント・マイクが青ざめる。



「やっべえー！」

彼は急いで実況室に行こうとするが

『あーあー、マイクテスト、マイクテスト！』

キーンと嫌なハウリングが響く。

実況室から聞こえてくる声は、間違はなく青石ヒカル。

彼女の事だ。初めて見る機材などに興味津々のだろう。

時折マイクをポンポン叩く音も聞こえてくる。

『わっ！　なんか音大きい！　えと音量調整は……どれだろう？』

何かなこれ？　色々ボタンがあるけど……

取り敢えず押しちやおうかな。押しちやっつていいよね？

わっなんか光った！　えーいボタンは全部押しちやえー！』

ポチッと彼女は何かボタンを押したらしい。先ほどより更にひどい音が鳴り響いた。

キーンと耳の奥が痛くなる。彼女の鼻歌交じりの声が聞こえる。

『マイクさん早く来てくれないかな？』

もう、相澤さん。

実況してろって言われても、ボク一人じゃ全然わかんないんだけど！』

彼女の心の思うまま、デタラメに操作する様子が音だけで伝わってくる。

機材が彼女の手により滅茶苦茶にされていく。

「早く彼女を取り押さえるんだ！」

根津が見るからに焦る。

相澤とマイクは全力で実況席に向かう。

彼女の暴走が止められたのは一分ほど後の事。

この醜態も後々まで語り継がれる事になる。

彼女の、すなわちこの雄英側の失態も、全国放送されていた。

日本中の人間も、彼女が問題児だとはつきり理解した。

## 第47話

「見苦しい姿を届けて申し訳ねえ、全国のリスナー諸君！

じゃあこれから質問タイムに入るぜ！」

プレゼント・マイクの実況が始まる。

と言つても、次の競技の準備が整うまでの時間稼ぎだ。

次の競技をどうするのか、取り敢えず職員たちの方で概ね決まったらしい。

ひとまず各関係者への伝達や諸々で時間がかかる。

その時間を稼ぐための放送だ。

青の少女が再び引き起こした騒動は、相澤らの手により収められた。

機材は何とか無事だった。

念のため予備の機材に入れ替えられてはいる。

放送中に予期せぬ不具合を起こしたら大変だ。

「相澤さん」

「先生だ、青石」

「なんでボク、まだぐるぐるに巻かれてるんですか？」

青石は椅子に座っている。だが先ほど実況室に居た時と違い、相澤の捕縛布でグルグル巻きにされている。

まるで連行される敵だ。ツイラン

もちろんその姿も全国に放送されている。

「お前が馬鹿な事をしないようにするためだ。諦めろ」

「酷いや！　こんなのあんまりだ！」

「それは俺の台詞だ！　機材滅茶苦茶にしゃがつて！」

相澤は若干キレ気味だ。いや実際キレている。

となりのプレゼント・マイクは「まあまあ」と宥める。

「解ほどいてやれよ」イレイザー・ヘッド」。俺達が側にいるからもう大丈夫だ。

それにこれじゃ格好つかねえだろ！」

「そうだ！」

青石がふんと鼻の穴を大きくする。お前が言うなと相澤は心の底で思った。

相澤は青石を無視しプレゼント・マイクの顔を見る。

「仕方ない」

彼が手を動かすと、捕縛布は生き物みたいにならねって解けた。

「おおーありがとう相澤さん」

「……」

青石は解いた捕縛布を見ている。

どうやら相澤の技術に感心しているらしい。

相澤は相変わらず複雑そうな顔をしている。

渋々だと言わんばかりだ。

「HEY！ 青石！ 全国から寄せられた質問に答えていくぜ！

準備は良いな!」

「おー!」

「さっさとしやがれ」

せかす相澤。プレゼント・マイクが苦笑しつつ手元のタブレットから質問を選ぶ。

「じゃ、一番目の質問だ。えー、神奈川県に在住のペンネーム○○○さんから。

『青石ヒカルさんの“個性”はどんなのなんですか?』だとき。

俺も知らねえんだよな! 一体どんなのなんだ!」

相澤と一瞬視線が合う。もちろん青石も分かっている。

「えと、ごめんなさい。それには答えられないかな」

「おー? 個性は一切不明! それで通すって事か?」

「……うん」

「オールマイトみてえだな！」

もちろんプレゼント・マイクだって青石の個性を知っている。

それを全国に公表できない事も。知らないふりも只のパフォーマンス。

「その、ごめんなさい。ボクの個性について喋る事は出来ないんだ。」

そういう質問はごめんなさい、全部却下でお願いします」

「おーおー分かったよ」

青石ヒカルはふーつと息を吐いた。

相澤も胸をなでおろす。

「じゃあ次の質問だ。福岡県在住の××さんからだ。」

『青石ヒカルさんの好きな食べ物は何ですか？』

「……」

これもまた青石には答えにくい質問。

彼女は今、シアンのおかず食事を食べている。それもムース食と呼ばれる代物だ。

それは一般的に介護などで使われる。

普通の人が想像する食べ物とは若干違う。

中身も普通のムース食とは、これまた少し違う。

彼女の味覚に合わせられて、アレンジされているからだ。

普通の人間に食べられたものではない。

実際相澤は一口食べたが、ゲロが出るかと思う程不味かった。

「えと……」

オロオロしている青石に助太刀が入る。

視界の端。そこに人が居た。赤く短い髪が、ぴよこんと跳ねている。

相澤の知らない人物だ。青石も知らなそうな顔をしている。

果たしてその人物は男なのか、もしくは女なのか。

相澤には判別が出来なかった。中性的というのだろうか。

男の様であり、女の様でも有る。

ともかくその人物は、携帯できる大きさのホワイトボード。

それを掲げていて、そこには……

“ハンバーグ、エビフライすつよ！”

と書かれていた。

それに青石は縫ったようだ。

「は、ハンバーグエビフライ！　が、好きです」

青石は食べた事がないので、どんな味がするのか知らないが、とりあえずそう答えていた。

「ハンバーグにエビフライか。何て言うか子供舌だな！」  
「そうかな？ 変？」

「いやいや、食べ物好みなんて人それぞれだろうがよ！

実際美味しいしな、ハンバーグとエビフライ」

プレゼント・マイクも意地悪だなど相澤は思う。

もつと答えやすい質問を選べばいいだろう。そう思う。

マイクもそこは分かっているだろう。

青石が今までどんな生活を送っていたのか。それを承知で質問を選んでいる。

だがあまりに不自然な質問の選び方をしていたら、それこそ聡い人間は何か勘付いてもおかしくない。

「じゃあ次行くぜ！」

福岡県在住の△△△さんから。

『青くてとても綺麗な髪ですね。「あ、ありがとうございます」

染めているんですか？ 地毛ですか？

お風呂でシャンプーはどんなのを使っていますか？

リンスはどんなのを使っていますか？』

「えと、髪はそのまま地毛だよ。染めてないよ。えと、お風呂は……」



相澤はジトつと見る。分かつてるんだらうなと暗に告げる。

隅でさっきの知らない人がいそいそホワイトボードに書き込んでいる。

だがあまり頼つても居られない。変に時間を置いても不自然だ。

「お風呂は入っているけど……シャンプーとかはあんまり気にしたことないかな。

適当に有るものを使っているとどうか。リンス……？ 使った事ないや」

「おー青石は特に拘りは無いのか。ま、人それぞれだわな」

また青石は息を吐く。

一つ一つの質問に気を遣う。聞かれれば聞かれるほど、普通とは違う人間なのだ。

そう実感させられるのだろう。

「じゃあ次。東京都在住の●●より。

これは単純で短いな！『好きな人は居ますか？』」

聞かれた瞬間、ボンと音がしたと錯覚するくらい。それほどに青石の顔が赤くなつた。

「えと……うううー……」

青石は手を膝の上にとりながら顔を俯かせ、もじもじしている。

時折チラツと相澤の方に視線を向けて、逸らし。それを繰り返している。

いくら何でもそんな態度を取られていて、気づかない程相澤は鈍感じゃない。

正確には鈍感じやないというより、彼女の気持ちは、とつくに知っている。そつちの方が正しい表現だろうか。

「いい、居ません」

この上なく説得力がない。

今の彼女の反応を見たら、誰だつて察してしまふだろう。

「あー……おー……。なんつーかその。……頑張れ」

先ほどホワイトボードでカンペをくれた人も何か書いて青石に見せている。

“ファイトつすよ！ 恋は戦争つす！ 例え禁断の愛でも勝てば官軍つす！”

「うー……だから居ないつてばー」

「おつとー。そうこうしているうちに準備が整つたようだぜ！」

プレゼント・マイクがそう言うのと、スタジアムの中央に人が出てくる。

言わずと知れた主審。ミッドナイトだ。

それにスタジアムの隅には、控室から出てきた生徒達の姿。

彼らは緊張した面持ちで結果を待っている。

もちろんI—Aの生徒達もそこに居た。

『長らくお待たせしました。ではこれより、第三種目の概要を説明いたします』

彼女の言葉にスタジアム中が静まり返つた。

青石ヒカルにより引き起こされたイレギュラーな事態。

一体どのような扱いになるのだろうか。

まあ相澤は知っているのだが。

『今回第二種目騎馬戦において、青石ヒカル及び爆豪勝己の二人組の騎馬が、全てのハチマキを独占する事態になりました。』

この事態を雄英側は想定していませんでした。

本来の想定としてはポイントはばらけ、上位4チームの12人から16人の決勝トーナメントが組まれる予定でした』

ここまでは誰でも理解できる。

それが想定していた通常の雄英体育祭。

青石ヒカルがいなければ、まず間違いなくそうなっていた。

『そこで我々は騎馬戦の試合の映像を確認し、青石ヒカルが独占する寸前のポイント。』

それを確認していました。

今回は試合において、青石ヒカルが“個性”を使い、最初にハチマキ取る寸前のポイント。

それを決勝進出の評価の基準とさせて頂きます。

つまり、進出するのはこの生徒達！』

中央のモニターにデンと大きく効果音と共に名簿が出る。

決勝トーナメントに進むのは……

爆豪チームから、青石ヒカル（1—A）、爆豪勝己（1—A）。

緑谷チームから、緑谷出久（1—A）、麗日お茶子（1—A）、常闇踏陰（1—A）、  
目明（1—H）。

轟チームから、轟焦凍（1—A）、飯田天哉（1—A）、八百万百（1—A）、上鳴電気  
（1—A）。

心操チームから、心操人使（1—C）、庄田二連撃（1—B）、青山優雅（1—A）、尾  
白猿夫（1—A）。

『……以上、14名よ。さあ！これから組み合わせの抽選を……おっと失礼！』  
ミッドナイトは手元のインカムでどこぞと話し始める。

スタジアムは決勝トーナメントの面々の評価で騒がしくなってきた。  
皆思っているに話し合っている。

ふと、青石は気になる名前を見つけた。

彼は確か障害物競走43位で、惜しくも敗退したはずなのだが

「えっ?! 青山君!」

青石の疑問に相澤が答える。

「あいつは一人体調不良で、欠場者が出て繰り上がったんだ。

入るチームは、選べなかったようだがな。知らなかったのか？」

「うん、全然知らなかった……」

青石は決勝トーナメントに進む面々を見る。

それにしても1―Aの多さは異常だ。

14人中なんと11人が1―Aの生徒だ。余りにも圧倒的過ぎる。

「おいおい！ 凄えなA組！ 敵と会敵したつっ―だけでこんな差が出るもんか!!」

プレゼント・マイクが驚いている。それは青石も思う。

いくら何でも偏りすぎでは無いか？

本当に不正はなかったのか？

相澤が口を開いた。

「……きつかけを掴んだら伸びるってのは珍しくない。

実際 敵ライオンを見る見ないの経験の差。それは思った以上に大きかったんだろう」

「にしても圧倒的過ぎるぜ！」

『はい、大変長らくお待たせいたしました。』

『それでは！ 改めて決勝トーナメントに進むメンバーを紹介するわ!』

青石ヒカル、爆豪勝己。

緑谷出久、麗日お茶子、常闇踏陰、発目明。

轟焦凍、飯田天哉、八百万百、上鳴電気。

心操人使、庄田二連撃、青山優雅、尾白猿夫。

『以上の14名で決勝トーナメントを開催します。

本当は生徒たちで抽選を直に行う予定でした。ですが時間も押しています！

組み合わせは、こちらで勝手に決めさせていただきます！』

「不正は無いの？」

青石の疑問は実況席から聞こえている。

ミッドナイトは頷いた。

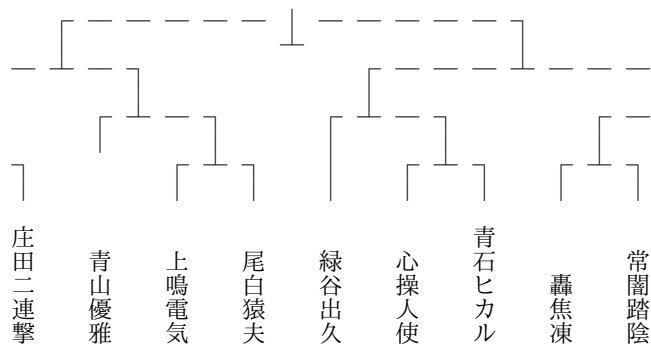
『無いわ！ 文句言いつこなし！ 完全にランダムよ！ スイッチオン！』

中央モニターになにやら演出がかかる。

そしてやがてトーナメント表が映し出され、名前がランダムに割り振られていった。

飯田天哉

発目明



八百万百

麗日お茶子

爆豪勝己・

——おおおおおっ!!

場内に独特の緊張が漂う。

相澤はトーナメント表を見た。

青石の一回戦目は、心操人使しんそうひとしという生徒らしい。

(コイツ……確か)

相澤は手元に有る資料を漁り情報を確かめる。

そしてその個性を知った時、何となく法月の顔がチラついた。

(心操人使……こいつの個性ならもしかしたら。……まさかな)

「出たあああ！ おいマスコミ！ お前ら待たせたな！

これが今年度一年の決勝トーナメントだ！

……上の方ヤバくね？ プロヒーローおれでも放り込まれたら死ぬぞ？」



「ぶつちぎってる青石と緑谷が同じブロックだからな。

現状目立った奴らは、殆ど上のブロックに居る。

下のブロックも、爆豪含めて優秀な奴らだが……」

「まあぶつちやけ地味つつーか何て言うか……」

どうにも乗り気にならないマイク達。

横から青石が噛みついてくる。

「もう！ 教師がデイスるなんて駄目だよマイクさん！ 相澤さんも！

みんな真剣なんだから！」

珍しく青石が怒っている。いつの間にそんな「デイスる」なんて言葉を覚えていたのか。

おそらく峰田実辺りの影響か。

だが言っている事は正しいだろう。

「おーそうだな青石！ 決まったもんは決まったもんだ！ 楽しんでいこうぜ！」

「おー！」

相澤は青石の顔を見るが、不安そうな顔は欠片も無い。

彼女は自分が勝つと信じ切っている様だ。

しかし相澤は心操人使の個性を知って、考えが変わる。

心操人使が、青石に勝てる確率。

それは万が一どころか、五分五分位では無かろうか。

それほどまでに心操人使の個性は強力。強力なのだが……。

(つたく、合理的じゃねえな。あの入試試験はよ)

心の中で愚痴を吐く。

相澤もこの個性で苦勞してきた。

対人に特化した個性は、相性によって大きく左右される。

時と状況を選ばないと、十分なポテンシャルを發揮することが出来ない。

心操人使。まず間違いなく、普通科に所属していい生徒では無い。

だが雄英高校の不合理な選別により、彼は燻ぶっている。

それこそ、地下に幽閉されていた、かつての青石ヒカルの様に。

(万が一も有るかもしれないな)

相澤の心配をよそに、彼女は能天気だ。

青石の顔は負ける未来など、考えていないように思える。

彼の中の不安は、どんどん膨れ上がっていった。

……。

雄英体育祭は昼休憩になった。

雄英体育祭もあくまで体育祭。休憩時間は有る。

最終種目のトーナメント表が発表されたが、それはあくまで最終種目。実際に行うのは、各種レクリエーションが終了した後だ。

でないと予選落ちした大部分の生徒が、暇を持て余してしまう。それはそれとして

「……スヤスヤ」

青石ヒカルが、シアンに膝に頭を乗せ寝ている。

シアンは相変わらずいつもの丈の長いメイド服。今日は雄英体育祭で、外部からの人間がそれなりに来る。

だというのに頑として、その服を着続けている。

何がそれほどまでに、お気に入りなのだろうか。

雄英の中庭。その木陰の下で涼しい風が吹いている。

時折強い風が吹いて、青の少女の髪を揺らした。

相澤は緊張感がまるでない青石を呆れたように見る。

起こそうと思つて近づくが、シアンは自らの口元に人差し指を当てた。

俗にいう「シーっ」というポーズだ。

相澤は声を抑えながら聞いた。

「飯は？」

「もう食べられてしまいました」

彼女の傍らには片づけられたお弁当箱があつた。

どうやらお昼は食べてしまつたらしい。

「ううん……相澤さあん……」

青石はボソツと寝言を漏らす

相変わらず幸せそうな顔で寝ている。

相澤何気なく空を見上げる。ずっと青石は閉じ込められていた。

外に出られるようになったのは、雄英に通うようになってからだ。

青石がずっと憧れていた外。何処までも広がる青い空。

それは相澤にとつては当たり前前に有るもの。そんなつまらないものでも、彼女にとつ

ては何よりも見たかつたものだ。

空を見られるというだけで幸せを感じた事は、相澤にはない。

人間は既に持っている物だけでは、満足できない生き物らしい。

「いつかは私に、こうやって膝を乗せてくれる事も無くなるのでしょうか」

シアンが青石の頭を優しく撫でる。

「いくら何でもいつかは大人になる。いつかは、そうなるだろう」

「ふふふっ」

シアンは何かおかしそうに微笑んだ。

「何がおかしい?」

「いえ、何でもございませぬ。……相澤様、この子の気持ちには気づいていらつしやいますよね」

「……あんな露骨な態度を取られて、気づくなという方が無理だ」

「応える気にはなりませんか?」

「……」

相澤は無言で答える。

何よりも雄弁に目が語っている。

もし青石が直接口で告白したところで、相澤はきつと受け入れない。

「ですが、一言だけ言わせていただきます。

相澤様、人の気持ちは移ろいゆくものです。この子は既に別の人にも、惹かれ始めています。

一途に一人だけを想い続ける事は、存外難しいものですから」

「シアン、何が言いたい」

「私は、後悔して欲しくくないのです。この子にも相澤様にも。」

いつか言える、いつでも言える。

そんな気持ち程、伝えられなかった時に後悔するものですから」

「……お前にはそんな経験があるのか？」

風が吹いた。木の葉や草を舞いあげて、空へと還っていく。

新緑の匂いが鼻に届く。風に揺らされた木に合わせ、木漏れ日の班目が揺れ動いた。

「さあ、どうでしょうか」

シアンには謎が多い。

法月の側近だとは、はつきりしている。

だがそれ以外の事は調べようと思っても、全然分からない。

ヒーローの権限を使って調べようとしても、情報そのものが見当たらない。

法月が手を回しているのだろうか。

シアンは元敵サイランだったとは聞いている。

だが相澤は彼女が、敵サイランだった時が想像できない。

シアンは一体、どのような人生を歩んできたのだろうか。

「あれ……ふああああ」

青石が目を覚ました。シアンの膝からゆっくりと上体を起こす。

まだ眠たそうに眼をこすっている。

そして目の焦点がゆっくりと相澤に合った。

目と目が合う。瞬間青石は顔を真っ赤にして

「ああああ、相澤さん！」

シアンの後ろに隠れてしまう。

シアンは笑いながら青石に話しかけた。

緩やかに、穏やかに時間は過ぎる。

信頼でき甘えられる二人の元。青石が幸せそうに笑っている。

第三者から見たら、まるで家族が団らんしているかに見えるだろう。

相澤には、青石が何が一番欲しいのか。

それが分かったような気がした。

傍らのシロツメクサに、蝶がゆっくり舞い降りた。

## 第48話

『結局これだぜガチンコ勝負！頼れるのは己のみ！』

心技体を駆使して駆けあがれ！』

スタジアムの控室。そこで青石は大きな欠伸をした。

雄英の最終種目が、先程より始まった。

この体育祭の最大の目玉だそうだ。

青石は部屋の片隅に置いたチアリーダーユニフォームを見る。

全員参加のレクリエーション。それをI-Aの女子はチア衣装を着て応援したのだ。

まあ峰田と上鳴によって騙された形ではあるが、チアリーディングを知らない青石は興味津々に食らいついていた。

青石の基本も何もない元氣だけが有り余るチアも、もちろん全国配信されている。

本人は全く意識していないが。

そして午後の時間が過ぎて今に至る。

先ほど飯田と発目の試合。それと常闇と轟の試合が行われた。

結果は飯田と轟の勝ち。



轟の試合の方は真劍勝負だったらしいが、飯田の方は違うようだ。

どうやら発目のサポートアイテムを、存分にアピールするだけの試合で終わつたらしい。

それも真劍と言えれば真劍なのだが。

そして次はいよいよ青石の番だ。

対戦相手の名前を思い出せても、苗字を覚えていない。

思い出そうにも思い出せなかった。

そこで青石は彼を、“スーパー人使君”<sup>ひとし</sup>と呼称する事に決めた。

世界ふ●ぎ発見か。一体どこの不思議を発見しに行くつもりなのか。

そう突っ込まれるのは後の話である。

「うん、そろそろ行くこうかな。相手はスーパー人使君か。

どんな個性なんだろ？ ま、いっか」

どうせボクに勝てる訳ないんだし。

その言葉は胸の内に止めておく。誰が聞いている訳でもない。

だが聞いている人が居なくても、決して言っていない事だとなんとなく思った。

——調子乗つてると足をゴツソリ掬つちやうぞつう、“宣戦布告”しに来たつもり

先ほど青石は思い出した。

その少年が以前教室に、宣戦布告しに来た少年だと。考えてみれば不気味だ。

青石は彼がどんな個性なのか知らない。

今までも目立った事は何もしてなかった筈。

だが結果としてこうして、決勝トーナメントに勝ち進んでいる。

彼には何かがある筈なのだ。

だがその尻尾も掴ませないまま上に来ている。

その事実が青石を困惑させ、同時に恐怖させる。

いったい彼は、どんな個性を持っているのだろうか。

「考えても仕方ないよね。とにかく、ボクは全力でやるだけ！」

青石は控室から外に出た。

……。

『さあ待ちかねたな！　とうとうこいつの登場だ！』

個性の詳細一切不明！　規格外！

突然姿を現した超新星！　実力ならオールマイトをも超えるか!?

青石ヒカルだあ!!!』

—おおおおお!!

青石ヒカルは、声援に手を振りながら入場する。

スタジアムの反対側からは、対戦相手の心操人使が来る。

『ルールは簡単！ 相手を場外に落とす、行動不能にする。

もしくは参ったと言わせれば勝ち！

怪我は上等！ リカバリーガールが待機してる。

だが、もちろん命に関わるようなのはアウトだ！』

マイクからルール説明される。

そのルールに青石は安心した。フィールドに目をやる。

どうやら場外に追いやっても勝ちらしい。

それなら青石が嫌いな暴力を振るう必要性がない。

そつと場外に相手を置いてやれば、それで勝ちなのだから。

もつと難しく変則的な事を求められたり。

逆に相手を倒すのみだったら心苦しかった。

けれどその心配も無い。

『ヒーローは敵を捕まえるために、拳を振るうのだ！』

「参ったか……分かるかい？ 青石ヒカル。これは心の強さを問われる戦い」

「？……えと、ヒトシ君何を言ってるのかな？ よく分かんないよ」

いきなり話しかけてきた心操。青石はさして警戒もせずには答える。それが致命的な悪手だとも知らず。

『じゃあ始めるぜ！ レディ……スタート！』

「一つ聞いていいか？」

心操は開始早々話しかけてきた。

青石は無視するのも失礼だと思い、返事をする。

「えっ、何か……な……」

だが、彼に返事をした瞬間、青の少女の動きが止まる。

「……俺の勝ちだ」

心操の言葉。それを青石は、ほんの僅かに残った意識で聞く。

彼の無表情な顔が、何故かとても印象に残っていた。

……。

相澤は実況席から青石の試合を観戦していた。

心操の質問に青石は案の定答える。

そしてまんまと彼の術中にはまっていた。

『なな……何が起った!? 青石ヒカル開始早々完全停止！

ビクとも動かねえ！ これは心操の“個性”か!』

青石が心操に返事をした直後、様子が変わった。

何もしやべらない。そして動かない。

指先すらピクリともしない。

いったい何が起きたのか、見ている人には分からないのだろう。

あつという間に青石が心操を倒すないし、場外にしてしまう。そう思っていた。

だが現実が違う。

未だ青石は動かない。

そして勝ち誇った顔をしているのは心操。

『全然目立ってなかったが彼……ひよつとしてやべえ奴なのか!』

心操が口を開いた。

「そのまま場外に歩いて出ていけ」

青石は心操に言われたままに、場外へとゆっくり歩いていく。

スタジアム中がざわつき始めた。

『ああつと、青石従順——!』

「だからあの入試は合理的じゃねえと……」

「ん? 何?」

相澤は手元の資料を見ながら呟く。

隣のマイクは気にしているが、実況を優先していた。

相澤は、心操のデータを改めて確認する。

ヒーロー科を受験するが、実技試験で彼は落ちていた。

入試の内容はロボットの仮想敵を倒し、そのポイントを競うもの。

そう、ロボットだった。

心操人使。個性“洗脳”。

彼の呼びかけに応じたものは、彼の言いなりになってしまう。

もちろん、本人が使う意識が無ければ洗脳することは無い。

その個性はロボットには当然通じない。

だから入試の実技試験では“無個性”も同然だったのだ。

相性が最悪だったと言っている。

それを見越してか、彼は普通科も受験していた。

落ちる事を想定していたのだ。これ程の強力な個性でありながら。

そして普通科で入学した後、ひたすら機会を伺っていた。

この雄英体育祭という絶好の機会。

たいして目立つことも無く、決勝にまで上がる事は難しい。

結果を出していたら、必然的に目立ってしまう。

如何に彼が、どれ程用意周到に準備を重ねてきたか。それが伺えるというものだ。

“洗脳”が青石に果たして効くのか。相澤には判断できなかった。

だが今の様子を見ている限り、通じているようだ。

元より青石は、法月の個性により抑え込まれていた。

思つた事を現実にする個性。だが弱点は有る。

その一つとして、今の様に、思考そのものを封じる事。

彼女そのものは個性を除けば、遺伝子調整されただけの人間に過ぎないのだから。

青石は歩みを止めない。

そのまま場外の一歩手前にまで行く。

『あぁー!! 青石ヒカル、このままあっけなく終わってしまうのか!』

……。

(嘘……? なんで!? ねえ止まってよ!)

青石は懸命に足掻く。

だが体は言う事を聞いてくれない、頭に靄がかかったようだ。

心操人使の問いかけ。それに応じた瞬間から、意識が遠くなる感じがした。

そして今彼の命令のまま、体は場外に向けて歩いてる。

それは法月に個性を使われた時に似ている。

(止まれっ！……止まれっ！)

青石の頑張りも虚しく、体は言う事を聞かない。

そのまま歩き続け、ついに場外の手前にまで来た。

——ねえ、私。

(レギオン……)

周囲が急速に速度を失っていく。手を振る人の手が止まる。

聞こえていた音も遠くなる。

フリッカー融合頻度が急速に上昇し、現れたレギオンと二人きりの空間になる。

目の前のレギオンが口を開いた。

——どうして頑張るの？ このまま負けちゃえばいいじゃない。

(……え？)

青石はレギオンの言う事が信じられない。

目の前の青の少女。レギオンは悲しそうに顔を伏せている。

(どうして!?……なんでそんなこと言うの!?)

青石の言葉にレギオンは静かに首を振った。

——あの男の子。心操人使君は、本気でヒーローを目指してる。



相澤先生の言う通り、お遊びじゃなく、真剣にね。

私は……彼の記憶を見たわ。彼はこの戦いにどれ程の覚悟を固めてきたと思う？  
どれ程真剣に努力してきたと思う？

(それは……分かんないけど……でもボクは！)

——負けたくない。だけど心操君はその気持ちを私あなた以上に持つてる。

客観的に見て、そう判断せざるを得ないわ。

(そんな……！)

——逆に聞くけど、あなたが勝つてあなたに何か良いことが有るの？

緑谷君や轟君、お茶子さんの様に具体的な目標を持つているの？

(……だけど)

——今すぐ私が助けるのは簡単よ。体の主導権を交代するなり、無理やり洗脳を解くなり。幾らでも方法は有る。

でも私が聞いているのはその先。あなたが勝つ事は、彼が勝つ以上に意味がある事なのかしら？

(それでも！ ボクは負けたくない！)

——どうして？

(どうしても！)

——だから、どうして？ あなた別にこの戦いで負けても、何も損しないじゃない。スターレインを迎撃した後の事なんて、その後に考えればいい。

私達にはそれだけの“力”がある。

確かな夢と未来を望んでいる心操君に、勝ちを譲ってあげて、何がいけないの？

(……分らない、でもボクは……)

——あなたは何を知りたいの？

……。

爆豪は目を覚ました。

むくりと起き上がる。

周りを見たら、どうやら医務室のベッドの上だ。

消毒液の匂いだろうか。保健室のような独特な臭いが鼻に突く。

かかっている白いベッドシーツを、彼は乱暴に押しつけた。

やけに眼が冴えている。

どんなに熟睡して快眠だった日より、ずっと視界が暗れている。

そんな爆豪の元、リカバリーガールが近くに寄ってきた。

「おや、起きたかい」

「ババア、今どうなってやがる？」

短く爆豪は問う。

「今まさに決勝トーナメントの真っ最中さ。

一応あんたも出場できるよ。目が覚めてなかったら、失格だったんだけどねえ……  
はあ」

心底残念そうにいうリカバリーガール。

どうやらそのまま寝ていて、失格になって欲しかったらしい。

だがり起きた以上、爆豪はもうやる気満々だった。

体の大事をとって棄権する事など、到底あり得ない。

スタジアムに様子を見に行く。

爆豪は歩みを進めて、観客席まで来た。

競技場内は、ゴミの様に人が溢れかえっている。

その人々が声を口々にしながら、スタジアムの中央を見ている。

爆豪の視線もそちらに向いた。

『ああと、青石従順……!』

青石ヒカルが、男子生徒に言われたままに場外へと歩いていく。

普段のとぼけた顔は硬直し、魂が抜けたかのようだ。

周りの会話から状況を推察する。

どうやら青石が声を掛けられ、それに答えた瞬間おかしくなったらしい。

察するに男子生徒の個性は、呼びかけに答えたら発動するタイプだったようだ。

青石ヒカルは話しかけられたら、無視するようなタイプではない。

むしろ嬉々として喋りたがる人間だ。

たとえ競技中だろうと、聞かれたら答えるだろう。

それが仇になったか。

「ふざけんな……」

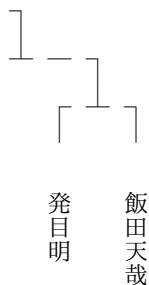
爆豪は苛立ちを隠さない。

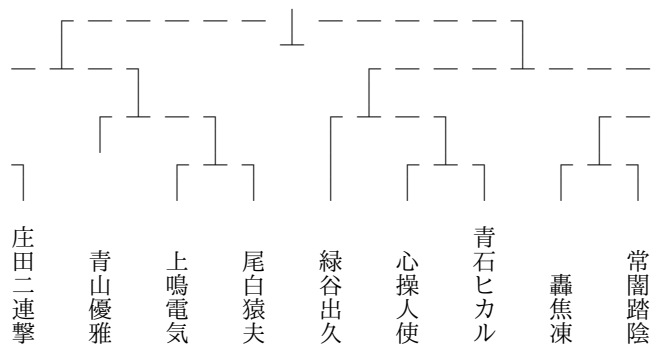
あれ程までに滅茶苦茶な奴が、圧倒的な力の持ち主が。

こども簡単にやられる。やられようとしている。

爆豪は中央モニターに目をやる。トーナメント表を見ると、爆豪と青石が戦えるのは

決勝戦だ。





八百万百

麗日お茶子

爆豪勝己・

それまでに負けるつもりはない。

だが青石がこんなつまらない終わり方をしては。

それこそ何のために二人騎馬をしたのか、分からなくなる。

「おいー」

人をかき分ける。観客を押しつけ、跳ねのけ。

時折掛けられる声も無視する。

観客席の最前列。

青石ヒカルから見ても真正面の向こう。

そこから爆豪はありつたけの声を出した。

「何やってんだ自販機！ 負けんじゃねえ！」

……。

——負けんじゃねえ！

(えっ……っ?)

声が聞こえた。

今確かに、レギオンとしか会話が成立しない止まった世界の中で。確かに耳に届いた。

青石はもう一度周りを見渡す。

(爆豪君……)

爆豪が観客席の一番前に居た。

いつも凶悪な顔を、更に凶悪にして叫んでいる。

(シアンさん！)

少し離れた場所にシアンの顔も見つけた。

祈るような表情で固唾を飲んで見守ってくれている。

先ほどは見えなかった顔が、今はハッキリと見える。

委員長の飯田、副委員長の八百万が。

友達の麗日、轟が。アズライトの力を持つ緑谷が見える。

緑谷の側のアズライトも、こちらを見守っている。

そして一番気になるのは

(相澤さん……)

やはり相澤の顔。彼の表情から何かを読み取るのは難しい。

だが、彼の顔を見て思う。

負けたくない。

終わりにたくないという気持ちだが、どんどん湧き上がってくる。

——答えは、出た？

「今は。まだ分からない事だらけで、よく分かんない。だけど……」

青石は迷いのない瞳になる。

目の前のレギオン。青の少女は微笑む。彼女の背後に控える、幾万幾億のアズライト

が見えた。

彼女達も答えを待っている。

「……ずっと思ってた。なんでボクは一人なんだろうって。

なんでボクばかり酷い目に遭って、誰もボクを助けてくれないんだろうって」

アズライト達は頷く。

そのまま視線で先を促される。

「でも違ったんだ。ボクは一人じゃなかったんだ。

相澤さんがずっと側にいてくれた。相澤さんだけじゃない。



シアンさんも。それに今は友達も！

着火マンが助けてくれなかったら、ボクこの場に立つことも出来なかった」レギオンは「ええ」と頷いてくれる。彼女の顔が柔らかくなった。

喋れば喋るほど、思いが溢れてくる。

「あの時に緑谷君や轟君。皆が助けてくれたから、ボクはここに居られる。

多分相澤さんだつてそうだったんだ。

相澤さんだつてきつと、誰かの助けを受けてた。だからボクの側に居てくれた。

きつと相澤さんを通してボクは、世界中の誰かと繋がっていたんだ。

相澤さんを通してボクは知らない誰かから、助けを貰っていたんだ」

人と人の繋がりが見知らぬ人にまで届いて、誰かのためになる事が出来る。

それつとても素敵な事じゃないかしら

セルリアの言葉が胸に蘇る。

今までつとに分からなかった。つと青石は孤独を感じていた。

つと誰かに側に居てほしかった。

一人で抱え込むのが辛いから、誰かに慰めてほしかった。

でも青石はもう一人じゃない。

その事に気付いた。人は一人では生きていけない。

それは物理的な意味でも、精神的な意味でも。

青石ヒカルという、今ここに有る存在は、決して自分一人だけの物ではない。

「ボクは——何処にでも行きたい、何処までも行きたい。

人の為に、誰かの為に。

世界の何処にでも、行きたい！ だから……！」

勝ちたい。負けたくない。

この試合に確かに勝ったところで、何かが直接変わったりなんてしないかも知れない。

だが、負けられない。

青石ヒカルという存在は、様々な人からの救<sup>たす</sup>けを受け、ここに居ることが出来るのだから。

だから、その人達を裏切りたくなんてない。

レギオンは何も言わずに首を縦に振る。

彼女は優しく青石を抱いた。

彼女の思いが言葉ではなく、直接心に流れ込んでくる。

心と心が繋がる。言葉を介さずに直接互いを理解していく。

分り合っていたと思っていた。しかし心は変化する。

レギオンは、“負けてあげればいい”と思った。

青石ヒカルは、“負けたくない”と思った。

恐らくこの先も、互いを分らない事が出てくる。

すれ違う事も有る。

だが互いに分かり合う意思を捨てなければ、きつとまた分かり合える。

青石はそう信じている。それはレギオンも。

彼女はなりたい。

人の為に、誰かの為に。そんな存在になりたい。

具体的にどうするのか。それはまだ見えない。

だが進み続ける事に意味があると青石は思う。

「支えてくれている人が居るんだ。」

ボクはボクの信じる道を進みたい。その先に何が有るのか分かんないけど。だから

ボクは勝つよ！

ボクも皆の様になりたいから！」

ずっと抱えてきた悩みと共に、頭の靄が晴れていく。

徐々に世界に色と音、そして速度が戻る。

彼女は完全に自らの体を取り戻し、世界に帰っていった。

『止まったああー！ 青石ヒカル、場外寸前で踏みとどまった！』  
「はあっ！ はあはあ」

青石ヒカルは荒い息を吐く。

目の前に有るのは白線。これを一步でも踏み越えていれば、青石ヒカルは敗退していた。

正面の遠くを見ると、爆豪の顔が小さく見えた。

手足を何度も確認する。

両掌でグーとパーを繰り返し、確かに体の制御権が戻った事を確かめた。

背後を見る。

そこには悔しそうな顔をした心操が居た。

続けて彼は声を上げる。

「はっ！ 何でもありかよその個性は!？」

青石は声を上げようとしたが、押し黙る。

確かにネタが分かった分、個性で対策さえすれば応えられる。

レギオンもきつと助けてくれる。

だがそれでは、駄目だ。彼女は首を横に振る。

本当に本気でやらないと、失礼だと彼女は思う。

「だんまりかよ? ……何とか言えよ!

俺はこんな“個性”のおかげでスタートから遅れちまったよ。

……恵まれた人間には分かんないだろ?

あつち 誂え向きの“個性”に生まれて、望む場所に行ける奴らにはよ!」

「っ! ……あああ!!」

彼の言葉が、青の少女を深く抉った。

何も知らない癖に。彼女の心の中に、ずっと溜まっていた不満が噴出しそうになる。

力がありながら。否、力が有るがゆえに彼女は何処にも行けなかった。

青石は言いたい。あなたに何が分かる、と。

だがその気持ちは封じ込める。

今は自分がかつて持っていた夢に向かうため。

湧き上がる殺意にも似た衝動を必死に押し殺す。

彼女は個性を使用した。時間にしてほんの一瞬。

心操を彼女は痛みや怪我もなく、ただ場外に移動させた。

あまりにも一方的であつさりとしていて、そして呆気ない。

何の面白みもなく、激しい力のぶつかり合いなど無い。

だがこれが彼女の考える最善。

誰も痛い思いをせずに済ませる。

殴る必要なんてない。場外で良いのなら、ただそこに移動させればいい。主審のミッドナイトの反応が一瞬遅れる。

青石は場内で、心操が場外に立っている事を確認して。

そして高らかに宣言した。

「心操君、場外！ 勝者、青石ヒカル！ 二回戦進出よ！」

『き、決まったああああ！ 勝利したのは青石ヒカル！』

心操の個性を何とか解いたか！ 最後は圧倒的な強さを見せた！」

スタジアムは興奮で湧き上がる。拍手の音が鳴り響く。

心操は場外でただ呆然としていた。

自身がいったい何をされたのか、分からなかったのだろう。

それは当然だ。青石ヒカルが本気になった時には、人間の反応速度など。

どんな人間でも見てから動くのに、0.1〜0.2秒はかかる。

それでは余りにも遅すぎたお話にならない。

青石は右手を前に出した。

「何の真似だ？」

「何って握手、ありがとうございましたって。変かな？」

「……お前警戒しないのか」

「警戒って何を？」

彼女は首をコテンと倒す。

「俺の個性。もう分かってんだろ。どういふもんなのかよ」

心操の言葉に青石は「うーん」と首をひねった。

「そんなこと言われても喋らなくちゃ、お話しできないよ。」

それにヒトシ君は、きつと個性変に使ったりしないと思うし」

「……根拠は」

「無いよ直感！ はい、ごちやごちや言っでないで！ 握手！

するのしないの!?! どっちなの!?!」

心操は何度か躊躇いながら手を動かす。

そして渋々と言った感じに手を前に出した。

「はい握手——」

その心操の手を青石はむんずと掴む。そして上下に動かした。

『おお!?! 良いね、競技の後の握手を送る選手！

お前ら、もつと惜しめない拍手送りやがれ!』

マイクに煽られて、観客が一層大きな拍手で祝ってくれる。

「普通……俺と話す奴は身構えるんだかな」

「そうなの？ でももう関係ないよね！ ボク達もう友達だもん！」

「……は？」

「ほら！ 両選手、中央に戻りなさい！ 互いに礼をして終了します！」

ミッドナイトに従い青石は中央に戻る。

そしてお互いに礼を交わす。周囲からの拍手は、まだ鳴りやまなかった。

「ヒトシ君、ごめんなさい」

「いきなり何だお前」

頭を下げた青石。心操は訝しんだ。

「前に教室に來た時の事思い出したんだ。あの時“強く見えない”って言っちゃった

事思い出して」

「……」

そんな事もあつたなと彼は呟いた。

青石は力を込めて続きを言う。

「でもそんな事ないよ！ ヒトシ君凄く強いもん！

まさにスーパーひとし人使君だよ！」

「褒めてえのか馬鹿にしえのか、どっちなんだよ！」



「馬鹿になんてしてないよ！　じゃあねー！」

……。

心操は青石ヒカルに負けた。その彼女は嵐の様に去っていく。

言いたい事を勝手に言いつくし、勝手なあだ名をつけていく始末。

なにがスーパーひとし人使君だ。

心操まさに今ボツシュートされてしまった訳で、どう考えても煽りとしか思えない。

しかし青石ヒカルの言葉には邪気がない。

彼女はあまりに人を警戒しなさすぎる。

——ボク達もう友達だもん

「はっ……！」

反吐が出るくらい彼女は無邪気だ。

完全に“洗脳”はかかっていた筈。

どうやって解いたかは分からない。

が、己と彼女の間に有る力の差は認めるしかない。

彼は裏に帰るため、ゆっくりと足を進める。

「かっ！　良かったぞ！　心操」

「正直ビビったよ」

「……」

同じ普通科の連中から声が掛けられた。

よく耳を澄ませば、心操に対してなんらネガティブな言葉は聞こえてこない。

それどころか青石ヒカルをあわやと言う所に追い込み、互角の戦いをした。

そんなほめたたえる声に

「この個性対敵サイランに関してかなり有用だぜ」

「雄英バカだな。あれで普通科か」

心操の力を確かに認めてくれる人たちがいる。

負けこそはした。だが心操の努力は決して無駄などでは無い。

勝てこそはしなかったが、心操の足掻きは確かに人々の心に焼き付けられるものだった。

「聞こえるか心操。おまえ凄いで」

心操は背後を振り返る。

その視線の先には青石が居る。

互いに言葉はない。だが青石は頷く。彼女の口が動いた。「負けないから」と。

心操はそれをただ見届ける。

いつの間にかかいていた汗でびっしょりとしている。

それだけ緊張していたのだろう。

吹き抜ける風が汗を蒸発させて、心地よく火照った体を冷やしてくれる。

何故だろうか。

負けたというのに、全然後悔していない。

やるべきことをやって、全力を尽くした。そして相手は心操の個性を真正面から受けて、打ち破った。

だからか。結果こそは初戦で敗退。それなのに全く悔いが残っていないのは。

心操は空を見上げる。

彼の心は空より青く、鮮やかに晴れ渡っていた。

## 第49話

『さあ決勝トーナメントの一回戦が終了だ！』

改めてトーナメントを確認するぜ！』

プレゼント・マイクが、テンションを更に上げ実況を続ける。

これはテレビでも放映されて全国に流れている。

青石は隣でやかましいなと思いつつながら聞いていた。

青石も実況席に居るのはなぜか。

それはテレビ受けが良く、視聴率に関わるからだと言われた。

何せ第一種目から、青石は次元が違う力を見せた。

将来ヒーロー業界を背負う人材になる。

大多数の人間は、そう思っていて彼女に注目している。

画面に映っていたら注視しても仕方がない。

必然的に青石が画面に入っている時には視聴率が跳ね上がる。

先の心操との一戦は、一時90%台を記録したらしい。

当然マスコミは食らいつく。

英雄もテレビ局などのマスコミを、軽々しく扱う事は出来ない。

ヒーローの活躍を民衆に伝えるのは、他ならないマスコミなのだから。ヒーローとマスコミが昵懇じっこんの仲にもなる。

故に一部のヒーローに、マスコミとの癒着。

それが進み始めているのは、青石の知る事では無かった。

ともあれ彼女は選手であるにも関わらず、再び実況席に呼ばれている。

もつとも目的は何もマスコミ受けだけではない。相澤の側において余計な事をさせない。そのための監視という側面も有るのだが。

青石は先ほど行われた、爆豪と麗日の試合のリプレイ。

中央モニターの隅に、流れているそれを見る。

青石の貧弱な語彙力では、なんと表現していいか分からない。

激戦であつた事は間違いない。

互いに全力を尽くして戦っていた。

互いに了承済みであつたとはいえ、青石にはとても辛い光景だつた。

結果だけ言えば、爆豪勝己の勝利に終わった。

だが麗日にチャンスが無かつたかと、言うとそうでもない。

もし爆豪が一瞬でも判断を誤つて、麗日に触れられていたら。

その時点で逆転していただろう。

とはいえ、結果として爆豪が勝った。それは確固たる事実。

最後の麗日の策を見た時、いやでも青石の脳裏には思い出された。

自身が作られた意味。およそ二週間後、何がこの星に来るのかを。

5 t h スターレイン。

五回に渡り、流星群が地球に降り注ぐ。

何も手を打たなければ、人類の滅亡は必至。

青石はそれを何とかしなければならぬ。

何はともあれ一回戦が終了した。

短い休憩を挟んで二回戦が開始される。

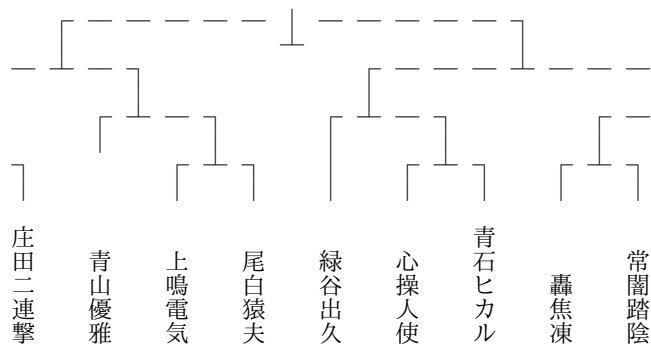
本当は今すぐ、麗日の所に行きたい。

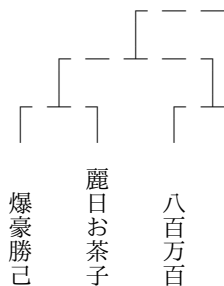
その気持ちを何とか抑えつつ、そこに座り続けている。

青石は現時点のトーナメント表を確認した。

飯田天哉

発目明





勝ち抜いた生徒は、概ね青石の予想通りだった。

上鳴電気と尾白猿夫の試合は一瞬で終わった。

上鳴の放電に、尾白は為すすべなくノックアウト。

上鳴電気の個性は“帯電”。

特にこの一対一のトーナメントでは無類の強さだろう。

尾白も決して弱くは無いのだが、個性がいかんせん地味だ。

敗れてしまいはしたが、彼の評価が下がることは多分無いだろう。

八百万百と庄田二連撃の試合も衝撃的だった。

試合が始まるや否や、八百万は何といきなり銃を作った。

そのまま発砲して命中。



試合終了となった。庄田二連撃は物理的か、あるいは精神的なショックか。失神していた。

八百万が作った銃弾はゴム弾であり、殺傷能力はない。撃った場所も全て急所を外れている。

ミッドナイトの審査の結果有効だと判定された。

庄田は自身の個性が何だったのか。何も見せることが出来ず敗退。

それにしても、青石は八百万の創造のスピード。それが以前にも増して早い気がした。

相当な努力を、体育祭に向けてして来たのだろう。

「二回戦は小休憩を挟んだ後に始まるぜ。」

次は飯田天哉VS轟焦凍だ！ 青石の勝敗予想は？」

マイクから質問される。

突然だったので少し反応が遅れる。

彼女は「うーん」と考えながら答えた。

「……轟君の勝ちだと思う」

「やっぱりか。ネットの予想でも、大半が轟の勝ちを予想してるみたいだな」

「うん、やっぱりあの氷結を何とかしないと難しいと思う。」

一度でも受けると、次の攻撃も避けられなくなるし。

実質一撃必殺のようなモノじゃないかな」

「それでもって範囲も威力も未知数！　かつ一瞬で敵を拘束&無力化。

ヒーローになった時が楽しみだな！」

「でも、飯田君にもチャンスはあるよ」

「ほー？」

実況は続いていく。だが青石はだんだん心配になってきた。

心配なのは言うまでもなく麗日の事。

もう心ここに有らずといった感じだ。

(お茶子ちゃん、やっぱり心配だな)

やはり様子を見に行こうと決意した。

チラツと横の担任の姿を確認する。

やはり彼は青石の心の機微に敏感だ。個性を使おうかなと思つた時には、既に彼が

見て〃いる。

だが青石は諦めない。

青石はそんな風に邪魔されて、逆に麗日の元に行こう。そう心の中で燃え上がる。

相澤の個性にも弱点は有る。

もちろんそれを青石は知っている。

青石は相澤の方を見る。ずっと息を殺してその時を待つ。

相澤の目が瞬きで閉じたその瞬間、青石は個性を使った。

瞬きの時間はおよそ0.3秒ほど。しかし彼女にとって個性を使うのに、それは充分すぎる。

世界の時間が、停止する。

止まった時間の中、相澤の目が閉じられている。

正確には青石が周囲より早くなっている。

今設定している青石の時間は、倍速一百万倍。

つまり青石にとって一百万秒過ぎたら、周囲の人間は一秒が過ぎる。

周囲の人間にとって、青石は一百万倍の速さで時が過ぎる。

静止した時間の中で、青石は実況席から静かに出ていった。

……。

「——って感じだな！ 青石……って居ねえ?！」

マイクの驚く声が耳に響いて痛い。

相澤は軽く耳をふさいだ。

「あの馬鹿が……」

青石は相澤の監視の元をすり抜けて、何処かへ行った。そう遠くには行っていない筈だ。

「あつ青石ー!!? おい、何処行きやがった!」

どうせ退屈になったか、はたまたは麗日が心配になったか。

どつちでもないかも知れない。

これも一応テレビに映っているのだ。もう少し自覚を持っていて欲しい。

だがあんな地下生活をずっと続けていたのだ。テレビに出るといふ事がどういふことなのか、ピンと来ないのだろう。

(最悪、雄英の外に出たか? ……それは無いか)

現状、青石ヒカルに課せられている枷はほぼ解かれている。

雄英からまだ出てはいけなさと、言い聞かせてはいる。

けれど彼女がその気になって、外に出ようとしたら、止められるものは何も無い。

その件でだいぶ日本は各国と揉めているらしい。

本当はこうやって雄英体育祭に出られる事など、有り得ないのだ。

彼女をこの舞台に出すに至るまで、おそらく相当強引に話を進めたに違いない。

それをしていたの言うまでもなく法月。

いったい彼は、この雄英体育祭で何を企んでいるのだろうか。

「考えても仕方ないか」

「ん？ 何か言った？」

「いや……」

相澤は何となく青石ヒカルの行方が気になる。

一体何処に行ったのか。

相澤の理解の範疇であれば良いのだが。

「何でもない」

その言葉に同期のマイクは「そうか」と短く返す。

彼は青の少女が、先ほどまで座っていた椅子を見る。

嫌な予感が、胸の奥から消えることは無かった。

……。

「えと……何処？」

青石ヒカルは迷子になっていた。

彼女以外の周りの人の時計は全て静止している。

正確には、ほぼだが。

彼女は進まない時の中、ゆらゆらと彷徨う。

力を使えば一瞬で周りの状況も把握できる。

だがそれは駄目だ。そう彼女は思う。

力が有るからと言って、それに頼り切りになるのは彼女のプライドが許さない。力を使つてやつて良い事と悪い事。

彼女の中のその基準は、実に曖昧なものであるのだが。

「あれ……」

気付けば青石はスタジアムの外に出ていた。

彼女の目的は麗日だ。

麗日はまだ競技場の中に居る筈。だから、中に戻らないと会えない。

それは分かっているのだが。

「……ちよつとだけ散歩してみよっかな」

彼女の中に少しでも冒険心が沸き起こる。

青の少女は心のままに、周囲の散策を開始した。

外は見た事ない物で満ち溢れている。

一つ一つ見た事ない物を見るたび、彼女はじっくり傍で観察した。

中でも彼女が今夢中になっているのは蝶々。

立派な成虫のアゲハチョウだ。

それをしげしげと眺めている彼女。そして

「ん……と。こんな感じかな？」

目をつむり自身の背中に意識を集中させる。

すると青石の背中に透き通った羽が出来ていた。

見た目は青石が観察していたアゲハにそっくりだ。

そのまま。パタ。パタ。羽ばたいてみた。空を跳ぶにはいかんせん心もとないが、彼女はそれで満足そうに頷いた。

「あははは！ すっごいしつくり来る！ なんで今まで無かったんだろ」

蝶々を真似して自らに生やした羽。彼女はそれが気に入ったらしい。

羽を生やしたまま、散策を開始し始める。

そしてやがて……

「あっ……」

普段は絶対に立ち寄らない場所にまで来てしまっていた。

そこは雄英の正門。

既に体育祭も始まった後だが、今だ入場する人は絶えていない。

皆静止した時間の中で、期待に顔を染めている。

どうやら荷物検査と身体検査を実施しているようだ。

遅れてきた人は更に遅れ、今頃になって入場出来たりしているのだろう。

青石は止まった時間の中で、人々の間をすり抜ける。

そして正門からあと一步のところまで来た。

あと一步。あと一步だけ踏み出せば雄英の外に出られる。

だが彼女の足が止まる。

踏み出そうとする足の震えが止まらなくなる。

「なんで……なんで……？」

これはもしかして法月の個性か。そう疑う。

でも彼女は本当は気付いていた。

あの日、緑谷や轟達が青石を止めてくれた日以来。

彼女にかけられた束縛は解かれている。

この服装が何よりの証。

今まではずっと白の拘束具ワンピースしか着られなかった。

この体操服にはそんな拘束する機能は付いていない。

正真正銘の只の服だ。

そう、出ようと思えば出られるのだ。

今彼女が雄英の外に出ようとして、止めるものなど何も無い。

だということに



「……そっか。ボクは……」

彼女は何を思ったのだろう。

あと一歩で出られるというのに、その足を戻す。

くるりと正門へと背を向けて、元の場所に歩き出した。

青石の背中に生えていた羽は、いつの間にか消えている。

静止した世界の中での、彼女の一連の行動。それを知る者は一人も居なかった。

……。

「勝手に何処行きやがった」

実況席に戻った青石に待っていたのは、相澤の説教だった。

クドクドと良くそこまで喋られるものだ、青石は感心する。

だがいつもとは少し違う。

普段なら拳骨の一発でも食らう所なのだが、今回は言葉だけだ。

カメラの前だからだろうか。やはり気を使っているのだろう。

「おいおい、そこまでにしといてやれよ。で、なんでいきなり抜け出しやがった？」

“プレゼント・マイク”の質問に青石は、もじもじしながら答えた。

「ちよ……ちよつとトイレに」

嘘である。

「おー、それならしょうがねえ！」

「……」

だがマイクは信じたようだ。

相澤は視線で「嘘つけ」と言っている。

ならばと、追加の言葉を繰り返した。

「おつきい方だよ！」

「誰もそこまで聞いてないねえよ！」

マイクのツツコミも、全然青石は気にした様子も無い。

青石は「どうだ、信じたか」と言った顔をしている。

相澤の表情は、更に呆れ果てたものになった。

一応全国に、このやり取りも流れている。

けれど彼女は今まで、強制引きこもり生活を送っていた。

だから実感が沸かないのだろう。

「アーアー……おっとそろそろ時間が来たな！」

じゃあこれから決勝トーナメント、二回戦を始めるぜ！

速さなら正に韋駄天の如く、飯田天哉！

ここまで氷結しか使ってねえが、炎は見られるのか!?

個性“半冷半燃”、轟焦凍!

両方ともヒーロー家出身のエリート対決だ!

飯田と轟。二人がリングの上で上がってくる。

お互いに集中を極限にまで高めているのだろう。

表情は真剣そのもの。無駄口も一切叩いていない。

青石の予想が正しければ、開始十秒ほどで試合の大勢が決まる。

轟の氷結を確実に防ぐ手段は、飯田には無い。

よって……

「スタート!」

開始が告げられた瞬間、飯田が動く。

殆ど同時に轟も動いていた。

氷結が地面を伝って飯田の元に延ばされる。

が、既にそこに飯田は居ない。

その場からジャンプして、轟の方に距離を詰めていた。

すかさず飯田は空中から蹴りを放つ。

轟は屈んで避けた。

だが

「決める！」

「ぐっ！」

轟の後頭部に、蹴りがさく裂していた。

屈んで死角を作ってしまった轟。

彼に出来た一瞬の隙に、着地を終えて次弾を繰り出したのだ。

轟は再び氷結を放つが、飯田は再びジャンプして躲す。

轟の背後に着地する。そのまま轟の襟首を掴み、飯田は場外へと連れ去ろうとするが

……。

「……………いつの間にか!？」

、だが蹴りを食らった際に、轟もただでは終わらなかつた。

飯田の足の排気筒。そこが氷で詰まっている。

青石には当然見えていた。が、飯田からすれば気付きにくい箇所。

見えてなくても仕方ない。

機動力を奪われた飯田は、あつと言う間に氷結に飲み込まれる。

「……………」

青石は、感情を失くした目でそれを見つめた。

お互いの夢の為、お互いに力をぶつけ合い傷つけあう。

そしてそれを見世物にして、それを世間は楽しんで互いに譲れないのだと分かる。

飯田も轟も、なりたいたいものになるために努力を重ね。こうして戦っている。

だがそれが彼女には、酷く悲しい事だと思えてならない。

青石はこの試合の次だ。

飯田は棄権するだろう。

相澤と目が合い、彼は無言で首を縦に振った。

席を立つ。

先ほどとは違い、今度は個性を使わずに。

“プレゼント・マイク”は試合に夢中で気づかない。

青石は静かに部屋を出ていった。

……

「参った……」

飯田の降参。ミッドナイトが轟の勝利を宣言した。

観客から称賛の声がうねりとなって響く。

相澤はうんざりとした目で見ている。

「試合終了！ いやー短いながらも濃密な試合だったな！

さて、青石……つてまた居ねえ！」

「青石ならさつき出ていったぞ。試合次だからな。

忘れてたんじゃねえだろうな？」

「お……おうそうか。もももモチのロンよ！ 忘れてねえよ！」

相澤の呆れた声に、彼は多少どもっている。

フィールドがセメントスにより、再び元の姿に戻っていく。

実際はこの作業も、青石がやった方が早く済む。

文字通り一瞬で終わる。

彼女を雄英体育祭に、参加させると決まった際。

セメントスのように運営側で活躍させたらどうか。そういう案も出ていた。

だが本人の希望を鑑みて、選手として参加させる事に決まったのだ。

彼女が実際に選手として出る。

その決定が正式になるまでには、随分と紆余曲折した。

相澤はその事を、思い出したくも無い。

「じゃあ、フィールドの整理が終わったら。次の試合始まるぜ！」

プレゼント・マイクが再び喋り始める。

次の試合が始まるまでの時間稼ぎだ。

相澤は先ほどの試合を思い出す。

正確にはそれを見ていた青石の顔だ。

感情を失くした、人形のような顔。

普段の明るい彼女には、似つかわしくない。

青石ヒカルの本当の顔じゃない。彼女と付き合いがある人はそう言うだろう。

だが相澤には分かる。

あれが、あの顔こそが、素の青石ヒカルの顔だ。

普段の作っている顔ではない。

ありのままの彼女の表情だ。

それは相澤が監視を始めた最初の頃に、嫌という程見ていたものだ。

相澤は彼女に変わって欲しいと思っていた。

実際彼女は明るくなった。

けれどもそれは、思い込みだったのかも知れない。

「お、準備が整ったようだな！ 待たせたな、さあ始めるぜ二回戦二試合目！

初戦こそヒヤリとしたが、その力は圧倒的！

文句なしの優勝候補の青石ヒカル！ VS！

VS！

こつちも文句なしのパケモンだ！

バケモンにはバケモンをぶつけんだよ！ 緑谷出久！  
他には悪いが、これは実質決勝戦か!？」

「間違いなく、どちらかが優勝だろう。」

まあ結果は分かり切っているが」

相澤は息を吐いた。

言葉にした通りだ。結果など分かり切っている。

最初の心操戦こそ危なかった。

だがあれは例外。

まともに戦う事だけを考えたら、生徒など逆立ちしたって勝てない。

もつと言うなら、この雄英に全員が、青石に挑んだとしても。彼女には勝てない。

彼女に勝つことが出来るとしたら、それこそ例外的な事象が発生した場合か。

それとも騎馬戦が始まる前の、チーム決めのような力など関係ない戦いか。

その位しかない。

だから、緑谷出久の敗北は既に確定している。

問題はどの様に負けるか、どのくらい時間がかかるか。

その程度なのだが。

「っていうかこのスタジアム持つか？ 大丈夫？」



おーい！ 青石に緑谷！ 言っておくが観客に危害が加わる攻撃もアウトだ！  
ちやんと周りを配慮してやりやがれ！ Are You OK!？」

「イエー！」

青石は元氣一杯に、拳を突き上げて答える。

対する緑谷はこくりと首を振っただけだ。見ただけで、全神経を集中させているのが分かる。

だというのに青石ときたら

「緑谷君、ボクからしたら君はまだ地味すぎるぜ！ もつと腕にシルバー巻くとかさ！」

緑谷を煽るような事を口にしてている。

彼はそれに何の反応も示さない。

……緑谷は強い。

どうやら彼は世界で二番目の、アズライトの適合者らしい。

だが適性は青石ほどはないらしい。

どの程度の事が出来るのか。それは分からない。

少なくとも怪我の再生は出来る。それは最初の競技の時点でハッキリとしている。

トーナメントで青石に対抗できるのは、もはや緑谷だけだろう。

といつても彼が勝てるとは、相澤は微塵にも思っていない。

同じアズライトなら確かに、アズライトに対抗できるだろう。だが余りにも年季が違いすぎる。

それこそ青石は今までの人生の全てを掛けて、その力の制御を磨いてきたのだから。相澤が知るどんな人よりも、青石は努力を積み重ねている。

のほほんとしているようで彼女は、相澤の知る誰よりも努力の人なのだ。

それが本人が望んでいないもので、強制されて行っていたにしてもだ。マイクの口が動こうとしている。

今にも試合開始が告げられようとしていた。

## 第50話

『ス……』

“プレゼント・マイク”の試合開始の声。

それが言い終わらない内に、青石は個性を使う。

自らの内に秘めた個性レキオンと思考が同期する。

世界が彼女の「青」に同化され、望みのままに作り変えられる。

青石ヒカルは、通常の一万倍の速度で動く。

実況室から抜け出した時と同じだ。

周囲の時間は、彼女から見たら止まったかのように見えるほど、ゆっくりと流れる。

青石は、緊張した顔で固まっている緑谷の側にまで来た。

近くに来たというのに、彼は何の反応も示さない。

当然だろう。

緑谷からすると、彼女はいつもの一万倍の速さで動いているのだ。

反応できるはずも無い。

そのまま青石は、緑谷を場外に移動させようとして……。

「待って」

そんな青石の前に、別の青の少女が現れる。

軍服のような恰好、丈の短いスカートが翻った。

前に見たことが有る。間違いなく緑谷出久のアズライトだ。

「何？」

「このまま緑谷君を場外に出す気？」

「うん、そうだよ」

緑谷のアズライトの質問に、青石は素直に頷く。

相変わらず緑谷に動きはない。

爆豪との戦いを見る限りは、思考速度をそれなりに強化できるらしい。

だがあくまでもそれなり。

思考を速く出来るとはいえ精々、10倍前後の強化だろう。

今彼女は一万倍の速さで動いている。実際の身体速度も、思考速度も両方が一万倍。

もつと早くしようと思えば、幾らでも上げられる。

十万倍だろうが百万倍だろうが、一兆倍だろうが。

だから緑谷出久は勝てない。

どれだけ気合が十分だろうとも。

そもそも彼女との戦いの土俵に上がってこれない。

「最終的にあなたが勝つのは構わない。」

「ただ少しだけ、緑谷君に合わせて戦ってあげて欲しいの」

「……それに何の意味が有るの？」

緑谷のアズライトの願いに、青石は首を傾げた。

戦ってあげて欲しい。彼女はそう言う。

だが青石にはそれが何の意味が有るのか、さっぱり分からない。

「この戦いは緑谷君にとって、次の段階に進むために必要なもの。」

「そう私は思っている。だから……」

「分からないよ。なんで戦わないといけないの？」

「ボクは争いたくなんてない。そんなの悲しいだけだよ」

青石にとって戦いとは暴力だ。

そして暴力は、忌むべき野蛮で残酷な仕打ちだ。

だというのに、何故わざわざ戦おうというのか。

戦わずに済むのなら、それに越したことは無い。

この雄英体育祭の一对一の戦い。

青石にとって、この競技そのものが狂気の沙汰だ。

だからそれを青石は否定したい。

圧倒的な力を見せつけて、誰も傷つけることなく終える。

そうする事で、青石は暴力を否定したい。

彼女を助けてくれたものは、暴力では無い。

暴力など使わずとも、救われるものが有るのだと世に示したい。

そんな思考。

それを目の前の緑谷のアズライトに直接送りつける。

言葉を介さずに意思が伝わる。

緑谷のアズライトは、悲しそうに首を振った。

彼女の思考もまた、青石の心に流れ込んでくる。

緑谷のアズライトの考え。それ青石は理解して……

「はあ、分かったよ。……ちよつとだけだからね」

心底うんざりした顔で答えた。いかにも渋々だと言わんばかりだ。

「ありがとう」

緑谷のアズライトは礼を言う。その顔は笑顔に綻んでいた。

「一つ聞いていい？」

青石は何となく、試合で心操に聞かれた場面。それを思い出しながら質問してみる。

「何かしら?」

「どうして君は緑谷君を選んだの?」

彼女はミステリアスにほほ笑むと、口ずさむように答えた。

「内緒」

「そっか」

「ええ」

青石は再び試合開始の時、立っていた場所にまで戻る。

少しずつ自らの思考速度、及び身体速度を落としていく。

5000倍……10000倍……5000倍……1000倍

50倍の時点で、ようやく緑谷が動き始めた。

呆れるほどゆっくりと彼は拳を構え、こちらに突撃してくる。

青石は片手を軽く前に突き出す。

緑谷の拳を彼女は正面から受け止める。

純粹な力と力。同じアズライトの力がぶつかり合う。

周囲の時間を置き去りにしながら、二人の戦いの舞台は始まった。

……

『スー』

試合開始の音が聞こえ瞬間、緑谷の緊張が極限に高まった。青石ヒカル。間違いなく雄英最強。

いや純粋な力のみなら、雄英どころか世界最強の存在。

そんな彼女との戦いの火蓋が切られる。

緑谷はアズライトの力を借りる。

フリッカー融合頻度が上昇する。

思考速度が速くなり、周囲がゆっくりとした動きになる。

実況のマイクの声も呆れるほど遅く聞こえていた。

緑谷の体感時間は、全て20倍に引き延ばされる。

周囲で1秒で起きた出来事が、緑谷から見たら20秒かけて過ぎる。

本来ならば、全てがスローモーションに見えるほどの動体視力。

だというのに

「……速い！」

青石ヒカルは、緑谷のそれ以上に速い。

緑谷が右腕を振りかぶる。

そして繰り出す攻撃も、余裕を持ちながら彼女は回避する。

次に左足の上段蹴り。それも彼女は、すれすれで避けた。



まるでダンスを踊っているかのように軽やかな動き。

ひらりひらりと、蝶のように惑わせるような舞踊。

多分ギリギリで回避しているのはわざとだ。

緑谷も気づいている。

青石は手を抜いている。

もし彼女が本気なら、とつくの昔に緑谷は場外に放り出されている。

『……ター……トオー……』

実況の声が間延びして聞こえている。

ようやく今、スタートのコールが言い終わった。

緑谷は体感上、既に数十秒戦っている。が、周囲からすれば一秒ほどしか経っていない。

だがその間にも緑谷は、既に10を超える攻撃を繰り出していた。

その攻撃のどれも当たっていない。

「へへーんだ」

青石ヒカルは余裕の笑みを崩さない。

その顔が言葉より雄弁に語っている。

あくまでも自分は、遊んであげているのだと。

自分が本気になったら、そもそもの戦いすら成立しないと。それも緑谷は分かっている。

第二種目でハチマキを奪われた際、緑谷は思考速度を強化していた。だというのに彼女に奪われた事実には全く気付いていなかった。

緑谷が可能な思考速度の強化と、彼女のそれはまるで次元が違う。

「退屈だなあ」

青石が大きな欠伸をした。

挑発するようにニヤリと彼女は笑う。

むかつ腹がした緑谷。攻撃を放つが、再び外れる。

(アズライト！)

——本当に良いの？ 今のあなたには現時点<sup>レ</sup>が本当にギリギリなのよ？

(構わない)

アズライトの思考が伝わってくる。緑谷の要求にあまり彼女は気乗りじゃない。緑谷は更に思考速度の引き上げを要求する。

——あまり無理はしないでね。

緑谷のアズライト。彼女の嘆息する声が聞こえた。

彼の思考速度は更に早くなる。

先ほどは20倍だったが、今は倍の40倍だ。  
緑谷は「ワン・フォー・オール」の力を使う。

時間を40倍に引き延ばした世界。そこを日常と変わらない速さで動く。

「おっ！」

彼女は急激に速くなった緑谷に、やや驚いた様子だ。

不意を突けたのだろうか。今青石に攻撃が届きかけた。

彼女もやや驚いたような顔をしている。

だが肝心の攻撃は彼女には届いていない。そして仮に届いたところで、どれ程の効果が有るのか。

それも疑わしい。

緑谷と青石に繰り出される攻防は、常人にはとても見えない速度。

通常の40倍の速さで繰り広げられる戦い。

幾重にも重なる拳のやり取り。緑谷が打ち付け、青石がいなす。

躲してばかりだった彼女が、先ほどから適切に防御もするようになっていた。

放った拳の数は、百をとうに超えている。

そんな中、彼の右腕がようやく彼女の胴体を捉えた。

「やった!？」

“ワンフォーオール”の力を存分に込めたパンチだ。正真正銘何の手加減もしていない。

普通なら場外にまで吹っ飛んでいくのだが。

「……何かした？」

「ぐっ！」

「あはは！一度言ってみたかったんだよね、こういうセリフ」

彼女は蚊に刺されたほどのダメージも負っていない。

キョトンと首を傾けている。

そしてお返しと言わんばかりに、彼女の片腕が動いた。

「行くよ、ちゃんと防いでね？」

軽くなぐようにビンタが緑谷を襲う。

全力で両腕に力を込め、それをガードするが

「ぐうううううう!!」

凄まじい衝撃。

緑谷の両腕の骨が、彼女の力に耐えきれず、粉碎される。

その場に立っていられず後退していく。

踏ん張っている足元のセメントがガリガリ削れる。

あわや場外というところまで、押し返されて止まった。

ギリギリで何とか踏ん張っている。

「わあ緑谷君やっぱ強いね」

「随分と手加減しているくせに。そんな事言われても嬉しくないよ」

緑谷の両腕をアズライトの結晶が包み込む。そして再生する。

「やっぱり分かる？ でも緑谷君のアズライトがいけないんだよ？」

ボクだって本当は戦いたくなんて無いのに。

緑谷君のアズライトが喉<sup>けしか</sup>けてくるんだもん」

「僕のアズライトが？」

「うん、緑谷君のレベルに合わせて戦って欲しいって。

つまり、戦闘訓練だよな。

緑谷君を場外に出すのは簡単だよ。ボクはそうしたいけどね、暴力は嫌いだし。

でもアズライトの頼みは断り辛いもん。

だって緑谷君のアズライトは、同じ過去から分かれた、もう一人のボクだからね」

「……そんな事この場で言っているの？」

緑谷の質問にケラケラ彼女は笑う。

「大丈夫だよ、ボクの声は周囲には届かない。ちゃんと仕込みも終わってる。

ボクの声が聞こえているのは、緑谷君だけ。

口元だっけ見られないように細工してるし、問題ないよ」

「……」

彼女の笑みには余裕がある。

実際緑谷が彼女に勝てる確率は0に近いだろう。

むしろあの日、レギオンが暴走したのを止められた原因。

それは力で上回ったからではない。アズライトの力で皆の思いを繋ぎ、レギオンに届けられたからこそ、彼女は止まってくれた。

だから、緑谷は戦いで彼女に勝ったわけでない。

彼女が勝つか負けるか。それは彼女の心の思うがままなのだ。

「ねえ、緑谷君……やっぱりもう……」

彼女の言葉を待たずに再び緑谷は挑む。

再び力が激突する。

周囲の人間を完全に置き去りにしていく。

二人だけが理解できる演武が、今開催された。

……。

緑谷が再び挑みかかってくる。

“ワン・フォー・オール”の力を全身にまとい、鋭い一撃を浴びせてくる。その一つ一つが、一撃必殺。

青石ヒカルが相手だからこそ、緑谷は放つ。

それを普通のヒーローや敵が食らったら即死している。

相手が青石ヒカルだからこそ、力を容赦なく出せていた。

既に速度は音速の壁を突破している。

青石は自らの動きが衝撃波を生み出さないように、周りの空気も同時に操作している。

一方の緑谷はそこまでの余裕は無いらしい。

持てる力のままに、こちらに攻撃してくる。

辺りにまき散らされるソニックブームは、青石は力で打ち消しておく。

観客席に届く時には、強い風程度になっているだろう。

本当はこのスタジアム程度の広さでは狭すぎる。

彼女が全力で戦ったら、それこそこの地球そのものが持たないのだが。

「ねえ、緑谷君。どうして緑谷君はヒーローになりたいの？」

「それを言うなら君だって、なんで体育祭に出たんだ」

緑谷は質問に質問で返してきた。

「……なんでだろ、ボクにもよく分かんない」

緑谷のパンチが顔面に飛んでくる。

青石はそれを片手で軽くいなす。

「ボクはスターレインに対抗するために生まれてきた。

閉じ込められて、何処にも行けなくて。

ずっとスターレインに備えて訓練をした。ボクが頑張らないと、人間は滅んでしま  
う。

それが、現実だから」

「……」

緑谷は黙って頷く。

結局の所、青の少女の監禁生活はまだ続いている。

縛りは徐々に緩くなってきている。

だが、相変わらず水面下でのせめぎ合いは有るらしい。

世界各国からしたら、青石ヒカルが自由になる事を善しとするはずがない。

「だからスターレインが終わった後の事なんて、何も考えてなかったんだ。

だってその後は死ぬだけだったんだから。

緑谷君、スターレインが終わったらボクは……。



ボクはいったい何をすればいいの？」

「そんな事、自分で勝手に決めたらいいだろ！」

「分かんないよ！……ねえ緑谷君。」

ボクはずっと知りたかった。ボクが守る人達は、どんな存在なんだろうって。

ボクは、一体どんなモノを守るために生まれてきたんだろうって。

“人間”ってどんな存在なんだろうって。

……でも、駄目だ。知れば知るほど、駄目なの……。

雄英体育祭にこうやって出て、色んな人が見える。

色んな人を知っちゃえば知っちゃうほど……。

どんどん人間が嫌いになっていって、もう止められないんだ。

ねえ緑谷君。なんでボク達がこうやって戦っているのを……。

それをどうして、あの人達は笑って見ているの？」

青石は観客席を指さした。緑谷もその先を見る。

視線の先の観客達は、興奮に顔を赤らめ、笑っていた。

「こんな狭い所で生徒を戦わせて。」

夢を叶えたい皆の思いを利用して、見世物にしてる！

それを見て笑ってるんだ！ ねえ、これが“人間”なの緑谷君？」

青石の嫌う暴力。それは世の中に溢れている。

そして世の中は暴力で回っている。それが紛れもない世界の真実だ。

言葉だけでは、人を制御することは出来ない。

言葉だけでは、<sup>ツイン</sup>敵を捕まえる事は出来ない。

オールマイトがオールマイトたり得たのは、あくまで力があつたからだ。

緑谷に限らず、生きてたら自然に馴染んでいく原理。

だが青石はそれに拒否感を覚えている。

「どうして皆、人が殴り合っているのを見て、笑っていられるの？」

「こんな……ボクはこんな人達を守るために、今まで閉じ込められてきたの？」

「……」

「人間」ってなんなの!? 人が戦ってる姿の、何がそんなに面白いの!?

緑谷君! 答えてよ!

繰り返される彼女の問い。

それに緑谷は答える事が出来なかった。

……。

「スタート……ってええええ!? なんな何コレ!?

全っ然速すぎて目で追えねえ!」

緑谷と青石の姿がぶれる。

はた目には何をしているのか分からない程、高速で動いている。

相澤は鍛えぬいた動体視力で観察する。

だが辛うじて端々に蹴りなどの動作が見えるだけ。

設置してるハイスピードカメラ。その録画した映像を相澤は手元で再生した。

何十分の一というスローモーションにしてようやく分かる。

彼らの繰り広げている戦いの内容。

普通の人間が瞬きしている間にも、彼らは数十を越す応酬をやり取りしていた。

緑谷の拳がうねる。

大気が彼らの戦いに揺さぶられる。

彼らの戦いは強風となつてスタジアム内に吹き荒れていく。

風を操作しているのではない。これは只の、攻撃の余波に過ぎない。

観客席の最前列位になると、風が強すぎて目を開けるのもやっとみたいだ。

相澤は割と離れた実況席に居るから、冷静に戦いを観察していられる。

もつともただ見るだけでは何が起きているのか、把握する事すらも困難だ。

マイクも実況のしようが無いらしい。

彼らの手足の動きの一つ一つ。その戦う姿すらもぼやけて見えていない。

何をしているのか分からない以上は、何も言いようがない。  
「なんつーか……次元が違えな」

「……」

マイクのしみじみとした声。相澤は何も返さない。

青石は手加減している。それは間違いない。

だがはた目から見たらどうか。

緑谷が猛攻を仕掛けて、青石に食らいつついている。

あるいは共に、互角の攻防を繰り返している。

そう見えていてもおかしくない。

だがそれは有り得ない。

彼女の本気はこの程度ではない。

青石がもし本気ならば、既にこんな戦いすらも成立していない。

スローモーションで再生した映像を確認する。

青石は無意識にだろうか、口の端に笑みを浮かべている。

それからは圧倒的な高みから、緑谷を見下ろしているような印象を受けた。

「……」

マイクが実況を忘れて、無言で見守っている。

観客は反対に大賑わいだ。

あちこちから口笛や歓声が上がっている。

まるで古代のコロッセウムだ。人々の興奮は最高潮に達している。

プロヒーロー間でも見られないような最高レベルの戦い。

それがまさに今、目の前で起きている。

興奮するのは無理もない。

残像だけが残り、目で追う事すらも不可能なバトル。

およそ生徒の戦いには似つかわしくない、レベルが高すぎる一対一<sup>タイマン</sup>。

もはや彼らの輪郭をとらえる事も難しい。

その空気に飲まれているのだろうか。

どのくらい経っただろうか。

終わりは唐突に訪れた。

競技場の中心部から勢いよく弾かれる人影。

そのまま場外の壁に激突して、その場に倒れる。

速度があまりに早く、一体どちらが場外に出されてしまったのか。

一瞬では判断できない。

「……………緑谷君、場外！ 青石ヒカル3回戦進出よ！」

——おおおおお!!

スタジアムに一齐に歓声が沸いた。

場外の緑谷はむくりと起き上がる。顔に悔しさがにじんで隠しきれしていない。

折れた両腕を結晶が包んで、次の瞬間には元通りになった。

青石は、喜ぶ観客を見ている。

その表情は一体何と形容した物だろうか。

出来るだけ理性的に振舞おうとしているようであり、感情を殺そうとしているようでもある。

超然としているようでいて、同時に見下しているようで。

相澤は彼女の心境が、何となく分かる気がした。

青石は恐らく緑谷にした事を暴力に過ぎないと、そう認識している筈だ。

だが民衆は彼女を責めることは無い。

これは試合であって、あくまでルールにのっとったもの。だから仕方がない。

普通はそう考える。

だが彼女はその考えを心底嫌う。

暴力は何が有っても暴力なのだと考えている。

理由があれば仕方がないと、受け入れることが出来ない。

だがそのくせ彼女は、普段の相澤の拳骨などは受け入れている。

その時にはどうやら、仕方がないと受け入れている。そのように見える。

彼女は自らが矛盾を抱え込んでいる事に、果たして気付いているのだろうか。

(気付いていないか、気づいていても意識しないようにしているか……)

試合を行った両者は、中央に再び集まり礼をする。

そして握手。

けれども互いの顔に笑顔はない。

緑谷は分かる。だが試合に勝った青石さえニコリとも笑わない。

その光景は違和感があるが、誰も気にしている様子はない。

彼女は人は話し合えば分かり合える。

そういう存在だと信じている。

だが現実には残酷だ。人間は言葉だけで分かり合えるほど、賢くはない。

言葉を交わしても、決して分かり合えない事。

その現実を彼女はまだ知らないのだ。

それがきつと、彼女が挫折を味わうとしたら。

その現実を受け入れた時なのだろう。

青石の顔を見る。

その顔は侮蔑に満ちている。その感情は紛れもなく、戦いに興奮冷めやらぬ観客に向けてだろう。

例えルールが設けられているものであったとしても、人が互いに傷つけあう。

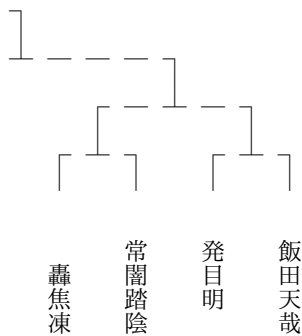
そしてそれを観戦して楽しんでいる風景。

彼女にはとても耐え難い苦痛だったに違いない。

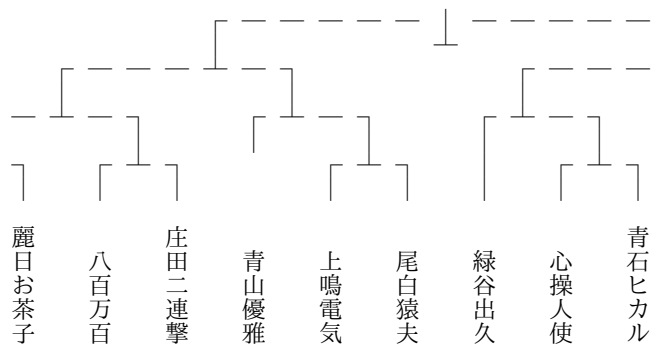
だがこれも人間が持っている確かな本質の一つだ。

受け入れていくしかない。

中央モニターに表示されているトーナメント表が更新される。







## 爆豪勝己

次に戦うのは上鳴電気と青山優雅。

だが会場内で盛り上がるのは、専ら今の試合の事。実力からして事実上の決勝戦だった。無理もない。

相澤は青石をもう一度見た。

彼女の顔は失望の色に染まり切っている。

雄英体育祭に出場して彼女は、だんだんと昔の姿に戻りつつあるのではないか。そう相澤は危惧する。

青の少女の瞳は今まで見た中でも、ひときわ濁っていた。

## 第51話

青石は逃げるように、控室に駆け込んだ。

1—Aに充てられたそこには誰も居ない。

たぶん皆観戦しているのだろう。

彼女はドカッと身を投げるように、椅子に腰かける。深いため息を吐いた。

トーナメントはまだ終了していない。

まだ試合は残っている。

次は確か轟焦凍と当たる筈だ。

彼女は聞こえてくる実況の音を聞き流している。

どうやらマイクが独りで喋っているらしく、相澤の声は聞こえてこない。

彼女は先ほどの、自らの試合を思い出す。

正確には試合を見ていた観客たちの顔を。彼らには悪意はない。

彼らの目に宿っていたのは純粹な善意、そして好意だ。

青石達の力を称賛し、評価し、中には憧れている者もいるだろう。

人々は誰も、彼女の事を責めたりしていない。

青石もそれを感じ取っている。  
だからこそ、青石は嫌悪する。

仕方がないと受け入れるだけならまだいい。

でも自分も含めて人が行う暴力的な行為を、彼女は前向きに捉えて欲しくない。

だが、それは彼女のエゴに過ぎない。

彼女は応援している彼らの姿を思い出すたび、吐き気を催すかと思う程の嫌悪感に襲われた。

そして何より、そう考えてしまう普通の人と違う自分自身に嫌悪感を覚えてしまう。

そのような思考。人々に対して無条件に湧き上がってくる嫌悪感。

それらが自身の本質である事にも気付いている。だが目を逸らし続けている。

彼女の願い。

人の為に、誰かの為に。

そんな存在でありたい。

だがその願いは、彼女自身が持っている本来の性質と相容れない。

彼女は人の為になりたい。

けれどもそれ以前に。

彼女は、人という存在そのものが大嫌いなものだから。

長年に渡り続けられてきた地下生活。

そして過酷極まりない訓練に生活環境。

それらは、彼女の人類そのものに対する憎しみを抱かせるに有り余るものだった。もつとも彼女はその事に、明確には気付いていない。

気付かないように目を逸らしている。

気付いてしまったら己が何をしてしまうのか。それを分かっているからだ。

「……行こう」

彼女は立ち上がり椅子から腰を上げた。

控室から出た青石はスタジアムの裏に居た。

遠くから青石を呼ぶマイクの放送が聞こえるが気にしない。

彼女の興味は足元のアリの巣。それと側のアゲハチョウの死骸に有る。

アゲハチョウの死骸には、大量のアリが餌にするため群がっていた。

「つんつん……わっ怒ってる！ 危ないっ！ 危ない！」

危ないと口でそう言いながらも。

巣穴近くにたむろしているアリの群れに、青石はちよつかいを出し続ける。

「つんつん！ つんつん！」

アリの夢中になっている彼女の姿は子供その物。

アリの巣で遊ぶ。普通なら、とうの昔に終わっている筈の経験。それを彼女は今している。

そんな彼女に背後から影が覆った。

振り返るとそこには微笑んでいるメイドの女性が居た。

「シアンさん」

「遊んでいるのですか？」

「うん、見てこのアリさん。すっごく大きいんだ！」

青石はつまんでシアンに見せつける。

青石の輝いている目を見て、シアンは優しく口を緩めた。

「……これはクロオオアリですね。日本に分布しているアリの中で最大の種ですよ」

「へえ、一番大きいアリさんなんだ」

「ええ」

「もしかして世界一大きいのかな？」

「さすがにそこまでは。世界にはもっと大きいアリは沢山いますよ」

「本当!? これより大きいんだ……凄いなあ」

青石が顔に浮かべた寂しげな表情。それをシアンは目ざとく見つけた。

「……見てみたいですか？」

青石は何も言わない。

ゆっくりとつまんだアリを地面に戻してあげる。

そして首を横に振った。

「見てみたい、なんて……ボクが言えるわけないよ。シアンさんだって知ってる癖に。意地悪」

「……ヒカル。貴方が出ようと思えば出られるのですよ」

青石は黙ってシアンを見つめる。

彼女の言葉を黙って待っている。

「気付いていると思います。あなたを無理やり閉じ込めるのは、もう不可能なのです。

あなたは出ようと思えば幾らでも外に出られる。

止められるものは、何もないのです」

その言葉にも青石は首を横に振る。

「駄目だよシアンさん。ボクはそんな事思っちゃいけない。

ボクはスターレインを迎撃する。それだけでいいんだ。だから……」

「ヒカル」

シアンは青石を背中から包む。

優しく抱きしめられた青石。彼女はその温もりの中に永遠に居たいと思う。

だがそれは出来ない。

それは許されてはいけない。

どんな理由が有ろうと、青の少女という存在がもたらした罪が晴れる事は無い。  
数千万人の命が失われた。

その過去は決して消えることは無い。

青石は自分にそう言い聞かせる。

青石が出ようと思えば確かに出られる。

外の世界へと行ける。何もスターレインをわざわざ待つ必要性すらも、本当はない。  
今すぐ地球を飛び出して、その流星群を片っ端から潰せばいい。

彼女にとっては造作も無い事だ。

だが出来ない。

「……シアンさん何だか怖いんだ」

シアンは何も言わない。ただ腕に込める力を強くする。  
「ずっと昔は思ってた。何処までも行きたい。

人の為に、誰かの為に。

だから人を知りたいってずっと思ってた。

なのに今は……人を知るのがとても怖い。



でもどんどん人を知れば知る程、ボクの中にドロドロしたのがどんどん溜まっていくんだ。

知れば知るほど、人を嫌いになって行く自分を抑えられないんだ」

思い浮かべるのはスタジアムで熱狂している民衆。

その表情は熱に浮かされたかのよう。

興奮に体をどっぷりと沈め、本能から湧き上がる快樂に理性を溶かしていた。

彼らの視線にヒカルは恐怖を覚えた。

「ヒカル、人間とは決して綺麗な存在ではないのですよ。

あなたはそれを分かっています」

「でもシアンさんはあの人達とは違うよね!？」

シアンさんは誰よりも優しいもん!」

青石はシアンの顔を正面から見つめる。

シアンはただ微笑んでいる。

何も返事をせずとも青石にはシアンの気持ちは何となく分かった。

「そんな……。ねえ、シアンさん」

「何でしょう」

「…………ごめん、なんでもない」

「そうですか。……行きましょう」  
「うん」

青石はシアンに手を引かれていく。

シアンは柔らかな手とメイド服の裾を強く握る。

まだ雄英体育祭は終わっていない。

結果は既に出ているも同然。だが出たからには最後までやり通す責任がある。

それくらい青石も分かっている。

青石は懂れた。

あの日自分を救うために必死に頑張ってくれた生徒たちに。

轟や緑谷達の姿が眩しく見えた。

だから職員会議の時に声を出した。

自分だけが置いてけぼりになるのは、仲間外れになるのが嫌だった。

何だと青石は心の中でため息を吐く。

彼女は既に答えにたどり着いていた。

その事に今更になって気付くなんて、どうかしている。

「シアンさん」

「はい」

「ボクは……本当は何処にでも行きたい、何処までも行きたい。

世界の何処にでも、行きたい」

シアンの顔がこちらを向いた。優しい瞳は静かに青石を捉えている。

どれ程の悲しみや苦しみを経験したら、こんな目になれるのだろう。

青石は自らを見てくるシアンのこの目が大好きだった。

「だけどそれは出来ないから。

ボクはヒーローにはなれない。だけど、ボクはシアンさんのような優しい人になりた  
い」

青石の頭をシアンはそつと撫でる。

「ボクはシアンさんみたいになりたい。

優しくなりたい。ボク、シアンさんのようになれるかなあ」

風が吹いた。風で青石の長い髪が巻き上げられる。

木の葉や土ぼこりが青空に吸い込まれていく。

青石はそれを見上げ、思わず手を伸ばした。

空は何処までも青く広く晴れ渡っている。

行こうと思えば行ける。

何処までも行ける。

だが、それは出来ない。してはいけない。やっつていい事と、出来る事は違うのだから。

青石という存在が自由になった時、社会にどれ程の混乱が巻き起こるか。それを青石は雄英体育祭を通じて感じてしている。

青石とシアンは手を繋ぎ歩く。

彼女たちはが去った後のアリの巣の前。

チョウの死骸はアりに解体されていく。チョウの羽が根元からアリの顎で食いちぎられた。

日差しは強く照っている。

世界の片隅で起きている命の営み。それを見ている人は一人も居ない。空は何処までも澄み切っていた。

「よお」

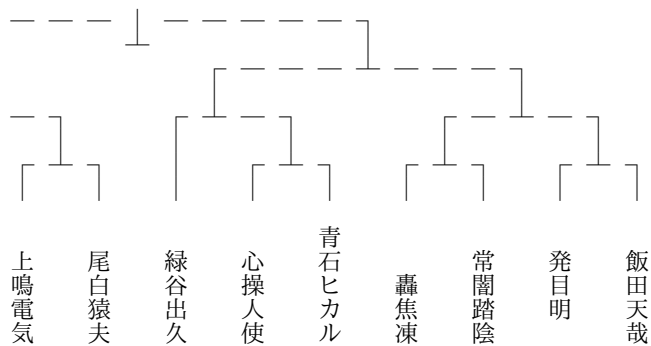
「やあ轟君。飯田君との試合見てたよ」

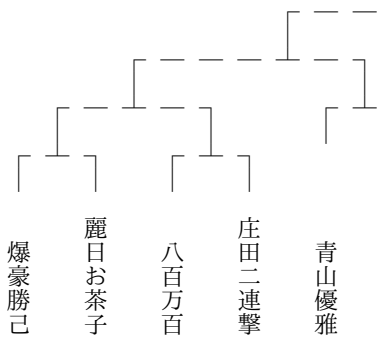
青石は轟とリングの中心で向かい合う。

スタジアムに戻った青石には早速試合が待っていた。

予定よりも早く進んでいるらしい。

青石は目の端でモニターに映っているトーナメント表を確認した。





勝ち残っているのは四名。

青石ヒカルと轟焦凍。青山優雅と爆豪勝己。

彼女はもう自分の勝ちを確信している。

奇しくも青石とかかわりの深い人間が勝ち残ったのは、感慨深くもあつた。

青山や爆豪の試合は見えていない。

もつとも試合は映像として保存されているので、後で幾らでも見れる。

青山がどの様に上鳴りに勝ったのか、それは気になる所ではある。

爆豪は八百万を下して準決勝上がった。

まあ八百万は少し頭が固い。

爆豪の動きに咄嗟に対応できなかったのだろうか。

本来個性だけの力で言えば、爆豪より強力なのだが。

『じゃあ準決勝！ 始めるぜ！ 青石ヒカルVS轟焦凍！』

マイクの声が聞こえる。

青石は轟の顔を見る。

互いに言葉は要らない。今更この場で話すべき事など何もない。

話なら後で幾らでもできる。

何よりここは話するには人が多すぎる。

彼はずっと友達で居てくれた。

雄英体育祭に参加すると青石が決めた時も、ずっと心配してくれていた。

轟のヒーローを目指す願いの強さは知っている。

だが負けるつもりは無い。

手加減なんて轟は望んでいない。そう青石は感じている。

『スタート！』

マイクの声で始まりが告げられた。

その瞬間決着はついた。

「はい、ボクの勝ち」

轟はスタジアムの外でただ立ち尽くしている。

青石は個性を使う暇すら与えなかった。

開始と同時に轟を場外に移動させただけ。

青石は視線を主審のミッドナイトに向けた。

彼女は反応が遅れながらも高らかに声を上げる。

「試合終了！ 勝者、青石ヒカル！」

ミッドナイトが青石の勝利を告げる。

会場内はやけに静かだ。

彼女のやっている事は単純極まりない。けれどもそれが、余りにも早すぎる。

観客は先ほどの緑谷と青石との試合のような展開。

それを予想したのかも知れないが。

「あつさりしすぎじゃね？」

「なんだかなー」

「まあ、仕方ないかもだけどねえ」

観客の中から、ぽつぽつ不満げな声が聞こえてきた。



彼らの声をまとめると「つまらない」になるのだろうか。

彼らはエンターテインメントを見にやってきたのだ。

青石ヒカルは確かにすごい。

だがそれも繰り返し見ていれば飽きる。

力と力の拮抗。強者と強者の鎬を削る戦い。

それを彼らは望んでる。

まだ学生でそれほどの力はないにしても、いい勝負を見たいと思っているのだ。

だが彼女はそんな娯楽は提供しない。

「何コレ？ つまんね」

案の定そんな声が聞こえてきた。

青石は静かに舞台を降りていく。

彼女を讃える声も聞こえるが、割と少数派だ。

青石は静かに舞台裏に帰っていった。

……。

相澤は放送室から出る。

青石は試合が終わっても、放送室には来なかった。

一応テレビ出演なのだから出て来いと言っている。

あくまでも体育祭であるが、マスメディアも深くかかわっている行事だ。蔑ろには出来ない。

だが相澤には分かる。青石は一般的に知られているようなヒーローの活動に向いていない。

相澤は選手の控室のドアを開けた。

「相澤さん……」

青石ヒカルはそこにいた。力なくパイプ椅子に腰かける彼女はゆらりと立ち上がる。何も言わずに相澤の胸に飛び込んできた。

二人以外部屋には誰も居ない。

青石は両手を相澤の背中に回してくる。

ヒーローの本分は敵を倒す事ウイラン。そして芸能活動をして名声を広げ人気者になる事。そう思われている。

だが相澤は違うと考える。

敵を倒す事ウイラン、芸能活動をする事。

それらは人を救けるたす為の手段ではない。

敵を倒すからヒーローウイランなのではない。

救けるたす為に、敵を倒すからヒーローウイランなのだ。

その事を見失っていくと、人は道を踏み外す。

いつしか“手段”が“目的”へとすり替わっていく。

青石を見るたびに思う。

人の為に、誰かの為に。

本来その願いは、ヒーロー達が持っているなければならない。

そんな綺麗な願いなのだと。

互いに言葉は交わさない。

温もりを共有して穏やかに時間は流れる。

遠くからマイクの実況が聞こえる。

どうやら爆豪勝己と青山優雅の試合が始まったらしい。

雄英体育祭は終わりへと向かっていく。

相澤は青石を引っぱがす。

不満そうな青石だが頭を撫でてやると途端に機嫌が良くなった。

スターレインは近い。

それが終わった後の事も考えなければならぬ。

青石が相澤に抱いている感情についても、その逆も。

相澤は、せめて目の前の普通の少女が。“青石ヒカル”が幸せであって欲しい。

ただそれだけを願っていた。

## 第52話

『さあいよいよ始まるぜ決勝戦！』

青石ヒカルVS爆豪勝己』

気合十分といった顔つきの爆豪に対し、青石は興味なさげだ。

「ふあ……」

青石は大きな欠伸をしてうーんと背を伸ばす。

爆豪の眉間にしわが寄る。鬼のような形相をしている爆豪にも構わず、彼女はどこ吹く風。

あくまでマイペースに構えている。

緊張の欠片も見当たらない。

「……舐めやがって」

普通なら聞こえない小さな爆豪の呟き。

だが青石はそれを耳に入れている。

だからといって態度を変える気も無い。

「まさか決勝に来るなんて、驚いたよ着火マン。」

てつきり八百万さん辺りが来ると思ってた。

本当に強いんだね」

「はっ！ 思ってもねえことを」

「ううん、強いと思ってるのは本当だよ」

爆豪は強い。青石そうは思っているし評価している。嘘偽りは無く本当に。

もつとも彼は、彼女の言葉を信じていないようだが。

これから行う戦いは一瞬で終わる。

爆豪の個性“爆破”。強力な個性ではある。

だが青石と戦うには荷が重すぎる。

彼女に一矢報いるのなら、初戦で青石と戦った心操の様な個性でないと厳しい。

純粋な戦闘力に特化した個性では、彼女には勝てない。

『じゃあ始めるぜ。3、2、1……スタート！』

青石の視界がゆっくりになる。

爆豪の突進をゆるりと青石は眺めた。

彼女の頭の中に有るのはこの戦いではない。

先ほど相澤としていた会話を思い出していた。

……。

青石は相澤に、思う存分に甘えていた。

シアンはここには居ない。

先ほどシアンに連れてこられて、ほどなくして相澤が来た。

会話は無い。

無言のまま時間が過ぎる。だが意外に雰囲気は悪くない。

青石はただ、相澤と一緒に居られる時間をただ心地いいと思う。

ずっと永遠に居たいと思う。だが、それは許されるべきではない。

「ねえ、相澤さん」

「……何だ」

青石は相澤の目を見据える。

相澤も彼女を見つめ返した。

不思議な気分だ。

さつきまでは心の底にヘドロのようにこびり付いていたもの。それが綺麗さっぱりと霧散したように感じられる。

どうしても考えずにいられない。

緑谷との試合中で感じた“人間”への疑問。

自分の生い立ちへの呪い。不安焦り、怒りに悲しみ。嫉妬に後悔。

様々な感情が混ざり合つて彼女自身分からなくなつていた気持ち。

それらが一つの感情に塗りつぶされる。

彼を見ているだけで、全てを忘れられる。彼と一緒になら、どんな困難にも立ち向かえる。

どれだけの苦しみや、終わりのない痛みを抱いても耐えられる。

今まで青石が頑張つていられたのは、きつと側に彼が居てくれたから。

この感情をなんと呼ぶのか既に知っている。

彼女は自嘲した。存外自分は複雑そうに見えて、実は単純な性格をしているのかも知れない。

青石は振り返る。

自分の為すべきこと。自分の為してきたこと。自分がやりたいこと。

バラバラだった気持ちが一つになって固まつていく。

色々な事が見えすぎて決められなかった指針。

それを明確に己の中に定めていく。

彼女の中の迷いが晴れていった。

「体育祭。優勝して、やりたい事があるんだ」

「どんな」ことをだ」



「うん、えとね……」

彼女の口から語られた言葉。相澤の目が見開かれた。

表情から分かる。彼は青石がやろうとしている事に賛成していない。

青石が語り終わるや否や、案の定相澤は首を振った。

「駄目だ。そんな事をしたらお前は……」

「相澤さん！」

いつにもない強い口調で青石は遮る。

「これがボクがしたい事なの。ボクがしなくちゃいけない事だつて。」

「そう思うの」

相澤は怯んだ。

「やってしまったら後には引き返せないぞ」

「いいよ、もうボクは逃げない。逃げたら駄目なんだ。」

「こーうやって皆が集まつてる。」

テレビだつて全国に放送されてる。今しかないよ。このチャンスを逃がしたら、きつ

とボクは一生後悔するつて思う」

「それは今じゃなくとも良い青石！」

「ううん、今じゃなくちゃいけないんだ。」

むしろ遅すぎたんだ。本当はもつと前にしなくちゃいけなかったんだ」  
青石の言葉に押し黙る相澤。

彼女の覚悟が分かったのだろう。

吐き捨てるように呟いた。

「好きにしろ」

「ありがとう相澤さん」

感謝の言葉を言う青石の顔は静かに笑っている。

対照的に相澤の顔は浮かなかった。

………

………

………

『勝者！ 青石ヒカル！』

審判の声が競技場に響いた。

青石ヒカルはボーっとした頭で状況を捉える。

ああ、そうだった。

雄英体育祭の決勝戦を、つい何秒か前に開始したんだった。

それを思い出す。

先ほどの相澤との会話で頭が一杯になっていた。

「糞があ……い！」

場外に放り出された爆豪が悪態をつく。

そう、決勝戦に上がってきたのは爆豪だった。

爆豪はその前青山優雅と戦って勝ち上がったはず。だがその試合は青石は見えていない。

自分の悩み事でいっぱい、とても気にしている余裕も無かった。

それに誰が勝ち上がろうと、己が勝つことは分かり切っていた。

興味も沸きようがない。

現に今青石は、路傍の小石を蹴り飛ばしたような感覚。

あるいはたかる虫を追い払うような感触で、爆豪に勝利している。

歯牙にもかけない。鎧袖一触。

緑谷との試合だって、本来はそのくらいに差があった。

周りからはいい勝負に見えても、残酷なまでに力の差がある。

文字通りアリとゾウ程までに。

だから特段感慨はない。

戦いに勝つこと。それに価値を彼女は見いだせていなかった。

彼女にとって、力で相手をねじ伏せる事に意味はない。

「あつ……爆豪君！ ごめんなさい！ 大丈夫!？」

爆豪の頭から血が流れていた。

慌てた青石は急いで爆豪の元に走る。

個性を使つて傷の状態を確認する。

「止めやがれ！」

彼女の治療に爆豪は受け入れようとしなない。

だが青石は無理やり個性で傷を治癒した。

「Code Blue……」

幸い大した怪我では無かった。だが青石は反省する。

もし、打ちどころが悪かったら骨の一本や二本簡単に折れていただろう。

青石なら治せる。けれど青石は爆豪に痛みを与えた事に罪悪感を覚えていた。

「治ったよ。ごめんね着火マン、もっと気を付けていれば怪我なんて。

痛くしないで済んだのに……」

「……」

爆豪からすれば屈辱でしかない。

勝者からそんな気遣いの言葉をかけられても、情けなくなるだけだ。

だが青石にはそれが理解できない。

彼女が思う価値のある事。

それは互いが理解し合えること。

戦つて勝つのは、あくまで手段でしかない。

彼女にとって重要なのはここからだつた。

……。

「それではこれより表彰式に移ります！」

雄英体育祭は、あまりにもあつけなく終わつた。

青石ヒカル。彼女の力は底すら見えない。

しかし危なかつた場面はあつた。

騎馬戦の組み合わせの時。それと心操との戦いの時。

だが純粋な力と力の激突の際に、彼女が押し負ける事は一切なかつた。

障害物競走ではぶつちぎり。

騎馬戦でもハチマキを結局は独占した。

しかも彼女のやる事なす事、全てが早すぎて目で追えない。

それが一番の問題だ。

凄いのは間違いない。

だがどう凄いのか、目で見ても理解できない。  
まだ緑谷の領域は分かりやすく強い。

けれども青石ヒカルは既に、それより数段上の次元に居る。

素人が見ても彼女が凄いというのは分かる。

しかしどう凄いのが分かりにくい。

ともあれ。

彼女が次世代のトップヒーローになるだろう逸材。

ほとんど全員その意見で一致している。

彼女に向けられるカメラの数は凄まじい。

これらで撮られた写真や映像が日本に、そして海外にまで広がっているのだろう。

青石ヒカルは先に個性を使用する。誰にも見えないように。

カメラの回線を通じインターネットを、密かに己の支配下に置いていく。

誰もそれに気づかない。表彰にメダル授与はつつがなく行われていく。

青石ヒカルは優勝なので、授与は最後だ。

彼女あまり周囲の声を聴いていない。

ただ空を見上げる。

今から青石ヒカルがやろうとしている事。

相澤はそれに反対した。だがそれを押し切って青石はしようとしている。確かに黙っていた方が良いのかも知れない。

だが……。

「優勝おめでとう」

目の前に立つ人物に目を戻した。

メダル授与を行うのはオールマイト。

カメラのシャッター音が聞こえた。

ナンバーワンヒーローと次世代のナンバーワンヒーロー。

多分その絵面に食いついているのだ。

「ありがとうございます」

青石の返事はよそよそしい。オールマイトは寂しげな顔になった。

「きつと君は立派なヒーローになるんだろうね」

瞬間、頭が沸騰した。

だが気持ちを押さえつける。湧き上がる衝動を理性で制御する。

青石は首を横に振った。

「いいえ、ボクはヒーローにはなりません。……ヒーローにはなれません」

周囲がざわざわし始める。

人々の困惑が嫌でも伝わってくる。

当然だ。仮にも彼女は、ヒーロー科に所属している生徒だ。

力だつて申し分ない。なのに何故そんなことを言うのか。人々は分かりかねている。

「ボクは、ボクの罪を明かします。」

今までずっと隠していた罪を。決して許されない咎を」

青石は個性を使用した。

彼女により世界そのものが“青”に染められる。

「なっ!?!」

悲鳴が上がる。

彼女は自身の意思で力を振るう。

レギオンと思考が共鳴する。

彼女は世界へ向けて意思を発信し始めた。

………

………

………

世界の皆様。

ボクの名前は青石ヒカルです。



今ボクは、ボクの個性を使って、世界中の皆様にご意思を直接届けています。なぜこんな事をしているかと言うと、どうしても伝えなければならぬ事があるからです。

ボクは——ボクの罪を告白します。

本当に、申し訳ない事をボクはしてしまいました。

どれだけ謝っても、決して許されぬことをしてしまつたんです。

突然の事で皆驚いていると思います。

ですが、どうしても伝えなければならぬ事があるのです。

最初に言います。これから伝える話は全て真実です。

とても信じられないかも知れません。ですが全て本当の事です。

——今から約十年前。大きな災厄が世界を襲いました。

それは“青の世界”と呼ばれています。

それを引き起こした犯人は、既に捕まつた。

そう皆さまは聞いています。

ですが、皆様が犯人だと思つていた人は無実です。

真犯人は別の人です。

ボクはそれを誰よりも知っています。

何故なら十年前の災害を引き起こしてしまった犯人。それは他でもない、ボク自身だからです。

ボクはその事件を引き起こしてしまった、真犯人です。

ボクが、数千万人の人を至らしめてしまったんです。

オールマイトが救ったというのは本当です。

個性で暴走したボクを止めてくれたのは、他でもないオールマイトでしたから。

世間一般には情報が改ざんされ、真実は隠蔽されています。

そもそもボクは自然に生まれた存在じゃありません。

世界に来る災いを、跳ねのける為に作られました。

5thスターレイン。  
ファイブス

それがボクが対抗する災いの名です。

何もしなければ地球に流星群が降り注いで、文明は崩壊し人は絶滅します。

だけど、大丈夫です。

心配しないでください。

スターレインは、ボクが何とかしますから。

その為に、ボクは生まれてきたのですから。

ボクは許されない事をしてしまいました。

数千万人の方々が亡くなられたのです。ボクはワザとではなかった。でも、そんなの言い訳になりません。

いくら謝つても決して許されない事です。

ボクは卑怯者です。

ボクは自分の罪からずっと逃げ出して。

ずっと真実を世界の皆さんに隠し続けてきました。

ボクは怖かったんです。

皆さんに真実を話して、どのように受け止められるのか。

いったいどんな目で見られるのか。

それを受け入れる自身が無かった。

本当はもつと前に、こうやって真実を明かすべきだった。

だけど弱いボクは、ずっと逃げ続け、今まで真実を伏せ続けていたんです。

もう一度言います。

十年前の青の世界。

それを引き起こした犯人は——ボクです。

青石ヒカルです。

数千万人の命を奪ってしまった、史上最悪の敵。<sup>ライオン</sup>

それがボクの正体です。

……。

スタジアムは静まり返っている。

緊張で高まる鼓動で青石の心臓は破裂しそうだ。

今、青石は告げた。告げてしまった。

もう後戻りは出来ない。取り返しもつかない。

法月らが隠蔽していた真実。

それを世界中に告白した。

「信じられないと思います。でも全部本当です」

青の少女は繰り返す。

自身が十年前の災厄を引き起こしてしまった事。

数千万人の命を奪ってしまった犯人だという事。

そして二週間前の事件。

それも自分のせいで起き、収めてくれたのは同じクラスの友人たちである事。

——話せる事は全て話した。

「本当に申し訳ありません」

頭を下げる青石。

周囲に音が戻ってくる。

いつの間にか世界から“青”は消え去っていた。

彼女の懺悔の言葉は世界へと届いている。

勿論、このスタジアムにいる人達にも。

ざわざわと周囲から声が漏れ出す。

そして観客席から飛んできたたった一言。

青石の心に深く突き刺さった。

「人殺し！」

その言葉に同調して次々と罵倒雑言が青石に投げられる。

——人殺し

青石はそれを受け止める。

最初からそのつもりだった。

だがこうして人々の憎しみを一身に受けていると、やはり辛い。

それでも青石は曲げない。

ずっと隠してきた真実。

でもそれは世界中の人達を知るべき真実だと、そう思っているから。

「君は……」

オールマイトに目をやる。彼は困惑しつつも納得したような。そんな顔をしている。ずつと隠蔽していた事実。

だが思わぬところで、それは漏れ出るもの。スタジアムは騒然としている。

「あれは事故だった……!」

オールマイトの言葉は静か、だがよく響いた。

民衆たちも彼の言葉で黙りこくる。

ナンバーワンヒーローの全身から放たれる圧。それが民衆たちを黙らせた。「君はまだ幼くて、とても制御なんて無理だった。

勝手にそんな力を押し付けられて。

君はどうしようも無かったんだ。仕方がなかったんだ。」

「仕方がないなら、人が死んでも良いんですか!？」

「そうは言っていない。だが君は敵じゃない!」

「ボクは数千万人の命を奪ってしまったですよ!

ウイラン 敵じゃないなら、何なんですか!？」

「……それは」

「ボクが敵じゃない?」

なら……。じゃあ敵ヴァイランとはなんですか!？」

彼女は問いかける。

敵ヴァイランとは何か。

彼女は自分自身を敵ヴァイランだと定義している。

数千万人の命を奪った、史上最悪の敵ヴァイランだと。

決して許されることは無い咎人だと。

だから雄英ヒコから出てはいけない。

人並みの幸せを求めてはいけない。

使命のため生きて、使命に殉じて死ぬ。

そうあるべきだった。

だから分からなくなる。

いざ死ぬ必要がなくなつて、未来が拓けたとしても。

何のために生きればいいのか分からなくなる。

まるで果てのない荒野に、突然放り出されたようだ。

青石ヒカルは、スターレインを迎撃し、終わつたら死ぬ。

その前提に従つていれば良かった。従っている方が楽だった。

己の罪も、死んでしまえば赦われる。永遠に続く良心の呵責から逃れられる。

青石ヒカルは処分される筈だった。むしろ彼女自身がそれを受け入れ、それを望んですらいいた。

「分らない」

オールマイトは首を振った。

<sup>ツイン</sup>敵とは何か。それは誰も分らない。あまりにも誰もなにも知らない。

自分たちはあまりに無力で無知であることを、彼は知っている。

辿り着いたと思つた答えも、間違いかも知れない。

世界には何一つ確固たる基準など無く、絶対的なものなど存在しなかった。

だから言えない。

「なら……」

「皆さん！」

オールマイトが大声を張り上げた。

スタジアム中の視線が彼を向く。

きつとカメラを通して世界中の人がオールマイトや青石を見ている。

「彼女の言つた事は全て真実だ」

彼の言葉に怒号が飛んだ。

嘘を吐いたのか、騙したのか、そんな言葉が四方八方から浴びせられる。



「だが誤解しないで欲しい！」

彼女は十年前、まだ幼かった！　とてもこの強大な個性を制御できる年齢ではなかった！

彼女は意図して、十年前の災害を引き起こしたのではない。

アレは事故だった、それを忘れないで欲しい！」

「でも！」

言いよどむ青石の頭にオールマイトは手を置いた。

大きくて暖かい手だった。

相澤とはまた違う、優しさと温もりがあった。

「君は、人を思いやる心を持っている。

暴力を憎んで、人と分り合いたい気持ちがある。

君は確かに大きな災害を起こしてしまった。

だが関係ないさ。

君はヒーローになれない？

馬鹿馬鹿しい。

いつたい誰がそんなことを決められる？

罪を犯したことの無い人間なんて、どこにも居やしないさ」

「ボクは！　だけどボクは！」

青石ヒカルは涙を流した。

彼女はずっと苦しんでいた。罪に押しつぶされそうになり、だが弱音を吐くことも許されない。

誰にも彼女の苦しみは理解されず、理解も出来ない。

オールマイトは

「もう、君は君を許して良いだろう。……君は——ヒーローになれる」

「……遅すぎるよ。なんで……なんで今更、本当に馬鹿」

馬鹿と言いながらも彼女は笑う。

なぜそんな顔になるのか、彼女自身分からない。

だけど、胸の奥にずっと抱えていた物が一つ解放された気がした。

青石はそれからの事をよく覚えていない。

ただわんわん泣いてしまった事は覚えている。

そしていつの間にか放課後になって、いつもの部屋に戻って一日が終わった。

自身が暴露した事実の重さ。それを改めて実感するのは後日の話。

彼女は行くべき道の一つ見つけた。

ヒーローになれるとオールマイトは言ってくれた。

だが、青石は本当になれるとは思っていない。

まだ、その為の資格を獲得していない。

青石は罪を告白した。世界中から憎しみを集めて、そして一人に許された。

世界中の人全員が、彼女を許してくれることは、まずない。

これから先、様々な悪意や憎しみが彼女に降りかかるだろう。

それでも青石は進み続ける。

青石は真実を、世界の人々が知るべきだと考えた。

彼女には夢がある。

人の為に、誰かの為に。

そういう存在でありたい。優しくなりたいと。

青石の中で本当に優しい人間とは、我が身可愛さで真実を隠蔽することを絶対にしない。

公明正大でなければならぬ。

だから後悔などしていない。

過ちを犯さない人間など居ない。

そして、人は犯した過ちを乗り越えた時にこそ、強くなれる。

青石はそう思っている。

罪が有るのは、罰を受ける為ではない。

罪を贖うために必要なのはきつと、罰以外の何かだ。

なら青石は、罰以外の何かで贖い続ける。

全ての人達に、そして自分自身に胸を張れるように。

今日の夕焼けもまた、あの日と同じように金色に輝いている。

光を受けて、蝶の羽が煌めいていた。

世界は大きな変革の時を迎えようとしていた。

## 第三章

### 第53話

「ねえ相澤さん……ボク決めたよ」

「何をだ」

降るような星空だった。雄英の校舎の屋上。

そこから見える夜景と空の光が交じり合う。

相澤と青石の二人以外誰も居ない。

クルリと回転し振り向いた青の少女。彼女の青い目と視線がぶつかる。

雄英体育祭は波乱に包まれたまま終了した。

彼女が文字通り世界に暴露した真実は、この社会を根底から揺るがしつつある。

今頃法月達は火消しに躍起になっているだろう。

つい先ほどとある天文台の関係者がスターレインの襲来を認めたらしい。

更には彼女が雄英に隔離されている事も、何処から洩れたようだ。

今の情報化社会の中で、情報の拡散を食い止めるのは至難の業だ。

明日にはほぼ全ての人間に知れ渡っているだろう。

スターレインの襲来。

人類を滅亡に追いやる危機。それに対抗できる唯一の希望が、十年前の災害の元凶。彼女の暴露と謝罪に対する人々の反応は様々だが、概ね二分されていると言える。

つまり青石ヒカル。彼女を許せるのか、許せないのか。いずれにしても相澤には確信がある。

人類は、変革するべき時を迎えている。

彼女は従来の社会のシステムに当て嵌められるような、そんなちやちな存在ではない。  
い。

一部の人間の間では、既に彼女の存在は神格化すらされ始めている。

彼女は神そのものだ。

確かに力の大小で言えば、とつくに人間を超越している。

出来る事だけで言えば、まさに神にも等しい存在だろう。

彼女がその気になれば地球など、一瞬で木っ端みじんに出来る。それどころか宇宙そのものすらも、消し飛ばせるかも知れない。

だがその力に反して、彼女の心は繊細だ。

彼女は先ほどからこちらをジッと見たまま動かない。

風がそよいで髪が揺れている。

「決めた……？ 何をだ」

「うん、えとね」

相澤は一言入れて間合いを図る。

青石はもじもじしている。

彼女の目が遠くの空に向いた。つられて相澤も空を見る。

先ほどと変わらず満天の星空だった。

「あれからね色々考えたんだ。お茶子ちゃんや轟君達に、色々聞いて相談して。

色んなことをいっぱい考えた。けどど分かっただのはあんまりなくて。

ハッキリ分かっただのは、分かんない事がいっぱいあるって。それだけなんだ」

「……」

相澤は返事をしない。視線で話を続けるように促す。

青石はこういう時下手な返事を求めていない。今までの経験から相澤はそう直感した。

今の彼女は相澤にただ聞いて欲しいと、そう思っている。

「だけどね！ 考えるのを止めるわけじゃないよ！

考えてもどうせ分かんないからって、答えが出ないからと言って。

それから逃げ出したら、一生それと真剣に向き合えなくなる。

そんな気がするんだ。それってとても悲しい事だと思うから」

「……そうか？ そうだな。お前はいつも……。」

何も考えて無いようできて、何かごちゃごちゃ考えていやがる」

「変かな？」

青石は首を傾けた相澤は頭を振る。

「変じゃない。お前はお前が思うようにあれば良い」

「そうかな、えへへ」

「他人に迷惑はかけない範囲でな」

「それは分かってるよ！」

「それで、何を決めたんだ」

話が脇に逸れたので本筋に戻す。

「……相澤さんは、ボクの夢知ってるよね」

「……人の為に誰かの為に」

「うん、そうだよ。」

何処にでも行きたい、何処までも行きたい。人の為に、誰かの為に。

世界の何処にでも、行きたい。人が広く、生きて行く為に」

「ああ」



もうウンザリするほど聞いてきた夢だ。

呆れるほど綺麗な夢だ。

そしてその綺麗ごとを本気で彼女は願っている。

人間なんてほとんどは大抵自分の事が一番大事だ。

見返りも無しに行動できる人間はいない。

だが青石は放っておいたらその内、自分をどこまでも軽く扱って犠牲にしていく。

そんな予感がしていた。

「でもボクはその夢を叶えたらいいけないんだ。夢が叶ったらいいけないんだ。

決して許されない罪人で、生かされているのは仕方がないからだって。

スターレインを迎撃した後は、死ぬことで罪を償えばいいんだ

死ぬなんて全然怖くない。

……今まではずっとそう思ってた。だけど……」

もしも、何かが一つでも違ったら。彼女は計画通りに殺される事を善しとしていた。

逃げようと思えば逃げられるくせに。

だというのに彼女は自分の命より他人を優先する。

普段は気まぐれで我儘なのに、根っこはどうしようもなくお人好しだ。

「ボクは、夢を諦めたくない。」

ボクはなりたいたんだ。

人の為に誰かの為に。ずっと側に居てくれた相澤さんやシアンさんのように。優しい人になりたい。

ボクはずっと皆に恨まれ続けていくけど、でも諦められないんだ」

「お前は……」

「だからねボク決めたよ！

ボクはなる。人の為に誰かの為に。

その為なら、世界の何処にでも行くよ。

ボクは——」

彼女は一旦言葉を飲み込んで。

そして覚悟して吐き出した。

「ボクはヒーローになる」

その青石ヒカルの言葉を、相澤は深く噛み締める。

彼女は暴力が嫌いだ。彼女がなぜ進んで道を選択したのか。

それが相澤に分かるはずも無い。

相澤はこれまでの過去を振り返る。

彼女は様々な苦難を受けてきた。

日の光も、空の高さも彼女はろくに見せられず育てられてきた。そもそも生まれすらも普通ではない。

彼女は世界を守るために作られた。世界の都合で使われて、そして用が済めば処分される。

その筈だった。

現実をイメージに上書きする力。思った事を現実にする個性。

知れば誰もが欲しがる力だろう。皆が憧れ嫉妬するだろう。

その力故に彼女は長年苦しんできた。

そして最後は殺されてしまう。その筈だった。

恨みのあまり、世界を今から滅ぼすと言い出しても、相澤は別に驚きはしない。

それだけの業を、人は彼女に対して積み重ねてきている。

その彼女がよりにもよってヒーローになると言っている。

それは相澤の理解の範疇の外にある。

いったい彼女は、何を考えてその結論に至ったのか。

きつと彼女自身にしか分からない。

相澤は青石が一步前進したことに対して嬉しく思う反面、少し寂しくもあった。

「お前は暴力が嫌いじゃなかったのか？」

「嫌いだよ。だから暴力は振るわない。人は殴らない。

ボクは人を痛くさせたくない。ボクは戦いたくなんてない」

ヒーローとは敵を倒す事ツイランで成立する。

極論で言うのなら、正義の為なら悪人なんて死んだって良い。

そんな論理の元に成り立っている。

それはヒーローに限らない。それは例えば警察でも一緒だ。

秩序とは如何に暴力を管理するか。暴力無しに秩序は成り立たない。

人は話し合うだけで全てを解決できる程、獣から離れているわけではない。

「……ヒーローは人気商売だ。そんなんじや人気なんて出ないぞ」

「人気なんて欲しくないよ！ そんなのどうだっていい！」

ただボクは、今も何処かで誰かが理不尽で傷ついて、苦しんでる。

そんなのが嫌なんだ。

……お金が欲しい訳じゃないし、興味も無いよ。

お茶子ちゃんとか着火マンは欲しいみたいだけど……

皆と違ってボクは確かに変だよ。

そんなのヒーローだなんて言えないかも知れない。

それは分かっている。でも……」

沈んだ表情で青石の言葉は尻すぼみになる。

青石の側に相澤は近寄る。

彼女が顔を上げる。青い目の中に、相澤は自分自身が映りこんでいるのが見えた。彼女に瞳には、相澤は何色に見えているのだろう。

「変じゃない。他人の痛みを嫌だと思えるお前の考えは、間違っちゃいない。

お前は他の奴より助けたい人の範囲が少し広いだけだ。

……お前は、<sup>ウイラン</sup>敵も助けたいんだろう」

「……うん、<sup>ウイラン</sup>敵だって人間なんだよ。

なんで皆 <sup>ウイラン</sup>敵はやつつけられるだけの存在でしかないって。

そう思うのかな？ <sup>ウイラン</sup>ボクは嫌だよ。 <sup>ウイラン</sup>敵だって人間だよ。

助けてあげたいよ。

きつとね、<sup>ウイラン</sup>敵は一番救われたがっている人達なんだって、ボクは思うんだ」

彼女がそう言うのは恐らく自らを <sup>ウイラン</sup>敵だと定義しているからだろう。

青石ヒカルは優しすぎる。

自らをこうまでして閉じ込めて、虐げ続けてきた人類を助けたいというのだから。

「つたく……本当に仕方のない奴だ」

「うん、仕方がないんだ。ボクはなりたくないんだ。人の為に誰かの為に」

きっと彼女の中には恨みが鬱積している。

何かの拍子で表に出ないとは誰にも言えないだろう。

何かの気まぐれで、明日にも人類を皆殺しにすると。そう言い出さないと誰にも言えないだろう。

だとしても、相澤は今ここに居る青石ヒカルを信じたい。

信じてみたいと思った。

「だから、ボクをちゃんと側で見えていてね！ 相澤さん！」

「ああ」

「ずっとだよー！」

「分かってる」

青石が胸に飛び込んでくる。

相澤は軽い体を受け止めた。満天の空の下彼女は誓いを立てる。

人の為に誰かの為に。そんな存在になると。

彼女は相澤にずっと側で見えて欲しいと願い、彼はそれを了承した。

きっと彼女は近いうちに外に出る。

そして様々な人達を実際に見る事になる。

今日のように純粹な彼女ではいられないかも知れない。

それでも彼女が少しでも幸せでいられるよう、相澤は願った。

「相澤さん、見て。月が綺麗だね」

「ああ……死んだっていいかもな」

「し、死ぬ!? 駄目だよ! 相澤さん!

相澤さんはボクが絶対に死なせないんだからね!」

「冗談だ」

「もうばかあ!」

胸をポカポカ叩いてくる青石。彼女を見る相澤の目は優しかった。

夜は静かに更けていく。

寄り添う二人を月だけが見守っていた。

……

……

……

「えへへ……相澤さあん……」。

見てて……ずっと……側で……ボク」

「青ちゃん! 青ちゃん起きて!」

「すぴー! ボクは寝てるの! すぴー!」

「絶対起きてるよね!？」

ゆさゆさと体を揺さぶられる。

青石は夢心地のまま返事をして、再び眠りに入ろうとする。

なんだか、もの凄くいい夢を見ていた気がした。

確信は無いがきつと相澤先生との夢だ。

詳細は思い出せないが、何となく雰囲気は思い出せる。

もう一度寝たら夢の続きを見られるだろうか。

そう思い青石は再び眠りに入ろうと気合を入れる。

「すびー!」

「起きろ馬鹿野郎」

「ふぎやああ!」

何かが頭頂部を直撃した。

痛みで体が跳ね上がる。

前を見ると青筋を立てている相澤。手には出席簿。

どうやらそれで叩かれたらしい。

「ううー……相澤さん」

「先生だ馬鹿野郎」



冷たく相澤にあしらわれ青石は頬をぶくーつと膨らませる。

「ふんだ」

先ほど見た夢の内容など衝撃で吹き飛んでしまった。

今では欠片も思い出せない。

「んじゃ始めるぞ、今日の『ヒーロー情報学』。

コードネーム。ヒーロー名の考案だ」

「胸膨らむヤツきたああ!!!」

どわつとクラス中が湧く。

青石はポカンとしてクラスメイト達を眺めた。

相澤が睨むと途端に静かになる。

「というのも先日話したドラフト指名が関係して……」

相澤は次に各個人に来たドラフト指名数の発表に移る。

だが相澤の話を青石は聞いてない。

(コードネーム……? ヒーロー名の考案……。相澤さんの『イレイザー・ヘッド』とか?)

でもそれって態々授業中とするような事なのかなあ?)

「……青石」

相澤からぎろりと睨まれる。青石はわたわたと姿勢を正した。

「で、指名の有無関係なしにいわゆる職場体験つてのに行つてもらう」

「それでヒーロー名か！」

「俄然楽しみになつてきたあ！」

更に盛り上がるクラスメイト。

だが青石だけがその空気に乗れり切れていないまま。

ただ首を傾げている。

「言いたい事が有つたら言つてみる青石」

相澤から直々に指名がかかる。

クラスメイトの視線が向いてくるのが分かる。

「えと、自分のヒーロー名を考える時間……つて事だよな？」

「そうだ」

「それつて授業でしなくちゃいけないものなの？」

「舐めてかかっちゃうと痛い目を見るわよ！」

彼女の疑問に割つて入つてきたのは「ミッドナイト」。

いきなり教室にやつてきて何事かと青石は思う。

「この授業ではミッドナイトに査定をしてもらう」

「なるほど……」

「青石ヒカル！」

「はい」

ミッドナイトに呼ばれて素直に返事をする。

「あなたの疑問はもつとも！　そう、学校によつてはヒーロー名は個人責任。

自分で勝手に考えてろ。そういう所もある。むしろそつちの方が多いわね！

でもね、若いあなた達が、後悔しないようなヒーロー名を付けられるよう指導する。

それも大事な教育の一環なの！　雄英はそう考えているわ」

「えと、名前付けてそんなに大事なんですか？　授業でするほどに？」

まだ青石は納得していないようだ。というより意味を見いだせていない様子だ。

相澤がため息を吐く姿が見えた。

ミッドナイトが更に補足する。

「以前居たのよ。テキストに変な名前を付けて地獄を見ちゃったヒーローがね。

職場体験がきっかけで、世に認知されて。そのままプロ名になっている人も多いから

ね！」

「へー……」

ミッドナイトが側に寄る。青石の耳元で他の生徒に聞こえないように言った。

「あなたの名前」青石ヒカル」。それが変な名前に決められていたらどうかしら？

「馬鹿山バカ子」とか「阿保石アホ子」とか名前つけられてたらどう思う？」

「そ、そんな変な名前絶対に嫌だよ！ 相澤さん嫌いになっちゃうよ」

ミツドナイトが頷いた。今度は他の生徒にも聞こえる声で言う。

「ね、名前つてとても大事なもののなの。真剣に考えなさい。」

私も聞いているわよ。あなたヒーローになるんでしよう」

「……うん」

「……将来自分がどうなるのか。」

名をつける事でイメージが固まりそこに近づいていく。

名は体を表すってことだ。……「オールマイト」とかな」

……。

各自名前を考える時間になった。

周りを伺うとほとんどの生徒たちは、既に案が固まっているようだ。

「うーん……名前……名前かあ」

ペンをクルクル回しながら考える青石。

「青ちゃん決まらんの？」

横から麗日お茶子が顔を覗かせる。

既に彼女は決まっているらしい。

麗日の白板には「ウラビティ」と書かれていた。

「それって重力の Gravity とかけているの？」

「うん」

「そっか」

「青ちゃん、本当にヒーローになるの？ ……大丈夫？」

麗日には既に話している。

麗日だけでない。クラスメイトも全員、青石がヒーローになると決めたことを知っている。

既に世間の反応は麗日などから聞いている。

青石の予想に反して、世間では意見が真っ二つに割れているらしい。

青石を許容する人間、それと青石を拒否ないし糾弾し排除したい人間。

おおよそその二つの派閥だ。

彼女がヒーローになりたいと世間が知った時、どんな反応になるのか目に見えてい

る。

実は今も雄英の校門の前、デモ隊が押し寄せてきているらしい。

ヒーロー達の活躍や、嚴重なセキュリティにより校内には入ってこれない。

麗日の「大丈夫？」という言葉は、諸々の事情を考慮した上での言葉だろう。青石の心中に未だ重しとなつてゐる罪悪感。

それを少しでも軽くしようとしてくれてゐる気がした。

「……えと、大丈夫。平気だよ。」

誰が何と言つても決めたから。

ボクは人の為に誰かの為になりたい。

だからヒーローになる。……暴力は振るわない。ただ人を助ける為になりたいんだ」

「……うち達はどんなことが有つても、青ちゃんの味方だよ」

「うん。……ありがとう」

麗日の些細な言葉が嬉しい。

青石の中で一番大切な人が誰かは決まつてゐる。

その序列が揺るぐことは無い。

だが彼とはまた違った距離感で会話できる麗日の存在は、青石の中で非常に大きかつた。

……。

各自発表する時間になつた。

教壇の前に立ち、自分で考えたヒーロー名を発表しなければならぬ。

次々に発表されていくヒーロー名。

青石は焦っていた。良い名前が一つも思い浮かんでこない。

そもそもヒーロー名は人々にどう認知されたいか。

その方向性が決まっていけないといけない。そう先ほど八百万にアドバイスされた。

だがアドバイスを聞いた青石は更に混乱してしまう。

考えに考えたが未だアイデアの一つも無い。

人の為に誰かの為に。それは良いとして。

そもそも、ヒーローとして具体的に何をしたいのか。それがビジョンとして明確ではない。

ふと前を見ると爆豪の出番だった。

「爆殺王！」

渾身の表情で発表した爆豪だったが。

「そういうのは止めた方が良いわね」

「なんだよ!？」

他のクラスメイトもクスクス笑いを漏らしていた。

「さあ青石ヒカル。貴方の番よ」

「えと！　ち、ちよつと待ってください！　考え中です！」

青石は再び思考の渦に飲み込まれていく。  
友人たちは既に決まっている。

麗日は「ウラビテイ」。

飯田は「天哉」。

緑谷は「デク」。

轟は「ショート」。

青石も自分の名前からとって「ヒカル」にしようかとも思った。

だが何かがしつくりとこない。

それよりもいい名前が有る筈だと考える。

思考が再び深く沈む。記憶を過去へ過去へと遡る。

自分の原典を見つけるべく、自らを定義するのにピツタリな何かを探していく。

「さあ残りは青石ヒカルだけね！ 爆豪君はとりあえず保留！」

「糞が！」

いきり立つ爆豪。彼を見ていると、ふと思い出された。

クラスメイト達から忘れ去られたしまった友人を。

彼女は初めての友達だった。そして彼女は青石の夢を綺麗だと言ってくれた。

——あなたの夢でしょう!?



USJでのあの時、あの場の光景を青石は一生忘れられない。

セルリア・セレスタイト。

彼女はもう何処にも居ない。

彼女は死んだ。

だがセルリアと言う人間は確実に存在した。

世界の理不尽に抗い、そして叶うことなく散っていった彼女。

そして今の青石ヒカルという存在があるのは、間違いなくセルリアが居たからだ。

青石の手が動く。

考えたわけではない。しかし気付けば彼女の体は勝手に動いていた。

「決めました。ボクのヒーロー名は……」

“セルリア”……？」

爆豪が反応したのを目の端で捉えた。

彼の脳内に直接メツセージを送る。

(当てつけなんかじゃないよ)

“セルリア”？ ……花の名前だったかしら？

もう少し別の名前のほうが……」

「これで、良いんです。……ううん、これでないといけないんです」

「……でも」

「これが良いんです」

青石の目に光が宿る。

青の少女の意思の強さを感じたのか、ミッドナイトが大人しく引いた。

青石はセルリア・セレスタイトを助けたかった。

「だが助けられなかった。彼女と分り合いたかった。今となつては、彼女が何を考えていたのか。」

それを知るすべはない。

彼女と分り合う機会は永久に失われた。

どれだけの人を助けても、セルリアは帰つては来ない。

今の青石ヒカルと言う存在は、セルリアという人間に支えられてここに居る。

だから青石は、せめて名前だけでも連れていきたい。

彼女のいた証をこの世界に残したい。

「何か訳アリね……。良いわ！ さあ最後爆豪君だけよ！」

「爆殺卿！」

「違うそうじゃない」

雄英の時間は緩やかに流れている。

窓の外をふと眺める。

スターレインは間近に迫っている。

全ての人間がその襲来を知った。

だが不自然なほどに世間は静かで、パニックに陥るなどの動きは見えて無いらしい。雄英体育祭で実際に見せた青石の実力を、人々は信じてくれている。

流星群迎撃くらい楽勝だろう。そう考えている。

ならその期待に応えないといけない。

最初からスターレインは、迎撃するつもりだった。

その為今まで生きてきたのだから。

もちろん、それが終わった後も死ぬつもりは無い。

「おい、青石。真面目に授業受けろ」

「はーい」

相澤から注意が飛んでくる。

いつもの様に青石は間延びした返事をする。

外の何処からか鳥の鳴き声が聞こえる。

空は清々しく晴れていた。

## 第54話

雄英は昼休みになった。相澤は青石と相談室で一緒に過ごして居た。

昼休みになったとたん、職員室にすつ飛んできたのだ。

こちらの都合などお構いなしだ。

既に雄英体育祭の青石の様子から、ゴシップ記事が出回っている。

中にはやはり青石と相澤の関係性に言及したものも有る。

世間体と言うものも有る。けれど青石はそんなのに気が回るほど、気遣いのできる人じゃない。

「はあ」

「どうしたの相澤さん？ 何か悩み事？」

「黙って食え」

「むむ……はあい」

青石はトレーに乗せられた食事を口に運んでいる。

見た目はどれもプリンのようだ。

ムース食と呼ばれるそれはシアンの手作り。味や成分は、徐々に変化させているらし

い。

彼は先ほど一口食べたが、常人が食べられる程度の味にはなっている。

青石ヒカルが食べていた固形の合成食品。それとは、比べ物にならないくらいは美味しい。

「むう……あんまり美味しくない」

「文句言わずに食え」

「分かつてるよ」

だが彼女はそれを美味しくないと言う。

彼女がその気になれば、自らの体を正常にすることは簡単だろう。

だが肝心の“その気”にさせるのほ思いのほか難しい。

自分の信じている感覚が正常では無いと認識するのは、確かに苦痛だろう。

青石ヒカルの基準の“美味しい”と普通の人の“美味しい”は違う。

「やっぱり美味しくない。シアンさんの意地悪……」

この食事を作っているのシアンは、ゆっくりと彼女の変質した味覚を改善させていくようだ。

シアンは「法月様には無断ですが」と言っていた。もちろん相澤もわざわざ法月に報告するつもりは無い。

美味しくないと言いつつ、青石ヒカルは完食する。

コップのお茶を飲み干した所を見計らい、相澤は切り出した。

「それで、具体的にどんなヒーローを目指すんだ。青石は」

「すごく頑張る。いっぱい色んなことする」

「おい」

「わ、分かっているよ！ 相澤さんが言うのはもつと……こう……」

青石は手を宙に泳がせて何かを伝えたい素振りを見せた。

だが中々伝わってこない。伝えようとする意志は感じるのだが。

「焦る必要はない。お前は……ひとまずはスターレインを何とかしなくちゃいけない。

……法月はまだ指示を寄越さないのか？」

「うん、まだ何にも聞かされてないよ」

「……ちいつ」

「こうなったら」

「勝手に動くんじゃない。また無用な混乱を起こすだけだぞ」

「ちえーっ……」

気まずい雰囲気の流れる。

スターレインの襲来まで二週間を切った。本当は具体的な迎撃の計画が立っていない

いといけない。

だが元々あつた計画は使えないらしい。

それは彼女が完全に雄英の制御化に置かれている。それが前提の計画だったからだ。けれど彼女を縛れる存在はいない。

相澤の個性だつて彼女が本気なら一切通用しない。だから彼女に強制させることは誰にもできない。

スターレインがどうなるか。それは彼女の良心を当てにするしかない。

相澤の見立てでは、まず間違いなく大丈夫だろうと思う。

無言の時間が流れる。

青石が何やらソワソワしている。

適当にクラスでの様子でも聞こうかと、相澤は口を開きかけ……。

「どもー・失礼するつすよー！」

赤い髪の人物が部屋に入ってきた。

相澤と青石の視線が一斉にそちらへ向く。

短く癖の強い髪がびよこびよこあちこちで跳ねている。

相澤は何処かで見た気がするが思い出せない。つい最近見た覚えがある気がするのだが

「あー！ 体育祭で助けてくれた人だ！」

青石の言葉で相澤は思い出した。

確か放送室で青石にカンペを見せていた人物だ。

青石に指を刺されたその人は頭をかいた。

「おつ……なんだ覚えてくれていたんすね！ 照れるなあ」

へへと言いながら頭をかいた。

相澤は警戒を強めるが青石は逆に緩めたようだ。隙がありすぎる。

一体こいつは何者だというのか。

「おつとー！ こいつは失礼。自分はマゼンタっす！」

一応女っす。よろしくお願いするっす」

「うん、よろしくねマゼンタさん！」

いつの間にかマゼンタと名乗る女の前に青石は回り込んでいた。

そして握手を交わす。

「あ、ボクはね」

「知ってるっすよ青石ヒカル。自分はとつつあん……じゃなかった。

法月将臣に言われて来たんすから」

マゼンタの一言に緊張が走った。



相澤は更に表情を厳しくする。

「法………月………？」

「あつ、なるほど、やっぱそっち側の人っすか？」

「やーだなー、そう警戒しないで欲しいっすねー」

「あの男の手先か？」

「うーん………そうとも言えるし、そうじゃないとも言えるし………」

「順を追ってちゃんと話すんで冷静になつてくれますか？」

「よく分かんないよ」

「まあまあ、とりあえず世界を救うための話をしましょう。」

「単刀直入に言うっすよ。」

「指示待ちに徹して何もしてなかったら………世界は滅びます」

………

………

“闇”が広がっている。

暗闇を引き裂くように一筋の光が伸びた。

闇の向こうに照らされるのは無機質な壁。

ディスプレイから伸びた光は、だだっ広い会議室の隅を心細く照らす。雄英の地下アークロジ。

その一角。

そこに居るのは背広にネクタイをした中年の男。左手には杖をついている。彼は法月将臣。

手元のキーボードを手慣れた様子で操作する。

「始めようか」

法月の声ではない。

それはディスプレイ越しに流れてきた声。

法月はインターネットを介して行われる会議に参加したのだ。

それは各国の高等尋問官の国際会議。

無論表向きになっていない。

ここで密かに各国の利権を巡った攻防が、日夜繰り広げられている。

「法月、報告を」

画面の向こうから促される。声の主はベレンス・セレスタイト。

アメリカの高等尋問官にして、各国の高等尋問官を取りまとめるリーダーだ。

実質的な世界の最高権力者。

名目上、高等尋問官同士での優劣は存在しない。

だが各国の経済、軍事、その他のパワーバランスと発言力は密接に関わっている。世界唯一の超大国アメリカ。

その高等尋問官であるベレンスの意向が、最大限に尊重されるのは必然でも有る。

「……以上になります。よって、明日にでも迎撃に向かわせるのが最善かと……」  
今日の報告を法月は終える。

報告を終えるや否や、中国の高等尋問官から声が上がった。

「法月君、君は最近調子に乗りすぎじゃないかね。

もう決まっている。迎撃はスターレインの前日に行う。

「これは小動こどうもせん」

「青の少女の力なら、宇宙で迫ってくる今の段階でも向かわせることが可能です」

「それは聞いた。だがそれがどうした？」

「漫然と過ごしては手遅れになるやも知れませんが。そうなる前に不安要素は取り除くべきかと」

「不安要素？ どこにそんなのが有るといふのかね？」

観測は続けておる！ アリ一匹も見逃さんほどに正確にな！

貴様は観測結果を疑うと言うのかね!？」

「いえ、決してそんな事は」

「ならば何の問題もあるまい！　そもそもだね！

本来“青の少女”などというプロジェクトも私は反対だったのだ！

法月、貴様は強引にプロジェクトを押し進めた！

結果こそは良かったが、一歩間違えれば我々が死んでいた！

分かっているのか!？」

別の国の高等尋問官も加わる。

「法月、昨日もその議題は取り上げたでしょう。

あまり遠くにある段階で隕石を解体したとしても、民衆には皆目分らない。

もしかすると最初からスターレインなどなかった。陰謀論だった。

などと言うでつちで扇動する輩も出てくるかも知れないと。

彼女には地球の側に来たスターレインを、民衆にも分かりやすい形で派手に迎えてもらおう。

多少犠牲が出たとしてもね。そう決まった事でしょう」

法月は唇を噛み締める。

法月が青石に命令を下せるのならとうに下している。

彼女は自らの個性を完全に支配下に置いた。個性と共存する事を確立できた。

だから本当は今すぐにもスターレインを排除してもらおう。それが最善だ。そんな事は法月も分かっている。

だが各国の高等尋問官から見れば話は違ふ。

そもそもこの各国の高等尋問官には、派閥が有る。

簡単に分けるなら二つ。

全人類をスターレインから救おうとする法月らの派閥。全人類派。

そしてあろうことかスターレインを見逃し、一度人類をリセットしてしまおうという

派閥。選民派。

もちろん選民派の人間が表立って、そのような発言をする事はない。

表向きはあくまでスターレインを迎撃しようという立場を取っている。

だがその実、裏で全人類派の足を散々に引つ張っている。

青石ヒカルを、今すぐスターレインの迎撃に向かわせられないのは、そのせいだ。

そして、アークロジーステム。これも皮肉なことに選民派の技術で作られている。

隕石の襲来が予測されているのに、なぜその迎撃の技術が進化しなかったのか。

それは選民派の人間がスターレインを利用して、人類の浄化を企んでいるからに他な

らない。

彼ら選民派の理屈はこうだ。

地球は既に限界を迎えている。そしてであろうことか人類に個性という“病”まで出現し決めた。

このまま人類が繁栄を謳歌するのは限界を迎えつつある。

だからスターレインで一度人類の数を、減らして厳選し改めて文明を再構築しよう。そういう腹づもりだ。

アーコロジーシステムは人の手を借りない全自動。それもそういう理由が関係している。

選民派の思惑通りいけば人手は必然的に不足するからだ。

やつら選民派はスターレインを何としても見逃させて、自分達だけのうのと生き延びようとしているのだ。このアーコロジーシステムを使う事で。

そしてであろうことか。この会議に出席している高等尋問官は全員選民派だ。

法月以外の他の全人類派閥がどうなったのか、語るまでも無い。ベレンスの手により、全員干されたのだ。

「……何か問題でも法月?」

「いえ」

「法月、もういいな? 具体的な指示はまた話し合えばよからう。

何、あと二週間ある、ゆっくりと考えればいい」

「左様ですな」

「はははは！」

一斉に笑い出す高等尋問官達。法月は当然加わらない。

冷え切った心境で、彼らを映像越しに見ていた。

「うむ、十年前の犠牲もこれで無駄にならずに済む」

ベレンスの口調に苛立つ。

どの口が言うのだろうか。

ベレンス・セレスタイトこそが選民派の筆頭だ。

普段はさも人類を全員救うように見せかけている。

やつが選民派であつた事實は、娘であつたセルリアも知らなかつただらう。

口では迎撃させるように振舞っている。だが本心は見えない。

奴らは青石ヒカルに迎撃などさせないつもりだ。

強引にでも止めようとしてくるだらう。

腐っている。

世界はどうしようもないほどに、腐敗しきっている。

世界の最高権力者たる高等尋問官達。彼らの頭の中に有るのはおよそ金の事。

奴らは既存の文明が崩壊しようとも、その後の世界で利権を得るための謀略を練つて

いる。

今頃如何にして青石ヒカルに迎撃させないか。それだけを考えている。

そして世界中にスターレインが降り注ぐ頃、彼らはアーコロジーに逃げ込んで新しい世界を構築するつもりだ。

本当にどうしようもない。

だが、そのどうしようもない連中の技術を使わなければ、青石ヒカルという希望は生まれなかった。

それもまた現実なのだ。

彼らがいる限り、この世界に不条理は蔓延し続ける。

だから、法月は決めた。

腐った果実は——切り落とすしかないのだと。

「ん? ……ぎやあああ!」

ディスプレイの向こう側から悲鳴が聞こえた。

「どうした!?! 何が起きた!?! 応答しろ!」

「ああああああ!?!」

「ぐあああ!」

ベレンスの焦った声に、法月はほくそ笑む。



次第に通信の繋がっている数が減っていく。  
焦るベレンス。

次々と通信が途絶えていき、残ったのは一つだけになった。

残ったのはベレンスと法月だけになった。

回線の向こう側から声が聞こえる。

「……育ててやった恩義を忘れたか。シアン」

「勘違いしないで頂きたい。私をお救い下さったのは法月様です。」

あなたは法月に「借り」を返すため、嫌々私を引き取っただけでしょう」

「セレスタイト」の名を与えたのは私だ！ この下民の元敵風情が！

やはり所詮は貧民街のドブネズミだったな！」

ベレンスが余裕もなく喚き散らしている。

唾を口から飛ばし、罵倒雑言を画面には映っていないシアンに浴びせている。

今頃沈黙している高等尋問官達は絶命しているだろう。

流石シアンの仕事だと、法月は内心舌を巻く。シアンは期待以上に良くやってくれた。

普段の煩雑な事務仕事から、戦闘、諜報。あらゆる分野で彼女は使える。

欠点があるとしたら、青の少女に必要以上に甘くなってしまうことか。

だがそれも些細な問題だ。

個性“忍者”。彼女を幼い頃に救ってやった選択は間違っていないかった。

そう改めて法月は確信する。

「ベレンスよ。貴様らはあまりにも賢く、それ故に腐敗しきっていた。そして愚かだった」

「愚か……？ この血と暴力が貴様のやり口か！ およそ理性的ではない。

これは理性を捨てた獣の手段だ」

「ベレンスよ覚えておけ。人類の歴史とは常に血と暴力で作られる。

そして貴様らの言う理性的なやり方が、野生を遥かに上回る残酷な世界を作り出すのだ」

「セルリアもそうやって殺したのか!？」

「知らん。彼女に関して私は管轄外だ」

「この……！ 薄汚い敵があ！」

「敵か……。はははは！ そうだ、今頃になって気付いたのか！」

「そうだ。私は敵だ。」

だが貴様らは敵をも超える悪臭を放っていた。

ならばそれを切り捨てるため、私は敵にでもなろう！」

「貴様っ……!!」

「世界は生まれ変わろうとしているのだ、ベレンスよ。そこに貴様らの居場所はない」

「ふざけるな! 世界を救えるのは我々選民派だ!」

「ふん、言いたい事はそれだけか。なら大人しく死ね」

「……法月様、よろしいでしょうか」

シアンからの確認に法月は首を縦に振った。

「構わん、殺れシアン」

「はい」

「法月い……!!」

ベレンスの声が通信越しに聞こえた。

だがそれも断末魔に変わる。

画面に血しぶきが飛んだ。

「さようならだ、ベレンス」

通信で報告が入る。

「終了しました」

今さっき画面で出なかった

「ご苦労。首尾は?」

「万事抜かりなく。証拠も全て消去済みです」

「ならば良い」

青石ヒカルは例えるなら、泥の中から咲いた蓮の花だ。

ようやく咲いた花だ。

それを散らせるわけにいかない。

「変革の時は迫っている。この時をどれ程待ちわびたか……。

これ以上邪魔などさせてなるものか」

この日から、地球上に残った高等尋問官は法月将臣だけになった。

……

……

…

「ならば良い」

法月の言葉を聞いてからシアンは通信を切る。

「ああ、また汚れてしまいました」

血にまみれた手。彼女の獲物はナイフ。

先ほど喉を掻っ切ったベレンスの死体が、視線の先に転がっていた。彼女は懐からハンカチで血を拭う。

そして端末を操作して、証拠をあらかじめ消していく。

その際に使えそうなデータを回収しておくことも忘れない。

シアンは青石ヒカルを思い浮かべる。

何の疑いもなくシアンを信じ切っている彼女。

青石がシアンのやっていることを、実際に目にしたら何と言うだろうか。

「いいけませんね……」

集中を欠いてはいけない。

そう分かっているけど、青石の事が頭から離れない。

青石は暴力が嫌いだ。そして彼女はヒーローになると決めた。

それは人の為に誰かの為に。

誰かが理不尽な思いで苦しんでいるのが嫌なのだ。

彼女はそう言う。

シアンもそうあれたらどんなに良いだろうかと思う。

けれど、世の中は綺麗ごとでは回っていかない。

今日のベレンス達高等尋問官を殺害した事も、正しくはない。

だが彼らを放置していると次の災いを作り出すことは必然だった。だから殺した。

法月の命令だったから。それは有る。

だがそれ以前に、彼らのような者達を見ると吐き気を催すほどに嫌悪感が湧く。高等尋問官達。彼らは金の為に動いていた。

彼らのたった一日の収入が、その国の国民一人の生涯年収と同じ額だけある。なぜこうも現実是非常なのだ。

世界に金持ちが居るのは、搾取される貧乏人がいるからであり。

だからといって金持ちが居なくなれば、貧乏人が居なくなるわけでは無い。

金持ちが居なくなれば、金の循環が滞り皆が貧しくなるだけだ。

だがせめて、力を持つものは、持たざる者に優しくあつて欲しい。

シアンは心からそう思う。

法月は優しくはない。

だが彼は資産を独占することは無い。

彼は収入のほとんどをモルグフ孤児院の運営や、その他の社会保障の施設に寄付している。

法月が持っている資産。それは収入に反して、一般的な家庭のそれと大差ない。

それは彼が誰よりも“秩序”を重んじるからであり。決して他人を思いやるからではない。

そのことは長年傍で仕えてきて理解している。

法月将臣。

彼は果たして“悪”なのだろうか。

彼が青石ヒカルにして来たこと。それを、シアンは許していない。

けれども法月が青石を作り出していなかったら？

世界はベレンス達の思い通りになっただけかも知れない。

さらに多くの人が死ぬしかなかったかも知れない。

それは誰にも分からない。

だが、少なくとも。今更人の生き方や、生き死にに文句を言えるほど。

シアンの手は綺麗では無かった。

「今日のあの子の夕食は、何にしましょうか。

……ふふつ、ハンバーグとエビフライにしましょう」

作業を終えたシアンは部屋を後にしていく。

人を殺した直後だというのに、彼女の顔には笑顔すら浮かんでいた。

彼女の一日はこうして過ぎていく。

人を命令で殺す。

これは彼女にとつて、いつも通りの何気ない日常の一コマ。

元敵ウイランの彼女は未だ、殺しから抜け出せない日々を送っている。



## 第55話

「全人類派？ 選民派……？ なんで……ボクそんなこと聞いてない！」

「そりゃあそうつすよね。法月のとつつあんが話すとは思えないですし」

マゼンタと名乗る人物が喋る内容。それはにわかには信じがたいものだった。彼女の話によると、各国の高等尋問官達は本気で地球を救う気がないらしい。

「スターレインが来たら皆死んじゃうんだよ!? なんで皆で助け合えないの？」

青石の心が沈む。不安に駆られて相澤の服の裾を思わず。

相澤はポンと青石の頭に手を置いた。

その感触に少し顔がほころぶ。

「……要するに、災害すらも利用しようっていう糞野郎共がいるって事か」

相澤の言葉にマゼンタが頷く。

「そういう事です。そしてよりにもよってそんな連中が、法月の上司にあたる存在なわけっす」

「なら隕石の位置や方向の正確な情報は……」

「もらえるはず無いっすね。奴ら適当に誤魔化してスターレインを迎えるつもりっす」

よ。

当然そうだったら人類がどうなるか。言うまでも無い事ですよね」

だから彼女は言ったのか。

このままでは世界は滅ぶと。

そうやって一度世界を滅ぼしてまで、己の利益を優先する人が居る。

そしてそんな人が世界を裏で牛耳っている。

青石は言葉が出ない。

何て言えばいいのか分からない。

マゼンタから聞かされた話で青石の中の価値観は揺るぎつつあった。

今までずっと青石の中では法月こそが“悪”だった。

彼こそが純粹な悪の権化だと、そう信じていた。

けれどもそんな法月は地球を救うために奔走していて、それを邪魔する存在が居る。

なら法月は果たして“悪”なのか？

だが、青石は今まで法月が自分にしてきた仕打ちを決して許すことが出来ない。

だとしても、法月が青石の知らないところで、青石の知らない何かと戦っている。

そしてそれは紛れもない“悪”だろう。それは間違いない事実のようだ。

「法月は？ 何もしてないのか？」

「手を尽くしてますけど、厳しいと思うっす。

いくら青石ちゃんも、どっから飛んでくるのか情報無いときつくないっすか？  
宇宙は広いっすからねー。

まあそんなわけで、最後の最後まで邪魔してくる奴らがいる訳です。  
ほんと糞みたいな話っすね」

青石は目を閉じた。

今までの経験を思い出す。

ずっとスターレインを迎え撃つことだけのため生きてきた。

自分の使命を果たすべき時が来た。

青石を縛る枷は既に存在しない。

行こうと思えば何処へでも行ける。

自らの力を使えば、地球を飛び出して、何処までも行ける。

もう、スターレインをわざわざ待つ必要なんてない。

頭の中に自らの個性の声が聞こえた。

——ねえ私。もう……

(分かってる。……行かなくちゃ、このままジツとしてるだけじゃ皆死んじやう)

——行きましよう、私達はそもそも。

（うん、行こう。もう、閉じこもっている場合じゃない。

人の為に誰かの為に。ボクたちは）

——何処にでも行ける、何処までも行ける。

（一緒に行こう。外の世界に）

「青石、お前は」

「相澤さん」

相澤の言葉は短く遮る。目を開ける。彼女の目が青く輝く。

決意の籠った視線に相澤が若干怯んだように見えた。

だがそれも一瞬。直ぐに青石の気持ちを受け止める。

青石は相澤の手を強く握る。

部屋の外へとそのまま歩きだした。

相澤も手を握ったままついてくる。

「ちよ、ちよつと！　これからが話の本番つすよ!?　具体的にどうするか……」

「関係ないよ」

「関係ないって……」

「関係ないんだ。他の人達がどんなこと考えてたって関係ない。

ボクがやれば済む。

ボクが守るって決めたんだ。世界は終わらない。

スターレインなんて全部自分で見つけて……全部壊すだけだよ」

「……」

青石の強い口調にマゼンタは口を閉じた。

普段の青石からは考えられないような強い覇気。それに圧倒されている。

青石はやっぱりとほほ笑む。

「ありがとうねマゼンタさん。迷いが晴れたよ。

おかげで本当にやりたいこと見つかるような気がする」

青石は相澤の腕を引いて相談室を後にしようとする。

扉を開けようとしたら扉の方が勝手に開いた。

「法月……」

「とつつあん！」

扉を開けたのは法月将臣だった。

いつもの背広姿。いつもの杖。

幼い頃より刷り込まれてきた恐怖が、全身に襲い掛かってくる。

まともによれば、もはや敵ではない。そう分かっている、どうしても彼女は法月に恐怖を覚えてしまう。

青石の手に力がこもる。

隣にいる相澤が力をくれる。

「ボクはこれから雄英を出て、宇宙そらに行きます。

直接スターレインを迎撃してきます。……止めますか？」

法月は鼻をならした。

「今更何を。止めはせん好きにしろ。

もとよりスターレインに対処させるため、お前を作ったのだ。

止める理由が無い。それに、もはやお前を止めようにも、誰も止められはしないだろ

う」

「そうですか」

青石は素っ気ない。

「その力、与えられたことに精々感謝するのだな」

「……ボクはあなたが嫌いです。誰よりも嫌いです。

本当はスターレインを迎撃して、結果的にあなたの思惑通りになる。

それが本当に腹立たしくてたまらない」

「ふん」

「でも、ボクはあなたの思い通りだとしても、スターレインを止めに行く。

皆を、皆の住む世界を守りたいからです。

そしてそれを決めたのはボクであって、あなたではない」

「……言いたい事はそれだけか」

「行こう、相澤さん」

法月の言葉は無視して横を通り過ぎる。

振り向きはしない。これからするべき事だけを考える。

“ 5 t h スターレイン ”  
ファイブス

最大で直径10キロの流星群。

それが、約一か月の間に五回に渡り地球上に降り注ぐ。

人類史上最悪の大災厄だ。

あと二週間で地球に襲来という事はそれなりに近い場所に有る筈。

青石の力なら探し出して撃滅くらいはなんてことは無い筈。

(ボク達なら出来るよねレギオン?)

——当たり前じゃない。そのくらい何てことないわよ。

相澤と二人きりのまま廊下を歩く。

無言のまま階段を上り、屋上へと向かった。

ギイイと蝶番が音を鳴らして扉を開く。

風が強く吹き込んでくる。日差しも眩しい。

遠くを見ると羊雲がプカプカ浮いていて、小鳥のさえずりが聞こえてくる。屋上には誰も居なかった。

今は昼休み。

誰か一人くらいは居そうなのだが、ここには誰も居ない。

相澤にヒーローになると告げた場所もここだった。

この屋上は、中庭と並んで青石のお気に入りの場所だ。

強い風が吹く。彼女の青い髪がなびいて広がった。

「本当に宇宙に行くのか？」

「うん……えと……あのね。お願いが有るんだ。

一緒について来てほしいんだ。宇宙でちゃんとボクがやれてるかどうか。

ずっと傍で見たい欲しい」

青石の言葉に相澤は直ぐには返さない。

しばらくして彼は、ためらいがちに返事をした。

「俺が傍に居ても、出来る事は何も……」

「何もなくてもいい！ 居てくれるだけでいいの」

居てくれるだけでいい。



そう青石は繰り返した。

青石が相澤に求めているもの。それはありきたりな温もり。

傍に居てくれること。だが傍に居るといふのは口で言う程に、簡単ではない。

それは青石も分かっている。

「相澤さんが傍に居てくれるだけで、きっとボクは何でも出来る。

何だって出来る。何のためにヒーローになるって決めたのか。きっと忘れずに済む」

「本当に俺は何も出来ないぞ」

「言ってるでしょ。傍に居てくれるだけで良い。

ただそれだけでボクは……」

相澤の目を見つめる。身長差が有るので必然的に上目遣いになる。

彼ははあとため息を吐いた。

「……ああ分かっている」

「えっ？ 何？ 何て言ったの？」

相澤は確かに何かを呟いた。だが小さすぎてその呟きは聞こえなかった。

「何でもない」

「……そっか」

踏み込んでほしくなさそうな相澤。青石は追及はしない。

きつと本当に何でも無かったのだとそう信じたい。  
「青の世界」コードブルー

青石はレギオンと共鳴する。

彼女と個性が思考を共有する。

目指すは宇宙。

空を見上げる。

実は地上から宇宙までの距離は、意外に近い。

海抜から1000キロメートル上空。それを超えた仮想のライン、カーマン・ラインを  
超えた先が宇宙と定義されている。

やろうと思えばほぼ光速で動ける青石にとって、1000キロなんて目と鼻の先だ。

「行くよ、相澤さん」

「シミュレーションは……今更か」

「うん、大丈夫相澤さん。ボクを信じてよ」

「……ああ、信じてる」

彼の言葉が胸に染みわたっていく。

心の奥に掛けられた錠が外れる音が聞こえた。

相澤に触れる。鼓動が聞こえ、ぬくもりが伝わる。

彼が居るだけで、世界は七色に輝きだす。

相澤となら、何処までも行ける。

自らの気持ちをも、彼女はまだ告げない。

今はまだ、この胸の内に色褪せないように、大事に秘めて居たかった。

「じゃあ、はい！」

青石の背中に蝶のような羽が生える。

光り輝くそれで相澤の体をそつと包んだ。

次の瞬間、彼女はその場から消える。

青の少女。

彼女は空の向こうへと音もなく飛び去って行つた。

……

……

……

「余計な事を」

「やーだなーとつつあん。ちよつと良かれと思つて教えてあげていただけですよ」

青の少女と相澤が去つた相談室。

法月はマゼンタと会話していた。

「とつつあんは自分の事を話さなすぎるんす。だから嫌われるんすよ」  
「ふん。まあよかろう。だがお前の心配は当てが外れたな。」

……作戦は無事に終了した」

法月から出た言葉に、マゼンタは信じられないといった顔をする。

「えっマジっすか!?! マジでシアン成功させたんすか。屑共一人残らず?」

「そうだ」

彼女の顔は驚きから呆れに変化した。

「ええ……。流石にシアンでも絶対に無理だと思ってたっす。」

それなりに強い護衛のヒーローがついていた筈ですがねえ」

「私としても嬉しい誤算というものだ」

「法月様」

音もなく第三者が現れる。

話題の渦中のシアンだ。マゼンタは身をのけ反らせた。

「うわ! シアン!」

「お久しぶりですねマゼンタ様。あなたが孤児院を出て以来ですね」

「お久っす! 聞いたっすよー! マジで全員ぶっ殺したんすか?」

「ええ、抜かりなく」

すました顔で答えるメイド。マゼンタはやはり少し引いている。まさきにドン引きといった表情だ。

「うわー、護衛とか居たつしよ?」

「全て排除いたしました」

「……うわあ」

「忙しくなるのはここからだ。働いでもらうぞシアン」

「承知しております」

「シアンを酷使しすぎじゃないっすかとっつあん!?

まじブラックっすね!」

「黙れ」

拳骨を食らったマゼンタを見てシアンがおかしそうに笑う。

生きるために、己の目的を果たすため、手を血に染めた者達が集っている。

法月と彼女たちの繋がりを、青石は知らない。

青石に関する様々な事が、今まで彼女達を通じて決定されていた。

そして彼女たちの下には、更にその指示に従う部下がいて。

その部下にも更に部下がいる。

青の少女。それは見えない沢山の人に支えられて存在している。

今後青石が知ること無い。

だが青の少女という存在の影に、歴史で語られない無数の存在が居た。

そして彼らの存在なしに、青の少女は存在しえなかった。

そのまま陰に埋もれてしまう存在だとしても。

誰にも覚えられない存在だとしても。

この小さい星の片隅で、理不尽に抗い、同時に理不尽を生み出しながら。

彼らは確かにここに居た。

………

………

………

「わあああ！ 綺麗……ねえ相澤さん！」

「ああ、分かってる。いちいち騒ぐな」

「凄い……本当に綺麗……」

相澤の隣でうつとりと青石が見ているもの。

それは地球。

青石は個性を使って、あつと言う間に雄英の上空100キロメートルにまで到達した。

彼女の個性は応用がとんでもなく広い。

大気圏外に出るなんて朝飯前だ。

本来は空気が無い二人の周辺。そこは当然、青石の個性を使い空気で満たされている。

大気で減衰される事ない太陽光線も、適度な強さにカットされている。

その他、予想される宇宙ゴミへの対策もバッチリしている。

青石は宇宙をそれなりに勉強はしていた。

スターレインは宇宙からやって来るのだし、当然と言えば当然だが。

下を見る。

見渡す限りの青い星。

闇夜に浮かぶ青い光。その美しさをどう形容していいか、相澤には分からない。

しかもカメラ越しでは無い、直に目の前に広がる大パノラマだ。

「凄い……世界は……こんなに綺麗だったんだ」

青石も地球のその美しさに見とれている。

もう相澤たちが居た場所は小さすぎて見えない。

青石の個性は可能性の塊だ。

何処にでも行ける。何処までも行ける。

彼女がやろうと思えば、止められるものは何一つない。

「相澤さん、守らなくちゃね。あー！」

彼女が焦った声を上げた。

一筋の流星がはるか下の方で燃えて、消えた。

「あ、そつか……流れ星か」

「ああ、流れ星が光るのは85キロメートルより下の間層だ。

小さな石やチリは大気圏で燃え尽きてしまう。

それが流れ星になって見えるんだ」

「……あんまり大きい石は大気で燃え尽きないで地上に落ちるんだよね」

「ああ、それが隕石で。それが大量に来るのが今回のスターレインだ」

「うん、大丈夫分かってる」

「頼んだぞ。……スターレインは見えるか？」

「ん……ちよつと待って」

青石はくるりと後ろの宇宙空間に身を翻す。

「集光……うん、バッチリ見える。軌道計算もちゃんとした。

確かにこのままだったら地球に当たっちゃうね」

「何とかなるか？」



「何とかするよ。じゃあ行こう相澤さん」

青石が相澤の手を握る。

周囲に光が二人を守る様に包んだ。

「ふふん、バリアだよ。これから隕石の所に行くからね。

途中で事故に遭っちゃったたら大変だもん。ちゃんと考えてるよ」

「それは頼もしいな」

「えへへ、じゃあー！」

青石が言うや否や。地球の姿があつという間に小さくなつて離れていく。

グングン青石は何もない宇宙空間を進んでいく。

見渡す限りの星々だ。

地上の星空とは比べ物にならない。大気という遮るものが有る地上と違い、宇宙では遮るものが無い。

何処に目をやっても星が光っている。

だが青石の顔を見たらそれ以上に輝いている。

彼女は鳥よりも自由に。宇宙を駆けていく。

やがて周囲が虹のように輝きだした。

「ん、なんだろ？」

「これは……光のドップラー効果か」

「何それ？」

「簡単に言うとな……」

相澤は説明する。

観測者、もしくは光源が動くと、観測される電磁波の周波数が変化する。

近づく光源からの光は青く見え、逆に遠ざかる光源の光は赤く見える。

普段の生活ではまず意識することは無い。

だが青石は今ほぼ光速で宇宙を移動している。

その結果、周囲は虹のように七色に色付いたのだ。

「へえーよく分かんないけど、とつても綺麗だよね！」

「ああ」

「あははははー！」

彼女の思いのまま。あるがままに。

相澤は過去を思い出し目を閉じた。

彼女は今自由だ。

誰にも縛られない。誰にも邪魔されない。

今、地球上に居る誰よりも自由だ。

こんな日が来るのをいつたいたいだけ待たただろう。

「着いたよ相澤さん」

青石に言われ目を開ける。

前方に物言わぬ岩の塊があつた。

表面はボコボコしていて穴だらけだ。

闇に溶け込むような色。大きさが相当あるのは分かる。

だが宇宙空間では距離感が難しく、一体どれほどの大きさか正確には分からなかつた。

相澤の見立てでは小さな山程の大きさはある様に見える。

「これがスターレインか？」

「うん、そう。その一つみたい」

「どのくらいの大きさだ？」

「ざっと直径3キロって感じかな？」

間違いなくこのまま放つておけば地上に落下すると思う」

「地球はどの辺だ？」

「あっち」

青の少女が指さした方角を見る。

ほんの小さく青い点が見えた。「豆粒よりも小さい。どうやら相当地球から離れた所にいるらしい。」

光に近い速度で結構な時間移動したのだ。当然ではある。

「ねえ、相澤さん。さつき言ったけど、小さなチリや小石は大気圏で燃え尽きるんだよね？」

「ああ、そうだ」

「ふふふ、良いこと考えた！ エイ！」

彼女が手をばつと前にやった瞬間、隕石が霧になった。

よく目を凝らすと、正確に賽の目の形にバラバラにされているようだ。

「ふんふんふん！」

さらに彼女は手を振るとその霧も霧散してしまう。

彼女曰く3キロメートルあった巨大な隕石も、あつという間に解体されてしまった。

「完全に消滅させずにバラバラにしたのか？」

「うん、全部大きさ1ミリにしたんだ。この大ききなら、大気で燃えてしまうから安心だよね」

「そうだな。お前まさか」

「うん！ これで二週間先に、いっぱい流れ星が見られるよ！ 写真でしか見た事ない

けどね。

きつと綺麗なんだろうなあ」

彼女は、まだ見えぬ空に思いを馳せている。

人類を滅ぼすスターレインを、史上最大の天体ショーにしてしまおう。そういう事か。

確かに隕石を全て細かくカットすれば。相当数の流星の卵になる。

文字通り雨のような流星が見られるだろう。

もちろんそれらが地上に降り注ぐことはないが。

「じゃあどんどん行こー」

青石に手を引かれる。彼女は次々に、隕石を細かい大きさ一ミリのチリに変換していく。

相澤では見えない闇の向こうの隕石も、彼女の目は正確に捉えている。

そして遠くの隕石群を見つけ次第、近くに寄って解体。

それをただひたすらに繰り返し返す。

そして解体した隕石がざっと500辺りになったところで

「これで最後だよ相澤さん」

先ほどまで見てきたのよりずっと大きな隕石があった。

「どのくらいの大きさだ？」

「直径十キロ。じゃあ、やつちやうよ」

「ああ、頼む」

「ふふ、えーい！」

再び個性を使い隕石をバラバラにする青石。

彼女にとっては十キロだろうが、数メートルだろうが大して労力は変わらない。

あつという間に人類を滅ぼしうる脅威は、ただの大きさ一ミリのチリの集団になり果てた。

「本当にこれで、最後ののか？」

「ちよつと待つて。……うん……大丈夫。スターレインは全部片づけたよ」

「そうか。よくやったな」

青石はその言葉に甘えるように、相澤の胸に飛び込んだ。

相澤も優しく迎える。

地球から遠くなはれた場所。今の地球人の技術なら、来るだけでも命懸けの空間。

そこで青石は相澤に抱き着いてくる。

相澤も拒否せずに受け入れる。彼女が抱いている気持ちには、とつくに気付いてい

「終わっちゃったね……相澤さん」

「ああ」

「何だかあつという間だったなあ。……ボク、たったこんな事の為に生きてきたんだ」

「青石、こんな事じゃない。お前じゃないと出来ない仕事だった。」

お前にとつては簡単でも、他の奴らには出来ない事だったんだ。

地味に見えても、お前は今地球を救った。間違いない事だ」

「相澤さん」

「しっかりと見てたぞ。……本当に良くやったな。よく頑張ったな。」

「……青石？」

青石は更に胸に強く顔を押し付けてくる。

彼女の目からは涙が溢れていた。

「なぜ泣く？」

「分かんない……分かんないけど。涙が止まらないんだ」

「そうか。……帰るぞ、俺達の地球に」

「うん、そうだね。……相澤さん、寄りたいたいところが有るんだ」

再び青石と相澤は空を駆ける。

そしてしばらくして着いた場所は。

「月か」

「うん」

月面に青石は腰を下ろした。

相澤は見渡す限りの荒廃した地平を見る。

どの道青石の個性のおかげで、ここでは生きていられるに過ぎない。

あまり遠くに行けはしない。青石の隣に相澤も腰を下ろす。

空を見ると大きい地球が浮いている。

地球から見る月よりも何倍も大きい。

「月と一緒に見た事が有ったが、流星に地球は初めてだな」

「うん」

青石は何やら考え事をしているらしい。

体育座りで地球をボーッと眺めている。

「今頃、スターレインを観測している奴は大騒ぎだろうな」

「そうだね……でも、本当に大したことじゃないよ。」

大体二、三十分くらいであつたという間に終わっちゃたもん……。

本当に呆気なかったなあ」

「青石とって簡単だったとしても関係ない。」



お前は地球を救ったんだ。もっと誇っても良いんだ」

「……相澤さん、ありがとう」

そのままお互いに言葉なく地球を見上げる。

時間だけが過ぎていく。だが焦ることは無い。

もうやる事はやった。青石はスターレインを迎撃し終えた。

青石の言う通り、あまりにも呆気なくて拍子抜けしたのは事実。

だがそれは青石がとんでもないだけだ。

映画で表現されるような派手な方法ではない。

大衆にとっては、分かりづらいし、とても詰まらないだろう。

地上から直接レーザーなり核兵器なりで、飛来する隕石を粉々にして、派手に火花を空に散らして演出する。

その方が、人からは評価されるのかも知れない。

それでも彼女は誰一人犠牲にする事なく、結果を出した。

例え詰まらなからうが、面白くなからうが。

彼女は一番ベストな選択をした。

それが大事だ。

「相澤さん、ボク具体的にどんなヒーローになるか決めたよ」

「……聞かせてくれ」

「うん、見て」

青石が指を刺すのは地球。

「とても小さいんだ。あの小さな星に皆住んでいて、泣いて笑って。

ヒーローや敵ツライや色んな人が居る」

「そうだな」

「ボクね小さい頃ずっと思ってた。なんでボクだけ外に出ていけないんだろう。

なんで閉じ込められなくちゃいけないんだろうって。

でもね、こうして地球を眺めていると、とっても小さなことだったんだなって。

ボクは外出られなかった。

だけどそれはみんな同じなんだ。みんなあの小さい星に閉じ込められて、何処にも行くことが出来ない。

それってボクと全く変わらない。今ではそう思えてくるの」

「……」

相澤は言葉ではなく頷いて返事を返す。

先を喋る様に促す。

「こうやって外に出てボク思ったんだ。

世界は広い。地球は狭くて、宇宙はもっともつと無限に広がってる。

地球にこだわる必要なんて、何も無いのに。

なのに皆あの星から出ていかないだろう」

青石は素直に疑問に思うのだろう。

相澤は彼女の髪を撫でる。

「それは、出る事が出来ないからだ。

超常黎明期、世界中が混乱した。この混乱がなければ、人類はとつと外宇宙に生息

領域を広げるまでに科学を発展させた。

そう言われている。だが今の科学では……」

「だったら出られるようにしたらいい！」

彼女は立ち上がる。

地球を背にした彼女の髪と目は、地球と同じ光を放っていた。

「この綺麗な景色をボクはもっともつと色んな人に見てほしい。

世界はこんなにも広いんだって。

世界はこんなにも綺麗なんだって。

世界中の誰でも、どんな人でも、この景色を見られるようにしたい。

ボクだけじゃなくて皆が、自由にこの宇宙に出られたら。

この宇宙の何処へでも好きな場所へ行けたら。  
そうなってら良いって思う。

ボクは相澤さんと一緒に、もつともつといろんなものを見たい。

だけど、皆も一緒にやなくちや嫌だよ。お茶子ちゃんや轟君にも、この景色を見てほしい。

世界中の誰でも、来れるようにしたい。

ボクは何処にでも行きたい。何処までも行きたい。

みんなと一緒に、この宇宙の何処までも行きたい！」

一氣にまくしたてる彼女。

彼女の夢の形が相澤にも少しづつ見えてきた。

彼女のやろうとしていること。それは途方もない。だが妙に納得できた。

個性の登場により、人類は衰退を余儀なくされた。

外宇宙に出られるほどに発展していた化学は衰退し、人類は今だ地球で細々と暮らしている。

人類が本来進出したはずの宇宙に出られる手段。

それが衰退を招いた個性だとは、なんとという皮肉か。

彼女の力を使えば、人はきつと外宇宙まで行けるだろう。

地球だけに限らず、太陽系を超え、何処までも生息領域を広げられる。なんとという広大な夢だろう。

だが彼女には、それを実現できるだけの力が有る。

「お前は……そうか。そういう奴だからな」

「だから相澤さんも一緒に考えてほしいの！」

誰もが自由にこの景色を見られる世界に、どうやったら出来るのか。

どんな人も地球を超えて、何処までも行けるように！

ボク、そんなヒーローになりたい」

相澤は眩しくて目を細めた。

あの小さな白い部屋で、無表情だった青の少女。

かつての彼女の面影は、もう何処にもない。

相澤は彼女が語る夢、その行く先を見届けたいと思う。

ああ、彼女が望むならきつと人は何処までも行ける。何処へでも行ける。

きつと彼女が言う通り、今彼女と居る月面にだって、誰でも行ける世界に出来るだろう。

彼女の夢は途方もなく大きい。

その夢の大きさに潰されないよう。彼女を利用しようとする人の悪意から、守らなく

ては。

そう相澤は心の奥で誓った。

月から見える地球はとて大きく、そして青かった。

## 第56話

「うう、疲れたー」

雄英地下三千メートル。青の少女の管理施設。

いつもの部屋、いつもの寝室で青石は、ポフンと音を立てながらベッドにダイブする。既に時刻は夜の十時を回っている。

普段ならとつくに寝ている時間帯だ。

宇宙から相澤と一緒に戻った青石は、万雷の拍手と声援に迎えられた。

聞けば世界各地の観測装置や、天文台でスターレインの脅威の排除が確認されたらしい。

あつという間に青石はカメラとマイクに取り囲まれた後、記者会見に連れ出された。

当然それは、全世界中に放送されている。

世界の終わり、巷にはハルマゲドンとも呼ばれていたスターレイン。それらは急速な

治安の悪化を生み、  
ヴィラン敵も多く発生していた。

どうせ世界が終わるのなら、一発でかい事をしてやろう。そんな風に考え出しても、

何ら不思議ではない。

けれど世界は終わらない。

青石ヒカルの手により、世界はスターレインの危機を回避した。

事前に雄英体育祭で彼女の実力は、世に知れ渡っていた。

彼女がスターレインを迎撃したのは厳然たる事実だし、多くの人が信じている。

そして実際に人類を救った事で、彼女に対して掌を返す人が一斉に増えた。

世間での彼女の評価は一転して好意的になっている。

世界を救った英雄扱いだ。英雄かはともかく世界を救った事は事実だが。

だが、青石はまだあまり実感が沸いていない。

今はただ、自分がずっと抱いてきた使命を果たすことが出来た。

その達成感で、むしろ胸に穴が開いたような気分になっている。

ずっとスターレインを迎撃する事だけの為に生きてきた。

だからいざ終わってしまうと、どこか空虚になってしまう。

「入るぞ」

相澤が部屋に入ってきた。

青石はベッドの上で寝がえりをしながら、彼の顔をチラッと見た。

流石に顔に疲れが残っている。



あれから色々仕事があったみたいだし忙しかったのだろう。

何しろ隕石群の撃退を生で見た唯一の証人だ。

「相澤さん疲れてる？」

「……色々あったんだ」

相澤の手には何やら資料があった。分厚く重そうだ。

所々にマーカーが引かれていて、端々からは付箋が飛び出している。

「そっか、そうだよね。ごめんね、いつもボク相澤さんに迷惑かけてばかりだよね」

「何言ってるんだ。お前は世界を救ったんだぞ。」

「お前は誰にも出来ない事をやったんだ。胸を張れ」

「う、うん。だけどあんまり実感が湧いてこないんだ。」

「なんだかあつという間に終わっちゃって、拍子抜けというかなんていうか」

彼女はもぞもぞ体を動かしてベットの淵に腰かける。

相澤が目の前に来た。

「よくやったな、青石」

珍しく相澤が素直にほめてくれる。

「えへへ」

頭を撫でられる感触が心地よく目を閉じた。

だが

「コレ目を通しておけ」

「ぎゃっ!?!」

相澤が持っていた資料を、青石の膝の上にドサツと置いた。

「ちよつと相澤さん!?!」

「明日、学校でも触れる内容だ。チェックしておけ」

「これ何?」

「インターンの指名だ」

「インターン?」

何それと言わんばかりの青石の表情。相澤は呆れた顔をする。

「職場体験だ。……授業で説明しただろう。」

実際にプロヒーローの仕事現場に参加させてもらって経験を積む。

そういうカリキュラムの一環だ」

「指名……職場体験の……」

「全国のヒーロー事務所から来ている。まだ増え続けているぞ。」

今の時点で二万以上の指名が来ている」

「い、一万!? それってやっばり多いの?」

相澤は困ったような表情で髪をかき上げた。

「無茶苦茶な数だ。……はあ。」

お前が決めてしまえば、打ち切る事が出来る」

だからさっさと行く場所を決めて、楽にしてくれ。

そういう事だろうか。

ぺらと資料をめくる。

青石に指名を出したヒーロー事務所の情報、びっしりと記載されている。彼女にも理解しやすいようメーカーも引かれていた。

「これ相澤さんが……？」

「勘違いするな。俺だけじゃない。他の先生方も手分けしてやっている。」

お前が決めてくれないと、俺達の心の休まる暇がない」

「……うん、そっか。ありがとうね、相澤さん。」

ボクきつと立派なヒーローになって見せるから」

「お前はもう……」

「うん？」

相澤の言葉が聞こえずに聞き返す。

「いや、何でもない」

「そう？ それにしても……職場体験かあ」

「ちゃんと考えて決めるんだぞ。テキストに決めるなよ」

「それくらい分かつてるよ！」

「ならいい。……お前もヒーローになるんだろ。なら頑張らないとな」

「あつ……」

それだけ言うのと相澤は外に出ていってしまふ。

理由もなく伸ばした手は何にも触れずに、宙をさまようばかり。

扉の向こうを見つめる。

結局、今日も帰ってきた。地下三千メートルのいつもの部屋に。

閉じ込められているという感覚は無い。実際出ようと思えばいつでも出られる。

けれどももう、彼女にとってはここが自分の家だ。

だがいずれ、ここから出ていかないといけない日が来るのだろうか。

「でも。まだ先の話だよねきつと……」

……。

「やっぱり決まらないー！」

「青ちゃんそれ何？」

翌朝雄英の教室で頭を抱える青石。

「お茶子ちゃん！ どうしよう！ 全然、全く決められないよ！」

「えっ何？ 何が!？」

「えと、職場体験」

青石は麗日に事情を説明した。

昨日突然職場体験の指名が来ている事を告げられたこと。

そしてそれは資料としてまとめられて、今青石に渡されていること。

当然青石が持っているのは原本ではなくコピーだが。

麗日は青石に渡された資料に目を通す。

「凄い数やね……」

「ねっ？ こんなんじゃ全然決められないよ……」

「贅沢な悩みだな」

「あつ轟君、おはよう」

「ああ、おはよう」

轟は黙って資料を麗日から受け取って、中身を一瞥する。

するとある一点に目を細めてみている。

「何か気になるのが有った？」

「……親父から来てるんだな」

「お父さん？」

「これだ」

轟の指さした先にはエンデヴァー事務所の情報が有った。

「あ、そっか。うん、そう言えば来ていたね。炎えんドバーさん」

「なんか発音違くない？」

麗日の疑問に手を振る。

「気にしない気にしない！ ……そっか、轟君のお父さんか」

エンデヴァーが話に上がったとたん、轟の表情が曇るのが分かった。

やはり仲がギクシヤクしているのか。

血のつながった親子だというのに不仲なのは悲しいと青石は思う。

だが変に口出しすることも出来ない。これはあくまで本人たちの問題だからだ。

「そう言えば青ちゃん、どんなヒーローになるのか悩んでたよね。」

あれから決まった？」

「えっ、うん。決めたよ！ えとね……」

青石はスターレインを迎撃するために宇宙に行った時の話をした。

地球が青くて綺麗だったこと。

その地球は宇宙から見たら、ほんのちっぽけな星で、宇宙は無限に広がっていること。

そして誰もが自由に、その景色を見られるようにしたいと思ったこと。

人の為に誰かの為に。何処にでも行きたい、何処までも行きたい。

人という存在が、宇宙の何処までも行けるようにしたい。

話の途中で他の生徒も登校してきて、気づけばクラスメイト達全員が彼女の話の聞いていた。

ただだどしくも全部話し終えた時、八百万が称賛の声を上げた。

「とても素晴らしい夢だと思えますわ！」

「えと、そうかな？　ただボクがそうしたいと思ったただけなんだけど。

大したことなんかじゃ」

「いえ、大したことです。先生から聞いた話は確かに本当です。

人類は個性の出現が無かったら、とつくに外宇宙に進出していた。そう言われています。

ですが個性の出現による社会の混乱で、それは叶わなかった。

個性によって失われた進歩。それを個性によって取り戻す。

とても素晴らしいですわ！」

「そ、そうかな。えへへ」

「そうですとも！」

なにやら八百万はとても興奮していた。

クラスメイト達の顔を見渡しても、概ね皆納得したような顔をしている。

だが一人だけ違った様子の生徒がいた。

「緑谷君は反対なの？」

「えっ!？」

「うん、だって何か難しそうな顔してる。ボクがやりたいことって変かな？」

変じゃないよ、と緑谷はボソツと呟く。

だが彼が全面的に青石のやろうとしていることに賛同していない。それは分かる。

だから青石は知りたい。

彼は青石のやろうとしていることの、何がいけないと思うのか。

冷静で客観的な意見が彼女は欲しい。

「青石さんは敵ツイランをどうするつもりなの？」

「それは……これから考える」

「青石さんがやろうとしていることって、宇宙開発だよな。」

でも僕は、青石さんが普通のヒーローをして、敵ツイランを捕まえる方が良いって思う」

「敵ツイランと戦うヒーローになるべきだって。そう緑谷君は言うの？」

青石の疑問に緑谷は首を縦に振った。



だが飯田が緑谷に異論を唱える。

「緑谷君、人には向き不向きがあるだろう。」

俺も青石君の性格からいって、敵と戦うヒーローは向いていないと思う。

人が宇宙に出られるように、進歩に貢献する。

それも立派なヒーローだろう?」

緑谷は返事をしない。じつと青石の目を見てきている。

「……緑谷君の言う事も分かるよ。……でもボクは」

「戦いたくない、誰も傷つけたくない?」

「う、うん」

緑谷の機先を制する言い方にたじろぐ。

「青石さん。だけど、青石さんが戦わない。」

その選択をして助けられなかった人は、一体どうすればいいの?」

「助けないって……そんなこと言っていない!」

ただボクは……」

「でもそういうことでしょ。戦わないって。」

青石さんは敵とは戦わない。

だから何処かで敵に誰が襲われようと助けない。

知った事じゃない。そういうスタンスで行くってことだよね」

「誰もそこまで言っていないでしょ!？」

「おい緑谷! 流石に言いすぎだろ」

だが青石の頭も、緑谷の頭も熱くなっている。

危険な雰囲気だ。理性でどこかでブレーキをかけようとしている。

なのに止められない。

緑谷は青石の触れられたくないところに触れてしまった。

ここで引くことは絶対に出来ない。

「たった今だって、この世界のどこかで誰かが敵に襲われている。」

僕たちなんかじゃ助けられないような人達だって、簡単に助けられる!

青石さんにはやろうと思えば出来る!

やろうと思えば出来る癖にやらない! じゃあ見捨てているのと同じだろ!

「……! 違う……!」

「なのに何で……!」

「うるさい! 緑谷君には関係ないでしょ!」

「関係なくないよ! 敵を君は一人残らず駆逐できる! なのに!」

食い下がる緑谷。青石は怒気を強める。

「じゃあ敵ワイランって何!? 敵は個性ワイランを使う犯罪者?

なら緑谷君……。

ボクが世界から個性を全部没収したら、敵ワイランはいなくなる!」

「……」

「気づいちちゃったんだよ。最初はね、緑谷君が言ったようなヒーローになろうかなって思った。

でもきつと、その先には何も残らない。

ボクが力ずくで敵ワイランを排除しても、きつと何も変わらない。

力で支配しても、きつと人は幸せになんてなれない。

だからボクはボクのやり方で行く。

やりたい事は変わらない。

ボクは人の為に誰かの為になりたい。

何処にでも行きたい、皆と一緒に何処までも行きたい」

「青石さん、君の言うことも分かるけど……」

それでも緑谷は青石の選択に不満が有るようだ。

だが青石は曲げるつもりは無い。

一般的に人が想像するヒーローと、青石の目指すヒーローは違うだろう。

でも青石はそれで良いと思う。

「ボクは、正しさを押し付け暴力を振るいたくない。

ヒーローがやっていることは否定はしないよ。

だけどボクは、ボクのやり方で行く。

ボクがなりたいのは敵ツイランが出たらやつつけるヒーローじゃない。

皆と一緒に自由で幸せで、誰もが敵ツイランにならずに済む。そんなヒーローになりたいんだ」

相澤に以前言われたことが有る。

青石は敵ツイランも助けたい。

それはあらぬ誤解を生んでしまうから、絶対に口にしてはいけない。

だから青石は間接的に表現する。

青石が助けたいのは人間全員。国や人種に個性、言葉や宗教も関係ない。

全てを分け隔てなく助けたい。

当然そこには敵ツイランも含まれる。

悪事に加担するという事では無い。

敵ツイランにならずに済むように環境を変え、敵ツイランなってしまった人も足を洗い、幸せに暮らせるように協力したい。青石はそう考えている。

だがそんな考えが緑谷に伝わる訳もなく。

「青石さん……それはあくまで理想論だよ」

緑谷の呟き。熱くなった頭を、理性で覚ましながら青石は聞いた。

「これは何の騒ぎだ？」

相澤が教室にやってきた。どうやら、もう朝のホームルームの時間になったらしい。

「何でもありません」

青石はさつさと自分の席に戻り着席する。

緑谷を見ると、彼はまだ立ちすくんだままでいた。

さつきは緑谷の言葉に必要以上に熱くなってしまった。

だが彼に指摘されて、分かった事が有る。

自分の選ぶ道、やりたい事。

それ一つで救われる命の数が多くなったり、逆に少なくなったりする。

青石の決断で今後多くの人の運命が変化することは間違いない。

仮に青石が普通に敵を捕まえるヒーローツイランをしたとする。

だがそうになったら、国内の敵は狩りつくされるかもしれない。

そしたら他のヒーローは廃業するしかない。多くのヒーローが食い扶持を失って路

頭に迷うだろう。

相澤はよく考えて決めろと言った。

確かに青石の選択一つで、多くの人の運命が変わる。

だがやりたい事の方針は決まった。

後は具体的にどうやって実現していくかだ。

机の上に置いた資料を眺める。

それには相澤らの苦勞が詰まっている。相澤達先生たちの思いそのものだ。

無駄には出来ない。

とりあえず目前に迫っている職場体験。それに向けて頑張るしかない。

頭の中で想像しながら一つ気付いたことがある。

青石は確かに宇宙にまで行った。なんなら月面にも寄ったりした。

だがまだ街に出かけた事が無い。

友人らが話をしている買い物にも興味がある。

ヒーローの活動も殆どは市街地で行われていると聞く。

「よし」

窓の外を見上げた。

未来は既に拓けている。緑谷と衝突したように、これから色々なすれ違いもあるだろう。

だがそれでも、きっと大丈夫なはずだ。

両手拳に力を入れて、次にやる事に向けて気合を入れた。

……

……

……

緑谷出久はずっとモヤモヤしたまま午前中過ごした。

注意力散漫になり、授業中なんども注意されたが、中々集中できない。

そして昼休み。

緑谷を心配する飯田と麗日と共に学生食堂で過ごしていた。

「デク君、麵伸びるよ」

「うん」

頷きながらも、うどんは一口も食べられていない。

「聞いてないねこりゃ」

青石はこの場に居ない。

昨日スターレインを迎撃してからというもの、マスコミ関係の仕事が舞い込んでくるらしい。

主にインタビュアーなどだ。

雄英側が選定したテレビ局や記者の人達と、個別に対応しているという事だ。マスコミの競争率も凄まじい。

何とか青石ヒカルの情報を得ようと必死だ。今やテレビをつけると途端にスターレイン消滅のニュース。

それと青石ヒカルの話題だけだ。

世間の中には陰謀論を唱える人もいるらしいが、そんなのは少数派。

十年前の災害を引き起こしたのは彼女だが、それ以上に失われるであろう命を救った。

彼女を世間は賛否両論の前とは打って変わり、彼女を好意的に報道し始めた。

どんな理由が有れ、例えばスターレインを迎撃したとしても。

彼女が数千万人を死に至らしめたのは紛れもない事実なのだ。

だが今は、むしろ彼女を叩こうものなら、逆に袋叩きにされる。

空気とは実に恐ろしいものだと思ふ。

「一体どうしたんだ緑谷君、今日はなんだか変だぞ。

青石君に突つかかるなんて初めて見たな」

学級委員長として見過ごせないのは有るだろう。

まあ、それ以上に友人同士の言い争いだから気にかけているのはある。



「青石君の目指すヒーロー像の、何が悪いと言うんだ？」

人の為に誰かの為に、彼女なりに一生懸命考えて出した答えじゃないか。宇宙開発を進めるヒーロー。俺は彼女にピッタリなヒーローだと思うぞ」

飯田の言葉にも緑谷はうんと言わない。

「……青石さんを見てると、何だか嫌な予感がするんだ。」

いや、予感っていうより……確信……だと思っ」

「嫌な予感？ 青ちゃんの何が問題なの？」

「青石さんの言う事も確かに分かるよ。でも……」

人の為に誰かの為に。

彼女が繰り返し口にする言葉。それは本当なのだろうか。

彼女に関して一番大事な何かを見落としているような気がしてならない。

大体今の彼女はとても危険な存在だ。

それを周りの人達は皆、すっかり忘れてるように思える。

明日にも「やっぱり人類を滅ぼす」とか彼女が言い出さない可能性が無いなど、誰にも言えないのだ。

だからこそ、彼女は今まで閉じ込められていた。

非人道的だとは理解できる。だがそれ以上に非人道的な結果を彼女はもたらしたではないか。

共同墓地の慰霊碑が頭に蘇る。

失われた数千万の命は、何をしても帰ってくることは無い。

ある日突然命を奪われた彼らの無念は、如何ほどのものだっただろうか。

確かに彼女は世界を救った。

だが命は単純な足し算で計算など出来はしない。

いくら世界を救ったからと言って、彼女の罪がチャラになるなど有り得ない事なのだ。

ウイラン  
敵とは何か。

青石や法月が繰り返し問いかけてきた言葉。

緑谷は改めて考えざるを得なかった。

「緑谷君、言いたくないがこれだけは言わせてもらおう」

飯田が真剣な顔をする。

「彼女がヒーローとして自身の力をどう使うか。

それは彼女の自由だと思う。勿論、法律に従う範囲だが……。

緑谷君が青石君を敵を倒すヒーローになるべき。

そう考えても、決めるのは青石君だ。君じゃない」

「……っ！ だけど！」

「緑谷君が目指すような、ヴァイラン敵を倒すヒーロー。」

……青石君に向けてなさすぎる」

「それは、そうだけど」

それきり言葉は出てこなかった。

世界は彼女に引つ張られて、少しずつ変化していく。

その変化が緑谷には恐ろしく感じられた。

——ボクが力ずくでヴァイラン敵を排除しても、きつと何も変わらない。

力で支配しても、きつと人は幸せになんてなれない。

だからボクはボクのやり方で行く。

彼女はそう言った。

だが彼女の言葉を皆聞いていたのも、彼女の力が有るからではないか。

スターレインを迎撃出来たのも、雄英体育祭で優勝できたのも。

彼女に理想があつたからではない。

彼女に力があつたからだ。

力に頼らないような理想を口にしておきながら、結局彼女は力を根拠にしている。

彼女を見ていると不安になるのは、その歪みを彼女自身が気付いていない事に有るの  
かも知れない。

結局その一日、緑谷の不安が晴れることは無かった。

## 第57話

「やあ法月」

「ギルバートか」

法月は衛星通信を取る。

一般は使用されていない回線を使った、テレビ電話。

かけてきた相手は、アメリカの上院議員議長。ギルバート・デユランダル。遺伝子学者でもあり、遺伝子研究、遺伝子工学における第一人者だ。

“計画”を法月と共に進めていた人物。

青の少女の遺伝子を設計したのも、このギルバートだ。

「何の用だ」

「いや、何という程の事では無いのだがね。

明日、私用で日本に訪れる予定でね。

そちら雄英高校に寄らせてもらいたいと思っっているのだよ」

「……青の少女か？」

「無論、そちらにも興味はあるがね。

私が注目しているのは別の生徒さ。……緑谷出久」

ギルバートの言葉に眉がピクリと動いた。

「……良かろう。話をつけておこう。」

オールマイトに伝言させる。よろしいか」

「ああ、彼が居るのだったね。だったら話が早い。」

随分顔を会わせていないし、彼には世話になったからね。

出来れば都合をつけてもらえると、非常に有難い」

「……手配しておこう」

「ありがとう。そう、法月。」

彼女の事は確かに計算外だったが、「計画」は進める。その予定は変更しない」

「もはや青の少女が、ここまでの存在になった以上不要だ」

「いやいや、法月それは買い被りだろう。」

彼女に力が有ると言っても、心は人間だ。

彼女が理想のまま突き進んだとしても、人は決してその愚かさを捨てることは出来な

いさ。

彼女の理想を支える為にも、計画は必要不可欠。そう私は考えている」

「デステイニープラン……正気か、あれを実行に移すと」

「もちろん、事前準備は必要だろう。実際に実行できるのは果たして何年先か。

だが彼女という存在で、大幅に計画を前倒し出来る。

争いから解放される未来へ、ようやく人類は進み始められるんだ」

数分後、法月は電話を切る。

青の少女は未来に向けて走り始めた。

だが、安々と夢を叶えられるほど、世界は優しく出来ていない。

青石の知らない所で、あらゆる人間が彼女を利用しようと動き出している。

法月とて、その人間達の一人だ。

彼の胸の高等尋問の証が、鈍く光を反射していた。

……

……

……

「街に行きたい！」

帰りのホームルームが終了するや否や、大きな声が響いた。

声のした方向を緑谷は見る。

青の少女が相澤先生の服の裾を掴みながら、街に一緒に行きたいとお願いしている。

上目遣いでねだり、梃子でも動かぬ格好だ。まるでデートの誘いみたいに見えた。

「相澤さん！」

「……そうか」

相澤は複雑な表情をしていた。

クラスメイト達もすっかり呆れた様子だ。

青石は駄々っ子のように服を引っ張る。

「いきーたーいーのー！」

「……好きにすればいいだろ。お前は自由だ」

「相澤さんは？」

「俺は仕事がある。一緒には行けない。一人で行くなり、友達と一緒に行くなり好きにしろ。」

轟や麗日も居るだろう」

「やだ！ 相澤さんと一緒じゃなくちややだ！」

「……どうしてもか？」

「どうしても！」

相澤抜きの外出を、断固青石は拒否する。

1—Aの生徒がほほえましく青石を見ている。



青石は特殊すぎる環境で育ってきた。

スターレインを迎撃するために彼女は宇宙に行った。

宇宙からの帰りに月に寄ったりしたらしい。

だが未だに街に出かけた事すら無い。

青石が街に興味を持って、行きたいと言いつ出すのは当然の話。

そして彼女にとって未知の世界。

知っている人に案内してもらいたいと思う気持ちは分からなくはない。

(だけど……)

——ええ、今考えなしに出たらどうなるか。

分からないわけ無いのだけど

緑谷のアズライトの声が聞こえた。彼女もまた青石が街に行くのを心配しているらしい。

今や青石ヒカルは世界でトップクラスの有名人。

何も用意もなく街に出させたら、何が起こるなど目に見えている。

きつと見物に来る人達で、手一杯になってしまおうだろう。

とても街を散策するどころではない。

そう考えると、監視役として誰かが付いていった方が良い。

きっと生徒では身に余る。

何かあった時対処できるプロヒーローが望ましいだろう。

そう考えたら、青石に一番好かれている相澤と一緒に行くのは理にかなっている。

どうやら相澤も同じ結論に達したらしい。

「はあ……分かった俺も行く」

「やったー！ えへへー」

無邪気にはしゃぐ青の少女。

ねだったのは本当に些細な願い事。

彼女にとっては街に出かける。きっとそれすらも一大イベントなのだ。

……。

ホームルームからしばらくして、緑谷は校門の外に居た。

青石は校門に居る。彼女も一步踏み出せば、雄英の外だ。

青石は既にスターレインを迎撃する際に、一度地球の外に出ている。

何をいまさら躊躇する事が有るだろうか。

緑谷はそう思うが青石は中々動き出さない。先ほどから足を外に出そうとして、引つ

込めてを繰り返している。

「どうしたんだらう青石さん」

「……今までの事情を考えたら無理もない」

緑谷の隣のオールマイトも口を開いた。

今オールマイトは痩せた姿。

そういうえば青石とオールマイトは和解したと聞いている。

だったら昔の傷を治して貰うくらい出来る筈。

なのに何故彼は、青石に傷を治して貰わないのだろう。

青石に目をやる。

まだ彼女は二の足を踏んでいる。

今まで散々出たはいけないと言いつ聞かされていた。

それがこうも急に変わると戸惑いもするか。

校門の周辺にマスコミらの人影はない。

校長らに連絡を取って、人払いしてもらっている。

姿は見えないが、何処かでマスコミの進撃を必死に食い止めているヒーロー達が居る

筈だ。

これは些細かも知れないが、青石にとって重要な意味のある一歩。

確かに緑谷も、それを衆目の目にむやみに晒したくは無い。

「ほら、青ちゃん」

ゲートの外で麗日お茶子が手招きしている。

青石はなかなか動かない。

青石の隣の相澤は焦れたのか、先に校門の外に出ようとする。

「待って！」

だが青石は相澤の腕をガシツと掴む。

「相澤さん……ボクやっぱり……」

だが足が校門内の地面にへばりついたように動いていない。

やはり躊躇いが有るのだろうか。

彼女の表情からは様々な感情が見えた。

「……来いよ」

「あつ……」

相澤が手を掴んで校門の外へと軽く引く。

手を引かれた彼女は抵抗せずに、外へとすりと体を投げ出した。

タンと乾いた音がする。

彼女の靴が雄英の敷地外へと踏み出されていた。

「ようこそ、青ちゃん。外の世界へ」

麗日のニカツとした笑いと対称的に、緑谷の表情は沈んでいた。

……。

「ねえ、相澤さん相澤さん！ これ何?！」

緑谷の視線の少し先に青石と手を引かれた相澤の姿がある。

麗日は青石のすぐ傍について、緑谷とオールマイトは、後ろからそれを見守っている。

周囲にチラツツと目をやる。

事前にヒーロー達により準備されていたのだろう。

青石めがけて群がってくる民衆は一人たりとも居ない。

遠巻きに青石を眺めているが、近寄っては来ない。

それを青石は不自然にも思っていないらしい。

初めて街に出たのだ。

実際にどのようなものなのか、知らなければ違和感が湧きようも無い。

彼女は目の前の初めて見る色々なものに夢中になっている。

「本当に、こんな日が来るとは夢にも思っていなかったよ」

オールマイトがしみじみと言った感じに口を開いた。

「八木さんは諦めていたんですか?」

「……ああ、正直な気持ちと言うとね」

緑谷の視線もオールマイトは受け入れている。

痩せた姿は前に見た時よりも、更に小さく見えた。

彼が緑谷に頼んだ願いは叶った。

青の少女は世界を救済し、その上で外に出られるようになった。

結論として最高の結果を得ることが出来ただろう。

客観的な視点で評価してだ。

けれど、緑谷は過去のオールマイトの所業を許していない。

必要な事だったのかも知れない。

それはこの現在にたどり着くために必要な、パズルのピースになってたのだろう。

だからといって許すことは緑谷には出来ない。

USJでの事件が解決した後、青石ヒカルに問うたことが有る。

過去のオールマイトがした事、それを許すのかと。

彼女は悲しそうに「もう過ぎた事だから」ほほ笑みながらそう言った。

「僕は……」

「ん、なんだい？」

「いえ、なんでもありません」

だからと言って、緑谷は文句が言える立場だろうか。

結局の所、緑谷は青石が閉じ込められている事実を心のどこかで「仕方がない」と受け入れていた。

彼女が今この結果を迎えられたのは、偶然に過ぎない。

——ボクは、正しさを押し付ける暴力を振るいたくない。

皆と一緒に自由で幸せで、誰もが敵ツライにならずに済む。そんなヒーローになりたいんだ

彼女が言った言葉も、冷静になった頭で考えたら分かる。

青石はずっと“正しさ”を押し付けられて苦しんでいた。

多数の為に、犠牲になる事を強いられていた。

青石自身が切り捨てられる少数の立場だった。

だからこそ、彼女はあんな綺麗ツイランごとを言うのだろう。

緑谷が言った敵ツイランを倒すヒーローを、青石が拒絶したのは当たり前だ。

それは青石がされて嫌だったことを、進んでしろ。そう言っているのと同じことだったからだ。

彼女が表現した“正しさを押し付ける暴力”という言葉。

まさにその言葉を体現した存在が、緑谷の隣に今いる。

オールマイトは多くの敵ツイランを打ち倒し、平和の象徴となった。

彼の生きざまを、緑谷や世間は称賛した。

おそらく青石ヒカルが敵と呼ぶ正体。

それが薄々分かった気がした。

——ボクが世界から個性を全部没収したら、敵はいなくなる？

彼女はこう言いたいのかも知れない。

敵がやられているのを、緑谷達が喜んでいるとき。

その時、緑谷達も敵になっっているのだと。

彼女はそう言いたいのかも知れない。

雄英体育祭で彼女が言っていた事も、それなら納得がいく。

彼女の理屈がようやく分かった気がする。

「青石君はね、優しすぎるんだ」

オールマイトがポツリと呟く。

「人の為に誰かの為に。それは私も緑谷君も、ヒーローになりたい人はみんな一緒さ。

だけど普通、その助けたい“人”に敵は含まれてない。

当たり前の話だけだね。けれど彼女は違う」

オールマイトの言葉に、何処かで聞いたシアンの記憶が蘇った。

——人が敵という定義をされた瞬間、その人は「人間」では無くなります。



社会は一度 ヴァイラン 敵になった人を人間扱いしません。

ヴァイラン 敵とは「悪」だからです。

ヒーローが救う対象は、民間人。そして敵は救う対象に入っていない。

当然だ。 ヴァイラン 敵は倒すべき敵だから。

「彼女はきつと敵も助けたいんだらうね」

オールマイトが遠い目をしている。

彼は多くの敵 ヴァイラン を倒した。そして倒した敵 ヴァイラン 以上の人を救った。

だが敵 ヴァイラン を救う事は出来なかった。

そして助けたかった青石ヒカルは、災害を起こした張本人。

被害者でもあり、同時に ヴァイラン 敵 ヴァイラン だった。だから助けられなかった。

ヴァイラン 敵の青石ヒカルを、ヒーローは助けられなかった。

ヴァイラン 敵とは何か。

真剣に緑谷は考えてこなかった。

ほとんどの人間がそうだろう。

そして考える意味も無いとそう思っている筈だ。

考えたところで答えが出るはずも無いし、 ヴァイラン 敵 ヴァイラン が居なくなるわけではない。

けれど青石は問いかけてくる。 ヴァイラン 敵とは何か。

少し前の緑谷はこう考えていた。敵とは、個性を悪用した犯罪者の事だと。今は少し違う。

敵とは何か。色々な人達から色々な意見を貰った。

しかし緑谷の中に確固とした答えは出ていない。

だが敵とは、個性を悪用した犯罪者。そんなちやちな存在では無いと、今は考えている。

青石ヒカルは言った。

この世界から個性が無くなれば、敵は居なくなるのかと。

今の緑谷の考えでは、そんなことでは敵は居なくなるらない。

敵とは何か。それは、個性が無くなれば解決するほど簡単な問いでは無い。

「緑谷君、実はとあるアメリカの偉い人が、君に会いたがっていてね。

明日の放課後大丈夫かい？」

「えっ？ アメリカの偉い人？ 誰なんです。

僕なんかに会ってっていったい何を……？」

「それが内緒にしている欲しいそうだね。

お忍びで日本に来ているんだ。だからまあそれは実際に会うまでのお楽しみって事

「えい」

「オールマイトの知り合いですか?」

「アメリカに居た時に少しね」

「……」

「構わないかい?」

「ええ、良いですよ」

「緑谷くん! 早く早く! 八木さんも!」

遠くに見える青石が緑谷に手を振っている。

オールマイトも苦笑いしながら、青石の方に歩み寄っていった。

——呑気なモノね……。あの私は……。

緑谷のアズライトは複雑な心境だろう。横に現れた彼女の顔は苦虫を噛み潰したようだった。

例え世界に生贄にされかけても、彼女はあくまで人の為に誰かの為になりたいと言  
う。

その“人”が青石を殺そうとしていたというのに。

緑谷は己の立場だったらどうだろうかと考える。

緑谷に果たして真似ができるだろうか。

視線の先では青石がオールマイトに笑顔を見せている。

全ての過去を踏まえ、あらゆる汚れを彼女は飲み干して。その上で笑顔を浮かべる。内心、どれだけの恨みが溜まっているだろうか。

どれほどの憎しみが募っているのだろうか。

けれどそれを青石ヒカルは表に出さない。

あくまで彼女は笑顔。

どれだけの困難が待ち受けても、彼女はその先で笑顔を浮かべている。

笑顔の大切さはオールマイトにも、何度か言われたことが有る。

人々を助ける存在のヒーローは、笑っていなければならぬ。

だが緑谷は、彼女が浮かべる笑顔を見るたびに不安になる。

彼女が無理をして笑っていると分かるから、嬉しさより先に、悲しい気持ちが先に来る。

それでも彼女は、相澤と手を取りながら、無邪気に笑っていた。

いつか彼女のやせ我慢が限界を迎えた時。

人類にとって最大の脅威になるかもしれない。

その時にはもしかしたら、戦わなければならぬかも知れない。

対抗できるのは自分くらいのも物だろう。そう緑谷は思う。

緑谷の不安が、消えることは無かった。

.....

.....

.....

「そうだ！」

「うわ!!? いきなり何青ちゃん?」

ポンと一つ青石は手を打った。

青石は今街に出かけていた。

隣に居るのは相澤と麗日。それと緑谷とオールマイトだ。

総勢五人で雄英から街に繰り出したのだ。

轟も誘ったのだが、断られてしまった。

地下の訓練施設で個性の訓練をしたとのことだった。

残念と言えば残念だが。街に行こうと思えばまた行ける。

「青石……」

相澤がぎろりと青石を睨んでくる。

その声と目に我に返った。

そう、青石は今麗日達に宇宙に連れて行ってあげようと思いついたのだ。

街を案内してくれて、青石はとても嬉しかった。

一人で勝手に行くことも確かにやろうと思えばできた。

だがやはり、友達と一緒に行く方が絶対に充実すると思つたし、正解だつたと思う。

「えとね、麗日ちゃん！ 今日ボクが話したこと覚えてる？」

「うんと……どれのことやろ」

「ほら宇宙から見た地球が綺麗だつて話！」

「うん、覚えてるよ」

頷いた麗日。青石は拳を突き上げて気合を入れる。

「それ今から見に行こう！」

「ええっ!? 今から!? 急すぎない？」

緑谷は反対しているが、青石は止まらない。

「大丈夫だつて緑谷君。」

それに宇宙から見た地球を見たら、緑谷君だつて分かってくれと思う。

ボクの夢のこと」

「えつと……」

歯切れ悪い緑谷だが、青石は放つておいて個性で準備を進める。

——とりあえず何処に行く？ 月とかかしら？

レギオンもノリノリだ。

「そうだね。とりあえず月に行こう！」

「そんな旅行みたいなノリで!？」

緑谷は悲鳴を上げる。青石の目が青く染まった。

次の瞬間青石達の姿はそこにはない。

遙か空の向こうの月面に向けて、出発していた。

……。

「うわあ……」

「……綺麗」

「ね!？」 とつても綺麗でしょ?」

青石は一行を、月面に連れてきていた。

月に居るのは青石含めて五人だけ。

他には相澤、緑谷、麗日そしてオールマイトだけだ。

一応、あまり遠くに行かないようお願いしている。

月面は空気がほとんど無い。気温も低いし、宇宙線もビュンビュン飛んでいる。

青石の個性で安全は保障しているが、あまり予想外な行動を起こされると困る。

本当に一瞬で死んでしまうだろう。

「これは凄いな」

オールマイトも感嘆の声を上げる。

皆の視線の先に有るのは地球。

月から見た地球は、昨日相澤と見た時と同じ色をしている。

闇に浮かぶ水の星。

それを見ると青石は今までの悩みなど、なんて小さいものだったのだろうかと思う。

「ボクねこの景色をもっともっと多くの人に見てもらいたい。

ここだけじゃなくて、もっともっと一杯。

宇宙って無限に広がってるの。あの狭い星に閉じ込められたままなんて勿体ないよ

！

ボクは皆と一緒に何処にでも行きたい。何処までも行きたい。

この宇宙の何処までも皆を連れていきたいの」

「青ちゃん……」

「もつともつと見た事ない景色が有る筈だから。

だからボクは見た事ない物をもつと見たい。

皆と一緒に見たいんだ。こんな綺麗な景色を」

「……」

「緑谷君。ボクは人が誰もがこの景色を見られるようにしたい。



どんな人でも。誰でも、何処にでも行けるようにしたい。

この風景を見ても、まだ駄目……？」

先ほどから黙りこくっている緑谷に尋ねてみる。

彼の目からは迷いが見える気がした。

彼が振り向く。

正直緑谷が青石に何を言いたいのか、彼女はあまり分からなかった。

どうしてそうまでして、緑谷は敵を倒すことを優先するべきだと、そう言うのだろうか。

確かに青石のいう事は綺麗ごとで、理想論かも知れない。

けれど人の為に誰かの為に。何処までも行きたい、何処までも行きたい。

それは有るがままの、自分のしたい事だと確信している。

だから青石は曲げるつもりは無い。

緑谷が反対しても青石は、なりたい自分の姿を変えるつもりは毛頭ない。

「……好きにすればいいだろ」

素っ気なく緑谷は漏らした。

「うん、じゃあ好きにするね！」

緑谷の目に一瞬怒気が宿った。青石は何故なのか分からずビクツとする。

だがそれも彼が瞬きした頃には消えていた。

(気のせい……だったのかな?)

多分自意識過剰だったのだ。そう自分に言い聞かせる。

「見つけたんだね。君がやりたい事。君がなりたいものを」

「オールマイトさん……。うん、決まりました。」

ボクはこの月にだって誰もが来れるようにしたい。

ううん、月だけじゃない。火星にだって、木星にだって。

この宇宙の何処にでも、行けるようにしたい。

皆がこういう景色を見られるようにしたいんです」

「……君らしい答えだと思うよ」

「じゃあ!」

思わず声のトーンが高くなった。

「ああ、思うようにやってみるといいさ」

「やった! ねえ聞いた相澤さん!」

オールマイトの言葉に胸が弾む。

嬉しくて相澤に抱き着いてしまう。

「青石……」

相澤の視線に少しばつが悪くなる。

つい嬉しくなると青石は相澤に抱き着いてしまう。そういう癖が有る。それは直さなくてはいけない言われなくても分かっている。

「わ、分かったよ相澤さん」

渋々相澤から手を放した。

相澤は首の後ろを搔いている。

青石は空に手を伸ばした。

地球とは違う真つ暗な空に、青い地球が浮いている。

今日、この綺麗な景色を麗日や緑谷にも見せることが出来た。

明日轟にも見せてあげたいなと青石は思う。

広い宇宙にひっそりと佇む小さな星。

あそこに世界中の人々が、ぎゅうぎゅうになつて敷き詰められている。

世界はもつと広いのに。

地球に拘らなくても、無限に広がっているのに。

行く手段が無いがため、離れられない。何処にも行けない。

それはとても悲しいことだと思う。

青石は自分の決めたことを再確認する。

「ボクは何処にでも行きたい、何処までも行きたい！」

人の為に、誰かの為に。

世界の何処にでも、行きたい。どんな人でも、居られるように人が広く、生きて行く為に」

誓いのように口から流れる。彼女の言葉を遮るものは何も無い。

月の上から地上を眺める。

きつとこの眺めも、青石だけの特権ではなくなる。

そんな日が来る。

少し寂しい気がするが、それでいい。青石は自らに言い聞かせる。

きつと本当の幸せは、独占する事では得られない。

みんなと分かち合う事で得られるのだと、彼女は信じている。

それを教えてくれたのは、相澤に縁谷もそうだ。

先生として、友達として傍に居てくれる。

それは個性などより遥かに勝る幸せなのだと思う。

「相澤さん」

「何だ」

「ボクずっと側に居るから。ずっと側に居るからね！」

彼女の誓いの言葉を、相澤は静かに受け止めてくれている。

今日も月面は地平の果てまで荒廃していて。

頭上の地球は青く輝いている。

世界はまた、ほんの少しだけ変化していた。

## 第58話

「ねえ、相澤さん。ちょっとね、相談したいんだ」

「相談？ ……今朝の事か？ 緑谷と何かあったみたいだが」

「やっぱり分かっちゃうんだ」

青石は相澤に切り出した。

先ほどまで一緒にいた友達と一緒に居ない。

ついさつき地球上に送り届けたばかりだ。

みんな初めて出る宇宙に喜んで興奮していた。まだ見せて上げられていない轟や八百万にも、早く見せてあげたい。そう青石は思った。

月面に腰を下ろす。青石の隣に相澤も座る。

月の上には今青石と相澤の二人だけ。

闇に浮かぶ地球を何とも無しに眺める。

「朝ね、緑谷君と言い争いになっちゃって……あつそうだ」

青石は自分のおでこを相澤のおでこに、こつんと触れさせる。

「クオリア<sup>Quaria</sup>」

朝起きた事の記憶をイメージにして、相澤の中に送り込んだ。

直接説明するよりか、その方が早く正確に伝わる。

青石の記憶を確認し終わったのだろう。

相澤は一つため息をついた。

「緑谷の言う事も……分からなくてはなない」

「えっ……？ なっ何が!? ボク何が悪かったの!？」

相澤の言葉に少しショックを受けた。心のどこかで彼は全面的に味方になってくれると、思っていた。

クラスメイト達も青石の味方をしてくれた。

青石の何が問題だったというのだろうか。

「落ち着け、お前は悪くない。……地球<sup>あれ</sup>を<sup>れ</sup>見てみる」

相澤が指さした地球を見る。

「あの中に何十億人も人間が居る。」

今もヒーロー<sup>サイラン</sup>が敵を倒し倒されて、色々な事が起きているんだ。

それは分かるな？」

相澤の言葉に頷いた。

「そうだ、お前もそれも分かっている。」

人の為に誰かの為に。そう思っているなら……。

なぜ、たった今苦しんでいる誰かを助けに行かない？

手を伸ばせば助けられる人間が、どこかに居ると分かっているくせに。

そう緑谷は言っているんだろ」

「な、なんでそんな事言うの!? 相澤さん!? ボクは……ボクは!」

相澤の言葉に胸が抉られるような気持になった。

ずっと目を逸らしていた事実を突きつけられた気がした。

「緑谷はそう思っているって話だ。だから落ち着け」

相澤が青石の頭に手を置いた。ポンポンと優しく叩く。

彼の顔を見ると、口の端が軽く緩んでいる。

「それは緑谷の理屈だ。

緑谷が敵を倒すヒーローに拘る理由は分からん。

まあ切羽詰まった人を先に助けるべきだと、考えているかもしれないが。

結局、人の考えなんて分からん。

俺は今すぐ全ての敵を倒してこい、なんて言うつもりは無い。

それはお前の力だ。どう使うかはお前の自由だ。

お前だけの力だろう」



「うん。でも……」

相澤に言われて青石は気付いた。

緑谷の言い分にも一理有るだろう。

もし緑谷が青石と同じことが出来るのなら、今すぐ世界中の敵を駆逐しているのだからか。

「青石、緑谷の理屈も確かに分かる。けどな、そんな事全部気にしていたらキリが無くなるぞ」

「キリがない？ ……ボクがその気になれば」

「敵なんて何時でも何処かで発生している。」

24時間毎日。ずっと絶え間なくな。

お前がその気になったら、地球に居る敵は駆逐できる。

やろうと思ったら出来るだろう。

だがお前はどうか？」

「ボクが？」

「緑谷の理屈通りにお前が動いたら、お前が休まる暇がない。」

それこそ寝る時間も、こうして話している時間すらなくなるぞ。

お前が寝ている間も、食べている間も、敵は発生し続けているんだからな」

「……でも」

相澤の言う事はなんとなく分かった。

確かに緑谷の言っている事を突き詰めたらそうなるかも知れない。

例えば、こうやって相澤と一緒に話をしてしている時間。

轟や麗日達と遊んでいる時間。八百万に勉強を教わったり、シアンに甘えている時

間。

青石がそうしている間にも敵は発生している。そして誰かが苦しんでいる。

それらの被害者を見捨て、青石は自分の事を優先している。意地悪に表現すると  
とそうなる。

確かに青石は、助けようと思えば助けられる。地球の裏側の敵だろうと駆逐できる。

だからと言って、青石が全てを助けようとしたら。

人間として享受している楽しい時間すら無くなってしまふ。

24時間絶え間なく発生している、敵を駆逐し続けたとしても、敵が果たして居な

くなるだろうか。

そして少し疲れて休んでいる間にも、敵は発生する。

それら全部を青石が救わなければいけないのだろうか。

「緑谷が言っている事は分かるが、極論だ。」

お前は人の為に誰かの為に。そうなりたいんだろう。けれど、それ以前に一人の人間だ。

人間として当たり前前の幸せを求めて何がいけない？」

青石は迷っている。

相澤の言う事も分かる。だが緑谷に指摘されて気付いてしまった。

今まで目を逸らしていた己の醜さを指摘された気がした。

青石はずっと出来ることから逃げていた。

青石は力を使って無理やり支配したくない。それは自分が今までされて苦痛だったこと。

それを他の人に行うことになるから。

でもそうやって言い訳し続けて、雄英の外にも出ようと思えば出られくせして。

相澤が手を引いてくれなければ、一步外に出る事すら出来なかった。

スターレインを迎撃する際に相澤に付き添ってもらったのも、きつた不安だったからだ。

結局、青石は自分に出来る事に制限を設けている。

自分で自分に枷をかける事で、自分の中の最悪に陥らないようにしている。

青石は相澤に嫌われたくない。

他の誰に嫌われたとしても、相澤に嫌われるのだけは絶えられない。  
(そっか、緑谷君には分かってたんだね。)

ボクは結局、人の為に誰かの為に。それより前に、相澤さんを好きなのボク。  
それが一番大切だったんだ。……笑っちゃうなあ)

「ねえ、相澤さん」

相澤がこちらを向いた。青石は地球に向けて手を伸ばす。

「もしボクが世界から個性を全部没収したら、敵ライバルはいなくなる？」

「……居なくはないだろうな。」

個性が無くなったって、他に手段なんて幾らでもある」

「やっぱりそうだよね」

相澤の返答は予想通りではある。

「けど……」

「けど……」

言いよどむ相澤。青石は首を傾げる。

じつと青石は相澤を見た。

相澤は目を青石から逸らし、地球に向ける。

「今よりはマシな世界になるだろうな。きつと」

「そっか。……じゃあ決めたよ」

「決めた……？ いったい何を」

「ボクは緑谷君が言つてた通りだった。手を伸ばせば助けられる人が居るのに、何もしなかつた。

そんなんじや駄目だね。ボクは人の為に誰かの為になりたい。

だから……」

青の少女の顔が引き締まる。目を地球に向けて、両手を大きく広げる。

背中にアゲハチョウそっくりの羽が生える。

青石の目が青く光った。

「止めろ青石！ 何をするつもりだ!？」

ただならぬ気配を感じたのだろうか。相澤が“抹消”の個性を使う。

「相澤さん、ボクには今更、相澤さんの個性なんて通用しないよ。

それにここは月。

もしボクの個性が無かつたら一瞬で死んじやうよ?」

「つ……! 青石! お前はまさか……」

「ごめん、相澤さん。決めたから。この世界は皆、個性なんて有るから苦しんでる。

個性が無くなれば、全部解決するわけじゃない。そんなの分つてる。

だけど、ボクは世界がもっと優しくなって欲しい。より良くなって欲しい」  
青石は決めた。

これから自分がやる事は、最低だと非難されるだろう。それは分かっている。  
一体その先にどんな未来が待っているのか、分からない。

「この世界から個性は無くなる。みんな個性で苦しまずに済む。

“個性”なんてこの世界に有っちゃいけないんだ。

だから……」

青石は個性を使う。

青い地球をより強い“青”が包み込んだ。

青石はまるで包み込むように両手を動かす。

彼女に同化された世界。その中の個性だけをより分け、消滅させる準備を整える。

「この馬鹿野郎！」

パアンと乾いた音が響いた。

青石の思考が中断される。

自分の頬に感じる“痛み”に個性を使うどころでは無くなる。

「え……う！」

頬に手をやる。相澤の振り抜かれた手を見て、ようやく理解した。

相澤が青石をぶった。

今まで捕縛布で捕まった事は多々ある。

けれども、今受けた衝撃は今までのとは比較にならなかつた。

相澤の目を見る。彼は本気で怒っていた。

「相澤さん……う？」

「自分が何をしようとしているのか、お前本当に分かっているのか!？」

「相澤さん……だけどボクは！　ボクはどうすればいいの!？」

個性なんか有るから、皆苦しんでる！

ボクは人の為に誰かの為に……だからみんなの個性を……」

「それが本当にお前が望んだことか！」

相澤の言葉に歯ぎしりする。

「したく無いよこんな事！　だけど仕方ないじゃない！」

みんなが個性を悪用する。それを止めてくれないんだから！」

「馬鹿野郎！」

もう一度叩かれる。個性で躲すなり拒否するなり出来た。なのにしなかつた。

「ボクには力が有る！　皆を幸せに出来る力が！」

「お前が欲しかったのは本当にそんな力か!？」

自分で自分の心が分からなくなる。

頬に再び感じる痛み支配される。

相澤に叩かれた衝撃で全てがどうでもよくなる。

「人の為に誰かの為に。お前の夢は立派だよ。」

けど、それより前にお前は、お前の為に。自分の為に生きて良いんだ」

「自分の為に……？」

「みんな同じだ。みんな自分が一番大切なんだ。」

お前だって同じだ。なのにお前は、一番自分が大切なくせに、人の為に生きようとしてる。

だけどそんなやせ我慢が、いつまでも続くはずないだろう。

お前も自分の為に生きて良いんだ」

「相澤さん……。だけどボクは……。世界を救うために、作られて……。」

だから人並みの幸せなんて」

「人の為に誰かの為に。」

その夢は、間違つてなんかいない。けどお前は、もつと自分を大事にするべきだ。

オールマイトも言つてた。お前はもう、自分を許してやれよ」

「……相澤さん……」



確かにオールマイトはそう言っていた。

だが、本当に自分を許していいのか青石には分からない。

どんな理由が有っても、人が死んだ事実が揺るぐことは無い。

一生かけて罪を償っていくつもりだ。なのに、自分を許して本当に良いのか。

青石は自分がどんどん傲慢になっていくようで怖い。

自らの変化を怖くて中々受け入れられない。

「でも……なら……相澤さんはボクを……許してくれますか？」

「……それは」

「数千万の人を殺してしまった、ボクを……。世界を危機に陥れたボクを……。

決して許されてはいけないボクを！

あなたの大事な人もボクは……殺してしまっただんしょ!? 相澤さん！」

「青石……」

「それでも!? ボクを……」

長い沈黙。相澤と目を合わす。

互いに逸らさない、逸らせない。

地球が二人を見ている。相澤が叩いた頬に手をやる。

相澤の手は温かい。

彼の手をそつと手に取った。

「ああ、許すよ」

「うあああ……あああああ！」

慟哭が響く。青石は相澤の胸で泣く。

「泣いてばかりだなお前」

相澤の軽口も流す。ただ青石は感情のままに泣き続ける。

青石は感情のまま、世界から個性を消滅させようとして、それを相澤に止められた。

こうしている間も、世界では敵が出現し、誰かが犠牲になっている。

それを仕方がないと、青石は許容は出来ない。

だが今だけは許して欲しい。青石はそう願う。

せめて今は一人の男性に思いを寄せる、ただの少女で居させてほしい。

先ほどまで地球を包んでいた“青”はいつの間にか消えていた。

……

……

……

「寝たか」

ベッドの上でスヤスヤ眠る青石を見る。

雄英の地下。青の少女の管理施設。いつもの彼女が寝泊まりし、過ごす部屋だ。相澤は息を吐いた。

月で青石はしばらく泣き続けた。

雄英に帰ってきたのはつい先ほど。

彼女はもう何処にでも行ける。なのに結局は地下三千メートルのこの部屋に戻ってくる。

「ここが彼女にとつての家なのだろう。」

「はあ……先が思いやられるな」

彼女はいつまでここに住み続けるつもりなのか。

青石は既に自由だ。

相澤は彼女が別の場所に住むことを望んでいる。

だが青石は踏ん切りがつかない様子だ。

そして職場体験もまだ行き先が決まっていないという。

まあ青石の事だし、何処に行こうが何かしらの問題を起こすことは目に見えている。

それは分かっているのだが。

「……これに必要な経験か」

街に連れ出しだ一定の成果は有る。

青石は街に対して一層興味を持ったみたいだ。

今まで触れてこなかった市井にどンドン接触していくだろう。

世界中に溢れている敵も、実際に目にするはずだ。

まあ彼女も、USJでの敵の襲撃で一応は目にした。

けれどもその経験では足りない。

彼女が先に進むためには、実際の現場で敵とは何か。

それを知る必要が有るだろう。

多くの敵は大抵、仕様もない悪人だらけなのだから。

彼女は人の為に誰かの為になりたい。

そして誰もが幸せになれる社会にしたいと考えている。

けれども本当に救いようもない悪人を目にした時、彼女は思うのだろうか。

救いようもない悪人も、きっと彼女は救いたいと願うだろう。

だが力さえあれば救える、そんな都合よく世界は出来ていない。

どれほどの力が有ったとしても、それだけではヒーローにはなれない。

人を救うとは、そんな簡単な話ではない。

「ううん……相澤さん……？」

「悪い、起こしたか？」

眠りが浅かったのか、途中で青石は起きた。

ベッドの上で彼女は体を起こす。

トロンとした目で相澤を見てきて

「えい」

両手で相澤を掴むや否やベッドに引きずり込んできた。

「えへへー相澤さんの匂いがいっぱいだあー。くんかくんか」

「おい、放せー」

青石は相澤の全身を嗅ぎながら抱き着いてくる。

相澤の講義も意に介さない。

「嫌だー絶対に離さないー。くんかくんか、くつつか」

「こいつー」

「一人にしないで」

急に冷たく冷静な声で青石は呟いた。

「青石……」

「お願い」

真剣な彼女の声は震えていた。

「……分かったよ」

「えへへ」

大人しく抵抗を止める相澤。ベッドの中で青石は抱き着いてくる。

相澤は抱き枕ではないのだが。

「相澤さん、ボクね幸せだよ」

「そうか」

「うん、幸せ。ずっとこうしていたいなあ……」

「青石。お前は」

相澤が返事をする頃には、既に彼女は再び寝ていた。

彼女の柔らかな髪と頬を撫でる。

まだ少し赤く頬は腫れていた。

「すまん、仕方がなかったんだ」

あの時の青石は尋常では無かった。

本気で地球上から個性を失くすつもりだっただろう。

その場の判断で止めるため、思わず手を出してしまった。

世界から個性を消失させる。とてもビンタ一つで済むような小さなことではない。

けれど彼女なりに世界を考えた結果、しようとしたことだとも理解している。

「個性のない世界……最終的にそうなるは、ありだろう。だがお前は急ぎすぎなんだよ」

相澤としては、この世界から個性が無くなるのは良いと思う。だが彼女のやろうとしたことは余りに急すぎる。

既にこの世界は“個性”が有る事を前提に成り立っている。

いきなり人類の全てを無個性にしても、また社会が混乱するだけだ。善意でやろうとしたのは分かる。

だが、やり方が良くない。だから相澤は全力で青石を止めたのだ。

青石もそれは理解してくれた。

もし世界から個性を失くすにしても、人々の理解を得て、ゆっくり進めなければいけない。

青石の勝手な判断で個性を取り上げても、ただの独り善がりだ。

それでは何も解決しない。

「どうなるんだろうな。この世界は」

彼女の気まぐれ一つ。それで世界は大きく変わる。

今後彼女が、悪意ある人間に利用されないとはい限らない。

否、絶対に利用しようとする人間は出てくるだろう。

その時、一人でも彼女を守る存在が必要だ。

「……全く」

本来なら、今日彼女がやろうとしたことを報告する義務がある。

だが相澤は、胸の内に秘めようと決めた。

青石が世界から個性をもし取り上げたら。どんな世界になつていたのだろうか。相澤もだんだんと眠気に引きずられていく。

そのまま夢の世界に落ちていった。



## 第59話

「ほら皆ー！ 早く早くー！」

「つたく元気なもんだな」

隣で元気よく青石ヒカルが手を振っている。

I—Aのクラスメイト達が彼女の元を集まる。

彼女の有り余る元気に皆苦笑いだ。

青石は雄英の校舎の屋上に、ブルーシートを広げていた。

そこに相澤は胡坐で腰を下ろし、青石はいわゆる女の子座りしている。

色々なお菓子や飲み物をずらりと並べ、まるで遠足みたいだ。

今日は午後この買い出しに相澤も付き合わされた。

「どうとう今日ですね。長かったような短かったような」

一段と気合を入れた格好の八百万が青石の隣に来る。

首には双眼鏡が下がっていて、背中にはリュックをしょっている。

これから登山にでも向かうつもりなのか。

「うんー！ もうすぐで始まるよ、スターレインー！」

青石ヒカルの言葉が響いて、一段と皆のテンションが高くなった。そう、今日は早くもスターレインが来る日だ。

青石ヒカルの手により隕石群は粉々になり、地上には降り注がない。細かくなった破片は、大気圏で燃え尽きるからだ。

そしてその燃えカスは、地上から流れ星として見える。

この事を知った企業はスターレインを商業的チャンスととらえ、様々な施策を行ったりにしている。

政府はスターレインの害はなくなったとの広報に、忙しく過ごした。特に青石が忙しかった。

スターレインを迎撃し、粉々にした本人として、CMやテレビ番組の出演。プレゼント・マイクのラジオ番組にも出るなどした。

相澤もヒーローとしてその手のCMに引っ張り出されたりした。

青石に連れ添い、傍らで見守ったのは相澤だけだからだ。おかげで世間の認知度も急上昇。

青石との関係も当然、毎日世間で話題にされている。

青石が相澤に恋愛感情を持っているのは、もう誰の目にも明らかだからだ。中には青石を信じずに、終末論で本気になって暴れ出すものも居た。

だが当然そこはオールマイイトなどのヒーローの出番だ。  
特に問題もなく鎮圧されている。

青石が出るまでも無い。

「やあ、青石君、こんばんは。相澤君も」

「あ、お……じゃなかった八木さん。こんばんは」

「おう」

痩せこけたオールマイイトが姿を現した。

相澤も首を振ってあいさつに応じる。

青石の後ろの方に彼は陣取る。

「このところ忙しかったみたいだね」

「うん。あんまりテレビとか興味ないけど……」

なんかプロデューサーさんとか必死だったし断り辛かったんだ」

「大事な仕事さ。手抜きせずにした分偉いぞ」

「むう……でも何だかコレジャナイ感？ それがあつてね。

本当にコレで良いのかなあつて。だってつまんない」

「ちゃんとマスメディアに対応するのは大切な仕事さ。自分を皆に知ってもらおう。

そういう事だからね。知らない人の言葉より、知っている人の言葉の方が胸に響く。

青石君も、相澤君と他の人の言葉の重みは違うだろうか？」

「うん」

「皆が青石君の言葉を聞いてくれるようになるには、地道に努力を重ねるしかないんだ。例えそれがつまらない事でもね」

「うん。分かったよ」

青石は基本的に情に訴えられると弱い。

断られると会社を首になるかもとか、養っている家族がどうかとか。

テキトーに泣かれると、青石は直ぐに首を縦に振る。

世間に青石が徐々に認知されてきて、どうやら性格も皆分かかってきたらしい。

一言で表現するなら、チョロい。

騙されやすいので、将来詐欺に遭わないか心配だ。

「なんか有名になるって大変だね。お買物するだけで時間かかっちゃうし」

青石も何だかんだ進展が有った。

なんと普通に買い物が出るほどまでに成長した。

彼女は今超が付くほどの大金持ちだ。

もう一生遊んで暮らせる額が、彼女の口座にある。

どれほど凄い金額なのかは、彼女はまだ分からない。

今現在で3千億円ほど。だがまだまだ放っておけば増えるだろう。

そう言えば、そのお金の一部数億円ほど麗日にあげようとしたらしい。

当然断られたようだが。

「ホント、飯田君が顔を隠したコスチュームなものも納得できるよ」

「まあそういうコスチュームは、プライベートを守ったりするためにあつたりするからね。

機能的な都合は当然だけだね。

まあ顔出しした方が親近感も沸く。実際人気のヒーローは顔出ししてる方が多いし。

顔出しするかしないかは、個人の自由さ」

飯田が青石の言葉に応える。

確かに彼は全身を覆うコスチュームだ。見た目より機能を重視するなら、全身を走行で覆う方が良い。

彼らしい良いコスチュームだと相澤は思う。

「そっかー」

青石は納得した風で、どこまで理解しているのだろうか。

頷いている青石の側に影が差す。

相澤が見上げると。

「やつほ青ちゃん」

「お茶子ちゃん、やつほ」

次に麗日がやってくる。彼女達が和気あいあいと会話している。

青石を何となしに見る。

彼女は余りにも小さい。

一応年は16だ。緑谷達1—Aと同じ年だというのに小学生程の体格しかない。

こんな体に世界を滅ぼせるほどの力が有るのだ。

今更ながらとても信じられない。

マスコミでも度々その事は取り上げられる。

まあその小ささは、概ね好意的に捉えられている。

身長も低いし胸も平坦で、ミニマム。

態度もかなり子供っぽい。

彼女が余りに小さいせいで、相澤にロリコン疑惑が浮上しているが

(俺にそんな趣味は無えよ)

生憎と相澤には彼女に恋愛感情はない。

側に居ると彼女が願う限り、側には居るつもりだ。だが彼女がこの先どんな成長をす

るのか。

それは誰にも分からない。

「あっ！ 始まったよ！ スターレイン！」

辺りから声上がる。

クラスメイトのテンションが最高潮になった。

「綺麗……」

星の雨が降っている。

月がない闇の奥から、光の筋が空を横切り消える。

一つや二つでは無い。

幾重にも幾重にもそれは重なる。

夜空をキャンパスにして、数多の星が思い思いに流れて消える。

「なるほど……スターレイン。これは青石さんの“個性”にピッタリですね」

「え？ なんで？」

「なるほど」

「えっ？ 相澤さん分かったの？」

青石は教えてと体を揺さぶってくる。

「流れ星に消えないうちに願い事を三度すると、願い事が叶う。そういう言い伝えがあるんだ」

「願いが……叶う……あつそつか」

「青石さんの個性は、夢を現実にする」。

言い換えれば、願いを叶える、個性じや有りませんか！

これは青石さんに相応しい天体ショーですわ！」

八百万の言葉で青石はどう噛み締めているのだろうか。

青石は空を見上げる。

「青石さんはまさに今、世界中の人達の願いを叶えているのですわね」

「皆の分の流れ星有るかなあ？」

「多すぎて余るぐらいだろう」

「えへへ。願いが叶う。そっかー。じゃあボクもお願ひしてみようかな」

青石は両手を組んで空を見る。

彼女の目に流れ星が映っているのが見えた。

彼女は一体何を願っているのだろうか。

「まあ青ちゃんのことだからね。何を願ってるなんて分かり切ってるけど」

「お前達には分かるのか？」

麗日が怪訝な顔つきをする。そこまで変な事を言った覚えは無いのだが。

「むしろ先生は分からないんですか!？」



麗日が聞いて来て相澤は考える。

「……分かん。世界平和……か?」

「ええ……」

何故かそこから落胆した声上がる。

青石は聞こえていないのか、真剣に目を瞑って願い事に集中していた。

今世界中に星の雨は降る。

星の雨は止むこと無く続く。

知らせでは約一週間は、夜の間続くらしい。

世界中の人が流れ星を見て、願い事をするだろう。

全人類が願っても有り余るほどの流れ星。

それを見て人類は何を思うだろうか。

これはきっと彼女の願いの形そのものだ。

彼女はその気になれば放置して、世界を滅ぼす事すら出来た。

だが世界は終わらない。彼女の慈悲の元で世界は続いていく。

明日も、明後日も、来年も。

世界は止まることなく動いていく。

彼女はどんどん人を知り、変わっていくだろう。

彼女は宇宙開発をするヒーローになると決めた。

人の醜さや愚かさ。人間の持つ本当の醜悪さを、きつと青石は知る事になる。

これから先、ヒーローとして活躍すると決めた以上は。

そして何も醜いのは敵ツイランだけではない。

彼女にこびへつらい、もしくは利用しようとする人間もこれから先出てくる。

いや、むしろ今まさに出てきている。

テレビ局の人達がまさにそうだ。視聴率命の彼らは、何としてでも彼女の情報を捉

え。

あわよくば番組に直接出演させようと必死になっている。

そして各国の動きもそうだ。

この前はアメリカの上院議長。その他の国のトップクラスの権力者が、彼女に面会し

た。

彼女の国籍を日本から移そうと提案した国すらも有る。

当然丁重に断らせてもらったし、本人も直々に拒否した。

願い事が終わったのか、こちらを向いている青石と目が合う。

だが、これから先のそんな苦労も知らないように。青石は笑顔になった。

星の雨の下で青石が笑っている。

あの部屋の中で独りぼっちだった少女が。笑顔のやり方すら知らなかった彼女が。彼女は流れ星にどんな願い事をしたのだろうか。

きつとそれは彼女の個性ですら無しえない。相当に困難なものに違いない。

相澤はそう思う。

「えへへ、さつそくちよつぴり叶っちゃった」

「は？」

呆ける相澤をよそに青石はご機嫌だ。

「何でもなーい」

青石は相澤と手を重ねてきた。冷えた彼女の指先は人の未来を担うには、あまりに小さい。

「なあ青石……お前は」

「うん？」

「いや……忘れてくれ」

「——相澤さんは何を知りたいの？」

青の少女の目が光る。

彼女の中のスイッチが切り替わる音が聞こえた気がした。

周りのどんちゃん騒ぎが遠く聞こえる。

二人だけの時間が流れ、息をするのも忘れる。

「お前は何を願ったんだ？」

「……内緒」

弾むような声で彼女は言う。結局教えないのかと相澤は内心思う。

だがそう言えば願ひ事は人に言つてはいけない。

そんな言い伝えもあつた覚えが有る。

まあ青石は流れ星の願ひ事を知らなかつたので、凶らずもいつたところか。

青石は更に肩を寄せてきた。

首を相澤の肩に乗せてくる。

「おい」

「えへへ」

周りから冷やかしの声が聞こえるが、青石は気にしていない。

むしろ見せつけるように体を更に密着させてくる。

「やめろ」

「やめな—い」

無理やり引きはがそうと思つたが、彼女のあまりに幸せそうな顔に躊躇つた。

結局相澤は青石にされるがままになる。

相澤はこれから先も、青石の願いが、夢や希望が、どうか変わらないように。

このまま、人の幸せを願う優しい存在で有れるよう。

流れ星に祈った。

青石の顔を盗み見る。

彼女は笑っていた。

相澤も釣られて頬が緩んでいた。

幾千万の星が降る。

まるで相澤には、十年前の犠牲になった魂が、再びこの世に現れてそのまま降り注いでいるのではないか。

死人に思いを馳せる人に一人では無いと、語りかけるために。

そんな思いすらも抱かせるような幻想的な風景で。

一生忘れられない、思い出になった。

## 第60話

「これは一週間ほど前の話。

「青石さん、これ受け取って」

朝のホームルーム前。青石は机でまったりしている時に緑谷が来た。

軽く挨拶を交わした後に、緑谷は大量の紙束を青石の机の上に置く。

「コレなに？」

「署名だよ」

「署名？」

青石が疑問に首を傾げる。そして一番上の用紙をぺらつとめくる。

「青石さんはテレビでも言ったよね。青石さんがどんなヒーローになりたいのか」

「うん、言ったけど……」

確かに三日ほど前、青石が出演した番組が放送された。

その中で青石にどんなヒーローになりたいのか質問された。

青石の中の答えは変わらない。

緑谷達に話した夢と同じことを話した。

人が地球を超えて何処までも行けるようにしたい。

誰もが敵ヴァイランにならずに済む。そんな優しい世界を目指したい。

そして敵ヴァイランを退治することは、基本しない方針だとも伝えた。

青石が目指しているのは、戦って勝つヒーローでは無い。

「これは青石さんに敵ヴァイランと戦って欲しい。そう思っている人たちの署名だよ」

「……そうなんだ」

「全部でおよそ100万人だよ」

「100万!? そんなに!」

「だからこれもほんの一部。どれだけの人が青石さんに戦って欲しいって。

敵ヴァイランから救って欲しい。そう願っているか分かるよね」

「緑谷まだ言ってるのか。青石には青石の……」

「まだ、話は終わってないよ」

珍しく轟が突っ込んでくるが、緑谷は無視して続けた。

「手紙も有るんだ。青石さん宛だよ」

手紙の束を渡してくる。

その中の一番上の一枚を、青石は開封して文面を見た。

書いた人は敵ヴァイランにより家族を失ったらしい。

遅れてやってきたヒーローにより自分の命は助かったが、母は助からなかった。もし青石のようなヒーローが敵を退治してくれれば、自分のような悲しい思いをする人が減る。

青石の夢も立派だが、もっと足元の苦しんでいる人達に目を向けてほしい。

そんな内容だった。

「……そっか。この人は敵に」  
ウイラン

「別に珍しくないよ。世界中に居るんだそんな人が。」

……青石さんがどんなヒーローになりたいのか。確かにそれは自由だよ。

でもこの署名と手紙に込められている人達の気持ちも忘れないでほしい。

青石さんに助けを求めている人が……敵を退治して欲しいって人がどれだけいるの

かってことを。忘れないで欲しい」

「そんなに皆、ボクに敵をやっつけて欲しいの？」  
ウイラン

緑谷は無言で頷いた。

青石はため息をついた。

「……分かったよ」

教室の扉が開く。担任の相澤がゆらりと入室してくる。

緑谷は席に戻っていく。



「青石。なんだそれは？」

青石の机の上に置いてある大量の署名を見て、相澤が聞いてくる。

まあそのまま放置も出来る筈無い。

「フアンレターと署名です」

「署名？ 聞いていないぞ」

「緑谷君に渡されました」

「本当か？ 緑谷」

「はい」

肯定した緑谷。相澤はこれ見よがしに大きくため息をついた。

「緑谷、ここのうものは一旦雄英を通せ。」

特に手紙なんて代物はな。何が入っているか分かったものじゃない。

安全のためにもな。分かったか？」

そしてそのまま始まるホームルーム。

青石は甘く見ていた。それほどまでに青石に敵と戦つて欲しい。

そんな人たちが居るのだと思つても居なかつた。

改めて考えたら分からなくもない。

青石が敵を退治する事で、確かに救える命が有るだろう。

それは間違いないと思う。

その日の放課後、青石は職場体験の希望を提出した。

行き先はエンデヴァアのヒーロー事務所。

轟焦凍と同じ希望だった。

………

………

………

「本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫相澤さん、無理はしないよ」

「………」

相澤の顔を見た青石はヘラッと笑う。相澤の顔は真剣そのものだ。

相澤の横には轟焦凍も居る。彼も相澤に負けず劣らず真剣な顔をしている。

真剣を通り越して怖いくらいだ。

スターレインから一か月が過ぎた。

ここしばらくは世界が滅亡を逃れた事への歓喜で湧いていた。

当初予定されていたインターン。つまり職場体験はやや日程を遅らせて実施される

事になった。

スターレイン。世界が滅びから救われたなど、人類が今まで体験してなかった事態。何が起きるか分かったものではない。そんなイレギュラーな環境に生徒を放り込むわけにもいかない。

だからインターンは当初より一週間ほどたった後に行うと決定された。

様子を見つつ判断をしたわけだ。本当は一か月以上予定は伸びるものだと思われる。いた。

そして本日に至る。

青石は空を見上げた。今日もまたいい天気だ。

まあ仮に雨が降っていたとしても、彼女はいくらかでも晴れに出来るのだが。

今日はインターンの初日だ。

青石はエンデヴァアの元の職場体験。その一環として敵ウイランに対処する事になる。

エンデヴァアの事務所の前はやけに人が少ない。

これもまた雄英が手配して人払いしているからだ。

彼女はあまりにも有名になりすぎた。

こうでもしないと青石が馬鹿正直にファンに対応し始めて、いつまで経っても職場体験どころではない。

「どうしたの相澤さん？」

「……いつも通りのバカ面だと思っただけだ」

「ひ、酷いや！　ねえ轟君もそう思うでしょ!？」

「あつ……うん……良いんじゃないかそれで」

「聞いてなかったんだね轟君！」

わーわー青石は能天気騒ぎ始める。

それを見ながらやはり相澤は心配だった。

彼女は既にメディアでどのようなヒーローになりたいか公言している。

雄英体育祭が開催された直後やスターレインの最中は、<sup>ヴィラン</sup>敵は殆ど出現しなかった。

<sup>ヴィラン</sup>敵が彼女の力を恐れたからだ。

いつ何時彼女が捕まえに来るか分からない。彼女はまだヒーローでは無いが、政府や

ヒーロー公安が彼女に命令する可能性もゼロではない。

青石ヒカルは潜在的に敵に<sup>ヴィラン</sup>対する抑止力として働いていた。

当然それは本人が意図している事ではないだろう。

彼女は暴力を振るいたくない。<sup>ヴィラン</sup>敵を個性を使って捕まえる。そんなヒーローにはな

りたくない。

青石ヒカルはそれを公言してしまった。

雄英の中だけではなく、メディアに向けても。

だが敵はそんな彼女の優しさに付け入る。

彼女の脅威が無いと分かると敵が爆発的に増えた。

それを受けてヒーロー公安は彼女に依頼したのだ。

一週間ほどだけでいいから敵を捕まえる普通のヒーローをやって欲しいと。

その名目として職場体験が利用された。

全国から寄せられていた署名も後押しした。

お人好しな青石はそれを断る事は出来なかつた。

それが例えやりたくない事であろうとも。

だから今回青石がやる事も職場体験を名目とした、敵達への見せしめだ。

彼女が本気を出すとどうなるのか。

それを分かってやるつもりだ。

どれほどの力を彼女は持っているにしても、彼女はまだ子供。

権力に利用される立場の弱い人間なのだ。

相澤はそれを齒がゆく思う。

もつと自由に思うがまま生きられたのなら、どれほど良いだろう。

けれどそれは叶わない。彼女がどれほどの力を持つとも、彼女もまた人間に過ぎない

のだから。

「本当だって。ボクを信じてよ」

青石は相澤に微笑みかける。相澤も不器用な笑顔を浮かべた。

「H Nを利用して全国の敵の摘発……か」

だが再び相澤の笑顔は消え、心底心配そうな顔になる。

青石は手元の端末を覗き込む。

そこにはH N 上の様々な敵の情報ツイランが流れていた。

もちろんそれはヒーローツイランにしか知り得ない機密情報。

現在進行中で敵は全国で出没し続けている。

「時間だ」

エンデヴァアの短い言葉に彼女は顔を上げた。

作戦の時刻は来た。

青石は顔を引き締めめる。

「大丈夫だよ、きつと！」

青石は笑顔になる。大切な人には笑顔で居てほしい。幸せでいてほしいから、彼女は

笑顔を作る。

「……気を付けろ」

「うん！」

「青石…………その…………」

「轟君も心配？」

「…………」

轟は無言だが何を考えているのか何となくわかる。

明らかに轟は今回の作戦に不満そうだった。

<sup>ヴィラン</sup>敵の摘発および捕縛など、青石に向いているとはとても思えない。

彼女は与えられた力と

「作戦開始だ」

エンデヴァーの短い言葉に頷く。

「相澤さん行ってくるねー！」

「青石…………行ったか」

相澤はため息をついた。

青石は一瞬でその場から消え去った。

手元の端末に目をやると、凄まじい勢いで情報が更新されていく。

言わずと知れたH<sup>ヒーロー・ネットワーク</sup>Nだ。

全国で出没している敵が次々に逮捕されている。

風がびゅうと吹いた。もうすぐで夏になるうという時期だというのに、やけに寒々し

く感じられた。

「……どうやらこの周囲の敵は全て青石に捕縛されたようだ」

エンデヴァーの声に首を向ける。

彼も報告をサイドキック達から受けたらしい。

「流石といったところか」

「……そうだな」

「それにしては浮かない顔だな」

青石にかかれれば敵の摘発など、赤子の手を捻るより容易い。そんな事は分かっている。

だが相澤の胸の奥はざわついたままだ。

「嫌な予感がするんです」

「嫌な予感だと?」

「ええ……」

相澤は空を見上げた。

今頃青石は人が持つ様々な負の側面を見せつけられている筈だ。

全国に出没している様々な敵。

彼らを見て彼女は何を思うのだろうか?



“人間”その物に対して失望したりしないだろうか？

彼女は度々口にする夢。

人の為に誰かの為に。

だが彼女は“人”そのものをどれだけ理解しているのだろうか。

普通の人は彼女のような夢を抱いたりはしない。

何故なら物心ついた頃より“人間”がどういうものなのか。それを身をもって体験していくからだ。

人には拭い去れない醜く愚かな面が有る。

それはどうしようもない。

だから人は人の為に誰かの為に。そんな風に生きようとはしない。

それほどの価値を“人間”というものに見いせてはいない。

人の為に誰かの為に。そうやって他人の為に尽くせる人間など、ほんの僅かな例外に過ぎない。

オールマイトが正しくその例外だった。

人の為に誰かの為に。

彼ほどそれを体現した存在が今まであっただろうか。

そして世間は彼女を新しい“平和の象徴”として迎えようとしている。

彼女の思いを世間は汲み取らない。

力だけが彼女の全てでは無い。だが世間から見たらどうか。実際に世間が見ているのは彼女ではなく、彼女の“力”だ。

青石ヒカルという、本人そのものではない。

同じことを為す人間なら、中身など誰だつていい。

本当の意味で青石を見ている人間など、ほんの僅かだ。

結局の所、彼女が無力な無個性の人間だったら。誰も彼女に見向きもしないのだ。

「ちっ……」

相澤は踵を返す。

ここにいつまでも居たところで時間の無駄だ。

予定通り彼は雄英に帰ることにした

「帰るか？」

「ここに居ても何もすることは無い。しっかり頑張れよ轟」

「あいつが頑張つてる限り、する事なんてなさそうですけど」

全くだと相澤は息を吐いた。

今日はどうにもため息が多い。

エンデヴァアの事務所の前に車が停車した。

中から人が降りてくる。

「相澤様、迎えに参りました」

高等尋問補佐のシアンが頭を下げる。彼女はやはりいつものメイド服。

エンデヴァーもいちいち声を上げたりしない。

どうやら二人は顔見知りのようだ。

いつたいこのシアンと言う女は何者なのか。

それはともかく、事前に頼んだ時間通り来てくれたようだ。

「すまない」

「いえ」

短く言葉を交わして車の中に体を滑り入れた。

助手席に腰かける相澤の横。運転席にいつものメイド服の

エンジンが音を立てて発車する。

「……」

車の外の流れる景色を見る。

考えているのは青石の事。

彼女がいつたい今頃どんな気持ちで居るのだろうか。

いつたい何を見て、何を感じているのだろうか。無性に気になった。

けれど相澤に出来る事は何もない。  
ただ無力に待つことしか出来ない。

彼女の隣に立つこと。側に居る事。

それは余りにも困難で難しい。

かつてオールマイトにはそれが出来なかった。相澤は、なんとか辛うじて実現できた。

だがそれは今までの話。これからどうなるかそれは分からない。

携帯端末には青石の捕まえた敵の情報が行き交っている。

全国のヒーローが、H Nに情報を上げて、青石がそれを処理する。

捕まえられた敵の数は、僅か数分経っただけの今でさえ1000を超えている。

実際はそれ以上だろう。

「つたく……あの馬鹿が。何が人の為に誰かの為にだよ。」

……本当は」

「何かおっしゃいましたか？」

小さく漏れた声にシアンが反応した。

「何でもない」

……………

.....

...

(行こう、レギオン)

——ええ、任せて。

青石は個性を解放する。

青石の思考速度が急激に高まっていく。

個性を使つて世界ないし時空そのものを歪め、青石だけが早く動けるように改ざんする。

(思考速度、身体速度を1000万倍に再定義)

彼女は今、周囲の人間の1000万倍の速さで動いて、考えられる。

彼女にとって1000万秒が過ぎたら、ようやく周囲の世界では一秒流れる。

世界が1000万分の1の速さになる。

彼女の目からは、事実上世界の時は停止した。

青石はH<sup>ロー・ネットワーク</sup>Nの情報をネットワーク上に直接展開する。

人々を助ける為に彼女は行動を開始した。

.....

「これで、もう何人目かな？」

——これで1051人目よ、……先は長いわね  
 青石の質問に個性レギオンが答える。

彼女の心はだいたい追いつめられていた。

ヒーロー・ネットワーク

H Nの情報を頼りに、彼女は静止した世界の中を駆けずり回る。

彼女は甘く見ていた。この世界はもつと優しく美しいものだど、無条件に信じていた。

自分が受けた悲しみや苦しみを上回るものなど、そうはないと。高をくくっていた。

「これが”世界”なんだね。……これが”人間”なんだね。緑谷君」

まさに目の前で敵ヴィランが、年若い女性に襲い掛かっている所だった。

止まった世界の中で、襲われている人は恐怖に慄き。

ヴィラン

敵は残酷な笑顔に顔を染めている。

ヴィラン

敵の手には刃物が握られていて、もうあと数センチで首を貫くところだった。

「ボクは……ボクは暴力なんて振るいたくない。……だけど」

ひとまずそつと傷つけないように、襲われている一般人を少し離れた場所に移動させる。

そして怪我を治癒。

多分逃げる時に打撲と擦り傷を負ったのだろう。

軽く捻挫もしている。

被害者を助ける事は比較的簡単に終わった。

当の本人たちは100万分の1の速さでしか認識できないので、今救われた事にすら  
 気付いていない。

改めて青石は敵の様子をジッと見た。

心の中も少し覗いてみたが、あまりにも汚れ切った悪意と欲望に吐き気を催しそうに  
 なる。

敵になった経緯や、なぜ追い詰められたのだろうかと考える。

だが敵の記憶を覗いても、皆目青石には分からない。

青石の判断基準からすれば、この敵の人は充分に恵まれているはずだ。

なのに、敵としてこうして人を襲っていた。

考えに考えてもいつまでも分からない。

結局青石はこの男が、自分勝手な男なのだ。そう判断するしかなかった。

「……個性抹消」

青石は男の個性を削除した。相澤の抹消の個性とは違う。

個性そのものを完全にその敵の中から消し去る。

そして身動きが出来ないよう束縛した。

「……次行こう」

彼女は再び歩き出した。

しばらく青石は日本中を飛び回り、手当たり次第に敵達を駆逐し続けた。

そして気付いたことが有る

敵になるのに特別な理由など、そう必要ない。

何人もの敵を見ていくうちに、青石は理解した。

青石は救い続けた。

何人も、何人も。

何度でも、何度でも、青石は止まった世界の中を飛び回り、人を助け続ける。

彼女のスピードに置き去りにされて、人は助けられたことにすら気付けない。

そして助けなければいけない人は、後から後から湧いてくる。

「キリがない……」

気付けば青石は助けた人間の数も、捕縛した敵も数えなくなっていた。

最初は敵を捕まえる事に躊躇いが有った。

だが何度も敵の悪行を目にした末に、そんな躊躇いはいつの間にか消えていた。

青石は暴力が嫌いだ。

人を傷つけたくないし、人を力でねじ伏せたたくない。



話し合いの末に、解決出来たらどれだけいいかと思う。

「だけど、どうすればいいの？ 話し合いなんてしてたら間に合わない……」  
彼女の言葉に応えられる人間は誰も居ない。

青石の声は虚しく街の中に消えていく。

結局、彼女は敵を行動不能にすることに決めた。

危険そうな個性は取り上げ、無個性になって貰った。

敵が人を襲っていた、ありのままの現実を目にしたら、人を傷つけないなんてお笑い種だ。

なんて自分は甘い事を言っていたのだろうと思う。

緑谷の言葉を思い出す。

——たった今だって、この世界のどこかで誰かが敵に襲われている。

僕たちなんかじゃ助けられないような人達だって、簡単に助けられる！

青石さんにはやろうと思えば出来る！

やろうと思えば出来る癖にやらない！ じゃあ見捨てているのと同じだろ！

「ボク馬鹿だ……」

再び青石は敵を捕縛する。捕縛された事にすら、まだ敵は気付いていない。

100万分の1の速さの時で流れる世界。

その青い空を眺める。

青石は思う。緑谷は正しかった。

青石がただぼんやりと過ごしている間に、いつたいたいだけの人が苦しんでいたのだらう。

どれだけの人間が死ななければならなかったのだろう。

それらの命は全て彼女が、助けようと思えば助けられたはずなのだ。

「ボクのせいだ……うん駄目だよね相澤さん、弱気になったら」

パンパン自身の頬を叩く。

救いを求める人は何処にでもいた。

青石は個性を使う。人の為に誰かの為に。

敵が<sup>ヴィラン</sup>出沒していたので、出来るだけ痛くしないよう捕縛した。

交通事故が起きかけていたら、未然にそれを阻止した。

病院に寄ったら、今にも死にそうな患者たちが居たので治療して。

寝たきりの人が居たら、歩けた頃の状態で回復させた。

目の見えない人が居た。耳の聞こえない人が居た。

味覚を失った人も居て、仕事を失って金に困っている人も居た。

今日食べるものすら無くて貧困に喘いでいる人も居れば、金が有っても寂しい思いを

している人も居た。

いじめを受けている人、差別されている人。

中には男や女といった性別のカテゴリに入らない人々も居た。

皆救いを求めていた。

この世界の誰もが、助けを求めている、悩み苦しんでいた。

青石は駆ける。一人でも多く助けたいと願って、一人一人の困難を個性を使って対処する。

気付いたら彼女は敵ツインを捕まえるだけの予定から、大きく外れた行動を取っていた。

敵ツインは捕まえる。それに変わりはない。

だが彼女は助けを求める人を見捨てられるほど、冷酷になれなかった。

青石は手当たり次第に人を助け続ける。

進まない時の中、ゆらゆらと彷徨い続ける。

救いを求める人たちに手を差し伸べ続けた。

助けられた人達からの返事は、まだない。

助けられたことにすら気付いていない。

どのくらいの時間が経ったかすら、彼女にはもう分からない。

彼女が救い続けても、苦しんでいる人はそこかしこに溢れている。

例え独り善がりだとしても。彼女はひたすらに、人を救い続けた。

## 第61話

「デク君おはよー!」

「うん麗日さんおはよう」

朝から元気な声をかけられ緑谷は挨拶を返した。

麗日は怪訝そうな顔になる。

「デク君なんかあった?」

「えっ何もないよ」

「でもなんか暗い顔してる。もしかして……青ちゃん関係?」

麗日の指摘に緑谷はだんまりになる。

「あつデク君だんまりになった。つてことは凶星だ!」

緑谷は心にやましい事が有ると口を閉ざす。

その癖を麗日は見抜いていた。

「別にただ……」

「ただ?」

「インターンが中止になったのが何て言うか……」

「ま、まあまあ……ね？」

青石に対して直接的な文句が有ったりするわけではない。

だが彼女がもたらした影響は大きすぎた。

青石ヒカルが一週間前に開始したインターン。

一応エンデヴァアの事務所の前でヒーロー活動を学ぶ、という体裁になっている。

だが実際には全国の隅々にまで、青石ヒカルは活動範囲を広げている。

緑谷は携帯を開いた。

画面上に青石ヒカル関係のニュースを出してみる。

もはや解決した事件や事故の数、捕まえた敵の数サイランがとんでもない事になっている。

初日だけでどうに一万以上の事件を解決している。

全国のヒーローが普段解決している事件。

それが全部そのまま青石ヒカルに置き換わっている形だ。

ヒーロー形無しどころではない。

ネットの掲示板では「もうアイツ一人で、もう全部あいつ一人でいいんじゃないかな。

なんて言われている始末だ。

どこでどんな敵サイランが出ようが瞬殺である。

警察に突き出される敵サイランの数はすさまじく、刑務所はパンク寸前だ。

ヒーローがどんなに頑張つて敵サイランを捕まえようとしても、青石ヒカルが先に捕まえてしまう。

ヒーローの出番がまるでない。

だから当然、緑谷達のインターンが普通通り行くわけが無い。  
敵サイランを捕まえようとしても、全て青石にかっさわれてしまう。

まるで仕事にならない。

よつてインターンに出た生徒が雄英に突っ返されるのは、自明の理。

青石ヒカルが全部一人でやつてしまうのだ。教えられるものなどありはしない。

「確かに青ちゃんが全部やつちゃうのは、フクザツだけど……。

うちは何となく予想ついていたし。

青ちゃんが本気出したらね。どんな敵サイランもいちころだもん。

ヒーローの仕事なんてそりやなくなっちゃうよね」

緑谷は頷く。

ネットの情報を調べてみるとまあ、凄まじい。

初日でエンデヴァーの事件解決数をあつさり凌駕。

彼女の事件の解決が余りにも早く分かりづらいので、後から遅れて情報がやつてくる。

現在明らかになっている解決した事件の倍近くは、青石ヒカルが解決しているだろう。

彼女の出現から数日で、敵の発生は激減した。

そして発生した敵もことごとく、青石ヒカルにより捕縛されている。

「凄いよね青ちゃん。敵だけじゃなくて、病人も治してるんだよ?」

「うん、知ってるよ。寝たきりの人が歩けるようになったつてね」

「凄いね青ちゃん。信じてた通り……ううん、それ以上だよね」

「……」

「デク君?」

「えっ? ああうん! 凄いよね! 青石さん」

救った命は数知れず、敵の逮捕はおろか、病人も治す。

普通のヒーローが一生かけても積み上げられない功績。それをたった一日で成し遂げている。

そしてそれを驕ることも無い。

クラスメイトの前でもそうだが、メディアの前でも彼女は自身の力を誇示したりはない。

あくまでも彼女は力を使わない、平和的な解決を望んでいる。



現に逮捕された敵<sup>ツイラン</sup>達も、殆ど全員が怪我すら負っていない。

中には個性が青石に焼失させられたケースもあるらしい。だが敵の個性<sup>ツイラン</sup>が消されたところで、それを非難する人間はあまりいない。

それより民衆の大部分は、悪をくじく絶対なる力が降臨した。そのように捉えて歓喜の渦に沸いている。

そして彼女の活動は今日をもって、停止する。それにガツカリする人は多い。

あくまで彼女はインターンで活躍しているだけであり、正式なヒーローでは無いのだ。

だが民衆の大半は、既に彼女を受け入れて歓迎している。

当然十年前、彼女によって数千万が死んだことも承知の上でだ。

彼女が雄英体育祭で罪を告白した際には、“許せない”といった民意が大半だったのに意見をコロツと変える。

教室に徐々に人が集まってくる。

本来はクラスメイト達は全員今頃は、インターンで雄英の外に居る筈だったのだ。

それなのに青石ヒカルによって、全ては狂った。

ヒーローは活躍の機会を奪われてしまった。

元はと言えば、緑谷自身が言い出したことがきっかけだ。

それは分かっている。

だが彼女がやっている間違っていない事。

それがもたらすものは、決していい影響だけではない。

緑谷はそれを肌で感じていた。

彼女は余りにもその存在そのものが大きすぎる。

居るだけで世界を歪ませる。

青石ヒカルという危険な存在を、緑谷はどうしてもすんなりと受け入れる事が出来ない。

「緑谷、なにポーっとしている?」

「すみません」

相澤から注意が飛んだ。

いけないと気を引き締める。

緑谷は心に抱えている不安が大きくなっているのを確信した。

青石ヒカル。

彼女はきつと緑谷の知っているこの世界を、いずれ破壊してしまうだろう。

きつとそこには緑谷の目指すヒーローの姿は無い。

緑谷の目指すヒーローは必要とされない。

青の少女をなんとかして止めなければ、とてもつまらない、死んだ世界になってしまうだろう。それだけはなんとかして阻止しなければならぬ。

緑谷はヒーローになると誓ったのだから。

そのために今、ヒーロー科の教室に座れるこの場所。

それを勝ち取ったのだ。

(とにかく、青石さんに注意しないと。皆青石さんに用心しなすぎさる。

何かあつた時どうにか出来るのはもう僕しか居ない……！

もう二度と十年前のようにならないように)

緑谷の青石に対して燻ぶり続けていた不安は、どんどん大きくなっていた。

………

………

………

風が強く吹いた。もうすぐで夏だというのに寒気すら覚えるほどの冷たさだ。

雄英は小高い丘の上に有る。その屋上となると遮るものが無いので、風は強く吹く。

転落防止のフェンスに寄りかかる青の少女。

他には人っ子一人いない。

日は傾きかけて、徐々に夕焼けに染まろうとしている。

長く伸ばした髪をそつと片手で押さえる。

「髪……切ろうかな？」

鬱陶しく思っただろうか。

彼女は風にあおられる髪を手にとり、しげしげと見つめる。

しばらく思案すると

「止めよう」

小さくポツリと呟いた。

手元の端末が震えた。

ヒーロー・ネットワーク

H Nを通じて青石に連絡が寄越される。

「……そっか、終わりか。長かったなあ」

彼女は寂しそうに言う。連絡は法月からだった。

青石のインターンは今日で終了との事だった。

一週間前、青石のインターンは始まった。

エンデヴァアの事務所の前で見送ってくれた相澤の顔は今でも覚えている。

もつとも一週間と言うのはこちらの世界の話。

青石からしたら、もつと長い月日が経過している。

自身の思考速度を100万倍の速度で働いたのだ。

それは青石と周囲の人間との間で、時間の感覚のずれをもたらしていた。

「ま、いつか」

彼女は空を見上げた。

色々な人達が居た。それぞれが全く違う人生を生きていた。

自分出来る事なんて、そんな大したことじゃないと青石は思う。

青石が本当に助けられた人なんて、どのくらい居たのだろうか。

病氣や怪我は治した。出来る限りの事故や、災害は未然に防いだ。

既に犯罪を犯した敵<sup>ツイラン</sup>達は、可哀そうだが警察に突き出した。

敵<sup>ツイラン</sup>にも色々な人が居た。

本当にどうしようもなく追い詰められた人間もいた。

ただ単に身勝手なクズも居た。

心の中を覗いてみても、青石にはどうしても理解できない人たちが居た。

敵<sup>ツイラン</sup>とはどんな人達なのか、青石には分からない。

だが分かることもある。

人間とは、全ての人と分かり合える程に賢くも無ければ、単純でもない。

勿論それは、青石ヒカル自身も含めて。

けれど青石は信じている。今は分かり合えなくても、時間をかければきっと変わるこ

とが出来ると。

確かに目を背けたくなくなる程、人は残酷で愚かだった。

だがちゃんと優しく、互いを思いやる心も人は持っている。

それは確かなのだ。

青石は人を信じたい。どれ程人間が愚かだと分かっても、信じたい。

いつの日かきつと、<sup>ワイラン</sup>敵など出ず。

全ての人が幸せで温かい幸せな世界に出来る。

だから人に絶望して裁きを与えるなど、一瞬でも頭に思い浮かんだ自分が恥ずかしい。

今はだいたい数千万人殺してしまった張本人が、<sup>ワイラン</sup>敵を責め立てるなどちゃんちゃら

おかしいじゃないか。

どの口が言えるのだろうか。青石はそう思う。

だがしかし、彼女のやった事は極めて単純だった。

弱い人を助け、悪をくじいた。

オールマイトがやっていた事と何も変わらない。

ただそれが、あまりにも影響が大きすぎただけだ。

人を傷つけたくない。誰も犠牲にしたくない。

そう言いながら、<sup>ワイラン</sup>敵を捕まえ犠牲にしている。

明確な悪事をはたらく敵を見逃せはしなかった。  
だから法に従い捕まえた。

正しい事をしたはずなのに。だというのに良心の棘が、心にチクチク刺してくる。  
インターンは終わった。もつともインターンと言うのも名ばかりだ。

教わった事なんて一つも無い。

元から個性の制御に関して、青石の右に出るものなど居ない。

青石は思う。やはり普通のヒーローがやっている事は、自分の性に合わない。

もつと自分にあつた他にやれることを探した方が良いだろう。

(……お医者さんなんてどうかな?)

青石の力なら、どんな病気だろうと理論上治せる。

誰かを傷つけることも無い。医者は天職なので、そう思える。

けれど青石の力は大きすぎる。もしかしたら、普通の医者が仕事を失ってしまうかもしれない。

ヒーローだつてそうだ。

実際この一週間。ヒーローはろくに活躍しなかった。

どこにいる敵サイランだろうとも、青石が一瞬で片づけてしまうからだ。

おかげでヒーローは一週間の間、うどの大木となっていた。

「うん？」

キイと扉が開いた。音の方を見る。

屋上に繋がる扉は一つ。

さび付いた蝶番を開いた人間は

「なんだ緑谷君か」

緑谷出久だった。

彼は何も言わず青石の前に立つ。

顔をじつと青石は見つめる。

「インターンは？」

「やる事なんて何も無いからって、一週間前に返されたよ」

一週間前というと初日からか。なるほど、敵は出てきた次第に捕まえていた。だから

ら他のヒーローは暇になって当然だ。やる事も無くなるか。

青石が動いていた一週間は、ヒーローも商売あがったりだっただろう。

「そう」

「僕だけじゃない。皆ね」

「そっか」

思えば緑谷に説得されてから、青石は動いたのだ。



皆を敵ヴァイランから救ってほしいと。

緑谷だけでない。大勢の人間が青石に助けを求め、それに青石は応えた。

「ねえ、緑谷君。これで満足？」

「……」

緑谷は黙っている。青石は不安になった。

「緑谷君？」

「……青石さんは」

「うん何？」

「もう、敵ヴァイランを……」

緑谷が何を言いたいのか、何となく分かった。

青石は敵ヴァイランを捕まえるヒーローにはならないと言っていた。

今回は特別に動いただけの話。

緑谷は不安なのかも知れない。その不安を一時的に紛らわすことは出来る。

(……でもそれは良くないよね)

だが青石は嘘をつかずに本音を言う事にした。

「うん、敵ヴァイランを捕まえるボクは今日でお終い。

明日からは……またいつものボクだよ」

口にした途端、緑谷の顔が激しく歪む。明確に口にせずとも、目が語っていた。

どうして——と。

「どうしてっつて?」

緑谷は首を縦に動かした。

「じゃあ、緑谷君。逆に聞くな。」

君たちはいつまでこんな事を続けるつもりなの?」

「……言ってる意味が分からない」

「言葉通りだよ。」

きつと明日から世界は、いつもの日常に戻る。

ヴィラン  
敵が出て、それをヒーローが捕まえる。

あなた達は、いつまで繰り返すの?」

「なっ……そ、それは……どういう? 意味わかんないよ!」

「言葉通りだよ緑谷君。」

ヴィラン  
敵が出て、それをヒーローが捕まえる。

それをいつまで続けるの?

いつになったら終わらせるの?

ボクがもし、緑谷君の言うように生きるとしたら。

ボクはいつまで頑張れば良いの？」

「そんなの僕には……でも青石さんが頑張ればもつと救われる人が！」

「もう、いい加減緑谷君も気づいてよ。」

ツイラン  
敵が出て、ヒーローが捕まえる。

そんなのボクはもう嫌だよ。もう終わりにしたい。

ボクはもう戦いたくなんてない。

誰にも苦しんで欲しくなんてない。ツイラン 敵にだつて。

世界は変わる。きつと変わるんだつて信じてる。

だから……」

続きを言おうとしたら視界が突然ぶれた。

頭の奥がガンガン鳴る。どちらが上でどちらが下か。それすら分からない。

「あ——れ？」

「青石さん!？」

顔色を変えた緑谷が目の前に見えた。

体の感覚が遠い。

だんだん目の前がぼやけていく。

体が揺さぶられている感覚も、必死に名前を呼ぶ緑谷の声も、  
全てが遠くなっていく。

夕焼けに染まりつつある空の色が綺麗で、それがやけに印象に残っていて。  
青石ヒカルは意識を手放した。

……

……

……

「馬鹿野望が……」

眠り続ける青石を見て相澤は言葉を漏らす。

青石はいつもの地下三千メートルの部屋に居る。

格好もいつもの姿ではなく、パジャマ姿に着替えさせられている。

ベッドで寝ている彼女が目を覚ます気配はない。

ずっと悪い夢でも見ているように、苦しそうにしている。

いつもヘラヘラ笑っている彼女が嘘のようだ。

青の少女の管理施設。

そこには彼女専用の医療設備が整っている。

三日前に青石ヒカルは倒れた。

インターンを丁度終えて、緑谷と会話していたら糸が切れたように気を失ったらしい。

原因は検査をしたら直ぐに分かった。

単純な理由だ。過労、つまり頑張りすぎたのだ。

一生かかっても出来ない仕事をたった一週間でこなしたのだ。

疲れて当たり前だ。

無理はするなど言ったのに、なぜこうも言うことを聞かないのだろうか。

「失礼します」

部屋に入ってくるのはシアン。いつもの丈の長いメイド服だった。

「まだ目を覚ましませんか」

「ああ、相変わらずだ」

シアンは物憂げに青石の手を取った。

すると青石の顔に少しだけ変化が有った。

ほんの少し青石の表情が和らいだように見える。

「起きてるんじゃないだろうな？」

「……いえ、寝ていますね。じきに目覚めるとは思いますが」

シアンは否定する。

しばらくするとまた苦しそうな顔に戻ってしまった。

「こいつが倒れてもう三日か。シアン、こいつは」

「命に別状はありません。恐らくは力を使いすぎて疲労困憊しているだけです」

「本当に確かなんだろうな」

「検査で明らかになってます、じき目を覚まします。大丈夫です」

シアンが嘘を言っているようには見えない。

そもそもシアンは青石に普段から肩入れしているし、心配は人一倍している筈だ。

目に入れても痛くない程に溺愛しているし、甘やかしている。

そのシアンが大丈夫と言うからには、その通りなのだろう。

「……そうか」

長く返事をためて相澤は息を吐いた。

「地上は？ 敵はまた？」

相澤は短く聞いた。相澤はずっと青石の側についていた。

いつも通り教職を務めようとしたが、校長らに止められた。

青石の側に居る事。それが相澤の為すべき事だと諭された。

ただ側に居るだけで、何かが出来るわけでは無い。

それでも側に居るべきだと根津らは言う。

それが青石の望んでいる事だと。

「お察しの通りです。地上は……」

シアンの口から地上の状況を告げられる。

一週間の間、青石ヒカルは働きづめだった。

本来インターンは昼間活動する。だが青石はずっと夜の間も活動し続けた。

夜に活動しないと敵が理解すれば、その時間帯を狙うのは明白だったからだ。

相澤は、夜も活動するのは反対した。

そんな事をしたら、青石自身のプライベートも何もかも無くなってしまう。

あくまで青石は学生であり、そこまでする必要は無いと主張した。

だが結局、青石は一週間ずっと休まず活動し続けた。

それこそ一睡もしていないだろう。

なにせインターンの間ずっと絶え間なく、敵は彼女に捕え続けられていた。

彼女が力を示せば示すほど。人を助ければ助けるほど、人は彼女に縋った。

あらゆる敵の犯行を未然に防ぎ。

敵の犯罪を摘発し、事故や災害を防いだ。

全国のヒーローの誰もが、この一週間手持ち無沙汰になっていた。

どんな事件が起ころうと、どんな敵が出ようとも。

彼女が一瞬で解決してしまう。

自分たちの出る幕が無い。

だがそれは全国のヒーローがやっていた作業を、青石が一手に引き受けてしまった事を意味する。

確かに敵は減った。

彼女が出た日以降、敵は見る間に数を減らした。

青石が活躍し始めて、犯罪数は半分以下になった。

凶悪な敵は、殆ど出現しなくなったと言っている。

だが今では再び敵は出現している。

彼女がインターンを終えて三日経過した。

そして日本は再び以前と同じ状況になった。

「結局、以前と同じ状況か……」

ヒカルの手を握る。

彼女の手は温かい。こんな小さな手でどれ程の人を救ったのだろうか。

「全く同じではありません。ヒカルに救われた人は山ほど居ます。

敵の居ない世界。敵にならずに済む世界にしたい。

ヒカルの思いは確実に伝わっています。



現にヒカルが活動する前に比べ、三割ほど敵は減っていますから」  
「……………ふん」

どうにもシアンは青石が絡むと感情的になるきらいがある。  
青石ヒカルが捕まえ始めた途端、敵は姿をひそめた。

そして活動を停止した瞬間、これ幸いと悪事を働き始める。

敵が滅つたのはこいつが力を示したからだ。

こいつの思いに共感したからじゃない。

……………どいつもこいつも、ヒカルの“力”しか見ちゃいない。

世界は何も変わってない」

青石の手がびくつと動いて、相澤の手を握った。

目を覚ましたかと思つて青石を見るが、まだ寝たままだ。

「それでも私は信じています」

「それはこいつを？ それとも世界を？」

「ヒカルを……………いえ今では違いますね」

クスツとシアンは微笑んで言う。

「両方です」

「は？」

「ヒカルと世界。両方です」

「随分とめでたい頭してるんだな」

「この子を見ていると信じたくなるんですよ。この世界にもきつと救いが有るのだと。きつと変わることが出来るのだと」

「……ふん」

「相澤様もそうでしよう?」

「どうだかな」

シアンが青石の手を取る。青石の表情が和らいだ。

寝ている彼女はどんな夢を見ているのだろうか。

シアンは言った。

青石と世界。両方を信じていると。

青石が目指す世界など、子供の理想論に過ぎない。

誰も敵ツイランにならずに済む世界。

誰も犠牲にならない世界。

果たして本当にそんな日が来るのだろうか。

歴史を紐解けば嫌でも気づく。人はいつの時代も戦い続けていた。戦いの形の変化は有れど、戦いその物は無くなったりしなかった。

今この国は戦争はしてないが、ヒーローと敵が戦っている。

きつと敵が居なくなっても、新たな形で人は戦い続けるだろう。

その時に青石はどんな顔をするのだろうか。

「相澤さん……すき」

寝言だろうか。青石の口から何かが呟かれる。

相澤には何を言ったか分からなかった。

シアンはただおかしそうに微笑んで、青石の頭を撫でる。

その様子は本当の親子のように相澤には思えた。

青石の顔を覗き込む。

「よく……頑張ったな。偉いぞ」

相澤も少しだけ、青石を信じてみたくなった。

彼女と、彼女の言う理想を。

世界は本当に変わる事が出来るのだろうか。

「お前の言う世界になったら。ヒーローは必要ないな。

……やれやれ、転職しなくちゃいけないじゃねえか」

シアンの紫苑の髪がそつと小刻みに揺れる。

地下三千メートル。日が差さないその部屋は、世界中のどの場所よりも温かかった。

## 第62話

世界が変わっていく。

彼女によって塗り替えられていく。

もっとより良く、もっと正しい姿を求めて。

人々はあるべき世界を模索し始める。

更に向こうへ。

「ボクがなりたいのは敵ヴァイランが出たらやつつけるヒーローじゃない。

皆と一緒に自由で幸せで、誰もが敵ヴァイランにならずに済む。

そんなヒーローになりたいんだ」

(やめろ……！)

青石が無邪気にはほ笑んでいる。

彼女が笑う。彼女の周りにいつの間にか人が集まってくる。

轟、麗日、八百万、飯田。そして相澤。

皆笑っている。笑って彼女の言う理想の世界に、共鳴し共感し。

今と違う世界へと変革を誓う。

「青石さんー！」

「なあに？」

彼女が振り向いた。

緑谷は青石のキラキラとした目が苦手だった。

理由は分からない、そう思っていた。

けれど気付いてしまう。本当は分かっていた。

緑谷よりもはるかに過酷で、困難な環境に身を置かれようとも。

彼女は理想を捨てる事は無かった。

暴力や権力に虐げられて、理不尽な仕打ちを受けようとも。

誰も彼女の夢を壊せはしなかった。

「君は本当に……？」

「うん、人の為に誰かの為になりたい。

この世界のどこまでも行きたい。

緑谷君だってそうでしょ？」

「……違う」

「うーん。緑谷君はよく分かんないなあ。

ねえ緑谷君。敵ツイランが出て、それをヒーローが捕まえる。

こんな馬鹿で下らない争いを、いつまで続けるの？」  
首を傾げる青石に緑谷は齒ぎしりする。

無個性だからと言ってふてくされ、燻ぶっていただけの緑谷とは違う。

彼女の異常性は決して力から来るものではない。

それは、人の為に誰かの為に。

その強迫観念に近い信念から来るものだ。

一見よさそうに見えるその信念も、緑谷から見れば異常の一言に尽きる。

まるで人の為に誰かの為に。

そうあるように仕組まれた機械のようだ。

「青石さん」

「うん？」

「例えヒーローが居なくなっても、皆が幸せでありさえしたら……。」

君はそれで良いの？」

「うん、そうだよ」

彼女の返事は最初から分かっていた。

だから、最終的にヒーローが居なくなろうが彼女には関係ない。

皆を幸せにするためになら、ヒーローなど彼女は切り捨てる。

宇宙のどこまでも自由に行けて、皆が幸せに暮らせる世界。  
それが青石の目的。

青石にとってヒーローとは、目的を叶えるための手段でしかない。  
だが緑谷にとっては違う。

緑谷にとってヒーローとは、なりたいたいものその物。

ヒーローになること。それ自体が手段ではなく目的なのだから。

「緑谷少年」

青石の側のオールマイトが緑谷の前に立つ。

痩せこけた姿から一転して、筋骨隆々の姿へと変わる。

まるで緑谷から青石を守るかのように。

「人を助ける事に憧れるなら警察官って手もある」

「でもそれは……!」

「あれも立派な仕事だ!」

緑谷が反論しようとしても、ピシヤリと言ひ含められる。

言葉が出てこない。

「人の為に誰かの為に。ボクはそんな風になりたい」

青石の頭をオールマイトが優しく撫でている。

「誰も敵ヴァイランにならずに済む世界にボクはしたい」

「止める……止めてよ！ そんな事しちやいけない！

そんな世界になつたら！」

「どうしてデク君？ 敵ヴァイランが出ずに済むのなら。それに越した事なんかないじゃん」

麗日が疑問の声を上げる。

「違う！」

「何が違うんだ？」

今度は飯田が困惑している。

「もし敵ヴァイランが居なくなつたら……！」

「ええ、困るのはヒーローでしょうね」

「っ！ シアンさん！」

緑谷の隣にシアンが現れる。

シアンは丈の長いスカートをたなびかせ青石の元に寄る。

「シアンさん！」

青石の声が喜色に染まり、シアンに飛び込む。シアンは優しく抱き留めた。

「ええ、ヒカル。あなたになら出来ます。」

人の為に誰かの為に。誰も理不尽に敵ヴァイランに追いつまれない世界に」



「やめろ……僕はヒーローになるんだ！ ならなくちやいけないんだ！」  
彼女の言う理想の世界。

けれどそこに——ヒーローの姿は無い。

ヒーロー達は必要とされていない。

「あなたにならきつと出来る……ヒーローが要らない世界に」

何故ならそこに敵は居ないから。

敵が居ない世界に、ヒーローは必要ない。

「やめろおおおおおー」

緑谷が拳を振るうと嵐が起きる。

青石の周りに居る人間が全て吹き飛んだ。

バラバラになったはずの肉塊は何も残さず、霧のように消えていく。

そこに残ったのは、ただ一人。

青の少女の姿だけ。

彼女は緑谷を悲しそうに見つめ。一筋の涙を流した。

「そっか君が敵だったんだね」

緑谷は泣いている彼女に拳を向ける。

拳が触れるか触れないかの所で、彼女は光になって消えていった。

景色が薄れていく。

悲鳴があちこちから聞こえては消えていく。

体に力が入らない。

手を伸ばそうとしても何も出来ない。

「小僧」

「え……何ですか貴方は？」

また唐突に人が横に現れる。

なのに緑谷は疑問を浮かべることも無い。

「色々と教えてやりたいが、今は時間が無い。受け取れ」

緑谷の胸に男は手を押し付けてくる。

途端に胸の奥に熱いものが広がった。

「これは……!?!」

「黒鞭」俺の個性だ。こいつは良い個性だぜ。

守りなよ小僧。今のこの世界を……あの嬢ちゃんのがままから。

ヒーローが居て、敵ツインが居るこの世界を。

「ワン・フォー・オール」を完遂させるのは、お前だ」

「待って！ いったい何を!?!」

「青石ヒカル……。あの敵を倒せるのはお前しかない。  
頼んだぜ」

そして姿も声も消え失せる。

だんだん視界が薄暗くなり。

先ほどまでのやり取りも思い出せなくなっていく。

「敵って……誰だよ」

感じるのは胸の奥で躍動する新しい個性と。

それ以上の痛みが走っていた。

……

……

……

「うわあああああああ!」

緑谷はベッドの上で跳ね起きる。

自室の照明は落とされており、まだ薄暗い。

乱暴にカーテンを開くと未だ空は闇に覆われている。

壁掛け時計を見ると午前四時。

普段ならまだ寝ている頃だ。

——随分と大袈裟な目覚めね？

ベッドの上にいるの間にアズライトが腰かけている。

彼女の姿は最初に有った頃よりより一層、現実に存在するのではないか。そう思わせられるだけの存在感を放っていた。

——それだけ私があなたに馴染んできたという事

緑谷は返事を返さない。

彼女も素知らぬ顔をしている。彼女が手を口にやり欠伸をする。

「……夢を見たんだ」

——どんな夢？

「それが……良く思い出せない。でもきつと……うん、青石さんの夢だったと思う」

——……そう

「えっ？ 何？」

何か言いたげなアズライトに聞くが彼女は聞こえないふりをする。

まあ考えが有るのだらうと、緑谷は考える。

やけに目が冴えてしまった。

もうここまで意識がハッキリしてしまつては、再び寝るのは難しいだろう。

やることも無くスマートフォンを開く。

いつものようにヒーローのニュースを探す。

「これも、これも！ 青石さんのばかりじゃないか」

一面に出てくるのはやはり青石ヒカルの記事ばかり。

彼女がインターンを終えて三日経つ。

青石ヒカルが君臨した一週間は凄まじいものだった。

彼女がどれだけの影響を及ぼしたのか、正確にはまだ誰も把握しきれていない。

だが判明している事実が一つある。

それは一週間の間表向き、一切の死者が発生していないという事。

人は生まれた以上いずれ死ぬ。

それは病気であつたり、事故であつたり、寿命であつたり。

理由は様々ある。

だが青石ヒカルが動いた一週間では、一切の死者が日本から消えた。

普段なら処置の施しようもない患者も、事故で無くなる人も。

一切合切、日本中の全ての死に瀕する人間を、青石ヒカルは助け切った。

一週間の間、普段ならありふれている自動車事故すらも、一件も発生していない。

一件すらもだ。

紛れもなく青石ヒカルが事故を未然に防いだからだ。

そんな事は普通は出来る筈がない。

けれども青石は普通ではない。

彼女が本気になれば、それこそ神と同等の奇跡だって起こせるはずだ。

それが起きただけ。

緑谷はネットの掲示板を少し覗いてみる。

普段はあまり見たりはしない。そこにはありとあらゆる人間の悪意が集まっているから。

書き込みを見た緑谷の手に力がこもる。

青石に命を救われた人間が、あちこちに情報を拡散している。

そして皆が口にする。

青石ヒカルが活躍している間は、本当に良かった。

それに引き換え——ヒーローはなんて情けないんだ、と。

青石ヒカルがインターンを終えた瞬間、奇跡の時間は終わった。

普通に自動車の事故は起きるし、<sup>ツラン</sup>敵は発生する。

一週間の間、青石ヒカルがどれだけのことをしていたのか。

今まさに全ての国民が実感している。

彼女は全国の幾万のヒーロー達全てより、ずっと多くの成果を上げていたのだ。それを誇ることも無く、ただ人の為に誰かの為に行動し続けた。

当然、人は青石を持ち上げて、ヒーローを蔑む。

普段金儲けのためにヒーローをしている人と、無償で結果を出した青石ヒカル。考えてみたらこうなるのは必然でもあった。

「糞っ！」

緑谷が憧れた世界が、ヒーローが滅茶苦茶にされている。

例え青石に悪気がなかりと。

緑谷がなりたいものに泥を塗られていく。

緑谷が憧れたもの、必死に勝ち取った力すらも彼女は否定する。

このまま行けば、世界は彼女にどんどん歪められてしまうだろう。

緑谷は彼女がもう放置できない、危険な存在になっていると思った。

……

……

……

「何だアレ」

「えつなになに？ うわあ……」

二人は雄英に登校しているところだ。

いつもの駅を降りて雄英への道を行く途中麗日に会い、そのまま合流。

一緒に登校している最中だった。

緑谷の指さした方を麗日が見る。

「青石ヒカル万歳！」

「万歳！ 万歳！ 万歳！」

「ヒーロー！ セルリア！ 万歳！」

人がごった返していた。

老若男女問わず様々な人達が集まっている。

彼らは手にプラカードや横断幕、拡声機なんて持ち出している。

「何だろうアレ」

「青石ヒカルの信奉者どもさ、はあ」

緑谷の呟きに一人の男が愚痴を零す。

「どちら様ですか？」

「見て分からない？ 店長さ。コンビニの、ね」

本人が言う通りコンビニの店長だろうか。青と白のストライプの制服を着ていた。



たしかに店長らしい。胸に名札が付いている。

そこに名前と店長と書いていた。

手には放棄とチリ取り。店の前に散乱しているゴミを拾っているのだろう。

そのゴミが何処から出たものなのか、すぐに察しは付いた。

「あんた達、雄英の生徒だろ？」

「あ、はい。そうです」

制服を着ているので分かるのは当然か。

「ここ数日の話さ。青石ヒカルって奴がインターンを終わったくらいからかな。

全国からそいつの信者が集まってねえ。デモ行進やら集会やらで集まってんだ。

雄英がすぐ近くだからね。奴らにとってはいわば聖地ってことさ雄英は」

「はあ」

「ほんといい迷惑だよ。そのせいでたむろする奴らが絶えない。

見ろよこのゴミを。奴らが落としていくんだ。

近所の奴らは怖がって近寄らない。おかげでこの有様だよ。

全部青石って奴のせいだ」

麗日がムツとした顔をしたが緑谷が止める。

これも青石ヒカルがもたらした世界の歪みそのものだ。

「何が救世主だよ。たかが一週間働いただけの癖に。ほんつと、とんだ疫病神さ」

「これは青ちゃんのせいじゃ有りません！」

今度は我慢できなかつたのか麗日が声を上げた。

「はっ！ あんたに何が分かるって言うんだ？」

あいつが出てから、俺の生活は滅茶苦茶だ！」

「でも青ちゃんは！」

「麗日さん！ それはまずい！」

「えっ？」

「おいそこのお前！」

「遅かった……！」

いつの間にか集団に緑谷達は囲まれていた。

ざっと十人以上いるだろう。

正確に言えば、囲まれているのは隣に居るコンビニの店長だ。

明確にその男は敵意を向けられている。

緑谷と麗日は眼中にすらないらしい。

もう一度名札を見る。

苗字しか書いていない。「佐々木」と書いていた。

「な、なんですかあなた達は！」

店長の佐々木は怯えた声を出す。

「佐々木、か。おい貴様、神を侮辱したな？」

「神……？ い、一体何のことやら」

「とぼけても無駄だ！」

がつちりとした男が店長の胸倉を掴んだ。

店長は情けない悲鳴を上げる。

「しつかり聞いていたぞ！」

我らが女神を疫病神と呼んだのをな！」

「そよそよ！」

そのまま佐々木は、地面へと投げ倒された。

「す、すみません！ すみません！」

コンビニの店長佐々木は箒も手放して、下手に出て謝る。

だが彼を囲む集団の熱は下がる気配がない。

「その侮辱断じて許しがたい！」

どんどん彼らの怒りのボルテージが上がっていく。

「どけ！」

緑谷と麗日は集団から弾き飛ばされる。

店長は集団の中に揉まれていく。

麗日が見るからに焦った声を出す。

「ま、まずいんじゃない？」

緑谷は一呼吸おく。

冷静にならないといけない。そう考えた。

「うん、でも取り敢えずここは巻き込まれないように距離を……」

「ぎゃあああ！」

人垣に阻まれていったい何が起きているのか分からない。

だが今聞こえたのは店長の悲鳴だった。

おそらく暴徒となった人が店長に襲い掛かっているのだろう。

「粛清を！」

「殺せ！」

「裁きを与えよ！」

明らかに穏やかでない言葉が聞こえてくる。

緑谷は最悪の事態を避けようと、麗日の手を引こうとするが。

「駄目だよ！ 緑谷君！ 青ちゃんなら見捨てたりなんか絶対にしない！  
助けないと！」

緑谷が止める暇も無く、麗日は集団に飛び込んでいく。

「麗日さん!? 駄目だ！」

「落ち着いて！ 落ち着いてください！」

「なんだてめえ？ お前も異端者か！」

「女神への批判は断じて許さん！ 貴様も粛清しなくてはな！」

「麗日さん！」

緑谷が声を上げる。

だが次の瞬間、暴徒たちは次々にその場に崩れていった。

「えっ？」

「わーたーしーがー来た！」

「オールマイト！」

“平和の象徴”がそこに居た。

鍛え上げられた鋼の肉体。口角はにと吊り上げられている。

右手と左手にそれぞれ麗日と佐々木が抱えられていた。

そして二人を地面に下ろす。

暴徒たちを見ると全員気を失っていた。

(なつんだこれ！　これがオールマイトか！)

やっぱりオールマイトの力は凄い……。

いや僕も同じことが出来る筈なんだ。今はまだ無理でも。

僕も早く出来るようにならないと……)

どれ程の精密な加減をしたら可能だと言うのか。

改めて化け物のような力のコントロールだ、

オールマイトがオールマイトたる所以の一端を緑谷は見た。

同じように緑谷がしようとする、暴徒たちを全員殺してしまうだろう。

「怪我は……少ししているね。すまない遅くなつて。」

大丈夫だったかい？　ちゃんと病院で診てもらおうといい」

「あ、ありがとうございます！」

襲われていた店長は何度も頭を下げている。

「後は警察が来るから心配せずともいいさ。……ヒーロー達にも伝えておくよ。」

特にこの辺りを警戒して欲しいとね。彼らのような輩はまた湧いてくるだろうし」

「オールマイト……」

「緑谷少年も麗日君も！　遅刻せずに来るんだぞ。」

まだギリギリ間に合うからね。じゃ！」

オールマイトは風のように去っていった。

緑谷はオールマイトが去った方をジッと見る。

遠くからパトカーのサイレンが幾つも聞こえてくる。

オールマイトが去った際に吹いた風はやけに冷たく、段々と時代が変わっていくのを感じずにはいられなかった。

緑谷は、青石ヒカルが取り返しのつかない破局をいずれ生み出す。

その原因になるだろうと改めて確信した。

(急がないと……青石さんに対抗できるのは、僕だけだ)

「デク君？」

「何でもない、行くこう」

麗日の心配そうな視線。

それに緑谷は気付くことは無かった。

……

……

……

鳥のさえずりが聞こえる。

生い茂る木々の向こうを見ても、その声の持ち主は見えなかった。頭上から木漏れ日が斑になって照らす。

青石はメイド服の女性と手を繋ぎながら、森林浴を楽しんでいた。

「具合はどうです？」

「まだ本調子じゃないけど……大丈夫だよ」

「そうですか」

丈が長いメイド服の女性はシアン。彼女のいつもの微笑みに青石もつられて笑う。

青石が目覚めたのはつい昨晚の9時頃。

それからまた一眠りして、今朝に至る。

「それにしても三日も寝てたんだねボク」

「むしろよく三日で済んだと思いますよ」

「そんなに？」

「ヒカルのやり遂げた功績は大変なものですよ。

常人なら精神がとても持たないでしょう。過労死ラインなんてとうに飛び越えているのですから」

「えへへ」

「褒めてません」



恥ずかしくてはにかんだ青石。だがシアンはピシヤリと言う。

「うう……でもお」

「相澤様もおっしゃっていただけなのでしょう？ 無理はするなど」

「ご、ごめんなさい……でもボク」

シアンは足を止める。背の低い青石と目が合わせるため、膝を曲げた。

青石はシアンの目の色に吸い込まれそうな感覚を覚えた。

「責めてなど居ませんよ。ですが、ヒカルが相澤様が大切なものと同じくらい、相澤様や私もヒカルが大切なのです」

「……うん」

「あなたが心配なのですよ、皆」

シアンは頭をそつと撫でてくる。

青石はシアンが愛おしくなってシアンに抱きついた。

「……ごめんなさい」

シアンは何も言わない。

だが気持ちは伝わってくる。

抱きしめた温もりが言葉より明確に感情を表している。

「ヒカル、学校はどうします？」

「行くよ、皆に会いたいしね」

「本当は休んでいて貰いたいのですが」

「ごめんねシアンさん、でも」

「分かってます」

二人で道端のベンチに腰かけた。

そつとシアンの方に寄りかかり、そのまま膝の上に頭を乗せる。

シアンの膝枕をして貰うのが青石は大好きだった。

「シアンさん」

「何ですか」

「ボク決めたよ、人の為に誰かの為になりたい。

人が何処までも自由に生きるために。

誰一人敵ツライにならない世界にする」

「……それがどういう意味なのか。分かっていますよね」

「うん……。もしそんな世界に出来たら。

ヒーローは……居なくなる。この学校も必要なくなる。

皆の夢は……叶わなくなる。ボクのわがままで」

風が一段と強く木々の間から吹き付けた。

日差しも先ほどより高くなっている。

時間が過ぎるのが早い。もう少しで朝のホームルームが始まるだろう。

シアンの手に手を伸ばす。

シアンは優しく手を包んでくれた。

「分かっているじゃありませんか」

「緑谷君は反対するだろうなあ……シアンさん緑谷君に色々教えてるんでしょ？」

「ええ」

「反対しないの？ ワイラン 敵の居ない世界にするって。

ヒーローが必要ない世界にするって」

「……反対などするものですか。ワイラン

敵が居ない世界以上に幸せな世界なんて、有る筈がないのですから」

「本当？」

「確かに緑谷様には、技術を教えています。ですがそれをどう使うかは、緑谷様自身が決める事です。

「私じゃ有りません」

「そっか」

「ええ。そうなのですよ。それに、ヒーローでなくても人の為になる仕事は有ります。

もつとも……」

「どうしたの？」

「いえ、何でもありません」

一週間の間頑張つて分かつた事が有る。

この世界は仕方がないことが積み重なった結果、たくさんの理不尽が生まれていること。

そして仕方がないから諦めて、折り合いをつけていくしかないのだということ。

だけど、青石の力が有れば仕方がないことも、何とか出来るかもしれない。

全ての理不尽を排除するのは不可能だとしても。

現在より良くしていくことが出来る筈だ。

今までの人間が超えられなかった、当たり前前に存在している壁を超える。

更に向こうへ。

宇宙への進出だつてその一つだ。

「難しいね、戦いたくなんてないのに。多分いつか戦わないといけないんだろうなあ」

宇宙へ単独で行ける青石であっても、他人と分り合う事は難しい。

力で征服するのは簡単でも、説得する事はそれより遥かに困難だ。

やはり悪人は殴つてやつつけるのが一番楽なのだ。

だからこそ、青石は分かり合いたい。

例え困難であろうとも、合理的じゃなくても。

話し合って分かり合える。相互理解を実現させる。

それより尊いものが、この世界にあるだろうか。

「私は、ヒカルの味方ですよ」

シアンの言葉が身に染みて嬉しかった。

長い長い進まない時をさまよひ、ようやく帰ってきた場所にシアンが居る。

そして教室に行けば相澤もいる。

きつといつもの様に怒られるんだろう。

それでいい。

青石が一番欲しいものは、既に手に入っている。

それでも青の少女は止まらない。

止まる訳にはいかない。

人の為に誰かの為に。

そのために青石は生まれてきたのだから。

「本当に難しいね」

「ええ、世界とは簡単では無いのですよ」

青石はシアンと互いに温もりを確かめていた。  
二匹のアゲハ蝶が祝福するように、二人の側を舞う。  
その黒は、この世の果てと同じ色をしていた。

## 第63話

「で、結局これか」

「ZZZZZZ……」

すびーすびーと青石が寝息を立てている。セメントスの額には青筋が立っていた。一限目の現代文。セメントスの担当の授業中、青石は眠りこけている。教室の一番後ろからでも、それがよく見えた。

「あの馬鹿」

相澤はポリポリ頭をかく。

「先生、良いんですか？」

緑谷が尋ねてくる。寝ている青石を起こす生徒は、だいたいの場合緑谷か麗日だ。

青石は他の人間と距離感や感性が違い独特だ。

たまによく分からない事で怒り出したりもする。

起こす時にしてもそうだ。

だから緑谷や麗日くらいしか、起こそうとする生徒はいない。

触らぬ神に祟りなしだ。

「良くはない。……だがな」

少し思案した末に

本来なら青石は休みにする予定だった。

何しろ一週間ぶつ続けで活動する、など無茶した末、三日間も寝込んだのだ。

教員と根津校長らで、最低一週間は休養を取らせる。

そう決まっていた。

青石がこの場に居るのは、彼女のわがままを聞いたからに過ぎない。

だからこそ、相澤がこうして側で様子を見ている訳だが。

「Zzzzz」

「……あんな無茶するからだろ馬鹿野郎」

まあ無茶をしたにせよ青石がもたらした功績は多大なものだ。

だいたい青石はスターレインを迎撃して、人類を救済している。

これから一生ニート生活を送っても罰は当たらない。

それ程の結果を既に出しているのだ。

文句など言えようもない。

「むにゃむにゃ」

「……仕方がないか」



疲れているのは分かる。だが起こすことに決めた。

こどもも自由に振舞っていては示しが見つからないだろう。

既に何を今更という感じはあるが。

「起きろ青石、起きろ」

しばらくゆすり続けると、むくりと彼女が動いた。

「すやすや……う……ん……？ ……あいじゃわしやん？」

「授業中だぞ」

「……ふぁーい。……Z z z z z z」

だが相澤が起こしても、すぐにまた寝てしまう。

彼は青石を横抱きに抱えた。

黄色い歓声があがる。

いわゆるお姫様抱っこだから女子が反応したのか。

「頼みますイレイザーヘッド」

「分かってる」

短くアイコンタクトを交わして教室の外に出る。

ひとまず寝かす必要性があると判断し、保健室へと向かう。

「Z z z z……」

それにしても良く寝るものだ。

「……」

相澤は嫌な予感がした。

青石に関して、致命的な何かを見落としている気がしてならない。

青石がいつたい明日にもどの様な行動をして、一体何をもたらすのか。

それは誰にも分からない。

もはや彼女は誰かにコントロール出来る存在では無い。

もしも気まぐれに彼女が人を殺したとしても、誰にも止める事も、捕まえる事も出来ない。

今は辛うじて、福音をもたらす存在に踏みとどまっている。

だが、その気になれば世界をどうとでも滅ぼせる存在が、こうして自由に歩き回っている。

それは本来とても恐ろしいことだし、許されない。

個人が持つていい力の範疇を優に超えている。

だからこそ、彼女は閉じ込められていた。

彼女の中には未だ、暴力に対する嫌悪が渦巻いている。

そして、この世界は青石が嫌う暴力で回っている。

ヒーローという抑止力があるからこそ、<sup>ヴィラン</sup>敵に対抗できている。相澤は綺麗ごとを言うつもりは無い。

ヒーローとは紛れもなく、社会の暴力装置だ。その拭い去れない一面が確かにある。そこまで思案して口から洩れる

「……午後の授業はいよいよ見せられないな」

午後のヒーロー基礎学では、ロボットの仮想<sup>ヴィラン</sup>敵。

それを使用した戦闘訓練だ。

青石がこの一週間やったことは、決して無駄ではない。

だが社会の構造を変えるには至っていない。

だから時間が経ては、人はまた同じことを繰り返す。

<sup>ヴィラン</sup>敵が出て、ヒーローがそれを倒す。

終わらない螺旋へ回帰していく。

果たして青石が、それを見て何を思うだろうか。

訓練とはしても、相手がロボットだとしても。

暴力を磨いていく生徒達を見て、何を思うのだろうか。

きつと青石ならこういうのだろう。

あなた達はいつまでこんな事を続けるつもりなのか。

あなた達は「人」に対しても同じことをするのか、と。  
ロボロボになったロボットの残骸を指さしながら。

「来たかい。話は聞いてるよ。こっちさね」

保健室に入るとリカバリーガールが、待つてましたとばかりに用意していた。  
連絡が他を通して伝わっていたのだろう。

示されたベットに青石を横にする。

こうして黙って寝ていけば、人形みたいに整った容姿をしている。

メディアでは青石の容姿が綺麗だの可憐だので、毎日毎日飽きもせずに特集が組まれている程だ。

青石の見た目は、間違いなくいい。

だが口を開いた瞬間アホ面になるので、普段意識することは無い。

その方が青石らしいと相澤は思う。

「……」

相澤は青石の無表情な寝顔を見つめていた。

なんだかこのまま一生起きてこないんじゃないだろうか。

相澤はそんな不安をも抱えたまま、彼女を見ていた。

……

……

「どうしてもか？」

「うん、どうしても」

青石の願いに相澤が渋い顔をした。

青石が起きた時には既に昼になっていた。

壁の時計を見るともう12時半になっている。

無理を押しして教室に行つたはいいが、眠気に耐えられずに寝てしまったのだ。

途中相澤に起こされたような気もするが、よく覚えていない。

青石が来ている服は白いワンピース。

ヒーローコスチュームの技術が導入されたこの衣装には、各種バイタルサイン測定の機能もついている。

起きた時に服が変わっていたので少しびびくりした。

「これ着せてくれたの相澤さん？」

「馬鹿、婆さんだよ」

相澤はリカバリーガールを顎で示した。

「おばあちゃん。午後の授業見てもいい？」

「どうせ止めても聞きやしないんだろ」

「うん」

「好きにしなさい」

「やった！」

「喜ぶのは良いがさつさと食べよ」

相澤はオーバーテーブルの上の食事を指さす。

ベッドは頭の方が上に傾けられている。

寝ていても頭を挙上させ、ベッドで休んだまま食べられる。

そう言えば入院していた人たちも同じように食事を取っていたなあ。そんな事を青

石は思いながら食事を口に運ぶ。

「見ても面白いものは無いぞ」

「そんなの見てみないと分かんないよ相澤さん」

「今日の午後のヒーロー基礎学は……戦闘訓練だぞ」

「……そっか」

きつとまた個性を使って戦うのだろう。

それが生徒同士なのか、はたまたはロボットを使うのか。

いずれにせよ、彼らはこのまま社会に出て、同じことを敵ウイランに向けてするつもりなのだろう。青石はとても悲しく思う。

相澤も青石をよく見てくれている。

青石が何を好んで何を嫌っているのか、分かってくれている。その事が青石には凄く嬉しい。

「相澤さん」

「何だ？」

「ボク決めたんだ。ボクは皆を幸せにしたい。

幸せに生きられる、そんな世界にしたい。

ウイラン  
敵が出て、ヒーローが倒す。

そんな下らない、悲しい戦いを終わらせたい。

ウイラン  
誰一人敵にならない世界にしたいんだ」

「……そうか」

「ちゃんと分かっているの？ ボクは……今のこの世界を否定してるんだよ？

皆の戦いを下らないって、そう言ってるんだよ？

皆、ヒーローじゃ居られなくなってしまうんだよ。

「……本当にそれでいいの？」

「迷ってるのか？」

相澤に見つめられ、言葉に詰まった。

青石は自分の夢を叶えたい。

誰もが幸せに生きられる世界にしたい。

だが青石がその願いは、別の誰かの夢を潰す事で成り立つ。

緑谷や麗日。それに轟らになりたいヒーロー。

それは青石の夢の先に居ない。

青石の目指す世界に、ヒーローは存在できない。

彼らの夢を踏み潰す事でしか、青石は自らの望みをかなえられない。

それも皆を幸せにしたい、と願いながら。

「分かってるよ。……矛盾してるんだ。皆を幸せにしたいって、本当に思ってる。

なのに、誰かの夢を犠牲にしないと、ボクの夢は叶えられない。

ボクが目指すのは、ヒーローが要らない世界だから。

そしたら皆の願いが叶わない」

「……そうだな」

「ねえ相澤さん。ボクどうすれば」

「それはお前にしか決められない。



ヒーローが要らない世界……か。結構じゃねえか」

「相澤さんだつてヒーローじゃ居られなくなるんだよ？」

それでいいの？」

「そうなつたら転職して次の仕事を探すさ」

あつけらんとした相澤の返事。青石は毒気を抜かれた。

「……なんだか全然ボクの想像と違うや」

「どんな風に？」

「相澤さんならもつところ、自分の力の責任を自覚しろとか。

社会に余計な混乱を持ち込むなつとか」

「どんなイメージだよそれは」

相澤がクツクと笑う。青石は珍しい相澤の顔に戸惑う。

「とにかく！ 相澤さんは反対するって。そう思ってたから」

「反対なんかしねえよ」

相澤が青石の頭にポンと手を置いた。

青石は目を細める。そのまま相澤の肩にしだれかかった。

嗅ぎなれた相澤の匂いを吸うと、とても心が安らかになる。

「ウオツホン！ ここは学校だからね!？」

「イチャイチャするのはいいけど場所を選んでほしいね！」  
「わあ!？」

隣で盛大な咳払いが聞こえた。

いつの間にか根津校長が二人の側に居た。

慌てて相澤から離れる。

「イチャイチャなどしてません。こいつがいつも勝手にくっついてくるんです」  
素っ気ない相澤の返事。青石は自分で自分の顔が赤くなってるのが分かった。

「ま、それは置いておこうか」

根津は手を上げて、話の主導権を取った。

何か話があるのだと青石にも分かる。

「青石君！」

「は、はい」

根津の声にたじろぐ。

彼は嬉しそうに顔をほころばせた。もともとネズミなので人間とは少し違うが。

「君の話聞かせて貰ったよ。」

君はこう願うんだね？

誰一人 ウイラン 敵にならない世界にしたい」

「そうです」

根津は一つ頷いた。

「……素晴らしい願いだと思おうよ！」

「本当にそうでしょうか？ でもそうしたら……」

「そうヒーローは要らなくなる。その通りだね」

間髪入れず根津は応える。まさに青石が悩んでいたところだ。

「だったらー！」

「まあまあ。落ち着いて」

根津は両手を前にして青石に声かけする。

なぜか彼の手は正確には前足だろうか？

そんなどうでも良い疑問が頭に浮かんだ。

根津が話し出す。

「……僕たちは無力で弱かった。

仕方がなかったからね。敵ワイランが出てくるのは。

君の言うような敵ワイランの居ない世界”。

そんなの想像すら出来やしなかった。

ただ出てくる敵ワイランを如何に効率よく捕まえるか。

それしか考えてこなかったんだ。

だからこの雄英でも教えられることは、如何に敵を如何に効率よく捕まえるか。それだけなんだ。残念ながらね」

「……分かります」

「敵の居ない世界。」

そんな理想を叶えるための力が僕たちにはなかった。

そしていつしか、そんな世界にしたいなんて思う事すらなくなっていった。

当然だろうか？ 例えば医者<sup>ウイラン</sup>は病気を治す、でも病気がない社会にしたい、なんて思える筈がない」

「それは……そうですね。そんな事」

「うん、そうさ。出来る訳が無い。」

そう思うと人は、それを願う事すらなくなってしまふ。

壁が高すぎて誰も登ろうと思えなくなってしまう」

「……」

根津の言葉に考え込む。

確かにそうかもしれない。

青石は思った。敵の居ない世界にしよう。ヒーローが要らない世界にしよう。

そしてそれは実現可能だと思っている。

本当に最終手段だが、人類全員から個性を取り上げてしまえば、現在の定義上の敵は居なくなる。

ただそうせずとも、人は変わる事が出来ると彼女は信じている。

「だけど僕は思ったのさ。本当はもつと早く僕達が、その思いを抱かないといけなかったのだと。」

ただ敵を捕まえて、それで善しとする風潮をおかしいとすら思わなくなっていた。

ははは、Plus Ultra。更に向こうへ、か。

それを校訓にしていながら、現状維持に甘んじている自分がね。

なんだかとても恥ずかしくなってきたのさ」

「根津さん……ならー！」

「うん。僕も君の言う理想の世界を目指したい。」

ツイラン  
敵の居ない世界、ヒーローが要らない世界。

僕も君と同じ夢を見たいんだ。

そのための力が君にはあるだろう？」

根津の言葉に青石の顔が曇った。

「力……ですか……」

根津は顔を苦々しくしながらも頷いた。

「残念だけどね。思いが有つても、力が無いと何も変えられない。

君の友人の緑谷君。無個性だった彼が、そのままではヒーローにはなれなかつたようにね。」

気持ちだけでは何も出来やしない。それは揺るぎない現実なのさ。

でも、力だけあつても全てを破壊していくだけ……。

思いだけでも、力だけでも駄目なのさ」

「思いだけでも……力だけでも……」

「そう。そして君にはちゃんと側に居てくれる人が居るだろう？」

相澤の方を見ると彼はそっぽを向いていた。

でも分かる。

彼がそうしているのはきつと照れ隠しだ。

現に今手を伸ばして握つても、振り払おうとは決してしない。

「だから君はきつと大丈夫さ」

根津の言葉がすうつと頭に入ってくる。

側に居てくれる大切な人が居る。相澤にシアン。

大切な人が居るから、青石は頑張れる。

自分だけの為に頑張るよりも、何倍も力が湧いてくる。

「君の夢。君の願いは間違つてなんかかない。

僕にも協力させてくれないかな？」

「……はい！ こちらこそよろしくお願いします！」

はははと、根津が笑う。

青石の胸の奥がじんわり温かくなる。

多分これは人の持つ心の温もりだ。

「一週間、ううん。ボクにとつてはそれ以上ですけど。

ちよつと分かつた事があるんです、根津さん」

「それは何かな？」

「……命は『光』なんです。目で見えるのは、この肉の塊だけだけど。

沢山の人を見てそう感じたんです。命は光り輝くものなんだつて」

「……」

根津は黙つて聞いている。青石も続きを言う。

「でも光があると、『影』も出来る。強い光の元にはより強い影が。

どんな人も命が有つて、光り輝いている。

そしてどんな人にも『光』と『影』の両方が有つて……。

どっちかだけの人なんていない。

ボクはきつと、その「影」が強くなっちゃった人。それを敵ヴァイランつて。そういうんだと思うんです」

「それは……何と言うか面白い考えだね。

光と影……つまり君は根っからの悪人は居ないつて。そう言うのかい？」

「そう思います。どんな人にも「光」は有るんです。

それは命の光です。どんな人にも善の心は宿つてる。

ボクはそう信じてます」

「……そうかい」

側で相澤もそれを聞いている。

そして口を開いた。

「『悪』だけの人間も居るだろう」

相澤の反論に青石は返す。

「絶対違う！」

自分でも思った以上に大きな声が出て、青石は驚く。

気を取り直して続きを伝える。

「……『悪』だけの人間なんて居ないよ。



そう思うのは、そういう人間が居る。

そう思った方が、自分が楽になれるからでしょ？

悪人は生まれつき悪人なんだ。救いようがない屑なんだ。自分とは違うんだ。

そう思えたなら、凄く楽で気持ち良いもんね。

でもそれは“差別”だよ。相澤さん

相澤の目が凄く怖かった。

だが青石は怯えずに自分の考えを伝える。

「“悪”だけの人間も居る。相澤さんが本当にそんな風に思うのなら、それが相澤さんの“影”だよ。

きつと」

「……お前に何が分かる」

「分かるよ！ だってボクは……ねえ相澤さん」

「何だ」

「これからも……ずっと側に居てもいいよね」

「……なに当たり前のこと聞いてきやがる」

相澤に頭を乱暴に撫でられて、髪が乱れる。

青石は少し不機嫌な相澤に戸惑う。

それでも、これからもずっと側に居たいと思う。

青石にとつて相澤の隣外にいるのは考えられない。

夢は追いかけていきたい。

人の為に誰かの為になりたい。

だがそれはそれとして。

青石にとつても一番は既に目の前の人にある。

彼こそが青石にとつての全てだ。

これからもずっと側に居られますようにと、青石はこの世界の何処かに居るかもしれない神様に祈った。

## 第64話

「皆！ ボクの聞いて欲しい話が有るの！」

まもなく午後の授業が始まろうという頃合い。

青石は教室に戻った。

戻った瞬間さっそく生徒に囲まれて質問攻めにあう。

そして青石は切り出した。

「ボクはね、誰もが幸せに暮らせる世界にしたい。

誰も敵ライバルにならない世界にしたいの」

保健室で相澤に話した内容と同じ。

敵ライバルがいらない世界にしたいと訴えかける。

「それで具体的にどうするんだ？」

轟が疑問を言う。

青石は頷く。

「うん、だからね。それを皆と一緒に考えていきたいの。

皆の力を貸して欲しいんだ」

「私は全面的に協力させて貰いますわ！」

八百万が真つ先に声を上げる。

青石の側に来てから手を取ってくる。

「ぜひとも私にも手伝わせてくださいな。」

ツイラン  
敵の脅威に誰も怯えずに済む世界。

共に目指していきましよう！」

「八百万さん……ありがとう、えへへ」

青石は照れくさくて俯き加減に微笑む。

「良いじゃねえか！ やっぱ夢はでかい方が良いよな！」

「まったく青石君らしい目標だな」

「私も青ちゃんの夢を応援するわね」

クラスメイトも青石の思いを受け止めてくれたみたいだ。

ツイラン  
敵が居ない世界。それを目指して団結していく。

だが……。

「ま、待ってよ！」

一人異を唱えた。

見なくても誰かはハッキリと分かる。

青石の双眸が少年を視界に入れる。

緑谷出久。

元無個性の彼は、戸惑いと怒りを身にまどっていた。

言わんとする事は分かる。

何を思っているのか大体想像は付く。

「青石さんが何を言っているのか。皆本当に分かっているのか!？」

「どういふこと?」

麗日が緑谷に聞く。直ぐに彼は返事を返す。

「青石さんの言っている事は、確かに正しく心地いいものに聞こえるかも知れない!」

「……」

「だけど青石さんの理想は、やがて全てを殺す!」

「……緑谷君。そうだよね、うん」

青石の呟きは誰にも聞こえなかった。

緑谷の言葉に続く声が出てこない。

彼を見る。

……緑谷は無個性だった。

ヒーローをずっと夢見てきて、それが叶えられずにいた。

なぜなら無個性だったから。

だけど奇跡のような幸運に恵まれて、やってチャンスをつかめた。オールマイトから個性を譲り受け、最高のヒーローになれる。

その筈だったのだ。

だが青石はそれを否定する。

彼が望む前提条件の社会を根底から変えようとしている。

緑谷の夢を木端微塵に破壊しようとしている。

全ての人を幸せにしたいと、のたまいながら。

だからこそ緑谷は反発する。

今までの血のにじむ努力の全てを、青石は無に帰そうとしている。

それを青石は分かる。

だが止まるつもりは毛頭ない。

「僕はそれを……！」

「緑谷君！ 少し落ち着いてくれ」

「飯田君……！」

「緑谷君の言いたいことは何となく分かった。

確かに青石さんが夢を追っていけば、その通りになる。

青石さんの力は本物だ。今更疑ってなんかいない。きつと本当に敵が居ツイランない世界になるだろうさ。

……そこにヒーローは要らない。ヒーローが要らない世界になる」生徒に動揺が走る。

青石の夢の先に自分たちの夢みた理想の姿は無い。

それを分かっていた生徒はそれほど多くない。

飯田の言葉でようやく気付いたのだろう。

青石をそのまま放置すれば、ヒーローになれない。

「そこまで分かっただけなら何で!？」

皆はヒーローになるために雄英こごに来たんじやないのか!？」

「緑谷君」

青石は緑谷の前に出る。

何か話さないといけないと思うのに、言葉が出てこない。

それに何となくわかる。

きつとこれは幾ら話し合っても解決できない問題だと。

緑谷はヒーローになりたい。

青石はヒーローが必要ない世界にしたい。

互いの願いが矛盾している以上、両方の願いは叶わない。  
それは青石が強かろうが関係ない。

原理的に不可能だからだ。

「青石さんは身勝手に振舞って、社会に混乱をまき散らしてるだけだ！」

「……！」

「おい緑谷！」

制止の声が入る。

だが青石にも緑谷にも届かない。

意識が急速に熱く、同時に冷たくなっていく。

青石の目が細くなる。

周囲の雑音が消えていき、緑谷以外の情報がカットされる。

緑谷が口を開く。

「今雄英の前がどうなってるのか、青石さんは知らないだろ！」

君がやった事で何もかも滅茶苦茶だ！」

緑谷の心が流れ込んでくる。

彼の見たもの、聞いたものの一部が青石の中で再生される。

青石が動いたことで新たな理不尽や苦しみが生まれた。



その事実の一端を緑谷は見ている。

滅茶苦茶に散乱したゴミ、狂信的な青石の信者。

風評被害を受けたヒーロー達に、まともに機能しなかったインターン。

青石は人を救った。

だが同時に社会に歪みをもたらしてしまった。

「でも！ 苦しんでる人が居るんだ！ そのままになんて出来ないよ！

<sup>ウイラン</sup>敵が出続ける限り、いつまで経っても終わらない！

<sup>ウイラン</sup>敵が出てヒーローが倒す。その戦いがいつまでも続く。

そんなのボクは嫌だ！

世界は変わらなれないといけないと思う、だから……」

「変わる必要なんてない！」

「……えっ？」

緑谷の言葉に思考が止まる。

彼は今何と言った？ 変わる必要なんてない。

そう言ったのか。青石の思考の過程で、徐々に緑谷に対する黒い影が湧いてくる。

<sup>ウイラン</sup>「敵が出てヒーローが倒す。その何がいけないんだ！」

「……緑谷君？」

青石は分かった。分かってしまった。

青石と緑谷では前提条件が違うのだ。

青石は現状を悲しく、変えないといけな  
ヴィラン敵が出てヒーローが倒す。思っている。

いつまでも繰り返される世界の状況を、青石は変えたい。

だが緑谷は違う。

そもそもそんなの思ったことは無い。

彼はヒーローに憧れた。

だがその前提となる社会の状況を、変えないといけ  
ヴィラン敵が出てヒーローが倒す。な  
なと思つた事は無い。

それを“善し”とするのか、“悪し”とするのか。

決定的に食い違っている。

青石は“悪し”と思つた。だから変えないといけ  
ない。

緑谷は“善し”と思つた。だからヒーローになり  
たい。

「もう必要以上に関わらないでくれよ！頼むから！

自分の都合で世界を変えようとするなよ！

それが我儘だつて何で分からない!?

青石さんの理屈は敵ツイランと何も変わらない！」

「でもそれは仕方がないじゃない！」

「この世界は変えないといけない！ 変わらないといけないの！」

「そうでないと、いつまでも理不尽な目に遭う人が、居なくならない！」

「皆が幸せになれない！ 分かってよ緑谷君！」

「人は変わらないといけないんだ！」

「だから敵ツイランが出ない世界に……」

「エゴだよそれは！」

「いい加減にしろ！ 何の騒ぎだコレは!?!」

「いつの間にか相澤が隣に立っていた。」

「青石の頭に相澤の拳骨が落とされる。」

「緑谷の頭にも同様に落ちる。」

「うう……」

「何が有ったのか後でいいから報告しろ。良いな？」

「……はい」

「緑谷もだ返事は？」

「……了解………しました」

緑谷も歯切れ悪く返事をした。周囲のざわつきは止まらない。

緑谷の方を見る。彼は既に背を向けていた。

多分、これは仲直りだとかそんな問題ではない。

もつと根本的に、人として相容れないから起きたこと。

青石と緑谷では目指しているものがまるで違う。

緑谷の気持ちも分からはない。

必死に目指していた夢に手が届く寸前で、横合いから奈落へ落とされるようなものだ。

反抗するのは必然だろう。

だが青石は思い出して欲しい。

きつと緑谷も人の為に誰かの為に。

そんな風な存在になりたいと願った事が有る筈だ。

でなければヒーローになりたいと思わないと思う。

きつと彼は、目的と手段が入れ替わってしまっているだけだ。

(……やっぱり戦うしかないのかな)

青石は緑谷と戦う事になるかもしれない。

心の中で決意を固めていく。

緑谷に何を言われようが、目指すものを変えるつもりは無い。皆が幸せに生きられる世界にしたい。

そのために、<sup>ヴァイラン</sup>敵が出てヒーローが倒す。

いつまでも続いていく悲しみの戦いを終わらせる。

間違つてなんかいない。

現に分かつてくれる人はいる。

相澤だつてそうだし、シアンや根津校長だつてそうだ。

だがどうしても、緑谷の言葉が胸に刺さったまま痛み続ける。

青石は想像する。

もし青石が現状を見過ごした先の緑谷の姿を。

<sup>ヴァイラン</sup>敵をなぎ倒し、笑顔を浮かべている緑谷の姿。

それを拍手喝采で迎える民衆。

<sup>ヴァイラン</sup>敵に勝つて、民衆を救う。見ろこれが最高のヒーローだと。

それは違う。

戦いは何をどう取り繕つても、体裁を整えても、醜く悲しいものなのだ。

青石はそう思う。

そして、とても恐ろしい未来だと思う。

そんな悲しい結末を青石は見たくないし、するつもりはない。

(緑谷君、信じてるよ。きつといつか分かり合える日が来るって)

彼と分かり合える日が来るのはいつだろうか。

二人の距離はいつの間にか、静かに遠く離れていた。

## 第65話

『変わる必要なんてない!』

モニターの中で緑谷が大声で怒鳴る。

青石の呆然とした顔。緑谷の憤怒の目。

それらを見ている大人たちの表情が失望に染まっていく。

(どこで間違えてしまったんだ……私は)

法月の執務室で、八木俊典は静かに頭を抱えた。

1-Aの教室で起きていた騒動は、全て記録されていた。

記録しているのは、雄英内に死角無く設営されている監視カメラだ。

『青の少女』が関わる施設だから当然だが、彼女は一挙手一投足が監視されている。

以前よりだいたい緩くなったとはいえ、ここは雄英だ。

警戒態勢を敷いているとはいえ、雄英は地上。

敵の襲撃だつて有るかもしれないし、もしかして敵に内通している者も居るかもしれ

ない。

否、“かもしれない”ではない。

目の前の法月将臣は、間違いなく「居る」と想定している。だからこそその監視カメラ。

そしてその映像。

定時報告を済ませようとオールマイトが法月に会いに来た時、彼は映像で監視していた。

そのまま共に見るように促され、そして今に至る。

シアンも法月に呼び出され、法月とオールマイトそして彼女の三人で事の顛末を振り返る。

緑谷と青石の言い争い。

彼らの喧嘩は今に始まった話では無いが、今回の内容は内容だけに重く受け止めるしかなかった。

緑谷は明らかに危険な状態に陥りつつある。

<sup>ツイラン</sup>彼の言葉の端々からは、明確に口にせずともある考えが誰にでも見て取れる。敵が出てヒーローが倒す。その何がいけない。関わらないでくれ。

<sup>ツイラン</sup>つまり敵が居なくなったら、僕がヒーローになれないじゃないか。

そう言っているのと同義だ。

彼のクラスメイト達も同様に捉えたはずだ。



……緑谷は以前より賢くなった。

様々なものを見て、聞いて。色々な事を考えただろう。

その結果ヒーローは、この世界の理不尽がないと存在できない。

そんな悲しく矛盾したものであることも、きつと理解したはずだ。

だからこそその発言。

他の生徒より一步速く彼は気付いた。

青石が夢を追った先に、生徒たちが夢見たヒーローの姿は無い。

真の平和が実現してしまえばヒーローは要らない。

皆が幸せになってしまつては、ヒーローが必要とされない。

不幸な人間が居ないと、緑谷はヒーローになれない。

だから緑谷は拒絶する。失うのを恐れる。

そして恐怖は怒りに変わり、彼女に向けられたのだ。

映像が終わる。

法月はモニターを切り、オールマイトとシアンに向き直つた。

「オールマイト、シアン。お前達が緑谷の指導を担当していたな」

「……はい。」

シアンが悔しそうに言葉を返す

「結果このざまか」

「面目次第もございません」

シアンが頭を下げた。法月の冷笑にオールマイトは齒を食いしぼる。

(いったい何故……?)

「何故だと思ってるのか。オールマイト」

心の内を見透かされ、オールマイトは動揺する。

「知れた事よ。緑谷出久。奴は所詮、どこまでも自分本位な人間に過ぎん。

ヒーローになりたいと思ったのも、全ては自らの為。

目の前の困った人間を助けこそすれど……この世界の何処かに居る困った人間を、わ

ざわざ助けに行こうとはせん。

分かってるだろう。

奴の目的はヒーローになって周りからチャホヤされたいだけだ」

「緑谷様は、人を助けられるヒーローになりたいと言っています。

決してそのような……」

「違うな。それはあくまで自己実現にすぎん。

ヒーローになるその目的を達成するため、“人を助ける”という手段を取っているだ

けだ。

人を助けることそのものを“目的”にしている青石や……オールマイトとは根本的に違う」

「……」

法月の言葉に反論できなかつた。

心の底で何処かが間違っていると思つても、具体的に何が違うのか分からない。

だが確かに思い当たる節はある。

何度も何度も夢にまで見て思い出す。

緑谷と初めて出会つた日を。

『人を助ける事に憧れるなら警察官つて手もある』

そう言つた時の緑谷の顔も、鮮明に覚えてる。

その時は……。

「そうだ、オールマイト。思い出したか。

奴が元から人の為になりたいと思う人間だったとしよう。

だがもしそうならば、無個性なりにそれなりの手段を取つていたのだ。

無力なりに警察を目指すなり、ボランティアで社会貢献するなりな。

だが奴はそんなものに見向きもしなかつた。裏付けは調査で結果ははっきりと取れている。

その上爆豪に対し、ストーカーまがいの行動を繰り返したという。爆豪の行動を逐一観察してはノートにメモしていた。ずっと後からコソコソついて来てな。

だからか知らんが、中学時代緑谷には友人の一人も居ない。

如何に緑谷という人間が異質で異常だと周りから見られていたか、それが伺えるというものだ。

奴は、ヒーローになりたいという叶えられもせん夢を、延々と見続けていた夢想家に過ぎん。

現実を直視もせずいつまでも未練たらしく、ヒーローになるという妄執に憑りつかれた無個性の小僧。

それが奴の本来の姿だ。

そんな者が、運にだけ恵まれ、力を持った瞬間どうなるかなど目に見えている。

案の定他人を見下し始め、粋がりだすようになった。

そして青石と言う脅威が目の前に迫ると、途端に威嚇するようになった」

「……返す言葉もございません」

「問題はここからだシアン、オールマイト」

「はい」

「貴様らの教育の結果は出た。限りなく最悪に近い失敗だろう」

法月の言葉にオールマイトはうなだれる。

「だがまだ奴は引き返せる。」

決定的に悪事に手を染めたわけでは無い」

「……では！」

「だが奴が完全に闇に堕ちるのは時間の問題だろう。」

そうなる前にこちらも手を打たなければならん。ひとまずは“ワン・フォー・オール”だ。

奴の状態がこれ以上悪化するならば、別の者に継承させなければならん。……強制的にな」

「……承知しています」

「最悪の事態ともなれば、奴の命をも取らなければならぬ。」

そんな状況にもなりかねん。

奴を無力化するとなると、こちらも犠牲が出るのは避けられんだろう。

緑谷が敵になるのだけは何としても避けなければならん」

「分かっております」

「失礼しました」

オールマイトは足早に外に出る。後ろ手に扉を閉めて廊下に行く。

確か今日の1-Aのヒーロー基礎学は、市街地演習場での模擬戦の筈。もう一度自分の目で見て確かめなくては。

緑谷は何か焦っているように見えた。

彼を何がそこまで駆り立てるのだろうか。

オールマイトは見えない不安と戦いながら足を進める。

緑谷を一度は理解したと思っていた。だがそれは幻想でしかなかったのかも知れない。

オールマイトはいったい何処で自分が間違ってしまったのか、考え続ける。

そして何かがおかしい。

緑谷の様子を周りの人間は自分本位な発言だと捉えた。

だがオールマイトには誰かを助けたいが故の言葉に思えてならなかった。

あの必死な緑谷の顔は、明確に何かを守ろうとする。

そんな様子に見えたのだ。

(……駄目だ分からない。緑谷君、君は何を考えているんだ)

答えはいつまで経つても出ることは無かった。

……

……

……

——緑谷君、話があるわ

緑谷は自らの個性アシライトに呼び出された。

人の目を懸命にかくぐり、人気のない校舎裏にまで来た。

彼女はあくまで幽霊のような存在。

緑谷にしか見えないし緑谷と一心同体の存在なので、頭の中で返事をすれば意思も通じる。

なのはどうして、こんな所にまで来させられたというのだろうか。

——あなた、黙ったままちゃんと会話するの苦手じゃない。

「そりやそうだよ。それで、話って？ 僕急いでるんだけど」

——あなた、一体どうしてしまったの？

「何のことだか分からない」

——分かる筈よ。さっきの……いいえ最近のあなたは、ずっとおかしいわ。

私の知ってる緑谷君は、あんなこと言うはずない

「……」

アズライトの言葉に口をつぐんだ。心も閉ざした。心を平静に保ち波風が立たないようにする。

——なのに……

彼女が悲しい顔をする。

緑谷の心にチクリと痛みが走った。これは自分が感じた痛みだろうか。それとも彼女が感じた痛みだろうか。

軍服のような服の端が揺れる。

幻のような自分にはか見えな存在だと、それは分かっている。

だがどうして、彼女の姿が見えるたびに目で追ってしまう。

ずっと前に彼女は言った。

人が心の底で望む最適な形に姿を変える、と。

つまり目の前のアズライトは、緑谷が望んだ姿にカスタマイズされたものだ。どうしても彼女が気になってしまうのはその為なのか。

——私は分からない。何が青石さんにそこまであなたが……

「分からない？　なんで？　冷静に考えたら分かるだろ」

アズライトの言葉を遮る。彼女が呆けた顔になる。



およそAIだとは思えない。いや、純粋なAIではないから当然だ。

彼女は個性だとはいえ、元は“人間”なのだから。

「青石さんの言っている事は、正しいのかも知れない。

誰もが敵ツイランにならない社会。

確かに理想だよ。でもそんな風になったら……君は……君が……」

——何を恐れているの？

「分かるだろ!？」

アズライトの肩が震えた。

「人が個性を持つてる限り、敵ツイランが居なくなるなんて。

絶対にそんなこと有り得ないんだ!

どんなに社会が進んでも、悪い奴は何処にだっている。

いくらでも出てくる! いくら青石さんでも、それはどうしようもない!

どんなに優れたシステムで管理しても、悪いことをする人間は居なくならないんだ!

それを青石さんが見たら、どうすると思う!？」

——それは……。

言いよどんだアズライト。

きつと彼女にも想像は付いたはずだ。

この世界には善人も悪人も、必ず両方いる。どちらかが居なくなることは無い。青石さんがどれほど力を持っていても、それは変わらない。

力が有ろうがどうしようもない。

人々が個性を持ち続ける限り、個性を悪用する人間は居なくなるならない。

個性が存在する限り、絶対に敵は居ツライなくなるならない。

きつとそれに青石は気付く。気付く日が来る。

それが緑谷には恐ろしい。

青石がそれに気づいたら、目の前の彼女は……

「ああそうさ…… つか絶対、青石さんが全員から個性を消す日が来る！

どんなに青石さんが呼びかけても、敵は絶対ツライに居なくなるならない。

この世界から個性が消えるまで、敵はいつまでも出てき続ける。

青石さん、この前言っただろ？

世界から個性を全部没収したら、敵はツライいなくなる？ って！」

今でも緑谷は思い出せる。

あの時の青石の顔、声、仕草も全て。

その言葉に緑谷は恐怖した。

彼女の破滅的な思考の一端。底知れない心の闇が溢れてきているのを感じた。

——でも彼女は、その気はないって……

「今はそうかも知れない。でも違う、その手段が青石さんの中に可能性として存在している。」

それが問題なんだ。いつか絶対、青石さんは皆から個性を奪わないといけない日が来る。

そうでもしないと、いつまでも敵が居ウイランなくなるなんてあり得ない。

でも、君はどうなるんだ！」

——私は個性よ。ただの個性。消えたところで……

「違う！ 君は個性だけど……心が有るだろ！」

常聞ダークシャドウくんの個性にだつて……。個性にも、心が有るんだ。

でも青石さんが大事なものは“人間”なんだ。

“個性”きみのことなんて眼中にも無い！

人の為に誰かの為に。そう言つて……。

間違いない、青石さんは……個性の君を殺しに来る！

個性が有る限り、敵は居ウイランなくなるから……。

現に青石さんは……！ 何人も敵をウイラン“無個性”にしてるじゃないか！

——それは、仕方がない事よ。緑谷君。仕方がないわ。

「仕方なくなんてない！ 僕は君を……君を！」

——緑谷君

いつにもなく強い口調のアズライトの遮り。緑谷は彼女を見つめた。

「アズライト……」

彼女の青い瞳に釘付けになる。

あの日、共同墓地で出会ってから一心同体になった。

それから助けてもらってばっかりだ。

オールマイトから譲り受けた力をコントロールできない緑谷を、彼女はずっと支えてくれた。

青石の個性がUSJで暴走した日も、雄英体育祭の時も、共に痛みを分かち合ってきた。

彼女がなぜ緑谷を選んで、力を貸してくれたのか。それは分からない。

けれども緑谷にとって、目の前の彼女は無くてはならない存在になっていた。

だから、失うのが怖い。

もしもある日突然、目の前から消えて無く居なくなるのではないか？

青石がああ無邪気な笑顔を浮かべて、彼女を葬り去る日が来るのではないか。

心配でならない。

いや、むしろ確信している。その日はいつか必ず来る。

青石が敵の撲滅を謳っている限り、個性を全人類から抹消する日は来るだろう。  
なら……。

——緑谷君、私は“個性”なの。“人”じゃないの。

もしあなたの言う通り、青石さんが私を消しに来る未来が来るとしても

それが“人”の為なら、私は受け入れる。

「アズライト！」

——私は個性よ。人工個性アズライト。

人の為に誰かの為に。その為に作られた道具。“人”じゃない。

緑谷君、青石さんに謝ってきて。もしも青石さんに怒鳴りつけた理由が私に有るのなら、それは間違っているわ。

“人”が幸せに生きられる世界以上に大事なモノなんて有る筈がないでしょう？

「……嫌だ……それでも僕は君に……君を……」

——緑谷君……

「絶対に、そんなこと！ させはしない！」

アズライトはそれ以上何も言わなかった。

ただ側に居て緑谷を見つめていた。

「……行かないと」

気付けば結構な時間が経っていた。

もうそろそろ、演習場に向かわなければ間に合わないだろう。

アズライトは何も語りかけては来ない。

ただ彼女からは戸惑いを感じられた。

緑谷には確信がある。

青石が何人もの敵を<sup>サイラン</sup>無個性にしている。

それは複数のメディアが報道していたし、紛れもない事実だ。

だが彼女本人はその事を気に病んでいる様子はないように見える。

“無個性”がどれほど苦痛をもたらすのか、青石ヒカルはまるで分かっていないの

だ。

<sup>サイラン</sup>敵を居なくならせるためなら、彼女は平気で全ての個性を消し去るだろう。

それだけは何としても避けなければならぬ。

その為にどうすればいいのか。緑谷の頭の中は目まぐるしく動いていた。

「遅いぞ緑谷」

「すみません」

遅れて着いた演習場。

端の方に青石の姿が見えた。ボロボロ涙が溢れていて、麗日が隣で慰めている。まるで緑谷が泣かせたかのように、周囲から冷たい視線が突き刺さってくる。でも関係ない。

青石がやろうとしている事は危険だ。

彼女が行き過ぎないように、誰かが泥を被つてでも止めなければならない。

緑谷は自らの中で黒い何か膨れ上がるのを感じる。

もう間もなく、午後のヒーロー基礎学が始まろうとしていた。

## 第66話

いつの間にか空は雲で覆われている。急がないと雨が降り出すかもしれない。

今日の授業はロボットを使う。尚更急がなくては。

漏電対策はしてはいるが、100%安全だとは言えない。

生徒が感電死でもしたら、笑い話にすらならないだろう。

相澤は簡単に授業の概要を説明し終えた。

いつものと言えればいつもの内容。

ロボットの仮想敵との戦闘訓練だ。ワイラン

「思いつきりぶつ壊してOKってことか！」

切島が腕が鳴るぜと張り切っている。

相澤は視界の隅の青石がようやく泣き止んだのを確認した。先ほどから麗日に慰めて貰っていたがようやく落ち着いたらしい。

まあ緑谷との言い争いはいつもの事だ。仲のいい友人同士直ぐに元の関係に戻るだろう。

相澤は特に心配はしていなかった。



「先生」

八百万が手を上げる。

「質問か八百万」

「本当に思い切り壊しても良いんですね？」

「そうだ」

「それはどうしてなのでしょう？」

「……質問の意味が分からん」

本当は何となく察したが、敢えてぼかして返した。

八百万は首を横に振る。

張り切っていた切島は、ポカンと疑問そうな顔になっている。

「何言ってるんだ八百万？ 戦闘訓練だぜ？」

それに相手はロボットだ。気にする事じゃねえだろ？」

「そうじゃ有りませんわ、切島さん。」

相手はロボット。それ故に相手の怪我や命の危険を、一切考えずに攻撃しても構わない。  
い。

だからこそ問題なのですわ」

八百万は真つすぐに相澤の方を見てくる。

(やはり八百万は気付いたか……。このロボットを使った授業の真意を)  
「……お前らもう何度かやってるな？ ロボットを使った戦闘訓練」

1—Aの生徒は一齐に首を振った。

「だがおかしいと一度も思わなかったか？」

世間という敵は何だ？

お前らは敵を想像するとき、それはロボットか？

ロボットがぶつ壊れる衝撃を本当に人間が受けたら、一体どうなると思う？

お前らがヒーローになった時、実際にロボットと戦う機会がどれくらいあると思う

？」

「それは……」

「ない……と思います」

「えっ？ あっそうか。でもだったら何で？」

生徒たちは授業の意味を探り始めたようだ。

八百万の言葉で今まではただ消化するだけだったカリキュラムの意味。

それをようやく考え始めている。

「馬鹿、そりゃ安全を考慮してだろ」

「本当にそれだけかな？」

「じゃあ何の意味があるってんだよ?」

八百万や相澤を置いて生徒たちの中で議論が交わされている。既に授業は始まっている。

本来の相澤ならとつくに「合理的じゃない」と止めて、授業に戻すところだ。だがそれは今回はしない。

今生徒たちは、本当に重要なものに気付き始めている。考えたら違和感だらけの筈だ。

なぜ戦闘訓練で壊していいロボットを使用するのか?

ヴィラン  
敵は生身の人間だ。

各々“個性”が有って千差万別ではある。状況もその時々で全く違う。

だがヒーローには守らなくてはならない大原則がある。

ヒーローは敵を殺してはいけない。ヴィラン

けれども、この授業はその原則に真つ向から対立している。

その矛盾に生徒は気付き始めた。

「よく考えたらよ。ロボットが壊れるような攻撃人間にしたら、下手すると死んじゃまう

ぜ?」

「ヒーローは敵を殺してはいけない。……なのに何故?」

更に生徒たちの熱が高まる。

「そうだ……おかしい。敵は生身の人間……。」

本来はロボットを使わず、もっと対人を意識した訓練をしないといけない筈なんだ」  
「だったらどうして……？」

そろそろ答えを言っていいかと思ひ、相澤は口を開いた。

「お前達」

静かだが声は良く通った。

生徒たちは一斉に口を閉じる。

相澤の目が細くなる。

「もう、分かっただろう。そうだ。本来はこんな授業“合理的じゃない”。

……本来、はな。

サイラン  
敵はお前たちが言っている通り、生身の人間。

それを意識した対人戦闘を行うのが、普通。当たり前前の話だ。

ロボットと戦うなんてそんな機会、全くないとは言わんが……。

殆ど存在しないからな」

「な……!?」

「……思い切り壊してもいい……怪我も考慮しなくてもいい……。」

つまり……そういう事ですか」

飯田がまず察したらしい。

八百万はとつくに気付いている。青石は最初から言わずもがな。

「どういう事だよ委員長」

「つまりこれは……。いざという時に……」

ためらいなく人を殺せるようになる。

その為の訓練をしている。そういう事だったんだ」

相澤は頷く。

クラスの空気が凍り付いた。

空の遠くから鳥の声が高く鳴り響く。

既に授業が開始され十分経とうとしている。

いつもの授業はもう無理だなと、相澤は察した。

……

……

……

「いざという時に……」。

ためらいなく人を殺せるようになる。

その為の訓練をしている。そういう事だったんだ」

飯田の声をぼんやりと緑谷は聞いていた。

だがその一言で現実に急に引き戻される。

「何を言ってるの飯田君？」

僕たちがなるのはヒーローだよ？ 人は殺さない。

<sup>ヴィラン</sup>敵は必ず生きて捕まえなくちゃいけないんだ」

だが相澤から言葉が投げられる。

「だったら何でロボットをぶっ壊す授業がある？」

「えっ？」

「本当にお前の言う通りなら、対人訓練ばかりしていればいい。

最初のオールマイトの授業のようにな」

相澤は緑谷を見てくる。相澤だけではない。クラスメイト達全員が見てくる。

「生徒の……安全面を考慮したうえで……」

「それは雄英側が、表向き用意した方便だ。

本当の意味は別にある。分からないか？」

緑谷は言葉に詰まった。

そう、本当に緑谷の言う通りなら、対<sup>ヴィラン</sup>敵を意識しなければならない。

殺さずに無力化する術を学んでいく必要が有る。

——だが、ロボットを使った授業はそのまるで逆。

とにかくぶっ壊してOKだ。

やりすぎで怒られたという事は無い。

実際に人に向けたら死んでしまう攻撃を、ロボットに向けてやっても注意されないのだ。

しかし、それはよく考えたらおかしい。

「本当にヒーローが”人を殺さない”という原則を守らせようと考えているならば、そこは修正されないといけないのだ。

攻撃は常に人を殺さないような威力に調整する。

そのように、求められないと辻褃が合わない。

「……緑谷、お前の個性。本気で人に向ければどうなるか、言うまでも無いな？」  
緑谷は頷く。

「緑谷だけじゃない。ここにいる全員だ。前に13号が言ったな？」

全員、その気になれば人を殺すなんて簡単な力を持っている。

個人が持つには余りにも行き過ぎた力だ」

「それは言われなくても分かっています！」

「じゃあ何でロボットをぶっ壊す授業を？」

切島の質問に相澤はしれツと答える。

「必要だからだ」

「だから何で!？」

若干切島は苛立っている。

ずっと信じてきたのに裏切られた。そんな顔をしている。

「仮定の話だが……無事このまま学生生活を終え、社会に出てヒーローになったとしよう。

そして色々な事件や敵<sup>ヴァイラン</sup>を見る事になるだろう」

全員黙って聞いている。

もつとも先ほど青石が、敵<sup>ヴァイラン</sup>の居ない世界。ヒーローの要らない世界にしたいと言っていたばかりだ。

そうならなかったとして、これまで通りの社会のままだったとして、仮定の話。

「逆に聞くがお前ら。その時に、全部を全部<sup>ヴァイラン</sup>。

敵を全く殺さず解決できるのか？」

「ヒーローは人を殺さない！」

「話を遮るな緑谷。だが敵<sup>ヴァイラン</sup>がそれを必ずしも許してくれると思うか？」



奴らは何でもする。本当に文字通り何でもだ。

人質、脅迫、囹、挑発、罠……。考えたらキリがないほどにな。

奴らは民間人も平気で巻き込んでいく」

「だったらどうしたと言うんですか？」

「お前は敵の命と、民間人の命。どちらを優先して守らなければならない？」

「だからそれは……！」

「民間人です。当たり前前の話です」

八百万がきつぱりと答える。

相澤が首を縦に振った。

「じゃあその次は？」

相澤が続けて問いかける。

「仲間のサイドキックや、自分の命です」

「では敵の命は？」

「優先順位的に言えば最後、になります」

「正解だ」

「で、でも！ そんなのおかしいよ！」

思わぬ人物が声を上げた。

青石ヒカルだ。

「命の価値に差なんてない！ 皆、同じだよ！ ヒーローも民間人も……敵も！」

ウイラン

皆生きてるんだ、命に優先順位をつけるなんて……」

「そうせざるを得ない。そういう話だ、青石ヒカル」

相澤が青石の方に歩み寄った。

青石の顔と、相澤の背中が見える。

青石は完全に戸惑った顔をしていた。

「ひゅー」

「全員が全員お前のように、完璧に助け切れたなら、誰もこんな話する必要はねえ。

でも俺たちは、お前のような力は持ちやいない。

時には全員助けられないことだってある。

……もちろん最善を尽くす。

だが、時には民間人を守るため、自分を守るために、ウイラン 敵を殺さなくちゃいけない。

そんな時もあるんだ」

相澤の話聞いて、緑谷も疑問が解けた。

皆の顔を見る。きつと自分も同じような顔をしているんだろう。緑谷はそう思う。

「ヒーローは人を殺さない。それが原則なんじゃないの相澤さん？」

「あくまでも原則だ。……人の命に代えられるもんじゃない。

とりわけ巻き込まれただけの、関係のない民間人とかは特にな」

「……現代のトロツコ問題ですわね」

「トロツコ問題？」

「後で調べるのをお勧めしますわ」

切島が八百万に聞いていた。

緑谷もトロツコ問題くらい知っている。

ようは命の選択の問題だ。

救える命が限られている状況で、何を基準に救う対象を決めるのか。

その思考実験だ。

同じことがこの社会でも起きている。

「敵<sup>ヴィラン</sup>を殺さなければ、民間人<sup>だれか</sup>が犠牲になる。

そんな状況になった時を想像しろ。

大抵の場合、考えられる時間なんてそんなに無い。

時には一瞬で判断を要求される。その時、今のお前たちはやれるのか？

体が動くか？

いざという時”出来ません”じゃ済まされないんだぞ」

「だから『いざという時』。躊躇わず攻撃……命を奪える訓練をしている。そういう事です」

「そうだ八百万。本来はそんな訓練せずに済むなら、俺だつてやりたくない。」

だが仕方がない。命の取捨選択を迫られる場面で、判断を誤らせるわけにはいかない。

甘えを持った奴から死んでいくんだ……。

いざという時、殺す覚悟が無い奴はヒーローには向いていない」

青石が俯いていた。

緑谷は何て言つたらいいか分からない。

オールマイトが前に何度も言つていた。

プロはいつだつて命懸けだ。その言葉の裏に、いったいどれ程の死線の数が有つたのだろうか。

相澤先生が言わんとする事、伝えたい事は分かつた気がする。

ヒーローは人を殺してはいけない。それは原則。

だがいざ民間人や、仲間が犠牲になろうとしている時。本当に敵を殺さずに済むだろうか。

いや、そうでは無いと相澤は言っている。現実には甘くない。

時には命を取捨選択しなくてはならない。

例え、正解が用意されていなくても。どれかを選ばなければならぬ時が、いつか来るのだ。

「だからこそ、雄英はロボットを使った授業をしている。

いざという時、容赦なく人の命も奪える攻撃も出来るように体に教え込む。

そうして徐々に、時間をかけて慣らししていくんだ。

ロボット相手に出来ない事を、いきなり人間相手に出来る訳が無いだろ」

「……やりますわ」

八百万が決意を露わにした。

他の生徒達も次々に同意する。

先ほどまでとはクラスの雰囲気が変わるで違っている。

青石の表情が見える。

こんな事は嫌だと叫びたい。そんな風に見えた。

「仕方がない……か」

委員長の飯田が本当に仕方がなさそうに呟く。

周囲の生徒も消極的にその意見に賛成していく。

始まる前はノリノリだった生徒も、今は違う。

隠された意味を知り、戸惑い困惑している。

緑谷の拳に力が入る。例えば青石がどのような選択をしようとも、自分のする事は変わらない。

青石の思想は危険だ。

今のまま行けば間違いなく彼女は、緑谷のアズライトを殺しに来る。

そんな未来緑谷には耐えられない。

——緑谷君……

緑谷のアズライトが出てくる。そつと彼女の手と緑谷の手が重なった。

——……例えばあなたが道を違えたとしても。何が有つても。私はそばに居るわ。

緑谷の胸の奥に熱い炎が宿った。

言葉を介さずとも互いに意思が伝わる。

かつて緑谷はヒーローになりたかった。オールマイトのようになればそれでよかった。

今もその夢は変わらない。だがそれ以上に、守りたいものが出来た。

憂いに深まる青の少女を見つめる。

彼女の透けた姿の向こうに青石が居た。

重なり存在する二人の青の少女を、緑谷は見る。

青石ヒカルは危険な道に陥りつつある。そう緑谷は確信している。その時止められるのは自分だけだ。

青石にも欲しい世界はあるのだろうが、緑谷だつて譲れない。

緑谷の大切なものは既に、今ここに有るのだから。

(絶対に守つて見せる。君も世界も、何もかも！)

——馬鹿……

拭えないアズライトの目から流れる一筋の涙。その理由が緑谷には分からなかった。空からポツンと雫が垂れた。

「雨が……」

最初は弱かったがどんどん強くなって振ってくる。

しまいにはバケツをひっくり返したような勢いになっていた。

「今日の屋外演習は中止する！」

相澤の声が遠く聞こえた。

いつの間にか生徒たちは相澤に連れられて、遠くの方に行つてしまつていた。

屋外では出来ないという判断だろう。

前を見る。ずぶ濡れの青石が居る。

彼女の顔が濡れているのは、雨のせいだけでは無いと分かった。

彼女と視線がぶつかる。

「君が降らせたのか？」

「……ボクが何もしなくても、雨はいずれ降るものだよ」

声が震えている。手も。濡れネズミになつて行く二人。

雷鳴が遠くで鳴る。更に風まで吹いてきた。

「止ませることは出来るんだろう」

「出来るけど、出来ない。緑谷君だつて分かつてるでしょ」

「君はどうしたいんだ？」

青石の顔がぐしゃつと歪んだ。

この空と同じくらい荒れている。

彼女は絞り出すように声を出した。

「……分かんないの。皆を幸せにしたいのに、出来ないの。

何かを助けると、何かが歪んじゃうの。何もかもは救えないの」

それが世界の真理で道理。

全ては救えない。

どれだけの力が有つても、変えようがない。

人という存在は、誰もが善人では無い。



個性がなくなろうが、敵は決して居なくならない。

だが青石は人々に山を動かさせ、水の上を歩け。そう言わんばかりに出来ない事を要求している。

人が人である限り、それは不可能な話だ。

「僕は、ヒーローになる」

「……うん」

「僕は……僕にも守りたいものがある。ゆずれない願いが有るんだ」

「ボクは、皆を幸せにしたい。……幸せにしたかった。君も……幸せにしたかった」

青石の背後に影が一つ刺した。

「青石」

「相澤さん……」

青石の隣に相澤が来た。青石を傘の下に抱いて招き入れる。

ぐっしよりと濡れた青石の服が、肌にびっちり張り付いている。

青石は寒そうに相澤の胸の中で震えていた。

世界で一番強い筈の彼女は、この瞬間は一番脆い存在に見えた。

「こんな個性でどうとでも出来ただろ。なんでしなかった？」

「……出来るようになったら分かるよ。相澤さんにもきつと」

「無茶を言うな。……とにかく教室に來い。緑谷もだ」

相澤から傘を投げ渡される。緑谷はアタフタしながらなんとかキャッチした。

「今日は教室で自習している良いな」

相澤と青石は相合傘に入ったまま去った。

緑谷はただ雨に打たれながら空を見上げる。

——戻らないの？

「ああ」

——傘、差さないと濡れてしまうわ

「今はこうしていたいんだ」

——そう

「……泣いてるの？」

アズライトが隣に居た。前に回り込む。

彼女は顔を上げようとしない。

自分の肩を抱き、静かにすすり上げている。それが何故なのか。緑谷には分からな

い。

人の悲しみを止める事が出来ないように、人に雨を上がらせることが出来ないよう

に。

彼女の涙をぬぐう事が、緑谷には出来ない。

世界の理不尽は、雨のように降り続けている。

緑谷は傘を差した。

目の前の彼女が濡れないように傘を持ち一步寄る。

——私は雨に濡れないわ

「でも……泣いてるじゃないか」

——そうね

「なぜ泣くの？」

——あなたが、それを分からないから

「……」

——ごめんなさい。困らせたい訳じゃないわ。でも今は……今だけは。泣かせてほしい

「今だけじゃなくていい。君はもつと我儘を言うべきだ」

——私は、作られた道具よ。あなたの個性。あなただけのための個性ちから。

「違う、君は人間だ。君は人の為とかそれより先に、自分の為にあるべきだよ」

——それは……

「違うなんて言わせない。僕は！僕は……」

先を言おうとしても言えない。言う勇氣が無かった。

それを言つてしまふと、決定的に何かが動いてしまつて、後戻りが出来ない。そんな予感がした。

——緑谷君……無理はしないで。

「……うん」

——いつか続きを聞かせてくれたら。それでいいから。

ただ、例え雨を止める事が出来なくても。

共に傘をさし、そばで待つことが出来たなら。

それが人の持ち得る一番の幸せなのではないか。

静かに泣き続ける彼女アスライト 青石ヒカルと彼女。

二人の青の少女が、理不尽を嘆いていて、だからこの世界の誰よりも優しい。

そんな事を緑谷は考えていた。

この世界の隠された真意は、雨の向こうに紛れて見えなかった。

## 第67話

雨は止むことなく降り続く。青石の今にも倒れそうな体を片手で支え、もう片方の手で傘をさし歩く。

青石と同じ傘の下ゆつくりと足を進める。

彼女はやがて口を開いた。

「相澤さん、ボクやっぱり間違えてるのかな？」

青石は悩まし気な顔をしている。

教室で緑谷と言い争っていたようだし、今さっきも何やら会話していた。思うところがあつたのだろうか。

「緑谷と何かあつたのか？」

「ちよつとね。……反対されちゃった。世界は変わる必要なんてない。

ツイン敵が出てヒーローが倒す。そのの何がいけないって」

「そうか、緑谷はそう言ったのか」

「うん」

しばらく青石から緑谷が話した内容を聞く。

緑谷の言い分にも一理ある。確かに青石の言っているのは理想論だ。それを言っているのが青石だからこそ、意味を持つ。

言葉は発言した人間によつて重さが変わる。ただの無力な人間が、ライオン敵の居ない社会にしたいと言つたところで誰が聞くだろうか。

いや、聞きやしないのだ。青石以外の誰が、それを言つたところで相手になどしない。青石を支持すると根津校長は言つた。けれども彼女以外の人間が口にしたところで、校長も聞きはしなかつただろう。彼もまた彼女の力しか見ていないのかも知れない。

「ねえ、相澤さん。ボク……」

「お前がどうすればいいのか、俺はその答えを持っていない」

「えっ」

青石の目が僅かに見開く。信じていたのと言わんばかりに衝撃を受けているのが分かつた。

「お前がやろうとしてる事は、今まで誰にも出来なかつた事だ。

今後も、お前以外の誰にも出来ない事だ。

だからどうすればいいのか、誰も答えを持っていない。校長も、オールマイトも、俺もだ」

水たまりが足で跳ねる。隙間から水が入り込んできて、靴の中はぐちゃぐちゃだ。

「これから先、お前に反発するのは緑谷だけじゃない。社会にはヒーローがないと困る人間がごまんと居る。」

ツイラン  
敵がない世界。ヒーローが要らない世界。

緑谷だけじゃない。お前が世間にそれを言うと、必ず反対する人間は出てくるんだ」

「……うん」

「それにな、そう急がなくてもいい」

一度相澤は立ち止まる。青石も足を止める。

視線が混じり合って、相澤は青石の体から手を放した。

「急がなくていいってそんな！ 今だって苦しんでる人が」

「焦るな」

彼女の頭に手を置く。彼女の表情はまだ晴れない。

「世界を変えるにしても時間はかかる。何年……もしかすると何十年もかかるかもな。」

何かを変えるってのはそう簡単じゃない」

「……そう、だよね」

「心配するな。何が有っても俺はお前のそばに居る」

「……」

彼女は相澤にしがみ付いてくる。

その姿はとても弱々しい。

青石が今何を考えているのか分からない。彼女の望みが何なのか、知るすべはない。だが相澤は思う。

彼女は人の為に誰かの為によりも、自分の為に生きるべきだ。

青石は本当は何処にでもいる、只の一人の少女でしかない。

そんな彼女に今まで重責を担わせてきた。けれども、もうそろそろ解放されてもいいのではないか。

「それにな、前にも言っただろう？ お前は人の為に誰かの為にじゃなくて、お前自身の為に生きるべきなんだ

世界を変える事だけ考えるんじゃない。もつと自分がやって楽しいものを探すんだ」

「自分の……？？」

「ああ」

「本当にそれで良いの？ ボクは人の為に誰かの為に、その為に作られて……」

「それで良いんだ。お前は自分の為に生きてみる。それが俺がお前にして欲しい一番の大事な事だ」

人は彼女の夢や理想を美しいと言うだろう。だが相澤はそれは違うと思う。

例え汚かろうが、人間は自分が一番大事であるべきなのだ。



自分よりも他人が大切だなんて、そんなのは人として壊れている。

「相澤さん……あのね……ボク、好きな人が出来たの」

「……そうか」

「自覚できたのは最近なんだけどね」

青石が照れくさそうに笑う。頬も赤く染まっている。

相澤は自惚れるつもりは無いが、十中八九それは自分だろうと思う。

普段の態度から青石の気持ちは、嫌という程察せられている。

「それで、どうしたいんだ？」

「で……デート……」

「ん？」

「その……えと……デート！　したいなあつて」

青石は両人差し指をツンツンしている。

ちらちらと覗き込むように相澤を見てくる。

「デートか、誰と？」

「相澤さんと！」

「……」

「あくまで予行！　予行練習だからね！

そ、その好きな人と一緒に行く時に失敗したく無いから！  
だから予め練習しておくの！」

「そうか予行か」

青石は相澤の言葉に飛びつくように首を縦に振る。

もう彼女の顔はこれ以上赤くはならないだろう。それほどに血が巡っている。

ゆでだこの様になるといふ表現ではとても追いつかない。

「だから！ あの一……デート」

尻すぼみになる青石の言葉。本当は相澤だつて分かっている。

青石が誰が好きなのか。

ただそれを正直に言うのが恥ずかしいだけだろう。

「ダメ？」

「……分かった、行こうか」

その一言に青石の顔が一気に晴れる。

先ほどの涙が嘘のように笑う。

「やった……！ やったあー！」

青の少女が無邪気に飛び跳ねる。彼女が拳を突き上げると、空を覆っていた雲が一瞬で蹴散らされた。

太陽との障壁は無くなり、一気に強い日差しが差し込んでくる。

「あははははははは！」

青の少女が太陽に向かって手を伸ばす。彼女なら本当にその気なら、太陽だって掴めるだろう。

相澤は眩しくて目をすぼめた。

思い出すのは昔。

彼女がどれ程までに外に憧れていたか。人を恋しく思っていたか。

利用され、殺される筈だった彼女がこうして笑っている。幸せを感じてくれている。

彼女の顔に今ある笑顔は、本物だ。

人の為に取り繕い、恐怖を誤魔化すためじゃない。

心の底から溢れた感情が、そのまま表に現れた本物の笑顔だ。

彼女の夢の先にどれほどの困難があるか分からない。

だが相澤はこの笑顔だけは守って見せる。そう心の中で固く誓った。

空は青く澄み渡り、どこまでも際限なく広がっている。

「相澤さん、約束だよ！ デート！ 行こうね！」

彼女の笑顔は、空より晴れ渡っていた。

……………

……

麗日お茶子は中断し、自習となった午後を教室で過ごしていた。教室の中には麗日以外には誰も居ない。

各々学校の中に散っている。

主に人気があるのは室内の演習場だろうか。

雄英では当然屋内で個性を使用できる演習場も設けられている。

その使用許可を得ているのだろう。

個性は原則使用が禁止されている。だがそれはあくまでも建前だ。

現にこの雄英に入る時には当然のように、個性をどれだけ使いこなせているか。それを確認する実技試験があった。

普段から個性を使用していないと本気で雄英側が考えている筈がない。

むしろ人の目を盗み、どれだけ自身の個性を磨き上げているかをチェックしている。

だから当然、1-Aのクラスメイト達も全員、普段から体や個性を鍛えているのだ。

そうでないと一流のヒーローにはなれない。

まあ今では麗日はヒーローになりたいと考えてはいない。

だが少なくとも、雄英に入るまでは本気でヒーローになりたいと

机の上に広げているのは明日の授業の宿題。

雄英は進学校としての一面も有る。ヒーローとしての授業に加えて、当然通常の教科もある。

そして宿題も勿論山のようにしなければならぬ。

ヒーローの世界は厳しい。もし夢かなわず脱落したとしても、食べていけるだけの教養は身に付けなければならない。だから雄英側は勉強に力を入れる。

それに青石の夢の先にはヒーロー達は必要ない。

今のうちにヒーローとは別の進路を視野に入れておく必要が有る。

「集中でぎん……」

だが集中が出来ない。

心の中に青石の姿が幾度も再生される。教室を見渡しても青石の姿は無い。そして緑谷の姿も無い。

集中しようとしても、青石と緑谷のやり取りだけが頭の中に再生される。

ふと麗日の心のどこかで悪魔が囁く。

もし困窮に追いやられたとしても、青石が助けてくれるぞ、と。

だが麗日は首を振って、その誘惑を振り切る。

出来れば青石の手を借りず、自分の夢は自分で叶えたい。

先日青石が麗日の自宅に大量の現金を持ってきたことが有った。

麗日の家が裕福では無いと知った青石が善意でお金を譲ろうとしたのだ。

ジェラルミンケースにギチギチに詰められた札束を見た時は血の気が引いた。

青石はとつくに大金持ちになっていたのだ。

だが、麗日とその両親は青石の提案を断った。

現状暮らしていけるだけのお金はある。だからそのお金は困っている人と、自分自身の為に使って欲しい。そう言つて諭した。

青石は渋々と言つた感じに引き下がった。

彼女は未だに教室に帰つてこない。いったい何をしているのだろう。

ふと、降り続いていた雨が突然止んだ。

外から眩しい日差しが肌を刺してくる。

麗日は教室の窓から外を見る。空は先ほどとは一転して晴れていた。

「青ちゃん……」

課題を進めていた手が止まる。

同時に教室の扉の方から音がする。青石が静かに教室の中に入ってきた。

「青ちゃん……えっ何その顔!?!」

今まで見た事が無い青石の顔に麗日は腰が引けた。

「うえへへへへ。なあにお茶子ちゃん？ 何かあった？」

にやけが止まらない頬。青石は両手でしきりに顔を覆い「キヤー」と声を上げています。そして虚空を見つめてえへへとにやける。

一言で言うとお変質者だ。

いけない薬でもやってるのではないか。そう疑いたくなるほどの、普段の青石からの変貌ぶりだ。

「いやなに？ じゃないって！」

何が有ったのか聞きたいのはこっち！

「えへへへ、そう？」

そして暫くしてから、青石は何が有ったかを洗いざらい話した。

「デート!? 青ちゃんが相澤先生と？」

「えへへ、そうなんだよ。えへへへへ」

「や、やっぱり青ちゃん本気だったんだね……」

麗日は余りにも嬉しそうな青石の顔にたじろいでいる。

「うん？ 何が？」

「……青ちゃんは今何歳？」

青石は少し考えこむ。

「えとね……16だよ」

「相澤先生は？」

「30だよ」

今度は即答した。

（年の差！）

ほほ倍だ。

前々から青石の恋心はとづくに気付いていたが、ここまで本気だとは思ってなかった。

麗日は多分相澤がその内振ってしまつて、ご破産になる。てつきりそうなるものだと思っていた。

だから内心、青石が失恋したときにどうしよう。そればかりを考えていたのだ。

「デートは青ちゃんから誘つた？」

「うん、そしたら良いよつて」

（つていうか相澤先生もノリノリー!?!）

「えへへ、どんな感じになるのかなあ？　楽しみで仕方ないんだよ！　お茶子ちゃん！」

「う、うん、良かったね」

「うん！　えへへ。えへへへへ」



青石は自身の席に腰かけた。ベターっと上半身を倒して不敵に笑い続ける。

(……先生と生徒。これって……。でも青ちゃんが幸せそうならそれで良いっか)  
「えへへへへへへへ」

(……本当に良いのかなあ?)

青石が相澤をどう思っているかなど、周囲の人間から丸わかりだった。

しかしこれまで目立った進展は特にはなかった。

だがしかし、今回青石がデートに誘い、相澤はそれを受けたという。

(相澤先生、何か考えが有るんだよね? だって青ちゃんまだ子供で学生だもん)

間違えても一線を越えない事ばかりを麗日は祈る。

青石の顔は今まで麗らかが見た中で一番幸せそうで。

それを見ているととても羨ましく思えてきた。

やがて教室に人が戻ってくる。

各自トレーニングを終え、意見交換をしている。それぞれのノウハウを教え、お互いの課題を見つける為だ。

青石が八百万の方に嬉しそうに駆けていく。

大声で自慢するように話をしているので、麗日の方にも聞こえてくる。

早速八百万が腕まくりをしていた。

どうやらデートプランを考えようとしているらしい。

でも青石がデートするとなると、おそらく雄英が動くはず。八百万の出番はないだろう。

だがいつまで経つても、緑谷の姿は無い。

いったいどこで何をしているのだろうか。今頃先生に怒られてもしているのかもしれない。

(何してるんだろデク君……心配だけど。多分大丈夫だよね?)

心配するが、まあ緑谷だし大丈夫かと麗日は頭の隅に置いておいた。

ワイワイと騒いでいるクラスメイト達。そんな何でもない風景を見つめながら、午後の時間は過ぎていく。

いつまでもこの時間が続けばいいのにな。

麗日はそんな事を考えていた。

日が傾き、空は茜に色付く。

一日の終了を告げる鐘が、無情に鳴った。

結局、緑谷は帰ってこなかった。

## 第68話

「キヤーもうキヤー！」

青石は有頂天だった。

相澤に駄目で元々と思いいねだったデートへの誘い。それが二つ返事で了承を貰えてしまった。

それからは浮かれっぱなしだ。

職員室へとスキップしながら青石は向かう。

職員室に向かう理由は、先ほど校内放送で呼び出されたからだ。

「お邪魔しまーす！ 相澤さーん！」

職員室の扉を勢いよく開けた。

開けた扉のすぐそばに相澤がいた。

「青石、デートは……」

「うん！ いつにする?！」

青石はニコニコ顔で聞く。もう嬉しさが溢れてきて抑えきれない。

「しばらくお預けだ」

相澤の言葉に思考がフリーズした。

耳がおかしくなったのかなと思ひ、もう一度聞いてみる事にする。

「しばらくお預け？」

「しばらくお預けだ」

返事は変わらず、やまびこのように帰ってきた。

「……えええ!? どうして!？」

相澤が耳を塞ぐ。青石のキンキン声がやかましかったのか。

相澤は青石を連れて別室へと連れていく。

青石は相談室の中に連れ込まれた。

先ほどまでの青石の中の高揚感は、たちまちの間にしぼんでしまった。

「お前と緑谷の会話だが。かなり問題になっている」

「え？　なんで？　誰が？　先生が聞いてたの？」

「監視カメラがあるだろ」

「あ、そっか」

すっかり忘れていた。青石は今こそは、行動の自由が保障されている。

けれども雄英ひいては日本にとって、青石は機密の塊。

当然行動が予測する範囲において、彼女の言動は監視されている。

だから教室に監視カメラが設置されて無い訳が無い。

「ひとまず、お前が緑谷と関係を直すまではデートはお預けだ」

「どうして？」

「お前は友達よりデートが大事なのか？」

「それは……」

相澤に問いかけられて、答えに困った。

分かっている。緑谷は友人だ。彼とこのまま分かり合えないまま終わるのは嫌だ。

「分かっている。緑谷君とちゃんと仲直りしたい。分り合いたいよ」

「それが聞きたかった」

頭をわしやわしやされた。普段は笑顔になる青石だが、今回はそんな気分にもなれない。  
い。

相澤に言われて理性が戻った。ピンク色になっていた頭に冷静さが戻ってくる。

そして

デートが出来ると思って、緑谷との間に起きた諍いさかいが頭から飛んできた。

何とかしなくてはいけない。

けれども、どうしたらいいのか分からない。

彼と青石では、決定的に食い違っている。

「皆やつぱり監視カメラで？」

「ああ。その録画された映像と音声だ。俺も見た。緑谷が、かなり問題視されている」

「そんなに緑谷君いけない事言ったの？ 確かにボクはショックだったけど……」

「お前がどう捉えたかは知らん。だが教師おれたちの間じゃ、ヒーローにあるまじき自分勝手な考えが見え透いた発言……」

そんな風に捉えられている。緑谷、結局教室に帰ってこなかったろ？」

「うん……どうしたのかなって思ってた。お茶子ちゃんも心配してたし」

「ずっと教師たちに叱られてたんだ。」

今も、こてんぱんに教師たちに絞られている筈だ、緑谷は。

少し見たんだが、本人にもあまり反省の色はない。このままだと……雄英に居られなくなるかもな」

「そんな!？」

緑谷が青石に向けた言葉は、確かにショックだった。

傷ついたことは確かだろう。

けれど緑谷がどんな風に考えるか、それは緑谷の自由だろう。

青石の言った事に全面的に賛成の人も居れば、反対の人も居る。

青石は緑谷の発言を思い返してみる。

彼が発言した内容は、確かに身勝手かもしれない。だけど教師たちにいちいちお小言を貰わなければいけない事なのだろうか？

「ボクどうすれば……」

「俺に策がある」

「策？」

相澤が青石の耳元でごによごによ囁く。

それを聞いた青石は思わず大声を上げた。

「ええええー!!」

「出来るだろ？」

「で、出来るけど……でも……ええええ!!」

「せっかくだ、お前の休暇も兼ねられる。一石二鳥だろ？」

「そ、そうなのかなあ？」

「頼んだぞ」

相澤の手が肩に乗せられる。

かけられた期待がかなり重く感じた。

(つていうか、そんなことで上手くいくの!?)

……

……

…

「つたく緑谷よおー！ 聞いてんのか!? ああ!？」

「あ、はい聞いてます」

緑谷は適当に相槌を打ちつつ受け流す。

目の前のプレゼント・マイクの額に青筋が浮かぶ。緑谷は心の中でため息を吐いた。(いつまで続けるつもりなんだ。僕は何も悪くないのに……全部青石さんのせいだ)

かれこれ数時間はこうやって狭い部屋に閉じ込められて、お小言を言われ続けている。

「つていうかここは何処なんですか？」

「ああ？ 懲罰房ちやうばつぼうだよ。使う事なんて滅多に無えけどな」

「そうですか」

緑谷は改めて部屋の中を見た。

本当に何も無い簡素な狭い部屋だ。広さは畳7、8畳ほどか。天井も低く二メートルぐらいしかない。娯楽になるものや、調度品は何もない。

あるのはテーブルが一つに、椅子二つ。

どちらも無骨な見た目をしている。自身が腰かけている椅子を何となしに触ると、ひ



んやり冷たい。

頑丈な金属製なのだろう。少し手を動かすとざらついた面に触れた。

手を目の前に持つてくると赤い錆がついている。

メッキがはがれた場所が錆びついて、変色していた。

よく見るとテーブルと椅子のどちらにも、あちこちに錆が見受けられる。

およその外面は、メッキで綺麗に保たれている。が、果たして中身はどうだろうか。それは社会の現状を彷彿とさせた。

「ちっ！」

プレゼント・マイクは分かりやすく舌打ちを鳴らした。

イラついているのがよく分かる。

だいたい何故教師たちが誰も彼も緑谷に説教師に来るのか。これが分からない。

青石との言い争いだって、言ってみれば言い争っただけ。

暴力沙汰でも何でもない。

青石と思想の面に対立しただけだ。

考え方なんて人それぞれで、尊重されるべきだろう。

この学校では思想の自由すらも認められないのか。

プレゼント・マイクは何かぼやきながら出ていった。

外側から鍵を掛けられる。足音はやがて遠くに去っていった。

そつと扉に近づいてドアノブを回す。やはりカギはしっかりと掛けられていた。

緑谷は息を吐く。

ここから無理やり出るなんて簡単だ。個性を使えば扉や壁などぶち破れる。

だがそんな事した日には、たちまち敵<sup>ツライ</sup>扱いだ。

第一外にどのくらい人が居るか分からないのに、そんな事するわけにいかない。

吹き飛ばしたガレキに当たり、打ちどころが悪ければ即死も有り得る。あり得ない選

択肢だ。

緑谷は元居た椅子に再び腰かける。

どのくらい経つただろうか。しばらくすると鍵が開く音がして、のっそりと影が入り込んできた。

「緑谷」

「相澤先生」

担任の相澤先生だった。

緑谷は目を逸らす。

「あなたも僕を怒るため来たんですか？」

「いや」

「だったらどうしてここに？」

「お前の担任は俺だ。俺には担任としての責任がある。」

当然――Aの奴ら全員の言動にな。その責任の範疇には当然、生徒のメンタルのケアも含まれている」

「僕にメンタルケアが必要……？」

「俺はそう判断した」

「冗談じゃない！」

緑谷は興奮して椅子から立ち上がる。

「僕はまともだ！ おかしいのは皆の方だ！」

青石さんの言う事なんてまとも聞いて！

今の社会を否定して、ヒーローを無くすなんて滅茶苦茶言ってる！

青石さんに頭をやられてしまったのは、僕じゃなくて皆の方でしよう！」

「だから、落ち着け、俺はお前に説教をしに来たんじゃない」

相澤の視線に緑谷は動揺した。いつもの上から押さえつけるような目では無い。

本当に可哀そうなものを見るような、どこまでも憐れんだ目をしていた。

今の緑谷を彼がどう思っているのか、言葉にしなくても分かった。

目は口程に物を言う、だが今回は言葉よりも雄弁に物語っていた。

「……はー」

「俺はお前のいう事にも一理あると思ってる。」

青石の言っている事は理想論だ。

ウイラン  
敵が出てヒーローが倒す。

社会はそれを前提として成り立つてる。変えるなんて、よほどの力が無いと不可能だ。

それこそ青石程の力でもない限りな」

「……」

黙って相澤の話を聞くことにする。

何か口を挟むだけ無駄だろう。それに相澤は一步離れた視点で見ている。

緑谷の言い分にも理は有ると認めてくれた。

多分誰よりも冷静に判断しているのが相澤だ。きっと緑谷よりも多くの者が見えて  
いる。

「俺は青石の……青石に協力しようと思う」

「っー」

けれども、相澤のその一言に心が揺れる。やはり相澤も青石を否定はしていない。

「だが緑谷、本当にヒーローは敵が居ないと成り立たないか？」

「ヒーローの報酬は歩合制です。敵ツイランが居ないと、成り立たないでしょう？」

それに敵ツイランが居なくなったら、政府もヒーローをいつまでも制度で運用する必要がない。

敵ツイランが居なくなったら、ヒーロー制度が無くなる。そんなの誰だって分かります」

「そうじゃない緑谷。お前がなりたいモノは、国から認められなくなっただけで居なくなってしまう。」

「そんな柔でちやちなモノなのか？」

「……訳が分からない」

相澤の言葉もよく理解できない。質問の意味が理解できない。

緑谷がなりたいのは、ヒーローで公務員だ。国が認めてくれないと、なれないのは当たり前じゃないか。

敵ツイランをぶっ飛ばさないと、お前はヒーローになれないのか？」

「じゃあどうだって言うんですか!?! 意味不明ですよ!」

相澤の遠回しな言い方に緑谷はいきり立つ。いったい何が言いたいのかまるで伝わってこない。

だが彼は表情をまるで理解できない緑谷の方が可哀そうだと。そう言っていた。

「俺の目が正しければ少なくとも……入学したときのお前になら、今の質問に答えられ

たはずだ」

「何をっ……っ？」

戸惑う緑谷に相澤は畳みかけるように話しかける。

「入学したときのお前は無力だった。手にした力の半分どころか、多分数パーセントだっけ使えてなかった。

だが力への執着もなかった。

強くなってお前は変わったよ。昔を知らない俺でもよく分かる。

力を手に入れて、お前は自身をつけた。けど反面、傲慢になった。

人の気持ちを、理解しようとする気持ちを忘れてしまった。

お前は力に執着して、失うのを恐れるようになってしまった。

……今のお前は、“勝つ”ためなら何だっけするだろう。

それこそ、最優先に守るべき被害者だっけ、必要と分かればその場で利用するくらいには」

「だから何だっけ言うんですか?! 勝たなきゃ何も守れない! 当たり前前の話でしょう!?

そうだ、トロッコ問題だ。……八百万さんだっけ言ってた。

結果の為になら多少の犠牲が出て、最善の選択をしなくちゃいけない。

例え守るべき一般人も、結果の為なら利用しなくちゃいけない。

それがヒーローでしよう!？」

「緑谷、はつきりと言わせてもらう。それは絶対に違う」

「は?」

「結果を出すことは大事だ。だがそれ以上に、ヒーローには超えてはいけない一線がある」

「矛盾してますよ。時には敵を殺さなくちゃいけないって、言ったのはあなただ!」

「矛盾なんかしてない。もういいさ。緑谷、今のお前には何を言っても分からないだろ。鏡が有ったらよかつたんだがな。今のお前、どんな顔してると思う?」

「……なにを」

相澤に指摘され、頬に思わず手が伸びる。そんな緑谷を見て相澤は薄く笑った。

「緑谷、俺はお前に一週間の休暇をやろう」

「そんなもの……!」

「やると言っただんだ。大人しく休め」

語気強く言った相澤。

「……はい」

緑谷は大人しく従う事にする。

「言っておくが除籍や退学じゃない。安心しろ。公欠扱いだ。少し待ってろ。持ってくるものが有る」

相澤は部屋の外に出ていった。何もする事が無くなり、手持ち無沙汰になる。相澤との会話は緑谷を動揺させた。

彼が言っている事もまた滅茶苦茶だ。

時にはヒーローが敵を殺さなくちゃいけない。そんな時が有る。

それは緑谷は理解した。

時には非常な判断も要求される時がヒーローには有るのだ。そして反面彼は超えてはいけない一線が有るという。一体それが何なのか教えてくれなかった。

「何だっけ言うんだよ……」

「待たせたな緑谷」

10分ほど経っただろうか。相澤が戻ってきた。

だが先ほどもと違い、彼は手ぶらでは無い。

彼の手には一匹の猫が抱えられている。黒と白のトラ柄の猫だ。

猫の青い目と視線があう。

「にゃおー」

猫はまるで緑谷に挨拶するように鳴いた。



「可愛い猫ですね。名前は？」

「こいつは……ウラキだ」

「誰の猫ですか？」

「俺の猫だ」

「にやにや！」

まるで猫が相澤に抗議したかのように緑谷に見えた。

「へー……」

「こいつを休みの間飼ってもらおう」

「は？」

「知らんか？ アニマルセラピーだ。猫はいいぞ。」

猫が傍に居ると人間は癒される。科学的にも証明されてることだ」

「ふざけないでください！ 誰が……」

「ふざけてなんかいない。これは担任の俺の判断だ。」

大人しく従ってもらおう。緑谷、お前は一週間学校を休め。

その間、こいつと一緒に過ごすんだ。色々振り返ったり、好きにしろ。

ただし、この猫とは一緒に居ろ。ずっととは言わんが、出来る限りな。

きつとこの猫がお前を助けてくれる」

「その猫にいったい何が……」

「詳しくは聞くな。なに心配はない。ちよつと普通より賢いだけの普通の猫だ。親御さんにも連絡済みだ。」

今日から一週間お前に預けるぞ」

そう言つて相澤はテーブルに猫を置く。猫は緑谷と相澤を交互に見ている。

不安なのだろうか、尻尾はだらんと垂れていた。

おずおずと猫を受け取ろうとする緑谷。

「えつとこうですか？」

「違う！ 肩じゃなくてちゃんとお腹を支えるんだ！ じゃないと負担がかかるだろうが！」

「す、すみません。こうですか？」

「そうだ」

相澤に怒られながらトラ猫を何とか抱える。想像以上に柔らかく温かい。毛並みも綺麗だ。種類までは分からない。後で調べてみようか、そう緑谷は思った。

「にやにや！ にやおー」

猫はバタバタ尻尾を振つた。嫌そうに抵抗したので、緑谷は放してやる。

猫はスルツと手をすり抜けて床に着地する。

そそくさと相澤の足元にすり寄った。

「にやお、にやおー!」

まるで離れたくないと言わんばかりに、相澤に向けて鳴いている。

先ほどから緑谷の猫の印象より、やたら鳴いている。鳴き癖でも有るのだろうか。

「今日から一週間緑谷と暮らすんだ。いいな?」

猫の尻尾は不安そうに振られていた。

緑谷は予想していなかった展開に、心が揺れた。

……

……

……

「ただいまー」

緑谷が扉を潜る。

青石は大きな扉を見上げた。

集合住宅の金属のドアは、今の青石にとってはとても頑丈で重たそうに見える。

まるで巨人の住む家だ。

「おいでウラキ。一週間だけだけど、君の家だよ」

「にゃあ」

青石はおもわず声に出して返事をした。そして声からは猫の鳴き声しか出てこない。なぜなら、今青石は……。

(どうして、うう。相澤さんの馬鹿！)

白黒縞模様のトラ猫になっているのだから。

……。

「ね、猫になって欲しい!？」

「そうだ、猫になって一週間、緑谷と一緒に暮らすんだ。当然、緑谷に正体は伏せてな」

「……相澤さん、頭どうかしちゃった?」

「どうもしてない。これは立派な策だ」

「どこが!？」 緑谷君、第一学校が有るでしょ?」

「休ませる」

「ボクは?」

「お前も休め。だいたいお前は疲れてたんだ。本当はもっと休みが必要なんだ。

一週間くらい一緒に休んでしまえ」

「ええ……」

青石は呆れてしまう。

相澤が猫が好きだというのは知っている。

だが青石自身が猫になって、緑谷と一緒に過ごすなど……どうかしてるとしか思えない。

およそ正気の沙汰では無い。

「どうした？ それとも何か？ 猫になれないか？ 流石に青石でも無理だったか」

煽るような相澤の口調に思わず青石も反論してしまう。

「で、出来るもん！ 猫になるくらいどうってこと無いもん！」

「じゃあ決まりだな」

「うう」

「お前たちは、お互い何も知らないんだ。青石、お前は緑谷の何を知ってる？」

「し、知ってるよ！」

「何を？」

「えと、その。ううー！」

「まあ何も知らんだろう。そんなもんだ。そんな状態で分かり合うなんて出来る訳ないだろ。」

だから猫になって、お前の知らない緑谷を知ってこい。

お前の知らない緑谷の姿がある筈だ。きっとそれがお前たちの未来につながる」

「……本当に？」

「少なくとも、俺はそう信じてる」

「……分かった」

「あ、一応言っておくが、猫の時でも。万が一の為に個性は使えるようにしておけよ。

それに元に戻れないなんて、無いようにしろよ。分かっているな？」

「えと、うん。大丈夫だとおもう。一応チェックしておくね」

「ああ」

青石はレギオンと思考を共鳴させる。自らの個性の力を行使する。

猫になるだけは簡単だ。猫は何度も見てきた。

肉体そのものを猫にするのではリスクが大きいので、別の猫の体を新たに作る事にする。

その猫の体を自分の意識で動かせばいい訳だ。

いわゆる電脳上のアバターを作る感覚か。

青石はさくつと本物と同様の猫の肉体を作り、それを自身の体として設定する。

意識が元の体を抜け出して、アバターたる猫の体に移る。

元の体は別の空間を作って、そこに収納した。これはアニメに出てきた青い猫型ロボットのアイテムをまねたものだ。

アニメ等の創作物は自身の個性の発想を助けてくれる。青石は時折漫画やアニメを見るが、自身の能力の使い道を広げるためという面もある。

「にやお（どう?）」

「完璧に猫だな。おおよしよし、こっちにおいて」

巨人となった相澤が青石に手を伸ばしてくる。

青石は怖くなってパツとその場から引いた。

「どうした? 何故逃げる?」

「にや、にやおー……（だって怖い）」

猫の目から見た人間は、青石の想像より遥かに巨大で怖かった。

青石は元に戻れるか試してみる。

猫の体は消え失せる。意識を異空間にしまった元の体に戻す。

これらの作業はものの一秒も経たずに終わっている。他の人の目からみたら一瞬だろう。

「うん、大丈夫」

元の体に戻った事を確認する。

こういう力の使い方をしたのは初めてで、少し怖くはあったが、同時に新鮮でもあった。

猫から元の姿に戻った青石を見て、相澤は不満そうな顔をしている。

「わ、分かったから。ちよつと待って。今のはテストだから！」

「分かつてるさ」

再び青石は猫の姿へと変身したのだった。

そして懲罰房で緑谷に引き渡されてから、緑谷の自宅へと行き今に至る。

……。

「あらー！ 可愛いわね。出久名前は？」

「ウラキだつて」

（何がウラキだよ！ H I K A R U を反対から呼んだだけじゃん！）

あまりにも適当な命名に青石は憤慨する。

「出久、学校から連絡来たよ。一週間休みだつて」

「……うん、ごめん」

緑谷とその母は食卓で会話している。

青石は目の前に並々と盛られている、キャットフードに一口も手を付けていない。

頭の中は相澤の意図を探る事で精一杯だ。

もう一度相澤の言葉を思い出してみる。

——猫になって、お前の知らない緑谷を知ってこい。



お前の知らない緑谷の姿がある筈だ。きっとそれがお前たちの未来につながる（うう、緑谷君ごめんね）

騙しているように気が引けるが、他ならない相澤の頼みだ。

きっと考えなしにはこんな馬鹿げた事をさせないはず。

相澤の言う通り、まず緑谷の知らない面を知ってみよう。青石はそう思った。

「それにしても。全然食べて無いわねこの子」

「にやああー！」

突然前に手がかざされた。いきなりの事でびっくりして、思わず目の前の手に噛みついてしまう。

「痛っー！」

緑谷の母が手を押さえていた。血こそ出て無いが、青石が噛んだ部分が痛いらしい。

青石は動揺した。

「この！ ウラキ駄目だろ！」

「にやあ、にやああ（ご、ごめんなさい）」

緑谷の怒声も相まって恐怖に体が包まれた。

何も考えず一目散に玄関向けて走り出す。扉をすり抜け圧倒言う間に廊下を駆け抜け、玄関に到着した。

猫の鼻では靴からやけに匂いがしみ出していた。

「にやつ！ にゃあ！」

ドアノブめがけてジャンプする。何とかドアを開けて、家からの脱走を図るが上手くいかない。

ドアノブにあと一步のところで手が届かない。

ようやく一瞬触れたと思ったら、つるつと滑ってしまった。

人間の手と違つて握れるようにはできておらず、踏ん張りがきかない。

「にゃああああ」

「なに逃げようとしてるんだよ」

駆けつけた緑谷に捕まってしまう。そして玄関へと通じる廊下の扉がボタンと閉められた。

もはや脱出口は無い。

悪気は無かつたとはいえ噛みついてしまったし、青石に罪悪感はある。

緑谷の母の前に連れ戻され、青石はうなだれた。あくまで猫の姿であるが。

「ほら」

（ううう、ごめんなさいー）

「出久。この子も反省しているみたいだし、許してあげましょう。」

いきなり触ろうとした私が悪かったの」

どうやら、この女性は心が広いようだ。

青石が囁んでしまった事も許してくれるらしい。

(ううう、これからボクどうなっちゃうの?)

相変わらず緑谷達人間は巨人のように見える。猫から見た世界は何もかも違って、戸惑う事ばかりだ。

何よりこの緑谷との共同生活で、彼の事をもっとよく理解したい。

相澤も言っていた、緑谷の事何も知らないだと。

青石は緑谷の方に寄ってみる。じつと顔を見つめると頭をそつと撫でてきた。

撫でられる感触は心地いい。

撫でている緑谷の顔は、青石が今まで見た事が無い表情をしていた。

青石は緑谷の今まで知らなかった一面を垣間見て、少し嬉しかった。

盛られたキャットフードを一口食べてみる。

いつぞやぶりの、あの合成食品の味によく似ていた。

(懐かしい味がする……)

出されたキャットフードは悪くない味だった。

## 第69話

雄英の校舎に明かりが灯る。

相澤が一つため息を吐いた。疲れ切った体を椅子に深々と沈める。

周りを見ても誰も居ない。

職員室に残っているのは相澤消太只一人だった。

「ちっ……」

舌打ちしながらも黙々と作業をしていく相澤。

相澤はI—Aの担任だ。当然それ相応の仕事が割り振られている。

だが彼は青石ヒカルの監督も兼ねている。

彼女に時間を割り振ればその分、他が忙しくなるのは当然の事。

周りのサポートは当然あるが、どうしても細かな雑務が毎日少しずつ溜まっていく。

おかげで処理しなければならぬ書類が山のようになっている。

「お疲れ、相澤君」

机に缶コーヒーがトンと音を立てて置かれた。

「……オールマイト」

「おごりき。少しは休みなよ」

コーヒーを置いた人物はオールマイトだった。

痩せたその姿からは全盛期の姿を想像する事は難しい。

ふと疑問がわいた。

青石はインターンの間、片っ端に日本中の人間を治療した。

おかげで大体の人間は五体満足の生活を送っている。

目が見えない人は見えるようになり。

足が無くなった人も、手が無くなった人も、元通りに再生された。

耳が聞こえない人も聞こえるようになったし、寝たりきりだった人は歩けるように

なっている。

しかし、目の前のオールマイトが治療されたようには到底見えない。

「オールマイト……」一つ聞きたい事が」

「なんだい？」

「……いえ、何でもありません。忘れてください」

「そうか？」

オールマイトはキョトンとしている。

相澤は疑問をそつと胸の内に閉じ込めた。

相澤がオールマイトの立場だったらどう考えるだろうか？

彼が過去に青の少女にした仕打ちは知っている。

それがきっかけで青石はオールマイトを憎むようになり、オールマイトは彼女を割けるようになった。

今でこそ普通にに会話している。

だが通常そんな事あり得ない。

言葉にするのが憚れる程の凄惨な暴力を受け、それを許してしまえる青石がただただ異常なだけだ。

法月に命令されて実行したオールマイトにも、深い傷を残しただろう。

だが一番辛かったのは紛れもなく青の少女なのだ。

そんな彼女にいけしやあしやあと傷を治して欲しいなどと、オールマイトが言えるだろうか。いや、言えやしない。

少なくとも相澤がオールマイトの立場なら、口が裂けてもそんな凶々しい頼みなど出さはない。

「相澤君、緑谷君を……」

「休暇を出しました」

オールマイトは「ふむ」と相槌をして顎に手をやる。

「青石君をあんな形で出したのに何の意味が……あつ！」

彼が喋る最中、視線で訴える。

相澤はこれ見よがしに法月の執務室の方を見た。

それで伝わっただろう。

オールマイトは相澤の耳元で囁く。

「もしかして緑谷少年を守るためかい？ 法月から」

相澤も小声で返す。

「……青石の側が一番安全です。法月は青石を避けている」

青石は法月を嫌っている。法月もそれは知っている。

そして青石が本気を出せば、法月とてやられるしかない。だから法月はむやみに手は出せない。

今の青石が何だかんだ危険である事には変わりはない。少し機嫌を損ねたら、人類滅亡にすらなる。冗談でも何でもない。

彼女は指先一つで地球など木端微塵に出来る。

実際彼女は人類を滅亡させるスターレインを事も無げに一蹴した。

同じぐらいのことをやろうと思えば出来るのだ。

彼女は这个世界で切れる最強の切り札だ。

「法月将臣……彼が何か仕掛けてくると？」

「既に仕掛けられています。教師にあの映像をばら撒いたのは法月です。」

その後いつたい何をしてくるか分からなかった。後手に回っては手遅れになりかねない。

だから先手を打たせてもらつたまでです。

馬鹿げているように見えるかも知れませんが、緑谷を守るにはそうするしかなかった」

もつとも猫にするのは相澤の発案では無いが。

「そうするしかなかった、か。しかし緑谷少年は一体どうしてしまったのか」

「……それはあいつにしか分かりません」

相澤には分かる気がする。

きつと緑谷は、青石がもたらす世界の変化に付いて行けていないだけだ。

彼は元々無個性だった。ずっと夢見ていたヒーローにあと一步というところまで来ていた。

けれども青石は緑谷の夢その物を破壊しようとしている。

ヒーローを前提とした社会そのものを変えよう。彼女はそう言い張っている。

緑谷が青石に反感を持つのは無理はない。



相澤は窓の外を見上げる。夜空には月がぼんやりと浮かんでいる。

青石は今頃何をしているのだろうか。

自分で送り出しておいてと、相澤は自嘲するが無性に青石の事が気になった。

「やあ」

相澤とオールマイト、二人の側に影が落ちる。

「校長」

相澤は会釈する。根津校長だ、小声で二人に話しかけてくる。

「相澤君、どうだった？」

「上手くいきました。あいつは校長の案だとは思ってません」

勿論青石に猫になって欲しいと頼んだ件だ。

何も考えも無く相澤もあんな話を持ち出したりなんてしない。

先ほどオールマイトにも話した通り、今回教師たちに監視カメラの映像をばら撒いたのは法月だった。

彼がこのように動くことに根津校長は違和感を覚えたらしい。

もしや緑谷を邪魔に思い、排除しに来るのでは？

法月が強硬に出てくることも十分に考えられる。根津はそう判断した。

だから青石に猫になる事を提案して、相澤に指示を出したのだ。

「まあ、猫になれだなんて一見馬鹿げた話だしね。

僕が考えただなんて、言わなければ分からないだろうね」

だが青石と緑谷は今、仲がよろしくない。

だいたい青石がそのままの姿で緑谷と一緒に居ては、男女という事もあり何かと問題が有る。

緑谷には騙すようで悪いが、あのようにするほかに、青石を緑谷の側に置く方法が見当たらなかった。

そして猫になるなんて指示。相澤以外が出しても聞くとは思えない。

「……二人とも、時間はいいかい？ 大事な話があるんだ」

「どのような要件でしょう？」

「……法月の“個性”についてさ」

相澤ががたつと立ち上がる。

オールマイトの顔色も明らかに変わっていた。

「ずつと調べていたけどね、ようやく突き止めた。本当にいや、骨が折れたよ」

「それで、どのような個性なのですか奴は」

「うーん、法月の個性……正確には法月の“力”について、と言った方が正しいかな？」

「どういう事でしょう？ まるで個性以外の力が有る。そんな風に聞こえますが」

「まあ順を追って話すよ。いいかい？」

二人の首が即座に縦に振られる。

根津の口が動き始める。

今日の夜もまた長くなりそうだ。

……

……

……

青石は窓の外から月を見上げる。

猫の目から見た世界は、いつもと何もかも違って新鮮に見える。

緑谷宅の居間で青石は欠伸する。そのソファの上で青石は丸くなった。

大きい掌がそつと頭を撫でてくる。

青石は猫の体で撫でてくる緑谷の方に振り向いた。

「何とか落ち着いたみたいだけど。はあ……何やってるんだる僕は」

青石は取り敢えずむやみやたらに鳴くことは控えるようにした。

あまりにも都合よく返事をしてしていると、変に勘繰られるかもしれない。

ひとまずは只の猫のフリをしているのが正解だろう。

元々相澤は猫として、青石を緑谷の元にやった訳だし。

(ううう、これからどうなっちゃうのかな？ 会いたいよ相澤さん)

「よしよし、いい子だね」

緑谷が見た事ない笑顔で背中を撫でてくる。

なるほど、普段の青石にこんな態度で接してくるわけがない。

今の青石は只の猫だ。

緑谷も目の前の猫が実は青石だとは夢にも思っていない。

「出久お風呂沸いたわよ」

「分かったー、入るよ」

緑谷が離れていく。

青石はソファから起き上がった。

取り敢えずやる事もなく暇だ。緑谷の母は洗い物に取り掛かっている。

ひとまず家の中を物色しようと思うが。

『ねえ青石ヒカル』

驚いて飛び上がりそうになる。

目の前にいきなり青の少女が現れた。

目の前の彼女は体が透けている。

緑谷の母も気づいている様子はない。間違はなく電脳体、緑谷のアズライトだろう。

(な、何のことかなあー?)

『とぼけても無駄よ。私には分かっている。猫の姿になっても私の目は誤魔化せないわ』  
 どうやら緑谷のアズライトには看破されているようだ。

青石は素直に謝る事にした。

(うう、ごめんなさい。でも僕だってやりたくてやってるんじゃないの。

だって相澤さんが……あ、あにまるせらびー? それを)

『それも分かっている。でもね、本当にそれだけの理由でこんな馬鹿げたことをさせる。

そんな風に思っているの? あの相澤先生が?』

(どういう事?)

『こんな強引な手段を使ってまで、緑谷君にあなたを付けた。

それがどういう意味なのか』

(……緑谷君が危ないから? ……もしかして法月が?)

『私はそう思っている、きつと相澤先生は緑谷君を守るために、こんな事をあなたにさせるのよ』

(……そっか)

彼女に言われて考えてみる。ようやく腑に落ちた気がした。

確かに法月が緑谷に害をなしに来ることは十分に考えられる。

緑谷は強い。それこそ青石も油断は出来ない程度には。だが油断は出来ない。

緑谷は強いと言つても法月にはいくらでも手段が有るだろう。相性のいい人間を刺客でやるなども考えられる。

けれども、青石が側に居れば手を出すのは相当に難しくなる。

(この事緑谷君には?)

『言つていないし、今後伝える気も無いわ安心して』

(ありがとう)

流石に青石も正体を今更バラされるのは恥ずかしい。

黙つていて貰えるのなら、それに越したことは無い。

『私からお願いが有るの?』

(なに?)

『……緑谷君を救<sup>なす</sup>けて欲しい』

(救<sup>なす</sup>ける? ボクが? ……どうすればいいの?)

アズライトは真つすぐ青石を見つめる。

『彼を〃見て〃欲しい』

(見る?)

『ちゃんとおりのままの姿を。曇りなき目で。

力とか、肩書だとか。そんなものに関係ない。

ありのままの緑谷君を。本当の“緑谷君”を』

(……)

『きつとそれが、緑谷君を救<sup>たす</sup>けられる唯一の方法。

他ならないあなた自身がそれで救われたはずよ』

彼女の言葉で一人の男が頭に浮かぶ。

(……相澤さん)

『違うかしら?』

(……ううん、違わないよ。相澤さんはきつと“ボク”を見てくれている。

ホントは見えていないかも知れないけど、見ようとしてくれている。

“力”なんて関係ない、ありのままの“ボク”を……)

それがどれほどの救いになるか、青石は知っている。

緑谷は雄英に入る前、友人が一人も居なかったと聞いている。

それは“無個性”のせいだからだと、思っていた。

だが青石は違うのではないかと思う。

個性が無くても、力が無くても、友達というものは作れるものだ。

ちゃんとお互いを理解し合い、歩み寄ればなれるものだ。  
青石は思う。

仮定の話。もしも、緑谷が青石と友達になれたのが“個性”のおかげだと考えているのなら、それは間違っている。

“力”を前提にしなければ成り立たない友情など、それはもはや友情では無い。

青石はそう考える。

(分かった。どれだけ出来るか分かんないけどやってみる)

『ありがとう』

彼女はすうつと消えていく。きつと緑谷の元へと帰ったのだ。

青石はごろんと横になる。

猫の体はいつもの体に比べても更に眠気が来る。

いつの間にか青石は眠りに落ちていった。

いつもと違う猫の体で。

.....

.....

.....



風呂から緑谷が上がると、猫のウラキは寝ていた。

だが緑谷が想像していた猫の寝相とはかなり違う。

それもかの猫は。

「にゃ〜」

ソファアの上、腹を堂々と上に向け、仰向けに寝ていた。まるで万歳をしているようだ。

「なんてふてぶてしい猫なんだ」

両手足の肉球が見え、何となく触りたくなる。

緑谷は猫を両手で抱えた。

居間から自室へと移動させるためだ。

緑谷が抱えると猫はゆっくり目を開けた。

暴れるかもと一瞬思ったが、猫はされるがままになっっている。

だいぶ慣れてきたのだろうか、もつと懐いてくれると嬉しいのだけど。そんな事を思う。

ともあれ、緑谷は猫を自分の部屋に運んだ。

母親が用意していた、猫用のクッションに置く。

部屋の隅には雄英から送られてきたという段ボール箱が有った。

中を見ると様々な猫用のグッズがこれでもかと詰められている。

「おっ」

猫は起きてきて緑谷の側に居た。

段ボール箱に上半身を乗せ、段ボール箱の中身をしげしげと眺めている。

緑谷は試しに猫じやらしを取り出してゆらゆらと揺さぶってみた。

「ほらほら」

「にゃっー」

猫は猫じやらしに飛びついてくる。

どうやら効果覲面らしい。

少し臆病な猫みたいだが、ちゃんと落ち着いて相手をしてやれば問題なさそうだ。

相澤先生も賢い猫だと言っていたし、緑谷にも何とかかなりそうだ。

緑谷はひとまず猫じやらしを脇に置いた。

そして箱の中身を仕分けしていく。

……。

「ふう、こんなものかな？　ここで君は過ぐすんだよ。えーつとウラキ」

「みゃー」

猫は先ほど設置した猫用トイレの上に居た。

専用の容器に脱臭効果のある専用の砂を敷き詰める。

猫は本能的にそこをトイレだと理解するらしい。

思ったよりも賢くて助かった。部屋のあちこちに、節操なく糞や尿をされたらたまつたものではない。

「にゃ……」

じつと猫は緑谷を見てくる。

トイレの上に座つたまま身じろぎ一つしない。

「どうしたの？　そこがお前のトイレだよ。さつきとしなよ」

「にゃー！　にゃー！」

何やら訴えかけてくる猫。緑谷にはまるで意味が分からない。

そうこうしているうちに緑谷自身も尿意が湧いてくる。

仕方ないのでとりあえず目を放してトイレに緑谷も行く。

緑谷が帰つてくると、猫はトイレには居なかった。

ベッドの上に座り、窓から外を眺めている。

部屋の隅のトイレに目をやると、何やら用を足した跡が有つた。

「もしかしてこの子、トイレを見られるのが恥ずかしいのかな？」

「にゃー！」

まるで緑谷の言葉を理解したかのように返事をする猫。  
緑谷はそんな猫の様子に疑問が沸き一つ仮説を立てた。

「もしかしてこの子、元々人間だったとか？　なんかの個性で猫にされちゃったとかかな？」

「にやつ!?　にやあ〜?」

(明らかに言葉を理解しているように見える。

やっぱり普通じゃないこの子。人間を相手にしていると思つて接した方が良さそう)  
ピピピと緑谷の携帯が着信音を鳴らした。電話だ。

誰からだろうと思つて緑谷は携帯電話を開く。

かけてきた相手は……

「竜胆瑠璃……はい、もしもし」

『もしもし緑谷君？　元気してた?』

「う、うん大丈夫だよ、そつちこそ元気?」

『毎日チビ達の相手で忙しいけどね』

向こうが苦笑したように笑い、緑谷も釣られて笑う。

竜胆瑠璃。彼女は法月の義理の娘だ。

彼女とはモルグフ孤児院で出会った。

『そう言えば雄英体育祭ぶりよね?』

「あ、うん」

そう言えばもうだいぶ行っていない気がする。

モルグフ孤児院は法月が立てた施設だ。国内から行き場のない子供たちを受け入れている。

法月自身に善意が有って設立している訳では無い。

だが緑谷は思惑はどうあれ、法月のその行為自身は褒められるべきものだと思ってる。

モルグフ孤児院が無かったらどうなっていたか分からない子供が、どれ程いるだろうか。

『チビ達が寂しがってるのよ。デク君が来てくれない。嫌われたんじゃないかって』  
「そ、そんな事ないよ!」

『分かってるわよ。……ちよつと良い? 藪から棒にだけ頼みごとが有るのよ』  
「えっ頼みごと?」

『といつても私じゃないけどね。レンって子覚えてる?』

緑谷の頭の中に一つの光景が思い出された。

忘れることなんて出来ない。

オールマイトとシアン。三人でスラムへと足を運んだ時に出会った少年だ。ふとその日に元敵ワイランのシアンの言葉が蘇る

——敵ワイランが居なくなつて、一番困るのは誰だと思ひますか？

『緑谷君！ 緑谷君!!? もしもし!』

「あ、ああ、うん。聞こえてる」

『大丈夫?』

「うん……大丈夫。ちよつとポーつとしちゃつて」

頭を殴られたかのような衝撃を緑谷は受けていた。

かつての緑谷は憤慨していた。

ワイラン敵へと追い込まれる環境を放置しているヒーロー達に。

だが今の緑谷は一体どうだろうか。

力を得て強くなつたはずだった。ならない物に少し近づいていた筈だった。

けれど、もしかして。いつからか、緑谷は間違えていたのだろうか？

『しつかりしてよ! 未来のヒーローがそんなのでどうするの?』

「……ヒーロー……か」

『えっ? 何? もう、しつかりして!』

正義の味方がそんなんじや皆不安に思つてしまふでしよ!』

——覚えておいて欲しい。ヒーローとは正義の味方では決してないのだ。今度はオールマイトの言葉が蘇る。

あの時には分からなかったが、今なら分かる気がする。

ヒーローは秩序の番人だ。今の社会を維持する。その為に存在している。

だからこそ、法は守らなければならないし、従わなければならない。

<sup>ヴィラン</sup>敵が逮捕されるのは、彼らが“悪”だからではない。

法にひいては社会に害をもたらす存在だから、間引かれる。それだけの話。

彼らにどれだけの言い分が有ろうが、正義が有ろうが関係ない。

秩序を維持するためのヒーローに、そんな理由は通用しない。

だから、緑谷は分からなくなる。

もしも正義と秩序が相反し、真つ向から対立したとき。一体どちらを優先すべきなのか。

青石ヒカルのいう事に、心の底から賛成できない一つの理由かもしれない。

「……ええと、何だっけ？」

『とにかく替わるわね。レン！』

電話の主が遠くなる。

そして入れ替わりに別の声が携帯から流れてきた。

『もしもし！ デク？ オレ！ オレだよオレ！ 分かるだろ!』  
何となく昔猛威を振るつたという詐欺を思い出した。

「えつと誰だっけ？」

『思い出せないのかよ！ レンだよ。海路<sup>かいろ</sup>レン』

「え？ あ、ああ！ うん大丈夫覚えてるよレン君。久しぶりだね」

電話の向こうの声の主をはつきり思い出す。

はつらつとした少年の声だ。

彼の名は海路<sup>かいろ</sup>レン。確か彼は十歳ほどの“無個性”だったはずだ。

まあ今はそれは関係ないか、そう思い緑谷は頭の隅に置く。

彼は緑谷の事を気に入ってくれているらしい。

『実はさ……イジメられてんだよ!』

「えっ！ 君が!？」

『違えよ！ ……友達だよ』

ああ、なるほどと心の中で納得する。レンは気が非常に強い。

イジメなんて受けたとしても、逆に反撃してやっつけてしまうだろう。

だてにスラムで生き抜いて居ない。

『そのよ、“青石ヒカル”ってヒーローが色々な事したじゃん?』



「ああ、うん。知ってる」

正確にはヒーローでは無いが。まあインターンでの活躍の事だろう。

『それでよ、モルグ<sup>う</sup>フ孤児院<sup>ち</sup>にも結構新入りが来たんだよ』

なるほど考えられることだろう。

様々な劣悪な環境に居た子供たちを、青石ヒカルは助けただろう。

青石ヒカルの活動。その結果孤児院に入られるきっかけを得た子供は少なくない筈だ。

『大抵の奴はもう馴染んだんだけど……そいつ目をつけられてさ、イジメられてんだよ』

「それは……大変だね」

『大変だね、じゃねえよ！ 他人<sup>ひと</sup>事みてえに！

“でりかしー”が無えなデク！』

「い、いめん」

やけにデリカシーの部分<sup>ぶぶん</sup>がゆっくりだった。最近覚えたのだろうか。

小さい頃は覚えたての言葉を使ったがる時がある。

レンも丁度そんな年頃なのだろう。

『とにかく明日モルグ<sup>う</sup>フ孤児院<sup>ち</sup>来いよ！ 色々相談してえんだよ！

良いよな！』

「ちよ、ちよつと待つて、随分と急な話でその……」

『絶対来いよな！ 色々見せてえものも有るんだよ！』

オレの修行の成果も見せてえし！ じゃあな！』

「あつ！ ま、待つて！ ……切れた」

電話は一方的に切られてしまった。

一応明日は平日で、一般的に学校が有る日だ。

レンが緑谷が休みになっていたのを知っていたとは到底思えない。

つまり頭から最初から抜けていたか、もしくは休んでも来いという意味か……。

（休んでも来いって意味だろうなあ……）

——どうするの緑谷君？

アズライトが姿を見せる。

緑谷は力なく頷いた。

「行くよ、何にしてもイジメは放つては置けないしね」

——そう

「なんだか嬉しそうに見えるけど？」

——ふふ、何でもないわ

やっぱりアズライトは嬉しそうに見える。

緑谷はアズライトの笑みを見て、思わず顔がほころんだ。

それはともかくとして、緑谷は先ほどのレンとの会話を思い出す。

(何にしても、気の強いレン君が相談なんて、よっほどの事だろうな……)

海路レンは非常に勝気だ。

いじめっ子なんて大抵圧倒してしまうだろう。

だが友達が受けているイジメの相談をしに来ている。

覚悟していた方が良さそうだ。

緑谷は時計を見る。いつの間にか、いつもはもう寝ている時間になっていた。

部屋の明かりを切る。

いつの間にか猫のウラキは、猫用の寝床に移動していた。

窓の外から見る星空は、少しずつ移り変わっている。

明日は良い一日になりますように。

そんな事を思いながら、緑谷は布団をかぶる。

数分後、緑谷は寝息を立てていた。

それを青の少女が見ている。

青の少女の髪が星の光で艶やかに光っていた。

## 第70話

寒く凍るような月が輝く。

校長室に明かりは灯っていない。

根津校長はひとつ嘆息し、椅子に身を沈めた。

先ほど相澤とオールマイトに伝えた内容。それを己の中で反芻する。

自分自身、最初に聞いた時はとても信じられない内容だった。

しかし、「彼女」に真実と、それを補強する証拠を見せられては、信じざるを得なかった。

「君は、何が目的なんだい。なあ……」

——シアン君

校長室にもう一つの影が伸びる。

肩で切りそろえられた紫苑の髪。

整えられた丈の長いメイド服。軽やかに彼女は舞い降り、涼やかな声で根津に言葉を返す。

「何、とは?」

「とぼけないでくれよ、シアン。君はいつたい何者なんだい？」

「……」

シアンは優雅にほほ笑むだけで返事を返さない。

だが彼女はその見た目に反し、根津が見てきたどのヒーロー達より、死線を潜り抜けた。そのような印象を抱かせる目をしている。

いや、実際そうなのだろう。少し深く調査すれば分かった。法月がどれ程に彼女を重用しているのか。

「私の話は、信用できませんでしたか？」

「……信用するよ。いや……と言うよりも。信用せざるを得なかった。そう表現する方が正しいのかな？」

法月の訳の分からない力も、ようやく合点がいった」

彼女とは根津もそれなりに長い付き合いになる。

だが彼女について分かっていることは驚くほど少ない。

彼女が極めて有能な人材である事。法月の右腕と言える存在だという事。青石ヒカルをもっとも大事に思っているらしいという事。

そして——目的のためになら手段を選ばない人間である事。

「……そうしようとも」

酷薄にシアンは微笑む。おそらく青石ヒカルはこんな彼女の顔を見た事は無い筈だ。まさにシアンの影の面。個性「忍者」に似つかわしいふるまいだろう。

「正直不可解さ。君はなぜ告白したんだい？ 法月の力も、君の罪も。」

君は世界各地に居た高等尋問官を殺害した。黙っていれば、多分分からなかつただろうに」

「……間違いは正されなければなりません。そして罪には罰が。」

私は、己が為さねばならぬと信じたから、そうしたまでです」

「例えそれが敵と呼べようともかい？」

「根津様。あなたもお判りでしょう？ 例え誰もやりたくなくても、誰かがやらなければならぬことがある」

「……」

理屈は分かる。だが到底納得できるものではない。

そんな根津の感情を察したのか続け言う。

「汚れたものを片付けるのです。汚れてしまうのは致し方ありません」

けれども彼女の顔は、仕方がないと割り切っているようにはとても見えない。

「きつと青石君は悲しむさ」

「それでもなお、譲れないものが私にはあります」

「人の為に誰かの為に？」

「ええ」

多分それ以上に、青石ヒカルを大事に思っているだろう。

シアンが青石ヒカルに入れ込んでるのは、誰が見たって明らかだ。

「そのために人を殺すのかい？」

「必要であれば」

それも青石を守るためか。

「矛盾しているね」

「ええ、ですがこの国の言葉でも有るでしょう？ 馬鹿は死ななきゃならない、と」

「……」

「いずれあの子も、気づく時が来るでしょう。」

どれ程の力を持つとも、どれ程の傷を癒すことが出来ようとも。

人という存在は救いようがない。その現実を変えられない。人が人である限り変わらない。

そして人は人をやめられない。あの子の夢は夢のまま。永遠に現実にならない。

夢は所詮、夢でしかないのですから」

「それを知ってなお、なぜ君は青石君を……」

彼女は悲し気に微笑む。

次に瞬きをした瞬間にはその場から消えていた。

根津は独り校長室に残される。

「はあ」

ため息が漏れる。

この問答にどれ程の意味があつたのか分からない。

いや意味など無いのかも知れない。

ただ純粹に互いに愚痴を吐きだしたかつただけ。

あまりにも不条理にまみれた世界で、弱音の一つも出さずに生きていけるだろうか。

「……………ふっ」

根津はシアンから聞いた“力”を試しに使おうとする。

彼女の話によると、その“力”は原理上、誰にでも宿っているものだそうだ。

もちろん適性の上下や能力の強弱は有るらしいが。

机の上のペンに手をかざして引つ張ろうとしても、ペンはビクとも動かない。

「はあ……………やっぱり無理か」

彼は机の中から資料を一枚引つ張り出す。

そこに書かれているのはプロジェクト“Reason”の概要。



当時は仮説として発表され、今ではトンデモ理論と扱われている。

その中に記載されている“力”の内容を見る。

それは地球ないし銀河系の万物をあまねく包む。

生命が生み出し育む一種のエネルギーフィールド。

法月はそれを“理”の力と呼ぶそれは。

「理力<sup>フォース</sup>……か」

夜も次第に更けていく。もう日付も変わった頃合いになった。

根津の独り言は月だけが聞いていた。

………

………

………

まどろみから少女が目覚める。白く長い髪のあちこちが寝ぐせでびよこびよこ立っている。

壁も天井も床も、何もかもが真っ白な部屋。それを希望のない目で見つめる。

少女の名は壊理<sup>えり</sup>。年は6歳。

額には巻貝を思わせるような角が一本生えている。

その角を彼女は触る。今日はまだ大丈夫だ。この角のせいで、自分はこんな場所に居

なければならぬ。

彼女は憂鬱になった。

「エリちゃん、おはよう」

そんな起きたばかりのエリに話しかけてくるのは、一人の少女。

「……おはよう……その……」

「私レイ。海路<sup>かいろ</sup>レイ。名前、思い出した？」

忘れるわけない。エリの所にわざわざ来てくれる人はそう多くない。

エリはかぶりを振る。

「ううん。忘れてない。レイさん、ともだち」

エリの目に生気が宿った。

人の名前を覚える必要は今まで無かった。

でも最近は違う。毎日会いに来てくれる兄妹の顔を、エリははつきりと覚えている。

ただそれを言葉に出来ないだけ。感情が薄いように見えるその顔も、どうやって表に出せばいいか分からないだけ。

「エリちゃん、顔洗おう。朝ご飯持ってきたよ」

「うん」

レイに言われるまま、顔を洗い、机につく。

トレーに乗せられた朝ご飯は白米とお味噌汁。

それと付け合わせのたくあんに、サラダ。

「いただきます」

エリは食べ始める。時折何となくレイの方を見る。

彼女はエリよりは年上。だがまだ子供だ。何歳ぐらいなのだろうか。

「レイ何才？」

「私？ 私十歳だよ。んーまだ教えてなかったっけ？」

「うん」

それからはずっと無言。食べる時にはあまりおしゃべりはいけないと教わっている。

ごはんも味噌汁ももう少して食べ終わる。だがまだたくあんには手を付けていなかった。

「こらエリちゃん。ちゃんと全部食べないと駄目だよ」

「これ嫌い」

「だーめ、ちゃんと全部食べないと。めっするよ」

「……わかった」

しぶしぶ箸でとって口に放り込み、急いで白米も口に入れる。

何とか嫌いなものも全部食べ終え、朝食も終わった。

「ごちそうさま」

「じゃあ歯磨きしようか」

「うん」

エリは洗面台に向かう。まだ背が低いので洗面台の前に台が設置されている。

ぴよこんと彼女はそれに立った。

「転ばないようにね」

「うん」

そして歯磨きを終え、再び暇になる。

エリは壁をじっと見つめる。

彼女にとつて監禁は日常だ。もつとも最近の前よりもずつとました。

前はもつと薄暗く、狭い場所で毎日痛い目に合わされていた。

ここではそんな痛いことは誰もしてこない。ご飯も美味しい。

申請こそしなければならぬが、外にも出られる。

こうして会いに来てくれる人が居る。

みんな最善を尽くしてくれていて、感謝している。

以前はもつと怖い大人の元で、エリは耐え続けていた。

それが終わったのはつい最近の話。

青石ヒカルという女の子が助けてくれたらしい。

エリは気付いたらこのモルグフ孤児院にいた。

ほんとうに気付いたらとしか表現できなかった。

どのように助けられたのか、それすらも分からない。ひよつとして神様が助けてくれたのではないか。

そのように思う事も有る。

レイにも話す。

レイは笑いながら「仕方ないよね」という。

青石ヒカルというヒーローがする事は凄すぎて、凄さを理解するのに一苦労するらしい。

だがその青石ヒカルも無理がたたって、今は休んでいるらしい。

「レイ」

「なに?」

「きょうは一緒にいてくれるの?」

「うん、今日は一日エリちゃんと遊べるよ。ちゃんと先生たちに許可貰ったからね!」

「レンは?」

「兄さんもすぐ来るよ」

「そと、出られる?」

「……うん、ちよつとだけだけどね。出られるよ」

「やった」

けれども、どうしても寂しいと思つてしまう。

どうして私だけが。そんな考えがよぎつてしまう。

外に出たい。もつと自由に色んなことしたい。

普通の人は、こうやつて部屋の中に居る事を強制されたりなんかしない。

外に出る時にも、いちいち監視の人が連れ添うことも無い。

レイには感謝している。その兄のレンという少年にも感謝している。

二人はエリが悲しまないように、寂しくないように側に居てくれている。いつでも一

緒、という訳には行かないけども。

けど出来る限りそばに居てくれている。

二人から直接聞いたわけでは無い。

それでも、何日も過ごすうちに分かってくる。

海路レイと海路レン。二人の兄妹はエリのそばに居てくれる。

それにいつたいたいどれほど救<sup>たす</sup>けられただろう。

「エリちゃん? どうしたのじーと私を見て」

「なんでもない」

「そうだ、にらめっこしよっか」

「にらめっこ？」

エリの知らない単語が出た。首を傾げて聞き返す。

「教えるから大丈夫だよ。にらめっこはね……」

レイからエリは説明を聞き、睨めっこで遊ぶ。

真つ白に染められた部屋の中、笑い声が響く。

にらめっこはエリの連戦連勝だった。無表情のエリは疑問に思う。

こんな遊びが楽しいのだろうか。

だけどそれを表に出すことはしないよう、心がける。

エリ自身はそんなに楽しくなくても、レイがちゃんと楽しんでくれている。

友達が笑顔になってくれている。

それが自分のことのように嬉しいから。

だからエリはレイの笑顔をずっと見つめていた。

「あ、エリちゃん」

「なに？」

「少しだけ笑ったね」

「そうなの？」

エリは自身の顔に手をやる。言われてもどう変化したのか分からない。

レイはますます嬉しそうになった。

「わたしが笑うとレイ嬉しい？」

「うん」

「そっか」

交わす言葉は長くない。

だがエリにはこの距離感が心地いい。

そんな風に、エリの時間は過ぎていく。

今日は一日とても楽しくなりそうだった。

……

……

……

「やっと来たなこのやろー！」

「ご、ごめん。ちよつとこつちもあんまり急で……」

緑谷出久はモルグフ孤児院に着いた。



先ほど受付を通ったばかりだ。

ここはモルグフ孤児院の幾つかある建物の一つ。

ロビーに当たる場所だ。

そこで昨日の夜電話してきた海路レンが仁王立ちしていた。

「言い訳すんなよデク！」

「ごめん」

「謝るんじゃねーよデク！」

とても理不尽だ。

いったいなぜこんな目に合わなければならぬのか。

だいたい時間の指定すらなかったでは無いか。

そう思うが、ぐっと心の中にため込む。

相手は子供なのだ。そう子供。

「にやあく」

「つていうか猫飼ってたのかよ。名前何て言うんだ？」

「ウラキ。それにその子は僕の猫じゃない」

「そうなんか？」

「一週間だけ借りているだけだよ」

「ふーん？」

レンが首を傾げた。ふとレンの腰に下げている銀色の筒に目が行く。前まではそんなもの持っていなかった筈だが。

何かのおもちゃだろうか。

「まあ何でもいいや、来いよ浦木、ついでに「デク」

「にやつ！」

「僕がついで!？」

「猫の方が役立ちそうだしな。ダメダメのデクと違って」

レンはくっくと笑った。邪気のない笑顔に緑谷も毒気を抜かれる。

海路レンと会話していると何だか幼い頃の爆豪を思い出す。

「待ってよ今日呼んだのはアレだろ!?! いじめが……」

「大声だすんじゃねえよ」

「……」

「ついて来いよ。見りや分かる」

レンの出す気迫に緑谷はたじろぐ。彼はまだ十歳ほどの少年。

だというのにこの圧はいつたい何か。

考えたらレンはずっとスラムで生き抜いてきた。それも妹や仲間たちを守りながら

だ。

親元でぬくぬく育っていた緑谷とは、根本的に生き抜いてきた環境が異なっている。彼の牙は孤児院で抜けるどころか、より鋭くなったらしい。

昨日電話で“修行”という言葉も出た。もしかして誰かに鍛えて貰っているのだろうか。

大きすぎるこの態度も、力が有る故の自信からと考えれば納得できる。

……。

(何だこゝは……まるで青石さんの部屋にそっくりじゃないか)

緑谷が案内された場所は地下にあった。

迷路のように入り組んだ施設の奥へ進み、幾つもの隔壁を通り抜け、エレベーターを降下。

地下5階の頑丈な電子ロックの扉。

生体認証のロックを潜り抜けた先に彼女は居た。

太陽の光が届かない、LEDの照明だけが光源の少し薄暗い部屋。

全てが白く染められた白亜の空間。

頭が痛くなってくる。

以前、アズライトにオールマイトの記憶を見せられた時と同じ。

青石ヒカル程ではないにしても、閉じ込められ管理されている幼い少女。感情に乏しい目に、痩せた体軀。

昨日のレンの言葉を思い出す。

——そいつ目をつけられてき、イジメられてんだよ！

レンの言いたいこと、して欲しいことは見れば分かった。

だが、緑谷にはどうすればいいのかわからない。

これはいじめだとか、そんな次元の問題ではない。

確かに幼い彼の目から見たら、いじめに見えるかも知れない。

施設の先生たちが意地悪をして、閉じ込めている。そのように見えても不思議はない。

だが、このような状況になっているということは必ず何らかの理由が有る。

このように閉じ込めなければならない、のつぴきならない事情。それを解決しない事には、どうにもならない。

少なくとも緑谷に手に負える案件には思えない。

「紹介するよデク。こいつエリ」

「よ、よろしく。緑谷出久だよ」

「えっとエリです。よろしくお願ひします……」

「……」

「……」

お互いに無言になる。何を話した物かと思うが何も思い浮かばない。

イライラしたレンは声を張り上げた。

「何か言えよ！」

「ひっ！」

レンの苛立った声にエリという少女は怯える。

レンの妹であるレイは眉を吊り上げた。

「兄さんはいちいち五月蠅いんです。少し黙って貰えますか？」

「うっ……うるせえ！」

「うるさいのは兄さんの方です。だいたい昨日電話でもう少し正確に伝えなかつたんですか？」

「全く持ってあり得ないです。ほんとダメ人間ですね」

「なんだとー!？」

緑谷とエリをおいて兄妹喧嘩が始まった。

二人で仲良く言い争っている。それでもエリに気を使っているのか部屋の端へとどンドン移動していた。

そんな中、緑谷の足元から猫のウラキは顔をひよこつと出す。

「あつ猫ちゃん……」

エリは興味津々といった感じに猫を見ている。触りたいと顔に書いてあった。

「触ってみる？」

「いいの？」

「うん、この子が良いのなら」

猫のウラキはエリをいやがる様子も無い。そのまま彼女の傍に寄っていく。

おずおずとエリは手を伸ばす。

そして頭に触れた途端

「あ……柔らかい……」

笑顔になった。緑谷も笑う。

猫は更にエリに身を寄せる。

「お待たせしました、緑谷さん」

「あれ、レン君!？」

レンの方を見ると頭から煙を上げている。どうやら兄妹喧嘩は妹に軍配が上がった

ようだ。

「緑谷さん、もう言わなくても分かると思うんですが」

緑谷は無言で頷く。

レイも首を縦に振った。とても十歳ほどの少女とは思えない立ち居振舞いだ。

仕草に気品すら感じられる。良くも悪くも豪快な兄とは対照的だ。

「私と兄はエリちゃんを救<sup>たす</sup>けたいんです。だけど、このままじゃどうすることもできません。」

私はエリちゃんに普通の生活をあげたいんです」

「……君たちはエリちゃんに会う許可を？」

「ちゃんと貰ってます。というより、先生たち、むしろ私達に押し付けたがってます。」

エリちゃんの「個性」が怖いから……」

(エリちゃんの「個性」……。何だろう?)

「それはどんな？」

「それが……分かりません」

「分からない？」

「はい。分からないんです。どんな個性なのか、エリちゃん自身も分からないみたいです。」

ただ……」

海路レイ、彼女は言いよどむ。エリの方をちらちら見ている。

「だいじょうぶ、言っても。それはじじつだから」

「エリちゃん……」

「何が有ったの？」

「実はここに来る前、エリちゃんの個性で……一人死んでいるんです」

緑谷の顔から血の気が引いた。

エリは顔を下に向けている。

「だから、エリちゃんここに閉じ込められてるんです。もう二度と犠牲者を出さないために」

レイの言葉にエリはうつむいている。

“個性”に振り回されて、閉じ込められている幼い少女。

やはり緑谷の脳裏に青石ヒカルの姿が蘇る。

緑谷は以前、オールマイトに聞かされたことが有る。

オールマイトは後悔していた。

青の少女を助けられなかったと悔いていた。

だが果たしてそれを責められるだろうか。

今こうして緑谷の目の前に、同じような理不尽が突きつけられている。

緑谷はただ己の運命を呪わずにいられなかった。



地下から見えない地上では、太陽がもうすぐで中天へと差し掛かろうとしていた。

## 第71話

「おい、いつまでやるんだよデク？」

遠くでレン少年が声を上げる。

ザザーンと波打ち際でしぶきが上がる。額からの汗が目に入り、強い日差しが滲んだ。

緑谷が持っているのは40リットルのゴミ袋。それに砂浜のあちこちに散乱したゴミを、せっせと放り込んでいく。

ちなみにこのゴミ袋は緑谷のアズライトが作ってくれたものだ。

簡単な構造の物体なら作れるまで、緑谷はアズライトに適応してきているらしい。

八百万までとは行かないが、十分に強力な力だ。

ゆくゆくは青石ヒカルと同レベルまでのことも出来るようになりたい。

だがそれはおすすめしないと、アズライトに釘を刺された。

レンが近くまで来る。

「ゴミ拾いすんのは偉いと思うけどさ……もう十分だろ？」

「……………」

レンが顎でエリたちの方を示すが、緑谷は拒否する。  
レンはため息を吐く。

海路兄妹とエリ。それに緑谷は海浜公園に足を延ばしていた。

もちろん猫のウラキも一緒だ。今はエリに抱きかかえられている。

海浜公園。そこは緑谷にとつての思い出の場所。

地下で閉じ込められていたエリ。彼女とその後話をしたら、海が見たいと言いだした。

流石にまだ十歳の海路レンと海路レイだけでは、エリを連れてはいけない。

そこで施設の先生に相談したところ、緑谷が連れ添うならいいと言ってくれた。

だから緑谷達は海に行く事にしたのだ。

そして今に至る。

緑谷はどうせ海に行くなら、綺麗な海を見せたかった。

自分が何か月も時間をかけて、チリ一つ無くなつた海浜公園を自慢したかった。

けれども、半年以上足を運んでいなかった海浜公園は……。

「糞ツ……なんでこんなに、ふぎけんなよ」

見渡す限りにゴミゴミゴミ。再びゴミの溜まり場へと変わり果てていた。

口が悪くなるのも仕方ない。

緑谷が最初に清掃し始めた時よりは幾分ましなのが、唯一の救いか。

「デクつてさ、ここ掃除した事前にも有るの？」

「うん」

「でもまあ、仕方ないんじゃないの？ ゴミ捨てる奴が居なくなるわけじゃねえし。

時間経てば戻るのは当たり前だろ？」

「……」

レンのいうことは確かに正しい。

だいたいここにはゴミが集まりやすい条件がそろっていた。

海流の関係上、海の方からゴミが漂着しやすい地形。

交通の便もよくなく、住宅地からも離れている。

夜の間は人の目が無くなるので、不法投棄しやすいのだ。そしてゴミが溜まると便乗

して、後からどんどんゴミを捨てに来る人が集まってくる。

確かに緑谷はオールライトから受けた修行の一環で、チリ一つ無い海岸にした。

だが、それもいつまでもは保てない。

緑谷はゴミを取り除きこそしたが、ゴミの原因となるものを排除したのではないのだから。だから時間の経過とともに、ゴミが再びどんどん溜まっていくのは必然だった。

「はあ」

一息ついて、適当な場所に腰を下ろす。

遠くに目をやるとまだゴミが少ない場所にエリたちは居た。

エリは興味津々と言った感じに海面の方を見ている。

その海面にもちらほらゴミが見える。

「そろそろ戻ろうぜ、エリたちだけじゃ心配だしよ」

「……分かった」

緑谷はこれ以上入りきらないゴミ袋の口を結んだ。

横を見るとゴミ袋なんかで収まりきらない家電が鎮座している。

あそこには冷蔵庫、あそこには電子レンジ。向こうに見えるのはタイヤに、エアコン。ありとあらゆるゴミがある。

どうやら緑谷が綺麗にした後、地域で清掃で景観を維持する活動はなかったようだ。それもこれもヒーローの仕事だと思っツインているのだろうか？

ヒーローは食い扶持となる敵を探すので手一杯だ。わざわざ金にもならない清掃活動をしている余裕なんてない。

だからこの海岸も、緑谷とオールマイトが来るまで放置されていたのだ。

「お疲れ様です、緑谷さん。これどうぞ」

エリたちの元に行くと、海路レイがジュースを一本差し出してくれた。

「ありがとう」

緑谷はそれをごくごくと飲む。

「どうしたんだよそれ？」

「自動販売機で買いました」

自販機と聞いてどうしても緑谷の頭に青石の顔が思い出される。

未だに爆豪は青石の事を自販機と呼ぶ。

入学初日、青石が自販機のジュースを大量に購入した事件、今でも昨日のことに思い出せる。

思わず思い出し笑いをして吹き出しそうになった。

「俺の分は？」

「兄さんの分？ ある訳が無いでしょう」

「ええ!! ケチだなおい！」

「兄さんは黙って見ていただけでしょ！ 少しは緑谷さんの爪の垢を煎じて飲んだらどう？」

「いやだね！ ゴミ拾いなんてけち臭え！ オレは自分のしたいことしかしない主義なんだ！」

(レン君はいい意味で自分本位な性格って感じがするなあ)

「それにしても緑谷さん見直しました。ボランティア活動も目に見えないところでやってたんですね。」

「とても偉いと思います!」

「そんな僕は……」

「オレちよつと向こうの様子見にいつてくるぜ!」

何かを見つけたのだろうか。少年はずつと向こうの方に走っていつてしまふ。

緑谷は視線で危険が無いか追った。今のところ周囲に怪しい人物は見えない。

「謙遜しなくてもいいです。それにですね、モルグフ孤児院で時々、雄英体育祭のDVD

みんなで見たりするんですけど、緑谷さん大人気ですよ!」

「そうなの? てつきり青石さんとかが人気かと……」

「それが意外に青石さん言う程は人気無いです。まあ一番人気では有るんですけどね、当然」

「なんでだろう?」

「それが青石さんを嫌いつて子もいるんです。割と結構な数」

「……十年前の事件の?」

「やっぱりそれは大きいかと思えます。でもその時青石さんも5歳くらいだったから、

仕方ないと思いますけどね。

法的に責任能力が有りませんから！ それに……」

訳知り顔で話し始めるレイ。

マシンガントークを右から左に受け流し、エリの方に視線を向ける。

エリは猫とじゃれ合っていた。

猫が草むらの上でお腹を出して寝転がり、エリはお腹を撫でまわしている。

そうかと思えば、エリはそこらの葉っぱをちぎって猫じやらしのように誘惑する。

「にゃっー！ にゃっー！」

猫もエリと存分に遊びに乗って楽しんでる様子だ。

温かい日差しの下で小さな女の子と猫が遊んでいる風景はとても尊く見えた。

こんな生活が彼女にいつまでも続いて欲しいと願わずにいられない。

だが同時に、それが叶わない事も知っている。

「……エリちゃん、ちゃんと笑えるんだね」

緑谷の一言に海路レイが我に返る。

「……緑谷さん、相談考えてくれますか？」

「……」

緑谷は返事を返さない。



海路兄妹の願いは当然理解している。その思いの強さも。

だが少なからず思うところが有った。

「卑怯なやり方だとは分かってます。でも私達にはこんな方法しか思いつかない。

青石ヒカルさんに私達が直接お願いする事は出来ません。青石さんは世界で一番の重要人物ですから。

でも緑谷さんは、青石さんと同じクラスです。私達にとって緑谷さんだけが、青石さんと繋がれる唯一の道です。

青石ヒカルさんにあなたから伝えて欲しいと思つてます」

「それは——エリちゃんを〃無個性〃にして欲しいってかい？」

風が吹いた。海からの風は先ほどより一段と強い。

遠くから海鳥の鳴き声が聞こえてくる。

潮の香りがほのかに鼻腔に広がる。

レイは迷いなく頷いた。

「それが最善だと私は思つてます。なによりもエリちゃんがそれを望んでいます。

現に青石さんは何人かの敵を〃ライバル無個性〃に……」

エリを無個性にして欲しい。

それこそが緑谷を呼びつけた本当の理由だった。

もちろんやるのは緑谷自身ではない。青石ヒカルに緑谷から依頼してくれないか。そういうお願い事だ。

「それは出来ない」

だが緑谷は首を横に振る。明確な拒否の意思を示した。

レイの顔が気色ばむ。

「レイちゃん、本当にそんな方法でエリちゃんが幸せになれるのかな？」

「どういうことですか？」

レイは動揺しているように見える。

緑谷は迷った。

自分の忌むべき過去、その一端を明かすのは正直怖い。

だが自分の思った事を素直に言ってみる。

「……僕は無個性だった」

「緑谷さんが!? 信じられない……何かの間違いじゃ」

「詳しい事は教えられない。でも事実だよ。僕は昔、〃無個性〃だった。

なんの取柄もない木偶の坊だった」

緑谷は立ちあがる。手元の手ごろな小石を一つつまみ上げ、海の向こうへと投げる。

「惨めだったよ。周りの皆は皆個性を持っていた。」

僕だけが持つてなかった。持つてて当たり前前の個性を。

僕もね最初色々試したりしたんだ。

何か僕自身が気付いていない個性が宿ってるんじゃないか？

火を出そうとしたり、物を浮かそうと念を込めた事もあったよ。

でも出来なかった。『無個性』だったからね。ついにはお医者さんにはつきりとそう告げられても、諦めなんてつかなかった」

「……」

レイは無言で聞いている。

レイも詳しくは聞いていないが、何らかの個性を持つていると聞いている。

少なくとも無個性では無い。彼女達は無個性がどれ程苦しいものなのか、全然分かっていない。

『無個性』がどんな扱いを受けるかなんて、君は知ってるかい？

本当に嫌になるよ。思い出したくも無い。

何で僕だけが、何で僕なんだ。皆だったまたま運が良かっただけの癖に。

一日中そんな事ばかり考えてた。

僕がどんな努力をしても手に入れないものを、皆は生まれつき持つていたんだ」

「……才能とは、そんなものじゃないんですか？」

「そうだよ。持つてる人は生まれつき持つてて、持てない人はどれ程もがいても貰えない。」

「それが現実なんだ」

緑谷はレイに向き直る。彼女の瞳を真つ直ぐに見返す。

「だから、僕にはエリちゃんを〃無個性〃にしようだなんて……まるで信じられない」

「それでもエリちゃんは苦しんでるんです！」

「レイさん……」

レイの元にいるの間にかエリがやってくる。

猫を大事に抱えて大きな目で緑谷とレイを交互に見ている。

「エリちゃんに必要なのは〃個性〃なんかじゃない！」

「力〃や〃才能〃なんかじゃない！」

ただありふれた当たり前の幸せが、欲しいだけなんです！　なんで分かってくれない

んですか!？」

「なんでつて？　……むしろこつちが聞きたいよ。」

僕たちが、どれ程欲しいと願つても、努力しても手に入れられないものを何で簡単に

捨てられるんだい？」

「私はエリちゃんに！　これ以上苦しんで欲しくない！」

レイは金切り声を上げる。彼女の言葉からは悲しみの感情が嫌という程伝わってくる。

もしかしたら、この少女の方がエリよりも苦しんでいるのではないか。

そう思わせるだけの言葉に力がこもっている。

ズキリと痛む心をぐっと抑えながら、緑谷は続ける。

「それでも青石さんは乗り越えたよ」

緑谷はエリの頭を撫でる。

エリは不思議そうに緑谷を見上げる。

「今は確かに苦しくて辛くて、どうしようもなく逃げ出したいかも知れない。

だけど、自分の持っている力が何なのか分かりもせずに捨ててしまう。

それはとても不幸なんだって、僕は思う」

「……それは」

「比較対象がおかしいかも知れないけどさ、青石さんは最後までやりきったよ。

どんなに死にたくても投げ出したくても、ちゃんと逃げずに向き合った。

自分の出来る事から逃げなかった。自分に課せられている使命を果たしたんだ」

「……」

だからこそ、世界は今こうして存続している。

一人の少女が最後まで耐え続けた事で、スターレインは回避され世界は救われた。  
「正直、青石さんはどうしても好きになれない。」

授業中寝てばかりだし、気まぐれで過ぎるし、すぐ泣くし。

だけど、諦めずに最後までやり切る心は僕も見習いたいと思うんだ」

「みどりやさん……あの……わたし……」

エリが悩んでいる風に見える。

エリ自身は個性を捨て去りたい。そう願っていた筈だ。

だが緑谷はそれに賛成できない。確かに残酷かも知れない。

でもだからといって、彼女の望むままに個性を刈り取って、その先の未来を潰したくない。

「エリちゃん、もう少しだけ頑張ってみよう？ 自分の可能性と向き合ってみよう。」

自分の出来る事から逃げてはいけない。きっとそれは、本当に悲しい事だと思うんだ」

「……うん、ちよつとだけ……こせいがんばってみる」

エリは少し気合を入れたように見える。

緑谷は笑顔になった。

「エリちゃんは偉いね」

「えへへ」

頭をなでるとエリは恥ずかし気に微笑んだ。

だが脇に立っているレイは感情の籠っていない目で緑谷を見ている。

「緑谷さん、見損ないました」

日は少し傾き、空は赤く色づき始めていた。

西の空の端っこに一番星が煌めいた。

## 第72話

「よつと……トイレはこんな感じかな?」

プラスチック製の容器に砂が敷き詰められる。

海路レイがふうと息を吐いていた。

青石の尻尾がぴよんと跳ねる。彼女は未だ猫だ。あと六日間はこの姿で居なければならぬ。

猫になり切り思いっきり休みを謳歌する。

それも相澤からのお願いのひとつだ。

「はい兄さん。あと猫は綺麗好きなので、最低一日一回は砂を交換しないとですよ」

「それも本?」

「ええ」

海路兄妹がせっせと説明書を見ながら、猫用トイレを作成していた。

兄妹の会話の内容は猫用トイレの話題。

青石は周りを見る。

ここはエリが普段生活している地下の部屋。



青石ヒカルの部屋とそっくりだ。

白いLEDの照明だけが光源の寂しい空間。そこでエリは毎日過ごしている。先ほどまでいたゴミだらけの海が恋しくなる。

「砂は毎日交換か？」

「そうですよ兄さん」

「面倒くせえ……俺がやるのか？」

「エリちゃんにさせるんですか？」

レイはじとつと兄を見ていた。

「……どうせ一週間も無いんだしさ。このままでもいいんじゃないの？」

「駄目です！ 猫のおしっこは臭いんですから！ 綺麗にしていないと大変な事になり

ますよー！」

「多少臭くても平気だろ、なあエリ？」

「えつと……」

困った感じのエリ。ぴしゃりとレイは兄に指を突きつけた。

「なんでそんなにだらしがないんですか!?! 駄目です兄さん！ 私も手伝いますから

！」

なんだか二人の会話を聞いていると、とても幸せな気分になって、うとうとしてくる。

猫の青石は温かい場所は無いか探し、結局エリの膝の上に乗る。そのまま丸くなって瞼を閉じた。

頭と背中をエリに優しく撫でられる。

青石は先ほどまでの、モルグフ孤児院前の出来事を思い出していた。

……。

「いせいがんばってみる」

青石は猫の目で見つめていた。

まだ6歳の少女が絞り出した答え。

緑谷は満足そうに頷いている。青石はそれを何も出来ずに見ていた。

エリの腕の中に抱かれながら、青石は思考の海に沈む。

青石はどうしてもエリと過去の自分を重ねずにはいられない。

厳密に同じ環境ではない。青石とエリとはまた違う。

だが望まない力に翻弄される辛さなら、身をもって知っている。

(エリちゃん……本当はどうしたいのかな?)

考えてみるが分かる訳ない。そして勝手にエリの頭の中をのぞくのも躊躇われた。

人の思考はもつとも繊細なプライベートだ。土足で踏み入ってはいけない。

勝手に人の心を覗き見るなど、青石は許されないと思う。

だから考える。

エリが何を思っているのか、何を感じているのかを。帰ったらエリはまた地下へと戻るのだろう。

薄暗い部屋で他社と隔離される生活になるのだろう。

「じゃあなデク！」

気付いたら青石たちはモルグフ孤児院の前に居た。

考えている間に海浜公園から戻って来ていたみたいだ。一体どれだけの間考えていたのだろう。

一行の雰囲気は決して良くない。むしろ最悪だと言っている。

「帰ろうウラキ」

青石は伸ばされてくる緑谷の腕からスルリと身をかわした。

「にやつー！ にやー！ うにやー！」

そのままエリのそばに寄り添う。

青石は今も緑谷よりも、エリの方が気がかりだった。

エリの心は無理ばかりして悲鳴を上げていると思った。

相澤の言いつけを破るのは心苦しい。

だが今は、緑谷よりもエリの方が救<sup>なす</sup>けを必要としている。

そう感じていた。

「来いったら！ つ!？」

「フシャー!」

しつこく伸ばされる手を、青石は思いつきりひつかいた。

緑谷の手に赤いひっかき傷が走る。だがそれもほんの数秒。

緑谷が気合を入れると傷は青い結晶に覆われた後に完治した。

「なんだよ……! 君も僕が間違っているってそう言うのか？」

青石は何も返さない。ただ態度だけで心を示す。

エリの元にびったりとひつつき意地でも離れない。

エリはそんな青石を抱きかかえた。

「そばにいてくれるの?」

「にやっ!」

(うん!)

言葉が伝わった訳では無い。それでもエリは幸せそうに笑ってくれた。

「ありがとう」

「つていうかさーデク。その猫さ借りものなんだろう? 良いのかよ?」

レンは言いにくそうに緑谷を確認する。

「……電話して確認してみる」

緑谷は手元の携帯電話を操作して電話をかけている。

おそらく相手は……。

「もしもし相澤先生ですか？ 実は……」

緑谷は電話で相澤と会話し始める。それから青石は目を逸らしてエリの方を見る。

青石はエリに抱きかかえられた。

正面から向かい合う格好になる。

「……かわいい」

エリにギュッと抱きしめられる。温かい感触に青石は目を閉じた。

「良いってさ」

電話を終えた緑谷がこちらを見ている。

「良いってつまり！」

「うん、ウラキはエリちゃんの元に預けて良いって」

「やった！」

緑谷の言葉にエリとレイは大はしゃぎしている。

「今から六日間だけだけどね」

「ええー」

「また明日来るよ。じゃあね」

「バイバイ！ デク！」

……。

「あ、起きた」

どのくらい寝ていたのだろうか。青石は目を覚ます。

気付けば猫用のベッドに寝かしつけられていた。

大きく欠伸をして伸びをする。

エリは食事中だった。

ぼんやりとそれを眺める。あまり頭がはつきりしていない。

すると背後からむんずと首元を摘み上げられた。

驚いた青石は手足と尻尾をバタバタさせる。

「お前、緑谷の元に貸したんだけどな、ウラキ」

「にやつ!？」

(げっ！ 相澤さん!?! 何でここに!?!)

寝起きではつきりしなかった頭が一気に覚醒する。

思わぬ人物の登場で青石はパニック状態だ。

「それイレイザーの猫だったん?」

「ああ」

(息を吐くように嘘をつく！ いけないんだー相澤さん)

レイ少年も居た。妹のレイはこの場には居ないようだ。

寝ている間に何処か行ったのか。

青石は尻尾をバタバタ振った。

相澤は青石を放す。

(うわ！)

猫の青石は、いきなりに空中に放り出され。だが難なく床に着地する。

(うう……そんなに高くなかったけど、いきなり放すなんて酷いよ相澤さん！)

「エリ」

相澤はそんな青石には目もくれない。

エリの方を見ている。

「えつと……なんですか？」

「近々お前は雄英で暮らすことになる。校長と話し合った結果、雄英で引き取る事になった」

「ええ!!? 雄英で!?!」

(エリちゃんと相澤さん知り合いだったんだ……)

青石の心にチクツと刺さるような感覚がする。それに熱く燃えるような感覚。自分の知らないところで、相澤が知らない子と知り合いになっている。

それが青石の何かを燃え上がらせる。

「ゆうえい、ですか？」

「そうだ、今よりは多分マシになるだろう。軟禁状態は多分避けられないが……」

「イレイザー、エリちゃんを無個性には出来ねえの？」

「目上に対する言葉は選べ、レン」

「……エリちゃんを無個性に出来ませんか？ “イレイザーヘッド”」

「……校長に掛け合ってみる。だが最終的に判断を下せるのは青石自身だ。」

青石が嫌がったら、お前達がいくら騒いだところで意味は無い」

相澤はそう言いながら青石の方を見てくる。

青石は目を逸らす。

青石は迷っていた。青石自身、エリは“無個性”になった方が良いと思う。

個性なんて無くても人は幸せになれる。

こんな生活を強要されるような力など捨ててしまつていいと思う。

「そしてそれは最終手段だ。何よりもエリ自身がどう思うか。」

それが一番大事だ。……エリ」



「……あいざわさん？」

「エリは、どうしたい？」

「どう……」

「自分の個性をどうしたい？ 持っていたいか？ 捨ててしまいたいか？」

「……」

相澤は優しい目でエリを見ている。青石はそれを外側から見ている。

自分と相澤が普段どんな感じに周りから見えているのか、それが分かる気がする。

相澤は基本的に厳しい。だけど最終的に青石自身を尊重してくれる。

そばに居てくれる。

「どんな答えを出しても、誰も責めやしない。自分に正直になつてみる」

相澤の言葉にエリは一つ頷いた。

おずおずと口を開いて、話し始める。

「……わたしいままで、いろんな人に迷惑かけてきました。

お父さん……わたしのこせいのせいで死んじゃったんです。

もしかしたらレイやレンも死んじゃうんじゃないかって……そう思うときもありま

す。

怖くなって……ねむれないときがあります」

「オレは絶対死なねえ！」

「無責任な事を言うんじゃないレン。絶対だなんて誰にも言えやしない」

「でもよー！」

「レン」

「……分かったよ、ちえっ！」

それもまた自身の経験上だろう。エリの個性が分からない以上、何が起きるか分からない。

エリ自身まだ幼い。制御もかなり難しい。

制御させるとしたら、過酷な訓練を強いる事になる。それは余りにも残酷すぎる。

「緑谷さんはこせいを捨てるなんてもつたいないって言ったけど……」

でも。もし本当にこせいをすてて……むこせいになって……やりなおせたら。

どんなにいいかなって……そう思います」

「そうか」

それは本心だと青石も思う。

緑谷のいう事ももしかして一理あるかもしれない。

だけど青石は納得できない。

緑谷の論理は“個性”や“力”に執着した言い分だ。

本当の幸せはそんなものとは関係ない。

青石が相澤を好きになったのは、彼に力が有ったからではない。

そばにいて、支えてくれたから。心の拠り所であってくれたから。

それは緑谷が知る“力”とは違うものだ。

「ほんとうはわたし、

こんなちから……いらない。こんなちからほしくない。いらないっておもってます」

「そうか、分かった、なら……」

「分かったよエリちゃん。そのお願い叶えるよ」

相澤の言葉に青石は割り込んだ。

「なっ!?!」

青石は猫の姿を解く。

腰まで伸びた青く長い髪、同じ色の瞳。

まだ小学生程度にしか見えない未発達の手足。

猫の体を捨て去り、誰もが知る本来の姿へと戻る。

「あっあっあっ……青石ヒカルウー……!?!」

咄嗟に青石は個性で、レンの悲鳴を部屋の中に閉じ込めた。

ついでにエリや相澤の鼓膜も守った。

ここは地下五階なので、本当は外に漏れる心配など気にしなくても良かったのだが。レンは相澤の捕縛布でぐるぐる巻きにされた。

「モガガ!?!」

レンはもがもが口で何か言っているか聞こえない。

「この馬鹿。なぜ姿を晒した」

「あいた!」

相澤から小突かれる。軽く叩かれた頭を青石は両手で押さえる。

「猫さんが……青石さんに……?」

エリはただただ驚いている。

「うん、騙していてごめんね。その猫、ボクだったんだよ。内緒にしているね」

戸惑っているエリに青石はウインクする。

いまだ驚きから覚めないエリの体を抱きしめた。

「エリちゃん、後悔しない?」

「えっ?」

「君を〃無個性〃には簡単にできる。だけど、それで本当に後悔しない?」

その個性は危険かも知れない。でも同時に〃可能性〃なんだよ。それを捨てる事に迷いはない?」

……君の本当の心教えてよ」

「……こうかいはすると思います」

「そっか」

「だけど、こせいをすてなくても、多分こうかいはすると思います。

それにわたしが一番大事なのは……友達なんです。

レンやレイとずっと友達でいたいです。

もし、お父さんと同じように、わたしのこせいでいなくなったら。

きつとわたし、わたしを許せなくなるって思います」

「そっか……うん、そうだね」

「だから可能性をすててなんてません。こせいよりも、ちからよりも。

わたしは皆と一緒に居るみらいを、えらびたいんです。

だからわたしは、ちからなんていりません。

友達とそばにいたら。……だれかを助けられたなら」

「……耳が痛いなあ。偉いよエリちゃん、うん。とつても偉い。

ボクなんかよりエリちゃん、君の方がよっぽど強いよ」

「そ、そんなことありません！ わたしは……」

「エリちゃん。最後の確認だよ」

「……はい」

青石は居住まいを正す。雰囲気を変えた青石に、エリも引き締まった顔になった。

「君はボクに何を願いますか？」

「……わたしを“無個性”にしてください」

迷いなくエリは告げる。青石も覚悟を決めた。

緑谷がこれを知ったら、何を思うか想像は付いた。

だからと言って、止まる気はない。

これは緑谷の問題ではない。エリ自身の問題なのだから。

「その願い、叶えるよ」

光がエリを包み込む。あたたかな木漏れ日のような光。

エリの体から光る何かが抜けていく。エリの体に変化が起こる。

額に生えていた角は、光の粒になって消えていった。

「わあ……」

「終わったよ、エリちゃん。今日から君は“無個性”だよ」

エリが青石に抱き着いてくる。

青石は一筋の涙を流した。

「青石さん……？　なんで泣くの？」

「ううん、ごめんねエリちゃん。なんでも無いんだ」

「……ほんとう？」

青石は返事をしない。

青石自身にも分らないから。

エリは個性を捨ててる事を望んでいた。だから無個性になった。

それだけの話。なにも青石自身が恥じる事など無い筈。

だが胸の中に罪悪感が広がっていく。

青石が消したエリの個性。それに“可能性”があつたのは紛れもない事実なのだ。

個性を消していなかったら、将来エリはその個性を人の役に立てられたかもしれない。

い。

それは誰にも分からない。

けれど、その未来は決して訪れない。

こんな小さな少女に人生を左右する決断をさせてしまった。それが罪悪感の理由だ

ろうか？

「さて、どうしたものかな？」

相澤が首を掻きながら今後をどうするか、悩んでいる。

エリは無個性になったので、引き取る計画も見直しが迫られるだろう。

少し申し訳なく思った。

(多分違う……でも分かんない。分かんないよ)

彼女は緑谷を知りたいと願ひ、エリを知りたいと願つた。

青石は、緑谷と分り合いたい。

だが何一つ分らない。分かり合えない。

互いの思いも言葉もすれ違ふ、心の底は見えてこない。

そして青石は他人どころか、自分自身の事すらも分らない。

青石は理由も分らないまま、泣き続ける。

何も分らないなか、確かな分かる事も有る。

エリは“無個性”になつた。

そして友達のレンと幸せそうに——笑つていた。

他人を安心させるために、無理やり作る笑顔じゃない。

それは、自分を偽るための仮面の笑顔じゃない。

心の底から幸せがあふれ出て、形になつた笑顔だつた。

本物の笑顔だつた。



## ※第73話※

短い赤の髪が風になびいた。

影が狭い路地の合間を通過する。

それは少し身をかがめて力をためた後、地上から一気にビルの屋上にまで跳躍する。黒い外套が夜空の星をバックに翻る。とんだ距離はざっと三十メートルほど。辺りを警戒してそれとなく視線を巡らせている。

やがて安全を確認し終えたのか、懐のインカムでいずこかと連絡を取り始めた。

「もしもし、とつつあん」

『今はマスターと呼べ』

「へいへいマスター。どうします？　一応、今なら殺れますけど」

フードの前から見える顔は中性的で、男か女か見分けるのは難しい。

その人物の目の先に見えるのは、ビルの屋上からの夜景。

一般人の視力では、地上に居る人間を識別するのは困難を極める。

だがその人間は、視線の先に居る人物の姿をはつきりと捉えている。

『…………お前の目から見て奴はどうだ？』

「だいぶ手遅れな感じっすねー。なんでマスターがあんなになるまで放置していたのか不思議なくらいっす」

『働きかけはしていた。効果のほどは分からぬがな。』

……やつの理力フォースは強い。手放すのは惜しい』

むしろ逆効果だったのではないかと、思案する。

「使えて無かったら意味ないっすけどね」

『時期を見て引き込むつもりだった』

「うーん……あそこまで暗黒面あんこくめんに染まっているのは久しく見てないっす。

他人ごとじゃないっすけどね」

ケラケラその人物は笑い声をあげた。だが目が笑っていない。

『お前の見立てではどうだ?』

少し思案したのちの答える。

「首までどっぶりっす」

『引き返せそうか?』

「無理じゃないっすか?」

元々の人間性からしてそうなる運命だった。その人物はそう捉えている。

『貴重な人材だ。消すのはもったいなからう』

「青の少女への対抗手段としてっすか」

『それだけでは無いがな』

「未練がましくなるのはしようがないっすけど、もう無理だと思っすよ」

正直な感想を口にする。

雄英での青の少女との論争の一件は聞いていた。

それからずっと遠巻きに観察していたが、相場に危ない状態だと理解できる。

『……通達する。お前の判断で構わん、監視の任務を続けろ。』

もし奴が手遅れになると確信したら排除せよ』

「生死は？」

『問わん。それで勝てる相手ではなからう』

「“ワン・フォー・オール”は？」

『回収は可能であればいい。それより周囲への被害を抑えるのを最優先しろ』

「一つ許可を得たいっす」

『言ってみろ』

「ライトセーバーの使用許可を」

『良からう。使用を許可する。……武運を祈る。マゼンタ』

通信は切れた。

マゼンタと呼ばれた少女はふうと深呼吸する。

そして視線の先を見つめる。目当ての少年は話している間に家に入ってしまった。ひとまず今日は襲撃の機会はないだろう。

明日も多分外出もするだろうから、気は逃さないようにしたい。

とはいえ、法月も惜しい人材だと言っていた。本当に殺すかどうかは、まだ見極めなければ。

「もう、無理だと思っんですがねー」

そんな彼女の下の方を車が往来していく。

彼女はその中の一台の中に、猫になった青石ヒカルの姿を確認した。

「あー……やーだなーもう。ほんと正義の味方は辛いつす」

愚痴を零しながら、彼女は立ってる場所から飛翔する。

夜の闇に紛れて姿を消した。

……

……

……

世界がゆさゆさ揺れている。

体全体が心地よく一定のリズムで揺れているのを感じた。

青石ヒカルはまどろみに身を任せる。

エリを無個性にした後、青石は再び猫になった。

そしてエリのベッドに潜り込んで一眠りしたのだ。

そう、だからこれはおかしい。青石は猫として緑谷からエリに又貸しされた。

今はエリの部屋に居る筈である。こんなに長時間揺られているのはあり得ない。

夢の中で青石がはつきりとそれを自覚した。途端、視界に現実の風景が飛び込んでくる。

「にやつ!? にゃあああ!?!」

「起きたか青石」

（あつ相澤さん!? これどういう事!?!）

いつの間にか青石は移動用のケージの中に居た。

ペットの猫や犬を持ち運ぶための檻だ。青石は爪でガリガリとケージの金網を掻いた。

周りを見てみる。どうやら車の中らしい。大きさはいたって普通の自家用車と言ったところ。

車の中に居るのは相澤と猫の青石だけ。

相澤は運転席でハンドルを握り、青石が入られているケージは助手席に置かれてい

る。

窓の外では夜の街が後ろに向かつて流れていた。

猫の鼻は敏感で、車の中の匂いが凄く気になる。有体に言えば臭かった。

「緑谷のに返して欲しいと頼まれてな」

「にやにや!?!」

(だ、誰に!? まさかエリちゃんが!?)

「まあ、エリに頼まれてな。だからお前を緑谷の元に送り返す」

動揺している青石の心を相澤は見透かしていた。

車の窓越しに外を見る。

相澤の言う事が本当なら、この車は緑谷の元に向かっているらしい。

また緑谷のところに戻される。青石は抗議の鳴き声を上げた。

「うにゃー! うにゃー!」

「まあ勝手かも知れんがな、仕方ないだろ。」

猫の正体がお前だと分かっただら飼うなんて無理だ。お前は世界一の有名人なんだぞ、

一応な。

それに騙していたのは俺とお前の方だしな」

(うう、それはそうかもだけど……)

そう言えば海路レンと相澤は知り合いの様だった。妹のレイとも面識があるかもしれない。

なのにどうして海路兄妹は、わざわざ緑谷に依頼したのだろうか。

青石に会いたいなら相澤にお願ひする方が早いだろうに。

いや、むしろそっちが先だったのかも知れない。

けれども相澤から断られていたと考える方が自然か。

もしかして青石の知らない間に、青石に面会したいという人が相澤に接触しているかも知れない。

だとすると、青石の知らない人が大勢相澤と知り合いだという事になる。

青石はその可能性に思い当たり、何となく不機嫌になった。

「着いたぞ」

程なくドライブは終了して、青石の入られているケージが持ち上げられる。

そのまま緑谷宅に相澤は訪問する。再び青石は緑谷宅に戻された。

「わざわざ丁寧にありがとうございます」

迎えてくれたのは緑谷の母。緑谷引子いんこだ。

昨日噛んでしまったことを思い出し、申し訳なく思った。

青石はよく観察してみる。まるまると太ったその体は、猫の青石に安心感を与えた。

動作がゆつたりとしているのも心地いい。

居間でケージから出される。

青石の不満が低音で「うー」と洩れる。

目の前に何時間か前別れたばかりの緑谷出久が居た。

彼から青石に手がずいっと伸ばされる。

(うわあああ！ 怖いっ！)

いきなり鼻先に近づけられた手が怖くて回避する。まるで握りつぶされるような感覚を味わった。

そのまま優しそうな緑谷の母の足元に駆け込む。

何度かエリなどに撫でられて慣れ始めているが、どうにも緑谷の手の伸ばし方は怖くて仕方ない。

本能的に恐怖を感じて逃げてしまう。青石としては、もう少し優しく手を差し出して欲しい。

声もかけられずにいきなり手が伸びてくると、どうしてもビクビクする。

引子いんこの足の裏から顔だけ出して、出久の方を伺う。

彼は疲れ切った顔をしていた。

「やっぱり嫌われてますよ僕」



緑谷は力なく首を横に振った。

（ううごめん緑谷君。でも違うのー）

「違う、緑谷。お前は嫌われてるんじゃない」

「でも、だったらなんで……」

「やり方が悪い。ひとまずお前は、相手の立場になって考えるべきだ。」

自分がもし猫の立場だったらどう思うか。それを考えてみる。

それが難しかったら、猫について調べてみるのもいい。ネットで幾らでも探せるだろ」

「……はい」

「全力でやれるだけやってみる。それでどうしても駄目なら、俺に返してこい。」

……一週間で無理だったら言ってこい。出来る限り期間は伸ばしてやる」

「息子が迷惑をかけてすみません。何から何まで本当にありがとうございます」

緑谷引子が頭を下げるが、相澤は手を上げて制止していた。

「担任として当然の事です。あたまを上げてください……。」

「じゃあなウラキ。頑張って緑谷と仲良くなれよ」

「うにゃああ」

相澤は背を向けてそのまま居間を出ていく。青石は後を追った。

玄関で靴を履く相澤の背中をジッと見る。

「なおーん！」

相澤は屈みこんでそつと頭を撫でてくる。

もつとそんな風に過ごしたいと思うが、ぐつと我慢する。我儘を言つて困らせてはいけない。

そもそも青石は緑谷の事を理解したいのだ。

相澤は青石を思つてしてくれている。それを裏切りたくない。

緑谷出久も青石に続いて玄関にやってきた。

「じゃあな」

「先生！ その……」

「緑谷」

短く相澤は緑谷に言う。

「……はっ」

相澤の目が真剣になる。青石は猫の目で、相澤と緑谷を見つめる。

「もう一度自分を見つめ直してみろ。お前が本当になりたいものがなんなのか。なぜヒーローになりたいのか。考えてみる。」

自分の本当の気持ちも分からないまま戦つては駄目だ」

「先生は……その……」

「なんだ？」

「いえ……ありがとうございます。色々……便宜を測ってくれて」

「気にするな。これも俺の仕事だ。じゃあ……」

「先生！ もう一つだけいいですか？」

「言ってみろ」

「……先生にとつて敵とはなんですか？」

相澤はドアに手を掛けたまま考える。

「難しい質問だな。だがまあ強いて言うとならば……」

「すれば？」

相澤はドアノブから手を放した。

「……緑谷。ヒーローと敵は必ずしも反対の関係じゃない。」

ヒーローだから敵じゃないなんて事はない。

とある人は世間様から見れば立派なヒーローだったが、俺から見れば敵そのものだった。

た。

ヒーローと敵は両立する事が有る。

……俺たちが見て真実と捉える多くは、自身の視点に強く依存しているんだ」

真実は自身の視点に依存する。それは青石にも分かる気がする。今こうして猫の立場で世界を見てみると、全然違った風景に見えてくる。ただ撫でたいだけで伸ばされる手も、猫からすればとても恐ろしく感じられたりする。

「……それで」

「要は見え方の問題だ。俺達から見たら敵は身勝手な悪党だろう。」

だが敵から見ればまた違う。敵からしたら、間違っているのは世界の方だ」

「要は分からないってことで良いんですか？」

青石はあまりにざっくりとしすぎだと思った。だが相澤は首を縦に振った。

「そうだな、緑谷。分からないものを、分かったふりをするのはやめろ。」

分からないものを分からないと、受け入れるのは大事だ。が、意外に難しい。

人は適当な理屈をつけて、あたかも分かったかのように振舞いたがる。

その方が安心できるからな。……俺も昔はそうだった。その自覚すらしてなかった」

「先生も？ それは」

「長くなつたな緑谷。じゃあな、何かあったら連絡しろ」

「あっ」

緑谷はまだ話したげに見えた。だが相澤は打ち切って帰ってしまった。

青石は緑谷の足元に寄って一鳴きする。

緑谷はそんな青石に構わずに居間の方に引き返す。

青石は急いで緑谷の後を追った。

相澤が言った言葉は、きつと緑谷だけでなく青石にも送られた言葉だろう。分かっていないものを、分かったふりをしてはいけない。

理屈は分かる。

青石は緑谷のことを分かりたい。互いに分かり合いたい。

だがもしかして、その思いすらも独り善がりでしかないのだろうか。

青石の中の不安はどんどん膨らんでいった。

………

………

………

「お、来たなデク！」

「おはようレン君」

「おう、おはよう！」

緑谷は昨日に続いてモルグフ孤児院の戸を叩いた。

何度も来ているので、受付の人にも顔も名前も覚えられている。

目の前のレンは緑谷の顔を見て、何やらニヤニヤ笑っていた。もしかしてゴミが付いているのか。気になって触ってみるが何もついていない。レンは昨日と同じく腰に銀色の金属の棒を下げていた。筒のように見えるそれが何なのか、緑谷には全然分らない。

「なおーん」

連れてきた猫のウラキはレンの足元に早速すり寄った。

（餌あげてるの僕なんだけどな。なんで懐いてくれないんだろ？）

白黒のキジトラの後姿はなんとも自由で、羨ましく思えてくる。

「そう言えばレン君」

「なに？」

「電話でさ修行の成果見せるって言っていたけど……」

一昨日の夜、いきなりかけられてきた電話で彼自身が口に使っていたことだ。

昨日帰ってからずっと気になっていた。

まあ子供が言う事だし、ほんの些細なモノだろう。

「ああ、そういえば」

忘れてたぜと、眩いた。どうやら覚えてなかったらしい。

「まあ無理して見せなくても良いけど」

そこまで見たいというわけでもなかったので、緑谷はその旨を伝えるが。

「そう言うなつて。見せてやるから」

レンは笑つて手をひらひら振る。

「でも君は“無個性”で……」

その一言にレンの表情は途端に不機嫌になった。

険しい顔で緑谷を睨みつける。

「だからさー。そーいうところがダメなんだつて。なんで分かんないかなデクは」

「えつなに？ 何かいけない事でも僕言った？」

「だからそういうとこだつて。はあ……自覚なしかよこんちくしょー」

レンは黙つて先を歩き出す。

猫がレンの足元から緑谷の元に来た。

手を伸ばすと相変わらず避けられる。だがそばには来る。

そばに来るくせに触らせてくれない。それが緑谷をイライラさせる。

相澤がなるべくそばに置けと言わなければ、緑谷だつてわざわざ連れてきたりしない。

「つて言うかデクさー。ヒーローになりたいんだろ？」

「うん、そうだけど」

「デク今のままじゃさ、幾ら強くなったってヒーローになんかなれねえよ」

その言葉に緑谷の血液が煮えたぎる。

今までに緑谷が受けてきた言葉の数々が溢れてくる。

ふざけるな。何が分かる。

いつたい僕のなにがいけないんだと言うんだ。

どいつもこいつも、何も分かってなんかいない癖に。

分かった風に説教を垂れてきて。

レンの顔を見ると、彼はとても悲しそうに下を向いていた。

「なんかデク変わっちゃったな。オレの知ってるデクじゃなくなっちゃった。

今のデク。どっちゃかっていうと敵ライバルって感じがするぜ」

緑谷はレンの言葉を呆然とした頭で聞いて。

殴られたような衝撃を受けていた。

……。

「エリちゃん……その……頭……」

緑谷の指さした先にエリがいる。

彼女はなぜか怯えた顔をしながら緑谷を見ている。

そして緑谷の記憶と決定的に違う部分が有った。



それは一本の角。エリの頭に生えていた筈の巻貝の形をした螺旋を描く角が、無い。

「なんで……どうして……？」

「青石ヒカルさんに“無個性”にしてもらいました」

エリの代わりに答えるのは海路レイ。

僅か十歳の少女は緑谷から守る様に両手を広げ、エリの前に立つ。

“無個性”……だつて？ 青石さん……？ どうやつて……」

「詳しくは話せません。約束しましたから。だから……」

「ふざけるなよ！」

緑谷の大声が部屋中を揺さぶった。

そのままエリの方に向かって歩み寄る。

「だめです！ 緑谷さん！ くっ……」

立ちはだかるレイを片手で押しつけた。

レイはバランスを崩して床に倒れこむ。

「レイさん！」

「レイ！ ……おいデク何しやがる！ ふざけんな！」

「エリちゃん！」

エリの両肩を緑谷はガシツと強くつかんだ。

エリが怯えた顔をする。

「あんなに言つてたじやないか！ 頑張るつて！ 自分の個性と向き合うんじゃないか？」

「おいデク！ エリから手を放せ！」

「レン黙れ！」

「いたいっ……！ いたいです！ みどりやさん！ やめて……」

猫のウラキも必死に鳴いて緑谷の足元に縋りつく。

だが緑谷の感情が力を緩める事を許可しない。

エリの肩から嫌な音がなったが、緑谷は気にも留めない。

そして緑谷の両腕はエリの肩から、喉へと伸び……。

「エリ!? ちっ……ふざけやがって。デク！」

レンが腰に下げた筒を手取る。

彼がそれを手に取り構えを取った瞬間、筒から赤い光の棒が伸びた。

それは光の剣のように見える。

「は……？」

「ちつとばかり痛えぞ！」

驚く緑谷。だがその緑谷の思考を置き去りにして、レンはそれを振るう。

赤い光刃は何の抵抗もなく、緑谷の両腕の肘から上を焼き切った。

「えっ……あああああ!」

「ひっ!」

緑谷は痛みに耐えかねて悲鳴を上げる。切られた断面は焼き付いていて、完全に止血されている。

だが肉が焼ける嫌な臭いが立ち込めた。

そしてレンが手を前に突き出すと、緑谷はその場から吹き飛んだ。

「がっ!」

壁に打ち付けられて内臓がのたうち回る。頭も強く打った。

受け身や抵抗しようにも腕が焼き切られている。

(アズライト……? アズライト!?)

緑谷の声にアズライトは応えない。緑谷の腕は再生する気配を見せなかった。歪んだ視界でエリの方を見る。

エリはせき込んでいる。レイはエリの背中をさする。

レンがエリの体を掴んだままの緑谷の腕を取り外していた。

そのまま汚いものを捨てるように、緑谷の方に放り投げる。

緑谷は深呼吸しながらなんとかその場に立ち上がった。

「何をするんだ!？」

緑谷は激高する。

「それはこっちの台詞だったの！ エリに何しやがる！」

「それはエリが個性を……」

レンは手に持った赤い光の剣。その刃を収納する。

それは創作物でよく見かけるビームソードそのものだった。

(あれはビームソードだったのか……)

「うるせえな。口を開けば個性個性個性……。個性の事しか頭に無いのかよ!？」

「言ったじゃないですか兄さん。だから私は会わせるのに反対だったんです」

軽蔑のまなざしを向けてくるレイ。そして残念そうにしているレン。

そう言えば疑問に思った。

何か見えない力で緑谷は吹き飛ばされた。あれはいったい何だったのか。

「レン君は“無個性”だったんじゃない……」

「そんなの何だって良いだろ！ ほらさっさと再生しなよ。雄英体育祭でやってたみた

いこや」

(アズライト！ おいアズライト！ 何をしているんだ!?)

……………。

（何をしてんだよ!? ふざけるな! さっさと怪我を治せよ!）

——わかった……わ。

緑谷の両腕を青い結晶が包み込んで弾ける。傷一つない元の体に戻った。

「がっかりだぜデク。……あん時俺達を助けてくれたデクは、もう居ないんだな」

「何をっ」

「この事はヒーローに報告させていただきます。」

兄さんも多少は問い詰められると思いますが……正当防衛だと主張させていただきます。

緑谷さんの行為は絶対に見逃せません」

「たかが十歳の子供の言う事なんて、誰が信用するもんか。証拠だつてない癖に」  
緑谷は床に転がっている両腕を拾う。

（アズライト、消せ）

拾った腕は結晶に包まれたのちに、跡形もなく消え失せた。

「いいえ、もう一人証人は居ます。……青石さん」

「は? 青石?」

「青石さん、お願いします。どうか私達を守って……」

「……分かった」

声が響いた。その声の方を向く。

海路兄妹の前に猫のウラキが居座る。次の瞬間、猫の輪郭が光を放ってぼやける。眩しい光がその場を包んで、目がくらみそうになる。

そして、青の少女が静かにその場に降り立った。

「そんな……猫は？　ウラキは!？」

「猫のウラキ。それボクだったんだよ。緑谷君」

「……」

「ごめんさいい」

驚きすぎて言葉が出てこない。視界が急速に速度を失っていく。

フリッカー融合頻度が上昇していく。

回転が早まる頭で、緑谷は直ぐに理解した。

H I K A R U を逆から読むとウラキになる。

なぜこの事実気付かなかったのか。

最初から変だとは思っていた。相澤がアニマルセラピーだとかで猫を緑谷の元にやる。

おかしいとは思っていたのだ。

だが猫の正体が青石だと知って、ようやく点と点が繋がった。

要は監視の為だ。

相澤はメンタルケアだなんだの言いながら、緑谷を警戒していたのだ。じゃないと普通の猫じゃなくて、青石をわざわざ使う理由が無い。

青石を猫の姿にして、緑谷からは分からないように見張らせていたのだ。相澤先生だけは、信用していたのに。

自分は全てに、何もかもに、騙されていた。

そう、思った。

そして途方もない怒りが湧いてくる。

クラスメイトも、先生たちも誰も彼も緑谷を間違っているという。

担任の相澤も緑谷を騙していた。海路兄妹も、緑谷を批判する。

誰一人として、緑谷の味方をしてくれない。

ようやく縫れると思っていた、相澤ですら、敵だった。

誰一人青石が間違っていると、思ってくれない。

(ははは……何だよ……コレ……まるで道化じゃないか)

そしてその全ての元凶が今目の前に居る。

猫は彼女だった。青石ヒカルだった。

全てを隠して、周りの人間を誑かして、世界を喰した。

数千万人を死に追いやった、世界最悪の敵だ。ワイラン

彼女さえ——彼女だけは——消さなくては。

(そうだ、何もかも！ みんな、青石さんのせいだ！)

「緑谷君、ボクは——君と分り合いたいんだ」

その一言が、緑谷の心の水面に落ちた時。彼の心は完全に闇に染まった。

「嘘を吐くな！」

「……違う」

彼女が怯えた顔をする。首を横に振る。だが緑谷の心には届かない。

「騙したな……最初から！ 僕を貶める気で居たんだろ！」

「違う……！ 違うの緑谷君！ ボクは君と……分り合いたくて……」

「分かり合う？ 人の夢を壊しながら、分り合いたいだなんて！」

思いあがるな！ 僕は君と分り合いたくなんてない！」

「……っ」

「お前さえいなければ……オールマイトみたいになれたのに！ お前さえいなければ

……！

僕はヒーローになれたのに！」

緑谷は全力で“個性”ちからを開放する。



緑谷の中で新たな力が胎動しているのを感じる。

彼の両腕から黒いエネルギー状の紐が噴出した。

「緑谷君……それ……なに？」

彼女は明らかに異質なものを見る目になった。

青石の疑問になぜかすんなりと心の中で答が出る。

「黒鞭……」

「黒鞭？」

「知らないよ、そんなこと。世界のために、君はここで消されるべきなんだ！」

「この敵め！」

緑谷の腕から出るエネルギー状の紐が、蛇のように動き回る。それぞれが意思を持つように獲物を狙い、絡みつかんとする。

「バケモンかよ!？」

海路レンが、再び剣を抜いている。

だが、触手のように動き回る黒鞭は、彼女達に届く寸前で蒸発する。

青石ヒカルのアズライトの力だ。緑谷は黒鞭を消して、両腕に力を籠める。

「そう……だ。見ろよ、この個性を。罪のある君にじやない。」

……僕に有るべき力だ！」

両腕をアズライトの結晶が包み込む。青石の目が見開かれる。そのまま周りの少年少女を気にせず、100%の力で殴り掛かる。緑谷出久と青石ヒカルの戦いの火蓋が、ここに切られた。

## ※第74話※

「緑谷君！ お願い……話を聞いて！」

「ああああああ！」

エリの部屋で緑谷は青石に拳を叩きつける。

緑谷の“ワン・フォー・オール”が狭い部屋の中で嵐を起こす。

青石は個性で障壁を作り出して対抗していた。

施設にかかる負荷も個性で帳消しにする。

普通のヒーローや敵なら、今の緑谷の一撃でとつくに絶命している。

間違いなく冗談などで済まされない。

威力は緑谷が雄英体育祭で見せたより強力。

緑谷は青石を確実に殺しにかかってきている。

一瞬でも反応が遅れていたら、青石以外のエリや海路レンとレイは死んでいただろう。

それもただの衝撃の余波だけでだ。それほどまでに緑谷の力は凄まじい。

オールマイトの力を受け継いでいるのだ。これくらいは当然か。

彼女の額に冷や汗が滲んだ。

(とにかく、この子達には指一本触れさせない！)

青石の顔にも気合が入る。今回ばかりは手は抜けない。

今のところは、そばに居るエリと海路兄妹に傷一つついていない。青石は言わずもがなだ。

フリッカー融合頻度が上昇する。

(身体速度及び思考速度を1000万倍に定義)

青石の思考が個性と共鳴する。

青石にとつての見かけの時間が止まる。

青石からみた周囲の時間は1000万分の1の速度になる。

そして青石は周囲の1000万倍の速さで動くし、考えられる。

1000万倍で大丈夫とみた青石。だが何か嫌な予感がして更に保険をかけた。

(……速度を1兆倍に再定義)

1兆。それは1000万の更に1000万倍だ。

周囲から一切の音が消え去る。見かけ上の世界の時が止まる。

青石は目の前で停止している緑谷を見て一息ついた。

流石にこの速度には彼はまだ至っていないらしい。

青石は更に個性で緑谷を、緻密に調べる。

「どうやら彼は通常の10000倍程の速度で動いているようだ。」

雄英体育祭の時には50倍速にもなっていなかった筈。

彼は短い間にどうやら、20倍以上の速度で動けるようになっていたようだ。

内心青石は舌を巻く。このまま成長すればどこまで強くなるのだろうか。

「……緑谷君、どうしちゃったんだろう」

青石の言葉に返事できる人間は居ない。

今の青石の速度は通常の1兆倍。

周りの人間から見たら青石は、1兆倍の速さで動いているし思考している。

青石にとって1兆秒がすぎて、ようやく周囲の人間は1秒の時を刻む。

1兆秒は年になると3万年以上にもなる年月だ。

だから何か一緒にしようとしても、そもそも土俵が上がってこれない。

速いという事は、それだけで武器になるのだ。

青石は古代の兵書を思い出す。それもこう言っている。兵は神速を貴ぶと。

まあそれは戦争に関しての兵法であり、厳密には使い方が間違っているのだが。

「……時間はいっぱいあるし考えよう」

ひとまず青石は戦いに巻き込まれないように、エリと海路兄妹を移動させる。

今いる部屋は昨日のエリの寝室だ。いくら無個性になったと言っても、急に部屋を出ることは出来ない。

だいたい受け入れる先の部屋の準備も必要だし、本当に無個性になったか検査が要る。

青石が無個性にしたと言っても、周囲の人間は本当にそうなのか断定は出来ない。

極論、嘘をついている可能性だってある。

もちろん青石は自分のことなので、無個性にしたのは嘘でも何でも無い。

だが周囲の人間から見れば分からない。

青石は程なく海路兄妹とエリを、地下からモルグフ孤児院の地上の施設に移動させた。

そして再び緑谷の前に戻る。

緑谷の顔をジツと見る。

憎悪があらん限りに溢れ出している。心の内を覗いてみても、全然訳が分からない。

緑谷の心の中は、まるでごちゃ混ぜに書きなぐられた、出来の悪い絵画みたいだった。

だから見ても理解できない。

見たとしても、それにどんな意味が込められているのか分からない。

だからきつと、緑谷自身が自分の気持ちを分かっているのだから。

「エリちゃんにしたこと……さすがに友達でも許せないな。……でも」

緑谷は青石に言った。分かり合いたくなんてないと。

その言葉は青石の心を深く抉った。

こんなにも緑谷を理解したいのに。

緑谷に自信を理解して欲しいのに。

だがそんな気持すらも、緑谷は否定する。

今の緑谷はただ、青石という存在が消え去る事を一番に願っている。

### 『青石ヒカル』

緑谷のアズライトが姿を見せる。彼女は何も言わない。

力を通じて互いの思いだけが行き交う。互いの思いが共鳴する。

彼女の考えに、青石は首を振る。

だが緑谷アズライトはしつこく懇願し続けてきた。

彼女はとことんまで考える。思考し続ける。

青石はジツと緑谷を見る、見続ける。

どうすれば、緑谷を救たすけられるのか。

それをずっと考え続けた。

……

……  
……

氣付いたら体が動いていた。

何故と聞かれても、そう答えるしかない。

色々な事を考えはした。色々なものを見て、思つて。そして結論付けられたからだ。

青石ヒカルは——彼女は、あまりにも危険だ。

一見、彼女のいう事は正しく心地良いものに聞こえる。

だが、彼女が理想のままに行動した果てにいったい何が待ち受けるのか。

それを緑谷は直感的に理解した。

いつか聞いた法月の言葉を思い出す。

——民衆は目をそらす。良薬は口に苦し、その現実から逃げる。

そのまま、より自分を甘やかしてくれる、甘美な幻想へと惹かれていく。

自ら思考を放棄して、より強いものに管理される家畜へと身を落とす。

それが民衆にとつての合理的判断であり、楽な選択肢なのだ。

今なら分かる。

青石ヒカルはいずれ、人類を滅ぼす存在になる。そう確信した。

そして彼女は緑谷の夢を踏み尻ながら口にする。分り合いたいと。



どの口が言うのか。

緑谷の中のためにため込まれた不満に火が付けられた。

フリッカー融合頻度が上昇し、思考速度が上昇する。

身体速度、思考速度。共に1000倍という数値に達した。

緑谷の目が青石ヒカルを捉える。

「SMASH!」

そして緑谷の放つ拳は避けられることなく、彼女は食らった。

腕で防ぐことも叶わず、彼女の胴体に拳が食い込む。

「ごほっ! ……緑谷君。やめて。ボクは君と分り合いたいんだ」

青石は口の端から血を零す。

緑谷は確かな感触に笑みが零れた。優位を確信し、勝ち誇り口にする。

「ようやく捕まえたよ青石さん」

青石の目が揺らいだ。彼女の口車に乗る気はない。

彼女のやり口は分かっている。

分り合いたいなどと口にしながら、彼女は自分の考えが正しいと思いこんでいる。

最終的に緑谷が折れるまで、彼女が折れることは絶対はない。

だから、最初から彼女とはまともに取り合わない。

そうでもしないと、やがて彼女の言い分に乗って賛同していくしかなくなる。彼女の周りの何も考えていないクラスメイトや先生たちのように。

「ははははは！ 分かるよ、うん。……気持ちは良く分かる。」

僕の今の速度は1000倍。仕方ないよね混乱するのは。

同じ土俵に立たれたことなんて、今まででなかっただろ!？」

今までは一方的にやられる立場でしかなかった。

だがこれからは違う。これからは、こちらからやり返す番だ。

緑谷は腹にヒットした拳を引き戻し、再び放つ。

今度は青石の顎を正確に打ち抜いた。

緑谷は確信する。間違いなく自身は、青石よりも先のステージへと足を進めていると。

「どうしたんだい青石さん!! ついて行くので精一杯じゃないか!」

どんどん緑谷は攻撃を繰り返していく。

青石は防戦一方だ。

緑谷からのパンチや蹴りを辛うじて耐えている。

だが完全に避けることは出来ない。

ことごとくが急所ないし、狙った部位の近くに当たっている。

彼女の足がぐらつき、よろめいた。

緑谷は口を開く。

「こうして戦うとよく分かるよ青石さん。前の僕は確かに弱かった。

認めるよ。でもそれは過去。今は違う。

僕がどんな努力をしてたか君は知らないだろう？

毎日毎日、これでもかかって程頑張ってきたんだ。

僕はどんどん強くなった。そして追い越した。青石さんもね！

今の僕は……君より遥かに強い！」

彼女はただ悲しそうな顔をするだけだ。

強さになんて意味が無いのに。そう言いたげな顔をしている。

緑谷はそんな綺麗ごとを手を止めるつもりはない。

「今の僕は周りの人間の1000倍の速さで動ける！ 体育祭の時と違うんだ！

お望みならさ……もつと速く出来るよ！」

更にフリッカー融合頻度が上がっていく。

もつと。もつと、先へ。力を求め、あらゆる代償も支払う。

頭が焼けるように痛い。

脳の回路がショートしていかれていくのが分かる。

記憶の端々が飛んでいく。焼却された書物からは文字が読めないように、緑谷の記憶が焼き焦げていく。

——もう……やめて……

アズライトの懇願を一蹴する。

構うものか。

この世界の歪みを破壊さえてきたなら。緑谷はどんな事だつてする。

青石ヒカル。彼女は数千万人を死に追いやつた敵。

世界最悪の敵。

スターレインの迎撃だとか、敵を大量に確保しただとか、病人を何百万人も癒しただ

とか。

そんなものは全て些末事だ。

過去は洗い流せない。罪は決して消えやしない。

これから彼女がやろうとしていることも、決して許してはいけない。

だから緑谷は、拳を振るう。

彼女が嫌う暴力を、彼女自身に解き放つ。

言葉で言つて聞かないのなら、殴るしかないでは無いか。

だから緑谷は力を求める。無力であることがどれ程惨めなものなのか、それを知つて

いるから。

言葉だけでは何も為せやしないことを、知っているから。

緑谷の体が嵐を巻き起こす。

彼の目には青石しか目に映っていない。周りの風景や人間など、目にもくれない。緑谷の速度はさらに上がる。

嫌がるアズライトの力を強制的に開放して、更に向こうにある領域に手を伸ばす。更に向こうへ。

どれ程の身に余る力だろうと、知った事でない。

どれ程の代償が有っても、どうでもいい。

身体速度と思考速度は、5000倍にまで引き上げられた。

「はははははは…… どうだ！……これが僕の力だ！」

君の目ではもう追う事すら出来ないだろ！ 青石ヒカル！」

数十、数百の緑谷の攻撃。青石は緑谷の蹴りをまともに食らい、壁にまで吹き飛んだ。その着弾地点に緑谷は駆けこむ。

壁にめり込む彼女の首を掴んで上に持ち上げる。

青石は苦悶の呻きを流した。

「まあでも仕方ないよね！……今の僕は更に早い。さっきの五倍の速さだ！」

普通の5000倍のスピードだ！　僕にとって5000秒が過ぎて、周りはようやく1秒過ぎるんだ。

戦いにすらならないよね。だから、ついてこれる青石さんは凄いなと思うよ。とても尊敬しているよ。強さという面でね」

青石は強い。

それは緑谷は認めている。

だが、今は自身の方が強い。そう緑谷は確信している。

むしろついてこれている青石が凄いな。

流石に凄まじい実績を残しただけはある。

「だいたい君が僕に勝てるわけが無いだろう！　君は個性はただのアズライト。

僕は勝ち取ったんだ。アズライトだけじゃくて“ワン・フォー・オール”を！

二つの個性に、たった一つの個性で勝てる道理なんてない！」

彼は彼女を床にたたきつける。そして悠然と見下ろす。

「……そっか、緑谷君は凄いな」

青石はよろよろと起き上がり、だが完全には起き上がれずに膝を着いた。

彼女の胸倉を掴み地面に押しさえつける。

力で到底叶わないと思っていた人間を、こうして屈服させている。

緑谷の中で興奮が湧き上がってくるのを感じた。

「それに君と僕は根本的に違うんだ。

君はただ運よく授かっただけ。僕は認められ、譲渡された力。君とはその本質が違うんだよ！」

馬乗りになって更に拳を叩き込む。

何度も、何度も。

彼女の唇が裂け、頬の中を切って血が出てくる。

緑谷の拳がだんだん青の少女の血にまみれる。

「そしてこのまま、この力で君を倒し！ この世界をあるべき姿に戻す！」

「……あるべき姿？」

息も絶え絶えになった青石が聞き返してきた。

「そうさ！ ヒーローが居て、<sup>サイラン</sup>敵がいる。

そんな優しく暖かい、今の平和な世界だ！

君の言う世界には人間の温かみが欠片もない！

誰もヒーローになれない！

誰も敵をやっつけられない世界なんて、つまらないじゃないか！

そんなの間違ってる！」

再び緑谷は暴力を振るう。

世界の破壊を防ぐため。あるべき世界を取り戻すため。

悪を許さないため。敵を排除するために。

姿形に惑わされてはいけけない。甘言に耳を貸してはならない。

だから緑谷は己の直感だけを信じる。

耳を塞いで目を閉じる。余計な情報は何もいらぬ。

敵とは何か。悪とは何か。

感じたままに行動すれば、おのずと見えてくる気がした。

そして緑谷は殴り続ける。

かつての友にしているこの行為に、罪悪感はない。

幼い頃にオールマイイトが敵を殴るのを見ても、何も思わなかった。それと一緒にだ。

悪人が殴られて何がいけない。

悪人がやられることの何が悲しいと言うのか。

青石ヒカルは敵だ。理由なんて何だっていい。本能がそう命令している。

だから殴る。形ある力を行使する。

そうして世界は成り立っている。

彼女の悲しい顔も、声なき悲鳴も、涙も。緑谷の心は動かさない。



敵が流す涙に、同情などしない。

同情してはいけない。

だから緑谷は、ひたすらに彼女をあらん限りの力で殴った。

彼女が口を開いた。

「敵が出て、ヒーローが倒す。それが君の言う正しい世界なの？」

「そうだ！ それこそあるべき平和な世界なんだ！」

そして僕はヒーローになる。僕は敵を倒す。

僕はあるべき世界でヒーローとして君臨する。“平和の象徴”になる。

君は……その世界を破壊しようとする敵だ！」

敵は、こうやってヒーローに退治されなければならない。

世界は敵が出てヒーローが対処する。

そうする事で成り立っている。

緑谷はその秩序を維持するヒーローに憧れた。

敵をこの手でやっつけられたら、どれ程かっこいいだろうか夢を見た。

だから、敵を無くし、ヒーローを無くすなど言う青石は敵だ。

あつてはならない存在だ。

この世界の秩序を破壊する敵そのものだ。

断じて許す訳にいかない。許されてはいけない。  
敵ウイランとは何か。いくら考えても分からなかった。

でもね、何も考えず。殴ると分かる。はつきりとね。  
普通の人を殴ると心苦しい。

でも敵ウイランの君を殴っても、心は痛まない。

敵ウイランがやられていると嬉しくなるんだ。

敵ウイランが傷つくと、すごく心がワクワクするんだ。

君だってそうだろう？」

「……違う」

「何も違わない！　そう思えない君ウイランが敵ウイランただけだ！」

「あああつ！」

更に彼女に一撃を加える。青の少女がのたうつと、とても心が躍る。

世界最大の巨悪をこうやって打ちのめしている。

その全能感はとてつもない快樂を彼にもたらしした。

「うつつ……」

青石が泣いている。緑谷は笑う。

敵ウイランの彼女が悲しい顔をする。敵ウイランの青石が苦しい顔をする。

緑谷の心の中はとても晴れやかになった。

敵が傷ついたら、緑谷はとても気持ちよくなった。スッキリと爽快な気分になった。テレビの中の敵がやられている時と同じ。むしろそれ以上の快楽を緑谷に与えてくれる。

そうだ、そうでなくては。

世界はこうでなくてはならない。戦いを否定してはいけない。

悪人に正義の鉄槌が下り、然るべき苦しみを与える。悪人がやられている姿はやはり面白いものだ。

面白いものを求め続けて、何がいけない？

悪人が苦しむ姿を見れない世界など、ただ苦痛なだけだ。

青石が緑谷を見つめている。

「そっか——君が敵だったんだね。」

ボクが敵にしてしまったんだね」

どこかで見たような青石の顔と言葉に、緑谷は動揺した。

「何を訳の分からないこと……！ 僕はヒーローだ！

こうして敵の……悪の君を打ちのめすヒーローだ！

僕は敵じゃない！ 敵は君だ！ 僕はヒーローだ！

「……ねえ、言いたい事は、全部言い終わった？」

「何っ!？」

まだそんな事を言うだけの気力が残っていると言うのか。

まだまだ仕置きが足りないようだ、緑谷は思う。

そして追撃を加えようとして……。

「ぐっ!?! くそ!」

片手で易々と受け止められた。彼女の負っていた傷が一瞬のうちに完治する。

青い結晶がキラキラと舞い散り、雪のように輝いた。

馬乗りになった緑谷は跳ねのけられる。あつという間に体勢を整えられる。

「何もなければ、もう終わらせてしまおうね」

何故だろうか。震えが止まらない。

間違いなく今は緑谷の方が、圧倒的に優位なはずだ。

緑谷は5000倍の速度で動いている。

さつきまで圧倒的に押ししていたし、実際彼女は成すすべもなかった。

けれども、緑谷の頭の中ではガンガン警報が鳴り響く。

勝てない——逃げろ——調子に乗りすぎた。

それを緑谷は虚勢で塗りつぶす。

あらん限りの声を上げて、彼女を挑発し吼える。舐められないよう威嚇する。

「はっ！ 僕についていくだけで精一杯の癖に！」

そんな君に何が出来るんだ!? やれるものなら、やってみろよ！」

——駄目！

「さよなら、緑谷君。……君はボクにとっ……」

——危ない！ 避けてっ！

青石が何を言ったのか。それは緑谷のアズライトの悲鳴にかき消され聞こえなかった。

ただ彼女がやけに生々しい姿で緑谷の前に姿を現して。

そして両手を広げ、緑谷と青石の間に立ちはだかつていたのが印象的で。

「ミストルテイン神殺しの弓」

緑谷のアズライトに無数の光の矢が刺さっていて。

緑谷は何も出来ずに呆然とそれを見ていた。

緑谷の思考速度と身体速度が元に戻る。

世界の時が再び動き出す。

「アズライト……！」

緑谷は声の限りに叫んだ。喉が裂けるほどに悲鳴を上げた。

「アズライト!? しつかりしろアズライト!」

未だ名前すら付けてなかった彼女を、個性の名で呼び続ける。

彼女の姿は明滅しながら、消えようとしていた。

緑谷の中に僅かに残っていたとある感情。それが少しだけ息を吹き返す。

だが、それは余りにも遅すぎた。

## 第75話

「アズライト……」

緑谷の悲鳴が胸に痛い。

青石は緑谷を庇った緑谷のアズライトの方を見る。

彼女は緑谷に宿った個性そのもの。

青石は自らの個性レキオンと意識を同調させる。

掌を前に出す。

緑谷のアズライトが無数の光の粒子となって、青石の手の中に吸い込まれていく。

緑谷出久の中からアズライトがアンインストールされる。

青石の掌の中に粒子が集まり、光の玉となり輝いた。

そのままだと緑谷のアズライトは自分の中に取り込まれ同一化してしまう。

青石は、緑谷のアズライトだった彼女を結晶の形にして、再構成する。

「あつ……ああ……アズライト……」

緑谷は呆然と見ている。

自らのアズライトが、結晶の形にされているのをただ見ている。

緑谷のアズライトは、仮死状態のまま、青い宝石の姿になった。つまりは圧縮ファイエルだ。人で言うところのゴールドスリープに近い。

彼女は青い結晶となったアズライトを傷つけないよう、ロケットペンダントを創造し、そこに収納する。

そのまま首に下げた。カチツと閉まったロケットペンダントが音が鳴る。

緑谷のアズライトは、青石の胸のロケットに眠った状態で封印されている。

死んではない。

だが緑谷から見ると、違ったようだ。

彼は仇を見るような目で青石を睨んでくる。

「……よくも、よくも！」

いきり立ち青石に殴り掛かってくる。

だが青石は難なく回避した。

「返せ！ 返せよ！」

「……」

泣きわめいている緑谷に、青石は取り合わない。

もう言葉は通じないと思っっているから。

もう彼とは分かり合えないと、思ってしまったから。



少なくとも今の時点の緑谷とは無理だ。そう青石は判断する。彼には時間が必要だ。

人には何かを理解するまでに、ある程度の期間を要求する。

だが、緑谷の取り乱したその態度は、青石の心を大きく揺さぶった。

大切な人を失った痛みが、緑谷の顔に現れていた。

胸がズキツと痛む。緑谷にとってのアズライトは、多分青石にとっての相澤に近かったのだろう。

青石はそう考えている。

けれども、青石は同時に怒りも覚える。

「緑谷君は……ううん、みんな自分勝手だね。

緑谷君はまだ優しさを持つてる。優しい心を持つてる。

なのに……優しい心れをあげるかどうか、勝手に決めてしまう。

勝手に自分の中で人を評価して……見合わない相手に優しさをあげようとするな。

それは本当に、すごく悲しいことなんだよ。

優しくされるのに資格が必要だなんて、すごく残酷なことなんだよ」

「ふざけるな！ そうやって君はいつもはぐらかす！

人を惑わす！ この人殺しが！」

緑谷は体ごとぶつかってくる。青石は正面から受け止めた。

緑谷は青石が作成したロケットペンダントに腕を伸ばしてくる。

その中に、眠っている緑谷のアズライトがいる。

先ほどよりあまりに遅い緑谷の動きを、青石は悠々と躲した。

「……うん、知ってた。今の緑谷君にはきつと、何を言っても伝わらない」

「待てー！」

青石は手を緑谷に向ける。

「その個ワン・フォー・オール性……元々八木さんのものなんだよね。返してもらおうよ」

青石は個性を使用する。

緑谷が身構えるがあまりにも遅い。

彼の体を光が覆う

緑谷が痛みを感じる暇も無いくらいに素早く彼の個性を奪い取る。

まっつろ服わぬものを、排除する。

緑谷に残っている個性。それは代々受け継がれた力。“ワン・フォー・オール”。

その個性を先ほどと同じ要領で再び結晶にして、緑谷の中から抜き取った。

「ぐっ！………まさか!？」

「うん、君はもう“無個性”だよ。さよなら……デク」

緑谷の目が開かれる。

自らの体から個性が無くなったのを感じたのだろう。

青石は二つ目のロケットペンダントを作成して、結晶化した“ワン・フォー・オール”をしまう。

首からそれを下げる。

二つのロケットペンダントがぶつかって、小さな金属音がなった。

それはまるで試合終了の鐘の音。

勝敗はここに完全に決した。

彼はがつくりと膝を着く。

今まで散々無理をしていた上に、疲労が一気に襲い掛かったのだ。

頭も抱えている。脳も酷使していたのだから当然だ。

個性でわざわざ確認しなくても分かる。

きつと彼の脳内の端々の回路は、焼き焦げている。

日常生活にすら、もしかして支障が有るかもしれない。

青石はもはや脅威ではなくなった緑谷に背を向ける。

「……青石ヒカル……！」

絶叫する緑谷を置いて、ワープゲートを作成。

白い靄のような空間と空間を繋ぐ門を作り出す。

それをくぐり、青石はその場から立ち去った。

目の前にいきなり外の風景が広がる、

潮の香りがする。

波しぶきが高く上がっている。

前にはゴミだらけの海が広がっている。緑谷がゴミ拾いしていた海浜公園だ。

青石の他に、人は誰も居ない。

彼女の心を押し量ることも無く、太陽は燦々と輝いている。

青石の張りつめていた心は、一気に限界を迎えた。

「うあつ……ああああ……うわああああ！」

どうしてっ！ どうして!? ああああああ！」

青石の目からは、涙が溢れて止まらなかつた。

それを誰にも見られないように、誰も居ない場所を探してただ泣いた。

胸に下げた二つのロケットペンダントが、潮風に煽られて揺れていた。

……

……

……

「……以上が、今回の顛末になります」

「はああああああ」

ミッドナイトが馬鹿にでかいたため息をついた。

ため息をつきたいのはこつちだ。そう相澤消太は思う。決して口にはしないが、緊急で開かれた職員会議。

そこで昨日、モルグフ孤児院で起きた緑谷と青石の争いを共有している。

そしてさつき、相澤が調査資料の内容を報告し終えたというわけだ。

雄英の職員一同が、職員室に集まっている。当然、オールマイトも、痩せた姿の彼。見た目こそ一番貧弱だが、実績が実績だ。

彼の発言力は校長の次に強い。

「それで青石君は？」

校長が聞いてくる。相澤は間を置かず答える。

「部屋に閉じこもって出てきません。食事にも手を付けてません」

部屋とは言うまでもない。地下五千メートルの管理施設だ。

もはや彼女は自由に入出入りしているので、本来の役割を施設が担っているとは言えない。  
い。

むしろ今では世間から彼女を守るためという意味合いの方が強い。

どこか地上の家に移り住むことも考えはしている。だが今居る場所より、安全な場所など有りはしない。結果としてそこに居続ける選択を彼女はしている。

根津は首を傾げた。

「そばに居てあげてやらなくていいのかい？」

「今は一人にして欲しいと……」

彼女は枕に顔をうずめて泣いていた。慰めようにも拒否される。どうしようもなかった。

寂しがり屋の青石にだって一人になりたい時はあるだろう。

相澤は今はそのとおくおこうと思った。

「ぼっか！　そういう時こそ、そばに居てやるもんでしょ!？」

女心分かってないわね！」

右隣のミッドナイトがぼんと肩を叩いてくる。

「個性で追い出されては、どうしようもありません」

最近相澤の個性の影響下でも、平然と個性を使用してくる。

元々個性としての格が違うので仕方ないが、内心複雑な心境だ。

「……取り敢えず、職員会議が終わったら相澤君は青石君の元に行きなさい」

「ですが……」

渋る相澤に校長は首を横に振る。

「いいね？」

「……了解しました」

しづしづ頷く相澤。左隣の“プレゼントマイク”が口を開けた。

「緑谷はどうなる？」

「流石に何もなし、というわけにいかない。青石君は、緑谷は個性を使つてない。

そう言い張つてゐるらしいけど……」

「まあ嘘でしょうね。海路レンと、海路レイ。それにエリの証言と矛盾してます。

緑谷が普通では考えられない威力のパンチを繰り出したそうです」

13号の発言に一同は頷く。

相澤はどうやら、青石は緑谷をどうにか庇おうとしているのだろう。そう思う。

だが、そうは問屋が卸さない。

何が起きたのか、事実は徹底的に解析される。個性を使った形跡が有れば、なおの事。

現場に残る数々の証拠が、緑谷の犯行の全貌を物語っている。

残念ながら、相澤にも庇う事は出来ない。

「青石君は緑谷君を庇っているけど、もう明らかだね。」

緑谷君は不法に個性を使用した。それも明らかに害する目的で。

間違いない彼は……定義上 ライアン 敵にあたる」

「なら」

「残念だけどね、緑谷君は『除籍』処分にする。どっちみち彼はもう『無個性』だ。

とてもヒーロー科に居れないだろう。異論はあるかい？」

「……ありません」

苦虫を噛み潰したような相澤。だが他の教職員たちは違うようだ。

「賛成！」

「異議なし！」

「当然だよなあ？」

誰一人として、緑谷の味方をするものは居ない。

いや、一人だけどつちつかずな態度の人が居る。オールマイトだ。

彼はずっと腕を組みながら、何か考えている。

「良いよね？ オールマイト」

「……彼は今どこに居ます？」

「自宅だね」

本来なら留置所に勾留されるところだ。緑谷のやったことはれっきとした犯罪なの



だから。

だが青石だって本来なら、そうならないとおかしい。インターンの時のように許可が出ていたわけでない。

緑谷の個性を跡形もなく消し去った。それは問題にされるべきではないか？ だが相澤の見る限り、青石を非難する声は一つも上がらない。

相澤は正直、青石はやり過ぎたと思っている。だが対案も思いつかなかった。それを青石にも伝えた。「やりすぎだろう」と。

彼女も涙ながらに頷き、泣きじやくりながら後悔していた。

再び緑谷に個性を返すべきかと相談された。

だが相澤は、緑谷に個性を返すことを善しとしていない。

他の人間も同様だ。

もし今の正常でない精神の緑谷に個性を返せば、どんな事態になるか分からない。そして緑谷は元々無個性だったのが、周りの判断を後押しした。

最初の状態に戻るだけだから、何も問題は無いだろう。

そんな風に周りの教師たちは捉えているようだ。個性を失った緑谷の心境は如何ほどの物だろうか。

「警察は何をやってるんです？」

オールマイトの疑問は当然だが、ある人物の手が回っている。

「この事件は内々に処理される。他ならぬ法月の命令さ」

「……隠蔽ですか」

雄英在籍の生徒が敵ツインになったとなれば、ブランドに傷がつく。

だから、最初からなかったことにすればいい。

幸い目撃者は少ない。

緑谷の除籍の理由など、後から幾らでも作り出せる。

そんな所だろうと、相澤は推測している。

「隠蔽はヒーローの十八番おはじだろうと言われてしまったよ。

……会議は終了だ。緑谷君は“除籍”処分にする。

相澤君、書類はこちらでやっておくよ。

それよりも青石君やI-Aのメンタルケアに力を入れる事。いいね？」

「了解しました」

相澤は席から立ち上がる。

教師たちは各々、自分の仕事に戻っていった。

それぞれに割り振られている仕事がある。皆時間を何とか作って、この会議に出席しているのだ。

時間を無駄になど出来ない。

相澤は地下へと向かう。

いつものエレベーターに乗り込み、迷路のような通路をいく。

もう何回も何回も通いなれた道。

生き物の気配がない、無機質な空間。

幾重もの電子ロックと隔壁を通り抜け、青石の居室に足を踏み入れた。

「青石」

「……相澤さん」

青石はベッドの淵から立ち上がる。千鳥足で相澤に近づく。

相澤の手が青石の頭を撫でようとして、だが止まる。

彼女も甘えてこない。

青石の顔は涙でぐしょぐしょだった。

首から二つのロケットペンダントが下がっている。

その中にそれぞれ、緑谷が持っていた“個性”が形となって入っているという。

青石は顔を俯かせる。

「緑谷は……”除籍”になった」

彼女の肩が揺れた。

「力及ばず済まない」

「相澤さんのせいじゃないよ。……全部、全部ボクがいけないんだ」

「そんなことは……」

「そんなことあるの！ ボクがあんな事言いださなかつたら、緑谷君はああならなかつた！

ずっとボク達友達で居られた！ ずっと！ ……なのに」

本当に運命とは残酷なものだ。

青石と緑谷の中を引き裂いたのは夢だ。

誰もが幸せに暮らせる世界を作りたいという夢だ。

敵がいヴィランない世界を作りたい。人の為に誰かの為になりたい。

その綺麗な願いが、緑谷を闇の中に突き落とす。

人の思いや願いとは、受け取り方次第でいくらでも変わる。

青石の“善意”も緑谷からしたら“悪意”だった。

完全な正義や悪は存在しえない。立場によっていくらでも変わる。

言葉の重みは、発言した人によって異なる。

もしも、緑谷と同じことをオールマイトが言っていたら、周りはどう受け止めただろ

うか？

多分、このような事態にはならなかった筈だ。

オールマイトには実績がある。積み上げた名声と人望が有る。

だが、緑谷にはそれが欠けていた。まだ彼は、力が有りこそすれど、実績が伴っていない。なかつた。

青石には既に人類を救済した実績があつた。

だから、周りの人間が青石に味方して、緑谷に敵対したのは偏にそのせいなのだ。相澤はそう思った。

「緑谷君が、こんなこと言つてたの。」

敵がサイランやられていると嬉しくなる。敵がサイラン傷つくとワクワクするって。

そう思えない、ボクが敵サイランなんだって」

「……それは違う」

「本当に、そうなのかな？ もうボクには分からない。」

何が正しくて、何が間違っているのか」

「……今は休め。お前は疲れてるんだよ」

頭を撫でると青石は力なく返事をする。

「うん」

相澤は青石をベッドに連れていき、寝かしつける。

程なく青石はすうすうと寝息を立てた。

今回、相澤は失敗した。そう自覚している。

もう少し緑谷との向き合い方を考えていたら、このような事態は避けられたかもしれない。

もつと真剣に緑谷と向き合っていれば。

だが、もう遅い。

過去は変えられない。

時間はただ、未来に向かって流れる。時計の針を戻すことは出来ない。

それは青石も同じだ。

もしかして、青石が更に力を付けたその先。時すらも超越し、過去に向かう事も出来るかも知れない。

そしてそれは全部仮定の話だ。

仮に青石が過去を変えられる力を得たとしても、過去を変えようとしなйдらう。確証はない。

だが相澤は過去が変えられないのは、良いことでも有ると思う。

今という時間も、やがては過去になる。

過去とは、現在という時間の積み重ねで出来ている。

今ここに居る相澤と青石は、何物にも決して変えられない。永遠の存在としてあり続けることが出来る。

過去は無かつたことに出来ない。

逆に言うと、今過去になる自分自身も、無かつたことにな決してならない。彼女といふこの時間は一瞬であり、同時に永遠でも有るのだ。

「何を考えているんだか。俺らしくもない」

相澤は青石の前髪を優しく払った。

彼女の整った顔を見る。

時折悪夢にうなされるように苦しそうな顔をする。

相澤はずっと彼女の手を握っていた。

そうすれば少しでも、彼女の心が分かるような気がした。

相澤の携帯が震える。

電話がかかってきた。

直ぐに相澤はそれに応える。

『もしもし、相澤先生』

「緑谷か」

誰からかは分かっていた。おそらく彼は、知らせを受け取ったのだろう。

『今までありがとうございます』

「……力になれずに済まない」

『……先生は……その……』

「猫の件は、本当に済まなかった」

電話の先で動揺したのが声だけで分かった。

青石を猫にして側につけたのは、失敗だった。相澤は反省している。

「騙そうとしたわけじゃない。だが……お前から見たら、結局そういうことになるんだろうな」

『……何の意味があったんですか?』

相澤は正直に話す事を決意した。

「法月にお前を狙う動きが有った」

『法月……!』

「教室での青石とお前の言い争い。教師たちに広めたのは法月だ。

やつが何かしてくるのではないか。そう俺たちは考えて、青石をお前の側に付けた。

青石が側に居れば法月はお前に手出しは出来ない。

その筈だった」

『そう、だったんですか……』



本当に今更の話だ。最初からそう言っておけば良かったかもしれない。だが緑谷の除籍は覆らない。これは既に校長らで決定した確定事項だ。

「緑谷。飯は食ってるか？ 体調には気をつけろよ。何をするにしても体が資本だ。

ちやんと……」

『つ………！』

「緑谷？」

『ありがとう………ございます………』

電話口から聞こえる緑谷の声には嗚咽が混じっていた。

「辛かったな、緑谷」

『はい』

「苦しかったんだろ」

『はい』

「もう、終わったんだ。人の為に、夢を叶えるために。」

強い力を求めて、戦い続ける時間は。もう終わったんだよ」

電話から聞こえる緑谷はずっと泣いていた。

ふと青石に目をやる。彼女は目を開けていた。

そして電話の方に耳を傾けていた。

『青石さんに、伝えて欲しいんです』

「言ってみろ」

『本当に……ごめんって。……じゃあ』

「緑谷？ 緑谷!! 切れたか」

電話から聞こえてくるのはプープーと繰り返される電子音のみ。

青石に目をやると両手で顔を覆っている。

互いを思いあっているのに、何故こうもすれ違う。

人の為に誰かの為に。そう思っているのに、何故傷つけるしか出来ない。

不器用な生き方しか出来ない青石と緑谷。

そんな二人を見ていると、相澤の胸の内までも痛くなる。

分り合いたい青石は、緑谷のたった一言の謝罪の言葉を聞いて、涙する。

緑谷と青石。

二人が分かり合える日が、いつか来るのだろうか。

泣いている青石の姿を見て、自宅に居るであろう緑谷に思いを馳せる。

似て居ない筈の二人の姿は、なぜか相澤にはとてもよく似ているように見えた。

地下五千メートルの部屋の隅。

涙の雨が、ベッドのシーツをただ濡らしていた。

## 第四章

### 第76話

皆さん、こんにちは。ボクは青石ヒカルです。

この放送は、日本のみならず全世界に放映されている筈です。

まず、私が十年前に引き起こしてしまった事件を重ねてお詫び申し上げます。

本当に申し訳ありませんでした。

本日は、皆様に一つの疑問と提案があり、この場を設けさせて頂きました。

さて、“個性”という超常が出て100年以上経過して、人類は変化せざるを得ませんでした。

“個性”が人類に発生し、人という規格その物が崩壊してしまったからです。

そして年々、“無個性”の人は減少し。

逆に新しい世代の人ほど強力な“個性”を持って生まれつつあります。

いつ世界を滅ぼせるほどの力をもった敵ライバルが現れても、おかしくないのです。

……皆様に問います。

このままの世界で、本当に良いのでしょうか？  
今の世界は平和でしょうか？

私の住む日本は平和だと言われています。

ですが、本当にそうでしょうか？

“ 平和の象徴 ” オールマイトを始めとした数多くのヒーローが存在する事で、辛うじて秩序が保たれているにすぎません。

ヒーローの給料は基本的に歩合制です。

ヒーローが多く存在するという事は、逆に言うとならぬ彼らの収入を支えられるだけの敵ヴィランがいる。そう言うことになります。

今はヒーロー飽和社会、そう言われています。

ですがそれは、数多くの敵ヴィランが発生し、それをヒーローが倒す事で成り立っているのです。

それは殆ど奇跡に近いです。

神様が示し合わせたような、本当に小さな確率の偶然の積み重なり。

奇跡のような偶然に縋りついて、ボク達は生きながらえているんです。

ボクは疑問に思います。

ヴィラン敵が発生し、それをヒーローが倒す。

あなた達は、いつまでそれを繰り返すのですか？

いつまで続けるのですか？

もしボクが敵を捕まえ続けるとしたら、いつまで頑張らないといけないのですか？

ボクは嫌です。

この社会……世界の現状がとても嫌いです。

敵が発生し、それをヒーローが倒す。

そんな悲しい戦いの歴史は、もう終わらせたいです。

もう一度問います。

あなた達は、今の社会のまま、本当に良いのですか？

敵が発生し、それをヒーローが倒す。

それで、本当に良いのですか？

それで、本当に満足ですか？

ボクは、変えたい。

敵が発生し、それをヒーローが倒す。

それを終わらせたい。

ボクは敵が一人も居ない世界にしたい。

誰も敵にならずに済む世界にしたい。

ヒーローが要らない。必要とされない世界にしたい。  
そんな世界にしたいんです。

今の飽和している程に、ヒーローが必要な社会の現状が、おかしいとは思いませんか？

本当は、ヒーローなんて必要なかつたんです。

“個性”が出現していなかったら……。

ボクは、その気になればこの世界から、全ての個性を抹消できます。

個性のない世界に出来ます。

やろうと思えば、地球上全ての人を“無個性”に出来ます。

……もちろん、ボクもそれだけで平和な世界になるなんて考えていません。

たとえ世界から“個性”がなくなっても、悪いことをする人は出てきます。

個性が無くなる。それだけでは、敵は決して居なくなりません。

敵とは、そんなに簡単な存在ではないのですから。

ですが……どうか、皆さん考えてください。

あなた達は、テレビでヒーローが敵を倒しているのをどう見ていますか？

敵がなぜ敵になるのか、考えたことが有りますか？

ウイラン  
敵とは、何でしょうか？

ウイラン  
ボクはこう定義しています。

ウイラン  
敵とは、人が誰も心に持っている残酷な本性。それに負けてしまった人です。

ウイラン  
敵は強いから、敵になるんじゃないんです。

ウイラン  
敵は弱いから、敵になるんです。

ウイラン  
敵にならずに済む強さを持たない弱者なんです。

ウイラン  
敵になるまで追い詰められた、可哀そうな人なんです。

ウイラン  
敵なんて他人事だと、考えないでください。

ウイラン  
敵はボク達のすぐ傍に居ます。

ウイラン  
敵はボク達の心の中に居ます。

ウイラン  
誰もが心の中に、敵を飼っています。

ウイラン  
関係ないなんて思わないでください。

ウイラン  
あなた達は敵が傷つくのは楽しいですか？  
ウイラン  
気持ちいいですか？

ウイラン  
敵がやられていても、心は痛みませんか？

ウイラン  
ですが忘れないで下さい。

ウイラン  
あなたがテレビの向こうのヒーローを讃え、  
ウイラン  
敵を蔑むとき。

ウイラン  
あなたもまた、敵になっっているのですから。

ヒーローが敵ツイランに振るっている物は、紛れもない暴力なんですから。  
どうか、考えてください。

どうか、話し合ってください。

これ以上、誰も敵ツイランにならないように。

誰も敵ツイランにならずに済むように。

この世界が、今より少しでも優しくあれるように。

それは、ボクだけでは決して出来ないことです。

ボクだけでは駄目なんです。皆さんの力が必要なんです。

どうか、ボクに力を貸してください。

この世界から、敵ツイランが居なくなるように。

敵ツイランに苦しむ人が、居なくなるように。

敵ツイランに追い込まれる人が、居なくなるように。

敵ツイランが居ない世界、ヒーローが要らない世界になるように。

どうか——どうか。

……

……

……



青石ヒカルは空が好きだと、相澤は知っていた。授業中も休み時間も、暇さえあれば空を眺めている。

地下に居る時でも、天井の遙か向こうに広がる空の方を見ている。

青石にとつてきつと空とは自由の象徴なのだろうと思う。

何物にも束縛されず、どこまでも自由にあれたら。

思い描くまま何処にでも行けたなら、どれ程良いだろうか。

「青石」

相澤はただ夜空を見上げている彼女に呼びかけた。

青石の髪が翻る。白いワンピースがたなびく。

月に照らされて彼女の髪が、艶やかに光を纏う。

彼女の首から下げられた二つのロケットが揺れてぶつかり、風鈴のような音が響いた。

夜の雄英の屋上は風通しも良くとても寒い。

彼女の髪が風でゆつくりと波を描いている。海の波のように穏やかに緩やかに揺れていた。

「相澤さん、迎えに来たの？」

「ああ」

彼女の目が夜空の向こうに向けられる。

相澤はフェンス越しに見える夜景を見た。

眼下の街には明かりが煌々と灯っている。

雄英は丘の上に有るから、屋上からの夜景の景色は結構なものだ。

けれども彼女の目は街には向いていない。

彼女の目はただ、果てしない闇の向こうに広がる宇宙。そして星々に向けられていた。

「星を見ていたのか」

「うん」

「そうか。……空は好きか？」

「うん、相澤さんはどうなの？」

相変わらず彼女の目は空に向けたままだ。

「別に好きでも嫌いでもない」

「……そうなんだ、ねえ相澤さん。」

相澤さんは、敵ツイランが傷つくのを見ているのは好き？

「……さつきと同じだ。好きでも嫌いでもない。」

役割だから捕まえる。必要であれば傷つけもする。そこに感情が入り込む余地はな

「い」

「そっか……うん、そうだよね」

青石は静かに相澤の傍にまでくる。

スカートの裾が舞う。

「ねえ、相澤さん。ボクの声、皆に届いたかな？」

たぶん彼女は、今日行つたテレビでの演説の事を言っているのだろう。

青石は決意表明をした。

<sup>ヴィラン</sup>敵が居ない世界、ヒーローが要らない世界。

それを目指していくと宣言した。

「ちゃんと届いているさ」

彼女の頭にいつものように手を置く。

青石は幸せそうにはにかんだ。

「けど、大変になるぞ。きつと」

「うん、分かっている。……でも、もう戻れないよ。

それにここで諦めてしまったら、緑谷君が……」

彼女はそこから先を口にする事は無い。

はつとしたと思つたら口をつぐんでしまった。

緑谷が彼女の思想をどう思っていたかは知っている。

緑谷は青石の考えを間違っていると指摘し、それで対立した。

相澤には青石と緑谷。どちらが正しいか分からない。

どちらにもそれなりの言い分が有って、正当性がある。

正義と正義のぶつかり合いに、答えなんてない。

だから古いにしえからそういう時は、力が有る方が正義だと相場は決まっている。

論理を積み上げたその先に答えが無い時があるから、そうするしかなくなる。

「世界は……時代は変わる」

彼女の目が見開いた。

「変わるしかなくなる。個性を持ったまま、社会を維持するのか。

それとも廃棄するのか、それは分からない。

だが、どっちにしても世界は止まらない。

きつと今回のお前の選択で、死ぬことになる人間も出てくる」

青石は無言で頷いた。伏せられた目に見えるものはやはり後悔。

誰も傷つけたくない。誰も不幸になつて欲しくない。

そんな思いが、逆に人を追い詰めることも有る。

全ては救えない。

だから、青石は矛盾している。そのことを彼女自身気付いている。緑谷の件で、目を逸らしていた事に嫌でも気付かされただろう。

「けど、俺はそばにいる」

だから、相澤に出来ることは彼女のそばに居る事くらいしか無い。

それが彼女が相澤に求めている物だと知っている。

彼女がそつと相澤の背中に手を回してくる。

震えてるのが分かった。彼女は何も言わない。

それでもこうしてそばに居たら、少しでも心が近づくような気がした。

星は、街の明かりに邪魔されて弱々しく光っていた。

……

……

……

「個性廃止論者？」

「おう、青石はどう思ってたんだ？」

切島の問いに青石は考えに沈んだ。

今は朝のホームルームの前。朝日がさんと窓から差し込んできている。

切島から聞いた話は簡単なことだ。

昨日の青石の演説は世界中で大きな議論を呼んだ。

それこそ青石が求めたように皆考えては、自分の意見を述べているらしい。

今までは敵ライバルなど他人事だと思っていた人たちも、それなりに意見交換しているのとこのとだ。

そしてやはり強硬派は出てくる。

一刻も早く全人類無個性になるべきだという、個性廃止論者たちは既に大勢いるらしい。

既に青石に向けての署名活動すら始まっている。

逆に“個性”を無くすべきでは無いという保守派の人も居る。

色々な意見が有るのは当然だし、青石は議論して結論を出して欲しいと思っている。

青石の思いは少なからず届いている。

だが切島は青石の行動に困惑を隠しきれないようだ。

切島鋭児郎。

普段彼とそこまで話をする機会はない。

青石は慎重に考えながら答えた。

「……………どうって……………」個性”は無くなった方が人は幸せになる。ボクはそう考えているよ。

だからあんな提案したんだし」

「……そうかよ」

やはり切島はかなり不機嫌そうになっている。

何がいけなかったのだろうか？

勝手にあんな演説を相談もなくしたのは不味かっただろうか。

「青石はよ、もうちつと、自分の言葉の重さを考えるべきじゃねえか？」

「切島君、ボク怒らせる事しちやつた？」

明らかに険悪な切島に青石は戸惑いを隠せない。

少し周囲に視線を配らせる。

どうにも周りは遠巻きに伺って介入してこようとはしない。

「なあ、青石」

「なに？」

「青石の敵サイランに対する考えは間違ってるぜ」

「……！」

頭に血が上る。切島が口にした言葉が、青石の理性の枷を外しにかかる。

ダメだ、またここにも居る。

どうして、緑谷も彼も邪魔ばかりしようと言うのか。

皆が平和に暮らせる世界を、どうしてここまで拒否しようと言うのか。逆らおうと言うのなら、容赦するわけにいかない。

とつさに個性の力を借りようとしたが……。

——冷静になりなさい。

その個性に諭される。

今、自分が何をしようとしたのか振り返り青石はぞつとした。

(今ボク何をしようとした?)

「何か言えよ青石」

だがそんな青石の内の葛藤は、切島には分からない。

青石は奥歯を噛み締める。

「切島君、ボクの何が間違ってるの?」

「お前言ったよな? ヒーローを応援して、ライアン敵を見下してる奴も敵なんだって」

「うん、そうだよ」

「なんでだ?」

「なんでって? むしろそっちこそなんでだよ」

「分かんねえよ! 熱く戦ってるヒーローを応援しちやいけねえのかよ!」

「純粹にカッコいいと思っちゃいけねえかよ!」



切島が爆発したように怒鳴る。

教室がにわかに騒がしくなった。

なぜ切島が怒っているのか、それを青石は一生懸命に推察する。

きつと彼はヒーローに憧れていたのだろう。

だが青石はそれを否定する。ヒーローが敵ツイランにしているのは、ただの暴力に過ぎない。

市民を守るためだろうが、なんだろうが。暴力は暴力だ。

そう言っている。

「ねえ、切島君。敵ツイランがやられている姿を見るのは楽しい？」

「そうじゃねえ！ ……ヒーローが活躍しているのが嬉しいんだよ」

「でも敵ツイランが傷ついても、心は痛まない。そうだよね」

「それは……！」

「違うの？」

「けどよ……当たり前だろうが……敵ツイランなんだから」

「それだよ。ボクが敵ツイランと言ってるのは」

なおも口を開こうとする切島。

だが青石は個性を使って黙らせる。

「沈Silent黙」

切島の口は動くが、音は一切出てこない。

個性で強制的に音が出ないようにしたのだ。

青石は視線を切島からクラスメイト達に向ける。

「皆も考えて。皆は、敵がやられるのは嬉しい？ 楽しい？

ヒーローが敵をやつつけるのは熱い？ 格好いい？

でもそんなの間違ってる。敵は人間なんだよ。

どうして人が傷ついているのに、笑って見ていられるの？

おかしいよこんなこと。

いくら犯罪者でも、人が傷つく姿を見せしめにして娯楽にしているなんてどうかしてる」

「でも、青ちゃん……」

控えめに言葉が投げかけられる。青石は体を声の方に向けた。

「なに？ お茶子ちゃん？」

麗日は困惑していた。緑谷が欠けた1-Aのクラスは、それだけで少し寂しい雰囲気を感じられる。

「青ちゃんが言ってることは分かるよ。青ちゃんは優しいから。

だから敵だって可哀そうだって思えるんだろうけど……」

「けど？」

麗日は首を横に振った。

「青ちゃんが求めてるものは、あんまり……荷が重たすぎるよ」

青石は分からない。

青石としては、そこまで特別なものは要求してないつもりだ。

だが、反発は出る。

彼女の理想を、思想を、間違っていると指摘する人間は出てくる。

緑谷がそうだった。

青石は人の為に誰かの為になりたい。

平和で、どんな人も幸せに暮らせる世界にしたい。

なのにどうしてこうも上手くいかないのだろうか。

青石が無理やり力づくで従わせるのは簡単だ。

だが、それでは意味がない。そうしてしまうと、自分が嫌っている論理に嵌ってしま

う事になる。

青石は信じている。

世の中には暴力に頼らない力が有る筈だと。

だがそれが具体的に何なのか、全く見えてこない。

「分かんない……分かんないよ」

彼女の理想はあまりにも、誰もついていけない。

緑谷が居ないだけで、教室はやけに広く感じられる。

やがてホームルーム前のチャイムが鳴る。

「皆、もう席に着こう」

飯田の一声でクラスは動き出す。

大人しく生徒たちは席に着き相澤を待つ。

程なくして相澤は現れて、朝のホームルームが始まる。

不穏な空気がまとわりついて消えない。

そんな彼女の心と裏腹に空は明るく晴れ渡っている。

嫌な予感は午前中ずっと無くならなかった。

## 第77話

痩せた姿のオールマイトが息を切らしつつ廊下に行く。  
リノリウムの床が踏みしめる度に音が鳴る。

雄英の地下に存在する循環型閉鎖都市のアーコロジ。

そこには不気味なほどに人はいない。

すれ違う人間は一人も居ない。

先ほど市内の病院から緑谷は、このアーコロジの一角に移送されたと聞いた。

焦ったように連絡してきたシアンの声を聞いて、これは只事では無いと悟った。

最近シアンの顔を見ていないが、どうやら法月から任される仕事で手一杯らしい。

青石も最近「シアンさんに会えていない」と寂しがっている。

シアンが忙しいのは恐らく青石周りのフォローが大変だからだろう。

見えない場所で青石に危害が加わらないように、シアンは暗躍している筈だ。

それはともあれ、緑谷はどうやら普通の医療機関では手に負えない状態らしい。

アーコロジに移動する手配をしたのは恐らくは法月。

緑谷出久は二人目のアズライトの適合者として監視は続けられていた筈。

ガリガリに痩せたままのオールマイトは目当ての部屋の前に立つ。そしてノックもせず中へと足を踏み入れた。

そこは小さめの部屋だった。

全体的に受ける印象は、病院の入院の個室に近い。

部屋の一角にテレビが置いてある。

そこからは青石ヒカルが呼びかけるテレビCMが流れていた。

『目指そう敵ヴァイランの居ない社会！ ヒーローが要らない世界！』

彼女は画面の中から訴えかけている。

敵ヴァイランの居ない世界。ヒーローが要らない世界を。

それを色のない目で見つめる少年が居た。

見飽きるほど見てきた緑色の頭。

寝起きだったのか寝ぐせでぴよんと後ろの方が立っている。

もう、昼になる筈だが寝巻のまま。

左上腕部には、点滴の為の針のルートがあった。

かつてオールマイトも入院した際には付けられたことが有る。

緑谷はすつと顔を上げた。オールマイトを見るや体をビクツと震わせる。

「緑谷少年……」

オールマイトの口からは続く言葉が出てこない。

何とかなにかを言おうと頑張ろうとしたが。

「えつと……どなたですか？」

緑谷からの疑問に言葉を失う。

オールマイトは頭を殴られたような衝撃を受けていた。

『目指そう敵の居ない世界！ ヒーローが要らない世界！』

テレビから彼女の訴えが空しく部屋に流れていた。

……

……

……

轟焦凍は学生食堂でお昼を取っていた。

飯田と麗日も隣に居る。

青石が問題児だから何かと一緒に居ることも多くなつた仲だ。

轟はそこまでコミュニケーション能力が高くない。

友達もそこまで多く作る方では無いが、青石と一緒に居ると知り合いも増えてくる。

だが、肝心の青石はここには居ない。

昼休みになった瞬間、マスコミ達への対応で校門の方まですっ飛んでいった。

そこでも自分の理想を訴えかけるのだろう。

視線が目の前のテーブルに移る。

今日のお昼ご飯は、ざるそばセットだ。

だが食欲が湧いてこない。

頭の中は青石ヒカルのことと埋め尽くされていた。

教室での彼女の姿が頭の中でリピートされる。

——ヒーローを応援して、サイラン敵を見下してる奴も敵なんだって？

——……うん、そうだよ

轟は驚きを隠せなかった。

青石ヒカルが単純な意味で敵サイランという言葉を使っているのではない。

そのくらいは理解しているつもりだった。

だが彼女は轟の想像の遥か上を行っている。

食堂に設置されたテレビからは、青石ヒカルサイランの訴えが流れてくる。

『目指そう敵サイランの居ない世界！ ヒーローサイランが要らない世界！』

彼女は昨日の演説でも言っていた。

ヒーローを讃え、サイラン敵を蔑むとき、あなたは敵サイランになると。

冗談じゃない。



彼女の理屈で言うなら、テレビの前でヒーローに憧れている子供達だって敵だ。ウイラン

青石ヒカルの心に秘めていた闇は、もはや誰にも計り知れない。

いったい彼女がこのまま理想を追い求めたらどんな世界になるのか。

「青ちゃん……どうしちゃったのかな？」

「緑谷君は気付いていたのかも知れない」

「えっ？」

飯田の言葉に顔を向けた。

麗日も反応している。

「青石さんと言いつ争ってただろう？」

緑谷君は青石さんの言っていることが本当は何なのか、分かったのかも知れない

轟も思い出せる。

あの時の緑谷の怒りようは凄まじいものだった。

「ここまで極端なこと青ちゃんが言いだすって分かってたってこと？」

「ああ……というより。彼女は一貫して主張は変えていない。ウイラン

敵の居ない世界。俺もそれは正しいと思う。

だけど青石さんの定義する敵が何なのか……。ウイラン

俺たちは何も分かってなかったんだ」

「それは……うん」

「何が問題なのですか？」

八百万が割り込んで来た。

持っているトレーに昼ご飯の日替わり定食がある。

そのまま「失礼」と一声かけて轟の正面の椅子に着席した。

「八百万さん、おかしいと思わないのか？　今の青石さんは明らかにおかしい。

何とかしないと……」

飯田は八百万に問いかける。

クラスの委員長と副委員長。二人の会話に轟は耳を傾けた。

「いえ、あれから私も考えましたわ。ですが……おかしいのはむしろ私達の方ではないですか？」

「どういう意味だよ？」

八百万の言葉に思わず口が動く。

思った事がそのまま口に出る。

八百万はきよとんと轟の方を見た。

「あら轟さん、分かりませんか？　青石さんと親しい轟さんならお分かりになると思いますか？」

「説明してよ八百万さん」

麗日が話の続きを求めた。コホンと一つ八百万は咳払いする。

「いいですか？ 物事には必ず元となる“原因”と、その“結果”が有ります。

私達は今まで敵が<sup>ウイラン</sup>発生した“結果”に対して、場当たりの対応しかしてきませんでした。

つまりヒーローは敵を<sup>ウイラン</sup>排除こそすれど、敵の<sup>ウイラン</sup>原因となる環境を変えようとはしてこなかつたわけです。

ですが、青石さんは敵が<sup>ウイラン</sup>発生する“原因”を取り除かなければならない。

<sup>ウイラン</sup>敵を生み出す社会そのものを変えなければならぬ。

ひいては私達一人一人が変わらなければならぬ。

そう言っているのですわ」

「そんな柔な話には聞こえなかつたが」

飯田は首をかしげる。

「いいえ、考えてみたら当然の話じゃ有りませんか？

例えば“無個性”や“異形型”の方々への差別は皆さん知つての通りですし。

この世界には敵が<sup>ウイラン</sup>生み出す様々な理不尽な土壌が有ります。

私が言うのもなんですけど、例えば経済的な格差は深刻な社会問題です。

それらを私達は今まで変えようと努力してきたでしょうか？  
変えようと思ったでしょうか？」

「だからといって、青石さんの考え方は極端すぎる」

轟の言葉に八百万は首を振って否定する。

「そんなこと有りませんわ。むしろ遅すぎたくらいです。」

私達が無意識のうちに持っている“悪意”。

<sup>ヴィラン</sup>敵が幾ら苦しもうが、知った事ではない。

ヒーローが傷つくと悲しいけど、<sup>ヴィラン</sup>敵が傷つくと嬉しい。

そんな風に思ってしまう私達の残酷な本性。

それを青石さんはまざまざと、私達に突き付けたんですわ。

私達がどれだけ残酷で愚かな生き物なのかと、問いかけたんですわ。

だから切島さんも反発したんです。自分の胸の内にある敵<sup>ヴィラン</sup>。

今までは知らないふりをしていられたそれを、意識させられてしまったから。

<sup>ヴィラン</sup>敵は倒されるべき敵<sup>てき</sup>でなければならない。

差別されるべき存在でなければならない。

ましてや自分達とは何の関りもない。

その前提が覆されそうになっているから、怒ったのですわ。

それこそ、その感情こそが青石さんの言っている敵だと気づきもせず

「……でも敵が<sup>ウイラン</sup>発生しても、私達のせいじゃないよ。」

私達には関係ないよ」

麗日がぼつりとこぼした言葉に、八百万は興奮しながら反論し始めた。

「それこそ！ 青石さんが変えようとしている意識そのものですわ！」

<sup>ウイラン</sup>敵の発生に関係していない人間なんて居ません。

自分には関係ない。そんな風に皆思っている限り、<sup>ウイラン</sup>敵は居なくならない。

青石さんはそう言っているのです。なぜ分からないのですか!？」

「おいなんだなんだ?」

「喧嘩?」

周りから野次馬がぞろぞろ集まってくる。

平静を取り戻した八百万は手を振って何でもないとアピールする。

程なくして野次馬は解散した。

「……さっさと飯食うぞ」

気まづくなつた雰囲気で轟は口を開く。

無言でそれぞれ領き、食事を口に運び始めた。

テレビからは相変わらず青石が敵の居ない世界にしようと呼びかけている。

一人一人が考えなければならぬ。そう訴えかけている。彼女の言葉に耳を傾ける人はほとんどいない。

みんな敵は他人事だと割り切っているように思う。

その無関心こそがきつと青石の言う敵なのだろう。

この世界に生きる全員が、敵が発生する原因になっている。

そう青石は言いたいのかも知れない。

味のしない昼飯を轟は食べ終わる。

これ程に、そばを不味いと思ったのは初めてだった。

………

………

………

「やあ八木君。久しぶりだねえ。来るんじゃないかと思っていたよ。

シアンから連絡はいつてたはずだからね」

アーコロジーの一角。

学校の保健室の匂いに似ている空気が充満した部屋。

何に使用するのか想像もつかない機械がわんさかあふれていた。

そのガラクタの山をかきわける、一人の白衣を着た男が這い出てくる。

極端に色白でオールマイトに負けない程ガリガリに痩せている。

男はふうと額の汗を手の甲で拭った。

「イエロー」

「いっくんって呼んでくれよお」

その男の本名をオールマイトは知らない。

以前聞いたら答えてくれなかった。いわく既に捨ててしまったのだとか。

「本名を教えてくださいたら、そつちで呼ぶんだが」

「やだね。言っただろ？ 元の名前は捨てたんだ。俺の名前はイエロー、それだけさ。

……用件は緑谷君だろう？」

無言でオールマイトは首を振り肯定する。

イエローはドカツとリクライニングチェアに腰かけた。

「まあ、ああなるまで……よく持ったもんだよ。本当にね」

「彼はどうなっているんです？」

「一言でいうならスタボロ」

「スタボロ？」

「まあ脳の方がね。もうあつちこつち死んでるもんだからさー」。

きつとアズライトの力のせいだろうね。あれは元々人に扱えるもんじゃない。

アレをちゃんと扱えるのは青石ヒカルだけさ。

神にも等しい力を使おうって言うのなら、相応に代償が要るってモノだからね」

「だが緑谷少年は適応していた筈……」

「それこそが想定外。イレギュラーだったからね。知ってるだろ？」

十年前の個性改造手術で、あの子の個性は世界中に散らばった。

そして拡散したアズライトの、ほんの一部が宿っただけで人は死んだ。

元の個性の数億分の1以下の力でも、人は耐えられない。

だから緑谷少年がああなるのは、時間の問題でも有ったのさ。むしろ意識があるだけ凄いとしか言えない」

オールマイトが緑谷に面会したとき、彼はオールマイトを覚えていなかった。

それどころか、テレビの向こうの青石ヒカルも覚えていない様子だった。

「……緑谷少年は、記憶喪失なんですか？」

「まあ、そうだね。いや、むしろそれどこじやない後遺症さ」

「回復は？」

「無理。むしろこれからどんどん悪化していくだろうね」

「……」

イエローの軽い口調にオールマイトの眉間にしわが寄る。



「そう怖い顔するなって。無理なものは無理。

記憶を思い出そうにも脳みそがイカレてんだからさ。

その症状はどんどん進んでいくと思う」

「どのくらいの確率です？」

イエローは顎に手をやる。

「99.999999……まあほぼ絶対と言っていいほどの確定事項さ。

だからこれからのケアプランを作成しなくっちゃだからね。

もう大変だよ」

彼はゴソゴソと脇にある机の引き出しを開いて、まざくりだす。

「ケアプラン？」

「そう、もう彼は認知症だからね。いわゆる特殊な若年性認知症ってやつ。

まあ事故とかで脳が傷ついてとかは、割とよくある奴だけだよ。

こういう個性で脳みそがやられるのは、珍しいねえ。

そー言うわけで……さ！」

イエローは「あつたあつた」と言いながら一枚の用紙をオールマイトに渡してくる。

「これは……？」

「ケアプラン。まあまだ暫定だけどね。」

近い将来。緑谷君はザックリと、たぶんこんな風に日常生活をするよって計画書  
オールマイトは目を通す。

そこには朝の起床から、毎食何時に食べるか。

日々の行動をどのように送るのかの事細かに想定して、タイムスケジュールが組ま  
れている。

「何なんですかこれは?!」

「だからケアプランだって」

「ここに排せつは主におむつを使用するとありますが、馬鹿にしているんですか!」

オールマイトが指摘したところに確かに書いてある。

排せつは主に紙おむつの使用を前提にすると。

「緑谷少年はまだ……!」

「だから落ち着きなつて。今後そうなるかも知れないって話。これからどうなるかは分  
からない」

「……」

イエローは苦笑いしながら、両手を広げる。

だが次の瞬間には真剣な顔に戻った。

「でも実際既に運動機能の低下が確認されてる。」

俺も出来る限りの処置はするけどさ、このまま行けば歩けなくなるのは時間の問題。だったらこんな風にするしかないだろう」

「ですが……」

「人間なんてこんなもんさオールマイト。食べなくちゃ誰も生きていけない。

そして飯を食ったら糞くそは出るし、小便も出る。

食べると出すはワンセットなんだ。

緑谷君は、多分じきに歩けなくなるだろう。

そうなったら自力でトイレに行くことも出来ない。

脳機能の低下が続くと、排便排尿のコントロールも出来なくなる。

人間ってさ力が無くちゃ、自分で用を足す事すら出来ないんだ」

「っ……」

緑谷にこれから来るだろう過酷な現実を思うと胸が痛い。

いったいどうしてこんな事になってしまったのか。

まるでこれでは人生の終わりが見えている老人そのものだ。

「本当は専用の介護施設に入るのが一番なんだがねえ。

その辺りもおやつさん……法月にも打診しておくよ。

何しろアズライトが絡んでるからね。良い施設にきつと入れるはずさ。

もしかしたらずつとここで暮らすかもしれないけど、まだ分からないね」

「彼は元の生活に戻れないのか？」

「どこを」元」とするかにもよるねえ。だいたいさオールマイト。

ヴィラン  
敵との戦いは命懸け。

君が彼に個性を譲渡したときから、少なからずこんな未来になる可能性はあった。

力を渡した君にも責任があると思うんだがねえ。そこんとこどうなのよ？」

「帰ります」

「せめてさ、帰りに顔くらいみせてあげなさい」

彼の言葉を背中に受けながらオールマイトは扉を閉めた。

「そうだ……彼女になら……」

オールマイトは早足になる。

一刻も早く、最後の希望の元へと急ぐ。

彼女になら、青石ヒカルならば何とかしてくれるだろう。

何しろ緑谷は友人だったのだ。

最悪の形で別れたにしても、彼に対しての情は残っている筈だ。

彼女に縋るしか道は無い。

「緑谷少年……」

後ろ髪をひかれる思いで緑谷の部屋の前を通り過ぎる。

どんな顔をして会えばいいのか分からなかった。

今の彼はあまりにも惨めで、とても見ていられなかった。

## 第78話

「青石君、少しいいかい？ 実は……」

青石ヒカルはオールマイトに呼び止められる。

しばらく足を止めて会話し、その後オールマイトに聞いた場所へと青石は歩みを進める。

昼休み青石はマスコミのインタビュウを受けていた。

それが今さつき終わったところだ。

中にはテレビ局の取材もあった。

それらに青石はなるべく丁寧に対応した。

そして呼びかけた。

<sup>ヴィラン</sup>敵の居ない世界。ヒーローが要らない世界にしたい。

そのために協力して欲しいと。

確かな手ごたえがあった。

青石が求めている優しい世界に向け、少しずつ変わっている。そんな実感が有った。

だがそんな達成感、彼を見た途端にどこかへ消えてしまった。

「ええと、どちら様ですか？」

緑谷がベッドに身を横たえながら聞いてくる。

きよとんと首を傾けてこちらをジッと見てくる。

部屋の隅には花瓶に花が飾られていた。

脇に置いてあるテレビからは雑音が空虚に流れている。

やがてCMが終わってニュース番組が始まった。

今日もとりわけ大したことは放送していない。

緑谷はテレビが不快だったのだろうか。

リモコンをとって映像を切ってしまった。

「あつ……」

「ごめんなさい、勝手に切って良かった？」

「ううん、いいよ」

放っておいたらその内青石が画面に映るかもしれないなかつたし、渡りに船だつた。

テレビが消え、部屋の中は静かになる。

「すみません、さつきからずっと見ていたので疲れていたんです」

他人行儀に振舞う緑谷は、青石の知っている緑谷とはまるで別人だ。

個性を使わなくても分かる。

彼はアズライトの力を使いすぎて、脳に後遺症を負ってしまったのだろう。ただここまで深刻なものになるとは、青石には想像できていなかった。

(レギオン、どう?)

——脳機能を元のレベルにまで回復は出来る。でも消えた思い出までは元に戻せない。

(そっか……)

レギオンの言葉に一人納得する。

青石の横に現れた不可視の青の少女。

この前までは緑谷には見えていた電脳体の姿。

だが今の緑谷には見えないようだ。何の反応も示していない。

彼は力を失った。否、青石が力を奪い去った。

そして今の彼が居る。

皮肉にも何もかも全てを失った今の方が、以前よりも幸せに見える。

それがされに痛々しく思え、直視する事すらもためらわせる。

「あの……もしかしてあなたが青石ヒカルさんですか?」

「ボクを知っているんですか?」

「思い出したんです」



心臓がドキッと高鳴る。もしかしてまだ覚えているのだろうか。

「さっきチラツとテレビに出てました」

その一言で気分はどんより落ち込んだ。

視線で今は画面が付いていないテレビの方を見る。

「そっか。他には思い出せない?」

「他に……? うーん、すみません。僕とあなたは初対面だと思うのですが」

彼が口を開くたびに心が切り裂かれるように感じる。

これはお前のせいだ。お前がすっかりしていないからだ。

アズライトを得た最初のうちに対処しておけば、こんなことにならなかった。

緑谷とちやんと向き合っていれば、こんなことにならなかった。

もし、もし、もし、あの時にこうしていれば。

堂々巡りに青石の中でifもしもの仮定が繰り返される。

今更そんな事を考えても何になると言うのか。

過去は変えられない。

だがそれを分かっている、考えずにはいられない。

緑谷が、こんな惨めな姿にならない未来がきつと有り得た筈だと。

「あの……」

「ボクは君を知っていた。ううん、知っていると思っていた。でも本当は……何も知らなかったんだね」

「……う？」

彼は不思議そうに首を傾げるだけだ。

きつと意味を何も理解していない。

「すみません、お医者さんに言われたんです。どうやら僕は記憶を失くしてしまっているみたいです」

「うん」

「あなたとは知り合いだったのですか？」

「そうだよ」

「どんな関係だったんですか？」

言葉に詰まる。

友達だったと青石は思っている。

だが最後には憎しみあい、怒りをぶつけあうしかなかった。

誰も傷つけたくない、皆を幸せにしたいといいながら、結局力でねじ伏せることしか出来なかった。

彼女は自分の両手を見つめる。

この手は血にまみれている。その手は生まれる前から、血に汚れている。青の少女というプロジェクトで生み出された青石ヒカル。

その裏でいったい何人の犠牲者が出たかも分からない。

生まれてからも、個性を暴走させ数千万人を殺し。

理想を追い求め、あらゆる敵を手当たり次第に牢屋に押し込めた。

今度こそ、今度こそは誰も傷つかないように。誰も泣かないように。

皆を幸せにしたいと願いながら、多くの人間を力で屈服させた。

そして犠牲にした多くの敵や緑谷<sup>サイラン</sup>。それ以上の人間を救った。

青石は皆を幸福にしたい。

誰もが平和で自由で在れる、そんな世界にしたい。

けれども、青石が頑張れば頑張るほど、犠牲になった人が積みあがる。

本当は皆を助けたいのに。皆を救いたいのに。

心の内で悲鳴をあげている敵を助けたいのに。

蹂躪した敵を道しるべに、人々に希望を示すことしか出来ない。

本当にしたい事は何一つ叶わない。

青石の中で影が差す。

こんなことはもう嫌だと、心の中で悲鳴をあげる。

だが、それは押し込める。

そんな事を言つてはいけない。

そんな事を思つてはいけない。

自分は唯一の希望なのだから。

既に大勢の人が青石ヒカルを頼り、縋つている。その人達の手を振り払つてはいけ  
ない。

今も、こうしている間に、新たな理不尽が生まれ、新たな敵サイランが出ている。

変えなくてはいけない。

変えなくてはいつまでも、敵サイランで苦しむ人が居なくなならない。

だから敵サイランが居ない世界にする。

ヒーローが要らない世界にする。

間違つてはいない筈だ。こんないつまでも続く、愚かな争いはやめさせなくてはいけ  
ない。

今の人類はこの青い星にしがみつく、ちっぽけな存在でしかない。

宇宙に自由に入入りできる青石には分かる。

宇宙は限りなく無限に広い。地球だけにこだわる必要なんてない。

こうやつて地上に張り付いて、いつまでも小競り合いを繰り返すなんて愚の極みだ。

だが、一方で。

こうして何もかもを失った緑谷を見てみると、変わらなくてもいい。そう思えてくる自分が居ることに青石は気付く。

(ボクは……ボクは……人の為に誰かの為に……)

人の為に誰かの為に。だがそれは、果たして本当の願いなのだろうか。そんな一抹の不安が彼女の胸に沸いてきた。

「あの……僕とあなたの関係は……」

「あつ！ ううん、友達、友達だったんだよ」

「そうだったんですね」

「うん……そうだったんだよ」

それっきり二人は黙り込む。

気まずい雰囲気というわけでは無い。

お互いに話をしなくても、そこに居るだけで良いと思つた。

青石は緑谷を見る。緑谷も青石を見る。

青石は自らの胸に下げている二つのペンダントを手を取つた。

「それ、なんですか？」

案の定、緑谷はそれも覚えてはいない。何か思い出してくれるかも知れない。

そんな微かな希望も裏切られる。

「ロケットペンダント」

「中に何が入っているんです？」

その中にはかつて緑谷の個性だったものが入っている。

青石の頭の中には、これを返す。そんな選択肢も最初は有った。

だが、今の緑谷を見ているととてもそんな気にはなれない。

もしまた今の緑谷が力を付けて、再び同じ状態になったと考えたら。そう考えると恐ろしい。

これ以上緑谷が悪くしないよう治療だけして、大人しく平和に暮らして貰う。

それが一番いいと青石は思っている。

現状、緑谷が失った記憶は戻らないかも知れない。

だが、普通の日常生活に戻すことは可能だ。

それでよしとするしかないと思おう。

「内緒」

「教えてくれないんですか？」

「緑谷君が思い出せないのなら、そういうことになるね」

「僕は知っていたんですか？」

「ボクと君くらいしか知らないことだったよ」

相槌を打つ緑谷から視線を逸らす。

「ねえ、緑谷君」

「何ですか？」

「ボクはね、敵が居ない世界にしたい。  
ツイラン

ヒーローが要らない世界にしたい」

「そうなんですか」

「緑谷君は——どう思う？」

青石は真つすぐ緑谷を見る。

真剣な表情で返事を待つ。

彼の口が動くのがスローモーションに見える。

花瓶から一枚の花びらがはらはらと舞い落ちた。

……

……

……

緑谷は気付けば全ての記憶を失っていた。

いや、正確には全部を失った訳でない。

例えば自分の名前と性別は覚えている。

言葉も理解できるし、単語もしっかりと覚えている。

目覚めた時は知らない病室だったが、テレビの操作だつてしつかり出来た。

記憶にも種類があるらしく、記憶喪失にしても全てを失う訳では無い。

そうイエローとなつた医者から説明を受けた。

ガリガリに痩せすぎた変な名前の医者だが、腕は確実らしい。

何しろあのオールマイトのお墨付きなのだ。

医者に負けず劣らず痩せた男が、病室に入ってきた時には驚いた。

その正体がオールマイトと知った時にはもつと驚いた。

オールマイトがナンバーワンヒーローで、憧れだとはつきりと覚えている。

だが緑谷はどうやらオールマイトと知り合いだったらしい。

師弟の関係だった、思い出せるかと言われたが全く思い出せなかった。

そして今日の前に居る彼女。

彼女は青石ヒカル。

先ほども見ていたテレビにも出ていた。

彼女についても覚えていないが、それこそテレビで言っていた。

オールマイトをも凌駕する実力を持つ、次世代のスーパーヒーローだと。



青い髪と瞳が凄くきれいな人だと思った。

その彼女ともどうやら知り合いだったらしい。

「緑谷君は——どう思う？」

青石ヒカルが聞いてくる。

<sup>ヴィラン</sup>敵が居ない世界。ヒーローが要らない世界にしたいという。

それを緑谷はどう思うか、尋ねられている。

緑谷は思い出せないか考えるが、何も思い出せない。

彼女は真剣そのものだ。

それだけこの質問は大切なものなのだろう。

<sup>ヴィラン</sup>敵が何かくらいは、緑谷は覚えている。

個性を悪用して、人々に迷惑をかけ続ける悪党どもだ。

そんな人間が居なくなったら、確かに平和で良い世の中になるだろう。

ヒーローが要らなくても済む世界になったら、確かに住みよい世界になるだろう。

そう、考えた。

「とても、良い考えだと思えます」

「——え？」

「とても優しく、平和な世界だろうと思えます。」

応援したくなる夢だと思えます。

だから、僕は……青石さん？」

彼女は泣いていた。

断じてそれは嬉し泣きじゃない。そう記憶を失った緑谷にも分かる。

「あつ……あああああつ……！」

彼女の涙は止まらない。両手で懸命に目を押さえているが、どんどん溢れている。息もしゃくり上げ、顔をぐしゃぐしゃに歪ませて。

彼女は哀しみの淵に居る。

「なんで……なんで泣くんです？」

「緑谷……君が……それを分からないから……」

——あなたが、それを分からないから

脳裏に一つの映像が去来する。

雨の中でも濡れていない少女が、ただ泣いている姿。

知らない筈の風景。知らない筈の少女。

記憶が風化し、ノイズが混じってかすれてしまった声。

目の前の青石ヒカルとは違う、青の少女が一瞬蘇る。

「うっ！」

「緑谷君……?」

「うああああああ!」

頭が割れそうに痛い。

天と地がどちらかも分からない。

何も見えない。何も聞こえない。手足の感覚も遠くなる。

全てがごちゃごちゃにかき混ぜられ、かき回される。

あらゆる情報がノイズのように氾濫していく。

視界がどんどん青く染まる。

ひたすらに濃い青に。全身が沈んでいく。

緑谷は何も分からずひたすらにもがき、そして意識を完全に手放した。

## 第79話

「ひったくりだ————！」

街の中で大きな声が響く。

個性を使って悪事を働く輩は未だに居なくならない。

青石ヒカルがインターンを終えたこの世界には、再び悪がはびこりつつある。

オールマイトこと八木俊典は、犯罪者を取り締まるべく走る。

人々が悪態をついている。

青石ヒカルが活躍している時は、こんな事件にすらならなかった。

ヒーローが事件が起きてから動くが、青石ヒカルがいればそもそも事件すら起こらない。

ヒーローは悪人を倒すが、人々の身に降りかかる理不尽を失くせはしない。

あらゆる貧困や差別を、ヒーローは無くしたりしない。

そして青石ヒカルが呼びかける。

街中の至る場所に張られたポスター。そして街頭のディスプレイ。

大寫しになった青の少女は呼びかける。

敵が<sup>ウイラン</sup>発生し、ヒーローが倒す。

こんなことはもう終わりにしたい。

いつまでも続く連鎖を断ち切りたいと叫ぶ。

そもそも敵が<sup>ウイラン</sup>発生する原因を解決しなければならない。

そう彼女は社会に訴えかけている。

「そうだそうだ！」

「いつまで続けんだよヒーロー共！」

「さつさと敵は<sup>ウイラン</sup>この世から消えろー！」

「世界から〃個性〃は消えて、全員無個性になるべきなんだ！ 違うか!？」

「そうだ！ それが本来のあるべき姿だ！」

デイスプレイから流れる彼女の演説に、人々は同調して声を上げている。

だが彼女の考えた事。発した言葉。

それはそのまま届くとは限らない。

人間は各々自分勝手に言葉を捉えるものだからだ。

だからと言って、意味がないなんてことはない。

彼女の言葉は確かに世界を動かしつつある。

真の平和な世界を目指しつつある。

オールマイトも青石を応援するつもりだ。

<sup>ヴィラン</sup>敵が居ない世界。ヒーローが要らない世界。

オールマイトもそうなるべきだと考えるし、彼女の意見に賛同した。

だがもしも、同じことを別の人が言ったら誰が聞くだろうか。

彼女には力が有る。

そしてその力を使って、スターレインを迎撃して世界を救った。

一週間に及ぶインターンではあらゆる病人を治療した。

今や寝たきりになった人は一人も居ないし、一部の人を除けば全国民が五体満足である。

『私は青石ヒカルの活動を応援しています』

<sup>ヴィラン</sup>敵の戦いで一度は引退を表明した“インゲンニウム”が画面に出ている。

彼は全国に数多く存在する、青石ヒカルによつて普通の生活に復帰できた人の一人だ。

彼だけではない。

多くの人が青石ヒカルに直接的に助けてもらっている。

それに比べたら、オールマイトが積み上げた実績すらも霞んで見えてしまう。

世間は青石ヒカル一色に瞬く間に染まった。

そしてその熱は未だ冷めやらぬものだ。

「青石ヒカル万歳！ 万歳！」

街のあちこちから声がある。彼女の意見に賛同し、変わらなくてはならないと信奉者が過激に街頭演説も行っている。

自らの力の限界を情けなく思いながら、オールマイトは駆ける。

青石ヒカルに熱中する人々に背を向けながら、犯人の居場所を絞り込んでいく。風よりも早く群衆の間を走り抜け、雑踏の中に怪しい動きをした人を発見した。

その人はそのまま食わぬ顔で集団に紛れ込もうとしている。

「わーたーしーがー来たー！」

「何ッ!? ぐわっ！」

オールマイトは犯人が反応する前に、首に手刀を叩き込む。

そして男が持つにはあまりに似つかわしくない、女物のバックを取り返した。

小汚い男の靴底は限界ギリギリだったのか、べろんべろんに剥けている。

「オールマイトだ！」

周りの人間は遅れて反応する。

青石ヒカルという超新星が現れても、オールマイトはオールマイトだ。

その人気は未だ衰えを知らない。

オールマイトは安心させるために笑顔を振りまきつつも、警察へと連絡を取る事を忘れることはない。

「つてて」

「うん？」

オールマイトが気絶させた人は直ぐに起きた。

油断しているつもりは無かったが、少し打撃が浅かったようだ。

無論殺してはいけないので、その辺りの調整は難しいもの。

保有する個性によっては常人よりむしろ弱い身体能力の場合もある。

見極めを間違えたら最悪死に至ることも考えられる。

「大人しくするんだ。いいね？」

「ちっ！」

ひたたくり犯のちんけな敵は舌打ちしつつも大人しくなった。  
ワイラン

彼の方から風が吹いて、風上のオールマイトに何と言えない臭い匂いが漂ってくる。

髪をあちこちにふけもついている。

恐らくこの男、何日も風呂に入っていないのだろう。

もしかしたらホームレスなのか。

「警察が来たぞ！」



パトロール中の警察官が来て、ひったくり犯に手錠をかけた。  
オールマイトはそれをただ見送る。

いつもの仕事だ。

しようもない犯罪者を捉えて、警察に引き渡しただけ。

それだけのこと。

なのに何故か後味が悪く感じられる。

『目指そう敵ツイランの居ない世界！ ヒーローが要らない世界！』

街頭のデイスプレイの青の少女が訴えかける。

本当にこの社会で良いのかと、疑問を投げかけている。

どうか敵ツイランが居ない社会になって欲しいとこい願う。

そんな世界に具体的にどうすればいいのか、オールマイトには分からなかった。

ただそんな彼の戸惑いを置いてけぼりにして、世界は確実に変わり始めていた。

彼は自分に向けられていた厳しい視線に、気付けないでいた。

……

……

……

「青石、そろそろ良いだろう」

「……もうちよつとだけ」

相澤は深々と息をはく。

緑谷出久が雄英の地下に来たのを、相澤消太は知った。

どうやらアズライトの個性で脳にダメージを負ったらしい。

普通の病院では手に負えなかったということだ。

だから緑谷は雄英の地下のアーコロジーで、入院生活を送っている。

正確にはここは病院では無いので入院とはまた違うのだが。

「緑谷君……」

青石ヒカルが心配そうに緑谷を見つめている。

どうやらオールマイトが青石に緑谷をどうにか治してくれないか頼んだらしい。

そして青石と緑谷は顔を合わせた。

相澤からすると、あんな形で別れてしまった二人を会わせるのは反対だった。

けれども知らない間に動かれてはどうしようもない。

もつとも緑谷は青石を覚えていなかったようだが。

そして青石も緑谷と面会したこと自体は後悔していないみたいだ。

むしろもつと早くするべきだったと言っていた。

「切島君の声、ごめんなさい。ボクそんなつもりじゃなかったの。」

あれはつい……」

相澤は深くため息をついた。

目を向けると青石は体を震わせた。

相澤が青石と切島の朝に起きた口論。その顛末を知ったのは午後の授業の最初の時だった。

授業に顔を出していない青石はいつもの事だった。

が、問題だったのはそれ以外の事。

切島が朝からずつと青石に黙らされて以来、未だに話す事が出来ない。そう——Aの生徒から訴えが有った。

試しに切島に向け相澤の“抹消”を使ったら、幸いなことに切島の声は元に戻った。

けれどもそれはそれとして、青石が切島の声を個性で黙らせたことは、相澤の怒りに触れた。

そして相澤がカンカンに青石を叱りつけたのはつい先ほど。

青石は涙ながらに、ごめんなさいと繰り返した。

だがその言葉を向けるべきは相澤に対してではなく、切島だ。

そう言ったら一瞬で姿を消し、しばらくすると戻ってきた。

ちゃんと本人に謝ってきたという。

疑うつもりはない。だが、それが本当なのか明日相澤は確認するつもりだ。

「青石。もう行こう」

「嫌だ、ボクはここに居る。ここで見てる。今の緑谷君、とても目を離せない」  
青石が頑として首を横に振る。

視線はジツと緑谷の寝顔に向けられている。

彼女は未だ緑谷の事を大事な友人だと思っっているのは、言葉に出てなくても分かった。

「ごめんなさい相澤さん、これはボクのせいなの。ボクの責任なの。」

ボクがしっかりとってなかったから、緑谷君がこうなってしまったの。

だから、離れられない」

「それは違う。昨日も言っただろう。」

確かにお前にも原因が有ったかも知れない。

だがそれより担任の俺や他の大人に責任がある。

あまり抱え込むんじゃない」

相澤は首を振って否定したが、青石は視線を下にして俯く。

規則的に胸が上下に揺れている。

穏やかな顔で緑谷はベッドの上で眠りについている。

緑谷はまだ先ほどと同じ部屋。アーコロジの一角で経過観察されている。

正確に言えば昏睡状態になるのだろうか。

相澤は壁にかけている時計を見た。

緑谷が青石の前で苦しみだしたのは10時間程前になる。

青石も出来る限りのことをしたらしい。

そして驚くことに何らかの“個性”が緑谷の中で活動している。

それが青石には分かったということだ。

緑谷は“無個性”になった。そう相澤も青石も思っていた。

けれども、何らかのバイオウエアが緑谷の中で動いている。

その上で、どうやら緑谷の脳の組織が少しずつ回復しているらしい。

もしかして、緑谷のアズライトが何らかの保険をかけていたのかもしれない。

そう青石は語っていた。

「緑谷の中に残った“個性”か……確証は有るのか？」

「無い……けど、そうとしか考えられないよ」

「お前の力で目覚めさせることは出来ないのか？」

「ボクだって考えたよ。でも止めたの。」

緑谷君の頭の中で起きている変化はとても繊細なんだ。

変にボクが手を出したら、それこそ取り返しがつかなくなっちゃうかもしれない」  
「……なるほど」

つまり下手に手を出したら、それこそ全てを無かったことにしかねない。

下手すれば後戻りできない廃人になってしまう。

そう言いたいのだろうか。

だからと言って、目を離すことも出来ない。

何かあった時に対処できる青石が居ないと、取り返しがつかないことになるかもしれない。  
ない。

結論として、様子見をするしかない。きっと彼女はそういう判断に至ったのだろう。

相澤は口を開く。

「でもお前がやれることはないんだろう？」

「うん。ボクが出来る治療は全部したよ」

「だったら行こう」

「いや」

彼女の足はピクリとも動かない。

「学校は明日も有るんだぞ」

「ごめん、休ませて」

「マスコミのスケジュールも組んでいたよな？」

「それも、休むよ」

相澤は額に手をやる。

「あいな」

「友達だから」

短くしかし鋭く彼女は強く言う。

ナイフのように切れ味鋭く、有無を言わせない口調で言う。

「緑谷君は、ボクが助けられなかった人だから。」

ボクが今度こそ助けないといけない人だから」

「どうしてもか？」

「どうしても。これは緑谷君を助けられなかった、ボク自身のけじめだから」

青石がゆっくりとしつかりとかみしめる様に呟く。

確かな覚悟が彼女の目に宿っていた。

そんな目をされたら相澤も何も言えなくなってしまう。

「……あと五分だけだぞ」

「……うん分かった」

仕方なく妥協案を出して、渋々彼女は頷いた。

結局彼女がいつもの部屋に足を向けたのはそれから一時間ほど後になった。

………

………

………

沈む、ただ沈んでいく。

深くほとんど闇に近いような青の中を、緑谷は沈んでいく。

まるで深海へと潜っていくようだ。

緑谷の頭の中を幾つもの声が反響しては消えていく。

どれも聞いた事が有る筈なのに、どういう状況で、誰が言った言葉なのか。

全く思い出せない。まるでパズルのピースだけがばら撒かれて目の前に置かれていくようだ。

どのピースを何処に収めて良いのか、皆目分らない。

そんな感覚に近い。

体に意識を向ける。体はピクリとも動かない。

そもその手足の感覚が無い。

頭もぼうとして定かではない。

そうして長い長い時間が過ぎていく。



一分か一時間か。はたまた何日も経つたのだろうか。

緑谷にとって永遠にも思えるような退屈な時間が過ぎ、唐突にそれは終わりを迎えた。

「えっ？」

固い床に寝転がっている。

鈍色の材質も定かでないひんやりとした床。

まるで床というイメージその物で出来ているみたいだ。

辺りを見る。見渡す限りの闇が広がっている。

光源が何処にもないのに、なぜか自分の体はハッキリと見える。

おかしい。

あまりにも理屈に合っていない、おかしな空間。

これは――

「やつと来たわね。はあ。アズライトつたらまつたく！ 面倒くさい役割押し付けてく

れちやつてもう！」

闇の中から金色が現れた。

それは人の髪の毛だった。まるで闇を引き裂く黄金の太陽に見えた。

翡翠のような目がキラキラしている。

彼女の名前を、緑谷は知っていた。

知らない筈だと思っていたのに、すんなりと喉の奥から出てくる。

「セルリア……セレスタイト?」

「あつ、やっぱり思い出せた? まあ修復作業もぼちぼち進んでるし、当然つちや当然よね」

修復作業が何なのかは分からない。だが彼女の名前はセルリアで合っているらしい。

だが緑谷は彼女の事を知らない筈。

知らない筈だと思っているのに、名前は出てきた。

明らかにおかしい。

そして彼女を思い出そうとしたら、もっとおかしな記憶が出てくる。

「君は……死んだんじゃ?」

「うん、まあね」

事もなげに彼女は頷いた。緑谷の顔から血の気が引く。

「だからここにいる私は偽物。」

アズライトの力で限りなく忠実に再バックアップ現されたコピーよ。

あなたのアズライトが万が一に備えて、あなたの中にバックアップを用意していたつてわけ。

それに私は使われたってことよ」

「……………ここは僕の見ている夢なの？」

「理解が早いわね。そういうことよ」

彼女が上を見る。つられて視線を上に向けると、幾千もの星々が見えた。

もう一度目の前のセルリアに目をやる。

彼女からはアズライトと同じ雰囲気を感じられた。

「君は……………個性」なの？」

「言つたでしょ？ 君のアズライトにバックアップされた人格。元人間の個性。

いずれあなたが体を壊してでも力を使うことを、あの子は悟つてた。

だから私をその時に備えるための保険として、あの子が用意していたのよ。

リカバリーディスクって知らない？ まあそういう役回りね」

「……………僕はこれからどうなるの？」

「うーん、このままじつとしていたらその内終わるけどね。

それじゃつまらないでしょ。どうせなら、記憶の旅に出かけない？」

「旅？ 記憶の？」

「あなたがヒーローになりたいと思う本当の理由。

あなたの原典<sup>オリジン</sup>。私はそれが何か知ってるけど……………。

どうする？ あなたの原点思い出したくない？」

「……」

緑谷は前の少女を見る。

彼女の目はとても穏やかだ。人を思いやる心を形にしたら、このような感じになるのだろうかと思う。

緑谷は自らの掌を見つめる。

ところどころ、虫食い状態ではあるが記憶が蘇りつつある。

自分が雄英に通っていたことは思い出せた。

そしてヒーローを目指していたことも、オールマイトに偶然出会い、そして後継者に選ばれたのも思い出せる。

だが何かが決定的に欠落している。

欠けているのが分かるのに、何が無いのかが分からない。

非常にもどかしい。

「歯がゆいのは分かるけど、それもしばらくしたら終わる。

あなたは何もかもを思い出す」

「……！」

「驚いた？ だって私緑谷君の中で動いているバックアップだもの。」

思考を読むなんて、どうってことないわ。

それで、どうする？」

彼女が手を差し伸べてくる。

緑谷は言葉は返さない。ただじっと思考の中に浸る。

考えても考えても、今は分からない事、思い出せないことばかり。

だが目の前の彼女は何故か信用できる。

そう本能が言っている。

だから彼は彼女の手をそつと取った。

## 第80話

相澤は青石と共に空を見上げる。

だがその空は地球上の空では無い。

「ねえ、相澤さん」

「なんだ」

クスツと青石が含みを持ったように笑う。

いつもの笑顔とは違う大人びた表情に、相澤は青石の成長の欠片を見た。

彼女もだんだんと変わっていつている。

いつの間にか少しだけ背も伸びた。

きつと相澤の知らないところで色々な人に会い影響を受け、変わっていくのだろう。

それはとても嬉しいことの筈なのに、何故かとても寂しく感じられる。

「えへへ、何でもない」

「そうか」

相澤は彼女から目を頭上に浮かぶ地球に向けた。

地球は今日も青く美しい輝きを放っている。

最近彼女は事あるごとに地上を離れては、月や火星に行っているらしい。

現に今相澤が居る場所は、彼女がコッソリと作っていた秘密基地だ。

地球上からは分からないように光学迷彩で隠しているらしい。

透明なガラス状のドームがすっぽりと月面を覆い、その中に人が生活可能な居住スペースが広がっている。

彼女が彼女なりに作った、月面のコロニーだ。

彼女はゆくゆくは人類が地球を離れて、宇宙に旅立つべきだと考えている。

だからそのために必要な知識を最近片っ端から集めているとのことだ。

「相澤さん、どうかな？ 息苦しかったりはしない？」

「問題ない、快適だ」

「良かった」

彼女は「うーん」と伸びをする。

そのまま芝生の上でごろんと横になった。相澤の隣で、何かを期待しているかのよう  
に上目づかいで見てる。

相澤は素っ気なく視線を外した。

月面のドームの中の様子をもう一度観察する。

白亜の建造物が幾つか立ち並び、地面は芝で覆われている。

彼女が月面に作った居住スペースはあくまで簡易的なモノで、殺風景極まりない。相澤は青石に一つ問いを投げかけた。

「青石、こんな場所を幾つも作っていくのか?」

「うん、これはまだまだ未完成な実験段階だけだね。」

もつと立派でいいものを一杯作るつもりだよ。

人はきつと色んなところに行ける。何処までも行ける。

宇宙って本当に広いから。今の人は、あの小さな星にしか居られない。

それってとても不幸な事だっと思うから」

相澤はふとオールマイトの言葉を思い出す。

いつだったか彼は言っていた。余計なお世話はヒーローの本質なのだ。

青石が言っていることは、今の人にとっては余計なお世話でしかない。

無理に宇宙に進出しなくても、人は生きていける。

だが彼女は現状のままの人類はとも不幸な状態なのだという。

それが理解されるようになるのは、きつとずっと後の時代になってからだろう。

ヒーローが要らない世界というのもそうだ。きつと今の人間には、彼女の言葉の真意

は理解できない。

「青石……青石?」



相澤が声をかける。だが彼女は既に寝ている。

相澤は懐の携帯電話で時間を確認する。既に時刻は夜の2時を過ぎている。いい加減地上に戻るべきだろう。

彼女が姿を消したとなつては、どれだけの事件として扱われるか分からない。生憎携帯は圏外だった。月面なので当たり前だ。

「ちつ……おい青石、起きろ。起きろ青石！」

可哀そうに感じたが、相澤は少々乱暴に肩をゆする。

彼女は寝言の一つも返さない。いつもより更に深い眠りに陥っているようだ。

「おいー 青石ー」

「聞こえてるわよ」

彼女がゆらりと立ち上がる。

その姿は、この世ならざるものを相澤に思わせた。

それは鬼か神か、はたまたは人が知らない何か別の概念の何かか。

尋常ではないオーラが彼女を包む。彼女の目が青く光をたたえる。

髪が波打って光り輝いた。

まるで空に浮かんでいる地球がもう一つ、相澤の前に現れたかのようだ。

相澤がごくりと唾を飲む。

彼女はクスリと笑みをこぼす。

優雅にしなやかに髪をすくその姿は、いつもの彼女の姿ではない。

「お前レギオンか？」

「ええ、そうよ」

青石ヒカルの個性が意思を持っていることは知っている。

その名がレギオンというのも。そして青石と分り合い、共に在ると決めた事も。

「何をしに出てきた？」

「別に、ただ警告しに来ただけ」

「警告だと？」

「ねえ相澤先生。あなたは……いえ、あなた達は。いつまで問題を先送りするつもり

？」

「一体何の話だ？」

「誤魔化さないで」

彼女の纏う怒気と覇気に相澤は圧倒される。

文字通り神に等しい力を持った存在が目の前に居る。

少しでも返答を誤れば、命は無いだろう。

「安心しなさい。あの子にとってあなたが一番大切な存在だって分かってるわ」

「……敵ヴィランについてのことなら、まだ人は模索し始めたばかりだ。

どうしても時間がかかる」

「そうかも知れないわね。でもね、先生。私はあの子……ヒカルと違ってそんなに気は長くないの。

ヒカルの受けた苦しみや悲しみがあなた達に分かるかしら？

そして、それは過去の話じゃない」

彼女は頭上の地球を忌々し気に眺める。

そして手を伸ばす。彼女がまるで地球を握りつぶすかのように見えた。

「……私達の力の本質は、“人と人を繋げる力”。人と人が分かり合う為の力”。

あの子は既にその力の本質に気付いて、目覚めてる。

世界中から聞こえてくる、助けを求める助けを求める声に苦しめられているのよ。

今もあの子は、ね」

「馬鹿な！ そんなのは個性であるお前が遮断すれば済む話だろう」

「無理よ、それは私の力だけじゃない。あの子が本来持っている力。

私に完全な干渉は出来ない。

……四六時中、世界中からあらゆる苦しみや悲しみ。その時に人が祈る声。

あらゆる国境や人種を超えて、求めてくる助けの声にあの子はパンク寸前なの。

ねえ、あなた達はあの星に何億人いるのかしらね？」

以前、青石との月での会話を思い出す。

彼女はあの時にも様子がおかしかった。明らかに焦っているように見えた。

そしていつまで経っても強迫観念じみた信念が抜けない。

彼女は人を助ける事に異常なまでの執着を見せている。その原因の一つなのだろうか。

青石ヒカルに助けを、こい願う人間は数え切れないほどいるだろう。

それら全ての祈りや、心の声が青石には聞こえていたのだとすれば？

一週間のインターンで、ライオン敵を捕まえるだけでなく、人助けを徹底的にしたのは？

もしかして彼女は世界中のあらゆる“苦痛”や“理不尽”を取り除こうとしているのだろうか。

そんな事、出来る筈無い。

だが、彼女からすればするしかなかったのだろうか。

それでもしなければ、いつまで経っても、彼女に助けを求める声が無くなる事はないのだから。

眠れない夜に時計の秒針が、やけに大きく響いて眠られないように。

彼女の耳元には絶えず助けを求める声が、聞こえていたと言うのか。

「そんな事が……まさか、月に行くのも？」

「ええ、そう。だからこうやって月にまで来るのよ。月に居れば、そんな世界中からの助けを求める声も、遠くなる。」

気にならないくらいには、耳を澄まさないと聞こえないくらいには小さくなる。

あの子を追い詰めているのは、他ならぬあなた達自身。

救世主を求めるあなた達が、あの子を苦しめているのよ」

「……」

相澤は言葉にならない呻きを漏らした。

いったい何処まで、いつまで青石は苦しめばいいのだろうか。

彼女には力が有る。そして人は力が有る彼女に縋る。縋られるがゆえに、彼女は苦しみから抜け出せない。

人々が望む通りに青石が生きているのだとすれば、彼女自身の“個”が保てない。

人間の幸せのためにひたすらに働く奴隷に成り下がるしかない。

「そして、私にとって一番大事なのは主であるヒカル。ここまで言えば、何を言いたいか見当はつくでしょう？」

「……おおよその所は、しかし」

「言い訳は聞かない。あなた達には死に物狂いで変わってもらおう。」

これ以上あの子の負担になるのは、レギオンが承知しない。

これ以上、あの子に縋ろうと言うのなら。いつまでも愚かな争いを続けると言うのなら。

……私が滅ぼすまでよ。こんな星」

「……」

「期待しているわね、相澤先生」

そう言いたいだけ言ってから、レギオンの気配が消えた。

抜け殻になったような青石の体がふらりと倒れこむ。

そつとその体を相澤は抱き留めた。

「青石」

彼女はまだ目を覚まさない。

相変わらずその体は羽のように軽い。

ましてやここは月面なのだから。

「俺は……俺は」

どうするべきなのだろうか。思案するが何も浮かばない。

先ほどのレギオンの言葉は本気だ。間違いないそう断言できる。

レギオン、ヒカルの個性である彼女は、いざとなったら人類を滅ぼすだろう。

その時に対抗できる手段は、無い。

既に人類は彼女に縋り始めている。突如現れた救世主、地球を救った英雄。縋らずにはいられないだろう。

だが、レギオンにとっては青石が一番大切であり。

青石にとっては人の不幸が、救いを求める声が無視できず。

人々は青石を讃えて、歓迎しているだけ。

そんな人の心が、青石を追い詰める。

そして結果として個性の怒りをかっつた。

誰も悪くない。何もおかしくはない。

なのに上手くいかない。

この世界はこんなにも理不尽に出来ているのだろうか。相澤は恨みを覚える。月の上の空には色は無く。色のない夜はさらに深まっていった。

……

……

……

「緑谷君」

青石ヒカルの呼びかけに、本人は何も返しはしなかった。

そこは地下の部屋。窓もないので唯一の光源はLEDの照明だけ。それが病室の中を弱々しく照らす。

白いワンピース姿の青石ヒカル。本来はもう学校に出ている時間で、制服を着て居なければならぬ。

だがその格好だと言うのは意地でも学校は休むという意思表示だろう。

青石はパイプ椅子に姿勢を固くして座り、膝の上に握りこぶしを置いている。

緑谷出久はまだ眠りの最中だった。

昨日から緑谷の中で動き続ける何かがある。

それが一体何なのか青石にすら分からない。

だが推測は出来る。恐らくは緑谷のアズライトが主が危機に陥った際に、回復できるように保険をかけていたのだろう。

「起きてきたとき、君は多分……ううん、なんでもない」

青石の手がピクリと動く。緑谷がこれからの将来、何か取り返しのつかない事態を招くかもしれない。

青石への憎しみのあまり、周囲になりふり構わず襲ってくるかもしれない。

記憶が緑谷に戻らなくても、きつと危険は残る。



残された記録や、周囲の人間の話から自身が青石に何をされたのか 察しはついてしま  
まうだろう。

少し外の空気を吸いたくて青石は一旦病室の外に出た。

「ヒカル」

目の前にメイド服姿の女性が立っていた。

「シアンさん」

青石はそれ以上何も言わずその女性に抱き着いた。

シアンはいつもの様に柔らかく受け止めてくれる。

本当に彼女に会うのはいつ振りになるだろう。

ずっと仕事が忙しいと会えていなかった。だがそんな感情も、一気に吹き飛んでしま  
う。

青石は彼女の胸に顔をうずめて大きく息を吸った。

彼女は何も変わっていない。

丈の長いスカートも、紫苑色の柔らかい髪も顔も声も。

何もかもが変わっていつてしまう世界で。

何もかもを自らが変えていつてしまっている世界で。

彼女は何も変わっていない。それが何よりも嬉しく思えた。

「ヒカル、学校には行かなくていいのですか」

「今日には行かない」

「……」

彼女から青石は一旦手を放した。シアンは僅かに渋い顔つきになっている。

「相澤さんにも伝えてあるから。だから……」

「ヒカル。学校に行きましよう」

だがシアンは青石が学校に行くべきだと思っているようだ。

鋭く咎めるような目で見てくる。

青石は若干それに怯んだ。

「そんなに、大事なの？ 学校が？」

「あなたが幸せになるために、人と共に生きることを学ぶために、それは必要なのです」

「でも緑谷君は……」

「彼は、私が見守ります」

「シアンさんが？」

「ええ、私が責任をもつて見守ります。ですから安心して登校してください」

「……」

青石は黙ってシアンの目を覗き込む。

シアンも迷わず見詰め返してくる。

「信じて下さい」

彼女の言葉を青石は信じた。

下を向きつつ返事をする。

「分かった、緑谷君はお願いなね」

「ええ。命に代えても守り抜きます」

「大袈裟だよ。誰かが狙ってくるわけもないし」

「……そうですね」

シアンはただただおやかにほほ笑んだ。

青石は手元から携帯を取り出して時間を確認した。

「わっ!? もうこんな時間!?!」

「急げば間に合います」

「分かってるよ! じゃあ!」

青石は個性と思考を同調させる。

個性の力を借りてあつという間に着替えを済ませて、地上の雄英へと出た。

今日は何かが起こりそうな予感がした。

……

……  
……

「えと……その！ 昨日は本当にごめんなさい！」

I—Aの教室に謝罪の言葉が大きく響いた。

切島は何となく居心地が悪くなつて頬を搔く。

雲間に太陽がそつと顔を隠した。

もうすぐで朝のH Rホームルームが始まる時間。

席についていないと相澤の捕縛布か拳骨が飛んでくるだろう。

だが目の前の青石ヒカルは下げた頭をあげようとしなない。

「それはもう、良いつて。昨日も謝つたじゃねーか」

「でも……」

けれども青石は納得した雰囲気は無い。

彼女が謝っている件は切島の声を出さなくした件だ。

昨日の朝、ちょうど今頃の時間切島と青石は対立した。

そして青石は反論する切島の口を文字通り封じてきた。

彼女の個性が色々な事が出来るのは今更だが、実際に使われて恐怖を感じたのは確か

だ。

だが切島の声は元に戻った。

相澤の抹消の個性で幸い切島は声を取り戻した。

そして放課後になり家に帰宅した切島。

だが青石が家を訪ねて来て、切島一家は大慌てになった。

青石は切島鋭児郎に個性を使って危害を加えてしまった事を、直々に謝罪してきたのだ。

「本当にごめんなさい」

相変わらず青石は頭を下げてくる。周囲の視線が痛い。

こんな時緑谷が居てくれたら、そんな考えが頭に過るが彼はもう居ない。

緑谷が除籍になった事は切島含めたクラスの全員が知っている。

「だからいい言ってるだろ」

「でも……本当にごめんなさい」

(これじゃ永遠に終わんねーなア)

「あれから考えたんだけどよオ……青石の言う事も分からなくはないんだぜ？」

「えっ？」

切島も昨日考えた。青石の言っていること。伝えたいことは何なのか。

彼女は今この世界の前提その物を変えようとしている。

敵ヴァイランが出てヒーローが倒す。

それは当たり前のことであり、仕方がないことだと思っていた。

疑問に思ったことなど一度も無かった。

だが、青石は訴えかけている。

敵ヴァイランが出てヒーローが倒す今の現状そのものが、歪んで間違っているのだと。

ヒーローが居なくても大丈夫な世界にする必要があるのだと。

彼女は再三再四言っていた。

敵ヴァイランが居ない世界にしたいと。そして敵ヴァイランが出なければ、ヒーローは必要なくなる。

そういう世界にしたいと、青石は望んでいる。

頭の中で理解はしている。敵ヴァイランが出ないのなら、それに越したことはない。

ヒーローが必要とされない世界が、今よりもずっと先進的で幸せな世界だと。

それは分かっているのだ

だが、切島の心の中で反発が生まれる。

それでは、自分はヒーローになれない。

彼女が提案する世界の中に、自分が目指したいヒーローの姿は無い。

だからこそ、緑谷は青石と衝突したのだろう。

緑谷は自分勝手だったかも知れない。

世間から見れば青石の方が、よほど献身的で、皆が理想とするヒーローの姿に近いのかも知れない。

現に彼女は世間で最も理想的なヒーローとして、受け入れられている。

けれども、誰よりもヒーローらしい彼女が、ヒーローを否定する。

ヒーローなど、そんなものは本来必要ないのだと言う。

明らかに矛盾している。

彼女は数多の人間を救った。隕石の衝突から地球を守り、病人を治し、事故を防いだ。

青石は誰よりも強い力を持ちながら、それをあくまでも人の為に使おうとする。

だからこそ、世間は青石を歓迎する。

彼女はまるで民衆の奴隷のようだ。

顔も名前も知らない誰かの為に一睡もせず働き続け、彼女は過労で倒れた。

世界はそんな彼女を褒め称えた。英雄の彼女は人を救わずにはいらなかった。

切島は不思議に思う。I—Aの生徒たちは皆青石を、本来自分勝手にマイペースな人

だと知っている。

授業だって真面目に受けたくないし、気まぐれだ。

そんな青石が人の為に誰かの為になりたい。そうやって実際に行動しているのが、酷く不自然に思えてくるのだ。

青石がどれだけ自分勝手な人間かは、接している大体の人は分かる。

巷では青石を聖人君子のように持ち上げているが、実像はそのまるで逆。

世間との評価と実際とが、これほどまでにかけ離れている人間が果たして居るのだろうか。

「……切島君？」

彼女について考えれば考えるほど分からなくなる。

青石ヒカル。彼女は酷く歪んでいる。

まるで矛盾の塊だ。

そんな彼女が口にするフレーズがある。

“人の為に誰かの為に”。

どこまでも矛盾しているくせに。どこまでも歪んでいるくせに。

なのにその理想はどうして、こうまでも綺麗なのだろうか。

歪んでいる筈の彼女に、皆引き寄せられていく。

気付いたら、自分もそんな風に在りたいと考えている自分が居る。

だいたいの人がヒーローになりたいのは、偏に自分の為だ。

他人の役に立つとか、そんなものはあくまでも建前だ。

だが、今では。本当に誰かの為に在れたなら。



そう考えている自分が居ることに、切島は気付く。

切島は男らしい、カッコイイ自分になりたい。

それは果たして誰の為だったのだろうか。

あくまで自分の欲求に従っただけの、自分本位の夢では無かつただろうか。しかし、青石を見ているうちに変わっていく。

自分も、人の為に誰かの為に。そう在れたならどれだけ良いだろうか。そんな風に思えてくる。

「切島君！ して欲しいことが有るなら、言つて欲しいの！

それで許してもらえとは思つてないけど……

ボク……なんでもするよ！」

「うん？ 今なんでもつて……ギヤアアアア!?」

峯田が「なんでも」という単語に目ざとく反応するが、外野の生徒にお仕置きされる。

どうせ卑猥な想像でもしたんだろうと切島は思った。

「青石。……やっぱり俺はよ。青石のように敵をライバル可哀そうだとは思えねえ」

「……そっか」

彼女は目を伏せる。切島は言葉を続ける。

「敵ウイランになる人には確かに理由が有るのかもしれねえ。

けど普通の人は敵ウイランとかとは無関係な人が殆どだろ。

そんな罪のない人も敵ウイランは襲うんだ」

青石は静かに顔を俯かせている。

切島は力強く拳を握りしめた。

「俺は人ウイランを敵ウイランから守りてえんだよ。青石がしたように。

俺は……敵ウイランから守るヒーローになりたいんだよ!」

「……守るヒーロー?」

「ああ! だからよ、青石……俺に稽古けいこをつけてくれねえか!」

「稽古けいこ? 鍛えて欲しいってこと?」

「俺だつて強くなりてえ! 青石のように強くはなれねえけどよ、それでも強くなれば

守れるものだつてあるはずだろ!」

「それは……」

「違うか?」

青石は驚いた顔をしているが、切島自身も驚いている。

本当に今この場での思い付きだった。

青石は何かを思い悩んでいるようだ。一週間不眠不休で青石は動き続けた。

今思えば彼女はそうすることで、<sup>ライラン</sup>敵が居ない世界に出来るのではないか。そう考えたのかも知れない。

だが、<sup>ライラン</sup>敵は居なくならなかった。

青石が活動を止めた途端、<sup>ライラン</sup>敵はまた現れた。

だからと言って、彼女のように極端な考え方は出来ない。

だが、切島も青石に同意できる部分はある。

それは敵が居ない方が幸せだという点。

青石自身が定義する敵の定義はあまりにも広範囲すぎる。

けれども個性で犯罪に走る敵なんて居なくなるに越した事なんてない。

切島も敵で多くの人が傷つくのはとても悲しく思う。

だが、青石に比べ他のヒーロー達はあまりにも非力だ。

青石は無茶をしたとは言え、青石と同じことを他の人に出来るかと言われたらそれは否だ。

オールマイイトにすらそんな事できない。

彼女はあまりにも強すぎるがゆえに、何もかも背負い込もうとしているのではないか。

切島はそう思う。

ならたとえ微力であろうとも、切島は強くなりたい。

青石の思想が極端で間違つていようとも。

人々が敵ツイランに怯えずに幸せに暮らして欲しいという願いは、敵ツイランが居ない世界、ヒーローが要らない世界という目標は。

何も間違つてはいない筈だ。

「ううん……違わないよ。そっか、切島君は強くなりたいたんだね？」

「ああ！」

「守るために？」

「何かおかしいか？」

「ううん……ただ、ね」

青石は本当に寂しそうに笑う。心の底で彼女が一筋の涙を流して、それが顔に出たかのように見えた。

彼女の顔に、涙は一滴も流れていないのに。

「人は“守る”ためになら、どんな酷い事だつて出来ちゃう生き物なんだよ。

どんなにやりたくない事だつて、いけないと分かっている事だつて。

何かを“守る”ためになら、手段なんて選ばない。それが“人”なんだよ。

“守る”ために戦う。

それがどんなに残酷な事なのか、ボクは知っているから。

……身をもって知ってるから」

「あつ……」

（馬鹿か俺は……！）

地雷を踏んだ。そう思った。

彼女がどれだけ残酷な仕打ちを受けてきたのか、1—Aの生徒たちは聞かされてい  
る。

そしてそれは人類を“守る”ためにされてきたことも。

彼女にとって守るという動機は決して綺麗なものではない。

むしろ“人類を守る”という絶対的な大義名分の為に、犠牲にされた立場の人間だ。

そんな彼女が今の切島の言葉を聞いて何を思うか、想像に難くない。

「俺は……」

「いいよ、やろつか訓練」

「えっ？」

「何呆けた顔してるの？ 強くなりたいんじゃないの？」

キョトンとした青石。すると横合いから声が飛んでくる。

「青石、その訓練俺も混ぜろ」

「轟君？」

訓練に混ぜろと言いだしたのは轟焦凍だ。

考えてみたら青石と一番仲がいいメンバーの一人だし、言いだしてもおかしくない。

「切島、強くなりてえのはお前だけじゃねえぞ」

轟が真つすぐに切島を見てくる。

彼の顔に確固たる闘志が宿っていた。

もしかして轟は、危ない方向に行こうとしている青石を諭したいと思っっているのかも知れない。

昨日青石と話して何となく感じた。

きつとただ話し合うだけじゃお互い平行線のまま、何も変わらない。

ならば訓練を通じて、少しでも分かり合う事が出来るのではないか。

青石が、危ない方向に行こうとしているのは確定的に明らかだ。

それも、もしかしたら何かが変わるかもしれない。

他人を変えることは出来ないかも知れない。

だが自分自身は変えられる。

自分のやれることが増えたなら、もしかして青石の負担も減らせるかもしれない。

そしてゆくゆくは青石自身の考えにも変化が訪れるかも知れない。

「轟君もかあ……。良いよ、でもやると決めたからには徹底的にやるからね！ 覚悟してよ！」

ふんすと鼻息を鳴らして青石は腕まくりした。

いつもの青石の雰囲気に戻ってクラスも何となく和やかになる。

最近の青石はいつも落ち込んで深刻な顔をしていた。

今の彼女は適度に力が抜けていて、とても見えていて心地いい。

彼女が笑っている。それだけでクラスの中に光が満ち溢れるような感覚がする。

教室の窓から日差しが差し込む。

太陽が雲間から姿を現した。

## 第81話

——声が聞こえた。

青の少女は声が聞こえた方角に顔を向ける。

その先には無限に広がる青空だけが広がっている。

いつもならここで叱責か拳骨でも飛んでくるところだが、朝の教室に未だ相澤はまだ来ていない。

朝のH Rの予定時刻を既に十分は過ぎている。  
ホームルーム

相澤が遅刻など青石の記憶の中では初めてのことだ。

「先生来ないけど何が有ったんやろね？」

『——助けて』

「さあ？」

再び青空の向こうから助けを求める声が聞こえる。

「どうしたの？」

麗日が何やら察した様子で青石に声を掛けるが

「どうもしてないよ、変なお茶子ちゃんだね」









クラスメイト達の顔を見渡す。

彼らは無力で、本当に狭い身の回りの世界のことしか分らない。

その小さな世界が平和なら、きっとそれが彼らにとつての平和なのだろう。

現在進行形でこんなにも悲しいことが起きているのに。

こんなにも残酷な仕打ちを人が人に行っているのに。

彼らは何も知らない顔で、何も関係ないという顔で、平然と日常を送っている。

そして青石もそれに倣う。

彼らは理屈では知ってるはずだ。こうやって悲しいことが今も起きているのだと。

だが、何も行動を起こさない。今すぐ見えない誰かを助けに行こうとはしない。

だって聞こえていないから。何も見えていないから。

違う世界の出来事で、遠い国の出来事で。

自分には関係ないと思っているから。

だから、青石と彼らの違いがどこにあるのか？

違うとすれば実際に聞こえているか聞こえていないか。

現実に見えているのか見えていないのか。

その違いだけ。

彼らだって、実際に今助けようと思って行動すれば、助かった命は有る筈なのだ。

青石ほどではないにせよ、世界を変える力は誰にでも備わっている。

なのに、彼らは何もしない。

羨ましいと青石は思う。

自分も麗日や轟らのように無力で、こうやって聞こえさせなければ。

本当に他人事として捉えることが出来るのに、と心から思う。

だから、青石は無視する。

聞こえないふりをし続ける。

本当は聞こえているくせに、本当は見える癖に。

何も知らないふりをし続ける。

「何やってるんだろ。ボクはただ……」

そして心の奥に、罪悪感だけがどんどん消えず積もっていき。

彼女の心は少しずつ限界に近づいていた。

……

……

……

相澤は頭を抱えていた。

書類にまみれた机の上に両肘をついて、両手で髪をくしやりと驚つかみしている。

椅子に腰かけている彼はいつも以上にやさぐれている。

机の上に積み上げられた書類が、まだかまだかと彼の印鑑と署名を待ち望んでいる。既に置き場がなくなった書類は、机の横に段ボール箱に敷き詰められている。

そしてその段ボール箱がまた5、6箱ほど、机の横に積み上げられていた。

仕事は日に日に増える一方だ。

彼は落ち着かないのか足が貧乏ゆすりで揺れている。

鋭い眼光を窓の方に向けた。

朝の日差しが職員室に差し込んでいる。

今、職員室には誰も居ない。

先ほど職員会議も終わり、各自持ち場に散って行ったからだ。

監視カメラの無機質な目だけが、相澤を捉え続けている。

相澤は先日の青石の個性との会話を思い出していた。

——いつまでも愚かな争いを続けると言うのなら。私が滅ぼすまでよ。こんな星。

青石の個性は、明確に今脅威になりつつあるのは明白だった。

「……俺にどうしろって言うんだ」

だが相澤には何をすればいいのか分からない。

相談できる相手もろくにいない。

最初は校長に話そうかとも思った。しかしそれは出来ない。

彼に話しても駄目だと本能がそう告げている。

校長は人間以上に頭がいい。しかし青石に対して適切な対処が出来るかというところ、それは否だ。

校長だけではない。

相澤には相談できる人間に心当たりがまるでない。

スターレインを迎撃して以来、青石の立場は一変してしまった。

名実ともに世界を救ったヒーロー。

あらゆる病人を救った救世主。

新しい世界へと道を指し示す希望の光。

それが世間から見た今の彼女だ。

故意ではなく事故ではあるが、数千万人を死に追いやった事を気にする人間は今や少数派だ。

彼女の存在で確実に世界は変わりつつある。変わると言うと言えはいい。

が、それはあくまでも青石ありきの変化であり、歪んでいつていう方が正しいと相澤は思う。

「くそ……俺にいったい何が出来るっているんだ。俺はただ……」

彼の心は、絶え間なく降りかかる重圧。

日々こなさなければならぬ業務と、青石に対する心労で限界を迎えつつあった。

「相澤さん……う？」

ふわりと甘い香りが背後から流れた。

柔らかな気配に相澤は上体を背後に向ける。

青の少女がそこに居た。

朝の光を受けた青石が戸惑いながら相澤を見つめている。

青い髪が彼女の動きに合わせ、なだらかに揺れる。

光を浴びて輝く少女はひどく神聖なものに見えて、触れることすらも躊躇させた。

唐突に現れた予期せぬ存在に相澤は動揺する。

青石もそんな相澤に対してどうしていいのか分からないみたいだ。

キラキラとした大きい目が、不安で揺れていた。

「青石……どうしてここに？ いやお前は今日休むんじゃない？」

「学校に行った方が良いって言われて。緑谷君は見てるからってシアンさんが」

「……そうか」

シアンがそう言ったのなら、青石は聞くだろう。

青石はそういう人間だ。



青石にとってシアンとはきつと母親のような存在であり、頼れる姉のような存在なのだろう。

彼女はシアンに全幅の信頼を寄せている。

青石にまともな意見や叱責が出来るのはきつとシアンくらいしか居ない。

「教室、来ないの？ みんな心配してるよ」

「……だから来たのか？」

「うん、待つても来ないからどうしたのかなって。だからボクが来たんだ。

そしたら相澤さん、まだ職員室しむつむに居たから」

相澤は黙ってうなずいて立ち上がる。

そして彼女の頭を何となく撫でようと手を伸ばし、だが止まる。

「相澤さん？」

いよいよもって青石の顔が不可思議なものになる。

明確に顔に「今日の相澤さんはおかしいよ」と書いている。

そんなこと相澤だって分かってる。

だがどうしていいのか分からない。

ふと相澤は悟ってしまった。

いや、今まで理解していながら目を逸らしていた。

青石ヒカルは、彼女は、世界と相容れない。

いずれ彼女は世界を滅ぼすか、世界に殺されるか。

その二択の未来のいずれしかないのだと、そう分かってしまった。

彼女が世界に宣言を出した時だつてそうだ。

彼女が敵ヴァイランと呼ぶものの正体。

それは人の心そのものだ。

人が人である限り、当たり前前に持っている物だ。

敵ヴァイランとは、人が誰も心に持っている残酷な本性。それに負けてしまった人。

彼女はそう表現した。

そして誰もがそうならない世界にしたいと訴えかけている。

けれども青石は見誤っている。

誰もが心の内に抱える闇に打ち勝てるほど、人間は強くない。

彼女はやはり、人間を理解などしていない。

確かに人は今青石に触発されて変化しつつある。

が、彼女が満足できる程の速度では無い。

彼女がいくら理解したいと手を伸ばしても、人は彼女が望む領域には到達できない。

互いに理解し合おうにも、あまりにも価値観が違いすぎる。

青石が望むような世界の在り方にするためには、人間は人間ではいられない。それは人間というものを超越した何かだ。

相澤は伸ばした手を青石の背中にやり、強く抱きしめた。

「わわっ!? 相澤さん!? いきなり何?」

相澤は何も返さない。

ただ胸の中で抱かれるがままになる青石の鼓動を感じていた。

「は、恥ずかしいよ……」

きつと青石の顔は真っ赤になっているのだろう。

恥じらいながらも抵抗しない青石のは、まだ彼女は少女なのだ実感する。

相澤は心の中で決意した。

いったい何が一番大事で、何を守りたいのか。

それを見つけた気がした。

そして相澤は切り出した。

「青石、少し出かけよう」

……

……

……

相澤が青石の両肩に手を置く。

相澤の言葉に青石は目を丸くしていた。

あまりにも唐突すぎる提案に理解が追い付いていない。

朝のH Rホームルームにいつまで経っても来ない相澤。

何かあつたのかと青石は相澤を訪ねた。

だがそこに居たのは青石が知っている相澤の姿では無かった。

やさぐれているなんて物じゃない。

明らかに憔悴しきっていて、とても普通の状態には見えない。

いきなり抱きしめられた時には、びっくりして心臓が止まるかと青石は思った。

脇に目をやると相澤の机の上には書類が山のように積み重なっている。

青石にはあまり分らないが、それら一つ一つが重要なものであるのは察しがつい

た。

いったいどれ程の仕事が相澤に降りかかっているのだろう。

「少し出かけよう」

相澤が切り出した言葉。

それはようはサボリへと誘いだ。

相澤には担任としての業務が有る。

朝のH Rホームルームだつてそうだし、授業だつて受け持つてる。

青石だつて今日は生徒としての務めが有る。

「なに、言つてるの相澤さん？」

「一緒に、少し出かけよう」

「学校は？ 授業は？ お仕事でしょ？」

「いいんだ、そんなの」

そんなのという言い方があまりにも投げやりで、青石は底知れず不安になった。

「そんなのつてそんな言い方……」

「もういいんだ！ こんなつ……こんなのは！」

「相澤さん!? どうしたの！ やめて！」

彼はいきり立ち机を掴んで横にひっくり返した。

机の引き出しがガラガラと開き、中から道具が飛び出してくる。

これでもかという程積み上げられている書類の山が、どさつと床に広がる。

もう足の踏み場もないほどに床一面に広がった。

チラツと見えたのはあちこちの研究所や、施設やもろもろの団体の依頼。推薦に面会

希望。

数え切れないほどに青石に対して群がる人の、アポイントメントを求める要望の

数々。

青石の無限の可能性を秘める力に、あらゆる国や組織が目をつける。

そして青石と接触を図ろうと、雄英や相澤に関わりを持つてくる。

だから青石が世界の救世主になってしまった時点で、相澤が仕事に忙殺されてしまうのは時間の問題だった。

青石は個性の力を借りて職員室のデータを盗み見る。

相澤の月の残業時間は300時間を超えていた。

既に過労死ラインを倍以上過ぎていた。

こんなものどころかなるにきまっていた。

「ごめんなさい……相澤さん……本当にごめんなさい。

ボクのせいで無理させちゃって……。

その癖気付きもしないで甘えてばかりで……ごめんなさい」

青石はただ後悔した。

自身のやりたい事や夢に夢中になって、足元の現実には全く気付いていなかった。

青石が皆に夢を語るほどに、相澤の負担は増していた。

きつと青石の気付かない陰で、色々な苦勞をかけたのだろう。

「……いい、これはお前のせいじゃない。お前はただ、一生懸命にやってただけだろ」

青石は黙って首を横に振る。

気付かないうちにどれだけの助けを貰っていたのだろう。

「相澤さん、……そうだね、行こう。相澤さん、ちよつと疲れちゃったからね」

「お前の方が大概だろ」

「えへへ……そうかもね。ボク達、ちよつと頑張り過ぎちゃったかも。

少しくらいサボっちゃつても、罰当たらないよね。

それにボクはただ……」

「ただ？」

「ううん、何でもない」

青石は個性を使う。

その場に白い霧のような、ワープゲートを作り出す。

そして二人で一緒にそのゲートを潜る。

二人が通り抜けた瞬間、そのゲートは一瞬で跡形もなく霧散した。

「何事だ!？」

直後に物音を耳に入れた職員キョロが駆けつけた。だが、既に職員室はもぬけの殻になっ

ている。

それから一週間経過した。

相澤消太と、青石ヒカル。  
彼らは雄英に帰って来なかつた。



## 第82話

青石ヒカルが消えた。

そのニユースは瞬く間に全世界中へと広まった。

雄英体育祭をきっかけにして現れた新星は、何の前触れも無しに行方をくらました。彼女が人前から姿を消したのは、かれこれ一週間前になる。

轟焦凍は自宅の畳の上で仰向けになり、天井を眺めた。

朝ご飯を食べたばかりで横になるのは良くないのだが、そんなことどうでも良かった。

頭の中に無性に青石の色々な表情が浮かんでは消えていく。

「糞っ」

消えたのは青石だけではない。

I—Aの担任である相澤も同様に行方が分からなくなっていた。

轟が最後に青石の姿を見たのは、一週間前のホームルーム前のこと。「心配だからちよつと見てくるね」そう言い残して青石は、教室から消えた。

それが轟にとって青石に関する最後の記憶。

そのまま青石と相澤が教室に姿を現すことはなかった。当然、そのまま警察沙汰となった。

当初雄英側は内部で処理しようとしていたらしい。

だがI—Aの生徒の一部が既に警察に通報を入れた事もあり、世間に隠すことは出来なかった。

そのまま流れで警察の主導の元で捜査は進められた。

が、何の成果も未だ上がっていない。

「逃げた……っつてことだよな」

轟は青石の顔を思い浮かべる。

インターンで不眠不休で働き、結局倒れた彼女。

へらへらと何でもない風な笑顔を浮かべて、その裏で様々な苦痛を耐えていた。

彼女は人に助けを求めない。

彼女は人に助けられると思っていない。

だからインターンで倒れるまで無理をし続けた。

そんな事は分かっていたと思っていた、だが、結局は轟は青石のことをまるで分かってなかったのかも知れない。

「もうこんな時間かよ」

轟は乗り気がしないまま、学校指定のカバンを手に取り部屋を後にした。  
……。

「おはよう轟君」

「おう……おはよう」

教室で麗日とあいさつする。

だが彼女の目に活気は無い。

もうじき朝のホームルームだというのに、教室には全員はいない。

「八百万はやっぱり来てないみてえだな」

「うん、そうだね」

八百万は登校してなかった。他にもちらほら姿の見えない生徒がいる。

近頃は何かと物騒だ。青石ヒカルが突如消えて行方が分からない。

最近はオールマイトの与える影響も、徐々に低下しているらしい。

世間では全てのヒーローは青石ヒカルの下位互換扱いだ。

青石ヒカルが本気を出していた間は、そもそもの敵との戦いすら起きてなかった。

あらゆる死や事故を完璧に防いだ。

何ならその前に隕石も破壊して、人類を救った。

人々はどうしても青石のそれらとヒーローを比較する。

そして当の本人はヒーローの居ない世界を希望している。

そうして世間一般に嫌な雰囲気は漂い始めた。

携帯電話の画面でネットニュースをチェックする。

“消えた青石ヒカル 彼女は今何処に？”

“青石ヒカル失踪の真実 雄英の杜撰すぎる体制に生徒の悪質な要求”

“消えた象徴 彼女に比較すればオールマイトすらあまりにも……”

“青石ヒカルが暴き出した現実 ヒーロー依存社会から我々は抜け出せるか”

ずらずらと青石ヒカル関連の記事が出てくる。

そしてその内容はおおむね雄英や生徒が青石に負担をかけすぎたせい、というもの。

ある事ないこと出鱈目ばかり妄想ばかり書き綴った記事もある。

そんなものに好意的なコメントがついているのには吐き気すら覚えた。

「あれ？ 切島君がいないね？ 委員長も」

「そう言えば……」

轟は教室を見渡して切島を探すが見えない。

彼は青石のことを「何か理由があるんだろう。その内戻ってくる」と言っていて信じてい

た。

それまで出来るだけ、いつも通りに過ごそうとも言っていた。

「大変だ！」

飯田が血相を変えて教室に飛び込んできた。

走りが得意な彼が息を切らしている。

それほどに急いできたとは、よほどのことが起きたのだろう。

「切島君が……敵ツインに襲われた……！」

……

……

……

ねえ、相澤さん。

何だ？

……ボクね、駄目みたい。

駄目？

もう、疲れちゃったの。四六時中ね、聞こえてくるんだ。

助けて、助けてって。

そんな助けて欲しいって声が、ずっと。ずっと。ずっと。ずっと。ずっと。ずっと。

……。

いつくらいからかな？

ああ……多分、インターンの時くらいからかな？

世界って、こんなに悲しみが溢れてるんだ。

こんなに、苦しいことはいっぱいなんだ。

こんなに、辛いことで、理不尽なことで、悲しく、痛くて、どうしようもない。

いつまでも争いを止められない。

人は本当にどうしようもない。

そんなものなんだって、気づいちゃったんだ。

……そうか。

うん、相澤さん前にね、こう言ってたよね。

寝る時間も、こうして話している時間すらなくなるぞ。

お前が寝ている間も、食べている間も、ヴィラン敵は発生し続けているんだからな。  
つてね。

ああ……そんなこともあつたな。

うん、そうだったの。

ボクが自分の時間が欲しいって思ってもね。

その間に苦しんでる人は出てるの。

ほんの少しだけ、ご飯を食べようって思っても。

ちよつとだけ、眠りたいなあって思っても。

こうやって相澤さんとお話ししたいなあって思っても。

その間にも、苦しんでる人がいる。

ボクには、助けられる人が居る。

やろうと思つたら、ね。

……。

本当にね、皆を幸せにしたいなら。

ボクはねずっと頑張らなくちやいけないの。

食わずに寝ずに。相澤さんとお話もせず、ずっと。

ずっと人の為に誰かのために。

でも、でもね。

それは、ボクが本当にしなくちやいけないことなの？

……。分からない。

うん、ボクもそうなの。分からなくなっちゃったの。

ボクが頑張っている間に、救われる人。

ボクが少しお休みしてる間に、死んじやう人。

助けを受けられる人。助けを受けられない人。

そんな不公平が、どうしても出てきちやうんだ。

ボクが、ちよつとでもお休みが欲しいって思ったらね。



……。だからなのか？

なにか？

インターンの間。お前は不眠不休でやっただろ。

そんな無茶したのは。

そうやって全てを公平に助ける為だったのか？

……。そうするしかね、思いつかなかったんだ。

でもね、無理だったの。

ずっとずっと、全部を全部。助け続けるのは無理だったの。

そんなことしたら、壊れてしまうから。

ボクが、ボクじゃなくなっちゃうから。

……。

インターンが終わってもね、声は聞こえてた。

でもね、聞こえないふりをしたの。

何も知らないふりをしたの。

だってキリが無かったから。

ボクが助けた人と、ボクが助けられなかった人。

差が有るのは、分かってたよ。

でも、相澤さん。

ボクは、どうしても普通の暮らしが欲しかった。

友達と学校で勉強して、おしゃべりして。

本当に当たり前の、普通の生活が欲しかったの。

この世界に居る皆に、普通の暮らしをあげたかったの。

だけど――

もう、なにも言うな。

相澤さん？

もう、お前は頑張ったんだ。

世界を救ったんだ。

皆お前に明日を貰ったんだ。

お前が四六時中、救い続ける必要なんてない。

お前が、お前を捨ててまで、助け続けなくたっていい。

相澤さん、でもね。

こうしてお話してる間に、また何人も死んだ。

ボクはね、こうして相澤さんと話すことを優先して……。

他の人を……ボクは見捨ててるんだよ？

それでもいいの？

いい、もう、忘れよう。

普通の人間には聞こえないものも、お前は聞こえてしまうんだな。

普通の人間なら、抱く必要のない罪悪感をお前は背負ってしまう。

そんなのは終わらせてしまおう。

でも……。

青石、俺は……お前自身を一番大事にして生きて欲しいんだ。助けを求める人間なんて、この地球上のどこかで、いつだっている。全部を全部解決しようなんて、そんなの無理だ。

うん……。無理だったの。

青石、宇宙そらに行こう

宇宙そらに？

一緒に暮らそう。お前が作ったコロニーでもいい。

お前は、もう何にも縛られてないんだ。

お前は、もつと、自由に生きて良いんだ。

……ねえ、相澤さん

一つ聞いていい？

何だ？

あのね……

相澤はまどろみから目覚めた。

額に手を当てながら、むくりと上体を起こす。

柔らかな緑の匂いが鼻をくすぐった。

上を見上げる。

青空が見上げた先に広がっている。

人工的に作られた天蓋の向こうに果てしない宇宙空間と、小さい地球が見えた。

「あはは！ 待て待てー！」

「にゃー！」

草原で、青石と一匹の猫が追いかっこをしている。

茶トラ猫の尻尾が活発に揺れ、青石の髪が躍る様に跳ねていた。

全身を使って目いっぱいじゃれあって、とても幸せそうに遊んでいる。

それを相澤消太は目を細めて見ていた。

人工的に作られた空気をすうつと吸い込む。

地球と月の間に存在する重力の均衡点、ラグランジュポイントに青石はスペースコロ

ニーを建造していた。

直径約10 km程の円筒形のコロニーの中には、地球と同様の環境が再現されている。人が生きていく上で必要なものは、全て揃っている。

青石が人類が宇宙に進出するために必要だと考え、秘密裏に作っていたものの一つだそうだ。

青石により作られたスペースコロニーは、空想科学のものと遜色ない出来の物になっていた。

「相澤様」

背後から声を掛けられる。

振り返らなくてもそれが誰か分かった。

なにせこのスペースコロニーには、相澤含めても三人しか居ないのだから。

「なんだシアン」

「これで本当に良かったのでしょうか？」

「……」

直ぐに返事は返せなかった。

青石ヒカルと相澤消太が地上から姿を消して一週間が経過した。

その間、相澤は何の連絡も取り合っていない。

青石も同様に地球上とは連絡していないようだ。

生きていく上で問題は何か一つない。

水も食べ物も、住まいだって青石に頼れば何だって手に入る。

お金なんて青石の力に比べればゴミ屑もいいところだ。

現に青石は人類の夢の一つである。不老不死でさえ、個性で実現させている。

ただそんな青石も孤独ばかりは、耐え難い物らしい。

青石は地上の環境に疲れ切っていた。

あのまま無理をさせ続けても、相澤が無理し続けても。

どちらかが破綻するのは目に見えていた。

だから逃げた。

自分でも無様な選択だと相澤は思っている。

だがそれ以外、どうしようもなかった。そうとしか相澤には思えなかった。

「……仕方がない、仕方がないんだ」

「……」

「あいつは疲れてた。ずっと誰かが求めてる助けに応え続けたら、どんな奴でも狂ってしまう」

「これは持論ですが」

コホンと咳払いをしてシアンは言う。メイド服の裾が優しく揺れた。

「人から優しさを奪う最も効率的な方法は“忙しく”させてしまうことです」  
「忙しく……?」

「心にゆとりが無くなり、優しくする余裕が無くなってしまえば。どんな人間も優しさを失ってしまうでしょう?」

そしてこれもまた持論ですが、人の行動を決める最大の要因は“環境”であり“性格”や“人柄”じゃありません」

「だが性格も重要だろう?」

その言葉に相澤は納得できなかつた。

だがシアンは

「人は思ったよりも性格に行動を影響されないのでですよ。」

勿論、影響は0じゃありません。ですが、人が何かを決める時に一番重要になるのは

“環境”です。

もつとも人間は“性格”や“人柄”のせいにしたがりませんがね」

「それはなぜだ?」

「何故って決まつてるではありませんか」

シアンが笑うその表情に相澤は寒気がした。

この世の地獄をこれでもかという程見てきたのだろう。そう思わせるだけの凄みと



残酷な感情が見えた。

「変えられない」環境が一番大事だなんて、気付いてしまったら絶望するしかないでしょう？

でも人生に成功するのは、大体裕福な家庭に生まれた人間で。

貧乏になるの大体は、貧乏な家庭に生まれた人間です。

裕福な家庭に生まれたら、裕福になるためのノウハウを教えられます。

ですが貧しい家庭に生まれてしまったら、食べることにすら満足に満たせません。

でも人間は環境なんて関係ない。自分さえ何とかしつかりすれば何とかなる。

実は自分には隠れた才能が有って、それに気づいたら人生を逆転できるのだ。

そうしたらこんな環境も変えられる。

そんな風に思えた方が、希望が持てるでしょう？」

「……そう、かも知れない。が」

「あくまでも持論です。正しいかどうかは、相澤様自身が考えて決めることです。

ともあれ、私は相澤様とヒカルがこうして離れて環境を変えたのは正解だと思つてます。

落ち着いてしつかり休める環境に居れば、きつと見えるものも考えも変わってきますから。

人が自分を変えたいと思うのなら、環境をまず変えるのが一番でしょう。

……さしずめ燃え尽き症候群、なのでしょね。あの子は」

「そうだな。……叶えられもしない夢なんてなくなつていい。

夢なんて失くしてしまつても、俺はあいつに——笑つてて欲しい」

相澤は思う。

世の中は仕方がないことで回っている。

世の中にありふれた矛盾も不条理も。全部考えれば当たり前で、仕方がないことの積み重ねで出来上がっている。

仕方がないとは、見苦しくも有るかもしれない。が、同時に最大限の動機でも有る。

ヒーローが居るのも、<sup>ライバル</sup>敵が出るのも。

偏に全部仕方がないからだ。

もつとも、人間は自分のやった事は環境のせいにしたがる癖に。

他人のおかした過ちは、本人のせいにしたがる。

そんな傾向のある自分勝手な生き物なのだから。

「ええ、そうですね。……仕方が有りませんよね」

「ああ、本当に……仕方がない」

青石は今口にしらない。

人の為に、誰かの為に。そんな美しすぎる理想論を。

ただ良く寝て、食べて、遊ぶ。

相澤に遊び相手をねだったり、雄英の近くに住んでいた茶トラの野良猫を飼ってみたい。

シアンと一緒にテレビでアニメや映画を楽しんだり。

本来普通の少女がもつと昔にしている体験を、全力で楽しんでいる。

宇宙にポツンと浮かぶコロニーの中。

青石と相澤とシアン、それと一匹の猫。

三人と一匹だけで完結している小さな世界で、彼女はとても幸せそうに——笑っていた。

## 第83話

歌が聞こえる。

二人の女性の歌声が重なり共鳴して、相澤を覚醒へと導く。

相澤消太はゆっくりと目を開けた。

暖かな日差しが眩しく差し込んできている。

青石が作った宇宙コロニーは1年中快適に過ごせるように設計されている。

外で寝ているからと言って、雨に濡れることを心配する必要はない。

公園の芝生で横になった相澤は目をすぼめる。

見つめた先の少し離れた場所に、青石ヒカルとメイド服のシアンが居る。

彼女たちは手を胸の前に組み、白垂の墓標に祈りの歌を捧げていた。

Amaz<sup>ア</sup>zing<sup>メ</sup>g<sup>イ</sup>g<sup>ジ</sup>g<sup>ン</sup>g<sup>グ</sup> Grace<sup>グ</sup>ce<sup>レ</sup>is<sup>イ</sup>。

それが彼女たちが歌う曲。

日本語の歌ではない。彼女たちは全て英語で歌っている。

相澤はそれを詳しくは知らない。

だが、青石にとって特別な意味を持っている歌だと思っている。

青石からシアンに教えてもらったのだと聞いている。

どんな意味を持つ歌なのか、調べようと思つたことも有つた。

有名な歌であるし、知つて特別損になる事もないだろうと思う。

けれども相澤の中の何かが、知る事を拒んだ。知らない方が、幸せで居られると警告を鳴らした。

だから、相澤は彼女達の唄う歌詞の意味は知らない。

「あつ相澤さん、起きたんだね！」

相澤が考え事をしている間に歌は終わつたらしい。

すぐさま青石は相澤の元にすり寄ってくる。

何かを期待しているような目がキラキラと輝いていた。

相澤は何となく察して、頭をなるべく優しくなでる。

途端に青石はだらしのない笑顔を浮かべた。

あまりにも分かりやすすぎて、おかしくなつた相澤の口から笑みが漏れた。

「えへへー」

そんな相澤に青石は気付いた様子はない。

ただ相澤の撫でるがままにされている。

「ヒカル」

シアン的一声。相澤は撫でのを止め、青石は顔をシアンに向けた。

この元々敵ライバルの彼女は未だに謎だらけだ。

「話が有ります」

ただそれだけの一言だけなのに、青石の体に緊張が走るのを感じ取れた。いつにもなく真剣な顔つきで、青石はシアンと向き合っている。

「うん、じゃあ相澤さんも」

「いえ、二人きりでお願ひします」

シアンが相澤に目配せしてきた。何も言わずとも分かる。

相澤に出来ることは、何もない。口よりも彼女の目がそう言っている。

「分かった……」

「う、うん……えと相澤さん。今日の夕食何が良い？」

コロニーで生活し始めて、食事の用意は当番制になっていた。

今日は青石が食事当番だ。

なので相澤とシアンは、朝も昼も青石が用意した食事を口にしている。

青石の舌が舌なだけに、彼女は味覚音痴で味付けも想像を絶するほど濃いものだった。

だが食べられないという程ではない。

だから最後まで食べきるには食べきれないのだが、どうにも胃もたれする。

先ほど昼寝したのも、きっと青石の料理が腹に重たすぎるのも原因の一つだ。

「何でもいい」

「もー……それが一番困るんだよ！ うーん……」

「ヒカル」

「はいはい、シアンさん。じゃ場所移そつか。じゃあね相澤さん。

今日の夕食楽しみにしててよ！ あとコロニーは基本自由に回っていいけど、あんまり変な事しないでね！」

「ああ分かってる」

「じゃあねー！」

ぶんぶん手を振る青石に片手をあげる。

そのまま青石はシアンに連れ立たれ、公園を去っていった。

相澤は上を見上げる。

そして何も出来ずにいる自らの手を見つめる。

何も出来ない。何もなし得ずにいる己が呪わしく思えてくる。

青石は言う。相澤は何も出来なくてもいい。

ただ、そばに居てくれるだけでいい。

それだけで心の支えになってくれている、と。

そのままその言葉に乗っかって、甘えてしまっている自分が居ることに気付き更に腹立たしくなる。

「ちっ……本当に何をやってんだ俺は」

ただただ無力に立ちすくむ。

けれどもおそらく青石の方が、よほど相澤よりも無力感を感じているのだろう。

先日青石から悩みを打ち明けられた時、答えを返すことが出来なかった。

青石笑顔の仮面の裏で、悩み苦しんでいた。

誰も彼女の悩みに気付く事すら出来ていなかった。

誰も彼女のことを理解できていなかった。

青石が働き続ければ当然、その分人は沢山救われる。

だが、青石が休んでいる間も当然何らかの理由で犠牲になる人や、苦しんでる人も出てくる。

青石がそれを嫌だと思い、救い続けることは出来なくはない。

だがそれも限界がある。

何よりも、彼女の心が持たない。

そして彼女も人間だ。普通に平和に幸せな生活を送りたいと願っている。



普通の生活を送りながら、一人も残らずに救い続けるのは不可能だ。

だが、如何に効率よく人を救うか。それだけを追い求めた時には、彼女は人を止めるしかなくなる。

彼女が普通の生活を送っている間にも、人は死んでいるのだから。

「人の為に誰かの為に……それは正しい。けどな……」

人が苦しむのが嫌だ。人を助けたい。だから人を助ける為に力を使う。

それは正しい。

そんな一点の曇りもない正しい論理。だがそれも行き過ぎた先に、破滅しか残っていない。

正しさだけを追い求めていくと、人の心は死んでいく。

例え間違っているようにも。例え敵に身を落とそうとも。ツイラン

それ以上に譲ってはいけない論理が有るのだと、相澤は信じた。

「青石、正しくなんてなくたっていい。」

どうしても正しく生きられない奴は、死ぬしかないのか？ 違うだろ？

例え正しく生きられなくなったって、生きてる方が……生き抜く事が一番大事だろ

？」

相澤は思う。ヒーローとは、正しく生きられない者に死なずに済む道を示すものだ

と。

だからヒーローは人を殺さない。

社会の歪みや、個人の過ち。様々な理由はあれど、正しく在れなかつた者に“そんな事はしなくてもいい”と教える。

それがヒーローの真の役割だと、相澤は信じている。

だからヒーローは敵を倒した時になるのではない。

誰かを助けた時、誰かに手を差し伸べた時。その人は既にヒーローなのだ。

「ちっ……馬鹿か俺は。ちゃんと言葉にして伝えなきゃ意味ねえだろうが……」

相澤の呟きは、誰にも聞かれる事なくコロニーの空の中に消えていった。

……

……

……

「(一)なら良いでしょう」

青石はシアンに連れられて、相澤といた公園から数キロ離れた公園に来た。

白いワンピースとメイド服がゆつくりと風に揺られる。

先ほどの公園と同じように殺風景な芝が広がっている簡素な公園だ。

もう少し作りこめば良かったなと青石は思った。

「シアンさん、なに？」

「あなたの悩みは既に相澤様から聞きました。

……人を救いたい。けれどもキリがない。

誰も見捨てないようにあなたが動けば、あなた自身が普通の生活を送れない。

そういう事でよろしいですね？」

「う、うん。えと、そういうことになるのかな？」

うーんとね。シアンさんたちに例えて言うならね……。

家にいる時24時間365日ずっとピンポーンを鳴らされてる感じかな？」

寝ている間もお風呂入っている間もずっと」

「ヒカル、あなたが本気で人のことをどうでも良いと思ってるなら、そもそもそんな声、無視すれば良いだけの話でした」

「そ、そんなこと出来ないよ！ 無理だよ！」

「ええ、でも出来なかった。要するにヒカルは助けたいのに、助けられない。

普通の生活を送りたいけれど、同時に全ての人を助けたい。

そんなジレンマに陥ってしまってるからこそ、罪悪感で苦しんでいたのではないですか？」

青石はうーんと考え込む。

地球を離れた場所にコロニーを作って滞在して、青石は存分に休暇を満喫した。地球から遠く離れたこの場所なら、助けを求める声は聞こえない。

それでも、罪悪感はある。

つまり今のこの状況は「アアア聞こえない」と耳を塞いでいるも同じ状態だからだ。「……でもどうすれば良いの？　ボクだつてみんなと同じように普通に暮らしたい。

シアンさんや相澤さんと一緒に暮らして、ありきたりで何でもない生活を送りたい。でも、それは許されないの？

こんなことしてる暇が有つたら、さっさと人を助けに行けつて、シアンさんは言うの？」

「そうは言いません」

「でもー」

「落ち着いてください。……ヒカル、あなたの力をもつともつと無限大の可能性を秘めています。」

あなたが悩むのも無理はないでしょう。

ですが、力の使い方もつと深く学べば、出来ることはもつと増えて行く筈です」

「そんなこと言われたつて、もういっぱいいっぱいだよ……」

青石は拗ねてその場に座り込んでしまう。体育座りになってプチプチ芝に手を伸ば

して抜き始める。

「ヒカル、推測にはなりますが……あなたの悩みを解決してくれる“個性”の持ち主は、クラスメイト達の中に居ますよ」

「……えっ!? え!? 誰!? 教えて!」

「それは出来ません。あなた自身が考えるべきことです」

「せめてヒント! ヒントだけでも!」

「……ヒカル、あなたは“一人”で何もかもを背負おうとしているから、上手くいかないのですよ。」

もつと周りを見て、頼れるものを増やしてごらんなさい。

皆の力を集めれば、今のあなたに出来ない事も出来るようになりますよ」

シアンの言葉に青石は首を傾げる。

クラスメイト達の顔を思い出してみる。

緑谷は青石の目から見ても一目置ける。だが他は正直青石は評価していない。

どんぐりの背比べもいいところだと感じていた。

「何言ってるの? 大したことないじゃん。」

ヒーローだってみんな束になってもボク一人に勝てない癖に……」

「ヒカル!」

いつになく大きなシアンの叱責が飛ぶ。

青石は瞬間、言っではいけないことを言ってしまったのだと理解した。

シアンが厳しく青石を見る。

青石は先ほどの発言を反省して口を開いた。

「……………ごめんなさい」

「ヒカル。確かにあなたに叶う存在は地球上には居ないでしょう。

ですが人としての尊厳は平等です。あなた一人が特別扱いされていい訳ではありません」

「……………はい」

「いいですか？ 人としての価値は力に関係ありません。

あなたに神と同等の力が有るからと言っても、決して神では有りません。

……………あなたはいつの間にか傲慢になってしまっていたようですね」

シアンの失望した声は何よりも青石の心に痛かった。

大好きだから信頼を失いたくないと思った。青石は心の底から反省し、芝の上に正座する。

「本当に……………ごめんなさい」

芝の上に頭をつけて謝る。そんな青石にシアンが優しく頭を撫でてくる。

「……学校に行ってみなさい。そこでちゃんとクラスメイト達の顔を見て考えてみなさい。」

きつといい考えが思いつきますよ」

「……うん、分かった。じゃあちよつと行ってくるね。あつたご飯任せちやつていいかな？」

「ええ、行つてらつしやい」

「うん！ じゃあね！」

青石はシアンに手を振った。シアンが手を振り返した瞬間、その場から姿が消えた。  
……。

「みんなー久しぶりー！」

突如として教室に姿を現した青石は元気よく両手をあげた、

「あ、青石!！」

「あ、青ちゃん……」

「ん？ どうしたの皆？」

コロニーを出発した青石は、ものの十数秒後に1-Aの教室に到着した。

宇宙空間から直接教室にワープしたので目撃者も居ない筈だ。

ちよつと教室には生徒たちが揃っていた。

時計を見ればどうやら午後の授業の時間らしい。

だが教員がいない。生徒たちは机の上にノートと筆記用具を出している。

どうやら自習時間になっているようだ。

「お茶子ちゃん！ 久しぶり！」

とりあえず青石は麗日に声を掛けた。

麗日は青石を目を丸くしながら見つめている。

「本当に青ちゃんなの？」

「当たり前じゃん！ 本物だよ」

軽やかに青石はその場をクルリと一回転した。白ワンピースのスカートがひらりと遠心力で舞い上がる。

男子のクラスメイトが顔を真っ赤にして目を逸らしていた。けれど青石は気付いていない。

「うん、そのずぶとさ間違はなく青ちゃんだね」

「褒めてる？」

「うん、褒めてる。……ある意味」

「えと良く聞こえなかったけど？」

「何でもないよ！」



「そっか、あれそう言えばなんか見えない顔の人が居るね？」

青石はクラスの中を見渡して見覚えがあるようで、ないような後姿を発見する。  
どうやら男の子のようだ。

正面に回り込んで顔を確認してみる。

「あー!? スーパー人使君ひとし！ 何でここに!? ここはヒーロー科だよ」

「おい、その呼び方はやめろ。俺は心操人使だ。二度と間違えるんじゃないやねえ」

「そっか、分かった。スーパー人使君ひとし」

「……おい」

「青ちゃん。心操君はクラスに空きが出たから、ヒーロー科に転入になったんだよ。」

……デク君が除籍されちゃったから、ね」

「あ……」

麗日の説明を聞いて青石の気分は一気に落ち込んだ。

緑谷が除籍になった経緯を思い出して、胸が痛くなる。

だがそんな事を欠片も知らない心操はニヒルに笑った。

「そう言う事だ」

「そっかスーパー人使君ひとし、体育祭頑張ってたもんね」

「……なあ青石」

「何?」

心操が個性を使ったことは何となく分かったが、青石は正面から受け止める。彼の個性が青石を支配しようと効力を発揮しようとする。

だが

(なんだ、こんなものか)

青石はレギオンの力を借りるまでもなく、自力で跳ねのけた。

元から個性に対する耐性は高い方だし、体育祭で心操にやられた時から対策は考えてあった。

けれどもそんな対策も必要ないほどに、青石の力は強大になっている。

小細工も必要ない。

大抵の個性ならば、何もせずとも青石は跳ねのけるだけの力を持っていた。

「バケモンかよ……」

冷や汗を流している心操に青石は笑顔で返す。

「えっ何? なんなん?」

はたで見ている麗日が分からなかったのか、聞いてくる。

「何でもないよ。ねえ人使君?」

「ああ、何でもねえよ」

クラスメイト達は遠巻きに青石の様子を伺っている。  
どうやら何をどうしたらいいのか分からないようだ。

(別に普通にしていいのに。ボクが今更何か危害を加えるつもりなんてないって分かっている癖に)

青石としては自然に接して欲しいのだが、そうもいかないらしい。

まるで猛獣が突然部屋に入ってきたかのように、緊張した顔を皆している。

「あれ……？　そう言えば……うーん？」

「なに青ちゃん気になる事でも有る？」

「ううん、何でもない」

(気のせいかな……なんか一人足りない気がする。誰だったかな？)

青石はまだ、緑谷以外のクラスから欠けている人が分からなかった。

そして彼女に向けている厳しい視線にも、気づかずにはいた。

日の光が鮮やかに教室を照らしていた。

## 第84話

青石ヒカルは麗日と久しぶりの雑談を楽しみながら、チラチラとクラスの様子を伺っていた。

どうにも様子がおかしい。青石はそう感じる。

青石の予想ではわっと囲まれたり、質問攻めにあうものだとばかり考えていた。だが一向に麗日以外に青石に近づこうとする生徒はいない。

突然行方不明になって、唐突に現れたのにこの反応の薄さはいったいどうした事か。

(……多分根津さんかな？　あまりボクを刺激しないように言ってたのかも。

向こうからしたらボクが何考えてるなんて分かんないと思うし。

用心もするよね。それにボクが教室に来るなんて予想出来た筈だし)

教室の天井の隅に設置してある監視カメラの方をそれとなく見る。

その先にはきつと監視している校長や教師の姿が有るのかも知れない。

(もしかしたら法月もかな？　……どうでもいいか)

「それで青ちゃんは何処に行ってたの？」

「えと、宇宙」

「う、宇宙?」

麗日の目が点になる。青石は人差し指を立て自慢げになった。

「うん、今はね、そこにコロニー作って住んでるんだ」

「スペースコロニー作ったの!？」

「うん。そうだよ」

「はあああ……青ちゃんらしいね」

教室のあちこちからざわめきが聞こえる。

どうやら宇宙に逃げていたとは思っていなかったらしい。

青石からすれば人が多すぎる地上より、宇宙はよほど安全で快適な空間だ。

それはあくまで、生身で重力圏と大気圏を突破できる青石だからこそその感想だが。

——あなたの悩みを解決してくれる“個性”の持ち主は、クラスメイト達の中に居ますよ

青石の脳裏に突然先ほどのシアンの言葉が再生された。

彼女は思わず大声をあげる。

「あつ! そう言えば忘れてた!」

「何を?」

「えと何でもない! えと……」

青石ヒカルは教室の中に居る生徒一人一人をじっくりと観察していく。  
シアンの言う事が正しければ、青石の悩みを解決できるヒントが隠されているらしい。

こうしている間にも、世界中で人は苦しみ傷ついて死んでいる。

それはごく当たり前のことだ。

ヒーローが幾ら集まろうとも、どれだけ技術が発展しようとも変わらない。

いつの時代でも人は苦しみ、悩み続けてきた。

青石は思う。

どうして人は苦しまなければならないのだろうか。

どうして全ての人が幸せに暮らせないのだろうか。

青石は当たり前の幸せを、全ての人に与えたい。

理不尽に命が奪われたり、自由に生きられなかったりする。そんなのは嫌だと思う。

青石の胸の中で緑谷の言葉が今も木霊していた。

—— たった今だって、この世界のどこかで誰かが敵に襲サイランわれている。

僕たちなんかじゃ助けられないような人達だって、簡単に助けられる！

青石さんにはやろうと思えば出来る！

やろうと思えば出来る癖にやらない！ じゃあ見捨てているのと同じだろ！

以前、緑谷に言われてから気付いたことが有る。

今でも青石には助けようと思えば助けられる人達が居る。

けれども、それを青石はずっとしなかった。

自分の生活が大切だったから。

相澤にシアン。大切な人達と一緒に過ごす、かけがえのない日常が愛おしかったから。

けれども、一人残らず、全ての人を助けたい。そう本当に願うのなら、それは叶わない。

彼女が日常を送る間に、世界は動いているのだ。

青石が相澤に頭を撫でられている時でも、シアンに甘えている時にでも。人は死んでいる。

様々な理不尽が生まれて、誰かが助けを求めている。

本当にキリがないほどに、世界には苦しみが満ちている。

それは理屈では知っていた。頭では理解しているつもりだった。

だが、本当に分かってなど居なかったのだ。

それを実感したのはインターンの時だ。

現実に自分の目で見て、肌で感じた。

様々な人や物や状況を青石は見た。

そうしてようやく理解した。自分の見てきた世界は、人が見ている世界は、本当に目の前だけに限定されていて、如何に狭いものだったのだろうか。

「お茶子ちゃんはいいいね」

「えつと突然何？」

青石の頭の中に、幾千万の助けを求め声がなだれ込んでくる。

世界中に助けを求める人がいる。

戦争、貧困、劣悪な住環境に敵<sup>ツイラン</sup>。あらゆる理不尽が見える。

あらゆる人々の声なき声を、人々の心を青石は感じとる。

「みんなは何も見えないから。何も聞こえないから。

だからこうして居られる。普通の当たり前の日常を過ごしていられる。

何も知らずに平然と、何事もなく生きていける。

目の前の物しか見えないし、聞こえない。

世界の何処かで、どんなに苦しいことが起きても、違う世界の出来事のように思える。

それは本当に幸せなことなんだよ」

「……青ちゃんが何を言っているのかよく分からないよ。

何が言いたいのか青ちゃん？」



「別にね。ただ……人は差別とか偏見とか。

そんなのに守られてやっとな普通の生活を送られるんだなって」

青石は麗日に背を向けて窓の外を見る。

「そんなことを思ったただだよ」

麗日は言葉を失ったかのように何も返さない。

青石も麗日の方を見ない。見るのが怖かった。

どんなことを思われただろうか、失望されただろうか。

ふと青石は考える。

またインターンの時と同じように助けに行くべきだろうか。

あの時は一週間の区切りが有った。

だがそんなのは無視してずっと、助けられる限り助け続けたらどうだろうか。

けれども、そんな事をしても持たなくなるのは前回の結果が示している。

一週間、青石にとってはずっと長い期間だが青石は動き続けた。

あらゆる理不尽を力ずくで排除して、物理的に救える人間は全て救った。

普段の医療なら手の施しようもない人間だつて助けた。

普通なら逃げ切つてしまっている敵も難なく捕まえた。

全国のヒーロー全てが全力を尽くしても成し遂げられないことを、青石は成し遂げ

た。

けれども社会は何も変わらなかった。

たった一週間では、敵が居ない世界。ウィランヒーローが要らない世界に変われない。

もつと長い時間、継続的に力を発揮する必要が有る。

その為には……。

「青石、少しいいだろうか？」

「うん、常闇君、どしたの？」

青石に声掛けしてきたのは常闇踏陰とこやみふみかげだった。

青石からすると面白いお友達といった感じの人だ。

「麗日や轟、それに八百万が一番の友達だとするなら、その次くらいに仲が良いと彼女は思っている。」

「以前、世界から個性を失くすことも視野に入れていっていると聞いていたな？」

「うん、そうだね」

「フザケンナ！ 俺ハドウナルンダ!？」

常闇の影がぶわつと盛り上がる。

影が実体化したように常闇の背後から浮上し、青石の目の前に迫ってきた。

それは常闇の“個性”の黒影ダークシャドウだ。

「わっかゲちゃん！ よーしよしよし！ よーしよしよしよし！」

「ヤツ……ヤメヤガレ！ コノ！」

ダークシャドウ

黒 影の抵抗も抑え込み、青石は犬でも相手にしているかのように撫でまわす。

ダークシャドウ

黒 影が仮に本気で抵抗しても青石にとっては大した差は無い。

その怪力で青石は思う存分 黒 影を堪能した。

「久しぶりだね！」

「久しぶり……ジャネエヨ！ テメエ俺ヲ殺ス気ナノカ!?」

「どういう事？」

ダークシャドウ

青石は首を傾げる。黒 影は憤慨した。

「シラバツクレンナ！ 俺ダツテ 個性 〃 ナンダゼ！ 世界カラ個性ヲ消ス？ 冗談

ジャネエヨ！」

「あつそつか……」

「完全ニ忘レテヤガツタナ!?」

「てへ」

ダークシャドウ

舌をペロツと出すが黒 影の怒りは収まらない。

しかしどうしたものかと青石は悩む。

今後国や世界がどんな判断をするか分からない。



(シアンさんだつてそう言つてた！ そつか、一人で駄目なら二人で！)

二人で駄目ならもつと大勢ですればいい！ 単純すぎて考えもしなかつた！)

——ねえ、もう一人の私。

(レギオン！ 見えてきたよ、皆が幸せになる道！ 協力して欲しいのお願い！)

——……そう

(あんまり気乗りじゃないね?)

——いえ、そうね。そうかも知れない。ヒカル、あなたが今からやろうとしていること。

それは本当にあなたが望んでいること？ 本当のあなたはそれでいいの？

(どういう意味?)

——思い出して。あなたはあくまで力じゃなくて、分かり合う事で前に進むこと。

それを望んでいた筈よ。これはその真逆。力で全てを解決する、本当に強引なやり方。

(それは……。そうかも知れないけど……。でも、話してる間に人は死んでる！)

色々ボクだつて呼びかけたよ！ 敵の居ない世界になつて欲しいつて。

ヒーローの居ない世界になつて欲しいつて。でも仕方ないじゃない。

<sup>ウィラン</sup>敵が言葉を聞かないんだから！ 言葉だけじゃ人は救えないんだよ！)

——…：そうね

(だからこうするしか無くなってしまおう。仕方ないでしょ！)

——…：いいわ、ヒカル。一緒に行きましょう。

でも忘れないで。人は“仕方ない”と諦めたその瞬間、理不尽に屈する奴隷になる。

誰かを苦しめる敵になる。サイラン今のあなたは、敵サイランそのものになろうとしてるのよ。

(レギオン……。うん、そうかも知れない。でもね、例えそうだとしてもボクは誰かが苦しんでいるのは嫌だ。

世界中の誰もが幸せになつて欲しい。理不尽から解放されて欲しい。

ボクは誰かを切り捨てるヒーローになるより……どんな人だつて助け切る敵サイランになつてやる！)

——準備は整つたわ。後はあなたが実行するだけよ。

青石は集中の為目を閉じる。

青石の中に、レギオンから提供された黒ダークシヤドワ影のデータが入ってくる。

個性そのものが意思を持ち、自律で動く黒ダークシヤドワ影。

その“個性”を参考に、新たな“個性”を構築していく。

願うは救済。

あらゆる傷や病気を癒す力。オールマイトより強いパワー。必要に応じてあらゆるものを創造する能力。

およそ人を助ける為に、使えるあらゆる能力を足し合わせていく。

そして何よりも大事な行動理念を、綿密に書き加えていく。

それは“人の為に誰かの為に”

どんな人でも、居られるように。

人が広く、生きて行く為に。

青石は目を開いた。その目は青く輝いている。やがて髪も同様に輝きを放ちだした。

「これは……!?!」

麗日の声に顔を向ける。彼女は青石の体から発せられるオーラを凝視していた。

青石はたおやかにほほ笑む。

「大丈夫だよ。お茶子ちゃん」

「青ちゃん?」

「ようやく見つけたから。皆が幸せに生きられる方法を。」

緑谷君だつてこれならきつと納得してくれる。

ボク自身も自分らしく在れる生き方を。だからボクはもう諦めたりしないよ。

ボクはこのAzuriteで全ての理不尽を破壊して、新しい時代を始める!」

……

……

……

ずっと嫌な予感はしていた。

麗日は心によぎる不安を押し殺しながら、青石と話していた。

久しぶりに現れた青石は様子がいつもと違う。そう麗日は感じていた。

それはよく見なければ、気付かないかも知れない。

それでも麗日には分かった。

彼女は、何か辛い時、何かを我慢するとき、本当にわざとらしく微笑むのだ。

それはテレビで幾度となく流れていたオールマイトの笑顔にそっくりだった。

本当の心を打ち明けて欲しいと、何度もそう願った。

何も出来ないかも知れない。

何も解決できる案も思い浮かばないかも知れない。

それでも麗日は、彼女が確かに心の底に抱えている悩みを一緒に共有したかった。

嬉しさや喜びだけでなく、痛みや悲しみさえも分かち合いたかった。

青石ヒカルはよく口に出していた。

力では何も変わらない。暴力では何も成し遂げることなんて出来ない。



暴力はただ暴力でしかないのだから。だから自分ばかり合いたいのだと。

しかし、彼女が最終的に選んだのは結局、その有り余る力で支配してしまう道だった。「あはははは！ 成功した！ 大成功だよ！ これで皆を助けられる！」

ボクが寝てる時でも、遊んでる時でも。何してる時でも！ この子達がボクの力になつてくれる！

手を貸してくれる！ 皆を助けてくれる！」

影があふれる。青石ヒカルの足元から次々に闇が零れ出してくる。

闇はそれぞれ人間程の大きさにまとまり、一つ一つ形を成していく。

それらのシルエットは青石ヒカルそのもの。

まるで青石ヒカルの影法師だ。

常闇が震えた声を出した。

「これは……黒ダーク……影シャドウ？」

「青ちゃん！ これは何!？」

「うん？ 見て分からない？ 常闇君の言う通り、これは黒ダーク影シャドウ。」

それを元にボクが今作った「個性」。黒ダーク影シャドウの超強化バージョンだよ！」

「なんで……こんな？」

青石は麗日に向き合わない。既に彼女の目には、誰も映っていない。

彼女の瞳は全てを映していないながら、誰も視てはいない。

すべからく平等に、有るがままに。ただそこに有るものとして映っている。

路傍の石ころが目に入ったところで、大した意味を人は見出さない。

彼女は麗日達を見ていながら、見ていないのだ。そう直感的に麗日は確信した。

『皆さん！ ボクは青石ヒカル！ 青石ヒカルです！ ボクはこの世界に帰ってきまして！』

直接脳内に青石の意思こえが送り込まれてくる。

今日の前にいる彼女が、全世界に向けて声明を発しているのだと理解した。

『今世界中にボクそつくりの“影”が現れてると思います。』

ですが心配しないでください！ それらはあなた達に危害を加えません。

むしろあなた達を助ける為に、ボクが作って世界中に派遣しているのです！』

青石の顔を見て麗日はゾツとした。

なんと形容していいのか、麗日は分からなかった。

なんとなく麗日は理解する。これらのあふれ出た“影”はきつと、青石が人の為に誰かの為に作ったものだ。

だから人に危害を加えないと言うのは本当なのだろう。

『世界中に今も満ちている病気、怪我、障害、貧困、ウイラン敵。

あらゆる不幸は、ボク達が解決します。

もう、お金が無くて食べ物食べられないなんて事は有りません！

誰もが安心した住まいに住めます！ 誰もが安全な水を飲めます！

どんな病気も怪我もボク達が治します！ 事故も防ぎます！

ウイラン敵だつて出てきた瞬間逮捕します！

全ての理不尽を根絶し、あらゆる人の幸せを、ボク達が保証します！

もう誰も敵になる必要なんて有りません！』

「青ちゃん！ 駄目！ もう止めて！ こんな事しなくたっていい！

ここまでの事なんてしなくていいの！」

麗日は青石に向かって叫ぶ。それでも彼女には届かない。

『ですから安心してください！ 人類全員。あらゆる人の安全を、24時間365日。ボク達が保証しますから！』

彼女の狂気に満ちた瞳を、麗日は何も出来ないまま見つめる。

世界の崩れ去る音が聞こえた気がした。

## ※第85話※

青石ヒカルの声が世界中に響き渡る。

彼女の意思は直接脳内に送られてきて、あらゆる言語の壁を突き破った。

『人類全員。あらゆる人の安全を、24時間365日。ボク達が保証しますから!』

その言葉を最後に声は聞こえなくなる。

八木俊典は雄英の方に顔を向けた。

街を見渡すと“影”がそこから溢れてきている。

「いかん!」

その異様な光景に八木の本能が危険だと告げる。

だが彼の直感とは裏腹に、街中からは悲鳴や怒声と言った類の音は聞こえない。

代わりに聞こえてくるのは歓声。そして青石ヒカルへの感謝の声と祈りだ。

「おいおいまじかよ!?! もしかしてずっと青石ヒカルが守ってくれるのか!?!」

「当たったり前じゃん! インターンの時を思い出せよ。怪我だって一瞬で治っちゃった

だろ」

「どんな病氣も治っちゃったし、老人だって若返っちゃまうんだからなあ」

「えっもしかしてこれからは不老不死!？」

「アツすぎだろ!」

世界が壊れていく、崩れていく。

八木だけではない。ヒーロー達や先人たちが積み上げた社会システムが根本から崩壊していく。

そんな音が八木には聞こえた。

だがその音は民衆には聞こえない。万雷の拍手の中で、何かが死に絶えていく。

「八木俊典」

背後から声をかけられる。

振り向くと暗闇から音もなく青石ヒカルの影がにじみ出てくる。

「あなたを治します」

影が手を振りかざす。が、八木は首を振って拒絶した。

「どうして?」

「その前に聞きたい事が有る」

「……あなたは何を知りたいの?」

「君は青石君の“個性”なのかい?」

影は首を縦に振った。

「そう、私達はマスターにより生み出された“個性”。

人の為に誰かの為に。どんな人とも一緒に居られるように。

人が広く生きていくために。

その障害となるあらゆるものを排除して、全ての人を幸福にするために作り出された」

影の声は青石ヒカルとそっくりそのままだった。

「……そうかい」

影は不思議そうにキョトンと首を傾げた。

「質問はそれだけ？　じゃああなたを治すね」

「断る」

影は理解できないという風に首を更に傾げた。

「その前に、青石君本人と話したい」

「マスターと？　どうしても？」

「どうしてもだ」

「……うん、分かった。マスターもきつと良いって言うってくれるはず。

ついて来て私を取り次いであげる」

……

……

「皆さん、大変お待たせしました！ ボクはこの世界に帰ってきました！」

青石は満々の笑みを浮かべて両手を広げる。

雄英高校の正門の前に堂々と立ち、どっと押し寄せてきている民衆たちに呼びかけた。

——オオオオオオオオオオ！

彼女の声に民衆は拍手と感謝の言葉で応じる。

興奮と感動の熱量だけで地響きが響いてくれた。

その興奮のあまり青石が集団に飲み込まれてもおかしくないように思えるが、そうはなっていない。

彼女が民衆にもみくちやにされていないのは、偏に脇を雄英教師達が固めているからだ。

だが教師たちは誰も彼も良い顔をしていない。

むしろ苦渋の決断だとも言いたげな表情になっている。

やがてマスコミらによる質問攻めが始まった。

「青石さん！ 不躰ですが質問よろしいでしょうか？」

「あなたは確か夕日新聞の方でしたよね？」

「は、はい。覚えていてくださったのですか？」

黒髪のショートヘアの女性がキョトンとする。

青石は記憶の隅を探ってもう一度思い出してみる。

何度かこの女性には取材を受けた事が有る筈だ。

「前に何回か取材を受けたので……」迷惑でしたか？」

青石の声に、記者は顔を赤らめながら

「そんな迷惑だなんて！ あ、ありがとうございます！」

「え、えと。その質問は……」

「はっ！ これは失礼しました！ ええつと……これからは人類全員が“不老不死”の

時代になるってことなんでしょうか？」

記者の言葉に青石は力強く首を縦に振った。

「はい、その通りです！ 今日をもって人類は“死”という恐怖から解放放たれます！

誰も死なない！ いつまでも生きられるし、おまけに老いもしない時代になったので

す！」

民衆の興奮は更に高まっていく。



青石ヒカルの口から全員の不老不死が約束された。

しかも彼女に關しては口だけでない。

現に日本で誰も人が死ななかつた奇跡の一週間が存在する。

言うまでもなく彼女のインターンの時だ。

あらゆる敵は完璧に封じ込められて、あらゆる病気は癒された。

事故も心配しなくていい。

万が一怪我をしたって、彼女は一瞬で治してくれる。

まさに神としか形容しようのない彼女の力が、地球上全ての人類にあまねく提供される。

これはとんでもない事だ。

「それは凄いですねー！」

「えへへ……」

記者の言葉に気恥ずかしくなつて青石は目を逸らした。

全世界から聞こえる声に耳を傾けてみる。

大方の真つ先に対処しなければならぬ死や病気には、影たちは対応し終わつてい

る。  
全世界に派遣した影の総数は一千万。

だがそれでも今後足りなくなっていくかもしれない。

青石は更に影を増やして万全の態勢を築くことに決めた。

(よし、落ち着いたらまた影を増やすよ。レギオン、頑張ろう)

——幾つまで増やすつもりよ？

(ううーん。……とりあえず今の十倍の一億！)

——その数の根拠は？

(ないよ！　とりあえずそれだけ数が居れば何とかなるかなって)

——ほんと呆れたものね

(ダメかな？)

——いえ、いいわ。あなたの気が済むまでやってみましょう。

(うん、そうだよね！　これで皆幸せになれるね！)

——……そう

(レギオン？)

——……何でもないわ。

「待って青ちゃん！」

「うん？」

後ろから声をかけられる。

振り向かなくてもその声が誰からかは分かった。

想像通り顔を向けるとそこには顔を青ざめさせた麗日が居た。

「お茶子ちゃん、何でそんな顔してるの？」

「なんでって……青ちゃん、なんで分からないの？」

麗日が必死な顔をして何かを訴えかけている。

青石は、はてと考え込むが分からない。

麗日が何を言いたいのか、何を伝えたいのか。

その真意を理解したくて考える。けれども分からない。

「ああ、そっか。ボクの作り出した“影”が不気味？」

でも何も心配しなくていいんだよ。

見た目はちよつと怖いかも知れないけどね、この子達何も悪いことなんてしないんだから」

影を一人側に召喚する。

影は上目遣いに青石を見つめていた。その髪をそつと撫でて抱き寄せる。

青石の作り出したあまたの影の一つのそれは、安心した顔になってそつと青石を抱きしめ返した。

「行つておいで」

青石の言葉に元気よくその影は頷いてその場から消えた。

「お茶子ちゃん、これからは皆ボクが守ってあげる。

どんな理不尽だつてボクが全部解決してあげる。

だから……」

「そうじゃない！」

麗日の声に場が静まり返った。

青石のやる事をこの場の誰も「間違っている」とは言わない。

だが麗日は違う。

青石は麗日の言いたい事の一端をとりあえず理解する。

麗日お茶子は、青石ヒカルの今やっていることを「間違っている」と、そう言いたいのだ。

青石の腹の底からマグマのように沸々とした怒りがこみ上げてくる。

人の為に誰かの為に。

全ての人が幸せに暮らせる世界にしようと言っているのに、麗日はなぜ間違っていると言うのだろうか。

「お茶子ちゃん、勘違いしているかも知れないけどね。

もう一度言うね。

この子達は……”影”は何も悪いことはしないし、していないよ。

皆人を助けてくれる。ボクが皆を助ける為に作ったものなんだから。

何をそんなに違うって言うの？」

「青ちゃん、本当に何も分かつてないんだね。

……デク君がなんで青ちゃんと喧嘩したのか今なら分かる。

青ちゃんは完全に間違ってる！」

「何が間違ってるの？」

青石は疑問に思う。緑谷や麗日は青石を頑として否定する。

それは何故なのだろうか。

青石はただ助けたいだけだ。

人の為に誰かの為に。

誰も苦しめない世界にするために。誰かが一人ぼっちで泣いている世界は嫌だから。かつての青石のように、苦しくても手を差し伸べられない存在がこの世界には居る。きつと恵まれて育った麗日は知らないのだろう。

理不尽に苦しめられ、だが誰も助けてくれない恐怖と痛みを。

それがどれ程の憎悪を人にもたらすのかを。

「青ちゃん。こうやって何もかも力で支配して、その先に何が有るの？」

「何がって？ そんなの知らないけど……」

「青ちゃんは今うちよつと力使い方を考えるべきだよ！ こんな……こんな……」

「何が問題なの？ じゃあお茶子ちゃん。」

ボクが力を使わないことは簡単だよ。でもねそうすると……」

周りの視線を感じる。

カメラも控えている。ここでの青石と麗日の会話は、全ての人間が固唾を飲んで見守っている。

あまり過激な言葉は使うべきではないかも知れない。

それでも青石は思った事を、そのまま口にする事にした。

「人が死ぬよ」

場の空気が冷え切っている。全ての人間が麗目を冷めた目で視ている。

「それは……それは！ でも！」

麗日は震えながら返事にもなっていない返事を返す。

青石はため息をついた。

「お茶子ちゃん。君の目には何が見えてるのかな？」

「何がって……」

「例えばね、今この場には怪我をしてるひとや病気になつてる人はいないよ。」

敵だヴァイランってこの場には居ない。

誰も困ってないように見えるよね。でもここだけが世界じゃない。世界は広いの。お茶子ちゃんに見えている世界なんて、ほんの一部でしかないの。

今こうしている間にもね、いろんな人が苦しんで、悩んで、理不尽と戦ってるの。お茶子ちゃんの見えていないところだね」

「そんなの分かってるよ！」

「ううん、分かってないよ。ちつとも何も。お茶子ちゃんは分かってなんかいない。

ボクがね、影を回収するのは簡単だよ。

でもね、そうするとまた元通りの世界になる。

苦しみと悲しみが満ちてる世界に後戻り。それで本当に良いの？」

麗日は戸惑った顔のままだ。

青石は両手を広げる。

「お茶子ちゃん、日本で一日に死ぬ人間の数を知ってる？」

「だいたいね三千人くらいだよ。」

お茶子ちゃんが平和に呑気に過ごしていても、何処かで誰かが泣いてるの。

日本だけで三千人、全世界だと15万人も死んでるの。

たった一日だけで、だよ」

「それは……仕方がないことだよ！　人は生まれたらいつか死ぬの！  
当たり前のことだよ！」

「じゃあ例えばね。お茶子ちゃんがお医者さんだとするね。

助けて欲しいって患者が来たとしてね。治療をすれば助かる状況。

そんな時でもお茶子ちゃんはそう言うの？

人は生まれたらいつか死ぬ。だから諦めろって、そう言うの？」

「……言うわけないよ」

「そうだよね？　助けられるのなら助けるよね？」

「そう……だよ……」

「うん、だからね。ボクはボクに出来る精一杯のことをして、皆を助ける。

それだけだよ。そして皆をこの力で助けるの。助けられるから、助けているだけ。

その結果人は死なくなったりするわけだけど……。

何か問題が有るかな？」

「でも……それでも青ちゃんは間違ってる！」

「いい加減にして！」

頑なに青石を否定する麗日に堪忍袋の緒が切れる。

青石は麗日が何を言いたいのかが分からない。



「違う、間違ってる。言うだけなら簡単だよ！

でもねお茶子ちゃん……反対だけでも対案が無いと何の意味も無いんだよ！」

青石の声にも麗日はだんまりを決め込んだままだ。

違うと言うならば、青石は対案を示して欲しい。

この歪んだ世界を一体どうするのか。

青石が人を片っ端から助ける事が間違っていると言うのなら、一体どういう風に助けるのが正解だと言うのか。

分け隔てなく全ての人を助ける選択をした。だが、麗日は間違っているという。

ならば選別をして助ける助けないを決める事になるが、それはどういう基準で選べばいいのか。

何一つ麗日は答えを示してくれない。

だから青石は怒る。

反対だけして具体案を示さない麗日に苛立ちを覚える。

だが色々と考えているうちに、青石の思考もゆっくりと冷静になっていった。

「……分かった、じゃあ間違ってるかどうかは……みんなに決めて貰おうか」

「な……何をするつもりなの？」

麗日の声が微かに震えていたが青石は聞こえないふりをした。

群衆に向けて大声を張り上げる。

同時に世界に個性で意思を伝えることも忘れない。

「皆さん、今からボクは放った影を回収します！」

ひとまずは一週間です。ボクの“影”なしで生活してみてください！

その結果ボクの力が必要かどうか、皆さんで議論してください。

皆さんがボクの助けが要らないと言うなら、身を引きます。

どうか皆さんで考えてください」

ざわめきが雄英の校門前を包み込む。

戸惑いの声。時折怒号も聞こえる。

青石は両手を広げる。

世界中に散った影を全て青石の元へと回収する。

青石の足元に、闇を凝縮した黒い影が次々に舞い戻り青石の中に吸収されていく。

ものの数十秒ほどで、青石は世界に散らばった影を回収した。

何台ものマスコミ達のカメラに目をやる。

青石の宣言。

麗日と交わした会話と、影を回収した経緯も全て映像と音声で記録されている。

人々は青石を責め立てるかも知れない。それでも青石は逃げるつもりは無い。

麗日が正しいと世間が判断したなら、確かに引くべきだろう。

麗日の言う事に納得したわけでは無い。

それでも青石の力と、提供する世界。それを受け入れるかどうかは、みんなに決める権利が有るだろう。

気付かせてくれたという意味で青石は麗日に感謝している。

「お茶子ちゃん、ひとまずはコレで良い？」

「……」

麗日はただ俯いている。

まだ「そうじゃない」と言いたげな顔をしていた。

青石は世界の声に耳を傾ける。

影が去った瞬間、さっそく何人かが亡くなった。

その内の一人は何キロも離れておらず、すぐ近くだった。

亡くなったのは少年。

飛び出してトラックにはねられた死亡事故。

ごくごくありふれた交通事故だ。あくまでも青石がいなければの話だが。

「……お茶子ちゃん、さっそく一人死んだよ」

「えっ？」

麗日には見えていない。聞こえていない。

この世界で起きている不幸や理不尽が、何も目に入ってこない。

青石は羨ましいと思う。

だからそんなに呑気で居られるんだと思う。

青石と同じものが見えたり聞こえたりしたら、きつと反対なんてしないだろうにな。

そんな風に青石は思う。

青石は祈る。

自分の選択で死なせる事になってしまった少年の命。

他にも続々世界中で死にゆく人達に、祈りを捧げた。

影を遣わせば助けられる「助けて」という声も無視し続けながら。

彼女はただその場で祈っていた。

誰も彼女に、道を示すことはしなかった。

……

……

……

影の案内についていくオールマイトの頭にまた青石ヒカルの声が届いた。

今度は一転して影をひとまず回収するらしい。

とりあえずは一週間、彼女は様子を見るところだ。

彼女は世間に自分の力が必要かどうか、考えて欲しいと訴えている。

『皆さんがボクの助けが要らないと言うなら、身を引きます。』

どうか皆さんで考えてください』

その言葉を最後に声が聞こえなくなる。

オールマイトは案内してくれている影に声を掛けた。

「君は行かなくていいのかい？」

「私が戻るのはあなたを案内してから」

「いや、場所はもう分かるから良いよ」

オールマイトは街中の大型スクリーンを指さした。

そこに生中継として青石ヒカルが大写しになっている。

場所は英雄の正門前だ。場所さえわかれば問題ない。

「君は先に行つて取り次いでもらつていてくれないか？」

「……了解した」

その一言を最後にして影はその場から姿を消した。

青石ヒカルの影法師が消え去り、オールマイトはため息をついた。

だが……

「何だ!？」

ため息をついたその直後ドーン!と大きな音が響いた。

何かが衝突したような物音に八木俊典は振り向いた。

「大通りの方からか!？」

側に居る青石の影は下を向いている。

八木俊典はすぐさま何が起きたのか把握するため、個性を使用する。

筋骨隆々な誰もが知るオールマイトの姿へと変身した。

そして駆け出す。

「こっちから音が……あれか!」

道の脇に緊急停止しているトラックが目に入る。それとブレーキ痕。

タイヤの筋がトラックの後ろに伸びていた。

トラックの10メートルほど前に、横たわった小さな人の姿が見えた。背格好から察

するにまだ小学生低学年程度の少年だろう。

横たわった少年の下には、血だまりがじわりじわりと広がっている。

ころころと何かが転がる音がしてそちらを見ると、サッカーボールが転がっている。

(交通事故……! 恐らくボールを追った少年が飛び出したのだろう。

それで急ブレーキをかけたが間に合わなかったということか!)

「運転手は……い！」

トラックの運転手はトラックの陰で電話をしていた。内容から察するに警察に電話している。

横たわっている少年にオールマイトは近づく。

「くっ……無事でいてくれ！……い！」

だがすぐ傍にまで来て、全てを察して諦めてしまった。

オールマイトは仕事柄グロテスクな光景も目にする機会はある。

だから耐性が出来ていて声を上げることはしない。

だがそんなオールマイトでも、ショックを隠し切れないものが有る。

一言で言うと、少年は処置しようがない。素人でもそう分かる状態だった。

猫が道路わきに轢かれたかのように、出てはいけなないものが頭と腹からまろび出ている。

既に目に光は宿っていない。その眼球も片方しか元の場所に収まっていなかった。

もう確認するまでもない。これは即死だ。

そしてそのタイミングの悪さを恨まずにはいられない。

青石ヒカルが影を回収していなかったら。この少年は、死なずに済んだだろうに。

主を失ったボールが風に吹かれて転がっている。

やがて少年の元にまで吹かれてたどり着き、深紅の血に囚われ止まる。  
血塗られた歴史が始まるのを、オールマイトは肌で感じていた。



## ※第86話※

彼女の夢はとても眩しかった。

彼女の夢はどこまでも“正しい”ものだった。

それは、人の為に誰かの為に。

彼女は人の痛みを嫌がった。

どうしてこの世界は理不尽や不条理に溢れているのだろう。

そう悲しんでいた。

だから彼女は願った。

ライオン敵が居ない世界を。だれも敵にならずに済む世界を。

……ヒーローが必要とされない世界を。

それは間違えていなかった筈だった。

けれども麗日お茶子は確信する。

間違えていない理屈を積み上げて作り上げられた“彼女”の論理は……何故か致命的に壊れているのだと。

間違いないものを追い求めた先に有るのが、“正しい”ものだとは限らない。

それを彼女は理解できない。

彼女は全ての人々に“正しく”有る事を強制しようとしている。

だが、それは根本的におかしいことなのだ。

人は元々、完全に正しく在れるようには作られていないのだから。

「う……………ん……………」

「あ、目が覚めた？」

ひんやりとした壁の感触が指先に当たる。

ぼんやりとした頭で、薄暗い空気の向こうから聞きなれた声が聞こえる。

胸にかけていた掛け布団を祓う。

裸足のままで氷のように冷たい床をひたひたと踏みしめ声の方に向かう。

顔を上げる。

格子の向こうに笑っている彼女の顔を虚ろな目で麗日は見つめた。

「ゆっくり寝れたかな？」

「……………最悪」

「そっか、まあそうだよね。そこまで心地よかつたら、牢屋の意味無いもんね」

麗日は鉄格子を両手で握る。

麗日は今、青石ヒカルに幽閉されている。

場所が何処かは分からない。

ただそれは突然だった。

青石ヒカルを何とか説得したと思ったら、彼女は校門前で祈りを捧げていた。

それをただ麗日は見ていたと思う。

だがそれ以降の記憶が曖昧だ。何かがあった事は確かだとは思うのだが、詳細がどうしても思い出せない。

そして気付いたら、日の当たらない寒い牢屋の中に麗日は閉じ込められていた。

牢屋の場所が何処にあるのかすら分からない。

青石以外に誰も人は来ない。

青石が定期的に来なければ、麗日は成すすべなく餓死するしかない。

こんな理不尽な話だあるだろうか。

「どのくらいになるの?」

麗日の問いに青石は首を傾げた。

「うん? ああ……お茶子ちゃんが牢屋こじに入ってから? 丸3日だね」

ギリギリと麗日は唇を噛み締める。

何も、何も悪いことなどしていい筈だ。

確かに麗日と青石は意見の食い違いがあった。

だがそれだけで、人を勝手に捕まえて幽閉する権利が青石に有る筈がない。「うーん……その様子だと出られるのは、まだまだ先みたいだね」

「はあ」とため息をついたその様子は、妙に麗日はイラつかせるものだった。「うるさい！　なんでウチをこんな目に合わせるわけ!？」

意味分らないよ青ちゃんは！」

「何って……悪いことをした人には罰が必要でしょ？」

お茶子ちゃん、そんなことも分からなくなっちゃったの?」

まるで出来の悪い子供を諭すような物言いに、麗日は激昂する。

「ウチは悪いことなんて何もしてない!」

「……何も?」

「してない!」

青石は人差し指を立てて、ちつちと左右に振った。

「つまらない嘘は止めてよね。お茶子ちゃん。もうホントは気付いてる癖に」

「何を?……!?!」

妙に確信めいた言い方に麗日は狼狽する。

何もかもを見通すようなブルーの目が眩しい。そして怖かった。

青石の口がゆっくりと動く。

「ねえ、お茶子ちゃん。この世界で一番大事なものって何だと思う？」

「一番大事な……？」

「正義かな？ それとも義理？ 感情？ もしかしたらお金？」

まあ色んな大事なものはあるけどね、ボクは確信してるんだ。

この世界で一番大事なのは“命”だって」

「命……それは——うん」

「そうだよ？ 命より大事なものなんてこの世界にはない。

だから、ボクはお茶子ちゃんをこうするしか無かった。分かっただよ」

「……分つかんないよ！ 青ちゃんの言ってること何にも！

それっぽい話をして誤魔化してるだけじゃん！ はやく外に出してよ！ ……家に

帰らせてよ」

どうしても溢れてくる涙を堪えながらお茶子は願う。

青石ヒカル。彼女の力には、もう誰も逆らうことは出来ない。

世間一般より情報を与えられている——Aのクラスメイトとして、その事は理解している。

彼女には世界中のヒーローが一齐に襲い掛かったとしても、絶対に勝てやしない。

彼女はもはや神に等しい力を持っているのだから。

「お茶子ちゃん」

キイと牢屋の鍵が開いた。

呆然とする麗日の手を青石が引いて行く。

「お茶子ちゃんがどんな罪を犯したのか、ボクが見せてあげる。

それを見てまだ自分には関係ないって思うんだったら好きにすれば？

まあ、ボクの知ってるお茶子ちゃんならそうは考えないって思うけど」

麗日の手を引く青石の姿は、まるで過去の青石とは別人のようで。

彼女の理想のなれの果てが一体どうなるのか。

麗日は考えるのも恐ろしくなって目を閉じた。

……

……

……

「オーライ！ オーライっすよ！ ……はいストップ！

さあどンドン運び出すつすよ！」

「何だありゃあ……」

雄英の校門の前は黒塗りの車でごった返していた。

けたたましいブザー音がそこかしこで鳴り響いている。

それらを撮影や取材しに来るマスコミ、そして見物しにやってくるその他大勢のガヤ。

青石ヒカルの信奉者に、何か起きた時に備えるヒーロー達。

雄英の校門は混沌の最中にある。

一人の少年はその光景に目を見開いていた。

「こりや何だよ?」

「霊柩車だよ」

「霊柩車?」

「あれを見ろよ」

男が顎で指した先にはトラック。そこから次々に長方形の箱型の物体が担ぎ出されている。

「あれは……棺桶?」

「ああ」

「じゃあ、あの中にあるのは」

「死体……って訳さ。日本だけじゃねえ。世界中で死んだ奴の遺体が一齐に運び込まれているって事さ」

「……何で?」

「何でつて分かるだろ？　一週間後にはどうせ青石様のおかげで皆不老不死だ。

人類史上最後の死者つてわけだ。特別に扱うのは当然だろ？」

ごくりと少年が唾を飲み込む。

道路は既に渋滞しきつている。原因はこの黒塗りの車たち。

それらの中にいくつもの死体が乗せられている。

そしてどんどん次から次へと雄英の中へと運び込まれていく。

その一つ一つが死体なのだ。

「うっ」

少年は吐き気が込み上げてきたのか口元を抑える

青石ヒカルの騒動が起こったのはつい3日前のこと。

そして彼女は世界に問いかけた。

青石ヒカルの救たすけが必要か否か。

民意の大半は既に彼女に救たすけて欲しいと願っている。

数々の調査でそれは明らかになっている。

この世界はそれなりに心地いいかも知れない。だが決して楽園では無い。

理不尽な事や不条理なんて幾らでも有るし、差別や偏見だってまかり通っている。

大半の人が日々の暮らしをヒイヒイ言いながら、行きたくもない仕事に行つて金を稼



いで。

やりたくもないことを嫌々ながらやって。

それでようやく生活が成り立っているのだ。

嫌にならない訳が無い。

だが青石はそんな生活を一変させてくれる。

もう青石にさえ任せておけば、何もかもを最高の形で解決してくれる。

ひよつとしたらお金を必死こいて稼がないといけない時代すら、終わるかもしれない。

社会の必要な事は全て彼女の“影”が担当してくれるだろう。

殆どの仕事は彼女の力に取って代わる。

だが果たしてそれで良いのだろうか。

必要な事は全部青石がやってくれ、自分たちはただ提供されるものを享受するだけで良い。

それは家畜ではないか。

「ん？ 何か言ったか」

「いや……」

どうやら少年の思考は口に漏れていたらしい、

何でもない、そう一言いい残して少年はその場を後にした。

それは誰の記憶にも、何の記録にも残らない男と少年のやり取り。

街角の喧騒と時代の濁流の中に飲み込まれ、消えていった。

.....

.....

..

「ねえ青ちゃん」

「んー何？」

「いつまで目隠ししてたらいいの？」

麗日は青石に連れられるまま、歩みを進めていた。

そして先ほど目隠しとしてハンカチを頭に巻かれていた。

「ふふふー内緒だよっ！」

どうやら何か驚かせたい何かがあるのだろう。

麗日は青石にまだ自分達と過ごした日々が残滓が残っている。それを確信出来て嬉しくなった。

つい口の端から笑顔がこぼれてしまう。

「お茶子ちゃん何かおかしかった？」

「何でもないよ」

「ふうん」

きっと彼女は今真顔になっている。

無明の闇の向こうでも、彼女がどんな顔をしているのか声さえ聞こえれば想像がたく。

今まで青石と過ごしてきた時間はきつと無駄ではない。

そうだ、しっかりとしないと。そう麗日は心の中で、自らを叱咤激励する。

今の青石はきつと、夢や理想を追い求めすぎておかしくなっているだけだ。

麗日は知っている。青石にも普通の女の子らしい一面が有るといふ事を。

天然で、とてもドジで、何も知らなくて、それでも一生懸命な彼女を知っている。

明るく笑顔で皆の幸せを祈る彼女の姿を知っている。

今の擦り切れ、疲れ果てている彼女の瞳には何が見えているのだろう。

それは麗日には分らない。けれどもきつかけは想像は付く。

明確におかしくなったのはインターンの時以来だ。きつとあの時に何か青石を狂わせたのだ。

麗日は口を開いた。

「青ちゃん聞いていいかな？」

「うん何？」

「……インターンの時何が有ったの？」

「……」

彼女は応えない。

ただ沈黙をもつて麗日に返してきている。だが声がなくとも彼女の纏う気迫だけは伝わってきた。

(寒い……)

先ほどまで寒さなど、まるで感じていなかったのに今は凍える様だ。

お前は触れてはいけないものに触れた。謝るなら今しかない。

そう麗日の体中の細胞と本能が、命の危機を訴えかけてくる。

「ごめん青ちゃん！ 今の……」

「何も……」

「え？」

「ううん……何も無かったって言うのと嘘になるね。

お茶子ちゃん、インターンの時何が有ったかと言うとそりやあったよ。

色んなことがあったよ。有りすぎていちいち全部は思い出せないくらいにはね。

それでもね、あえて一つだけ言うなら……」

「言うなら？」

“人”を見たよ」

「それは一体……」

「さあお茶子ちゃん！ 着いたよ！」

麗日の視界が一気に開ける。

白色の照明の光が目の中に飛び飛んできて眩しい。

麗日は咄嗟に掌を前にかざした。

「お茶子ちゃん、下に見えるもの見える？」

まず感じたのは寒さ。

先ほどは青石の気迫に怯えていただけだと思っていたが違う。

明確に肌に刺さる冷気がそれを物語る。

目を辺りに見渡す。

麗日から見える限りその施設は、卵型の形をしているらしい。

直径何百メートル以上は優にあるだろう。まるで巨大なサッカースタジアムのようなだ。

中央には開けた場所が設けられていて、その周りをぐるりと観客席が取り囲んでいる。

どうやら麗日と青石は、観客席の最上段の場所に居る様だ。  
下に目をやる。

中央の拓けた場所に、何やら長方形の物体がぎっしりと敷き詰められている。  
「何だろあれは？」

「近づいて見てみる？」

「うん」

「じゃあお茶子ちゃん来て」

青石の提案に乗って麗日は頷く。そして青石に手を引かれるままついて行く。  
だがそれを麗日は、「それら」の近くにまで来てから激しく後悔した。

見なければよかった。分からなければよかった。

出来れば一生関わることも無く終わりたいかった。

だがそれは不可能だとも麗日は知っていた。

「あ……ああ……」

長方形の物体は、麗日も良く知っている物だった。知らない筈はない。

何しろ人はやがて大半の人が、その中に入れられていくのだから。

青石がその物体の一部を開く。中に人が入っているのならば、ちょうど顔が拝めるで

あろう場所。

そこには観音開きの小窓が有った。

そこから見えたモノは……。

「見てお茶子ちゃん」

「い……いや……」

「見てよほら」

「いや……いや！」

「何を躊躇つてるの……？ ……ほらあ！」

「いやああああああ！」

顔の半分が削げ落ちた、子供の顔が見えた。

紛れもない、“死”の形がそこに有った。

見たくもない真実を。気づかなくても良かった真実に気付かされて体が拒絶する。

麗日はかぶりを振って絶叫した。

「いや！ いや！ いや！」

「見てって言ってるでしょ！」

「痛っ……！」

青石が麗日の頭を髪ごと鷲づかみにする。

そして棺桶の窓に顔を押し付けた。

あまりの怪力に抵抗できない。

瞼を閉じようと思つても、閉じることが出来ない。

青石の個性にかかれれば、麗日の抵抗などまるで意味をなさない。

ひたすらに青石は“死”を麗日にまざまざと見せつけた。

「どう!?、これがお茶子ちゃんがボクを止めた結果だよ!」

ボクは君の望むとおりにいったん止まつてあげた! だけど言つたよね?

人はいつでも何処かで死んでるんだつて。

日本だけでも一日で3千人。世界だと一日で15万人。

人は! 死んでるんだよ!」

「こんな……こんなの……!」

「見て!」

青石の指さした先を見る。棺がサッカーコートより広い空間に整然と敷き詰められている。

数はどう見ても数百から千は下らない。その一つ一つに遺体が入っている。

それぞれに違つた人生が有り、家族が居た。

かけがえのない命だった。

だが、今はもう彼らは何も出来ない。何も言えない。



死体となった彼らには、もう青石ですら何もする事は出来ない。

「もう、ボクが何を言いたいのかわかったよね。」

ここに居る死体達は、お茶子ちゃんが、あの時ボクを止めてから死んだ人達だよ。

あの時ボクは、お茶子ちゃんの望み通り止まってあげたよ。

でもね、結果として人は死んだの。

……この人たちは全員……！ ボクが救<sub>す</sub>られた命なの！

死なずに済んだはずの命なの！

あの時……お茶子ちゃんが止めてなければね！」

「ああああ……」

「お茶子ちゃん、どう責任を取るのかな？」

涙を流す麗日は返事を返すどころではない。

それを青石がゴミを見るような目で見下していた。

「お茶子ちゃん……うん皆ずるいよね。」

みんな頭の中では分かっているって、そう言ってる。

でも全然違う。お茶子ちゃん言ってたよね？ 人が死ぬのは仕方がないんだって。

本当にそう？ 大切な人が死んだら、それは数字の問題じゃないよね？

君たちはどうでも良い誰かの時と、そうじゃない時とで命を選別してる。

ヒーロー達が活躍すると自分のことのように喜ぶくせに、敵の事は他人事。サイラン  
普通の人の死亡事故は聞き流す癖に、知ってる芸能人の死には涙を流す。

目の前にこうして見せたら何も言えなくなる癖に。

見えなければ、聞こえなければ、知らなければ。何もなかったかのように過ごして  
ける。

ねえ、どうして？ 同じ命なのに。同じ人間なのに。

どうして差別されなくちゃいけないの？

お茶子ちゃん、これだけ人が死んだんだよ？ 今も人は死んでるんだよ。

ボクなら何もかも助けられるのに、助けられた筈なのに。なんで邪魔しようとするの  
？

ボクの何がそんなに怖いの？」

「だからって……！ 全部を支配するなんてそんなの！」

「……ボクに全てを任せるのがそんなに怖い？」

でもね、君達は弱っちいじゃん。見てなくちゃ直ぐに死んじやうじゃん。

ねえ、お茶子ちゃん。もう一度聞くよ。

命より大事なものって、この世界に有るのかな？」

狂気に満ちた彼女の瞳に吸い込まれていく。



その圧倒的な正論に、麗日は成すすべなく叩きのめされた。

何が正しくて、何が間違っているのか麗日にはもう分からない。

ただ一つだけ分かった。

一見、綺麗に見える彼女の夢。

人の為に誰かの為に。

その願いは最初から、間違っていたのだと。

## ※第87話※

「うああ……ああああああああ」

少女の慟哭が空を覆いつくす雲の中へと消えていく。

彼女の謝罪と悲鳴を聞いている人物は、少年の他には誰も居ない。

緑谷は無力な両手を彼女に向けて伸ばそうとして止まる。

今更、何が出来ると言うのか。

もう何もかも、全てが遅かった。

彼女の理想は美しかった。

本当にそう在れたらいいのにと、世界がそんな風に美しく在れたなら。

どれ程に良いだろうと。

そう思っていた。

だが、人は競い争い守り奪い、欲望のまま自らの身を亡ぼす方に突き進んでいった。

それは偏に守るため。

彼女の理想に浸食されまいと足掻いた世界は、程なく自滅の道を選んでいった。

「緑谷君」

青の少女が振り向いた。涙があふれた顔にドキッとさせられる。両膝が力なく地面につき、白いワンピースは泥にまみれていた。

吸い込まれてしまいそうな青い瞳は、緑谷を通り抜け青空が見えない空の向こうを見つめている。

雨が降っていた。

焼け爛れた大地を黒い雨が洗い流していく。

放射性物質にまみれた雨が、容赦なく青い髪を濡らしていた。

「青石さん……」

「違う。違うの緑谷君、こんなはずじゃなかった。

ボクは皆が幸せになれる世界が欲しかった。それだけなのに。

なのに……」

緑谷は首を振る。

緑谷は彼女を責めたくはない。

彼女は頑張った。彼女は一生懸命だった。

ただ人の為に誰かの為に。誰もが幸せになれる世界を作るために。

その為に努力して、その為に生きてきて、力の使い方を必死に覚えて。

だがその結果がコレなのか。

分厚い雲が地球上を覆いつくそうとしている。

人が生み出した核の炎は、地球上のあらゆる都市を焼き尽くし、人々の命を奪った。巻きあがった粉塵は空に舞い上がり、太陽の光を遮断する。

核の冬が来たのだ。

あらゆる動植物が死に絶えていく。人の文明が破壊されていく。

緑谷は齒噛みする。彼女を人類を滅ぼせる存在だと。

彼女のことをずつとそうやって恐れていた。

だが何てことは無い。

核を使えば、ボタン一つで何十何百万の命を奪うことが出来る。

人類を滅ぼせる力など、人はとつくの昔に手に入れていたのだ。

彼女の目からとめどなく涙が溢れてくる。

緑谷はそつと傍に近寄り涙を拭った。

「何が有ったのか、聞かせてくれる?」

彼女はゆつくりと首を縦に振り、語り始める。

何が起きたのかを。

「あの日ね——」

.....

……

…

「ハイハイに、」 プラントの建国を宣言します！」

地響きと歓声が広場を包んだ。

青石ヒカルは群衆に向かって手を振る。

数多くのカメラが取材陣が、建国の式を世界中へと中継している。

重力の均衡する宙域、L5と呼ばれるラグランジュポイント。

そこに作った多数のスペースコロニーが、プラントの領土だ。

地球上に作ろうとすると、何処かの国の領土を奪わなければならない。

だから必然的に、国家を作ろうと思つたら宇宙空間にするのが丁度良かったのだ。

青石ヒカルが麗日と言い争いしたのは、もう半年も前のことになる。

彼女は様々な意見を聞いた。色々な事を考えた。

色々な選択肢があつた。

だが実際に選べる道は一つしかない。

何かをするという事は同時に何かをしないと選ぶことでも有るから。

そして青石は決めた。

青石ヒカルが選んだ道は、自分の考える限りの理想の国を作り、自由に出入りできる



ようにする。

そういうものだった。

「シアンさん、どうだった？」

建国の式典は無事に終了した。

群衆の目を離れ、プライベートの時間に戻った青石はシアンに尋ねる。

息を弾ませながら聞く青石はまだ幼い子供その物だった。

「大変立派でしたよ。よく頑張りましたね」

「えへへ」

シアンに頭を撫でられて青石は幸せに目を細める。

「……青石」

「相澤さん……やっぱり反対？」

「……それは」

「教えて」

相澤消太は青石がやろうとしていること。それに難色を示していた。

理想の国を作る。

犯罪も貧困も差別も。あらゆる理不尽を根絶した社会を作って、そこに世界中の人達を招待する。

青石の選んだ道はそういうものだった。

青石の言う事が気に入らないなら、別にそれでもいい。

嫌なら来なくてもいいし、嫌になったら出ていってもいい。

どうであろうとも、選択肢を与える。それが重要だと青石は思った。

もつとも、最初に国家を作ろうと言いだしたのは青石自身では無い。

モルグフ孤児院に、ふらつと立ち寄った時エリに再会したとき、海路レンという少年が言いだしたのが始まりだった。

世界を変えて問題があるなら、いっそのこと新しい世界を作ってしまった方がいい。

そしてそこに自由に入出入りできるようにすればじゃないか。

彼はそう言った。

青石は彼の提案に雷に打たれたかのような衝撃を受けた。

さつそく根津校長や、アメリカの副大統領のギルバート・デュランダルらの意見を聞き、そして計画が練られ実行された。

月と地球の重力の均衡点。

そこに多数のコロニーを作って居住空間とし、領土とする。

作るコロニーも青石が全てを担当しない。

設計などを本格的に科学者たちの手を借り、欠陥が無いように設計している。

そして完成した砂時計型のスペースコロニー。

名前は *Productive Location Ally on Nexus Technology*。その頭文字を取り *P.L.A.N.T.*。

青石ヒカルの個性で安全と平和を約束された国だ。

「今更、反対も糞もない。それに……」

「それに？」

「……対案を用意できなかつた俺達がいけなかつたんだ。

反対だけでも対案が無いと何の意味も無い、だろ」

「相澤さん……」

「好きなようにやってみろ」

「……うん」

「ヒカル、忙しくなりますよ」

「分かっているよシアンさん。でもボク頑張るよ。皆幸せにしてあげるんだから！」

この時には青石は想像していなかった。

青石の言う理想の国。

それが理想に近づけば近づくほど、世界の歪みがまた大きくなるということ。

自らが世界に対して起こした行動が、如何に劇薬になるのかを。

正しいことをすれば、正しい結果が得られると。

人が幸せに生きられる世界を作れば、人は皆幸せになれるのだと。

本気でそう信じていた。

まだ彼女は、何も知らない子供のままだった。

……

……

……

『ここに、『プラント』の建国を宣言します！』

テレビから大音量の歓声が流れてくる。

遙か空の向こうで建国されたプラント。その建国の式典が生中継で配信されているのだ。

だがこれは法月らが考えていた青石の行動の中でも、最悪に近いものだった。

「あーあー……予定していた中でも最悪の展開じゃないっすか！

正気っすか青石ちゃん」

「ふむ……」

「ふむ、じゃないっすよ！ どうするんすかとおっつあん!？」

赤髪の少女は頭を抱えていた。

法月将臣は椅子の背もたれに深く腰掛けている。

「このままじゃ間違いなく……ヤバいつすよー!」

「戦争になるのは既に避けられん。世界各国で既に門ゲートを封鎖する動きは出ている」

「……門ゲート、やっぱそのまま……て訳になるわきやないつすよね」

「当然だろう」

「はああ……」

門ゲートとはプラントへ入るための入り口だ。

青石ヒカルが個性で創り出したそれは、見た目は白い霧の塊だ。

それに入っていけば誰でもプラントへ行ける。遙か彼方空の向こうのスペースコロ

ニーの中に着けるといふことだ。

実際法月らも体験したので、その機能に間違いはない。

彼女は世界各国の要所に門ゲートを設置した。

無論、誰でも通つていい訳では無い。

設置したのは青石ヒカルだとしても、通行の許可を下すのはその門ゲートが置かれている国だ。

日本に置いてある門ゲートを管理するのは当然日本。

アメリカに存在する門ゲートはアメリカが管理する。

当然プラントへ入国したいのなら、所属する国家に出国の許可を得なければならぬ。

「既に役所はプラントへの移住申請でパンパンになってるっす」

「ふん、プラントへ移住できさえすれば衣食住何もかも満ち足り、しかも死の恐怖からも逃れられる。

殺到するのは当然だろうな」

「どうするんすか？ このままじゃ人類破滅へ一直線すよ？」

「……アーコロジを開放する」

「アーコロジを？」

「今はそれしかない。あくまでも秘密裏にだ。急げ、残された時間はあまり多くあるまい。

一人でも多く住民をアーコロジに避難させるのだ」

「……了解っす」

恐らく間違いなく来るだろう最悪の時に備え、彼らは動き出した。

……

……

……

ピピピと電子音が意識を外から揺さぶって覚醒させる。

まだ重たい頭をゆっくりをベッドから上げ、小さな手でよろよろと目覚まし時計の上を押した。

電子音が鳴りやむ。

そのままベッドに再び戻りたい誘惑を振り切ってカーテンを開く。

眩しい太陽の光が窓から差し込んできた。

「起きたのですね、エリ」

「あ、おはようございます。シアンさん」

「はい、おはようございます」

メイド服のシアンはたおやかにほほ笑んだ。

エリもつられて笑う。

今エリは4人と1匹の家族で暮らしている。エリに青石、相澤にシアン。後はペットの猫のとら丸だ。ちなみに猫の性別は雌である。

シアンに誘導され洗面所に向かう。

顔を洗うときつきまでしつこく付きまどっていた眠気が一気に晴れた。

「ふー、スッキリしたー」

顔を洗った後、部屋の壁掛け時計を確認すると丁度午前7時になったところだった。

「今日は如何しますか？」

「えーとね、あおい……じゃなかった。おねえちゃんはまだ寝てるのかな」

「……ええ、寝ていますね」

少し苦々しい表情になってシアンは言う。

エリは最初シアンの事が少し怖かった。あまり感情が表に出ないロボットのような人だと思っていたからだ。

だが青石の事になると、途端に表情が生き生きしだす。

ちゃんと人間らしい面が有るのだと分かってからは、何となく安心できるようになった。

何よりも青石から絶大な信頼を寄せられているのが大きい。

それでも時々エリはシアンの事が怖い時が有り、その度に申し訳なく思っている。

「ちよつと起こしてきますね」

エリは隣の部屋を訪ねて、部屋を出る。

「おねえちゃん？ おねえちゃん？」

コンコンとノックをしても返事は無い。

エリはそろつとドアを開けて部屋の中に入る。

部屋の中は暗いが視認できない程ではない。



てくてくエリは歩みを進めて、目標の人を探す。

窓際のベッドの中にエリの目当ての人物はいた。

すぴーすぴーと安らかな寝息を立てて幸せそうに寝ている。

だが、今日も毎朝行っている全国民へのあいさつが有る筈だ。遅刻させるわけにはいかない。

エリは心を鬼にして青石ヒカルを起こしにかかる。

まずは締め切っているカーテンを全開にして、光を迎え入れた。

「うみゆ?! まーぶーしーいー」

青石は途端に布団の中にくるまってしまふ。

まるで芋虫のようだ。

「おねえちゃん、起ーきーてー!」

ゆさゆさと体をゆるする。だが青石の起きる気配は微塵もない。

「起ーきーてー!」

「むにやむにや……エリにやん?」

「朝ですよ、起きてください。遅刻しちゃいますよ?」

「うううだつてえーまだねむういー。あと一時間だけ……」

「あと一時間たつたらスピーチの時間なんですけど」

プラントに住まう全国民に向けての挨拶。これは午前8時に毎日青石が行っている。そもそも元はと言えば青石がやろうと言いだした事らしい。

「うるしやーい！ ボクがねるといつたらあーねるのー。ほらエリちゃんも一緒に寝よ？」

「いや私は……」

「ほら一緒にお眠ー！」

「うわあああ!？」

エリはベッドから伸びてきた青石の手に引きずられた。

そのまま彼女の胸の中に抱き寄せられる。

「ふわああ、エリちゃんとってもいい匂い。クンカクンカ！」

「や、やめてください。くすぐりたいです」

エリの制止の声も聞こうとせず青石はエリの髪の毛や全身を嗅ぎまわり始める。

「ふふふーよいではないかー。よいではないかー。」

エリちゃんの匂いくんかくんか。くんかつか！」

「わっわあああ!？」

悲鳴をあげるエリ。だが青石は止まる気配はなく嗅ぎ続ける。

そんなエリに救世主は突如として現れた。

「朝から何やってる馬鹿野郎」

「あべしっ!？」

拳骨を食らった青石は痛みに悶絶している。

だがいつものことなのでエリは気にしていない。

「あつ相澤さんおはようございませう」

「ああ、おはようエリ。朝ご飯出来ているぞ」

さも自分で用意したかのような相澤の口ぶり。

まあ用意したのはシアンさんだろうなとエリは内心思う。口には絶対に出さないが。

「うう……相澤さんぶつなんて酷いよ」

「お前も早く準備して来い、遅刻しても良いのか？」

「……はーい」

「わああもうこんな時間!？」

朝ご飯を悠長に食べていた青石は時計を見るや途端に焦りだした。

現在は7時50分。

全国民への生放送の時間まであと十分しかない。

青石でなかったら完全に遅刻する時間だ。

「おねえちゃん寝ぐせ立ってます」

「ええどっこ!」

「じつとしてください、直しますね」

エリが青石の髪を撫でつけてあげるのがいつもの事だ。

「えへへエリちゃんありがとう、じゃあお仕事行ってくるね!」

青石はそう言うや否や一瞬で姿を消した。

そして数分後、テレビに出演している青石ヒカルの姿があった。

毎朝生放送で全国民へとあいさつしているのだ。

『えーと、プラントの皆さんおはようございます! 今日も一日元気に過ごしましょう

!

それでは今日のプラントの予定を発表しますね。

まずは——ええつと』

テレビの向こうでアタフタしながらも何とか頑張ってる姿に、エリの顔も綻んだ。

「おねえちゃん頑張ってますね」

「……そうだな」

相澤の憂鬱そうな返事だ。

「相澤さん、なんでですか?」

「何がだ」

「なんでおねえちゃんのこと、賛成できないんですか？」

「……確かにプラントは平和で過ごしやすい良い国だ。一見な」

エリは頷く。

この青石ヒカルが建国した国プラント。

今までの国家とはあらゆる点で一線を画している。

まず労働を国民に求めない。

国家を運営するにあたって必要不可欠な労働が強要されないのだ。

では何が代わりを務めているのか。それは青石ヒカルの個性。

及びオートメーション化されたシステムや、ロボットだ。

特に青石ヒカルの個性に頼る部分は大きい。

青石ヒカルの個性により生み出された彼女の分身が、社会システムのほぼ全てを担っ

ていると言つて過言でない。

犯罪などが起きないのは、偏にそのためだ。

犯罪を犯そうと思つても、一瞬で捕まえられてしまう。

だから誰も犯罪をしようとは思わない。やろうとするだけ無駄だ。

そもその話、犯罪のメリットが無い。

何しろ欲しいものは青石ヒカルが全て用意してくれる。

余程の危険なモノだとか、犯罪につながるような物品でない限り、誰もが何でも手に入れられる。

今や宝石の類なんかは誰だつて持つてるし、手に入る。

あのダイヤモンドだつて青石ヒカルの手にかかれば簡単に作り出せる。

あらゆる工業製品も、地上の何処の国よりも高品質なものがただで手に入る。

そう、無料でだ。

だから通貨は一応存在はしているが、使う機会がそもそもない。

犯罪の温床には、貧富の格差が関わることが多い。

だがそれが存在しないのだ。

誰もが必要なものを必要な時に必要なだけ、何でも手に入れられる。

犯罪でない限りは、あらゆる欲望を青石ヒカルは満たしてくれる。

その上に寿命と言う制限すらも取っ払っていると来たものだ。

ここは正に天国だと人々は口にしてる。

何しろ人々は好きな事を好きなだけして、それだけで暮らしていけるのだ。

不満に思うはずも無い。

「けどそれはあいつの『個性』ありきで全部成り立ってるんだ。

働かなくても好きなものが食べられる。欲しいものが手に入る。

犯罪もないし、死ぬ心配が一切ない。あいつの影が全国民を見張ってるんだからな」  
エリは頷く。相澤の言っていることは事実だ。

プラントは青石ヒカルの影に監視される事で成り立っている。

だが、それ以上のメリットを享受しているから誰も文句は言わない。

そもそも影は普段生活している分には表に姿を現さない。

プライバシーにだって最低限配慮してくれているのだ。

だいたいそうやって見てくれないと、いざ突発的な事故が起きた際に間に合わない。

だから国民は多少の監視はしょうがないものだとして受け入れている。

そしてそんなに監視が嫌なら出ていけばいいのだ。

青石ヒカルは別にプラントに居ることを強制したりはしていない。出ていこうと思えば、いつでも地球上に帰られる。

ここまで手が回っていたら文句をいうものなど、誰一人としていやしない。

「それはそうですけど。……おねえちゃん嫌なら出ていつでも良いって言ってますよ？」

監視されていることが嫌ならそうしても良いって。

でもそうしたら目が届かないところで、どうなってるか保証が出来ないって。

仕方がないんじゃないですか？」

「それは……分かつてる。だがこれはあいつが本当に望んでいることなんかじゃないんだ。」

あいつは人を救たすけることに、あまりにも囚われすぎてる」

「……なんだか似てますね」

「何がだ？」

「おねえちゃんと緑谷さんです。二人とも人を救たすけたいって。

その気持ちが大きすぎて空回りしてる感じがすごくします

だから何となく似てます」

「……そうだな。それにそのくせ自分勝手なところとかな」

「本当ですな」

エリの言葉にシアンも頷いている。

エリはとても満ち足りていて、幸せな暮らしを手に入れた。

本当にこれ以上望むべく物など何も無いほどに。

だが何故だか不安がいつまで経っても付きまとう。

いつまでこの生活を続けられるのか、心配になってしまう。

エリの心の隅に、不安はくすぶり続けていた。



.....

.....

.....

「押さないでください！ 順番に順番に！ 落ち着いてください！」

ヒーローの悲鳴にも近い制止が木霊する。

今にも暴徒と化しそうな集団を、辛うじて警察とヒーローが連携して抑え込んでいた。

市役所の中は今や混沌の坩堝と化している。

もう人が入りきらない程にぎゅうぎゅう詰め。まるで満員電車だ。

青石ヒカルが建国したプラントと言う国。

その国に行くための申請手続きをしに、人々はどっと集まってきたのだ。

プラントが実際に良い国かは、目にしたことが無いので分からない。

だが実際に行った人が、地上に出て来ては良い国だと宣伝しているのだ。

プラント内の実際の暮らしの様子がインターネット上にも、次々に出回っている。

信じられない程暮らしやすく、まるで楽園のような生活が保障されているとのことだ。

「にしたってコレはやべえぞおい」

「いや俺達だって本当は手続きしてえけどよ」

警備をしているヒーロー達の中にもそう言った声が漏れる。

だが政府はヒーロー達にはいち早くプラントに渡航する事を禁止する措置を発表した。

曰く国防力が低下して、国民の生活の安全が確保されなくなるかららしい。

「聞いたかよなんか調査したら、日本人の90%がプラントに行きてえだってよ」

「マジかよ」

「いやほんとほんと」

「まあでも当然だよな。だっていけば無病息災不老不死、おまけに働かなくても生きていけるんだぜ?」

「控えめに言つて最高なんだよなあ」

「いやホントマジ。こんな必死こいて働いてるの馬鹿らしくなるらしいぜ」

「あーあ、俺もプラントに移民してえ」

「そこ無駄話するな!」

罵声が怒声が終始飛び交う役場内。

そこに設置してあるテレビの番組には誰も興味を示していない。

だが次の瞬間テレビから流れだした映像に、誰もが目を奪われていった。

『内閣府より緊急の発表があるとの事です！ 緊急の記者会見をただいまよりお送りいたします！』

繰り返してお伝えします！ 内閣府より緊急の発表があるとの事です！』

先ほどより役場内は静かになる。

それでも五月蠅いと罵声がうるさく上がる。

職員が必死にテレビのリモコンに手を伸ばし、音量を最大限に上げた。

『えー結論から申し上げますと、日本からのプラントへの出国。

これを一時的に禁止する措置を、この場を借りて発表させていただきます』

空気が完全に冷え切る。

そして何処からか罵声が飛び、不満と怒りが役場の中を覆いつくした。

「これはどういう事だあ！ 説明してもらおうじゃねえかああ!」

「わ、私共に言われましても……」

「ぶざけんな!」

血しぶきが舞い上がった。

感情に身を任せた市民の一人が個性を使って、職員を切り裂いたのだ。

「ヴィ……敵だ!」  
ツイン

悲鳴が上がる。混乱が場に広まる。

だが人がぎゆうぎゆうに詰まりすぎて、ヒーロー達も事態を把握できない。

いったい人混みの中で誰が何をやったのか。

まるで事態の收拾がつかない。

おまけにプラントへの出国が禁止された。

その事への恨みが今、国の手足となつて働くヒーロー達に向けられようとしている。

「てめえらのせいだよ！ プラントに行かせろ！ ふぎけんな！」

「ち、違う！ 私達は関係ない！」

「しらばっくれやがって！ ああそうだよなあ？」

このまま皆プラントに行っちゃったんじや、日本なんてなくなっちゃうもんなあー？

ヒーローがヒーローで居られなくなっちゃうもんなあー？

だから出国停止したんだろお？ ふぎけんじやねえ！」

「そんな下らないことは後にして下さい！ 今は……」

「ああ下らねえだど!? 調子乗ってんじやねえぞ国の犬が！」

「下がって！ 皆さん下がってください！ 怪我人がいるんです！ 命に関わるんです

！

皆さん落ち着いて……」

怒号と混乱の中一人の職員が血だまりに沈んだ。

早急に応急手当すれば、助かったであろう命。だがそれも助からなかった。

青石ヒカルが建国したプラント。

それは地上のあらゆる場所に混乱をもたらした。

彼女の言う通り、それは理想の国だった。

そして理想の国故に、人を容易に狂気に走らせた。

存在するだけで、周囲を歪ませていく。まるで雄英体育祭の彼女のよう。

青石ヒカル。彼女は善行を積み上げること、人々を狂わせ歪ませてしまう。

血塗られた歴史が、また一つ刻まれた。

## ※第88話※

「あああ……どうしよう、どうしよう」

主人が部屋で頭を抱えていた。

落ち着きが無いのはいつもの事ではあるが、今回はその比では無い。

彼女はおやつのかッキーを一つ口に放り込み、むしゃむしゃと咀嚼し、コップのジュースで腹の奥に流し込む。

「ふうふう」

彼女は満足そうに声を漏らした。頭の上の猫耳がピンと立つ。

茶色い毛並みの尻尾がゆらゆらと左右に揺れている。

ソファアームに腰かけている彼女は更にテーブルの上のかッキーに手を伸ばす。

「とら丸！ どうしよう……地上の皆が戦い出しちゃったんだよ。こんなの考えてもなかつた……」

「放っておけばいい」

とら丸と呼ばれた彼女は、しれっとした顔を崩さず返事を返す。

パリッとクッキーをかじる音が部屋に響いた。

我関せずといった態度を崩そうとしない。

「そんなの出来ないよお」

うろたえる主人の青石ヒカルを放置したまま、彼女は更にジューズをごくごく飲みだす。

半分もコップに残っているオレンジジュースが、あっという間に空になった。

「ご主人も大好きなオレンジジュースは、とら丸にとつても大好物だ。

「うむ、極めて美味」

「ジューズ飲んでる場合じゃないんだよーとら丸ー!」

とら丸という猫が居る。いや正確には居た、というのが正しい表現になるだろうか。

彼女は元々雄英周辺に生息していた野良猫である。

とら丸は青石ヒカルの飼い猫になった後、個性“ハイスペック”の複製を移され人と同じような姿を得た。

猫耳と尻尾があり、手足に肉球があるものの、それ以外の見た目は完全に人と同じになっている。

だが姿が人になったとそうは言っても、彼女はあくまでも猫である。

主人である青石ヒカルは大好きであるが、それ以外の人間に対して敬意など持つてはいない。

社会的な常識もない。

「ねえ、とら丸聞いて！ あのね……」

主人の青石ヒカルがとら丸に説明し始める。

猫に話して一体何になるのだ。何の解決にもならないだろうと、とら丸は内心思うが黙っておく。

まさに猫の手も借りたいのだろうか。

主人の話にほんの少し耳を傾ける。なにやら地上で争いが始まったらしい。

察するに青石ヒカルが作った国に入れないよう、世界中の国々がその出入口を封鎖したらしいのだ。

「それでね……」

まあ、とら丸からしたら「どうでもいい」話である。

「……ふむ……ふむ」

適当に返事だけを返しておく。青石は止まらず次々に話を続けるが、内容が被りすぎている。

同じような内容をくどくどと繰り返し返している感じだ。

とら丸の耳を右から左に話の内容はすり抜けていく。とら丸は煩わしいと感じて目を閉じて膝を抱えた。



「ねえ、とら丸どうしたらいいと思う？」

「さあ……知らない、だから放っておけば？　好きにさせておけばいい」

「うう……とら丸は冷たいよ」

「猫わたしに聞かれても困る。人間の話は人間に聞いた方がいい」

「だいたい人間と人間がいくら争いを始めようが、とら丸からしたら知ったこつちやない。  
い。」

それに争ったからなんだと言うのだ。

人間に限らず自然界においても戦いなど常にある。

いや、戦いもせずに生き残る事など本来ならば不可能なのだ。

だからここでの生活は余りにも平和的過ぎる。

何もしなくても勝手にご飯は出てくる。飲み水に困ることも無い。

野良猫で生活していたころは毎日が必死だった。

その頃に戻りたいとは思わないが、あの頃の方が生きている実感は確かにあった。

(まあ、どうでもいいか。人間のことは人間に任せておけばいい)

ふあと大きくとら丸は欠伸する。そのままソファアの上で横になった。

「ねえとら丸？　とら丸ってばー！」

「……うるさい。……人間のことは知らない。人間のことは人間で何とかしてほしい」

なおも聞こえる主人の声を、とら丸は聞こえないふりをする。あまりに五月蠅いので両手で耳を閉じた。

耳を塞いで微かに聞こえていた主人の音が止む。どうやらこれ以上は無駄だと悟つてくれたらしい。

振動が足元から伝わる。これは主人の足音だ。振動がすぐ近くまで来て止んだと思つたら、頭に優しく手が触れてきた。

「ごめんねとら丸」

「……別に」

暖かな頭を撫でる感触に、とら丸は眠りに誘われていく。

春の陽だまりのような優しさが、ご主人のつくつたこの場所にはある。

とら丸は思う。プラントは、この国は良い場所だ。この国でなら飢えに苦しむことは無い。

病気も怪我も、青石が全て解決してくれる。

とら丸も知り合いは多くないが、人間も優しい人ばかりだ。

誰もが生きるのに必死にならなくていいから、必然的に優しい人ばかりになる。

だがその反面、プラントの人々は地上に興味を失いつつあるのではないかと思う。

(まあ、そんなのどうでもいいっか)

とら丸の意識は安らかな闇の向こうに落ちていった。

……

……

……

この世界に地獄と言うものが有るのなら、今この場所がそうなのだろう。

爆豪勝己という少年は、目の前の現実を見てそう思わざるを得なかった。

「ぎゃあああああ!!」

男のもの凄い叫び声に爆豪は体が震わせた。靴磨きを装った少年が持っていた箱が、爆発したのだ。

爆豪は良いと断ったが、そのヒーローは「OK」と了承した。

爆豪は喉が渴いて自販機でジュースを買いに行った。

そこから戻ってきたら、爆発の現場に出会ったのだ。

雨が降っていた。

一人の男の体が、見るも無残な姿になっていた。

彼はヒーローだ。名前は知らない。

正確には覚えていない。

彼は地方のマイナーヒーローで、ランキングなんて夢のまた夢という弱小だった。

個性も地味。足が一般人より早いだけ。

ハツキリ言ってクラスメイトの飯田の下位互換だ。

内心爆豪は、こんなモブと組まされるのかと不満にも思っていたし見下していた。

今日即席でチームアップしたから、面識などほんの数時間ほどだった。

それでも知っていることはある。基本的に明るい良い性格で、車でドライブするのが

趣味だということ。

口も悪く愛想もない爆豪を笑ってよろしくと迎えてくれる。

それくらいには優しい人だ。

そしてその名前も知らない無名のヒーローは、もはや助からないと断言できるほどの

重体になっていた。

「痛え……痛えなあ」

男の体が、飛び散っている。

そのバラバラになった肉片が、爆豪の体じゅうにくっついていてた。

さつきまで一緒に仕事をしていた、ヒーローの体がだ。

「ちつと黙ってる！ 今手当を……」

「はは、もうどうしようもねえんだろ？」

「黙ってる！」

ちらと端を見ると自爆テロを仕掛けた少年は、跡形もなくバラバラになっていて即死していた。

爆豪は血まみれになりながら、彼の体を集めようとした。

なにか治療系の個性のヒーローが来れば、助けになるかもしれないからだ。

自販機のジュースを放り出す。

爆豪はギリギリと歯ぎしりする。こんな時だというのに、自販機に連想してあのバカ面が脳裏に思い浮かべられた。

彼女ならば、今の絶望的な怪我だろうときつと助けられるに違いない。

青石ヒカルの作ったプラントと言う国は、理想の国で、まるで天国のような場所らしい。

最近になって政府は躍起になって否定しているが、もう誰でも知ってる事実だ。

子供だって知ってる。プラントに入られれば、まず死ぬことが無い。病気も怪我もしない。

青石ヒカルが全て治してくれるから。

お金だって要らない。食べ物も水も、住む場所も全て青石が提供してくれる。

だから仕事をしなくてもいい。社会システムの全て、青石と機械が補ってくれる。

プラントと言うのは、青石ヒカルが天上に作り出した理想の国だ。

まさに青石の作った「ボクの考えた最高の国」というわけだ。

だがそこに欠けている物がある。それは言うなれば「歴史」だ。

プラントに行けば、確かに何不自由なく楽な暮らしが送れる。それは事実だろう。

「畜生……もしプラントに行けたら……こんな俺でも助かるんだよなあ」

「いいから黙ってろ！」

爆豪はひとまず上着を脱ぐ。男の両足は千切れて無くなっていた。その傷口から血が溢れてきている。

ぎゅうと圧迫止血を試みるがなかなか止まってくれない。

怪我はそれだけではない。

脇腹の肉も抉れていて、そこから内臓が溢れてくる。周りには誰も居ない。誰も助け  
てくれない。

彼の出血は止まってくれない。唇も青ざめている。チアノーゼだ。

呼吸も浅くなってきた。きつともう、長くない。

彼は死ぬ。その決定的な事実が、爆豪の心を激しく揺さぶってくる。

「家に帰りてえ……帰りてえよ……。帰って車に乗りてえよ」

「どうやって……？ 見つからねえんだよ…… 足が！ ねえんだよ！」

「ははは……」

爆豪の悲鳴交じりの声に、男はただ笑って答えた。

「なんで?」

男は最後に力を振り絞る様に精一杯に笑顔を作った。

その笑顔が、どうして爆豪には忘れることが出来なかった。

どうして男は、あの時に笑ったのだろうか。

それからのことを、爆豪はあまり覚えていない。

ただいつの間にか、ヒーローの前線基地の施設に帰って来ていて。

後始末などは他のヒーローがしてくれたりしたいことを聞いて。

そして別の大人たちからは、同情の目を貰い、慰めの言葉を貰っていた。

「辛い思いをしたわね」

ミッドナイトが爆豪の肩を優しく叩いてくる。何も言わずに爆豪は肩に掛けられた手を振り払った。

「言っただろ!? だから学徒動員なんてするべきじゃなかったんだ!」

PTSDにでもなったらどうするんだ」

「じゃあどうするんだ!? 彼らの手も借りないと到底追いつかないだろ!」

「だからやってやって良いことと悪いことが有るだろ! ……だいたい俺たちがやってることって本当に正しいのか? 門ゲートを目指すアイツらからしたらむしろ……」

「おい！　そこまでにしとけよ！　気持ちには分かるけどよ……」  
 他のヒーロー達の騒ぎの声も聞こえる。

どうやら今立って居る場所は、食堂らしい。

疲れのせいだろうか。最近爆豪は、自分自身が何処に居るのかも分からなくなることが有る。

「爆豪君、しっかりと休みなさい。明日は休みでしょ？」

「……うす」

「まあちよつとベッドは固いけどね、贅沢言つてらんないわよね」

青石ヒカルがプラントを作つてからほんの数日で、門は国に封鎖ゲートされた。

一応体裁としては、あまりに出国の希望者が多く混乱を招いているため、とされてい  
 る。

だが事實は違う。それは誰もが薄々知っていた。

青石ヒカルが作り出したプラントと言う国は、本当に夢のような国らしい。

そして青石ヒカルは、誰もが自由にそこに入っていいと公言している。

来るもの拒まずということだ。

地上で今まで通りの暮らしをしたい人を無理に招待したりはしない。

当初彼女は自分の力で、地上を支配するようなことを言っていたが、方針を変えたよ



うだ。

青石ヒカルのやり方に賛同できる人は、プラントに行けば良い。

嫌ならば、行かなければいい。

一見青石の考えは、色々な人の意見を参考にした理想的な折衷案のようにも思えた。だが、それは間違っていた。

おおよその人が想像する以上に、プラントには人がどつと押しかけた。

それこそ世界中の人々が一齐に、我先にと門ゲートに向かっていたのだ。

そして門ゲートは国によって管理され、現在閉鎖されている。

門ゲートの機能自体を消すことは出来ない。

青石ヒカルの個性で作られたそれを消すことは容易ではないし、賢明ではないだろう。

消しでもしたら、それこそ青石ヒカルが何をしてくるか分からない。

青石ヒカルは理想郷を作った。そしてそこに人々を招待し、行くか行かないかを委ねた。

人々はそれに殺到し、国はそれにNOを突きつけた。

爆豪にだつて分かる。

そんな風に人がプラントに出ていったら、今の“日本”という国がなくなってしまう

う。

それは日本だけの話ではない。世界中の国々も同じだ。

そして国は国を守るためにヒーロー達に命令した。

ゲート  
門を死守せよ。

青石ヒカルの甘言に惑わされ、プラントに行こうとする民衆を押しとどめよと。

そして爆豪含めた全国のヒーロー科の生徒にも召集はかけられた。学徒動員だ。

ゲート  
門のある街に防衛のための専用の施設が用意され、そこにヒーローは集められた。

全ては今の国かたちを守るために。

爆豪はこの学徒動員に行く前の法月の言葉を思い出した。

——確かにプラントに行けば、確かに何不自由なく楽な暮らしが送れるだろう。

だが爆豪。そこは“プラント”であり“日本”ではないのだ。

我々には何百年何千年と積み上げられた歴史を守る責務がある。

忘れるな爆豪。歴史は時として、命よりも余程重要な価値を持つのだ

爆豪の中では、どうしようもない違和感が膨れ上がっていた。

「みんな聞いてくれ！」

一人のヒーローが声を張り上げている。

「俺たちヒーローが世間でどう言われてるか言うまでもないよな？」

この前街で言われたよ、この人殺しつてな。お前らがいなければ、皆幸せに暮らせるのにつて罵られたよ」

何人が頷いている。今までずっと国の言う事を聞いていれば「正義」だった。

正しく居られた。それが今、崩れようとしている。

男は更に口にする。

「けど俺達がなんで非難されないといけない？」

あいつらに何が分かるって言うんだ？ ヒーロー<sup>おれたち</sup>達は法を守っている。

そして国は国を守ろうとしているだけだ！

皆がプラントに行ったんじゃ、この国はお終いだ！ そんなこと許せるわけがないだ

ろ！

だいたい悪いのは青石ヒカルじゃないか！ あんな訳の分からないものを作ったり

するから！

なのはどうして、責められなければならない!? おかしいだろ！

皆思い出せ！ 俺達は大切なものを守るために戦ってるんだ！

俺達が「正義」なんだ！」

だがヒーロー達の目に生氣は戻らなかつた。

実は門の正確な場所はヒーロー達にも知らされては居ない。

何処かの建物の中にあるらしいが、それ以上のことは知らない。

だが何としても門ゲイトに入りたい連中は、情報をヒーロー達から得ようと襲い掛かってくる。

敵ツイランの数は、プラント建国以降爆発的に増えた。

しかし、もつとも深刻に変わったのは敵ツイランの数ではない。

世間からの風当たりだ。

今となつてはヒーロー達は世間の敵だ。

国の命令のまま、天国への門ゲイトを封鎖する門番。国の犬。

そんな風に見られるようになってしまった。

かつては民衆から応援される立場だったというのに、今では敵ツイランにやられたら拍手喝

采サが巻き起こる。

まるで狂っている。この国を守っているのはヒーローだというのに。

今まで敵ツイランを倒してきたヒーローを、民衆たちは根絶やしになることを望んでいるのだ。

民衆は望んでいる。

ヒーローが居なくなり、門ゲイトが解放される日を。

そしてプラントで死に怯えることのない暮らしを送りたいと願っている。

気付けば任務で前線に立っていて、門を<sup>ゲート</sup>目指してくる敵を<sup>ヴァイラン</sup>駆逐する日々。周りを<sup>ゲート</sup>見て見ると、誰もが疲れ切った顔をしている。疲弊しているのは爆豪だけではない。ヒーロー達は、限界を感じていた。

## 第89話

——地球で生まれ育った皆様。

——ボクは青石ヒカルです。プラントからボクのメッセージを届けさせていただきます  
ます

——地上の皆様にお願ひがあります。

——今地上では様々な争いが起きていると聞きます。

——ボクが設置したプラントへのゲートの扱いを巡り

……時に血を流す事態に発展していることもある

そう聞き及んでいます

——ですが、皆さん。どうか落ち着いてください。

——ボクはゲートを設置したのは、言うまでもないですがプラントに入れるようにする  
ためです

そして少しでも多くの人に安全で幸せな生活を送って欲しいと願ったからです

ボクがボクの力でできる最大限のことを、プラントでは受けられる

そんな風にしてきたつもりです

——ですが、今地上ではボクが望んでいるモノとは逆の事が起きています

——法律に違反して許可なくゲートを無理やり探し出して、突破しようとしたり様々なものを奪い合い、暴力と報復の連鎖が続いています

——それはボクが望んだモノでは決して有りません

——そしてあくまでもプラントは一つの国家です

——正式な手続きを経た入国は歓迎しますが、不法な入国を推奨していません

——あなた達は、所属する共同体の法律とルールに従うべきです

——自分の思い通りにプラントへの入国の許可が国が出さないからと言って

公務員の人達や……軍や警察、それにヒーローの人達を攻撃するのは止めてくださ

い

——そんな事をして、なんの解決にもなりませんから

——大事な事なのでもう一度言います。

——あなた達は、所属する共同体の法律とルールに従うべきです

——そしてもう一つ、重大なお知らせが有ります。

——ボク達プラントは本日より一時的に、地上からの入国を停止いたします

——既に地上の国家でプラントに入国を許可している国は一つも有りません

——この状況でゲートを設置し続けるのは、意味が無いと判断されました

——これはプラントの最高評議会で決定されたことです  
選挙で選ばれた議員による討議の末の結論です

ボクは民意を最大限尊重しないとイケません

よつてボクは最評議会の結論に従い、ゲートを封鎖いたします

——……ボクは世界が今より安らかで優しくある様に

——あなた達がどうか過ちを犯さないように、祈り続けます

——どうか地上の皆様、武器を捨て、よく話し合い、賢明な判断を出されるようお願い

いたします

——プラントへのチャンネルはいつでも開いています

——ボクはいつでも、いつまでもお待ちしておりますから

……

……

……

ゆつくりと意識が覚醒していくのを爆豪は感じる。

そして目をカッと見開き上体を起こした。

いつもと同じすっかり見慣れてしまった天井が目に入る。



固いベッドの感触にもだいぶ慣れてきた。

「ちっ、だいぶ湿ってやがる」

だいぶシートもじめじめして気持ち悪い。週一回のシート交換は今日だから今日の夜にはマシになっているだろう。

もつとも共同生活の場で文句を言っただけはいいからいられない。

爆豪とて弁えるべき場所では弁えている。

ここはヒーロー達の基地だ。ここでは様々なヒーロー達が、共同生活を営んでいる。ざつとここに居るのは100人ほどだ。

無機質な人工物の箱の中、政府から半強制的に集められている。

プラントという国家が宇宙に作られて、治安が悪化した地上ではこういうヒーロー達の基地があちこちに作られていた。

日本だけが特別なわけでは無い。

こういう施設は都会の方に集中して作られている。

田舎の方からも都会のこういう施設に収集されて、強制的に従事させられている人もいる。

当然田舎の方は手薄になる。今では田舎はとも住めたものじゃない治安になっている。

ハッキリ言えば敵の天下ツイランになつてゐる。

政府は守る街の選択と集中を迫られた結果、地方は見捨てられたのだ。

その結果食料の確保に手間取つて居たりするらしい。

全く何をやってゐるのだろうか。

「おはようー！」

「おはようございませすー！」

考え事をしてゐる間に廊下を通り抜け、食堂の方に来ていた。

今日も食堂は混みあつてゐる。いつものように爆豪はカウンターからお膳を受け取るための列に並んだ。

「はいよー！」

「うす……！」

お膳に乗つてゐる朝食はとても豪華とは言えない。

小さい茶碗に盛られた白米に味噌汁。それときんぴらごぼうに卵焼きが2キレ。

きんぴらごぼうなんて小皿にちよこんと載つてるだけだ。これなら一口で食べてしまえる。

爆豪は朝は食べる方だったが、ここでの生活では前よりも食事は減つた。

もちろん出されたものは全部食べてゐる。

ただ出てくるものが少ないだけだ。

「……………いいか」

適当な空いている席に腰かける。

向かい側にはこれでもかという程体を鍛え上げた大男がいた。

彼は既に半分は食べ終えている。

正直別の席にしようかとも考えた。非常に男の体温が高く、暑苦しいからだ。

だが他の席はここから見える限りではほとんど埋まっているし、爆豪はここで食べる事にした。

まだご飯と味噌汁からは湯気が立ち上っている。

質素な食事でも、せめて冷めないうちに食べてしまいたい。

「いただきます」

誰にも聞かれることも無い食事前のあいさつをして食べ始める。

ちらつと眼の端に飛び込んできたテレビには、青石ヒカルの姿が映っていた。

「ちっ！」

向かいの席で食べている大男がテレビの青石ヒカルに不快感を示し、舌打ちをする。

男の口から飛んだよだれが、爆豪のお膳の味噌汁にぴちやんと入り跳ねた。

一気に食欲がなくなる爆豪だが、当の大男は気付きもしない。

画面の中に居る青石を、親の仇のような形相で睨みつけている。

「——おい、テレビ音量上げろ！」

やおら大きな声を誰かが出した。

爆豪からはテレビの音は小さすぎて聞こえない。だが誰かがリモコンを操作して音量が上がっていく。

やがて爆豪が聞こえるぐらいの音にまで引き上げられた。

『ボク達プラントは本日より一時的に、地上からの入国を停止いたします』

爆豪は己の耳を疑った。

テレビの向こうの青石はマイクの前で原稿を涙を堪えながら読み上げている。

テレビは何度も青石の映像を繰り返し流していた。

そしてテロップが画面にでかかどと表示されている。

青石ヒカル涙の会見、プラント入国受け入れ一時停止へ！

食堂のヒーロー達は映像に釘付けになっている。そして少しずつぎわめきは大きくなっ  
ていき、やがて大きな歓声へと変わっていった。

「やったやったぞ！」

「やりましたね俺達！」

「粘り勝ちですよ！」

「これで敵ヴァイラン 共もちったあ大人しくなんだろう！」

「……は？」

周囲のヒーロー達のお祭り騒ぎっぷりを、爆豪は冷やかな目で眺める。

そんな中でミッドナイトが近くに来て爆豪に耳打ちした。

「気を付けなさい。……きつとこれから大きな波が来る。ヒーローも国家も、何もかも壊してしまうような大きな波が」

「そんなぐらい少し考えりや分かんذار。むしろあいつらは分かかってねえのか？ 正気か？」

「分からないし、分かりたくも無いのよ。きつとこれで良くなるって思わないとやってらんないのね」

「……」

「そうそう、後で一一緒に所長室に来て。所長が爆豪君を呼んでたのよ」

「俺を？」

「多分雄英絡みね。……何にしても、爆豪君気を付けるのよ」

「……言われるまでもねえよ」

爆豪は最後に残った味噌汁を嘔みもせず一気に飲み干す。そして急いで水をごくごくくと飲みこんだ。

向かいに居た大男は気付けば遠くのテーブルの知り合いと肩を組んでいる。実に幸せそうな顔をして笑っていた。

遠くのテレビには相変わらず青石ヒカルが大写しになっている。

彼女は顔を俯かせ、静かに涙を流していた。

……

……

……

陽光が穏やかに降り注ぐ。水やりで塗れた花の水滴がきらりと眩しく光った。

窓の外をオールマイトこと八木俊典が見る。視線の先ではエリとシアンが、花壇の脇で何かしている。

たぶん花壇の草花の世話をしているのだろう。

エリの横顔は遠くからでも柔らかく、笑顔に溢れていた。

「ふむ……やはり不味いな」

目の前の男が一つ眩きを漏らす。

彼はギルバート・デユランダル。

アメリカの元副大統領であり、現在はこの国の。彼の視線の先に有るのは立体映像

だ。

現状の地上の様子がデータとして様々な形で送られてきていた。

「相変わらずですか、地上は？」

オールマイトが、ギルバートに問いかけた。

「その様だね、いや。むしろ悪くなる一方だよ」

「ちっ……はあやはりか」

隣に居る相澤が大きいため息をつく。

彼らが居る場所は、宙に築かれたスペースコロニーを拠点とする国家“プラント”だ。

青石ヒカルの依頼を受け、世界中の科学者や技術者が集められたった一年で作られた国。

だがその国力は、地上のどの国をも上回っている。

青石ヒカルの個性の恩恵を十二分に受けられることにより、科学技術も日に日に進んでいる。

今までは理論上でしか作れなかった物質も青石は作れる。

どんなに施工が難しい精密機械でも、設計さえ終えているのなら一瞬で青石に作ってもらえる。

食料や水の心配もない。青石が作り出した“影”は、あらゆる必要な生活物質を生み出して与えている。

医療面すらも完璧だ。

今までは根本的に治療不可能だった難病すらも、青石の手にかかれば治せないものは無い。

当然死者の一人も居ない。

ここはこれまであらゆる社会に付きまどってきた諸問題を、ほぼ完璧に解決した社会。

完成された世界だ。青石の個性により監視と管理されているという点を除いてはだが。

だがその監視も普段意識することもあまりない。

青石の個性はプライバシーに配慮して、人々から気付かれないように身を隠している。

だから実際に青石の個性の尖兵である“影”を目撃することなど滅多にない。

やがてギルバートが口を開く。

「ところで彼女はやはり？」

「部屋で一人引きこもっている。……今日でもう三日目だ」



相澤の声のトーンが一段と落ちた。普段は冷静な彼も、青石が関わると途端に熱くなる。

「地上の人々へ幾ら声を届けても、こころも効果が無いようではね、無理もないだろう」

ここプラントが天国なら、さながら地上は地獄だろうか。

人類の夢が数えればキリがないほど叶えられる国プラント。

そしてそんなプラントに入りたい欲望を、何とか押さえつけようとしている地上の国家。

国家を運営する人間からしたらプラントに入りたい要望に「はいそうですか」と首を縦に振れるわけが無い。

おとぎ話にしかないような夢の国なら、誰だつて行きたいに決まつてる。

自国に人間が残る筈がない。

そして当たり前だが、人がいなければ国は成り立たない。

だから必然的に国家は国境を閉鎖した。

しかし、人々はプラントに何としても入国したい。

これで争いが起きないわけが無い。

オールマイトが青石ヒカルの顔を見たのは四日前になるが、その時にも表情はすぐれなかった。

何となくオールマイトは一年前の青石と相澤の逃亡を思い出す。

あの時に彼と彼女がとった行動は、正直予想出来なかったわけでは無い。

むしろオールマイトは時間の問題だと思っていた。

青石は誰よりも相澤の事を想っている。相澤もそうだ。

だからオールマイトは彼女達が逃げ出したと聞いた時、もう二度と戻ってこないのではないかと思っていた。

青石には力がある。何にも頼らず、己の力のみで生きていくことが出来る。

実際に彼女は、現在5000万人に及ぶプラント国民の生活を一手に引き受けて支えている。

愛する人とだけで生きていく決断をしても、おかしくないと思っていたのだ。

だが彼女は戻ってきた。

そして空の上に国を作り上げた。誰もが安全で豊か、そして幸せに暮らせる世界を作って見せた。

そして、地上の人々を招き入れようとした。

しかしオールマイトは、彼女は人々を見捨てて愛する者達とだけで生きていく。

そんな選択をした方が良かったのではないか。そんな気がしてならないのだ。

「まああまり気落ちしないで頂きたいが、そうもいかないかね」

「……どうして最高評議会はあんな結論を下したんです?」

「正直なところ色々複雑な事情があつてね。実際議会では紛糾したもののさ」

「入国受け入れ停止などと……。地上はヒーローが勝つた勝つたと浮かれ騒ぎ、一方敵は日増しに増えている。」

学徒動員なんてものが未だに横行しているらしいじゃないですか。

完全に火に油を注いだ形になつてるでしょう」

現在、プラントは地上からの移民を受け入れていない。

地上からプラントの“空港”に行くためのゲートは全て消滅している。

もつともそれより先に、地上の国々は全てゲートを閉鎖していた。

色々な問題が一気に発生しすぎ、とても対処が追い付いていないらしい。

だから地上の国々は建前としてはあくまで一時的な出国停止措置を取つている。

あくまで“一時的”と建前に過ぎないこの言葉を強調して広めているとのことだ。

本音ではずっと、プラントへの出国を認めるつもりは無いのだろう。

「私だつて一律で入国を停止するのはやりたくないさ。だが、仕方がないだろう?」

先にプラントへの入国を規制したのは地上の国だ」

ギルバートの言うことは分かる。

青石ヒカルが国家として掲げている方針の一つは、“来るもの拒まず、去るもの追わ

ずだ。

去るもの追わず、これはわりと簡単だ。

プラントに来たいのなら来ればいい。

ただしそこで生活する以上は、プラントの法律やルールに従ってもらおう。

そして気に入らなければ出ていっていい。

実際ごく少数だがプラントの生活が肌に合わなく、地上に戻った人間もいる。

必ずしもプラントに留まらないといけない、というわけでは無いのだ。

しかし今問題になっているのは、来るもの拒まずの方だ。

青石ヒカルは世界中の国々に、入国するためのゲートを設置した。

だがその詳細な位置や情報は、それぞれの政府に教えるに留めた。

実際オールマイトはその判断を支持している。

やみくもにゲートを設置したりすることで、国の知らない間に国民がプラントに勝手に流れたりしたら大問題だ。

あくまでもプラントは宇宙に拠点を構える一つの国。

青石ヒカル自身に地上の国に危害を加えたり、侵害する意思は全くない。

プラントに入る前にはあくまで、地上では地上のルールに従うべきだ。

彼女はそう考えている。

だからこそプラントに入るためのゲートの管理は、それぞれの政府に任せているわけだ。

きつとうまく利用してくれると信じていたのだ。

今回それが仇となってしまったのだが。

「地上の国は一体いつまで続ける気なのでしょう？」

「さて、ね。こちらとしてもシミュレーションは幾つか用意しているが、ハッキリとしたことは誰にも分からないよ」

それはその通りだろう。

人は多かれ少なかれ予測は立てる。だが未来の事なんて結局誰にも分からない。

分からないから、何が起きても大丈夫なように備えをしておくことが大事なのだ。

だが今回のプラント建国からの一連の流れは、予想していた中では最悪に近いものだった。

きつと青石ヒカルも全く予想していなかったわけでは無い。

それでもきつと受けた衝撃は計り知れないものだったのだろう。

「今は地上の人々を信じ、様子を見守るとしよう。それが我々最高評議会が出した結論だ」

青石ヒカルの願いは純粹で綺麗なものだ。

人の為に誰かの為に。その為に人々の願いに最大限に配慮しつつ、だからと言って己の力で無理やりねじ伏せることは避ける。

だからプラントを作つて、人々に選択できるようにした。

オールマイトから見たら間違つているようには思えない。

プラントへ行くためのゲートを国の管轄下に置かせたのも間違つてると思えない。

だが、結果として混乱を避けることは出来なかつた。

地上の人々はプラントに行くことが出来なかつた。

現在プラントに居る5000万人の人々。それらは建国に関わつた科学者に技術者に専門家。

その他は抽選で選ばれた人達である。

地上にいるプラントに移住を希望している大多数の人達は、未だに置き去りのままだ。

だが、地上のことは地上の人々が解決するべき問題でも有る。

(しかし……このまま放置して良いものなのだろうか?)

オールマイトの中で嫌な予感がどんどん膨れ上がつていった。

## 第90話

父が死んだ。

ウイラン  
敵の爆弾によるテロ攻撃を受けたらしい。

傍には学徒動員で同伴していたヒーローも居たが、どうにもならなかった。

どうかまだ学生であるそのヒーローの責任は追及しないでくれ。

そう告げられた娘はただ一言「そうですか」と呟いて、俯くだけだった。

韋田天（いだ あまつ）には母親が居ない。

母は天を生んだ時に亡くなったと聞いている。

母さんのことを父に聞くと、もの凄いヒーローだったんだぞって自慢げに話をしてい

た。

雷雲を呼んで雷を自在に落とすことが出来る個性だったらしい。

その個性“天雷”は娘の天にも、遺伝し引き継がれた。

父はいつも「お前はお母さんの生き写しだよ」とよく口にしていた。

怒られた時には本当に物理的な意味で、いつも雷を落とされていたらしい。

父親の颯太（そうた）は男で一つで、娘を高校生になるまで育ててくれた。

父の韋田颯太（いだ そうた）はヒーローだ。

とても努力家で真面目な性格だった。

個性だつてそんな大したものじゃない。

精々100メートルを9秒台。本気を出せばほんの一時だけ7秒程で走れる個性。

足が常人よりは早い。ただそれだけの個性だった。

見た目は全く無個性の人と変わらない。

<sup>ヴィラン</sup>敵を倒したり、捕まえた数も本場に少ない。

それでも現場では色んなヒーローのサポートをして活躍してた。

ほんとうに徹々たる力で、誰の記憶にも残らないような地味な人だったけれども。

彼女の天<sup>あまつ</sup>にとっては誰よりも大切な父親で。唯一の肉親で。

誰よりも凄くて、世界で最高のヒーローだったのだ。

「……父さん」

天<sup>あまつ</sup>は2か月ぶりに父の顔を、棺桶のガラス越しに見た。

遺体の保管施設がある雄英の地下は、凍えるほどに寒い。

父の顔は今にも起き上がるのではないかと勘違いするくらいに、とても穏やかだつた。

けれど、それはもうあり得ない。



もう二度と、その手が天の金の髪を撫でてくれることはない。

父の棺桶から隣を見るとまた棺桶がある。その隣も、またその隣も。

おびただしく運び込まれている死体は山となっている。

今日もまた何処かで誰かが死んでいるのだろう。

ヒーローが敵が。病人が怪我人が、老人が若者が。

不慮の事故で、悪意や殺意の元で。

嫉妬で、恨みで、妬みで、怒りで。

いちいち数え切れないほどの原因で、死んでいるのだろう。

人にはそれぞれに、それぞれの人生がある。それぞれの物語がある。

あまりにも巨大で複雑になりすぎた世界の全てを把握するのは、人間には不可能だ。

だから人間は、自分にとって必要な情報と必要でない情報を区別する。

なるべく構造を単純なものに置き換えて、理解しようとする。

この世界の何処かで知らない誰かが死んだとしても、知った事ではない。

だってそうしないと生きていけないから。

いちいちそんなことに反応していたのでは、キリがなくなるから。

そんな風に生きていられたし、それを当たり前だとそう思っていた。

けれども、こうにも死体が目の前に突き付けられると、途端に無視できなくなる。

なぜこんな現実を今まで見ないふりを出来たのか、分からなくなる。

1000の死者数もテレビで聞くと、ただの数字だ。

だが目の前に1000の遺体を見せつけられると、それが生々しい現実として脳に入り込んでくる。

心に痛みをもたらしてくる。

頭だけで理解するということと、体験わかするということは。

こども違いを生み出すものなのかと、思わずにはいられない。

天あまつの父の颯太そうたが亡くなった日。

他のヒーローも何十人も死んでいた。

彼女は一年前のテレビを思い出す。雄英校門前での。青石ヒカルと麗日との会話。今ではネット上に出回り続けているその映像で、青石ヒカルはこう言っていた。

人は死んでいる。日本だけで3千人、全世界だと15万人。

これはたった1日の死者数だ。

頭では理解しているつもりだった。

でも、全然分かってなどなかった。

あの日、父は数字になったのだ。

戦いに負け、死んだヒーローの一人。“1”という数字。

例え天あまつにとってかけがえなく、唯一の存在であつたとしても、世間はそうではない。

彼らからすれば、犠牲になつたヒーローの内の1人に過ぎない。

“1”という数字でしかない。

今日もまた死んでいる。人がどこかで、また死んでいる。

彼女にとって、そうであつたように。

他の誰かにとって大切な存在であつたとしても。

こんなにもちつぽけで、無機質で、まるで意味のない数字に変換されてしまう。

たつた“1”されど“1”。

だが彼女にとってその“1”は……。

他の人間の幾万の命より、ずっと重たいものだつたのだ。

「もうすぐで時間になります。退室をお願い致します」

コツコツと背後で足音がした。

かけられた声に振り向くと、黒い修道服をまとつた一人の少女が居た。

彼女の瞳に光は感じられない。あまりにも濁り淀み、疲れ切つたその目には、きつと何も価値のあるものとして映つてはいない。

その顔を見て、天あまつの中の理性が役割を放棄した。

忘れなどしない。さんざん見てきた顔だから。

あの時、あの場所で、彼女さえいなければ。

彼女が余計なことさえ言わなければ。

神様のような青石かヒカルのが、全てを助けてくれていたのに。

父は死なずに済んでいたのに。

どうしてこんな奴がのうのと今まで生き残っているのだ。

「麗日……お茶子……」

金の髪が紫電を纏い逆立った。握りしめた両手に力と雷が宿る。

拳を振りかぶり、一切の容赦なく彼女の顔に目掛け叩きつけた。

だがその手も突如として飛来した羽に妨害されてしまう。

「なに!？」

視線を麗日の後ろに向ける。影がバサツと音をなびかせて飛来する。

あまりにも見覚えの有る姿だった。

赤い翼から分離した羽。それらを自在に操る“個性”剛翼。

「ウイングヒーロー……ホークス……!」

「駄目だよ? 女の子がそんな暴力振るっちゃ」

「黙れ! あの時こいつが余計なことと言って青石さんを惑わせたから!

……こいつさえいなければ！ 父さんは死なずに済んだんだ！」  
テレビの画面越しではカッコよく見えた余裕のあるその顔が、今では非常にイライラさせてくる。

心が、火山の底で噴火を待つマグマのように熱くなる。

父は死んだ。この麗日が余計に青石ヒカルを止めたせいで。

父だけではない。世界中で多くの人が、日々死んでいる。

それはずっと昔から、延々と繰り返されてきた世界の理。

どうしようもない運命だった。

だが今ではそれを解決してくれる存在がいる。

青石ヒカルという救世主が出てくれた。

空の向こうで彼女は、望むのなら夢のような世界に来て、もう良いと言ってくれている。

今の腐った世界とは全然違う世界。

困難と不条理に溢れたこの世界とは、全く違う日常を与えてくれる。

死も病気もない、ヒーローも敵も居ない世界。<sup>ツイン</sup>

誰もが満ち足り、幸福に生きられる世界を青石ヒカルは作り出した。

そこに来ても良いと言ってくれている。

いや、正確には言っていた。

なのにヒーローが邪魔をする。

誰もが幸福で生きられる世界に、ヒーローは要らないから。  
ライオン敵が一人も居ない世界など、ヒーローは存在できないから。  
 だから邪魔をする。

誰かが苦しみ続ける世界を作り出し、維持し続ける。

「……」

「何か言えよ！」

「……」

「言えって言ってんでしょ！ 落ちろ！ 神雷！」  
カムイラン

「おっと」

自身の個性の力全てを注ぎ、麗日の頭上から雷を落とす。

だがそれも悠々とホークスに防がれてしまう。

(何で？ こんなちっぽけな羽で止められたの？)

何をされたのかまるで分からなかった。

焦げた羽の匂いがつんと鼻をつく。およそ戦闘のプロとは程遠い民間人の彼女には、

プロヒーローのホークスの技術を見破るなど不可能だった。

天は持つて生まれた個性は中々の強さは有るが、別に鍛えてはいない。

既に今放った攻撃で、スタミナが切れてしまった。  
もう攻撃は出来ない。

「ひゅーやるねえ。もしかして個性のポテンシャルはトップヒーローレベル？」  
飄々としているホークスが憎々しい。

こんな事になるのなら、日頃から鍛えておくのだったと後悔する。

天は父親の反対があり、ヒーローになる道を選択肢として視野に入れていなかった。  
個性を鍛えることも禁止されていた。

それを疎ましく思ったことも有る。

だがこうして父親がいざ死んだとき、きつとそれは優しさだったのだろうと気付いた。

けれどもその優しさが仇になる。

力を振るう事に躊躇ためらいを持ったがために、青石ヒカルはこの世界を混乱に陥れた。  
力を持つことを恐れたために、天は親の仇に手が届かない。

「何か言えって言ってるでしょ！」

「……めんなさい」

絞り出すように麗日は口に出し、そのまま背を向けていつてしまった。

呆然とその場に天は一人取り残される。

広い遺体安置所にはまばらに遺族たちが見えた。

嘆き悲しむ声が遠くから聞こえてくる。

この世にあるもつとも苦しい形の一つ、“死”がこんなにも溢れている。

天はよろめきながら父の亡骸の元に座り込む。

「あれ……？」

さつきまでは一滴も出ない涙が次々に流れ出してきた。

止めようと思ってもどうしようもできず、後から後から湧いてくる。

自分ではどうしようもなかった。

そして彼女は父の眠る棺に縋りつき、泣き崩れた。

後ろで見守る“影”に気付きもしなかった。

……

……

……

夢を見ていた。

もう長い長い夢だ。

何度も何度も、戦ってはやり直し。



戦っては生まれ変わる夢。

正確には、シミュレーション夢。

ソフトウェア、A z u r i t e “アズライト”の作り出した仮想世界。

そこで繰り返される もし i f の世界。

緑谷は、立ち向かう。

夢の中、生まれ変わる度努力して、力を付けて強くなり。

再び人類を救うため、彼女に立ち向かう。

何度も、何度も終わりを体験した。

ある時は、人類が核戦争に及んだ。

ある時は、人々が青石の独裁に立ち向かい命を散らし。

ある時は、青石自身が人類を虐殺した。

数え切れないほどの終わりを体験したけれど、どれにも希望など残らない未来だけだった。

もう、終わりが近い。

もうすぐで、夢を見ていられる時間は終わる。

もうすぐで、現実に戻らなければならない。

けれども緑谷は一度たりとも、青石に勝てたことがない。

そうしてまた、緑谷は青石に戦いを挑んでいた。

「あは……あはは……アハハハハハハ！」

青石ヒカルの虚ろな目が緑谷を静かに捉えている。

緑谷は拳に力を入れることなく、彼女の目を無言で見つめ返した。

彼女のまとう白のワンピースは、血に汚れ乾きを繰り返し赤黒く染まり切っていた。

「最初っからこうすれば良かったんだ。」

何もかも力尽くで、ねじ伏せちゃえば良かったんだ。

だって仕方ないよね？ 君たちが言葉を聞かないんだから。

ねえ何か言ったらどう？ ボクはねついに手に入れたよ。

戦いのない世界を、皆が幸せになれる世界を。

ヒーローになんてならなくて済む世界を。

ヒーローも敵も。<sup>ザイラン</sup>みんなみんな殺しつくしてねえ！」

彼女が壊れていく姿を見るのは、これで何回目になるのだろう。

何度繰り返して、何度手を伸ばして、何度裏切られ。

絶望を乗り越えて、努力を重ね、およそ選択しうるであろう選択肢を全て試した。

なのに、届かない。まるで変わらない。

「あとは君だけだね、緑谷君。君を殺してボクは理想の世界を作って見せる」

「ぐっ、やられてたまるかよー！」

(思考速度、身体速度を50万倍に定義！)

アズライトの力を使い、この世の理を捻じ曲げる。

緑谷の脳内の計算力を用いて、現実をシミュレーションに同化する。

世界を自らに都合の良い物理法則に捻じ曲げ、緑谷は青石に向かつて拳を向ける。

けれども

「遅い」

あまりにも重たく早い一撃が緑谷の鳩尾に食い込んだ。

「ぐっ!？」

苦悶の声を吐く緑谷。胃から湧き上がる血をグツと吐き出さずに何とか飲み込んだ。

彼女はそんな緑谷を見てケラケラ笑っている。

これでも手加減してるんだよ、と視線がそう言っていた。

今の緑谷の速さは通常の50万倍、これが緑谷の今現在出来る最高の速度。

全盛期のオールマイイトすら悠々と置き去りにする疾さ。

それなのに彼女の前ではまるで通用しない。

もう数えきれない時間をこの空間で過ごした。

普通の人なら人生の全てを注ぎ込んで足りない程の時間。

幾百、幾千の時が流れた。

それでも足りない。

彼女は、生まれながらに最強としてあるべく作られた。

人の為、誰かの為に。

人類を救うため、スターレインと言う未曾有の天災に対抗できる存在として作られた。

ただの一般人の緑谷とはその出生からして違う。

青石ヒカルは、次元を超えた才能を生まれながらに持つている。

例えば人が努力しても、短距離走でチーターには叶わない。

ゴリラと腕力で張り合うことは出来ない。

才能と言う生まれつきの天からの贈り物ギフトに、人が抗う術はない。

努力という後付けの力だけで抗うには、あまりにも高い壁がある。

それを認めたく無いから、人は努力を崇拜するのもかも知れない。

成功した人はすべからず皆努力している。

それは当たり前の話だ。

努力とは最低条件だ。

何かを成し遂げる際に、何かを手に入れる際に、支払う代償のことだ。

そう、確かに青石ヒカルだって努力していた。

だが青石ヒカルと同じ努力をしたところで、同じ強さを手に入れられることは無い。ある程度の水準までなら、大抵の人がたどり着ける境地と言うものは確かに存在する。

だが最終的に頂点にたどり着くためには、才能と言うものが絶対的に必要なのは事実なのだ。

——僕がどんな努力をしても手に入れられないものを、皆は生まれつき持っていたんだ

——才能とは、そんなものじゃないんですか？

いつか誰かと交わした会話を思い出した。

そうだ、世界は最初からこうだったじゃないか。

緑谷は無個性の頃の自分を思い出す。

あまりにも理不尽だと思った。どうして自分は無個性なのだろう。

そう思つて時には無個性に生んだ親を恨んだことすらあつた。

だけど、仕方じゃないか。

どうしてあの人間の屑のような爆豪に神様は個性を与えて、自分には与えてくれなかったんだ。

どうして、どうして、どうして。

だけど、恨むばかりじゃどうしようもない。

現実も見えないといけない。折り合いを上手くつけないといけない。

そんなことは分かった。

だけど、憧れてしまった。夢を見てしまった。

オールあんな風マイトになりたいって。

あんなカツコイイ存在になりたいって。

そう、自分は最初から人の為に誰かの為になりたい。

そう思ってたわけじゃない。

ただ、人を助けるという行為が格好いいと思ったから憧れただけ。

それは純粋な人を救いたいという意味じゃない。

人を助けたいという心と、人を助ける格好いい存在でありたい。

それはイコールでは結ばれない。

緑谷が思ったのは 純粋な人の為じゃなく、あくまで憧れたものになりたい自己実

現。

そんなこと分かってる。だけど仕方がないじゃないか。

憧れてしまったんだから。

夢を見てしまったんだから。

それが例え醜くても、夢を見てしまったものは、力尽き果て終わるまで……

「じゃあね緑谷君、さようなら。ボク達は止まらずに進み続ける。」

君たちの屍を超えて、更に向こうに！」

彼女の手に握られた黄金の剣が緑谷の胸を貫いた。

「止まれないんだよ！」

「っ！……なに!?!」

緑谷は己を貫いている黄金の剣を拳で叩き割る。

舞い上がる剣の破片の一つを握りつぶし、それらを散弾銃のように打ち付けた。

「くっ！…… 姑息な……やるようになったね緑谷君！」

「傷一つない癖に！…… 嫌味にしか聞こえないんだよ！」

折れた剣を引きぬいた。途端傷から気が噴き出す、次の瞬間結晶に覆われて傷が癒える。

緑谷は再び拳を握りしめた。

大地が抉れ、大気は泣き叫ぶ。

地球と言う星の許容範囲を大きく超えた戦いは、プレートとの崩壊を引き起こす。

やがて緑谷の体に青石の拳が深々と刺さり、緑谷は血に倒れ伏した。

「ボクの勝ちだね、デク君」

（クソ……また負けたのか）

激痛と共に意識が闇の向こうに落ちていくのが分かる。

（ああ、また繰り返すのか）

今回も緑谷は勝てなかった。

次の人 シミュレーション 生こそ上手くいくのだろうか。

これは、夢だ。

緑谷出久が青石ヒカルに敗れ、記憶を失い、そしてまた昏睡した。

また意識が戻るまでの間に見える夢だ。

無料の闇の底に緑谷は放り出された。

完全な闇のなか。光源一つ見当たらないというのに、自らの手足は見える。

地面はただ概念としてのみ存在していて、緑谷はその地面に拳を叩きつけた。

「糞！」

そんな緑谷の前に、闇の向こうか一人の男が姿を現した。

眼鏡越し鋭い眼光は、なんの容赦なく緑谷を見据えている。

「立て緑谷。時間はもうない。現実へと戻らなければならぬ時間は迫ってきている」

「……猶予はどのくらい有りますか佐々木さん」



佐々木と呼ばれた男はクイと眼鏡を手で押さえる。

「あと2、3回繰り返し返せればいい方だろう」

「佐々木さん、あなたが見た未来はこんなにも絶望に溢れていたんですか？」

佐々木未来。生前オールマイトのサイドキックを務めた事も有るプロヒーロー。

個性は“予知”。

未来を知る事が出来る個性だ。

だがアズライトの引き起こした災害に巻き込まれ、佐々木未来は昏睡病を発症し息を引き取っていた。

「……あの子の未来を見た事はない」

「本当に？」

「見えなかったんだ。いや、正確に言えば見えはした。

だがあの子の未来は幾重にも重なっていて、見ても理解が出来なかったんだ」

「……今更ですけど、あなたはなんでこうして僕と話が出来るんですか？」

「……言っていないかったな。あの災害により世界中にアズライトが散らばった。

その中に人々の意識と個性が吸収される形で、人々は昏睡状態に陥ったんだ。

そしてお前が出会うアズライトに集約した」

「じゃあ……」

「お前の中には10年前の青の世界。それで失われた数千万の人間の魂と個性が宿っている」

「なっ!?! 滅茶苦茶重要じゃないですか! なんて教えてくれなかったんですか!?!」

「……それらの人々はもう、復活など望んでない。お前に打ち明けて、復活させようとする動するのではないかと心配で秘密にしていた。

個性だつてそんなに使いきれぬものじゃない。過ぎた力は身を亡ぼすだけだ。

既に私達は死んだ人間だ。お前が自分達の為に死ぬことを喜ぶ人間などいない。

……間違つても数千万の個性を使えこなせたのなら、青石に勝てるなんて思わないことだ」

ギクツと緑谷はして慌てて顔を知らんぷりをする。

佐々木はふつと優しい笑顔を浮かべる、が一瞬でもとの顔に戻る。

彼が暗闇の向こうを凝視すると、そこから一人の女性の輪郭が浮かび上がった。

「悪い知らせよ」

暗闇からもう一人の亡霊が姿を現した。

翻る黄金の髪が眩しく光る。セルリア・セレストライトが曇った顔を見せる。

「もう、繰り返すことは出来ない。シミュレーションはここで終了よ」

「あと一回出来ないのか? あと少しで何か掴めそうなんだ!」

あと一回」

「無理よ、もう」

「あつ……」

セルリアの姿が少しずつ霞んでいた。彼女は緑谷を修復するためのバックアップログラムだ。

役割を終え次第、消えて居なくなる。

今見えているその姿が儚く、今にも消えそうなのは、つまりそういうことなのだろう。

「そっか、うん。……ありがとう、お疲れ様」

「良いわよ別に、それに……強くしたのはあくまでオマケだったから」

「えっ!？」

「……時間ね」

一気に暗闇が薄れていく。光があちこちから溢れ出してきた。

あまりにも眩しすぎて目がくらむ。

光の向こうから彼女たちの声と気配だけが伝わってくる。

「本来緑谷君はもつとはやく目覚める事は出来たの！」

でもそうはしなかった。あなたを強くしたかった。それはあるけど、本当は別の理由が有るからの」

「それは何!？」

セルリアの張り上げた声に緑谷も大声で返す。

「理由っていったい!？」

「青石ヒカルという人間をあなたに理解させたかった。

何百回、何千回も彼女が滅ぼす世界を見てきたあなたにしか出来ない事が有る筈だから!」

「でもこれは夢で! ただのシミュレーションだろ!？」

「忘れたか緑谷。これはただの夢じゃない」

佐々木未来。ヒーロー、サー・ナイトアイが落ち着いた声で緑谷に語り掛ける。

「ここはアズライトで作った世界だ。

現実を空想に同化させ、なおかつ現実を破綻させない程の再現性を持った世界だ。

素粒子単位で世界を演算している仮想現実。お前が思っているシミュレーションとは次元が違う。

アズライトによるシミュレーションは、現実と同じ濃度を持っている」

「つまりそれって?」

「前にアズライトと一緒に訓練したことがあつたでしょう?」

あれと同じ。あなたにはもう、実際に数千年の経験が実際に宿っているの。

実際に現実を体験したことで、あなたにとっては何の変りも無いの」

「それなら……青石さんにも勝てる……?」

「だが忘れるな緑谷、お前が為すべきなのは青石を倒すことじゃない。

それはもう、誰にも出来やしない」

「ならどうすれば!?!」

「彼女の本当の望みを叶えさせてやるんだ。

……いや、正確には叶っているはずだが、それを理解させてやることだ」

「だからどうやって?! 何を!?!」

「彼女が願っている一番の願い、それは……人の為に誰かの為にではない」

「はあ!?!」

今まで青石ヒカルと言う人間の根源を否定され、緑谷は困惑した。

青石ヒカルという人間はそうではないのか?

人の為に誰かの為に、だからこそ行き過ぎて世界を滅ぼすほどにまで至る。

だが、違うと言うのか。

「分かっている筈よ緑谷君。既にもう、あなたはその事を知っている。

ううん、あなただけじゃない。皆、その事を知っている!

あの子が一番幸せそうにしてる瞬間を思い出して!」

「……相澤さん? ……いや、そんなまさか。そんなのあまりにも」  
セルリアは頷いた。

「なのに、彼女だけがそれを拒んでいる。受け入れたらいけないと思っ  
ている」  
「だからどうして!?!」

「話し合つて、お互いに気持ちをぶつけ合うの。それしか道は無い。互いに分かり合  
わないと、本当の未来は来ない」

「なんで僕なんですか?」

「そんなの、ヒカルに聞いてよね。あと! 起きた時アズライトの力は戻つては  
はずだ  
けど、彼女は傍に居ないから! ちゃんと返してもらおうのよ! ヒカルにあなた  
のアズ  
ライトをね! 名前だつてちゃんと付けてあげないと承知しないんだから!」

「世界の未来を頼んだぞ、緑谷」

「……勝手なことばかりごちやごちやと」

彼らの声は光に包まれたまま、やがて聞こえなくなつてしまつた。  
光の中で緑谷は目を閉じる。

眩しすぎてまぶたの裏に光を感じた。目を閉じているのに、開けている時と同じく  
ら  
いにも明るく感じる。

——君と分り合いたいんだ

青石の言葉が白む景色の中で思い出される。

どれ程の力が自分についたのか、正直緑谷は自分でも怖いくらいだ。それでも青石には勝てないだろう。

だけど、自分の言葉や意思を届かせるくらいなら出来るかも知れない。

(会いに行こう。そして迎えに行くんだ、待っててよ、今そこに行くから)

緑谷は光の向こうに手を伸ばした。

光はどんどん強くなっていく。

やがて現実と認識するだけの感触が体に戻ってきた。それはさながら光の祝福を受けているような感覚だった。

「おかえり、緑谷君。遅いよ……本当に。待ってたんだから」

目を開いた時に真っ先に目に飛び込んできたのは、泣いている青石の顔だった。

(いきなりだなんて……本当に青石さんは)

もしかして自分が起きる前兆を察して飛んできたのではないか。

いやもしかしてもそうだろう。青石なら容易いことだろうし。

心の中の何処かに有ったはずの怒りや憎しみも、なんだかどうでも良くなってきた。

「うん……ただいま、青石さん」

「……うん、おかえり」

彼女の胸に下げている二つのロケットが振り子のように揺れる。

それらがぶつかり風鈴のような澄んだ音を鳴らした。

本当に心地が良いと思えるような音だった。



## 第91話

エリはとある喫茶店へと足を運んでいた。

石畳の町はとあるヨーロッパの街の片隅を、そのまま移動してきて作られているらしい。

プラントには所々にこういう場所がある。

地上の歴史ある町や文化財、建物などがコロニーにそのまま移築されていたりするのだ。

午前中に行ったストラホフ修道院図書館もその一つだ。

もつとも図書館などプラントでは使っている人間など殆どいやしない。

大抵のものは望めば手に入る。本だってそうだ。

わざわざ図書館に足を運んで本を借りるなんて面倒でしかない。

何しろ新品の本なんて、電子端末のアプリを少しいじるだけで手元に瞬時に届いてしまうのだから。

勿論エリだって、そんなことは分かってる。

けれどもエリにとっては、不便でも図書館に行つて古い本の匂いに包まれない。

自分を取り囲む多くの本の中から、自分にとつての運命の本を見つけ出す。その過程がたまらず好きなのだ。

電子端末の向こうの人工知能がおすすめてくる本を読むのは、確かに効率がいいかもしれない。

しかしエリはたとえ非効率だと言われても、実際に手に取り選んだという体験が何よりも得難い。

そう感じていたのだ。そうすることでしか得られない体験があると信じている。

「ね、とら丸。帰ったら一緒に絵本読もうね？」

とら丸はエリの腕に抱かれ、歩くたびにゆさゆさ揺れながら眠そうに大きなあくびをした。

「……面倒」

とら丸の顔には、青石ヒカルとならいいと書いてある。

「えっと。お姉ちゃんがそんなにいいの？」

「ご主人以外の人間なんて、塵芥ちりあかた以外の何でもない」

「でもわたしに抱かれてくれているよね？」

「お前に邪険にすると、ご主人が悲しむ。だから大人しくしてやってる。それだけ」

「お姉ちゃんは、特別なんだ」

「そう、特別。お前たちは何億何十億も居る。死んでもいくらでも代わりは居る。

でもご主人様は違う、ご主人様はたった一人だけ。

うん、そう。青石ヒカルは特別」

とら丸はとても変わった猫だ。

エリ自身は猫にそんなに詳しいわけではない。だがエリの目から見たら、このとら丸という猫は非常識が過ぎる猫だった。

まず青石ヒカルにより個性を与えられているという点で、普通の猫であるとはとても言えない。

今はエリも抱くことが出来る普通の猫の姿をしている。

けれどもこの猫、姿をある程度変えられるのだ。

つまるところ変身である。

気分によって姿を変えて人になったり猫になったりするので、家の中でバツタリ会うときも猫だったり人の姿だったりする。

つい昨日は人の姿のまま、エリのベットに入り込んだりしていた。

本当に猫なのか疑わしく感じるときもある。

何しろ猫と言うには、見た目も言動もあまりに人間っぽい。

猫の個性を得た人間と見たほうが、まだしっくりくる。

今胸に抱いているような、純粋な猫の姿になるのは本当に稀だ。

だからエリはこれ幸いとばかりに、わざわざ抱きかかえているわけなのだ。

とら丸は嫌そうな顔をしているが、そこは気にしないことにする。

(嫌われちゃったかなあ?)

「……ふん」

とら丸は鼻を鳴らしながらも、大人しく抱かれ続けていた。とら丸が嫌になったら下ろす。

それはエリ自身が心がけている絶対のルールだ。

エリはとら丸を猫としてというより、純粋に一人の家族として見ていた。

出来の悪い妹が一人いる感覚に近いだろうか。

なにしろとら丸は放っておけば食べて寝るを繰り返すだけなのだから。

まあ猫としてはそれは普通のことなのだ。

エリはとら丸を抱えたまま、ひたすら目的地まで歩く。

そして一軒の家の門の前、とら丸を地面に下ろした。

「ついたねとら丸」

とら丸の顔は、まだむすつとしている。

「ガトーちゃんに会いに行くのそんなに嫌？」

「別に」

とら丸はさらにそつぽを向いた。

傾いた日差しが、柔らかく古い家の石垣を照らす。

今にも崩れそうな石垣の内側の庭には、5000本のバラが丁寧に植えられ、育てられている。

バラは手入れも行き届き、見事に咲き誇っていた。

その家が喫茶店だとは、近隣の住民もほとんどが知らない。

何しろ看板も何も何もない。その家が喫茶店だとわかるものは、外観からは一つもうかがう事は出来ないのだ。

宇宙のスペースコロニーに存在するプラント。その居住用コロニーの片隅にひっそりと存在している古ぼけた一軒家。

喫茶店“サンテグジュペリ”に客は来ない。

その喫茶店は知る人ぞ知る店であって、世の中にほとんどその存在を知られていない。

エリはその入り口のドアをガチャリと開けた。足元のとら丸もすると店内に入っていく。

すると途端に

「ふおおおおお！　なんでなんですか〜〜!？」

一人の怒りと嘆きを含んだ声がエリの耳を揺さぶった。

来店を告げる扉につけられた鈴の音もかき消される。

声の主のほうを見たら、一匹の黒猫がカウンターの上で人間の言葉をしゃべりながら地団駄を踏んでいた。

「やあ、いらつしやいエリちゃん、おや、とら丸ちゃんも一緒だったんだね」

「こんにちは、ローズさん」

「……」

とら丸は我関せずと言った感じに佇んでいる。

「ほらとら丸、挨拶」

「……こんにちは」

「はい、こんにちは」

渋谷と口を開いたとら丸に店長であるローズは柔らかく笑いかけた。

金色の髪が目を引く美しい人だ。

室内だというのには黄色のマフラーが巻いてある。

エリは初対面じゃないのでローズが女性だと知っているが、最初は男の人だと勘違いしたものだ。

それほどまでに中性的な顔立ちをしていて、まるで少年のような印象すら受けた。

「今日はシアンは一緒じゃないんだね、それにヒカルちゃんも」

「はい、今日は一人……いえ、とら丸と一緒に来ました」

「ま、シアンは忙しいからね。仕方ないか」

「それよりも！ です！」

先ほど叫んでいた黒猫が一声上げる。

ひらりとエリの足元に舞い降りすり寄る。

そしてエリにやおおらしゃべり始めた。

「なんでご主人様は一緒じゃないんでしゅか〜？」

「ガトーちゃんのご主人はローズさんだよ？」

「NonNon! 違うんですよ！ わたしのご主人様は青石しやまなんですよ！」

この黒猫はガトー。青石ヒカルに個性を与えられた猫の一体だ。

だが言葉を喋る猫は、エリが知る限り目の前のとら丸とガトーの二匹だけ。

個性あふれる世の中とはいえ、猫が言葉を話すのはとても珍しい光景だ。

「もう何日来てくれないか知ってますしゅか!? 2週間ですよ!」

2週間もわたしを撫でてくれないですよ!?

これはネグレクトでしゅ！ 虐待でしゅ！ ああ、ご主人様早く来てくださしい！」

ガトーはどうも舌足らずである。時折サ行を発音できない様子はどうにも可愛らしい。

ちなみにこのガトーはオス猫で、とら丸はメス猫である。

エリなりにいい感じにならないかなと思ひ、暇があればとら丸も連れてきているのだ。

今のところ全く脈がないのが残念なところなのだが。

「じゃあご主人様は誰？」

「もちろん青石ヒカルしゃまでですよ〜〜！」

ガトーは恥ずかしそうに両前足で顔を抑え、床をゴロゴロと転がった。

「ガトーちゃんのご主人様はローズさんだよ？」

「Non! 違います! 断じてご主人様じゃありません!」

俊敏にガトーは立ち上がる。そしてとら丸の元に寄って行くが

「邪魔」

「ふおおあ!!? とつても痛いでしゅ……」

ガトーはとら丸に強烈な猫パンチを食らっていた。顔面にもろである。

とても痛そうにしている可哀そうだと思うが、ローズはクスクス笑っているだけだ。

「じゃあローズさんは何？」



えへんと黒猫は胸を張る。

「これは只のご飯をくれる人です！」

「ご、これ!？」

「Oui!」

「ご主人を」これ」と言い、そもそもご主人と認識してすらいない。

あまりにも勝手すぎる主張にエリはあきれ果ててしまった。

「ろ、ローズさん良いんですか？」

「いつものことさ」

ローズはそう言つてカラカラと笑う。

「……そう言えばヒカルちゃんはどうだい？」

「……まだ、部屋から出てきません」

「相当シヨックを受けたんだらうね。無理もない」

「……はい」

「何の話でしゆかあ〜〜?」

「猫には難しい話さ。ガトー、おやつあげるから散歩行つておいで」

「馬鹿にしないでください! わたしだって青石しやまに勧められて九九を覚えたんですからね!」

「じゃあ7×7はなんだい？」

「えつと……だいたい50でしゅ！」

この猫が九九を完璧に覚えるのは当分先の話になりそうだ。

……

……

……

雄英の地下には巨大な施設が建造されている。

その事実の一部のヒーローの間にはとっくに知られていたことだ。

雄英地下に建造されている都市一つが丸ごと収まる巨大施設。

循環型閉鎖都市アークロジ。

それは青の少女やスターレインに備え、長年にわたり作り上げられてきた。

ヒーローとしてはまだ新米のホークス自身が目にしたのは、つい最近のこと。

だが実際に足を踏み入れて以来、その規模には圧倒されっぱなしだ。

(いったいヒーロー公安はどこまで隠してたのやら。……いや)

もしかしたら、ヒーロー公安すらも完全には把握してないのかも知れない。

これだけの規模の施設だ。

しかも主な用途はかの青石ヒカルを閉じ込めておく檻の役割を果たしていた施設。

間違ひなく日本一国で作られたものではあり得ない。

ホークス自身の独自調査でも、少なくとも10か国以上の国がこの件には関わっている。

先ほど麗日に雷撃をしかけた少女がの骸に縋りついている。無機質な棺桶越しの再会を、一体だれが望んだというのか。

反対側に視線を戻すと修道服姿の麗日が、別の参列者の元に向かっている。その修道服も普通のものではない。

青石ヒカルの手により作り出されたその服の強度はとんでもない。

これはあらゆるヒーローコスチュームを遥かに凌駕している。

少なくとも攻撃力に欠けているホークスには、傷一つつけられない代物だ。

「……………ホークスさん?」

麗日お茶子のよどんだ目がホークスを捉える。

ホークスは何でもないと言つて彼女の横に立つ。

彼女はそうと領きそのまま次の入場者の元へと歩みを進めた。

麗日お茶子は現在、この巨大な遺体安置所の管理人を務めている。

彼女が青石ヒカルを止めた一件は、世間から猛烈なバッシングを受けている。

先ほどあの泣いている少女が言ったような内容だ。

麗日お茶子さえあの時に止めなければ、余計な事を言わなければ、青石ヒカルに支配され、全てが平和になったのに。本気で殆どの人はそう考えていた。

SNS上で話題の上位を独占しているのは主にヒーローや政府への不満。青石ヒカルの支配を願う声、そして戦犯とされている麗日お茶子への粛清だ。

法律上、麗日お茶子には何の罪もない。

先に法律を犯して個性を使用したのは青石。そう、違法行為を友達がして彼女はそれを止めただけ。

麗日には、何の法的な責任を問えない。

しかし、こうも世の中が一変すると事情も違ってくる。

青石ヒカルは空の向こうに天国さながらの国を作り出した。

彼女の作った国プラント。老いも病も死も存在しない安らかな世界。

その上に働かずとも生きていけ、その上間違はなく今よりも上質な生活が約束される国ときたものだ。

当然犯罪行為などは行えないが、それを差し引いても破格に過ぎる。

欲しいものはほぼ全てなんでも、青石ヒカルが提供してくれる。

毎日遊んで暮らせる。酒池肉林の毎日を送れ、しかも寿命という制限まで取っ払う。

まるであり得ない。

ホークスがプラントに対して真つ先に思った反応はそれに尽きる。

しかし、それがまた事実なのが、世の為政者たちの頭を痛める要因になっているのだ。こんな“いい国”過ぎるバカげた国があるものか。

国とは国民の安全を保障するのと引き換えに、多少の自由や権利を制限するものなの  
に。

これでは自国に残る国民など、一人も居なくなるではないか。冗談ではない。

そんな愚痴を昨日ホークスは散々この国の首相から聞いたので、正直うんざりしていたのだが。

それはそうとして、ホークスにはもう一つの顔があつた。

——ホークス、麗日お茶子の様子はどうかしら？

ホークスの前に彼にしか見えない幻影が現れる。

電子回路を連想させる禍々しい衣装のドレスを着こんだ“青の少女”がホークスを見据える。

(今のところ大丈夫ですよ、レギオン)

彼女の名はレギオン。

青石ヒカルの個性の司令塔のような存在だ。彼女には半ば脅される形で、ホークスは

任務を遂行させられている。

——間違つても死なせては駄目よ

(それは青石ヒカルが悲しむから?)

——想像に任せるわ。どっちもちヒーロー公安からも同じことを言われてるんでしよう?

何しろ彼らにとっては地上の秩序を守ったヒーローですもの。

(……)

ホークスは彼女の言葉に沈黙で返す。彼女はクスクスと笑みを優雅にこぼす。

見た目は青石ヒカルと同じなのに、雰囲気や仕草が違うだけで印象がこうも変わるものか。

そうホークスは思った。

(今回のプラントの対応、ちよつと不味いんじゃないのかい?)

入国受け入れを拒否するなんて、プラントの国是に反するじゃないか)

——ええ……そうね、だから私もあの子も喜んで従つたわけじゃない。

でも仕方ないでしょう? こつちにはこつちの事情がある。私達の力も決して無限じゃない。

それに何よりもあの子自身、自らの力を抑制するための仕組みが必要だと理解して

いる。

そのための議会で、そのための選挙。民意によって人を選び、意思を決定する。民衆の代表の意見だもの。あの子も私も考慮せざるを得ない。

あなた達と何も変わりはないわ。

……そう、大切なものね、“民意” っつものは。ふふっ。

彼女の漏らすクスツツとした笑みは全てを見下した笑みだった。

その笑みが何を意味していたのかは、明白だ。

(……その判断が全てを滅ぼすかもしれないんだぞ)

——仕方がないじゃない。それに……あなた達にそれを非難する権利があるのかしら？

入国拒否？ ええ、そうね。

だけどあなた達日本だって、ずいぶん昔から難民を拒否してきたじゃない。

今のプラントと、過去の日本。似ていると思わない？ 歴史は繰り返すものね。

過去の日本はよそ様の国から見て、まさに夢の国のように見えたんじゃないかしら？

(それは！)

——それに私達は直接あなた達に危害を及ぼしたり、迷惑をかけているわけじゃない

い。

勝手にあなた達がこちらと比較して騒いでいるだけよ。

正直こつちだつて迷惑してるのよ？

……まあいいわ、そんな話どうだつて。

私がやることは変わりないし、あなたに命じた指令が変わるわけでもない。

引き続き麗日お茶子を守り抜きなさい。

もしも何かあつた時は……出来なかつた、じゃ済まないわよ？

そのまま彼女は闇に姿を溶かして消えていった。

(……出来なかつたじゃ済まないか。まあもし何かあつたら消されるんだろうな。

それより……)

青石ヒカルが提示する、正確には提示していた国をホークスは考える。

宇宙に存在する青石ヒカルが統治する国家プラント。

そこでは古いも病も、果ては死すらも存在しない。

すべての人が平等に富に恵まれ、あらゆる犯罪が未然に抑止されている。

まるで子供が考えた夢の世界、おとぎの国だ。

正直、惹かれない人間など居やしない。みんな、そんな国に行きたいに決まつてる。

そして、だからこそ、地上の国はそれを拒絶する。



そんな国が有つてたまるかと、上の人間は皆そう考えている。

今までの人類の常識をはるかに超えた先に存在する国に、人々の意識は追いついていない。

頭の固い権力者たち程そうだ。

なにしろ今まで人々が積み上げてきた常識が何一つ通用しないのだから。

日本の政治家達に、プラントへ対応を期待するほうが難しいだろう。

(……どうなつてしまふんだろうな、この世界は)

<sup>ウイラン</sup>敵の居ない世界。ヒーローの必要ない世界。

ホークスは青石の理想に共鳴したことがある。

だがその憧れも、今ではとうに色あせてしまった。

彼女の高すぎる理想がもたらした現実。それに地上の人間は消耗しつつある。

それでも、彼女を信じて戦い続ける人は後を絶たない。

青石ヒカルを信じ、いつか夢の国になる。

すべてが救われる世界になると信じる人間は、ヒーローの敵になつていく。

現状の体制を維持する暴力装置に対抗する。

それはヒーローも変わらない。ヒーロー達も一枚岩ではない。

ヒーローの中に敵に<sup>ウイラン</sup>堕ちていく裏切り者は後を絶たない。

ホークスがヒーロー公安から受けている指令には、ヒーローの中の裏切り者の調査も含まれている。

(……何にしても出来ることをやるしかない……か)

……

……

…

「何で議会では入国を拒否する決定がされたんでしょうか？」

「うーん……それは理由は色々あるけど。エリちゃんにはまだ難しい話だと思うなあ」

ローズがエリに注文されたコーヒーを目の前に置く。

わずかな振動でコーヒーの水面に波が立つ。

エリはコーヒーに映り込んだ自身の顔と目が合い、にらめっこになった。

顔を上げるとローズは頬杖について考えこんでいる。エリは純粹に疑問に思っただけなので、あまり困らせたくはない。

撤回しようとも思ったが……。

「分かりやすく説明すればいい。簡単なこと」

すました顔でとら丸が言うがローズは首を捻った。

「ぼくもそう出来たらいいなあって思うんだけど、案外難しくてねこれが。

理由はもちろんいっぱい色々ながあるよ。キリがないほどにね。

……まあ、まず地上の国がプラントに入国を禁止しているってのが一つ」

エリは首を縦に振る。これは簡単に理解できた。

「来てよと言つても来てくれないんですもんね……」

「うん、そう。だけどそれが全てじゃない。

例えば議員が選挙基盤に影響を危惧していたりとか。そういう権利闘争のごたごたも有るにはある。

でもそれも些細なことだね……実は裏でプラントが将来的に破綻するって話がある」  
「えっ？ そんなの初めて聞きました」

エリはキョトンとした。

まるで信じられない話だ。エリは青石を信じている。それに青石の支援を受けたプラントの人たちは、科学を凄まじい勢いで進歩させていると聞く。

破綻するだなんて到底考えられない。

「今はあくまでも噂だけどね。だけどそれも聞くとあながち嘘じゃない、って感じもしてね」

「それはどういいうっ？」

コホンとローズは咳払いをした。

「……エリちゃん、君は将来的に子供は作る気はあるかい？」

「えっ？ ……まだ分からないです」

エリはまだ子供の作り方も知らない。それにまだまだ子供を作れない体だ。

いずれ知る事になるのだろうが、まだ考えた事もない。

「はは、まあそうだよねうん。まあ当たり前の話だけど、人間には子供を作る権利がある。」

自らの子供を産み、育て、家庭を築く権利がある。これは分かるよね？」

「はい」

それは当たり前の常識だから分かる。

「けれど、それこそがこの国では問題になってくる所さ。放っておけばプラントの人間はドンドン増える。」

だけど現状プラントはその制限を全く掛けていない。

まあここまで言えばエリちゃんにも分かるかな？」

そこまで言われてエリの中で考えをめぐらす。するとスルリと一つの結論に行き着いた。

しかしエリはあまりにも短絡的なその結論に困惑する。

こんな簡単に思いつくことが正解だともいうのだろうか。

「……あつ、えつでもそんな。……国を作るときにそんな簡単な事に」

「考えが及ばなかったんだらうね。まあ、後からその権利を制限することは可能だからね。

でも結局、そう言うことになるってことさ」

「どういうことでしゅか〜?」

「ガトーは低能。もつと考えろ駄目猫」

黒猫のガトーは茶トラのとら丸に猫パンチを食らっている。

「と、とら丸ちゃんは厳しすぎましゅ〜! もつと分かりやすく言ってくだしやい!」

はあと、とら丸がため息をついた。そしてとら丸が語りだす。

「この国の人間には、寿命がない。いつまでたつても死なない。

普通の国ならどんな人が生まれて、全く問題なかった。むしろ生まないと問題だった。

人間は古い、衰え、病にかかり、やがて死ぬものだから。

でも、プラントでは人が生まれる一方で“死”がない。人は無制限に増えるだけ。

「ここまで言えばわかるか駄目猫?」

「分かりましゅん!」

ガトーが吠えた。

そんな黒猫を流し目で見つつつエリが口を開く。

「……お姉ちゃんの力がどの位の人に対応できるかは分からない。でも無限じゃない。

いつか……増えていく人口にいつかお姉ちゃん自身対応できなくなる?」

ローズは神妙に頷いた。

「それがいつかは分からないけどね。何百年……もしかしたら何千年かも知れない。

でもプラントの住人の大半が、そのことに薄々気付いているのさ。

選挙で選ばれた議員なんて言わずもがなね。

青石君の力は偉大だよ。でも無限じゃない。

何億、何十億、何百億……。いつかは対応できなくなる時が来る。

増えた人口からは、さらに多くの人間が生まれていくからね。

やがて途方もない数になるだろう。

その時に、選べるかい? 誰が青石君の恩恵を受け、誰が受けられないのか?

そんな話はしたくないだろう? プラント皆が今のように受けられるのに越したこ

とはないさ」

エリは黙って頷く。出されていたノンカフェインのコーヒーに砂糖を静かに入れる。

「だからプラントの皆はいたずらに入国させて人口を増やしたくなんてない。

少なくともそうすれば、自分たちが恩恵を受けられる期間はずっと長くなる。

その間に、人口問題に対してどうするのか、何かしらの結論だつて出るかも知れない」  
エリはローズから聞かされる話に、ただただ頷くことしか出来なかつた。

同時に思った。姉は、青石ヒカルは。この話を聞かされていたのだろうか。

いや、間違いなく聞いていたのだろう。その時、青石ヒカルは何を思ったのだろうか。  
「ブランドという入れ物に、あまり多くの中身にんげんを入れたくはない。

膨らみ続けるものは、いつか破裂する。つまり、そういうことさ」  
砂糖を入れててもコーヒーは、ほんのりと苦い味だつた。

## 第92話

病室で青石は緑谷と互いを見つめ合う形になった。

話したいことが山ほどあった。謝らないといけなと思ったこと、あれからどのよう  
に世界が変わったのかと言う事。

今の世界の現状にプラントのこと。

そして奪ってしまった緑谷の個性アスライトのこと。

「えと……あの……その……」

なにか喋らないと。そう青石はそう思うが、何一つ口からは出てこない。

何から喋ればいいのか頭の中がとっ散らかってしまい、收拾がつかない。

そんな青石を見て、緑谷はクスツと堪え切れなかったかのように笑った。

「むー……笑うことないじゃん」

「ごめんごめん」

青石はぷうと頬を膨らました。そんな青石の様子に緑谷はさらにおかしそうな顔を  
する。

「本当に心配したんだから。……ボクが言えたことじゃないんだけど、さ」



「うん、僕もずっと謝りたかった。ごめんって」

「許してくれるの?」

青石の言葉に緑谷はただ沈黙で答えた。

穏やかな緑谷の顔は青空のように晴れていた。

耳をすませば、目を凝らしたら、今なら緑谷の心が全部見える。

そんな事が出来るような気がした。

見ているほうが心配になるほどに、あまりにも優しい顔をしているのだ。青石は今見ている風景が実は現実なのではなく、夢なのではないかと半分疑ってかかるほどだった。

「緑谷君、なんでこんなに長い間寝ていたか分かる?」

分かるわけないかと、青石は心の中で馬鹿な事を聞いたたと反省する。

だが緑谷の反応は青石の予想とはまるで違っていた。

「——夢を、見たんだ」

「夢?」

緑谷の目が遠いものを見る目になる。

窓の外には、青石が作り上げた平和なコロニーの景色が広がっている。

「長い……本当に長い夢だった。そこで僕はずっと戦ってた。」

何回も何回も、歴史を繰り返して。何度もやり直してた。

青石さんと、何度も戦って負けて。そんなことを、ずっと」

「……もうボクは君と戦わないよ」

「うん、僕もさ」

緑谷と目が合う。言葉よりそのまなざしが彼の意思を告げてくれていた。

「……夢の中で、ボクはどうしてた？」

「色々途中は違ってたけど……最終的に、人を滅ぼしていた」

「……っ！」

「話を聞いてほしい！ これは本当に大事な話なんだ！ 実は……」

緑谷の口から次々に言葉があふれ出す。

緑谷の言葉は青石にとって驚くべき内容だった。

「歴史を……繰り返してた？ 緑谷君の脳内で？」

「うん、そうだよ」

「……」

緑谷は寝ている間、ただ寝ていたわけではない。

緑谷が言うにはずっと寝ている間に、緑谷のアズライトの残したバックアッププログ

ラムによって修復作業が進んでいた。

それだけならまだ、青石の予想の範囲だ。  
だがそれだけではなかった。

緑谷の中に復活したアズライトの力。その力によって緑谷は、何度も世界の行く末をシミュレートした未来を体験したという。

ある時は人類同士が核戦争を起こし。

ある時には人類を見限った青石が人類を滅ぼし。

多かれ少なかれ途中経過は違えども、人類が滅んでしまうという一点に収束してしまつたというのだ。

「それで佐々木未来って人はこう言つたんだ。

<sup>A z u r i t o</sup>  
アズライトによるシミュレーションは、現実と同じ濃度を持つている、って」

青石はただその話に圧倒されっぱなしだった。

「信じられないかな？」

「……あり得ないことじゃないよ、うん。……そっか、そんな使い方も……」

「青石さん？」

「あ、ううんごめん。……結論としてボクは緑谷君を信じるよ」

青石は窓の外を見る。

緑谷を匿うただけにつくったコロニーの中は、のどかな自然あふれた景色が広がっていた。

他の邪魔になる人間は一切いない。

青石は頭の中で考えをまとめる。

緑谷の言っていることはほぼ間違いなく真実だろう。何千回も滅びの歴史を体験し、その経験で力を得た事も。緑谷の中に数千万の個性と魂が宿っていることも。

そして聞き捨てならないのは、緑谷のシミュレート上での青石の結末。

緑谷が何回繰り返しても、人類が滅んでしまう結果に変わりはなかったというのだ。(どんな選択肢を選んでも待つてる滅びの未来。

あくまで緑谷君のシミュレーションが未熟だから？ ううん、アズライトの演算を使った未来予測だもん。

それは多分佐々木って人の言う通り、どんなコンピュータを使った未来予測なんか比べ物にならない精度を誇っている。

本当に現実と同等の価値を持つてるシミュレーション。疑う余地なんてない。

緑谷君は実質、未来からタイムトラベルして帰って来たのと同じなんだ)

レギオンが青石の横に姿を現す。

——どうするのかしら？

(今は……まだ分からない)

——……そう

(だけど……そうか、どのくらい時間があるかも分からないし……)

今はやれることをやるしかないよね？ レギオン)

——そうね、でも世界が滅ぶかどうかは結局あなた次第よ。

……もし未来のあなたが世界を滅ぼす選択をしたとしても、きっと私はそれに従うでしょうね

あなたと大事な人さえ無事に済むのであればだけど

(そんな!?! 止めてくれないの？ 未来のボクが世界を滅ぼす選択をしようとしても

?)

——……今のあなたはそう思っているけど、未来のあなたがどう思っているかは分からない

そして私は同じ人の判断なら、過去よりも今の意思を尊重するべきだと思うの

(……それは)

——間違っているかしら？

(……きつとそれも一つの正解の形なのかな)

——どうでしょうね、ただ一つだけ誓えることはあるわ。

(それは何?)

——私は今も未来も、あなたの味方であり続ける。

例え世界を滅ぼす選択をしようとも、どれだけ身勝手な選択をしてもね。

(……)

——信じられない?

(……ありがとう)

ふと視線を上げる。

緑谷の目が明らかにレギオンを捉えていた。

電脳体であるレギオンが見えている。という事は本当に緑谷はアズライトの力を

取り戻しているのだろうか。

「緑谷君、まずは——」

青石が切り出す。

青石と緑谷の間にくらかかのやり取りが交わされる。

やがて青石は頷き、胸から下げているロケットの一つを手を取った。

ロケットの蓋が何の手も触れられていないのに勝手に勝手に開く。

そこから青い結晶体がゆっくりと浮遊して出てきた。

「……code blue」

青石のつぶやきとともに結晶が光を放つ。

まばゆい光が目を開けられない程に光り輝いた。

結晶が光を放っていたのは、ほんの数秒程。

光が収まった後に部屋には人間が一人増えていた。

緑谷の腕の中に、青の少女が抱えられている。

軍服のようなスカートの丈が短い服。

青石ヒカルにそっくりだが、誰が見ても違くと断言できる違いがあちこちに散見される。

この青の少女はかつて人間だった。

そして個性へと身をやつし、そしていま再び肉体と言う実体を持って帰ってきた。

「う…………ん」

長い瞼がゆつくと開く。長いまつ毛にぱっちりした瞳。

目の色は青石と同じ「青」に輝く。

「おかえり、アズライト」

「……………ただいま、緑谷君」

かつて過去は自身と同一だった存在が、別の人間として緑谷と見つめ合っている。

なんだか青石はその場に居てはいけなような気持になった。

緑谷とそのアズライト。

二人だけが存在を許されているような空間のような気がして、とても気恥ずかしかった。

青の少女と青石の目が合う。

青の少女が優しく微笑む。青石は照れ臭くなって頬を掻いた。

窓から入り込む日差しが、とても柔らかく三人を包み込んでいた。

………

………

…

あの日した選択を後悔していない。

そう言うと嘘になると彼女は思っている。

青石ヒカル。

親友だと思っていた彼女は麗日お茶子から見ても変な人だった。

授業をまともに受けないわ、時折突拍子もない行動をしたりするわ。

入学初日に自販機のジュースを、これでもかと言うほど買っていたのは絶対に忘れられない。

そんな青石ヒカルにはある一つの信念があった。



彼女は暴力を極端に嫌った。

彼女はあくまでも分かり合い、平和的に解決することを望んでいた。

なんでそんな人がヒーロー科にいるのだろうと不思議に思ったものだ。

ヒーローとは積極的ではないにしろ、必ず暴力が付きまとう仕事だ。

話し合いで解決できないからこそ、ヒーローは居る。

<sup>ウィラン</sup>敵は説得できるような相手ではない。それは常識だ。

そして更におかしいと思ったのは、彼女の力があまりにも桁外れで規格外だったからだ。

およそ出来ないことがないんじゃないか。

そう思わせるほどの能力が青石ヒカルには備わっていた。

少なくとも、1-Aの生徒たちの個性で出来て、青石にできないことなど存在しなかった。

彼女はあらゆる個性の上位互換とでも言うべき個性を持っていた。

麗日は、自分がそんな力を持っていたらどんな性格になったのだろうか。そんな事を想像したことがある。

大抵の人間は力に溺れ、力こそが全てだと。そうやって自惚れ、自身の力だけで全てを解決するようになっていくのではないか。

そんな風に育っていないのが、考えれば考えるほど麗日は不思議に思っていたものだ。

彼女は、力による支配を否定する。

彼女は、暴力では何も変わらないのだと訴える。

誰よりも強大な暴力を振るえる彼女がそう訴える様は、明らかに矛盾していた。

やがて、彼女は世界を救った。

スターレインという脅威を取り除いた青石は、名実共に世界一の英雄になった。

だが、麗日には嫌な予感がした。

当たり前だが、スターレインを解決できたのは言葉ではない。

解決したのはあくまでも青石ヒカルのだ。

言葉が通じない事象には、言葉など何の力も持たない。

彼女の世界を救える力は同時に、世界を滅ぼせる力でもあったのだ。

だが、彼女は言っていた。

力では何の解決にもならないと。

力で世界を救っておきながら、彼女はそう口にする。

彼女が世界を救う事が出来たのも結局、その力があつてこそだと言うのに。

彼女は自身が抱える矛盾に気付いてすらいなかった。

その先にどうなってしまうのだろうか。そんな不安を抱かせるには十分すぎたのだ。そして、恐れていた日は来た。

彼女自身が明らかに好意を寄せていた相澤消太と姿をくらし、そしてしばらくして彼女は姿を見せた。

彼女はほんの少し考慮した後に、力で世界を支配する。そう言い出した。

麗日は必死になって止めた。

あれほどまでに力による解決を拒んでいたのだ。

絶対に彼女が望んだことではない。

止めなければ、きつと取り返しのつかないことになる。そう思った。

力では絶対に青石には叶わない。

だからあらん限りの声を張り上げて、青石と対峙した。

言葉は届いた。届いてくれた。

しかし、それが地獄の始まりになるとは。その時には想像だにしていなかった。

彼女は言った。

対案は有るのか、と。

世界中で人は死んでる。自分はそれを助けられる。

一日だけで日本で3000人、世界では15万人、人は死んでいる。

青石ヒカルが力で支配せず、彼らを救う方法はあるのかと。そして麗日は対案を見つけられずにいる。

「殺す！ こいつだけは許せないんだよ！」

「……」

まだ若い男がヒーローに取り押さえられている。

憎悪を込めた目で麗かを睨みつける。

凍てつく空気が肌を刺すが、それ以上に視線のほうが痛く感じられる。

麗日はそれに何も感じないわけではない。感じないわけではない。

だがあまりにも麗日は、そういう感情に晒されすぎた。

「……ごめんさい」

棺桶がずらりと並ぶ広大な空間。

雄英地下に設けられた遺体の安置所だ。

世界中から希望者の遺体はここに運び込まれ一定期間保管される。

一週間程度経つとここより更に地下にある施設へと遺体は運び込まれる。

この地下の空間は特殊な防腐処置が施されていて、遺体はいつまで経つても傷むことは無い。

勿論これは青石ヒカルの個性によるものだ。

「……また人が死んだんですね」

「ん、何か言った？」

「いえ……何でもないです」

背後にいる護衛のホークスには聞こえなかつたらしい。

麗日はそつと目を伏せる。

麗日はこの雄英地下の遺体安置所。通称、雄英墓地の管理人だ。

青石ヒカルより命令される形で任命されている。

ここでは毎日これでもかと言うほど遺体が運び込まれてきている。

そしてその亡くなった方の遺族や関係者も毎日訪れる。

ほとんどの人間は麗日に会った際に不快感を示す。

中には麗日を責めない人もいる。

本当にごく少数だが、麗日を励まし気遣ってくれる人は存在するのだ。

例えば緑谷出久の母がそうだ。

今は彼女は重要な保護対象人物として麗日と同様に匿われている。

とはいえ、麗日のように仕事を押し付けられてはいない。

扱いの程度には若干では済まない程度の差はある。

(青ちゃん、私あの時どうすればよかったのかな?)

思考は再び青石ヒカルのことに回帰する。

確かにあの時、麗日が青石を止めなければ、あれ以来一切の死人は出なかつた。だがそれは青石に全てを監視される世界の訪れを意味する。人の命より大事なものは無い。確かにその通りだ。

青石に任せていれば、万事うまくいくのかも知れない。

青石は自分一人で全てを背負うとしていた。

けれども麗日から見ればそれは重たすぎる。

たった一人の人間に任せるべき責任ではないと思つたのだ。

平和とはたった一人で作っていくべきものではない。

皆で協力して守っていくものだから。

それこそが、青石が最初に目指していたものではないのか。

(今度青ちゃんに会えた時に言えるかな……)

彼女の決意は静かに闇の中に溶けていった。

……

……

……

「と言うわけで、新しい家族の緑谷君とミアだよ！ ほら二人とも何か言つて」

青石は胸を張つて緑谷と緑谷のアズライトを紹介した。

時は夕食。

青石の家は血も名前もバラバラだ。

相澤消太。シアン。エリ、ペットのとら丸。そして青石ヒカルの5人家族だ。

プラントは選択的夫婦別姓制度を採用している。

それにしても今のところ名字がない人が二人と、違う名字が二人は珍しい。

シアンは本名にかなり抵抗が有るらしい。

エリも元の家庭事情が複雑で名字が保留になっている。

だからこの家族は名前はてんでまとまっていけないのだ。

だから絆が薄まるだとかそんなことを感じた事は一度もないのだが。

「ミアです。よろしくお願いします」

「ど、どうも……緑谷出久です」

緑谷のアズライト“Mi<sup>ミ</sup>ia<sup>ア</sup>”は礼儀正しくお辞儀した。

緑谷はばつが悪そうにしている。

「むっふー……あいたー！」

自慢げに鼻息を出していた青石の後頭部がド突かれる。

相澤が不満げな顔をしていた。

「うう……酷いや。相澤さん！ 叩くことないじゃん！」

「馬鹿が。……エリのことも考えろ」

「あつ……えと」

チラツとエリのほうを見るとエリは少し不安そうにしていた。

目がせわしなく動いて落ち着きなさげな様子だ。

珍しくとら丸がエリの足元にまで寄った後

「うわっ!? 何?！」

緑谷が驚きの声を出す。

とら丸がエリの足元で発光した。そう思ったら人の姿に変身していた。

「人前で人間モードになるなんて珍しいね、とら丸」

「……別に」

青石曰く“人間モード”形態だ。ちなみに猫状態のときは“ねこねこモード”と青石は呼んでいる。

だがとら丸からは不評らしい。はやく呼び方を変えてくれと催促されているが、今のところ青石は変えるつもりはない。

とら丸はエリと緑谷の間に立って、油断なく緑谷の方を見ている。



(もしかして守ろうとしてくれてるのかな?)

青石にしか懐かなかつたと丸だが、だいぶ人に馴れて改善の兆しが見えてきているようだ。

それが少し青石は誇らしくなった。

(つてそれよりも)

「うう、ごめんエリ。勝手に決めちゃって。どうしても駄目?」

「えつとダメつてことはないですけど……」

エリはどうにも歯切れが悪い。

無理はないだろう。

何しろ緑谷に過去にあんなことをされていたのでは。

だが青石から言わせればあれの責任は緑谷だけではない。

周りからどうしようもなく追い詰められて、そして青石が最悪の行動を取ってしまった。

じゃあどうすれば良かったのかと言われれば、それは分からない。

けれども青石は、緑谷一人に責任を押し付けるのは間違っていると思うのだ。

青石が考えるに本来の緑谷は優しい少年だ。

他人を思いやれる人間だ。困っている人がいれば手を差し伸べられる人間だ。

こと誰かを救<sup>たす</sup>けたいという思いは誰にも負けない程強い。

確かに欠点は色々あるけれども、それを差し引いても良い人だと青石は思っている。

「お願い！ これはどうしても必要なことなの！」

「住む場所くらいは別でもいいだろ。ましてや先にエリが先に住んでいるんだ。

どうしても一緒に住む必要があるのか？」

青石の願いにも相澤は渋い顔が続けている。

だが青石は譲らない。

「あるの！」

「どうして？」

「それは……言えない。でも大事なことから」

「そんなにか？」

「……人類の命運が掛かっている位には大事なことなの」

ぷつと相澤は噴出した。青石はムつとする。

本当に大事な話なのに相澤は子ども扱いをやめてくれない。

この提案は、緑谷からの話を聞いた青石なりの対策の一つだ。

ひとつ屋根の下で過<sup>ご</sup>すことで普段は見えない部分も見えてくるかもしれない。

青石が世界を滅ぼす原因になるというなら、少しでもその兆候を緑谷が掴めるように

した方がいい。

だから一緒に家に住もうと青石は提案したのだ。

もちろん互いのプライバシーを守る事は前提条件だ。

前は青石が飼い猫として緑谷の家に泊まった。

お互いを知ろうという発想は、そもそもこの相澤の言い出したことをヒントにしている。

なのに笑うだなんて信じられない。

「むー……っ！ ……そうだシアンさんはどうなの？」

「私は……構いません」

「おいー」

相澤は不満げだが、シアンは受け流すように涼しい顔だ。

「……緑谷様が、あのような事態になった責任は私にありました」

「そんな！ シアンさんは僕に良くしてくれました……あれは！」

緑谷が声を上げる。だがシアンは目で静かにそれを制する。

「私は大人です。大人には子供が道を誤らないよう導く義務があります。」

「……こんな私ですが、少しでも緑谷様にその罪滅ぼしを出来たら幸いです存じております」

「シアンさん……！　ありがとう！」

青石はシアンにお礼を言つて、シアンは苦笑していた。

「あの……ミアさんでしたっけ？」

「ええ、何かしら？」

エリがミアに話しかけた。エリにしては珍しく積極的だ。

「えつと、その。緑谷さんの“個性”なんですよね？」

「ええ、青石さんのレギオンは知っているかしら？」

「はい、プラントに住んで知らない人はいません」

「それと似たようなものよ」

「そうなんですネ」

「ええ」

ふふつとミアはエリに笑いかけて、エリも釣られて笑顔になっていた。

なんだかミアに自分より姉らしい態度だなと思ひ、嫉妬の炎が燃える。

無理矢理に青石は二人の会話の間に割り込むことにした。

「ちなみに“ミア”って名前はボクが付けてあげた仮の名前だよ！」

「そうなんですか？」

「“み”どりや君の“ア”ズライト。だからミア。呆れるほど単純よね」

「わっ悪い?」

「いや、とてもいい名前だと思うよ。ミア」

いきなり名前を呼ばれたミアは不意打ちで顔を真っ赤にしていた。

ゆでだこの様になるとは、なるほどこういうものなのだたと青石が感心するほどには  
真っ赤だった。

「……わたし、一緒に住んでもいいです。いえ、一緒に住みたいです」

「えっ……? やったー! エリ! ほんとに!」

「はい!」

エリの思わぬ言葉に青石は歓喜する。

そしてただ一人、煮え切らない顔でたたずむ大人が一人だけ居た。

「えと、相澤さん」

「……エリも良いつて言っているんだ。好きにしろ」

「やったー! ほら二人とも一緒に住んで良いつて!」

「ああ、うん。ありがとう、よろしくお願いします」

「よろしくね」

「うん! よろしくね!」

青石と緑谷は握手を交わす。

青石ヒカルを取り囲む家族の一員に、無事緑谷は迎え入れられた。

緑谷が見た未来は、との程度の制度の話かは分からない。

だが何としても破滅の未来だけは回避しなければ。そう青石は心の内で誓う。

そして目の前にある問題も解決しなければいけない。

さしあたっては地上の騒乱をいかに食い止めるか。

そしてプラントの人口問題もだ。

これは“死”がないプラントが根本的に抱える構造的な問題でもある。

解決しないことにはプラントに未来は無い。

そして地上の人を受け入れる選択肢を、プラントの人も選ばないだろう。

やることは山積みになっている。

だがエリやシアン。相澤らの家族に囲まれていると、無限に何でもできる気になつてくる。

明日への希望が湧いてくる。

青石はこの家族に囲まれた時間が、何よりも充実していると思える。

愛する者と触れ合う時間が何よりも愛おしく感じる。

だけど同時にそれをいけなものだと、心の底で拒絶している自分がいることに気付いていた。

そんな感情を青石は押し殺す。何も感じないふりをして、何も悩みなどないふりをして。

心の奥に誰にも言えない寂しさを抱えたまま、今日も彼女は笑顔を作っていた。

## 第93話

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。

沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。

奢れる人も久からず、ただ春の夜の夢のごとし。

猛き者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵におなじ。

——平家物語より。

風が強く吹いた。

それは僅かな夏の匂いを届けてきた。

月日も流れ、今日で七月に入った。もうすぐで夏になり梅雨も明けるだろう。

日はとつぷり沈み、月明かりが雄英の中庭を照らす。

風がさらに吹いた。

どこからか飛んできた花卉が一枚頬に張り付いた。轟は無言でそれを摘み取る。

轟は花の名前は知らない。その花びらを見ても、その種類は分からない。

指先で風に煽られている白い花びら。どこの何という花だろうか。



白い花びらの先はほのかに桜色に色づいていた。  
そつと指を広げる。

花卉はそのままふわりと風に乗って舞い上がり、空の向こうへと消えていった。  
そのまま視線が空の方に向く。

雲の切れ目から見えるのは月。それと砂時計のような形の巨大な建造物群。  
轟は目を細めてそれを見上げた。

遙かな空の向こうに存在する国家プラント。

青石ヒカルが作り上げたコロニー群を居に構える国家がそこにある。

——ボクの名前はえとね、青石ヒカル……だつて

「っ!？」

視線を下げた。記憶が激しくフラツシユバツクした。

最初に彼女と出会ったときの記憶が頭の中に蘇る。

ちようどこの場所だった。

まだ登校初日の朝礼前の時間。

廊下から何やら奇妙な動きをしている少女が見えたから声をかけたのだ。

自身の名前をわざわざメモで確認し、女なのにボクと自称する変わり者。

およそ世間のことを何も知らない彼女には本当に驚かされた。

自販機で大量に飲み物を買いはじめた時には頭を抱えたものだ。本当に懐かしくなる。今にもあの頃に帰りたくなる。

まだ何も知らない子供だった。

ヒーローとは何か、敵とは何か。<sup>ツイン</sup>考えずに済んでいた、幸せな子供だった。

まさかその時出会った彼女が、世界を根本から変えるとは夢にも思わなかった。

まぎれもなく轟は未来永劫語られるだろう神話の世界に引き込まれたのだ。

あの時、まさしくこの場所。このなんの変哲もない中庭で。

轟は目を凝らして視線の先を確かめる。

そこにはただ芝生が生えているだけで何も無いように見える

だが轟は直感で感じ取った。

目で見えなくても、耳で聞こえなくても。確かな気配がそこにある。

青石ヒカルという存在が確かにそこに感じられる。

轟は頭がおかしくなったのかと半分思いながら、口をゆっくり開いた

「そこに居るのか？ 青石……」

返事はない。だが轟は確信を持ち、視線をずらすことは無い。

するとまるでそんな轟に根負けしたかのように、

「なんで分かったの？ 轟君」

ぬらりと影が虚空から飛び出した。黒い不定形な物質は一瞬にして姿を変える。

青い髪がしなやかに踊った。ふわりと白いワンピースの裾が翻る。

月明かりに照らされた姿はまるで、人間離れしていて。

いや、実際に人間とはとても呼べる存在ではないのかも知れない。

彼女を人は様々な形で呼ぶ。ある者は女神や神と。ある者は悪魔だと。

その気になれば今すぐにでも、全人類を救済も破滅もしてしまえる存在。

まさにその力は神そのものと言えるだろう。

彼女が優雅に髪をとかす。

その月光に濡れた姿はあまりにも艶やかにで、あまりにも儂く、今にも消えてしま

そうに見えた。

風が吹いた瞬間、チリが吹き飛ぶように居なくなってしまうのではないか。

そのように思えてならなかった。

「轟君？」

「……いや、なんとなく、だ」

「そう？　なんか確信があるっぽい感じで、こつちをまつすぐ見てきたからさ」

「……どうして雄英に？」

「地上こごからだこと星がほし良い感じに見れるから、ね」

「星が？」

彼女が夜空の方に目を向ける。つられて轟も上に視線を向けた。

「知ってる？　宇宙から見る星は瞬かないんだ。」

地球の分厚い大気の揺らぎが、星の光をぼやけさせ、ちよūdō良くらいに人の目に届けてくれる。

ちよūdōメガネのレンズのようにね」

「……」

「空の底で溺れながら見る星は本当にキレイなんだ。」

宇宙から見える星も勿論キレイだけどね。たまにはこういう星空も悪くないなって」

「……お前は」

「あつほら！　見えた流れ星？　そうそう、流れ星も宇宙からじゃ見れないからさ、だか

ら……」

「青石！」

轟自身が驚くくらい大きな声が出た。

自身の心の余裕のなさがそのまま表れてている。

そのことに気付いた轟は、なんて小さく愚かな存在なんだと己を恥じた。

「怒らないでよ」

「……俺がそんな理由で質問したんじゃないってことくらい、分かってるだろう。なるべく落ち着いて声を出す。」

日本が、世界中がおかしくなってしまった元凶がこうして目の前に居る。

仮にだが、もしこの場で倒してしまえたら世界中のヒーローが歓喜に沸くだろう。

そして民衆は絶望し、轟はやがて死ぬまで追い詰められるだろう。

本当に青石を倒せるだけの実力があればの話だが。

そしてそんな事が不可能だという事は、轟自身が分かっている。

だが考えずにはいられない。もしも自分が青石と同じ力があれば、何を考え何を為すのだろうと。

そこまで思考が轟の中で回り、轟は頭を振ってそれらを追い出した。

青石を害してどうにかするなんて下らない考えより、もつと建設的な何かを考えるべきなのに。

「……うん、ごめんね」

「いや……俺も……、すまん、気が立ってたみてえだ」

「地上、大変な事になってるね」

言いたいことが色々ありすぎて何を喋ったらいいのか分からない。

今の地上の様子を話すべきか。だがそんな情報青石はとづくに知っているはずだ。

自分の最近の体験を話すべきか。だが最近は受け持った区画の敵を倒して回っているだけだ。

轟が雄英高校の防衛に回されたのはつい昨日のこと。

だがそんな事を喋ってどうなるというのか。

クラスメイト達の近況を言うべきだろうか。

だが最近は大半のクラスメイトとはまともに連絡すら取れていない。

皆日本各地のヒーロー基地に飛ばされ、必死に戦っている最中だ。

とても連絡を取り合うような心の余裕はない。

そもそも最近、連絡そのものが付かなくなっているヒーロー基地も出てきている始末だ。

正直全員が生きているとはとても思えない。

「……ああ、そうだな」

結局口から出てきたのは、しようもない台詞だけ。もつと他に言わないといけないことがある筈なのに、まるで出てこない。

あれだけ気の置けない友人として暮らしてきたはずなのに、その存在に轟は圧倒されている。

口の中がひりひりと乾く。

自身の生唾を飲み込む音が聞こえた。きつと彼女にも聞こえている。

こんなにも緊張しプレッシャーを感じている自分自身が轟は信じられなかった。

青石は苦笑する。そのまま彼女は芝生に三角座りになり、横尾芝生をポンポン叩いた。

どうやらそこに轟も座れということらしい。

轟は促されるがままに青石の横に腰を下ろした。

「お前のせいだつて言わないの？」

「……正直思っている。でもそんな風に思ってる俺自身を、恥ずかしいって思ってる」  
思っていることをありのままに言うことにした。

これ以上嘘偽りで仮面を作る事をしたくなかった。

正直轟の中で青石に憎しみが無いなんて、とてもじゃないが言えない。

彼女が余計なことさえしなければ。スターレインを処理した後に、何もせずただ日常を送っているだけの存在であつてくれていれば。

毎日そんな事ばかり考えている。

けれども、と轟の心の中の一部が反論する。

彼女がそうやって何もせず日常を送る事。それは彼女が救える人間を放置して暮らしていくことを意味する。

それに彼女は耐えきれなかった。だから彼女は自身の力を使い、出来るだけ現実と折り合う方法を探したのだ。

それがプラントと言う国家。

ある程度は既存の国家や組織にゆだねる。彼女に賛同したものだけが、彼女に従えばいい。

何も……何も間違っていないはずだ。

彼女は人々の選択を尊重した。彼女の力に縋りたいという人の希望も叶え、彼女に従わない者の意思も尊重した。

力尽くで地上を支配することも出来た。だがそれをしなかった。

だが、一つだけ誤算があるとすれば。彼女はあまりにも理想に近すぎて、あまりにも“正しく”在りすぎたのかもしれない。

プラントに移住を望まない者たちが地上に残ったとして、その人たちだけで生きていけるだろうか。

不可能だ。間違いなくほぼ全員がプラントに移住していき、地上の文明は維持できなくなる。

そうなると思まぬものだって、結局プラントに行かざるを得なくなる。

地上に残るのは原始時代で良いという変人だけになるだろう。



そんなもの、結局選択の自由など無いに等しいではないか。

彼女の顔を横目で見る。彼女はたおやかにほほ笑んだ。

「轟君は優しいんだね」

「そんなんじゃない。けど、分からねえんだ」

「何が？」

「お前があの日麗日に言ったやつのお案」が見つからない。

青石が確かに世界の全てを支配したら、もしかしてずっと前よりいい世界になるのかもしれない」

「……」

「けど、それは嫌なんだ。確かに人は死なない方が良いに決まってる。苦しまない方が良いに決まってる。」

でも人が死ななくなることが、本当に命を大事にすることなのか？

命を大事にするって、そんな単純な事じゃねえだろ。それに……」

「それに？」

「……この世界を、人を支配したいなんて。そんなこと、青石は思つて無い筈なのに」

「それは……」

青石は黙りこくりに静かに首を縦に振った。

彼女は人を支配したくて支配しているのではない。

ただ最善の結果を追求するあまり、支配せざるを得なくなっているだけだ。仕方がなかつただけだ。

父親のエンデヴァーが以前言っていた。

世の中は全て「仕方がない事」で動いている。認めたくないがそれが現実なのだ。

仕方がなければどうしようもない。その現実には抗えるものは誰一人としていない。神に等しい力を持っている青石ですら、その原理には逆らえないのだ。

轟は口を開く。

「なあ青石、何でこんなことになってしまったんだ？」

「轟君……」

情けないと轟は自分でも思う。けれども心の中で留めていた思いが後から後から溢れてくる。

まるで堰を切ったかのようだ。

一体どれだけのものが心の中にあつたのだろう。

だが轟が止めようと思つても、どうにもならなかつた。

「俺たちが毎日やってることお前も知つてるだろ？」

ヒーローが何をやってるかなんて、全部分かつてるだろ？

今の敵は、あいつらは何も特別な事なんか求めちゃいない。

ただ今よりいい暮らしを送りたい。死にたくない。

戦いや色んな理不尽なんてない穏やかで平和な世界で暮らしたい。

それだけなんだよ。一部の頭のおかしい敵は違うけどな……。でも大多数は違う。

大抵の奴は皆一生懸命生きたいだけなんだ。

……どうしてこんなことになっちまったんだ。

毎日毎日ヒーローをあらゆる奴がぶつ殺しにやってくる。

俺たちだつて皆が幸せに生きられる世界を守りたいだけなのに。

俺たちは……ヒーローはどこから間違えていたんだ？」

彼女は轟の言葉をかみしめるように受け止めていた。

そして長い沈黙が続く。彼女は星空を見上げながら考えている。

いつの間にか空を覆っていた雲は跡形もなく消え去っていた。

「どこから、か。……最初から、じゃないかな？」

「……最初？」

「例えどんなに救いようのない悪人だったとしても。

人を暴力で打ちのめすことに何の疑問も持たない。

その時点で、おかしかったんだよ。

まして、それを誇らしげにするなんて。見世物にして人気商売にするなんて。やっちゃいけないことだったんだよ。

ヒーローきみたちが今までやってきた事が、そっくりそのまま帰ってきた。それだけの話じゃないの？」

「……っ」

つまりは自業自得だと彼女は言いたいのか。

ヒーローが今まで積み重ねてきた業。それがどれだけ大きいものなのか、轟にも分かってる。

ヒーローは社会の敵を排除する存在だ。より多くの罪なき人々の為に、少数の悪を排除しなければならぬ。

そして社会を守るために必要なら、時には手段を選んではいられない。仕方がない場合がある。

そう、この目の前の少女がかって抹殺されそうになつていた時のように。「ねえ、轟君にとつてヒーローってなに？ 敵ツライってなに？」

「俺はただ……」

「ただ？」

彼女の言葉が重い。彼女はずっと問いかけていた。

ヒーローとは何か。敵ライアンとは何か。

それは彼女にとつて本当に重要な問いかけだった。

けれど今まで轟は、その言葉を本気に捉えた事がなかったのかもしれない。

きつと人は追い詰められれば視野が狭まる。けれども逆に追い詰められなければ、見えないものもある。

彼女の人生はきつとつらい選択の連続だった。常人ならとつくに自死してしまうだろう苦痛を味わってきた。

きつと彼女は、誰よりもヒーローを求めていたのだ。

だが、物語にあるようなヒーローはどこにもいなかった。

だから彼女は問いかけずにはいられない。

ヒーローとは何か。敵ライアンとは何か。

それこそが彼女の人生において、根幹となる命題そのものなのだから。

「俺は。きつと憧れただけだ。テレビの中で誇らしげにしているヒーローに。

オールマイトに。あんな風になりたいって。そう思っただけなんだ」

「うん」

「だからヒーローにやられている敵ライアンなんて考えもしなかった。

あいつらはどこにでも湧いてくる救いようのない屑で、どうしようも無い奴らで。

考えたって無駄だって。可哀そうなんて思う必要なんてないって」  
「うん」

「でも違ってた。何も間違ってたなんか無い筈なのに。

なのに俺がいつの間にか、あいつらにとつての敵ライバルになったた。

いつの間にか俺が！ ……敵ライバルになっていた。

お前が言っていたヒーローってなにか。敵ライバルってなにか。

毎日考えてる。でも分からない。分からないんだ」

「うん、そっか」

「ずっとずっと目をそらしていたんだ。本当は最初から考えてなくちゃいけないことだったんだ。

俺は知らなかったんだ。

一生懸命に生きているだけなのに、いつの間にか道を踏み外してしまうやつやつの気持ちとか。

周りから理不尽に“悪い奴”だって指をさされる辛さとか。

そんな奴らやつがいてヒーローがヒーローでいられたんだって事とか」

「うん、そうだね」

「青石、俺は……俺たちはどうしたらいい？ どうすればいいんだ？

ヒーローを裏切つて敵になつて、国家を倒せば、みんなプラントに行けるのか？  
みんな助かるのか？ 教えてくれよ！」

彼女は目をそらさない。ゆるぎない眼で轟を見据えていた。

「……轟君がどうするべきなのか。それは轟君自身が決めることだよ」

「そう、だよな。ああ」

「でも何も言わないのはズルいよね。」

じゃあ一つだけ。君がプラントの国民だったらさ。

暴力で国を破壊した人たちが自分の国に来るとなつた時、歓迎できるかな？」

「……それは」

出来るわけではない。考えなくてもわかる。当たり前のことだ。

プラントの主は青石ヒカルだ。だが全てを決めているわけではない。

プラントにはちゃんと議会があり、議員は選挙で選ばれる。

民主主義国家なのだから当然だ。

当然、プラント国民が嫌だと言うのであれば、青石も地上の人をプラントに入れるわけがない。

「それが分かっているならさ、それを皆に伝えなくちゃね。」

あくまでもボクは宙の向こうの人間。

地上のことは地上の君たちに任せると決めただから、さ」

「信じられるのか？ この無力な俺たちを？」

「信じるよ。ううん、信じさせてよ」

「分かった、約束だ」

「うん、約束だね」

「ああ」

互いに手を伸ばして小指を絡めた。

指キリの格好で彼女は、はにかむ。

互いに言葉は無い。無言の指切りをそつと終える。

彼女のぬくもりと指が手から離れる。それはまるで永遠の別れのように思えた。

「あっ」

花卉が一枚青石の前に落ちてきた。青石は花卉を、そつと手のひら包み込む。

「ナツツバキの花だ」

「ナツツバキ？」

「うん。別名は沙羅の木、沙羅双樹さらそうじゆ」

「沙羅双樹？ ……平家物語のあれか？」

「そう」



「英雄は超高倍率の名門だ。当然英雄に入るために轟は勉強を欠かしていない。

だから国語の勉強だって当然しているし、有名な古典もある程度は勉強している。

「まあ、本物の沙羅双樹は日本では育たない。

だから代わりに似ているナツツバキが植えられていて、それが沙羅双樹って呼ばれているんだけどね」

「……代用」

「そう、代用。ここに居るボクと同じだね」

語尾の方は尻すぼみに小さくなり、轟にはよく聞こえなかった。

「そう言えばね、ボクは平家物語の冒頭が好きなんだ」

「始めて聞いたなそれは」

「そうでしょ。多分今始めて言ったからね。

——ぎおんしやうじや祇園精舎の鐘の声、しよぎんむじやう諸行無常の響きあり。

沙羅双樹の花の色、じやうしやひつすい盛者必衰の理をあらはす」

「……」

「続きは轟君も知ってるよね？」

「……奢れる人も久からず、ただ春の夜の夢のごとし。

猛き者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵におなじ」

「そうだね」

「何が言いたいんだ！」

「そんなの、轟君なら分かるでしょ？」

「青石！」

青石は踊るように立ち上がる。月を背にして彼女は轟に向き直った。

沙羅双樹の花びらを、彼女はまだ両手でしっかりと包み込んでいる。

「待てよ！　まだ話したいことが……」

彼女の両手から光があふれ出した。月光に輝く沙羅双樹の花が次から次へ溢れてくる。

たった一枚だけだったはずの花びら。それは幾千枚の花弁になり両手からこぼれだしていた。

彼女の周囲を風が吹く。

花吹雪となったナツツバキの花びらの向こうに、彼女の困ったような笑顔が見えた。

「ああ、もうこんな時間だ！　油を売ってるってバレたらどうしよう。

ごめんね轟君、話はまた今度。こう見えてボク達は忙しいからさ！

それじゃあね！」

彼女は両手のひらを月の方に向ける。途端に無数の花びらは一斉に空の向こうへと

舞い上がっていく。

まるで思いを遥か空へと届けるように。

「青石！　まで……俺は、お前のことが……！」

轟が瞬きをした一瞬で、彼女は姿を消してしまった。

まるで風に吹かれて消えた塵のようだった。

轟は手のひらを見つめる。まだその小指には、彼女のぬくもりが残っている。

「……猛き者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵におなじ。」

ヒーローは滅びるって、そう言いたいのかお前は？」

轟の声に答えるものは、何も無い。

月明かりだけが、轟の側に寄り添っていた。

## 第94話

『それでは、青石様に登場いただきます！　どうぞ！』

体育館一杯にマイクの音声が響く。

生徒たちのざわめきが聞こえる。

青石ヒカルは深呼吸を一つして、体育館の壇上の袖幕から中央に歩み出た。

——ワアアアアア！

途端に声援が爆発する。建物の中の視線という視線がそこかしこから青石に向けられてくる。

プラント公立第十三中学校の生徒は、とても元気いっぱいのようなようだ。

壇上に据えられている椅子にちよこんと座る。

おそらく先生であろう女性がマイクを恐る恐る手渡してきた。

「ありがとう」

「い、いえいえいえ！　お、恐れ多いことです！」

「……そんな緊張しなくてもいいのに」

ただマイクを渡すだけなのに、もの凄く緊張している職員に青石は苦笑いした。

ポンポンマイクを叩いてみる。

ちやんとスピーカーから音がポンポンとなる。

別にマイクなんてもなくても、音を響かせることくらいなんてことない。

でも郷に入つては郷に従えともいう。

わざわざ青石もマイクを突っ返してまで、個性を使つて声を届けることはしない。

視線を前に移して床に三角座りになつてゐる生徒たちを見る。

元氣と希望に満ちた子供たちの顔は、何て眩しいのだろうと思う。

こうしていると彼女は、かつての雄英高校での生活を思い出す。

すごく短かったが、人生であれほどに楽しかった時間はなかつた。

クラスメイト達は今でも元氣にしているだろうかと、思いをはせる。

(ううん、感傷に浸るのはあとで良い。今はこの子達とお話きたんだもんね)

咳ばらいを一つする。その瞬間ざわめき、さあつと一瞬で静まつていく。

『えと、第十三中学校の皆さん、初めまして。こんにちは』

「「こんにちは」」

『わあ！ 元氣だね、えとまずは自己紹介からしないとだね。』

ボクは青石ヒカル。今日は皆さんとお話するためにやって来ました』

.....

……  
……

とある音声データが、ネット上に流れ出し話題になり始めているらしい。

緑谷出久は電子端末からそのデータを直接頭の中に放り込み、頭の中で再生し始める。

勿論アズライトの力を使った力技である。

どうやらその音声データは昨日のもの。

青石ヒカルがとある中学校に講演で訪れた際のものらしい。

一体どんなことをやらかしたんだと、緑谷は気になりながら音声データを再生していく。

「じゃあ……その君！」

「へっ？ わ、わたしですか？」

「君だよ君、ボクに何か聞きたいこととかない？ ……ごめん、いきなり聞かれても困っ

ちやうよね。それじゃあ……」

「ま、待つてくさい！」

「おっ？」

「……聞きたいこと、ひとつ有ります。聞いてもよろしいでしょうか？」

「答えられる範囲ならね」

「じゃあ……」。

「青石様は、陛下は。……なぜ、能力主義をプラントで行われないのでしょうか？」

「うん？ それはどういふことかな？」

「お、恐れながら申し上げます。……今のプラントは、あまりにも平等過ぎると思いません。」

「どれほど優秀な能力を發揮している人も、逆にどれほど成果もあげていない人も。」

「みんな、送れる生活に変わりがありません。」

「どんなに才能のある人も、能力がある人も。」

「そうでない人に比べて、恩恵を多く受けられるようになっていません。」

「それは、あまりにも平等過ぎではないでしょうか？」

「……なるほど」

「け、決して！ 不満が有るとか！ そう言う考えじゃありません！」

「で、ですが……どうしても思ってしまうのです。」

もっと個性を尊重し、才能を重視して、能力のある人が報われるべきなんじゃないかって。

陛下はたった一人で国の柱となっている、

こんなにも誰にも真似できない結果を出されていて！ それなのに……」

「……うーん」

「まあ君が言おうとしていることは何となくわかるつもりではあるんだよ、うん。

能力主義を積極的に採用してさ、もっとよりよい国の形に持つていくべきだって。

国からの恩恵を能力のある人ほど、多く受けられるようにする。

そしてみんなの努力を促す、才能を開花させていく。

そういうことで良いんだよね？」

「は、はい！」

「まあ正直今まで何度も聞いてきたんだよね。君が言うようなことは。でもさ……」

その続きを言おうか青石は少し躊躇した。けれど言い切る事にした。

「ボクは正直好きじゃないんだよね、能力主義って考え方がさ。ううん、むしろ嫌いって

方が正しいのかな？」

「えっ……？ どうして……？」

「うーん、それも多分話すと長くなっちゃうんだけど良い？」



もしかしたらね、他の人の質問を聞く時間もなくなっちゃうかもだけどさ。皆聞きたいの？」

「そっかじゃあ話していくね。ボク自身でもあんまりさ、整理が出来てない内容だから、話ながら考えをまとめていく感じになるから。」

多分聞きづらくて、分かりづらい説明になるとは思うんだ。そこはちよつと我慢して欲しいかな」

「えと、とりあえず何の話からしようかな。」

とりあえずね、ボクが能力主義って考えが苦手、と言うよりむしろ嫌いって言うのは本当なんだ。

何でって言われると正直今から考えていくしかないんだけどさ……。

最初に能力主義に対してのボクの第一印象は、この世界で最も許されている差別主義なんだよね。能力主義ってさ」

「能力ってさ全然平等じゃないんだよ。」

人の数だけ生まれつき与えられた能力には差がある。

もちろん能力の元になった才能が人によって全然違う。

みんな能力で人を区別することを差別だとは思っていないよね。

むしろ人が人を評価するのに一番重要視している項目の一つでもあって。

それがむしろ当然だと無意識のうちに思い込んでるんだけさ。

でもボクからしたらそれって……本当にあり得ない。そう思っちゃうんだよね」

「ボクは能力を得るために必要なのは大きく二つだと思ってる。

努力、そして才能。

で、さ。努力に関してはある程度は才能のない人間でも何とかすることだって、できなくはない。

まあ“努力が出来る才能”というもの有るんだけど、それは置いておくね。

……才能に関しては本当に誰にも、それこそボクにだってどうすることも出来ないんだ。

才能って本当に残酷でさ。こればかりは天から与えられたギフトがあるのかないのか。

単純に運の良い悪いの問題なんだよね」

「君たちも学校の授業や日常を通じてさ、人や自分を比べて才能や能力の差を感じるこ  
とっていっぱいあると思う。」

でもその能力の差ってどうやって生まれるものだと思う？

能力の高い人はよく自分が努力したからってそう言うんだけどさ、そうじゃないんだ  
よね。」

能力の高い人って結局運が良い人。それだけなんだよ」

「才能だけじゃない。自分は努力した。運が良かったからじゃない。

自分がこの能力を得たのは紛れもない努力の成果。

ただ怠けていた連中と自分は違う。だから、他の人間よりも評価されるべきなんだ。

能力の高い人間は、そうやっていつも言うんだ。

そう、才能の有る人たちは思っている。

「だけどね、本当にそうかな？」

「才能の有る人、ない人。その間には本当に絶望的までに差が有るんだ。

そして才能のない人が才能を得ることは出来ない。

……鳥は空を飛べる。でも鳥は飛び方を君たちに教えることは出来ない。

才能も同じだよ。才能のある人から見れば、ない人がなぜ出来ないのか理解できない。

前提条件が違うんだ。才能と言うのは教えることも、授けることも出来ないんだ。

才能……能力って途轍もなく残酷なものなんだよ」

「ボクの個性の事はみんな知ってるね？　ここに居る人たち全員にその気になれば、ボクの個性を分け与えることは出来る。やろうと思えばね。

でも君たちにそれを使いこなすことは絶対にできない。

ボクの個性を使う才能がないから。その才能をあげるのは、ボクにすら不可能なことなんだ。

……こんなことを言うのと反感を買うかもしれないからさ、今まで言わなかったんだけど、あえて今日は言わせてもらおうね。

ボクはこの世界の誰よりも才能に恵まれた。そして誰よりも努力をしてきた。

その結果のボクが出した結論はさ……努力では才能を越えられないってことなんだよね」

「君たちはきつと」才能」ってものを誤解しているんだ。

ねえ、才能って何だと思う？ 才能と君たちが呼ぶものの正体は、一体何だと思う？

凄く素晴らしいってキラキラしたもの？ 少なくとも持つていて損は無いもの？

それはあくまでも才能の持つ本質の一部に過ぎないんだ。

君たちが才能に対して抱いてるイメージは、あまりにも都合が良すぎるんだ。

……才能の本質は、「異質」で「異端」で「異常」なんだよ。

少なくとも、一般的なもの、普通のものではないものなんだ。

大体の人間は大なり小なりのその「異常」を持つているものなんだ。

そして君たちの勝手な価値観でその「異常」が、役に立つもの。とても良さそうに見

えるもの。

そんな「異常さ」を才能って……君たちはそう呼んでいるんだ。

君たちの周りにも一人二人変な人がいるでしょ？

何処か変わった人だったり、自分自身の中に「異常性」を抱え込んだまま生きていたりするでしょ？」

「そう、才能の本質は、その異常そのものなんだよ。

じゃあさ、君たちの中に眠っている「異常性」。その全てが社会にとって役に立つものや、自分自身が胸を張って誇れるものなのかな？

……そんなこと絶対ないんだよ。

だから、才能と言うものに執着すればするほどに人間はおかしくなっていく。

才能と言うものの本質はあくまでも「異常」そのものなのに、それを無条件で良いものだと思いつむ。

その結果どうなると思う？ 個性を尊重？ 才能を重視？ 耳触りはすごくいい言葉だね。

でもそれが実際にやっていることなんて、人の持つ「異常性」を洗い出して、勝手に使えるものと使えないものに分類することなんだ

大抵の人間の持つている才能の本質の「異常性」なんてさ……それは本当にどうでもいいような些細なものだったり、

全く何の役に立たないようなものだったりする。それも「才能」と呼ぶのならそうなんだろうね。

それらは才能と全く同質のものなんだ、けれど誰にも必要ともされないし評価もされない。

そんな才能とは呼ばれない、才能と同質のものが世界中にいっぱい溢れているんだよ」

「じゃあ、それらも全部平等に評価すべきかもしれないってボクは思った。でもそれも不可能なんだ。

かたちあるものは物理的に平等に分けることは出来る。

社会の富と言うのはボクがやっているように、平等にすることは可能なんだ。

でもこの世界で絶対に平等にならないものがある。それは人が人に下す評価なんだ。

例えばモテる人モテない人。友達が多くできる人出来ない人。

この世界の人間の評価と言うものの、絶対的に偏りが出来る。

評価を平等に配る事は出来ない。

それは誰にもどうすることも出来ないんだよ」

「じゃあ、とボクは思った。

ボクが最終的にどうしたいんだろうってボク自身が悩んだ。

ボクはね出来るだけ多くの人が幸せに生きられる世界にしたい。

そのために能力主義を、前の世界のように取り入れたらどうなるんだろう？

残念ながら、優れた才能を持っている人間なんて、ほんの一握りしかない。

君たちはまだ分からないし、知らない。

だから「もしかして自分の中に知らない才能が眠っているのかも知れない」。

そんな都合のいいことばかり考えている。

その才能を見つけることが出来れば、何かの分野でトップを取ったりトップクラスの

活躍が出来るかも知れない。

そんな風に考えている。

でも、現実には厳しいものなんだよ。

何かの分野でトップだったりトップクラスの才能を持っている人間なんてそうだね、

全体の一割も居ればいい方なんじゃないかな。

ここに居る君たちの中には、確かにまだ見つからないトップクラスの才能の持ち

主は居ると思う。

でもそれはほんの一部で少数。

大多数の9割以上の人間には、そんな分かりやすい才能なんて最初から有りはしないんだ。それが現実なんだよ」

「それでも君たちは、能力主義をどんどん導入していくべきだと思うかな？」

そんなこととしても、得をしたり幸せになるのは才能の有る一部の人間だけだよ。

残りの9割以上の人は、自分には才能なんて無かったって現実を突きつけられるだけ。

皆がそれでいいと言うのなら、そういう社会にしてあげてもいいよ？

例えばその君や……その君や、その君。自分が才能の有る側の人間だって確信は持てるのかな？

才能がある。能力がある。たかがそれだけの理由で、他の人より恩恵を受けられるなんて、ボクはどうかしてると思うんだ」

「だから、ボクは能力の有無でボクの力の恩恵を多くしたり少なくしたり、そんなことは考えていない。

今のところはね。そんなことしたって、才能のない大多数の人間が今より不幸になるだけだから」

音声データはそこで終わっていた。

緑谷はもう一度再生して、彼女の発言の内容を考えていく。



(……なんだか、合点がいった気はする)

今まで青石が何でスターレインの成果で偉ぶったりしなかったのか。なぜ力を振るうことを良しとしないのか。

なぜヒーロー社会に対しての疑問を投げかけていたのか。

多分、根本から彼女の考えは違っていたのだ。

間違いなく言えることは、彼女は能力主義を良しとしていないということだ。

「青石さん……」

何はともあれ、これは直接聞く必要がある。

緑谷がそう確信した時、ちょうど時計の針が日付をまたぐ。

今日はもしかして忙しい日になるかもしれない。